この素晴らしい世界に祝福を！

自宅警備兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この素晴らしい世界に祝福を！

【Ｎコード】
Ｎ７１４５ＢＬ

【作者名】
自宅警備兵

【あらすじ】
子供が好きで、近所の公園で子供達と遊んであげるのが趣味の優しい主人公。
そんな優しい彼はある日、轢かれそうな女の子を助けようと果敢にも道へと飛び出し、その結果、命を失う。
そんな彼の勇敢さ、優しさを見ていた美しい女神は、主人公へとある話を打ち明けた。
危機に瀕した異世界へ、旅立ってはくれないか……と。
主人公はそれを聞き届け、異世界へと旅立つ事となる。

その美しい女神を引き連れて……！

やがて恐るべき魔法を操る高い知性をもつ魔法使い、そして、鉄壁の守りでどんな強敵にも恐れない勇敢な騎士を仲間に、主人公は様々な出会いを経て、異世界で冒険をしていく事となる。……これは、そんな、異世界成り上がり小説です。

※あらすじは大体合ってます。

プロローグ

どうも、俺は死んだらしい。

「ようこそ死後の世界へ。私は、あなたに新たな道を案内する女神。佐藤和真（さとうかずま）さん、あなたは本日午後１４時２１分に亡くなりました。辛いでしょうが、あなたの人生は終わったのです」

目が覚めると、そこは事務室みたいな部屋の中だった。

そこに、唐突に俺は突っ立っている。

そして、目の前には事務椅子に座った一人の女神。

なぜ女神だと、相手の言う事をすんなり信じたのかと言えば、無駄にキラキラと後光の様なものが射していたのと、現実にはありえない位の美女だったから、ああ、本物の女神様なんだなと思ってしまった。

その女神の言葉を聞き、改めて自分が死んだ事を自覚した。

死んだと言われて落ち着いているのは、死ぬ直前の記憶があるからだ。

それはついさっきの出来事だ。

ニート生活で培った達人級のゲームスキルを遺憾なく発揮し、俺は近所の公園で携帯ゲーム機をこれみよがしにプレイして、子供達の崇拝の視線を浴びるという、俺の人生において最高の時を満喫していた。

だが、そんな俺のモテっぷりを妬み、そして危険視した何者かが、どうも国家権力の犬を召還する儀式を取り行なったらしい。

二十歳にもなって新人の警察官にたっぷり説教を受けた俺は、軽く死にたい気分でウロウロと近所を徘徊していた。

そんな時、携帯をいじりながら俺の前を歩いていた女子高生が、信号が青になったのを確認して、そのままロクに左右も見ずに横断歩道を渡っていった。
そこに、わき見運転をしていたトラック……！

ではなく。
トラクターが突っ込んで来たのだ。

耕される！

俺は危うく畑の肥やしになりかけた女子高生を、とっさに後ろから突き飛ばした所までは覚えている。

「……そうですか。ええと、一つだけ聞いても？」

俺の質問に、女神がゆっくりうなずいた。
「どうぞ？」

「あの女の子は……。俺が突き飛ばした女の子は、生きてますか？」

大切な事だった。
人生最初にして最後の見せ場だったのだ。
命をかけて助けに入って、結局間に合わなかったなんて悔し過ぎる。

「ええ、生きていますよ？　もっとも、足を骨折する大怪我を負いましたが」

良かった……。
女の子は怪我はしたが、俺の死は無駄じゃなかった訳だ。

ほっとした様子の俺を見た女神は、小首を傾げた。

「まああなたが突き飛ばさなければ、あの子は怪我もしなかったんですけどもね？」

「……は？」

この女なんつった。

「あのトラクターは、本来ならあの子の手前で止まったんです。あたり前ですよね。だってトラクターですもん。そんなにスピードだって出せないし。つまり、あなたはヒーロー気取りで余計な事したって訳です。……プークスクス」

どうしよう、こいつ引っ叩いてやりたい。

「……つまり、俺は意味も無くトラクターに耕されて死んだって事か。……まあ、しょうがない。つまんない最後だったけども、まあ……」

「耕された？　いえ、あなたトラクターに轢かれてなんかいませんよ？　トラクターは、あなたの目の前で止まりましたから」

……は？

「え、でも、俺死んだんじゃ……？」

トラクターに轢かれる寸前の記憶しかないから、それが原因で死んだと思ってたんだが、違うのか？

「あなたはトラクターに轢かれそうになった恐怖で、失禁しながら気を失い、近くの病院に搬送。なんだこいつ、なっさけねーのと医者や看護婦に笑われながら、目を覚ますまでそこのベッドに寝かしとけと、」

「うわあああああああああああ！　聞きたくない聞きたくない！　そんな情けない話は聞きたくない！」

女神は耳を塞いでいる俺に近寄ってくると、にまにまと笑みを浮かべながら、わざわざ俺の耳元で、

「そこのベッドに寝かしとけと、適当な病室のベッドに寝かされていた所を、病院で有名なドジッ子看護婦が、本来絶対に間違っちゃいけない系の薬を、点滴待ちしていた他の患者と間違えてあなたに……」

「あああああああああああ！　うわあああああああああ！　いやあああああああ！　嫌だあああああああ、そんな情けない死に方ってあんまりだろおおおおおおお！」

こいつ絶対女神じゃないだろ！

「……さて。私のストレス発散はこのくらいにしておいて。情けなく死んだあなたには、いくつかの選択肢があります」

こいつ……！

いやもう、話が進まないから我慢しとこう。

「それは、このまま日本で赤ん坊として生まれるか。天国的な所でお爺ちゃんみたいな暮らしをするか。さあどっち？」

なんだその身も蓋もない選択肢は。

お前いくつかの選択肢って、二択じゃねえか。

「いやその……。天国的な所ってなんですか？　そもそも、お爺ちゃんみたいな暮らしって？」

「えっと、天国ってのはね。あなた達が想像している様な素敵な所ではないの。死んだんだからもう食べ物は必要ないし、死んでるん

だから、物は当然産まれないわ。作ろうにも材料もないし。がっかりさせて悪いけど、天国にはね、何にもないのよ。ネットもなければテレビも漫画もゲームもない。そこに居るのは、すでに死んだ先人達のみなの。もちろん死んだんだから、エロい事だってできないし、そもそも体がないんだからできないわね。彼らと永遠に意味もなく、ひなたぼっこでもしながら世間話するぐらいしかやる事がないわ」

何それ、ネットも娯楽も何にもないとか、天国ってより地獄じゃねーか。

しかし、赤ちゃんになってもう一度人生やり直すってか。

合法的におっぱい吸える訳だが、母親が残念な顔な人だったらなあ……。

いや、それしか選択肢はないんだろうけど。

そんな残念そうにしている俺を見て、女神はニコニコと笑顔を浮かべた。

「うんうん、天国なんて退屈な所行きたくないですよね？　かといって、今更記憶を失って赤ちゃんからやり直すって言われても、あなたにとっては今までの記憶が消える以上、それってあなたって言う存在が消えちゃう様なものですよね。そこで！　ちょっといい話があるのよお兄さん！」

なんだろう、物凄く胡散臭い。

女神は、警戒する俺にニコニコしながら。

「実はね？　今、ある世界でちょっとマズイ事になってるのよね。って言うのも、俗に言う魔王軍ってのがいて、その連中にまあ、その世界の人類みたいなのが随分数を減らされちゃってピンチなのよ」

「……で、俺に代わりにその魔王を倒せとか？」

女神が、フッと鼻で笑った。
この野郎。

「まさか、幾ら何でも童貞のニートに魔王退治命じるほど鬼じゃないわ！　あはははははは！」
ふうむ、ぶっ殺してぇ。
「話を続けるわ。で、その星で死んだ人達って、まあほら魔王軍に殺された訳でしょう？　なもんで、もう一度あんな死に方するのはヤダって怖がっちゃって、そこで死んだ人達は殆どがその星での生まれ変わりを拒否しちゃうの。はっきり言って、このままじゃ赤ちゃんも生まれないしその星滅びちゃう！　みたいな。で、それなら他の星で死んじゃった人達を、そこに送り込んでしまえって事になってね？」

つまり、移民政策みたいなもんか。

「で。どうせ送るなら、若くして死んだ人なんかを、肉体と記憶はそのままで送ってあげようって事になったの。それも、送ってすぐ死んじゃうんじゃあ意味が無いから、何か一つだけ。向こうの世界に好きな物を持っていける権利をあげているの。それは、強力な固有スキルだったり。とんでもない才能だったり。神器級の装備を希望した人もいたわね。……どう？　これならお互いにメリットがある話でしょう？　あなた達は、異世界とはいえ人生やり直せる。異世界の人達は即戦力になる人がやってくる。悪くないでしょ？」

なるほど、確かに悪くない話に思える。
それにあれか！　強力なチート能力もらって、俺つえーなあれか！
しかしどうしたもんか。

「えっと、聞きたいんですけど、向こうの言葉ってどうなるんです？　俺、言葉喋れるんですか？」
「その辺は問題ないわ。私達神による、アレな超パワーでサクッと都合よく解決済み。もちろん文字だって読めるし向こうの貨幣なんかも、日本円に脳内で換算されてくれる分かり易い便利システムを採用してるわ。だから、後は能力か装備かを選ぶだけよ」

もはや、最初に出会った時の重々しい口調は崩壊し、完全に地が出ている女神。
なるほど。
となると、ここはやっぱ能力かな？
いや、装備も捨てがたいし。
いやいや、ここは必須ともいえる鑑定だとか、ステータス弄れる系だとか？
いやいやいやいや、ここは……。

「ねえ、早くしてー？　どうせ何選んでも一緒よ。最初からニートでロリコンのあなたなんかに誰も期待はしてないから、なんか適当に選んじゃってー。何でもいいから、はやくしてーはやくしてー」
「ロ……、ロリコンじゃないから……っ！」
涙目で震え声で言い返すが、女神は自分の髪の先の枝毛をいじりながら、俺には全く興味無さそうに言った。

「ねーえー。そんな事どうでもいいから早くしてー。この後、他の死者の案内がいっぱい待ってるんだからね？」

そのめんどくさそうな投げやりな態度に、流石に俺もカチンときた。
じゃあ決めてやるよ。
異世界に持っていける物だろ？

せめて揚げ足とって困らせてやんよ！

「じゃあ、あんた」

俺は女神を指差した。

女神は、髪の枝毛を弄りながら。

「あーはいはい。それじゃ、この魔方陣の中央から出ない様に……

……」

そこまで言って、女神はハタと動きを止める。

「……今何て言ったの？」

呆然と呟く女神と、そして俺の足元には、青く光る魔方陣が現れた。

おお、なんだこれ。

もしかしてこのクソ女神を異世界に引きずり込む事に成功するってのか？

「ちょ、え、なにこれ。え、え、嘘でしょ？　いやいやいやいや、ちょっと、あの、創造神様！？　無効でしょ！？　こんなの無効ですよね！　待って！　待って！？」

涙目でオロオロしながら、滅茶苦茶に慌てふためく女神。

その姿を見れただけで、俺はすでに満足していた。

そのまま女神を指差し。

「ぶはははははっ、馬鹿にしてた相手と異世界へと強制連行！

おいどんな気持ちだ？　なあ、今どんな気持ち？」

「わあああああー！　ちょっとあんた何してくれてんの！？　いやあああああ！　こんな貧弱なクソニートと異世界行きなんて、い

やあああああああ！」

俺は、女神と共に白い光に包まれた。

プロローグ（後書き）

作中では主人公の外見的描写はありません。
自分の身長や外見等を説明口調で書くのもおかしな話なので。。。
主人公は、身長１７０前後の中肉中背、黒髪黒目、外見普通の地味な兄ちゃんです。
服装は黒のジャージとなっております。

1話

「おいおい、本気で異世界だ。え、本当に？　本当に、俺ってこれから冒険者とか？」

俺は、目の前に広がる光景に、興奮で震えながらも呟いた。

それは、これはテンプレートですからと言わんばかりの中世風の街並み。

異世界とは中世ヨーロッパ風であるべきだって、宇宙の法則かマニュアル本かなんかがあるのかも知れない。

「あ……ああ……あああああ……」

俺はキョロキョロと街中を見渡して、行き交う人々を観察した。

「獣耳だ！　獣耳がいる！　エルフ耳！　あれエルフか！？　美形だし、エルフだよな！　さようならニート生活！　この世界なら、俺働くよ！」

「あああああ……あああああああ……あああああああああああ！」

俺は隣で頭を抱えて叫び声を上げている、女神の方を振り返った。

「おいうるさいぞ。俺まで頭のおかしい女の仲間だって思われたらどうするんだよ」

「あああああああああああああああああああああああああああ！！」

叫ぶと同時、女神は泣きながら俺に掴みかかってきた。

「や、やめろお！　ぼ、暴力はやめたまえ！　というか、何だよ、悪かったよ！　もういいよ、帰ってもらっても。後は自分で何とかしてみるから」

俺の首を絞めようとする女神の手を振り払うと、面倒臭そうにシッシと手をやる。

すると、女神はわなわなと手をわななかせた。

「バカ！　帰れないから困ってるんでしょ！？　あんた、どうすんの！？　ねえ、どうしよう！　私これからどうしたらいい！？」

女神は泣きながら取り乱し、頭を抱えてバタバタしていた。

腰まで届く長い髪を振り乱し、なんというかもう、黙っていれば凄い美人なのにこれでは唯の痛い女だ。

「おい女神、落ち着け。まずはこういう時の定番としては、冒険者ギルドだ。冒険者ギルドに行って登録とかすれば、身分証とか作って貰ったり金貸して貰ったりして、その日の宿代稼げるような簡単な採取任務とか紹介して貰えるもんだ。いいから、ついて来い」

「なっ……！　ロリコンのクソニートだったハズなのに、な、なぜこんなに頼もしいの？　あ、カズマ、私の名前はアクアよ。女神じゃなく、アクアって呼んで。私が女神だってバレちゃ、私を崇拝する信者達でこの街が大変な騒ぎになるから。住む世界は違っても、一応私、この世界で崇められてる神様の一人なのよ」

余裕のある俺の後ろをバタバタとついて来ながら、その女神はアクアと名乗った。

さて、こういった時にはまず冒険者ギルドを探すものだが……。

よく考えたら、こいつは女神なんだし、こいつに色々聞けばいいんじゃないか。

「アクア、とりあえずギルドの場所だ。どこに行けばいいんだ？」

俺がアクアに尋ねると、アクアはだが、キョトンとした表情で。

「……え？　私にそんな事聞かれても知らないわよ。私はこの世界

に送る事は出来ても、たまに人々の暮らしを覗いてたくらいで特に詳しい訳じゃないし。というか、大量にある異世界の内の一つよ？」

そんなもの一々知るわけないでしょ？」

こいつ使えねえ……。

しかたないので、その辺の通りすがりのおばさんに尋ねる。

男の人に聞くのは怖いし、若い女性に話しかけるのは俺のチキンハートから言って難易度が高い。

「すいませーん、ちょっといいですか？　冒険者ギルド的なもの探してるんですが……」

「ギルドを？　あら、この街のギルドを知らないなんて、他所から来た人かしら？　ここの通りをまっすぐ行って右に曲がれば、看板が見えてくるわ」

おばさんの言葉に、やはりギルド的な物があったかと安心する。

「いやあ、ちょっと遠くから旅してきたもので、まだこの街に慣れてなくて。どうも、ありがとうございました！　……ほら、行くぞ」

おばさんに礼を言い、教えてもらった道を歩いていくと、後ろをちょろちょろ付いて来るアクアが、ちょっと尊敬の眼差しを交えながら感嘆の声を上げた。

「ねえ、あんなとっさの言い訳とか、なんでそんなに手際がいいの？　こんなにできる男な感じなのに、なんであなた童貞だったの？　なんでロリコンのクソニートなんかやってたの？」

「童貞なのは別に悪い事じゃない、一生に一度の機会を大切にする事の何が悪い。あとクソニートは止めろクソビッチ。ニートは、働かなくても生きていける、勝ち組にだけ許される上級職だ。後俺はロリコンじゃない、子供が好きなだけだ。……あそこか」

クソビッチ呼ばわりされたアクアが首を絞めてくるが、それを無視して、見つけた冒険者ギルドっぽい施設に入っていく。

冒険者ギルド。

つまり異世界のハロワ的なアレだ。
日本じゃハローワークに近付くだけでアレルギー反応が出たものだが、ここの施設はなぜか平気だった。
元の世界じゃニートだったりいじめられっ子だったりコミュ障で行動的でもなかったヤツが、異世界に来た途端活発になるこの現象は、俺にもちゃんと適用されたらしい。

「いいかアクア、登録すれば駆け出し冒険者が生活出来る様に色々チュートリアルしてくれるのが冒険者ギルドだ。金を貸してくれるか、駆け出しでも食っていける簡単な仕事を紹介してくれて、オススメの宿も教えてくれるはず。今日の所は登録と金の確保、そして泊まる所の確保だ」
「分かったわ。その辺は、最近トラックに飛び込み自殺して私の所に来てた多くの人達が、似たような事言っていたから把握してるわ。私も冒険者として登録すればいいのね？」
「そういう事だ。よし、行こう」
俺はアクアを引き連れて、真っ直ぐカウンターへと向かう。
受付は四人。
その内三人は手が空いている状態だった。
そして、ギルドの受付は美人の女性である事が基本な筈なのに、四人の受付の内二人は男性職員だった。
女性職員の内、より美人な方の受付嬢の所に行く。
「……ねえ、他の三つの受付が空いてるのに、何でわざわざここに来たの？　他なら待たなくてもいいのに。……あ、受付が一番美人だからね？　全く、ちょっと頼りがいがあると感心した矢先にこれ？」
俺の後ろに付いて来た何も分かっていないアクアに、俺は小さな声で教えてやった。
「ギルドの受付の人と仲良くなっておくのは基本だ。そして、一番美人な受付のお姉さんってのは、なぜかギルドの冒険者達に恐れら

れてたりだとか、実は凄い実力者だとかで、一目置かれている可能性が高い。これはこういった世界での基礎知識だぞ。そういった有力者とコツコツとコネを作っとくと後々助かるんだよ」

「……私がバカだったわ。そういえば、そう言った話を聞いた事がある。ごめんね、素直にここに並んでおくわね」

他が空いてるのに、わざわざここに並んでいる俺達を、他の受付の人がチラチラ見ているがここはガン無視だ。

やがて俺達の番が来る。

「はい、どうぞー。今日はどうされましたか？」

受付の女の人はおっとりした感じの美人だ。

ウェーブのかかった髪と巨乳が大人の女性の雰囲気をかもし出していた。

「えっと、冒険者になりたいんですが、田舎から来たばかりで何も分からなくて……」

田舎から来たとか遠い外国から来たとか言っておけば、受付が勝手に色々教えてくれる。

「そうですか。えっと、では登録手数料が掛かりますが大丈夫ですか？」

後は受付の人の言う事に従っていけば……。

登録手数料？

「……おいアクア、金って持ってる？」

「あんな状況でいきなり連れてこられて、持ってる訳無いでしょ？」

……なんてこった、こういう時って、最初のお金は貸してくれるだの後払いだのになんないのか？

捨てられた子犬のような目で訴えてみるが、お姉さんは困った顔を浮かべるだけだ。

一旦受付から離れ、アクアと作戦会議をする。

「……アクア、作戦変更だ。まず最低限の金を手に入れよう。お前

の美貌でそこらの頭悪そうな冒険者をたぶらかしてくるんだ。アクアは黙っていれば美女だ。手数料なんてそう高いもんでもないだろ。手数料に困ってますアピールすれば、一人二人余裕のハズだ」

「いきなり頼りがいが無くなったけど、まあしょうがないわねニートなんだし。いいわ、黙っていればって所が気になるけど、私の美貌で迫ればイチコロよ。まあ見てなさいな」

アクアは、自信たっぷりに近くのテーブルで雑談していた二人組の冒険者に目を向けると、不自然に体をくねらせて近付いていった。

あの女神にとっては、どうやら色気を振りまいているつもりの様だ。

だがあれではどう見ても頭のおかしい不審者だ。

俺は一時の激情で、有能な能力や装備ではなく、あんなのを連れてきてしまった事を激しく後悔していた。

「相席してもよろしいかしらー？」

「ん？　ああ、どう……。……ど、どうぞ……」

話しかけられた冒険者は、身をくねらせるアクアを見て、明らかに引いていた。

その冒険者と話していた相席の男にいたっては、明らかに目を逸らして関わらない様にしている。

「ねえ、あなた達、こういうお店で遊ぶのって始めて？」

「へっ？　いや、俺達は結構ここの常連だと思うんですが……」

「あらあら、お盛んな事ねー？　ふふふ、若いわね？」

ダメだ。

よく分からないが、あの女神は何か変な店の接客嬢と間違っている。

というか、明らかに男の方は引き気味だし、もう一人にいたって

はあさっての方を向いて、完全に関わらないようにしている。
「ふふっ、そんなに緊張しなくてもいいのよ？　何か、私に聞きたい事とかあるんでしょう？　どこに住んでるとか、普段何してるのとか？」
「い……、いえ、特に興味は……」
これはあかん。
「ふふふっ、照れちゃってかわいいわね？　いいのよそんなに遠慮しなくても……、ちょ、ちょっと何よ！？　今いい所なのになんで邪魔するの！？　後少しで落ちそうなのに！」
俺はアクアを無理やり引っ張っていき、施設の隅に連れて行った。
「あれでいい所だって本気で思っていたのならお前はバカだ。というか、ビッチ臭いくせに男性経験がないなら最初から言え。人を童貞童貞言いやがって、お前も未経験なんだろ」
「べべべ、べ、別に未経験じゃないし！？　そ、それにたとえ未経験だったとしても、女神が処女で何が悪いの！？　そうよ、神聖な存在の女神が処女で、何が悪いのさこの童貞！」
「こ、こらっ！　お前自分で、女神だって事は内緒だとか言っておきながら、声がでかいんだよ！　それよりほら、アレを見ろよ」
俺は、いまだアホな事を大声で口走っているアクアに、テーブルの一角を指差した。
そこには、いかにもな風体の二人組のいかつい男。
一人はスキンヘッドの大男で、もう一人はモヒカンという、もうホントにいかにもな連中だ。
「ちょっとアレは私の好みじゃないわね。向こうの、サイズの合わない大きめの、ブカブカな鎧着たクルセイダーの少年がいいんだけど」
「誰がお前の好みを聞いたショタ女神。お前、女神だけあって強いんだろ？　あそこに、ガラの悪そうなのがいるだろ。あいつらとちょっと、ほら、あれだ……」
俺は、最低な事を言っているのに気がつき、言葉が尻すぼみにな

っていった。
幾ら一文無しの非常事態でも、それでは唯のカツアゲみたいなもんだ。
しかも、こいつは仮にも女神。
こんな低俗な事は
「あんた頭いいわね、そういう事は最初から言いなさいよ。こっちの方が手っ取り早いじゃないの」
こいつは多分、女神じゃないと思う。
アクアはそのまま、俺が何か言う間も無く、男達の方に歩いていった。
そして、イスに座り、大声で笑っているモヒカンの後ろから、ヨタヨタと近寄り、そのまま肩を……！
肩をぶつけてインネンをつけようとしたが、それを避けられ、バランスを崩したアクアは転んだ。
「お、おい姉ちゃん、大丈夫か？」
転んだアクアに、モヒカンが声をかける。
「おい。そいつ、さっき向こうのテーブルでクネクネと不思議な踊り踊ってたおかしい奴じゃ……。あまり関わり合いにならない方が……」
心配するモヒカンに、スキンヘッドがそんな事を。
あいつはもうダメだ。
こんな人種にまで避けられている。
いや、こんな人種は言い過ぎかもしれない。
あんな変な女が転んで心配してくれるのだ、案外いい奴なのかもしれない。
アクアはそんなモヒカンの心配を他所に、地面に打ちつけた鼻を押さえ、半泣きで立ち上がった。

「ふぐぐぐ……。ちょっとあんた！　あんたが避けるから、鼻打ったじゃないの、どうしてくれんのよ！　慰謝料払いなさいよ！　訴えられたいのあんた！」

違うそうじゃない、軽くぶつかって向こうから絡まれるのならまあいい、だが自分からインネンつけて絡んでどうする！

俺の作戦では、ガラの悪い連中の傍をちょろちょろするアクア、絡まれるアクア、返り討ちにして幾ばくかの金を迷惑料として巻き上げるアクア。

こんな感じで考えていたのだが、これではこっちが通報される。

「いやあんた、俺達は座って酒飲んでただけで……」

「そ、そうだぜ、俺達が何したってんだ、しかもこいつが避けたから転んだって言われても言いがかりもいいとこじゃねえかよ」

正論を言う男達。

「うっさいわねあんた達！　……はっはーん、慰謝料の支払いを渋って引き伸ばして、この私と長くいる為の口実作りって訳ね。いいわよ！　ほらちょっと詰めなさいよ、一緒にお酒くらい付き合ってあげるわよ、その代わり支払いはあんた達持ちよ、それと慰謝料よこしなさいよね！」

「おいなんだこの図々しい女は！」

「おい、もう小遣いやって追い払おう！　こいつ、絶対関わらない方がいいって！」

信じられます？

あれ、一応女神らしいんですよ？

うちの女神が、もう本当にすいません。

「登録料持って来ました」

「は……はあ……。登録料はお一人千エリスになります……」
アクアが男達にもらった金が三千エリス。
一エリス一円の換算みたいなので、三千円相当をもらってきたわけだこの女神は。
俺達の引き起こした騒動に全く干渉しないどころか、俺とアクアとあまり目を合わせたがらない受付のお姉さん。
どうやら、俺はスタートダッシュでこのお姉さんとの最初のフラグをへし折った様だ。
「えっと、ではお二人とも、こちらのカードに触れてください。それであなた方の潜在能力が分かりますので、潜在能力に応じてなりたいクラスを選んでくださいね。選んだクラスによって、経験を積む事により様々なクラス専用スキルを習得できる様になりますので、その辺りも踏まえてクラスを選んでください」
おっと、早速きたな。
ここで俺の凄まじい潜在能力が発揮されて、ギルド内が騒ぎになったりする訳だ。
俺は内心緊張しながら、淡い期待を込めてカードに触れた。
「……はい、けっこうです。サトウカズマさん、ですね。潜在能力は知力が高いだけで、後は普通……、あれ？　凄いですね、幸運が非常に高いですね。まあ、冒険者に幸運ってあんまり必要ない数値なんですが……。でもどうしましょう、これだと選択できる職業は基本職である冒険者しかないですよ？　これだけの幸運があるなら、冒険者稼業はやめて、商売人だとかになる事もオススメしますが……。よろしいのですか？」
おい、いきなり冒険者人生否定されたぞ、どうなってんの。
隣でニマニマと笑みを浮かべているアクアを殴りたい。
「え、ええと、その、冒険者でお願いします……」
お姉さんが心配そうな顔で。
「ま、まあ、レベルを上げてステータスが上昇すれば転職が可能ですしね！　それに、初期クラスだからって悪い事は無いですよ？

なにせ、全てのクラスのスキルを習得し、使う事ができますから！」
「その代わり、スキル習得には大量のスキルポイントが必要になるし、クラス補正も無いから同じスキル使っても本職には及ばず器用貧乏なんだけどね。でも何やらせても中途半端なニートには調度いいのかもね？　プークスクス！」
フォローを入れるお姉さんの言葉を、二秒で打ち崩すアクア。
こいつ、本当にどっかに捨ててこようか。

どうやら、俺は基本職というか、初期クラスというか。
ともかく、最弱なクラスに就いたらしい。
それでも、これで俺は何度も妄想の中で夢見ていた冒険者だ。
ちょっと感慨深く、俺の名前とともに、冒険者レベル１と記されたカードを手に取ると……。

「はっ！？　はあああああっ！？　何です、この潜在能力！？　知力が平均より低いのと、幸運が最低レベルな事以外は、全ステータスがぶっ飛んでますよ！？　特に魔力と、魔力容量が尋常じゃないんですが、あなた何者なんですか……っ！？」
アクアの触ったカードを見たお姉さんが、そんな大声を上げていた。
その声に、施設内がざわめきだす。
……あれ、そういうのって普通は俺のイベントじゃね？
「え、そ、そう？　なになに、私が凄いって事？　いやー、まあ私くらいになればそりゃあね？」
さすが腐っても一応は女神。
だが、調子に乗って照れているアクアが憎たらしい。
「す、凄いなんてものじゃないですよ！？　高い知力を必要とされる魔法使い職は無理ですが、それ以外ならなんだってなれますよ？　クルセイダーにルーンナイト、アークプリーストにエレメンタルマスター……。えっと、クラスは何になさいますか？」

お姉さんの質問にアクアはちょっと悩み。
「そうねえ、女神ってクラスがないのは仕方ないから、私の場合アークプリーストかしら」
「アークプリーストですね！　回復魔法はおろか、蘇生魔法まで使え、前衛に出ても問題ない強さを誇る万能職ですよ！　では、アークプリースト……っと。冒険者ギルドへようこそアクア様。今後の活躍を期待しています！」
お姉さんはそう言って、にこやかな笑顔を浮かべた。

……あれ、何だコレ。
こういったイベントは俺の方に起こるんじゃ……。

2話

「おーし、ご苦労さーん！　今日はこれで上がっていいぞ！　ほら、今日の日当だ」
「どうもです。お疲れっしたー！」
「どもです！　したー！」
親方の仕事の終了の声で、俺とアクアは日当を受け取ると挨拶と共に頭を下げる。
「じゃあ、皆さんお先―っす！」
「お先ーっす！」
「おーう、お疲れ！　また明日も頼むな！」
俺が先輩達に挨拶すると、アクアも俺に続いて挨拶する。
先輩の声を聞きながら、俺とアクアは現場を後にした。
ああ、今日も一日働いた。
俺がニートだったなんて、自分でも信じられない話だ。
俺とアクアは日当を握り締め、街の大衆浴場に向かう。
大衆浴場は日本の銭湯とほぼ変わりは無い。
日本に比べれば、一般の人の平均賃金に換算すると入浴料は割高だが、仕事終わりの風呂は、ちょっと高くともやめられない。
「オウフ……。生き返るわー……」
熱い湯船に肩まで浸かり、仕事の疲れをゆっくり癒す。
異世界では風呂なんて贅沢品だと思っていたが、異世界イコール中世ヨーロッパ辺りでの風呂文化が無かったのは、水が貴重であるという事が理由の一つにある。
そして、湯を沸かす大変さだ。
ここでは、日本ほどではないが水はそれほどの貴重品では無いらしい。
湯を沸かすのも、風呂の様に大量のお湯を沸かすなら、ファイア

ーボールを水に放り込んで一発らしい。
むしろ、鍋に張った水の様に、少量のお湯を用意する方が大変なのだそうな。
この大衆浴場には、専用のお湯沸し魔法使いなんてのも居たりする。
水に放り込むファイアーボールの熱量の加減で、ぬるかったり沸騰したりするから意外と難しい。

風呂から上がると、アクアが浴場の入り口で待っていてくれた。
女よりも長風呂なのもどうかと思うが、風呂好き日本人のサガだ。
これぱっかりはどうしようもない。
「今日は何食べる？　私、スモークリザードのハンバーグがいい。あとキンキンに冷えたクリムゾンビアー！」
「俺も肉系がいいな。それじゃ、宿屋のおっちゃんにスモークリザードのハンバーグ定食二人前頼むか」
「異議なし！」

アクアと二人、定食を平らげて満足すると、特にやる事もないし馬小屋に。
馬糞が付いていない藁を選んで寝床を作ると、早々と横になった。
隣には当たり前のようにアクアが寝転がる。
「じゃあ、お休みー」
「おう、お休み。……ふう。今日もよく働いたなあ……」
そして俺は、心地よい疲れと共に、深い眠りに……

「いや、待ってくれ」

俺はムクリと身を起こした。
「……？　どしたん？　寝る前のトイレ、行き忘れた？　暗いし付いてってあげようか？」

「いらんわ。いやそうじゃなくてな。俺達、何で当たり前の様に普通に労働者やってんだって思ってさ」

そう。

俺とアクアはここ2週間ほど、ずっと街の外壁の拡張工事の仕事をしていた。

つまりは土木工事の作業員。

俺がこの世界に求めていた、冒険者稼業なんて物とは程遠い。

いや、というかなんでアクアは何の疑問もなくこの生活に馴染んでんだ。

お前は一応女神だろ。

「そりゃ、仕事しなきゃご飯も食べられないじゃん。工事の仕事は嫌なの？　全く、これだからニートは。一応、ドブさらいとかの仕事もあるけど？」

「そうじゃねえ！　そうじゃなく、俺が求めてるのはこう、モンスターとの戦闘！　みたいなね？」

熱くなり、つい大声になる俺の声に、周りから罵声が飛んだ。

「おい、うるせーぞ！　静かに寝ろ！」

「あっ、すいません！」

駆け出しの冒険者は貧乏です。

宿に部屋をとって毎日寝泊りとか、普通はありえない。

一般的には、他の冒険者達と金を出し合って大部屋で雑魚寝とか。

今の俺達の様に、宿の馬小屋を借りて藁の上で寝るとかそんなんらしい。

うん、想像してた異世界暮らし、期待していた冒険者生活と全然違うな。

宿暮らしって事は、日本で言えば毎日ホテルで寝泊りする様なも

の。
収入が不安定な冒険者には無理な話だ。

収入が不安定。
そう、予想していた簡単な採取クエストだの、街の近くでのモンスター討伐だのといったクエストなんて一つも無かった。
コボルト討伐とかしてその日の宿代稼ぐとか、そんなお約束はどこ行ったとばかりに、危険な仕事しか残っていなかった。
街の近くにある森に住んでいたモンスターは、とっくの昔に軒並み駆除されたそうだ。
モンスターもいない安全な森の中、採取クエストなんてものをわざわざ金出してまで人に頼む者はあまりいない。

そりゃそうだ。
街の外には子供だって出るだろう。
門番もいるが、蟻の子一匹出入りさせないなんて警備をずっと続けるよりも、それ程巨大な森でないならとっとと人に害をなすモンスターを駆除してしまえばいい話だ。
言われてみれば当たり前だが、そんな現実的な事はあまり知りたくなかった。

ＲＰＧによくある、素人に毛が生えた様な冒険者でも簡単に見分けが付く様な薬草だのを、森に入って半日ほど採取しただけで、その日のホテル代と三食分の金が稼げる。
そんなおいしい仕事がある訳もないってか。
日本で例えれば、半日ほど山で山菜取りでもしたって、そこまで稼げないだろう。
ましてや、アフリカだとかの発展途上国の一部とかだと、丸一日働いて、トウモロコシのスープとちょろっとした穀物が一日二回貰える程度とか聞いた。

ここより文明が発達した地球ですらそんなんなのに、ここでそんなにうまい話が転がっている訳が無い。
考えてみれば、地球でも裕福な国である日本ですら、ホテル暮らしの日雇い労働者なんていないだろう。
最低賃金？　労働基準法？　なにそれおいしいの？
ここは、そんな世界だ。

「つまり、冒険者らしい事がしたいって訳？　まだロクな装備が整ってもいないのに？」

アクアの真っ当な意見にぐうの音もでない。
そう、俺とアクアは、必要最低限の冒険用の道具や装備すら持っていない為、まずそれらを手に入れる為に、ここのところずっと、安全な土木作業のバイトに勤しんでいたのだ。

「そろそろ土木作業ばっかやってるのも飽きたんだよ……。俺、労働者やりに異世界に来たんじゃないぞ。パソコンもゲームもロクに娯楽の無い世界だが、俺は冒険する為にここに来たんだ。一応魔王やらに対抗する為にここに送られてきたんだろ、俺は？　ならレベル上げくらいしとかないと、いざ街が攻められた時とか、逃げられもしないで殺されるかもしれないし。今のところ、簡単な討伐クエストとやらは無いらしいが、逆に言えば簡単じゃない討伐クエストならあるって事だろ？」
俺の言葉に、なんの話だ？　といった顔でしばし考え込んでいたアクアは、
「おおっ！　そういえばそんな話もあったわね。そうよ、労働の喜びに夢中になって忘れてたけど、そうじゃないわ。カズマの前にここに送り込んだ、あの頼りない連中が魔王討伐に失敗してこの世界が滅ぼされたら、この世界に降りて来た私も他人事じゃないじゃないの！」

そういや、こいつは受付のお姉さんに知力のステータスが人より低いって言われてたなと納得する。
「いいわ、討伐行きましょう討伐！　大丈夫、この私がいるからにはサクッと終わるわよ！　期待して頂戴！」
「な、なんかもの凄く不安だが……。おし、それじゃ、貯まった金で最低限の武具を揃えて、明日はレベル上げだ！」
「おうともさ！」
「うるせーってんだろこらっ！　しばかれてーのか！」
「「すいません！」」
他の冒険者に謝りながらも、俺は心を躍らせて眠りに付いた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆

「あああああああああ！　助けてくれ！　アクア、助けてくれえええええ！」
「プークスクス！　やばい、超うけるんですけど！　顔真っ赤で涙目で、必死過ぎるでしょカズマ！」
よし、こいつは殺そう。
俺はそう決心しながら、巨大なカエル、ジャイアントトードに追いかけられながらアクアに助けを求めて逃げ回っていた。
必要最小限の武器、俺はショートソードとダガーを。
アクアは、プリーストって言ったら素手じゃね？　メイスもいいけど、素手でモンスターを屠る武闘派美人僧侶ってよくね？　とアホな事を口走って、無装備でのん気に、カエルに追われる俺を眺めていた。

たかがカエルと侮れない。

大きさは牛を越える巨大さで、こいつらは繁殖の時期になると、産卵の為の体力を付ける為か、エサの多い人里にまで現れて、農家の人の飼っている山羊を丸呑みにしてまわるらしい。

山羊を丸呑みってんだから、俺やアクアだってもちろん余裕だろう。

実際に、毎年このカエルの繁殖期には人里の子供やら農家の人やらが行方不明になるそうだ。

見た目はただの巨大なカエル。

だが、街の近隣で駆除された、弱っちいモンスターとは比較にならない程に危険視されているモンスター。

ちなみに、その肉は多少の硬さはあるが、淡白でサッパリしていて食材として大変喜ばれるらしい。

腕のいい冒険者は、こいつらを好んで狩るというのだが……。

「らめえええええええ！　食われちゃうううううう！　アクアー！　アクアー！！　お前いつまでも笑ってないで助けろよおおおおおお！」

泣きながら、俺の後ろをビョンビョンと飛び跳ねて追いかけてくるカエルを見る。

だがカエルは、すでに逃げ回る俺とは違う方向を向いていた。

その視線の先には……

「あっはははははははは！　いいわよいいわよ、助けてあげるわよロリニート！　その代わり、明日からはこの私をアクア様と呼び、崇めなさい！　街に帰ったらアクシズ教に入信し、一日三回祈りを捧げる事！　毎晩、私にクリムゾンビアを一杯奢ること！　そしてひゅぐっ！？」

ふんぞり返りながら何かを言っていたアクアが突然姿を消した。

ふと見ると、俺を追いかけていたカエルの動きが止まっている。
そのカエルの口の端からは、白い物が生えていた。
その白いのは……
「アクアー！　おま、食われてんじゃねえええええええええ！」
アクアの白い太ももだった。
カエルに食われたアクアの足が、カエルの口の端から覗き、ビクンビクンと震えている。
俺はショートソードを抜くと、カエルへ向かって駆け出した！

「ぐふっ……、うっ、うえええええええっ……、あぐうっ……！」
俺の前には、うずくまり、カエルの粘液でねちょねちょになって泣くアクアの姿。
その隣には、俺に頭を砕かれたカエルが横たわっていた。
「ううっ……ぐずっ……あ、ありがど……、がずま、あ、ありがどうねえ……っ！　うわあああああああああんっ……！」
カエルに食われたアクアを何とか救出し、カエルの口から引っ張り出されたアクアは泣きじゃくっている。
流石の女神も、捕食は堪えたらしい。
「だ、大丈夫かアクア、しっかりしろ……、その、今日はもう帰ろう。クエストは、三日の間にカエル五匹の駆除だけど、これは俺達の手に負える相手じゃない」
正直俺がカエルを仕留められたのも、アクアを捕食したカエルが獲物を飲み込もうと、その動きを止めていた事が大きかった。
元気に俺に向かって捕食に来るカエルに、正面から立ち向かっていく勇気は無い。

だがアクアは、粘液でヌラヌラと体中をテカらせながらも立ち上がる。

「ぐすっ……。女神が、たかがカエルにここまでの目に合わされて、黙って引き下がれるものですか……っ！　私はもう、汚されてしまったわ。今の汚れた私を信者が見たら、信仰心なんてダダ下がりよ！　でも、カエル相手に引き下がったなんて信者が知ったら、美しくも麗しいアクア様の名が廃るってものだわ！」

心配するな。

日頃の、大喜びで他のおっさんの数倍の荷物を運んで汗を流し、ジョッキを豪快にあおり、馬小屋の藁の中でよだれを垂らして気持ちよく寝てるあの姿を見れば、今の粘液まみれの姿なんて今更だ。

だがアクアは、俺が止める間も無く、離れた場所にいたカエルに向かって駆け出した。

「あっ！　おい、待てアクア！」

制止も聞かずにアクアはカエルに距離を詰め、そのまま駆けて来た勢いはそのままに、拳に白い不思議な光を宿らせてカエルの腹に殴りかかった。

「神の力、思い知れ！　私の前に立ち塞がった事、そして神に牙を剥いた事！　地獄で懺悔しながら眠るがいい！　ゴッドブローおおおおっ！」

ぶよんとカエルの柔らかい腹に拳がめり込み、そのままカエルは何事もなかったかの様に……。

俺は、捕食したエサを飲み込もうとして動かないでいた、本日二匹目になるカエルを倒し、更に粘液まみれにされて泣きながら二匹のカエルの肉を引きずるアクアを連れて、今日の討伐は終了した。

3話

「アレね。二人じゃ無理だわ。仲間を募集しましょう」
街に帰還した俺達は、真っ先に大衆浴場に行って汚れを落とした後、冒険者ギルドにてカエルのもも肉の照り焼きを食いながら作戦会議をしていた。
この冒険者ギルドという所は、冒険者達の待ち合わせや溜まり場としても使われている為に、酒場も併設されている。
今日はカエル二匹の肉が手に入ったので、ギルドへのカエル肉販売でそこそこの小遣いにはなった。
といっても、土木作業のバイトの給料と稼ぎはあまり変わらない。
しかし、ちょっと硬いがカエルが意外にいけるのが驚いた。
この世界に来た当初はトカゲやカエルに抵抗があったが、食ってみると意外といける物が多い。
目の前の女に関しては、どんな物でも一切の躊躇なく最初からモリモリ食っていたが。
「しかし、仲間といっても駆け出しでロクな装備もない俺達と、組んでくれる奴なんかいると思うか？」

口いっぱいにカエルのもも肉を頬張ったアクアは、手にしたフォークを左右に振った。
「ふぉのわたひがいるんだはら、なかああんて「飲み込め。飲み込んでから喋れ」

口の中の物をゴクリと飲み込み、

「この私がいるんだから、仲間なんて募集かければすぐよ。なんせ、私はアークプリースト様よ？　あらゆる回復魔法が使えるし、補助魔法に状態異常治癒魔法、蘇生魔法だってお手の物。どこのパーテ

ィも喉から手が出るほどに欲しいはず。カズマのせいで地上に降とされ、本来の力からは程遠い状態とはいえ、仮にも女が……、アクア様よ？　ちょろっと募集かければお願いですから連れてってくださいって輩が山ほどいるわ！　分かったら、カエルの唐揚げもう一つよこしなさいよ！」

言って、俺の皿から唐揚げを奪い取る自称女神を、俺は不安気に眺めていた。

翌日の、冒険者ギルドにて。

「……来ないねぇ……」

アクアが、寂しそうにションボリと呟いた。

求人の張り紙を出した俺達は、冒険者ギルドの片隅にあるテーブルで、すでに半日以上も待ち続けている。

別に、張り紙が他の冒険者に見てもらえていない訳ではないらしい。

俺達以外にもパーティ募集をしているっぽい冒険者達もそこそこいるが、その人達は次々と面接を行い、何やら談笑した後連れだって行った。

誰も来ない理由は分かっている。

アクアの問題児っぷりが、すでに噂になっているのだ。

証拠に、最初は俺達の募集の紙を見た連中が、嬉々としてこちらのテーブルに来ようとして、アクアを見てコソコソと帰っていくのを何度も見ている。

だが、流石にこのまま誰も来ないのではここにいる意味が無い。

しょうがない、アクアの悪い噂が消えるまで、またしばらく土木作業のバイトでも……。
俺がそう思っていた時だった。
「募集を見て来たんだが。面接はここでいいのかい？」
声をかけてきたのは、気だるげな、とろんとした眠そうな赤い瞳、そして黒い髪の女の子。
黒マントに黒いローブ、黒いブーツに杖を持ち、トンガリ帽子は被っていないものの、典型的な魔法使いの格好だった。
信じられないぐらいに整った、人間離れした顔立ちのその美少女は、歳は二十には満たないだろう。
十七、八といった所か？
黒髪を腰まで伸ばし前髪をぱっつんと切り揃えたその娘は、気だるげな声で言ってきた。
「我が名はめぐみん。アークウィザードにして、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者」
「……冷やかしにきたのか？」
「ち、ちがわい！」
女の子の自己紹介に思わず突っ込んだ俺に、その子は慌てて否定する。
いや、めぐみんってなんだ。
「……その赤い瞳。もしかして、あなた紅魔族？」
アクアの問いに、その子はこくりと頷いた。
「いかにも。我は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん。……あの、図々しいお願いなのですが、できれば何か食べさせてくれませんか……」
めぐみんと名乗る娘は、そう言って悲しげな瞳でじっと見てきた。
それと同時に、めぐみんの腹が鳴る。
「……ええと、カズマに説明すると、彼女達紅魔族は、生まれつき

高い知力と強い魔力を持ち、大抵は魔法使いのエキスパートになる素質を秘めているわ。……そして、大抵変わった名前を持っているわ」

なるほど。別に俺をからかっている訳じゃないのか。

「変わった名前とは失礼な。私から言わせれば、人族の名前の方がよほど変わってると思うのだよ」

「……ちなみに、両親の名前を聞いてもいいか？」

「母はゆいゆい。父はひょいざぶろー」

「…………とりあえず、この子の種族は質のいい魔法使いが多いんだよな？　仲間にしてもいいか？」

「おい、私の両親の名前について言いたい事があるなら聞こうじゃないか」

「いいんじゃない？　冒険者カードは偽造はできないんだし、彼女は上級職のアークウィザードで間違いないわ。カードを見ても、高い魔力が記されてる。魔力容量は普通だけど、これは期待できると思うわよ。もし彼女の言う通り本当に爆裂魔法が使えるのなら、それは凄い事だわ。習得が極めて難しい爆発系の魔法の、最上級の魔法だもの」

「おい、彼女ではなく、私の事はちゃんと名前で呼んで欲しい」

抗議してくるめぐみんに、俺は店のメニューを手渡した。

「まあ、何か頼むといいよ。俺はカズマ。こいつはアクアだ。よろしく、アークウィザード」

めぐみんは何か言いたそうな顔をしたが、無言でメニューを手に取った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆
◆

「爆裂魔法は最強魔法。その分、詠唱時間が結構かかる。呪文が完成するまで、あのカエルの足止めをお願い」

俺達は満腹になったためぐみんを連れて、あのジャイアントトードにリベンジにやって来ていた。

平原の、遠く離れた場所には一匹のカエルの姿。

カエルは、こちらに気付いて向かって来ていた。

だが、更に逆方向からも一匹のカエルがこちらに向かう姿が見える。

「遠い方のカエルを魔法の標的にしてくれ。近い方は……。おい、行くぞアクア。今度こそリベンジだ。お前、一応は元なんたらなんだろ？　たまには元なんたらの実力を見せてみろ！」

「元って何!?　ちゃんと現在進行形で女神よ私は！　アークプリーストは仮の姿よ！」

涙目で俺の首を絞めようとしてくる自称女神を、めぐみんが不思議そうに。

「……女神？」

「……を、自称している可哀想な子だよ。今後もたまにこういった事を口走る時があると思うけど、できるだけそっとしておいてやって欲しい」

俺の言葉に、同情の目でアクアを見るめぐみん。

半泣きになったアクアが、拳を握ってヤケクソ気味に、近い方のカエルへと走った。

「きいっ！　打撃が効き辛いカエルだけど、今度こそ女神の力を見せてやるわよ！　見てなさいよカズマ！　今の所活躍してない私だけど、今日こそはっ！」

そう叫んで、見事カエルの体内へ侵入する事に成功したアクアが、

カエルの腹の中から一匹のカエルを足止めしてくれている間に、めぐみんの呪文が完成した。

「喰らうがいい、我が必殺の爆裂魔法を！　『エクスプロージョン』っ！」

閃光が走った。

めぐみんの杖の先から放たれたそれは、遠くからこちらに接近してくるカエルにぶつかると……！

目も眩む様な光と轟音と共に、カエルは爆裂、四散した。

凄まじい突風になぎ倒されそうになりながらも、俺は足を踏ん張り顔を庇う。

煙が晴れると、カエルのいた場所は半径十メートル以上にも渡ってクレーターができており、その爆発の凄まじさを現していた。

「すっげー……。これが魔法か……」

俺がめぐみんの魔法の威力に感動していると、今の轟音と衝撃からか、一匹のカエルが地中から這い出してきた。

地球ではカエルは地に潜って冬眠するが、この世界のカエル達は、冬眠など関係なく、日頃から地中に潜って生活しているのかもしれない。

カエルはめぐみんの近くに這い出そうとしているが、起きたばかりなのか、その這い出す動作は非常に遅い。

今のうちにめぐみんと共にカエルから距離を取っておき、めぐみんの先程の魔法で消し飛ばしてもらえばいいだろう。

「アークウィザード！　一旦離れて、距離をとってから攻撃を……」

そこまで言いかけて、めぐみんの方を向くと同時。

俺はそのまま動きを止める。
そこにはめぐみんが倒れていた。

「ふ……。我が奥義である爆裂魔法は、その絶大な威力ゆえに、消費魔力もまた絶大。……要約すると、最大魔力容量を超えた魔力を消費したので、身動き一つ取れません。近くからカエルが湧き出すとか予想外。やばい食われる。すいません、ちょ、助け……」

俺は、アクアとめぐみんが身を呈して動きを封じたカエル二匹にトドメを刺し、何とか、『三日以内にジャイアントトード５匹討伐』のクエストを完了させた。

4話

「うっ……うぐっ……。ぐすっ……。生臭いよう……。生臭いよう……」

一匹はめぐみんの魔法で消滅した為、残る二匹の巨大なカエルを引きずりながら、粘液まみれのアクアがめそめそと泣いている。

俺の力じゃカエル一匹すらビクともしないのに、さすが腐っても一応元女神だ。

「カエルの体内って、臭いけどいい感じに温かいんですね……。知りたくもない知識が増えました……」

同じく粘液まみれでそんな事を言っているめぐみんは、俺の背中におぶさっていた。

魔法を使う者は、魔力容量を超えて魔法を使うと、魔力の代わりに生命力を削る事になるらしい。

ほとんど魔力が枯渇している状態で大きな魔法を使うと、命に関わる事もあるそうだ。

「今後、爆裂魔法は緊急の時以外は禁止だな。これからは、他の魔法で頑張ってくれよ」

俺の言葉に、背中におぶさったままめぐみんが、俺に掴まっている手に力を込めた。

「……使えません」

「……は？　何が使えないんだ」

めぐみんの言葉にオウム返しで言葉を返す。

めぐみんが、掴まる手に更に力を込め、その薄い胸が俺の背中に押し付けられた。

「……私は、爆裂魔法しか使えません。他には、一切の魔法が使えません」

「……マジか」
「……マジです」
俺とめぐみんが静まり返る中、今まで鼻をぐすぐす鳴らしていたアクアが、ようやく会話に参加する。
「爆裂魔法以外使えないってどういう事？　爆裂魔法を習得できる程のスキルポイントがあるなら、他の魔法を習得していない訳がないでしょう？」
……スキルポイント？
そういや、ギルドのお姉さんがスキル習得がどうのと言っていたな。
そんな俺の顔を見て、アクアが説明してくれる。
「スキルポイントってのは、クラスに就いた時に貰える、クラススキルを習得する為のポイントよ。優秀な者ほど初期スキルポイントは多くて、このポイントを振り分けて様々なスキルや魔法を習得するわけ。例えば、超優秀な私なんかは、まず宴会芸スキルを全部習得し、それからアークプリーストの全魔法を習得して、更にポイントが余ったから近接格闘スキルまで取ったわ」
「……宴会芸スキルって何に使うものなんだ？」
アクアは俺の質問を無視して先を続ける。
「クラススキルは、個人によって習得できるスキルが限られてくるわ。例えば水が苦手な人は氷結や水属性のスキルを習得する際、普通の人よりも大量のポイントが必要だったり、最悪、習得自体ができなかったりね。……で、爆発系の魔法は複合属性って言って、いくつもの属性の魔法が複雑に絡み合っている系統の魔法。つまり、爆発系の魔法を習得できるくらいの者なら、他の属性の魔法なんて簡単に習得できるはずなのよ」
「爆裂魔法なんて上位のものが使えるなら、下位の他の魔法が使え

ないわけが無いって事か。……で、宴会芸スキルってのはいつどうやって使うものなんだ」

俺の背中で、めぐみんがぽつりと言った。

「……私は爆裂魔法をこよなく愛するウィザード。爆発系統の魔法が好きなんじゃない。爆裂魔法だけが好きなのよ」

その意味は俺には分からないが、アクアは真剣な面持ちでめぐみんの独白に耳を傾けている。

ずりずりとカエル引っ張りながら。

いや、そんな事よりも、俺はすでに宴会芸スキルとやらの方が気になっているんだが。

「もちろん他のスキルを取れば楽に冒険ができるのでしょう。火、水、土、風。この基本属性のスキルを取っておくだけでも違うでしょう。……でも、ダメ。私は爆裂魔法しか愛せない。例え今の私の魔力容量では一日一発が限界でも。例え魔法を使った後は倒れるとしても。それでも私は、爆裂魔法しか愛せない！　だって、私は爆裂魔法を使う為だけに、アークウィザードの道を選んだのだから！」

「素晴らしい！　素晴らしいわ！　その、非効率ながらもロマンを追い求めるその姿に、私は感動したわ！」

……まずい、どうもこの魔法使いはダメな系だ。

よりによってアクアが同調しているのがその証拠だ。

ハッキリ言って、これ以上問題児を引き取りたくない。

「そっか。多分茨の道だろうけど頑張れよ。お、そろそろ街が見えてきたな。それじゃあ、ギルドに着いたら今回の報酬を山分けさせて貰おう。うん、まあ、また機会があればどこかで会う事もあるだろ。では、ギルドに着いたら解散、という事で」

その言葉に、俺を掴んでいるめぐみんの手に力が込められた。

「ふ……。我が望みは、爆裂魔法を放つ事。報酬などあくまでおまけに過ぎず、何なら山分けでなく、食事とお風呂とその他雑費を出して貰えるなら、無報酬でもいいと考えている。そう、上級職であるアークウィザードである我が絶大な力が今なら食費と諸々のみ！　これはもう、長期契約を交わしてもいいのではないだろうか！」

「いやいや、その強力な力は俺達のような弱小パーティには向いていない。そう、お前さんの力は俺達には宝の持ち腐れだ。俺達の様な弱小パーティには普通の魔法使いで充分だ。ほら、俺なんか初期クラスの冒険者をやってるぐらいだから」

俺はそう言いながら、ギルドに着いたらすぐにこいつを捨てられるように、必死でしがみ付いてくるめぐみんの手をなんとか緩めようとする。

が、その俺の手をめぐみんが掴んで離さない。

「いやいやいや、弱小でも駆け出しでも大丈夫だから。私……、じゃない、我も上級職だけど駆け出しだから。まだレベル６だから。見捨てないでもう少し使ってくれれば、レベル上がれば魔法使っても倒れなくなるから。だ、だから、ね？　お、お願いだから、手を引き剥がそうとしないで欲しいです」

「いやいやいや、爆裂魔法一発しか使えない魔法使いとか、かなり使い勝手悪いし意味わかんないから。くっ、魔法使いのくせに意外な握力をっ……！　こ、こら離せ、お前多分他のパーティにも捨てられた口だろ、というかダンジョンにでも潜った暁には、爆裂魔法なんて狭いダンジョンじゃ使えないし、いよいよ役立たずだろ、お、おいこら離せ、ちゃんと今回のクエスト分の金はやるから！　離せ！」

「見捨てないで！　もうどこのパーティも拾ってくれないの！　ダンジョン探索の際には、荷物持ちでも何でもします、お、お願い、私を捨てないでー！」

背中から離れようとしないめぐみんが、捨てないでだのと大声で

叫ぶ為か、あらぬ誤解をしている通行人達がこちらを見てひそひそと噂していた。
すでに街中に戻ってきている為、巨大なカエルを引きずるアクアの姿もありやたらと目立つ。
「やだ……。あの男、あの女の子を捨てようとしてる……」
「隣には、なんか粘液まみれの女の人に、あんな巨大なカエル運ばせてるわよ」
「あんな女の子を弄んで捨てるなんて、とんだクズね。見て？　女の子二人は粘液でぬるぬるよ？　一体どんなプレイしたのよあの変態」
……間違いなくあらぬ誤解を受けている。
アクアがそれを聞いてニヤニヤしているのが憎たらしい。
そして、めぐみんにもそれが聞こえた様で。
めぐみんは口元をにやりと歪め……
「どんなプレイでも大丈夫ですから！　先程の、カエルを使ったヌルヌルプレイだって耐えてみせま「よーし分かった！　これからよろしくなめぐみん！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はい、確かに。ジャイアントトードを三日以内に五体討伐。討伐を確認いたしました。ご苦労様でした」
冒険者ギルドに報告を終え、規定の報酬を貰う。
粘液にまみれたアクアとめぐみんは、そのままだと生臭い上にまた俺があらぬ誤解を受ける可能性があるので、とっとと大衆浴場へ

追いやった。
　カエルの死体の内一体は爆裂魔法で消滅した為、クエスト完了の報告はどうなるのかと思っていたが、この冒険者カードは、倒したモンスターの種類や討伐数が記録されていくらしい。
　俺とめぐみんのカードを見せると、受付嬢はなにやら機械を操作して、それだけでチェックを終えていた。
　科学の代わりに魔法が発達した結果なんだろうけど、この世界の技術もあながちバカにはできない。

改めて自分のカードを見ると、そこには冒険者レベル６とある。
一応あのカエルは中級の冒険者が狩る相手らしい。
その為、４匹狩っただけで一気にレベル６にまで上がったのだろう。
ステータス欄の数値が多少は上がっているが、あまり強くなった実感は無い。

「……しかし、本当にモンスター倒すだけで、強くなるもんなんだなぁ……」

　俺は思わず呟いた。
　この世界では、生き物を殺すと、殺した相手の力の一部を吸収するのだそうな。
　アクアの話だと、魔力の溢れているこの世界では魂の記憶がうんたらかんたら。
　まあ、言っていた事の半分も理解できなかったが、要は敵を倒すと経験値が入ると思っておけばいいらしい。
　よくよく見ると、カードにはスキルポイントと書かれている欄が６０と表示されている。

　キマシタワー。
　とうとう俺もスキルが使えるわけだ。

「はい、ではジャイアントトード二匹の買い取りとクエスト報酬を合わせまして、十一万エリスとなります。ご確認くださいね」

十一万か。

あの巨大なカエルが一匹五千円程での買い取り。

そして、カエル五匹を倒して十万円。

アクアの話では、四人から六人でパーティを組んでクエストを行なうらしい。なので、普通の冒険者の相場だと、一日から二日をかけてあのモンスターと命がけで戦い、カエル五匹の取引と報酬で十二万五千円。五人パーティだとして、一人当たりの取り分が二万五千円。

……割に合わねー。

クエストが一日で済めば日当二万五千円。

これだけ見れば一般人にしてはいい稼ぎに思えるかもだが、命懸けの仕事にしてはやはり割に合っていない気がする。

事実、今日なんてカエルがもう一匹湧いてたら俺も食われて、誰も助けることができなくなり、見事全員カエルに消化されるのを待っていただろう。

考えただけでもゾッとする。

一応他のクエストにも目を通すと、そこに並んでいたクエストは……。

『森に悪影響を与えるエギルの木の伐採、報酬は出来高制。迷子になったペットのホワイトウルフを探してきて欲しい。息子に剣術を教えて欲しい。※要、ルーンナイトかソードマスターの方に限る。魔法実験の練習代探してます、※要、強靭な体力か強い魔法抵抗力……』

うん。

平和な日本に比べたら、異世界はハードモードです。
もう帰りたくなって来た。

5話

「なあ、スキルの習得ってどうやるんだ？」

軽くホームシックにかかっていた俺だったが、スキルポイントを得た事を思い出して少しだけ前向きになり、風呂から帰って来た二人に尋ねた。

二人には今回のクエストで得た報酬の内アクアに４万、めぐみんに３万を渡していた。

めぐみんは食費だけでいいだの言い出したが、何だかダメ人間を養う義務が発生しそうでちゃんとした報酬を払う事になった。

俺の親を見てきた身としては、ニートを養う大変さは分かっているつもりだ。

カエルは二日かけて狩ったので、初日は参加しなかったためぐみんはちょっと安めの３万。

俺とアクアが４万ずつで、合計してちょうど今回の報酬１１万だ。

二人は今、俺の前でカエル定食をがっついている。

アクアにいたってはキンキンに冷えたクリムゾンビアを一気飲みしてこめかみを押さえていた。

……一応女二人に男一人のハーレムパーティっぽいのに、色気の欠片も無いなぁ……。

「スキル習得？　そんなもの、ギルドカードに出ている現在習得可能なスキル欄を……。ああ、カズマのクラスは初期クラスの冒険者だったね。冒険者は、誰かにスキルを教えてもらうんだよ。まずは目で見て、そしてスキルの使用方法を教えてもらう。すると、カードに習得可能スキルって欄が現れるから、スキルポイントを使ってそれを取るといいさ。そして、一度習得したスキルは使えば使うほどに鍛えられ、スキルレベルが上がっていく。頑張ってスキルを鍛

えていけば、冒険者でも本職のスキルに匹敵する力が得られるはずさ」

なるほどな。

というか、確か以前受付のお姉さんが、冒険者は全てのスキルが習得可能だって言ってたな。

という事は……

「……つまりめぐみんに教えてもらえば、俺でも爆裂魔法が使えるようになるって事か？」

「その通り！」

「うおっ！」

俺の何気ない発言に、意外な食いつきを見せるめぐみん。

「その通りだよカズマ！　まあ、習得するスキルポイントはバカみたいに食うが、冒険者はアークウィザードを除き唯一爆裂魔法が使えるクラス。爆裂魔法を覚えたいなら幾らでも教えてあげよう。というか、それ以外に覚える価値あるスキルなんてないよ！　さあ、供に爆裂の道を歩こうじゃないか！」

顔が近い！

「ちょ、落ち、落ち着け！　つーか、スキルポイント６０しかないんだがこれで習得できるもんなのか？」

滾るめぐみんでは話にならない為、アクアに聞く。

「冒険者が爆裂魔法を習得しようと思うなら、１００や２００じゃきかないわよ。冒険者レベルが５０を越えるまで一切スキルポイント使わないで貯めていれば、もしかしたら習得できるかもね」

「待てるかそんなもん」

「！」

俺の一言にショックを受けたらしいめぐみんは、しょんぼりと項垂れながらカエル肉をかじりだした。

しかし、俺の就いているクラス、冒険者は、全スキルを習得可能って所が唯一の利点なんだから、せっかくなら多彩なスキルを覚え

ていきたい。

「なあアクア。お前なら沢山使えるスキル持ってるんじゃないか？　何か、お手軽なスキルを教えてくれよ、習得にあまりポイント使わないで済んで、それでいてお得な感じのヤツ」

俺の言葉に、アクアはジョッキを握りながらしばらく考え込む。

「しょうがないわねー。言っとくけど、私のスキルは半端ないわよ？　ホイホイと誰にでも教えるようなスキルじゃないんだからね？」

やたら勿体つけるアクアだが、教えてもらう立場なのでここはじっと我慢。

神妙に頷きながら、アクアがスキルを使う所を観察する。

「じゃあ、まずはこのコップを見ててね。この水の入ったコップを自分の頭の上に落ちないように乗せる。ほら、やってみて？」

俺はアクアに続いて、同じように自分の頭にコップを乗せた。

すると、アクアはどこから取り出したのか、一粒の何かの種をテーブルに置くと。

「さあ、この種を指で弾いてコップに一発で入れるのよ。すると、あら不思議！　このコップの水を吸い上げた種はにょきにょきと……」

「誰が宴会芸スキルを教えろっつった！」

「ええっ！」

めぐみんに続いてなにやらショックを受けたらしいアクアも、しょぼんとしながらジョッキの中身をちびちびすする。

何を落ち込んでいるのかは知らないが、目立つから頭の上のコップを下ろして欲しい。

「あっはっは！　面白いねキミ！　ねえ、スキルが欲しいんだろ？　盗賊スキルなんてどうだい？」

それは、横からの突然の声。

見れば隣のテーブルには二人の女性が居た。

俺に声を掛けてきたのは盗賊風のお姉さん。
頬に小さな刀傷がある、ちょっとスレた感じだが明るい雰囲気の美人さんだ。
その隣には、ガチガチのフルプレートメイルを着込んだ金髪ロングのお姉さん。
冷たく、取っ付きにくい印象の酷薄そうな美女だった。
二人とも、俺より一つ二つ年上だろうか。
ニート歴が長い俺はドギマギしながらも、なんとか冷静を装ってみる。
「盗賊スキル？　えっと、どんなのがあるんでしょう？」
俺の質問に、上機嫌で。
「盗賊スキルは使えるよー。罠の解除に敵感知、潜伏に窃盗。持ってるだけでお得なスキルが盛りだくさんだよ。キミ、まだクラス冒険者なんだろ？　盗賊のスキルは習得にあんまりポイントもかからないしお得だよ？　どうだい？　今なら、クリムゾンビア一杯でいいよ？」
安いな！
と思ったが、よく考えればスキルを教えた所でこのお姉さんにはデメリットなんてない。
本気で俺が盗賊スキルを教えて欲しければ、そこらの他の盗賊に頼んでもいいわけだし。
「よし、頼む！　すんませーん、こっちの人にクリムゾンビアお願いします！」

「まずは自己紹介しとこうか。あたしはクリス。見ての通りの盗賊だよ。で、こっちの無愛想なのがダクネス。こいつのクラスはクル

セイダーだから、キミに有用そうなスキルはちょっと無いと思うよ」
「ウス！　俺はカズマって言います。クリスさん、よろしくお願いしやっす！」
冒険者ギルドの裏手の広場。
俺とクリス、そしてダクネスの三人は、今は誰もいない広場に立っていた。
ちなみに俺の連れ二人は、なにやらテーブルでへこんだままだったので置いてきた。
「では、まずは敵感知と潜伏をいってみようか。罠の解除なんかは、こんな街中に罠なんてないからまた今度ね。じゃあ……、ダクネス、ちょっと向こう向いてて？」
「……ん。分かった」
ダクネスが、言われたとおりに素直に向こうを向く。
すると、クリスがちょっと離れた所にあるタルの中に入り、上半身だけを出す。
そして向こうを向いているダクネスの頭に、何を思ったのか石を投げた。
そして、そのままタルの中に身を隠す。

……ひょっとして、これが潜伏スキルだとか言う気だろうか。
「……」
石をぶつけられたダクネスが、無言のままスタスタと、ぽつんと一つしかないタルへと向かって歩いていく。
「敵感知……。敵感知……！　ダクネスの怒ってる気配をピリピリ感じるよ！　ねえダクネス、分かってると思うけどこれはスキルを教える為に仕方なくやってる事だからねお手柔らかにあああああああああ、やめてえええええええええええええ！」
隠れていたタルごと、ダクネスに横に倒されてそのままゴロゴロと転がされ、クリスが悲鳴を上げている。

……これでほんとにスキルを覚えられるんだろうな……。

「さ、さて。それじゃあたしのイチオシのスキル、窃盗をやってみようか。これは、対象の持ち物を何でも一つ奪い取るスキルだよ。相手がしっかり握っている武器だろうが、鞄の奥にしまい込んだサイフだろうが、何でも一つ、ランダムで奪い取る。スキルの成功確率は、スキルレベルとステータスの幸運に依存する。強敵なモンスターと相対した時とか、モンスターの武器を奪ったり、もしくは大事に取っといたお宝だけかっさらって後は逃げたり。色々と使い勝手のいいスキルだよ」

しばらくタルごと転がされ、目を回していたクリスが復活した。

窃盗スキルは、確かになかなか使えそうな感じだ。

しかも、成功率が幸運依存って事は、俺の唯一高いステータスを活かせるって事だ。

「じゃあ、あなたに使ってみるからね？　いってみよう！　『スティール』っ！」

クリスが手を前に突き出し叫ぶと同時、その手に小さな物が握られていた。

それは……。

「あっ！　俺のサイフ！」

俺のなけなしの金が入った薄いサイフ。

「おっ！　当たりだね！　まあ、こんな感じで使うわけさ。それじゃ、サイフを返……」

クリスは、俺にサイフを返そうとして、そしてにんまりと笑みを浮かべた。

「……ねえ、あたしと勝負してみない？　キミ、早速窃盗スキルを

覚えてみなよ。それで、あたしから何か一つ、スティールで奪っていいよ。それが、あたしのサイフでもあたしの武器でも文句は言わない。この軽いサイフの中身だと、間違いなくあたしのサイフの中身や武器の方が価値があるよ。どんな物を奪ったとしても、キミはこの自分のサイフと引き換え。……どう？　勝負してみない？」

いきなり面白い事を言い出す姉さんだ。

しかし、と俺は考える。

俺は幸運が高いらしい。

で、相手からは何か一つ奪ってもいい。

つまり、スキルに失敗したら何も貰えないって事じゃないだろう。

……やってやるか。

なんというか、こういった賭け事みたいなヤツはいかにも荒くれた冒険者同士のやりとりみたいで憧れる！

俺は自分の冒険者カードを確認すると、そこに習得可能スキルという欄が新しく表示されているのを確認した。

そこを指で押してみると、４つのスキルが表示される。

敵感知１５ポイント、潜伏１５ポイント、窃盗１５ポイント、……

……宴会芸『花鳥風月』４０ポイント。

……最後のはアクアのやってたコップに種を入れる宴会芸か？

何で宴会芸のくせに大層な技名と結構なスキルポイントを食ってんだ。

俺はカードの中のスキル、窃盗、敵感知、潜伏を習得する。

６０あったスキルポイントが消費され、残りスキルポイントが１５になる。

なるほど、こんな感じでスキルを覚えるのか。

「早速覚えてみたよ。そして、その勝負乗った！　何盗られても泣

くんじゃねーぞ？」
言って右手を突き出す俺に、クリスが不敵に笑って見せた。
「いいねキミ！　そういう、ノリのいいヤツって好きだよ！　さあ、何が盗れるかな？　今ならサイフが敢闘賞。当たりは、魔法が掛かってるダガーだよ！　こいつは４０万エリスは下らない一品だからね！　そして、残念賞はさっきダクネスにぶつける為に多目に拾っといたこの石だよ！」
「ああっ！　きったねえ！！　そんなの有りかよっ！」
俺はクリスが取り出した石を見て、思わず抗議の声を上げた。
自信満々だと思ったら、こういう事か！
確かにゴミアイテムを多く持っておけば、大事なアイテムが盗られる確率も減り、スティール対策にはなる。
「これは授業料だよキミ。どんなスキルも万能じゃない。こういった感じで、どんなスキルにだって対抗策はあるもんなんだよ。一つ勉強になったね！　さあ、いってみよう！」
畜生、確かにいい勉強にはなった！
それに、心底楽しそうに笑うクリスを見ていると、騙された方が悪い気にすらなってくる。
ここは日本じゃない、弱肉強食の異世界だ。騙される甘っちょろいヤツが悪いのだ。
それに、勝負の分が悪くなったってだけで、まだ残念賞に当たるとは決まってない。
「よし、やってやる！　喰らえ、『スティール』っ！」
俺が叫ぶと同時、俺が突き出した右手には何かがしっかりと握られていた。
俺の幸運が高いって言っていたのは本当らしい。
一発で成功しやがった。
俺は自分が手に入れた物を広げ、マジマジと見ると……。
「……なんだこれ？」
それは、一枚の黒い布切れだった。

俺はそれを両手で広げると……。

「ヒャッハー！　当たりも当たり、大当たりだあああああああ！」

「わあああああああああああああ！　ぱ、ぱんつ返してえええええええええええええええええええっ！」

クリスが自分のスカートを押さえながら、涙目で絶叫した。

6話

俺がギルド内の酒場に戻ると、大変な騒ぎになっていた。

「アクア様、もう一度！　金なら払うので、どうかもう一度花鳥風月を！」

「ばっか野郎、アクアさんには金より酒だぁ！　ですよねアクアさん！　クリムゾンビア奢りますから、ぜひ花鳥風月をもう一度！」

めんどくさそうな様子のアクアの周りに、何故か人だかりが出来ていた。

「ああもう、芸って物はね？　請われたからって何度もやる物ではないのよ！　良いジョークは一度きりに限るって、偉い人が言ってたわ！　受けたからって同じ芸を何度もやるのは三流の芸人よ！　そして私は芸人じゃないから、芸でお金を受け取る訳にはいかないの！　これは芸をたしなむ者の最低限の覚悟にして、それに花鳥風月は元々あなた達に披露するつもりだった芸でもなく……。あっ！　ちょっとカズマ、やっと戻ってきたわね、あんたのおかげでえらい事に……。って、どうしたの？　その子は」

人だかりを面倒そうに押しのけて、俺の隣で涙目で落ち込んでいるクリスにアクアが興味を抱く。

俺が説明するより早く、ダクネスが口を開き、ボソボソと呟いた。

「……ん。クリスは、カズマにぱんつ剥がれた上に有り金毟られて落ち込んでいるだけだ」

「おい何口走ってんだおい、待てよおい待て。間違ってないけど、ほんと待て」

俺は、クリスが幾らでも払うからぱんつ返してと泣いて頼んできたので、自分のぱんつの値段は自分で決めろと言っただけだ。

そして、提示する値段に満足しなかったら、もれなくクリスのぱんつは我が家の家宝として奉られる事になる、と。

泣きながら自分のサイフと俺のサイフを差し出したから交換に応じたまでで、ダクネスの言い方だとなんだか語弊がある。

ダクネスの言葉に軽く引いてるアクアとめぐみんの視線が気になるが、やがてクリスが落ち込んでいたその顔を上げた。

「公の場でいきなりぱんつ脱がされたからっていつまでもメソメソしててもしょうがないね！　よし。ダクネス、あたし、悪いけど、臨時で稼ぎのいいダンジョン探索に参加してくるよ！　下着を人質にされて有り金失っちゃったしね！」

「おい、待てよ。なんかすでに、アクアとめぐみん以外の他所の女性冒険者達の目まで冷たい物になってるからほんとに待って」

周囲の女性達の視線に怯える俺に、クリスがクスクス笑い、

「このくらいの逆襲はさせてね？　それじゃあ、ちょっと稼いでくるから適当に遊んでいてねダクネス！　じゃあ、いってみようかな！」

言いながら、クリスは冒険仲間臨時募集の掲示板に行ってしまった。

「えっと、ダクネスさんは行かないの？」

自然と俺達のテーブルに座ったままのダクネスに、俺は疑問に思って尋ねる。

「……ん。私は前衛職だからな。前衛職なんて、どこにでも有り余っている。でも、盗賊はダンジョン探索に必須なクラスの割に、地味だから成り手のあまり多くないクラスだ。クリスの募集は幾らでもある」

なるほど、そういやアクアもアークプリーストは人気クラスで引っ張りだこだって言ってたし、クラスによって優遇されたりとか色々あるのだろう。

やがて、ほどなくしてすぐに臨時パーティが見つかったのか、数

名の冒険者達と連れ立って入り口から出て行くクリス。
クリスは、出掛けにこちらに向かってひらひらと手を振って行った。
「もうすぐ夕方になりそうな時間帯なのに、クリス達はこれからダンジョン探索に向かうのか？」
「ダンジョン探索は、出来ることなら朝一で突入するのが望ましいです。なので、ああやって前の日にダンジョンに出発して、朝までダンジョン前でキャンプするのさ。ダンジョン前には、そういった冒険者を相手にしている商売すら成り立っているしね。それで？」
カズマは、無事にスキルを覚えられたのかい？」
めぐみんのその言葉に、俺はにやりと不敵に笑った。
「ふふ、まあ見てろよ？　行くぜ、『スティール』っ！」
俺は叫び、めぐみんに右手を突き出すと、その手にはしっかりと白い物が握られていた。

そう、ぱんつである。

「……なんです？　レベル上がってステータス上がったから、冒険者から変態にクラスチェンジしたんですか？　……あの、スースーするのでぱんつ返してください……」
「あ、あれっ！？　お、おかしーな、こんなはずじゃ……。ランダムで何かを奪い取るってスキルのはずなのにっ！」
慌ててめぐみんにぱんつを返し、いよいよ俺への女性陣の視線が冷たい物になっていく中、それは突然起こった。

『緊急クエスト！　緊急クエスト！　街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！　繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』

それは、街中に響く大音量のアナウンス。

魔法的な何かで音を拡大しているのだろう。
「おい、緊急クエストってなんぞ？　モンスターが街に襲撃に来たのか？」
ちょっと不安気な俺とは対称的に、ダクネスとめぐみんはどことなく嬉しそうな表情だ。
ダクネスが、ぼそぼそと小さな声で言ってきた。
「……ん、多分キャベツの収穫だろう。もうそろそろ収穫の時期だしな」
……。
「は？　キャベツ？　その、キャベツって名前のモンスターかなんか？」
俺が呆然とそんな感想を告げると、何故かめぐみんとダクネスが俺を可哀想な人でも見るかのような目で見つめてきた。
「キャベツとは、緑色の丸いやつです。食べられる物です」
「噛むとシャキシャキする歯ごたえの、おいしい野菜の事だ」
「そんな事は知ってるわ！　じゃあ何か？　緊急クエストだの騒いで、冒険者に農家の手伝いさせようってのか、このギルドの連中は」
最近まで土木工事やってた俺が言うのもなんだが、俺はここに農業しに来た訳じゃない。
冒険をしに来たのだ。
「あー……。カズマは知らないんでしょうけどね？　ええっと、この世界のキャベツは……」
アクアが、何だか申し訳無さそうに俺に言いかけ、それを遮る様に、ギルドの職員が施設内に居る冒険者に向かって大声で。
「皆さん、突然のお呼び出しすいません！　もうすでに気付いている方もいるとは思いますが、キャベツです！　今年もキャベツの収穫時期がやってまいりました！　キャベツ一玉の収穫につき千エリスです！　すでに街中の住民は家に避難して頂いております。では皆さん、できるだけ多くのキャベツを捕まえ、ここに収めてくださ

い！　くれぐれもキャベツに逆襲されて怪我をしない様お願い致します！」

………今、この職員はなんつった。

その時、冒険者ギルドの外で歓声が巻き起こった。
何事かと、人混みに混ざり様子を見に行く俺の目に、街中を悠々と飛び回る緑色の物体の姿が飛び込んでくる。

呆然とその訳の分からない光景に立ち尽くしていると、いつの間にか隣に来ていたアクアが呟く。
「この世界のキャベツ達は飛ぶわ。味が濃縮してきて収穫の時期が近づくと、簡単に食われてたまるかとばかりに。街や草原を疾走する彼らは大陸を渡り海を越え、最後には人知れぬ秘境の奥で誰にも食べられず、ひっそりと息を引き取ると言われているわ。それならば、私達は彼らを一玉でも多く捕まえておいしく食べてあげようって事よ」
「……俺、もう馬小屋に帰って寝ててもいいかな」
呆然と呟く俺の隣を、勇敢な冒険者達が気勢を上げて駆け抜けてゆく。
彼らもまた、今、この瞬間を必死に生きるキャベツ達に感化された熱き漢達なのだろう。

うん、俺が思っていた異世界じゃない。
凄く、日本に帰りたい。

俺はギルドの中で出されたキャベツ炒めをかじりながら、呟いた。
「何故たかがキャベツの野菜炒めがこんなにクソ美味いんだ。納得いかねえ、ホントに納得いかねえ」

無事キャベツ狩りが終わった街中では、あちこちで収穫されたキャベツを使った料理が振舞われていた。
物凄くやり切れなかったが、一応金にはなるのでキャベツ狩りに参加した俺だったが、何だか軽く後悔している。
俺はキャベツと戦う為に異世界に来た訳じゃない。

「しかし、やるわねダクネス！　あなた、さすがクルセイダーね！　あの鉄壁の守りはさすがのキャベツ達も攻めあぐねていたわ」
「ん……、そ、その、アクアの回復魔法も凄かった……。アクアは最初こそ、からかう様に空中を漂うキャベツを追いかけ、足元が疎かになって転んで泣いていたが……。その後、多くの冒険者グループに強力な回復魔法を飛ばして大活躍だったではないか。私など、ただ固いだけの女だ。私は器用度も低く、素早さも無い。だから、剣を振るってもロクに当たらず、誰かの壁になって守る事しか取り柄が無い。……その点、めぐみんも凄まじかった。キャベツの群れを追って街に近づいてきたモンスターの群れを、爆裂魔法の一撃で吹き飛ばしていたではないか。他の冒険者達のあの驚いた顔といったら無かったな」
「ふふ、我が必殺の爆裂魔法の前において、何者も抗う事など叶わず。……それよりも、カズマの活躍こそ目覚しかったね。魔力を使い果たした私を素早く回収して背負って帰ってくれたし」
「……ん、突出した私がキャベツやモンスターに囲まれ、袋叩きにされている時も、カズマは颯爽と現れ、襲い来るキャベツ達を収穫していってくれた。助かった、礼を言う」

「確かに、潜伏スキルで気配を消して、敵感知で素早くキャベツの動きを捕捉して、背後から強襲するその姿はまるで鮮やかな暗殺者のごとしでした」

「やるわねカズマ！　私から、『華麗なるキャベツ泥棒』の称号を授けてあげるわ」

「やかましいわ！　そんな称号で俺を呼んだら引っぱたくぞ！　……あああもう！　どうしてこうなった！」

俺は頭を抱えたままテーブルに突っ伏した。

緊急事態である。

「……ん。では、みんな、これからよろしくな。名はダクネス。クラスはクルセイダー。一応両手剣を使ってはいるが、火力は期待しないでくれ。なにせ、器用度が低過ぎて攻撃がほとんど当たらん。だが、壁になるのは大得意だ。相方のクリスが帰ってくるまでの間になるとは思うが、よろしく頼む」

そう。仲間が一人、増えました。

アクアがキャベツ狩りで得た報酬で早速クリムゾンビアをあおりながら。

「ふふん、ウチのパーティもなかなか豪華な顔触れになってきたじゃない？　アークプリーストの私に、アークウィザードのめぐみん。そして、防御特化の上級前衛職、クルセイダーのダクネス。四人中三人が上級職なんてパーティ、そうそう無いわよカズマ！　あなた、凄くついてるわよ？　感謝しなさいよ？」

一発しか魔法が使えない魔法使いに攻撃が当たらない前衛職、極上のバカで運が悪くて間の悪いプリーストだがな！

キャベツ狩りの最中、なぜかダクネスと意気投合したアクアとめぐみんが、ダクネスをパーティに誘おうと言い出したのだ。
俺だって、普通の仲間だったなら特に断わる理由も無い。
だって美人だし。
だがこのダクネス。全くと言っていいほどに攻撃が当たらない。
相当な美人なのだが。
何でも、スキルポイントを防御系のスキルに全振りしている為、両手剣修練などの攻撃スキルを一切取っていないらしい。
見てくれはクール系の美女なのに、本当に勿体無い。
しかもこのクルセイダー、なぜかやたらとモンスターの群れのど真ん中に突っ込みたがるのだ。

弱者を守るクルセイダーとして、他の者を守りたい気持ちが人一倍強いのは良い事なのかもしれないが……。
「んっ……。ああ、先ほどの、キャベツやモンスターの群れにボコボコに蹂躙された瞬間は堪らなかったな……。このパーティでは本格的な前衛職は私だけの様だから、遠慮なく私を囮や壁代わりに使いまわしてくれ。何なら、危険と判断したら捨て駒として見捨てて貰ってもいい。……んんっ！　そ、想像しただけで、む、武者震いが……っ！」

ダメだ。

こいつもダメだった。
そう、アクアやめぐみんと同調していた時点で警戒するべきだった。
頬をほんのり赤く染めて、ふるふる震えているダクネスを、俺は泣きたい気持ちで眺めていた。
こんなクール系の美人なのに、俺の目にはもうタダのドMにしか映らない。

「それではカズマ。多分……。いや、間違いなく足を引っ張る事になるとは思うが、その時は遠慮なく強めで罵ってくれ。これから、よろしく頼む」

俺は最弱な初期クラスの冒険者。

そんな貧弱クラスにして元ニートなダメな俺が、なぜかこのパーティでリーダーやってます。

7話

冒険者レベルが9になった。

キャベツ狩りでレベルが3つも上がった事になる。

確か、この世界では倒した相手の魂の記憶の一部だかを吸収して強くなるらしいが、俺はキャベツを捕まえただけで倒していないのに何故レベルが上がるとか、なんでキャベツごときがカエル並みに経験値高いんだとか、キャベツの魂の記憶の一部ってなんだとか、そもそもキャベツに魂があるのかなど、ツッコミたい所が山ほどあったが、考えていると頭が痛くなるので今は考えないでおこう。

レベルが1上がると、スキルポイントが10増える様だ。

何故レベルが上がるとこんなRPGゲームみたいな現象が起こるのかとか、細かく突っ込んでいくと眠れなくなりそうなので気にしないでおく。

残しておいたスキルポイントが15ポイント。

今回のレベルアップで30ポイントのスキルポイント。

合わせて45ポイント。

俺はキャベツ狩りクエストの時に知り合った魔法使い職の人と剣士職の人達から、片手剣修練スキルと初級属性魔法スキルを教えて貰った。

片手剣が15ポイント、初級属性魔法が30ポイントかかった。

スキルを教えてくれた人に聞いた所、剣士が片手剣修練の習得に消費するスキルポイントは通常なら10ポイント。

初級属性魔法スキルなら20ポイントらしい。

つまり、俺が他のクラスのスキルを習得する際には、1・5倍のスキルポイントを使うわけだ。

最も、元々剣を扱うのが苦手な人が剣スキルを取ろうとしたりだ

とかすると、普通よりも多くポイントを消費するとか言っていたからその辺は適当なのかもしれない。
初級属性魔法スキルは火、水、土、風の初級魔法が使えるようになるスキルらしいが、相性が悪いと使えない初級魔法もあると言っていた。
ちなみに初級属性魔法に殺傷力のある魔法はほぼ無いので、初級は取らず、ポイントを貯めていきなり中級属性魔法のスキルを取る魔法使い職が多いらしい。
中級属性魔法は、習得に１００ポイントほどのスキルポイントを使うと聞いた。
単純に考えて、俺の場合だと１５０ポイント使う訳だ。
魔力が高い訳でもない俺が、攻撃魔法を覚えるのは諦めた方がいいのかもしれない。

才能の有無で、最初に所持しているスキルポイントってヤツは違うらしいが、普通の冒険者なら大体３０から５０。
最初から上級職を選べるような優秀な奴は、初期スキルポイントは１００を越える事も少なくないそうな。
とすると、めぐみんやダクネスは最初からかなり優遇されていたのかもしれない。
二人ともスキル振りが残念だが。
俺がレベル１の時に最初から持っていたスキルポイントは１０ポイント。
……うん、落ち込むから深く考えないでおこう。

何にしても、一応一端の冒険者らしくはなってきた。
……はずだ。
となると、後は装備を何とかしたい。
なんせ今の格好は、たまにこっちで買った服に着替える時はあるものの、基本の装備は　ジャージにショートソードとダガーのみ。

皮製でいいから、鎧の一つも欲しい所だ。

「……で、何で私まで付き合わされるのよその買い物に」

俺は、文句たれるアクアを連れて一般大衆向け武具ショップにやって来ていた。

「いや、お前も一応装備整えとけよ。俺はジャージだけど、お前も似たようなもんだろ？　お前の装備、そのヒラヒラの羽衣だけじゃないか」

アクアは俺と一緒にここに来たままの格好だ。

アクアの青い髪と青い瞳に合わせてあつらえた様な、淡い青色の、ヒラヒラした薄い羽衣みたいな服を着ている。

毎日、寝る前に寝間着に着替えた後は、宿屋のバケツで羽衣をジャブジャブ水洗いして、馬のエサの藁を乾かす場所に、一緒に掛けて乾かしていたのを見た。

アクアは呆れたと言わんばかりの表情で、

「バカねー。あんた忘れてるみたいだけど、私は一応女神なのよ？　この羽衣だって神具に決まってるじゃないの。あらゆる状態異常を受け付けず、強力な耐久力と様々な魔法が掛かった逸品よ？　これ以上の装備なんて、この世界に存在しないわよ」

そんな神具を、馬のエサと一緒に干すなと言いたい。

「それは良い事聞いたな。いよいよ生活に困ったら、その神具を売ろうぜ。……おっ、皮製だけど、このブレストアーマーいい感じだな」

「ね、ねえ、冗談よね？　この羽衣、私が女神である最後の証みたいな物だからね？　う、売らないわよね？　ね？　う、売らないわよ？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……ん、見違えたじゃないか」
「おお……。ようやくちゃんとした冒険者みたいに見えますよ」
もはや溜まり場にもなっている冒険者ギルドにて、ダクネスとめぐみんが俺の格好を見て感想を言ってくる。
今までは冒険者でなく唯の不審者程度にしか見えなかったのかと聞きたい所だ。
今の格好は、皮製の胸当てに金属製の篭手、同じく金属製のすねあて。
魔法系のスキルの使用には、片手を空けておいた方がいいとの事。
なので、せっかく初級とはいえ魔法を覚えてみたので、盾は持たずに魔法剣士みたいな感じで行こうかと思う。
クリスとのスティール勝負で貰った金は大分減ったが、一週間や二週間は食べていけるだけは残してある。
とはいえ、やはり装備を整えてスキルも覚えたならばやはりクエストにでも行ってみたい。

「あんまり強くなくて、近場でそこそこ稼ぎもいい討伐系のクエストを受けたい」
俺の結構ワガママな注文に、ダクネスがふむと頷く。
「ならジャイアントトードが繁殖期に入っていて街の近場まで出てきているから、それを……」
「「カエルはやめよう！」」
言いかけたダクネスに、強い口調でアクアとめぐみんが拒絶した。

「……ん、なぜ？　カエルは刃物が通り易く倒し易いし、攻撃法も舌による捕食しかしてこないから、深い傷を負う事もない。倒したカエルも食用として売れるから稼ぎもいい。薄い装備をしていると食われたりするらしいが、今のカズマの装備なら、金属を嫌がって狙われないと思う。アクアとめぐみんは私がきっちり盾になろう」

「あー……。この二人はカエルに食われかけた事があるから、トラウマになってるんだろ。頭からパックリいかれて粘液まみれにされたからな。しょうがないから他のを狙おうか」

俺の説明にダクネスはなぜか、少し頬を赤らめた。

「……あ、頭からパックリ……。粘液まみれに……」

「お前、ちょっと興奮してないだろうな」

「してない」

ダクネスは目を逸らして、赤い顔でもじもじしながら即答するが、凄く不安になってきた。

こいつ、目を離したら一人でカエル狩りに行ったりしないだろうな。

「あ、これいいんじゃないの？　ほらほら、冬牛夏草の討伐だってさ。牧場の家畜が寄生されたみたい。倒した家畜のお肉は好きにしていいみたいよ？　報酬は一頭3万エリス。寄生された家畜の種類は、山羊と馬、牛だってさ。あまりこのモンスターに詳しいわけじゃないけど、山羊にくっついた冬牛夏草なら楽勝でしょ」

アクアが一枚のクエスト依頼書を掲示板から持ってきた。

「冬牛夏草？　冬虫夏草みたいな、生き物に寄生するキノコか何かか？」

名前的には多分そんな感じではなかろうか。

「冬牛夏草は、生き物の頭に寄生して脳を侵食し、他生物を襲わせてその死体に卵を植える、ちょっと嫌なモンスターですね。寄生する対象が、牧場などのその場からあまり動けない様な生き物が多いので、冬牛夏草と呼ばれています。強さは寄生した生き物の強さに

左右されますが、まあ家畜に憑いたのならそれほど手強くはないでしょう」
なるほど。
「家畜相手なら、何とかなりそうだな。よし、サクッと行くか！　キノコに寄生されてた家畜の肉って所がちょっとひっかかるが、今日は焼肉だな！」

冬牛夏草。
名前的にキノコを連想させるが、それはれっきとしたモンスターである。
名前の由来はそのまんま。セミ等を苗床にするキノコ、冬虫夏草から取られている。
だが、そんな植物的な名前で油断してはいけない。
その見た目は、そんな甘っちょろいものではなく、やはりモンスターそのものなのだから。

「ひいあああああああああああああああ！　助けて、助けて、怖い怖い！　神様ー！　神様あああああああ！」
アクアが泣き叫びながらこちらに向かって逃げてくる。
助けを求めているが、お前こそがその神様だろと、ツッコミ入れる余裕も無い。
何故ならば……。
「うわあああああああああああああ！　こ、こっちくんな！

こっちに来るなあああああああ！　ダクネスー！　クルセイダー様、助けてくれえええ！」

「ギチギチギチ、ゲタゲタゲッゲッ！」

アクアが山羊に追われていた。

頭に、得体の知れない、猿ほどの大きさのエイリアンみたいな凶悪な寄生生物を生やした山羊に。

「あわわわわわ、わ、我がば、爆裂魔法で、け、け、消し飛ば、消し飛ばして……！　ひいっ！　目が合いました！　せせせ、先生！　お、お願いします！」

めぐみんに押される形で、グロテスクな、おぞ気と恐怖を容易く与えてくるその生き物に対し、なぜか先生と呼ばれたダクネスは平然と前に出た。

山羊を操っている冬牛夏草は、前に立ち塞がるダクネスに狙いを定める。

どこを見ているのか分からないその瞳が赤く輝き、ダクネスに向かって顎を大きく開けて気持ち悪い声を上げた。

「ゲタゲタゲタゲタ！」

ぬめる体をくねらせて、赤い触手の様な物をダクネスに伸ばす。

その触手を伸ばす本体の下では、山羊がダクネスに向かってまっしぐらに駆けてくる。

寄生生物怖い、マジ怖い！

舐めてました、もっと甘っちょろいもんだと舐めてました！

そのグロテスクで醜悪な姿に悲鳴を上げて逃げ惑う俺達を庇うように立ち、ダクネスが背に担いだ大剣を抜き、それを眼前に構えて言い放つ。

「お前達は私が守る」

ダクネスさんカッコイイ！　抱いて！

「ギシャアアアアア！」
「んっ……！　こんな程度！　昨日のキャベツの方が、よほど歯ごたえがあった！」
それはどういった意味での歯ごたえだろうと悩んでしまうが、それどころじゃない。
ダクネスが、真正面から山羊の突進を受け止めていた。
山羊の突撃は受け止めたものの、冬牛夏草が身動き取れないダクネスに向かって、その触手を伸ばしてくる。
え、えげつない。
ああやって、耳とかから触手を侵入させて脳を侵食して操るのだろう。
気持ち悪過ぎる敵だが、いつまでも怖がっていても仕方が無い。
俺はショートソードを抜いてダクネスの元へと駆け寄った！

「ああっ、カズマ！　こんな、こんなグロテスクなモンスターによる触手プレイだなんて私は、私はどうすればっ！　私は、このままきっとこのグロテスクな生き物に脳を侵され、抵抗虚しく触手で純潔を散らされ、あちこち弄ばれてしまうのだろうっ！　やがて私はこのモンスターに操られ、身も心もこのモンスターを主と崇める奴隷に！　だが気にするな、お前は私は気にせず先に行けっ！」
「行けるか！　つーかどこへ行くんだよ！　これは討伐クエストなんだ、倒さなくてどうする！　どこの世界に触手プレイに期待して頬を火照らせる女騎士がいるんだよ、このド変態が！　おらっ、これでも喰らえええええ！」
バカな事を口走るダクネスはほっておき、俺はショートソードで冬虫夏草の触手へと斬りかかる。
「ヒギイイイイイイイイイイイイイイイイ！」
「あああああっ！　ジェスター様っ！」
触手を切り飛ばされ痛がる冬牛夏草を見て、ダクネスが悲痛な声を上げた。

もうこのクルセイダーはダメなんじゃないのかな。
「あれはジェスター様でもお前のご主人様でもなんでもない！　いきなり、出会ったモンスターに名前を付けるんじゃない！　何でまだ寄生もされてないのにすでに洗脳されてるんだ！」
その時、俺達の背後で様子をうかがっていためぐみんが叫んだ。
「カズマ、冬牛夏草は寄生体から離されると力を失うと聞いています！」
「よしきた！　つまり、山羊の頭部分に張ってる根を切ればいいんだな！」
俺はショートソードを振り上げると、そのまま痛がっている冬牛夏草に狙いを定め……！
「ヒ、ヒギイイイイイイイイイイイイイッ！」
冬牛夏草は、そんな俺から怯える様に、山羊を操り俺に背を向け逃げ出した。

二本足で。

「……は？」

寄生されていた山羊は後ろ脚で立ち上がり、そのまま背を向けて走り出す。
前傾姿勢で、それは見事な二足歩行の猛ダッシュで。

俺は、あまりの事態に握っていたショートソードをその場に落とす。
そのまま、遠く逃げていく冬牛夏草を乗せた山羊を呆然と見送っていた。
と、未だ脳の活動が止まったままの俺にアクアがゆっくりと近づいて来る。
そんなアクアに、俺は呆然と、山羊が走り去った方角を指差した。

「……ナニコレ」

アクアは一つ息を吐き。

「……ここは異世界なのよカズマ。常識を捨てなさい。ここではどんな生き物も、その瞬間を必死に精一杯に生きている。危なくなれば、キャベツも飛ぶし山羊だって走って逃げるわ」

「異世界って言えば、何でも許されると思うなよ！」

8話

「とりあえず、どうしようか。あいつは逃げちゃったし、俺の敵感知スキルで他の冬牛夏草を探してみるか？」

ようやく色々なショックから立ち直った俺は皆に提案してみる。

本音を言うと、もう半分ぐらい帰りたい気持ちだが。

すると、アクアが分かりやすく顔をしかめた。

「ええー……。自分で持ってきたクエストで何だけど、あの怖いのをもう一度相手するの？　ていうか、あんな凶暴で凶悪な姿形してるだなんて聞いてないわよ。まともな攻撃手段がカズマだけってのも問題よね。めぐみんの魔法は一発こっきりだし、ダクネスは極端に命中率が悪いんでしょう？　私、近接格闘スキル持ってるけどあんなグロいの殴るのは嫌よ？　何か弱点とかないの？　寄生体から切り離す以外で」

それにめぐみんが答えてくれる。

「ありますよ。弱点。寄生系のモンスターは水を嫌うと聞いてます。キラーマンティスのお腹に寄生する、なんとか言う寄生モンスターも、キラーマンティスを水に付けると宿主のキラーマンティスから脱出するとか。でも、街の近くの牧場での討伐って事で、私水なんてあまり持って来ませんでした。皆さんは？」

カマキリに寄生するハリガネムシみたいだな。

いや、ハリガネムシはカマキリを水に付けると卵を産む為に出て来るんだったか？

だが、水を嫌うなら俺に手がある。

「おい、水なら俺に任せてくれ。実はキャベツ狩りで仲良くなった他パーティの人に初級属性魔法を教えて貰ったんだよ。今の俺はこ

んな事ができる！　『クリエイト・ウォーター』！」
右手を前に突き出して叫ぶと、何も無い空中に大量の水が現れた。
ちょっとテンション上がって魔力を多めに込め過ぎたらしい。

スキル毎に最低必要魔力が決まっているが、魔力を多く消費すると、魔法やスキルの効果を高める事ができる。
魔力を多く込めるのは簡単だ。
気合を込めて、普段より大声で叫べばいい。
うん、中二病歴の長い俺にとっては大声で技名を叫ぶなど造作も無い事だ。
水を召還した俺がちょっと得意になっていると……

「おいクソニート。私に何か言う事はあるかしら？」

少なくない殺意が込もったアクアの声に振り返ると、そこにはクリエイトウォーターでずぶ濡れになったアクアの姿。
「……み、水もしたたるアクアさん、今日はとびきりいい女ですね……」
「ううっ……。普段の私への扱いの酷さの所為で、そんなあからさまな懐柔のお世辞でもちょっと嬉しい自分が悔しいっ！」
半泣きで羽衣の裾を絞るアクアに、流石に俺も、すまなかったとぺこぺこ謝り、この状況で使えそうな初級魔法があったのを思い出す。
「アクア、俺がその服乾かしてやるよ。いくぞ、『ウインドブレスト』ッ！」
俺の声で巻き起こる突風が、濡れそぼったアクアを直撃し、羽衣の裾を思い切り捲り上げた。

皆の前で丸出しにされた下着をもはや隠そうともせずに、立ち尽くしたアクアが呟く。

「必殺のゴッドブローを食らわせてやるから、あんたちょっとそこになおりなさい」
「悪かった！　悪気は無かったんだよほんとに！　いやマジで悪かった！　……って、あれちょっと待て。おい、近くに敵がいるぞ」
俺の敵感知スキルに反応があった。
目の前のアクアからもビリビリと強い敵意を感じているがそっちではない。
「え、ちょ、ちょっと、またあのキモいの！？　ちょっと、どこよ！？」
俺達がいるこの牧場は、そこかしこに木も生えている、どちらかと言うとかなり自然に近い感じの牧場だ。
ゆえに、家畜が隠れられる茂みもそこかしこにある。
その茂みの一部が、がさがさと動きを見せた。
「あそこに居るな！　家畜じゃない、間違いなく寄生済みの冬牛夏草だ！　めぐみんとアクアは後ろに下がれ、ダクネス、今度は血迷うなよ！　あそこに居るのはお前のご主人様じゃなくてモンスターだからな！」

「私はモンスターをご主人様と呼んだりはしない。大丈夫だ」
「お前さっきモンスターをジェスター様とか呼んでたろ」
「……言ってない」
「言ったろ」
「……言ってない。……ん、来るぞ！」

めぐみんとアクアが慌ててダクネスと俺の後ろに下がる中、茂みが大きく動いた。
敵感知で相手がモンスターだと分かっている以上、姿を見せるまでモタモタと待っているつもりもない！
「先手必勝『クリエイト・ウォーター』ッッッ！！」

気合をたっぷりと込めて、俺は大声でスキルを叫んだ！

「ヒギイイイイイイイイイイイイイイイ！　ギイイイイイイイイッ！」

茂みに大量の水が降りかかると、茂みから、冬牛夏草のあの気持ちの悪い甲高い声が聞こえてきた。

どうやら大当たりだったらしい。

そして、水を浴びて悲鳴を上げている事から、弱点が水である事も間違いない様だ。

「おお、最弱クラスのクセに生意気だ！　カズマが意外な活躍を見せているわ！」

「うっせえ！　お前こそ優秀なアークプリースト様なら、支援魔法とかの一つでも……！　ん？　めぐみん、プルプル震えてどうした？」

舐めた事言ってくるアクアに怒鳴り返しながら、俺はめぐみんの様子がおかしい事に気がついた。

拳を握り、涙目で肩を震わせ俺を上目遣いで睨みつけている。

「べ、別にカズマが初級属性魔法使える様になって、私の魔法使いの存在意義が一段と薄れたとか全然思ってないからですから？　私……、我が爆裂魔法は最強ですから……っ！？」

震え声で涙目で言ってくるめぐみんに、なら次のレベルアップでスキルポイント得たら、爆裂魔法関係以外のスキルを取れと言ってやりたい。

手の掛かるめんどくさい仲間は置いといて目の前に注意を払うと、ひとしきりもがいた後、茂みから飛び出してきたのは牛に寄生している冬牛夏草。

それが、こちらを睨みつける様にジッと見つめると、突如大声で泣き叫んだ。

「キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！　キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！」

攻撃してくるでもなく叫ぶだけの冬牛夏草。

だが、何か嫌な予感がする。

「……ん、チャンスだ。なぜ襲って来ないのかはしらないが、身動き一つしない冬牛夏草なら流石の私でも当てられる。カズマ、水を浴びて弱っているウチに袋叩きにしてしまおう」

ダクネスの勝ち誇った様なその言葉に、俺はますます嫌な予感を膨らませた。

「いやまて、こういった簡単に事が運びそうな時ってのは、必ず何かあるもんで…………。おい、何か聞こえないか？」

目の前では、なおも叫び続ける冬牛夏草。

その叫びに混じり、遠くから似たような叫び声が……。

「「「キイイイイイイイ……、キイイイイイイイイイイイイイ…………、キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」」」

それは、こちらに向かってくる大量の家畜の群れだった。

もちろん、頭に冬牛夏草を乗せたヤツらだ。

「「いっぱい来たあああ！」」

それらは間違いなく俺達を標的にしているのが分かる。

これはあかん、あの牛や馬の大群に突っ込まれたら多分死ねる。

めぐみんとアクアが背後で悲鳴を重ねる中、いまだに仲間を呼び続ける水を浴びた冬牛夏草から視線を外し、ダクネスがゆらりと家畜の大群の進行方向に立つ。

ダクネスは大剣を地面にザクリと突き立てて、まるで杖にでも寄りかかる様に剣の柄の上に両手を置くと、仁王立ちのまま声の限り

に叫びを上げた。
「かかってこおおおおい！！　『デコイ』ッッッッ！」
それは、敵の注目を自分に集める囮となるクルセイダースキル。
敵感知スキルで感じていた自分への敵意が減り、家畜の大群の注意が、明らかにダクネス一人に向けられたのが分かる。
剣を杖代わりにしてその場から微動だに一つしないダクネスは、たなびく金色の髪とその美しい横顔が相まって、まるで大軍をたった一人で迎え撃つ戦乙女を思わせた。

俺がダクネスの中身を知らずにいたら、この行動とその姿を見てすっかり惚れてしまっていただろう。
あの娘の頭の中身はそんなカッコイイ物ではなく、自分の欲望のままに立ち塞がっている事を、凄く残念な事に俺はもう知っている。

家畜の群れを前に一歩も引く気を見せないダクネスに、俺は覚悟を決めた。
「めぐみん！　めぐみーん！　とうとうお前の出番が来た！　爆裂魔法の用意！　アクア、ダクネスに何か支援魔法とか掛けてやれないか！？　防御が上がる系とか、魔法防御が上がる系とか！」
俺の後ろでバタバタと慌てふためいていた二人が、その言葉に少しだけ冷静になる。
「わわ、分かりました！　どうしよう、こんな非常事態ですがこんな風にアークウィザードとして頼りにされるのは生まれて初めてで、凄い嬉しいですどうしよう！　……ふふふ、群れるしか能の無い家畜どもよ！　我が絶大なる破壊の力！　その目に焼き付けるがいい！」
口上いらんからとっとと唱えろ！
「支援魔法ね、分かったわ！　防御と魔法防御ね……！　……ねえカズマ、他にも一時的に芸達者になる支援魔法とかもあるけど、それは……」

「んなもんいいから早くしろやあああー！」

慌てて魔法の準備を始める二人。

初級魔法ぐらいなら魔法名を叫ぶだけで問題ないが、中級、上級と上がっていくにつれて魔法は使用するまでに時間が掛かる。

二人が魔法を使う準備を整えている中、さて俺は何をするべきか。

ダクネスの隣で壁なんかしても、俺の防御じゃ牛に跳ねられてヘタすれば即死だろう。

何をするか。

何ができるか。

いや、初期クラスの俺にこんな時に戦力として求められても……。

そうだ、未だに仲間を呼び続けている冬牛夏草を仕留めに行くか？

……と、そんな俺の頭にひとつ閃いた物があった。

上手くいく保障はないが、せめてものダクネスの援護にはなるかも知れない。

「ダクネス！　ちょっと我慢しろよ！　『クリエイト・ウォーター』アアアアア！」

全力でスキルを叫び、大量の魔力を使って、ダクネスの頭上を中心に大量の水をぶちまけた。

ダクネスを真ん中にして、半径十メートル近くにも渡って大量の水が地面に滴る。

「……不意打ちで、いきなりこんな仕打ちとは……。んんっ！！　カ、カズマ、この火照った体をどうしてくれる！」

「お前はちょっと黙ってろ、台無しだよこんちくしょう！！　いいかダクネス、その場から動くなよっ！　『フリーズ』ッッッ！！」

初級属性魔法スキルを教えてくれた人は言っていた。

しょせん初級だから、殺傷能力は期待できないと。

この魔法は夏場暑い時に自分に掛けたり、飲み物を軽く凍らせる時とかに便利だよ、と。

ヤケクソ気味に叫んだ俺の残りの全魔力を込めた魔法が、ダクネスの周囲の水を凍らせた。

それと同時にダクネスの体が淡く光る。

アクアの支援魔法を受けたのだろう。

それとほぼ同時に、ダクネスに向かって家畜の群れが突っ込んだ。

だが地を踏みしめて力強く駆けていた家畜達は、水の上に張った氷に蹄をとられ、転びこそはしないもののその勢いを大きく弱める。

次々とダクネスに家畜が突っ込んで来るものの、ダクネスは地に刺したままの剣を掴んで一歩も引かない。

めぐみんが叫んだ。

「爆裂魔法完成しました！　いけます！　でも、ダクネスが効果範囲に入ってますが……」

その声に、ダクネスが前を向いたまま、こちらに視線を向けずに堂々と言い放った。

「高レベルの魔法耐性スキルを取ってある！　支援魔法も受けた！　かまわん、ドンと来い！」

ちくしょう、あの変態娘がちょっとカッコイイ！

「ダクネス、気合を入れて魔力を活性化させなさい！　万が一には、体さえ残ってれば私が蘇生させてあげるわ！」

アクアが凄い事を叫んでいる。

自己犠牲なんかやめろと、止めないのか女神的に。

ならここは、めぐみんの意思で魔法を撃たせるのではなく、俺が言ってやるべきだろう。

「めぐみん、やれ！」

「わ、わ、分かりましたっ！　『エクスプロージョン』ッッ！！」

9話

俺達の拠点にしている街が、ようやく見えてきた。
「はあ……、はあ……っ！　ふぐぐ、アクア、俺そろそろやばいかも……。頼む、代わってくれよ……」
「イヤよ。あんた今回、私に水かけたり魔法を悪用してパンツ覗いたり好き放題してくれたじゃない。もう少しなんだから頑張りなさいな」
クソっ、俺より遥かに筋力が高いくせにっ！
俺はズリズリと、背中におぶさる重い荷物を引きずって行った。

ボロボロになったダクネスである。

今回は、爆裂魔法を使っためぐみんは自分の足で歩いている。
この一発魔法を撃つ度に倒れていたもやし魔法使いは、爆裂魔法で盛大に冬牛夏草を吹っ飛ばし一気にレベルが上がり、最大魔力容量が上がった為、一発爆裂魔法を撃った程度では魔力枯渇で倒れる事は無くなったらしい。
まあ、まだ一日一発しか撃てない事には変わりないが、戦闘後に自分の足で歩いてくれる様になったのは本当にありがたい。
俺は、ほぼ原型を留めていないボロボロのプレートメイルを着た、気を失ったダクネスを背負っていた。
冬牛夏草もろとも『エクスプロージョン』でぶっとばされたダクネスは、瀕死の重傷を負いながらも辛うじて息はしていた。
すぐさまアクアが傷は完治させてくれたのだが、未だ目を覚まさないのでこうして俺がおぶっている。

「やー、しかし何匹だっけ？　めぐみんの冒険者カード、もっかい見せて！　……冬牛夏草が二十三匹。確か、報酬は冬牛夏草一匹で

3万だっけ。えっと、……69万！　……あわわ、どうしようカズマ、城壁工事の給料4か月分以上の稼ぎよ！　ちょろいわ！　冒険者稼業なんてちょろ過ぎるわね！」

「いやお前、ダクネスのフルプレートが完全に使い物にならなくなったから、必要経費って事でダクネスの鎧代引いてから、みんなで山分けだからな？」

アクアが、そこまで考えていなかったらしく顔をしかめた。

「くっ……！　それじゃあ、儲けなんてほとんどないじゃないの！　結局、家畜のお肉も全部消し飛んだし、カズマが水掛けて弱らせた一匹も、爆裂魔法で驚いて逃げちゃったし！　焼肉はどうなったのよ焼肉は！」

「いやお前、アレに寄生されてた肉って食いたいか？」

「……やっぱりいらない……」

……しかし。

「クルセイダーの耐久力ってのは凄いもんだな。アクアの支援魔法があったって言っても、冬牛夏草の群れは軒並み欠片も残らなかったのに」

言って、背中のダクネスの顔を見る。

傷を完治されたダクネスは、顔を煤だらけにしながらも、今では整った呼吸をしている。

……というか、頼むから俺の肩によだれを垂らさないで欲しい。

これ、もう気を失っているんじゃなくて寝てるんじゃないのか。

「彼女の場合は、スキル配分が防御特化だからだと思います。物理耐性に魔法耐性、他にも考えられる防御系統のスキルはほとんど取ってあるんじゃないでしょうかね。……そう考えないと、私の爆裂魔法を喰らってホイホイ生き残られるとか、ちょっとどころじゃなく存在意義が無くなりそうです」

めぐみんがそんな事を言いながら複雑そうな顔をしていると。

「……ん……。ここは……？」

背中のダクネスが目覚めた様だ。

「よう、起きたか。お前が敵を引き付けてくれたおかげで、討伐は終わったぞ、ご苦労様。囮に使ったり、魔法叩き込んだり悪かったな」

俺のその言葉に。

「……ん。そうか。皆が無事なら、それは良かった。……カズマにも、世話を掛けたな。……ありがとう」

言って、ホッと息を吐いて俺の背中に顔を埋めた。

おいおい、そんな普通の女の子みたいな反応されたら対応に困るんですが。

童貞ニートには刺激が強いんですが。

俺が照れながらどぎまぎしていると、近づいてきた街の目の前。

そこに、目を真っ赤に充血させ、今にも俺を殺しそうな勢いで、俺を睨みつける女が立っていた。

そう、クリスである。

「こ、ここ、このぱんつ脱がせ魔あああああっ！　キミ、私がダンジョン探索で稼ぎに行ってる間にダクネスに何をしたあああああっ！」

タイミングが悪いってのはこういう事だろう。

丁度ダンジョン探索を終えて街に帰って来たクリスのパーティと、俺達が鉢合わせたのだ。

クリスの目は俺の背中におぶさったままのダクネスに注がれていた。

鎧はボロボロになり、あちこちが煤だらけになったダクネスに。

ダクネスは、俺の背中に掴まったまま。
「クリス、何を誤解しているのか分からないが、私は特に何もされていない。クリスがいない間にあった事と言えば……。モンスターと対峙している時にクリエイトウォーターで頭から水ぶっかけられたり、このド変態がと罵られたり、モンスターもろとも爆裂魔法で吹っ飛ばされたぐらいだ。……うん、とっても楽しかった」
「あんたあたしの相方に何してくれてんのよおおおおおお！」
「ちちちち、ちがー！　ダクネスの言ってる事は大体合ってるけど、大体違う！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

場所を移して、冒険者ギルド併設の酒場の中。
クエスト達成の報酬を、必要経費を抜いてから山分けし、ようやくクリスの誤解が解けた。
「……全く。話は分かったけど、無茶し過ぎでしょ？　冬牛夏草って、パーティの平均レベルが１０以上がクエストをする際の適正レベルだよ？　キミ達はまだレベル１０以下の人ばかりじゃないの？」
「俺はレベル９」
「……ん、私もレベル９」
「私はさっき、爆裂魔法での大虐殺でレベル１３になりました」
「おっと、まさかの私様がレベル２で最低レベル？　よく考えたらキャベツ狩りでキャベツ捕まえたぐらいしかまともに経験値得た記憶がないわね」
「だ、ダメじゃん！　冒険者はね、慎重に慎重を重ねるぐらいで丁

度いいの！　勇気と無謀は違うからね！？　全く……。じゃあダクネス、もう行こう。いくらあたしが帰ってくるまで暇だったからって、こんな変な男についてっちゃダメだよ？」

誰が変な男だと言い返したいが、ぱんつ剥いた前科があるからあまり何も言い返せない。

まあ、ダクネスもちょっと変な……。いや、かなり変……、いやいや、凄く変な奴だったが、パーティを離れるとなるとちょっとだけ寂しいもんだ。

ちょっとだけ。

よし、気持ちを切り替えて、是非ともちゃんとした戦士系の前衛職の人に……。

「……ん、私はこのままカズマのパーティに残るとする」

そう、俺がもう少し固くなれば、俺が戦士系スキルでも取って前衛二人の魔法職の後衛が二人で……おい今なんつった。

「ちょ、ちょっとダクネス、あんた何言ってんの！？　バカな事言ってないで、またあたしと組もうよ！　あたしとのコンビほど、完璧な相性は無いってば！　ダクネスが囮になってる間にあたしが敵から盗って逃げたり！　あたしの拘束スキルで敵を止めて、動けない敵にダクネスがその大剣でぶっ叩いて！　これ以上に相性のいいコンビって無いじゃん！」

「おい、その拘束スキルってヤツ、詳しく」

「うっさい！　ねえダクネス、考え直してよ！　こんなパッとしない濁った目をした男のどこが気に入ったのさ！」

「……おい、あまり俺をコケにしてるとお前のトラウマになったであろう、ぱんつスティール食らわせるぞ」

俺の言葉に、慌てて、怯えたようにダクネスの背後に回りこみながらも俺を非難するのは止めないクリス。

「ほ、ほらほら！　こんな事言ってくる男なんだよ！？　分かってるの？　ダクネス、こんな男と一緒に居たらますます酷い目に合わ

されるよ？」
　おい馬鹿、そのセリフは逆効果だろ。
　案の定、ほのかに頬を赤らめた変態はもじもじしながら。
「……クリス、私はクルセイダーだ。たとえどんな目に合ったとしても弱きを助けるのがクルセイダーだ。カズマのパーティには壁をできる人間がいない。私は、ここに必要とされているのだ。そうだろう？　カズマ」

「いや、要らないよ別に」

「んんっ！　……くっ！　この男は、いちいち的確に私のツボを……っ！」
　俺のそっけない返答に、何故か顔を赤らめもじもじしているダクネスを見て、クリスがはあとため息をついた。

「……全く。言い出したら聞かないからねあんたは。でも、酷い目に合わされたりしたらすぐに抜けてあたしの所に帰ってくるんだよ？」
「……ん。酷い目なら、それこそ望むとこ……じゃない、クリスは心配しなくてもいい。大丈夫、またその内一緒に冒険しよう」

　言って、ダクネスはクリスに笑いかけた。

「さてと。それじゃ、あたしも行くね。ちょっと、ぱんつ脱がせ魔。キミ、ちゃんとあたしの相方を守ってよ？」
　クリスが、言いながら立ち上がる。
「いや、守るのはクルセイダーの仕事だろうに。最弱クラスに無茶

言わないでくれよ。あと、次にぱんつ脱がし魔って呼んだら全裸になるまでスティール唱え続けてやるからな」

「や……やめろよぉ……」

俺の返しに、クリスが泣きそうな表情を浮かべる。

「ねえねえ、あなた盗賊でしょ？　どうせなら、一緒に冒険すればいいんじゃないの？」

「ですね。盗賊職はダンジョンでは必須なのに成り手が少ないクラスです。歓迎しますよ？」

アクアとめぐみんが口々に言うが、クリスは軽く首を振る。

「いやあ、カズマにはもう盗賊の一部のスキルを教えてるし、あたしの有難みが半減しそうだから止めとくよ。……それに、今回のダンジョン探索で、あたしもまあ、組んでもいいかなって思える連中と出会えたしね」

言って、クリスがくいっと親指を射す方には、クリスの様子をチラチラと心配そうにうかがう一組の冒険者パーティ。

それを見て、ダクネスが安心したようにほっ、とこっそりと息を吐いた。

何考えているのか分からない所が多い変なヤツだが、一応友人の心配ぐらいはできるらしい。

「じゃあね、ダクネス！　その内大規模討伐クエストとかがあったら、一緒に受けよう！　じゃあねカズマ、そしてお仲間の皆！　じゃあ、いってくる！」

クリスはそう言って、新しい仲間の居るテーブルへ駆けて行った。

ダクネスが、正式にウチのパーティメンバーになりました。

10話

「と、言うわけで。金が欲しい。それも、大量に」

ギルドの酒場で、めぐみんとダクネスを待っている間、俺は昼間からクリムゾンビアのジョッキを片手に上機嫌なアクアに、考えていた事を切り出した。

それをアクアが、今更何言ってんだと言いたげな小バカにした様な表情で。

「ほーん？　今更何言ってんの？　そんなのカズマだけじゃなく、みんな欲しいに決まってんじゃん。私だって欲しいわよ。バカなの？　私より知力のステータス高いとか思ってたけど、しょせんニートはこんなもんなの？」

昼間から飲んだくれているこの自称元なんたらを殴ってやりたい。が、今こいつと喧嘩した所で不毛な話だ。

なので、口だけで言い負かしてやる。

「お前が欲しいのは散財する金だろうが。俺が欲しいのは、安定した生活を手に入れる為の、元手の金の事を言ってる。本来なら俺は、お前からチート能力でも貰ったり強力な装備を貰ったりで、ここでの生活にはあまり困らないはずだった訳だろ？　そりゃあ、俺だってロクに何もしてないのに、いきなり都合よく無償で神様から特典を貰える身で、ケチなんてつけたくないよ？　それに、やけになったその場の勢いとはいえ、チート能力よりお前を希望したのは俺なんだし！　でも、俺はそのチート能力や強力アイテムの代わりにお前を貰った訳なんだが、今の所、チート能力や強力な装備並みにお前は役に立ってくれているのかと問いたい。問い詰めたい。お前が泣くまで問い続けたい。どうなんだ？　最初は随分偉そうで自信た

っぷりだった割に、あまり役に立たない自称元なんとかさん」

「うう……、も、元じゃなく、その……。い、一応今も女神です……」

「女神！　女神ってあれだろ!?　勇者を導いてみたり、魔王とかと戦って、勇者が一丁前になるまで魔王を封印とかして時間稼いでみたり！　お前は昼間からビール飲んでる今の現状で、本当に女神を名乗っていいのか!?　この、カエルに食われるしか脳の無い、宴会芸しか取り柄のない穀潰しが！」

「わ、わあああああーっ！」

テーブルに突っ伏してワッと泣き出したアクアを見ながら、小バカにされた事に対する逆襲が完了した事でちょっと満足する。

だが、アクアの方はこれで終わらせておく気にはなれなかったらしい。

キッと顔を上げ、小賢しくも言い返してきた。

「わ、私だって、回復魔法とか回復魔法とか回復魔法とか、一応役に立っているわ！　なにさクソニート！　じゃあ、何の為にお金が必要なのか言って御覧なさいよ！」

涙目で睨みつけてくるアクアにトドメを刺すことにしてやる。

「今の所、俺が日本から来た事を全く活かせていないだろ。そこで、俺達にも簡単に作れそうでここの世界に無い日本の製品とかを、売りに出してみるってのはどうかなって思ってな。ほら、俺は幸運とやらが高くて、商売人とかでもやったらどうだって受付のお姉さんに言われた事があるだろ？　だから、冒険者稼業だけで食っていく他にも生きていく道はあるかなって思ってさ」

正直、冒険者なんて割りに合わないと思っている。

前回、冬牛夏草相手にあれほどに怖い思いして得た報酬は、ほとんどがダクネスのフルプレート代に消えてしまった。
なので、俺がこの世界でどうやったら一番楽に生計を立てて行けるかを模索中なのだが。

「と、言うわけで。昼真っから酒飲んでる暇があるのなら、お前も何か考えろ！　何か、お手軽にできて儲かる商売でも考えろ！　あと、お前の最後の取り柄の回復魔法。とっとと俺に教えろよ！　スキルポイント溜まったら、俺も回復魔法の一つぐらい覚えたいんだよ！」
「嫌ーっ！　回復魔法だけは嫌！　嫌よおっ！　私の存在意義を奪わないでよ！　私がいるんだから覚えなくてもいいじゃない！　いいじゃないっ！　嫌！　嫌よおおおっ！」
言ってテーブルに突っ伏し、おいおい泣き始めるアクア。
と、そんな俺達に横から聞き慣れた声が掛けられた。

「昼間から一体何をやっているんです？　……カズマは結構えげつない口撃力がありますから、遠慮なく本音をぶちまけていると大概の女性は泣きますよ？」
「……ん。何かストレスでも溜まっているのなら……。アクアの代わりに私が口撃を受け、そのイライラの捌け口になってあげようか。クルセイダーたるもの、誰かの身代わりになるのは本望だ」

そこにいたのはめぐみんと、おかしな事を口走るダクネス。

二人の視線は、テーブルの上で泣き続けるアクアに注がれている。
皆の注目を集めているのを自覚したのか、泣きながらも、顔を埋めた腕の隙間から時折こちらをチラッチラッとうかがうのがちょっとイラッとする。
「こいつの事は気にしなくていい。それより、クエスト受けよう。

安くていいから安全なヤツ。まだダクネスの鎧も出来ていない事だしなぁ」

ダクネスの鎧は通常の鎧よりも分厚い特別製らしく、オーダーメイドの為時間が掛かるらしい。

今日のダクネスはタイトな黒のスカートに黒のタンクトップと皮ブーツ。

そしてその格好で背に大剣を担ぐその姿は、クルセイダーと言うより剣士にしか見えない。

しかし……。

「……ダクネスさん、着痩せするタイプなんですね……」

俺は何故か敬語になってしまっていた。

締まるべき所は締まっていて、それでいて全体的にむちっとした身体。

端的に言えばエロい身体付きってヤツだ。

美人で身体も良いとなると、多少の性格の破綻には目を瞑ってもいいかもとすら思えて来て……。

「……む、今、私の事をエロい身体しやがってこのメス豚がと言ったか？」

「言ってねえ」

やはり、性格は一番大事だと再認識する。

「クエストを受けるなら……。アクアのレベル上げができるクエストにしませんか？」

めぐみんがそんな事を言ってきた。

「どういう事？　そんな都合のいいクエストなんてあるか？」

というかこのチート駄女神の場合、必要なスキルは初期スキルポ

イントでほとんど習得済みらしいから、あまりレベル上げにこだわる必要は無い気がするが。

「先日クリスさんがパーティの平均レベルがどうこうって言ってましたが、パーティを組む場合、できるだけレベルが近い人とパーティを組むのが好ましいと言われます。これはまあ色々理由があるんですが、アクアさんの様なプリースト職の人は一般的にレベル上げが難しいのです。攻撃魔法なんてありませんからね、プリーストは。そこで、プリースト達が好んで狩るのがアンデッド族です。アンデッドは不死という神の理に反したモンスター。彼らには、神の力が全て逆に働きます。回復魔法を受けると身体が崩れるのです」

ああ、なんかそんな話は聞いた事がある。

回復魔法はアンデッドには攻撃魔法代わりになると。

しかしなあ。この駄女神を鍛えても……。

と、俺は閃いた。

俺はレベルが上がった際に色々なステータスが上がっていた。

じゃあ、アクアは？

この、テーブルの上で泣き真似しながら構って欲しそうにチラチラこっち見ているバカが、レベルが上がり知力が上がってくれれば何よりの戦力アップだ。

「……うん、悪くないな。問題はダクネスの装備がまだ出来ていないってのが心配なんだが……」

すると、ダクネスは腕を組み、堂々と言ってのける。

「……ん、私なら問題ない。伊達に防御スキルに特化している訳じゃない。鎧無しでもアダマンマイマイより硬い自信がある。それに、鎧無しの方が殴られた時気持ち良いじゃないか」

「お前今殴られて気持ち良いって言ったか」

「言ってない」
「言ったろ」
「言ってない。……後は、アクアにその気があるかだが……」
ダクネスが視線をテーブルに伏せているアクアに向ける。
「……おい、いつまでもメソメソしてないで会話に参加しろよ、お前のレベルの事……」
俺はアクアに手を伸ばし、肩を叩こうと……。
……して、気がついた。

「……すかー……」

アクアは泣き疲れて眠っていた。
子供かこの女神は。

街から外れた丘の上。
そこには、お金の無い人や身寄りの無い人がまとめて埋葬される共同墓地がある。
この世界の埋葬方法は土葬。
そのまんま土に埋めるだけだ。
そう、今回受けたクエストは、墓場に湧くアンデッドモンスター退治。

今の時刻は夕方にさしかかろうとしている。
俺達は、墓場の近くで夜を待つべくキャンプをしていた。
「ちょっとカズマ、その肉は私が目を付けてたヤツよ！　ほら、こ

っちの野菜が焼けてるんだからこっち食べなさいよこっち！」
「俺、野菜苦手なんだよ、焼いてる最中に飛んだり跳ねたりしないか心配になるから」
墓場からちょっと離れた所で鉄板を敷いて焼肉しながら夜を待つ。
モンスター討伐のクエストなのに随分とのんびりした話だが、今回引き受けたのはゾンビメーカーと呼ばれる弱めのモンスターの討伐らしい。
ゾンビを操る悪霊の一種で、自らは質のいい死体に乗り移り、手下代わりに数体のゾンビを操るらしい。
駆け出しの冒険者パーティでも倒せるモンスターだと言うので引き受けた訳だ。
これなら鎧の無いダクネスでもあまり危険はないだろう。

腹が一杯になった俺は、マグカップにコーヒーの粉を入れ、クリエイトウォーターで水を注ぎ、マグカップの下を『ティンダー』という火の魔法で炙る。
これはそのまま、着火に使う魔法で、殺傷能力はハッキリ言ってない。
でもライター代わりに重宝している。
そんな俺を見て、めぐみんが複雑そうな表情で自分のコップを差し出した。

「すいません、私にもお水ください。って言うかカズマ、何気に私より魔法使いこなしていますね。初級属性魔法なんてほとんど誰も使わないものなんですが、カズマを見てるとなんか便利そうです」
俺はめぐみんのコップにクリエイトウォーターを唱えてやる。
「いや、元々そういった使い方するもんじゃないのか初級魔法って。あ、そうそう。『クリエイト・アース』！　……なあ、これって何に使う魔法なんだ？」
俺は手の平に出した粉状のサラサラした土をめぐみんに見せた。

初級属性魔法の内、この土属性の魔法だけが使い道が分からない。

「……えっと、その魔法で出来た土は、畑などに使用すると良い作物が取れるそうです。……それだけです」

その説明を聞き、隣でアクアが吹き出した。

「何々、カズマさん畑作るんですか！　農家に転向っすか！　土も作れるしクリエイトウォーターで水も撒ける！　ちょっと、クラス農家って天職じゃないですか、やだー！　プークスクス！」

俺は右手の手の平に乗る土をアクアに向け、その土に向かって左手を添えた。

「『ウインドブレスト』！」

「ぶあああああっ！　ぎゃー！　目、目がああああああっ！」

突風で吹き飛ばされた土がアクアの顔面を直撃し、目に砂ぼこりが入ったアクアが地面を転がり回っている。

「……なるほど、こうやって使う魔法か」

「違います！　違いますよ、普通はそんな使い方しませんよ！　ってか、なんで初級魔法を魔法使い以上に器用に使いこなしてるんですか！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……冷えてきたわね。ねえカズマ、受けたクエストってゾンビメーカー討伐よね？　私、何か、そんな小物じゃなくて大物のアンデッドが出そうな予感がするんだけれど」

月が昇り、時刻は深夜を回った頃。

アクアがそんな事をぽつりと言った。
「……おい、そういった事言うなよ、それがフラグになったらどうすんだ。今日はゾンビメーカーを一体討伐。そして取り巻きのゾンビもちゃんと土にかえしてやる。そしておいしいご飯食べて馬小屋で寝る。その計画以外のイレギュラーな事が起こったら即刻帰る。いいな？」
俺の言葉にパーティメンバーがこくりと頷く。
頃合だった。
敵感知を持つ俺を先頭に、俺達は墓場へと歩いていく。
アクアが言った一言が気になるが、普段からこの女神はロクでも無い事ばかり口走っているし、あまり気に掛ける事もないだろう。
……無いはずだ。
……ん？
「敵感知に引っかかったな。居るぞ、一匹、二匹……三匹……四匹……」
……あれ、多いな？
ゾンビメーカーって取り巻きは二、三匹って聞いてたんだが。
この程度ならまあ、誤差の範囲……。
そんな事を考えていると、墓場の中央で青白い光が走った。
何だ？
それは、妖しくも幻想的な青い光。
遠めに見えるその青い光は、大きな丸い魔法陣。
その魔法陣の隣には、黒いローブの人影が居た。
「あれ。ゾンビメーカー……じゃない気がするんですが……」
めぐみんが自信無さ気に呟いた。
その黒いローブの周りには、ユラユラと蠢く人影が数体見える。
「突っ込むか？　ゾンビメーカーじゃなかったとしても、こんな時

間に墓場に居る以上、アンデッドには違いないだろう。なら、アクアがいれば問題無い」
ダクネスが大剣を胸に抱えたままソワソワしている。
お前は落ち着け。
その時、アクアがとんでもない行動に出た。
「あ――――――――っ！！」
突如叫んだアクアは、何を思ったのか立ち上がり、そのままローブの人影に向かって走り出す。
「ちょっ！　おい待て！」
俺の制止も聞かずに飛び出していったアクアは、ローブの人影に駆け寄ると、ビシと人影を指差した。
「リッチーがノコノコこんな所に現れるとは不届きなっ！　この私が成敗してやるわっ！」

11話

リッチー。

それは、有名なアンデッドモンスター、ヴァンパイアと並ぶアンデッドモンスターの最高峰。

長い時を経た大魔法使いが、魔道の奥義により人の身体を捨て去った、ノーライフキングと呼ばれるアンデッドの王。

強い未練や恨みで自然にアンデッドになってしまったモンスターとは違い、自らの意思で自然の摂理に反し、神の敵対者になった存在。

その、ラスボスみたいな超大物のモンスターが。

「や、やめやめ、やめてえええええ！　誰なの！？　いきなり現れて、なんで私の魔法陣を壊そうとするの！？　やめて！　やめてください！」

「うっさい、黙りなさいアンデッド！　どうせこの妖しげな魔法陣でロクでもない事企んでるんでしょ、なによ、こんな物！　こんな物！！」

ぐりぐりと魔法陣を踏みにじるアクアの腰に、泣いてしがみつき止めていた。

リッチー？　の取り巻きのゾンビみたいなアンデッド達は、そんな揉み合う二人を止めるでもなくボーっと眺めている。

……えっと、どうしよう。

とりあえず、ゾンビメーカーではなさそうだが。

アクアは絡んでいる相手をリッチーだとか言い張っているが、何

だかリッチーが、チンピラか何かに因縁付けられてるイジメられっ子にしか見えない。

「やめてー！　やめてー！！　この魔法陣は、未だ成仏できない迷える魂達を、天に還してあげる為の物です！　ほら、たくさんの魂達が魔法陣から空に昇って行くでしょう！？」

リッチーの言う通り、どこから集まってきたのか、青白い人魂の様な物がふよふよと魔法陣に乗り、そのまま魔法陣の青い光と共に、空へと昇って行く。

「リッチーのクセに生意気よ！　そんな善行はアークプリーストのこの私がやるから、あんたは引っ込んでなさい！　見てなさい、そんなちんたらやってないで、この共同墓地ごとまとめて浄化してあげるわ！」

「ええっ！？　ちょ、やめっ！？」

アクアの宣言に、慌てるリッチー。

アクアが手を広げ、大声で叫んだ。

「『ターンアンデッド』！」

墓場全体が、アクアを中心に白い光に包まれた。

アクアから湧き出すように溢れるその光は、リッチーの取り巻きのゾンビ達に触れると、ゾンビ達が掻き消す様にその存在を消失させる。

リッチーの作った魔法陣の上に集まっていた人魂も、アクアの放った光を浴びていなくなった。

その光はもちろんリッチーにも及び……。

「ぎゃー！　か、身体が消えるっ！？　止めて止めて、私の身体が無くなっちゃう！！　成仏しちゃうっ！」

「あはははは、愚かなるリッチーよ！　さあ、私の力で欠片も

残さず消滅するがいいわっ！」

「おい、やめてやれ」

いつの間にかアクアの背後に立っていた俺は、アクアの後頭部をダガーの柄でごすっと殴った。

「っっぎゃー！？　い、痛、痛いじゃないの！　あんた何してくれてんのよいきなり！」

後頭部を強打されて集中を途切れさせたのか、アクアが白い光を放つのをやめ、頭を押さえながら涙目で俺に食って掛かる。

ダクネスとめぐみんの二人もやってきた所で、俺は掴みかかるアクアは無視して、頭を抱えて震えながらうずくまるリッチーに声を掛けた。

「お、おい大丈夫か？　えっと、リッチー……でいいのか？　あんた」

見ると、リッチーの足元が半透明になっており、軽く消えかかっている。

やがて徐々に半透明になっていた足がくっきりと見える様に戻り、涙目のリッチーがフラフラしながら立ち上がった。

「だ、だ、だ、大丈夫です……。あ、危ない所を助けて頂き、ありがとうございました……っ！　えっと、おっしゃる通り、リッチーです。リッチーのウィズと申します」

言って目深に被っていたフードをはねのけると、現れたのは月明かりに照らされた二十歳位にしか見えない黒髪の美女だった。

リッチーってからには骸骨みたいなのを想像してたんだが。

ウィズは黒いローブとマントをはおり、さながら悪の魔法使いみたいな格好だ。

いや、リッチーなら悪の魔法使いでいいのか？

「えっと……。ウィズ？　あんた、こんな墓場で何してるんだ？

魂を天に還すとか言ってたけど、アクアじゃないが、リッチーのあんたがやる事じゃないんじゃないのか？」

「ちょっとカズマ！　こんな腐ったみかんみたいなのと喋ったら、あなたまでアンデッドが移るわよ！　ちょっとそいつに、ターンアンデッド掛けさせなさい！」

俺の言葉にアクアがいきり立ち、ウィズに魔法を掛けようとする。

ウィズが俺の背後に隠れ、怯えた様な困った様な顔をしながら、

「そ、その……。私は見ての通りのリッチー、ノーライフキングなんてやってます。それで、アンデッドの王なんて呼ばれてる位ですから、私には迷える魂達の話が聞けるんです。そして、この共同墓地の魂の多くはお金が無いためロクに葬式すらしてもらえず、天に還る事なく毎晩墓場を彷徨っています。それで、一応はアンデッドの王な私としては、定期的にこの墓場を訪れ、天に還りたがっている子達を送ってあげているんです」

……ほろりときた。

いい子だ。

恐らく、店の店員とかを除き、俺がこの世界に来て初めて出会ったまともな人だ。

いや、人間ではないが。

「それは立派な事だし善い行いだとは思うんだが……。アクアじゃないが、そんな事はこの街のプリーストとかに任せておけばいいんじゃないか？」

俺の疑問に、ウィズが言いにくそうに憮然としたアクアをチラチラと気にしながら。

「そ、その……。この街のプリーストさん達は、拝金主義……いえその、お金が無い人達は後回し……と言いますか、その……、あの……」

アークプリーストのアクアがいるので言いにくいのだろう。

「つまりこの街のプリーストは金儲け優先の者がほとんどで、こん

な金の無い連中が埋葬されてる共同墓地なんて、供養どころか寄り付きもしないって事か？」

「え……、えと、そ、そうです……」

その場の、全員の無言の視線を受けたアクアが目を逸らす。

「それはまあしょうがない。でも、ゾンビを呼び起こすのはどうにかならないのか？　俺達がここに来たのって、ゾンビメーカーを討伐してくれってクエストを受けたからなんだが」

俺の言葉に、ウィズは困った表情を浮かべ。

「あ……そうでしたか……。その、呼び起こしている訳じゃなく、私がここに来ると、まだ形が残っている死体は私の魔力で勝手に目覚めちゃうんです。……その、私としてはこの墓場に埋葬される人達が、迷わず天に還ってくれればここに来る理由も無くなるんですが……。…………えっと、どうしましょうか？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

墓場からの帰り道。

「納得いかないわ！」

アクアは未だに怒っていた。

時刻は、すでに空が白みがかってくる時間帯だ。

「しょうがないだろ。つか、あんな娘退治する気にはなれないだろうに」

俺達は、あのリッチーを見逃す事に決めた。
これからは毎日暇を持て余しているアクアが、定期的にあの墓場に浄化に行くと言う事で折り合いがついた。
そこは腐っても女神、アンデッドや迷える魂の浄化はちゃんと自分の仕事だと理解はしているらしい。
酒飲む時間が減るとか駄々をこねていたが。
モンスターを見逃すという事に若干抵抗があったためぐみんとダクネスも、ウィズが今までに人を襲った事がないとの事で、ウィズを見逃す事に同意してくれた。

俺は、一枚の紙切れを眺めながら呟く。

「しかし、リッチーが街に普通に生活してるとか。街の警備はどうなってんだ」

一枚の紙切れ。
それは、ウィズの住んでいる住所が書かれた紙。
あのリッチーは俺達が住む街で普通に生活しているらしい。
というか、小さなマジックアイテムの店を営んで普通に人として生活しているそうな。
リッチーってダンジョンの奥深くに居るイメージがあったんだがと言ったら、生活や魔法の研究に不便なダンジョンに、わざわざ住む必要性がありませんよと言われた。

いや、リッチーだって元は人間なんだから言ってる意味は分かる。
分かるんだが、この世界に来てから俺の持っていた異世界観がどんどん破壊されていってる気がする。
と言うか、俺が期待してた異世界じゃない。

「しかし、穏便に済んで良かったです。いくらアクアがいると言っ

ても、相手はリッチー。もし戦闘になってたら私やカズマは間違いなく死んでたでしょうし」

何気なく言うめぐみんの言葉にぎょっとする。

「げ、やっぱリッチーってそんなに危険なモンスターなのか？　ひょっとしてヤバかった？」

「ヤバいなんてものじゃないです。リッチーは、魔法を極めた人が行なう禁断の儀式で成れる存在ですから。強力な魔法抵抗力に魔法の掛かった武器以外の物理攻撃の無効化能力。相手に触れるだけで様々な状態異常を引き起こし、その魔力や生命力を吸収する、絶大な魔力で敵をなぎ払うアンデッドモンスター。多分、爆裂魔法だって使えますよ。むしろ、なぜそんな大物にアクアのターンアンデッドが効いたのかが不思議でなりませんよ」

軽く失禁しそうになる。

そうだよな、アンデッドモンスターの元締めみたいなもんだ。

リッチーのスキルを教えてくれるって言われたから喜んで名刺貰ったが、スキルを習いに行く時は必ずアクアを連れて行こう。

「カズマ、その貰った名刺、渡しなさいよ。ちょっとあの女より先に家に行って、あの女の家の周りに神聖属性の結界張って涙目にしてやるから」

「や、やめてやれよ……」

やっぱりアクアは連れて行かない方がいいかもな……。

俺がそんな事を考えていると、ダクネスがぽつりと言った。

「そういえば、ゾンビメーカー討伐のクエストはどうなるんだ？」

「「「あっ」」」

俺達は駆け出しですら達成できるクエストに失敗した上級職の多

いパーティとして、しばらく笑い話のネタにされる事になりました。

12話

「カズマ、俺もコーヒー頼むよ」
申し訳無さそうにおずおずと自分のマグカップを差し出してくるキース。
「任せれ」
俺は自分の分のコーヒーを作り終えると、コーヒーの粉末が入ったキースのマグカップを受け取り、クリエイトウォーターで水を入れ、マグカップの底をティンダーで炙る。
焚き火で盛大に火を焚くと、せっかく撒いた初心者殺しが追ってくるかもしれない。
なので、マグカップの下に右手を筒状にしてくっつけて、手の中で小さなティンダーを灯し、弱火でマグカップをじっくりと。
「あっ、いいな！　ねえカズマ、私もお願いしてもいい？　……はあ、ていうかカズマ、本当に次から次へと上手い事スキルを使いこなすねえ……」
「それほどでもない。リーンの分は、キースのコーヒー作り終わってからな」
「わーい、ありがとう！」
本当に嬉しそうに、俺ににこやかに礼を言ってくるリーン。
「おいおい二人とも。カズマは、今日魔法を使いまくってるんだぞ。唯でさえ今日のＭＶＰのカズマにどこまで甘える気だよ」
そんな和やかなムードの中、テイラーが苦笑しながら言ってきた。
「悪い、いやだって、カズマは何でも出来るからさ、ついつい甘えちまって」
「ごめんね、そうだよね。カズマ、きっと疲れてるのに。うーん、私も初級属性魔法スキル、取ろうかなあ……」
真剣な表情で初級属性魔法スキルを取ろうか悩むリーンに、テイラーが笑いながら冷やかした。

「おいおい、リーンがカズマと同じスキル取ったって、カズマほど上手く使いこなせるのか？　カズマはスキルが凄いんじゃない、その使い方と立ち回りが凄いんだ」
「あーっ！　何よもう！　私だって、今日一日カズマの戦い方見て色々覚えたんだからね？」
俺は作り終えたコーヒーをキースに渡し、頬を膨らますリーンのマグカップを受け取りながら。
「おい、なんか俺の評価が不当に高いんだが。三人とも分かってるか？　俺、最弱なクラスの冒険者なんだぞ？」
おどけた様に言う俺の言葉に、皆が吹き出し、夜の草原の真ん中で笑い合った。

◆◆

「おい、もう一度言ってみろ」
俺は怒りを何とか抑えながら、静かな声でぽつりと言った。
先日ゾンビメーカー討伐のクエストを失敗した為、金が無い俺達は少しでも金になるクエストを受けようと、割のいいクエストが無いか探していた所。
「何度だって言ってやるよ。上級職が揃ったパーティで、何でゾンビメーカー討伐なんて簡単なクエスト失敗するんだよ。大方お前が足引っ張ってるんだろ？　なあ、最弱職さんよ？」
言って、同じテーブルにいた他の仲間と笑い合う戦士風の男。
我慢だ。

俺は大人な対応ができる男だ、普段のアクアの冷やかしに比べれば、こんなどこにでもいる酔っ払いの挑発は取るに足りないものだ。

そう、相手の言う事も一理ある。

ゾンビメーカー討伐クエストで、ウィズを見逃そうと言い出したのは俺だ。

ウィズを討伐とまではいかなくても、ゾンビメーカーではなくてリッチーだったと報告していれば、ここまでバカにされる事も無かっただろう。

だが、ウィズの事は秘密にしといてやろうと言い出したのも俺だ。

だから、この位は我慢しようと自分に何度も言い聞かせる。

だが、無言で耐えている俺を、その男は俺がビビッて何も言えないでいると受け取ったらしい。

「おいおい、何とか言い返せよ最弱職さん。ったく、いい女ばっか引き連れてハーレム気取りか？　どいつもこいつもいい女で、しかも全員上級職ときてやがる。さぞかし毎日、このお姉ちゃん達相手に良い思いしてんだろうなぁ？」

そしてギルド内に巻き起こる爆笑。

俺は思わず拳を握る。

そんな俺に、めぐみんやダクネス、アクアが止めに入った。

「カズマ、相手してはいけません。私なら何言われても気にしませんし」

「そうだカズマ。酔っ払いの言う事など捨て置けばいい」

「そうよカズマ。あの男、私達を引き連れてるカズマに妬いてんのよ。私は全く気にしないからほっときなさいな」

典型的な三下だ。

普通なら、相手する程の事じゃない。

何とか耐えようとした俺だったが、男の最後の一言には耐えられなかった。

「上級職におんぶに抱っこで楽しやがって。苦労知らずでよろしいこって！　おい、俺と代わってくれよ兄ちゃんよ？」

「大喜びで代わってやるよおおおおおおおおおおっ！！」

冒険者ギルドの中が静まり返る。

「……えっ？」

俺に絡んでいた戦士風の男が、思わずマヌケな声を出した。

「代わってやるよって言ったんだ！　おいお前、さっきから黙って聞いてりゃ舐めた事ばっか抜かしやがって！　ああそうだ、ゾンビメーカーの討伐は、事情があって俺の判断でクエストキャンセルしたんだよ！　それは認める！　だがなあ、お前！　お前その後なんつった！」

「カ……、カズマ？」

おろおろするアクアが、怒り狂う俺におずおずと声を掛ける。

そして、いきなり激怒した俺に若干引きながらも男が口早に言ってきた。

「そ、その後？　その、いい女三人も連れてハーレム気取りかって……」

俺は思い切りテーブルに拳を叩きつけた。

その音にギルド内の皆がビクリとする。

「いい女！　ハーレム！！　ハーレムってか！？　おいお前、顔にくっついてるのは目玉じゃなくてビー玉かなんかなの？　どこにい

い女が居るんだよ、教えてくれよ！　いいビー玉付けてんな、俺の濁った目玉と取り替えてくれ！」
「「「あ、あれっ？」」」

なぜか俺の後ろで俺のパーティメンバーの三人が、それぞれ自分を指差しながら小さな声で呟いた。

「なあオイ！　教えてくれよ！　いい女？　どこだよ、どこに居るってんだよオウコラッ！　テメーこの俺が羨ましいって言ったな！　ああ？　言ったなオイ！」
いきり立つ俺に、背後からおずおずと声が掛けられた。
「あ……あのう……」
恐る恐る右手を上げて、三人を代表するかの様なアクアの声。
俺はそれを無視してなおも続ける。

「上級職におんぶに抱っこで楽しやがって！？　苦労知らずだああああああああっ！？」
「……そ、その……。ご、ごめん……俺も酔ってた勢いで言い過ぎた……。で、でもあれだ！　隣の芝生は青く見えるって言うがなあ！　お前さんは確かに恵まれている境遇なんだよ！　代わってくれるって言ったな？　なら、一日。一日だけ代わってくれよ冒険者さんよ？　おい、お前らもいいか！？」
言って、その男は自分のテーブルの仲間にも確認を取る。
「ま、まあ俺は構わないが……。今日のクエストはゴブリン狩りだしな」
「私もいいよ？　でもダスト。あんた、居心地が良いからもうこっちのパーティに帰ってこないとか言い出さないでよ？」
「俺も構わんぞ。ひよっ子一人増えたってゴブリンぐらいどうにでもなる。その代わり、良い土産話を期待してるぞ？」
絡んできた男と同じテーブルに居た仲間達は口々に言った。

「ねえカズマ。その、勝手に話が進んでるけど私達の意見は通らないの？」
「通らない。おい、俺の名はカズマ。今日一日って話だが、どうぞよろしく！」
「「「は、はあ……」」」
絡んできた男の三人の仲間は、若干戸惑い気味の返事を返した。

大剣を背負った鎖帷子を着込んだ男が、俺を値踏みする様に眺め回しながら言ってくる。
「俺はテイラー。大剣が得物のソードマンだ。このパーティのリーダーみたいなもんだ。成り行きとはいえ、今日一日は俺達のパーティメンバーになったんだ。俺の言う事はちゃんと聞いてもらうぞ」
「勿論だ。と言うか、色々と指示してもらえるってのは楽だし、新鮮でいい。よろしく頼むよ」
その俺の言葉にテイラーが驚いた表情を浮かべた。
「何だと？　あの上級職ばかりのパーティで冒険者がリーダーやってたってのか？」
「そーだよ」
当たり前の様に頷く俺に、三人が絶句する。
青いマントに皮の胸当てを付けた、まだどこか幼さを残した女性がにこりと笑った。
「え、えっと。私はリーン。見ての通りのウィザードよ。魔法は中級属性魔法までは使えるわ。まあよろしくね、ゴブリンぐらい楽勝

よ。私が守ってあげるわ、駆け出しクン」
多分俺の方が年上だと思うんだけども、本職の魔法使いなら心強い。
ぜひとも頼りにさせてもらおう。
「俺はキースだ。クラスはアーチャー。狙撃が得意だ。よろしく頼むぜ？」
言いながら笑いかける弓を背負った皮鎧の男。
「じゃあ、改めてよろしく。名はカズマ。クラスは冒険者。……えっと、俺も得意な事とか言った方がいい？」
俺の言葉に三人が吹き出した。
「いや、別にいい。そうだな、カズマは荷物持ちでもやってくれ。ゴブリン討伐くらい三人でもどうとでもなる。心配するな、ちゃんとクエスト報酬は四等分してやるよ」
テイラーがちょっと小バカにした様に言ってくるが、そんな事はどうでもいい。
荷物持ちで報酬貰えるとかなにそれ、そんなもんでいいのか？
楽過ぎるだろ。
まあこいつらが言い出した事なので遠慮なく甘えさせてもらおう。

その時、クエストが張り出してある掲示板の方から聞き慣れた声がした。

「ええー。ゴブリン退治ー？　何で街の近くにそんなのが湧いてるの？　もうちょっとこう、ドカンと稼げる大物にしない？　一日とはいえ他所にレンタルされるカズマに、私達が日頃どれだけ有り難い存在かを見せ付けないといけないのよ」

俺に絡んだ男にアクアが難癖付けているらしい。
「い、いや、あんたらが実力があるのは分かるが俺の実力が追いつかねえよ。アークプリーストにアークウィザードにクルセイダー。

これだけ揃ってればどんな所でも行けるだろうけどよ、まあ今回は無難な所で頼むよ」

今回はって、次も組むつもりなのかあの男は。

俺はちっとも構わないけど。

そんな向こうの様子をちょっと気にしながら、テイラーが立ち上がった。

「今日のクエストは山道に住み着いたゴブリンの討伐だ。今から出れば深夜には帰れるだろう。それじゃ新入り、早速行こうか」

ゴブリン。

それはこの世界でも知らない者はいないメジャーモンスターで、ゲームに出てくる様な雑魚モンスターではなく、実は民間人には意外と危険視されている相手らしい。

個体の力はそれほどでは無いが、基本的に群れで行動し、武器を使い、しかも衛生観念が無い為に扱う武器が非常に汚い。

小剣で獲物をさばき、その血が付いた武器をそのまま手入れもしない。

当然、サビや雑菌だらけのその武器は、傷を負わされると簡単に破傷風になるそうな。

普通は森などに住むらしいが、今回、隣街へと続く山道になぜかゴブリンが住み着いたらしい。

俺達は山へ向かう途中の草原を、のんびりと歩いていた。

「しっかし、なんでこんな所に住み着くかなゴブリンは。まあ、おかげでゴブリン討伐なんて滅多に無い美味しい仕事が出てきた訳だ

けど」
ゴブリン一匹で二万エリス。
ゴブリンがどの程度の強さなのかは知らないが、リーンが美味しい仕事と言うからにはそうなのだろう。
俺は三人の後を荷物を背負ってくっついているだけで分け前が貰える。
こんなに緊張感も無い楽な仕事は始めてかも知れない。

やがて、そのまま何の問題も無く目的地の山に着いた。
山と言っても日本の緑豊かな山ではなく、山の殆どを茶色い岩肌が占めていた。
所々に茂みがある程度で、こんな自然の恵みが少ない所にどうしてゴブリンが引っ越してきたのか不思議に思う。
しかし、今までのメンバーだと問題も無くクエストがすんなり進む事に不安を覚える所だが、何だろうこの安心感は。

それはきっと、マトモなパーティの連中と一緒だからだろう。
テイラーが足を止め、地図を広げる。
「ゴブリンが目撃されたのはこの山道を登り、ちょっと下った所らしい。山道の脇にでもゴブリンが住み易そうな洞窟でもあるのかも知れない。ここからはちょっと気を引き締めてくれ」
そんなテイラーの指示に、俺は軽い感動を覚えていた。
これだよ、こんなやり取りが冒険者ってものだよ。
敵のど真ん中に突っ込みたいとか何となく爆裂魔法唱えたいとか早く帰ってお酒飲みたいとか、そんな会話がおかしいって物だ。

全員が視線を合わせ、無言でコクリと頷く。
山道は完全な一本道で、険しい岩肌の山を、這う様に細い道が伸びていた。
五、六人ほどが並んで歩ける程度の広さの道だが、道の片方には

壁の様な岩肌が、反対側は崖になっている。
そのまま無言で山道を登っていると、ふと気付いた。

「……何か山道をこっちに向かって来てる。敵感知に引っかかった。でも、一体だけだな」

敵感知スキルに反応があった。
しかし反応は一体だけっぽい。
ゴブリンは群れで行動するんじゃなかったか？
俺の言葉に三人が驚いた様に振り向いた。
「……カズマ、お前敵感知なんてスキル持ってるのか？　というか、一体だと？　それはゴブリンじゃないな。こんな所に一体で行動する強いモンスターなどいないはずだが……。山道は一本道だ。そこの茂みに隠れた所で、すぐ見つかっちまうだろう。迎え撃つか？」
テイラーが言ってくるが、
「いや、茂みに隠れても多分見つからない。俺が潜伏スキル持ってるから。確か、このスキルはスキル使用者に触れてるパーティーメンバーにも効果があったはずだけども。せっかく都合よく茂みがあるんだし、とりあえず隠れとく？」
俺の言葉に、三人が驚きながらも茂みに隠れた。
そこは流石に場数を踏んだ冒険者パーティだ。
相手が何者か分からない。
そんな場合は戦いを避けるのは冒険者の基本だ。
用心深いのは恥ずべき事じゃない、用心を怠って死ぬ奴が恥ずかしいのだ。

これがいつもの連中なら、こんな素直に隠れてくれただろうかと茂みに隠れながら悩んでいると、ソレは来た。

一言で言えば、猫科の猛獣。

虎やライオンをも越える大きさのソレは、全身を黒い体毛で覆われ、サーベルタイガーみたいな大きな二本の牙を生やしていた。
ソレは俺達がさっきまで居た山道の地面をクンクンと嗅いでいる。
リーンがその姿を見て、慌てて自分の口元を押さえた。
悲鳴でも上げそうになったのかも知れない。
潜伏スキルを発動中の俺に触れる三人の手に、緊張の為か力が入る。
この三人がこれだけ緊張するという事は、かなり危険なモンスターなのかも知れない。

ソレは神経質に辺りを嗅ぐと、やがて俺達が登ってきた、街へと向かう道へ消えていった。

「……ぶはーっ！　こここ、怖かったあああっ！　初心者殺し！　初心者殺しだよっ！」
リーンが涙目で言ってくる所を見ると、やはりヤバイ相手だったらしい。
「し、心臓止まるかと思った……。た、助かった……。あれだ、ゴブリンが、こんなに街に近い山道に引っ越してきたのは、初心者殺しに追われたからだ」
「あ、ああ……。しかし、厄介だな。よりによって帰り道の方に向かって行ったぞ。これじゃ街に逃げ帰る事もできないぜ」
テイラーやキースが口々に言ってくる。
「えっと、さっきのヤツってそんなにヤバいのか？」
俺の言葉に三人が、なぜ知らないんだと、信じられない物を見るかの様な目で見つめてくる。

「初心者殺し。あいつは、ゴブリンやコボルトと言った、駆け出し冒険者にとって美味しい部類の弱いモンスターの傍をウロウロして、弱い冒険者を狩るんだよ。つまり、ゴブリンをエサに冒険者を釣る

んだ。しかも、ゴブリンが定住しない様にゴブリンの群れを定期的に追いやり、狩場を変える。狡猾で危険度の高いモンスターだ」

「なにそれ怖い」

モンスターですらそんな知恵を持つご時勢とか。

あの初心者殺しのツメを持ち帰って、アクアに飲ませてやりたいとこだ。

「とりあえず、ゴブリン討伐を済ませるか？　初心者殺しは、普段は冒険者をおびき寄せるエサとなる、ゴブリンやらを外敵から守るモンスターだ。ゴブリンを討伐して山道の茂みに隠れていれば、俺達が倒したゴブリンの血の臭いを嗅ぎつけて、さっきみたいに俺達を通り過ぎてそっちに向かってくれるかもしれない。近づいてくればカズマの敵感知で分かるだろうし、帰ってくるかどうかも分からない初心者殺しを待って、何時までもここで隠れてる訳にもいかない。まずは目的地へと向かうとしよう」

テイラーの提案に俺達は茂みから出る。

と、リーンが俺の背負っていた荷物の一部を手に取ると、

「もし初心者殺しに会ったら、皆で逃げる時、カズマも身軽な方がいいからね。私も持つよ。そ、その代わり、潜伏と敵感知、頼りにしてるよ？」

自分の分の荷物を持ちながら、おどおどと言ってきた。

そのリーンの言葉にテイラーとキースも俺の背中から荷物を取る。

「「べ、別に、俺達はカズマを頼りきってる訳じゃないからな？」」

おっと、ツンデレ頂きました。

初心者殺しが引き返してくる気配も無く、俺達がてくてくと山道を登っていると、テイラーの持つ地図の通り、山道が下り坂になる地点に出た。
ゴブリンが目撃されたのはこの辺りらしい。
テイラーが俺を見る。
「……カズマ、どうだ？　敵感知には反応あるか？」
ありますとも。それもたくさん。
「なんか……。この山道を下っていった先の角を曲がると、一杯いる。初心者殺しの気配は今の所無いな」
しかし多いな。
十やそこらじゃない数が居る。
うん、多すぎてちょっと数えられない。
「一杯いるってならゴブリンだな。ゴブリンは群れるもんだ」
気軽に言ってくるキースに、
「いや、俺ゴブリンと戦った事無いから知らないけど、こんなに多いものなのか？　普通はどんくらいで群れるんだ？　ちょっと数え切れないぞこれ」
若干不安に思いながらも俺は尋ねた。
そんな俺の様子に、リーンも不安になったのか、
「ね、ねえ。そんなに居るの？　カズマがこう言ってるんだし、ちょっと何匹いるのかこっそり様子をうかがって、数えてから……」
リーンがそこまで言いかけた時だった。
「大丈夫大丈夫！　カズマばっかに活躍されてちゃたまんねえ！　おっし、行くぜ！」
叫ぶと同時、ゴブリンが居るであろう下り坂の角から飛び出すキース。
それに続いてテイラーも飛び出して、二人同時に叫んでいた。

「「ちょっ！　多っ！！」」
叫ぶ二人に続き、俺とリーンも角を曲がる。
そこには、三十やそこらはくだらないゴブリンの群れが居た。
子鬼だ！　子鬼がおる！
身長は子供程度しかないゴブリンだが、その殆どが武器を持ち、それらの多くのゴブリン達がまっすぐこちらを向いている。
これはちょっとした脅威だ。
リーンが叫ぶ。
「言ったじゃん！　私、カズマがこう言ってるんだし、こっそり数を数えた方がいいって言ったじゃん！！」
泣き声を上げるリーンと、アーチャーのキースを後ろに庇う形で山道の角の部分に俺とテイラーが展開する。
「ゴブリンなんて普通は多くても十匹ぐらいだろ！　ちくしょう、このまま逃げたって初心者殺しと出くわす可能性が高い！　やるぞ！」
テイラーが叫び、リーンとキースが悲壮感を漂わせた顔で攻撃の準備を始めた。
ゴブリン達が奇声を上げて、こちらに向かって山道を駆け上がってきた！

ここは山道で、道の片方は崖となっていた。
「ギギャッ！　キー、キーッ！」
そして、俺達は今坂の上に陣取っている。

つまり……

「おいっ！　弓構えてるゴブリンがいるぞ！　リーン、風の防御魔法！」
「リーンが詠唱してるが間に合わねえっ！　テイラー、カズマ、何

とかかわせえっ！」

「『ウインドブレスト』ッ！」

俺が咄嗟に叫んだ初級の風魔法が、俺とテイラーに飛び来る矢を吹き散らした。

「カ、カズマっ！　でかしたっ！」

テイラーが大剣を構えて俺の隣で叫ぶ中、リーンの魔法が完成したらしい。

「『ウインドカーテン』！」

俺とテイラーの周りを緩やかな風が吹き出した。

魔法だ！

これがちゃんとした魔法使いの支援魔法ってヤツだ！

きっと、矢を逸らすとかなんかしてくれる魔法なんだろう。

こういうのが本物の魔法使いって奴だと感動しながら、俺は大声で叫んでいた。

「つまり、こんな場所こそこんな手が効くのではなかろうか！　『クリエイト・ウォーター』ッッ！」

大声で大量の魔力を注いで広範囲に盛大に水を降らせる。

俺とテイラーが立ち塞がる前にぶちまける様に。

「カズマ！？　一体何やって……」

後ろからのリーンの声を聞きながら、

「『フリーズ』ッ！」

凍結魔法を全力で！

「「「おおっ！！」」」

俺以外の三人が叫ぶ中、ゴブリンの足元が一面の氷で覆われた。

冬牛夏草に使った手だが、二足歩行のゴブリン達は簡単に氷に足を取られ、あちこちで盛大にすっ転んでいる。

モタモタと何とか俺の前まで上って来た、氷の上でプルプルと踏

ん張っている不安定なゴブリンを、俺はしっかりと乾いた地面を踏みしめながら、危なげなく切り捨てた。
「テイラー！　この足場の悪い中でも上って来るゴブリンは、二人でしばこうぜ！　上って来ないゴブリンは、後ろの二人に任せた！」
「でっ、でかしたカズマー！　おい、やっちまえ！　この状況ならどれだけ居たって関係ねえ、ゴブリンなんてやっちまえ！」
「うひゃひゃひゃ、なんだこれ、楽勝じゃねーか！　蜂の巣にしてやるよおおお！」
「いくよ！　強力な魔法、ど真ん中に撃ち込むよおおお！」
なぜかやたらと高いテンションで、俺達はゴブリンの群れを迎え撃った！

ゴブリンの群れを討伐した帰り道。
「……くっくっ、あ、あんな魔法の使い方、聞いた事もねえよ！　何で初級属性魔法が一番活躍してるんだよ！」
「ほんとだよー！　私、魔法学院で初級属性魔法なんて、取るだけスキルポイントの無駄だって教わったのに！　ふふっ、ふふふっ、そ、それが何あれ！」
「うひゃひゃひゃ、や、ヤバい、こんな楽なゴブリン退治初めてだぜ！　いや、俺はあのゴブリンの群れを見た時終わったと思ったね！」
俺達は山道を街へ向かって帰りながら、先ほどの戦闘を振り返っていた。

口々に先ほどの戦闘の話題で盛り上がる、いまだにテンションの下がらない三人に、

「おい、戦闘終わったんだから荷物よこせよ。最弱クラスの冒険者は荷物持ちが基本だろ？」

口元をにやけさせた俺の軽い皮肉に。

「ちょっ、悪かった、いやほんとに悪かったよカズマ、謝るよ！これからは冒険者だからってバカにしねえ！」

「ご、ごめんねカズマ！　てか、何で冒険者が一番活躍してるのさ！　おかしいよ！」

「おいカズマ、荷物よこせ！　ＭＶＰなんだから、お前の荷物も持ってやるよ！」

途端に慌てた三人に、俺は思わず吹き出した。

吹き出した俺を見て、冗談だと気付いた三人も笑い出す。

ああ、いいなあ。

これこそ冒険者パーティって感じだ、ほんとに。

「つっ……。いてて……」

テイラーが、先ほどの戦闘で受けた小さな傷を押さえて顔をしかめた。

「おい、大丈夫か？　……さっきの戦闘でレベル上がったから、ウチのプリーストに無理やり教えさせた回復魔法スキル、今すぐ取ってもいいんだけど。確かゴブリンの武器で攻撃受けると破傷風になりやすいんだよな？　消毒薬もないし、街に帰るまで傷口は塞がない方がいいよな。街に帰ったら急いで消毒しようぜ」

何気なく言った俺の言葉に、リーンとキースが、なぜか喉をゴクリと鳴らした。

「カズマ、か、回復魔法まで使える様になるつもりなの……？」

「回復魔法……。つ、ついに俺達のパーティにも回復魔法が使えるメンバーが……」

何か言いかけた二人の言葉を、テイラーが遮った。

「おい止めろ。カズマには、ちゃんと帰る場所があるんだぞ。上級

職ばかりのパーティが。……ったく、なぜ冒険者のカズマが上級職ばかりのパーティでリーダーなんてやってるのかが、良く分かったよ」

そして、俺に笑いかけた。

俺は自分がなぜあのパーティで問題児達の子守をしなければいけないのかが分からないが、テイラーには良く分かったらしい。

ぜひ今度教えてもらおう。

俺達は山から降り、街へと広がる草原地帯に足を踏み入れる。

そして、思い出した。

俺達はあまりにゴブリン狩りが上手くいきすぎていて、もっと注意を払わなければいけない存在がいた事を。

「あれ？　何か、凄い勢いでこっちに何か向かってきてないか？」

流石はアーチャー、視力が飛び抜けていいのだろう。

ソレに最初に気付いたのはキースだった。

続いて俺も、敵感知によりソレに気付く。

夕暮れの、草原地帯のど真ん中。

そこから、俺達に向かって駆けて来る黒い獣に。

「初心者殺し！」

俺の叫びを合図に、四人で一斉に街に向かって駆け出した。

「はあっ……、はあっ……！　くそっ、最後の最後でこれか！」

キースが、荒い息で毒づいた。

「はあっ、はあっ……。やばいよー、追いつかれちゃうよー！」

涙目のリーンが泣き言を呟く。

初心者殺しは、俺達のすぐ後ろにまで迫っていた。
街まではまだ距離がある。
とても逃げ切れるものではないだろう。
と、先頭を走っていたテイラーがクルリと振り向き、剣を構えて言い放つ。
「リーン！　このままじゃ追いつかれる！　お前はカズマを連れて街に逃げろ！　俺が足止め、キースは援護！　街に帰ったらギルドに駆け込んで、応援を呼んでくれ！」
「ま、ま、ま、任せろ！　そ、そうだよな、カズマは他所のパーティの人間なのに、今日は一番頑張ってくれた！　今度は俺達が頑張る番だよな！」

何それカッコイイ！
何を、ここは任せて先に行けみたいな事言ってんだ！

「わ、分かった！　行くよ、カズマ！」
リーンが俺に声を掛ける。
が、今日一日とは言ってもこいつらは俺のパーティメンバー。
置いて行くって選択肢は無い。
目と鼻の先まで迫っている初心者殺し。
その標的は立ち塞がるテイラーに向いている。

「ちょ、ちょっとカズマ！？　逃げないの！？」

リーンの声を聞きながら、俺は初心者殺しに目を付けられない様、小さな声で呟いた。
「『クリエイト・アース』」
手の平に生成される、少量のサラサラの土。
「おっ、おいカズマ！　危ないぞ、早く逃げろ！」
慌てたキースの声を聞きながら、それを握り締め、そっとテイラー

の右後ろに立つと。
「うらあああああっ！　かかって来いよ、この毛玉があっ！」
叫ぶテイラー。
その、テイラーに飛び掛かる初心者殺し。

「『ウインドブレスト』オッ！」
俺は、手の平の土を初心者殺しに向けながら、大声で唱えていた。
「ギャンッ！」
テイラーに飛びかかろうとしていた所を、突然横合いから顔面に砂粒の直撃を受け、目に多量の砂が入った初心者殺しはそのまま地面にうずくまる。
そして、目が見えないながらもこちらに向かって威嚇した。
「フシャーッッ！」
「ちょっ！？　えっ？　ええっ！？」
いきなり何が起こったのかが分かっていないテイラーに。
「おい、今の内だ！　ずらかれえええっ！！」

街まではまだ少しある。
だが、もう初心者殺しの気配は感じられない。
狡猾なモンスターだとか言っていたから、街にあまり近い所までは追ってこないのだろう。
「ま、撒いたか？」
テイラーが、荒い息をつきながら呟いた。
「はあっ……。はあっ……。ま、撒いたみたい？」
リーンが足を止め、何度も後ろを振り返りながら言う。
「……ふっ……。ふふっ……。ふへへへっ……」

キースが……。

お、おい、恐怖でおかしくなったのか？

だが、キースの笑いにつられた様に。

「くっ……くっ、くっくっくっ……！」

「あはっ……。あははははっ……。あははははははっ！」

逃げ切れた事に、いつの間にか俺を含めて皆が笑っていた。

「ちょ、何だよさっきのアレ！　カズマ、何しやがったんだよっ！　ぶはははははっ！」

テイラーが背中をバシバシ叩いてくるが、その痛みが心地いい。

「初級魔法だ初級魔法！　俺は冒険者だぞ、スキルポイント高くて初級魔法ぐらいしか取れねえ！　わははははっ！！」

「こ、こんな冒険者が居てたまるかよっ！　うひゃひゃひゃっ！　は、腹いてえっ！　生きてるよ、俺達初心者殺しに出会って生きてるよ、おいっ！」

「有り得ないよー！　この人有り得ないよ、色々とー！　一体どんな知力してんのさ！　ねえカズマ、冒険者カードちょっと見せてよ！」

俺は言われるままにリーンにカードを差し出した。

「あ……、あれっ？　知力は普通だね。他のステータスも……、って、高っ！？　この人幸運、超高いっ！！」

リーンの言葉に、二人もどれどれとカードを覗く。

「うおっ、なんじゃこりゃ！」

「お、おい、今回こんなに都合良くクエストが上手くいったのは、カズマの幸運のおかげじゃねえか？　おい、お前ら拝んどけ拝んどけ！　ご利益があるかもしれねーぞ？」

いや、絶対幸運は関係ないと思う。

受付のお姉さんも、冒険者稼業には幸運なんてあまり必要無いっ

て言ってたし。
それに俺が本当に運がいいなら、そもそもパーティメンバーにあの連中が集まってこないはずだ、うん。
だがテイラーの言葉に、三人が俺に手を合わせて拝み出した。
「や、やめろよ。……おいお前ら。そんな事より、コーヒーでもどうだ？」
俺は三人に苦笑しながら、マグカップを取り出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

冒険者ギルドのドアの前。
今の時刻はすでに夜半を回っている。
すっかり遅くなった俺達は、クエストの達成をするべくギルド前にやって来ていた。
初心者殺しが出た事も報告しないといけない。
だがテイラー曰く、ゴブリンの群れを全滅させたので、初心者殺しは新しいゴブリンの群れを探して人里からは離れるだろうとの事だ。
「つ、着いたあああああっ！　今日は、なんか大冒険した気分だよ！」
リーンの声を聞きながら、俺達は笑いながらギルドのドアを開け…………
「うっ……ぐずっ……。ふぐっ……、ひっ、ひぐう……っ……。あっ……、ガ、ガズマあああっ……」

泣きじゃくっているアクアを見て、俺はそっとドアを閉めた。
「おいっ！　気持ちは心底よーっく分かるが、ドアを閉めないでくれよっ！」
ドアを開け、半泣きで食って掛かってきたのは今朝俺に絡んできたあの男。
名をダストとか言った、アクア達のパーティの新しいリーダーさんだ。

酷い惨状だった。

ダストは背中にめぐみんを背負い、アクアは、白目をむいて気絶したダクネスを背負って泣いていた。
よく見ればアクアは頭に大きな歯型を残し、涎か何かは知らないが、何となく湿っぽい。

「……えっと、なにこれ。いや、大体分かる。何があったかは大体分かるから聞きたくない」
「聞いてくれよ！　聞いてくれよっ！！　俺が悪かったから！　俺が悪かったから聞いてくれ！　いや、街を出て、まず各自どんなスキルが使えるのかを聞いたんだ。で、爆裂魔法が使えるって言うもんだから、そりゃすげーって褒めたんだよ。そしたら、我が力を見せてやろうとか言い出してよ、普段使う以上の全魔力を込めた爆裂魔法とやらを、いきなり何も無い草原で意味も無くぶっ放して……」

泣きながら俺に訴えてくるダストの言葉を、俺は耳を塞いで聞こえないフリをした。

「おい、聞いてくれって！　そしたら、初心者殺しだよっ！　爆発の轟音を聞きつけたのか初心者殺しが来たんだが、肝心の魔法使いはぶっ倒れてるわ、逃げようって言ってんのにクルセイダーは鎧も

着けてないくせに突っ込んでいくわ、それで、挙句の果てに……」

「おい皆、初心者殺しの報告はこいつ等がしてくれたみたいだし、まずはのんびり飯でも食おうぜ。新しいパーティ結成に乾杯しよう！」

「「「おおおおおっ！！」」」

俺の言葉に、テイラーとキース、リーンの三人が喜びの声を上げてくれた。

「待ってくれ！　謝るから！　土下座でも何でもするから、俺を元のパーティに帰してくれぇっ！」

本気で泣くダストに、俺は心底同情すると。

「これから、新しいパーティで頑張ってくれ」

「俺が悪かったからっ！！　今朝の事は謝るから許してくださいっ！！」

13話

「サンキュー、キース。うん、千里眼スキルと狙撃スキルはなかなか使えそうだな」
「だろ？　これで何時でも習得は可能になっただろうから、スキルを取りたい時に取るといいさ」

俺はギルドのドアを開けながら、アーチャースキルを教えてくれたキースに礼を言いつつギルドに入る。
教えて貰った二つのスキルはなかなか便利そうだ。
暗視能力が備わり、更には遠くまで視認可能になるスキル、千里眼。
弓などの飛び道具を使用しないといけないが、使う飛び道具の飛距離が劇的に伸び、長距離からの狙い撃ちが可能になるスキル、狙撃。
先日の、大量のゴブリン狩りでレベルが12になったので、スキルポイントが30ポイント加算された。
次はどのスキルを覚えるかが悩みどころだ。

と、ギルドに入ってきた俺とキースをじっと見つめてくる者達がいた。

「……どうした？　そんな変な目で。……おっ、ダクネス、新しい鎧できたのか」

アクアとダクネスとめぐみんの三人が、テーブルの真ん中に置いた、コップにさした野菜スティックをぽりぽりかじりながら俺を見ていた。
俺はキースに別れの挨拶をすると、三人のテーブルに座り、俺も

一本貰おうと、野菜スティックに手を伸ばす。

クイッ。

野菜スティックが俺の伸ばした手から逃れるように、ひょいと身をかわした。

……おい。

「何やってんのよカズマ」

アクアがテーブルをバンと叩くと、野菜スティックがビクリと跳ねる。

一瞬動かなくなった野菜スティックを、アクアが一本つまんで口に運ぶ。

「……むう。楽しそうですね。楽しそうですねカズマ。他のパーティのメンバーと、随分親しげでしたね」

めぐみんが、拳を握ってテーブルをドンと叩き、怯ませた野菜スティックをつまみ、口に運んだ。

「……くっ、何だこの新感覚はっ!?　カズマが他所のパーティで仲良くやっている姿を見ると、胸がもやもやする反面、何か、新たな快感が……！　もしやこれが、噂の寝取られ……？」

おかしな事を口走るどうしようもないのが、コップのフチをピンと指で弾き、そのまま野菜スティックを指でつまむ。

「なんだ、どうしたお前ら。昨日の一日レンタル気にしてんのか？　あれは別に……」

言いながら俺はバンとテーブルを叩くと、野菜スティックに手を……

ヒョイッ。

「……だあああらっしゃあああああ！」
俺は野菜スティックを掴み損ねた手でスティックが入ったコップを掴むと、それを壁に叩き付けようと振りかぶった。
「や、やめてええ！　私の野菜スティックに何すんの！　た、食べ物を粗末にするのはいくない！」
アクアに腕を掴まれ、俺はしぶしぶコップを置く。
「野菜スティックごときに舐められてたまるか！　てゆーか今更突っ込むのもアレだが、何で野菜が逃げるんだよ。ちゃんと仕留めたヤツを出せよ」
「なに言ってんの。お魚も野菜も、何だって新鮮な方が美味しいでしょ？　活き作りって知らないの？」
こんな活き作りがあってたまるか。
俺は野菜スティックを食うのは諦め、イスに座る。
「はあ……。まあ、野菜は今はどうでもいい。それよりお前らに相談があるんだよ。レベルが上がって新しいスキル取れそうだから、次はどのスキルを取ろうかと思ってさ。そういや、お前らのスキルとかってどんな感じなんだ？」
そう、効率よくクエストをこなしていくなら、パーティメンバーとの相性を考えたスキルを取っていく方がいい。
そう思って相談を持ちかけたわけだが。
「私は物理耐性と魔法耐性、各種状態異常耐性等で占めてるな。後はデコイといった、囮スキルぐらいだ」
「……大剣修練とか取って、命中率を上げる気はないのか？」
「無い。私は言っては何だが、体力と筋力はある。攻撃が簡単に当たる様になってしまっては、無傷でモンスターを倒せる様になってしまう。かといって、手加減してワザと攻撃を受けるのは違うのだ。こう……、必死に剣を振るうが当たらず、力及ばず圧倒されてしま

うと言うのが気持ちいい」
「もういい、お前は黙ってろ」
「……んっ！　自分から聞いておいてこの仕打ち……」
頬を赤らめ、ふるふると震えているダクネスは放置する。
めぐみんを見ると、小首を傾げて口を開いた。
「私はもちろん爆裂系スキルです。爆裂魔法に爆発系魔法威力上昇、高速詠唱。スキルポイントは習得済みのスキルのレベルを上げるのにも使えるので、スキルポイントが貯まると、もちろん爆裂魔法に全て注いでますよ」
「……どう間違っても、中級魔法スキルとかは取る気はないのか？」
「無いです」
こいつも駄目だ……。
「えっと、私は……」
「お前はいい」
「ええっ！？」
自分のスキルを言おうとしたアクアを黙らせる。
宴会芸とか宴会芸とか宴会芸とかそんなんだろう。
後はアークプリーストの全スキルと格闘スキルがあったんだっけか。
めんどくさいので省略する。
しかし…………。
「何でこう、まとまりが無いんだよこのパーティは……」

◆◆◆

俺はアクアを引き連れながら、ある所へと向かっていた。

めぐみんとダクネスには、今日受けるクエストで手頃な物を探してもらっている。
俺達のパーティはバランスが悪い。
とにかく偏り過ぎている。
アクアはプリーストとして自体はまあ優秀なのかもしれないが、ダクネスが硬すぎて回復魔法の出番が殆ど無い。
めぐみんは最大瞬間火力においては他のウィザードの追随を許さないが、とにもかくにも一発こっきりだ。
ダクネスは硬いだけで火力面では期待できない。

当面の問題としては、安定した火力。
となると、俺がスキルを覚えるなりなんとかしないといけないのだが、俺が剣振り回して戦うにも、やはり一人では限界がある。
教えて貰った狙撃スキルを習得して、ダクネスが敵を引きつけている間に弓で援護。
これでもいいが、もう少しこう、メインの武器になるスキルが欲しい所だ。

「おし、着いたぞ。いいかアクア。今の内に言っとくが、絶対に暴れるなよ。喧嘩するなよ。魔法使うなよ。分かったか？」

それは小さな、マジックアイテムを扱っている魔法店。
それを見て、アクアが小さく首を傾げる。
「ちょっと、何で私がそんな事しなきゃなんないのよ。一度言っときたいんだけど、カズマって私を何だと思ってるの？　私、チンピラや無法者じゃないわよ？　女神よ？　神様なのよ？」
俺の後ろで文句を垂れるアクアを引き連れ、俺は店のドアを開け、中に入った。
ドアに付いている小さな鐘が、カランカランと涼しげな音をたて、俺達の入店を店主に告げる。

「いらっしゃ……、ああっ！？」
「あああっ！？　出たわねこのクソアンデッド！　あんた、こんな所で店なんて出してたの！？　女神であるこの私が馬小屋で寝泊りしてるってのに、あんたはお店の経営者ってわけ！？　リッチーのくせに生意気よ！　こんな店、神の名の下に燃やしていだいっ！？」
俺は店に入るなりいきなり暴走を始めたアクアの頭を、ダガーの柄で軽く殴る。
そのまま後頭部を押さえてうずくまるアクアを他所に、俺は怯える店主に挨拶した。
「ようウィズ、久しぶり。約束通り来たぞ」

「……ふん。お茶も出ないのかしら？　このお店は」
「あっ、す、すいませんっ！！　今すぐ持って来ますっ！」
「持って来なくていい！　いや、客にお茶出す魔法店ってどこにあるんだよ」
陰湿なイビリをするアクアの言う事を、素直に聞こうとするウィズを止める。
魔法店なんて初めてな俺は、店内を見回して手近な物を何気なく手に取った。
それは小さなポーションの瓶。
「あっ、それは強い衝撃を与えると爆発しますから気を付けてくださいね」
「げっ、マジか」
俺は慌てて瓶を戻す。
ついで、隣の瓶を手に取ると……

「あっ、それはフタを開けると爆発するので……」
俺はそっとソレを戻すと、更に隣の瓶を手に取って。
「これは？」
「水に触れると爆発します」
「……こ、これは？」
「温めると爆発を……」
……。
「おい、この店は爆薬しかねーのか！」
「ちちち、違いますよ！　そこの棚は爆発シリーズが置いてあるだけですよ！」
おっと、そうじゃない。
俺は別に魔法の道具が欲しくて来たんじゃない。
勝手に自分でお茶を入れてすすっているアクアは置いておき、俺は本題に入る事に。

「なあウィズ、何か、使えるスキルを教えてくれないか？　リッチーならではのスキルとかあるんだろ？」
「ぶっ！」
「きゃあああっ！？」
俺の言葉にアクアがお茶を吹き出し、それがウィズにモロに掛かった。
「ちょっと、何考えてんのよカズマっ！　リッチーのスキル？　リッチーのスキルですって！？　この女に名刺貰ってるの見たときは、一体何する気だろうって思ってたら！　リッチーの持つスキルなんてロクでもない物ばっかりよ！　そんな物覚えるなんてとんでもないわ！　いい？　リッチーってのはね、薄暗くてジメジメした所が大好きな、言ってみればなめくじの親戚みたいな連中なの」
「ひ、酷いっ！」
アクアのあんまりな決め付けにウィズが涙ぐむ。
「いや、なめくじの親戚でも従兄弟でもいいんだけどさ。リッチー

のスキルなんて普通は覚えられないだろ？　そんなスキル覚えられたら結構な戦力になるんじゃないかと思ってな？　お前だって、今のメンバーじゃちょっと強い敵が大勢出てきたらどうにもならない事ぐらいは分かるだろ」

「むう……」

俺の言葉に、一応は納得はしたのか、渋々とアクアは引き下がる。

なめくじ発言でちょっとへこんだウィズが、気を取り直して俺を見た。

「え、えっと。それでは、一通り私のスキルをお見せしますから覚えて行って下さい。見逃してくれた、せめてもの恩返しですので……」

言って、ウィズはハタと何かに気付いた様に、俺とアクアを交互に見て困った様におどおどしだした。

「えっと、どうした？」

問いかける俺に、ウィズは怯えながらアクアを見る。

「そ、その……。私のスキルは相手がいないと使えない物ばかりなんですが、つまりその……。誰かにスキルを試さないといけなくて……」

なるほど、そういう事か。

「おいアクア。悪いけど頼めないか？」

「ほー？　アンデッドがこの私に何のスキル使おうっての？」

ウィズを威嚇するアクアに、ウィズが怯えたように身を引きながら。

「そ、その……。ドレインタッチなんてどうでしょう？　ああっ、も、もちろんほんのちょっぴりしか吸いませんので！　スキルを覚えてもらうだけなら、ほんのちょっとでも効果があれば覚えられると思いますので！」

慌てたように口早に言うウィズに、アクアがにんまりと凶悪な笑みを浮かべた。

一応この二人は、アンデッドの大物、リッチーと、女神である。
……どっちがリッチーでどっちが女神だったか。

「いいわよ？　構わないわよ、幾らでも吸っても。さあどうぞ？」
アクアが自分の手を差し出した。
その手をウィズが恐る恐る手に取って……。

「で、では失礼します……。……？　あれっ？　あ、あれっ？」
俺には何が起きているのかは分からないが、ウィズにとっては予想外の事が起きているらしい。
「ほらほらどうしたの？　私から魔力や体力を吸うんじゃないの？　あらあら、アンデッドの元締めみたいな存在のクセに、ドレインすらできないのかしら？」
余裕たっぷりのアクアに対し、ウィズがみるみる涙目になっていく。
「あ、あれえ――――――――！？」
アクアが、ドレインさせない様に抵抗しているらしい。

俺は無言でアクアの後ろ頭を引っぱたいた。
「痛いっ！？　ちょっとカズマ、邪魔しないでよ！　これはリッチーと女神の戦いなのよ！　私だって女神の端くれ、そう易々と吸われてたまるもんですか！」
「いや、話進まんから吸わせてやれよ……。悪いなウィズ、どうもこいつは職業柄、アンデッドが受け付けられないらしくてな」
代わりに謝る俺に、ウィズがとんでもないとばかりに首を振った。
「い、いいえ！　そ、その、私がリッチーなのが悪いんですから……。と言うか、女神？　その、以前私を簡単にターンアンデッドで

消し去りかけたり、私の力が効かなかったり……。ひょっとして、本当に女神様なんですか？」

あ、ヤバイ。

流石にリッチーにもなれば、アクアが本物の女神だと分かるのか。

俺は未だに、アクアが女神だってのに納得していないのだが。

「まあね。あなたは他所に言い触らしたりはしないでしょうから言っておくけど。私はアクア。そう、アクシズ教で崇められている女神、アクアよ。控えなさいリッチー」

「ヒイッ！？」

ウィズがこれ以上に無いぐらいの怯えた顔で俺の後ろに回り込んだ。

リッチーにとって、やはり神って存在は天敵に出くわしたような物なのか。

「おいウィズ、そんなに怯えなくてもいい。アンデッドと女神なんて水と油みたいな関係なんだろうけどもさ」

なだめる俺に、だがウィズは、

「い、いえその……。アクシズ教団の人は頭のおかしい人が多く、関わり合いにならない方がいいと言うのが街の常識だったので、その、アクシズ教団の元締めの女神様と聞いて……」

「何ですってぇっ！？」

「ごごごご、ごめんなさいっ！」

「……は、話が進まねえ……」

アクアに首を絞められている涙目のウィズを助けようと、ため息を付きながら立ち上がろうとした、その時だった。

『緊急クエスト！　緊急クエスト！　街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！　繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』

それは、街中に響く大音量のアナウンス。
そう、大量の冒険者を必要とする時の緊急のアナウンスだ。

「何だ？　またキャベツか？　もうあんな訳の分からないクエストは沢山だぞおい」
俺の言葉に、ウィズの首を絞めていたアクアもウィズを放して立ち上がった。
「何かしら。まあこの季節じゃ大したクエストじゃないわね。ギルドから結構離れちゃったし、今回は行かなくてもいいでしょ。他の冒険者に任せとけばいいわ」
アクアの言葉に、開放されたウィズが咳き込みながらも同意する。
「そ、そうですね。本来なら、冒険者は緊急招集には余程の事情がないと集まらなきゃいけない義務があるんですが……。この店からだと、ギルドまでは距離がありますしね」

「そんなもんなのか。デカイモンスターが迫っていて街がヤバイとか、そんな事は無いのか？」
俺の疑問にアクアは肩をすくめ、
「そんな緊急クエストなら、尚更行きたくないでしょう？　ま、どうせ大したクエストじゃないわ。ほっときましょう」

『緊急クエスト！　緊急クエスト！　街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！　繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！　……冒険者の皆さんっ！！』

アナウンスの人が息を吸った。

『宝島ですっ！！』

アナウンスのその声に、アクアとウィズが店から飛び出し、脇目もふらずに駆け出した。

１４話

「おいっ、どう言う事だよ、説明……って、早っ！！」

飛び出して行った二人を追って店を出ると、すでにアクアとウィズの後ろ姿は小さくなっていた。

俺はウィズの店に掛かっている営業中の札を裏返し、準備中にする。

そしてそのまま俺も、ギルドに向かって駆け出した。

ギルドへと向かう途中、大急ぎで走っている冒険者達とすれ違う。

彼らの殆どは、頭にヘルメットをかぶり、背中に大きなリュックを担いで、手にはツルハシを持っている。

ギルドに向かっていると、俺より先に飛び出して行ったアクアとウィズに出くわした。

二人もすでに、リュックとツルハシを持っている。

どうやら、このリュックとツルハシはギルドで支給して貰える様だ。

「カズマ！　あんたの分も借りてきたわよ！　すでにギルドに居たダクネスとめぐみんの姿は無かったから、きっともう先に行ってるわ！　ほら、私達も街の外に行くわよ、急いで急いで！」

言いながら、アクアが俺にリュックとツルハシ、ヘルメットを渡してきた。

どうやら街の外に何かがあるらしい。

「おい、どう言う事か説明してくれよ！　宝島って何だよ？　名前の感じとお前等の反応から、随分と割の良いクエストなんだろうけども」

俺はアクアに渡されたリュックとツルハシを受け取ると、アクア

に尋ねながら二人の後を付いて行く。

「宝島は、玄武の俗称です！　街の外に、玄武と呼ばれる、巨大なモンスターが現れたのですよ！　玄武は、十年に一度甲羅を干す為に地上に出て来ると言われています。これは、普段は地中で生息している玄武が、甲羅に繁殖したカビやキノコや様々な害虫を日干しにする為だと言われていますが、定かではありません。言えるのは、玄武は暗くなるまで甲羅を干す事。そして玄武は鉱脈の地下に住み、希少な鉱石類をエサにする為、その甲羅には希少な鉱石が地層の様にくっ付いている事です！」

ウィズが走りながら教えてくれた。

なるほど、それで皆がツルハシ持って走ってるのか。

その玄武とやらが甲羅を干している間に背中の希少な鉱石を掘るわけだ。

「しかし、その巨大な亀とやらは背中を掘られて攻撃してきたりはしないのか？　つーか、すでに凄い人数の冒険者とすれ違ってるぞ？　俺達が付く頃には掘り尽くされてるんじゃないのか？」

俺の言葉に、アクアが。

「宝島は温厚で、余程の事をしない限りは攻撃なんてしてこないわ！　そして……、掘り尽くされる心配なんてないわよ？　まあ、なぜ宝『島』なんて呼ばれているのか、見れば分かるわ！　……それよりアンデッド！　何で人類の敵のあんたまで来てるのよ！」

「い、いいじゃないですかリッチーが宝島に登ったって！　それに、私も一応元人類なんですから、人類の敵扱いは止めてください！　今月も赤字で厳しいんですよ、み、店の借金が……っ！」

店の経営上手くいっていないのか。

リッチーが借金返済の為にツルハシ持って肉体労働しに行くとか、この世界は世知辛いなぁ……。

「……ありえねえ」

小山が居た。

うん、これは山だろ。

街の入り口を出てすぐの所に、小さな山か何かと間違えそうな、巨大な生き物がそこに居た。

その大きさは、俺が子供の頃に見た東京ドームと遜色ない。

近くの地面には、その巨大な亀がそこから出てきたのだろう、巨大な穴がぽっかりと口を開けており、その巨大な亀は大地に悠然とその身を横たえていた。

きっと、こういう存在を神獣とか呼ぶのだろう。

宝島は、巨大なヒレを地面に投げ出し、首を地に伸ばして寝そべっている。

すでに多くの冒険者達がその背に登り、岩石の塊みたいなその背中にツルハシを打ちつけていた。

背中を掘られているというのに、宝島は怒るでもなく、やけに気持ち良さそうにしている。

巨大な岩山みたいなその背中には、すでにあちこちにロープが張られ、ロッククライミングのごとく冒険者達が次々によじ登っている。

なるほど、アクアの言っていた事が理解できた。

これを半日で掘り尽くすってのは、まず無理だ。

「いくわよカズマ！　タイムリミットは日が沈むまで！　リュックがパンパンになるまで掘りまくるのよ！」

アクアがすでに張られているロープを使い、宝島の背によじ登っていく。

どれぐらい儲かるのかは知らないが、ここは行っとくべきだろう。

「おし、せっかくだし行くとするか。ダクネスとめぐみんはどこだよ？　……おっ、テイラー達がいるじゃないか。あいつらも先に来てたのか」

ロープを使って宝島へとよじ登りながら、俺は数少ない見知った顔の存在に安心する。

俺達三人は難なく宝島の背によじ登ると、俺はヘルメットをかぶり、手近な所にツルハシを振るい始めた。

アクアとウィズの二人は髪が崩れるのが嫌なのか、ヘルメットは付けていない。

ツルハシが鉱石の塊を打ち砕き、キラキラと輝く石が散乱する。

この石一つに一体どれほどの価値があるのか。

「……なあ、これ一つがどの位の価値があるのか知らないけどさ。こんな簡単に儲かっちゃっていいものなのか？　ていうか、よく見れば同業者ばかりだな。こんなお祭り騒ぎなら、街の人達も掘りにくればいいのに」

辺りを見渡しても、ツルハシを振るのは同業者しか居なかった。

鉱石堀りなんて、俺がこの世界に来た当初にお世話になった、土木工事の親方達の方が上手そうなもんだが。

そんな疑問にアクアが答えた。

「そりゃもちろん、危ないからよ」

……は？

誰かの声が轟いた。
「だあああああーっ！　やっちまった！　鉱石モドキを掘り当てちまったっ！」

突然の悲鳴にそちらを見れば、一人の冒険者がツルハシを手に、タコの様なグニャグニャした生き物と対峙していた。
「うおっ！？　な、なんだありゃ！？　おいヤバイぞ、助けに行かないと！」
そのタコの様な生き物は、身体の表面を周囲の鉱石に溶け込む様に擬態化させている。
なるほど、だから鉱石モドキ。
だが、一心不乱にツルハシを振るうアクアとウィズはそちらを見向きもしなかった。
「ほっときなさい！　ここに居るのはみんな仮にも冒険者！　彼らは何時だって死ぬ覚悟はできているわ！　そんな彼らを勝手に助けるなんて、彼らの覚悟を踏みにじる行為だわ！」
「全くです！　たとえ力及ばず果てるとしても、冒険の最中に亡くなるのは冒険者として誉れです！　それに……、それに借金が……っ！！」
お、お前らそれでいいのか人として……っ！
いや、そういやこいつらは人じゃなかった！
鉱石モドキとやらに襲われていた男が叫ぶ。
「た、助けてくれえええっ！！」

「……助けてくれって言ってるぞ。助けなくていいのかよ自称女神様」
「あはははははっ！！　高純度のマナタイトよっ！　こっちはフレアタイトっ！　ここの所の失敗なんてこれで全部帳消しよっ！」
自称なんとか様は、すでに聞いちゃいなかった。

だがそのなんとか様に人類の敵呼ばわりされた人間辞めたリッチーは、ここで見捨てるほどには人の心を捨ててはいなかったらしい。

「く……っ！　お店なら、私が一月も食事を我慢すれば今月はまだ何とかなる……っ！　大丈夫、食べなくても私は死なない、私は死なない……っ！！」

涙ぐましい事を口走るウィズがツルハシを置いて、男を襲う鉱石モドキに向き直る。

「ちょ、お前は掘ってろ！　あいつの所には俺が助けに行くからっ！」

俺の呼びかけに、ウィズは儚げに微笑むと、

「大丈夫ですカズマさん。リッチーの爪は魔力の塊。これを冒険者ギルドに持って行けば結構なお金に……」

「や、止めろよ、マジで止めろよ！　要はとっとと助けて採掘作業に戻れればいいんだろ？　おい、行くぞアクア！　三人で掛かれば速攻で終わるだろ！」

俺の呼びかけに、流石のなんとか様も放ってはおけなくなったらしい。

「くうっ、この一分一秒を争う時に、しょうがないわねっ！　鉱石モドキの分際で、私の邪魔するなんておこがましいわ！　神罰をくれてやる！　くそったりゃあああ！」

叫んで、そのまま握っていたツルハシで鉱石モドキに殴りかかるなんとか様。

物欲にかられた女神が、生物にツルハシで殴りかかる。

どちらかというとコイツの方に神罰が下りそうな絵顔だ。

「いい機会です！　この際ですから、ここで私のスキルをカズマさんにお教えします！」

ウィズはそう言うと、魔法を使うのではなく、鉱石モドキの元へと駆けて行く。
鉱石モドキにツルハシで襲い掛かるアクアの隣で、ウィズが右手を突き出した。
ウィズの手が触れた瞬間、鉱石モドキの身体がビクリと震え、そのまま動かなくなる。
そこにアクアのツルハシが、鉱石モドキの頭部に振るわれた。

「ふう。さあ、掘るわよー！」

あっさりと鉱石モドキを仕留めたアクアは、助けた冒険者に何度もお礼を言われながら、いい汗かいたとばかりに鉱石掘りの作業に戻る。
め、女神がそんな武器であっさり殺生しちゃっていいのだろうか。
俺が悩んでいると、ウィズが俺の元へとやってくる。

「えっと……。あっさりアクア様が仕留めてしまいましたが、分かりました？　今、鉱石モドキに状態異常を引き起こしました。触れた相手に様々な状態異常を付与する、リッチーの固有スキルです。毒、麻痺、昏睡。魔法封じに弱体化。多分、武器を使っても効果はあると思いますよ？」

「カズマ、アクア、ここに居たのか。どうだ、掘れているか？」
「ククク……、マナタイトがこれだけあれば、我が爆裂魔法に更な

る磨きがかけられる……。おっと、二人もいい感じにリュックが膨れてますね」

リュックをぱんぱんに膨らませたダクネスとめぐみんが、街の入り口に居た俺達の元へとやって来た。

俺とアクアとウィズのリュックも、これ以上ないぐらいに鉱石が詰められている。

日が暮れてきた夕暮れ時。

宝島の背中は、すでに巨大な岩盤の塊ではなく、所々に本来の甲羅がむき出しになった状態になっていた。

宝島の元来の甲羅は黒く美しい光沢を放ち、ツルハシで叩いてみても傷一つ付く事は無かった。

流石に他の冒険者達も満足行くまで掘ったのだろう。

今は甲羅干しをする宝島を、全員で遠まきに見守っていた。

見守られている宝島は、チラリと街の入り口、俺達冒険者の方を見る。

まるで、もう満足したのかと言いたげに。

その視線に、俺は一つだけ心残りな事があった。

宝島の背中には、一際大きな鉱石の塊がいまだこびりついている。

アレさえ剥がせれば、きっと宝島の甲羅は実に綺麗に黒く光り輝くだろう。

「……なあめぐみん、ちょっといいか？」

俺は、掃除を途中で終えてしまった、どうにも中途半端なもどかしい気分が落ち着かず、隣のめぐみんに耳打ちする。

「……ええっ！？　ほほほ、本気ですかっ！？　そりゃ、今日はまだ爆裂魔法を使ってませんし、一日一爆裂を日課にしている私とし

てもこのまま宿に帰れはしませんが……」
な、なんだよ一日一爆裂って……

「いいんですか？　宝島は温厚ですが、流石に襲ってくるかもしれませんよ？　それに、一応暗黙の了解で宝島への攻撃は止めておこうって事になっているんですが……」
渋るめぐみんに、俺は大丈夫だと促した。
「いや、俺の勘だけど、多分宝島は怒らないよ。それどころか喜ぶかもしれん。大丈夫だ、めぐみん、頼む」
俺に促され、めぐみんは渋々と魔法の準備を始めた。

「知りませんよ、どうなっても。それに爆裂魔法のプロフェッショナルな私ですが、手元が狂う事だってありますからね？」
冒険者達が、突然の恵みをもたらしてくれた宝島に感謝を込めて、地中に帰るまで見守る中、めぐみんの詠唱が響き渡った。

「え、ちょっと、何してんの！？」
アクアを筆頭に冒険者達がざわつく中、めぐみんの爆裂魔法が完成する。

「参ります！　『エクスプロージョン』ッ！！」

エクスプロージョンの大爆発が、宝島の背中に最後まで張り付いていた岩盤を粉砕する。
それ以外にも所々にこびりついていた鉱石類が、衝撃でひび割れたり、砕けて落ちた。
めぐみんの狙いが良かったのか宝島が硬いのか、宝島の甲羅には傷一つ付いていない。
どよめく冒険者達を尻目に、宝島は魔法を放ったためぐみんとその隣の俺をチラと見た。

「ひいっ！？」
めぐみんが怯えるが、俺は大丈夫だと自分に言い聞かせ、その場で宝島を見守った。
……でも、ちょ、ちょっと怖いです！
今日一日ずっと動かなかった宝島はむくりと立ち上がると、まるで昼寝を終えた後のように気持ち良さそうに伸びをした。
そしてそのまま、ぽっかりと開いた穴に戻っていく。

宝島は、十年に一度地上に出て甲羅を干す。
きっと、それは間違ってはいないのだろう。
だが、それなら街の近くに現れなくてもいいのではないだろうか。
聞いた話では、宝島は必ず街の近くで甲羅を干す。
そう、まるで背中の鉱石類を人間に掘らせる様に。

宝島の最大の目的は、背中にこびり付いた老廃物、あの鉱石類を掃除してもらう事ではないのだろうか。
背中の鉱石類をあらかた取り払われた宝島は、まだ日が沈みきっていないにも関わらず、穴の中へと向かっていく。
と、宝島はもう一度俺とめぐみんの方をチラと見て、その巨大な身体をブルリと大きく震わせた。
その振動で、まだ僅かに残っていた鉱石類が宙に舞う。
宝島はさっぱりした様に、満足気に再び穴へと潜っていった。

どうやら、この神にも等しい巨大なモンスターは、最後にお土産をくれたらしい。

俺とめぐみんは顔を見合わせ、微かに笑い合う。

「お土産よ！　私の日頃の行いに、宝島がお土産くれたわっ！！」
「借金がっ！　これで借金が綺麗に返せる！」

恐らくこの街で、唯一宝島にも匹敵するであろう二人が、他の冒険者が見守る中、真っ先に駆け出した。

「はぐっ！？」
「あぶっ！？」

降り注いだ鉱石に頭を直撃され、その場に倒れるノーヘルの二人。

倒れ伏す二人のがっかりな存在も、悠然と地中へと帰っていく神獣の美しさを曇らせる事はけっして無かった。

15話

宝島クエストから数日後。
今この街は、異常な好景気に包まれていた。

「カズマ、これを見てくれ。……これを、どう思う？」
酷い混雑のギルド内で、ダクネスが嬉々として自分の鎧を見せ付けてきた。
先日の宝島クエストで手に入れた希少な鉱石をあしらったのか、いつものダクネスの鎧が所々淡い光を帯びている。

それは一言で言うと……、

「なんか、成金趣味の貴族のボンボンが着けてる鎧みたい」
「……。カズマはどんな時でも容赦ないな。私だって素直に褒めて貰いたい時もあるのだが」
ダクネスが、珍しくちょっとへこんだ顔でしょぼんと言ってくる。
知らんよそんなもん。
そんな事より。
「今はお前より酷いのがいるから、構ってやれる余裕はないぞ。お前を越えそうな勢いのそこの変態を何とかしろよ」

「ハア……ハア……。た、たまらない、たまらない！　魔力溢れるマナタイト製の杖のこの色艶……。ハア……ハア……ッ！」

めぐみんが、新調した杖を抱きかかえて頬ずりしていた。
何でもマナタイトと言う希少金属は、杖に混ぜると魔法の威力が向上する性質を持っているらしい。
宝島で手に入れた鉱石で杖を強化し、めぐみんは朝からずっとこ

の調子だ。
何でも、爆裂魔法の威力がこれで何割か増すらしい。
唯でさえオーバーキル気味な爆裂魔法をこれ以上強化してどうするのか、威力よりも数を撃てる様に、魔力の最大容量を増やす方向で強化は出来ないのかと、言いたい事は色々あるがあまり関わりあいたくないので放っておく。

宝島クエストは、街中のほぼ全ての冒険者が参加した為、鉱石の買い取りも一日ではとても終わらず、未だ換金が終わっていない冒険者も多い。
そして、この街に宝島が現れた事を聞きつけた周囲の街から、希少な鉱石の買い付け、もしくは臨時収入で羽振りの良くなった冒険者目当ての、数多の商売人達がこの街に押し寄せていた。

俺はすでに換金は終わってホクホクだ。
特にこだわりの鎧や武器がある訳でも無いので、鉱石は全て金に換えてしまった。
今回は鉱石を装備に使いたいメンバーもいた事から、報酬を均等に分けるのではなく、それぞれ自分で取ってきた鉱石を換金するって事になった。
俺達の中で一番リュックをぱんぱんに膨らませていた、アクアが言い出した事だ。
そして今は、その言いだしっぺの換金を待っていた。

「なんですってえええええ!?　ちょっとあんたどう言う事よっ！」

ギルドに響き渡るアクアの声。
ああ……。嫌だなあ……。

鉱石の買い取りカウンターでは、案の定アクアが何やら揉めてい

た。
　ギルドの受付のお姉さんの胸ぐらを掴み、いちゃもんつけている。
「何で十万エリスぽっちなのよ！　高純度のマナタイトとフレアタイトがあったでしょ！？　あれだけでも十万は下らないはずよ！　それ以外にも、鉱石がたくさんあったでしょ！？」
「そそ、それが、お金になりそうな鉱石はその二つだけでしてっ！　他の鉱石類はその、申し上げにくいんですが、ほとんどクズ石で……！　寧ろ職員が感心してましたよ、何で宝島の背中を掘ってこれだけしか希少鉱石が取れないんだって……」
「なんですってー！」
「ごごご、ごめんなさいっ！」
　会話のやり取りを聞くに、どうも買い取り額が納得いくものではなかったらしい。
　これ以上はらちが明かないと踏んだのか、アクアが後ろ手に手を組み、にこやかな笑顔で俺に近づいてきた。
「カーズマさん！　今回のクエストの、換金総額おいくら万円？」
「三百万ちょい」
「「さっ！？」」
　アクアとダクネス、めぐみんが絶句する。
　降って湧いた突発クエストで、いきなり小金持ちになりました。

「カズマ様ー！　前から思ってたんだけれど、あんたってその、そこはかとなく良い感じよね！」
「特に褒める所が思い浮かばないなら無理すんな。言っとくが、この金はもう使い道決めてるからな、分けんぞ」
　先手を打った俺の言葉にアクアの笑顔が凍りついた。
「カズマあああああ！　私、鉱石の換金が相当な額になるって踏んで、換金を待ってるこの数日で持ってたお金、全部飲んじゃったんだけど！　ていうか、大金入ってくるって見込んで、二十万近いツケまであるんだけど！！　今回の換金じゃ、足りないんだけど

！」

半泣きですがり付いてくるアクアを引き剥がし、何でこいつは後先考えないんだろうと、痛むこめかみを指で押さえた。

「知るか、そもそも今回の報酬はそれぞれが手に入れた鉱石を、各自で換金しようって言い出したのはお前だろ。と言うか、今回の報酬でいい加減拠点を手に入れたいんだよ。そろそろこの辺り、寒くなってくるんだろ？　それに、いつまでも馬小屋暮らしじゃ落ち着かないだろ」

通常、冒険者は家を持たない。

冒険者は安定を求めず、常にあちこちを飛び回る事が多いからだ。

まあ成功する冒険者など一握りで、殆どの冒険者はその日暮らしが多く、金が無いというのも理由の一つだが。

ぶっちゃけ、俺は冒険者で大成できるなんて思ってないし、その気もあんまりない。

一応ここに連れて来られたのは魔王だのなんだのに対しての人材確保らしいが、そんな物騒な連中と戦う仕事は先にここに送り出された、チートじみた能力だのを貰った連中がやればいい。

なんせ、俺は誰にでもなれる基本職、冒険者だ。

しかも、子供の頃から冒険者を目指し鍛えていた様な連中に比べればステータスだって劣る、本当にどこにでもいる兄ちゃんだ。

適度に安全に冒険とかできて、後はのんびりと暮らしていければそれでいい。

なので、ここらで一つ賃貸、もしくは安ければ、小さな小屋みたいな物件でも手に入らないかなと思った次第だ。

アクアがいよいよ泣きそうな顔ですがりつく。

「そんなあああああ！　カズマ、お願いよ、お金貸して！　ツケ払う分だけでもいいからぁ！　そりゃあカズマも男だし、馬小屋でたまに夜中ゴソゴソしてるの知ってるから、早くプライベートな空間が欲しいのは分かるけど！　十万！　十万でいいの！　お願いよお

おおおお！」
「よし分かった、十万ぐらいお安いもんだ！　分かったから黙ろうか！！」

ギルドに併設されている酒場にツケを払い、アクアがほぼ空っぽになったサイフを握り締めて言ってきた。
「クエストよ！　多少きつくても、お金になるクエスト受けましょう！」
「「「えー……」」」
アクアの言葉に俺達三人はあまり乗り気じゃない。
そりゃそうだ、アクア以外の俺達は懐の方は潤っている。
ダクネスとめぐみんの鉱石が幾らになったのかは知らないが、アクアほど少ない事はないだろう。
つまり今の俺達三人は、無理して危険なクエスト受ける必要性が無い訳だ。
そんな俺達を見て、いよいよアクアが泣き出した。
「お、お願いよおおおおお！　宝島騒ぎで色んな所からたくさん人が来てお祭り騒ぎになってるのに、こんな楽しそうな時にお金が無いなんて！　頑張るから！　今回は、私全力で頑張るからあぁっ！！」
俺達は顔を見合わせる。
宝島が来た事で確かに街はお祭り騒ぎだ。
まあ、こんな楽しそうな時に金が無いのは辛いだろう。
「しょうがねえなあ……。じゃあ、ちょっと良さそうだと思うクエスト見て来いよ。良いのがあったら付いてってやるから」
俺の言葉にアクアは嬉々としてクエスト掲示板へと駆け出す。

「……受けるクエスト、一応カズマも見てきてくれませんか？　アクアに任せておくと、とんでもないの持ってきそうで……」
「……だな。まあ私は強化されたこの鎧を試せるし、別に無茶なクエストでも文句は言わないが……」
めぐみんとダクネスの意見を聞いて、俺もヒシヒシと嫌な予感がしてきた。
俺はクエストが張り出されている掲示板へ行くと、何やら難しい顔で受けるクエストを
吟味しているアクアの後ろに立つ。
アクアは背後に立つ俺に気付かず、真剣な顔で受けるクエストを選んでいる。
そして、やがて一枚の紙を掲示板から剥がし手に取った。
「……よし」
「よしじゃねえ！　お前、何受けようとしてんだよっ！！」
俺はアクアの持っていたクエスト依頼書を取り上げる。

『マンティコアとグリフォンの討伐依頼。マンティコアとグリフォンが縄張り争いをしている場所がある。ほっておくと大変危険なので、二匹まとめて討伐してください。報酬は５０万エリス』

「アホか！」
俺は叫ぶと、張り紙を元の場所に貼りなおした。
見に来て正解だった。危うくとんでもないクエストに巻き込まれるとこだった。
「何よもう、二匹まとまってる所にめぐみんが爆裂魔法食らわせれば一撃じゃないの。ったくしょうがないわねー……」
こいつは、その危険な魔獣を都合よく二匹まとめる作戦についてはどうせ俺に丸投げする気なのだろう。
いっそこのクエストを受けて、一人で送り出してしまおうかと悩む俺に、アクアが興奮しながら服の袖を引っ張ってきた。

「ちょっと、これこれ！　これ、見なさいよっ！！」
言われて、そのクエストを見る。

『タルラン湖の浄化。街の水源の一つのタルラン湖の水質が悪くなり、ブルータルアリゲーター等の凶暴なモンスターが住みつき始めたので水の浄化を依頼したい。湖の浄化ができればモンスターは生息地を他に移す為、モンスター討伐等はしなくてもいい。※要浄化魔法習得済みのプリースト。報酬は３０万エリス』

「お前、水の浄化なんて出来るのか？」
俺の疑問にアクアがフッと鼻で笑う。
「バカね、私を誰だと思ってるの？　と言うか、私の名前や外観やイメージで、私が何を司る女神かぐらい分かるでしょう？」
「宴会の神様だろ？」
「違うわよクソニート！　水よ！　この美しい青い瞳とこの髪が見えないのっ！？」

なるほど。
水の浄化だけで３０万か、確かに美味しいな。
討伐をしなくていいって所がポイント高い。
「じゃあそれ受けろよ。てか、浄化だけならお前一人で受けてもいいんじゃないか？　そうすりゃ報酬は独り占めできるだろ」
俺の言葉にアクアが、
「え、ええー……。だって、多分湖を浄化してるとモンスターが邪魔しに寄ってくるわよ？　私が浄化を終えるまで、それから守って欲しいんだけど」
そういう事か。
しかし、ブルータルアリゲーターって、名前から察するにワニ的なモンスターだろ？
凄く危険そうなんだが……。

「ちなみに浄化ってどれぐらいで終わるんだ？　五分くらい？」

短時間で終わるなら、一度くらいならめぐみんの爆裂魔法で何とかなるだろう。

アクアが小首を傾げて言ってくる。

「……半日ぐらい？」

「長えよっ！」

こんな危険そうなモンスター相手に半日も防衛なんかしてられるか。

俺は張り紙を元に戻そうとする。

「ああっ！　お願い、お願いよおおっ！　他には碌なクエストが無いの！　協力してよカズマー！」

張り紙を戻そうとする腕にしがみついて泣きつくアクアに、俺はふと気付いた。

「……なあ、浄化ってどうやってやるんだ？」

「……へ？　水の浄化は、私が水に手を触れて浄化魔法でもかけ続けてやればいいんだけど……」

なるほど、水に触れなきゃいけないのか。

ちょっと思いついた事があったんだが、それじゃ……。

いや待てよ？

「おいアクア。多分安全に浄化ができる手があるんだが、お前、やってみるか？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

タルラン湖。

俺達が拠点にしている街から少し離れた所にある、結構な大きさの湖だ。
湖からは小さな川が流れており、それが街へと繋がっている。
湖のすぐ傍には山があり、そこから絶えずタルラン湖へと水が流れ込んでいた。

なるほど、湖の水は何だか濁り、淀んでいた。
モンスターも清潔な水を好むもんだと思っていたが、違うのか。
俺が湖を眺めていると、背後からおずおずと声が掛けられた。

「……ねえ……。本当にやるの？」

それは凄く不安気なアクアの声。
俺の考えた隙の無い作戦の、一体どこが不安なのか。
アクアは言った。

「……なんか私、今から売られていく、捕まった希少モンスターの気分なんだけど……」

希少なモンスターを閉じ込めておく、鋼鉄製のオリの中央に体育座りをしながら。

完璧な作戦だった。
オリに入れたアクアを湖に運び、そのまま湖に投入するのだ。
最初は安全なオリの中から浄化魔法を掛けさせようと思ったのだが、浄化魔法は水に触れていないと使えないそうなのでこの作戦に。
仮にも水の女神なアクアは、水に半日浸かっているどころか、湖の底に一日沈められても、水の中で呼吸ができるのはおろか、不快感を感じる事も無いらしい。

浄化魔法を使わなくてもアクア自身が湖に浸かっていれば、それだけでも浄化効果があるそうな。
それだけ神聖な存在だと言う事なのだろう、さすがは一応、腐っても神だ。

アクアが入ったオリは、俺とダクネスの二人がかりで中のアクアごと湖に運ばれる。
この鋼鉄製のオリは、ギルドに普通に常備されていた物を借りてきた。
クエストの中にはモンスターの捕獲依頼もあるので、そう言った時用の物らしい。
別に、湖にアクアを投棄しに来た訳ではないので、遠くに持っていく必要は無い。
湖の際に、アクアがちょっと浸かる程度にオリを置いておけばいい訳だ。
これなら湖の浄化中にブルータルアリゲーターとやらが襲ってきても大丈夫だろう。
なんせ捕獲したモンスターの運搬用のオリだ、中のアクアに攻撃が届くとは思えない。

ギルド職員の話では浄化が終わればモンスターは湖から離れて行くとは言っていたが、万一アクアの傍から離れなかった時に備え、オリには頑丈な鎖が付けられていた。
流石に鋼鉄製のオリは重かったので、湖に着くまでは街で借りた馬に引かせながら運んできたのだが、緊急の際にはこの馬に付けられた鎖でオリを引っ張って行く予定だ。
アクアを入れたオリは湖の際に沈められ、体育座りのアクアは足の先と尻の辺りだけが湖に浸かっていた。

後はこのまま、俺達三人は離れた所で待つだけだ。
アクアが、膝を抱えながらぽつりと言った。

「……ねえ、なんか私、ダシを取られてる紅茶のティーバッグの気分なんだけど……」

16話

浄化装置改めアクアを湖の際に設置して、二時間が経った。
だが、未だにモンスターが襲ってくる気配は無い。
俺とダクネスとめぐみんの三人は、アクアから二十メートルほど離れた陸地でアクアの様子を見守っていた。
水に浸かりっぱなしのアクアに離れた所から声を掛ける。
「おーいアクア！　浄化の方はどんなもんだ？　ていうか、湖に浸かりっぱなしだと冷えるだろ。トイレ行きたくなったら言えよ？　オリから出してやるからー！」
遠くから叫ぶ俺に、アクアが叫び返した。
「浄化の方は順調よ！　後、トイレはいいわよ！　めが……、アークプリーストはトイレなんて行かないし！！」
昔のアイドルみたいな事を叫んでいるアクア。
水に浸けっぱなしで大丈夫かと心配したが、まだまだ余裕はありそうだ。
「何だか大丈夫そうですね。ちなみに、紅魔族もトイレなんて行きませんから」
めぐみんが聞いてもいないのにそんな事を言ってくる。
お前もアクアも普段モリモリ食ったり飲んだりしてるが、それは一体どこに消えてるんだとツッコミたい。
「私もクルセイダーだから、トイレは……トイレは……。……ううう……」
「ダクネス、この二人に対抗すんな。トイレに行かないって言い張るめぐみんとアクアの二人には、今度、日帰りじゃ終わらないクエスト受けてほんとにトイレ行かないか確認してやる」
「や、止めてください。紅魔族はトイレなんて行きませんよ？　で

も謝るので止めてください。……しかし、ブルータルアリゲーター、来ませんね。このまま何事もなく終わってくれればいいんですが」

めぐみんが、そんな前フリとしか思えない様な事を言った。

そして、まるでそれをきっかけにするかの様に、湖の一部に小波が走る。

大きさ的には地球の平均的なワニと比較して、あまり変わらないだろう。

だが、そこはやはりモンスター。地球のワニとは一味違った。

「カ、カズマー！　なんか来た！　ねえ、なんかいっぱい来たわ！」

そう、この世界のワニ達は群れで行動する様だ。

アクアが浄化を始めてから四時間が経過。

最初はただ水に浸かって女神の身体に自然に備わった浄化能力だけを使っていたアクアだったが、早く浄化を終わらせて帰りたいのか、今は水に浸かったまま、一心不乱に浄化魔法も唱えまくっている。

「『ピュリフィケーション』！　『ピュリフィケーション』！　『ピュリフィケーション』ッッッッ！」

そのアクアが入っている鋼鉄製のオリを、大量のワニ達が囲み、そのオリに噛り付いていた。

「『ピュリフィケーション』！　『ピュリフィケーション』ッッ！　ギシギシいってる！　ミシミシいってる！　オリが、オリが変な音立ててるんだけど！」

オリの中で喚くアクアだが、この状況ではオリごと爆裂魔法でぶっ飛ばす訳にもいかず、俺達にはちょっとどうしようもない。
「アクアー！　ギブアップなら、そう言えよー！　そしたら鎖引っ張ってオリごと引きずって逃げてやるからー！」
先ほどからオリに向かって叫ぶのだが、アクアは怯えながらも頑なにクエストのキャンセルは拒んでいた。
「イ、イヤよ！　ここで諦めちゃ今までの時間が無駄になるし、何よりせっかくのお祭り騒ぎなのに楽しめないじゃないのよ！　『ピュリフィケーション』！　『ピュリフィケーション』ッッ！！　……わ、わあああーっ！　メキッっていった！　今オリから、鳴っちゃいけない音が鳴った！！」
わあわあと泣き叫んでいるアクアを囲み、ブルータルアリゲーター達は俺達三人の方には見向きもしない。
それを見て、ダクネスがぽつりと言った。
「……あのオリの中、ちょっとだけ楽しそうだな……」
「……行くなよ？」

……浄化を始めてから七時間。
湖の際には、ボロボロになったオリがぽつんと取り残されていた。
ブルータルアリゲーターに齧られたオリは、所々にワニの歯型が残されている。
浄化が終わったから退散するのか、ブルータルアリゲーター達はオリから離れ、湖の中を山の方へと泳いで行ってしまった。
もう、アクアの浄化魔法の声は聞こえてこない。

というか、一時間ほど前からアリゲーターにたかられながら、アクアの声は聞こえなくなっていた。

「……おいアクア、無事か？　ブルータルアリゲーター達はもう全部どっか行ったぞ」

俺達はオリへ近づき、オリの中のアクアをうかがう。

「……ぐす……ひっく……ひっく……」

膝を抱えて泣くぐらいなら、とっととクエストキャンセルすればいいのに……。

まあこの状況では無理もないか。

「ほら、浄化が終わったんなら帰るぞ。ダクネスとめぐみんで話し合ったんだが、俺達は今回、報酬はいらないから。報酬の３０万、お前が全部持っていけ」

体育座り状態で膝に顔を埋めたアクアの肩がぴくりと動く。

だが、オリから出てくる気配はない。

「……おい、いい加減オリから出ろよ。もうアリゲーターは居ないから」

俺のその言葉に、アクアが小さな声で呟くのが聞こえた。

「……まま連れてって……」

……？　なんて？

「……オリの外の世界は怖いから、このまま街まで連れてって」

……どうやら、今回のクエストはアクアにトラウマを植えつけた様だ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ドナドナドーナードーナー……」

「……お、おいアクア、もう街中なんだからその歌は止めてくれ。ボロボロのオリに入った膝抱えた女を運んでる時点で、唯でさえ街の住人の注目集めてるんだからな？」

無事にクエストを終えて街に帰って来た俺達は、街の人達の生温かい注目を集めながらギルドへと向かっていた。

頑なにオリから出ようとしないアクアが自分の足で歩いてくれないせいで、馬にオリを引かせているにも関わらず俺達の歩みは遅い。

しかし、今回は約一名にトラウマは出来たが、それ以外は被害らしい被害は無い。

ウィズから教わったスキルの一つを習得してみたので、実はちょっとだけ新スキルを試してみたかったが、戦闘しないで済んだのだからそちらの方がいいに決まっている。

まあ俺達にしては珍しく、大した事も無くクエストが無事済んだと言える。

きっと、俺がそんなフラグになる様な余計な事を考えてしまったからだろう。

「め、女神様っ！？　女神様じゃないですかっ！　何してるんですかそんなとこで！」

突然そんな事を叫び、オリに引きこもっているアクアに駆け寄り、その鉄格子を掴む男。

そしてそいつはあろう事か、ブルータルアリゲーターがかじりついても破壊できなかったオリの鉄格子を、いとも容易くグニャリと捻じ曲げ、中のアクアに手を差し伸べた。

唖然としている俺とめぐみんを尻目に、その見知らぬ男は、同じく唖然としているアクアの手を……、

「……ん、私の仲間に馴れ馴れしく触るな。貴様何者だ？　アクアの知り合いにしては、アクアがお前に反応していないのだが」

アクアの手を取ろうとしたその男に、ダクネスがズイと詰め寄った。

それは、大切な仲間を守るクルセイダーとしてどこに出しても恥ずかしくない姿だった。

ああ……いつもこんな感じでいてくれたなら……。

男はそんなダクネスを一瞥すると、ふうと一つ、ため息を吐きながら首を振る。

いかにも、自分は厄介ごとに巻き込まれたくは無いのだが仕方ないといった感じで。

その男のその態度に、普段はあまり表情をあらわにしないダクネスが、明らかにイラッとした。

何だかきな臭い雰囲気になってきたので、俺はこの期に及んでも膝を抱えてオリから出ようとしないアクアに、そっと耳打ち。

「……おい、あれお前の知り合いなんだろ？　女神様とか言ってたし。お前があの男を何とかしろよ」

そんな俺の囁き掛けに、アクアは一瞬だけなに言ってんの？　という表情を浮かべ……、

「……ああっ！　女神！　そう、そうよ、女神よ私は。それで？　女神の私にこの状況をどうにかして欲しい訳ね？　しょうがないわ

ね！」

アクアがようやくオリから出てきた。

と言うかこいつは今、自分が女神だと言う事を忘れていたんじゃないだろうな。

モゾモゾとオリから出てきたアクアは、その男に対して首を傾げた。

「……で、あんた誰？」

……知り合いじゃないのかよ。

いや、やはり知り合いの様だ。

男が、信じられないと言う表情で目を見開いているから。

多分アクアが忘れているのだろう。

「何言ってるんですか女神様！　俺です、御剣響夜（みつるぎきょうや）ですよ！　あなたにこの、魔剣グラムを頂いた！！」

「……？」

アクアが尚も首を傾げているが、俺はピンと来た。

名前からして、このミツルギと言う奴も俺と同じ様に日本から連れて来られた口なのだろう。

名前がアニメや漫画の主要キャラみたいなヤツだが、多分、俺より先にアクアにチートアイテムを貰ってここに送られたのだ。

何だか正義感が強そうなその男は、良く見れば結構なイケメンだ。

その身にはきらびやかな高そうな鎧を着け、後ろには槍を持った戦士風の美少女と盗賊風の美少女を引き連れている。

一言で言ってしまえば……。

実に、主人公っぽい奴だった。

「居たわね、そういえばそんな人も！　ごめんね、すっかり忘れてたわ。だって結構な数の人間送ったし、忘れてたってしょうがないわよね！」

俺やミツルギの説明で、ようやくミツルギの事を思い出したアクア。

若干表情を引きつらせながらも、ミツルギはアクアに笑いかけた。

「えっと、お久しぶりですアクア様。あなたに選ばれた勇者として、順調に頑張ってますよ。クラスはソードマスター。レベルは37にまで上がりました。……ところで、アクア様はなぜここに？　というかなぜそこの人に、そんなオリの中になんて閉じ込められていたんですか？」

ミツルギは何だか俺をチラチラと警戒しながら言ってきた。

アクアはミツルギに、お前は選ばれた者にして勇者だとか、そんな適当な事言ってここに送り込んだのか。

今の今まで存在を忘れてたいい加減な所が、いかにミツルギにその場しのぎで適当な事を言っていたのかが良く分かる。

というか、ミツルギは俺がアクアをオリに閉じ込めてた様に映ったのか？

いや、普通はそう取るな。

まさか、本人がオリの中から出たがらないんですと言っても、きっとこの人は信じてくれないだろう。

俺だってそんな変わり者な女神がいる事が、この目で見てても信じられない。

俺とアクアは、俺と一緒にアクアまでもがこの世界に来る事になった経緯や、今までの出来事などを説明した。

「……バカな。ありえないそんな事！　あなたは一体何考えているんですか！？　女神様をこの世界に引き込んで！？　しかも、今回のクエストではオリに閉じ込めて湖に浸けた！？」

俺はいきり立ったミツルギに、胸ぐらを掴まれていた。

それをアクアが慌てて止める。

「ちょちょ、ちょっと！？　いや別に、私としては結構楽しい毎日送ってるしここに一緒に連れてこられた事は気にしてないんだけどもね？　ていうか今日のクエストだって、怖かったけど結果的には誰も怪我せず無事完了した訳だし。しかも、クエスト報酬３０万よ３０万！　それを全部くれるって言うのよ！」

そんなアクアの言葉に、ミツルギは憐憫の眼差しでアクアを見る。

「……アクア様、こんな男にどう丸め込まれたのかは知りませんが、今のあなたの扱いは不当ですよ。そんな目にあって、たった３０万……？　あなたは仮にも女神ですよ？　それがこんな……。ちなみに、今はどこに寝泊りしているんです？」

こんな公衆の往来で女神女神言うなよと言いたかったが、何だかミツルギが今にもキレそうな感じなので黙っておく。

と言うか、初対面で随分なヤツだなこの男。

多分、ロクにアクアの事も知らない癖に。

ミツルギの言葉にアクアが若干押されながらもおずおず答えた。

「え、えっと、カズマやみんなと一緒に、馬小屋で寝泊りしてるけど……」

「は！？」

ミツルギが俺の胸ぐらを掴む手に力が入った。

ちょ、痛いんですけど！

その俺を掴むミツルギの腕を、ダクネスが横から掴んだ。
「おい、いい加減その手を放せ。お前はさっきから何なんだ。カズマとは初対面の様だが、礼儀知らずにも程があるだろう」

普段は唯の大変な変態のダクネスが、今は静かに怒っていた。
見れば、めぐみんまでもが新調した杖を構え、今にも爆裂魔法の詠唱を……って、それは止めろ！

ミツルギは手を放すと、興味深そうにダクネスとめぐみんを観察する。
「……クルセイダーにアークウィザード？　……それに、随分綺麗な人達だな。君はパーティメンバーには恵まれてるんだね。それなら、尚更だよ。君はアクア様やこんな人達を馬小屋なんかに寝泊りさせて、恥ずかしいとは思わないのか？　さっきの話じゃ、クラスも初期クラスの冒険者らしいじゃないか」
俺に絡んできた、テイラーの仲間のダストとか言った男を思い出す。
何の関わり合いも無い他人から見れば、俺は余程恵まれた境遇に見えるのだろうか。
俺はアクアに耳打ちする様に囁いた。
「なあなあ、この世界の冒険者って馬小屋で寝泊りなんて基本だろ？　この兄ちゃんなんでこんなに怒ってるん？」
「あれよ、彼には異世界への移住特典で魔剣を与えたから、そのおかげで楽勝で高難易度のクエストとかバンバンこなして、今までお金にも困らず、苦労知らずで来たんだと思うわ。まあ、能力か神器を与えられた人間なんて大体みんなそんな感じよ」

アクアの耳打ちを聞いて、俺は何だか無性に腹が立ってきた。
アクアからタダで貰った魔剣で今までこの世界でイージーモードで生きてきたヤツに、なぜ一から頑張ってきた俺が上から説教喰ら

わなきゃいけないのか。

そんな俺の怒りも知らず、ミツルギが同情でもするかの様に、アクアやダクネス、めぐみんに対して慈悲の込もった顔で笑いかける。

「君達、今まで苦労したみたいだね。これからは、僕と一緒に来るといい。勿論馬小屋なんかで寝かせないし、高級な装備品も買い揃えてあげよう。というか、パーティ編成的にもバランス取れてていいじゃないか。ソードマスターの僕に、ランサーとクルセイダー。そして、盗賊にアークウィザードにアクア様。まるであつらえたみたいにピッタリなパーティ編成じゃないか！」

おっと、俺が入っていませんが。

いや、勿論この男のパーティに入りたいとも思わないが。

そんないきなりの身勝手なミツルギの提案に、俺の連れの三人はヒソヒソと話し出した。

性格的にはなんかアレな感じのミツルギだが、待遇的には悪くは無い提案だ。

アクア達も心が動いたのかと、背後の会話に聞き耳を立てると……。

「ちょっと、ヤバいんですけど。あの人本気で引くぐらいヤバいんですけど。ていうか勝手に話進めててナルシストも入ってる系で、怖いんですけど」

「どうしよう、あの男は何だか生理的に受け付けない。攻めるより守るのが大好き派な私だが、アイツだけは何だか無性に殴りたい」

「唱えていいですか？　あの苦労知らずの、スカしたエリート顔に爆裂魔法、唱えてもいいですか？」

おっと、大不評の様ですよミツルギさん。

アクアが俺の服の裾を引っ張った。

「ねえカズマ。もうギルドに行こう？　私が魔剣なんて力を与えといて何だけど、あの人には関わらない方がいい気がするわ」

正直腹の立つヤツではあるが、ここはアクアの言う通りに立ち去るべきか。

「えーと。俺の連れ達は満場一致であんたのパーティには行きたくないみたいです。俺達はクエストの完了報告があるから、これで……」

俺はそう言うと、馬を引いてオリを引きずり、立ち去ろうとした。

……。

「すんません、どいてくれます？」

俺の前に立ち塞がるミツルギに、俺はイライラしながら言った。

どうしよう、コイツ人の話を聞かない系だ。

「悪いが、僕に魔剣という選ばれた力を与えてくれたアクア様を、こんな境遇の中放ってはおけない。アクア様は僕と一緒に来た方が絶対に良い。……君は、この世界に持ってこれる物として、アクア様を指定したんだよね？」

「……そーだよ」

あれだ。

この後の展開が目に見える。

こいつ、絶対……、

「なら、僕と勝負をしないか？　アクア様は持ってこれる『物』と

して指定したんだろう？　僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ。君が勝ったら、何でも一つ、言う事を聞こうじゃないか」

「よし承った！！　じゃあ行くぞ！」

何という予想通り。

イライラが既に限界に来ていた俺は、一も二も無く襲い掛かった。

俺は左手をワキワキさせて、右手で小剣を引き抜き斬りかかる。

先手必勝、卑怯もクソもあるか！

魔剣持ちの高レベルのソードマスター様が、駆け出しの貧弱装備の冒険者に勝負を挑む方が卑怯ってもんだ！

本気で斬るつもりはない、ちょっとかすらせるだけだ！

ミツルギも、まさか話を持ちかけ、いきなり斬りかかられるとは思ってもいなかったのだろう。

「えっ！？　ちょっ！　待っ……！？」

慌てたミツルギだが、そこは流石に俺よりも遥かに高レベル。

咄嗟に腰の魔剣を引き抜くと、ソレを横にして俺の小剣を受け止めようとした。

俺の右手の小剣が魔剣に当たる寸前、俺は左手を突き出し叫ぶ。

「『スティール』ッッッッ！」

左手にずしりと掛かる剣の重み。

おっと、いきなり当たりを引いたみたいだ。

俺の小剣を受け止めようとしていたミツルギの手からは、その受け止めようとして掲げていた魔剣が消えうせる。

「「「はっ？」」」

その間の抜けた声は誰の物か。

いや、俺以外のみんなの声だったのかも知れない。

窃盗スキルを組み込んだ攻撃に、ミツルギは成すすべも無く、小剣により掠り傷を負わされた。

17話

「卑怯者！　卑怯者卑怯者卑怯者ーっ！」
「あんた最低！　最低よ、この卑怯者！　正々堂々と勝負しなさいよ！」
ミツルギの仲間の、二人の少女による俺への罵倒。
それを俺は甘んじて聞いていた。

「き……きき……君って……やつは……。こ、これで勝って満足なのか……！？」

俺の新しいスキルで、身動きが取れなくなったミツルギに小剣を突きつけながら。

『不死王の手』
それがウィズに教えて貰った新しいスキル。
ポイントを３０ほど消費して、貯めてたスキルポイントが全部無くなったが、その価値はあった。
というか、有用すぎるスキルだ。
効果は、素手でも武器越しでも、触れた相手に、毒、麻痺、昏睡、魔法封じに弱体化の状態異常を引き起こすもの。
状態異常の効果はスキルレベルに依存する。
そして、状態異常を引き起こす確率は幸運依存。
まさに、幸運だけ高い俺にうってつけのスキルだ。

ミツルギは、今はどうやら麻痺の状態異常に陥っている様だった。
まだ俺のスキルレベルが１なだけあって、完全に身動きが取れない訳ではないのだろう。
だが明らかにその動きが緩慢になっていた。

「俺の勝ちって事で。何でも一つ言う事聞くって言ってたな？　それじゃこのまま魔剣を貰っていきますね」
　俺の一言に、ミツルギが驚愕する。
「なっ！？　ば、バカを言うなっ！　それに、その魔剣は君には使いこなせない。その魔剣は僕を持ち主と認めたんだ、僕以外には魔剣の加護は効果がないよ」
　自信たっぷりに言ってくるミツルギに、俺はアクアの方を振り向いた。
「……マジで？　この戦利品、俺には使えないの？　せっかくチートアイテム取り上げたと思ったんだけど」
「マジよ。残念だけど、魔剣グラムはあの痛い子専用よ。装備すると尋常じゃない膂力が手に入り、石だろうが鉄だろうがばっさり斬れる魔剣だけれど。カズマが使ったって、ちょっと良く斬れる剣ってだけよ」
　なんだ、良く斬れる剣ってか。
　なら、貰っておこう。
「じゃあな、それじゃまたどこかで会う事もあるかもしれんが、これはお前が持ちかけた勝負なんだから恨みっこ無しだぞ。……それじゃアクア、ギルドに報告に行こうぜ」
　言って踵を返す俺に、ミツルギの仲間の少女が武器を構えた。
「ちょちょちょ、ちょっとあんた待ちなさいよっ！」
「キョウヤの魔剣、返して貰うわよ。こんな勝ち方、私は認められないわ」
　その二人の少女に、俺は手をワキワキさせて見せた。
「別にいいけど、男女平等主義者の俺は女の子相手でもドロップキックを食らわせられる公平な男だぞ。手加減してもらえると思うなよ？　と言うか、女相手なら、この公衆の面前で俺のスティールの餌食にしてくれる」
　俺のワキワキと動く手を見た二人の少女は、違う意味での身の危険を感じ取ったのか不安気な表情で後ずさった。

「「「……」」」
そんな俺を、無言でじっと見ている後ろの仲間達の視線が痛いです。
「ま……、待て……。まだだ、俺はまだ終わっちゃいない……っ！」
麻痺を喰らったはずのミツルギが、痺れる身体をなんとか動かし、怯んでいる二人の少女の前に庇う様に立ち塞がった。
……あれ、理不尽な喧嘩売られたのは俺なのに、なぜか俺が悪者みたいな雰囲気に。
ミツルギは脂汗をかきながら、懸命に手足を動かした。
負けられない、負けるわけにはいかないとかブツブツ言いながら。
俺はそんなミツルギを……。
「……とおっ」
小剣で突いた。
ほっぺたに軽く傷を負わせるように、小剣の先でツンツンする。
更なる状態異常を引き起こす為だ。
「ぐあああ！？　な、何だこれは、力が抜ける！？」
痺れてロクに動けない所を俺の小剣で何度も突つき回されて、ミツルギが悲鳴を上げた。
力が抜けると言う事は、『不死王の手』の最悪の状態異常、弱体化が発動したのだろう。
弱体化。
効果は、レベルの減少。
某有名ＲＰＧでお馴染みの、レベルドレインというヤツである。
……この際だ、今後逆恨みされて絡まれても厄介だ。
こいつ、レベル１にまで下げてやろう。

「ちょっと!?　あ、あんたキョウヤに何してんの!?」
「おい、止めろ!　止め……!　おい、ほんとに止めろ!　止めろって!　お願い止めて!」
ミツルギを突つき回す俺を二人の少女が止める頃には、ミツルギは昏睡状態に陥り地面に寝転がっていた。
ミツルギが首からぶら下げている冒険者カードを確認すると、そこにはソードマスターレベル1の表示。
これでよし。
「……私はこの男は生理的に受け付けないが、さ、流石に気の毒だ……」
「……多分、レベル37まで上げるのって、魔剣持ちだとは言っても相当な時間が掛かったはずよ」
「カズマ、その新スキル本気で怖いんで、スキル発動中は近くに寄らないでくださいね」
俺の後ろの仲間達が、流石に憐れんだ様に深く眠るミツルギを見ていた。

多分毒に侵されてるから、早めに治療した方がいいよとの俺の言葉に、二人の少女が慌ててミツルギを抱え連れて行ったその後。
俺達は借りてたオリを引きずりその場を後にし、ようやくギルドへと帰って来た。
報酬は全部アクアにやると決まったので、クエストの完了報告はアクアに任せ、俺とダクネスとめぐみんは夕食を食べていたのだが……。
「な、何でよおおおおっ!」

喧しいアクアの声が響き渡る。
あいつは、とにかく騒ぎを起こさないと気が済まないのだろうか。
俺は定食を頬張りながら受付カウンターの方を見る。
そこでは、涙目になったアクアが職員に掴みかかっていた。
「だから、借りたオリは私が壊したんじゃないって言ってるでしょ!?　ミツルギキョウヤって奴がオリを捻じ曲げたんだってば!　それを、何で私が弁償しなきゃいけないのよ!」
なるほど、そういやミツルギがオリを曲げてアクアを助けようとしてたんだっけ。
アクアが、その壊れたオリの請求を受けているらしい。
しばらく粘っていたアクアだったが、やがて諦めたのか、報酬を貰って俺達のテーブルへとぼとぼとやってきた。

「今回の報酬、壊したオリのお金を引いて、１０万エリスだって……。あのオリ、特別な金属と製法で作られてるから２０万もするんだってさ……」
しょんぼりしているアクアに流石にちょっと同情する。
今回に関しては、アクアはとんだとばっちりだ。
「何だったんでしょうねあの人は。なんか勝手にアクアを助けたがってましたが、余計なお世話と言うべきか……。しかし、それにしてもカズマはエグい攻撃ばかり考えますね。スティールで武器を奪う発想は今までにもまああありましたが、斬りかかられながらスティールされたら、相手はたまったものではないですよ。どんな熟練の戦士でも、今手元にある武器なり盾なりで対処するもんです。いきなり持ってる物を取り上げられるぐらいなら、あのミツルギとか言う人も最初から素手で戦っていた方が、身をかわすなり何なり、まだ対処はできたでしょうね」
めぐみんが呆れた様に呟く中、テーブルに着いたアクアはメニューをギリギリと握り締め、
「あの男、今度会ったら絶対ゴッドブロー食らわせてやるわっ！

そしてオリの弁償代払わせてやるっ！！」
アクアが悔しげに喚く中。
「ここに居たのかっ！　探したぞ、佐藤和真っ！」
ギルドの入り口に、その話題のミツルギが立っていた。
教えてもいない俺のフルネームをいきなり叫んだミツルギは、俺達の居るテーブルにツカツカと歩み寄り、バンとテーブルに手を叩きつけた。
「佐藤和真！　君の事は、他の冒険者に聞いたらすぐに教えてくれたよ。君は結構有名なんだね。ある盗賊の女の子はパンツ脱がせ魔だって言ってたし、あるマジックショップの店主のお姉さんは、ヤクザみたいな人の飼い主だって言っていた。ある魔法使いの女の子は、何でも出来るカズマさんだとか。ある戦士風の男は、君はとてつもない苦労人だとか……。……君は、一体何なんだ？」
何なんだと言われても。
「僕のレベルを1にしてくれたそうだな。レベルドレインなんてスキル、どのクラスにおいてもそんなスキルを教えられる職業なんて、僕は知らない。君は一体何者だ？」
真剣な表情で俺に詰め寄るミツルギに、アクアがゆらりと立ち上がり、ミツルギの前に出た。
「……アクア様。僕はいずれまたレベルを上げ、そしてその男から魔剣を取り戻し、必ずあなたを迎えに行きます。あなたを守るに相応しい男になって。その時は、僕と同じパーティぐぶえっ！？」
「「ああっ！？　キョウヤ！」」
アクアに無言でぶん殴られて、ミツルギが吹っ飛んだ。

慌ててミツルギに仲間の二人の少女が駆け寄るが、なぜ殴られたのか分からないといった表情のミツルギに、アクアがツカツカと詰め寄り、そのミツルギの胸ぐらを掴み上げた。

「ちょっとあんたオリを壊したお金払いなさいよ！　おかげで私が弁償する事になったんだからね！　３０万よ３０万、あのオリ特別な金属と製法で出来てるから高いんだってさ！　ほら、とっとと払いなさいよっ！」

さっき、あのオリ２０万って言ってなかったか。

ミツルギは殴られた所を押さえ、尻餅をついた体勢で、アクアに気圧されながら素直にサイフから金を出した。

気を取り直したミツルギが、上機嫌でメニューを片手に店員を呼ぶアクアを気にしながら、俺に悔しそうに言ってくる。

「……あんなやり方でも、僕の負けは負けだ。そして何でも言う事を聞くと言った手前、こんな事を頼むのは虫がいいと言うのも理解している。……だが、頼む！　魔剣を、返してはくれないか？　あれは君が持っていても役には立たない物だ。君が使っても、そこらの剣よりは斬れる程度の威力しかない。どうだろう？　剣が欲しいのなら、店で一番良い剣を買ってあげてもいい。返してはくれないか？」

本人も言ってるが、また随分と虫のいい話だ。

いくらいらない子とはいえ、アクアは、一応この世界への移住特典として俺にくっ付いてきたオマケな訳だ。

それはつまり、俺もミツルギの持つ魔剣相当の特典を賭けたって事になる。

魔剣に相当してるのかと言われれば黙るしかない訳だが。

俺はウキウキしながら注文した料理を待っているアクアに、ワザとらしく話しかけた。

「アクアさーん、アクアさーん！　魔剣1本のお値段って、おいくら万円？　店で一番良い剣と、どっちが高い？」
「そりゃあ魔剣に決まってるじゃない。魔剣1本の値段なんて、下手しなくても屋敷が建つわよ。この街で一番良い剣なんて、魔剣を売って屋敷を買ったお釣りで余裕で買えるわよ」
　そりゃすげー！

「と言う事は、これを売り払ってしまえばミツルギにわざわざ買って貰わなくても自分で買えちゃう訳か。しかも、最近欲しかった拠点まで付いて」

　俺の言葉にミツルギの顔が青ざめた。
　そりゃそうだろう、一度売ってしまえばもうミツルギの手元に戻ってくる保障なんてない。
「ままま、待ってくれ！　うん、そうだな、そうだ。確かにちょっと値段が安過ぎた。よし、剣だけじゃなく、最高の装備一式揃えさせてくれ！　それも、君だけじゃなく君のパーティメンバー全員の分だ！」
　迂闊な事を口走ってばかりのミツルギ。

「おいお前ら聞いたか！　金に糸目は付けなくていいぞ、考えうる限り最強の装備をオーダーできるぞ！　なんせ、今は宝島フィーバーで希少鉱石がこの街には溢れてる！　俺、最高純度の希少鉱石で作ったフルアーマーが欲しい」
「私もそれが欲しい。しかもミスリル銀をふんだんにコーティングした、小さな城でも買えてしまいそうなヤツだ」
「私は総マナタイト製の杖と、マナタイトをふんだんにあしらったローブが欲しいです。あと特に意味はないけど、ミスリル銀でできた腕輪が欲しい。絵的にカッコイイから」
「めんどくさいから、私はこの街で最高値の希少鉱石をありったけ

使った、大型の鎧か何かでいいわ。貰ったら、もれなく売り飛ばすから」

俺達四人の好き勝手な無茶な注文に、ミツルギが涙目になる。

バカめ、考え無しに適当な事を口走るからだ。
「そ、そんな無茶な……！　わ、分かった。有り金だ！　僕の有り金を置いて行く。それで、魔剣グラムを返してくれ！　どうだ、これで文句無いだろ！」
半ばヤケクソ気味に言ってくるミツルギに、俺はミツルギではなく三人に聞き返した。

「おいお前ら、今何か聞こえたか？」
「私には、有り金と所持アイテム、それと装備している鎧一式差し出すので返してくださいと聞こえたわ」
「私もそう聞こえましたね。あと、今日一日語尾に、ごめんなさいっ！　を付けて生活するからと聞こえました」
「……ん、あと、鎧一式を脱いだ状態で土下座して謝るのでどうか許してくださいと聞こえたな」

ミツルギは、泣きながら着ている鎧を脱ぎだした。
「お前ら、僕をこんな目にまであわせたんだから、今後どうなるか覚えてろよごめんなさいっ！」

◆◆◆

「ところで。アクアが女神だとか何とか言っていたが、何の話だ？」

ミツルギがパンツ一枚で土下座して、泣いて帰って行ったギルド内にて。

あの騒ぎでギルド内の冒険者達の好奇の視線を遠巻きに浴びる中、ダクネスが言ってきた。

……まあ、あれだけ女神だ何だと言ってればなぁ……。

この際だ。めぐみんとダクネスには言ってしまってもいいか？

俺がアクアに視線をやると、アクアはこくりと頷いた。

そして、アクアは珍しく真剣な表情で、ダクネスとめぐみんに向き直る。

ダクネスとめぐみんも、その雰囲気を察し、真剣に聞く姿勢に入る。

「今まで黙っていたけれど、あなた達には言っておくわ。……私はアクア。アクシズ教団が崇拝する者にして、水を司る女神。そう、私こそが、女神アクアなのよ」

「「って言う、夢を見たのね」見たのか」

「違うわよ！　何で二人とも変にハモってんのよ！」

……まあ、こうなるわなぁ……。

俺達は、未だキーキー騒いでいるアクアを連れて不動産屋にやって来ていた。

ちなみにミツルギの装備やアイテムは売り払った。
ミツルギの持ち金も含めると結構な一財産になった。
これなら、もしかしたら小さい家の一つも買えるかもしれない。

……そう、簡単に考えてました。

「無理ですね」
不動産屋の店員が、一言で切り捨てた。
身も蓋もない一言に、アクアがすかさず食って掛かる。
「何でよ！　これだけのお金があれば、屋敷とまではいかなくても小さい家の一つは買えるでしょ！　私達が冒険者だからって足元見てると、私達の知り合い全員にある事無い事言い触らして、悪評って名前の天罰食らわせるわよ！」
「や、止めてください！　別に我々も、意地悪してる訳では無いんですよ。単純に、売れる物件が無いんです」
噛み付くアクアに、店員がなだめる様に言ってきた。
「……どういう事だ？」
ダクネスが先を促すと、店員が途方に暮れた顔で説明を始めた。
「……実はですね……」

「悪霊？」
という事らしい。
最近この街の空き家には、なぜか様々な悪霊が住み着きまくっているのだと言う。
冒険者ギルドにも相談したのだが、こんな事は初めてで対処のしようが無いとの事。
なんせ、悪霊の討伐クエストを出して退治しても、またすぐに新

しい悪霊が住み着いてしまうのだと言う。

「悪霊を、払っても払っても、幾らでも新しいのが湧いて住み着いてしまうんですよ。それで、今は物件を売るどころではなく、物件の除霊をするので精一杯でして」

店員が、疲れた表情でため息をついた。

他の客にも同じ様な説明を何度もして、疲れ果てているのかもしれない。

まあ、そういう事なら仕方が無い。

冒険者ギルドが絡んでいるのなら、今は無理でもじきに解決はするだろう。

それまでは、段々寒くはなってきたが、まだしばらくは馬小屋で……。

俺がそう考えた時だった。

「ふふん。あなた、運が良いわね」

アクアが自信たっぷりに店員へと笑いかける。

何だろう、嫌な予感がヒシヒシとする。

アクアは、腕を組んで胸を張り。

「悪霊なんて舐めた連中、アークプリーストのこの私の手に掛かればお茶の子よ！　まあ、この私に任せなさいな！」

18話

「……この屋敷か」

街の郊外に佇む、一軒の屋敷。

店員の話では、部屋数は屋敷にしてはそれほどは無いと言っていたが、なかなかどうして。

日本にある一軒家の数倍の大きさがあるその屋敷は、とある貴族の別荘だったらしい。

だが、その貴族が突然この別荘を手放したそうだ。

そして売りに出されようとした所に、この悪霊騒ぎである。

「悪くないわね！　ええ、悪くないわ！　この私が住むのに相応しいんじゃないかしら！」

アクアが興奮したように叫び、ダクネスとめぐみんも心なしか顔が紅潮している。

俺が全額金出したんだから、勿論俺一人で住みますよなんて、とても言えない雰囲気だ。

まあこんな広い屋敷に一人で住むつもりもないし、そんな小さい事言うつもりはない。

でも、一番いい部屋は俺が貰おう。

浮かれるアクアにダクネスが言った。

「しかし、本当に除霊ができるのか？　聞けば、今この街では払っても払ってもすぐにまた霊が来ると言っていたが。除霊ができなくては、カズマがせっかく高い金を出したのに、この物件が無駄になってしまうぞ」

そう、俺はほぼ全財産をはたいてこの屋敷を買った。

日当たりは良く、大型の浴室と庭と悪霊まで付いた優良物件である。

「でも悪霊憑きとは言え、よくこんなお屋敷があの値段で買えましたね。小さな家ぐらいの値段でしたよ。もしかして、今回の街中の悪霊騒動が起きる前から問題がある、訳有り物件だったりして……」

めぐみんが不安になる様な事を言った。

そ、そんな事はないはずだ。

……無い、だろう。多分。

「まあ何にしても、たとえそんな問題物件だったとしても俺達にはアクアがいる。だろ？　大丈夫だよな、対アンデッドのエキスパート」

自分で言ってて不安になってくるが、ことアークプリーストとしての能力に関してはこいつは問題ないはずだ。

……多分。

「任せなさいな！　……ほうほう。見える、見えるわ！　この私の霊視によると、この屋敷には貴族が遊び半分で手を出したメイドとの間に出来た子供、その貴族の隠し子が幽閉されていたようね！　やがて元々身体の弱かったその貴族の男は病死、隠し子の母親のメイドも行方知れず。この屋敷に幽閉されていた少女は、やがて若くして父親と同じ病に伏して、両親の顔も知らずに一人で寂しく死んでいったのよ！　名前はアンナ・フィランテ・エステロイド。好きな物はぬいぐるみや人形、そして冒険者達の冒険話！　でも安心して、この霊は悪い子じゃないわ。私達に危害は加えないはずよ！　おっと、でも子供ながらにちょっぴり大人ぶった事が好きな様ね。甘いお酒を飲んだりしてたみたいよ。という訳で、お供えはお酒を用意しておいてねカズマ！」

ペラペラと、テレビに出てくるインチキ霊能力者みたいな事を口走り始めたアクアだが、俺はそんなアクアを胡散臭いエセ霊媒師を見る視線で眺め、ダクネスとめぐみんに尋ねた。

「……なあ、どう思う？　何でそんな余計な設定や名前まで分かるんだってツッコミたいんだが。……あいつ、本当に大丈夫なのか？　俺、全財産はたいたんだが、もしかして早まった事しちまったのか？」

「「……」」

二人も俺と同じ不安を抱えていたのか、俺の質問には答えてはくれなかった。

夜半過ぎ。

俺達はみんな鎧などは脱ぎ、すでに屋敷でくつろいでいた。

不動産屋の店員に、自分達で除霊するからオススメ物件を売ってくれとねだり、売って貰ったのがこの屋敷だ。

すでに俺達は各自の部屋割りを決め、荷物なども屋敷に持ち込んでいた。

俺としては、この屋敷には今日からアクアが住み着く以上、悪霊の類は出て行ってくれるのではと、淡い期待を抱いていた。

出て行ってくれなくても、あれでいて一応アークプリーストにして女神なアクアだ。

自分の家が悪霊なんぞに好き勝手やられるのを放置しておく様なヤツではない。

俺は自分の部屋として確保した、二階の一番大きな部屋で、わりと安心して休んでいた。

「あああああああっ！？　うわーんっ！！」
その、頼りにしていたアクアの泣き声を聞くまでは。

「どうしたっ！？　おいアクア、何があった！　大丈夫かっ！？」
俺は慌ててアクアの部屋の前に駆けつけると、そのまま部屋のドアをノックする。
返事が無いので、これはヤバい事態なのかと判断し、勢いよくドアを開けた。

そこには……、
「うっ……ううっ……。カ、カズマあああああっ！」
部屋の中央で、大事そうに空の酒瓶を抱え、泣いているアクアの姿。
……おい。
「えっと、何があった？　てか、お前は酒瓶なんて抱いて何してんだ。酔っ払って奇声を上げたとか言ったら頭からクリエイトウォーターぶっかけて酔いを醒ましてやるからな」
「ち、違うの！　この空になった酒瓶は、私が飲んだ訳じゃないわ！　これは、大事に取っておいた凄く高いお酒なのよ。お風呂から上がったらゆっくりちびちび大事に飲もうと楽しみにしてたのにっ！　それが、私が部屋に帰ってきたら、見ての通り空だったのよおおおおおおっ！」

……寝よう。

「そうか、じゃあお休み。また明日な」
「ああっ！？　待ってカズマ！　これは悪霊よ！　悪霊の仕業なのよ！　この屋敷に集まってきた野良幽霊か、この屋敷に憑いている貴族の隠し子の地縛霊か！　そのどちらかに違いないわ！　ちょっと私、屋敷の中を探索して目に付く霊をしばき回してくるわ！」

野良幽霊なんてもんがこの世界には居るのかと気になったが、除霊してくれると言うのなら別に止める必要も無い。
「……なんだ、一体何の騒ぎだ？」
「もう結構遅い時間なんですから、勘弁してください。何事なんですか？」
先ほどのアクアの叫びを聞きつけて来たのだろう、ダクネスとめぐみんの二人がやって来る。
「こいつが、取っといた酒を悪霊に飲まれたとか騒いでてな。除霊するとか言ってるんだよ。そもそも何で悪霊が酒なんて飲めるんだよとか色々ツッコミたいんだが、めんどくさいから俺はもう寝る。後はお前らに任せたよ」
俺が部屋に戻ろうとするとアクアが後ろから罵倒してくるが、そんな事はどうでもいい。
とっておきの酒を飲んでしまう程度の悪さしかしない悪霊なら、放置しといても問題ないだろ。

一体どれほど眠ったのだろう。
俺は、ふと夜中に目が覚めた。
屋敷の中は静まり返り、今はおそらく深夜はとっくに回っているだろう。
……トイレ行きたい。
俺は寝ていたベッドから起き上がろうと……。

して、その体が動かない事に気がついた。
……えっと、何だこれ。
金縛り？

声を出そうとしてみてもくぐもった声が出るだけで、アクアに助けを求める事も出来ない。

俺は大変な事に気がついた。

尿意が大ピンチである。

あかん、シッカリしろ、俺はもう大人だ！

大人になって漏らしてもいいのは、特殊なお店とお爺ちゃんだけだ！

俺は身動きが取れない状況で、歯を食いしばって耐えていると、部屋の隅から音が聞こえた。

カタンッ。

その音は、静まり返る屋敷の中でとても大きな音に聞こえた。

その音に、身動きが取れない俺は視線だけを部屋の隅へと向けて見る。

部屋の隅の暗がりには。

一体なぜそこにそんな物があったのか、小さな西洋人形が置かれていた。

「……ッ！」

俺は無意識の内にツバを呑む。

嫌な汗が止まらない。

何だろう、なんであんな所に人形があるんだろう。

俺はあんな物置いといた記憶は無いし、俺が寝てる間にアクアが嫌がらせでもしようとこっそり置いといたのだろうか。

うん、そうだな。きっとそうだ。

あの駄女神め、朝になったらこっ酷い目に合わせてやる。

俺は勝手にアクアのせいだと結論付けると、そのままきつく目を瞑って現実逃避に走る。

カタンッ。

嫌でも部屋に響くその音に、俺は目を瞑ったままどっと汗を掻いた。

うん、あれだな。

何でもかんでもアクアの所為にするのは可哀想だ。

そう、何だかんだ言って日頃あいつも頑張ってるんだ、たまには優しくしてやろう。

カタンッ。

なんせ女神様だからな、うん。

そう、この屋敷にはその女神が付いてる。

悪霊？　何ソレ、そんなもんアクアさんに掛かっちゃ吹けば飛ぶ様なちょろいもんだろ、なんせウチのアクアはリッチーですら消滅しそうになったんだぜ？

カタンッ。

カタンッ。

カタンッ。

ああ、朝になったらアクアに今までの事を謝ろう、そうだ、ミツルギが言っていた事じゃないが俺は確かに女神様に対してちょっと扱いが雑過ぎたな、うんあれだ、反省してる、反省してます。

カタカタカタカタッ、ガタガタガタガタッ！

あああああああああマジで今までの事全部謝るから！
謝るから、どうかアクア様助けてくださいっ！

……俺の懺悔と祈りが届いたのか、あの部屋の隅から聞こえていた音が止んでいた。
……良かった、やっぱり悪霊なんて居なかったんだ。
俺は少しだけ安心する。

……目を開けたい。

目を開けて、さっきの人形が今どうなってるのか確認したい。
だが、俺の勘みたいな部分が全力でそれは止めとけと囁いている。

どうしよう、マジで気になる、だが開けるの怖い、でもこのままも怖い！

俺はしばらくの間悩みに悩み、このままではトイレにも行けない事を思い出す。
俺は意を決して、うっすらとその目を開け……。

そして、俺のすぐ目の前で俺の顔を覗き込んでいる西洋人形と目が合った。

「なあああああああああああああああああああああ！！」
俺は魂を搾り出す様に絶叫を上げると、途端に動く様になった身体で目の前の人形を払いのけた！

「アクアー！　アクア様あああああー！」

俺はアクアの部屋へと廊下を裸足で走っていた。

背中に、何者かが追って来る音を聞きながら。

怖い怖い、超怖い！

ナニコレ、何でこんな事になってんの！？

俺はアクアの部屋の前に着くと、ノックもせずにそのまま部屋に飛び込んだ。

そして慌ててそのままドアを閉め、部屋のドアに鍵をかける。

ガダンッ！

一拍置いて、ドアに何かがぶつかる音。

それをドア越しに背中に聞きながら、俺は部屋の中に視線をやった。

そこにはアクアの姿は無く。

長い黒髪の黒服の女が、部屋の中央に座り込んでいた。

「うわあああああああああ！」

「きゃあああああああああ！」

思わず悲鳴を上げる俺に、目の前の黒髪の女も悲鳴を上げる。

その聞き覚えのある声によく見ると、それはいつものローブ姿のめぐみんだった。

俺とめぐみんはひとしきり叫んだ後、少しだけ落ち着きを取り戻

す。

ドアの外では、ドアに何かがガツガツとぶち当たる音。

何がドアにぶち当たっているのかは怖いから考えたくはない。

「お、脅かすなよめぐみん、危うく漏らすとこだったぞおい」

「それはこっちのセリフです！　何でカズマがこの部屋に飛び込んでくるんですか、アクアが帰って来たのかと思ったのに……」

そのめぐみんの言葉にハタと気付く。

「そういや、何でアクアの部屋にめぐみんが？　いや、アクアはどこ行った？」

俺の言葉に、めぐみんは。

「う……。いや、その……。人形が、ですね。その、あちこちで動いておりまして」

ああ、めぐみんも俺と同じ目に合ったのか。

「それでですね。……その……アクアに、身の安全を守ってもらうのと、……一緒にトイレに……と思いまして……」

「……お前もか……」

俺のその呟きに、めぐみんも俺が同じ目に合った事を察したらしい。

「カズマも人形に追いかけられたんですか。多分アクアは、ダクネスと共にこの屋敷内の除霊を行なっているのではと思います」

「……アクアはともかく、ダクネスは……、ああ、そういやあいつ、アレでクルセイダーなんだったな」

あまりそうは見えないが、本来クルセイダー、聖騎士とは神に仕える騎士にして敬虔な神の信徒。

プリースト程ではないが、確か神聖な力も使えるはずだ。

あの守り馬鹿のダクネスが魔法系のスキルを取っているとは思えないが、スキルが無くとも神への祈りの真似事ぐらいはできるのだろう。

しかし、そうなると俺とめぐみんは今、困った状況に置かれてい

る事になる。
　咄嗟の事で武器の類は部屋に置いて逃げてしまった。
　見ればめぐみんも杖など持たず、手ぶらのままだ。
　杖を持っていてもこんな所で爆裂魔法を唱えられてはたまらないが。
　この状況をどうしようかと悩んでいると、めぐみんが何かに気付いた様に言ってきた。

「カズマ、ドアの外の音が止んでます。今ならドアの外に人形はいないのでは？」
　そう言えば、すでに音は止んでいた。
　だが、正直言って出るのが怖い。
　仮にもリッチーを退けられるアクアが、あんな人形ごときにやられるとは思えない。
　となれば、このまま部屋でじっとしてればアクアとダクネスがじきに除霊を完了させるだろう。
　だが一つだけ問題がある。

「……なあめぐみん、ちょっとドアの方向いて耳塞いでて。失礼して、アクアの部屋のベランダから……」
　俺が一つだけある問題を手っ取り早く解決させようと、ズボンのベルトに手をかけ、ベランダに出ようと……。
　する俺のズボンのベルトを、行かせまいとするかの様に後ろからめぐみんが掴んだ。
「……おい、何してんだよ。放してくれ、さもないと俺のズボンとアクアの部屋の絨毯が大変な事になる」
「行かせませんよ、何一人ですっきりしようとしてるんですか。私達は仲間じゃないですか、トイレだろうとどこだろうと、逝く時は一緒です……」
　めぐみんが、言ってにこりと微笑を……。

「ええい放せ！　こんな時だけ仲間の絆を主張するんじゃない！　紅魔族はトイレ行かないって言ってたじゃねーか！　なんならそこに空いた酒瓶が転がってるから！」

「今とんでもない事口走りましたね！　その空いた酒瓶で私に何をしろと!?　させませんよ！　私でも、カズマが用を足そうとしてる所を、後ろから揺らしてやるぐらいは出来ますか……ら……ね……」

途端に尻すぼみになっていくめぐみんに、俺は不審に思い、めぐみんを見る。

そしてめぐみんが、俺が出ようとしていたベランダの窓の方を凝視している事に気が付いた。

嫌な予感がしつつもそちらを向くと。

そこには、案の定と言うべきか、予想外と言うべきか。

ベランダの窓にびっしりと張り付いた、大量の人形がこちらを見ていた。

「「ぎゃあああああああああ！」」

俺とめぐみんは同時に叫び、二人仲良く部屋から飛び出し、駆け出した。

「ううっ……。カズマ、居ますか？　離れないでくださいよ？」

「居るよ、ちゃんと居るし、もし人形が出ても一人で置いてったりしないから早くしてくれ」

屋敷の中を駆け、俺とめぐみんは近場のトイレに逃げ込んだ。

もう二人とも、自分の身体に言い訳が出来ないほどに限界だった

からだ。
先に用を済ませた俺は、めぐみんが出てくるのをドアの前で待っていた。
俺がどこかへ行くのが怖いのか、先ほどからしきりに話しかけてくる。
「……あの、カズマ。流石にちょっと恥ずかしいので、大きめの声で歌でも歌ってくれません？」
「何が悲しくてこんな深夜にトイレの前で俺が歌わなきゃならないんだよ！　どうせこれから野外やダンジョンで何度もこんな状況あるだろ！」
めぐみんにツッコミつつも、実は待ってる俺も微妙に気恥ずかしいので、仕方なく歌い出した。
歌といっても日本の歌しか知らないので、適当に大声でアカペラで。

「……ふう。えっと、もういいですよカズマ。聞いた事も無い、随分変わった歌ですね？　前から思ってたんですが、カズマってどこの国出身の人なんですか？」
「夜中にトイレの前で歌う風習がある、日本って言う素敵な国の出身だよ。ほら、行くぞ。とっととアクアを探して合流しようぜ」
適当な事を言う俺の後を、無言でぺたぺたとついてくるめぐみん。
とにかく今の状況では、俺とめぐみんは悪霊に対して何の抵抗もできない。
一刻も早くアクア達と合流したい。

……と、その時だった。
俺とめぐみんがトイレの手洗い場から廊下に出ようとしたその時。

カタ……カタ……カタ……カタ……

嫌な音が聞こえ、俺はトイレの手洗い場のドアの前でそっと佇む。
隣ではめぐみんが、俺の服のすそをギュッと掴み、震えながら身を寄せる。
怖い、人形マジ怖い。
あんな人形に殺されるなんて事は流石にないだろうが、夜中に西洋人形に追いかけられるというのは冗談じゃなく恐怖だった。
「たたたた、太古の真名の名において、原初の力を解き放て……！」
「こらっ、お前は何を唱えてる！　この屋敷ごと吹き飛ばす気かっ！」
爆裂魔法の詠唱を始めためぐみんの口を塞ぎ、そのまま暴れない様に身体を押さえる。

あの、カタカタ言う音がドアの前で止んでいた。
震えながら俺の手を掴み、俺の顔を見上げるめぐみん。
クソ、やるしかないか！
「めぐみん、ドアを開けたらお前は走れ！　俺は多分効かないとは思うが、不死王の手で麻痺が効くか触れてみる！　人形の攻撃喰らっても、死ぬ様な事はないだろ！」
俺が叫ぶと、めぐみんは口を塞がれたままでコクコクと頷いた。
行くぞ！

「おらあ！　掛かってこいやこの悪霊がああああ！　後でウチの狂犬女神けしかけてやんぞこらあああ！」
叫びながらドアを勢い良く押し開けると、ごっ！　と何かがドアにぶち当たる。
しめた、追ってきた人形を今ので吹き飛ばしたかもしれない。

俺はめぐみんの手を掴み、ドアの外へと飛び出すと、そのまま一気に駆け抜けようと……！

「お、おいアクア、大丈夫か！？」
駆け抜けようとした俺は、ドアの前に顔を押さえてうずくまるアクアと、傍に力を失い転がる人形、そして、アクアに声を掛けるダクネスの前で固まった。

「ふう、これでよし、と。結構居たわねー。結局朝までかかっちゃったじゃないの」
アクアが、人形に憑いた最後の悪霊を浄化して、明るくなってきた窓の外を見て呟いた。
流石は対アンデッドのエキスパート。
この広い屋敷の悪霊を、一晩で退治してしまった。
「……ん、一応ギルドに行って報告した方がいいだろう。クエストを受けた訳ではないが、不動産屋がギルドに相談していた案件だ。街の悪霊屋敷の一つを浄化した事で、臨時報酬ぐらいは貰えるかも知れない。それに、この街に急に悪霊が増えた原因も知りたいしな」
ダクネスの言葉に全員が頷いた。

全員でじゃんけんして、誰が報告に行くかを決める。
明るくなってしまったので、このままギルドに報告に行く事になったのだ。
当然、みんな徹夜で除霊していた為、誰もが報告になんて行きたくないし、正直俺だってこのまま寝たい。

が、いつもの俺の運の良さはどうしたのか、俺とアクアが負けて

しまった。

しぶしぶギルドに向かう俺とアクアは、道中に屋敷の悪霊の話をしていた。

「ところで、屋敷に憑いた貴族の隠し子って話はどうなったんだよ。俺達には危害は加えない、悪い霊じゃないって話じゃなかったのか？」

アクアがその言葉にポンと手を打ち。

「ああっ！　そういえばそんな子も居たわね！　安心して、今回の件はどこからともなくやって来た野良幽霊の仕業だったわ。でも私の高級酒を飲んだのは、多分貴族の隠し子の方だと思うの！　ねえカズマ、飲まれちゃったお酒、除霊の必要経費って事で……」

俺は何か言っているアクアを無視して、ギルドのドアに手を掛けた。

「おはようございます。ちょっと早いんですが、報告したい事があるんでいいですか？」

朝早くだと言うのに、受付には人が居た。

「はいはい、何でしょうか？」

俺とアクアは屋敷での出来事を説明すると、受付のお姉さんはアクアの冒険者カードを見て、なるほどと頷く。

そういえば、冒険者カードには倒したモンスターの情報や数が記録されるんだったな。

多分、以前クエストを受領した時より、倒した悪霊の数が増えているのか等を確認したのだろう。

「はい、分かりました。確かにこの案件では、悪霊退治の依頼と言う事で不動産屋から依頼を受けております。屋敷の持ち主はカズマ

さんになった様ですが、街に居るモンスターを退治したと言う事で。僅かですが、臨時報酬が出ます。ご苦労様でした」

その言葉に、俺とアクアが無言でガッツポーズを取った。

受付のお姉さんは尚も続ける。

「苦労をかけて申し訳ないです。悪霊が急に増えた原因なんですが、分かりましたよ。街の共同墓場があるじゃないですか？　あの墓場に、何者かがイタズラか何かで、神聖属性の結界を張ったんですよ。それで、墓場で発生した霊が行く所を失って、街の中の、人の居ない空き家等に住み着いたみたいで……」

それを聞いたアクアが、ビクンと震え、動きを止めた。

……？

「ちょっと失礼」

俺は受付に言って、アクアをギルドの隅に無言で引っ張って行く。

「……おい。心当たりがあるな？　言え」

「……はい。ウィズに、墓場の迷える霊を定期的に成仏させて欲しいって頼まれてたじゃないですか。でも、しょっちゅう墓場まで行くのってめんどくさいじゃないですか。それで、いっそ墓場に霊の住み場所をなくしてやれば、その内適当に空気に散って居なくなるかなーって……」

つまり、手抜きしたこのバカの所為でこの街に居場所を失った霊が迷い込んでいた訳だ。

要するに今回の騒動は、俺達が霊を屋敷に放ち、値段を下げさせ、安く買った所を除霊した訳で。

……なんというマッチポンプ。

これはどう考えてもダメだろ。

「……おい、ギルドからの臨時報酬は受け取らない。いいな？」

「……はい」
申し訳無さそうな表情で、素直にコクリと頷くアクア。
「後、俺と一緒に不動産屋に謝りに行くぞ。詐欺みたいなもんだからな」
「……はい。本当にごめんなさい」
俺とアクアはギルドを後にし、不動産屋に……。

と。途中で俺達が買った屋敷の傍で、昨日の不動産屋の店員が、同じく不動産屋の店員と思われる女性を連れている所に出会う。
「これはこれは。どうなったか心配で、今朝早くに屋敷へ様子を見に行ったのですが。無事、除霊は済んだ様ですね」
にこやかな笑顔で言ってくる店員が、俺達の心配をしてくれていたと知り、俺はいたたまれなくなった。
俺とアクアは事情を話し、除霊の済んだ屋敷を返す事を店員に告げる。

……が。

「なるほど。……でも、できれば今後もあの屋敷に住んで頂けると有り難いのですが。なにせあの屋敷は広い分、他の物件よりも大量の悪霊が住み着いて暴れておりましてね。おかげで随分と悪評が……」
「「すんませんしたっ！」」
俺とアクアが地に頭を付けて土下座すると、店員が慌てて言ってきた。
「ああ、いいですいいです！　頭を上げてください！　ええっと、こうしましょうか。あなた達はこのまましばらく、あの屋敷に住んでください。あなた達はあの屋敷を除霊出来たと言う事は、よほど実力のある冒険者なのでしょう。冒険者に貢献するのは、この街の

住民の義務ですよ。そして、あなた達に長く住んで頂ければ、悪霊屋敷の評判もいずれは消えます。その時は、まあ、屋敷を引き払うときには再び我々に売って頂ければ、と言う事で……」

店員さんの太っ腹な条件に、俺とアクアは再び地面に土下座する。

「ああ、止めてください止めてくださいっ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

何度も頭を下げながら屋敷へ帰る、カズマとアクアを見送り。

「……社長、これで良かったんですか？」

そのまま、屋敷を遠く見つめる女の店員が呟いた。
それに、社長と呼ばれた店員が笑う。

「アンナ・フィランテ・エステロイド。あの屋敷の元の持ち主の貴族の令嬢の名だ。……その令嬢の遺言でね。身体が弱くて外に出られなかった自分の代わりに、自分の死後は屋敷を、外の世界を見て回れる、冒険者達に売って欲しい。そして、楽しそうに冒険話をするその様子を見守っていたい。それが彼女から、あの屋敷をタダで譲り受けた条件だ」

これでようやく、彼女との約束が果たせたよ。

不動産屋の社長は、そう言って秘書に笑いかけた。

1話

俺がこの世界に来て、数ヶ月が経った。

その間、様々なスキルを習得したり、屋敷を安値で手に入れたり。

こつこつスキルを使い続け、習得したスキルレベルも順調に上がっている。

初級属性魔法と不死王の手、片手剣修練は、使用頻度が高いからか、スキルレベルはそれぞれ、レベル１１、９、１０に。

潜伏、敵感知、窃盗スキルはスキルレベルが5まで上がった。

鋼鉄製の胸当てと篭手とすね当てを身に付け、切れ味が鈍くなってきた小剣は、鍛えた鋼鉄製の、俺の注文で刀っぽい形にしてもらった、片刃の剣に買い換えた。

腰にはダガーを差して、弓と矢を背中に背負った状態が今のスタイルだ。

アーチャーのキースに教わった、遠視と暗視が可能になるスキル、千里眼。

そして、遠距離武器の飛距離が劇的に伸び、長距離狙撃が可能になるスキル、狙撃。

ここしばらくで俺はレベルが２になり、スキルポイントに余裕が出来た俺は、この二つのスキルも習得していた。

「よし、いい位置だ。それじゃ仕掛けるぞ！」

木の上で、狙撃スキルでの長距離狙撃体勢に入った俺は、仲間に今から仕掛ける合図を出す。

「いいわよ、こっちは何時でも大丈夫よ！」

アクアが俺の登っている木の下で、腕を組み、仁王立ちで見下ろ

すかのように俺の標的を見つめている。
「ん、アクアの支援魔法もかけて貰ったし、これなら何匹でも耐える」
大剣をずんと地面に突き刺し、それの柄に両手をかけて堂々と立つダクネスの姿が頼もしい。
「撃ち漏らした時は任せてください。今日はいつもよりいい感じで魔力を練れてます。近づいてきたらまとめて吹き飛ばしてあげますよ」
めぐみんが、杖を振りかざし余裕を持って佇んでいる。
攻撃的なスキルが無い為、あまり攻撃に参加できないアクアを除き、レベルが20を越え、装備も充実した俺達は、今や駆け出しではなく一人前の冒険者だ。
「よし、それじゃ始めるか！　じゃあ手はず通り行くぞ！　まず俺が、王様ランナーと姫様ランナーを狙撃！　王様ランナーと姫様ランナーさえいなくなればリザードランナーの群れはほっといても解散するそうだから、後のリザードランナーはほっとく。狙撃に失敗してこっちに襲ってきたら、ダクネスが耐えてる間に俺が王様と姫様ランナーを続けて狙撃。それすら失敗したなら、囲まれる前にめぐみんの爆裂魔法でまとめてぶっ飛ばし、撃ち漏らしたヤツを俺が上から撃破。アクアは全体の援護を頼む。……じゃあ、いくぞ！」
スキル千里眼により、遠く離れたリザードランナーの群れを捕捉する。
そこには、他のリザードランナーとは二回りも大きいヤツが1匹。
頭にトサカの様なツノを生やし、他のリザードランナーをはべらせる様に従えていた。
「おいアクア、頭にトサカみたいなツノのあるリザードランナーが

いる。こいつが姫様なのは分かったが、王様はどいつなんだ？」

リザードランナー。

普段であれば特に危険の無い、草食性の二足歩行のトカゲなのだが。

姫様ランナーとか言う大きなメスの固体が発生すると、このリザードランナー達は途端に厄介な生物に変貌する。

この姫様とやらに率いられたリザードランナーは、どんどん集って群れを成し、そして群れの中では、姫様ランナーとのつがいになれる権利を勝ち取る順位決めが始まる。

その順位決めの仕方が独特で……。

走るのだ。

二足歩行で、とてつもない速さで走るのだ。

まるで、昔流行ったエリマキトカゲみたいに。

しかも連中は、同種族で並んで走って実力を測るのではなく、他種族の足の早い生物を見つけては、勝負を挑み、並んで走り、抜き去っていく。

そして、抜き去った数が一番多い者が見事姫様ランナーとつがいになれ、そしてそいつは群れを従える王様ランナーと呼ばれる存在になる。

なぜ姫様なんだ、王様とのつがいなら女王ランナーか王女ランナーじゃないのかとか、リザードランナーって呼ぶのなら、王様ランナーじゃなく普通にキングランナーとか呼べよってのは、突っ込んだら負けなのだろう。

このリザードランナーとやらの訳の分からない生態を説明された時には、俺はいよいよこの訳の分からない世界が嫌になったものだ。

この世界ではモンスターまでもが非常識なのかと悩んだが、馬や騎竜、騎鳥等に乗っている人達にとっては他人事ではない。

普段は大人しいリザードランナー達だが、駆けっこ勝負の為なら ば、相手が馬だろうがドラゴンだろうが物怖じせずに蹴る。

蹴って、そのまま逃げるのだ。

リザードランナーの蹴りは凄まじく、当たり所が悪ければ骨折程度では済まない。

そして、姫様ランナーが現れたとの報告を受け、ギルドからリザードランナーの群れの解散クエストが発注されたのだが……。

「どれが王様かなんて、私には分からないわよ。王様ランナーってんだから、一番偉そうなのが王様なんじゃないの？」

どうやって偉そうなトカゲを見分ければいいんだと言いたいが、アクアに聞いた俺がバカだった。

姫様ランナーは特徴があるから分かるのだが、駆けっこ勝負で勝ったトカゲの見分け方なんて……。

と、姫様ランナーがくっついて離れない、一匹のトカゲを見つけた。

そうだ、姫様とつがいになるとか言ってたな、なら姫様と仲のいいヤツが王様ランナーだ。

俺はそのトカゲに狙いを絞ると、弓をキリキリと引き絞り……！

「そうだわ、任せてカズマ、私に考えがあるわ！　駆けっこ勝負で一番になったのが王様ランナーなら、王様ってのは一番速い訳よ！　神聖魔法の一つに、敵を寄せ付けない魔法の対になるヤツで、モンスター寄せの魔法があるわ！　これで呼んで、一番にここに着いたランナーが王様よ！」

遠くから安全に王様を狙い撃ちする為にどいつが王様かを知りたかったのだが、アクアが、敵をおびき寄せて王様を選別すると言う、本末転倒な事を言い出した。

「おい、お前は何を言っている。女神には火を見ると油を注がなきゃ気が済まない習性でもあるのか？　もう王様の目星は付けた。頼むから余計な……」

「『フォルスファイア』！」

俺が説く間も無く、アクアが魔法を唱えていた。

アクアの手に青白い炎が灯り、その火を見たモンスターではない俺ですら、何だかアクアを殴りたい衝動にかられる。

余計な事しやがってと言う感情の所為も少しはあるが、この衝動の大半は魔法の力だ。

もちろんその炎はリザードランナー達にも遠目に映ったらしく、トカゲ達が甲高い奇声を上げてアクア目がけて駆けだした。

「「「速っ！？」」」

俺とダクネス、めぐみんが、走ってくるトカゲの速さに驚愕する。

めぐみんが慌てて爆裂魔法の詠唱を始めるが、この速さでは魔法が完成するまでに攻めかかられるだろう。

ダクネスがめぐみんの前に立ち、俺は弓を構えてアクアに怒鳴る。

「このクソバカ、毎度毎度何かやらかさないと死ぬ病気なのかお前は！　王様と姫様さえこっそり討ち取れれば無力化できるのに、何でわざわざ呼び寄せるんだ！」

「な、何よいきなり！　私だって役に立とうとしてやってる事なんだから怒んないでよ！　ああ、分かったわよ！　どうせこの後の展

開なんていつもの事でしょ！　きっとあのランナー達に酷い目に合わされて泣かされるんでしょ！　分かってるわよいつもの事よ！　さあ殺すなら殺せー！」

俺に怒られた事に開き直り、ヤケクソになったアクアが叫び、不貞腐れた様に地面に大の字に寝転がる。

「このバカ、せめて支援と回復ぐらいしろ！　そんな所に寝るな、本当に踏まれて死ぬぞ！」

俺は叫びながら、こちらに凄まじい速さで駆けて来る王様ランナーに弓を絞って狙いを定め、狙撃スキルで狙い撃つ。

狙いは違わず、王様ランナーと予想した、群れの真っ先をひた走るリザードランナーの眉間に矢が突き立った。

狙撃スキルの命中率は、スキルレベルと器用度、そして幸運の高さに依存される。

弓なんてロクに扱った事のない俺でも、スキルを使えば持ち前の運の強さでそこそこ当たる。

王様を討たれた事で他のトカゲが怯むかと思えば、トカゲ達は何故か益々いきり立った。

「おいアクア、いつまでもふて寝してんな！　王様っぽいのを倒したのに、かえって凶暴になってるぞ！」

アクアが大の字に寝そべったまま。

「王様を先に倒すと、新しい王様ランナーに成れるチャンスが出来たトカゲ達がはりきり出すわよ。倒すなら姫様ランナーから倒さないと」

「そんな大事な事は先に言えよおおお！」

「ちょっ……！　無理、魔法が間に合わな……！」

「ふはははははっ！　来ーいっっ！」

それぞれが叫ぶ中。

リザードランナーの群れが、めぐみんの前に嬉々として立ち塞がるダクネスに突っ込んできた。

ちょっとレベルが上がった程度で、一人前とか調子に乗ってすいませんでした。

「おっ、ようカズマ！　……って、ボロボロだなおい。リザードランナーの群れを解散させるクエストだったか。失敗したのか？」

ギルドに帰った俺達の姿を見て、最近めっきり仲良くなったキースが声を掛けてくる。

「いや、一応クエストは完了した。ボロボロなのはいつもの事だ」

俺とダクネスは、それぞれボロボロになって気を失っているアクアと、比較的軽症のめぐみんを背負っていた。

ダクネスは流石に硬く、リザードランナーに一番蹴られまくっていたのに平気な顔だ。

めぐみんは一撃だけ蹴りを喰らっていた様だが、それほど深い怪我は無い。

問題は、高いステータスと神器の羽衣のおかげで、ダクネスに次ぐ防御と耐久を持つアクアだった。

普段は多少の攻撃を受けても大した怪我はしないのだが、今回は開き直ってあんな所に寝転んでいた為、トカゲ達に踏まれまくり蹴られまくり、途中から泣いて助けを求めていたが、こればっかりは自業自得としか言い様がない。

結局、ダクネスがめぐみんを守りながら耐えている所を、俺が姫

様ランナーを木の上から狙撃して群れを解散させたのだが、今回はどうにも手こずった。
今日の報酬は１０万エリス。
四人で割れば日当２万５千か。
アクアとめぐみんの負傷を考えれば、割に合わない話だ。
ううむ、やっぱり冒険者稼業は儲からないなぁ……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

報酬を受け取り屋敷に帰った俺達は、目を覚ましたアクアの手で傷を癒した後、屋敷の広間に集まる事に。
ちょっと今後の事でみんなに話したい事がある。
俺より先に広間に来ていたダクネスとめぐみんは、広間に元から備え付けられていたソファーに寝転び、くつろいでいた。
のんびりとアクアを待っていると、アクアが何かを持って広間に慌ただしく駆け込んで来る。
「カズマあああ！　聞いてよ！　またよ、またやられたわっ！　見てよこれっ！」
アクアが涙目で突き出してきたのは、空になった酒の瓶。
「はいはい、また貴族のなんたらさんが現れて、お前の酒を飲んだんだな。分かった分かった」
「ちょっと信じてないでしょ！　何度言ったら分かるの！？　本当にこの屋敷にはその子が住んでるんだってば！」

いつぞやの悪霊騒ぎの時に、アクアが霊視したと言い張っている貴族の少女。

それが、たまに取って置きの酒を飲んでいくとアクアが文句を言ってきて困っている。

きっとこいつは、そんな訳の分からない事を言って俺に酒代をせびりたいだけに違いない。

「じゃあ、お前には見えるって言うのなら、とっととその子を成仏させてやればいいじゃないか」

その言葉に、アクアがもじもじと指をもにょらせ、困った様な顔をする。

「だ、だって、冒険者にこの屋敷に住んでもらって、毎日冒険話を聞くのが夢だったって言われたら、もうちょっとだけこの世に居させてあげたいじゃない……」

珍しくそんな事を言いよどむアクアの様子に、俺は少しだけ、ひょっとしたらアクアは本当の事を言っているのかも知れないという気になる。

「……今、その女の子はどうしてるんだ？　今も俺達の話を楽しそうに聞いてるのか？」

もし、そうなのだとしたら。

独り言になってもいい。

寝る前に、その日あった冒険話でも……。

「私にしか姿が見えないのを良い事に、カズマの後ろでヒゲダンスみたいな踊りを踊って、カズマが邪魔で手が出せない私を挑発してるわ」

「そんな陽気な地縛霊が居てたまるか！」

一瞬信じかけた俺がバカだった。

いや、今はそんなしょうもない話をする為にみんなに集まってもらった訳じゃない。

俺とアクアとの訳の分からないやり取りを、いつもの事だとのんびりとくつろぎながら聞いている、ダクネスとめぐみんに向き直った。

「拠点は手に入った。レベルも上がって装備も揃った。冒険家業もいいんだが、次の目標として、俺は店的な物を出したいと思うんだが」

2話

「そういや、前もそんな事言ってたわね。でもお店を出すって言ったって、何のお店を出すつもり？　商売の経験なんてないでしょ？　ここに来る前は、近所の小学生にゲームの腕を自慢して喜んでる様なロリニートだったんだし」

「おっと、こいつは一本取られたな！　おい、お前の着てる羽衣だか神器だかをよこせ。売っ払って店の開業資金の足しにするから。自分で脱がないなら、スティールでひん剥いてやる」

　アクアの挑発に、俺は慌てて逃げようとするアクアに、スティールを唱える構えを見せる。

「まあまあ。えっと、カズマは何か商売の当てでもあるんですか？　まあ、カズマの幸運が高いのは知ってますし。商売人に必要なのは機転でも知恵でもなく、騙されて仕入れてしまったガラクタを、流行の品に変えてしまえるほどの強運だ、ってのは、一文無しの状態から世界に名だたる大富豪になった大商人の格言ですが……。アクアも言いましたが、お店って、何の店を出すつもりで？」

　めぐみんの言葉に、ダクネスの後ろに隠れて俺のスティールに怯えるアクアは、とりあえず置いておく。

「お前らには言っておくけどさ。俺、この国の人間じゃないんだよ。細かい事は省くけど、えらい遠くの国って言うか。で、だ。俺の国にあった便利な物ってのは、この国って言うか、少なくともこの街には無い。なので、それら便利グッズをお手軽に作って売りさばこうって思ってな」

　俺の言葉に、ダクネスが首を傾げた。

「便利グッズ？　……例えばどんな物だ？」

「うーん。沢山あるが……。例えば、この街にはライターなんて物は無いだろ？　ガスライターは無理だとしても、この街にはオイルとかはちゃんとあるのに、ジッポとか使ってる人は見た事無い。ティンダーなんて着火魔法があるから誰も発明しないのかも知れないが、お手軽に火を起こす道具って見かけないよな」

「おおっ。言われてみれば」

俺の言葉に、アクアがぽんと手を打った。

「「ジッポ？　ライター？」」

何かに納得した様なアクアとは対称的に、ダクネスとめぐみんが首を傾げた。

そして、ダクネスが懐から何かを取り出し。

「こういった、火打石ではいかんのか？　火なんて誰でも起こせるだろうに」

言って、カンカンと火打石を叩いて火花を散らす。

「そんな、藁とかに一生懸命火花を散らして、時間かけてフーフーするやり方じゃなくてさ。言ってみれば、子供だろうが誰だろうが簡単に使えるティンダーの魔法みたいな物だ。ティンダーって、誰でも使える訳じゃないだろ？　しかも、攻撃力が無い初級属性魔法は習得する人が少ないって聞くし。おいアクア、お前ならライターの便利さが分かるだろ」

俺の言葉にアクアがこくこく頷く。

「分かるわよ。火打石って時間掛かるのよね。野外でキャンプする事が多い冒険者は勿論、一般家庭の奥様まで、ライターは幅広く売れると思うわ」

俺とアクアの言葉に、めぐみんが考え込む。

「まあ、本当にティンダーの魔法みたいに一瞬で火が点けられるのなら、それは誰でも欲しがるとは思いますが。でも、そんな便利な魔道具を買う人なんて、一部の上流階級の人しかいませんよ？　一

つ何十万エリスで売る気かは知りませんが……」
「いや、俺の国じゃ一つ百エリスぐらいで売ってるんだよ、そんな便利グッズが」
「えっ！？」
めぐみんが驚くのも無理は無い。
この世界では魔道具の類は非常に高い。
部屋を涼しくするクーラーみたいな魔道具があるのだが、これが一つ数百万からするとか。
当然そんな物は貴族だのと言った、上流階級の連中しか持ってない。

「ジッポぐらいなら、火打石とオイルはすでにある訳だし、あの火花を散らすシュッてする部分を作れればなんとかなると思わないか？」
「あの、シュッてする部分ね。あれぐらいなら、カズマが鍛冶スキルでも取ってくれば何とかなるんじゃないかしら」
シュッとする部分と言っても、ライターやジッポの現物を知っているアクアと俺だけにしか通じない話だが、鍛冶スキルとやらを取ればなんとかいける様だ。

現在の俺のレベルが２２。
千里眼と狙撃スキルの習得にそれぞれ１５ポイントずつ使ったが、今の俺のスキルポイントの残量はまだ７０ポイントもある。
鍛冶スキルがどれだけポイント喰うのか分からないが、スキルポイントは充分足りるだろう。
となると、鍛冶スキルを教えてくれる奴を探さなければいけないのだが……。

その事を三人に相談すると、
「……ん、心当たりがある。私の鎧をオーダーメイドした所の主人

なら、頼めば教えてくれると思う。ちょっと行って頼んでみようか」
「私の杖をマナタイト製に改造して貰ったあそこですね？　私も顔馴染みですから一緒に行きますよ。そして、私からもお願いしてみます」
ダクネスとめぐみんが鍛冶スキル習得の交渉を買って出てくれた。
俺も一緒に行って頼むべきなのかもしれないが、スキルを覚える前に、俺もちょっと寄りたい所がある。
「それじゃ、二人に頼んでもいいか？　俺はちょっとアクアと一緒に行く所があるんだよ」
俺のその言葉に、アクアがきょとんとしながら自分の顔を指差した。
「……私？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ねえねえどこ行くの？　って言うかカズマ、店を出すって前から言ってたけど、冒険者辞めちゃうの？」
俺の後ろを付いてきながらアクアが言う。
「ちがわい。せっかく異世界に来たんだし、冒険者稼業は勿論続ける。そもそもそれがしたくてこの世界に来た訳だしな。でも、できれば安全で怖くないクエストな。つまり、俺にとって冒険稼業は趣味だ。ぶっちゃけ、こんな割に合わない仕事を本業にはしたくない。モンスターの返り血と泥に塗れて命がけの仕事をして、その日の稼ぎが数万円ってどれだけブラックなんだよ。俺は魔王だとか言った物騒なのを何とかしたいとは思わないし、冒険者として大成功した

いとも思わないし、そもそも、出来るとも思えないしな。日本で得た知識と技術で濡れ手に粟で楽して稼いで、たまにちょろっと冒険して、そんな感じのぬるま湯人生を送りたい。ただ、それだけだ」

俺のしみじみと実感の込もった本音に、なぜかアクアが関心した様な顔をした。

「はー……。さすが長年ニートやってた訳じゃないわね、何ていうか凄く後ろ向きでいて、でも悪くない考えよ。特に、濡れ手に泡で楽して儲けるって所には共感が持てるわ。……それはいいんだけど、一体どこに向かってるの？」

褒めているのか分からないアクアの言葉を聞きながら、俺は目の前の目的地であるマジックショップを指差した。

「おらー！　出て来いアンデッド！　あんたに引導渡しに来てやったわよっ！」

叫びながら、アクアがウィズの店のドアを蹴り開けた。

「な、何!?　強盗!?　ヤクザ!?　……ひいっ！　ア、アクア様っ!!」

なんだか強盗やヤクザよりも恐れられている感じのアクア。

突然のアクアの襲撃に怯えるウィズに、遅れて店に入った俺は敵意が無い事を示す様に笑いかけた。

「ようウィズ、久しぶり。今日はちょっと相談したい事があって来

たんだ」
「あんたの墓石にはなんて彫るのかって相談よ！」
訳の分からない事を口走るアクアは無視して俺はウィズに相談を持ちかける。
と言うのも、俺が鍛冶スキルを取ったとしても、いきなり店を出す金も無く、商品を作っても置いて貰える場所が無い。
そこで、ちょっとの間ウィズの店の空いている所で置かせて貰えないかと思った訳だ。

「ウィズにちょっと、頼みたい事があるんだよ」
「頼みってのは他でもないわ、今からサクッと成仏して頂戴って事よ！」

俺は喧しいアクアを押しのけ、ウィズに事の次第を説明する。
ある便利な道具を作るから、良ければ置かせてもらえないかと。
売れた場合は、勿論ウィズの店にも利益は払う。
置いてもらえるかどうかは物を見てからでいい、と。

「どうだろう、こんな事頼めるのはウィズぐらいしか居なくてさ」
「つまりカズマが言っているのはこういう事よ、これからこの店は私達が経営するからとっとと店の権利書をいだいっ！！」

いつまでも喧しいアクアの後頭部をダガーの柄で殴って黙らせ、俺はウィズに頭を下げて頼み込んだ。
店の床を頭を押さえて転がり回るアクアに怯えながらも、ウィズが優しげな微笑を浮かべ。
「そんな事ならちっとも構いませんとも。寧ろ商品が増えるのは願ったりです。宝島の時の利益で借金の大部分は何とかなったんですが、元々あまり繁盛しているお店では無かったもので……。何を売

る気かは知りませんが、期待してますよカズマさん」
にこりと笑いながらあっさりと承諾してくれたウィズに、俺も思わず笑みが零れる。
店の床を転がり回るのがいなければ、もう少し良い雰囲気になったものを。

……と、ウィズが少し表情を曇らせた。
それは、何かを言うべきか言わないべきかと迷っている様な顔だ。

「……？　どうした？　気になる事があるなら言ってくれよ？　無理に頼んでる訳じゃないから、もし何か、思う所があるんなら……」
俺の言葉に、ウィズが慌てて手を振った。

「い、いえ違うんです！　その、カズマさんが作った物を置いてくれってお話は、私としても有り難いんです！　そうではなくて、その……。アクア様の事なんですが……」
言って、ウィズが困った様に口ごもる。
「……？　こいつがどうかしたか？　ああ、これから商品を置いて貰う事になったらアクアがちょこちょこ顔出しに来ると困るとか？　こいつが怖いなら、なるべく此処には来させない様にするが」
こんなんでも一応女神だ。
アンデッドとしてはやはり、気が気ではないのかも知れない。

「……い、いえ、そうではなく……。来て頂いてもいいんですが、いつもここに来る度に、アクア様が店のお客さんに、ここの商品はこの女店主がとても人に言えない様な製法で作った物ばかりだから、買わない方がいいと吹き込んで……」
「おい、どう言う事だ」

詰問する俺の低い声に、アクアが床で頭を抱えながらビクリとす

る。
「い、いえ！　それはもういいんです！　なぜか不思議な事に、それからウチの店の聖水とかが男の冒険者の方々に凄く売れ出したので、その事は別に……」
……それは、売れて良かったですねと言うべき所なのだろうか。
それより、リッチーが聖水とか売ってて大丈夫なんだろうか。
と言うか、そもそもこの街の冒険者達は色々と大丈夫なんだろうか。

「それよりも、その……。アクア様がウチの店の商品をあちこち触るもので、呪術用の薬やネクロマンシーに使う秘薬等が片っ端から浄化されていってしまいまして、かなりの商品がダメに……」
「どういう事だクソ女神いいいいっ！」
このバカはちょっと目を放した隙に、ちょこちょこウィズの店に嫌がらせに来ていたらしい。
俺はアクアを引き起こすと、その頭を掴んでウィズに向かって下げさせようとした。

「ウィズ、悪い！　商品の分は俺が責任持ってこいつから金を巻き上げて弁償させる！　おら、お前もちゃんとごめんなさいしろ！」
「待ってよカズマ！　嫌よ！　何で女神がリッチーに頭下げなきゃいけないのよっ！　大体、触った穢れた水を浄化しちゃうのは私の体質なんだからしょうがないじゃないの！　植物が日の光を浴びたら光合成するみたく、私が水に触れたら浄化しちゃうのよ！　これぱっかりはしょうがないわよ！」
いや、そもそも商品に勝手に触るなよ。
俺は、首に力を込めて頑なに頭を下げようとしないアクアの代わりに、深々と頭を下げる。
なんか不動産屋といい、最近色んな所にコイツの所為で謝らされてばかりいるな。

まるでアクアの保護者みたいな気分だ。

「あ、頭を上げてください！　いいんです、過ぎた事は！　ただ、これからは、出来れば商品を浄化しないで欲しいってだけで……！　アクア様には、墓地の迷える霊達を空に還して頂いたりと、随分とお手を煩わせてしまっておりますから……！」

そう言って、慌てて頭を下げてくるウィズ。

その真っ直ぐなウィズの言葉を聞いて、最近まで墓場の霊の浄化を手抜きし、街に悪霊騒動を引き起こしたアクアが目を逸らした。

……もうお前、ウィズと職業交換してもらえ。

2話（後書き）

お店経営はあくまで副業で、一応物語上必要なわき道です。
本編はもちろん冒険が舞台ですので、タイトルやあらすじが突然商売風に変わって、そのまま経営者物として進行したりはしませんのでご安心ください。

3話

「ようこそ死後の世界へ。私は、あなたに新たな道を案内する女神、エリス。佐藤和真さん、あなたは本日午後15時25分に亡くなりました。辛いでしょうが、あなたの人生は終わったのです」

目が覚めると、そこは中世の神殿の中みたいな部屋だった。
そこに、唐突に俺は突っ立っている。
そして、目の前には神殿の中央に佇む、エリスと名乗る一人の女神。

ゆったりとした白い羽衣に身を包み、長い白銀の髪に白い肌。
凄まじい美貌ながらも、その表情にはどこか陰りが感じられる。
エリスと名乗った女神様のその青い瞳が、呆然と立つ俺を哀しげに見つめていた。

その女神の言葉を聞き、改めて自分が死んだ事を自覚する。
うん、この感じは覚えがある。
俺があの訳の分からない世界へ行く前に、あの自称女神に会ったのも、そういえばこんな感じで唐突に立っていた。
確かに、死ぬ直前の記憶がある。

ああ、俺はまた死んだのか。

そう思った瞬間、俺は自分の頬を熱い物が伝ったのに気がついた。
日本で最初に死んだ時はこんな事は無かったのに。
なんてこった。
俺は大嫌いだと思っていた、あの訳の分からない世界の事が案外

気に入っていたらしい。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「交渉は上手くいった。それどころか、手間賃さえ貰えればそのシュッてするヤツとやらの生産も手伝ってくれるらしい」

ダクネスが、屋敷に帰ってきて交渉の結果を教えてくれた。

良い感じだ、シュッてするヤツさえ作れれば後は薄い鉄板を加工すればなんとかなりそうだ。

「あ、でも宝島の時に大量の鉱石が出回った所為で、未だに忙しくて今週は教えてる暇が無いそうです。なので、しばらく経ったら店の方に来て欲しいと……」

ダクネスに付いてったためぐみんが補足する。

別に慌てる様な話じゃないし、一週間や二週間ぐらいちっとも構わない。

その旨を伝えると、ダクネスとめぐみんはまた店に顔を出した時にでも伝えておいてくれると言ってくれた。

それに、アクアがウズウズした様に立ち上がった。

「それじゃ、今日もサクッと稼ぎに行きますか！　少しでも元手稼いでおかないとね！」

「……む、珍しい。コボルトの群れの全滅なんてクエストがあるぞ。場所は、以前アクアが浄化した湖の近く。どうする？」

ギルドの掲示板でクエストを物色していたダクネスが、一枚の張り紙を持ってきた。
コボルト。
言うまでも無いメジャーモンスターで、非常に弱いのに討伐金額はそこそこ高い、美味しい部類のモンスターだ。
弱いが繁殖力が旺盛で、大量に増えると人を襲ってきたりもするので、見つけたらすぐに討伐依頼が出され、依頼が張り出されるとすぐに受けられてしまう。
そんなクエストが残っていたのは幸先が良い。
「おし、それじゃコボルト討伐、サクッと行っとくか」

確かタルラン湖とか言ったと思う、いつかの湖にやって来た。
ここにコボルトがウロウロしているって事らしいのだが……。
「……おいめぐみん、どうした？　大丈夫か？」
「い、いえ……。大丈夫です、特になんともないですから……」
めぐみんの顔色が真っ青だ。
酷く具合が悪そうで、杖に寄り掛かるようにして歩いている。
確か屋敷に居た時はこんな感じでは無かったのだが。
「おいアクア、回復魔法とか掛けてやってくれよ、なんかめぐみんが辛そうだ」
俺の言葉に、アクアがめぐみんに魔法を掛けようとするが……。
「……ダメね。これは魔法じゃ治らないわ」
アクアがゆっくりと首を振った。
そんなに重傷なのか？
アークプリーストのアクアにも治せないとなると、コボルト狩りなんてしている場合じゃない。
「おいめぐみん、クエストはキャンセルだ。背中におぶされ。今日

は帰るぞ」
　俺がめぐみんに言って背を向けるも、何故かめぐみんは首を振り、その場から動こうとはしない。
　そんなめぐみんの代弁でもするかの様に、ダクネスが俺の肩をぽんと叩いた。
「……察しろ。冒険者だって人間だ。毎月、具合の悪い日だって出てくる」

……なるほど。

「べ、別に私はそういうんじゃないですけどね！？　紅魔族に生理なんてありませんし。ちょっとだけ具合が悪いだけですし！」
「勿論女神も生理なんて無いけどね！」
　めぐみんを庇ったダクネスの言葉に、めぐみんとアクアがこぞって無理のある事を言い出した。
　せっかく庇ったダクネスへの予想外の裏切りに、頬を赤くしたダクネスがちょっと震え声で。
「わ、わ、私もクルセイダーだから……、せ、生理なんて……！　ううっ……」
「おい止めろ、バカ二人に対抗すんな。と言うか、お前も日頃はもっと恥ずかしい事口走ってる癖に、こんな時だけ赤くなるな！」
　赤い顔で涙目になるダクネスが、両手で顔を覆い隠した。
　こいつの羞恥心の基準はどこにあるのか。
「まあめぐみんが大丈夫だって言うなら別にいいが。でも、無理はするなよ？」

コボルトの集団は、俺の敵感知ですぐに見つかった。
湖のほとりで魚でも捕まえようとしてるのか、湖に入ってバシャバシャと暴れている。
俺達は茂みに潜伏したまま、そんなコボルト達の様子をうかがっていた。
シベリアンハスキーみたいな顔をした二足歩行の獣人達は、鼻が良いのか、潜伏スキルを発動中の俺達の方をしきりに気にして、その鼻をひく付かせていた。
潜伏スキル発動中とはいえ急いだ方が良さそうだ。

俺は、隣のめぐみんに合図を送る。
十数匹はいるコボルト達は、その殆どが一ヶ所にまとまっており、今ならめぐみんの魔法で一網打尽にできそうだ。
万が一討ち漏らした時に備え、俺は刀に似た形状の片手剣を引き抜く。
「よし、頼む」
俺の言葉にコクリと頷き、めぐみんが魔法を唱えた。

「『エクスプロージョン』ッッ！」

めぐみんの杖の先から閃光が走り、コボルト達の群れのど真ん中に突き刺さる。
周囲を揺るがす轟音と共に、湖に巨大な波紋と波を起こし、コボルトの大半が爆発に巻き込まれて消し飛んだ。
だが、やはり今日のめぐみんは不調なのか、数匹のコボルトが爆発の影響範囲から免れ生き延びていた。
「クエストはコボルトの群れの全滅だ、逃がすな！　行くぞダクネス！　アクアはめぐみんの傍に居てくれ！」
俺はダクネスと並んで茂みから飛び出すと、数匹の生き残ったコボルト達に駆け出した。

重量のある鎧の所為で、ダクネスは俺の後ろから遅れて付いてくる。
「いつも通りに行くぞ！」
「分かった！」
俺はダクネスに叫び、コボルトの一匹へと斬りかかる。
一撃で致命傷を負わせるには至らなかったが、狙いは違わず、コボルトの腕に手傷を負わせた。
斬られたコボルトがビクリと震え、その動きが止まる。
麻痺の状態異常でも喰らったらしい。
俺はそのコボルトにはもう目もくれず、二匹目のコボルトへと斬りかかった。

生き残っていたコボルト達は、爆裂魔法で耳でもやられたのか、反撃する事もなくふらついている。
俺が傷つけ動けなくしたコボルトに、ダクネスが両手で構えた大剣を、大上段に振り上げて斬りかかった。
頭の先から腹の辺りまでをザックリと切り裂かれ、コボルトが命を落とす。

俺が傷つけ動きを止めて、攻撃力はあるが当たらないダクネスが、トドメを刺す。
これがここ最近の俺とダクネスの連携だ。
普段は攻撃がまるで当たらない子のダクネスだが、流石に止まっている相手には当てられる。
俺は攻撃はちょこちょこ当てられるのだが、一撃の火力が無い。
ここ最近はこんな感じで、俺とダクネスは経験値を稼いでいた。

「よし、最後の一匹だ。……ふう、楽勝だったな」
俺は最後のコボルトに傷を負わせ、コボルトを昏睡状態に陥らせた。

地面に寝転がったコボルトに、ダクネスが遠慮なく大剣を振るい首を刎ねた。

俺はコボルトの死体に向けて、ナムナムと両手を合わせる。

人に危害を加えるモンスターなのだし、俺達も金がいるのだから仕方が無いが、死んだコボルトの冥福を祈ってやるぐらいはいいだろう。

本当はこういった事はアクアの仕事なのだろうが、当の本人はめぐみんの傍でのん気に欠伸している。

俺とダクネスがめぐみんとアクアの元へと歩いて行くと、アクアが手をヒラヒラと振り、

「お帰りー。今日はいつに無く楽勝だったわね。それじゃ、めぐみんの生理痛が酷くなる前に帰りましょうか」

「せ、生理じゃないから……っ！　ちょっとお腹が痛くて血が出て、微熱があるだけで何ともないから……っ！」

それが生理なんじゃ？　と思うが、こう言った微妙な話は、突っ込むと女性陣の痛い視線に晒されるのでほっておく。

さて、帰るかと言おうとしたその時だった。

ダクネスが、遠くのある場所を見つめている。

一体なに見てんだと、俺もそちらを見ると。

何だか、見覚えがある黒い塊がそこに居た。

ダクネスがぽつりと言った。

「……初心者殺しだ」

初心者殺しに追い掛けられるのはこれで二度目になる。
「嫌ー！　もう初心者殺しにかじられるのは嫌よぉっ！」
アクアが叫び、涙目でひた走る。
湖から街まではそれほど遠くはない。
街が見える場所まで逃げ切れれば、警戒心の強い初心者殺しは諦めて立ち去る事だろう。
「おいアクア、言ってないでとにかく逃げろ！　おいお前らも、街までの辛抱だ！　何とか……！」
俺はアクアと並走しつつ、後ろに付いて来ていた二人を……！

振り返った俺が見たのは、重い鎧の所為で遅れ気味のダクネス。
そして……。

体調不良の為か、青い顔で最後尾でよろめくめぐみんの姿だった。
そのすぐ真後ろには初心者殺しが迫っている。
俺は意を決すると、いつぞや初心者殺しに使ったあの手を思い出し、身を翻していた。

「『クリエイト・アース』！」

手の平に生成されるのは一握りの良質の土。
「ちょ、ちょっとカズマ！　何する気!?」
戻る俺に、アクアが叫ぶ。
引き返してくる俺を見てダクネスが驚き、そして自分の後ろのめぐみんを振り返り、ダクネスはその場に足を止めた。
「カズマ！　しんがりは私が務める！　めぐみんを連れて行ってくれ！」
そんな事を叫んでくるが、俺はみんなで逃げる道を選びたい。
あの時だって出来たんだ。大丈夫、きっと上手くいく。

引き返してくる俺を見て、めぐみんが驚き、叫んだ。
「カズマ!?　一体何を……！」
そして、めぐみんは俺が握っている物を見て何をする気か察した様だ。
めぐみんはそのままスッと道を開け、
「『ウインドブラスト』ッッッ！」
初心者殺しの前に出た、俺の放った風の魔法が手の平の土を吹き散らした！

初心者殺しは俺の魔法にビクリと震え、その顔を地に伏せて……！

……はっ？

初心者殺しは、そのまま何事も無かったかの様に俺へと飛び掛かってくる。

ああ、そうか。

俺は思い出していた。
確か、初心者殺しは狡猾で……。

目の前に、初心者殺しの牙が迫る。

ああ、そうか。
こいつはあの時、俺が目潰し喰らわせた初心者殺しだ。
この頭の良い狡猾なモンスターは、きっと、学習したのだろう。
そうだよなあ。
モンスターだってバカじゃないよな。
「カズマーっ！！」
それは誰の声だったのか。

俺は初心者殺しの巨体の影により暗くなる目の前に。
「この毛玉が！　止めろーっ！」
どうか、麻痺か昏睡が発動します様にと願いながら、
「あああああっ！？　カズマぁ！」
不死王の手を発動させた右腕を、初心者殺しに突き出していた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺は目の前の、エリスと名乗った女神に問い掛けた。
「……あの、いいですかね？　俺を殺したあのモンスター、あの後どうなったか分かりますか？」
俺の心残りは、あの後ちゃんとスキルが発動し、あいつらを助けられたのか、だ。
俺が日本から来るきっかけになったあの時は、唯の無駄死にだった訳なのだが。
今回は、俺の死は役に立ったと思いたい。
「ええ、あなたを襲った初心者殺しは、あの後深い昏睡状態になり。あなたの仲間のクルセイダーが、ちゃんとトドメを刺しました」
俺はほっと息を吐く。
何だか、初めてアクアと会った時もこんなやり取りがあったなと思い出しながら。
そんな俺を見て、女神エリスは哀しげな目で俺を見た。
「佐藤和真さん。せっかく平和な日本からこの世界に助けに来てくれたのに、この様な事になり……。異世界からの勇敢な人。せめて私の力で、次の人生は、平和な元の世界、日本で、裕福な家庭に生まれ、何不自由なく暮らせるように。せめて、そんな所に転生させ

てあげましょう」
女神エリスの言葉に、ああ、そうかと思い出す。
死んだら、天国でお爺ちゃんみたいな暮らしをするか、赤ちゃんからやり直しなんだっけ。
この訳の分からない世界でもう一度人生やり直せた事が異常だったんだ。
短い間だったが、最後に少しだけ楽しめたと思っておこう。
あの迷惑な連中と会えなくなるのは、少しだけ。
ほんの少しだけ、寂しいが。

そんな俺を見て、エリスが哀しそうにそっと目を伏せた。
そして俺に右手を向けて、

《さあ帰ってきなさいカズマ！　何こんなあっさり殺されてんの！死ぬにはまだ早いわよっ！》

それは突然聞こえてきたアクアの声。
神殿みたいなこの空間に、ドップラー効果みたいに大音量で響いている。
「ちょ、何事っ！？」
俺は驚きの声を上げる。
そして、驚いたのは俺だけでは無かった様だ。
「なっ！？　この声は、アクア先輩！？　随分先輩に似たプリーストだなと思っていたら、まさか本物っ！？」
女神エリスは、信じられないと言った表情を浮かべ、大きな声を上げていた。

《ちょっとカズマ、聞こえる？　あんたの身体に『リザレクション』って魔法をかけたから、もうこっちに帰って来れるわよ。多分、今あんたの目の前に女神がいるでしょ？　その子に門を開けてもらい

なさい》
再び聞こえるアクアの声。
おおう……。
マジかよ女神様、とんでもない事してくれやがった！
「おし、待ってろアクア！　今そっちに帰るからなっ！」
俺の声が向こうに届いているのかは分からないが、俺は叫びながら、飛び跳ねて喜んだ。
「ちょ、ちょちょ、ちょっと待ってください！　ダメですダメです、申し訳ありませんが、佐藤和真さん、あなたはすでに一度生き返ってますから、天界規定によりこれ以上の蘇生は出来ません！　私からはアクア先輩に声が届かないので、そう伝えてはくれませんか？」
女神エリスが、慌てながらそんな事を言って来た。
おいマジか。ぬか喜びか。
「おいアクア、聞こえるかー！？　何か、俺って一度生き返ってるから、天界規定とやらで、もう生き返る事はできないんだってよー！」
俺は何も無い場所に向かって、空を見上げながら叫んでみた。
すると、一瞬静まり返り……、
《はあー？　誰よそんなバカな事言ってる女神は！　ちょっとあんた名乗りなさいよ！　仮にも地球担当のエリートな私に、こんな辺境担当の女神がどんな口効いてんのよっ！！》
おい、止めろ。
目の前の女神様が凄く引きつった顔してる。
「えっと、エリス様って女神なんだけども……」
俺はアクアに呼びかけた。
すると、アクアは素っ頓狂な声を上げる。
《エリス！？　ちょっとこの世界での国教として崇拝されてるからって、調子こいてお金の単位にまでなった、上げ底エリス！？　ち

ょっとカズマ、目の前の女がそれ以上何かゴタゴタ言うのなら、その胸パット取り上げてやんなさ「わ、分かりましたっ！　特例で！　特例で認めますから！　今、門を開けますからっ！」

アクアの喚き声を遮ると、女神エリスは胸の前で腕を組み、顔を赤らめて指を鳴らした。

俺の目の前に、飾り気の無い白い門が現れる。

全く、アクア先輩は相変わらず理不尽な……とか、目の前の女神はぶつぶつと気の毒そうな事を言いながら。

「……さあ、門は開けました。……全く、こんな事普通は無いんですよ？　本来なら、魔法で生き返れるのは王様だろうがどんな人だろうが一回まで。……全く。……カズマさんと言いましたね？」

「えっ、あ、はいっ！」

女神エリスに名前を確認され、俺は上擦った声で返事をする。

ウチのあれと比べると、やはり相手はちゃんとした女神。

しかもとびきりの美女だ、どうしたって緊張はする。

今まで、ずっと哀しげな目をしていたその女神は。

しょうがないと肩を落としながらも、イタズラっぽく片目を瞑り、少しだけ嬉しそうに囁いた。

「この事は、内緒ですよ？」

俺は苦笑を浮かべると、そのまま白い門を開け……

「カズマっ！　カズマ、起きてくださいっ！　カズマあああああっ

！」

俺にすがって泣くめぐみんの声。

……？

何か、右手が暖かい。

ふと視線をやると、ダクネスが俺の傍に片膝を付き、俺の右手を両手で握り、祈るように目を閉じていた。

俺は頭の上に気配を感じ、そちらに視線をやる。

と、俺を見つめるアクアと目が合った。

「……あ、やっと起きた？　ったくあのパット女神、頭固いんだから全く」

俺はそんなアクアの声を聞きながら、後頭部が暖かいのが気になっていた。

……おっと。

アクアが膝枕してくれていたらしい。

俺が目を覚ました事に、めぐみんとダクネスが気が付き、二人は無言で俺を抱き締めてきた。

生き返れた事を喜んでくれるのは良いんだが、何か無性に照れ臭いんですが！

そんな俺の様子に気付き、アクアがにやにやと笑みを浮かべるのが憎たらしい。

くそ、あのまま帰らず、日本で生まれ変わって金持ちのボンボンとして暮らしておくべきだったか。

「ちょっとカズマ、照れてないで何とか言いなさいよ。私達に何か言う事あるでしょう？」

にやにや笑みを浮かべ、アクアがそんな事を言ってきた。

この駄女神が、エリス様と取替えっこ出来ないかな。

俺はアクアにぽつりと言った。

「……エリス様と、チェンジ……」

「上等よ、このクソニート！　そんなにあの子に会いたいなら、今すぐ会わせてあげようじゃないの！」

額に血管浮かべたアクアが叫び、俺を押さえつけながら拳を光らせ、殴りかかる体勢になる。

こいつは、なんて気の短い女神なんだ。

俺は照れ臭さを隠す様に、心の中でだけ呟いた。

……ただいま。

4話

「知ってるか？　何でも魔王軍の幹部の一人が、この街からちょっと登った丘にある、昔放棄された廃城に、派遣されて来たらしいぜ」

ギルドに併設された酒場の中。

俺はそこの一角で、昼間から酒を飲んでだべっているキースの話を聞いていた。

俺はと言えば酒ではなく、ネロイドのシャワシャワを飲んでいる。

ネロイドとは何なのか。

シャワシャワとは何なのか。

なんか、酒をあまり飲まない多くの人達がいつもコレを飲んでいるので、興味本位で飲んでみたのだが……。

美味いのかと言われたらこう答えるしかない。

……うん、分からん。

だが、シャワシャワの意味は分かった。

飲んだ後シャワシャワする。

別に炭酸ではない。

自分でも、シャワシャワするの意味が分からないが、これはシャワシャワとしか表現できない。

俺はネロイドとやらを飲み干しテーブルに置く。

「魔王の幹部ねぇ。物騒な話だけど、俺達には縁の無い話だよな」

「違えねえ」

キースが、俺のやる気の無い無責任な言葉に笑いながら同意した。

今俺は、ギルドに一人で留守番している。

いや、正確にはキースや他の冒険者や職員がいるから一人って訳

じゃ無いのだが。

リザレクションで蘇生したばかりの俺は、アクアに二週間は安静にしてろと言われた。

何でも、初心者殺しの巨大な牙にかじられた俺は、それはもう無残な状態だったらしい。

どんな状態になってたのかと聞いても、皆目を逸らして教えてくれない。

そんな訳で、今日は俺はギルドの酒場で、クエストに行ったみんなの帰りを待ちながら、他の冒険者達に色んな話を聞いていた。

冒険者ギルドでだべっている連中は意外に多く、面白い話が色々聞ける。

どこそこで危険なモンスターを見掛けたから、暫くはあの辺りでのクエストは受けない方がいいとか。

あのモンスターは、柑橘系の果物の汁を身体に付けておくと匂いを嫌って寄ってこないだとか。

と言うか、今まで生きていくのに精一杯で、こういった情報収集みたいな事はした事が無かった。

「しかし、カズマが一人でここでだべってるなんて珍しいな。いつもの連中はどうしたんだ？」

「何か、三人でクエスト受けてったよ」

俺の言葉を聞いたキースは、そ、そうかと小さな声で気まずそうに頷いた。

気持ちは分かる。

きっとロクでもない結果になって帰ってくると思っているのだろう。

俺も勿論そう思っている。

もうこのギルド内で俺を上級職のお荷物呼ばわりするヤツは居ない。

ダストとか言ったキースの仲間の戦士が、いかに俺が苦労しているかを、酒が入る度に他の冒険者達にトクトクと語ってくれたらしい。

今度アイツに会ったら酒でも奢ってやろう。

そして、あの時アイツがどんな目にあったのかを聞いてやろう。

きっとその思いは俺とアイツにしか分かり合えないだろうから。

「ま、何にせよ。街の北の外れにある廃城には近づかない方がいい。王国の首都でもないこんな所に、何で魔王の大幹部様がやって来たのかは知らないがね。幹部ってからには、アークデーモンやヴァンパイア。はたまた、ドラゴンかリッチーか。いずれにしても、俺達が会ったら瞬殺される様な化け物が住んでるのは間違いない。廃城近くでのクエストも、避けた方が無難なとこだな」

キースと別れた俺は、街中をプラプラと歩いている。

あいつらがクエストから帰ってくるのは、昼過ぎから夕方にかけてだろう。

俺はそれまで、普段はロクに見る事も無かった街の中をのんびりと散歩していた。

この街の名はアクセル。

この国の中では結構大きな街らしいが、そもそも俺はここ以外の街を知らないのでなんとも言えない。

ここは別名始まりの街とも呼ばれ、駆け出しの冒険者から中堅ま

でがここの街を拠点にするらしい。
カエル討伐ですら食われ掛けてた俺達からすれば、これで駆け出し向けの街？　と言いたくなるが。

と、俺はフラフラと宛も無く街を歩く中、暇そうにする冒険者達が多い事に気が付いた。
冒険者は基本的に貧乏だ。
ほぼ毎日あくせく働くものなのだが……。
不思議に思っていると、冒険者達は皆、街の入り口の方からゾロゾロと帰ってきている様だった。

「ったく、やってらんねーよなぁ！　何様だっつーの！　魔王の幹部だか何だか知らねーが、そんなの俺達みたいな駆け出し連中にはどうにもなんねーだろうがよ！」
俺がギルドに帰ってくると、ギルドの中では、一人の酔っ払いが仲間と共に愚痴っている。
そう、ダストとか言った奴だ。
「お、カズマ。お前の連れはまだクエストからは帰ってきてないぞ。でもまあ……、多分この様子じゃもうそろそろ帰ってくるだろうさ」
……どういうこった？
テイラーの言葉の意味が分からず、俺がきょとんとしていると、リーンがため息を吐きながら。
「なんかねー。魔王の幹部だかが引っ越してきた所為で、この街の冒険者に勅令クエストが出ちゃったの」
……？
「勅令クエスト？」

オウム返しに尋ねる俺に、リーンがこくりと頷く。

「そ、勅令クエスト。この国の偉い人達が出せるクエストの事なんだけどね。これは全冒険者が対象で、このクエストが出されてる間は他のクエストは後回しになっちゃう訳。で、今回出された勅令クエストの内容がね……？」

困った様に言い淀むリーンの後を引き継いで、俺が散歩してる間にすっかり出来上がっていたキースが言った。

「駆け出しや中堅しかいないこの街の俺達に、大魔王の幹部様をぶっ殺せだってよー！　無理に決まってんだろ！　うひゃひゃひゃひゃひゃっ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆

「ただいま！　カズマ、聞いてよ！　聞いて！　やったわよ、やったわ私達！　カズマ抜きでも、失敗する事無くクエスト完了してきたわよ！」

何時になく上機嫌なアクアが帰って来た。

「……うむ、私達だってやれば出来る子だと言う事だ。苦労を掛けたなカズマ。これからは、お前一人に苦労はさせない。もう、カズマのあんな無残な姿を見るのは勘弁だ」

何時になく優しげな顔で微笑むダクネス。

「ふっ、我々にかかればこんなものです。まあ、クエスト自体は簡単な物でしたしね。畑に大量発生したマイマイつむり。動きがノロくて、ダクネスでも難なく倒せました。何であんな弱いのに討伐依頼なんて出てるのかって思ってたら……。何でも、畑の持ち主が、マイマイ系だけは駄目なんだそうで！」

何時になく得意げなめぐみんが胸を張る。
……マイマイつむりってなんだよ。
かたつむりつむり？
……というか、それだとめぐみんは今回何もしていないと思うんだが、何故一番自信満々なのだろうか。

でも、せっかく何事も無くクエスト達成してきたと思ったら……。
「えーと……。申し訳ありません、現在勅令クエスト発生中ですので、一切の他のクエスト処理ができません……」
報酬を受け取ろうとしたアクア達に、申し訳無さそうな受付のお姉さん。

「な、なんでよおおおおおっ！？」

……コレばっかりは流石にアクアに同情した。

「全く……！　何でこのタイミングで引っ越して来てんのよ！　幹部だか何だか知らないけど、もしアンデッド系なら見てなさいよ！」
アクアがジョッキを一気に煽り、ぶはーと息を吐きながら愚痴を零した。

他の冒険者達も皆思いは同じな様で、やってられないとばかりにいつもより多めに飲んだくれている。

国のお偉いさんとやらも無茶言うものだ。
一体何の目的でこんな所に来たのかは知らないが、仮にも魔王の

幹部だのを討ち取れだとか。
ハッキリ言って、この街の冒険者達の実力は俺達とあまり変わらない。
俺達より強いパーティは勿論あるだろうが、それでもパーティの平均レベル的には、レベル３０以下の者ばかりだ。
聞いた話では、今はどこで何をしているのか知らないが、あのミツルギのパーティがこの街では一番強かったらしい。
そのミツルギに、例え不意打ちとはいえ勝った俺ですら、先日初心者殺しにあっさり殺られた。

魔王の幹部なんて、ゲームで言えばラストの方で出てくるもんだ。
初心者殺しを見て逃げ回っている冒険者グループが、例え百組以上集まってもどうにかなるとは思えなかった。

「つまり、国の首都から腕利きの冒険者や騎士達がここに来るまでは、暫くは仕事が出来ないって事か」
俺はぶらぶらと歩きながら。
「ですね。……まあ、こう言っては何ですが、生き返ったばかりのカズマの、良い休養だと思っておきましょうか。……まあ、となると、クエストの無い間はしばらく私に付きあって貰う事になりそうですが」
そんな事を言ってくるめぐみんと共に、街の外へと散歩していた。
街の近くには危険なモンスターはいない。
害をなすモンスターは軒並み狩られているから。

俺は、今日のクエストで爆裂魔法が撃てなかった消化不良のめぐ

みんに付き合い、めぐみんの日課の一日一爆裂を放つ場所を探し、街を出て散歩していた。
ひょっとして、俺はこれから毎日、腕利きの冒険者達が魔王の幹部を倒すまでこれにつき合わされるのだろうか？
一人で行けと突き放したら、万一調子に乗って全魔力を込めて魔法を放ってしまったら、一体誰がおぶって連れ帰ってくれるんですかと開き直られたのだが。

「もうその辺でいいだろ。適当に魔法撃って帰ろうぜ」
街からちょっと出た所で、俺はめぐみんに魔法を放つ様に促した。
だがめぐみんが首を振る。

「駄目なんです。街から大分離れた所じゃないと、また守衛さんに叱られます」

「またって言ったか。怒られたのか、音がうるさいとか迷惑だって」
俺の言葉にめぐみんがコクリと頷く。
しょうがない、唯でさえ日々色んな所で迷惑掛けてる俺達だ。
丸腰なのでちょっぴり不安だが、ここはちょっと遠出して……。

……俺は思いついた。

なぜ俺がこんな面倒臭い事に付き合わなければいけないのかと言えば、それは例の魔王の幹部の所為な訳だ。
そうだ、そうだよ。
駆け出しの俺達には抗う事なんざ出来ない様な格上様だが、嫌がらせぐらいはしてやれる。
「おい、いい場所を思いついた。めぐみん、行くぞ！」

俺達は街の近くにある丘を登り、遠い昔に廃棄され、今は魔王の

幹部が住み着いていると言う城が見える所までやってきた。
廃城とは言え、それはまだまだ住むには充分な城。
俺とめぐみんは、それを遠巻きに眺めていた。
「よし、やれ」
「ええっ！？」
俺の合図にめぐみんが驚愕の声を上げる。
「しょ、正気ですか！？　魔王の幹部ですよ！？　そんなの相手に喧嘩売る気ですか！？」

冷や汗垂らしながら捲し立てるめぐみんに、
「喧嘩売ってきてるのは向こうじゃないか。どこの誰とも分かんない顔も見た事の無い奴の所為で、今この街の冒険者達は仕事が無くて困ってるんだぞ？　こんな離れた所から爆裂魔法撃ったって、すぐ街に逃げ帰れば大丈夫だって。今回お前ら、せっかく俺抜きで無事にクエスト終えてきたのにケチ付けられちゃっただろ？　元々討伐命令が出てる相手だし遠慮はいらない。せめて一矢報いてやろーぜ？」

俺の言葉にめぐみんはなるほどと呟くと。
「それもそうですね。相手は魔王の幹部です、今は様子を見る気なのか何なのかは分かりませんが、いずれ何時かは戦わなきゃならない相手ですし！　それに、万が一爆裂魔法で討ち取れれば儲けものですしね！　城に対抗魔法ぐらいは掛けてあるでしょうが、せめてビックリさせてやりましょうか！」
言って、ウキウキと魔法の詠唱を始める。

……こうして、俺とめぐみんの新しい日課が始まった。

それからと言うもの、俺とめぐみんはその廃城の傍へと毎日通い、爆裂魔法を放ち続けた。
それは、寒い氷雨が降る夕方でも。
それは、穏やかな食後の昼下がりでも。
それは、朝起きて、爽やかな目覚めの散歩のついでにでも。
どんな時でもめぐみんは、毎日その廃城に魔法を放ち。
いつしかめぐみんの魔法を見慣れた俺も、その日の爆裂魔法の出来が分かるまでになっている。
「『エクスプロージョン』ッッッ！」
「おっ、今日のは良い感じだな。爆裂の衝撃波が骨身に浸透するみたくビリビリ来る。ナイス爆裂！」
「ナイス爆裂！　ふふっ、カズマも爆裂道が段々分かって来ましたね。どうです？　カズマも随分とレベルが上がり、ステータスもかなり上昇して来たでしょう。いっそ、アークウィザードへのクラスチェンジを目指してみては？」
「うーん、爆裂道も面白そうだがなぁ、今のパーティ編成だと魔法使いが二人ってのもな。でも冒険者稼業を引退する頃には、最後にアークウィザードになってみるってのも面白そうだな」
俺とめぐみんはそんな事を言いながら笑い合う。
今日の爆裂魔法の音は何点だった、いや、音量は小さかったが音色が良かった等、そんな事を言い合いながら。
それは、俺の養生期間とされていた、二週間が経った時の事だっ

た。

『緊急！　緊急！　全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっっ！』

街中に鳴り響くのはお馴染みの緊急のアナウンス。

そのアナウンスに俺達も、しっかりと装備を整え。

街の正門前に多くの冒険者が集まる中、そこに着いた俺達は、凄まじい威圧感を放つそのモンスターの前に呆然と立ち尽くした。

デュラハン。

それは人々に死の宣告を行い、生きる者に絶望を与える不死身の首無し騎士。

不死となり、生前を凌駕する剣技を手に入れたその暗黒の騎士は、脇に己の首を抱え。

街中の冒険者達が見守る中、その抱えていた首を目の前に差し出した。

その差し出した首がプルプルと小刻みに震え出し……！

「まままま、毎日毎日毎日っっ！！　おお、俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法撃ち込んでく大馬鹿は、誰だあああああーっ！！」

魔王軍の大幹部は、もう限界だとばかりにお怒りだった。

5話

ずっと何かに耐えていたが、とうとう我慢できずに切れてしまった様な、追い詰められた様なデュラハンの絶叫に、俺の周りの冒険者達がざわついた。

というか、俺達も周りの冒険者達も、一体何が起こっているのかが理解できない。

とりあえず、俺達が緊急で呼び出されたのは目の前にいる怒り狂ったデュラハンが原因の様だった。

「……爆裂魔法？」

「爆裂魔法を使えるヤツって言ったら……」

「爆裂魔法って言ったら……」

周りの冒険者達が再びざわつき、そして……。

俺の隣に居るめぐみんへと、自然と周りの視線が集まった。

……周囲の視線を寄せられためぐみんは、フイッと隣に居た魔法使いの女の子の方を見る。

それに釣られて、俺もその女の子を見ると、周りの視線も一緒に釣られたようにその女の子に……。

「ええっ！？　あ、あたしっ！？　なんであたしが見られてんのっ！？　爆裂魔法なんて使えないよっ！」

突然濡れ衣をなすり付けられ、慌てる魔法使いの女の子。

めぐみんがはあと息を吐き、嫌そうな顔で前に出た。

それに、冒険者達がデュラハンへの道を開けてくれる。

街の正門の前に佇むデュラハン。

そのデュラハンから１０メートルほど離れた場所にめぐみんが対

峙した。
　勿論俺やダクネスやアクアもめぐみんの後に付いて行く。
　アンデッドを見つけるとまるで親の敵の様に襲い掛かるアクアも、これ程までに怒り狂うデュラハンが珍しいのか興味深々で成り行きを見守っていた。

「お前が……！　お前が、毎日毎日俺の城に爆裂魔法ぶち込んで行くキチ○イか！　俺が魔王軍幹部だと知っていて喧嘩を売っているなら、堂々と城に攻めてくるがいい！　その気が無いのなら、街で震えているがいい！　何故こんな陰湿な嫌がらせをする！　この街には低レベルの冒険者しか居ない事は我々も知っている！　雑魚ばかりと見逃してやっていれば、調子に乗って毎日毎日ポンポン爆裂魔法を撃ち込みにきおって……っ！！　頭おかしいんじゃないのか、貴様っ！」
　よほど堪えたのか、激しい怒りでデュラハンの兜がプルプルと震える。
　それにめぐみんが若干怯むも、意を決して口を開いた。

「我が名はめぐみん。アークウィザードにして、爆裂魔法を操る者……」
「……バカにしてんのか？」
「ちっ、違わい！」
　めぐみんの名乗りを受けたデュラハンに突っ込まれるも、めぐみんは気を取り直し。

「我は紅魔族の者にして、そしてこの街随一の魔法使い。我が爆裂魔法を放ち続けていたのは、こうして魔王軍幹部の貴公をおびき出す為の作戦……！　まんまとこの街に、一人でノコノコ出て来たのが運の尽き！」

何だかノリノリでデュラハンに杖を突きつけるめぐみんを、その後ろで見守りながら、俺はアクアとダクネスにヒソヒソと囁いた。
「……おい、あいつあんな事言ってるぞ。毎日爆裂魔法撃たなきゃ死ぬとか駄々こねてたから、仕方なくあの城の近くまで毎日連れてってやってたのに。いつの間に作戦になったんだ」
「……ん、しかもさらっと、この街随一の魔法使いとか言い張ってるぞ」
「しーっ！　そこは黙っておいてあげなさい！　今日はまだ爆裂魔法使ってないし、後ろに冒険者の大群が控えてくれてるから強気なのよ。今良い所なんだから見守るのよ！」

その俺達のヒソヒソが聞こえていたのか、片手で杖を突きつけたポーズのまま、めぐみんの顔がみるみる内に赤くなる。
デュラハンはと言えば、何かに納得した様な雰囲気だ。
「……ほう、紅魔の者か。なるほど、そのイカれた名前は別に俺をバカにしていた訳では無かったのだな」
「おい、両親から貰った私の名に文句があるなら聞こうじゃないか」

何かヒートアップしているめぐみんだが、デュラハンはどこ吹く風だ。
と言うか、街中の冒険者の大群を見ても別段気にする素振りも見せてはいない。
流石は魔王軍の幹部、俺達みたいなひよっ子など眼中に無いのだろう。

「……フン。まあいい。とにかく、俺はお前ら雑魚共にちょっかいかけにこの地に来た訳ではない。この地には、ある調査に来たのだ。しばらくはあの城に滞在する事になるだろうが、これからは爆裂魔法は使うな。いいな？」
「それは、私に死ねと言っている様なものなんですが。紅魔族は日

に一度、爆裂魔法を撃たないと死ぬんです」
「お、おい、聞いた事ないぞそんな事。貴様、嘘つくなよ！」

どうしよう、もう少しめぐみんとあのモンスターのやり取りを見守りたい気分になってきた。
見ればアクアも、めぐみんがデュラハンに噛み付いているのをワクワクして眺めている。

デュラハンは片方の手の平の上に首を乗せながら、そのまま器用に、外人がやるみたいにやれやれと肩をすくませた。
「どうあっても、爆裂魔法を止める気は無いと？　俺は魔に身を落とした者ではあるが、元は騎士だ。弱者に手を出す趣味は無い。だが、これ以上城の近辺であの迷惑行為をするのなら、こちらにも考えがあるぞ？」
剣呑な気配を漂わせてきたデュラハンに、めぐみんがビクリと後ずさった。
そしてそのままアクアに目をやると、
「迷惑なのは我々の方です！　あなたがあの城に居座ってる所為で、我々は仕事もロクにできないんですよ！　ふっ、余裕ぶっていられるのも今の内です。こちらには、対アンデッドのスペシャリストがいるのだから！　さあ、先生、お願いします！」
めぐみんは、アクアに丸投げした。

……おい。

「ふふん、しょうがないわね！　魔王軍の幹部だか何だか知らないけど、この街にこの私が居たのは運が悪かったわね。アンデッドが、力が弱まるこんな昼間にノコノコ出てきちゃって、浄化して下さいって言ってる様なもんだわ！　あんたの所為で、受けたクエストの報酬がずっと棚上げされてんのよ！　さあ、覚悟はいいかしらっ！

？」

先生呼ばわりされたアクアが満更でも無さそうに、ズイとデュラハンの前に出た。

成り行きを固唾を飲んで見守る冒険者達の視線を浴びながら、アクアがデュラハンに片手を突き出す。

それを見たデュラハンは、興味深そうに自分の首をアクアに向かって前に出す。

きっと、これがデュラハンなりのマジマジと見る行為になるのだろう。

「ほう、これはこれは。プリーストではなくアークプリーストか？なるほど。こんな街に居る低レベルのアークプリーストに浄化されるほど落ちぶれてはいないが、確かにこの太陽の下で浄化魔法を喰らっては痛そうだ。……では、こうさせて貰うとしようかっ！！」

デュラハンは、アクアが魔法を唱えようとするよりも速く、その右手の人差し指をめぐみんへと突き出した！

そしてデュラハンはすかさず叫ぶ。

「お前、二週間後に死ぬかんなー！！」

デュラハンが人差し指でめぐみんを指すのと、ダクネスがめぐみんの襟首を掴み、自分の後ろに隠すのは同時だった。

「なっ！？　ダ、ダクネス！」

めぐみんが叫ぶと同時、ダクネスの身体がほんのりと一瞬だけ黒く光る。

くそっ、やられた、死の宣告か！

「ダクネス、大丈夫か！？　痛い所とかは無いか？」

俺が慌てて聞くも、ダクネスは自分の両手を確認するかの様にワキワキと何度か握り。
「……ふむ、何とも無いが」
平気そうに言ってのけた。

だが、デュラハンは確かに叫んだ。
二週間後に死ぬ、と。
呪いを掛けられたダクネスをアクアがぺたぺたと触る中、デュラハンは勝ち誇った様に宣言する。
「その呪いは、今は何とも無い。若干予定が狂ったが、このままではそのクルセイダーは二週間後に死ぬ。ククッ、それまで死の恐怖に怯え、苦しむ事となるのだ。めぐみんとか言ったな紅魔の娘よ。二週間のあいだ、仲間の苦しむ様を見て、自分の行いを悔いるがいい。ククッ、素直に俺の言う事を聞いておけばよかったのだ！」

そのデュラハンの言葉にめぐみんが青ざめる中、ダクネスが慄き叫んだ。

「な、なんて事だ！　つまり貴様は、この私に死の呪いを掛け、呪いを解いて欲しくば俺の言う事を聞けと！　つまりはそう言う事なのか！」
「えっ」
ダクネスが何を言っているのか分からなかったデュラハンが素で返した。
俺も何を言っているのかが分からない。

「くっ……！　や、止めろお……！　呪いぐらいではこの私は屈しはしない……！　屈しはしないが……っ！　ど、どうしようカズマ！　見るがいい、あのデュラハンの兜の下のいやらしい目を！　あれは私をこのまま城へと連れて帰り、呪いを解いて欲しくば黙って

言う事を聞けと、凄まじいハードコアプレイをする変質者の目だっ！」
大衆の前で、突然変質者呼ばわりされた可哀想なデュラハンがぽつりと言った。
「……えっ」
……気の毒に。

「この私の体は好きに出来ても、心までは好きに出来るとは思うなよ！　城に囚われ、魔王の手先に理不尽な要求をされる聖騎士とかっ！　ああ、どうしよう、どうしようカズマっ！！　行きたくは無い、行きたくは無いが仕方がない！　ギリギリまで抵抗してみるから二週間後に城に迎えに来てくれ！　では、行って来る！」
「ええっ！？」
「止めろ、行くな！　デュラハンの人が困ってるだろ！」
ノコノコと敵に着いて行こうとするダクネスを羽交い絞めにして引き止めていると、デュラハンがほっとしている姿が見えた。

「と、とにかく！　これに懲りたら俺の城に爆裂魔法を放つのは止めろ！　そして、そこのクルセイダーの呪いを解いて欲しくば、俺の城に来るがいい！　城の最上階の俺の部屋まで来る事が出来たなら、その呪いを解いてやろう！　……だが、城には俺の配下のリビングアーマーやゴーレム達がひしめいている。ひよっ子冒険者のお前達に、果たして俺の所まで辿り着けるかな？　クククククッ、クハハハハハッ！」
デュラハンはそう宣言すると、哄笑を上げながら、街の外に止めていた首の無い馬に乗り、そのまま城へと去って行った……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

あまりと言えばあんまりな展開に、集められた冒険者達は呆然と立ち尽くしていた。

それは、俺も同じだった。

俺の隣では、めぐみんが青い顔でわなわなと震え、杖をぎゅっと握り直す。

そしてそのまま街の外へ出て行こうとする。

「おいこらどこ行く気だ、何しようってんだよ」

俺がめぐみんのマントを引っ張ると、めぐみんはそれにグイグイと力を込めて抵抗しながら、こちらを振り向きもせずに言ってきた。

「今回の事は私の責任です。ちょっと城まで行って、あのデュラハンに直接爆裂魔法ぶち込んで来ます」

めぐみん一人で行った所で、どうなる物でもないだろうに。

というか。

「俺も行くに決まってるだろうが。お前一人じゃ最初の雑魚相手に魔法使って、それで終わっちゃうだろ。そもそも、あの城に魔法撃ち込めってそそのかしたのは俺だしな」

俺の言葉にしばらく渋い表情を浮かべていためぐみんは、やがて諦めた様に肩を落とした。

「……じゃあ、一緒に行きますか。でもリビングアーマーやゴーレム相手じゃ、カズマのスキルは殆ど役に立ちませんよ？　なので、こんな時こそ私の爆裂魔法を頼りにしてください」

言って、少しだけめぐみんは笑みを浮かべた。

確かに無機物な敵が相手じゃ、俺の不死王の手や目潰し、片手剣、弓なんて物は役に立たないだろう。

だが、それならそれで考えがある。

「俺の敵感知で城内のモンスターを索敵しながら、潜伏スキルで隠れながらコソコソ行こう。二週間の期限があるんだし、毎日城に通って一階から順に、爆裂魔法で敵を削っていってもいい」

俺の提案に少しは希望が持てたのか、めぐみんが明るい顔を見せてきた。

俺とめぐみんはダクネスの方を振り返る。

「おいダクネス！　呪いは、絶対に何とかしてやるからな！　だから、安心……して……」

俺とめぐみんが振り向く先には、なぜかしょんぼりと残念そうな顔のダクネスと、体育座りの状態で、じっと俺とめぐみんのやり取りが終わるのを待っていたアクアの姿。

アクアが、何でもなさ気に言ってきた。

「……あ、終わった？　その、盛り上がってる所悪いんだけど……。ダクネスに掛かってた呪いなら、もう私が解いちゃったわよ」

「「えっ」」

俺とめぐみんは、デュラハンみたいに素で返した。

6話

シュボッ！
「「おおっ！？」」

ジッポで付けた火に、めぐみん、ダクネス、そしてウィズの三人が驚いた。

デュラハン事件から二週間。
その間クエストも受けられない状態だったので、俺はポイントを３０ポイントほど使って鍛冶スキルを習得し、早速ジッポを作ってみたのだが。
「こ、これは思ったよりも便利ですね！　本当に、まんまティンダーの魔法じゃないですか！　カズマさん、これは売れますよ！」
ウィズが大喜びで、興奮した面持ちでジッポを手にはしゃいでる。
その言葉に、俺は持って来ていたジッポの山をカウンターの上にドンと置いた。

ここはウィズのマジックショップ。
完成したジッポを、売れるかどうかウィズに見てもらっていたのだ。
「これ、簡単な構造なのに良く出来てますね。これが魔法を使ってないってのが信じられないです。大事に使えば凄く長く使えそうですしね」
感心した様にジッポを色んな角度から眺め回しているめぐみんは、興味深そうにジッポの感想を言った。

「うん、これは私も一つ欲しいな。火打石では湿気った場所では使い辛かったり、火を起こすのに時間が掛かったり。他にも、火種と

なる燃え易い物を濡らさない様に持ち歩いたりと面倒だ。これなら、それらが一発で解決する。……カズマ、一つくれ。幾らだ？」

ダクネスがジッポを手に、サイフから金を出そうとする。

「金なんかいらんさ。ダクネスとめぐみんには鍛冶屋スキルを教えてくれる人を紹介してもらったしな。二人とも、気に入ったの持ってけよ。あ、ウィズさんも、ジッポお店に置いて貰うんだし、良かったらお一つどうぞ」

俺の言葉に嬉々としてジッポを選ぶ三人を見ながら、アクアが小バカにした様に鼻で笑った。

「未開人なんだから……。ジッポ一つで何を喜んじゃっているのかしら。こんな物、本当に簡単な作りなのよ？　まったく、これだから文明が遅れてる人達は、まったく……」

三人を上から目線でからかいながら、アクアも俺の作ったジッポの一つに手を伸ばし……。

その伸ばした手を、俺がぺしっとはたいた。

「……何よ、なにすんのよカズマ。私にも選ばせてよ」

「いやお前は金払えよ」

当たり前だろと後に続ける俺に、アクアが食って掛かってきた。

「はあ？　なんでよ、なんでいつもいつも私にだけ意地悪すんのよ！　何でそっちの三人は良くって私だけ駄目なのよ、私だけ仲間外れにしないでよ！」

「この三人をからかったりしなきゃ、別に一つくらいくれてやっても良かったんだが。つーか、お前今回何もしてないだろ。この三人には色々とジッポ作りに協力して貰ったが、お前はこの二週間近く、屋敷で食っちゃ寝してただけじゃねーか。分け前が欲しいなら、ちょっと店の外で客引きの一つでもして来い」

俺の言葉にアクアはじわりと涙ぐむと、捨て台詞を吐きながら店の外に飛び出してった。
「わあああーっ！　カズマの甲斐性なし！　カズマが私達の脱ぎ散らかした洗濯物、クンクンしてる事黙っててあげようと思ったのにっ！」
「おい待て！　お、俺そんな事してないぞっ！　滅多な事言うなよ、おい！　……本当だって！　めぐみんもダクネスもそんな目で俺を……。ちょ、ウィズまで！　違うよ、濡れ衣だって！」

アクアが口走った誤解を解くために俺が必死で弁解する中、店から出てったアクアが入り口から、ひょこっと顔だけ覗かせた。
「……人一杯集めたら、私にもジッポ一つくれる？」
「ジッポぐらいやるから、まずはこの誤解を解いていけ！」

ウィズのマジックショップの前には、凄まじい人だかりが出来ていた。
ウィズ曰く、この通りにこれだけの人が殺到するのは初めての事だそうだ。
前もって、『安価で便利な着火道具販売！』と書いたチラシ撒いといたのが功を奏したのかもしれない。
人だかりの中には、俺が撒いた物と思われるチラシを持った人の姿も見受けられた。
「……しかし、凄い人だかりだな」
「……そうだな」
ダクネスの呟きに、俺は適当に相槌を打つ。

「……これが、全部ジッポ目当てのお客さんなら、良かったんですけどね……」
「……そうだな」
めぐみんの言葉に力無く返事を返す。
俺達は、人だかりの中心に再び目をやる。
俺の隣で、ウィズが困り顔でおずおず言った。
「……ウ、ウチへ来るつもりだったお客さん達まで、みんな取られちゃってますね……」
「ああ、そうだな！　あああああああ、もうあいつは一体何なんだよおおお！」
俺達が見つめる先には、凄まじい人だかりの中持ち前の芸を披露し、喝采を浴びるアクアの姿。
そこには、チラシを見て来てくれたであろう人までもが人の輪に混じり込み、安価で便利な着火道具の事など忘れてしまっていた。
客引きしろとは言ったが、誰が目的忘れるまで夢中にしろっつった。
当のアクアも、すでに店に客を集めると言う当初の目的を忘れ、全力で芸を披露している。
「さあ続いては、取り出したるこの何の変哲も無いハンカチから！　なんとビックリ、鳩が出ますよ！」
言って、アクアが一枚のハンカチを広げて見せた。
それはよくあるあの手品。
事前に服の中に鳩を入れ、それをハンカチから飛び出す様に見せるアレだ。
アクアはハンカチを一振りすると、そのハンカチの中から……
「「「「うおおおおおおっ！？」」」」
驚愕する観衆の声を受けながら、ハンカチから数百を越える鳩の

群れを羽ばたかせた。

「多いだろ！　多過ぎだろあれ！　何だあれ、あいつ今どうやった！？　物理的に不可能だろ今のは！」

俺は自分の目を疑い隣のウィズに慌てて聞くも、

「な、何でしょうか……。召還魔法を使った訳では無さそうですし、あれだけの鳩の大群をどこかに隠しておくわけにも……。……えっと、本当にどうやって……？」

俺に聞かれた魔法のエキスパートであるリッチーは、口元に手を当て真剣な顔で悩み出した。

「あ、おひねりは止めて下さい。私は芸人ではないので、おひねりは止めて下さい」

観衆から投げられる大量のおひねりを、アクアが丁重に断わっている。

芸に関しては譲れない物があるらしい。

というか、あいつ芸で充分食っていけるだろ。

俺達が半ば呆れ、そしてアクアの芸のレベルの高さに、俺達も観衆に混じって眺め始めていたその時だった。

『緊急！　緊急！　全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっっ！』

例の緊急を告げるアナウンス。

「またかよ……？　最近多いな、緊急の呼び出し」

俺がウンザリと言うと、ダクネスが全くだとばかりに頷いた。

「放っておけ。どうせ大した事じゃないし、我々にはそんなものよりもっと大切な事がある」

そういやそうだ。
俺達にとってはそんな金にならない緊急の呼び出しよりも、せっかく作ったジッポが売れるかどうかの方が大切だ。
同じ思いのダクネスが、拳を握り。
「見ていろカズマ。あの、アクアが取り出したシルクハット！　あそこからは、ネロイドが出るぞ！　間違いない、昨日アクアが、路地裏に逃げ込んだネロイドを追い掛け回していたのを目撃した。ネロイドだ、きっとあのシルクハットからはネロイドが飛び出すんだ……！」
拳を握り締め、子供みたいにワクワクした面持ちのダクネスは俺と同じ思いでは無かった様だ。
……ってか、今ネロイドって言ったか？
俺こないだ、ネロイドのシャワシャワとか飲んだんだが路地裏に居る様な何かなのか？
俺がダクネスに、ネロイドとは何なのかを聞こうとすると、再び緊急の呼び出しが鳴り響く。
すでにウィズやめぐみんはアクアの芸に夢中で、放送自体を聞いちゃいない。
『緊急！　緊急！　全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってください！　……特に、冒険者サトウ・カズマさんとその一行は大至急でお願いします！』
俺達はウィズにジッポの販売を任せ、正門に向かっていた。
「アクア、あのシルクハットからはネロイドが飛び出すんだろう？

昨日追い掛けていた、あのネロイドが飛び出すんだよな？」

「ふふん、どうかしらね？　いい、ダクネス。芸ってのはね、見せるまでは種明かしはできないの。ネロイドかも知れないし、そうじゃないかも知れない。続きはまた来週、あの店の前に並びなさい」

「わ、分かった、来週だな？　よし、並ぼうじゃないか！」

俺はみんなの先頭を走りながら、アクアとダクネスの二人の場違いな会話を聞きながら、俺達が呼び出される理由を考えていた。

だがまあ、大体予想は付く。

「お、やっぱりな。またアイツか」

俺達が街の正門前に着くと、そこには既に多数の冒険者が集まっている。

そして多くの駆け出し冒険者達が遠巻きに見守る中、ヤツは居た。

そう、あのデュラハンだ。

デュラハンは俺とめぐみんの姿を見つけると、開口一番叫びを上げた。

「なぜ城に来ないのだ、この人でなしどもがあああああっ！！」

◆◆◆

俺はめぐみんを庇う形でジワジワと前に出ると、デュラハンに問い掛ける。

「ええっと……。なぜ城に来ないって、なんで行かなきゃならないんだ？　後、人でなしって何だよ、あれからまた毎日爆裂魔法撃ち込んでくのが気に入らないのか？」

俺の言葉に、怒ったデュラハンが思わず左手に抱えていた物を地面に叩き付け……ようとして、それが自分の頭である事に気付き慌てて脇に抱え直した。

「爆裂魔法を撃ち込んで行く事にはもう諦めた。そこの頭のおかしい紅魔の娘は、どうせ言っても聞かないだろうしな。……だが、貴様らには仲間を助けようという気は無いのか？　モンスターと化した俺が言うのも何だが、不当な理由で処刑され、モンスター化する前は、これでも真っ当な騎士のつもりだった。その俺から言わせれば、貴様を庇って代わりに呪いを受けた仲間を見捨てると言うのは信じられないのだが」

デュラハンの言葉に、俺とめぐみんは思わず顔を見合わせた。

後ろを振り向くと、まだダクネスが着いていない。

着ている鎧が重いのと、アクアと訳の分からない話をしながらだったので遅れてしまったのだろう。

そう思っていると、やがて噂のダクネスが、アクアと共にやって来る。

俺とめぐみんはデュラハンの方を向きながら、これを見ろとばかりにぴんぴんしているダクネスを指差した。

「あれえ――――――――――――――！？」

それを見たデュラハンが素っ頓狂な声を上げた。

兜の所為でその表情は見えないが、多分、何で！？　と言った表情をしている事だろう。

「なになに？　どしたん？　あのデュラハンなんであんな挙動不審なの？」

ダクネスと共に遅れてきたアクアが、事の経緯を聞いてくる。

「ダクネスに呪いを掛けて二週間が経ったのに、未だダクネスがピンピンしているから驚いてるみたい」
説明を聞き、アクアがデュラハンを指差し笑う。
「あはははは！　じゃあ何!?　このデュラハン、私達が呪いを解く為に城に来るはずだって思って、ずっと城で私達を待ち続けてたの？　帰った後、アッサリ呪い解かれちゃったとも知らずに？　プークスクス！　マジうけるんですけど！」
相変わらず表情は見えないが、プルプルと肩を震わせるデュラハンの様子から、きっと激怒しているのだろう。
しかし呪いを解いてしまった以上は、罠を張っていると分かりきっている、そんな危ない所にわざわざ行く理由が無い。

「……おい貴様。俺だって、駆け出しの雑魚共相手とはいえ、頭に来たなら別に見逃してやる理由もないんだぞ？　俺がその気になれば、この街の冒険者を一人残らず切り捨てて、街の住人を皆殺しにする事だって出来るのだ。疲れを知らぬこの俺の不死の体。お前たちひよっ子どもには傷も付けられぬと知れ！」
アクアの挑発に流石に頭にきたのか、デュラハンが不穏な空気を滲ませる。

だがデュラハンが何かをするより早く、アクアが右手を突き出し叫んでいた。
「見逃してあげる理由が無いのはこっちの方よ！　今回は逃がさないわよ。アンデッドのクセに、こんなに注目集めて生意気よ！　消えて無くなんなさいっ、『ターンアンデッド』！」
アクアが突き出した手の先から、白い光が放たれる。
アクアが魔法を放つのを見て、デュラハンはまるで、そんな物は喰らっても余裕だとでも言うかの様に、それを避けようともせずに。

「こないだこの街にアークプリーストが居ると知って、俺が何の対

策も無しにここへ来たと思っているのか？　残念だったな。俺は様々な属性の鎧を所持し、それを取り替える事によっぎゃあああああああああああああー！！」

魔法を受けたデュラハンの足元に、白い光の魔法陣が現れる。

それは天に突き上げる様な光を放ち、デュラハンごと空へ還そうとでもするかの様に、しばらくの間浄化の光を放ち続けた。

自信たっぷりだったデュラハンは、体のあちこちから黒い煙の様な物を立ち昇らせ、ふらつきながらも巨大な剣を引き抜いた。

それを見て、アクアが叫ぶ。

「ね、ねえカズマ！　変よ、効いてないわ！」

いや、だいぶ効いてた様に見えたんだが、ぎゃーって叫んでたし……。

デュラハンは、よろめきながら。

「ク、ククク……。説明は最後まで聞くものだ。俺は様々な属性の鎧を所持し、相手に合わせて装備を変える。普段は貴様らのなまくらな剣など弾き返してしまう鎧を着るのだがな……。今日の装備は、神聖属性の攻撃をほぼ無効化してしまう吸光鉄製の鎧だ。だから、ターンアンデッドは効かぬ。……効かぬのだが……。な、なあお前。お前は今何レベルなのだ？　駆け出しか？　駆け出しが集まる所だろう、この街は？」

デュラハンの疑問に、アクアが答えようとするも、それまで様子をうかがっていた冒険者達が、急にザワザワとざわめいた。

「吸光鉄……？　あいつ、吸光鉄の鎧って言ったか……？」

何だ？　吸光鉄ってのに何かあるのか？

その、小さな誰かの声。それを聞いたダクネスが大剣を引き抜く

と、吸光鉄とやらが何か知らず、不思議そうな表情を浮かべる俺に、大剣を正眼へと構え、言った。

「吸光鉄は、酷く脆い。あいつが、自分で言った通りの吸光鉄製の鎧ならば、普通の武器でも傷つけられる。……つまり、この街の冒険者でも充分討ち取れると言う事だ」

ダクネスの言葉を聞いて、街の冒険者達がゴクリと唾を飲み込む。

……やがて多数の冒険者達が、武器を手に、デュラハンを取り囲む様に。

それを見たデュラハンは、片手に頭を、片手に剣を持ちながら、愉快そうに肩をすくめて言い放つ。

「……ほう？　俺は、自分から斬りかかって来る様な連中までは見逃すつもりは毛頭無いぞ？　……我が名はベルディア。魔王軍斬り込み大隊隊長、デュラハンのベルディアだ。俺を討ち取ればさぞかし大層な報酬が貰えるだろう。……さあ、一獲千金を夢見る冒険者達よ。まとめて掛かってくるがいい！」

7話

ジリジリと、ベルディアと名乗ったデュラハンを冒険者達が距離を置いて取り囲んでいく。

冒険者達の目の前にいるのは、ひよっ子冒険者の貧弱な武器でもダメージを与えられる、魔王軍の大物モンスター。

運が良ければ自分でも討ち取れると知った冒険者達が、緊張を滲ませながらも期待を込めた表情で……。

「おい、どんなに強くても後ろに目は付いちゃいねえ！　囲んで同時に襲い掛かるぞ！」

周りの冒険者に叫んだ、何だか聞き覚えがある声のその男は、確か……。

「おいダスト！　相手は魔王軍の幹部だぞ、そんな手で簡単に倒せる訳ないだろ！」

テイラーが、他の冒険者と一緒にベルディアを囲み始めたダストに叫ぶ。

なるほど、あいつらも来てたのか。

テイラーの忠告を無視して、ダストが他の数名の冒険者達と共にベルディアとの距離を詰め、そして一気に……！

ダスト達が襲い掛かろうとするその直前に、ベルディアは持っていた剣を地に突き立て。

「やっちまえっ！」

叫びと共に襲い掛かろうとするダスト達を前に、持っていた自分の首を、空高くへと放り投げた。

ぶんと投げられたベルディアの首は、その顔を地の方に向けながら宙に舞う。

それを見た瞬間に、ぞくりとする。
それは、俺だけじゃなくダストの仲間のテイラーも同じだったらしい。
「止めろ！　行くなダ……」
テイラーが叫び終わる前に、ベルディアは一斉に斬りかかる冒険者達の攻撃を、まるで背中に目が付いているかの様に。
「えっ？」
それは斬りかかった誰かの声。一体どの冒険者が言ったのだろう。
アッサリと全ての冒険者の攻撃をかわしてのけたベルディアは、地に刺していた剣を両手で握り……。
「……えっ？」
それは、呆然と呟くテイラーの声。
ベルディアは、ダストを含む、斬りかかってきた冒険者全員を、瞬く間に切り捨てた。
知り合いが何の躊躇も無くアッサリと目の前で命を落とす。
その理不尽な無常さに、俺はこの世界の現実を思い知った。
ドシャリと音を立てて崩れ落ちるダスト達。
それを聞き、ベルディアが手を上に向けると、その手の平の上にベルディアの首が落ちてくる。
何でもない事の様に、ベルディアが言った。
「次は誰だ？」
その言葉に居合わせた冒険者達が怯む中、テイラーが叫びを上げた。
「こ、こんのやらあああああ！」
「ちょ、ダメだよテイラー！　行っちゃダメだよ！」
ダストが殺された事で激怒し、斬りかかろうとするテイラーをリ

ーンとキースが止めている。

ヤバイ、魔王軍の幹部マジヤバイ。

俺はアクアの方を見ると、既に先ほどまでそこに居たアクアの姿は無く。

この中で唯一切り札となりそうな力を持つアクアは、冒険者達と対峙するベルディアに目もくれず、ちょろちょろと斬られた冒険者達の死体の傍へと近寄り、一体なんのつもりかぺたぺたと死体を触っていた。

頑丈そうな鎧を着た冒険者達がアッサリと斬り殺されたのを見て、悠然と立つベルディアの前には、もはや誰も立ち向かおうとは……。

……一人居た。

「……ん。私が相手しよう」

硬さには定評のあるダクネスが、ズイとベルディアの前に出た。

ダクネスの特注品の重厚な白い鎧が、ベルディアの黒い鎧と相反する様に輝いている。

ダスト達も鎧は着ていた。

だが、この魔王軍の幹部はその着ている鎧ごと切り裂いたのだ。

希少金属をあしらったダクネスの特注鎧でも、ベルディアの攻撃に耐えられるのだろうか。

いや、ダスト達だって一端の鎧を着ていたんだ、鎧の強度なんてそこまで劇的に変わる物でもないだろう。

俺がダクネスを止めるべきか止めないべきかを悩んでいると、それを察したダクネスが自信有り気に言い放つ。

「安心しろカズマ。私は頑丈さには誰にも負けない。それに、スキルは所持している武器や鎧にも効果があるんだ。アイツの剣は良い物だろうが、普通の者に金属鎧が、あんな、紙を裂く様に切り裂け

る訳が無いだろう？　アイツは強力な攻撃スキル持ちだ。私の防御スキルとどちらが上か、確かめてやる」

何やら譲れない所があるのか、今日のダクネスは珍しく攻撃的だ。だが、受けるのは出来ても、お前の場合攻撃が当たらないだろうに。

「止めとけよ。あいつ、攻撃だけじゃなく回避も凄かっただろ。あれだけの冒険者が斬りかかっても当たらなかったものを、不器用なお前が当てられる訳ないだろ」

俺の言葉にダクネスは、ジッとベルディアと対峙したまま。

「……聖騎士として、どうしても譲れない物がある。やらせて欲しい」

何の事だかは知らないが、本人にはきっとどうしても譲れない何かがあるのだろう。

大剣を正眼に構え、ダクネスがベルディアに向けて駆け出した！

「ほう、お前が来るのか。俺も元は騎士だった者だ、クルセイダー相手なら是非も無し。よし、相手になろうかっ！」

ベルディアがそれを迎え撃つ。

ダクネスが両手で握る大剣を見て、受け止めるのを嫌がったのか、ベルディアは身を低く落とし、回避の構えを見せている。

そのベルディアに、ダクネスは飛び込むようにその大剣を……！

ベルディアとの距離の目測を見誤ったのか、ベルディアの足先数センチほど前の地面に叩きつけた。

「……は？」

ベルディアが、気の抜けた声を上げる。

そのまま呆然とダクネスを見ているが、同じ様な視線で他の冒険者達もダクネスを眺めている。

やだもう、動かない相手すら外すなんて恥ずかしいっ！

この子、俺の仲間なんですけど！

いや、素人が刀を思い切り振ると自分の足を切りつける事があるとか、そんな話は聞いた事はあるが、これは……。

的を外したダクネスは当たらないのはいつもの事だとばかりに、一歩前に踏み出し、今度は横に大剣を切り払う。

これは流石に当たる角度だったのか、ベルディアが身を更に低くし、ひょいとかわした。

「なんたる期待外れだ。もういい。……さて……」

ベルディアがつまらない者を相手にしたとでも言いたげな口調で、ダクネスに袈裟懸けに、無造作にその剣を片手で一閃させた。

「……さて……。次は、誰……、……は？」

討ち取ったという自信があったのだろう。

だが、金属を引っかく様な鈍い音を立て、ベルディアの剣はダクネスの鎧の表面を派手に引っ掻いた。

ダクネスが、一旦ベルディアから距離を取り。

「ああっ！？　わ、私の新調した鎧がっ！？」

鎧に出来た大きな傷を悲しげに見つめた後、キッとベルディアを睨みつける。

鎧の傷は大きい物の、ダクネスの身体に届くような傷では無い。

つまり……

「な、何だ貴様は……？　俺の剣を受けて、なぜ斬れない……？　その鎧が相当な業物なのか？　……いや、それにしても……。先ほどのアークプリーストといい、お前らは……」

何かブツブツ言い出したベルディアに、俺は弓を降ろして矢をつがえる。

「ダクネス！　お前ならソイツの攻撃に耐えられる！　攻撃は任せ

とけ、援護してやる！」
俺の言葉にダクネスが、目はベルディアに向けたままこくりと頷く。
「ん、任せた。だが、私にもこいつに一太刀入れさせる機会を作ってくれ。頼む」
ダクネスの頼みに分かったとだけ叫び、ベルディアから離れた距離から矢を射掛けた。
俺の姿を見て、他にも弓を使える冒険者達が次々とベルディアに矢を射掛ける。
その中には、ダストを殺された事で怒りに燃えるキースの姿もあった。

ベルディアが、手に持っていた首を空に投げた。
兜の顔の部分は、またもや下を向いた状態で投げられており、迫り来る矢の雨を両手に握った大剣で次々と斬り飛ばす。
あの、宙に放り投げた首で空から全体を見渡しているのだろう。
だが、仮にも魔王の幹部様を、矢を射掛けただけで倒せるとは思っていない。

「ダクネス、しばらく耐えることに専念しろよ！　……魔法使いのみなさーん！！」
俺の呼びかけに、自分の仕事を思い出した魔法使い達が次々と魔法の詠唱を始め、他の冒険者達も自分に出来る事が無いかと動き出した。

そう、これは魔王の幹部との戦争だ。
冒険者の街にモンスターにノコノコと侵入されているのだ。
無事に帰してやる理由が無い。
だが、魔法の詠唱を始めた魔法使いにのみ、ベルディアが地に剣を突き立て、開いた手で次々と指で指す。

「お前らまとめて、二週間後にィィィ！　死にさらせェェ！！」
ベルディアが、魔法を詠唱していた魔法使い達にまとめて死の呪いを掛けた。
自分が死の宣告を受けたと言う衝撃に、魔法使い達がうろたえ、次々と詠唱を止めてしまう。
参戦しようとしていた他の魔法使いは、死の宣告を受けた同業者の姿を見て、顔を引きつらせながら魔法を唱えるのを躊躇した。

このクソデュラハン、嫌らしい手を使いやがって！
「よし、今度は本気で試してみようか！」
ベルディアが、叫ぶと同時に再び自分の首を舞い上げた。
そして俺達を庇う様にベルディアの前に立ち塞がるダクネスに、大剣を両手で構えて襲い掛かる。

「あああああっ！？　ダ、ダクネスーっ！」

後ろから、聞き覚えのある悲鳴が上がる。
それはダクネスの相方だったクリスの声。

この場には、この街の殆どの冒険者達が集まっている。
見覚えのあるあの人も、あのモンスターの弱点を教えてくれたあいつも。
剣を手に攻めあぐねている、俺にネロイドって飲み物があると教えてくれたあの子も。
槍を手に、ベルディアの背後に回り込もうとしている、最初は俺をからかってばかりいたあのおっさんも。

ダクネスが崩れれば、ベルディアは気まぐれに、本当にこの場の全員を皆殺しにするかもしれない。
それが分かっているからなのか、襲い掛かるベルディアに、ダク

ネスが正眼に構えていた幅広の大剣をくるりと返し、剣の腹を前に出し、盾にでもするかの様に一歩も退かず、掲げ立つ。
兜を着けていない頭以外は好きに攻撃しろとでも言わんばかりに。

「潔しっ！　これで、どうだっ！？」
ベルディアが両手でしっかりと構えた大剣から放つ、常人離れした無数の斬撃が、ダクネスの鎧に向けて放たれた。
金属を引っかく不愉快な音と共に、ダクネスの鎧に無数の刃傷が刻まれる。
常人なら細切れにされてもおかしくないその斬撃に、だがダクネスは微動だに一つせずに立ち塞がった。
ベルディアは強烈な連続攻撃を一旦止めて、空から落ちてきた首を片手で受け止め、ほお……と、ダクネスのタフさに感心した様に、そのまま片手で剣を振るう。

俺が魔法使いの連中を見るも、その殆どが呪いを受けたショックで青い顔で立ち尽くし、僅かな者が意を決した様に再び魔法を唱え出していた。
と、俺の頬に温い何かがピッと振り掛かる。
手の甲でそれを拭うと、それは……
「おいダクネス、お前手傷負わされてんのか！　もういい下がれ！　冒険者全員で走って逃げて、あいつから距離を取って、もう街の一部ごとめぐみん使って吹き飛ばそう！　おい、下がれっ！！」
俺の傍で杖を握り、めぐみんはこの凄まじい攻防に目を奪われながらも、俺の言葉にこくこく頷く。

頬や鎧の切れ目から、所々血を流し、だがダクネスは下がらない。
「クルセイダーは、背に誰かを庇っている状況では下がれない！　これぱっかりは絶対に！　そ、それにだっ！」
カッコイイ事言うダクネスが、頬を赤くし、必死の抵抗を続けな

がら。

「それにっ！　こ、このデュラハンはやり手だぞっ！　こやつ、先ほどから私の鎧を少しずつ削り取り……！　全裸に剥くのではなく中途半端に一部だけ鎧を残し、私をこの公衆の面前で、裸より扇情的な、あられもない姿にして辱めようと……っ！」

「えっ！？」

ダクネスの言葉に一瞬手を止め、ちょっと引くベルディアに、俺は弓を引き絞りながらこんな時でもブレない本物を罵倒する。

「時と場合ぐらい考えろ、この筋金入りのど変態が！！」

俺の罵声にダクネスがビクンと震え、

「くう……！　カ、カズマこそ時と場合を考えろっ！　公衆の面前でデュラハンに痛めつけられているだけでも一杯一杯なのに、これでカズマまでもが罵倒したら……っ！　お、お前とこのデュラハンは、一体二人がかりでこの私をどうするつもりだっ！」

「ええっ！？」

「どうもしねーよこのど変態が！」

「ちょっと横から邪魔するよ！　ダクネスをイジメんな！　こんな時こそ、『スティール』だっ！」

馬鹿なやり取りをしていた俺達の、その隙を付いたように。

潜伏スキルでも使っていたのか、横合いから突如飛び出したクリスが、ベルディアに向けスティールを叫んでいた。

チャリンと音がして、クリスの手に小さな袋が握られる。

それを見て、ベルディアが低く笑った。

「おっと、この俺相手に一発でスティールが成功したのか。おい盗

賊、ついてるな！　それはお前らみたいなコソドロ対策の残念賞だ、取っておけ！」

ベルディアが、そのままクリスを指で指す。

あかん、流石は戦い慣れした魔王の幹部、スティール対策もバッチリか！

きっと小銭でも入れたあの小さな袋を、あちこちに隠してあるのだろう。

ベルディアがクリスに死の宣告をしようとするのを見たダクネスが、剣を捨て、そのままベルディアに駆け出し。

「私の悪友に手を出すな！」

こんなに怒ったダクネスなど見た事無い。

ダクネスは叫ぶと同時、素手のまま、ベルディアに向かって肩口から体当たりした。

だがベルディアはそれも易々と身をかわし、余裕たっぷりに大剣を握り締める。

マズイ、ダクネスは急いで飛び出すために、重い剣を投げやがった。

気が付くと、俺は周りに叫んでいた

「盗賊、頼むー！　万に一つ、こいつから剣を奪っちまえば俺達の勝ちだっ！　スティール使える奴は協力してくれっ！　『スティール』っ！」

叫ぶ俺の手元には、チャリンと音を立てる小さな袋。

俺の呼びかけに、いつの間に近くまで潜伏し、寄って来ていたのか、そこかしこからワラワラと盗賊風の男女が姿を現す。

「「「『スティール』ッ！」」」

次々と掛けられるスティールに、失敗する者、成功する者。

だがその僅かに成功した者の手には、小さな子袋が握られている。

ベルディアはもはや群がる俺達を気にする様子も見せず、素手で無防備になったダクネスの元へと剣を構えた。

魔法やスキルは魔力を使う。
スティールだって例外じゃ無い。
なら、込める魔力を増やしたら？
俺の持ち前の運の良さと重なって、都合よく剣を盗めたりはしないのか？

俺は腹の底から全力で叫んでいた。
「『スティール』ッッッ！！」
「……ムッ！？」
ベルディアのいぶかしげな声と共に、自分の手にズシリと重い存在を感じ取る。
それは……

「おい貴様、俺の弁当返せ」
「アンデッドが飯食ってんじゃねえ！」
俺は奪った弁当をベルディアに投げつけた。
ベルディアは、せっかく返してやった弁当を受け取ろうともせず、持っていた首を、再び高々と放り上げた。
「「ああっ！？」」
それを見た冒険者達から悲鳴が上がる。
そう、ベルディアが首を投げた後は、開いた両手によるあの凄まじい連激が始まるからだ。

「ダクネスをイジメんなっつってんだろ！　『スティール』ッッッッ！！」

それは、ダクネスの一番の親友のスティールだった。

強い想いと魔力の込められたスティールは……！

俺がベルディアを見ると、そこには剣を両手で握り締めたままの姿があった。

ベルディアは、そのままあの凄まじい斬激を。

放つ事は無く、そのままぽつんと突っ立っている。

……？

何が起こったのかとシンと静まり返っているその場に。

何だか困った様な、それでいて、自分でも何が起こったのかと半信半疑な声で。

「あ、あの……」

ベルディアが声を震わせながら。

そう、声を出せる頭を宙に投げたはずのベルディアが、声を震わせながら。

「あ、あの……。首、返してもらえませんかね……」

首を両手でしっかり持ったクリスと至近距離で見つめ合いながら、ベルディアがぼそりと呟いた。

「クリス、パース！」

俺の言葉に、首を持ったまま呆然と固まっていたクリスは、はっと我に返り、俺に向かって首を放った。

俺はそのままその首を……

「おい、お前ら行くぞ！　サッカーしよーぜ！　サッカーってのはなあ！　手を使わず、足だけでボールを扱う遊びだよ！」
冒険者達の集団の真っ只中に、思い切り蹴り込んだ！

「あああああ！　ちょ、おいっ、や、やめっ！？」

冒険者達の只中に放り込まれたベルディアの頭は、今までジレて待っていた冒険者達の格好のオモチャにされた。
「ひゃはははは！　これおもしれー！」
「おい、こっちこっち！」
「やめっ！？　ちょ、いだだだ、ちょ、やめえっ！？」

頭を蹴られるベルディアの、その体の方は片手に剣を握り締め、前が見えずにワタワタとうろたえている。

「おいダクネス。一太刀食らわせたいんだろ？」
ダクネスの大剣を渡してやると、荒い息を吐きながらあちこちから血を垂らしていたダクネスが、大剣を構えてベルディアの体の前にゆらりと立つ。
その間に、俺は……
おっと、居た居た！
何してやがんだあいつは。

俺はベルディアに斬られた死体の傍で、屈み込んで何かをやっていたアクアにちょいちょいと手招きする。
それに気付き、ばたばたとこちらに駆けて来るアクアを尻目に、ダクネスが大剣を大きく振り上げた。
「これはっ！　お前に殺された、私が世話になったあいつらの分だ！　チマチマと何度も斬りつけるつもりはない！　まとめて、受け取れえっ！！」

ダクネスが叫び、そのまま大剣を振り下ろした。
「ぐはあっ！？」
遠くで頭を蹴り転がされているベルディアが、人だかりの中からくぐもった声を上げる。
ダクネスの剣は吸光鉄の鎧を打ち砕き、胸元にザックリと大きな傷跡を残していた。
「おし。アクア、後は頼む」
「任されたわ！」
アクアが片手をベルディアの身体に突き出し。
「『ターンアンデッド』！」
「ちょ、待っ……！　ぎゃあああああー！」
アクアの浄化魔法に、遠くからベルディアの声が聞こえる。
鎧が大きく砕け、流石に今度は効いた様だ。
ベルディアの身体が淡い光に包まれて、その存在が薄くなり、消えていく。

ベルディアの首の方も消えていったのか、人混みでは冒険者達がどよめいていた。

こうして、何が目的で城にやってきたのかも良く分からずに、魔王軍の幹部はこんな所で討ち取られた。

◆◆◆

勝利に沸く冒険者達の声を聞きながら、傷だらけのダクネスは、片膝を付いてデュラハンの体のあった場所の前で、祈る様なポーズで目を閉じていた。

そのダクネスに、クリスが恐る恐る声を掛けた。
「……ダクネス、何してるの？」
それにダクネスは、目を閉じたまま、まるで独白の様に答える。
「……祈りを、捧げている。デュラハンは不条理な処刑で首を落とされた騎士が、恨みでアンデッド化するモンスターだ。元々、こいつとてモンスターになりたくてなった訳ではないだろう。自分で斬りつけておいて何だが、祈りぐらいはな……」
そっか、と呟くクリスに、尚もダクネスは独白を続けていった。

「……腕相撲勝負をして私に負けた腹いせに、私の事を鎧の中はガチムチの筋肉なんだぜとロクでもない大嘘を流してくれたセドル。おいダクネス、団扇代わりにその大剣で扇いでくれ！　なんなら当ててもいいけど、当たるんならな！　と、バカ笑いして私をからかって来たヘインズ。そして……。一日だけとはいえ、パーティを組み……。何で初心者殺しに突っ込んでくんだと泣き叫びながら私を罵ったダスト。……みんな、あのデュラハンに斬られた連中だ。今思えば、ロクでもない連中ながらも、私は連中をそれほど嫌ってはいなかったらしい……」
そのダクネスの言葉に、なぜか戸惑った様にクリスが。
「え、えっと……、う、うん。そっか。それじゃ、続きは後で聞いてあげるからね。とりあえず、ギルドに戻ろっか」
慌てたように言うクリスに、ダクネスは目を閉じたまま。
そっと優しげな声で囁いた。
「……あいつらに、もう一度会えるなら……。一度くらい、一緒に酒でも飲みたかったな……」
その、ダクネスに。

「「「お……おう……」」」
後ろから、戸惑った様な声が掛けられた。

ビクリと震えるダクネスの後ろで、恥ずかしそうに照れている三人の男達。
それは確かにベルディアに斬られた冒険者。
それを代表するかの様に、ダストがオズオズと、申し訳無さそうに。
「そ、その……。わ、悪かったな色々と。お前さんが俺達に、そんな風に……」
「あ……、ああ。その、悪かったよ、腕相撲に負けたぐらいで変な噂立てちまって……。こ、今度奢るからよ……」
「剣が当たらない事、実は結構気にしてたのか？　その、わ、悪かったな……」

三人の言葉に、ダクネスが祈りを捧げるポーズで目を閉じたまま震え出し、頬がみるみる赤くなる。
そこに嬉々とした声で、空気を読まずにアクアが言った。
「任せてよダクネス！　私に掛かれば、あんな死にたてホヤホヤの死体なんてちょちょいと蘇生よ！　良かったねダクネス！　これで一緒にお酒飲めるじゃない！」

多分そのアクアの発言には、悪気は無かったのだろう。
だが当のダクネスは、アクアの言葉に、背後にダスト達が居るとも知らずに続けた自分の独白を思い出し、涙目で震えながら、その赤い顔を両手で覆って座り込んだ。

「良かったじゃないか、みんなとまた会えて。ほら、飲みに行って来いよ」
俺がほがらかにダクネスに声を掛けると、ダクネスが両手で顔を覆ったまま呟いた。
「……死にたい……」

俺はそんなダクネスに。

「お前、常日頃から攻められたがってただろ。遠慮すんなよ、これから三日間ぐらいこの事話し続けてやるから」

「こ、こ、この羞恥責めは、私の望む羞恥責めと違うから……っ！」

ダクネスが、部屋に三日ほど引き込もった。

8話

「た、大変だ！　カズマ、大変なんだ！」
それはベルディアを討ち取って四日目の朝の事。
俺達が屋敷の広間でゴロゴロしていると、屋敷に突然、一人の美女が飛び込んで来た。
それは清楚なイメージを与える高そうな純白のドレスを着ながら、白いハイヒールを履き、長い金髪を綺麗にまとめて片方の肩から流した、どこかの令嬢みたいな人だ。
そんな格好だが、大変けしからんエロい身体をしている。
そんな人が、俺の名前を叫んでいた。

「……あんた誰？」
「んんっ……！？　くっ……！　カズマ！　今はふざけている場合じゃ無い！　そういったプレイは後にしてくれ！」
目の前の清楚な美女が、頬を赤くしながら言ったそのロクでもない発言で、ようやく気付いた。

「なんだ、ダクネスか。そのコスプレはどうしたんだ？　何か新しいジャンルでも開拓中なのか？」
「違うっ！！　こ、コスプレじゃない！　とにかく、まずはこれを見てくれ！」
言って、ダクネスがバンとテーブルに一枚のアルバムを叩きつけた。
ソファーでゴロゴロしていた俺とアクアとめぐみんは、どれどれとそれを見る。
アルバムと言うか、これは……。

「……何だこれ？　おお？　なんだこのイケメンは。ムカツク」

爽やかそうなイケメンが写っていたそれを、俺は思わず無意識の内にびり……と。

「ああ！？　な、何をするんだっ！　そんな事したら、見合い写真を返して断わる事が出来なくなるだろうがっ！」

ハッ！？

「おお？　スマン、つい！　なぜだろう、自分でも手が無意識に……。って言うか、見合い写真？」

俺はアルバムを手に首を傾げた。

しばらく部屋に閉じ込もっていたダクネスが、ようやく出てきたのが昨日の事。

そのまま、ちょっと家に行って来ると言って、今朝まで帰って来なかったのだが……。

「そうだ！　普段なら、見合い話が持ち上がった瞬間に全てぶち壊して来たのだが！　私が三日ほど部屋に閉じ込もり、世間から離れている間に、あっと言う間に見合いの段取りが組まれていたっ！　私が引き込もる原因を作ったカズマの所為だぞ、どうしてくれる！」

うろたえるダクネスが、オロオロしながら言ってくる。

「ちょ、待てよ、俺は日頃お前らに苦労掛けられてるストレスをここぞとばかりに晴らしただけで、まあ涙目で、本気で恥ずかしがるお前を見て、楽しくなかったと言えば嘘にはなるが……ああっ！　こ、こらっ、止めろ！　でも、見合いが嫌なら断われば良いだろ、今アルバム直してやるから。アクア、悪いんだけどご飯粒持って来てくれないか？」

「はいはーい」

ばたばたと駆けて行くアクアを見送って、俺は涙目で掴みかかってくるダクネスを落ち着かせようと、テーブルの上の飲み物をすす

めた。
テーブルの上には朝から、アルコールが弱い物とはいえ酒類が置かれている。
「……なんだ？　朝から酒を飲んでるなんて珍しいな、アクアでもあるまいし」
そのダクネスの言葉に、ちびちびと果実酒を舐めながら、めぐみんが上機嫌で。

「実は、ダクネスが閉じ込もってる間にギルドから通達がきまして。今日の夕方、ギルドに領主さんの使いが来て、ベルディア討伐の報酬が貰えるそうなんですよ。戦闘に参加したこの街の冒険者全員に貰えるそうで、街の冒険者達はお祭り騒ぎです」

そう、仮にも魔王軍の幹部だったベルディア。
そのベルディア討伐と言う事で、この地方の領主が腕利きの傭兵や冒険者を集め、さあベルディア討伐だと意気込み、この街へ行こうとしていた矢先に、それをこの街の駆け出し達で倒してしまった。
大手柄を上げられると意気込んでいた領主としては随分と複雑な思いだろうが、それでも評価しない訳にはいかないのだろう。

今の季節はもう冬に入り始めている。
冬は、冒険者達はあまり仕事はせず、じっと街に篭り大人しくしている。
冬になると、討伐対象のモンスターがあまり活動しなくなるからだ。
僅かに活動するモンスターはと言えば、少ないエサを求め、狂暴性が増している肉食系の、割に合わないとびきり危険なモンスターばかりだ。
本来なら冬を前にし、金を蓄えておきたい所だったのが、ここ最近ベルディアが現れた事による勅令クエストのせいで、他のクエス

トを受けられずにいた懐の寂しい冒険者達。
そこに、領主から今回の勅令クエストの報酬が出るとなれば、それは浮かれるのも仕方が無い。

「……む、私が引き込もってる間に、そんな楽しげな事になっていたのか……」
「そーいうこった。あ、今日のお昼ぐらいからギルドで宴会があるぞ。アクアがやたら張り切ってた。……でも、あいつ虫取り網と虫かご持って、昨日から不審な行動取ってたんだよな……。なんか、アクアの部屋からケキョケキョ鳴く声が聞こえたり、何かが暴れる音がしたり。……犬やら猫やらも、ほっとくと何でも家に持って帰ってくるからな。アクアが変な生き物拾ってこない様に注意しないと」

俺のその言葉に、なぜかダクネスが泣きそうな顔を浮かべた。

「カズマ……。どうしよう。その……。見合いが、今日のお昼からなんだ。宴会があるのに本当に申し訳無いんだが、一緒に来ては貰えないか？」

「……つまり、こういう事ですか？　ダクネスのお父さんが、危険な冒険者稼業を辞めさせたくて、隙あらば勝手にお見合いをセッティングしてくると。で、ダクネスとしてはまだまだ結婚はしたくない、と」
めぐみんが、ちびちび酒を舐める様に飲みながら言った。

テーブルではアクアが、持ってきたご飯粒で俺がちょっと破ってしまったアルバムの部分を丁寧に修復していた。
破った俺がやろうとしたのだが、なんか楽しそうに、やたら器用に修復していくので任せている。
こいつは、どうでも良い様な事では本当に多芸だな……。

「……ん、そうだ。正直言って、私は今の暮らしに満足している。この稼業を続け冒険者として名が売れれば、やがて邪悪な魔道士や魔王軍の手の者に目を付けられ、抵抗むなしく捕まり、とんでもない目に合わされてしまうかもしれない。それはもうきっと凄いもので、手枷足枷を付けられ、あられもない姿で……っ！　や、やめろお……っ！」
「お前はもう引退して、嫁に行った方がいいんじゃないかな」
自分の想像に浸り、赤い顔でもじもじし出したダクネスから、俺はちょっとだけ距離を置く。
めぐみんが、ちびちび舐めていたコップを置き、不思議そうに言った。
「でも、そんなに嫌なら断わっちゃえば良いじゃ無いですか。政略結婚でもあるまいし、ダクネスが相手を気に入らないと一言言えば済む話じゃないんですか？」

その言葉に、ダクネスが俯き。
手を胸の前で組み、しばらく指をぐにぐにした後言ってきた。

「その……。わ、私は本名を、ダスティネス・フォード・ララティーナと言う。その……。そこそこ大きな貴族の娘だ……」

「「「ええっ！？」」」
俺達三人が驚くのを、ダクネスがちょっと寂しげな顔をして表情をかげらせた。

きっと、今までも名前を名乗り、こうやって驚かれる様な事があったのだろう。

「ダスティネスって……！　そこそこじゃなく、メチャメチャ大きな貴族じゃないですかっ！　この国の懐刀とまで言われている、あのダスティネス!?　この街に居を構える!?」

驚きの声を上げるめぐみんに、ダクネスが小さな声で。

「……そうだ……」

それに続いてアクアが言った。

「なに!?　じゃあ、ダクネスの家の子になれば毎日ゴロゴロ贅沢三昧できるって事!?」

見当ハズレな事を口走るアクアに、ちょっと戸惑った声でダクネスが。

「そ、そうだ……、い、いや、まず家は養女は今の所必要としていないから……」

戸惑うダクネスに、俺は一番大事な事を突っ込んだ。

「ダクネス、お前……！　普段、うむとか、ああ、とかそうだな、とかそんな口調なのにっ！　本名はララティーナなんて可愛らしい名前なのかよっ!!」

「ら、ララティーナと呼ぶなあ……っ！」

ララティーナが赤い顔で、涙目になって大声を上げた。

驚きのあまり立ち上がっていためぐみんが、改めてソファーに座り直し。

「ふう……。まあ、確かに驚きましたがダクネスはダクネスですし。私にとっては超硬いクルセイダーで大事な仲間。まあそれだけの事ですよ」

めぐみんの言葉に、ダクネスが少しだけ嬉しそうな表情を浮かべ。
「……ん、これからも、よろしく頼む……」
そう言って、安心した様に微笑んだ。

アクアが、そんな二人を見て嬉々として自分を指差す。
「……ねえねえ、私もびっくりする事言っていい？　その、こないだは二人とも信じなかったけど、私……。実は、本当に、女神なのよ！」
「「そうなんだ、すごいね！」」
「信じてよー！！」

ぐすぐす言いながらご飯粒で破れたアルバムを修復する作業に戻るアクア。
そんな三人を見ながら、俺は一人考えていた。

なるほど、これで納得いった。
ダクネスが場違いなコスプレしてる理由も、理由も無しに見合いを断われないという事も。
となれば、これは確かにギルドの宴会どころじゃない話だ。
ほっておけば、ウチの大事なクルセイダーが嫁に行ってしま……。

……ん？

……ん？

「これ持っていけばお見合い断われるの？　はい、これ。どう？　完璧でしょ？」
誰かがこれを見ても一体どこが破れていたのかが分からないぐらいに完璧に修復された見合い写真のアルバムを、アクアは得意気な顔で、はいと俺に手渡した。

待てよ。ダクネスが嫁に行く？
それはつまり、ウチのパーティから攻撃が当たらないクルセイダーが寿退社すると言う事だ。
寿退社。
そう、つまりはめでたい事だ。
別にいらない子としてパーティから追い出す訳じゃ無い。
別に、ダクネスの事が嫌いだとか言うんじゃない。
おかしな所は多々あるが、悪い奴じゃない。
だが先行きも不安な俺のパーティで、貴族の令嬢のダクネスを冒険者として縛り付けてもいい物だろうか？
いや、良くない。
ダクネスが結婚すれば、きっとダクネスの親御さんも安心する。
俺も何だかんだ言ってダクネスの事が心配だ。
断言できる。
有り得ないが、もし万が一俺達が魔王の城にでも行ったなら、こいつは間違いなく魔王に捕縛されたがり、足を引っ張り出すだろう。
そうこれはつまり……っ！

みんなが幸せになれる訳だ！

「ああ……。一応理由が必要だが、それを丁重に相手に返して、こういった理由があるのでと謝ればなんとか……。そこで、できれば誰かに付いて来て貰いたいのだが……」
俺の手に渡された、修復されたアルバムを見たダクネスが、少しだけホッとした様な表情で、俺達にそんな事を頼んできて……。

「これだあああああああああああっ！」
「「「ああああああああっ！？」」」

俺はアルバムを真っ二つに裂いていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「じゃあ行ってくるわね！　ごめんねダクネス、ギルドの職員の人に頼まれてて、私、どうしても外せないのよ。昨日からの芸の仕込みもあるしね！」

ギルド職員に宴会奉行として指名されている宴会を司る神様は、ダクネスに申し訳なさそうな顔で謝った。

俺としても、この展開は大変都合がいい。

あの宴会を司る神様がいると、間違いなくお見合いはぶち壊されるだろうから。

アクアは俺から貰った小遣いを上機嫌で握り締め、何度も振り返りながらギルドの宴会へと出掛けて行った。

せっかくアクアが修復したお見合いのアルバムを俺が勢いで再び破ってしまった際、アクアがグズり出し、その機嫌を直す為に宴会での軍資金として小遣いをやったのだ。

それに多少金を持っていれば、その分ギルドの宴会に長く居てくれるだろうと言う打算もある。

アクアを見送りながら、俺は背後に強烈な視線を浴びていた。

それは、涙目で無言で俺を睨みつけるダクネスの視線。

そして同じく、無言で冷たい目で見てくるめぐみんの視線。

こ、怖いです。

「ま、まあ落ち着け。これは、今後の為でもあるんだ」

俺の苦し紛れの言い訳に、ダクネスが未だ涙目ながらも。

「……どう言う事だ？」

俺はダクネスとめぐみんに、こんこんと説明した。

つまり、ずっと冒険者をやって行くのなら、この際一度見合いをやってみてはと言う事を。

どうせ今回断わったとしても、すぐ次の話を持ってくる。

それに、家に三日帰らなかっただけでこれほど素早く見合い話をセッティングされてしまったのだ。

今後、何日も街を出て遠出する様なクエストもあるかもしれない。

その度に今回みたいな騒ぎになるのか？

ならば、一度見合いをしてみて、それをぶち壊してしまってはどうかと言う提案だ。

ダクネスの家の名が傷付かない程度で。

だが、相手からこの話を断わらせる様に持って行く。

するとどうだ、ダクネスの親御さん達も、次から持ってくる見合いの話は慎重にもなるだろう。

何度も見合いをしてその度他家に断わられるとあっては家の恥だ。

無論、俺とめぐみんの二人も、使用人と言う形で見合いに付いて行ってもいい。

そして、さり気なくダクネスが相手に嫌われる様にフォローするのだ。

そんな俺の話を聞いていた二人は。

「そ、それだカズマっ！　それで行こう！　それが上手くいけば、もう一々見合い話が持ち上がる度に父を張り倒しに行かなくて済む！」

お、親御さん可哀想に……。

「なるほど、確かにそれなら、今後は安心して長期に渡るクエストも受けられますね。やるじゃないですかカズマ。私は単に、手の掛かるのが一人嫁に行ってくれればその分新しいメンバー入れて、楽

ができるぜ！　みたいに考えてたのかと思いました」
　めぐみんの言葉にビクリとする。
「ち、違うよ？　ダクネスみたいな優秀なクルセイダーを、今更手放せる訳がないじゃないか？」
　そういや、紅魔族は頭のいい種族と言ってたな。
　今後、めぐみんには警戒しとこう。

「ほ、本当に？　本当にいいのかララティーナ！　本当に、見合いを受けてくれるのか！　と、父さんを殴りに来たのでは無いのか？」
　ララティーナ、もといダクネスの親父さんが、ダクネスの手を握り興奮して言って来た。

　ここはこの街にあるダクネスの実家である屋敷の中。
　そこで、ダクネスが見合いを受ける事を親父さんに報告したのだが。

「本当ですお父様。ララティーナは、此度、このお見合いを受けようかと思いますわ」
　そのダクネスの言葉を聞いた俺とめぐみんが、思わず顔を俯かせた。
　普段と全然違う言葉遣いのララティーナお嬢様に、俺が笑いを堪えて肩を震わせていると、お嬢様が顔を赤くして俺を睨む。
　そんな俺達を見て、親父さんが不審に思ったようだった。
「ララティーナ、この二人は？」
　その言葉に、ダクネスが俺とめぐみんに手を向けて、
「この方々は、わたくしの冒険仲間です。今回の見合いに、臨時の

執事とメイドとして同伴させようかと」
それに、親父さんが顔をしかめて難色を示した。
「……むう。だが、それは……」
これはいけない。

俺はズイと一歩前に出ると、胸の前に片手を当てて、ピシと立ち。
「初めまして。自分は日頃ラティーナお嬢様にお世話になっている、冒険者のサトウ・カズマと申します。この度は、このお見合いが無事成功した暁にはラティーナお嬢様とは、自分達は身分の違いからもう会えなくなるでしょう。ならば最後に、無理を承知で傍に控え、大切な仲間を任せられる相手かを拝見したく存じます」
そんなセリフを、一度も噛む事も無くスラスラ言って、そのまま深々と頭を下げた。
今の俺は超クールだ。
お嬢様を無事嫁に送り出せるなら、どんな事でも出来る気がする。

そんな突如豹変した俺に、ダクネスとめぐみんがぽかんと見ていた。

「カズマ様、こちらが執事服になります。サイズは合うかと思いますが、試してみてくださいませ」
俺はメイドさんから服を受け取り、部屋の中で着替えを済ます。
うん、調度いい。
「大丈夫みたいです」
俺の言葉を聞いて、メイドさんは一礼して去って行った。

親父さんに無事臨時の執事として雇ってもらえた俺は、完全な執事の格好で、部屋の外で俺を待っていたダクネスの元へ。

そこにはすでに、メイド服を着ためぐみんがいた。
普段前髪を綺麗にぱっつんと切り揃え、そして長い黒髪のめぐみんは、清楚なメイド服が意外に似合っていた。

「すげーなめぐみん、その姿でギルドに行ったら、多分誰も頭のおかしい爆裂娘だとは気付かないよ。似合ってるじゃないか」
俺の褒め言葉に、めぐみんが微妙に嫌そうな顔をした。
「褒めてるのかバカにしてるのかどっちなんですか？　ちなみに今は杖を持っていないので、魔法を唱えても威力が半減してるのが残念ですが……」
「や、やめろよ、褒めてるんだよ珍しく！　……じゃあ、準備はいいな？　ララティーナお嬢様」
「ら、ララティーナお嬢様は止めろ！　せめて、人前ではお嬢様だけにしてくれ！」
ダクネスが恥ずかしそうに食って掛かる。

見合いはこの屋敷で行なわれる。
相手も貴族のボンボンだ。
俺は先ほど、ダクネスの親父さんに頼まれた。
頼まれてしまった。
娘が相手に粗相をしない様助けてやってくれないか、と。
そして、更にこうも言われてしまった。
見合いが上手くいったなら、報酬を出させて貰おう、と。

俺と親父さんは元々利害が一致する上に、しかも報酬というおまけまで付いてくる事になってしまった。
これは嫌でもやる気が出てくる。
見合い相手が、よほどロクでもない奴だったら俺も邪魔する側に回ってやろうかと思っていたが、ちょっとぐらい嫌な奴でも多めに見てしまいそうだ。

屋敷玄関の前に使用人達がズラリと並ぶ中、ダクネスと親父さんの両名が玄関前の真ん中に立つ。
俺とめぐみんはダクネスの両側に控えるように。
そういやダクネスの母ちゃんはどうしたんだと思ったが、今は気にしないでおく。

相手は間も無く来るそうだ。
「しかし……。お前が見合いを受けてくれるなんて、本当に嬉しいよ……。相手は本当に良い人だ。幸せになるんだぞラティーナ」
にこやかに笑いかける親父さん。

だがそれに、ダクネスがキッパリと。
「嫌ですわお父様。ラティーナは、見合いを受けるとだけ言ったのです。フフフ……。もう今更遅い。ぶち壊してやる。見合いなんて、ぶち壊してやるぞ！　フハハハハ！」
もう演技する必要は無くなったとばかりに、ダクネスが本性を現した！

それを見た親父さんが俺達の真意に気付き、青い顔をして……
「ま、まさかそこの二人も、最初からそれが目的で……！」
親父さんが怯えた様に俺を見る。

いかんな、ダクネスの奴頭に血が昇って、家の名前を傷つけない程度にって所を忘れてやがる。
もうなりふり構わないつもりだろう。
ならもう、俺もこれ以上演技する必要は無い。

「……お嬢様、その様な、はしたない言葉使いは止めて下さい」

俺の言葉にダクネスと親父さんがハッとこちらを見た。

めぐみんは、貴族の見合いと言うこの状況の緊張の為か、青い顔で先ほどから言葉も発せず固まっている。

俺の発言の真意を汲み取り、ダクネスはみるみる顔をしかめ、逆に親父さんは目に涙を浮かべ、まるで俺を救いの神かという様な目で見だした。

「カズマ、き、貴様……っ！　どう言うつもりだ、裏切る気か！」

「裏切るも何もありませんよお嬢様、今の自分はダスティネス家の臨時執事。お嬢様が幸せになれる事が自分の望みです」

俺の言葉に親父さんが、おお……と呟く。

「カ、カズマ君と言ったね！　この見合いが成功しなくても……、せめて、ララティーナが粗相をしない様にフォローしてくれるだけでもいい！　報酬はたっぷり弾む！　だ、だから……」

俺は親父さんが全てを言う前に、深々と頭を下げた。

「お任せください旦那様。このカズマ、全身全霊を持って、お嬢様を……」

その時だった。

玄関のドアがガチャリと開き、そこからあの写真の青年が現れる。

周りにはお付きの者を引き連れて。

ダクネスが、先手必勝とばかりに腕を組み、見合い相手を睨みつけながら言い放つ！

「貴様がこの私の見合い相手か！　我が名はダスティネス・フォード・ララティーナ！　私の事はダスティネス様と呼」

「おっと危ないお嬢様っ！　頭の後ろに刺す虫が止まっておりますっ！！」

俺はダクネスの後頭部を思い切り引っぱたいた！

8話（後書き）

次回、カズマとダクネスのバトル回に！
いえ、違う意味でのバトルです、すいません。
今回主人公酷いなあ……

9話前編

俺がダクネスの暴走を止めた後。
お嬢様が虫に刺されていないか確認したい、と俺達は見合い相手からちょっと離れた場所に移動し、見合い相手の方は、現在親父さんが時間を稼いでいた。

「おいどう言うつもりだっ！　カズマ、お前私の手助けをしてくれるのではなかったのかっ！？」

俺はダクネスに襟首を掴まれ、廊下へと連れて来られていた。
ダクネスの隣には、俺より背の低いめぐみんが上目使いで冷ややかな視線を送っている。

現在は俺への詰問タイムだ。

「まあ落ち着こうかお嬢様。お前、一つ大事な事忘れているだろ」
「三人の時はお嬢様と呼ぶな！　……なんだ大事な事とは？」
ダクネスが少しだけ落ち着きを取り戻し、話を聞く姿勢になった。
「お前、自分の家の名前に傷付けないって所をすっかり忘れてるだろ。お前、ここでとんでもない悪評が立ったら一番困るのはお前なんだからな？」
俺の言葉にダクネスは眉をしかめた。

「何が困る！　悪評が立って嫁の行き手が無くなれば、心置きなく冒険者稼業が続けられる。最悪、父に勘当されてしまったとしても、それは覚悟は出来ている。……家を勘当され、先行きが不安になった私は、必死に生活しようと無茶なクエストばかり受けるようにな

るかもしれない。そして、やがてそんな無茶が祟り、力及ばず凶悪なモンスターに捕えられ、組み伏せられて……っ！　……そんな人生を送りたい」

「お前とうとう言い切りやがったな」

とんでもない願望を口に出した貴族のお嬢様は、さらに続ける。

「大体、あんな男は私の好みのタイプでは無いんだ。父が持ってくる見合いには、大概ロクな男がいないんだ」

それに、俺は首を傾げた。

いや、相手は結構なイケメンだったんだが。

「あいつ、そんなにダメな感じなのか？　俺は外見しか知らないんだが」

その疑問に、

「あの男の名はアレクセイ・バーネス・バルター。アレクセイ家というかなり大きな貴族の次男坊だ」

それにめぐみんが反応した。

「アレクセイ家のバルターって言ったら、もの凄く評判良い方ですよ？　次男って事で煩わしい権力争いには巻き込まれない立場で、その分伸び伸びと領地経営をしてる方ですね。領民の評判は凄く良くて、善政を敷き、平民相手でも分け隔てなく相手をしてくれる、大変出来た方だとか……」

めぐみんが、ダクネスの不機嫌そうな反応に、自分の解説が間違っているのかと不安になり、段々尻すぼみになっていく。

それにダクネスが不機嫌そうに頷いた。

「そうだ。この、次男で伸び伸び領地経営ができると言う所はまあ悪くはないな。堅苦しい宮廷での政務などが無いのはポイント高い。だが、その他がまるでダメだ！」

「そ、そんなにダメなのか、それは、知らないとは言え俺が悪かっ

た……」

早まった事をしたかとちょっと後悔する俺に、ダクネスが続けた。

「そうだ！　まずこいつは、人柄が物凄く良いらしい。誰に対しても怒らず、家臣が失敗しても、決して怒らずなぜ失敗したのかを一緒に考えようと家臣に持ちかける様な、変わった奴で……」

……？　良さそうな奴じゃないか。

日本に住んでいた頃そんな上司が居たら、俺だって働いていたかも知れない。

「そして非常に努力家で、民の為により知識を付けようと、日々勉学に励んでいるらしい。頭が良く、それでいて最年少で騎士に叙勲された程の剣の腕も持つ。悪い噂など聞かない、正に完璧を絵に描いた様な男だな」

……。

「……あの、話聞く限り凄く良い人っぽいんですが……。ダクネスはその人の何が不満なんですか？」

汗を垂らしながらのめぐみんの言葉に。

「どこが！？　全部だ全部！　まず、貴族なら貴族らしく、常に下卑た笑みを浮かべていろ！　初対面の時の、私を見る時のあの爽やかそうな視線はなんだ！　もっとこう……。私が屋敷で楽な格好でウロウロしている時に、カズマが向けてくる様なあんな感じの舐め回す様ないやらしい視線で見られないのか」

「ベベベベ、別に！？　おおお、俺そんな視線で見てないし！？」

挙動不審になる俺に、ダクネスは尚も続ける。

「部下が失敗しても怒らない？　バカが！　失敗したメイドに、おしおきと称してアレコレやるのは貴族の嗜みだろうが！　あの男は何も分かっちゃいない、あの男の家臣は叱って欲しくて失敗しているんだ！　貴族なら、メイドを片っ端から孕ませるぐらいの甲斐性

を見せろ！」
そんな奴はお前だけだ。
ダクネスは、いよいよ我慢ならないと言った風に拳を握って力説した。
「そもそも、私の好みのタイプはあんなほっといても出来る様な男とは正反対なんだ！　外見はパッとせず、体はひょろくてもいいし太っていてもいい。私が一途に想っていても、他の女に言い寄られれば鼻の下伸ばす様な意志の弱いのがいい。年中発情してそうな、スケベそうなのは必須条件だ。出来るだけ楽に人生送りたいと、人生舐めてるダメな奴がいい。借金があれば申し分ないな！　そして、働きもせずに酒ばかり飲んで、俺がダメなのは世間が悪いと文句を言い、空の瓶を投げて私に言うんだ。おいダクネス、お前のそのいやらしい身体を使ってちょっと金を稼いで来い！　……んくう……っ！！」
力説を終え、頬を火照らせてブルリと身体を震わせるダメネスさん。

畜生、この女はもうダメだ、手遅れだった。
どうしようもない空気の中、無言で立ち尽くす俺とめぐみん。

「……もういい！　私は自分で見合いをぶち壊す！　カズマ、私の邪魔をする気なら、それなりの覚悟をしておけよ！？」
ダクネスはそう言うと、怒りをあらわに見合い相手の元へと向かって行った。

残された俺とめぐみんがしばし無言で立ち尽くす。
やがてめぐみんが、棘のある口調で言ってきた。
「……カズマ、何のつもりですか？」
そんなめぐみんに。
「あの親父さんの顔見たろ。あれは本気で娘の心配してた顔だ。そ

れに、相手も見たろ。これって、政略結婚ってよりも、真剣に娘の幸せ願ってる親の、ちゃんと薦めるお見合いって感じだな」

「……それが、何だって言うんです？　幾ら親だって、娘の人生勝手に決めるなんて……」

めぐみんが強い口調で言いかける。

俺は、それを最後まで言わせなかった。

「いや、ダクネスは貴族だろ。親が結婚を決める。これって、当たり前の事なんじゃないか？　貴族ってのは、生まれた時から贅沢も出来るし英才教育だって受けられる。……ダクネスを見てると、あんまりそうは見えないが……。でも、一般庶民の税金で食ってきた分、一般庶民より自由が無いのは当たり前だ。どんな身分でも良い所があれば悪い所もある。一般庶民は金が無い分自由がある。貴族は金はあるが自由は無い。生まれた時から贅沢してきて、そして自分の人生も好きに決めたい。そんなものは唯のワガママだ。……むしろ、よく今までこれだけ自由にやらせてもらってるなって思うよ俺は。そして、結婚相手は全く欠点の無い男と来たもんだ。お前、これで贅沢言ったら庶民が怒るぞ？」

長々と言った俺の言葉に、めぐみんが更に噛み付いた。

「……でも！　だからって言ったって……っ！」

「まあ、それが一応の表向きの理由な」

俺の言葉に、めぐみんの動きが止まった。

「……えっ？」

俺はめぐみんにその場にしゃがむ様に促し、問い掛けた。

それはもう、真顔で。

「めぐみん。お前は馬鹿じゃない。だから言う。言うが……。ダク

ネスの本当の望みとか、願いってなんだ？」
　めぐみんは俺と同じ様にしゃがみ込み、真面目な顔でそんな事を聞かれるとは思わなかったのか、戸惑った。
「え、えっと……？　このまま結婚せずに、私達と一緒に冒険者を……」
　無難な返事を返そうとするめぐみんに、俺は思わず大声で言った。
「違う！　そんな上辺だけの綺麗な事を聞いてるんじゃない！　お前は馬鹿じゃないんだから分かるだろ！　言え！　ほら、恥ずかしがらずに言ってみろ！　その口で言ってみろ！　どんな表情で言うのか見ててやるから！」
「つ、強いモンスターとかに力及ばず連れさらわれて、凄くエッチな目に合わされる事です！　……カ、カズマ、これってセクハラ？　セクハラじゃないですか？」
　恥ずかしそうに半泣きになるめぐみんに、俺は更に続けて言った。
「セクハラじゃない！　いいか？　お前が大馬鹿だとしたら、あいつはもう手遅れの極バカだ！　夢はモンスターに拉致られて色々されたい？　バカッ！　お前親御さんに、言って来い！　言えるもんなら言って来い！！　お宅の娘さんはこういった立派な夢があるんで結婚は取りやめて夢を叶えさせてあげて下さいって、今すぐ親御さんに説明して来い！」
「ごめんなさい！　言えません！　ごめんなさい！！」
　涙目になるめぐみんに、俺は更に追撃する。
「俺の国にはＡＶ女優って仕事があってな、それはとてもエッチな仕事だ。別にその仕事を馬鹿にする訳じゃ無い。事情があって、しょうがなくそれになるってのなら仕方が無い。だがもし俺に、実家が金持ちな女友達がいて、私特にお金に困ってないけど、夢はＡＶ

女優になる事ですとか言い出したら、引っぱたいてでも止めるわ。親も泣くわそんなもん！」

「正論です！　ごめんなさい、ごめんなさい！」

俺の勢いに気圧されて、なぜか謝り続けるめぐみん。

そのめぐみんが、何だかおどおどしながら言ってきた。

「あ、あの……。でも、それじゃあの人と結婚させる事が正解だって言うんですか？」

俺はめぐみんを納得させるべく、声を落として説明を始めた。

「俺だってそうは言わん。別に冒険者以外に道を見つけるならそれでもいいさ。というかな、今後は俺がダクネスを止めてやる事が出来なくなるからだ。……いいか、めぐみん。お前にはまだ言ってなかったが、俺は冒険者稼業をずっとやってく気なんてさらさら無い。こんなブラックな仕事は趣味とかでやるもんだ。……で、こないだジッポ作ったろ？」

「え……、ええ、まあ」

「あのジッポがな、一つ一万エリスって値段設定なのに飛ぶ様に売れてんだわ」

その言葉に、めぐみんは特に意外でもなかった様に言ってきた。

「まあ……。平均的な魔道具の値段考えたらそんな値段じゃ破格でしょうね。しかも、火って言うのは一生生活に使う物です。大事に使えばずっと使える道具ですし、あんな便利な物が一万で手に入るなら、誰だって買いますよ。あれに慣れたら、もう火打石なんて使えませんから」

まあ、そんなもんなのか。

火打石は一度使ってみたが、あれは素人に簡単に火を起こせるような物じゃなかった。

この世界の人達は良くあんな器用に使いこなせるもんだと感心し

たもんだ。

「俺が作れるジッポの数は、冒険の無い日に鍛冶スキルを稼働させて、まあのんびり作って一日三個ほど作れるかどうかだ。冒険せずに作り続ければ月に九十個。これが全部売れたとして、ウィズへのマージンに材料費を差っ引いても、月の儲けが五十万ほどになるんだ」

めぐみんがごくりと喉を鳴らす。

「つまり、もう俺は危険な冒険稼業をする必要は無い。でもそうなったら、お前らはどうする？　屋敷には適当に住んで貰えばいいさ。暇な時なら俺も冒険に付き合ってもいい。でも俺には、命の危険を冒さなくても割のいい収入を得る方法が見つかった。なんなら、めぐみんも手伝ってくれるならバイト代だって払うさ。アクアは知らん。あいつはいざとなったら芸でも何でも食っていける。……でもダクネスは？　あいつは金を稼ぐのが冒険の目的じゃなくて、本来のアレな目的があるだろう？　俺達が冒険に出なくなれば、ほっとけば一人でクエストに行っちまうぞ。それも、とびきり危険なヤツに大喜びで。……あれは、そういう奴だろ？」

めぐみんが、いつの間にか俺の話に引き込まれた様に、真剣に聞き入っていた。

めぐみんが頷くのを見て俺は続ける。

「放っとけばいい話かもしれないが、それが出来るほど薄い関係じゃ無くなっちまった。別にダクネスが嫌いな訳じゃ無い。寧ろ好きか嫌いかで言えば、そりゃ好きだ。だからこそ、あいつのあんなバカな願望は叶って欲しくない。勿論余計なお世話だってのは分かってるし、俺はダクネスの男でもないんだから、束縛する権利も無い。人の人生勝手に決める権利だって無い。……でも、ワガママだがダクネスがそんな事になるのは嫌なもんは嫌だ。それに何でもかんで

も本人の望み通りにさせてやればいいってもんでもないだろう？」

めぐみんがコクコク頷き。

「でも、だからってバルターさんに嫁がせればそれが上手く行くんですか？　それに、ダクネスの好みの……」

「好みのタイプじゃないから可哀想なんてバカ言うなよ？　さっきの好みのタイプは聞いたろ？　お前ダクネスが、理想の男性見つけてきたってモロさっきのタイプの男を連れてきたらどうすんだ？　いいか？　押し付けるんだよ、バルターってあの男に……。良い奴そうだし、ここは泥を被って貰おうぜ。バカな事しでかそうとするダクネスを、首に縄付けてちゃんと監視しといて貰おう。話を聞いた感じだと、あいつは次男で伸び伸びやってるんだろ？　なら、結婚してもダクネスだってたまになら冒険に出ても良いって許して貰えるかも知れない。そうなったら、その時ぐらいは俺達が冒険に付き合ってやればいい。これなら、親は安心、俺も安心、ダクネスが危険な冒険に出る事も無くなるし、何より、手の掛かる三人の内一人が掃ける」

「手の掛かる三人に私も入ってますよねそれ」

俺は拳を振り上げ、立ち上がった。

「では始めるぞ！　そもそも、冒険者稼業なんて一生できる仕事じゃ無いんだ、こんなブラック稼業、本当は辞められるなら辞めた方がいいに決まってる！　ハッキリ言おう。あいつはバカだ！　百歩譲って、本人がどうしても冒険者を続けたいとか、そんなだけなら別にいい！　俺だって応援する！　だがもう一度言うが、あいつはバカだ！　本来他人が人様の家の事に首突っ込むのはアレだが、目標はダクネスを無事嫁にやる事！　それが無理なら、今後もいつでも寿退社出来る様に、ダスティネスの名前に泥を付けさせない事だ！」

「おい、私の目を見て話をしようじゃないか」

「失礼、お待たせしました」

「しました」

親父さんとバルターが歓談している間、チラチラとこちらを気にしていたダクネスの隣に、俺とめぐみんはスッと立つ。

「カズマの考えには納得はしました。でも、卑怯かもしれませんが、私はやっぱりダクネスには嫌われたくありません。なので、邪魔はしませんがフォローもしません。今日は私は黙ってます」

めぐみんはそう言って、そっとダクネスの隣に佇んだ。

するとダクネスが、俺にヒソヒソと耳打ちしてきた。

「……おい、悪い事は言わない、止めておけ。さもなくば、今日の帰りにはお前が死ぬほど後悔する様な事態にしてやるぞ」

何ソレ怖い。

だが、今の俺に脅しは効かない。

なんせ今は、ダクネスよりも強い味方が俺の後ろ盾として付いている。

そう。

「旦那様、差し出がましい様ですが、そろそろお嬢様とバルター様のお見合いを始めましょうか。お嬢様が、先ほどから待ちきれない御様子ですので」

その言葉に、余計な事を言うなとばかりにダクネスがぎりぎりと歯を食いしばった。

ダクネスの様子には気付かない親父さんが、俺の進言を嬉々として承諾した。
親父さん的には、俺が先ほどダクネスを黙らせる為に頭をはたいた事は特に気にしてはいない様だ。
むしろ、良くやってくれたとばかりにホッとしていた。
「よし！　ではバルター殿、こちらへ。ララティーナ、さあ付いて来なさい。客間に行こうか」
ダクネスが、それを聞いて屈み込んだ。

「わたくし、ヒールの踵が折れてしまった様で……。バルター殿、お手を借りてもよろしいですか？」

言ってバルターに手を伸ばす。
俺にまたはたかれるのを警戒してか、口調だけはまともなお嬢様風になっているダクネス。
だがこれはいけない、絶対何かやらかす気だ！
俺はすかさず片手を出し、
「お嬢様、どうかお手を。幾らバルター様がお気に召されたからと言って、婚約前から甘えてはなりませんよ？　バルター様申し訳ございません、本日のお嬢様は少々浮かれてあだだだだだだだだ折れる折れますお嬢様お戯れを、ちょ、やめ、お止め下さ、止めろってんだろお嬢様！」
俺は涙目になりながら、ダクネスに両手で全力で握られた手を振り払った。
こ、こいつ今、俺が手を出さなかったら物理的にバルターを締め上げようとしやがったのか！

「ど、どうされました？　大丈夫ですか？」
涙目で片手を押さえてうずくまる俺に、バルターが心配そうに声を掛けてきた。

なんていい奴なんだ、あんた頼むからこの狂犬を貰ってやってくれないか。

「うふふ、何でもありませんわバルター様。では参りましょうか」

スタスタと歩いていくダクネスを見送りながら、親父さんが手を押さえてうずくまる俺に、申し訳無さそうに手を合わせて頭を下げた。

「では、改めて自己紹介をさせて頂きます。アレクセイ・バーネス・バルターです。アレクセイ家の次男で、カロン地方に僅かながら領地を拝領しております」

ダクネスとバルターが、客間の白いテーブルを挟み、向かい合って座っていた。

バルターは、見ればかなりのイケメンだ。

鍛えているのだろう、頑丈そうなシッカリした体躯は、俺よりも頭一つぐらい背が高い。

そんなバルターは、穏やかそうな笑みを湛え、ダクネスを見つめていた。

ダクネスの隣には俺とめぐみんが不自然なぐらいに近くに立つ。

バルターはそれをちょっと気にした様子だったが、親父さんが何も言わないので口に出す事はしなかった。

「わたくしはダスティネス・フォード・ララティーナ。細かい自己紹介は省きますわね。カロンの田舎領主でも知っていて当然んんんっ！？」

いきなり失礼な事を言いかけたダクネスが、途端にテーブルに顔

を伏せ、フルフルと小さく震えた。
「ど、どうされました？」
心配するバルターに、
「い、いえ……。その、バルター様のお顔を見ていたら何だか気分が悪くんんーっ！」
顔を耳まで赤くして、何か言い掛けたダクネスが再び顔を伏せた。
「お嬢様は、今朝からバルター様とお会いになるのを楽しみにしておりまして、少々舞い上がっておられるのです。ご覧下さいお嬢様の顔を。真っ赤になって照れているでしょう？」
「そ、そういえば顔が赤いですね……。い、いやお恥ずかしい……」
言いながら、俺は足元に力を込め、ダクネスにだけ聞こえる小さな声で囁いた。

そう、テーブルの下で、ダクネスの足をグリグリ踏みながら。

「……おいお嬢様、これ以上いらん事言ったらもっと強めに踏むからな」
そんな俺の言葉を聞いていたのかいないのか。
赤い顔で何だか荒い息でハアハア言い出したダクネスが、小さな声で呟いた。
「……ご、ご褒美だ……」

当家のお嬢様は何時だってブレない。

娘の様子に、親父さんは今テーブルの下がどういう状況かが分かったらしい。
すぐさま状況が分かると言う事は、親父さんは娘の性癖を知っていると言う事だ。
なぜ娘がこんなになるまでほっといたんだと叱ってやりたかったが、今はそれ所じゃない。

親父さんは俺とダクネスをフォローするべく、慌てた様にバルターに話題を振った。
「バルター殿、カロン領の方はどうだね？　あそこは今不作だと聞くが……。何なら、支援もやぶさかではないよ？　親子になるかも知れないんだからね」
「ははははっ！　その折は是非とも！　しかしご安心ください、不作は以前から予想しておりました。すでに対策は打ってありますのでご安心を」

ダクネスが赤い顔でプルプルしている間、和やかに話は進んでいく……。

これ以上は父親がいては邪魔だろうと言って、親父さんが立ち去って行った。
立ち去り際、親父さんに、頼むとぼそりと言われて。

今、ダクネスとバルターの二人は俺とめぐみんを引き連れて、ダスティネス家の庭を散歩している。
流石は有名な貴族の庭。
大きな池があり、冬に入るというのに、品種改良でもされた高級種なのか、そこかしこに色とりどりの花が咲き乱れていた。

「ララティーナ様は、ご趣味は何を？」
バルターが、見合いの定番の当たり障りの無い質問をした。
「ゴブリン狩りを少々ぐっ！？」
迂闊な事を口走るダクネスに、横から肘でわき腹を突く。

と、先ほどから不自然にダクネスに近い俺に、バルターが苦笑しながら小首を傾げた。
「……随分と仲がよろしいんですね？」
これには、俺がしまったと顔をしかめた。
やばい、やり過ぎたか。
俺がダクネスの評判を下げる要素になってどうする。
見合いに来て、目の前で見合い相手と執事がくっついていれば、面白い訳が無い。
俺がどう誤魔化そうかと言葉を選んでいると、それを察したダクネスが、俺にニヤリと笑いかけた。
こいつ、また何を……！？
「このカズマと言う執事とは特別仲が良く、毎日一緒におりますわ。食事もお風呂も何でも一緒、勿論、夜寝る時も……時も……うう……」
バカな事を口走ったダクネスが、途中から顔を赤らめ言いよどんだ。
だから、お前の羞恥心の基準はどこにあるんだ。
「お嬢様は冗談が大好きでして。こうして、自分で口にしておいて恥ずかしがる可愛らしいお方なのです。ですよね？　ラライティーナお嬢様。どうしましたラライティーナお嬢様？　顔が赤いですよラライティーナお嬢様」
「ううう……。お、覚えてろよ……」
ラライティーナと言う可愛らしい名前を連呼され、歯を食いしばって涙目になるダクネス。
よし、これでしばらくは大人しくなるだろう。
それを見て、バルターがちょっと寂しそうに苦笑しながら呟いた。
「……本当に、仲がよろしいですね……。妬いてしまいますよ」

「またまたご冗談を。執事と主のほんのお戯れで……」

俺のその言葉を聞き、ダクネスがバッと俺から距離を取る。

おお？

「もうまどろっこしいのは止めだ！　こんな事いつまでもやっていられるか！」

何を思ったか、ダクネスが着ていたドレスの長いスカートの裾を、思い切り良く引き裂いた。

白い太ももが露になり、エロネスさんの身体の線が嫌でも目に飛び込んでくる。

長いスカートを動き易く短くし、横の部分もスリットみたいに裂いていく痴女ネスさん。

思わず目を逸らすバルターに、ダクネスが大声で。

「おい、バルターと言ったな！　クラスは騎士なのだから剣は使えるのだろう！　私もクルセイダーだ。今から修練場に付き合って貰おう。そこでお前の素質を見定めてやる。さあ、付いて来いっ！」

いきなりとんでもない行動に出たダクネスを止める事など、俺にはとても出来なかった。

「……この男を見ろバルター。貴族たるもの、常日頃から、このカズマのいやらしい目つきを見習うがいい！」

みみみみ、見てないし！

ちょっと気になってチラッと視線がいっただけだし！

9話後編

「勝負はどちらかが根を上げるまで。この私に、こんなのもう無理、お願いこれ以上は許して！　って言わせて見せろ！　そうしたら嫁でもなんでもどこへでも行ってやる！」

ダクネスが俺達を連れてきた修練場。

ダクネスは、バルターに一本の木刀を投げて渡す。

それを受け取ったバルターは、困った表情で木刀を一振りさせた。

「えっと……。ラティーナ様、私は騎士です。訓練とはいえ、女性に手を上げる事など出来ません……」

そんなバルターにダクネスは、不愉快そうに顔をしかめる。

「何というフヌケだ。そこのカズマはな、自称男女平等主義者で、女相手にドロップキックも食らわせられると豪語している様な奴だぞ。少しは見習え」

ダクネスの言葉にバルターが俺を見るが、その視線が何だか痛い。

バルターは意を決した様に、息を吐き。

「……分かりました。正直言って、今回の見合いは親に押し付けられた物だったんです。そして私は、最初はこの見合いをやんわりと断わりにここへ来ました。……でも、あなたを見て気が変わった。どこにでも居る貴族の令嬢とは訳が違う。あなたは、流石は王国の懐刀の一人娘だ。豪放にして、それでいて恥ずかしがる様な可愛い一面もある。そして物事をハッキリ言える清々しさに、下々の執事に対する、上からではない、同じ様な目線で接するその態度。私はあなたに興味が湧いた。……行きますよ、ラティーナ様！」

いきなりの惚れた宣言と共に斬りかかった！

それはダクネスの木刀を跳ね上げると、そのまますかさずダクネスの肩に打ち込まれる。

それに、バルターがホッと息を吐いた。
勝負あったと思ったのだろう。
ダクネスが、何事も無かったかの様に跳ね上げられた自分の木刀を拾い直し。
「よし。さあ次だ。掛かって来い」

三十分以上が経っただろうか。
「も、もういいでしょう！　もう勝負は見えている！　なぜ諦めないんですかあなたは！」
切羽詰まったバルターの声。
実力自体は圧倒的にバルターの方が上だった。
先ほどからダクネスの木刀はバルターには掠りもせず、逆にダクネスは木刀であちこちを打たれ、そこかしこに痣が出来ている。
だがダクネスは荒い息を吐きながらも一向に目から光が消えない。
汗に塗れ、頬を火照らせながらも、ダクネスは声を張り上げた。
「どうした、もっと遠慮などせずにどんどん来い！　徹底できる強さを見せろ！」

そんなダクネスを見て、バルターが木刀を投げ捨てた。
そのまま両手を上げて降参する。
「……参りましたラティーナ様。私の負けです。技量では勝っていても、心の強さで負けました……。あなたは、とても強い人だ……」
バルターが、そう言ってダクネスを眩しそうに見つめ、そして笑った。

ダクネスはと言えば、不満そうに肩を落とし。
「……なんだ、終わりか。つまらん、修行して出直して来い」
そのダクネスの言葉に、バルターは声を上げて笑い出した。
それは、何だかとても楽しそうな、吹っ切れた笑いだった。
そして、バルターはダクネスに聞こえるか聞こえないかの小さな声で。
「……本当に、惚れてしまった……」
そんな事を呟いた。

一見、いい話だなと思うのに。
内情を知っている俺にはどうしても……。
きっとダクネスの荒い息とあの火照らせた顔を見て、痛みに耐えながら頑張るクルセイダーとでも映ったのだろう。
俺が深々とため息をついていると、当のダクネスがバルターの投げた木刀を拾い上げ。
「よし、来いカズマ。お前のその容赦の無さと外道さを、バルターに見せて教えてやれ」

トンチンカンな事を言って、それを俺に渡してくる。
……こいつは何を言い出すんだろう。
いや、こいつはバルターとのやり合いで身体に火が付いてしまったのだ。
おいふざけんな、そんなもん相手できるか。
「……私も見たいな、ララティーナ様が信頼を寄せる君が、どんな戦いをするのかを」
そんな余計な事を言い出すバルター。

ちょっと離れた所には、今までは退屈そうにしていた、空気の様だったためぐみんが、おっ、と展開の変化に興味を示す。

……ナニコレ。

「はあ。もういい分かった。どうせもう見合いは失敗だしな。それにバルター様も、お嬢様の悪い噂なんぞ流さないだろうし」

俺はよっこらせと立ち上がる。

「よし、いいぞカズマ！　実は、私は一度お前とやり合いたかった！　初対面の女相手でも下着を剥こうとするその非道さ！　様々な搦め手を使うその悪辣さ！　さあ、全力で掛かって来るがいい！」

ダクネスの言葉で、俺を見るバルターの視線が本当に痛い。

この寒い時期に、この火照った変態の相手をまともにしてやるつもりもない。

俺は空いた片手を突き出すと。

「『クリエイト・ウォーター』！」

ダクネスの頭から水を被せた。

「えっ！？」

驚くバルターに、俺はどうしたのかと声を掛けた。

「……どうかしました？」

それにバルターが、慌てたように、

「……い、いや、木刀を握っての試合で、普通は魔法を使わないだろうと……」

おお？　そういう物なのだろうか。

というか……。

ダクネスの姿を見て、めぐみんがぼそりと呟いた。

「……さ、最低……」

言われてダクネスの姿を見れば、ずぶ濡れになり、下着がスケて、破れたスカートと相まってそれはもう凄く……ありがとうございます、ありがとうございます。

バルターはもはやずっと下を向き、顔を上げる余裕もなさ気だ。

「フ、フフフ……。見ろバルター！　この、木刀での勝負と思いきや、いきなりこんな辱めを仕掛けてくる。この男のこういう所をちゃんと見ておけ！」

ずぶ濡れになったダクネスが、誤解を招くような事を口走る。

「お、俺はそんなつもりでやったんじゃ……！　ああもうっ、一撃で終わらせるからな！」

全力で来いと言ったのだから、全力で行かせて貰おう。

不死王の手を遠慮なく発動させ、木刀越しにダクネスを軽く突いた。

弱体化が発動すると嫌だなと思いながらダクネスに打撃を与えると、昏睡状態に陥ったダクネスがそのままあっけなく崩れ落ちた。

それを見たバルターが、驚愕の声を上げる。

「一撃だと！　なんと容赦の無い、まさしく鬼の様な男……！」

「し、失礼なっ！」

しかしまさかリッチーのスキルを使ったとも言えずに困っていると……。

「訓練場に居ると聞いて、ちょっとした飲み物の差し入れを……」

そこにタイミング良く現れたのはダクネスの親父さん。

だが親父さんは、手にしていた飲み物の入ったかごを突然ボトリと落とす。

どうしたんだと思っていると、引き連れている使用人の人達もぽ

かんと口を開けている。
その、みんなの視線の先には……。
そこにはダクネスが、全身に痣を付けられ、スカートが裂かれたあられもない状態で、しかもずぶ濡れで色々な物が透けた状態で意識を失い、地に横たわっており……。
……俺とバルターは思わず顔を見合わせる。
親父さんは俺とバルターを指差すと。
「こいつらを処刑しろ」
「「違うんです、誤解です！」」
俺とバルターは同時に叫んだ。
俺とバルターの二人は、その場に居ためぐみんの証言により、事情を何とか説明し、事なきを得ていた。
ついで、俺とめぐみんの素性もすでにバルターに明かされている。
最も、バルターは俺が執事ではないと、かなり最初から気付いていたらしいが。
こんな事になった肝心のダクネスは、俺のスキルのせいでまだ眠っている。
応接間に通された俺達は、タイトな黒のスカートと黒のシャツという、冒険者姿の時の普段着に着替えさせられた、寝息を立てるダ

クネスを見守っていた。
やがて、親父さんが、ダクネスを見ながら口を開いた。

「娘は、元々人付き合いが苦手な方でなあ……。それは、身内の者に対してもそうだった。カズマ君、君は娘と同じパーティなんだろう？　最初、娘はあまり話さなかったんじゃないか？」

親父さんの言葉に首を傾げた。
どうだったか。
あまり覚えてはいないが、そういえば今ほどは饒舌には話さなかった気はするな。
口を開いてもロクな事しか喋らなかった記憶はあるのだが。

「娘は、クルセイダーになっても一人きりでなあ……。毎日毎日、エリス様の教会に通い詰め。冒険仲間が出来ますようにと、エリス様にお願いしていたよ。そんなある日の教会からの帰りに、娘が、初めて仲間が出来た、友達が出来た、盗賊の女の子と仲間になったと喜んで……」
……おっと、流石は本物の女神様。
エリス様、いい仕事するなぁ……。

「家は、家内を早くに亡くしてな……。それから、新しい妻も娶らず男手で、甘やかしながらもとにかく自由に育てて来た。……それが、悪かったんだろうなあ……」
しんみりと言う親父さん。
親父さんが言うそれとは、ダクネスのあれな性癖の事だろう。
自由に育て過ぎたから、捕えられたりされたがる娘に育ったってか？
いや、アレは真性だと思うよ親父さん。

「ラティーナ様は、男勝りですが素晴らしい女性だと思いますよ？　カズマ君がいなければ、私は本気でラティーナ様を妻に貰いたいと思っています」
突然とんでもない事を口走ったバルター。
この人いきなり何言い出すんだ。
「すいません、ちょっと何言ってるのか分かんないです」
俺のその言葉を聞き、バルターは、まるで隠さなくてもいいとでも言うかの様に。

「いいんだ。君の方が、ラティーナ様を幸せに出来るだろう。君達の信頼関係はしっかり見せて貰ったよ。君達は、お互いに愛し合っているんだろう？」
「よし、お前ちょっと表に出ろ、貴族だろうが関係あるか、ぶっ飛ばしてやる」
「カズマ！　お願い止めて下さい、せめて私がいない所で！　私まで一緒に処刑されます！」
俺が、背後から俺を止めるめぐみんに逆らい、不死王の手を発動させ、失礼な誤解をしているバルターが、枯れるまでレベルドレインを発動させてやろうとしていると。

「ふふ、ははははっ！」
親父さんが突然笑い出した。
どうしよう、今日はもう色々有り過ぎて一杯一杯なんですが。
これ以上何かあるのはマジ勘弁。

「よし分かった！　バルター殿。娘がもし、いきおくれた時は、貰ってやってはくれないか」
親父さんのいきなりな発言に、バルターが戸惑い。
「い、いえ……。私はそれは、勿論構いませんが、しかし……」
俺を見て何か言い掛けたバルターを遮り、親父さんが尚も続けた。

「そして、カズマ君」
「ほっ！？　へい、何でしょうか？」
いきなり振られ、俺も戸惑う。
「娘をよろしく頼むよ。コレがバカな事をしでかさない様、見張ってくれ。頼む！」
このおっさんは何を言うんだろう。

アレだよな、冒険者仲間としてって意味だよな。
いやまあそれはいいんだけども、今までとやる事は変わらないし。
いや待てよ？
やっぱ良くない、俺はもうジッポ販売で楽に温く生活していけるのだ。
これ以上お守りをする必要は……。

「……んん？　む……。……？　応接間？　……ああ……そうか……」
ダクネスが、起き出してきた。
それと同時に、昏睡状態になる前の記憶を思い出したのだろう。
「……む、私はカズマに昏睡状態にされたのか。……なるほど、そして意識を失って無防備なこの私の身体をいつもの様に弄び……！」
「してねえよ、そんな事！　って、いつもの様にって誤解を招く言い方すんな！　お前が寝てた間に、今微妙な空気なんだよ！」

それを聞いたダクネスが、周囲を見渡し。
そして、俺を見てニヤリと笑った。
何だろう。
何考えてるんだろう。
俺は、この屋敷に来た時のダクネスの言葉を思い出す。

今日の帰りにはお前が死ぬほど後悔する様な事態にしてやる。

大丈夫だ、問題ない。
ダクネスがこれ以上何を口走っても問題ない。
落ち着け、今日の俺は超クールだ。
落ち着いて対処すれば問題な……

「お父様。バルター様。どうか、今回の見合いは無かった事にして下さい。今まで言い出せなくて隠してましたが……。私のお腹には、カズマの子が……」
「おめー童貞の俺に何言ってやがんだこらあああ！　何もしてないのに俺の子が？　処女のクセに、マリアかおめーは腹パンすんぞ！！」

シャレにならない事を口走ったダクネスと俺の態度を見て、バルターが可笑しそうに。
「そうか、お腹にカズマ君の子がいるのなら仕方が無い。では、諦めるとします、ララティーナ様」
言って、バルターが立ち上がった。
くそ、ダクネスめ。
眠ってたお前は知らないだろうが、もう余計な事を言わなくても良かったのに。
失礼しますと、にこやかに挨拶して出て行くバルター。
……良い奴だったなあ。
あんた、ほんとにダクネス引き取ってくれよ……。
してやったりとにやつくダクネスを見ながら。
俺は深々とため息をついた。
しょうがない、もう少しだけ、冒険を……。

と、俺とダクネスとめぐみんは、一人様子がおかしい人物がいる事に気が付いた。

「孫……。初孫……。ここここ、このワシに、可愛い孫が……っ！」
ポロポロと泣き出した親父さんに、俺達は三十分程かかってようやく嘘だと納得させた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「まったく……。これでは、素直に最初から見合いを断っておいた方が良かったじゃないか」
「それはこっちのセリフだよ。もうこんな厄介事に巻き込むんじゃないぞ」
「よ、よく言いますね……。カズマが一番引っ掻き回して話をややこしくしたクセに……」
俺達三人はダクネスの実家を後にして、ギルドへと向かっていた。

時間はそろそろ夕刻だ。
今日は領主の使いとやらが来る日のはずだ。
ギルドでは、まだ宴会はやっているだろうか。
またアレが変な厄介事を起こしてないだろうか。

もうジッポ販売と言う権益を得たのだ、あくせく冒険に行く必要は……、
おっと。
「おいダクネス。今の内に言っとくが、俺、これから冒険に出られる数減ると思うから。でも、お前の親父さんにダクネスがバカやらかさないか見ててくれって頼まれてな。……一人では、冒険行くな

よ？」
その言葉に、ダクネスが額をぴくりとさせた。
「バカな！　それでは困る！　それでは私の、私の冒険者になった意味が……！」
そんなダクネスの怒鳴りをはいはいと聞き流し、到着したギルドの中へ。
そこは酷い有様だった。
何が酷いって……。
「あら？　カズマ、来たのね。おかえりー……。どしたん？　みんなその格好は」
「それはこっちのセリフだ、お前こそなんだその頭のヤツは」
アクアは、速くギルドに行きたくて、そのまま借りてきた執事服やめぐみんのメイド服の事を言っているのだろう。
だが俺がアクアに言っているのは……。
「ああ、これ？　待ってて、今帰らせるからね」
アクアの頭に生えていた、小振りのカリフラワー。
えっと、何がどうしてこうなった。
いや、帰らせるって……。
色々突っ込みたい事が多過ぎた俺の前で、アクアが小さな縦笛を吹いた。
ぴょろー。
その音色と共に、カリフラワーがヒョイとどこかへ消えた。
……おい。
「えっ。今の何？　何であんな物が生えてて、そんで、生えてたア

レはどこに消えたの？」
そんな俺の疑問には答えずに、アクアがギルドの中のカウンターを指差した。

「そんな事より、カズマ！　お金受け取って来なさいよ。もう、ギルド内の冒険者達の殆どは報奨金貰ったわよ。勿論私も！　もう結構飲んじゃったけどね！」
何が嬉しいのか、貰ったとおぼしき褒賞の入った袋を開けて見せて、たはー、と頭をぽりぽりとかきながらケラケラ笑う。
おおう、出来上がってやがる。
見れば、ギルド内の冒険者達も、皆歩く事もできそうにない程にぐでんぐでんだ。

俺は酔っ払い達は放っておき、カウンターへと歩いていく。
隣には、ダクネスとめぐみんも。
見慣れた受付のお姉さんが、俺達を見て何故か微妙な顔を浮かべた。

「ああ、その……。カズマさん、ですね？　お待ちしてました」
……？
受付のお姉さんのその態度に、どうしたんだろうかと疑問に思う。
「あの……。まずはそちらのお二方に報酬です」
お姉さんは、言って小さな袋をダクネスとめぐみんに手渡した。

……ん？

あれ、俺のは？
疑問に思っている俺に、お姉さんが困った様に。
「……あの……。ですね。実は、カズマさんの御一行には特別報酬が出ています」

……！？

どういうこった？

「え、何で俺達だけが？」

俺の、その疑問の言葉に。

ある誰かの声が響いた。

「おいおいＭＶＰ！　お前らが居なきゃそもそもデュラハンなんて倒せなかったんだからな！」

その誰かの声に、そうだそうだと騒ぎ出す酔っ払い達。

こ、こいつら……。

俺はこの所苦労続きだった事に加え、今日のバタバタしていた出来事もあり、不覚にもその優しさにジンと来た。

俺は四人を代表して、特別報酬を受け取る事に。

受付のお姉さんが、コホンと一つ咳払いをした。

「えー。サトウ・カズマさん率いる一行は、魔王軍幹部ベルディアを見事討ち取った功績を称えて……。ここに、金三億エリスを与えます」

「「「「さっ！？」」」」

俺達四人は、その場で思わず絶句した。

ギルド内もシンと静まり返る。

そして……。

「おいおい、三億ってなんだ、奢れよカズマー！」

「うひょー！　カズマ様、奢って奢ってー！」

ギルド内から木霊する、奢れコール。

奢ってやろう奢ってやろう！

あっ、そうだ！

「おいダクネス、さっき、これからは冒険の数が減るって言ったな。あれは間違いだ。これからは、冒険の数が、凄く、減る！」

「おい待てっ！　それは困るぞっ！？」

盛り上がっていくギルド内と俺達四人。

そんな俺に、申し訳無さそうな表情の受付のお姉さんが、一枚の紙を手渡した。

それは、〇が沢山並んだ紙切れだった。

……？

この世界の小切手か？

「ええと、ですね。カズマさん一行が毎日爆裂魔法を撃ち込んでいた、領主様所有の廃城ですが……。ベルディアが消滅した為彼の魔力でなんとか保たれていた、廃城が崩壊しまして。……まあ、魔王軍幹部を倒した功績もあるし、廃城なんで、全額弁償とは言わないから、一部だけ払ってくれ……と……」

受付のお姉さんは、そのままそそくさと逃げ出した。

俺の手元の紙を見て、まずアクアが逃げ出した。

次いで、逃げ出そうとするめぐみんの襟首を、俺は掴んで離さない。

俺達の雰囲気で請求の額を察した冒険者達が、みんなそっと目を逸らす。

請求を見ていたダクネスが、俺の肩にポンと手を置く。

「褒賞三億の、弁償金額が三億六千万。……カズマ。明日は、金になる、強敵が相手のクエストに行こうか」

ダクネスが、心底嬉しそうに良い笑顔で笑いやがった。

9話後編（後書き）

というわけで二話更新

すいません、明日は多分お休みです

１０話

「泊ーめーてー」

クリスが大きなリュックを背負い、屋敷に来た。

結構な雪が降った。

雪が降ると、もう冬の冒険者はやる事がない。

正確には、駆け出し冒険者にとって冬の討伐は危険すぎるから誰もやらないのだ。

雪が積もるこの季節、馬小屋は堪えたのだろう。

俺もスキルを教えて貰ったし、それにダクネスの友人だ。

寒くなったらクリスを泊めてやってもいいかと、以前からダクネスに頼まれていたのだ。

「部屋は使ってないのが大量にあるから、適当な部屋を使うといいさ」

俺は屋敷の広間にて、ガチャガチャと胸当て等の装備を身につけながら言った。

俺の言葉に、クリスが大喜びで背負っていた荷物を降ろす。

友人がしばらく泊まる事になり、なんとなくダクネスが嬉しそうだ。

荷物を降ろしたクリスが、クエストの支度をしている俺の姿を見て言った。

「いやー、悪いね！　冬の間、家事とか手伝うよ！　……あれ？　キミ、この寒いのにクエストなんかに行くの？」

俺は腰に愛剣を差しながら、ギリッと歯を食いしばり。

「莫大な借金背負ったからな！　背負ったからなっ！！」
思わずいつもより大声で返していた。

俺の隣では、すでに準備を終えたためぐみんが、自分の杖を乾いた布で磨きながら、深々とため息を吐く。
「……まあ、ダクネスのお父さんの尽力で、支払いは、ある時払いでいいって事になりましたし。……それにしても、理不尽な話です……」

それにダクネスが、重い鎧をガチャリと鳴らし。
「手柄を横取りされた事がよほど腹に据えかねたのだろうな。器の小さいあの豚領主は、ベルディア討伐の為に、大金使って腕利きの冒険者や傭兵を雇い集めていたらしいし。手柄をさらっていったカズマへの逆恨みと嫌がらせ……。後は人を集めるのに金を使ったから、褒賞を出し渋ったのだろうな」

俺は篭手を付ける手を思わず止めて、
「何ソレひでえ。……って言うか、領主を知ってる口ぶりだな。まあ、ララティーナだしな、そりゃ領主ぐらい面識あるのか」
「ら、ララティーナと呼ぶな！　……私の父は、今は半分隠居の身だが国でも名の知れた重臣だからな。今もこの街でのんびりしてはいるが、領主の相談役と言う肩書きになっている。だもので、今でもたまに困った事があると、その領主が家に来るのだ」
ほお。
あの親父さん、娘の教育には大失敗した様だが、仕事の面ではあんな感じでも出来る男なのか。
そういや国の懐刀がどうとか、めぐみんが言ってたな。

「……お嬢様、お父様のお力添えで借金の方もなんとかなりませんかね？」

「お嬢様と呼ぶな。……ならんな。父は極力あの豚領主には借りを作りたがらない。今回色々と尽力してくれたのも、父なりのカズマに対する礼らしい。これ以上の借りを作ると、また……」

……？

「また？　なんだ？」

「……また私を嫁にくれと頼みに来るだろうな。私は、領主に何度も何度も求婚されていてな……。ううむ、家に相談に来る度に、イヤらしい目で私を見てくる。あの下卑た目つきとでっぷり太った身体、それでいて性欲も強く金に汚いと言う、貴族のお手本の様な奴だ。なんせ、父が相談役としてここに留まっているのも、王に頼まれ、その領主が不正をしないかの監視も兼ねているぐらいだからな。……とんでもない下衆で、ちょっとだけ私の好みに合わない事もないのだが、父が頑なに見合いを拒んでなぁ……」

つまりダクネスが見合いしてもいいと思えるぐらいにロクでもなく、典型的な駄目な貴族か。

まあ、ダクネスの親父さんのおかげで、支払うのは金が出来たらで良いって事になった訳だし。

そもそも、要らなくなって廃棄したから廃城って言うんだし、それを魔王幹部に乗っ取られた時点で、俺達が城を攻撃したってしょうがない話だろう。

こんなもの言い掛かりに近いんだから、屋敷は勿体無いがイザとなったら他の国に逃げちまうか。

つか、借金六千万ってアホか。

ロクな領主じゃなさそうだが、バックレたって借金ぐらいで、まさか命まで取りには来ないだろう。

……来ないよな？

「なあ、その領主ってねちっこい？　執念深かったりする？」
それにダクネスがふふっと笑った。
「執念深いな。私がまだ子供の頃から、ずっと事ある毎に近づいて来ては口説いてきた。カズマもロリコンだそうだが、こいつは凄いぞ。子供はもとより、子を何人も生んだ人妻まで、欲しい女は全部手に入れるという悪評がある。私との結婚も諦めてはいまい。私と結婚すれば、我が家の家格が付いてくるのだ。父に何度も断わられて、私に対する愛憎が凄いらしいぞ。……そんなのにもし捕まったらどうなってしまうのか、考えただけでゾクゾクするな！」

「ロ、ロリコンじゃないから……っ！　俺は子供が好きなだけだから！　……って、おい変態、もしかしてウチのパーティにお前がいるのもあるから、こんな理不尽な要求突きつけられてるとかは無いよな？　そこまでは恨まれてはいないんだろ？」
「……」
「おい黙るなよ。なんとか言えよ。おい」

それには答えず、ダクネスが、誤魔化すように言ってきた。
「……今回の件で、お前がいつもより一割り増しぐらいで男前に見える」
「お前の好みを知ってるから、ちっとも褒め言葉に聞こえねえよ！」

俺とダクネスのそんなやり取りを見ていたクリスが言った。
「……なんかキミ、知らない間に随分とダクネスと仲良くなったんだね？」
頬の傷をポリポリと掻いて、面白くなさそうに言うクリス。
そこに、なんだか楽しそうに自慢の杖をきゅっきゅと磨き続けるめぐみんが、余計な一言を。
「まあ、なんせ先日、ダクネスのお父さんに、娘をよろしく頼むと

言われたぐらいの仲ですし」
「なななな、なにおーっ！？」

よし、落ち着け。
クリスが目を白黒させて俺を凄い勢いで見る。
そのクリスに向けて、おれはどうどうと手で抑えた。
「落ち着こう、落ち着いて話をしよう。実は……」

と俺が説明する前に、ダクネスが勝手に喋り出す。

「実は昨日の事なんだが……。カズマに、無理やり好きでもない男と結婚させられそうになってな。私はそいつと戦いなんとか男に負けを認めさせたのだが……。その後カズマが、痣だらけで下着もあらわな私にこの寒空の下、水をぶっ掛けた後昏倒させ……。目が覚めたら、なぜか父がカズマを認めていた」
「よし、表に出ろ、決闘だ！」
「ちちちち、ちがー！　大体合ってるけど、大分違う！」

怒り狂うクリスの誤解を解くのに、えらく時間が掛かった事は省略する。

きっちりと装備を整え、準備を怠っていないかを確認。
なんせ、今日受けるクエストはいつもとは訳が違う。

「おい、そろそろそいつを起こしてくれ」

準備を整えた俺は、めぐみんとダクネスに言った。
二人の視線は、広間に備え付けられていた明々と燃える暖炉の前。
そこに広間の真ん中に置いてあったソファーを勝手に移動させ、気持ち良さそうに眠りこけるアクアの姿。
こいつは、寒くなってきてから部屋に戻らず、酒をここに持って来て、一日中暖炉の前を占領している。
それにクリスが近寄り、起こそうとする。

「アクアさんアクアさん？　みんなクエストに出掛けるみたいですよ？　起きてくださ……、あーあー……」
クリスがアクアをユサユサと動かすと、それにともないアクアが口の端からよだれを垂らした。
それをかいがいしくハンカチで拭いてやるクリス。
なんだろう、バカな子供の世話をしている母親を見ている気分だ。
口元を拭いてもらい、その感触でアクアが目を覚まし起き上がる。

「……はれ？　あんた誰？　……っていうか、何か見た事ある……。なんだか懐かしい様な……」

寝ぼけた事を言うアクアに、
「おい忘れるな、クリスだクリス。会った事あるだろ、ダクネスの親友の」
「は……はは……。どうも……」
俺がアクアに説明すると、クリスが困った様にぽりぽりと頬の傷跡を掻いた。
俺はよし、と気合を入れると立ち上がる。

「それじゃあ、クリス、まあ暖かくなるまで好きに屋敷は使ってくれ。じゃあ、働いてくるから留守番頼む」
「はいよー。では気をつけて。行ってらっしゃい！」

ギルドに着いた俺達は、真っ直ぐにクエストが張り出されている掲示板に向かう。

ギルドの中は飲んだくれ冒険者で賑わいを見せるにも関わらず、掲示板の前は閑散としていた。

寒い上に危険なクエストしか無いとなれば、皆仕事などしたがらないのだろう。

「どれどれ……っと。……おお……。報酬は良いのばかりだが、本気でロクなクエストが残って無いな……」

縄張りを広げてきた白狼の群れの討伐２００万エリス。冬眠から覚めてしまった一撃熊が牧場に出没、討伐なら３００万、追い払うなら５０万。

狼の群れなんて無理だな。

大型犬より大きくて速いのが大量に襲ってきたら、まずやられる。

狼なんて群れで狩りをする生き物だし、柔らかそうなめぐみん辺りを狙われたら防ぎきれない。

熊は論外。

俺とめぐみんが攻撃喰らったら、首を撫でられただけで即死だろう。

しかも一撃熊とか物騒な名前なヤツに関わりたくない。

後は……。

……おお？

「なあ、この雪精討伐って何だ？　名前からしてそんな強そうにも思えないんだけど」

雪精討伐。

一匹１０万エリス。

今まで倒してきたモンスターの中でも随分高い報酬だが、名前的には狼やら熊ほど強くは感じられない。

「雪精は基本的にとても弱いです。雪深い雪原に多く居ると言われ、剣で斬れば簡単に四散させる事が出来ます。ですが……」

めぐみんの言葉に、俺はその張り紙を剥がし取る。

「雪精討伐？　雪精は、特に危害を与えてくる訳じゃ無いけども、一匹倒す毎に春が半日早く来るって言われるモンスターよ。それを受けるなら私も準備してくるわね」

張り紙を剥がした俺に、アクアがちょっと待っててと言い残して何処かに向かう。

めぐみんは雪精クエストを受ける事に文句は無さそうだ。

と、ダクネスがぽつりと呟く。

「雪精か……」

昨日あれから、強いモンスターと戦いたがっているダクネスは、雪精クエストは嫌がるかと思っていたが、なぜかちょっと嬉しそうだ。

……？

ちょっと疑問に思いながらも、俺達はアクアを待って、雪精討伐に出発した。

街から離れた所にある平原地帯。

そこが、今は一面真っ白に輝いていた。

そして、きっとこれが雪精なのだろう。

そこかしこに、白く淡い、手の平ぐらいの大きさの丸い塊が漂っていた。

見るからに危険は無さそうだ。

しかし、こんな特に害も無さそうな物の討伐で、なぜ十万エリスもの褒賞がもらえるのだろう。

こいつを一匹倒す毎に春が半日早く来るだとか言っていたから、春に来て欲しい人達が高額の報酬を掛けているのかも知れない。

クエストは、報酬が高額でも、必ずしも対象のモンスターが強いとは限らない。

強さは普通で、人自体には危害は与えないが、畑の農作物を食い荒らすモンスター。

弱いが、積極的に人を襲う、好戦的なモンスター。

こう言った二つの場合、弱くても積極的に人を襲うモンスターの方が、大概報酬が大きくなる。

雪精の報酬の高さも気になるが、俺はそれよりももっと疑問に思う事がもう一つ。

「……お前、その格好どうにかならんのか」

俺は、虫網と小さな小瓶を幾つか抱えた、冬場に蝉取りにでも出かけていくバカな子供の様な格好のアクアに、呆れて言った。

そんな俺に、アクアが、はあー？　と言った、バカを見る様な目で俺を見た。

この野郎。

「全く。いい？　これで雪精を捕まえて、この小瓶の中に入れて置くの！　で、そのままお酒と一緒に箱にでも入れて置けば、いつでもキンキンのクリムゾンビアーが飲めるって考えよ！　つまり、冷蔵庫作ろうって訳！　何か作ろうってのはカズマだけじゃないのよ？　どう？　頭いいでしょう？」

……何かオチが読めそうだが、本人が勝手にやる事なので好きにやらせておこう。

「めぐみん、ダクネス！　そっちに逃げたの頼む！　くそっ、チョロチョロと！」

普段はゆっくり漂っているクセに、攻撃すると突然素早い動きで逃げる雪精。

こいつに当てるのはなかなか困難だ。

まあ、一匹十万なんて高額な褒賞が付いているのだから、これぐらいは当たり前なのか？

俺は三匹目の雪精を仕留め、ほっと息を吐いた。

「四匹目の雪精取ったー！　カズマ、見て見て！　大漁よ！」

嬉々としたアクアの声にそちらを見ると、アクアは虫網で捕まえた雪精を、小瓶にきゅっと詰めていた。
……俺も剣より虫網の方が良かったかな。
……もしあんまり討伐出来なかったら、あいつの持ってる雪精も討伐してしまおう。

「カズマ、私とダクネスで追い回しても、すばしこくて当てられません……。爆裂魔法で辺り一面ぶっ飛ばしていいですか？」
ダクネスと二人で追い回し、杖で叩き、ようやく一匹仕留めためぐみんが、荒い息を吐きながら言ってきた。
白狼とか一撃熊とかが寄ってこないかとも考えたが、敵感知スキルで常時注意して、反応があれば逃げればいいか。
「おし、頼むよめぐみん。まとめて一掃してくれ」

その言葉にめぐみんが嬉々として呪文を唱え……

「『エクスプロージョン』ッッッ！」

何週間も時間は掛けたとはいえ、廃城すらも崩壊させた爆裂魔法が雪原の真ん中に放たれる。
冷たく乾いた空気をビリビリと振動させて、轟音と共に白い雪原のど真ん中に、茶色い地面を剥き出させたクレーターを作り上げた。

めぐみんが、すぐさま自分の冒険者カードを確認する。
「八匹！　八匹やりましたよ。レベルも一つ上がりました！」
おお、やるなあ。
と言う事は、俺が三匹、めぐみんが九匹。

……アクアの分も取り上げると、合計十六匹で、百六十万エリス。
四人で割って、一人四十万か。

まだ一時間も経っていないのにこの稼ぎ。
なんだよ、冬の討伐は美味し過ぎるだろ。

なんでこんな弱くて美味しい雪精討伐を誰もやらないんだ？

……そんな俺の疑問に答えるかの様に。
俺達の前に、突然それが現れた。

「……ん、出たな！」
ダクネスがそいつを見て、大剣を構えて嬉しそうにほくそ笑む。
突如湧き上がる様に出現したそれは、敵感知スキルで逃げるどころの話では無かった。

「あ……ああ……、や、ヤバイ、ヤバイ……。カズマ、カ、カズマ……！」
めぐみんが、杖を両手で握り、小さく震える声で呟く。

「……カズマ。なぜ冬になると、冒険者達がクエストを受けなくなるのか。その理由を教えてあげるわ」
アクアが一歩後ずさり、そして、それから僅かにも目を逸らさずに。

俺達の視線を集めるそれは、ズシャリと一歩、前に出る。

「カズマ。あなたも日本に居たんだし、昔から、この時期になると天気予報やニュースで名前ぐらいは聞いたでしょう？」

それは全身を白く染め上げた重厚な鎧姿で、俺達に途方も無い殺気を浴びせつける。
日本人である俺は、それを一目見て、もうアクアが言う前に何な

のかを把握した。
その馬鹿げた姿にもうアクアの言葉を待つまでも無いが、それでも俺はじっと待つ。

「そう、雪精達の主にして、冬の風物詩とも言われている……」

日本式の白く重厚な鎧兜に、同じく真っ白で、素晴らしくキメ細やかな陣羽織。
そして、白い総面を付けた鎧武者が、おぼろげな、白い冷気を漂わせる刀を握り立っていた。

アクアが、真面目な顔で呟いた。
「……そう、冬将軍の到来よ」
「バカッ！　このクソッタレな世界の連中は、人も食い物もモンスターも、みんな揃って大バカだ！！」

恐ろしく斬れそうな抜き身の刀を煌めかせ、冬将軍が襲い掛かってきた！

11話

白一色の鎧兜。

それは味気ない色ながらも、戦国鎧特有の華やかさは、僅かにも損なわれてはいなかった。

将軍の名に相応しく、決め細やかな意匠を凝らされた陣羽織。

白い冷気を発する刀は、わざわざ寄って見なくとも、恐るべき切れ味を秘めているであろう事は、一目で分かる。

冬将軍が八双の構えを取る。

そして日の下に白刃を煌めかせ、一番近くに居たダクネスに斬りかかった！

「くっ！？」

ダクネスが、それを大剣で受けようとするが……。

キンッと甲高い音を立て、ベルディアの猛攻にも耐えた大剣が、あっさりと真ん中で叩き斬られた。

「ああっ！？　わ、私の剣がっ……！？」

冬将軍と、それと戦うダクネスから距離を取り、

「冬将軍。国から高額賞金を掛けられている特別指定モンスターの一体よ。精霊は元々決まった実体を持たないわ。そして精霊は、出会った人達の無意識に思い描く思念を受け、その姿へと実体化するの。火の精霊は、全てを飲み込み焼き尽くす炎の貪欲さから、凶暴そうな火トカゲに。水の精霊と言えば、清らかで格好良く知的で美しい水の女神を連想して、美しい乙女の姿に。でも、冬は街の人間どころか、冒険者達ですら出歩かない。……そう、日本から送られ

たチート持ち連中以外はね」

アクアが雪精を詰めた小瓶を握り、冬将軍について教えてくれる。

目の前の冬将軍は、息吹を行なう様に、総面の口からコオオオッと白い冷気を放っていた。

俺は剣を折られたダクネスの隣に立ち、目の前の冬将軍に油断なく剣を構え。

「……つまりこいつは、日本からこの世界に来たどっかのアホが、冬と言えば冬将軍みたいなノリで連想したから生まれたのか？　なんて迷惑な話なんだよ、どうすんだこれ。冬の精霊なんてどう戦えばいいんだよ！？」

ハッキリ言って、目の前のモンスターにまるで勝てる気がしない。

一見人型の鎧武者だが、それが精霊が実体化した物だって言うのなら、状態異常に陥る事はないだろう。

頼みの綱のめぐみんも、今日はもう魔法が使えない。

アクアが、手の小瓶の蓋を開け、中に閉じ込めていた雪精を解放する。

「カズマ、聞きなさい！　冬将軍は寛大よ！　きちんと礼を尽くして謝れば、見逃してくれるわ！」

アクアは言って、白い雪が積もる雪原に、そのまま素早くひれ伏した。

「ＤＯＧＥＺＡよ！　ＤＯＧＥＺＡをするの！　ほら、皆も武器を捨てて早くして！　謝って！　カズマも早く、謝って！！」

ペタリと頭を雪に付け、プライドなどそこらに落としてきたらしい元なんとか様は、それは見事な土下座を行なった。

見ればめぐみんも綺麗な土下座を行なっている。
この何の迷いも無く土下座する二人を見ていると、いっそ清々しさすら感じられた。
冬将軍はと言えば、確かに土下座した二人には目もくれなくなった。
その分、俺とダクネスにその視線が向けられる。
俺も慌てて土下座を……。

と、俺の隣で未だ立ったままのダクネスを見る。
「……おい何やってんだ、早くお前も頭下げろ！」
隣では、悔しそうに冬将軍を睨み付け、斬り飛ばされた大剣の一部を捨て、立ち尽くすダクネスの姿がある。
「くっ……！　私にだって、貴族の娘であるというプライドがある！　誰も見ていないとは言え、父や私を慕ってくれる領民がいる以上、怖いからと、モンスターに簡単に頭を下げる訳には……」

面倒くさい事を言い出したダクネスの頭を、俺は両手で握っていた剣から左手だけを手放して引っ掴み、そのまま無理やり頭を下げさせた。

「いつもはモンスターにホイホイ着いて行こうとするお前が、何でこんな時だけしょうもないプライド発揮するんだ！　普段ドン引きの変態発言が多いクセにどうでもいい下ネタには恥ずかしがったり、お前の基準は色々おかしい！」
「や、やめろお！　くっ、下げたくも無い頭を無理やり下げさせられ、地に顔を付けられるとかどんなご褒美だ！」
頬を赤くしながら形だけの抵抗を見せる変態の頭を、俺は左手で押さえつけ、そのまま自分も頭を下げた。
チラリと冬将軍の様子をうかがい見る。

すると、冬将軍はすでにその刀を鞘に収めていた。

俺はホッとしながらも、そのまま頭を下げ続け……

アクアが俺に、鋭く叫んだ。

「カズマ、武器武器！　早く手に持ってる剣を捨てて！！」

冷たい雪原の上に頭を付けながら、俺は右手に剣を握ったままだった事を思い出す。

俺は慌てていた為か、思わず腰を浮かせながら右手の剣を投げ捨てる。

当然頭が雪から離れ……。

頭を上げてしまった俺の目に飛び込んできたのは、鞘に収めた刀のツバの部分、そこに左手を添えた冬将軍の姿だった。良く見れば左手の親指が、刀のツバをそっと押し、白刃を僅かに覗かせている。

それは、俗に言う居合いの構え。

それまで空いていた冬将軍の右手が、一瞬ブレた様に見えた。

そして聞こえる、チンと言う小さな音。

それは刀を鞘に収めた音だろう。

俺はそれを聞きながら、うっかり上げてしまった自分の目線が、なぜか冬将軍から雪の積もる地に向けられ、そのまま目の前に白い地面が迫って来るのを…………

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆
◆

「……」
「……」
俺は呆然と突っ立った状態で、女神エリスと見詰め合っていた。

そこは、以前俺が初心者殺しにかじられ、殺された時に来た神殿みたいな部屋の中。

そこに相変わらず唐突に、俺は突っ立っている。
目の前には、長い白銀の髪に青い瞳。
相変わらずの、人間離れした美しさをしたエリス様。
その本物の女神様は、物凄く困り顔の表情で、ぽりぽりと指で頬を掻きながら話し掛けてきた。

「……あの、もうちょっと気を付けて生きてくださいね？　以前規約を曲げて生き返らせた時、凄く苦労したのに……。どうせ先輩が、また無茶言い出して生き返らせるんでしょうけれども、その度に苦労するのは私なので……」

「ごめんなさい、本当にごめんなさい。迷惑掛けてごめんなさい」
俺はペコペコとエリス様に謝った。
エリス様の言う通り、多分その内、アクアが生き返らせてくれるだろう。

「ええと……あの連中、大丈夫ですか？」
俺は自分が殺された事で、あいつらが、俺の敵討ちだ！　と冬将軍に突っ掛かって行ったりしていないかを心配した。
だが杞憂だったらしい。

「ああ、大丈夫ですよ。皆さん大人しくしておられます。冬将軍は、あなたを斬った後は消えてしまった様ですね。今は先輩が、あなたの体の修復をしています」

それを聞いて安心したが、それはそれで少し寂しい。

まあ、そういう事なら待たせて貰うか。

死んでおいてなんだが、殺されたのが痛みも感じず一瞬だった所為か、それともいい加減慣れてきたのか。

俺は死んだと言うのに、なぜか平然と落ち着いていられた。

珍しい物を見るかの様に、俺は辺りをキョロキョロと見回していた。

「……死んだと言うのに、今回は随分と落ち着いていますね。ここに来る人達は、大概取り乱す方が殆どなのですが……」

「まあ、日本で一回、この世界で二回。計三回目ですし」

エリス様に答えながら、俺は改めて部屋を見回す。

……本当に、何も無い部屋だ。

そんなキョロキョロしている俺を、エリス様が無言で見ている。

俺も特にやる事も無く、結局俺とエリス様は無言で見つめ合う。

……どうしよう、凄く気まずい。

何でこんな時に限ってアクアはちゃっちゃと生き返らせてくれないんだ。

しかし……。

「こんな何も無い部屋でずっと居て、退屈したりはしないんですか？　この世界の人口がどれ程居るのかは知りませんけど、ホイホイ人がここに送られてくるものなんですかね？」

俺の疑問にエリス様が微笑みを湛えながら答えてくれた。
「そうですね。私が担当しているのは、モンスターによって命を落としてしまった人達のみですから……。普段はそこそこ忙しいですが、この冬の時期は皆さん外に出歩きませんから、とても喜ばしい事に、暇しておりますよ」
エリス様は、そう言って俺に、優しげにニコリと笑い掛けて。

あかん、ダメだ、なにこれヤバイ。
そうか、俺の異世界入りは何かが足りないとは思っていたんだ。

足りない物。そう、メインヒロインはここに居たんだ。

俺が顔を赤くしてうろたえていると、
「それに……。私もずっとここに居る訳ではありませんしね。他の者に代わってもらって、実はコッソリ色んな所に遊びに行ってるんです。……この事は、内緒ですよ？」
そう言って、イタズラっぽく片目を瞑り、笑いかけてきた。
お、おおう……。
俺が赤い顔でコクコク頷いていると。

《カズマー！　カズマ聞こえるー？　リザレクションは掛けたから、もうこっちに帰って来れるわよ。目の前の子に、門開けてもらいなさい》

いつもいつも、本当に間の悪い奴の声が聞こえてきた。
……もう少し時間掛けてくれれば良かったのに。

先程とはまるで正反対の事を考えながら、俺は思わず舌打ちしそうになる。

「もうちょっと後でいいよー。もっとエリス様と色々話とかしたいし。それまで俺の体大事に取っといてくれー」

俺は何も無い空間に向かって声を張り上げる。

エリス様が、えっ？　と小さな声を上げ、ちょっと照れた様に恥ずかしそうに俯いた。

しばらく、シンと静まり返り。

《はあー！？　あんた何言ってんの！？　ちょっとバカ言ってないで早くこっち帰ってきなさいよ、早く帰って目一杯働いて、借金返さないといけないでしょ！？》

そのアクアの言葉に、俺は現実を思い出す。

莫大な借金。

そして、冬のクエストはやはり俺達には荷が重いという現実。

このまま生き返っても、大量の借金抱えたまま、この冬の間は屋敷に篭り、ちまちまジッポ作り続けるのだろうか。

そして、ようやく借金を返したとしても、あの三人と共にこれからずっと……！

……俺はアクアに答えず考えた。

しばらくそのまま考えて……。

生まれ変わって新しい人生をやり直す事にした。

「おいアクアー！　俺、もう人生疲れたしそっちに帰らない！　生まれ変わって、赤子から人生やり直す事にするわ！　そっちの二人

によろしく言っといてくれー！」
「ええっ！？」
エリス様が驚いた声を上げた。
そして……
《あんた何バカ言ってんの！　ちょ、ちょっと待ってなさいよ！！》
慌てるアクアの声を聞きながら、俺はエリス様に向き直る。
「それじゃ、一つよろしくお願いしますエリス様。あまりわがままは言いませんが、もし叶うのなら、次も男の子として生まれたいです。後、可愛い義理の姉がいる家庭に生まれたいです」
「ちょ、その、待って！　待ってくださいね！？」
俺の言葉を聞いたエリス様が慌てふためく。
やがてアクアの声が再び響いた。
《カズマー！　ダクネスが、早く戻って来ないとあんたを剥いて色々するって言ってるわよ。習い事は貴族の嗜み、活け花ぐらい出来るって言ってるんだけど》
おい。
おい止めろ、活け花するのに何で俺を剥く必要があるんだよ。
俺の体と活け花に、何の関係があるんだよ。
《あとめぐみんが、無言で何か始め……。えっ？　めぐみん！？
ちょ、ちょっとめぐみん！？　ちょっ！　カズマが！　そんなにしたら、カズマがっ！！》
「おい止めろ！　俺の身体に何してんだ！　仏さんにイタズラすんな、バチ当たるぞお前ら！！」
一体俺の身体に何をされているんだろう。

俺が不安に思っていると、アクアが叫ぶ。

《めぐみん！　めぐみーん！！　ちょ、カズマ！　早くきてー、早く帰ってきてー！！》

「おい止めろ！　アクア、二人を止めろ！　止め……！　エ、エリス様、お願いします！　俺を帰してください！　お願いします！！」

慌てる俺に、エリスがクスリと笑いながら、片手の指をぱちんと鳴らした。

そして目の前に現れたのは白い門。

俺は慌ててその門の前に立ち……。

「それでは、佐藤和真さん。今度は、あなたが天寿を全うした時に会えます様に。では、また！　さあ、行ってらっしゃい！」

エリス様の送り出す声を受け、俺はそのまま門を開けた……！

12話

若干赤い顔をした、それでいて怒っている様な目つきのめぐみんの顔が、俺の目の前に飛び込んできた。
めぐみんは横たわっていた俺の体の上にまたがり、ゴソゴソと俺の胸元の服の乱れを直している。

「……おい、なにやってんの？　お前は爆裂狂な所と名前を除けば、唯一常識的な奴だと思ってたのに、俺に一体何してくれたの？」

めぐみんは俺の身体に何をしたかの質問には答えようとはせず、俺の上から立ち上がり。
「おい、私の名前に文句があるなら聞こうじゃないか。……帰らないとかバカな冗談言ってるからですよ。次にそんなバカな駄々こねたら、もっと凄い事しますからね」
バカな冗談と言われてしまったが、半分以上本気だったと言ったら凄く怒りそうだ。
俺は冬将軍に斬られた自分の体を、あちこち確かめながら起き上がる。

……と言うか、
「……なあ、俺ほんとに何されたの？　とりあえず、汚されちゃったのか、まだ綺麗なままなのかを教えてくれよ。場合によっては明日から、めぐみんの顔見るのも恥ずかしくなるんだけど……」
言いながらダクネスの方を見ると、顔を両手で覆い隠し、耳まで赤くしてしゃがんでいた。
相変わらずこの変態の羞恥の基準は分からない。
お前、俺を剥いて活け花がどうとか言ってなかったか。

その場に屈み込んで俺の起きるのを待っていたアクアに、視線で訴えかけるてみると……、

「……あんた、神聖な女神様の口から何言わせる気？　本人に教えてもらいなさい」

そのままフイッと横を向かれた。

「な、なあめぐみん、教えてくれよ。でないと、俺お前の事、明日から凄く意識する様になるんだけれど……」

「……家に帰って、お風呂に入る時にでも分かります。……それより、具合は大丈夫なんですか？　どこか調子が悪い所は？」

その言葉に、俺は改めてぺたぺたと体のあちこちを手で触る。

そういや、俺はどうやって殺された？

そんな俺を見てアクアが言った。

「あんた、冬将軍に首ちょんぱされたのよ。それはそれは見事な切り口だったわ。おかげでピタリとくっついたし、修復も簡単だったわよ。今回は一週間も安静にしてれば、その後は激しい運動してもいいわ」

「首ちょ……！」

俺は絶句し、思わず自分の首筋を手で撫でた。

どれだけ手で触っても、傷跡が残っている様子は無い。

俺の血で雪原の一部が赤く染まり、俺の隣にいたダクネスにも返り血が付いていた。

……アクアにちゃんと治療してもらったにしても、やっぱり死んだというのはゾッとしない。

この世界の冬は、食料に乏しい過酷な環境の中、それでもなお生存競争を生き抜けるモンスター達にのみ、活動が許される季節。

俺達の様な駆け出しに、お手軽にこなせるクエストなど無いと言う事だ。

……うん。今日はこのまま、街に帰ろう。

街へと帰って来た俺達は、そのまま報酬を貰う為ギルドへ向かう。

「しかし、小一時間で十二匹。百二十万か……。稼ぎはデカイが、死んだのが割に合わないなぁ……。あの冬将軍ってのはどれだけの賞金掛かってるんだ。ダクネスの剣が一撃で折られたり、ハッキリ言って、三億の賞金掛けられてたベルディアよりも強かったぞ」

冬のクエストは諦めた方が良さそうだ。

「冬将軍は、雪精にさえ手を出さなければ何もして来ないですからね。一応はあまり害の無いモンスターと言う事になってますが……。それでも、賞金は二億エリスは掛かっていたはずですよ。魔王軍の幹部で、明確な人類の敵のベルディアは、その分賞金は跳ね上がっていますが……。冬将軍の場合、本来はあまり攻撃的でないモンスターなのに二億もの賞金が掛かっています。この破格の賞金は、それだけ冬将軍が強いって事ですよ」

めぐみんの説明に、俺は思わず黙り込む。

……二億。

それだけあれば借金返してもしばらく遊んで暮らせるな。

「……めぐみん、あいつを爆裂、」

「爆裂魔法では冬将軍は倒せませんよ。見た目は人型ですが、あれ

は精霊ですから。精霊は本来、魔法的要素が強い存在です。その精霊達の王みたいな存在ともなれば、そりゃあもう魔法抵抗力も凄い物です。爆裂魔法ならどんな存在にもダメージは与える事はできますが、一撃で仕留めるのは難しいでしょうね。……と言うか、あんな怖いの相手に爆裂魔法撃ちたくないです」

……ダメか。

ガクリと落ち込む俺を見て、アクアが得意気に、にんまりと笑みを浮かべた。

「ふふん、カズマ。なんか落ち込んでるみたいだけど、この私様はただ土下座してた訳じゃあないわよ。さあ、見なさいこれを！」

言いながら、アクアが服の中から出したのは小さな瓶。

中には、雪精が入っている。

どうやらあの時全て開放したのではなく、一匹だけ残しておいたらしい。

「おっ！　でかしたアクア、よし、そいつ貸せ！　討伐してやる」

珍しく機転の利いたアクアを褒めながら、俺は瓶を取り上げようとした。

「なっ！？　だ、ダメよっ！　この子は持って帰って家の冷蔵庫にするの！　夏場でもキンキンに冷えたクリムゾンビアが飲める様に……、イヤー！　この子はイヤー！　もう名前だって付けてるのに、殺させるもんですか！　やめてー、やめてー！！」

雪精の入った小瓶をお腹に抱き抱え、うずくまって予想外に激しい抵抗を見せるアクア。

くそ、一匹十万と言う高額なモンスターだが……。

今日はアクアに生き返らせてもらった事だし、勿体無いが見逃し

てやるか……。

無事ギルドで清算し、一人頭３０万の報酬を受け取った。
一日にしてはいい稼ぎなのだろうが、借金の額を考えると焼け石に水だ。
先の見通しが暗い現実に、俺は思わず現実から逃げる様にエリス様の事を考える。
見た目は清楚な感じで、それでいて何より中身だ。

冬場は冒険者達が死ななくて、仕事が無くて暇な事はとても喜ばしい。

そんな事を言いながら微笑む、優しい心を持った女神様。
……ああ、エリス様マジ女神……。
エリス様の姿を思い出しているだけで、あっという間に屋敷の前に到着する。

「ふふっ、この子は大事に育てて、夏になったら氷を一杯作って貰って、この子と一緒にかき氷の屋台を出すの！　そして、夏場の寝苦しい季節は一緒に寝るのよ。……ねえめぐみん、この子何食べるのか知らない？」
「雪精の食べ物なんてちょっと分からないですね？　そもそも精霊って何かを食べるんでしょうか」
「……ふわふわしてて、柔らかそうで、砂糖かけて口に入れたら美味そうだな……」
俺の後ろでは、そんな取り留めの無い会話をしている三人。

俺は屋敷のドアに手を掛けながら、そんな三人に振り返った。
もう一度エリス様の姿を思い出し。
そして、三人の顔をじっと見る。

「「「……？」」」
そんな俺の行動に、キョトンとした表情を浮かべ、三人は俺を見返し黙り込む。

「……ハァ……」
「「「あっ！！」」」
俺の吐いた深い溜息を見て、ぎゃあぎゃあと騒ぎ出した三人の声を聞きながら、俺は屋敷のドアを開けた。

「ただいま……、あれ？　クリスは居ないのか」
帰宅したが、そこにクリスは居なかった。
代わりに、屋敷の中がピカピカになっている。

「ちょっとカズマ、さっきの溜息はどう言う事よ！　最近私達の扱いが雑になってきてない？　今日だって頑張って生き返らせたじゃない、カズマは生き返るの嫌がったけど！　ねえ、いらない子扱いしないでよ！」

後ろからぎゃあぎゃあ喚くアクアに、俺は振り返り、言ってやる。

「バカ、いつお前をいらない子扱いしたんだよ。お前がいなくなっ

たら誰がトイレ掃除すると思ってるんだ。自称水の神様に、これ以上ない適材適所な掃除場所だろ。分かったら、今日来たばかりなのに綺麗に掃除してったクリスを見習って、お前もトイレ掃除でもして来い。俺は自分の血で血塗れになった事だし、ちょっと風呂に入ってくる」

「それよ！　私水の神様よ、トイレの神様じゃ無いの！！　そういう扱いが酷過ぎるって言ってるのよ、もっと私を敬いなさいよ！　もっと私を甘やかしてよ！」

涙目で面倒臭い事言ってくるアクアを適当にあしらい、俺はそのまま玄関で、自分の血が付いた胸当て等を外していく。

見ればダクネスも、モソモソと俺の返り血の付いた鎧を外し、そしてめぐみんがそんな俺を見て、急に忙しなくキョドり始めた。

……？

めぐみんの態度が気になったが、固まった血が気持ち悪いので、ダクネスに頼み、先に風呂に入らせて貰う。

クリエイトウォーターで風呂に水を張り、そのまま備え付けの薪を風呂焚き用のかまどに放り、ティンダーで火を付けた。

普段はジッポを使う所だが、急いで薪に火を付ける場合は、やはりティンダーのほうが早い。

後は薪に風を送り続ければいいだけなのだが、これが大変面倒くさい。

幸いここの屋敷の風呂のかまどは、煙を外に排出してくれる便利なタイプだ。

血の付いた服を着ているのも気分が悪いので、もう先に服を脱いで、全裸でかまどに風を送ろう。

季節は冬だが火を焚いたかまどの前なら寒くない。

俺はそう思いながら、服を脱ぎ、下着を脱いで……。

大変下品な話だが。
下半身の違和感に気が付いた。
いや、元々、ここに来る間に軽い違和感はあったのだ。
下着に先っちょが張り付く様な。

違和感の元を見ると、仮免とはいえ大人になっていたはずの俺の分身が、生まれたての子供の時の状態になっていた。
それは何か接着剤的な物で強制的に。

下腹部に、下向きの矢印が俺の分身を示しながら。矢印の上には、ある一文が書かれている。

『包〇野朗、ここに眠る』

そのまま風呂から飛び出した。

「めぐみん!!　めぐみんはどこ行った!　あのアマ、スティールでひん剥いて同じ目に合わせてやる!」
「……ん？　めぐみんなら、何日か他所に泊まって来ると言って出てったあああああ!?」
真っ裸の俺を見て、雑誌を読みながらソファーでくつろいでいたダクネスが、そのまま雑誌に顔を伏せるが、今はそんな事に構っている余裕は無い。

アクアが俺に、優しげな表情でぽそりと言った。
「……カズマ、安心して？　そんなに恥ずかしがる事ないわ。だって、日本人男性の七割は……」

「ちちちち、違うよバカっ！　おおおお、俺はもうちゃんと大人になってるよっ！」
　俺は泣きながら風呂場に逃げた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

　朝起きて広間に行くと、そこには暖炉の前のソファーの上で、三角座りしながら泣いているアクアの姿。
　そして、それをかいがいしく慰めているクリスがいる。
　昨日、風呂から出た俺が、ずっと部屋に引き込もっていた間に帰って来ていたらしい。

「……朝からどうしたんだよ？　アクアが泣いてるのはもう見慣れたけど、これはこれで珍しい絵だな」
　メソメソ泣いているアクアを慰めていた、クリスが言った。
「え、えっと……。アクアさんが朝起きたら、瓶に閉じ込めてた雪精が居なくなってたんだってさ……」

　……なるほど。暖炉の前の、アクアの座るソファーの隣にあるテーブルには、空の酒瓶と共に、同じく見覚えのある小さな空の瓶が置いてあった。
　いつまでもぐずっているアクアに、クリスが優しく、慰めるように。
「アクアさん、アクアさん、こう考えよう？　雪精は、アクアさん

に飼われるよりも、自然に帰りたかったんだよ。だから、そっとアクアさんの前から姿を消したんだと思う。狭いお屋敷で飼うよりも、広い雪原でのびのび暮らさせてあげようよ？」

そんなクリスの言葉に、一瞬アクアのぐすぐす言う声が止む。

「いや、溶けたんだろ」

「わあああああーっ！！」

「キミって奴は！　キミって奴は！！」

俺の言葉に再び泣き出すアクアと、俺をバシバシ叩いてくるクリス。

そんな二人に、俺は深々とため息をついた。

「悪いが、今の俺にアクアを構ってやれる余裕はないぞ。唯でさえ稼がないといけないのに、俺達の実力じゃ冬に無難にこなせるクエストは無い。つまり、金を稼ぐにはひたすらジッポ作り続けなきゃいけない訳だ。毎日毎日ジッポ作り。今日もジッポ。明日もジッポ！　違う商品考えてもいいが、それを商品化させるまでは相も変わらずジッポ作りだ！」

別にジッポ作るのが嫌って訳じゃない。

それに作業に慣れてきた今では、頑張れば日に五個ぐらいは作れるだろう。

だが、元々これは安全にのんびり生きてく為に始めた、お手軽に稼げる割の良いバイトみたいなもんだ。

合間に冒険行ったり遊んだり、そしてお茶でも飲みつつお気軽に、日に二つ三つほどジッポ作って小銭を稼ぐ。

そして面白おかしく温い人生を生きていく。

そんなハズだったのに、莫大な借金返す為に家に閉じこもってひたすら毎日同じ作業に従事する。

一体どんな拷問だ。

のんびり食い扶持を稼ぐ、趣味的な感じで物を作るのと、借金返済の為にひたすら物を作らされるのとでは、仕事の辛さが違うのだ。

ため息をつきながら肩を落としている俺に、クリスが言った。

「そんなにお金が要るのなら、冬の間はクエストじゃなく、ダンジョンに潜ればいいんじゃないかな？」

１２話（後書き）

今回書いてて、稲中思い出しました

13話

と、言う訳で。

「明日はダンジョンに行きます」
「嫌です」
「行きます」
即答で拒否するめぐみんに俺が更に即答すると、めぐみんが走って逃げようとしたので捕まえた。

俺が首ちょんぱされてから一週間。
激しい運動が許される程度に回復したので、屋敷の広間でくつろぐ皆に、早速提案してみたのだが。
ダンジョン行きを、めぐみんが激しく嫌がっていた。

「嫌です嫌です、だってダンジョンなんて私の存在価値皆無じゃないですか、崩れるから爆裂魔法なんて使えないし、私もう本当に唯の一般人！」
「そんな事はお前を仲間にする時に俺が言った事だろうが。そん時お前、荷物持ちでも何でもするから捨てないでって言ったんだぞ」

その言葉に、俺に襟首を掴まれためぐみんは、観念したかの様にうな垂れた。
「……はぁ……。分かりました。でも、本当に何も役に立てませんよ？　本当に荷物持ちぐらいしか出来ません。……もしかして、まだこないだ、カズマのアレにアレした事を根に持ってます？」
諦めの表情に不安を滲ませ、めぐみんが言ってくる。

それを安心させるかの様に俺は言った。

「一週間も前の事を根に持つほどねちっこくないぞ。確かに今回の提案は最初はめぐみんへの嫌がらせ目的だったが、良く考えてみたら悪くない話だと気が付いたんだ。めぐみんへの逆襲はまた今度だ。それに安心しろよ、付いて来るのはダンジョンの入り口までで良い。ダンジョンへの道中、危険なモンスターと遭遇したらお前の魔法で蹴散らしてくれ」

「へっ？　入り口までででいいんですか？　……いやその前に、カズマ、そのセリフの前になんて言いました？」

めぐみんが、もう一度今の言葉をリピートしろと言ってくるが、それをスルーしている俺に、

「でも、何でいきなりダンジョン行くなんて言い出したの？　ダンジョン行くなら、盗賊は必須よ？　最近見かけないんだけど、クリスは？」

アクアがソファーに埋もれる様に深く腰かけ、だらりと脱力しながら言ってくる。

この冬の間、こいつは暖炉の前の一番暖かい場所を占拠しながら、酒でも飲むか、もしくはこんな感じで何をするでも無くだらだらしていた。

「クリスは、急に忙しくなったって言ってたな。しばらくの間留守にするそうだ。だが、ダンジョン探索に必要な、罠発見や罠解除スキルはすでにクリスに教えてもらって習得済みだ。……クリスに教えて貰ったんだが、ダンジョンの中ってのは季節により生息モンスターが変わるって事が無いらしい。と言う訳で、あまり強いモンスターが居ないダンジョンに潜り、あわよくば一獲千金を狙ってみようかなと思う」

この一週間、俺もただ寝てたりジッポ作り続けていた訳じゃ無い。残り４０ポイントほど残っていたスキルポイントを、それぞれ１

5ポイントずつ消費し、罠発見と罠解除を覚えておいた。
この二つのスキルの罠の発見率や解除成功率は、スキルレベルと器用度、そして幸運の強さも左右される。
器用度は人並みな俺だが、そこは持ち前の運の強さでなんとかなると信じたい。

変な連中とばかり関わったり莫大な借金背負ったりと、俺が幸運が高いってのは、一体何の冗談かと思えてくるのだが。

ソファーに腰掛け、足を組んで両腕をソファーの背に回し、やたらとけしからん胸を強調させているダクネスが、
「む、待って欲しい。私の大剣が冬将軍に折られてしまったからな。今新しいのを発注しているが、完成までにまだ時間が掛かる。これでは私も戦力になれないのだが……」
「お前は最初から戦力に入れてないから大丈夫だよ」
「！？」
ダクネスが目を潤ませながらも頬を染めるが、きっと興奮半分、傷付き半分なのだろう。
半分は喜んでいるみたいだし、構ってやるのが面倒だ。
話を進める事にする。

「二人に誤解が無いよう言っとくが、ダンジョンに潜るのは俺一人だ。皆は、ダンジョンに行くまでの道中の警護をして欲しいんだよ」
「「「？」」」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆

街から半日ほど掛けて山へと歩き、その山の麓にある獣道を進んで行く。
雪が積もり、枝が邪魔する険しい道を、一体どれだけ歩いただろう。

唐突に現れた、かなり頑丈な作りの一軒のログハウス。
そのログハウスの表には、避難所と書かれた看板がぶら下げられている。
そしてそのログハウスの近くの、山の岩肌に、奥を窺い知れない様な真っ暗なダンジョンの入り口が、ぽっかりと口を開けていた。
入り口は天然の洞窟の様なダンジョンだが、その内部をそっと覗くと、綺麗に整備された階段がダンジョンの奥へと続いていた。

このダンジョンの名は、キールのダンジョン。

その昔、キールと言う名の稀代の天才と呼ばれたアークウィザードが、一人の貴族の令嬢に恋をした。
たまたま街の視察をしていた令嬢に、それまではただ魔法にのみ打ち込み、色恋になど全く興味を示さなかったその男は、令嬢を一目見ただけで恋に落ちた。

だが、勿論そんな恋は実るはずがない。
身分の差とはそれほど大きいものだ。
それをよく理解していた男は、その芽生えた恋心を忘れるかの様に、ひたすら魔法の修行と研究に没頭する。
月日は流れ、男はいつしかこの国最高のアークウィザードと呼ばれていた。
男は持てる魔術を惜しみなく使い、国の為に貢献した。

男は多くの人々に称えられ。
そして、男は王城に呼ばれ、男の為に宴が催された。
そんな男に、王が言う。
その功績に報いたい。
どんなものでも望みを一つ、叶えよう。

男は言った。
この世にたった一つ。どうしても叶わなかった、望みがあります。

その時、キールと言うアークウィザードが何を望んだのかは知られていない。
その後の話では、キールと言うそのアークウィザードが、貴族の令嬢をさらってこのダンジョンを作り、立てこもったらしい。
その後、一体どうなったかは伝えられてはいないらしいが。
まあ普通に考えて、一介の魔法使いがダンジョンにたてこもり、幾ら頑張ってみた所で勝ち目なんて無かった事だろう。
今となっては、そんなダンジョンの出来た経緯も半ば忘れられ、現在はこうして、駆け出し冒険者達の初めてのダンジョン探索の為の、良い練習場所になっている。

俺はキールのダンジョンの入り口で立ち止まると、後ろに付いてきている三人を振り返った。
「よし。それじゃあ、ここから先は俺一人で行って来るから、お前等はそこの避難所で待っててくれよ。一日経っても帰って来ない様なら、街に戻ってキースやテイラーに助けを求めてくれ。……って言っても、今日は偵察と実験を兼ねてお試しで潜るだけだから、すぐ帰ってくるよ」

俺の言葉に、三人が不安そうな表情を浮かべた。

ダクネスが腕を組み。

「……本当に行くのか？　一人でダンジョンに潜るなんてちょっと聞いた事がないぞ。カズマの考えを聞く限り、喧しい全身鎧の私が付いて行っても、邪魔になるだけだろうが……」

まあ、確かにこんな例はないのだろう。

「……私も、付いて行ってもかえって邪魔になるだけですが。……やっぱり考え直しません？」

めぐみんが、不安そうに。

「大丈夫よ、私が付いてってあげるから」

そして、そんな頼もしい事をアクアが言っ……

「……いや、来なくていい。というか、一人の方が都合がいいんだって」

俺はアクアに、ここに来るまでに説明した事をもう一度言う事にした。

「アーチャーの持つスキル、千里眼があれば暗視が可能になる。これは以前試したんだけども、光が全く無い完全な真っ暗闇でも、空間の把握、あと、置いてある物の形が分かる様になる。つまり俺一人なら灯りが要らない。冒険者の持つ灯りを目印にするタイプのモンスターには、見つからなくなる訳だ」

勿論それぐらいで一人でダンジョンに潜れるなら、世のアーチャー達がみんなやっているだろう。

だが。

「ついでに言うなら、俺は盗賊スキルの敵感知と潜伏があるだろ。闇に紛れて、暗視で地形を確認し、敵を察知したら迂回する。潜伏スキルがあるから、もし迂回が出来ない状況でも、暗闇の中壁にで

も張り付いてればやり過ごす事が出来る。……と、思う」
これぱかりは、試してみない事には断言はできない。

ダンジョンに潜るとは言っても、別に討伐クエストを受けてる訳でもないのだ。
モンスターを倒しても金にもならないなら、モンスターと戦闘しないで済むならそれに越した事はない。

モンスターをやり過ごし、お宝だけを掻っ攫う。
やっている事はなんだかコソ泥みたいだが、これは色んなクラスのスキルを同時に習得出来る、冒険者だけの数少ない特権だ。
こんな時にこそ少ない長所を生かすべきだろう。

俺は荷物の中から、狩り人が使う消臭の為のポーションの小瓶を取り出した。
ダンジョンのモンスターは暗闇に慣れている事だろう。
つまり、視力以外で敵を感知する能力にも長けていると予想出来る。
例えば獲物の匂いだとか。
もしくは音だが、これは音で勘付かれる前に、俺の敵感知の方が早く察知出来る事を祈っておこう。
蛇の持つ、熱を感知する様なピット器官だとか、コウモリの超音波によるソナーだとかはどうにもならないが、ここのダンジョンにはそういったモンスターは生息しないらしい。
このダンジョンに棲むモンスターの情報は、ギルドに通って事前に調査済みだ。
なんせ、先週死んだばかり。
エリス様にはちょっと会いたいが、俺だって流石に何度も死にたくない。

俺は自分の身体に消臭のポーションを振り掛けた。
これがどれ程の効果があるのかは知らないが、まあ使わないよりはマシだろう。
それに、以前初心者殺し相手に潜伏スキルを使った時も、匂いを気にしてはいたが結局立ち去って行った。
つまり、潜伏スキルは匂い等も多少は誤魔化してくれるのだろうと思う。
今はあの時よりも潜伏スキルのレベルも上がっているのだ。
うん、行ける。
行けるハズだ。

そもそも今回はあくまで実験。
上手くいけば儲けもの程度に考えておけばいい。
今回挑戦予定のこのダンジョンは、俺のレベル的に考えてかなり格下のダンジョンだ。
この探索方法が確立されれば、ここの様な格下のダンジョンではなく、今後は、他の旨みのあるダンジョンで稼いでいけばいい。

そもそも、ここは街から半日程度で着くような距離にあるダンジョン。
すでにこのダンジョン内部は冒険者達に荒らされ尽くしている事だろう。

大丈夫。
たとえ敵に遭っても、このダンジョンで遭遇する相手なら、遅れを取る事は無い筈だ。
「じゃあ行ってくるよ。寒いし、モンスターに遭遇するかもしれないから、そこの避難所でのんびり待っていてくれ」

俺は皆に手を振り、ダンジョンの入口から中へと降りていく。

と、後ろから誰かが付いて来る音がした。

そこには、付いてくるのが当然とばかりに、平然とした顔のアクアの姿。

「……お前、俺の話聞いてたか？　一人で行動した方が良いんだって。お前、一緒に付いて来ても真っ暗で何も出来ないだろ」

その俺の言葉に、アクアが余裕そうな表情でふふんと笑う。

叩いてやりたい。

「ちょっとカズマ。この私が誰だか忘れてない？　アークプリーストとは仮の姿。ほら、言って。めぐみんとダクネスは頑なに信じようとしないけど、ほら私の職業言ってみて」

「……トイレの神様だろ？」

「違うわよ、水の神様でしょ！　せめて宴会の神様で止めておいてよ！」

正直なんの神様でもいいんだが、一体こいつは何が言いたいのだろう。

「私は仮にも女神様よ。本来神の目には、全てを見通す力があるわ。カズマがこの世界に来る前の事。私、カズマの事を知ってたでしょ？　地上に降りて力が弱まってはいても、神様らしい力の一つや二つ、まだちゃんと残ってるのよ？　全てを見通すなんて事は出来なくなっても、闇を見通すぐらいはちょろいわよ！」

胸を張るアクアに、俺はどんどん不安になる。

潜伏スキルは触った相手にも発動するが、正直どんなポカやらかされるのかが不安でならない。

どうしよう、どう断わろう。

だが、そんな俺にアクアが言った。

「ダンジョンの中にはね。大抵アンデッドがいるものなのよ。そして彼らは、生者の生命力を目印にやって来る。つまり、アンデッドモンスターには潜伏スキルなんて通用しないわ。なら、この私が付いてってあげるしかないじゃないの！」

もう、本当に嫌な予感しかしなかった。

１４話

ダンジョン入口から続く階段を、どれだけ降りてきたのだろうか。
暗い中を結構な時間降りたはずなのだが、未だに通路に出られない。
駆け出し向けのダンジョンと聞いていたのでもっと小さな所かと想像していたが、これは思った以上に探索に時間が掛かりそうだ。

とはいえ、今回のダンジョン探索はこのコソ泥みたいな手がダンジョンで通用するのかの実験だ。
ハッキリ言って、コツコツマッピングをして真面目にダンジョンの探索を進めている人達にしたら、こんなやり方は邪道もいい所だろう。

背後にアクアが危なげなく付いて来ているのを感じながら、俺は階段を降りて行った。
「ねえカズマ。暗視はちゃんと出来てる？　私の曇りなき眼は、この暗闇の中でもカズマがおどおどしながらおっかなびっくり階段降りてく姿がバッチリ見えてるけど。暗視がイマイチな様なら言いなさいよ？」
アクアが、心配してくれてるのか喧嘩売っているのか判断が付き難い事を言って来た。

「見えてるよ。お前が、物音がする度に一々ビクついてる情けない姿がちゃんと見えてる。お前こそ、頼むからすっ転んで階段転がり落ちるなよ」
俺が返すと、アクアは安心した様に微笑んだ。

「そう。私はこの中でも走って逃げられる程度には見えてるから、モンスターが接近して来たら言ってね。後、ちゃんと見えてるんだから暗闇に紛れてお尻触ったりしないでね」

「安心しろ、お前の尻を触るなんてバカな事は考えてないさ。俺が今何考えてるか教えてやろうか。ダンジョンの奥深くに、一体どうやったらお前一人だけ置いて帰れるかなって真剣に考えてる」

俺とアクアはその場にピタリと止まり、お互いに顔を見合わせた。

「やだもー、カズマってば冗談ばっかりー！　くすくす」

「バカだなアクア、俺が今結構本気で言ってるって事が、もう付き合い長いんだし分かるだろー？　ははははっ！」

そんな事を言っている間に、ようやく長い階段を下り終えた。

そこは完全な闇の中だが、スキルのお蔭でダンジョンの石壁や通路の広さが正確に分かる。

真っ暗な空間に、物体の輪郭が薄青く、まるで黒と青のみの配色の、サーモグラフィーでも見ているかのようにくっきりと把握できていた。

階段を降りると、通路が左右に分かれている。

そして、階段を降りてすぐの所にあった、その物体に気が付いた。

「……？　何だこれ？」

暗視と言っても、暗闇に青く輪郭が見えるだけで、きちんとその物体の本来の色が見える訳じゃ無い。

そう、目の前の、朽ち果てた人の体みたいなその輪郭が見えるだけで……

……。

「おわーっ！！」
それは、朽ち果てた冒険者の死体だった。
俺の様に一人でダンジョンに挑戦しようとしたのか。
はたまた、死んで仲間に置いて行かれたのか。
どういう経緯でここに放置されているのかは知らないが、そこには確かに人の亡骸が横たわっていた。

その死体の傍にアクアが近づき、
「……ちょっとアンデッドに成りかけてるわね。カズマ、ちょっと待っててね」
言いながら、アクアがなにやらぶつぶつと祈りの様なものを捧げると、亡骸を淡い光が包み込む。
アンデッド化を防いだのだろう。
日頃からちゃんとこんな感じでやっていれば、信者も少しは増えるだろうに。

しかし、階段を降りていきなり死体に出くわすとか、早速心が折れそうになるな。
アクアを連れていなかったら、間違いなくもう帰っている所だ。

「でも、おわーっ！　はないわよ、一人でダンジョン潜るって強がってた人が。おわーっ！　は。ぷーくすくす！」
アクアの言葉に、ダンジョンの奥に行ったら、こいつちょっと一人きりにしてやろうと密かに決意する。

俺はぴたりと動きを止めた。
……何か来るな。
敵感知スキルで、こちらに向かって来る何かに気が付いた。
俺達の話し声が原因か、もしくは、アクアが死体を浄化した際の

淡い光に寄ってきたのかもしれない。

俺はアクアに、敵が来ている方向を指で指し、向かって来ている方向とは反対側の通路に逃げるぞと、そちらに向けて親指を指してジェスチャーした。

「なになに？　変な動きして。この私に指芸披露？　ちょっとジッポで灯り付けなさいよ。影で、キツネやウサギなんてヌルイのじゃなく、機動要塞デストロイヤーを見せてあげるわ」

「違うわ！　敵が来てるから向こうに逃げようってジェスチャーしたんだ！　ああくそ、見つかった！　おい手伝え、迎え撃つぞ！」

思わず大声で突っ込んでしまった自分が情けない。

俺は暗闇の中剣を引き抜くと、こちらに気付いて襲い掛かる、小さな人型のモンスターに向かって斬りかかった！

「……ふう、何だったんだこいつは。暗視じゃ形は分かっても、物の色が見えないから流石に正体までは分からないぞ。お前、これが何だったか分かるか？」

足元に転がる数匹の小さな人型の何かの死体。

それを見ながらアクアが言った。

「グレムリンって言う小型の悪魔ね。ダンジョンは地上よりも魔力や瘴気が濃いから、弱い悪魔がたまに湧くのよ」

なるほど。

ギルドの人達に教えて貰ったこのダンジョンのモンスター情報に

も、確かそんなのがあった。

……ふと、俺は一つの事に気付く。

「……なあ、ちょっといいか？　お前って、暗闇の中でもかなりしっかり見えちゃう？」

俺の疑問にアクアが、

「昼間と変わらないぐらいには、はっきりくっきり見えるわよ？　それがどうかした？」

さも当然の様にそんな事を言った。

…………………。

「……馬小屋で一緒に寝てる時、夜中、何か見た？」

「何も見てないわよ。ゴソゴソ音がし出したら、反対側向いて寝るようにしてたから」

「……ありがとうございますアクア様……」

グレムリンの血の臭いに、モンスターが寄ってくるかも知れない。

俺達はそっとその場を後にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

今日のアクアは一味違う。

そう、今までの様ななんちゃってアークプリーストでは無い。

トイレの神様でも宴会の神様でも無い。

「この暗く冷たいダンジョンで、さ迷い続ける魂達。さあ、安らか

に眠りなさい。『サンクチュアリ』！」

迷える沢山のゴースト達を、広範囲に渡って浄化する今の姿は、それは間違いなく女神様だ。

と言うか、俺はダンジョンを舐めていた。

確かに、暗視と潜伏のコンボは非常に使える。

大概のモンスターはこれでどうにでもなりそうだ。

だがアクアの言っていた通り、暗く、寒いダンジョンで長く苦しんだアンデッドには、生者がよほど眩しく映るのだろうか。

先ほどから俺達は、かなりの数のアンデッド達を浄化していた。

俺だけで来ていたなら、アンデッド達に成すすべもなく袋叩きにされていただろう。

ダンジョンでは、これほどアンデッドモンスターと遭遇するものだとは知らなかった。

自分の認識の甘さを深く反省する。

浄化を終えたアクアが暗闇の中、良い仕事をしたとばかりに息を吐く。

「ご苦労さん。いや助かったよ、俺一人で来てたら危ない所だった」

俺の労いを受けたアクアが、満更でも無さそうに。

「あれ、私の評価がようやく真っ当になってきた？　……それにしても、お宝はどこかしら。まあ荒らされ尽くしたダンジョンだし、あんまり期待はしてないけどね」

俺達は今、ダンジョンのかなり奥まで潜っている。

奥とは言っても、このダンジョンの造りは一階層構成だ。

ただ、その広さが広範囲に渡っている。

この暗闇の中でも昼間のように見えると言うアクアが、ダンジョンの壁に曲がり角の度にチョークで印を付けていた。

本来ならダンジョン探索とは、罠を警戒しモンスターにも神経を尖らせて、松明に火を付け、マッピングでもしながら恐る恐る進むものなのだろう。

しかし闇の中でも問題なく進める俺とアクアは、先頭に立つ俺が敵と罠を探知しながら、ドンドンと奥へと進んでいた。

この探索方法の有用性は確認できた事だし、もう引き返しても良いのだが。

ここまで来たら、何かお宝とまでは言わなくても、金目の物の一つも見つけたい所だ。

俺は前方にある部屋に敵の気配や罠が無い事を確認すると、音を立てない様に部屋の中に入る。

部屋を見回し……。

「……チッ、ロクな物が無いな」

「ねえカズマ、なにか今日は、この探索方法といいそのセリフといい、私コソ泥の気分なんだけど」

言うなよ、俺もちょっとそんな気分だ。

なんだか、真面目に頑張って少しづつ少しづつ探索している同業者の方達に、ちょっと後ろめたい。

「……ん？　ねえカズマ、あそこ。あそこに何かあるわ」

と、アクアが部屋の隅に、遠目に何かを見つけた様だった。

アクアの闇を見通す力だかは、俺の千里眼スキルよりも優秀みたいだ。

アクアと共に部屋の隅に行くと、そこには……

「ちょっと、宝よ宝！　宝箱よ！　やったわカズマ、今回のダンジョン探索は大当たりね！」

嬉々として、宝箱に近寄ろうとするアクア。
それを俺は慌てて止めた。
「おいおい待て待て。お前、こんな何度も探索されたダンジョンに、唐突に宝箱が置いてあってやっぱり敵感知スキルにビンビン来てる」
それは、その宝箱の方から気配がしていた。
なるほど、よく聞くミミックってヤツか？

「あー……。それじゃあれは、ダンジョンもどきね。残念だけどしょうがないわね」
言って、アクアがぽんと何かを宝箱の近くに放った。
それは、先ほど使い、空になった消臭のポーションの小瓶。
ぽんと放られ、宝箱の傍に放物線を描いたそれは……

バグンッ！

床に触れた瞬間に、突然その小瓶と宝箱ごと、周囲の壁と床が蠢き丸呑みにする様に包み込んだ。
今まで唯の床や壁だと思っていた部分が、取り込んだ小瓶を咀嚼する様に、まるで生き物の様に動いている。
「き、気持ち悪っ！　何だこれ！」
ダンジョンもどきとか言ったか。
「名前の通りのモンスターよ。歩いたりする事は出来ないけれど、体の一部を宝箱やお金に擬態させて、その上に乗った生き物を捕食するのよ。場合によっては体の一部を人間に擬態させて、冒険者を襲う様なモンスターも捕食するわ」
モンスターまで食うのか。
タ、タチ悪いな。
そういやギルドで、ダンジョンもどきには気をつけろって言われてたな。

敵感知スキルがあれば簡単に分かるとは言われていたが。
しかし、ダンジョンの中にもちゃんとこうして生存競争が成り立っているらしい。
この世界は、相変わらず世知辛い。

「『ターンアンデッド』！」
アクアの魔法で、ゾンビがその身体を消失させた。
もうどれだけのアンデッドを退治したのか。
サーモグラフィみたいに見える、千里眼スキルによる暗視で進んでいて良かった。
普通に灯かりを点けて進み、これだけのゾンビ達に遭遇していたなら、俺はもうとっくに泣いて帰っていただろう。
それぐらいに、トラウマになってもおかしくない数のアンデッドと遭遇していた。

「……なあ、幾らなんでもおかしくないか？　ちょっとアンデッドの量が多過ぎだろ。こんなもん、アークプリーストが居るパーティじゃなかったらとても攻略なんて出来ないぞ？　結局お宝らしいお宝は見つからなかったが、そろそろ帰るか？」

ここは駆け出し連中が練習代わりにしているダンジョン。
だがこれだけの量のモンスターを、駆け出しが相手に出来るとは思えない。

今の所魔法をガンガン撃っているにも関わらず、アクアは疲れる様子は見せていない。
流石は一応女神様と言った所か。
今日一日で、俺のアクアへの評価はかなり上昇していた。
だが、いくらアクアが居るとは言え流石にそろそろ引き返すべきだろう。

アクアが言った。
「そうねえ。お宝は無かったけど、アンデッドを沢山浄化できたし私的には満足したわ。……でも待って？　なんか、まだその辺にアンデッド臭がするわね」
俺の敵感知には反応しないが、今日のアクアは絶好調らしい。

すでにダンジョンの奥深くまで来ていた俺達だが、アクアが行き止まりの壁に近づき、マタタビか何かに興奮した猫みたいに、辺りに向かって執拗にクンクンしだした。
罠感知にも敵感知にも、以前反応は無い。
だが、今日の絶好調なアクアが言うのだ。
この先には何かがあるのかもしれない。

俺とアクアが手探りで行き止まりの壁を調べ出して、十分以上が経過した。
一行に何も見つかる様子も無く、諦めて帰ろうとしたその時だった。

突き当たりの壁の一部が、クルリと横に回転し、突然開く。
俺達が何かした訳じゃ無い。
それは、向こうから開いたのだ。

その奥からは、くぐもった低い声が聞こえてきた。
「……そこに、プリーストが居るのか？」

部屋の中は、小さなベッドとタンス、そしてテーブルとイスがあるのみだった。
そこのテーブルの隣のイスに、そいつが腰掛け、佇んでいる。

「やあ、初めましてこんにちは。いや、外の時間は分からないから、今はこんばんわかな？」

暗視スキルでは、相手の輪郭しか見えない。
俺はその挨拶をしてきた相手に一言断わり、ジッポを取り出し灯を点けた。

そいつは、干乾びた皮が張り付いた骸骨だった。
それが、目深にローブを被っている。
「私はキール。このダンジョンを造り、貴族の令嬢をさらって行った、悪い魔法使いだ」

その昔、キールと言う名のアークウィザードが、一人の貴族の令嬢に恋をした。

たまたま街の視察をしていたその令嬢に、男は一目で恋をした。
だが、その恋が実らない事を知っていたその男は、ひたすら魔法

の修行に没頭した。
月日は流れ、男はいつしか、国一番の最高のアークウィザードと呼ばれていた。
男は持てる魔術を惜しみなく使い、国の為に貢献する。
男は多くの人々に称えられ。
そして、男は王城に呼ばれ、男を称える宴が催された。
そんな男に、王が言う。
その功績に報いたい。
どんなものでも望みを一つ、叶えよう。

キールは言った。
この世にたった一つ。どうしても叶わなかった望みがあります。
それは、虐げられている愛する人が、幸せに成ってくれる事。

「そう言って、私は貴族の令嬢を攫って行ったのだよ」

目の前の骸骨が、そんな事を自慢げに語った。
……なるほど。

「つまりなんだ。あんたは、悪い魔法使いじゃなくて良い魔法使いだったって事か？　その貴族の令嬢は、親にご機嫌取りの為に王様の妾として差し出され、でも王様には可愛がられず、正室や他の妾とも折り合いが上手くいかず。で、虐げられてる所を、要らないんなら俺にくれと言って、あんたが攫ってったと」

俺の言葉に骸骨が、カタカタと喉の部分の骨を鳴らした。

「そう言う事だな。で、その攫ったお嬢様にプロポーズしたら二つ返事でオッケー貰ってなぁ。お嬢様と愛の逃避行をしながら、王国軍とドンパチやった訳だ。……いやぁ、あれは楽しかったな。おっと、ちなみにその攫ったお嬢様が、そこにいる方だよ。どうだ、鎖骨のラインが美しいだろう」

骸骨が指す方を見ると、小さなベッドに白骨化した骨が、綺麗に整えられて横たわっている。

……どうしたもんだこれ。

俺の隣では、アクアが目の前の骸骨に今にも掴みかからん勢いで、目を爛々と輝かせていた。

きっと浄化させたくてさせたくて、しょうがないのだろう。

「で、だ。そこの女性に、ちょっと頼みがあってね」

骸骨が、そんな事を言ってきた。

「頼み？」

骸骨はコクリと頷く。

「私を成仏させてはくれないか。そこの彼女は、強い力を持ったプリーストなのだろう？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

アクアが、普段よりも朗々と魔法の詠唱を行なう中。

元は偉大な魔法使いだったその男は、ベッドに横たわるお嬢様のその腕の骨に手を置いた。

お嬢様の方はとっくに成仏しているらしく、本来はこの骸骨を浄化できるだけの大きさの魔法陣で良いのだが、アクアは気合を入れて浄化の魔法陣を拡大し、その魔法陣はお嬢様の骨はおろか、部屋中をも覆い尽くしていた。

この男はお嬢様を守り戦っていた際、重傷を負い、そのままお嬢様を守り抜く為に、人をやめてリッチーに成ったらしい。

不覚にもちょっとだけ格好良いと思ってしまった。

普段、店の経営不振に嘆くリッチーを見ているせいで、相対的にこっちのリッチーが格好良く見えてしまうのだろうか。

お嬢様は、このダンジョンで最期を迎えたらしい。

彼女は、幸せだったのだろうか。

「いや、助かるよ。アンデッドが自殺するなんてシュールな事は流石に出来なかったしねえ。じっとここで朽ち果てるのを待ってたら、とんでもない神聖なる力を感じたもんだからね。思わず私も、長い眠りから覚めるってものさ」

部屋を満たす柔らかな光に包まれ、骸骨がカタカタと笑う。

アクアが、唱え続けていた詠唱を終えた。

そして、俺が今までに見た事も無い優しげな表情で、骸骨に笑いかける。

これは一体誰だろう。

俺が自分の目を疑っていると、アクアが優しげな声で言った。

「神の理を捨て、自らリッチーと成ったアークウィザード、キール。水の女神アクアの名において、あなたの罪を許します。……目が覚めると、目の前にはエリスと言う不自然に胸のふくらんだ女神がい

るでしょう。例え年が離れていても、それが男女の仲でなく、どんな形でも良いと言うのなら。彼女にこう頼みなさい。再びお嬢様と会いたいと。きっと、望みを叶えてくれるわ」

真剣な話、これは一体誰だろう。

俺があまりのアクアの変貌にオロオロしていると、キールと言った骸骨は、光の中、深々と頭を下げた。

「『ターンアンデッド』！」

光が消え、再び暗闇に閉ざされる部屋の中。

そこには、あのリッチーの姿も、そしてなぜかお嬢様の骨も、消えて無くなっていた。

俺とアクアは、何とも言えない雰囲気の中静まり返る。

俺はアクアに静かに言った。

「……帰るか」

ダンジョン入口へと帰る中、俺は暗闇の中、モンスターに見つかるかもしれない事も気にせず、無言のアクアに語り続けていた。

「なあ、あのアンデッド、またお嬢様に会えるかな？」

「……分からない。まあ、エリスなら何とかしてくれるでしょ」
そっ気ないアクアの返事に、俺はそうか、と一言呟いた。
そして、そのまま話題を変える様に。
「そういや、あのリッチー良い人だったな。もう要らないからって、タンスにしまってた財産くれたぞ。どれぐらいの価値があるのか知らないけど、街に帰ったら山分けな」
それに、ピクリとアクアの肩がわずかに揺れた。
「……そうね。彼らの分まで、大事に使ってあげましょう……」
アクアのその声は、先程よりもちょっと大きく、そして元気になっていた。

……。
俺は、地上に戻ってアクアが元気になってから聞こうと思っていた事を、今ここで聞く事にした。

「……なあアクア。キールって、あいつが言ってたけどさ」
再び出たキールの名前に、
「……なに？」
ちょっと沈んだ声でアクアが返した。

「あの人さ。とてつもない神聖な力を感じて目覚めたって言ってたけどさ。……このダンジョンで、今日やたらとアンデッドと出会うのって、別にお前と一緒に居るからじゃ無いよな？」

「ッ！？」
アクアが俺の質問に、その場にビクッと立ち止まる。

そして、搾り出す様な声で。
「そ、そそそ、そんなー、そんな事はない……と、思うわ……？」
とてつもなく曖昧な返事を返してきた。

「……」

俺は無言で、そんなアクアとジワジワと距離を取る。

そんな俺を見て、アクアが俺にジリジリと距離を縮めて来た。

「……ねえカズマ。なんでそんなに距離を取るの？　何時モンスターが襲って来ても良い様に、私達もうちょっと近くに居るべきじゃ無いかしら？　そ、それに！　分かってる？　私がチョークで付けてきた印は、カズマの暗視で確認出来るのかしら？」

そのアクアの言葉に、俺は、くっ！　と一瞬悔しげな顔をしてしまった。

それを好機と見て取ったのか、更にアクアが口早に。

「ふふっ、そうよ！　私だけこんな所に置いて行こうとしたって、そうは行かないわよ！　そう、この状況ならお互いの立場は五分五分よ。……いいえ、帰り道を知り、アンデッドも倒せる私が居なかったらカズマは一人じゃ帰れない！　むしろ私の方が有利な状況じゃないかしら！？　そこら辺を良く理解したら、今日は私を、神様らしくアクア様と呼び、私の華麗な活躍を街の皆に……！」

アクアが何かを喚く中。

ダンジョンの闇の中から、何かの遠吠えが聞こえてきた。

調子に乗って騒ぐアクアの声に反応したのだろう。

敵感知で確認しても、間違いなくここに向かっている。

「……」

俺は無言で、そのままピタリと壁に張り付き、闇に溶け込む様に潜伏する。

「ちょっとカズマ！　待って！？　ねえ、何一人で潜伏してるの？

「ごめん、ごめんなさい、私が悪かったわ！　悪かったから、私にも潜伏スキル使ってよ！　ごめんなさい、カズマ！　ねえ、お願いしますカズマ様ー！！」

アクアが泣き出した頃に潜伏スキルに混ぜてやった。

15話

「ただいま！　いやー、色々と疲れちゃったよ！　まったくもう、次々と無理難題押し付けられちゃって……。どうだった、ダンジョンは？　儲かったかい？」

騒がしくも楽しげに、用事が出来たと言って出掛けていたクリスが、久しぶりに帰って来た。

それは俺が昼飯を食べ終えて、そろそろ一仕事しようかと思っていた時だった。

「お帰り。いやあ、そこそこは儲かったけどな。でも、しばらくダンジョンはいいや。冒険に出る楽しさを味わうってより、どっちかって言うと怖かった。まあ、怖い目にあったのは、大体は一緒に付いて来たコイツの所為なんだけどな。コラッ、結局帰りもお前の所為でアンデッドに集られたんだからな。悪いと思ったらそこを退け。今から仕事するんだよ。これ以上邪魔するなら痛い目に合わすぞ」

鍛冶スキルの使用には火を使う。

なので、ジッポ作りの為に手軽に火を使える暖炉前を使いたいのだが、暖炉の前は自分の特等席だと勝手に決めているアクアが、ソファーにがっしりとしがみつき、現在激しい抵抗を見せていた。

「なによ、やる気？　お互い素手の状態なら、超高いステータスに近接格闘スキルまで持ってる私に分があるわよ。暖炉の前は私の聖域。これを侵す者には天罰があああああああああーっ！！」

言う事聞かないアクアの首筋と背中にフリーズと言う名の天罰をくれてやると、アクアは悲鳴を上げて、しがみついていたソファーから転がり落ちる。

そのまま、俺は材料を抱えて、空いた暖炉の前に陣取った。
「あーあー……。キミも相変わらず無茶するなぁ。アクアさん大丈夫？」
首筋押さえてプルプルしているアクアにクリスが近寄り、首筋以外にも付着した霜を払っている。

広間の中央では、ダクネスとめぐみんがこの世界のチェスにも将棋にも似たボードゲームに興じている。
「フフ、我が軍勢の力を見よ。このマスにオーク兵をテレポート」
「めぐみん、ウィザードの使い方がイヤらしいぞ。……このマスにクルセイダーを移動し、王手だ」
「テレポート」
日本とは違い、魔法の概念があるこの世界ではチェスみたいな遊びのルールも若干違う。
めぐみんと一度やってみたが、敵の王様に盤外へテレポートされた時点で、もう二度とやらないと心に決めた。

と、首を押さえて震えていたアクアが、何を思ったかバッと立ち上がり、懐から自分の冒険者カードを取り出して俺に向けて突きつける。
「ちょっとカズマ、これを見なさいな、レベルの欄を！　今私は、この中で一番の高レベルなのよ？　もうベテランと呼ばれてもおかしくないレベルなのよ？　レベル三十未満のひよっ子の分際でおこがましいわよ！　ほら、分かったら格上の私に暖炉の前を譲りなさい！」

突き出してきたカードを見ると、確かにレベルが跳ね上がっていた。
表示レベルは三十六。
考えてみれば、魔王の幹部ベルディアに、先日のダンジョンでの

大量のアンデッド。
更には、最後にリッチーまで浄化したのだ。
アクアの成長を喜ぶと同時に、レベルを追い抜かれた事で、ちょっと悔しさも……。

……あれ？

「……なあアクア。お前、レベルは上がってるんだけども。ステータスが、最初見た時から一切伸びてないのはなぜ？」
「バカねカズマ。私を誰だと思っているの？　ステータスなんて最初からカンストしてるに決まってるじゃない。最初から、ステータスはカンスト。初期スキルポイントも、宴会芸スキルとアークプリーストの全魔法を習得出来る程の量を最初から保持。そこらの一般冒険者と私を、一緒にする事が間違ってるわ」

俺は思わずアクアのカードを取り落とした。
そのままガクリと絨毯に膝をつく。
そんな俺を見てアクアが勝ち誇った様に笑みを浮かべているが、それどころではない。

……つまりこいつはどれだけレベルを上げても、これ以上知力が上がらない訳だ。

俺はカードを拾い上げ、アクアに返すと暖炉の前を譲ってやった。
「あら？　なによ、随分素直じゃないの。……ねえ、なんで泣いてるの？　そんなにレベル抜かれたのがショックだったの？　……ね、ねえ、なんでそんな可哀想な人を見る目で私を見るの？」

俺は暖炉の前にアクアを座らせると、今日はもう、とても仕事を

する気分では無くなってしまった為、気分転換に街にでも繰り出す事にした。

街の中は雪が積もり、寒さの為か人もあまり出歩いてはいない。
この世界の住人達の常識では、冬は引き篭もるもの。
凶暴なモンスターしか活動しないこんな時期に、鎧を着こんでクエストに出掛けていけるのは日本から来たチート持ち連中ぐらいのものだ。
そしてこんな寒い中、街中をふらついているのは俺の様な暇人か……。

もしくは俺の前方で不審な動きを見せている、俺の知り合いぐらいのものだろう。

俺は道の往来でコソコソしながら、路地裏に佇む一軒の店をうかがっている、二人の知人に声を掛けた。
「キース、ダスト。お前らこんな所で何やってんの？」
「「うおっ！？」」
背後から声を掛けられ、キースとダストが飛び跳ねた。
今日の二人は、冒険者には似つかわしくないラフな格好をしている。
「な、なんだよカズマか、驚かすなよ。全く、潜伏スキル持ちはこれだから、全く……」
キースが俺を見て安心した様に言ってくる。
が、勿論俺は潜伏スキルなんて使っていないのだが。

「よう。あれか？　今日はあの三人は一緒じゃないのか？」
ダストが気にした様に俺の回りをチラチラ見ていた。
まあ連中にエライ目に合わされてるしな。警戒するのは分かる。

「いや、今日は俺一人だから安心してくれ。そんなにあいつらが苦手になったのか？　俺は家に居るのも飽きたから、散歩してるんだ。お前らはこんな所で何してんの？」
俺の言葉に安心したのか、ダストがホッと息を吐きながら。
「いや、まあ……俺達はその、なあ？　まああの姉ちゃん達が居ないなら別にいいんだ。と言うか、女連れじゃないなら別に気にする事はねえよ」
……？

なんだそりゃ、女が居るとマズイ事でもしてるのか？
俺のそんな感情が表に出ていたのだろう。
キースがにやけた表情で言ってきた。
「へへ、日頃綺麗どころに囲まれてるカズマには縁の無い事だよ。俺とダストは寂しく……「おい待て」
キースが何かを言いかけ、それをダストが遮った。
そして、ダストは俺に同情の視線を向けながら。

「キース……。こいつはそんなんじゃない。一見ハーレムに見えるが、そんなんじゃあ無いんだ。……こいつは、俺達の仲間だ。苦労してるんだよ色々と」

よし。
暇だし、今日はダストに酒でも奢ってやろう。
ダストの言葉を聞いた俺がそんな事を考えていると、ダストの目が途端に険しくなる。
その鋭い視線は、ある方向を向いていた。

俺もキースも、釣られてそちらを見ると、そこにいたのは和気あいあいと歩いてくる三人組の男女の姿。

それは……、

「……ん？　佐藤和真！　君はまだこの街に居たのか。優秀な仲間達やアクア様までもが一緒にいながら、まだこんな駆け出しの街でくすぶっているのか？」

二人の美少女を引き連れたミツルギが、俺を見るなり言って来た。

いきなりな挨拶に、俺ではなく、キースとダストがミツルギに食って掛かった。

「おいおいおーい？　俺の連れに、いきなり随分なご挨拶だな？　聞いたかダスト、自分もこの街に居るくせに何か言ったよこの兄ちゃんは」

「おいおいキース、よせよ。見ろよこの兄ちゃんを。この格好は上級職のソードマスター様だぜ？　しかも可愛いのを二人もはべらせて、見るからに勝ち組じゃねーか。そんな態度じゃソードマスター様に斬り捨てられちまうぜ？」

二人は俺の援護をしてくれているのか庇ってくれているのかは知らないが、今の状況は傍から見れば、美少女を連れたミツルギに絡んでいる、タチの悪いチンピラだ。

少なくとも通り掛かった人達は、俺達三人を間違いなくそんな目で見ていた。

ええ、勿論俺も仲間として見られています。

本当にありがとうございました。

そんな二人を見て、ミツルギの顔がちょっと引きつり。

「……君は、アクア様を連れ回しておいて、日頃こんな連中と関係を持っているのか？　アクア様はどこだ？　ハッキリ言って、君の傍はアクア様を置く環境として良くない。やはり、君ではダメだ。僕がアクア様をはぶっ！？」

ミツルギがそんな事を言い終わるより早く、キースが投げた雪玉が、ミツルギの顔面に命中した。

「テメーおいこら、人の連れの悪口言ってんじゃねーぞハーレム野郎が！」

続いてダストも、足元の雪を集め、投げつける。

「おら、女連れなら俺達みたいなのに絡んでないで、とっととそこの宿にでもしけ込んで来い！　おら、帰れ帰れ！」

二人に雪玉を投げつけられ、ミツルギが顔を引きつらせながら後ずさる。

そして、傍らにいた二人の少女がミツルギの腕を引っ張った。

「キョウヤ、行こう！　あんな連中相手しちゃダメよ！」

「そうよ、勇者としての格が落ちるわ！　見なよ、あの男三人で仲良くつるんでる哀しげな姿を！　あの連中、なんかパッとしないし、きっとキョウヤを僻んでるのよ。もう行こう！」

そのまま引っ張られるミツルギは、

「ちょ、待ってくれ！　まだ佐藤和真に、本題が……！　佐藤和真、君にちょっと頼みが……！」

何かを言いかけたまま、そのまま二人に引きずられて行った。

ミツルギを追い払った二人は、ミツルギ達が立ち去った後、目に見えてテンションが下がっていた。

……と言うか、落ち込んでいた。

あの二人の少女に言われた事が何気に効いていたのだろう。

「……えっと。その、ありがとうな二人とも。一応俺を庇ってくれたんだろ？　あれだ。その、奢るから酒でも飲みに行こうぜ？」

俺がオズオズと声を掛けると、二人は少しずつ元気を取り戻していく。

「あ、ああ。そうだな。飲みにでも行くか！　男同士で居て何が悪いってんだよ、なあ！」

「おう、そうだそうだ！　カズマ、お前さんとは前から一度、一緒に飲んでみたかったんだ。あの三人に苦労してんだろ？　酒でも飲んで語り合おうぜ！」

俺達三人は、まだ早い時間ながらも酒を飲みに繰り出した。

ギルドの酒場へと場所を変え、昼間から早々と三人で酒盛りをしていると、キースが愚痴っぽく言った。

「はーあ、全く。この時期はやる事無くって腐っちまうよな。おっと、カズマもいける口じゃないか。ほら、ドンドンいこう！」

俺にグイグイと酒を注ぎ、キースはうひゃひゃひゃと笑い出す。

キースは笑い上戸な所がある様だ。

「はあー……。冬になると、人肌恋しくなるよなあ……。正直、あのミツルギとか言ったハーレム野郎が妬ましいぜ……」

ダストが、そんな事を言いながら深々とため息を。

冬でやる事が無いからか、ギルド内の酒場の中には俺達以外にも結構な人数が昼間から酒を飲んでだべっている。

冒険者なんて連中は、元ニートな俺に劣らず、結講ダメ人間が多いのかも知れない。

俺はそんな事を考えながら、ちょっと気になっていた事を二人に聞いた。

「なあ。そういや二人は、俺やミツルギに会ったあそこで、一体何やってたんだ？」

そう、あの時二人は、あの路地裏にある一軒の店に、入るかどうしようかと悩んでいた様に見えた。

あそこの店は何だったのかが少し気になる。

俺の言葉に、二人は顔を見合わせた。

そして二人は頷くと。

キースが握っていたジョッキを置き、真剣な顔をした。

「カズマ。俺は、お前なら信用できる。今から言う事は、この街の男性冒険者達にとっては共通の秘密であり、絶対に漏らしちゃいけない話だ。カズマの仲間の女達に、絶対に漏らさないって約束出来るか？」

その重々しい雰囲気に、俺は若干押されながらも頷いた。

それを見たキースもこくりと頷き。

そして、喧騒の中、周りには聞こえない様なとても静かな声で、ダストが言った。

「……カズマ。この街には、サキュバス達がこっそり経営してる、良い夢を見させてくれる店があるって知ってるか？」

「詳しく」

俺はダストに即答していた。

１６話

街の大衆浴場にて。
俺はキースとダストの二人と共に、例の店へ行く前の準備をしていた。
夢を見るだけなので別にわざわざ風呂に入っていく必要は無いのだが、まあエチケットである。
念入りに身体を洗った後、ゆったりと風呂に浸かっていた。
「ふう………………」
酒を飲んだ後なので、ちょっとぼーっとしてくる。※お酒を飲んだ後の入浴は危険です。
見れば、キースとダストも上機嫌で何度も体を洗っていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「この街にはサキュバス達が住んでるんだ。って言うのも、連中は人間の持つムラムラする欲望の感情、つまり男の精気を吸って生きる悪魔だ。となると当然、彼女達には人間の男って存在が必要不可欠になってくる」
ふむふむ。
俺は酒場の中で熱心にダストの言葉に耳を傾けていた。
「で、だ。当然彼女達は俺達から精気を吸う訳だが……。ここの男性冒険者達とこの街に住むサキュバス達は、共存共栄の関係を築いている。……ほれ、俺達は基本馬小屋暮らしだろ？　つーとだ。その、色々と溜まって来るじゃないか。でも、周りには他の冒険者が

寝てる訳だ。ムラムラ来たってナニする事も出来ないだろ？」
「そ、そうですね」
俺はコクリと頷いた。
やましい事なんて何一つ無いが、俺の頬を一筋の汗が流れる。
やましい事は何も無い。

「かと言って、その辺に寝てる女冒険者にイタズラでもしてみろ。そんなもん即座に他の女冒険者に気付かれて袋叩きにされるか、もしくはイタズラしようとした相手が隠し持っていたダガーで、逆にアレを切り落とされそうになったっておかしくねえ」
言って、ダストが青い顔でブルリと身震いした。
キースが、それを見て。
「お前、まだリーンにちょっかい掛けた時のトラウマ、治ってなかったのか」
「う、うるせえ！　……で、そこでこのサキュバス達だ。こいつらが、俺達が寝てる間に凄いのを見させてくれる訳だ。俺達はスッキリ出来て、彼女達は生きていける。彼女達も、俺達が干乾びたり冒険に支障をきたさない程度に手加減してくれる。精気を吸い過ぎて冒険者がヤバイ事になった例は無い。……どうだ、誰も困らない話だろ？」
ダストのその言葉に、俺は何度もコクコク頷いた。

素晴らしい。
素晴らし過ぎる。
サキュバス達もむやみに人を襲う理由が無くなり、馬小屋でモンモンとする冒険者達もいなくなる。
きっと、性犯罪の抑制にだって繋がるだろう。

そう言えば、この街は凄く治安が良い。

俺の想像していた冒険者像ってのは、荒くれが多く、ガサツで喧嘩早くて酒が好き。
ずっとそんなイメージだったのだが、この街では暴力事件も少なく、犯罪の話も特に聞かない。
誰もが常に賢者タイムでいられれば、争いなんて起こらない。素晴らしい。
世の中って物はちゃんと上手い事成り立っているものなのだ。

そんな軽い感動を覚えていた俺の様子を見て、キースが言った。
「実はその店の事を教えて貰ったのって、俺達も最近なんだ。で、今日初めて、俺達もそこの店に行こうって事になってな。そこにカズマに出くわしたって訳だ」
ダストがクイッと酒を煽った。
そして、俺に言ってくる。
「と、言う訳だ。……どうだ？　なんなら一緒に「ぜひ行きます」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

大衆浴場から出た俺達は、若干の緊張を滲ませながら、先ほどの大通りに戻って来ていた。
きっと俺一人では、こういった店には入れなかっただろう。
だが、今の俺には頼もしい仲間がいる。
一人で妖しげな店に入る度胸は無いが、大勢なら入れるというあの不思議な心理だ。
大通りからちょっと外れ、路地裏に入った小さな店。
一見すると、何の変哲も無い飲食店に見えるのだが……。

「いらっしゃいませー！」

それは、多くの男の理想の体はこうあるべきとでも言う様な、そんな魅惑の体をした女性。

そんな体の、とてつもなく綺麗なお姉さんの出迎えを受けながら、俺達が店に入ると、店内には男性客しかいなかった。

店内には、同じく魅惑の肉体を誇るお姉さん達がウロウロしており、正直それだけで、何だか胸が切ない気持ちになってくる。

飲食店だと言うのに、客達のテーブルには食べ物や飲み物は何一つ置かれていない。

店内の客は皆それぞれテーブルで、アンケートの様な紙に一心不乱に何かをカリカリと書いていた。

俺達を空いているテーブルに案内してくれたお姉さんは、メニューを手に笑顔を浮かべ。

「お客様は、こちらのお店は初めてですか？」

その言葉に俺達三人はコクリと頷く。

お姉さんは微笑を湛え、

「……では、ここがどういうお店で、私達が何者かもご存知でしょうか？」

俺達は再び無言で頷いた。

それに満足したかの様に、お姉さんがテーブルにメニューを置く。

「ご注文はお好きにどうぞ。勿論、何も注文なされなくても結構です。……そして、こちらのアンケート用紙に、必要事項を記入して、会計の際に渡してくださいね？」

俺達はそのアンケートを受け取った。

つまり、サキュバスのお姉さん達の中で、アンケートに合わせて、一番好みのタイプにそった人が相手をしてくれるって事だろうか？

アンケート用紙に目を落とすと……。

「あの、夢の中での自分の状態、性別と外見、ってのは……？」

そんな、良く分からない事が書いてあった。

状態は分かるが、自分の性別や外見って……？

「状態とは、夢の中では王様とか英雄とかになってみたい、等ですね。性別や外見は、たまに、自分が女性側になってみたい、と言うお客様もいらっしゃいますので。年端もいかない少年になって、強気の女冒険者に押し倒されたいと言う方もいらっしゃいました」

大丈夫なのだろうか、ここの街の冒険者は。

しかし、そんな事まで設定出来るのか。

なるほど、夢だもんな。

キースがおずおずと、お姉さんに質問する様に片手を上げた。

「……あの、この相手の設定ってのは、どんな所まで指定が出来るんですかね？」

「どんな所までも、です。性格や口癖、外見やあなたへの好感度まで、何でも、誰でもです。実在しない相手だろうが、何でもです」

「マジですか」

「マジです」

思わず素で聞いてしまったが、お姉さんは即答してきた。

つまり、有名なあの子や、身近なあの子、そう、二次元嫁まで可能って事か？

「……あの、それって肖像権とか色んなものは大丈夫なんでしょうかね？」

「大丈夫です。だって夢ですから」

「ですよね」

お姉さんの即答に俺は安心した。

夢なら何も問題無い。
ダストがおずおずと片手を上げる。

「……相手への年齢の制限なんかも、無いって事ですかね？　いや、別にそういったのを指名する気はないんですがね、一応、なんて言うか……」

「ありません、お好みでどうぞ」

お姉さんは一切の揺らぎもなく即答する。

俺は思わず、

「だ、大丈夫なんですか？　その、条例とか、色々……」

「大丈夫です。だって夢ですもの」

「ですよね」

夢なら何も問題無い。

なんて事だ、最強じゃないかサキュバスの淫夢サービス。

俺達三人は、無言でアンケートに一心不乱に細かく細かく書き続けた。

そう、店内の他の客と同じ様に。

「では、皆様三時間コースを御希望ですので、お会計、それぞれ五千エリスをお願い致します」

安いな！

俺は会計でサイフを出し、その値段に驚いた。

俺は勿論そんな店には行った事が無いので細かい説明は省くが、日本での色んなお店の相場より破格に安い。

そんな俺の表情から察したのか、お姉さんが。
「……私達にとって、お金は、この街で人として生活していけるだけの分があればそれで充分ですから。後は、ほんのちょっと、お客様の精気を頂くだけですから」
そう言って、クスリと微笑んだ。

なんてこった、コレほどに皆が幸せになれる商売があっただろうか。
俺は彼女の献身的な慈愛に満ちた経営方針に、すっかり心を奪われた。
これはぜひ常連になって、彼女達を手助けしてやらねばならない。

俺達は思わず、サキュバスのお姉さんを拝み、呟いていた。
「か……神様……」
「や、止めて下さい縁起でもない！」

「では最後に、お泊りのご住所と本日の就寝予定時刻をお願いします。その時間帯に、当店のサキュバスが就寝中のお客様の傍へ行き、希望の夢を見せて差し上げます。出来ればお酒等は控えめにしておいて下さいね？　泥酔なされて、完全に熟睡されていると、流石に夢を見させる事が出来ませんから」
お姉さんの忠告を受けて、俺達は店を出る。
時刻はまだ夕方だが、店を出た俺達は、何となくそのまま解散する事になった。
「そ、それじゃ、またな」

「お、おう！」
「ま、またな！」
二人は、何となくソワソワして早く帰りたそうにしている。
と言うか、俺も同じ気持ちだ。
指定した就寝時間まではまだ大分あるのだが、早く帰って準備して、今日は早めに寝ておきたい。
俺は何処かへ寄り道する事も無く、そのまま急いで帰宅した。

「カズマ、お帰りなさい！　喜びなさいな、今日の晩御飯は凄いわよ！　カニよ！　さっきダクネスの実家のお父さんから、超上物の霜降り赤ガニが送られて来たのよ！　しかも、すんごい高級酒まで付いて！　パーティメンバーの皆様に、普段娘がお世話になってる御礼です、だってさ！」

屋敷に帰ると、アクアが満面の笑みで出迎えてくれた。
カニか。
この世界でも、カニは高級品らしい。
この世界のカニなんて、食べた事がない。
と言うか、日本に住んでた頃でもロクに食えなかったと言っていい。

「あわわ……、貧乏な冒険者稼業を生業にしておきながら、まさか霜降り赤ガニをお目にかかれる日が来るとは……！　今日ほどこのパーティに加入して良かったと思った日はないです……」
「そんなに高級なカニなのか？」

霜降り赤ガニとやらに手を合わせて拝み出しためぐみんに、俺は気になって尋ねてみる。

するとめぐみんが、何バカ言ってんだとばかりにオーバーアクション気味に、拳を振り上げ力説した。

「当たり前です！　分かり易く例えるならば、このカニを食べる代わりに今日は爆裂魔法を我慢しろと言われれば、大喜びで我慢して、食べた後に爆裂魔法をぶっ放します。それぐらいに高級品ですよ！」

「おお、そりゃ凄……！　……あれ？　お前今最後なんて言った？」

クリスが目を輝かせながら、物欲しそうな顔で口を開け、下唇を指でなぞっていた。

それを見てダクネスが、

「クリスにも昔から散々世話になったが、今までまともに礼も言えなかったな。カニを肴に、今日は一緒に遅くまで飲もう」

「いいのっ!?　やったー！」

喜ぶクリスを笑みを浮かべて眺めながら、ダクネスが広間の食卓テーブルに、調理済みのカニを並べていく。

アクアが嬉々として人数分のグラスを持ってきた。

全員で食卓に着き、早速霜降り赤ガニを……。

「!?」

パキッと割ったカニの足から取り出した、白とピンクの身を酢に付けて、そのまま頬張る。

そのあまりの美味さに驚いた。

ふんわり甘く、濃縮されたカニ特有の旨みが口に広がる。

見れば他の皆も黙々と無言でカニを食べていた。

あかん、これは止まらん！

俺はそのままカニの甲羅をパカッと開くと、そこに付いていたカニ味噌を……

「カズマ、ちょっとここにティンダーちょうだい。私が今から、この高級酒の美味しい飲み方を教えてあげるわ」
言いながら、早々と甲羅に付いたカニ味噌を平らげていたアクアが、小さな手鍋の中に炭を入れ、その上に金網を置く。
言ってみれば、簡単な七輪の様な物を作った。
言われるままに炭に火を付けてやると、金網の上に、僅かにカニ味噌の残った甲羅を置いた。
そのまま甲羅の中に、ダクネスの親父さんが送ってきた、日本酒の様な透明の酒を注いでいく。
アクアは上機嫌で、軽く焦げ目が付く程度に甲羅を炙って、熱燗にしたそれを一口すすり……。

「ほぅ……っ」

実に美味そうに息を吐いた。
それを見ていた全員がごくりと喉を鳴らし、皆と共にそれを実行しようとした俺は、はたと気付いた。

これは罠だ！

いかん、カニの美味さにすっかり忘れていたが、これからサキュバスのお姉さんが来るのだ。
お姉さんが言っていたじゃないか、酒飲んで泥酔してたら夢が見れないと。

落ち着け、俺は我慢が出来る男だ。
鋼の精神を持つ、耐えれる男だ。

「なっ！？　なにこれ、信じられない！　超美味しいっ！」

惑わされるな！
クリスのあんな声に惑わされるんじゃない！
そう、多分あれを口にしたらもう止まらない。
そのまま酒の勢いもあり、いいや、もうどうにでもなれとばかりに酒を飲み続けるだろう。
それぐらいにカニは美味いし、酒も美味そうだ。

「カズマカズマ、これは凄いですよ、飲んでみるといいです！」

やめろめぐみん、誘惑するな！

俺が変な顔で耐えているのを見たダクネスが、首を傾げて俺を見た。
「……どうしたカズマ。酒はいけた方だろう？　……もしかして、カニが口に合わなかったか？」
そんな事を言って、ちょっと不安そうな表情を浮かべた。

ちがう、そうじゃない、カニは美味い。
「いや、カニは凄く美味い、それは間違いない。ただ、今日は酒は控えたいなって思ってな？　えっと、実はちょっと昼間にキース達と飲んできたんだ。だから、酒はそれほどいらないかな、と。明日。明日貰うよ」
俺の言い訳に、そうか、と安心した様に笑うダクネス。

止めろ、そんな純粋そうな顔で笑わないでくれ、普段はロクでもない事を口走って、下着同然のエロい格好でうろついてるクセに、何で今日に限ってそんな……！
そんな……！！

「ほーん？　あんた、明日までこのお酒残ってると思ってんの？　勿論私が全部飲んじゃうわよ？　これをのまないとはとんでもない！　わーい、カズマの分まで私が飲もう！」

くそっ、安定のバカがこの上なく憎たらしい。
そんな俺に、ダクネスが再び笑いかけ。
「……ん、そうか。なら、せめて沢山食べてくれ。日頃の礼だ」

その言葉に、何だか後ろめたい事をしている気がして、胸が痛んだ。
そうだ、一緒に酒飲んで、もう忘れちまえばいい。
わざわざ来てくれるサキュバスのお姉さんには、明日謝りに行こう。
こいつらと楽しく飲んで、また明日から頑張ろう。

そうだ、たかがあのアンケートの内容が、そのままリアルな夢になって出てくるってだけの話だ。
そして、見た夢は朝起きても忘れる事は無いらしい。
たかが、それだけの事。

目の前のダクネスの顔を見ろ。
そして、皆の顔を見ろ。
一体どっちが大事かを考えろ。
そして、アンケートに自分が何を書いたかを思い出せ。
そう、最初から何も悩む必要なんて無かったんだ。

俺はカニをたらふく食うと、立ち上がり。

「それじゃ、ちょっと早いけど俺はもう寝るとするよ。ダクネス、

ご馳走さん、お前ら、お休み！」

俺はもう何も迷う事なく、自分の部屋へと早々と引き込もった。

部屋に閉じこもって鍵を掛け、窓の鍵を外しておく。

別に鍵を外せと言われた訳では無いが、念の為だ。

わざわざ来て頂くのに、これ以上お手数かけては申し訳ない。

指定した時刻は後数時間後。

それまでに眠らなければいけないのだが、色んな興奮と緊張で眠れない。

ヤバイ、ドキドキして来た。

ああ、馬小屋に寝とけば良かったのかな、あそこなら、馬小屋の外から夢を見させるとか言っていた。

あっ、そういえば、聞いてなかったが朝起きたら下着とかどうなってるんだろう！

いや、そんな注意事項は聞いてないし大丈夫なのかもしれない。

馬小屋に泊まっている時、朝パンツ洗ってる冒険者は見た事なかった。

ああ、どうしようどうしよう、緊張と期待で興奮して眠れない！

俺は一体どれぐらいそうしていたのだろうか。

気付けば、サキュバスへの指定の時間はもう、後少しにまで迫っ

ていた。

俺はベッドの中での緊張がピークに達しかけ、これはいよいよ眠れないと思い、泥酔しない程度に少しだけ寝酒でも飲もうとベッドから……、

「この曲者ー！　出会え出会え！　皆、この屋敷に曲者よーっ！！」

それは屋敷に響くアクアの声。

俺は寝間着姿のまま、声の元へと飛び出した。

屋敷の広間には、昼間見たお姉さん風のサキュバスよりも幼げな、小柄なサキュバスの女の子がアクアの手によって取り押さえられていた。

それを、他の三人が取り囲んでいる。

「カズマ、見て見て！　実はこの屋敷には強力な結界を張ってあるんだけどね？　結界に反応があったから外に出て見れば、このサキュバスが屋敷に入ろうとしてたみたいで、結界に引っかかって庭で動けなくなってたの！　きっと、カズマを狙ってやってきたのね！　でも、もう大丈夫よカズマ。今こいつを、サクッと悪魔祓いしてやるから！」

アクアの言葉に、サキュバスがヒッと小さく声を上げ、アクア以外の三人は、鎧こそ着ていないものの、全員武器を持っていた。

俺の知らない間に結界だとか……。

相変わらず余計な事をしてくれる事にかけては定評のあるアクアが、全員がサキュバスを取り囲んだ事を確認し、サキュバスから手を放し、そのままビシと人指し指を突きつけた。

「さあ、観念するのね！　今とびきり強力な対悪魔用の……。……？　カズマ、男のあんたはこっち来ない方がいいわよ？　でないとサキュバスに操られて……」

俺は無言でサキュバスの前に立つと、その手を取り、そのまま玄関に向かって連れていく。

「ちょちょちょ！　キ、キミ、そのサキュバスをどうするつもり！？　ひょっとして操られちゃった？　サキュバスは、人類の敵だよ！　彼女達がいる街では、極端に結婚率と出生率が落ち込むんだ！」

クリスが俺に鋭く叫ぶ。

クリス以外の三人も、最初はあっけに取られていた様だが、武器を構えてサキュバスに鋭い視線を送っていた。

サキュバスが、俺にだけ聞こえる小さな声で。

「お、お客さんすいません！　私の事はいいです、どうせモンスターですから！　結界は予想外でしたが、コッソリ枕元に立つのは私達の一番得意とする所。これは、侵入できなかった未熟な私が悪いんです。お客さんに恥をかかせる訳にはいきません、私は街に迷い込んだ野良サキュバスって事で退治されますから、お客さんは、何も知らないフリをしてください！」

俺はそんな事を言ってくるサキュバスを、背中に庇う様にして、アクア達に対して向き直った。

そのままサキュバスを、玄関に向けて後ろ手にドンと押し。

そして、アクア達に向かって拳を構え、そのままファィティングポーズを取る。

「お、お客さん！？」

サキュバスが小さな悲鳴じみた声を上げる中。

「……ちょっと、一体何のつもり？　仮にも女神な私としては、そ

この悪魔を見逃す訳には行かないわよ？　カズマ、袋叩きにされたくなかったら、そこを退きなさいよ！」

アクアが眉根を寄せて、チンピラみたいな事を言ってきた。

更にはダクネスがズイと前に出て、威圧するような声で言ってくる。

「カズマ、一応神に仕えるクルセイダーな私としても、サキュバスを生かしては帰せないな。……さあ、そこをどけ」

その言葉に、俺は思わず後ずさりそうになる。

「カズマ、一体何をトチ狂ったんですか？　可愛くても、それは悪魔、モンスターですよ？　しっかりして下さい、それは倒すべき敵ですよ」

めぐみんが呆れた様に。

そして、冷たい目線で突き放す様な声で言った。

その視線が心にくるが、それでも俺は引き下がらない。

後ろ手に、サキュバスに早く行けとばかりに手を振った。

それを見たクリスが一歩前に出て、腰を落として身構えた。

そして……、

「キミは本気でその子を逃がすつもりの様だね。なら、先にキミを倒すまでだよ。……キミにはぱんつ剥がれた恨みがあるしねぇ……、では遠慮なく。さあ、いってみよう！」

叫ぶと同時に、俺に向かって飛び掛ってきた。

それを見たサキュバスが、小さな声ながらも悲痛に叫ぶ。

「お、お客さーん！！」

絶対に裏切ってはいけない物がある。

それは、自分を信じて秘密を話してくれた、友人達の信頼だ。

絶対に守るべき物がある。

それは、寂しい男達の哀しい欲望を満たしてあげようとする、俺の背中に隠れる優しい悪魔。

俺は拳を握り締め。

「かかってこいやー！！」

屋敷中に響く大声で、熱く、熱く、叫んでいた。

無事サキュバスを逃がしたものの、サキュバスに逃げられた腹いせに袋叩きにされた俺は、探さないで下さいの紙と共に家出をし。

後日、外泊から帰って来た時には、俺はこの世の全てを許せるような優しい心で、アクア達へのお土産を手に、袋叩きにされた事など最初から無かったかの様に忘れ去っていた。

サキュバス達のお蔭で、この街は今日も、とても平和だ。

17話

小さな金槌を使い、鍛冶スキルで薄い鉄板を伸ばしていく。
そして形を整えてから暖炉の前の火を使い、それを鍛冶スキルで綺麗に溶接。

俺が朝から暖炉の前でせっせとジッポ作っているそんな様子を、暖炉の前に斜めに置いたソファーに陣取り、アクアがじっと眺めていた。
アクアとの暖炉前の争奪戦は、毎日続けていた結果、半分づつ場所を使うという事で和解した。
というか、毎日毎日ジッポ作りの邪魔をするので、俺が折れた感じだが。

一体何が面白いのか分からないが、そんな風に作業の様子を見ていられると凄く気になる。
今の所邪魔してくる様子が無いのが救いだが、こいつの事だ。
また何をやらかすか……。

「……っと。完成」

そうこうする内、今日一個目のジッポ完成。
それをテーブルに置き、俺は二つ目の製作に取り掛かる。
いい加減作業に慣れてきた為、今では一日に5つぐらいは作れるようになっていた。

俺が作ったばかりのジッポをつまみ上げ、アクアは興味深そうにしげしげ眺める。
それを両手で隠す様に覆って見せると。

「カズマ、みてみてー」

……？

アクアがそのジッポをテーブルの上に、コトリと置いた。

……というか、アクアが手で覆ったジッポが、二周りぐらい小さくなってて……。

「小さくなっちゃった」

「バカ野郎！！」

アクアが縮めたジッポを慌てて取り上げるが、どこかのお笑い芸人がやるあの手品と違い、本当に物理的に小さくなっていた。

「おま……！　人が朝から時間掛けて作った物になんて事してくれんだ！　どうすんだこれ、元に戻せるのかよ！？」

「戻せる訳ないじゃない」

頼んでもいない芸を見せてきたアクアは、悪びれもせずにしれっと言った。

こいつどうしてくれようかと悩んでいると、アクアは退屈そうに伸びをする。

「冬ってのは暇ねぇ……。ダクネスは一日一爆裂の護衛でめぐみんに付いてっちゃったし。クリスは、どこかに逃げたサキュバス狩りだって言って、どっか行っちゃったし。私もいい加減、お酒飲んでゴロゴロしてるのにも飽きてきたわ。何か面白い事は無いかしら？」

そんなアクアに、俺は縮んだジッポをどうにか直せないかと弄くりながら。

「なら、お前もジッポ作りくらい手伝えよ。ダクネスとめぐみんは、たまに手伝ってくれるぞ。クリスなんて家事全般こなしてくれてるんだ。お前、手先は器用だろ？」

「私がやると五個に一個は小さくなるわよ？」

「何でだよ！　体の中にスモールライトでも埋まってんのか！　ったく、じゃあ完成品のジッポが貯まってきたから、ウィズの店に卸しに行くの手伝ってくれ。箱一つ持ってくれるだけでいいから」
俺はそう言って、一応アクアが縮めたジッポもポケットの中に放り込んだ。

街の中は未だ雪がたっぷり積もっており、春の訪れにはまだ遠い。
どこかのチート持ち、例えば魔剣持ったあの男とかが、冬将軍を倒してくれないものだろうか。
俺が散々レベル下げておいてなんなのだが。

俺はジッポの詰まった箱をアクアと共にそれぞれ一つずつ抱え、ウィズの店へとやってきた。
しかし、そろそろ新しい商品を考えるべきだよな。
専門知識が無くてもお手軽に作成出来そうな物。

うーむ……。

そんな事を悩みながらドアを開けると、ドアの鐘が涼しげな音を響かせた。
店内に入ると、物の見事に客はいない。
と言うか、この店に客がいる姿をロクに見た事が無いのだが……。
「あっ、カズマさんいらっしゃい！　それと、アクア様も……」
客が俺とアクアだと気付いたウィズが、尻すぼみな挨拶をしてきた。

「あらあら？　なぜこの私には、そんな元気なさそうな声の挨拶なのかしら？　ひょっとして、嫌われてるのかしら？　せっかくこうして、わざわざ売れ筋商品を持ってきてあげたのに？」
　早速ウィズに絡みだしたアクアに、ウィズが慌てて否定した。
「ち、違います違います！　その、いつもはカズマさんお一人なので、珍しいなと思っただけで！」
　まあ、普段は俺一人で納品に来てるしな。

「ほら、箱よこせ。ウィズが怖がってるから、納品終わるまでお前はちょっと向こうで遊んでろよ」
　俺がそう促すと、アクアは一旦離れ、商品棚の陰から頭を覗かせ、ウィズをじっと見つめ出す。
　棚の陰からウィズを威嚇しているらしい。

「……え、えっと、いつもありがとうございます。で、では、これが今回の金額で……」
　やはりそんなアクアが気になるのか、ウィズがビクビクしながら俺に売り上げを渡してくれた。
「おっと、いつも悪いな。……しかし、この店はいつ来てもあまり客がいないが大丈夫なのか？　いつも、暇でしょうがないだろうに」
　そんな俺の疑問に、ウィズが困った様に笑った。
「あはは……。まあ、あまりお客さんは来ませんね……。売れるのはカズマさんが持ってきてくれたジッポぐらいですから。お陰で街の情報にも疎くて……。そう言えば、私最近知ったんですが、あのベルディアさんを倒されたそうで。流石はアクア様ですね」
　そう言って、ウィズは穏やかな笑みを浮かべ……。

　あれ？
「あのベルディアさんって、なんかベルディアを知ってたみたいな口ぶりだな。あれか？　同じアンデッド仲間だから繋がりでもあっ

たのか？」
俺のそんな疑問に、ウィズが世間話でもする様な気軽さで。
「ああ、言ってませんでしたっけ。私、魔王軍の幹部の一人ですから」
……。
「確保ーっ！！」
商品棚の陰に隠れていたアクアが、ウィズに向かって襲い掛かった！
「待ってーっ！　お願いします、話を聞いてくださいアクア様！」
アクアに取り押さえられたウィズが、アクアにのしかかられたまま悲鳴を上げる。
アクアが、いい仕事したとばかりに頬の汗を拭い、
「やったわねカズマ！　これで借金なんてチャラよチャラ！　それどころかお釣りがくるわ！　霜降り赤ガニだってまた食べられるわよ！」
嬉々としてそんな事を言っていた。
俺は取り押さえられているウィズへと屈み込み、
「……えっと、おいアクア、一応事情は聞いてやれよ。幹部ってどう言う事だ？　流石に魔王軍のスパイとかだと、一応冒険者な手前、見逃すって訳にも……」

そんな俺の言葉に、ウィズが泣きそうになりながら必死に弁解する。

「違うんです！　魔王城を守る結界の維持の為に、頼まれたんです！　勿論今まで人に危害を加えた事は無いですし、幹部って言っても、なんちゃって幹部ですから！　私を倒しても、賞金も掛かってませんから！」

ウィズの言葉に俺とアクアは顔を見合わせた。

「……良く分かんないけど、念の為に退治しておくわね」

「アクア様ーっ！！」

アクアに取り押さえられながら喚くウィズ。

俺は魔法の詠唱を始めたアクアに、まあ待てと手を突き出し、

「えっと、何だ？　つまり、良くゲームとかにある、幹部を全部倒すと魔王の城への道が開けるとか。そんな感じか？　で、ウィズは、その結界とやらの維持だけ請け負っていると」

「げーむとやらは知りませんが、そういう事です！　魔王さんに頼まれたんです、人里でお店を経営しながらのんびり暮らすと言うなら止めないから、幹部として結界の維持だけ頼めないかって！　魔王の幹部が人里でお店やってるなんて思わないだろうから、人間に倒されないだけでも充分助かるって！」

「つまり、あんたが生きてるだけで人類は魔王城には攻め込めないし、私達には充分迷惑って事ね。カズマ、退治しときましょう」

アクアの言葉にウィズが泣き出す。

「待って！　待ってください、アクア様の力なら、幹部の二、三人ぐらいで維持する結界なら破れるはず！　魔王の幹部は元々八人。

風の噂で、すでに一人お亡くなりになったと聞いてますし……。ベルディアさんが倒されたのなら、残るは六人。私を倒した所で、後五人も幹部がいたなら流石にアクア様でも結界破りは出来ませんよ？　魔王城に攻め込むには、私を浄化したとしても、どのみち後二、三人は幹部を倒さないと……。せめて、アクア様が結界を破れるぐらいにまで幹部が減るまで、生かしといてください……、まだやるべき事があるんです……」

顔を覆いシクシク泣き出すウィズに、流石にアクアも微妙な表情を浮かべた。

そのままチラチラと俺をうかがう。

……俺に決めろってのか。

「……ええっと。まあ、いいんじゃないのか？　どの道、今ウィズを浄化したって、その結界とやらがどうにかなる訳でもないんだろ？　それにだ、本来なら幹部全員倒さないと結界とやらは解けないんだろうが、アクアなら、幹部を全員倒さなくても結界が破れるんだろ？　なら、ウィズ以外の幹部がある程度減った所で、その時また考えればいい」

と言うか、魔王だの幹部だの、俺達みたいな未熟なパーティにどうにか出来るとも思えないし、そもそも、そんな危険な事に首突っ込むつもりもない。

放っておけばチート持ち連中がどうにか幹部を減らすだろう。

そうなったら、結界を破るその時だけ、そいつらにアクアをレンタルでもしてやればいい。

その言葉に、ウィズがぱあっと表情を明るくさせた。

「でも、良いのか？　幹部って連中は一応ウィズの知り合いとかなんだろ？　ベルディアを倒した俺達に恨みとかは無いのか？」

俺の疑問にウィズがちょっとだけ悩み。

「……ベルディアさんとは、特に仲が良かったとか、そんな事も無かったですからね……。私が歩いてると、よく足元に自分の首を転がしてきて、スカートの中を覗こうとする人でした。幹部の中で私と仲の良かった方は一人しかいませんし、その方は……、まあ簡単に死ぬような方でも無いですから。……それに」

そう言った後、ウィズは。

「私は今でも、心だけは人間のつもりですしね」

と、ちょっとだけ寂しげに笑った。

ウィズの店からの帰り道。

俺は後ろを付いてくるアクアに、念の為に釘を刺した。

「おい、一応言っとくが襲撃に行くなよ？　ウィズにはこれからも世話になるんだからな？」

「分かってるわよ、ウィズのあんな顔見た後に浄化するほど私だって鬼じゃないわよ。それにまあ、魔王の幹部連中なんて、私が力を与えたチート持ちの人達がなんとかするでしょ。そんな事よりも、私達はお金稼いで借金返さないとね」

おっと、アクアのその言葉で思い出した。

アクアに、ちょっと頼みたい事が出来たのだ。

「……なあ、今朝お前が、宴会芸スキルでコンパクト化したジッポ

な。……あれ、いつも作ってるジッポよりもウィズが良い値段で買い取ってくれる事になったんだ。でさ、お前が芸を金儲けに使いたくないって美学は分かるんだけどさ」
「嫌」
俺が頼む前に拒否された。
残念そうな俺を見ながら、アクアが笑う。
「ま、私も一緒に新しい商売を考えてあげるわ。そうね、この冬が終わるまでに、借金を半分ぐらいに減らしたいわね！」
なんて頼もしくないんだろう。
だが、腐っていてもしょうがない。
そう、日本で得た知識でも使って、もっと稼いで、借金返してのんびり暮らそう。
無理そうなら、逃げて新しい土地でやり直せば良い。
なんせ、俺はまだこの世界に来て半年も経っていない。
そう、これからだ。
俺はアクアに自信有り気に笑みを返し。
「まあ、見とけよ。冬の間に荒稼ぎ出来る手を考えて、残りの余生は温い人生送れるようにしてやる。見とけよ？　今に成り上がってやるからな！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

やがてまた雪が降り、それが積もる。
俺はその間、いつもの連中に、いつものバカ騒ぎに巻き込まれ、

そして相変わらずの尻拭い。

そんな事を繰り返し、やがて、積もった雪が消える頃。

六千万ほどあった俺の借金は……

八千万に増えてました。

17話（後書き）

次回更新から三部に入ります

1話

「ほら、お迎えが来たぞ。……もうこんな所には来るんじゃないぞ？」

「はい……。ごめんなさい……。お世話になりました……」

重々しい門から出てきたアクアが、看守の人に別れの挨拶をする。

まだ冷たい雨が降る中、俺は出てきたアクアに近付き、一本の傘を差し出した。

それにアクアが気付き、俺の方を振り返り……。

アクアが俺の顔を見て、ジワッと目に涙を溜めた。

「……お帰り。大変だったな。もうこんな事はするなよ？」

俺の言葉に、アクアが泣きながらしがみついてきた。

「「「お帰りなさい！」」」

アクアを連れて屋敷に帰ると、めぐみんとダクネス、クリスの三人が、アクアに明るくお帰りを言った。

「うぐっ……、うえっ……！　だ、だだいま……っ！！」

泣きじゃくりながらただいまを言うアクア。
そこにはもはや、いつぞやのダンジョン探索の時、女神っぽかった頃の面影など、もはや跡形も残っていない。
泣くアクアを広間の真ん中のソファーに連れて行き、そこの中央に座らせた。
ソファーの前のテーブルには、アクアの為に用意した食い物が並べられている。

「アクアさん、食べてください、お腹空いてるでしょ？」
クリスが優しく促すと、牢の中で、きっとまずい安飯ばかりを食べさせられていたからだろう。
アクアが、泣きながら食い物をがっつきだした。

皆がそんなアクアを暖かく見守る中。
申し訳ないが、俺は心を鬼にして、アクアにある事を伝えることにした。

「アクア。ちょっと話があるんだが。……まあ、まずは、出所おめでとう」

俺の言葉を聞きながら、アクアが無言でラーメンみたいな感じの麺料理を貪っていた。
そんなアクアに。

「今回、お前がやらかしてくれた所為でなぜか俺の抱えている借金が増えた訳だが。……今回は、俺は殆ど関与してないんだし。……増えた分はお前が払えよ」

その言葉に、アクアが料理を口に運んでいた手を止め。
にこにこしながら、アクアが食べ物を頬張る様子を微笑ましく見

ていた三人も、動きが止まる。

「お前が作ってきた借金が千五百万。めぐみんが作ってきた借金が五百万。……俺は知らないからな？」

「わあああああーっ！」

俺の言葉に、アクアが途端に泣き出した。

その場に顔を伏せ、両手で顔を覆い、

「酷い！　私だって、カズマの借金を返してあげようって思ってやった事なのに、それで拘留された挙句に、出て来たらこの仕打ち！　鬼っ！　カズマ、あんたは鬼よおっ！！　私、今小銭しかないのにどう払えとっ！？」

そのアクアの言葉に、女性陣が俺に非難を交えた視線を浴びせてきた。

「……キミってヤツは、自分の為に頑張ってくれたアクアさんの気持ちを踏みにじるつもりなのかい？　キミって、そんな薄情なヤツだったのかい？」

クリスの冷たい視線に俺は慌て、

「い、いや待てよ！　俺の為って言ったって、犯罪やらかされた日にはたまんねーぞ！」

そう、どれだけ人の為だとか大義名分を並べても、犯罪は犯罪だ。

「だって！　カズマから方法を教えて貰った時に、それが犯罪だなんて知らなかったんだもの！　知らなかったんだものっ！！」

アクアがそんな事を言って……、

「おいコラッ、名前ぐらいは聞いた事はあるだろうが！　ねずみ講

を、聞いた事も無いだとか言わせねーぞ！」

そう、こいつがやらかしたのはねずみ講。

日本では違法なアレである。

儲け話を考えていた時に、俺がボソッと、まさかねずみ講やる訳にもいかないしなぁと呟いたのを聞きとがめ。

やけに細かく聞いてくるのでざっと教えてやったのだが、こいつの実行力を甘く見ていた俺もバカだった。

こいつは、こんな余計な時にだけ異常な行動力を見せ、この世界にものの見事にねずみ講を流行らせたのだ。

事態を重く見たこの国の偉い人が、迅速な法整備を行なって、ねずみ講は犯罪であると認定。

そしてアクアは今まで拘留され、事情聴取と取調べを受けていたのだが。

「……まあ、被害者に金さえ返せば、今回は罪には問わず、と言う事になったのだ。それで良しとしようじゃないか」

今回の事で、親父さんと共に尽力してくれたダクネスに言われると、俺としても何も言えなくなる。

アクアがねずみ講で物を売りつけた内の何人かは、すでにそこそこ稼いだ後、国に売上金の請求をされる前に逃走している。

おかげで、ねずみ講を最初に始めたアクアの所に、全ての被害の請求が回された。

ダクネスの言葉に同意するようにめぐみんが。

「そ、そうですよ。それにカズマはパーティリーダーですし、こういった、困った時こそ私達を助けてくれてもいいと思いますし！」

「お前がわざわざ山まで出向いて爆裂魔法使わなきゃ、借金はもう少し安くて済んだんだけどな」
俺の言葉にめぐみんがそっと目を逸らす。
こいつはこいつで、ダクネスと共に一日一爆裂とやらでわざわざ雪山まで出向いて魔法を放ち、雪崩に巻き込まれて遭難し、俺が街の捜索隊に要請をして、凍死寸前だった所を救助された。
結構な人数による捜索が行なわれ、雪山の捜索費用が５００万。
「そもそも、なんでわざわざ山まで行ったんだよ。爆裂魔法なんて、その辺で撃てばいいじゃないか」
俺の疑問にめぐみんが、
「私の無垢な体に、大きな建造物を崩壊させる喜びを教え込んだのはカズマじゃないですか。あれを知ったら、もうそこらの原っぱに爆裂魔法なんて撃てませんよ。せめて岩とか、そんなんじゃないと私の火照りは満たせません」
「おい、卑猥な言い方すんなよ、クリスが俺を見る目が冷えてるじゃないか」
結果、アクアの損害賠償とめぐみんの捜索費用の請求が、なぜかパーティリーダーと言う事で俺に宛てて寄せられた。
この連中と一緒に居るのだ。
もう、このぐらいはしょうがないのかと、俺が半ば諦めかけていると。
「……ズルッ」
今まで泣き崩れていたアクアの方から、麺をすする様な音が聞こえた。

俺がそちらを見ると、再び顔を覆うアクアの姿。

…………。

「おい。お前今、食ったろ。泣いてたと思ったら、今食ったろ」

「ふってない」

アクアが、顔を覆ったままくぐもった声で言ってきた。

「リスみたいな頬しやがって、口開けてみろ！　反省してないだろお前！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

街の外の平原は、すっかり雪が融けて大地が見える。

そう、もう季節は春である。

春といえば、冬は活動を潜めていた者達が起き出してくる季節。

冬眠中だった生き物が、その活動を再開する時期だ。

そして、春と言えば、恋の季節。

様々な生き物の繁殖期でもある。

そう。

「いやー！　もういやあああ！　カエルに食べられるのは、もういやあああああっ！！」

強い精力を持つ、ジャイアントトードの繁殖期だ。

借金が増えた原因が原因なので、カエルにトラウマがある二人に有無を言わせず、このクエストを受けたのだが……。

「しかし、ここのカエルは繁殖期が春と秋の二回もあるんだな。なんつーか、ここは他の生き物といい野菜といい、どいつもこいつも逞し過ぎないか」

俺は平原でカエルに追われるアクアを見ながら、しみじみと呟いた。

その、アクアを追うカエルの後を、ダクネスが追い掛け回している。

「まあ、おかげで我々冒険者も、こうやってお仕事できる訳ですし。私の爆裂魔法で、すでに八匹を退治。カエル一匹の討伐で二万エリス。カエル肉の買い取りが五千エリス。私が魔法で退治した分はカエル肉も消し飛んでしまいましたが、アクアを追っているヤツとここに居るカエルで、討伐数は丁度十匹。二匹とも剣で仕留めれば、肉の買い取りも合わせて二十一万エリスです。借金返済には遠いですが、一日にしては悪くない稼ぎでしょう」

俺の呟きに、めぐみんがそんな事を言ってきた。

肩から下をカエルに呑まれた状態で。

以前カエルに呑まれた経験からか、めぐみんはこの状況下で随分と落ち着き払っている。

めぐみんは抵抗もせず、なすがままになっていた。

と言うか、カエルの方もこれ以上呑み込もうとせず、ジッと動きを止めている。

口の中でめぐみんの金属製の杖がつっかえているのかもしれない。

「待ってろ、今助けてやるからな」

俺が剣を構え、めぐみんを捕食中のカエルに向き直ると。

「いえ、まだ肌寒い季節なので、アクアを追っているカエルを倒し終わってからでいいですよ。カエルの中はぬくいです」

こいつは爆裂狂な所以外は普通の奴かと思っていたが、意外と大物なのかも知れない。

金属鎧を身に着けていると、カエルは捕食を避ける様だ。

これが、カエル討伐は腕のいい冒険者にとって、おいしいクエストと呼ばれる所以だろう。

俺はめぐみんを助けるのは後にし、持っていた剣を地に刺して、肩から弓と矢を取り出した。

アクアを追うカエルに狙撃スキルで狙いを定め……！

「カズマー！　早くしてー！　早くしてー！！」

そんな、弓を構える俺を見て、アクアが半泣きで逃げまわりながら叫びを上げた。

……もうちょっと追い込んでみたい。

弓を撃とうとしない俺を見て、アクアがこちらに向かって逃げて来たので、身の危険を感じた俺はアクアを追うカエルの頭に矢を放つ。

矢は狙い違わずカエルの頭を貫き、カエルが動きを止めた所にダクネスがトドメを刺した。

半泣きのアクアが、そのまま俺に向けて駆けて来る。

「よし、それじゃめぐみん、今助けてやるからな」

「ねえカズマ、今私が食われるのを待ってなかった？　ねえ、待ってなかった！？」

力があるダクネスとアクアの二人が、それぞれ一匹ずつカエルを引きずり、俺達は街に向けて帰っていた。
今日は珍しい事に、めぐみんが粘液塗れな事以外は特に被害らしい被害は無い。
いつもこうだと助かるのだが。
他の連中も、きっと同じ思いだと……

「ああ……。なぜ私はせっかくのカエル討伐だと言うのに、金属鎧で来てしまったのか……。めぐみん、どうだった？　どんな感じだった？　粘液塗れで体から湯気が出てホコホコしてるが、あまり嫌そうな顔はしていないな。それほど気持ち良かったのか？」

ダクネスさんは平常運転でした。

俺達が街の入り口に着き、見慣れた守衛の人に頭を下げる。
そしてそのまま街に入ろうとすると、同じくクエストから帰って来た様子の一人の女冒険者が、こちらにじっと視線を向けていた。
その女冒険者の視線は、正確には、粘液塗れのめぐみんに向けられている。
魔道士風の格好の冒険者は、目を見開き。
「めぐみん！？　あなた、めぐみんじゃないの！？」

言いながら、慌ててめぐみんへと駆け寄り……。
そして、粘液塗れのめぐみんの姿を見て、嫌そうに顔をしかめて後ずさった。

2話

「……？　どちら様でしょう？」
「ええっ！？」
粘液塗れのめぐみんが何気なく言った言葉に、めぐみんを知っているらしいその女性は驚きの声を上げた。
その女冒険者は、見ればめぐみんと似たような格好をしている。
めぐみんが着ている物と、同じデザインの黒のローブに黒のマント。
銀色のワンドを持ち、腰には短剣を差していた。

めぐみんより少し背が高く、全体的にスラリと整った体型。
そして気の強そうなキツめの顔立ちの、かなりの美少女。
もし日本に居たなら生徒会長でもやっていそうな、優秀そうな印象を受ける。
その美少女は、黒く長い髪をリボンで後ろに束ね、そしてなにより、特徴的な赤い瞳をしていた。

そう、めぐみんと同じ瞳の色だ。

「わ、私よ私！　ほら、紅魔の魔術士学園であなたと同期だった！　あなたが一番で、私が二番で！」
自分の顔を指差して、必死に言い募る紅魔族の女の子。

いや、と言うか今さらっと大変な事言ったぞ。
「……おい、今学園でお前が一番だとか、何か聞き捨てならない事が聞こえたんだが」

俺の言葉に、めぐみんがフッと笑った。

「今更何を。初めて出会った時に、紅魔族随一の魔法の使い手とちゃんと名乗ったはず。それを信じなかった、カズマが愚かなのです。ですが、長い付き合いの今なら信じられるでしょう？」
「今の粘液塗れのお前を見て、信じられるって言う奴の顔が見たい」
「な、なにおう！」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
めぐみんと言い合う俺に、紅魔の少女が慌てて言った。
「ねえ、めぐみん、私よ私！　本当に忘れちゃったの！？　ほら、学園のテストでも何でも、あなたに勝負を挑んで、その度にあなたは、勝負を挑むなら等価が必要。弁当を賭けるなら受けて立つとか言って！　よく私のお弁当取り上げていたじゃない！」
こいつはそんな事してたのか。
俺がめぐみんをじっと見ると、そのままふいっと目を逸らした。

「ねえねえ、長引きそうなら、私とダクネスは先にギルドに行って清算してきてもいい？　カエル肉が痛んじゃう。納品しちゃってもいい？」
カエル肉を引きずっていたアクアが言った。
正直言うと、こんな状況で俺だけ取り残されるのは困るのだが。
だが、カエル肉が痛むのも困るので、二人にギルドへ行って清算してもらう事にした。
そうすれば、俺とめぐみんもこのまま屋敷に帰ればいいし、カエル臭いめぐみんを手早く風呂に放り込める。

カエルを引きずっていくアクアとダクネスを見送って、俺は改めてめぐみんに。
「で、この子はお前の知り合いだって言ってるが、どうなんだ？　結構詳しく知ってるみたいだし思い出してやれよ」

「知りませんよ、大体名前も名乗らないなんておかしいじゃないですか。これはきっと、今日カズマがカエル狩りに行く道中、アクアに、やるなよ、絶対やるなよと言っていた、オレオレなんとか言うヤツの類似品です。関わっちゃいけません」

めぐみんがそんな事を言って、俺の手を引き立ち去ろうとした。

そんな俺達を見て、少女が慌て。

「ちょ、ちょっと待ってよー！　わ、分かったわよ、知らない人の前で恥ずかしいけど、名乗るわよ！　……我が名はゆんゆん。アークウィザードにして、上級属性魔法を操る者。紅魔族でも五指に入る魔法の使い手。やがては紅魔族の長となる者……！」

ゆんゆんは若干頬を赤くしながら、名乗りを上げると着ていたマントの端をバサッと翻した。

紅魔族ってのは、名乗る時にはオーバーアクションをしなければいけない決まりでもあるのだろうか。

そんなゆんゆんを見ながら、めぐみんは俺に言ってくる。

「とまあ、彼女はゆんゆん。紅魔族の族長の娘で、いずれは紅魔の長になる、学園時代の、私の自称ライバルです」

「なるほど。俺は、こいつの冒険仲間のカズマです。よろしくゆんゆん」

「ちょっと、ちゃんと覚えてるじゃない！　……あ、あれ？　あの、カズマ……さん？　その、私の名前を聞いても笑わないの？」

ゆんゆんが不思議そうに、おずおずと俺に言った。

めぐみんの名前で慣れてるから、今更紅魔族の変わった名前を聞いた所で、別になぁ？

「名前がちょっと変わってるぐらいで、本人の人格やらには関係ないだろ？　世の中にはな、とても目立つ変わった名前をしてるにも

関わらず、頭がおかしい爆裂娘なんて、不名誉な通り名の方で呼ばれてる奴もいるんだよ」

「私ですか？　それって私の事ですか？　私が知らない間に、そんな通り名で呼ばれてたんですか！？」

俺の言葉に、ゆんゆんが不思議そうな、それでいて驚いた表情を浮かべ。

「……なるほど、流石ねめぐみん。良い仲間を見つけたわね。それでこそ、私のライバルよ」

彼女の中で、なぜか俺の評価が上がったらしい。

「ところで、話をするなら場所を変えないか？　こんな街の入り口で立ち話もなんだろう」

その言葉に、ゆんゆんがハッとした様に顔を上げ、俺とめぐみんから距離を取った。

「そうよ、めぐみんが私を知らないなんてすっとぼけたから、こんな話になったけど……！　めぐみん、私はあなたと勝負しに来たのよ！　私はいずれ紅魔の長になる者。それが、あなたに一度も勝てないままとあっては、おめおめと族長の椅子に座る事など出来はしないわ！」

ゆんゆんはそのままビシッとめぐみんを指差すと。

「私はあなたに勝って、紅魔一の座を手に入れる。そして、私が長となる時には、もう誰にも文句は言わせないわ。そう、親の七光りで長になっただなんて、誰にも言わせない！　学生時代は筆記試験の勝負だったけれど、今ではあなたもクラスを得て、もう魔法が使える一人前の魔法使いでしょう？　魔法での勝負ならば負けないわ！　さあ、めぐみん。この私と勝負なさい！！」

その眼の奥に固い決意を秘め、そうめぐみんに宣言した。

「嫌ですよ。もう体も冷えてきて寒いですし」

当たり前の様に言っためぐみんの言葉に、ゆんゆんが、えっと言って固まった。

「そっか。じゃあ、帰るか。風呂沸かしてやるから、先に入れよ。風呂が終わってから皆で飯食いに行こうぜ」

俺はそう言って、めぐみんと共に立ち去ろうと……、

「ちょちょちょ、ちょっと待って！　ねえ、なんで？　久しぶりに会ったのに、なぜそんな冷たくするの！？　めぐみん、お願いよ、勝負してよ！」

そんな俺達に、ゆんゆんが慌ててすがりついてきた。

それを見て、めぐみんがはあとため息を吐く。

「……だって、私は今日は魔法は使えませんよ？　仕事してきた帰りですから。それに、筆記で勝てなかったあなたが、この私に魔法で？　……フフフ、我が力も随分と侮られたもの。今も、カズマと共に我が力で、愚かなカエル達を、たったの一撃で八匹も蒸発させてきた所。ゆんゆんよ、汝にそんな事が出来るとでも？」

中二病じみたノリで、くぐもった声でそんな事を言い出すめぐみんに、ゆんゆんが、えっと驚きの表情を浮かべて俺を見た。

多分、それは本当なのかと聞きたいのだろう。

「まあ、魔法一発でカエルを八匹蒸発させたってのは本当だよ」

俺はコクリと頷きながら、ゆんゆんに。

それを聞き、ゆんゆんが若干青ざめながら俯き、ごくりと喉を鳴らした。

「そして、あなたは最近この街に来たのかも知りませんが……。聞

いた事は無いですか？　連日居城に撃ち込まれるこの私の魔法に脅威を感じ、まんまと魔王軍の幹部がこの街へと誘き出されたと言う事を。その幹部を討ち取ったのは我が仲間達。そして、我が魔法で魔王幹部に支配されていた城を崩壊させ、今後、この地に魔王の幹部が住み着くのを、困難なものへと変えた事を！」

それを聞き、オドオドと、俺とめぐみんの顔を交互に見る、不安気な表情のゆんゆん。

……嘘ではないなあ。

「まあ、連日のめぐみんの魔法の所為でこの街に魔王の幹部が来たのは本当だし、めぐみんが幹部が住んでた城を破壊したのも本当だよ」

物は言いようとはこの事だよなぁ……。

その言葉に、いよいよゆんゆんが青い顔で。

「そ、そそそそ、それでも、しょ、勝負を！　勝負をしないと、あなたに勝たないと私は帰れないのよ！　例え勝ち目が無くたって、何度でも勝負を挑ませてもらうわよ！」

目に涙を浮かべカタカタと震えながらも、きっと譲れない物があるのだろう。

ゆんゆんは、震えながらもキッパリとめぐみんに告げた。

めぐみんは、それを見て深いため息をつく。

「……しょうがないですね……。あなたは、私に勝てれば帰れるのでしょう？　では、こうしましょう。私は今日はもう魔法が使えません。なので、勝負方法はあなたが得意だった、体術でどうですか？　あなたも今や、ちゃんとクラスを得た冒険者の様ですし。今更筆記試験で対決なんてのも、納得いかないでしょう。武器は無し。勝敗は、どちらかが降参するまで。……どうです？」

ゆんゆんが、驚きの表情を浮かべた。
「……いいの？　その、学園では一度も体術の訓練に来なかったあなたは、体術が苦手でずっと避けていたと思っていたのだけれど……。……まさか、私に花を持たせて帰らそうなんて考えているの？　昼休みの時間になるとこれ見よがしに私の前をちょろちょろして、勝負を誘って毎日私から弁当巻き上げていた、あなたが？」
「……お前、ロクでもないな」
「……私だって、死活問題だったんです。家庭の事情で、彼女の弁当が生命線だったんですよ。自分から勝負を持ちかけたらカツアゲみたいなものでしょう？」

ゆんゆんが、目を閉じて。
そして、深く息を吸った後、良い笑顔を見せた。
「いいわ！　その提案受けて立つわ。……そして、こう言うんでしょう？　勝負には、対価が必要だって！　対価はこのマナタイト結晶。かなりの純度の一級品よ！　魔法使いなら、喉から手が出るほど欲しいアイテムよ！」
ゆんゆんが出してきたのは小さな宝石。
なんか、マナタイトって聞いた事があるな。
めぐみんの杖も、そのマナタイトとやらの鉱石で出来てたんじゃなかったか。

めぐみんがそれを見て、満足そうに頷いた。
「よろしい、受けて立ちます！　では、どこからでも掛かって来なさい！」
めぐみんは、威嚇するように両手を広げて宣言した。
それに対してゆんゆんが、腰を落として拳を構える。

見た感じ、体格的にはゆんゆんに軍配が上がりそうだ。

身長や筋肉の付き方など、ゆんゆんがスラッとした手足にバランス良く筋肉が付いているのに比べ、めぐみんはお世辞にも素手による戦闘が得意とは思えない。
ハッキリ言ってしまえば、どこにでもいる女の子、貧弱そうな魔法使いと言った印象だった。

ゆんゆんがジリジリと距離を詰め。
めぐみんも両手を上げた状態で、いつでもゆんゆんを抱きしめられる様な体勢を……。

「……ねえめぐみん。ちょっとさっきから気になってたんだけれど。……その、あなたの体がテラテラしてるんだけれど。その、粘液みたいなのは何？」

不安そうな表情になったゆんゆんが、めぐみんに対して尋ねていた。
それに対してめぐみんが。
「カエルの粘液です」
何でもなさ気にそのまま答えた。

ゆんゆんの顔が引きつるが、めぐみんが構わず続けた。

「先ほどまで、ジャイアントトードのお腹に居たんですよ。この全身ねっちょりは、全てカエルの分泌物です。……さあ、そんな事より掛かって来なさい！　近付いた瞬間に、思い切り抱きついてそのまま寝技に持ち込んであげます」
そう宣言してめぐみんが両手を広げてジリジリと前に出るが、それに合わせてゆんゆんが引きつった顔で後ずさる。

「め、めぐみん？　笑えない冗談は止めてね？　嘘でしょ？　わ、私の戦意を挫いて、降参させようって作戦なのよね？　でしょう？　わ、私は騙されないからね？」

そのままゆんゆんは、俺に不安気な表情で視線を送る。

その顔には、アリアリとこう書かれていた。

頼むから、嘘だと言ってと。

「…………本当だよ。そいつの体の粘液は、全部カエルの分泌物だ」

その言葉にゆんゆんが背を向けて走り出した。

それをめぐみんが追いかける。

「降参！　降参するから！　マナタイトならあげるから、こっち来ないで！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

めぐみんが、ゆんゆんを泣かせた後。

俺とめぐみんは屋敷へと帰っていた。

「あ、カズマ。これをどうぞ。良い値になりますから、借金の足しにでもしてください」

その道すがら、めぐみんが渡してきたのは先ほど巻き上げたマナタイト結晶。

確か、魔法使いにとって喉から手が出るほど欲しい物だとか言ってなかったたか。

「いいのか？　お前、これ使わないの？　どうやって使うのかは知

らないけれど」

俺の疑問にめぐみんは、小さくフフッと不敵に笑い。

「マナタイト結晶は、魔法を使う際の魔力消費を肩代わりして貰う物。しかも、使い捨てのアイテムです。その純度と大きさでは、我が爆裂魔法の膨大な魔力消費を肩代わりなんて出来ませんよ。それは、そこらの普通の魔法使いなら重宝するでしょうが、私ぐらいの規格外な大魔道士ですと、無用な物です」

そんな事を自慢気に……。

「……それってダメな事なんじゃないのか？　なあ、何度も言うが、爆裂魔法以外のスキルを取る気は……」

「無いです」

「ですよね」

即答するめぐみんに、俺は深く、ため息を吐く。

……まあしょうがない。

こいつはこれで、何だかんだと頼りがいがある時も……。

……あるかなあ？

あのゆんゆんとか言った子は、確か、上級属性魔法が使えるって言っていたか。

……見てくれも綺麗な顔してたし、スタイルもスラッとしてたし。

それに比べて……。

「……なんです？　変な顔して。……紅魔族は、魔力だけじゃなく、知力も非常に高いんです。今、何考えているのか当ててあげましょうか」

歩きながら、めぐみんをじっと見る俺に。

めぐみんが、不審な表情で聞いてくる。

……。

「……さっきの子より、めぐみんの方が美人だな……って、考えてました」

「それはどうもありがとう！　じゃあその言葉のお礼に、ギュッとハグしてあげましょう！」

「や、止めろ！　こっち来んな、カエル臭い！」

俺はめぐみんに追い回され、屋敷へと逃げ帰った。

3話

「どうもお世話になりました。じゃあ、ダクネス、めぐみん、元気でね！　アクアさんも、お酒飲み過ぎない様に気をつけて！　そしてキミは、セクハラに気をつけて！」

「お、おい滅多な事言うな！　セクハラなんて……。……あんまり、してない……はず……」

俺は若干慌てながら、玄関で頭を下げるクリスに言った。

クリスが、雪が融け、春になったので屋敷を出ると言い出した。

ハッキリ言ってクリスが居てくれると、個人的には凄く助かるのだが、こればっかりは仕方が無い。

「まあ、自分の家だと思ってまたいつでも来なさいな。歓迎するわよ」

アクアがクリスにそんな事を……、

……いや、確かに自分の家と思ってもらっても、いつ来て貰っても別にいいんだが、冬の間ロクに家事もせず、借金だけ増やしてきたお前が言うな。

「クリス、またボードゲームの対戦をしましょう。いつでも受けてたちますよ」

屋敷の人間は、例のテレポートまで許容されているボードゲームにおいて、めぐみんの卑劣な作戦にことごとく惨敗しており、対等に遊べていたのはクリスぐらいだった。

クリスへの俺の評価は、俺にパンツ剥がれる可哀想な子から、何でも出来る優秀な子へと昇格している。

……ああ、なぜ俺のパーティにはこういったマトモな人材は参加してくれないんだろう。

頼んでみたが、盗賊スキル持ちが二人も居ると、お互いの存在感が薄れるからと、クリスにはパーティ参加をやんわりと断わられた。

「……クリス、一緒に住む訳にはいかないのか？　クリスがしっかりしているのは知っているが……。もう、ここを拠点にすればいいんじゃないのか？」

ダクネスが、寂しそうな表情でクリスを引き止めている。

それにクリスは、困った様に頬の傷をポリポリ掻くと、

「いやあー、あたしも色々とやる事あるしね！　冬の間は冒険者達も大人しくしてて暇だったけど、これからはあたしも忙しくなるだろうし！　精一杯働かないとね！」

そう言って、荷物を背負い直した。

春はモンスターが目覚め、活発になる時期だ。

いわば冒険者達にとって、稼ぎ時の季節である。

クリスは玄関で再び頭を下げると、

「それじゃ改めて。皆、お世話になりました！　じゃあ、あたしも早速クエストに。いってみよう！」

クリスはそのまま快活に笑い、元気に屋敷を出て行った。

ダクネスが外に出て、いつまでもクリスの背中を見送る中、アクアが自分の所定位置へと戻っていく。

春になり、流石に暖炉に火を入れるほどではなくなったのだが、朝の時間はまだ寒い。

窓から暖かな日が射す場所が、現在のアクアの所定位置となっていた。

現在では、暖炉の前に置いてあったソファーをそこに移動させ、

ここは自分の聖域だと宣言している。
だが、そこが午前中は一番暖かく、色々な作業もしやすい事は俺も知っていた。

と言う訳で、勿論特等席の争奪戦だ。

「おいアクア、どうせゴロゴロしてるだけなら自分の部屋へ行け。そして昼まで布団にでもくるまってろ。クエストは昼から行くから。……俺は今から仕事をするから、そこをどいてくれ」

俺のその言葉に、ソファーの上で三角座りしながら、目を細めてうとうとしていたアクアが言った。
「先日、めぐみんが良い事言ったらしいじゃない。物事には、対価が必要。この暖かい場所が欲しいと言うなら、代わりに私が満足しそうな物をお供えしなさいな。そうねえ、具体的には……」
そう言って、アクアは一瞬悩み。

「……汝、神の住まう地を欲する者よ……。高級酒を我に捧げよ。さすれば、迷えるニートに暖かな光が射すであろう」

こいつ引っぱたいてくれようか。
めぐみんも、アホに余計な知恵を付けやがって。

「おい、良く聞けよ前科者。お前が事情聴取やら取り調べだけで済んで、懲役食らわずにいられたのも、被害者に返す金が、俺にツケとして回されたからなんだぞ。お前がのん気にくつろいでるその場所で、今からお前が増やしたそのツケを返す為、働くって言ってるんだよ。俺に少しでも悪いと思ったら、とっとと退け」

俺の前科者と言う言葉に、アクアが嫌そうに顔をしかめた。

「まだ前科は付いてないわよ。罰金が科せられたり、懲役くらったりしなければ、前科は付かないのでした！　そんな事も知らないの？　バカなの？　仮にも女神様に前科者呼ばわりなんかして、そろそろバチが当たるからね？　悪いと思ったら、麗しきアクア様ごめんなさいって言いながら、高いお酒を捧げなさい。ほら買ってきて。早く買って……」

「『スティール』」

ソファーの上で膝を抱えたまま、駄々をこねるアクアに向かって、俺は片手を突き出し唱えていた。

突き出した手の上に、チャリンと音がし、アクアのサイフが現れる。

「……ちょっと何すんのよ泥棒。現行犯よ。警察に突き出せば、これであんたの方が前科者ね。やーい前科者！　お酒買ってくるお金が欲しかったの？　そんな物、カズマのお金で買ってきてって意味に決まってるじゃ」

「『スティール』」

何かを言いかけるアクアに向かって、俺は尚もスティールを唱えていた。

俺の手には、アクアが履いていた靴下の、片方が乗っている。

アクアが膝を抱えたまま。

靴下を盗られ、裸足になった方の足の指を、俺に抗議でもする様に、これ見よがしにぴこぴこと動かした。

「……何すんのよ、寒いじゃない。靴下返してよ変態。とっとと返さないと、私の靴下盗んでハアハアしてる人が居ますって、人を呼ぶわよ。分かったら」

「『スティール』」

アクアは一体何に使う気でこんな物を持っていたのか。
何かの種が俺の手の平の上に乗っていた。
それを見て、アクアが不安そうな表情を浮かべ。
「ね、ねえカズマ。そういった冗談やイタズラは、シャレにならないし、良くないと思うの。私もちょっと調子に乗ってたわね。反省するわ。じゃあ、お互いごめんなさいして仲直りしましょう」
「『スティール』」

俺は手の上に乗った、アクアのもう片方の靴下をポイと絨毯の上に捨て。
そのままアクアにゆっくり告げた。

「……サクッと借金返してくる。神器だとか言うお前の羽衣、ちょっと貸せ。売り払って来てやる。剥かれたくなきゃ、別の部屋行ってちょっと自分で脱いで来い。……まあ、どうせそれも嫌だって言うんだろうから、今ここで剥いてやる」

俺がこれみよがしに片手をアクアにわきわきさせると、アクアが顔を引きつらせ、
「あんた何言ってんの、この羽衣は私の女神としてのアイデンティティーみたいな物だから売るなんて出来る訳無いじゃないバカなの何バカ言ってんの、冗談にしても笑えないから「『スティール』」ああああカズマ様ああーっ！！　調子に乗った私が悪かったから止めて、止めてー！」

数分後。

「うっ……、ぐすっ……、ひっく……ひうっ……」

ソファーの上で、膝を抱えてうずくまり、膝に顔を埋めて泣くアクア。

その姿は……

裸足になっている事以外は、いつも通りのアクアだった。

「……ハア……ハア……、く、くそ、何でこんな時だけ悪運が強いんだお前は……。ってか、何に使うんだこのガラクタの山は……」

俺の足元にはアクアからスティールした大量のガラクタ類。

宴会芸にでも使うのか、種やコップ、ガラス玉……。

絨毯の上は、子供のポケットの中身を引っくり返したみたいになっていた。

なんてこった、昼からクエストに行こうと思っていたのに、こいつの所為で魔力を全て使ってしまった。

泣くアクアの前に立ち尽くす俺を、めぐみんが、冷ややかな視線でじっと見ていた。

べ、別に苛めたりセクハラする気はあまり無かったのだから、そんな目は止めて頂きたい。

と、クリスを見送っていたダクネスが、俺の傍でモジモジしながら、頬を火照らせ。

「カ、カズマ。その、金を払ってもいいから……。今の、借金払ってくるから服を脱げプレイを、私にも……」

「お前は頼むから黙ってろ！」

◆◆◆

俺が魔力を使い果たした為、今日はクエストは取り止めになった。
魔力を使うスキルはそれほど無いのだが、油断してるとまた痛い目に遭う。
念には念を入れ、今日は別の金稼ぎをする事にした。

とはいえ、めぐみんは一日一爆裂したいと言うので、ダクネスに付き添ってもらい、街の外へ。
極力モンスターに遭わない様にすると言ってはいたが、もしカエルにでも出くわしたなら、魔法撃って逃げてくると意気込んで出かけて行った。

そして俺達は……、
「そろそろ借金の額がシャレにならない。勿論クエストでもコツコツ返してはいくが、元々冒険者稼業なんて大して儲かるもんじゃない。そこで、また何か儲かる話は無いかと、ウィズに相談に来た訳なんだが」
そこはウィズの店の中。

俺達は、ウィズに借金の相談にやって来ていた。
ウィズが困った様に、腕を組み、考え込む。

「うーん。カズマさんにはお世話になってますし、正直言うと、この店はカズマさんの卸してくれる商品のおかげでやっていけてる様なものなので、是非力になりたいのですが……。お店の経営をやっていて何ですが、私、商売が下手でして……」

それは経営者としてどうなんだろうと思うが、そう言えば、ここも元々は借金で首が回らなくなっていたんだったか。

と、ウィズが先ほどから何かを気にする様に、アクアの方をチラチラ見ていた。

そのアクアはと言えば。

「……ごめんなさい、ごめんなさい……。女神のクセに、大量の借金作ってごめんなさい……。女神の恥晒しでごめんなさい……。ごめんなさい……」

少々制裁がきつ過ぎたのか、ウィズに出された狭い丸イスの上で、器用に三角座りをし、膝に顔を埋めたまま、そんな事をぶつぶつと呟いていた。

それを気にしたウィズが言った。

「あ、あの……。アクア様、一体どうなさったのですか？　随分元気がないみたいですけど、一体、何が……」

アクアが顔を膝に埋めたまま。

「カズマが……。借金返す為に……。売り払ってやるって言われて……。無理やり私の服を脱がそうと……」

「ええっ！？」

「おい止めろ！　その片言の断片的な言い方だと誤解を招く！　いや、誤解じゃないかもしれないけれど！　悪かったよ、謝るからウィズもそんな目で見ないでくれ！」

「さてと。それじゃ、借金返す為にでっかく稼ぐにはどうしたらいいと思う？」

俺に謝らせたアクアが、先ほどとは打って変わって明るい声で言ってきた。

こいつとはいつか決着を付ける日が来ると思う。

「そうですね……。カズマさんの国には便利な物が多くあると言いますが。それの製法を売りに出すと言うのはいかがでしょうか？」

ウィズが指を頬にあてながら、そんな提案をしてくる。

「ほう。……そんなに儲かるもんか？」

この世界では、知的財産権の保護がかなり重要視されている。

意外な事に、俺が元いた世界よりも徹底しているかもしれないぐらいだ。

これは、この世界には魔法やスキルがあるせいだとアクアが言っていた。

魔法は開発に金と時間が掛かるらしいが、覚えるのは簡単だ。

その魔法を覚えられるクラスの者が、魔法をちょこちょこっと教えてもらい、後はスキルポイントを消費する。

ただ、それだけで良い。

簡単に魔法を覚えられてはたまったものではないのは、魔法を開発する研究者達だ。

知的財産権をきちんと保護しないと、研究者が居なくなると危惧した国々は、日本並にきっちりとした保護を行なう様になったらしい。

ちなみに、俺のジッポも登録済み。

作りは簡単なのに、誰も真似しようとしないのはその為だ。

「カズマさんのジッポの権利。それを売れば、借金の大半が返せてしまうかも知れません。それぐらい儲かりますよ、優良な商品の開発は」

「マジで！？」

売ってしまおうか……？

いやしかし、これは俺が安定した生活を送る為に、やっと手に入れた割の良いバイト。

できれば、他の商品開発を行なって借金の返済を……。

「と言っても何作ろう。家電なんて無理だし、身近で便利な生活用品って言ってもなあ。一応基本的な物はすでにそこそこあるし。……上質な紙とか重宝されてるみたいだけど、パルプ加工とかそんな技術、特に興味も無かったし詳しく知らん。紙すきのやり方すら知らん」

もっと色々勉強しとけば良かったと後悔しても、後の祭りだ。

……真剣に、パソコン欲しい。……ググれば一発なのになぁ……。

「後は……。高額な賞金が掛かっている、特別指定のモンスターを狩るとかですかね……？　危険度は高いですが、一獲千金を狙うなら……。……あ、あの……。なぜ、二人とも私をジッと見るんですか？」

「「別に」」

4話（前書き）

たまにはエロ展開をと言う要望があったので。
下品な表現があります。
苦手な方はご遠慮ください。

4話

超レアな高級アイテムである魔道カメラ。
俺は、一本数十万エリスはする魔道フィルムを惜しげもなく使い、その魔道カメラで被写体を撮りまくっていた。
赤く扇情的なレースの下着。
それに覆われる、冒険者特有の、引き締まった健康的な肉体。
それを遠慮なくレンズの中に収めていく。
下からのアングルに、左右、様々なアングルで。
いよいよ気持ちが昂ぶってきた俺は、とうとう自分から指示を出した。
「さあ、それじゃ、指を咥えて尻をこちらに向けてみようか！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「国の特別指定モンスター。通称、賞金首を狙えないかなと考えたんだが」
屋敷の広間に集まる皆に俺はそう切り出すと、その場の全員が、聞いた途端に顔をしかめた。
……いや、
「ぜひ行こう。オススメは、邪神の一種では無いかと言われる、強

壮なる使者との別名を持つ、朽ちた神殿に住む触手モンスターがいいぞ！」

喜んでいるのが一人いた。

とりあえずコイツは黙殺し、話を続ける。

「カズマー。私達に賞金首なんて倒せると思ってるの？　基本的に、賞金が掛けられるって事は、一流の冒険者ですら返り討ちにあってるって事よ？　そんな相手にカエルに苦戦してる私達が勝てるとでも？」

カエルが天敵なのはお前とめぐみんだけだと言いたいが、言っている事は分かる。

俺もそんなにバカじゃない。

「色々調べてみたんだよ。賞金首にも色々いるだろ？　例えば、今の季節、女性のスカートをめくる為だけに存在する、春を告げる精霊、春一番さんとか。スカートをめくる事以外は人に危害は与えないが、女性達に莫大な賞金を掛けられているそうじゃないか。春一番さんは置いておくとして、こういった、クセのある俺達にも倒しやすそうなモンスターを狙うんだよ」

「なるほどな、一理ある。……そこでだ。先ほど言った、神殿の触手モンスターはどうだろう。私が敵の注意を引き付ける。そこを……」

街の男性の絶大な支持を受け、一部では神と崇められている春の精霊、春一番さん。

突風を身にまとい、女性の傍を何度も駆け抜けていくだけの無害な精霊だが、とても弱いのに多額の賞金が掛けられている。

そんな賞金が掛かっていてなぜ討伐されないのかと不思議だが、女性冒険者達が追い詰めても、まるで街の中に協力者がいるかのご

とく、不思議と姿を消してしまうそうだ。

迷惑な賞金首である春一番さんを匿うなど、非常にけしからん事だ。

この屋敷の近くでも、追い詰められた春一番さんが、何者かに匿われたかの様に姿を消したらしい。

モンスターを匿うなんて、冒険者の風上にも置けない話だ。

「女の敵の春一番ですね。見つけたら爆裂魔法を叩き込んでやりたい所ですが……。ところでカズマ、なぜモンスターにさん付けを……？」

「……？　俺、さん付けなんてしてたか？　他には、そうだな……」

「しょ、触手モンスターを……」

何か聞こえた気がしたが、俺はめぐみんに一枚の羊皮紙を差し出した。

そこには、モンスターのイラストと情報が書かれている。

めぐみんが、その紙を見て険しい顔をした。

「……密林の主と言われる、隠密トカゲですか？　コイツは確か、高レベルの盗賊でも見つけられないと聞いたので、多分敵感知スキルが通じませんよ？　一人一人襲われて、全滅するのがオチだと思いますが……」

マジか、敵感知が効かない敵がいるのか。

「敵感知使って探し当てて、爆裂魔法で一撃かなって思ったんだが、ダメか。うーん、となると……」

「……触……手……」

誰かが泣きそうな小さな声で何かを言ったが、聞き取れない。

と、玄関のドアが突然開いて、一人の男が飛び込んできた。
それは、すでによく見知っている……

「……どうしたダスト。そんなに慌てて？」
そんな俺の疑問に、ダストが荒い息を吐きながら。
「カズマ！　た、大変なんだ！　お前の力を貸してくれ！　頼む、一緒に来てくれないか！」
良く分からないが、大変らしい。
俺は三人の方を振り向くと、
「と言う訳だから、ちょっと行ってくる。……どうしたんだ、お前」

見れば無視され続けたダクネスが、悲しげな表情ながらも頬を火照らせプルプルしていた。

「……新感覚……。新感覚だ……」
「……そろそろお前に、きちんと教育してやるからな」
「きょ、教育！？」
……教育と聞いてなぜか目を輝かせるこいつには、もう再教育は不可能なのかもしれない。

街中を、ダストに目的地まで案内されながら、俺は話を聞いていた。
そしてその説明を聞き終わり、俺はその場に足を止める。
「……えっと。ちょっと待ってくれ。つまりアレか？　大変な事って、リーンに男が出来たって事？」

「そうだ！　こんな重大な事なのに、テイラーもキースもふーんの一言で済ませやがる！」
いや、俺もふーんとしか言えないのだが。
だがダストは拳を振り上げ。
「大事な仲間が、どこの馬の骨とも分からねえ奴といちゃついてやがんだぞ？　カズマだってリーンとパーティ組んだ事があるだろう？　仲間の女が、変な男に引っかかったら心配だろうが！」
ど、どうだろう。

力説するダストに若干引き気味になるが、つまりウチの三人の問題児が、他所に男を作ったらって事で……。

……あれ？
確かに、何か嫌かも知れない。
いやいや、以前の俺なら、良い男なら、押し付けて任せてしまえって思ってなかったか。
なんだろうこの微妙な感じは。

……なるほど、あれだ。
連中とは長い付き合いだし、例えばペットを飼ってると、最初はいらないと思っていた、どんなに面倒をかける子でも、流石に情も移るってやつだ。

だが確かに……、
「ちょっと気持ちは分かる気はする」
「だろう！？　さすがカズマだ、分かってるじゃねーか！」

俺はテンション高いダストに、そのまま説明を続けられた。
つまりはこういう事らしい。

ここ最近、リーンがあまりクエストに出たがらず、ちょこちょこ外出していたらしい。
それをダストが不審に思い、四六時中リーンの後をつけてみたら、もれなく知らない男と一緒に宿屋に入って行ったのだと言う。
「……お前、それ、ストーカ」
「つまりだ！　このぽっと出野郎にリーンがたぶらかされてる訳なんだよ！　俺は仲間が心配なんだ。俺は相手の男を調査したい。頼むカズマ！　他の二人は頼りにならねえ！　この通りだ、協力してくれ！」

俺に手を合わせるダストの言葉に、俺はしばらく考え込んだ。

人の恋愛に他人が干渉するってのも無粋な話だが、俺も人の事を言えるだろうか？
もしダクネス辺りが、彼氏が出来ましたとか言い出したら、多分どんな男か調べに行きたくなる。
ダクネスの場合は男の趣味が特殊過ぎるからだが。

「……分かった。ちょっと気持ち悪いが、多分、俺もダストと同じ立場だったら、やっぱり相手の男を調査ぐらいはするかもしれない。リーンの場合は問題ないとは思うけど、相手がどんな奴か、気にならないって言えば嘘になるしな」
「うおおっ！　話せるなカズマ！　頼りになるぜ！」

そこは、小さいながらも小綺麗な宿屋だった。
何と言うか、冒険者には似つかわしくない感じの、カップルとか

がよく使いそうな、そんな宿だ。
「ここだカズマ。ここに、リーンをたぶらかした悪魔がいる」
いや、まだ相手がどんな奴かも知らないだろうが。
いきり立つダストを見ながら、俺はこの男は大丈夫だろうかと若干心配になっていた。

「で、どうするんだ？　まさか堂々と相手の男を訪ねる訳にもいかないだろ」
俺の言葉に、ダストがニヤリと笑みを浮かべた。
「俺が何年冒険者やってると思ってるんだ。この稼業は用意周到でなきゃ長生きできない仕事なんだぜ？　相手が泊まっている部屋も調べてあるし、その男が借りてる部屋の、隣の部屋を既に借りておいた」

お、お前……。

この男は今の内に通報しておいた方が良さそうな気がしてきたが、既にダストは宿のドアを開けていた。
しょうがなく俺も後に続く。
宿の中は、実に基本的なスタイルだ。
一階は食堂になっており、二階で部屋を貸すタイプである。
すでに店主には話を通してあるのか、ダストと俺を見ても、宿の店主は止めるでもなく、そ知らぬ顔をし気だるげに欠伸した。
ダストは、そのまま二階への階段を上がっていく。
やがて、ある部屋の前に立つと。
「よし、ここだ。……壁が薄いから極力声を上げるなよ？　隣の部屋には、リーンの奴も既にいるはずだ。あいつは耳が良いから、俺達の声だって気付くかも知れねえ」
俺はダストの言葉に頷くと、ダストに続き、部屋に入った。

そこはベッドと小さなタンスしかないシンプルな部屋。
ダストはドアをそっと閉めると、隣の部屋へと続く壁に近付き、耳を当てた。
俺も、何だかいけない事をしているなと思いつつ、同じ様に耳を当てる。
確かに壁は薄いらしく、聞き覚えのある女の子の声が聞こえてきた。

『そう言われても……。私の口からは、何とも……』
それは、間違いなくリーンの声。
だが、声の様子からしてあまり楽しげな話をしている様には聞こえない。
『リーンさん……。僕が難しい事を言っているのは分かってます。本来なら、こんな事は許されるべきではありません。しかし、好きになってしまったものはしょうがないんです！』
『お、落ち着いて！　その、良く考えてくださいね？　あなたは貴族で、本来冒険者なんて相手にするべき立場の人じゃないんだし。それだけでも問題なのに……』

どうも、相手は貴族階級の男らしい。
と言う事は、リーンにとっちゃ玉の輿か。
しかし、どうにもリーンが、口ぶりからして乗り気じゃ無いのが気になる所だ。

貴族の息子と冒険者。
普通に考えて、本来ならば日常生活ですら、一生出会う事なんてない二人なのだろう。
きっと、俺とダクネスが同じパーティで冒険している様な例が異常なのだ。

壁の向こうの話は尚も続く。

『リーンさん！　身分の違いでこの想いが届かないのは、百も承知！　いや、それよりももっと困難な問題がある。でも、せめて……！　せめて、この高値をはたいて手に入れた魔道カメラで、写真を撮らせて欲しいんだ！』

『おおおお、落ち着いて！　落ち着いてください！　冷静になろう！』

話の流れで大体分かった。

リーンに貴族の男が惚れ、そして身分的にも問題があるし結ばれない。

だからせめて写真を、ってか？

なんだ、そんな悪い奴じゃなさそうじゃないか。

『出来るだけ！　こう、出来るだけ扇情的な奴が！』

『落ち着こう！　お願い落ち着こう！　ちょっと下に降りて、何か軽い物でもつまんで、落ち着こう！！』

いや、そうでも無かったかも知れない。

と、俺の隣でダストがムクリと立ち上がった。

「ちょっとぶっ飛ばしてくるわ」

「おい待て、行くな！　まだ早い！」

俺がダストを何とか取り押さえていると、やがて隣の部屋のドアが開き、閉まる音。

そして廊下を二人が歩いていく音がした。

一階に、軽く食事をしに行ったのだろう。

それを無言で聞いていたダストが、ニヤリと凶悪な笑みを浮かべた。

「おい見ろよカズマ！　この脱ぎ散らかされた服！　流石はお貴族様だぜ、良い物着ていやがる！」

俺はダストを追い掛け、隣の部屋へと侵入していた。

室内を物色するダストを見ながら、俺は頭を抱えたくなる。

とうとうやらかしてしまった。

只今の罪状は住居不法侵入。

「さてさて、貴族の坊ちゃまは一体どんなお宝を……って、これは……！？」

これ以上は止めるべきだ。

不法侵入に窃盗とか、すでに一線を越えている。

タンスを開けて何かに驚いているダストの肩に手を置いて、俺は……。

「見ろカズマ！　このレース付きの赤いランジェリーを！　あの野郎、これをリーンに履かせて写真撮るつもりなんだぜ！？　こんな物まで用意しやがって、あのド変態が！　こんな物、こうしてやんよぉ！！」

ダストが、そのまま何の躊躇も無くズボンごとパンツを下ろし、

その赤いレースの下着を装備した。

あのド変態がと言っていたが、今の段階では間違いなくこの男の方がド変態だ。

「よし、カズマ！　そこに転がってるレアアイテムで、この俺を撮ってくれ！　高額なフィルムの中身を俺の半裸姿で一杯にして、万一リーンを撮ったとしても、現像した瞬間に一生物のトラウマを味合わせてやる！」

もう何て言ったらいいのか。

俺は半ば気圧され、言われるままに魔道カメラとやらを手に持った。

作りは単純そうだが、確かに強い魔力が込もっているのが感じられる。

俺は今、恐らくは家ぐらい買えてしまうぐらいの高級品を使い、世にもバカな事をしようとしている。

ダストが上半身の服を脱ぎ。

そのまま両腕を組むと、手も使わずブリッジの体勢を取った。

ダストは鍛えられた太い首で体を支え、その引き締まった体で見事なアーチを描いていた。

「よし、やれ、カズマ！　俺の体の美しさを後世に残してやってくれ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

一体何枚の写真を撮ったのだろう。
歯をきらめかせ、様々なポーズを取るダストを、俺は床にゴロゴロ転がったりと、実に様々なアングルで激写していた。
「いいぞいいぞダスト！　その調子だ、今のお前は輝いている！　さあ、美しいポーズは撮り終えた。次は扇情的にいってみようか！　さあ、それじゃ、指を咥えて尻をこちらに向けてみようか！」
ダストは言われるままに、親指を咥えて赤いショーツに包まれた尻をこちらに向けた。
それを何枚か撮り終えて、俺は更なる指示を出す。
「よし、次はいよいよカッコ良さを加えてみようか！　足を開き、腰を落とし、手を……、そうそう、そんな感じで！」
ダストは赤いショーツ姿のまま、まるで力士のシコ踏みの様に腰を落とし、右手を横に真っ直ぐ伸ばし。
もう片方の手の肘を曲げ、胸の前にやり酷く真剣な表情で、俺が教えた言葉を言った。
「はっけよい！」
そこでとうとう限界に達した俺とダストは、腹を抱えて笑い、床を叩いて転がり回り……
ゴトッ。
……ドアを開けた瞬間の状態で、持っていた杖を落とした、呆然とした表情のリーン達と目が合った。

「で、これは何？　バカなダストは分かるけど、カズマまで何やってんの？」
俺とダストは、リーンと貴族の青年の前で正座していた。
「「すいません」」
俺とダストが同時に謝る。

不覚だった。
変なスイッチが入り、二人でバカな写真を撮るのに夢中になっていた。
そんな俺達二人を見て、リーンが深々と、本当に情け無さそうにため息を吐く。

リーンのダストを見る目が痛い。
と言うか女物のショーツ姿が痛々しいので、せめてパンツの履き換えだけでもさせてあげて欲しい。

「はぁ……。全く、色々心配して損したわ。ああ、彼の事はもう、お好きにどうぞ？　私は何も言いませんから。……ほら、カズマ、行こう？」
リーンが呆れた様に、疲れた様に。
俺に片手を差し出した。
「……へ？　いや、あの二人を一緒にしちゃマズイだろ。大変な事になるぞ？」
俺はリーンに手を引かれ、半ば強引に外に出される。
リーンが後ろ手にドアを閉め。

「じゃあ、行こうか」
そう言って、廊下を歩き出した。

『ダストさん、まさかあなたが、僕の部屋にそんな格好でいるなんて……』
『あ？　何だ、オウコラ、確かに不法侵入だが文句あっか？』

部屋の中から聞こえる、取り残された二人の声。
完全に開き直った、ダストの雰囲気が物騒だ。

「なあリーン。あいつ、止めた方が良くないか？　絶対何かやらかすぞ？」
俺の言葉に、リーンが諦めた様に首を振った。
「やらかすって言うか、やらかされるって言うか……。私は頑張ったよ。うん、凄く頑張った。それなのに、ドア開けたらあのバカ、あんな格好で部屋にいるんだもの。カモがネギしょってホイホイ自分から鍋に入ってフタまで閉めたのよ？　もう私にはこれ以上、出来る事なんて何にもないわ」

……？
何だか話が噛み合わない。

『も、勿論文句なんてある訳無いですよダストさん……！　ダストさん……！　ああ……ダストさん……！　う、うわあ、感激だなあ……。リーンさんからは諦めた方が良いって言われてたけども、まさかこんな……。アクシズ教団に入信して、祈り続けて良かった……！　神様は、神様は本当にいたんだ……！』
『何喜んでるんだか分からねえが、お貴族様だからって、下手に出ると思うなよ？　俺にとっちゃ何の関係もねーんだよ。ここにいるのは二人の男。それ以上でもそれ以下でもねえ。そこん所ちゃんと

分かってるか？』

『なっ！？　身分の差なんて気にしないって、そう言ってくれるんですか！？　ここにいるのは、二人の男のみ、と……！？　ああ……、ああ……！　今日はなんて日なんだ、深く感謝致しますアクア様……！』

そんな、ダストと貴族の青年の声をドア越しに聞きながら。

俺はリーンと共に、宿を出た。

「で、何であんな所にいたの？　どうしちゃったのよ二人とも」

宿を出ると、リーンが不思議そうに聞いてきた。

なんと言ったら良い物か……。

「いや、実はな……？」

俺はこれまでの経緯、そして何より、ダストが結構本気で心配していた事を洗いざらいリーンに話すと……。

リーンは、息が出来なくなるぐらいに笑い転げた。

「あっ……あはっ……！　あ、アホだ！　あんた達二人、絶対おかしいよ！　あはははは！」

全くその通りだと思う。

リーンは目尻に浮かんだ涙を拭い、未だに肩をひくつかせながら。

「はあー……。あのね、あの貴族の人は、ダストが好きなの」

その一言に、時が止まった。

「……えっ？」

今なんつった。

「だからね、あの貴族の人に、ダストが好きなんだけどどうしようって、そんな相談を受けてたのよ。で、結ばれようとかそんな事は思わないから、せめてダストの写真が撮りたいって言っててね」

おっと、つまりはあのランジェリー類は、ひょっとしてあの貴族の人の私物とか？

……その時だった。

「ひゃあああああああああああああああー！」

それは今まで聞いた事も無いダストの絶叫。

宿の二階の方から、ダストの、鳥を絞めた様な切ない声が聞こえてきた。

……俺は、今日は何も起きなかったと自分に言い聞かせ、リーンと共に歩いて行った。

「しかし、バカな事に付き合わされたなぁ……。今日は賞金首モンスターでも狙うかって言ってたのに……」

今の時刻は昼を回った頃。

移動と討伐時間を考えると、ちょっと今からでは難しいだろう。

どこへ向かうにしても、移動だけで半日は掛かる。

「へー？　賞金首なんて狙うんだ？　まあ、カズマのパーティは上級職揃いだしね。おまけに、カズマがいるならなんとかなっちゃいそうだね！」

リーンが笑いながら言ってくるが、どうも俺への評価が一緒にパーティ組んでから不当に高い気がする。

駆け出しが賞金首を狙うなんて言ってたら、普通は笑われそうな物なのだが……。

俺が苦笑を浮かべながら、リーンに買いかぶり過ぎだと言おうとした、その時だった。

『緊急クエスト！　緊急クエスト！　街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！　繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』

俺とリーンは、思わず不安げに顔を見合わせた。

と言うのも、呼び掛けている声はいつもの人の声なのだが、いつもの緊急の呼び出しよりも、その声が上擦っている。

やがて、呼び出しの声が一際大きく、悲鳴じみた声になる。

『普段顔を出さない方も、皆さん、考えられる最大の武装で、必ず参加でお願いします！』

やがて、一拍置いて、声が響く。

『特別指定モンスター、高額賞金首、機動要塞デストロイヤー接近中！　冒険者の皆様は、直ちにギルドに集まってください！！』

4話（後書き）

次回はＶＳ賞金首。

……謝りません

リーンと別れた俺が急いで屋敷に戻ると、そこは阿鼻叫喚と化していた。

「逃げるのよ！　遠くへ逃げるの！　ああっ、どうしよう！　部屋で飼ってる芸に使うあの子達は……。しょうがないわ、苦労して集めたけれど開放してあげましょう！」

色んな物をひっくり返し、ワタワタしながらアクアが言った。

その隣では、既に荷造りを終えためぐみんの姿。

背には大きなリュックを背負い、達観した様にお茶を飲んでいる。

「こんな時、元より失う物の無い私は強いですよ。この際ですから、皆で暖かい地方に引越しましょう。そして、そこで毎日皆で楽しく、爆裂魔法でも撃って暮らすんです」

装備を整えに慌てて帰宅した俺は、その二人を見て唖然としていた。

「……えっと。どうしたお前ら。何だこの状態は？　緊急の呼び出し受けてるんだぞ、装備整えてとっとと行こうぜ」

俺のその言葉に、ようやく二人は俺に気付いた様だ。

「カズマ、あんた何言ってるの？　ひょっとして、機動要塞デストロイヤーと戦う気？」

アクアが呆れた様に言った。

一体何をしていたのか、アクアは両脇に、虫かごや、何か黒い生き物が入ったゲージを抱え込んでいる。

と言うか、まだ緊急の呼び出しを受けただけで、俺は状況が分か

っていなかったりする。
　呼び出しの声の慌て具合から、ヤバイ物が接近中と言う事は分かったのだが。

「カズマ。今この街には、通った後はアクシズ教徒以外は草も残らないとまで言われる、最悪の特別指定モンスター、機動要塞デストロイヤーが向かって来ています。これと戦うとか、無謀も良い所ですよ？」
「ねえ、私の可愛い信者達がなぜそんな風に言われてるの？　さっきも、この街のどこかの信者から、感謝の祈りを捧げられたのよ？　みんな普通のいい子達ばかりだから！」

　めぐみんに言われてもピンと来ない。
　機動要塞って何だ。
　名前からしてデカそうだが。

「なあ、めぐみんの爆裂魔法でどうにかならないのかそれ？　名前からして大きそうだけど。遠くから丸分かりだろ？　魔法で一撃じゃダメなのか？」
　それにめぐみんは、
「無理ですね。デストロイヤーには強力な魔力結界が張られています。爆裂魔法の一発や二発、防いでしまうでしょう」
　何者なんだよデストロイヤー。

「ねえ、ウチの信者はいい子達よ！　めぐみん聞いてよ、巷で悪い噂が流れてるのは、心無いエリス教徒の仕業なのよ！　みんなエリスの事を美化してるけど、あの子、アレで結構やんちゃな所があるのよ！？　悪魔相手だと私以上に容赦がないし、自由奔放で、案外暇な時とか、地上に遊びに来てたりしてるかもしれないわよ！？　アクシズ教を！　アクシズ教をよろしくお願いします！」

「アクア、神の名を自称するだけじゃ飽き足らず、更には神様の悪口まで言うなんてバチが当たりますよ？」
「自称じゃないわよ！　信じてよー！！」

俺は辺りを見回し、そこにダクネスの姿がない事に気が付く。
「なあ、ダクネスは？」
それに、半泣きのアクアにガクガク揺さぶられながら、めぐみんが言った。
「実家に帰りました」

どいつもこいつも！

デストロイヤーが何だか知らないが、この街にはせっかく手に入れた屋敷があるのだ。
それに、行き付けの店だって増えており、それにそもそも、他の街に、あの悪魔の姿をした天使達が経営する店があるとも限らない。むしろ、それらが無ければ俺だって、借金なんかに縛られず、とっくにとんずらかましていただろう。
そう、彼女達が他の街で、またあの商売を始めてくれるとも、そして今ほど上手くいくとも限らないのだ。

とりあえず武装を整え、俺もギルドへと……！

「遅くなった！　……ん、カズマも帰って来たのか。早く支度をして来い。お前なら、きっと行くんだろう？」

玄関のドアを開け、見た事も無い重武装に身を包んだダクネスが、俺を見るなり言ってきた。
ダクネスは、普段の全身鎧の上に鎖を編み込んだ重いマントを羽織り、左の篭手に、着脱式の盾まで着けていた。

そこまでしても兜を付けないのは、女としての譲れない何かがあるのだろう。

逃げる為に実家に帰ったのではなく、装備を取りに行っていたらしい。

流石、一応貴族なだけはある。

街の住人を放って、逃げると言う選択肢は無いらしい。

逃げ帰ったと疑って悪かった。ダスティネス卿、こんな時には頼りになる！

「おい、お前らコイツを見習え！　長く過ごしたこの屋敷とこの街に、愛着は無いのか！　ほら、ギルドに行くぞ！」

「……ねえカズマ、今日はなぜそんなに燃えているの？　なんか、目の奥が凄くキラキラしてて、カズマがたまに外泊しに行って、それから帰って来た時と同じ目をしてるんだけれど……」

「おっ！　やっぱり、来たかカズマ！　お前なら来るって信じてたぜ！」

完全武装でギルドへ入ると、そこには同じく重装備のキースの姿。

俺も、きっとお前がいると信じていたさ。

その隣には、テイラーとリーンの姿も。

「なあカズマ。ダストのヤツを見なかったか？　こんな時に、あいつが来ない訳が無いんだが……」

そう言って、キースがギルド内をキョロキョロと見渡した。

……。

「あいつはあいつで、今、大切な物を守る為の、決して譲れない戦いをしているはずだ。そっとしておいてやれ」

「……私はもう、ダストは大人の階段登ったと思うな」

俺とリーンの言葉にキースが不思議そうな顔をする中、俺は改めてギルドの中を見渡した。

そこには様々な冒険者達が、それぞれが考えられる限りの重武装で馳せ参じていた。

きっと、彼らもこの街が好きなのだろう。

何だか、男性冒険者達の比率が多い気がするが、きっと気のせいだ。

と言うか、見知った顔が大体いる。

遠くには、ミツルギの姿もある。

まだこちらに気付いていない様子だが、絡まれるのも嫌だ。

気付かれない様にしておこう。

……と、ある程度の冒険者達が集まった所で。

「お集まりの皆さん！　本日は、緊急の呼び出しに応えて下さり大変ありがとうございます！　只今より、対機動要塞デストロイヤー討伐の、緊急クエストを行ないます。このクエストには、レベルもクラスも関係なく、全員参加でお願いします。無理と判断した場合には、街を捨て、全員で逃げる事になります。皆さんがこの街の最後の砦です。どうか、よろしくお願い致します！」

ギルド内が喧しくざわめく中、ギルド職員が声を張り上げた。

そして、職員達が酒場になっている部分のテーブルをギルドの中央に寄せ集め、即席の会議室みたいな空間を作り出す。

おおう、空気が尋常じゃ無いな。
何と言うか、張り詰めている。
それほどまでにデストロイヤーがヤバイって事か。

「それではお集まりの皆さん、只今より緊急の作戦会議を行ないます。どうか、各自席に着いてください！」

俺達は職員の指示に従い、他の冒険者に習って席に着いた。
しかし、どれだけの人数がいるのだろう。
広いギルド内とは言え、ここに居る人の数は百ぐらいではきかないだろう。

テーブルに着くと、他の冒険者達の顔が良く見える。
所々に見知った顔が……。

おっ、あんな所にゆんゆんが、一人でぽつんと座っている。
まだこの街に、パーティメンバーがいないのだろうか。

げ、ミツルギがこっちに気付いた。
暇そうに俺の隣でコップの水で遊んでいるアクアを、真っ直ぐ見ている。

「さて、それでは。まずは、現在の状況を説明させて頂きます！
……えっと、まず、機動要塞デストロイヤーの説明が必要な方はいますか？」
その職員の言葉に、俺を含む数名の冒険者が手を上げた。
それを見て、職員が一つ頷き。

「機動要塞デストロイヤーは、元々は対魔王軍制圧兵器として、魔道技術大国ノイズで造られた、巨大ゴーレムの事です。国家予算か

ら巨額を投じて作られたこの巨大なゴーレムは、外見は蜘蛛の様な形状をしております。大きさは、以前皆さんが掘った、宝島にも劣りません。魔法金属をふんだんに使い、外見に似合わない軽めの重量で、八本の脚で馬にも匹敵する速度が出せます」

デストロイヤーはよほど有名なのか、ほとんどの冒険者達はそんな事は知っているとばかりに頷いている。

「特筆するのは、その巨体と侵攻速度です。凄まじい速度で動く、その八本の脚で踏まれれば、大型のモンスターとて挽肉にされます。そしてその体には、ノイズ国の魔道技術の粋により、強力な魔力結界が張られています。これにより、まず魔法攻撃は意味をなしません」

それを聞いている冒険者達の表情が、微妙に暗くなっていく。

段々、いかに自分たちが無謀な戦いをしようとしているのかが分かってきたからだろう。

「魔法が効かない為、物理攻撃しか無い訳ですが……。接近すると轢き潰されます。なので、弓や投石などの遠距離攻撃になりますが……。元が魔法金属製のゴーレムな為、弓はまず弾かれ、攻城用の投石器も、機動要塞の速度から運用が難しいと思われます。それに、このゴーレムの胴体部分には、空からのモンスターの攻撃に備える為、自立型の中型ゴーレムが、飛来する物体を備え付けの小型バリスタ等で撃ち落し、なおかつ、戦闘用のゴーレムが胴体部分の上に配備されております」

……ほほう。

「そして、その機動要塞デストロイヤーがなぜ暴れているのか、で

すが……。研究開発者が、この機動要塞を乗っ取ったと言われています。そして、現在も機動要塞の中枢部内にその研究者がおり、ゴーレムに指示を出していると言われています。速度が速度ですので、すでに荒らされていない地は殆ど無く、その蜘蛛の様な脚で、どれほどの悪路でも踏破してしまいます。現在の所、人類、モンスター合わせ、平等に蹂躙していく機動要塞。それがデストロイヤーです。現在、これが接近してきた場合は、唯街を捨て、通り過ぎるのを待ち、そして再び立て直すしか方法が無いとされています。正に、天災として扱われております」

……あれほどざわついていた冒険者達は、今はシンと静まり返っていた。

「……現在、機動要塞デストロイヤーは、この街の北西方面からこちらに向けて真っ直ぐ侵攻中です。……では、ご意見をどうぞ！」

無理ゲー。

俺は脳内にそんな言葉が浮かんだ。

ある冒険者が手を上げる。

「……あの、そのノイズ国ってのはどうなったんです？　造った国なら、それに匹敵する何かを造るなりなんなり、出来ないんですか？　あと、弱点ぐらい知ってたり……」

「滅びました。デストロイヤーの暴走で、真っ先に滅ぼされました」

「……他に、ありませんか？」

職員が促した。

それに、また別の冒険者が手を上げる。
「そんなの、街の周りに巨大な落とし穴でも掘るとか、」
「やりました。エレメンタルマスター等が寄り集まって、地の精霊に働きかけ、即席ながらも巨大な大穴を掘り、デストロイヤーを穴に落としたまでは良かったのですが……。機動性能が半端なく、なんと、八本の脚を使い、ジャンプしました。上から岩を落としてフタをする作戦だったそうですが、その暇も無かったそうです」
「……」
思わず場が静まり返る。
「……他にありませんか？」

また一人の冒険者が手を上げた。
「魔王軍の連中はどう対処してるんだ。魔王の城は蹂躙されてはいないのか？　連中はどうやってデストロイヤーから身を守っているんだ。連中だって困ってるんじゃないのか？」
「あの城には強力な魔力結界がある様です。人類の力ではとても張れない様なヤツが。結果、自分達には被害は無いので、デストロイヤーを破壊しようとしてくれる気配はありませんね。彼らにとって、野良モンスターが蹂躙される事は、取るに足りない事でしょうから」

職員が、静かに言った。
「他に、ありませんか？」

ギルド内はあーでもないこーでもないと、会議は難航していた。
機動要塞にロープか何かで乗り込めないかと言う意見が出れば、

速過ぎて無理だと反対意見が出る。
デストロイヤーを越える巨大なバリケードは造れないのかとの意見が出れば、職員が、壁を迂回して踏み潰して行った例があると告げ、静まり返った。

魔法は効かない、接近したら踏まれる、空からの攻撃も撃ち落とされる。
しかも、それらが迅速に行なわれる。

なるほど、アクアとめぐみんが逃げようとするのも仕方ない。

難航する会議に飽きたのか、俺達のテーブルの傍に座っていたテイラーが。
「おいカズマ。お前さんなら機転が効くだろう。何か良い案は無いか？」

突然、俺にそんな無茶振りをしてきた。

いやそんな事言われても。

離れた所から、めぐみんにぶっ飛ばしてもらうぐらいにしか考えていなかったのが、そもそも結界で魔法が効かないって時点で……。

……。

……結界で、魔法が効かない？

俺は、隣でコップの水を使い、テーブルに絵を描いて暇を潰しているアクアへと振り向きながら、
「なあアクア。ウィズの話じゃ、魔王の幹部、二、三人が張った結

界ぐらいなら、お前なら破れるとかって言ってなかったか？　なら、デストロイヤーの結界も……おわっ！？　なんだこりゃー！？」

俺はそこまで言って、アクアが水だけを使ってテーブルに描いた絵に、目が釘付けになっていた。

それは、間違いなく芸術作品。

それは、美しい天使が花を手に戯れている……、

「ああ、そういえばそんな事言ってたわね。でも、やってみないと分からないわよ？　結界破れる確約は出来ないわよ？」

アクアは、言いながらその水で描いた絵に、惜しげもなくコップの水を……、

「ああっ！　もったいねえ、何で消すんだ！」

「な、何よ急に。描き終わったから消して、また新しいのを……」

そんな事を言い合っていた俺達に、職員が大声を上げた。

「破れるんですか！？　デストロイヤーの結界を！？」

その言葉に、俺とアクアは冒険者達の注目に晒される。

俺は急いで手を振った。

「いや、もしかしたらって事で。確約は出来ないそうです」

俺の言葉にギルド内がざわつく。

そして……。

「一応、やるだけやっては貰えませんか？　それが出来れば魔法による攻撃が……！　……あ、いやでも。巨大ゴーレム相手には、下手な魔法では効果が無い。……レベル三十以下が多い、この街の魔法使い達では、火力が足りないでしょうか……？」

職員が再び悩み出し、また静まり返る中。
ある冒険者がぽつりと言った。

「火力持ちならいるじゃないか、頭のおかしいのが」

その言葉に、再びざわつくギルド内。

「そうか、頭のおかしいのが……！」
「おかしい子がいたな……！」

「おい待て、それが私の事を言っているなら、せめてその言葉の後に爆裂娘を付けよう。さもなくば、いかに私の頭がおかしいかを今ここで証明する事になる」
めぐみんが言って立ち上がると、冒険者達が目を逸らした。

ベルディアの罪は重い。
あいつがめぐみんを、頭のおかしい紅魔の娘呼ばわりしてから、そのフレーズが定着したらしい。

勢いで立ったものの、人々の期待を込めた視線を受けためぐみんは、みるみる顔を赤くした。
「ううう……わ、我が爆裂魔法でも、流石に一撃では仕留めきれない……と、思われ……」
そうぼそぼそと告げて、再び座った。

ギルドの人々から期待を込めた眼差しを集めていためぐみんを、遠くで、悔しそうに見ているゆんゆん。
彼女も上級属性魔法とやらが使えたはずだが、それがどれだけの威力を持つのかは俺は知らない。
手を上げない所を見ると、巨大なゴーレム相手には火力が足りな

いと分かっているのかも知れない。

ならせめて、あと一人。

あと一人、強力な魔法の使い手がいてくれれば……。

ギルド内の空気がそんな雰囲気になった時。

ギルドの入口のドアが開いた。

「すいません、遅くなりました……！　ウィズ魔法店の店主です。一応冒険者の資格を持っているので、私もお手伝いに……」

5話中編

機動要塞デストロイヤー。

それはどこかのチート持ちの日本人が、適当に付けた名前らしい。

適当に名付けるなと言いたい所だが、この姿を見た今なら、納得出来た。

「来たぞー！　全員、頭を低く！　踏み潰されないように、絶対にアレの前には出るんじゃないぞ！」

誰かの檄が飛ぶが、正直言って皆それを聞いている余裕など無い。

それほどに、目の前のソレは圧倒的な威圧感を誇っており……。

「ちょっとウィズ！　大丈夫なんでしょうね！　大丈夫なんでしょうね！？」

俺とめぐみんが待機している場所から、攻撃予定地点を間に挟み、大きく離れた場所に待機しているアクアが、隣に佇むウィズに何度も何度も確認していた。

「大丈夫です、任せてくださいアクア様。これでもリッチー、最上位のモンスターの一人ですから。アクア様がアレの魔力結界を打ち破ってくれれば、後はお任せを！　……もし失敗したら、皆で仲良く土に還りましょう」

「冗談じゃ無いわよ！　冗談じゃ無いわよ！！」

なにやら遠くで騒ぐ、そんな二人を見ながら、俺は隣でガチガチに緊張しているめぐみんに。

「おい、ちょっと落ち着け。失敗しても、誰も責めないさ。失敗した時は街を捨て、皆で逃げればいいだけだ。あんまり深く考えるな」

今回、ほとんどやる事のない俺は、気楽に言った。

「だだだだ、だい、大丈夫です！　わわわ、我が爆裂魔法で、消し、消し飛ばしてくれるわっ！」

蜘蛛の様な八本の脚を、それぞれワシャワシャと忙しなく動かして、いつぞやの宝島にも匹敵する大きさのソレは、馬が駆けるに近い速度で、真っ直ぐにこちらに向かって突っ込んで来ていた。

馬の速度が、平均すれば大体の時速が６０キロ。

その巨体ゆえに、遠目にはゆっくり近付いてくる様に見えるが、アレに接近されてしまったならば、もう人の足では逃げられない。

その進行方向には、木々の間に幾重にも張り巡らされた、本来なら湖での漁に使われるはずの網やロープ。

そして即席で作られた、石材や木々、台車等で組み上げられたバリケード。

それらの前に、どこかのクリエイターが作り出した、土で出来たゴーレムが何体も立ち塞がる。

そのゴーレム達の最前列、真ん中には……。

大剣を地に突き立てて、それの柄の部分に両手の平を置き、全身甲冑に合わせ、鎖を編み込んだ重いマントを羽織ったダクネスがただ一人、街を守護するかの様に、巨大な機動要塞を前にして、怯むことなく立っていた。

ダクネスの前に広がる平原を、左右から包囲する様に俺を含めた冒険者が待機している。

蜘蛛の様な巨大なソレは、周りに待機する俺達を一切気にする事なく、真っ直ぐに街の前を守護するダクネスへと突進し。
その道中に仕掛けられていた、落とし穴や爆発罠、鋼線罠をものともせずに……！

『アクア！　今だ、やれっ！』

拡声器で拡大された俺の合図に、全ての冒険者達が見守る中。
アクアが魔法を解き放った。

「『シールドブレイク』ッ！！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ウィズ魔法店の店主です。一応冒険者の資格を持ってるので、やって来ました……」
言いながらギルドに入ってきたのは、店で何かの作業中に、慌てて飛び出して来たのだろうか、黒のローブの上に、店で使うエプロンを付けたウィズだった。
その格好は、まるで炊き出しの手伝いにでも来た娘さんの様な姿だ。

そのウィズを見た冒険者達は……。
「店主さんだ！」
「貧乏店主さんが来た！」
「店主さん、いつもあの店の夢でお世話になってます！」
「店主さんが来た！　勝てる！　これで勝てる！」

と、途端に歓声を上げだした。

俺はウィズがリッチーだと知っている。

だが、冒険者達の、この勝てるといった騒ぎは何だ？

「なあ、なんでウィズってこんなに有名なんだ？　人気ありそうなんだが、その割には店には誰も客来ないし……。どうなってるんだ一体？　ていうか、可哀想だから貧乏店主はやめてやれよ……」

俺が近くのテイラーに尋ねると、

「知らないのか？　ウィズさんは、元は冒険者だったんだ。凄腕アークウィザードとして名を馳せたが、やがて引退し、しばらく姿を現さなかったかと思うと、突然この街に現れてお店を出した。ウィズさんのお店が流行らないのは、駆け出しが多いこの街には、高価なマジックアイテムを必要とする冒険者がいないのが原因だな。首都にでも店を出せば、もう少し需要はあると思うんだが。強敵と戦う訳でも無い俺達が、高価な薬や超高額なマナタイトなんて使う事は無いからな。皆、店をこっそり覗きには行ってるんだよ。買わないだけで」

いや、買ってやれよ、覗きに行くなら。

「ど、どうも、店主です、ウィズ魔法店をよろしく……。店主です、ありがとうございます、魔法店をよろしくお願いします、お店がまた赤字になりそうなんです……！」

そう言って、ウィズは歓声を上げる冒険者達にぺこぺこと頭を下げて……。

こ、今度何か買って行ってやろう。

「ウィズ魔法店の店主さん、これはどうもお久しぶりです！　ギルド職員一同、歓迎致します！　さあ、こちらにどうぞ！」

職員に促されるまま、ウィズは周りにぺこぺこと頭を下げながら、中央のテーブルの席に座らされた。

ウィズが席に着くと、冒険者達は期待を込めた目で、進行役の職員を見る。

職員はそれに応える様に。

「では、調度いい所に店主さんにお越し頂いた所で、改めて作戦を！　ええと、店主さんが来たのでもう一度まとめます。……まず、アークプリーストのアクアさんが、デストロイヤーの結界を解除。そして、あた……、めぐみんさんが、結界の消えたデストロイヤーに爆裂魔法を撃ち込む、と言う話になっておりました」

それを聞いたウィズが、口に手を当て考え込む。

「……爆裂魔法で、脚を破壊した方が良さそうですね。デストロイヤーの脚は本体の左右に四本ずつ。これを、めぐみんさんと私で、左右に爆裂魔法を撃ち込むのは如何でしょう。機動要塞の脚さえ何とかしてしまえば、後は何とでもなると思いますが……」

ウィズの提案に、職員もコクコクと頷いた。

と言うか、流石はリッチー。やはりと言うか、爆裂魔法も使えるのか。

確かに、脚さえ何とかなれば、もう機動要塞では無くなるし、街が蹂躙される恐れも無くなる。

戦闘用のゴーレムが配備されているらしい危険な本体に、わざわざ乗り込むまでもない。

一応しっかり監視して、動かなくなったデストロイヤーは、一日

一爆裂の的にでもするなりして、何日でもかけて、ゆっくり攻略すればいい。
要塞内部にいるらしい、要塞を乗っ取った開発研究者とやらも、毎日魔法を撃ち込まれていれば、要塞を動かす事が出来なければ投降してくるかも知れない。

その後、ウィズのその提案を元に作戦が組まれた。
万が一を考え、駄目元で、街の前に罠を張る、バリケードを造る等、色々な案が出され。

「では、結界解除後、爆裂魔法により脚を攻撃。万が一脚を破壊し尽くせなかった事を考え、前衛クラスの冒険者各員はハンマー等を装備し、デストロイヤー攻撃予定地点を囲むように待機。魔法で破壊し損なった脚を攻撃し、これを破壊。要塞内部には、デストロイヤーを開発した研究者がいると思われるが、この研究者が何かをするとも限らない。万が一を考え、本体内に突入も出来る様にロープ付きの矢を配備し、アーチャー等はこれを装備。身軽なクラスの人達は、突入準備を整えておいて下さい」
進行役のギルド職員が、作戦をまとめ、全員に指示を出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

街の前には、冒険者達だけではなく、街の住人達も集まって、突貫作業で即席のバリケードが組み上げられている。
作業に従事しているのは、俺とアクアがこの街に来た当初、お世話になった土木作業の

親方の姿もある。

デストロイヤーを迎え撃つ予定の場所は、街の正門の前に広がる平原だ。

そこには、罠を設置できるクラスの者が、無駄とは知りつつも即席の罠を仕掛けている。

街の前のバリケードの前には、クリエイターと呼ばれる連中が集まり、あーでもないこーでもないと言い争い、魔法陣を描いていた。

「おいダクネス、お前、悪い事言わないから下がってろよ。お前の固さは知ってるが、流石に無理があるし、そこにいても役に立てないって。ここはお前のどうしようもない趣味は置いといて、俺と一緒に道の端っこに引っ込んでおこう。な？」

俺は、街の正門の前のバリケード、その更に前にジッと立ちはだかるダクネスに、再三の説得を続けていた。

この変態クルセイダーが、ここから動かないと言って聞かないのだ。

ダクネスが大剣を地面に刺し、柄に両手を掛け、遠く、まだ姿も見えないデストロイヤーの方を見ながら動かない。

ダクネスは、じっと黙っていたが、やがて、口を開いた。

「……カズマ。私の普段の行いの所為でそう思うのも仕方が無い。……が、この非常時に、この私が自分の欲望にそこまで忠実だとでも思うか？」

「当たり前じゃん」

一瞬静かになったダクネスが、ちょっと頬を赤らめて、そのまま静かに続けた。

「……この私は、貴族の娘。この街を守る義務がある。……本来ならば、その義務はこの地の領主なのだが、そいつがどんな奴かは既に説明しただろう？」

確か、俺に借金背負わせたどうしようもないクソ領主だったか。

俺が経済的な理由で、毎日ではなく、週一ぐらいでしかサキュバスサービスを受けられないのも、言ってみればそいつの所為。

俺がダクネスに頷くのを見て、ダクネスが話を続けた。

「元々この地はダスティネス領。父が、王の懐刀と呼ばれ、長く王都勤めを命じられた時にこの地を国に返還し……。今は、王都の近くに広大な所領を拝領してはいるが。それでも、私にはこの地の住人を守る義務がある。私はそう思っている。だから……。無茶だと言われても、ここからは何があっても一歩も引かん」

「お前って、たまにどうしようもなくワガママで、頑固な所があるよな。そう言う無茶な所は、ああ、貴族だなって思うわ」

俺が呆れた様に言うと、ダクネスが少しだけ困った様な、不安そうな顔で。

「……貴族は、嫌いか？」

一般庶民、特に冒険者は貴族が嫌いだ。

それは、よほど優秀な領地経営者でもなければ、殆どの貴族の人間に対して抱かれる感情だ。

日本じゃ、領地経営を行なう貴族って言うと、セレブってよりも政治家だとでも思えばいいのか？

ダクネスが、自分が貴族の娘だと黙っていたのは、冒険者達が貴族を嫌っているのを知っていると言うのもあるのだろう。

だが……。

「ここの領主みたいな典型的な奴は大嫌いだ。でもまあ……。お前の親父さんみたいな人や……。後、今のお前みたいなのも嫌いじゃないよ」

俺が適当に言ったその言葉に。

「……そうか」

少しだけ、安心した様にダクネスが呟いた。

「説得は失敗した。あの頭の固い変態を守る為にも、成功させるぞ」

俺は、デストロイヤー迎撃地点の脇で待機しているめぐみんの隣に屈み込むと、緊張気味のめぐみんに告げた。

「そ、そそ、そうですか……！　や、やらなきゃ……！　絶対やらなきゃ……！」

「お、おい落ち着け。いざとなったら、あいつの重い装備を無理やりスティールでひん剥いて、軽くして力づくでも引っ張ってくから。それよりも……」

「ねえちょっと、あんた頭とかから、軽く煙が上がってるけど大丈夫なの？　なんなのそれ？　この私相手に新芸でも披露する気なの？」

「ち、違いますアクア様……。これはその、この良く晴れた天気の中、長時間お日様の下にさらされているもので……」

迎撃地点を挟んだ向こうでは、アクアとウィズが屈み込み、何や

ら話しこんでいる。
俺達やアクア達の周りには、ゴーレムに効果が強そうな、打撃武器等を持った冒険者達が寄り集まり。

そして、俺を含め狙撃スキルを持つアーチャー職の連中は、先がフック状になった、尻の部分に細いながらも頑丈なロープの付いた矢を弓につがえ、もしもの時には、何時でも動きを止めた機動要塞に乗り込める様、ロープを張れる準備を終えていた。

やがて、魔法で拡大されたギルド職員の声が、その場に響き渡った。

『冒険者の皆さん、そろそろ機動要塞デストロイヤーが見えてきます！　街の住人の皆さんは、直ちに街の外に遠く離れていて下さい！　それでは、冒険者の各員は、戦闘準備をお願いします！』

遠く離れた、坂になった丘の下から、最初にその頭が見えてきた。

感じるのは軽い振動。
まだほんの僅かな物だが、確かに大地が震えている。

「何あれでけえ……」

誰かがぽつりと呟いた。

確かにデカイ。

いや、爆裂魔法の威力は、めぐみんとの長い付き合いで知っている。

その知識を元に、言わせて貰う。

脚四本ですら、爆裂魔法で破壊できるのか？

「オイ、これ無理じゃねえか？　いけるのか？　無理だろこれは！」

近くの誰かが慌てて言った。

「「『クリエイト・アースゴーレム』！」」

クリエイターの皆さんが、地面の土でゴーレムを作り出す。

生み出されたゴーレムは、街を守護するダクネスの背後へと、付き従う様に整列した。

この街のクリエイターも駆け出しだ。

より強いゴーレムを作ろうと思うと、強さや大きさの代わりに、ゴーレムの維持時間を削るしかないらしい。

なので、このギリギリのタイミングで生み出したのだろう。

「でけえ！　それに速え！　予想外に怖え！！」

近付いてくるその巨大な姿に、冒険者達がパニックを起こしかけていた。

無理も無い、ここにいる多くの冒険者はまだ駆け出しなのだ。

と言うか俺だって、ダクネスがあそこに立ち塞がっていなかったなら、既に逃げようかと考えていただろう。

「来るぞー！　戦闘準備ー！！」

その声は、テイラーだろうか？

アクアが魔法を放つタイミングや現場の指揮は、なぜか俺に一任されている。

ギルドの職員の人に、指示を出す為の拡声器の様な魔道具まで預けられてしまった。

俺が、アクアやめぐみんのパーティーリーダーだからと言う事らしい。

そして、テイラーがギルド職員に色々と吹き込んでいたのもあると思う。

デストロイヤーがすぐそこまで接近している。

それは見上げんばかりの圧倒的な威圧感。

現場指揮なんて任されなければ、そしてダクネスが頑固に留まっていなければ、これは諦めて逃げてしまっていたかも知れない。

以前パーティ組んだ時に機転が利いたのは唯のマグレだ。

元ニートの最弱職のハードルを、あまり上げないで頂きたい。

背中の部分を空母の甲板の様に平らにし、そしてその上に、まるでヤドカリの様に砦みたいな建造物を乗せ、それ以外にも甲板の部分の所々にバリスタを搭載した、蜘蛛の様な外見の巨大ゴーレム。

機動要塞デストロイヤー。

ふざけた名前とは裏腹に、宝島にも匹敵するその巨大な移動要塞

は、仕掛けられた数々の罠も物ともせずに、地面を踏みしだく轟音を響かせながら。

『アクア！　今だ、やれっ！』

俺達の住む街を蹂躙すべく、迎撃地点へと突っ込んできた！

「『シールドブレイク』ッ！」

アクアが、俺の合図で魔法を放つ。

一瞬、アクアの周囲の地面に複雑な魔法陣が浮かび上がったかと思うと、アクアの手には白い光の玉が浮かんでいる。

アクアはそれを前にかざすと、気合と共に息を吐き出し、デストロイヤーに向かって撃ち出した。

「ハアッ！」

撃ち出した光の玉がデストロイヤーに触れると同時に、一瞬デストロイヤーの巨体に薄い膜の様な物が張られたが、それがガラスでも砕く様に粉々に弾け飛んだ。

なんだろう。緊迫した場面なのに、アクアの掛け声やあの光の玉の撃ち出し方で、俺はドラ〇ンボールみたいと思ってしまった。

俺がそんなバカな事考えているとも知らず、めぐみんが指示を仰ぐように、杖を握って微かに震え、不安そうな顔で俺の顔を見上げてくる。

おっといけない。

多分弾け飛んだあの膜が、魔力結界とか言う物なのだろう。
なら、これで魔法が届くはず！
俺は拡声器に向かって大声で。
『ウィズ、頼む！　そちら側の脚を吹っ飛ばしてくれ！』

ウィズに指示を出し終わると、続いて、緊張で震えているめぐみんに。

「おい、お前の爆裂魔法への愛は本物なのか？　いつも爆裂爆裂言ってる奴が、ウィズに負けたらみっともないぞ？　お前の爆裂魔法はアレも壊せないへなちょこ魔法か？」
「な、なにおっ！？　我が名をコケにするよりも、一番私に言ってはいけない事を口にしましたね！！」
怒りで口元を引きつらせ、今までの緊張はどこへやら、バッと立ち上がったためぐみんが、朗々と、力強く詠唱を……。

俺達の待機する目の前を、デストロイヤーが轟音と共に通り抜けようとする中。

かつては、凄腕のアークウィザードの名を欲しいままにした、今は経営難に苦しむ小さな魔法店のリッチーと。
そして現在、頭のおかしい爆裂娘の名を欲しいままにしている、唯一つの魔法に全てを捧げた、紅魔族随一のアークウィザード。

その二人の最強の攻撃魔法が、難攻不落の賞金首へと放たれる。

「「『エクスプロージョン』ッッ！！」」

全く同じタイミングで放たれた二人の魔法は、機動要塞の脚を一

つ残らず粉砕していた。

5話後編

突然脚を失った機動要塞が、とんでもない地響き、轟音と共に、平原の只中に墜落し、そのまま慣性の法則に従って街の方へと地を滑る。

その滑る巨体は街の前のバリケードに届く事はなく、最前線で立ち塞がるダクネスの、ほんの目と鼻の先で動きを止めた。

轟音と共に爆砕した巨大な脚が、破片となって冒険者達の頭上に降り注ぐ。

めぐみんが脚を吹き飛ばしたこちら側は、殆ど欠片は降ってこない。

だが、ウィズの側からは、なんだか聞き慣れた悲鳴が聞こえていた。

「あんた、もうちょっとちゃんと破壊しなさいよ痛っ！？　破片が、破片が降ってきていだいっ！？」

……まあ、向こう側は大丈夫そうだ。

しかし、こちら側は殆ど破片が降ってこないと言う事は……。

「フフフ……。今日の魔法は会心の出来です。脚が、欠片も残さず粉々ですよ……」

満足気に言っためぐみんが、ガクリと膝を落としてふらついた。

思わずその小さな体を支えると、俺に支えられながら、めぐみんは真っ青なドヤ顔でニヤリと笑う。

「フ……フフ……これが、持てる魔力を全て注いだ、我が渾身の爆裂魔法……。カズマ。これを見てもへなちょこ魔法と言えますか？　さあ、謝ってもらいましょう！」

「よしよし、良くやった。悪かった悪かった。ご苦労さん、後は離れた所で休んでいてくれ」

俺のそんな適当なあしらいを見て、めぐみんが青い顔でしがみついてくる。

「あ、謝って！　もっとちゃんと謝り、私の爆裂魔法こそが最強だと……！」

「こ、こらっ、止めろ！　ズボンを掴むな！　分かった、爆裂魔法に関しちゃお前が一番だ、ほら、魔力が回復した状態ならいくらでも謝ってやるよ、とっとと安全な所で休んでろ！」

めぐみんを木陰にずるずると引っ張ってそのまま横たわらせると、他の冒険者達が未だ降り注ぐ破片から頭を守る中、アクアとウィズが俺の元へとやって来た。

ダクネスはと言えば、降り注ぐ破片を気にもせず、目を閉じる事すらなく、一歩もその場から動かずにいる。

俺は改めてデストロイヤーの巨体を見上げると、脚を失った巨大要塞は沈黙を保っていた。

降り注ぐ破片の雨があらかた収まり、落ち着いて状況を把握出来る様になってきた冒険者達から、おお……、と感嘆の声が上がり出す。

だが、こんな簡単に終わってくれるなら苦労はしない。

フラグになる様な迂闊な発言は慎み、このまま油断せずに、みんなでじっくりと包囲を固め、決して奢らず……！

「やったわ！　何よ、機動要塞デストロイヤーなんて大げさな名前しといて、期待外れもいい所だわ。さあ、帰ってお酒でも飲みまし

ょうか！　なんたって一国を亡ぼす原因になった賞金首よ、一体報酬はお幾らかしらね！！」

「このバカッ、なんでお前はそうお約束が好きなんだよ！　そんな事口走ったら……！」

迂闊な事を口にしたアクアを俺は必死で止めに入る。

……が。

それは既に遅かったらしい。

「……？　な、なんでしょうか、この地響きは……」

ウィズが不安そうに機動要塞の巨体を見上げた。

大地が震えるようなこの振動は、明らかにデストロイヤーを震源としている。

冒険者達が不安げにその巨体を見上げる中。

それは唐突に。

『この機体は、機動を停止致しました。この機体は、機動を停止致しました。排熱、及び機動エネルギーの消費が出来なくなっています。搭乗員は速やかに、この機体から離れ、避難して下さい。この機体は……』

機動要塞の内部から、その機械的な音声は唐突に、繰り返し何度も流された。

「ほらみた事か！　お前って奴は、一つ役に立つと、二つ足を引っ張らないと気が済まないのか！」

「待って！　ねえ待って！　これ、私の所為じゃ無いからっ！　私、今回はまだ何もしてない！！」

デストロイヤーの中から何度も避難命令が出される中、俺は近くにいた冒険者達を集めていた。

「おい、この警告はなんだ？　このまま此処にいたら不味いんじゃないのか？」

一人の冒険者が口にする。

俺もそう思う。

と言うか、ここにいる誰もが気付いていた。

「多分だが。このままだとボンッてなるんじゃないかなと思うんだ、こういった場合だと」

俺の言葉に、居並ぶ冒険者達の顔が引きつる。

この巨大な要塞が爆発でもしたら、一体どれほどの被害が出るのか。

そもそも、この要塞の動力源すら知らない俺達に、これ以上どうこうする事など出来そうにない。

出来る事と言ったら、もうとっとと逃げるぐらいで……。

しかし、ウチの頑固なクルセイダーが、街を捨てて逃げてくれるだろうか。

いや、まだ街に被害が出る規模の爆発が起きると決まった訳じゃ無い。

そこら辺を理由に、あの頑固な女を説得出来れば……！

「み、店が……。このまま街が被害にあったら、お、お店が、お店

が無くなっちゃう……」

それは、泣きそうなウィズの声。

彼女にすれば、それはきっと、自分の魔法店の事を言ったのだろう。

だが……。

『この機体は、機動を停止致しました。この機体は、機動を停止致しました。排熱、及び機動エネルギーの消費が出来なくなっています。搭乗員は速やかに、この機体から離れ、避難して下さい。この機体は……』

アナウンスが何度も何度も響く中、誰かがぽつりと呟いた。

「……やるぞ。俺は」

それは、誰の呟きだったのだろう。

「……俺も。レベル３０越えてるのに、未だにこの駆け出しの街にいる理由を思い出した」

……そんな奴がいたのか。

だが気持ちは分からんでもない。

「むしろ、今まで安くお世話になって来た分、ここで恩返し出来なきゃ終わってるだろ……」

……。

シンと静まり返る中。

聞こえてくるのは……。

『この機体は、機動を停止致しました。この機体は……』

俺は弓にロープ付きの、先がフック状になった矢をつがえ。

「機動要塞デストロイヤーに、乗り込む人は手を上げろー！！」

迷うことなく一斉に冒険者達が手を上げる中、俺はデストロイヤーに向け高々と矢を放った！

俺を含めた、狙撃スキル持ちのアーチャー達が、次々とデストロイヤーに向けて矢を放つ。

スキルによって飛距離を強化された矢は、重い矢じりとロープを物ともせず、巨大なデストロイヤーの甲板にも楽に届いた。

フック状の矢の部分がデストロイヤーの甲板部分の障害物に引っ掛かる。

矢の後ろに付いたロープを引くと、それがピンと張られた。

張られたロープに冒険者達が次々取り付き、それらを伝い、上って行く。

鎧を着たままでロープを上るだとか、人間離れし過ぎだろとか、どこからそんな体力がとか、きっと今の彼らには言うだけ無粋な事だろう。

俺は他のアーチャーと共にせっせと矢を放ちロープを張る。

やがて、最初にロープに取り付いた冒険者が、いち早く甲板へと

よじ登る。
その後にも続々と、まるでこの日の為に鍛えてきたとでも言わんばかりに、彼らは異様な士気の高さで……、
「機動要塞デストロイヤーに！　乗り込めー！」
冒険者達は次々と、まるで無力な小村を襲う野盗か何かの様な奇声を上げて、巨大要塞へと乗り込んだ！

「う、うわあ……。ねえカズマ、私、何かあそこに混ざるの怖いんですけど……。あの分だと、もう任せといても大丈夫よ。帰ろう？　帰って、また明日頑張ろう？」
異様な熱気に包まれる冒険者達を見て、むしろ冒険者達に怖気付いたアクアが袖を引っ張る。
だが、そんな訳にもいかない。
あそこでは俺の同志、仲間達が戦っている。
「ここで帰れる訳がないだろ、バカかお前は。お前には、果敢に乗り込むあの勇者達の姿が見えないのかよ。お前の仕事はこれからだろうが。なんちゃって女神じゃないなら、あの勇者達を癒してやれ」
俺はアクアにそう告げると、既に要塞に乗り込んで行った連中の後を追う。
周りでロープ付きの矢を放っていたアーチャー連中も、今では既に要塞だ。

俺は大声で。
「ダクネス、お前は鎧が重過ぎて、流石に上れないだろ！　めぐみんはそのまま休んでろ！　ウィズは好きに任せる！　アクア、お前はやらかした張本人なんだからついて来い！」
「ねえ待って！　だから、私今回はまだ何もしてない！」

俺がロープに取り付くと、アクアも泣きそうな顔をしながらも後を付いてくる。
そして、ウィズもロープを伝い、そのまま後を付いてきた。
そして俺達が甲板へと上がると、そこは……！
「ゴーレムを囲め囲め！　大勢でロープ使って引きずり倒せ！　倒れた所をハンマーで叩けっ！」
それはもう、どちらが侵略者か分からない状態だった。
既に多くの小型ゴーレムや戦闘用のゴーレムが、駆け出しの多いはずのこの街の冒険者達に破壊されていた。
と言うか、流石と言うか何と言うか、ミツルギが次々と硬いゴーレム達を一刀の元に斬り捨てている。
その離れた所には、これまたいつの間にか乗り込んでいたゆんゆんが、特大の閃光を放ってゴーレム数体を粉砕していた。
……いいなぁ。何かあいつら、俺達のパーティと違って、普通に冒険者っぽく戦ってて。
「おらっ！　この中にいるんだろ！　開けろ！　このドア、ハンマーで叩っ壊すぞ！」
「出て来い！　街を襲った責任者出て来い！　とっちめてやるっ！」
その罵声にそちらを見ると、数名の冒険者が、この要塞を乗っ取ったと言われている、研究者が立て篭もっているとされる建物のドアをこじ開けようとしていた。
本当に、どう見てもこちらが侵略者です。

と……、

「デカイのがそっち行ったぞーっ！」

その声に振り向くと、そこには一体の戦闘用のゴーレム。

まるで一昔前のロボットを思わせる、無骨で大きい、四角く角ばった人型のゴーレムだ。

それがこちらに向かって来る中、他の冒険者達が俺達の手助けをしようと寄ってくる。

だが、俺には対ゴーレム用の秘策があった。

「おいアクア。いい物見せてやる。スキルの有用な使い方って奴だ」

俺は手をわきわきさせて、ゴーレムに向かって手を上にして突き出した。

相手はゴーレム。

部品奪っちまえば動けまい。

日本にいた時、何かのＲＰＧゲームで機械系の敵に使った技だ。

そう、盗む系のスキルを機械に使うと、即死攻撃になる！

俺だって、ただ毎日ジッポ作っていた訳では無い。

日々確実に進歩しているのだ。

「『スティール』！」

「ちょっ！　カズマ、待っ……」

俺が何をする気か察したのか、アクアが鋭く叫びを上げ……。

俺の突き出した手の上には、巨大なゴーレムの頭が乗っていた。

勿論頭を盗られたゴーレムは、途端に動かなくなる。

計画通り……！

スティールによってしっかりと俺の右手の上に乗っかった、かなりの重さを誇るゴーレムの大きな頭は、掴んでいた右腕ごと俺を引っくり返らせ、右手を下敷きに地面に落ちた。

「っっっぎゃー！　腕が！　腕があああああああっ！」

ドヤ顔だった俺の表情が泣き顔に変わり、慌てて付近の冒険者達が、右手を挟んでるゴーレムの頭をどけてくれる。

「ああっ！　大丈夫ですかカズマさん!?　重い物持っているモンスター相手には、スティール使っちゃいけませんよ！」

ウィズが俺を心配する中、俺の右手の具合をアクアが見る。

「アクア……、これ、折れてる。絶対折れてるよ」

「……ヒビも入ってないわよ。一応ヒールぐらい掛けるけど、あんまり調子に乗ってバカな事しないでね？」

くっ、屈辱だ！

「開いたぞーっ！」

砦の様な建物のドアを、冒険者達がハンマーで叩き壊した。

そのままぞろぞろと建物の中に突入していく。

今の彼らには、怖い物は無いのだろうか。

未だ鳴り響く警報を気にも留めず、パーティ編成もクソも無く、次々と中に突入していた。

俺達も彼らの後を付いていく。

中には何体ものゴーレムが居た様だが、それらが実に効率的に破壊されていた。

……普段はまとまりが無いくせに、団結した冒険者ほど恐ろしい物はないな。

やがて建物の奥に入る。

すると、ある部屋の前で人だかりが出来ていた。

その人だかりは、皆一様に沈んだ表情を見せ、今までのテンションはどこへ消えたのかと言う感じだ。

「……おっ、カズマ。良い所に来たな。……見ろよ、これを」

そう言ってきたのは、部屋の中央にいたテイラー。

そのテイラーも、なんだか寂しげな浮かない顔だ。

見れば、何かを指差している。

……それは、白骨化した人の骨。

この機動要塞を乗っ取った研究者は、ゴーレムに囲まれたこの要塞内で、寂しげに部屋の中央の椅子に腰かけていた。

俺はアクアを呼び、部屋に招く。

そして無言で骨を指差すと、アクアは静かに首を振った。

「すでに成仏してるわね。アンデッド化どころか、未練の欠片もないぐらいにスッキリと」

……。

スッキリと？

「いや未練ぐらいあるだろ。これ、どう考えても一人寂しく死んで

った、みたいな……」

その俺の言葉に、アクアが何かを見つけた様だ。
それは、机の上に乱雑に積まれた書類に埋もれた、一冊の手記。

アクアがそれを手に取ると、皆、空気を察して押し黙った。
冒険者達が見守る中、鳴り響くのは機械的な警告の声。

そんな中、アクアが手記を読み上げる……。

「……。〇月×日。国のお偉いさんが無茶言い出した。こんな予算で機動兵器を作れと言う。無茶だ。それを抗議しても聞く耳持たない。泣いて謝ったり拝み倒してみたが、ダメだった。辞めさせて下さいと言っても辞職願いを受理されない。バカになったフリをしてパンツ一枚で走り回ってみたが、女性研究者に早くそれも脱げよと言われた。この国はもうダメかも知れない」

……思わず、皆の視線が白骨化した骨に集まった。

「〇月×日。設計図の期限が今日までだ。どうしよう、まだ白紙ですとか今更言えない。だってヤケクソになって、貰った報酬の前金、もう全部飲んじゃった。どうしようと白紙の設計図を前に悩んでいると、突然紙の上に俺の嫌いなクモが出た。悲鳴を上げながら、手近にあった物で叩き潰した。叩き潰してしまった。用紙の上に。……このご時勢、こんなに上質な紙は大変高価なのに、弁償しろとか言われても金が無い。……知るか。もうこのまま出しちまえ」

……えっと。

微妙な空気になってきた中、アクアが尚も手記を読む。

「〇月×日。あの設計図が予想外の好評だ。それクモ叩いた汁ですけど、そんな物よく触れますねなんて絶対言えない。て言うか、ドンドン計画が進んでる。どうしよう、俺のやった事って、クモを一匹退治しただけ。……でも、こんな俺が所長です。ひゃっほう！」

……アクアが、適当に作ってるんじゃないだろうなと疑いたくなったが、読み上げるアクアはいたって真剣な表情だ。

「〇月×日。俺何もしてないのにどんどん勝手に出来ていく。これ、俺いらなかったじゃん。何なの？　もういいや、勝手にしてくれ。俺は俺らしく好きに生きる。……なんか動力源をどうこう言われたけど知るか。俺最初から無理って言ったじゃん。そんなの、永遠に燃え続けるって言われている、超レア鉱石、コロナタイトでも持って来いと言ってやった。言ってやった言ってやった！　持って来れるもんなら持って来い」

……。

「〇月×日。持って来ちゃった。どうしよう、本当に持って来た。なんか動力炉に設置を始めた。どうしよう、マジでどうしよう、持って来れる訳無いと思って適当に言ったのに、本当に持って来た。これで動かなかったらどうすんだ。俺どうなるんだ。えっ、死刑？　これで動かなかったら死刑じゃないの？　動いてください、お願いします！」

俺達の視線が気になるのか……。

「〇月×日。明日が機動実験と言われたが、正直俺何にもしてねえ。

やったのはクモ叩いただけ。この椅子にふんぞり返っていられるのも今日までか……。そう思うと、無性に腹が立ってきた。もういい、飲もう。今日は最後の晩餐だ。思いっきり飲もう！　機動兵器の中には、今日は誰も残っていない。どんだけ飲んでバカ騒ぎしても、咎められる事は無いだろう。とりあえず、一番高い酒から飲んでいこう！」

アクアが手記を読み上げながら、俺達の視線に軽く怯えている。

「〇月×日。目が覚めたら、なんか酷い揺れだった。何だろう。何だろうこれ。俺どれだけ飲んだっけ。覚えてない。いや、昨日の記憶が無い。あるのは、動力源のある中枢部分に行って、コロナタイトに向かって説教してた所までしか覚えてない。いや待てよ。その後、お前に根性焼きしてやるとか言って、コロナタイトに煙草の火を……」

読み上げながら、アクアはこちらには目を向けなくなり、

「〇月×日。現状を把握。そして、終わった。現在只今暴走中。どうしよう、これ間違いなく俺がやったと思われてる。俺、絶対指名手配されてるよ。今更泣いて謝ったって許してもらえないだろうな……。やだな……。このまま機動兵器ぶっ壊されて、引きずりおろされて死刑だろうか。畜生、国のお偉いさんも国王も、俺のパンツ脱がして鼻で笑った女研究者も、みんなみんなクソッタレだ！　こんな国滅んじゃえばいいのに。もういい、酒飲んで寝よう。幸い食料と酒には困らない。寝て起きてから考えよう」

……やがて、誰ともなく拳を握り。

「〇月×日。国滅んだ。やべえ、滅んだよ、滅んじゃったよ！　国

民とかお偉いさんとか、人はみんな逃げたみたいだけど。でも俺、国滅ぼしちゃった。ヤバイ、何かスカッとした！　満足だ。俺、もう満足。よし、決めた。もうこの機動兵器から降りずに、ここで余生を暮らすとしよう。だって降りれないしな。止められないしな。これ作った奴、絶対バカだろ。おっと、これ作った責任者、俺でした！」

…………。

最後まで読み上げたのだろう。

困った顔で、アクアが言った。

「……終わり」

「「「なめんな！！」」」

アクアとウィズ以外が見事にハモった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……これがコロナタイトか。ってか、これどうやって取るんだよ」

そこは要塞の中枢部。

大人数で行ってもしょうがないと、皆に任され、俺とアクアとウィズの三人で入った部屋の中。

その部屋の中央には、鉄格子に囲まれた小さな石、コロナタイトの姿がある。

今は、それが赤く輝いていた。

だが、鉄格子に囲まれたそれは、どう考えても取り出せない。

なるほど、攻め込まれた時用の最後の砦か。
格子の隙間から火を付ける事は容易いが、これを持ち去ったりする事は出来ない、と。

「どうしようかしらね。……あっ、そうだわ、確か、魔剣持ちのなんとかさんが……」
アクアが何か言い掛けたが、俺は閃いてしまった。
「おい、こうすりゃいいんじゃないのか？　格子なんて関係ない。この距離なら……『スティール』ッ！」
「ああっ！　カ、カズマさんっ！？」

ウィズが何かを叫ぶ中、俺の予想通り、コロナタイトは格子をすり抜け、俺の手の中におさまった。

赤々と燃えながら。

「あああああああづあああああ！！」
「『フリーズ』！　『フリーズ』！」
「『ヒール』！　『ヒール』！　……ねえ、バカなの？　カズマって、普段は結構知恵が働くって思ってたんだけれど、さっきのゴーレムの件といい、実はバカなの？」
くっ、悔しい！　アクアに言われて何も言い返せない！

俺の右手に焼き付き、危うく腕を燃き上げそうになったコロナタイトを、大慌てで冷やして剥がしてくれたウィズの足元に、燃え盛るコロナタイトが転がった。

それは一瞬は冷まされたものの、また再び赤々と……。
「……マズイですね、時間がないですよ。そろそろボンッていきそ

うです。……これ、どうしましょうか……」
悩むウィズの足元では、コロナタイトがどんどんその輝きを増していた。
いつの間にか、機械的なあの警告の声も止んでいる。
きっと、この石が要塞内の全ての動力源だったからだろう。

しかし、こんな物の処理は俺にはどうにもならない。
いや、これはハッキリ言って、ここの冒険者にはどうにもならないレベルの話だ。
これほどの要塞を動かす、燃え盛る石をどうにかできるのは……！
そう、困った時の神頼み！

「おいアクア、お前これを封印とかって出来ないか？　良くあるだろ女神が封印するとか何とか！」
「良くあるけど！　それはゲームの話でしょ！？　ちょっとウィズ、あんた何とか出来ないの！？」
無理難題を、日頃付け狙っていたリッチーにあっさり押し付けた自称何とか。
だが、無理ですと言うかと思ったウィズは……。

「……出来ない事はないですが……。それには魔力が足りません……。あの、カズマさん、お願いが！」
そう言って、真剣な表情で俺の前に顔を寄せた。
「な、何でしょう？」
ウィズは、切羽詰まった様に、俺の頬を両手の平で挟みながら。
「吸わせてもらえませんか！？」
「喜んで」

何を、なんて野暮は言わない。

こんな時に!?　なんて言わない。
俺は、ここで動揺したりすっとぼけたりする様な鈍感系じゃない。

「ありがとうございます！　では、参ります！」
否が応でもウィズの艶やかな唇が目に入る。
お父さん、お母さん、大人になり……ま……？
……あれ……目の前が……どんどん暗……く……
「ちょ、ちょっと！　それ以上は干物になっちゃう！　カズマ！
大丈夫？　しっかりして！」

気が付くと、俺は外にいた。
どうやら皆が下まで降ろしてくれたらしい。

「おっと、目が覚めましたか。カズマ、ご苦労様でした」

俺にそう言ってきたのは、俺の隣で座っているめぐみんだった。
俺が寝かされていたのは、めぐみんを休ませていた所の様だ。
俺はどれだけ意識を失っていたのか、周囲には、既に冒険者の姿は無く。
そこには、アクアとウィズ、ダクネスとめぐみんと言うメンツのみ。

俺が目を覚ました事に気が付いたウィズが、大慌てで俺に頭を下げた。
「すっ、すいませんカズマさん！　緊急だったので加減が出来ませんでした！」

その言葉を聞きながら、俺はむくりと上体を起こし。
「……えっと、一体どうなったんだ？」
周囲の皆に尋ねていた。

「カズマはこの悪女に、ドレインタッチを食らったのよ。魔力と生命力を吸い取る、リッチーが使うおぞましいスキルよ。それでカズマの魔力を貪り尽くしたこの女は、テレポートの魔法で、コロナタイトを火口に捨ててきたわ」
「そそそ、そんな！　うう……すいません、カズマさん……。すいません……」
アクアのロクでもない説明に、謝りながら小さくなるウィズ。

「いや、謝らなくていいよ。ウィズがああしなかったら、今頃みんなどうなってたか。あれだけの騒ぎを起こしておいて、最後にはウィズに丸投げした奴もいるんだしな」
「ねえ待って！　だから、今回私何も悪い事してない！　してないから！」

騒ぐアクアを尻目に、よろめきながらも立ち上がる。
と、ふらつく俺に、ダクネスがそっと手を貸してくれた。
そのまま皆で、街に向けて歩き出す。

俺は隣を歩くダクネスを、ぼんやり見ながら。

恐らくはずっと、街を守る為にダクネスは、この巨大な要塞の前に立ち塞がっていたのだろう。
そう言えば、この巨大要塞が脚を失って目の前に滑ってきた時も、微動だにすらしなかったな。
一体どうなってるんだこいつの頑固さは。
そんな、結局最後まで折れなかったワガママな貴族の娘は……、

「カズマ……。私が言う筋合いじゃ無いかも知らないが。改めて礼を言う。元はこの地を任されていた、貴族の娘として。……良く、この街を守ってくれたな。……どうも、ありがとう……！」

……そう言って、はにかんだように笑みを浮かべた。

……。

「そういやお前、今回やたらと格好良かったな」

突然の俺の言葉に、ダクネスは今日の自分を思い出したのか、

「……そ、そうか……」

ちょっと頬を赤らめながら、照れ臭そうに顔を背ける。

……。

「一番何もしなかったけどな」

「！？」

俺の言葉に、ダクネスは顔を背けた状態でビクリと震えた。

「そういや、ダクネスは今日はずっと街の前で立ってただけねー。ねえ、私は頑張ったわよ！　結界破ったし、カズマの傷も治したり！」

特に悪気は無いアクアの言葉。

それに、ダクネスは更に身を震わせた。

「私はもちろん、爆裂魔法で大活躍でしたから」

同じく、特に悪気も無いめぐみんが言った一言に、ダクネスは更に身を震わせ。

「そう言えば、カズマさんこそ大活躍だったじゃないですか！　見事な指揮を取って、それでいて、ちょっと失敗はしましたが、結果としては大物のゴーレムを倒し、コロナタイトを鉄格子から取り出し、そして私に魔力を供給してくれて……」

全く悪気など無いウィズの言葉に、ダクネスは耐えられなくなったのか、肩を震わせ、顔を伏せた。

……。

「ウィズなんて、爆裂魔法を始め、俺の手を冷やしたり、挙句の果てには爆発しそうなコロナタイトをテレポート。ＭＶＰはウィズだろ」

その言葉に、とうとう小さく震えるだけになったダクネスに。

「……で、街を守るって駄々こねてた、今日のお前の活躍は？」

「こっ、こんなっ！　こんな新感覚はっ！　……わあああああーっ！！」

頬を真っ赤に染めながらもそのまま泣いて逃げたダクネスは、苛め過ぎたのか一日部屋から出て来てくれなかった。

6話（前書き）

うっかりエロ展開が欲しいとの要望があったのでエロ回を。
短めですがすいません。
苦手な方はご遠慮ください。

6話

迂闊だった。

仮にも女性と同じ屋根の下で暮らしているのだ。
こういった事態は、ちゃんと想定しておくべきだった。
漫画やラノベ、アニメでも、もうお約束の展開じゃないか。

俺はみるみる顔を赤くしていくダクネスと、脱衣場でずっと見詰め合っていた。
「きっ……！」

「きゃあああああああああああああー！」

俺とダクネスしかいない屋敷の中に、甲高い悲鳴が響き渡った。

◆◆◆

「それじゃあ、一週間。そこまで言ってくれるのなら、色々と家事を頼むな」
「……ん……。分かった……」

鎧は外し、むちっとした体のラインが出る、黒のタイトスカートに黒のシャツ。

そして黒タイツを着用したダクネスは、なんかそれはもうエロかった。
そのダクネスが、俺の傍に待機している。
そのまま俺はつい調子に乗り。
「そこは、かしこまりましたご主人様、だろう」
「……ん……くっ！！　か、かしこまりましたご主人様、私は卑しいメス豚です……！」
「そこまで言えとは言ってない」
プルプルと赤い顔で震え出したダクネスに待ったをかけた。
機動要塞デストロイヤー戦において、一番頑固なワガママ言ったのに何も出来なかったダクネスは、突然何を思ったのか、お詫びに一週間ほど、メイドとしてこの家の家事を全てやると言い出した。
仮にもお嬢様なので家事なんてやった事もなく、どうせロクな事にならないと今までは何もさせていなかったのだが……。
「では、何をしようか。正直家事なんてした事無いから、何から始めればいいのかさっぱり分からん。とりあえず、カズマのズボンの股間部分にお茶でもこぼして、それを慌てながら拭けばいいのか？」
「お前はお茶を入れるのは禁止な」
こいつの頭の中のメイドさんはどんな職業なのだろう。
「まああれだ。適当に掃除でもしててくれ。食器洗いはいいからな。割るだろうし。そんな非経済的なお約束はいらない」
「……む。……分かった……」
何だかちょっとガッカリした様子のダクネスが、トボトボと広間を出て行った。

アクアは山へ死馬狩りに。
めぐみんは川へ爆裂に。
なので、今日はダクネスと二人きりだ。

出かけた二人はお腹が空けば帰ってくるだろう。

それより、日頃迷惑かけられている分、今日はせいぜいダクネスをこき使ってやろう。

……と。

「きゃあああああっ！」

ワザとらしい悲鳴と共に、何かが盛大に割れる音。

そのまま壊れた何かを持ったダクネスが、こちらに向かって駆けてくる。

「申し訳ありませんご主人様！　ご主人様が大切にしていたツボを割ってしまいました！　このお仕置きはどんな事でも……っ！」

「俺はツボなんて大事にしてもいないしそんな物持ってもいなかったが、本当に大事な物壊したら、ギルド内にラティーナを浸透させる仕置きするからな」

「！？」

高そうな黒シャツやスカートが汚れるのも気にせずに、せっせと雑巾掛けをしたり窓の枠を拭いたりと、かいがいしく家事をこなしていくダクネス。

そんなダクネスの家事の出来具合をチェックする。

なぜそんな事をするのかと言えば、暇だからだ。

先日あれだけの激戦を行なった後なので、流石にしばらくはせこせことジッポ作ったりする気にはなれない。

更には現在ギルドから、機動要塞の賞金額の問い合わせ等が行なわれている。

国を滅ぼし、世界中を荒らしまわった賞金首、機動要塞デストロイヤー。

あの機動兵器は、色んな所から賞金が掛かっていたらしい。

その総額は、数十億は下らないのではと言われた。

参加した冒険者全員で割っても、相当な額が貰えるのではと期待している。

俺はダクネスが磨いていった窓枠の縁を指先でなぞり、それを見る。

だが、期待していた様に指先に埃が付く事は無く、綺麗に掃除されていた。

「……くっ、器用度が低いくせに、こんな時だけちゃんと抜かりなく掃除しやがって……！　いちゃもん付けて、お仕置きと称してラティーナちゃんの名をギルドに定着させてやろうと思ったのに」

「ふふ……。そう易々とお仕置きなど受けんさ……。相変わらず私の本当に嫌がる事を的確に思い付く奴め……。後、ちゃん付けだけは本当にやめてくれ。お願いします」

頬を赤くするダクネスの、掃除においては及第点をあげざるを得なかった。

だが、その後も……。

「……くっ、塩と砂糖を間違えるとか、何かやらかすと思ったのに……！」

「ちゃんと書いてある字を読めば、普通は間違えたりしないだろう。それに冒険者稼業をやっていれば、肉を焼くぐらいは出来る」

俺はダクネスに作ってもらった昼食を食べ、思わず唸る。

ご飯と生野菜と焼肉だが、シンプルで失敗しない料理を選ぶ辺り、本気でお仕置きされたくないのがうかがえた。

ダクネスが、勝ったと言わんばかりの表情で。

「ふ……どうだ？　味は」

「普通」

「！？」

トイレ掃除。

それは、普段はアクアの担当なのだが。

「……その、トイレの掃除は必要なのかこれは」

「……い、いらないかな」

女神の浄化作用のおかげだろうか。

適当に掃除しているクセに、アクアが管理しているトイレは、家の中のあらゆる場所の中で、一番ピカピカに光り輝いている。

仕方が無いので次に行こう。

「本当に？　これは本当に、一番大切なメイドの仕事なのか！？　私が物を知らないと適当に言っていないか？　少なくとも、我が家で雇っていたメイドには、父はこんな事はさせていなかったが！」
「本当だ！　俺の国では、メイドって言ったらコレをやってもらわないとメイドじゃない！」

　俺は何度も玄関から出たり入ったりをしながら、その度にお帰りなさいませご主人様を言ってもらっていた。

「ほらっ、笑顔が硬い！　お前は何でそんなに無愛想なんだ！　怖い！　もっとにこっとしながらお帰りなさい！」
「お、お帰りなさいませご主人様！」
「違う！　手はこう！　足はこう！　もっと前屈みに、色々と強調して！　さん、はい！」
「お帰りなさいませご主人様！　いたぶられるのは好きですが、あまり調子に乗りますと、私の取り得の一つの握力が……！」
「あああああ、割れる、頭が割れる！　なんか出る！　ごめんなさい！！」

　コメカミにアイアンクローを食らった俺は悲鳴を上げながら謝った。

　エロい格好したダクネスと二人きりと言うシチュエーションで、色々と昂ぶり過ぎた。
　これはいけないとばかりに、俺は慌てて街に繰り出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺が頭を冷やして帰宅すると、屋敷の中には誰もいない。
アクアもめぐみんも、まだ帰ってこない様だ。
ダクネスはどうしたのかと屋敷内をウロウロするも、どこにも姿は見られなかった。

ふむ……。
誰もいないというのなら、今の内に風呂でも入ろう。
連中がいると、おちおち風呂にも入っていられない。
特にアクアの後に風呂に入ると、入れておいた入浴剤が浄化され、ただの綺麗なお湯に変わってしまう。

クリエイトウォーターとティンダーと薪を使って湯を沸かし、のんびりと風呂に浸かる。

思えば、最近は借金に追われ、こうしてのんびりと風呂に浸かる事もあまりなかった気がする。
勿論、まだ借金が無くなると決まった訳では無いが、それでも今回のデストロイヤー戦の報酬には、かなり期待していた。
肩まで温かい湯に浸かり手足を伸ばす。
思わず、ほうっとため息が出た。

一体どれほど浸かったのか。
俺はのぼせる前に風呂から出る。

そして、そのまま上機嫌で風呂場のドアを開けて脱衣所に……
……、
居るダクネスとバッチリと目が合った。

しばしそのまま呆然としていたダクネスが、やがてみるみる内に赤くなる。
そして……！
「きっ……！」

「きゃあああああああああああー！」
屋敷に甲高い悲鳴が上がった。
白い肌が熱で朱に染まり。
甲高い悲鳴の振動により。
その悲鳴の主の、白い尻がふるふる揺れた。

そう、俺の尻が。
悲鳴を上げたの、俺。
きゃーって言ったの、俺。
そう、俺である。

悲鳴を上げそうになったダクネスに先んじて叫んでみたが、俺に叫ばれたダクネスは逆にわたわたと慌て出した。

「お、おいっ！　そこは私が悲鳴を上げる所だろう!?　こっ、こらっ、やめっ！　私は風呂場の掃除に来ただけだ！　誰か来たら私が誤解されるじゃないか！」

耳まで赤くし、そして横に顔を背けたダクネスに、俺は下半身にタオルを巻きながら、

「誤解も何も、男女で同じ屋根の下に住んでるんだから気を付けるべき。そろそろお前のあだ名を痴女ネスにするぞ」

俺の言葉に泣きそうな表情を浮かべるも、タオルを巻いた俺に、ダクネスは少し安心して目をやった。

……そして、その視線が俺のある場所に止まり、急に曇る。

それは、俺の右腕。

コロナタイトを素手で掴み、アクアが癒したものの、引きつった火傷の痕の付いた部分だった。

「……それは、先日の戦いで付いた傷か。……すまなかった、本来はクルセイダーである私が仲間の全ての傷を背負うべき所なのに……」

沈んだ表情のダクネスに。

「これか？　まあ、うっかりスティールした自分が悪かったんだよ。こんな傷、男にとっちゃ勲章だ」

その何気ない俺の言葉に、ダクネスが更に表情を暗くした。

「……勲章、か……。確かに、男にとってはそうなのだろう。だが、女の私の体にも、沢山の醜い傷痕が残っている。……お前は、その

醜い傷痕を見ても勲章と言ってくれるのか……？」
自嘲気味に言うダクネスに、俺は……。
「お前の体を醜いなんて言う奴がいたら、俺がぶっ飛ばしてやる。お前の体はとてもエロく……そして、綺麗だ……。……そして、とてもエロい……」
その言葉にダクネスが、潤んだ艶っぽい瞳で見つめてくる。
そして自分の体の傷痕を、見てもらおうとでもするかの様に、着ている服に手を触れた。
ダクネスはそのまま口を開こうとしたが、その何かを言い出せないでいた。
目を潤ませながらも、不安げなその表情。
ここは俺から言ってやるべきだ。
そう、俺から……。
ダクネスの両肩を掴んだ俺は……！
「ヴォーレン　ヴィア　フィッケン？　（なあ……スケベしようや……？）」

「ナテュアリッヒ！　（バッチこーい！）」

俺はアンケート用紙を手渡した。

「この設定でお願いします」

「承りました！　ではお会計、三時間コース、５０００エリスになります。ありがとうございましたー！」

俺は屋敷には帰らず、そのまま馬小屋に駆け出した。

6話（後書き）

分かりにくいですが屋敷から出た後がアンケート用紙の中身です。
ドイツ語適当。

次回はちゃんとストーリー進めて賞金首の報酬回。ちょっと主人公が報われます。

今回も謝らない

7話

自分の耳を疑った。

「すいません、もう一度お願いします」

誰かの放ったその問い掛けに、それは俺だけではなかったらしいと知る。

ギルド内にいる他の冒険者達も、シンと静まり返っている。

「特別指定賞金首、機動要塞デストロイヤー。討伐賞金は三十億エリスです。今回は全冒険者が大なり小なり活躍しましたので、報酬は全員均等にさせて頂きます。クエスト参加者は百三十四名。ギルドからも報酬を少し足させて貰い、キリのいい所で、参加者全員に、お一人二千三百万エリスの支給となります」

誰かがゴクリと唾を飲む。

そして……。

「「「うおおおおおおおお！」」」

ギルド内に歓声が上がる。

冒険者達が、嬉々として職員の所へ、報酬を受け取りに行列を作った。

「二千三百万……。二千三百万……！」

ヤバイ、テンション上がってきた。

一日で二千三百万。

これはジッポ作る気が失せてしまう。

と……。

「カズマ、これを。借金の足しにして下さい」
めぐみんが、職員から受け取ってきた大量の報酬を、そのまま俺に差し出してきた。
「め、めぐみん……。いいのか……？」
……ちょっと泣きそうになる。

俺はめぐみんの事を誤解していた。
爆裂が好きで好きで、脳の一部が爆裂していて、意外と現実主義で、ピンチになると真っ先に逃走しそうな奴だと思っていたのだが……。

と、更にはダクネスが、持っていた報酬を差し出して。
「カズマ。私の分も持っていけ。ここ最近の私への所業を見て、お前は借金が減った所でその下衆な魅力は減らないと分かった。借金返してスッキリしてこい」
「い、いいのかよダクネスさん……！　褒められているのかは分からんが、ダ、ダンケッ！」
「仲間だろう、気にするな。仲間なら、苦労も喜びも分かち合うものだろう。……所でなぜさん付け？　……ダンケとはなんだ？」
「お礼の言葉だ、気にしなくていい。さん付けなのは、これだけの事をしてくれるお前に夢とは言え、ついお世話になった自分が虫けらかゴミ屑に思えただけだ」
俺は、めぐみんとダクネスからの金をありがたく受け取ると、自分の報酬も受け取りに。

借金が八千万。
そしてここに、自分の分の報酬も合わせ、六千九百万エリスある。
俺は期待を込めて、アクアの方を……！

「二千三百万！　二千三百万！　どうしよう、どうしようカズマ！　何買おうかしらね！　……って言っても、もうこの大金の使い道は決めてあるのでした！」

大量のエリス札の札束を抱え、空気を読まない安定のアクアが、嬉々として言ってくる。

アクアは抱えた札束をテーブルに置くと、そのままギルドに併設された酒場の店員に、飲み物を頼んでいた。

俺はそんなアクアに対し……。

「なあ、アクア」

「……？　なーに？」

アクアの元に飲み物が運ばれ、それにはガラス製の小さなストローが付いていた。

ストローの先と口の部分には、埃が入らない様にと、小さな綺麗な布の切れ端が詰められている。

ストローを入れておく紙袋なんてないから、衛生上こうしているのだろう。

アクアは俺に首を傾げながら、運ばれてきた飲み物を飲もうと、ストローの片方から切れ端を取り、そちら側を口に咥えた。

俺はアクアに片手を差し出すと。

「悪いんだが、お前の報酬分けてくれ。借金全部返してくるから」

……。

しばし無言になったアクアが、咥えたストローの反対側を俺に向け。

「……プッ」

そのまま吹き矢の要領で、俺の顔にストローの反対側に詰まっていた布の切れ端を、プッと吹き飛ばしてぶつけてきた。

飛ばした布の切れ端が、俺の頬にぺちんと当たり床に落ちる。

そのまま何も言わず、アクアは警戒する様に俺から視線を離さず、ストローで飲み物を吸いだした。

……。

「こんのアマー！　この二人は借金返して来いって言って、報酬全額渡してくれたんだぞ！　せめて、お前の作った借金分だけでもよこせコラッ！」

「い、嫌よぉっ！　このお金はね、ちゃんと使い道が決まっているの！　この街の冒険者達が賞金首を退治した事は、既に近隣に知れ渡っているわ！　それで、賞金で潤った冒険者目当てに、珍しい物持った商人達が一杯来てるの！　その中でも、凄いの見付けたのよ！　なんと、ドラゴンの卵売ってる店があったのよ！」

俺に報酬を取られまいと、テーブルに置いた札束の上に覆いかぶさる様にして防御しながら、アクアはドラゴンの卵とやらの説明をしてくる。

「いい？　カズマはここの常識を知らないアンポンタンだから教えてあげるけども、ドラゴンの卵ってのはね、凄く高いの。普通なら億は下らない代物なのよ。それが売りに出されているのよ？　ドラゴンよドラゴン。ワクワクしない？」

……正直、ワクワクしないかと言われれば嘘にはなるが。

俺は少しだけ興味を惹かれて聞いてみた。

「……その卵、幾らするんだ？」

その言葉にアクアは嬉々として、

「今回のクエストで冒険者達が受け取った報酬、全額と引き換えで良いって言ってるのよ！　何でそんな値段にするのかって聞いたら、前途ある冒険者達にドラゴンを育ててもらって、来るべき魔王との戦いに備えて欲しいから、そんな破格で売ってるんだって！」

その言葉に、俺はアクアに掴みかかった。

「典型的な詐欺じゃねーか！　いいからよこせ！　お前に持たせておくと、どうせロクな使い方しねーんだ！　俺が有意義に使ってやるから！」

「いやあーっ！　もう買う予定の卵も決めてるし、名前だって付けてるの！　お願いよぉっ！」

俺は泣き喚いて激しく抵抗するアクアから報酬を取り上げる。

「こ、こらっ、ベルトに手を……！　どうしてお前らは、人を止める時にはズボン下ろそうとするんだっ！　ドラゴンなら俺が捕まえてきてやるから、それで我慢しろ！」

「……本当？　水の女神的に、ブルードラゴンとかがいいんだけれど……」

アクアに、ブルーでも何でも捕って来てやると言うと、ようやく納得して放してくれた。

総額九千二百万。

借金を返した後は、残り千二百万は一人三百万ずつ分配すると言う事に。

……ドラゴンか。

確か、屋敷の窓に何匹かヤモリが張り付いていたのを見た事があ

る。
アレを何匹か捕まえてやろう。

「でけえな……。ダクネスの家より大きいんじゃないのか？　ダクネスの家はこの国でも大きな貴族だって言ってなかったか？」

この地方を治める領主の館。
今俺達は借金を返す為、街の中央の領主邸へとやって来ていた。
そこは贅の限りを尽くした屋敷で、門の前にはキンピカな鎧を着た門番達が、屋敷前でウロウロする俺達を気にしていた。

「ダスティネス家は元々、贅沢は極力避け、慎ましい暮らしをしている。父も、今では、領地の殆どを国に返還し、領主の監視をしつつ、相談にも乗りながら、のんびり暮らしている。父がカズマの借金をどうにかしなかったのは、領主に借りを作りたくない事の他にも、単にそれほど財を成していないのもあったのだ」

ほほー。
「お前の家の父ちゃん良い貴族だな。娘をこんな風に育てておいて一体どういうつもりだって、いつか説教しようと思ってたが……。保留にしとこう」
「や、止めてくれ、ずっと保留にしておいてくれ……。いいか皆。くれぐれも、礼儀正しく頼む。……行くぞ」
ダクネスはそう言うと、そのまま門番のもとへと歩いて行った。
ダクネスは鎧は着ておらず、いつも好んで着ている、体の線の出

やすい、黒のシャツにタイトスカートという普段着だ。
その後を俺達も付いて行くと、案の定門番に止められた。

「ここはこの地の領主、アルダープ様の屋敷だ。名前と用件を」

領主アルダープの屋敷内。
屋敷の中を、執事の爺さんが俺達の案内をしていた。
その執事の後を、ダクネスを先頭に付いて行くと、その道すがら、屋敷内には高級そうな調度品の数々が目に付いた。
高級そうな絵画や壺。
裸婦像に、装飾品など……。
それらの隣を通り過ぎる度に、理不尽な借金背負わされた腹いせにスティールでパクッてやろうかと考えてしまう。

「こちらです、領主様がお待ちです。……どうか、くれぐれもご無礼の無い様に」

執事の言葉に、俺達は案内された部屋に入る。

「おおっ！　これはこれはダスティネス家の！　相変わらずお美しい！　いや、実に……！」

隣に二人の護衛の男を連れ、出迎えてきたのは……。
ダクネスが豚領主呼ばわりするのも頷ける、でっぷりと太り腹の出た、腕や顔、服から出ている部分、全てが毛むくじゃらの精力絶倫そうな大柄の男だった。

領主は、ダクネスを見ると立ち上がり、挨拶もそこそこに、遠慮なく普段着のダクネスの身体に舐め回す様な熱い視線を送っていた。

エロネスの身体がエロいのは認めるし、先日色々とお世話になった俺がとても言える事では無いのだが、こうも不躾に人の身体をジロジロ見るのも如何なものか。

そんな領主の行動に、女三人がコソコソと話を始めた。

「ねえ、あの熊と豚を足した様なおじさん、ちょっと怖いんですけど。屋敷で薄着でウロウロするダクネスを見る、カズマの視線並にいやらしいんですけど」

「全くです、普段ダクネスを見る、カズマの絡みつく様な視線並ですよアレは」

「だろう？　以前言っただろう、カズマ並だと。……どうしたカズマ、領主の前でそっぽ向いて座り込むのは失礼だぞ」

俺だって傷付く時もある。

そんな俺達のコソコソしたやり取りを見て、領主は今更ながらに俺達に気付いた様だ。

その視線はまず俺に向けられ、一瞥すると、なぜかジッと冷たい目で見られた後。

そのまま興味も無さそうに、次はアクアへと。

そして、そのまま視線が動かなくなる。

アクアが、小さくひぃと悲鳴を上げ、俺の後ろに身を隠した。

「……ほう。……ほう！　これはこれは、流石はダスティネス様の

お仲間、これはお美しい！　例えるならば……、そう！　まるで……女神の様な美しさだ！」
「まるでじゃなくて女神なんですけど！　女神なんですけど！」
アクアが、俺の背中から頭だけを覗かせて抗議する。
「ハッハッ、お美しいだけでなく、冗談までお上手とは！」
「あんた天罰食らわせるからね！」
領主に向かってアクアが叫ぶが、領主はそれすらも冗談だと受け取った様だ。
そして領主は、そのまま視線をめぐみんの方に向け……、
「ほう、これはこれは、」
何かを言おうとした時だった。
領主の隣にいた護衛の一人が、何事かを耳打ちする。
遠くてあまり正確には聞き取れないが……、
「……様……お言葉には……気を付けを……。あれが頭の……」
「……あれが……！　危険で……のおかしな……！」
ぼそぼそと話していた領主の顔色が、サッと変わる。
「……そ、その……。おお、そちらの男が例の小器用な冒険者か。聞けば色々と機転が利き、ベルディア討伐と今回のデストロイヤー討伐で、指揮を執ったそうだな」
「おい、私から目を逸らしたのはどう言う了見かを聞こうじゃないか。返答によっては、この私が、今そこの男が囁いた通りの人間かどうかを見せ付ける事になる」
「い、いやその！　おお、その……。あなたもとても、清楚な感じで、お美しく……」

「ほう、それからそれから？」
しどろもどろになる領主とめぐみんがやり合っている中、俺はダクネスにこっそりと。
「おい、あれがお前を以前から狙ってて、俺に理不尽な借金背負わせた奴か。アイツに何か仕返ししたいんだが。……ダメか？」
「ダメだ。大人しくしておけ。あれで、アイツは頭は切れるし陰湿だ。余計な恨みは買う事はない」
クソ、ダクネスの手前もある事だ、今日は借金返して引き下がるか。
と、領主がめぐみんに絡まれながら、助けを求める様に俺を見てきた。
「おい、今回の功労者への褒め言葉が少ないのでは？　今から我が爆裂魔法の凄さを見せるので、ちょっとここの庭を貸して欲しい」
「いや、その！　素晴らしさは十分に分かったので！」
……このまましばらく放って置きたい。

◆◆◆

「……うむ、確かに。しっかりと八千万エリス頂戴した。……いや、悪く思わんでくれ、あの城はそろそろ補修が必要だなと考えていた所を、ベルディアに乗っ取られてな。それを取り返す手配も既に完了し、さて城を取り返すかとなった時にお主が、な……？　本当はベルディアを討ち取った功労者に借金など背負わせたくはなかった

のだが……。当家は節制を心がけているもので、あまり余裕が無くてな？」

俺が渡した金を数え、表面上は申し訳なさそうな顔をするアルダープ。

余裕が無いなどよく言うものだ。

この屋敷の中を見れば、金が有り余っているのが見て取れる。

思わずイラッとするが、俺は執事が入れてくれたお茶を飲みながら、ついつい表情に出てしまいそうになるのを何とか押さえた。

領主アルダープは、そんな俺の感情など見透かしているかの様に薄く笑うと。

「どうか、心置きなく好きなだけゆっくりしていってくれ。そして、君達の活躍の話でも聞かせてくれないか。ああ、勿論無理にとは言わないが……」

俺達が、こんな屋敷になど長居したくないという事もお見通しなのだろう。

そう言って、アルダープは俺に勝ち誇った様な、見下した様な視線を送った。

五時間後。

「……と言う訳なのです。つまり、我が爆裂魔法の威力は……」
「ねー、もっとお茶菓子持ってきてー！　あと、一番高い紅茶を出してー！　安物だって分かるんだからね？　水の女神舐めるんじゃないわよ？」
「執事さん執事さん、俺、晩御飯は高級な肉がいい。後、こいつらは帰らせるけど俺は何週間か泊まっていくから、ここで一番良い部屋を……」

恥ずかしそうに、ソファーで膝の上に握った拳を置いて、肩を小さくさせ俯くダクネスに、アルダープが疲れた顔で。

「その……ダスティネス様、もう夜も遅い事ですし……」
「はい、すぐに全員連れて帰りますので……！」

アクアが駄々をこね、お土産もゲットして帰りました。

8話

借金が無くなりました。

俺の手元には現在、借金を返した後、四人で分けたデストロイヤーの報酬の残りが三百万。

更には、借金を返す為に今までチマチマと貯め込んでいた金が五百万程。

計八百万。

一般家庭で育った元ニートの俺には、それはもう大金である。

既に屋敷もあるし一通りの家具もある。

俺は嬉しさのあまり震えていた。

一体何年ニート生活が出来るのだろう！

俺は特権階級である上級職、ニートぐらいにしか許されない、二度寝をするべく、布団の中でモゾモゾと……。

「カズマー！　起きて起きて！　ほら、起きてよ！　もう何時だと思ってるの？　早く着替えて外に出るわよ！」

騒々しくバンとドアを開け、煩いのが部屋に乱入してきた。

俺は布団の中から頭だけを出す。

「おい、こんな早朝から何の騒ぎだ」

「もうお昼前ですよカズマさん。ねえ、街はお祭り騒ぎよ！　賞金入った冒険者達の懐具合を当てにして、色んな商人が大挙して来て

るわ！　その大挙して押し寄せた連中相手の露店までも開いてるし！　ほら、起きて起きて！」

俺はその言葉に、ごろんと反対側に寝返りをうった。

「春とは言え、外はまだちょっと寒い。もっと暖かい季節になってきたら起こしてくれ。それまで俺は眠るとする」

「もうカエルですら起きてる季節なんですけど。これだからクソニートは、生活に余裕が出来たと思ったらすぐこれよ。ダクネスとめぐみんの二人は、カズマがいつまでも起きてこないから先に行ったわよ。ほら、起きて起きて」

……へえ。

俺は再びアクアのいる側に寝返りをうつと。

「……なんだ、お前この時間まで、わざわざ待っててくれたのか？」

「ううん、私も外が寒いから、今まで日向ぼっこしながら寝てました」

「……一人で行って来い」

アクアが文句言いながら出て行ってから、小一時間。

……眠れない。

クソ、あいつの所為ですっかり目が覚めてしまった。

今の時刻は昼を回った時間帯。

まだ起き出すには早い時間なのだが……。

ベッドから起き出し、窓から外を見てみると、子供達や近所の人が楽しげにどこかへ駆けて行く姿が見えた。

……ちょ、ちょっと俺も見に行こうかな。
顔を洗い、手早く身支度を済ませると、俺は街へと繰り出した。

街の中は、確かに言われた通りのお祭り騒ぎだ。

以前の宝島騒動を思い出すが、レア鉱石を買い付けに来る商人はいない為か、今回の規模はあの時よりは小さ目だ。
だが、懐の潤っている冒険者を狙った商売人達が、実に様々な商売を行なっていた。
三十億の褒賞がこの街の冒険者の懐に流れ込んだのだ。
元々、刹那的に生きる冒険者なんて連中は、金使いが荒い。
それを期待して商売人が来るのも当たり前と言えば当たり前か。

俺の様に、金が貯まったら屋敷を買って拠点を作るなんて連中は極稀だ。
きっと、皆パーッと使ってしまうんだろうなぁ……。

普段見ない様な食べ物を扱っている露天商。
他にも、フードを被った怪しげな店主が、魔法の道具を売っている。
何気なくその妖しげな魔法道具の露天商を覗いてみると、そこにあるのは何かの石、小さな卵、更に目を引くのは、何かが書かれた小さなポーション瓶。

『スキルポイントアップポーション』

……。おいマジか。

「おっちゃんコレ幾ら？　本物？　スキルポイントって、何ポイント上昇すんの？」

俺はそのポーション瓶を指差しながら、妖しげな店主に聞くと……。

「それは激レア品で、一本１０００万。飲んでみないと本物かは確認出来ないが、スキルポイントが１ポイント上がるポーションだよ」

高っ！

いや、しょうがないのか？

安けりゃ皆買うし、国が大量に買って自国の軍隊の兵士にでも使えば、ぶっちゃけ金さえあれば幾らでも強くなれる。

確か、めぐみんの話ではポイントを使ってスキルを覚えるだけじゃなく、ポイントでスキルレベルを上げる事も出来るとか言っていた。

こんな物が安値でホイホイ買えるなら、スキルレベル１００の、極悪なファイアーボールを撃つ魔法使いとかが量産できる。

俺がこれを大量に飲めれば、冒険者の特性を生かせるんだが……。

そう上手い事いかないかと、他の商品を……。

「……あれ？　カズマさんじゃないですか」

何か掘り出し物は無いかと、屈み込んで商品を眺めていた俺に声を掛けてきたのは、何かの包みを大事そうに抱えたウィズだった。

「おっとウィズじゃないか。随分と上機嫌だな。何か良い事でもあったのか？」

俺は、にこにこと機嫌良さそうに話し掛けて来たウィズに言った。

ウィズは、大事そうに抱えた包みを俺に見せつけながら、

「実は、先日頂いたデストロイヤーの報酬で、新しい商品の仕入れをしまして！　最高純度のマナタイト結晶が安く売られていたので、仕入れてしまいました！　なんと、最高純度の物が一つ一千万エリスで売ってまして！　思わず二つ、購入してしまいました。これ程の物なら、一つ千五百万で……、いえ、もっと高い値段を付けてもボッタクリにはならないはずです！　うん、これだけの良い品なら、きっとお客さんも喜んでくれますよ！」

「そ、そうか……。良かったな……」

本人が言うならきっとお得な仕入れだったのだろう。

でも……。きっとそれ、低レベルの魔法使いしかいないこの街じゃ、誰も買う奴いないと思う……。

仕入れる前なら止められもするが、もう報酬殆ど使っちゃったかー……。

「では、私はこれで！　きっと他にも掘り出し物がある筈なので、もっと見てきます」

「あ、ああ……。その、頑張ってな……」

俺はウィズに別れを告げると、そのまま俺も露店を後にする。

ウィズが救われる日は無いのだろうか。

多分しばらくすると、また貧乏に涙するウィズの姿が……。

と、俺は見覚えのある少女が一人で歩いているのを見つけた。

その子は一人とぼとぼと歩き、物欲しそうに露店の食べ物を眺めている。

やがて串焼きの露店の周りをウロウロすると、しばらくジッと露店の様子を覗っていた。

しばらくすると、その露天に客が来て、何か談笑の後に串焼きを

三本ほど買っていく。
それを見て、その子は意を決した様に露店に行き、前の客と同じ様に、串焼きを三本購入。

どうも露店で物を買うのは初めてな様で、どう注文していいのかが分からなかったらしい。

俺は声を掛けようか迷ったが、幸せそうに串焼きを頬張るその姿を見て、そっとしておく事にした。

「おっ、なんだよ、カズマじゃないか」
人混みを避けながら、街をプラプラ歩く俺に声を掛けてきたのはキースだった。
キースは、その手に普段は飲まない様な高そうな酒の瓶を抱えている。
「いよう、今日はダストと一緒じゃないのか。……えっと……。ダストの奴は、元気にしてるか？」
俺はキースに、ちょっと気になっていた事を尋ねる。

するとキースは肩を竦ませて……、
「いや、ダストの奴がなんか知らんが引き篭もってて大変なんだよ。ドアの外から、どうしたんだって聞いても返事もしねえ。あれだ、きっとあいつ、デストロイヤー戦に参加できなくて賞金貰い損ねたからスネてんだぜ。で、今からこの酒差し入れにいってやろうかと思ってな」
「……そ、そうか……。あ、それならちょっと待ってくれ」

俺はキースに、近くにあった露天でつまみになりそうな物を買い、それを渡した。
「これもついでに差し入れてやってくれないか」
「おっ、何だよカズマ、優しいな。分かった、渡しとくぜ。それじゃ、これが温かいウチに行ってくるわ！」
キースはそう言って、包みと酒を持ち、手を振りながら去って行った。

……しばらくダストの奴はそっとしておいてやろう。

と、俺は再び、先ほどの見覚えのある少女が、今度は射的の露店の前でウロウロしているのを見つけてしまった。

射的と言っても、日本の射的とはちょっと違う。
矢尻を丸くした本物の弓矢を使った射的だった。

その射的を楽しんでいる客はカップル連れが多く、男性が景品を取り、取った景品を恋人にあげている。
なるほど、祭りと言えばカップル連れで来る者が多い。
この露店もデート中の男女を狙った店なのだろう。
置いてある景品を見れば、一目瞭然だった。

その子は一人で射的をするのが恥ずかしいのか、カップル客達がいなくなるのをじっと待ち、客が一人もいなくなった所を見計らい、ようやく射的に挑戦する。
だが弓の扱いには慣れてないのか、狙っている景品には何度やっても当たらない。
何度も金を払い挑戦するが、やがて一組のカップル客が現れて射的を始めると、その子は店主に弓を返し、恥ずかしげに立ち去ろうとした。

ううむ。

……どちらかと言うと、俺達と仲が良いって間柄じゃあないんだが……。

俺はその子に近付くと、よう、と一言声を掛け。

「……？　あっ！　あの、お久しぶりですカズマさん……！」

挨拶してくるゆんゆんには目を向けず、そのまま射的の店主に金を渡し……。

「狙撃！」

俺は狙撃スキルを使い、ゆんゆんが狙っていた景品を一撃で仕留めた。

そのまま、狙撃されてころころと転がってきた景品の、何だか冬将軍みたいなサムライみたいなぬいぐるみを、

「ほら、これ欲しかったんだろ」

そのままゆんゆんに、格好良く手渡した。

俺がゆんゆんの立場なら、惚れてしまってもおかしくないのではなかろうか。

ゆんゆんは、頬をちょっと赤らめて、一瞬、貰ってもいいのだろうかと迷った後に。

ぱあっと笑顔を見せ、とても嬉しそうに。

「あ……ありがとうございま……！」

「ダメですよお客さん、アーチャーと狙撃スキル持ちはお断りって、ちゃんと看板に書いてあるじゃないですかー。景品はあげますが、

料金は倍払ってくださいよ……？」

店主に、謝りながら追加の金を渡す俺は、あんまり格好良くは無かった。

「そ、それじゃ。俺はウチのパーティの連中探してくる。またな」

俺は恥ずかしさもあり、ゆんゆんに片手を上げて立ち去ろうと……、

「えっ？　あっ……。あの……」

ゆんゆんは、その俺をまるで引き止めるかの様に寂しげに片手を出しかけ……。

そして、そのまま手を引っ込めると、片手で持っていたぬいぐるみを両手で抱き抱え直し。

「あ、あの、これ、冬将軍ありがとうございました！」

あのぬいぐるみってやっぱ冬将軍だったのか。

一度殺されたトラウマから、本物の矢で撃ち抜きたい衝動に駆られるが、まあ喜んでいるみたいだしヨシとするか。

俺はゆんゆんと別れ、再び街の散策に。

と言うか、ウチの連中は目立つから、すぐ会えると思っていたの

だが……。

「さあ、次の挑戦者はー！　次の挑戦者はいませんかー？」

その声に振り向くと、そこには人だかりが出来ていた。

興味を惹かれてそちらに行くと、人だかりにいるのは、何だか屈強な連中ばかり。

見ると、そこには……。

「おし！　次は、俺が行くぜ！」

言いながら前に出たのは、ガチムチの冒険者風の大男。

普段着姿なのでクラスまでは分からないが、その体格から前衛職なのは間違いない。

男は、露天商が用意したハンマーを持つと……。

「だあああああああああ！」

気合とともに、そのハンマーを振り下ろした。

振り下ろされた先には何かの石。

ハンマーが石に叩きつけられ、小さな火花が飛び散った。

そして、ハンマーを叩きつけられたその石は……。

「クソッ、これでも駄目か……」

悔しそうに呟く男の声の通り。

そこには無傷の石があった。

それを見て、露天商が声を張り上げる。

「今回のお兄さんも無理でした！　さあ、次の賞金は十二万五千エリス！　参加費は一万エリスだよ！　お客さん一人が失敗する毎に、五千エリスが賞金に上乗せされます！　腕力自慢はいませんか？

魔法を使っても結構ですよ！　これが破壊できる人は、一流冒険者を名乗っても良いぐらいの硬度を持つ、アダマンタイト！　さあ、御自分の腕を試してみたいと思いませんか！？」

なるほどなー。

実に色んな商売があるもんだ。

だが、俺のスキルや腕力じゃ、これはちょっとどうにもならない。

……ふと、ある場所を見た俺は、本日三回目になるその姿に。

「……また会ったなゆんゆん」

相変わらず一人で、冒険者がハンマーを振るう様子を、拳を握ってハラハラと見ていたゆんゆんに、今度は素直に声を掛けた。

一応めぐみんの自称ライバルらしいから俺も敵視されているかなと思ったが、先ほどの様子だとそれほど嫌われてもいなさそうだし。

ゆんゆんは俺を見て、

「あっ！　さっきはどうもですカズマさん！　見てください、アレ！　アダマンタイト砕きですって！」

言いながら、目を輝かせてその露天の説明をする。

その姿はごく普通の女の子。

とてもたった一人で冒険者稼業を行なっている子には見えなかった。

思えばこの子は、ギルドで見かける時もデストロイヤー戦の時も、常に一人でいるのだが、何か理由でもあるのだろうか。

聞きたいとこだが、なんだか聞いてはいけない気もする。

「ゆんゆんはアレだろ？　上級属性魔法とか使えるんだろ？　アレに挑戦してみないのか？　魔法使っても良いらしいぞ」

俺の言葉にゆんゆんは、
「私では無理ですよ、アダマンタイトなんて……。それこそ高破壊力を持つ、爆発系の魔法でも使わないと……。爆裂魔法なんて無茶は言いませんが、爆発魔法か、せめて炸裂魔法ぐらいは使わないと……」
そう言って、苦笑する。

俺達がそんな話をしている間にも、更なる挑戦者が現れては散っていった。
いつの間にか賞金は二十万を越えている。
人だかりもドンドン増して、露店の店主が更に盛り上げようと声を張り。

「この街の冒険者には、アダマンタイトは荷が重かったでしょうか！　機動要塞デストロイヤーをも倒したと聞き、わざわざこの街にやって来たのですが？　さあ、このまま、誰にも破壊できないのでしょうか！　さあ、さあ、さあ……っ！　挑戦者はいないのかっ！？」

露天商の口上がいよいよ絶好調になる中、冒険者達が、互いに突つき合い、お前が行けよと促している。
露天商の作戦だとはみんな分かってはいるが、このまま誰も破壊できないと言うのも悔しいのだろう。
その場の冒険者達が顔を見合わせる中。

人混みから、スッと一人の少女が前に出た。
前髪を綺麗にぱっつんと切り揃え、長く綺麗な黒髪を背中に垂らし。
今日は、黒いワンピース姿のめぐみんは、そのまま堂々と胸を張り、キッパリと。

「真打登場」

どや顔で店主に告げためぐみんは、俺を含めたその場の冒険者達に、大慌てで取り押さえられた。

9話

「おい、まだ何もしていない女の子相手に、この仕打ちはあんまりと言えばあんまりじゃないか」

現在めぐみんは、詠唱を始めたらいつでも口を押さえられる様、俺は後ろから首を羽交い絞めに。

そして、それぞれの腕には屈強な冒険者が取り付き、それをしっかりと捕まえていた。

「おいおっちゃん、コイツに見つかった以上、その商売はもう止めとけ！　コイツは街で噂の爆裂狂だ。その商売は、コイツの琴線を刺激し過ぎる」

俺の言葉に引きつった青い顔で、慌てて店仕舞いを始める露店のおっちゃん。

それを見ためぐみんが、ジタバタともがき出した。

「ああっ！　破壊出来るのに！　我が爆裂魔法なら、間違いなく破壊出来るのに！」

「逃げろ！　早く、早く逃げろおっちゃん！」

「ひいいいいっ！」

店仕舞いを済ませ、慌てて駆け出す露店のおっちゃん。

それを、残念そうにめぐみんが見送っていた。

それを確認し、めぐみんが拘束を解かれ、自由になる。

人だかりが散っていく中めぐみんに、

「……全く、目を放すと何かやらかすのはアクアだけにしといてくれ。……ダクネスはどうした？　一緒じゃなかったのか」

「ダクネスは、我慢比べの露店を見つけて参加してます。結界で密

閉した空間をファイアー系の魔法で温めていく我慢比べですが、我慢出来た時間だけ賞金が貰える仕組みなので……、まあ最後まで残っているでしょう。アクアも見かけましたが、路上パフォーマンスやってお金を稼いでいた人の隣で無償で芸をやり、泣かせてましたよ。ダクネスと一緒に、後でそっちも回収して行きましょう」

き、気の毒に……。

でもまあ、せっかくの祭だ、毎回俺があいつらのお守りする必要も無い。

可哀想だが、露店の人と路上パフォーマーの人に押し付けておこう。

俺の袖をめぐみんがクイクイッと引いた。

「せっかくなので、一緒に街を回りましょうか。向こうにも今の露店と似たような商売してた人がいたので、店主の目の前をウロウロしてやろうかと」

「俺、お前の事はもっと常識ある普通の子だと今まで勘違いしてたよ」

言い合いながら、その場を立ち去ろうとする俺とめぐみんの後ろから、小さな声が。

「あ……」

見ると、寂しそうなゆんゆんがこちらを見ていた。

「……一緒に来るか？」

俺の言葉に一瞬嬉しそうな顔をするも、めぐみんを見て、ハッとした様に首を振る。

「わ、私はめぐみんに勝つ為にこの街へ来たのよ！　馴れ合いに来たんじゃないわ！　さっきの射的の事にはお礼は言います。どうもありがとうございました！　……でも、一緒には行かないわ！」

そう言って、ゆんゆんはあの忌々しい姿をしたぬいぐるみを胸に抱き、俺達から一歩離れた。
「だそうです。行きましょうカズマ。今しか食べられない物も多々あります。今日はモリモリ食べるのです」
「お、おう……」
俺達は、そのままこちらに背を向けたゆんゆんから離れ……。

「……はぁ……」
やがて、寂しそうな、深いため息を吐いて肩を落とし、とぼとぼと歩いていくゆんゆん。

そして寂しそうに、チラリと肩越しに後ろに視線をやるゆんゆんと。

……そのゆんゆんの数歩後ろを、そこの露店で買った、クレープみたいな物をもしゃもしゃ食べながら堂々と付いて行く俺達は、バッチリと目が合った。

「……え、えっと。何で、付いてくるの？」
「相変わらずぼっちなゆんゆんの、寂しそうな泣きっ顔を拝もうかと」

その言葉に、ゆんゆんがめぐみんへと掴み掛かってきた。

「ゆんゆんは、紅魔族でも自分の名を恥ずかしがる変わり者で通ってまして。学園の中では、大体一人でご飯食べてました。その寂しそうにご飯食べてるゆんゆんの前をこれ見よがしにウロウロしてやると、それはもう嬉しそうに私に何度も挑戦してきて……」

「待ちなさいよ！　そ、そこまで酷くは……、無かったと……、思……。ま、まあ、毎日勝負を挑んだ気はするけど、別にぼっちでは無かったわ。友達だっていたもの」

　俺達三人は、話しながら街の外れへと向かっていた。

　話の流れで、またこの二人が勝負する事になった為だ。

　ゆんゆんの言葉に、めぐみんがピタリと足を止めた。

「……今聞き捨てならない事が……。ゆんゆんに、友達……？」

「な、何でそんな反応なの！？　居るわよ、私にだって友達ぐらい！　毎月月末になると、ふにふらさんとか、どどんこさんとかが、私達友達よねって言って、私の奢りで一緒にご飯食べに行ったり……」

　オイ止めろ、それ以上は聞きたくない。

　……つまりあれか、この子は変人ばかりの紅魔の里で、唯一の常識人だった事から、まわりから浮いていたと。

　なんて不憫な……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……おい貴様、このどこからどう見ても善良な一市民である我輩が、何ゆえ不審者扱いをされねばならぬ。我輩が不審者だと言う証

拠はあるのか証拠は。この一市民の姿は仮の姿。相手を見て言葉を選ばないと、大変な目に遭う事請け合いである」

「今ご自分で、一市民の姿は仮の姿って言っちゃったじゃないですか。勘弁して下さいよ。まずはその仮面を取ってからにして下さい」

俺達三人が門の前に行くと、なんか居た。

服装はそこらの街の人の普段着だが、とても普通の街の住人とは見えない、鍛えられた長身の体。

……そして、どう見ても不審者にしか見えない、口元だけが開いた黒いフルフェイスの仮面をかぶる、守衛さんと口論している奴がそこに居た。

守衛さんは普段は二人居るものなのだが、今は一人しかいない。不審者が来たので、応援でも呼びに行っているのだろうか。

「……あの人、魔族ですね。間違いないです」

「えっ？」

めぐみんがさらりと言った。

それに俺は、思わずマヌケな声が出てしまう。

「ええ、しかもとびきりの。悪魔族……？　この魔力……。きっとよほどの大悪魔。階級は、公爵級相当かも」

「えっ」

ゆんゆんまでそんな事を言い出した。

俺は仮面の男に目をやるが……。

「何を言うか！　この肉体の方が魔力で作り出した偽者にして、こっちの仮面こそが我輩本体。その本体である所の仮面を外せとは何事か！　外した瞬間に仮面が風にでも飛ばされたら、途端に体が崩

れ土となる。やがてそこには、豊富な魔力を含む我が身体を糧にして、花は咲き乱れ蝶が舞い……」

「すいません、お願いですからもう帰ってもらえませんか？　魔族の方は、ここは本当に通せないんですよ……」

守衛さんも、もう魔族の方って言ってるじゃん。

バレバレじゃないか。

……いや、あの変なのが、本当にそんなに力の強い悪魔……？

と、守衛の一人が、誰かを連れてやって来た。

やはり応援を呼びに行っていたらしい。

それは……。

「……む？　佐藤和真！　そんな所で何を……。いや、今は君と話している場合じゃ無い」

街で一番の実力者、チート魔剣持ちのミツルギだった。

ミツルギは、門の所で守衛と揉めている魔族に向かって歩いて行く。

俺達三人が、その様子をちょっと離れて見守っていると……。

「そこの悪魔！　この街に一体何の用だ？」

問い掛けながら、ミツルギが魔剣の柄に手を掛けて、何時でも抜き放てる体勢に入る。

その魔族はミツルギを一瞥し、ほう、と小さく呟いた。

「……この我輩の変装を一目で見破るとは大した物だ。我が名はバニル。魔王軍幹部が一人、悪魔バニルである」

その悪魔は。
「何の用かと聞いたか。我輩は魔王の奴に、ベルディアを倒した冒険者達に挨拶して来いと言われてな」
ミツルギに向かってそう告げると、バニルは悪魔らしく、ニヤリと口元を歪め。
そして、俺とめぐみんは、その言葉を聞きUターンして帰る事にした。
こいつはベルディアにトドメを刺したアクアを探している。
もう嫌になるぐらいに俺達が関わっている。
これ以上変なのと関わり合いになるのは沢山だ。
と、帰ろうとした俺とめぐみんの手を、ゆんゆんが慌てて掴んだ。
「ちょ、ちょっと二人とも、どこ行く気!?　あの人の手助けしないと！」
マジ勘弁。
と言うか、俺と違いミツルギならチート持ちな訳だし。
何より、今俺は丸腰一般人です。
その、ミツルギが。
「……僕がベルディアを倒した。僕の名はミツルギキョウヤ。異世界から、この世界を救う為に神に選ばれ、この地へと降りた者だ」
そう言って、バニルに魔剣を突き付けた。

街から離れた平原で対峙する、バニルとミツルギの二人。
そして、俺達三人はその二人を遠く見守りながら、
「……あのミツルギって人、ベルディアを倒したアクアを庇ってあんな事言ったんですね。何だか凄くウザイ人だなって思ってましたが、私の中ではちょっとウザイ人ぐらいに昇格しました」
ウザイ事はウザイのか。
「ね、ねえ……、手助けしなくていいの？　あの人、一人で幹部相手に……」
ゆんゆんが腰のワンドをぎゅっと握り、助太刀しようかを決めかねていた。

しかし……。
「俺、今普段着で武器も無いしなあ。早く逃げたいんだが」
「同じく。杖が無いので魔法の威力が半減です。逃げましょう、早く逃げましょう」

「あ、あなた達って……！　いいわ、私は助太刀してくる！」
言って、ゆんゆんがワンドを握り、向かって行った。

と、言うか……。
「なあめぐみん、アイツ魔王の幹部を自称してたけどさ。そんな大物が、守衛さんに知られてない訳が無いんじゃないのか？　ほら、ベルディアが襲来して来た時は、あっという間に緊急の呼び出しがあっただろ。あのバニルっての、何か無害そうなんだが本当に悪魔なのか？　随分と守衛さんが余裕そうなんだが」
俺はめぐみんに言いながら、ミツルギと対峙しながら変な事をペ

ラペラ喋っているバニルへと目をやった。

「と、言う訳でだ。貴様がベルディアを倒したと言うなら、挨拶をせねばならぬ。魔王に頼まれてきたのでな。……では、改めましてこんにちは！　我輩は魔王軍幹部、悪魔バニルだ。趣味は、人間にうわあと言わせる事。特技はバニル殺人光線と目ビームで……うおっ！？」

訳の分からない口上を並べる悪魔に、ミツルギが有無を言わせず斬りかかった！

バニルはそれを難なく回避し、ミツルギから距離を取る。

「下らない戯言はそれまでだ！　僕は女神に選ばれ、神の力を宿す武器を与えられた者。魔王軍幹部、バニル！　お前には、ここで経験値の足しになって貰う！」

ミツルギが随分熱くなっているが、あいつにとっては、人知れずアクアを守る勇者の気分なのかも知れない。

「おい貴様、紳士的に挨拶する我輩に対し、いきなり斬りかかるとは随分な礼儀知らずではないか。何を怒っているのかは知らぬが、怒りっぽい時は小骨を食べると良いと聞く。我輩の仮面の一部には魔人の骨が使われているが、一口ならかじってよいぞ？」

「ふ、ふざけるな、魔王の手先め！」

「そこの人！　助太刀しますっ！」

ゆんゆんがミツルギの助太刀に入る。

バニルへとゆんゆんが遠慮なく炎の上級魔法を放ち、だがそれを、バニルは慌てながらも受け止めた。

「こ、こらっ！　友達居なさそうなそこの娘。いきなり襲い掛かるは卑怯であろう！　鏡に日に三回は語りかけていそうな貴様も、なぜ我輩に斬りかかる！　魔王の頼み通り、貴様に挨拶は済ませたのでもうお前に用は無い！　それに、我輩は魔王の手先では無いぞ。

魔王と昔なじみだからなんとなく魔王城に居ついているだけだ。…
…そんな事より我輩は、働けば働くほど貧乏になるという、不思議な特技を持つポンコツ店主にこそ用事があるのだ！」

……今アイツ、最後に何て言った？

俺は思わず、めぐみんと顔を見合わせた。

「……つまりあんたは魔王の幹部だけど、今まで人に暴力を振るった事は無いし、これからも、人に危害を加える気は無いって事か？」

だだっ広い平原に、全員で車座に。

ミツルギとゆんゆんの二人は未だ警戒を弱めてはおらず、ミツルギはいつでも剣を抜ける体勢を取っていた。

「そうだ。我輩は世間で言う所の悪魔族。悪魔のご飯は、お前ら人間族の嫌だなと思う悪感情だ。我輩達にとって貴様らは美味しいご飯製造機であり、それを壊したり傷付けたりするなどナンセンス。寧ろ、貴様ら人間が一人生まれるたびに、我輩は喜び庭駆け回るだろう」

「そ、そうか……。でも俺達の悪感情って事は、やっぱり危害は加えるんじゃないのか？　平和に暮らしていれば、悪い感情なんてあんまり生まれないだろ」

俺は、魔王軍の幹部バニルと、普通に話し込んでいた。

仮にもコイツが幹部と言うなら、戦闘を回避出来るなら勿論その方が良い。

バニルは地面に胡坐をかき、

「まあ、悪感情と言ってもピンキリであるからな。そこは悪魔によ

って味覚も違えば好みも違う。人の恐怖や絶望が好きな奴もいれば、絶世の美女に化けて男に近付き、散々惚れさせてみた後で、実は我輩でしたと言って相手に血の涙を流させるのが大好物な、こんな善良な悪魔もいる」

「やっぱアンタは退治しといた方が良さそうな気がしてきた」

だがまあ、こいつがあまり人に物質的な害が無いのは分かった。魔王の幹部をホイホイ信じて良いのか分からないが、何だかコイツは嘘は言っていない気がする。

まあウィズの例がある事だ、こんな幹部が居てもいい……。

……のだろうか。

なんだか、ロクな幹部がいない気がするが大丈夫なのか。

しかし、ミツルギやゆんゆんの前でウィズの店への用件を聞くのは止めといた方がいいな。

と、バニルがよっこらせと立ち上がった。

「では、我輩の無害さが分かって貰った所で、街に入れて貰おうか。これからあの赤貧店主に……。……なんだ、幸薄そうな娘に魔剣以外取り得の無さそうな男。我輩は、街に用があるのだが」

立ち上がり、街に行こうとしたバニルの前に、ゆんゆんとミツルギが立ち塞がった。

9話（後書き）

なぜか人気のゆんゆんですが、大事な役目があるものの、あくまでモブ子なんだ……。

ストーリー展開的に、今回の話みたくしばらくギャグ要素は無いです。

一応、ギャグ小説ではなくコメディ系ファンタジーなので……っ！

これで一通りキャラは出揃い、敵キャラ以外はこれ以上増える事は無いと思います。

増えても謝りません。

10話

無言で立ち尽くす二人に、バニルがもう一度口を開いた。

「……どうした、男友達居なさそうな男に、友達という単語を知らなさそうな娘。……ほう、これは美味である。お前達のイラッときた悪感情をビンビン感じる。ご馳走様です。……もう一度言うが、通しては貰えんか？」

ミツルギが、ゆんゆんが。

そのまま無言で武器を構える。

「……僕は選ばれた勇者として、いつか魔王を倒しに行く予定の者だ。お前が魔王の幹部なら、見逃す訳にはいかない。……ある占い師によれば、魔王の幹部を全て倒さないと魔王の城への道が開かれないらしい」

そういや以前、なんか幹部が張った結界がどうのと言っていたな。確か、幹部二、三人程度が張った結界なら、アクアなら破れるんじゃなかったか。

「魔族、それも悪魔だなんて見逃せない！　人に危害を加えない？　悪魔の言葉を簡単に信じられるとでも思っているの？　そ、それに私だって友達がいない訳じゃない！　そ、その……」

そこまで言い掛けたゆんゆんが、何か言いたそうにチラチラとめぐみんを見ているが。

「……ふわあ……」

こいつ、欠伸しやがった。

俺の隣で欠伸するめぐみんを見て、ゆんゆんが途端に泣きそうな顔をした。

「……お前、あの子に毎回昼ごはん貰ってたんだろ？　せめて友達だって言ってやれよ」
「何を言うんですか、ご飯は貰ったのではなく、勝負代として受け取ったのです。自称ライバルが友達とはおこがましい。しかも、自分から、友達よね？　って聞いてくるならともかく、あの泣きそうなすがる様な目を見ると……。もうちょっと追い込みたくなります。我がライバルを名乗るのなら、もっとしゃんとするべきです」
お前って奴は。
「大体、子供の頃からああなのです。誘いを断わられるのが怖いのか、家のドアをノックして、あーそーぼーと言えば良いだけなのに、それが言えず。昼ご飯を食べた後は夕方まで外を一人でウロウロし、偶然知り合いに出会い、遊ぼう？　と誘ってもらえるのをジッと待つ子でした」
「……なんか、目から変な汁が出そうになるからもう止めてくれ」
「はあああっ！　でやっ！　でやっ！　でやあああああっ！」
「おおう、いい加減っ！　このっ！　善良なっ！　我輩に剣を振るうのは、止めるべきだ！　ふはははは、ほうら魔剣を白刃取り。後はこれを、女子トイレの中にでも……っ！？　あっづあああっ！？」
斬りかかるミツルギの攻撃を避け続けていたバニルが、魔剣を白刃取りして悲鳴を上げた。
白刃取りしていた赤く輝き出した魔剣を手放し、ミツルギからバニルが距離を取る。
「『ライト・オブ・セイバー』ッ！」
ゆんゆんが叫ぶと同時に、その手の平が白く輝く。

その光る手刀を、離れた位置からバニルに向けて、袈裟斬りにでもする様にシュッと振った。
それが振られるより早く、バニルは横っ飛びに身をかわすが……。

ゆんゆんの手刀の延長線上に一瞬だけ光が走り、その光が通り抜けた後には、そこにあった物は全て二つにされていた。

二つになった物。
それは地面の石に、そよぐ草木。

そして、宙を舞うバニルの右腕。
宙を舞ったバニルの腕は、地に落ちると溶ける様に消え……。

そして、右腕の肘から先を失ったバニルは、苦悶の声を上げながら膝を付いた。
「ぐう……っ！？　ま、まさか、たかが駆け出しの街の冒険者に上級魔法の使い手が……っ！？　おのれ、油断したわっ！」
失った肘から先を左手で押さえ、若干の焦りを滲ませながら、バニルが呻いた。
「いい加減、本気を出せっ！　無抵抗なお前を倒しても、こちらとしても後味が悪い！」

ミツルギの言葉にバニルはゆらりと立ち上がる。

「我輩は、人は殺さぬと決めている。そして、我輩の使う技の数々は、壊れマークの付いている廃威力の物が多い。例えば、我がバニル式殺人光線。これは殺人光線なので、人間であるお前は当たれば死ぬ。当たらなくても死ぬ。他にも、バニル式目ビームがあるが、これは使用すると目が焦げると言う欠点があるので、過去一度も試

しておらず……」
「もういい！　なんだか、お前と話をしていると頭がおかしくなりそうだ！　あくまで掛かって来ないなら、本気を出させてやるまでだ！」
バニルの言葉を遮り、そのまま斬りかかっていくミツルギ。
その姿を見ながら……。

「なあ、ダクネスの我慢比べ？　それって賞金とか高いのか？　魔法禁止じゃないなら、俺も自分にフリーズ掛けて出ようかなあ……」
「魔法は使用可能ですよ。賞金はそれほどでもなかったですが……。出場者は、なぜか厚着で参加してったダクネス以外は、みんな魔法使いでしたから。……でも、厚着してハードル高めたダクネスですが、負ける絵が思い浮かばないです。最後まで残ってた人が、耐えた分だけ賞金総取り。ダクネスには勝てないと思うので、きっと出るだけ無駄ですよ」

俺とめぐみんは離れた場所で座り込み、バニル対ミツルギ達の戦いを見物していた。

俺はエリス札を一枚、地面に置くと、
「俺、あのバニルって奴があのままかわし続けて、ミツルギ達が諦める方に千エリス」
「では、あの二人が疲れきって諦めた所を、通りすがりのカッコイイ魔法使いがバニルにトドメを刺す、に、千エリス」
と、めぐみんもエリス札を一枚地面に置いた。

「ええいっ、なんて奴だっ！　魔剣が当たれば一撃なのに……っ！」
ミツルギの剣筋は決して悪くは無い。

ハッキリ言って、もしやり合ったら、数合打ち合ったら俺ではアッサリ斬られるだろう。

だが、流石は幹部の大悪魔。

それらの攻撃を、ヒョイヒョイとかわしていたバニルは……、

「『ストーンバインド』！」

ゆんゆんの声と同時に、その足元を土に取られた。

そのままメキメキと鈍い音を立てながら、バニルが下半身を、そしてそのまま上半身をも土に拘束されていく。

バニルを固めていく土は、やがて固まり、石化していった。

「……おい、お前も上級属性」

「断わる」

俺が何かを言う前に、先に拒絶するめぐみん。

そんな中、ゆんゆんの魔法で拘束されたバニルは、首から下を、石と化した土でタケノコの様な形に固められ、完全に身動き取れずにいた。

その動けなくなったバニルに、ミツルギが魔剣を構えて近付く。

「今の気分はどうだ、バニル？　何か言う事はあるか？」

「秋口のミノムシ達も、こんな気分なのだろうか」

意外と余裕があるバニルに、ミツルギは無言で魔剣を振り上げた。

……あれっ？

なんかミツルギが勝ち誇ってるんだけど、よく考えたらバニルの腕を飛ばしたり動きを止めたり、殆どゆんゆん一人の活躍じゃね？

「これでっ！　終わりだっ！」

ミツルギが振りかぶった魔剣を振るい、バニルの頭を……！

叩き割る前に、バニルの頭部がコロンと落ちた。

そのまま地面に転がると、地面から、首の下から先がにょきっと生えて……。

「ピンチだと思ったか？　腕を飛ばしてダメージ与えたと思ったか？　残念、ハズレである。……おおっと、なんたる美味。二人とも、悪感情ご馳走様」

ミツルギとゆんゆんが、思い切り歯を食いしばりながら再びバニルに襲い掛かった。

「はあ……はあ……。ぼ、僕は勇者で……。ま、負ける訳には……」

「私は、もう、魔力が……」

どれだけの間戦っていたのか。

いや、戦いとは言えまい。

攻撃を加えていたのはゆんゆんとミツルギのみ。

バニルはただひたすらかわし、時にはおちょくり、時にはやられたフリをしてはガッカリさせ、先ほどから二人の悪感情を食い物にしている。

やがて、とうとう二人は、攻撃を諦め、その場に立ち尽くしたま

ま肩を落とした。

「おっと、もう終わりか？　まあいい、大分馳走になった。……だが二人とも、なかなかの攻撃であった。これは嘘でも騙しでも無く、本心である。なぜこの始まりの街にいるのかが分からない様な、上位の冒険者を名乗ってもおかしくない攻撃であった」

そんな二人に、バニルが感心した様に言葉をかける。

それは確かに本心で言っている様だった。

流石に、ミツルギとゆんゆんの二人も毒気を抜かれたのか。

「ふふっ、なんだそれ。ああ、僕の負けだ。また、腕を磨いて挑戦させてもらおうか。魔王城へ行くには、お前を倒さなくてはならないからな」

勝手に斬りかかっておいて勝手に満足したミツルギは、魔剣を鞘に戻して笑みを浮かべた。

ちなみに、ミツルギ単体ではバニルに掠り傷も負わせていない。

「……なんだか、どうでも良くなってきたわ。ふふっ、全く、変な悪魔。でもまあ、大悪魔に認めさせたってだけでも、里の皆に一応手を振って帰れる……かな……？　……ねえ、めぐみーん！　私は魔王の幹部に攻撃が認められたわよ！　どう？　これで私の勝ちじゃない！？」

ゆんゆんがこちらに駆けて来る。

バニルはそのまま街の方へと歩き出し、俺やミツルギ達とドンドン離れ……。

そんな中。

めぐみんが無言で立ち上がり。

「『エクスプロージョン』ッ！」

突然のめぐみんの叫びと共に轟く轟音。

杖を持たない為に、普段よりも威力控えめな爆裂は、それでもバニルを木っ端微塵に消し飛ばしていた。

「魔王の幹部討ち取ったり。……悪魔に認められた女と、その悪魔を一撃で倒した女。……どちらが上か、考えるまでもないですね……。あ、カズマ。賭けは私の勝ちなので、千エリス下さい」

「お前って奴は！　お前って奴は！！」

ミツルギは呆然とその場に立ち尽くし。

ゆんゆんは、涙目になってバニルの居た場所を見つめ、地面にぺたんと座り込んだ。

◆◆◆

「……お前って奴は、どうして使っちゃいけない所なほど、爆裂魔法を撃ちたがるんだ。アレ、ミツルギはともかくゆんゆんはトラウマにでもなったんじゃないか。力を認めてくれた、和解した悪魔が、立ち去ろうとした瞬間に目の前で爆散したんだぞ？」

俺達は、固まったまま動かなくなったミツルギとゆんゆんを置いて、そのまま街中のウィズの店へと歩いていた。

ウィズは以前、魔王軍の幹部の中に親しい奴が一人だけいると言

っていた。
あのバニルと言う奴もウィズに会いに来たと言っていたから、まず間違いないだろう。
……なので、せめてあの悪魔の死を、ウィズに伝えてやろうと思った。

と、めぐみんが自分の冒険者カードを俺に見せてくる。

……？

「まあ、これを見てくださいな。冒険者カードには過去に討伐したモンスターの種族や数が出るものです。ですが私のカードには、討伐の欄に悪魔の名は無いでしょう？　つまり、倒せてませんよ。……と言うか、仮にも悪魔族。しかも、アレはまず公爵級。そんな相手には流石の私の爆裂魔法でも、一撃で仕留めるなんて無理ですよ」
めぐみんの言葉にカードを見るも、確かに悪魔族の名は無く、もちろんバニルの名も無い。
俺はめぐみんにカードを返しながら。
ウィズの店に着いた俺は、店のドアに手を掛けた。
「じゃあ、アイツは一体どうなったんだ？　しばらくすれば復活するのか？」
そして、そのままドアを押し開ける。
俺の後を付いてきながら、めぐみんはフッと少しだけ笑うと。

「あれほどの悪魔ですから。きっと、数ヶ月、いえ、下手すれば数週間で、また会う事になるかもしれ」
「へいらっしゃい！　……おや、先ほど我輩に爆裂魔法吹っかけた、胸も薄いが存在感もたまに薄そうな娘。それに、活躍はするがイマイチ派手さが無さそうな男ではないか。さっきぶりである！」

ドアを開けるとなんか居た。

店の中には疲れきった様子のウィズの姿。

そして……。

「さあ、いらさいいらさい！　オススメは、ウチの金欠店主が何を考えて仕入れたか分からない、開けると爆発するポーションである。一本たったの三万エリスだが、これを持って銀行に行き、店員の前で開けようとするだけで大金が貰える魔法のポーション。さあ、どうか？」

「……いらない。……いや、あんたさっき粉々になっただろう。何でもうここに居るんだよ？　てか、その格好はなんだ」

俺は、ポーションを売りつけようとしてくるバニルに聞いた。

めぐみんは、流石にもう復活しているとは思わなかったのか、ピンピンしているバニルを見ながら俺の後ろでビクビクしている。

怖がるなら、最初から魔法撃ち込まなきゃいいのにと思うのだが。

とりあえず、いきなり爆裂魔法を撃ち込まれたと言うのに怒っている様子はなさそうだ。

と言うか、ミツルギやゆんゆんにあれだけ攻撃されても怒らないのは、人間出来ているのか大物なのか、一体どっちなんだろう。

バニルはポーションを棚に戻すと、

「これか？　我輩は、ここの店で働く事になったのだが、そこの困窮店主がこれを着ろと。……我輩は悪魔なので性別が無い。だから、女の格好をして女性販売員にでもなろうとしたのだが、止められた。女性店員の姿の方が売り上げは上がると思うのだが」

残念そうにそう言ってくるバニルは、黒のローブにエプロン姿。

それだけを見れば唯の魔法店の従業員に見えなくもないのだが、フルフェイスの仮面が全てを台無しにしていた。

「……いやあ、無理があるだろ。お前、冒険者達に袋叩きにされるんじゃないのか？　街の人もバカじゃないんだし。俺達だったから良かったけど、ちゃんとした客が来たらすぐ悪魔だってバレるんじゃないか？」

俺の言葉に、バニルではなく、ぐったりと疲れた声でウィズが答えた。

「カズマさん、どうもです……。バニルさんとお知り合いになったんですね。……大丈夫ですよ。バニルさんは、未来を見通したり、物事の本質を見抜いたりする悪魔なんです。先ほど占いをして貰い、バニルさんがここで働いたらどうなるかを見てもらいました。店にとって良い結果になると言われたので、もう私は諦めました」

きっとここで雇うかどうかの押し問答でもあったのだろう。

ぐったりとしたウィズは、そのままカウンターに突っ伏した。

しかし、未来を見通すとか凄い話だが。

ああ、だからミツルギの攻撃もあれだけ簡単にかわしてたのか。

しかし、それならめぐみんの爆裂魔法だって……。

「おっと、何を考えているのか分かるぞ小僧。なぜあっさり攻撃を受けたのか、と思っているな？　ほら、ここを見てごらん」

俺の考えている事をアッサリと見透かしたバニルは、自分の仮面の額の部分を指差した。

そこには、小さく2の文字が。

「そう、我輩第二形態。古い仮面を脱ぎ捨てて、我輩つるんと脱皮を完了。これで、晴れて魔王軍幹部の結界張りの仕事もお役御免である。後は、ここで働き金を貯め、いい歳なのにいきおくれリッチーに、願いを叶えてもらうのだ」

「……今度いきおくれリッチー呼ばわりしたら、悪魔にも効く呪いを掛けますからね」

バニルは、そのまま俺に向かって口元だけをにやりと歪めた。

「我輩は、まあ全てとは言わないが大概の事を見通す悪魔、バニル。あの門の前に貴様が現れる事も、そして貴様が極貧店主の正体も知っていて、しかも仲も良いと言う事も。勿論、先ほどの男がベルディアを倒した男では無い事も、全てはお見通しである」

そして、バニルはふうむと首を傾げ。

「……ただ、一つ見通せない物があったのだ。それはベルディアを倒した者の姿。……大きな光に遮られ、それが誰かを見通せぬ。貴様とその者が知り合いだと言うのは分かっている。……ベルディアを倒したその者を、ここに連れて来てはくれまいか？　連れて来ても、その者に危害は加えぬ。その者を連れて来たならば、貴様に面白い話を聞かせてやろう」

11話

めぐみんと共に屋敷に戻った俺は、そこにいた二人を見て頭を抱えたくなった。

「カズマ、お帰りなさい。ダクネスをお風呂に入れたばかりだから、まだお湯温かいわよ。入って来ちゃいなさいよ」

広間には、薄着でグッタリとソファーに横たわるダクネスの姿。

額の部分に濡れたタオルを乗せられ、眠っているのか気を失っているのかは知らないが、その表情はどこか満足そうだ。

「……こいつ、どうしたんだ？」

寝ているダクネスの隣に、ソファーの上に裸足で三角座りしていたアクアが。

「我慢比べで最後まで残ってたダクネスが、一向に根を上げないもんだからね。最後には、露店の人が、相当な火力で温めてたみたい。露店の人は、ダクネスがちゃんとフリーズか何かの魔法を使ってるって思ってたらしくて、人の耐えられる温度を軽くオーバーしちゃっていたそうよ。最後まで耐え切ったダクネスは、そのまま、勝った！　って笑って倒れちゃったらしいわ」

それをアクアが回収して介抱していたのか。

……いや、それは分かった。

それは、いいのだが。

「……お前、その腹の上に抱いてるの。……何ソレ」

「ドラゴンの卵よ。……名前はキングスフォード・ゼルトマン。こ

の子はいずれドラゴン達の帝王になるわ。この子を呼ぶ時は、ゼル帝とでも呼んであげて」

アクアは言いながら、腹と太ももの間に毛布を置き、そこに挟んだ小さな卵に、手から柔らかい光を放っていた。

どう見ても鶏の卵です。

本当にありがとうございました。

「……買っちゃったのか」

「買っちゃったわ。なんか商人の人が良い人でね。お金が足りなくなったから買えないって言ったら、持ち金と交換で良いって言ってくれたのよ。と言う訳で、孵化するまで私はクエストに参加できないからね。外にも出ないし、ここで寝るわ。カズマ、晩御飯持ってきて食べさせて」

俺はこのバカを、本当にあの悪魔に会わせなくてはいけないのだろうか。

「じゃあ行って来る。……ロクでもない事させて悪いなめぐみん」

「良いですよ。……それに私も、あんな大悪魔にはあまり近づきたくは無いですし」

翌日。

俺はアクアとダクネスを連れ、ウィズの店へと向かう事に。

めぐみんは留守番だ。

春先にも関わらず暖炉に火を入れ、その前で毛布にくるまり、アクアが買って来た卵を温めて貰っている。
卵の孵化は、温めるだけではなくたまに角度を変えてやったりと、色々と面倒くさいらしい。

卵の孵化作業があるから行きたくないと駄々をこねたアクアへの折衷案だ。

まだアクアには、今から会う相手が悪魔である事は伝えていない。
アンデッドですら目の敵にするこいつの事だ。
サキュバスみたいな下級悪魔ではなく、相手がとびきりの大物悪魔だと知ったら、店に油を撒いて火を付けるとか言い出してもおかしくない。
俺達はめぐみんに見送られながら屋敷を出た。

「で、私に会いたいって言うそいつは何者なの？　ファンなの？　信者なの？　信者なら、いつもすっぴんな私だけども、手土産の一つも持って、お化粧の一つもして行きたいんだけれど」
「ファンでも無いし信者でもないからそのままでいい。何者……って言うか。まあ、会ってくれればそれでいい。一応言っとくが、くれぐれも店で暴れたりするなよ？」
俺の言葉にアクアが首を傾げるも、そのまま素直に付いて来る。
一応ダクネスにはしっかりと鎧を着けて貰っている。
万が一何かが起こらないとも限らないからだ。

やがてウィズの店へと着くと、俺はアクアに振り向き、再び念を押した。
「いいか、ここは街の中だし店の中だ。暴れるなよ？　分かったか？　もしバカな事しでかしたら、お前が買って来た卵は、明日の朝

飯にするからな？」

言いながら、俺は店のドアを押し開けて、そのまま中に……。

「へいらっしゃい！　……なんだ、常識人を気取りながら案外壊れた男、貴様か。今日のオススメは、この明かりの魔法が封印されたスクロール。短時間だが効果はバッチリだ。欠点は、暗い場所だから明かりが必要なのであり、このスクロールの力が必要な場所では、暗くてスクロールの呪文を読めない所。これを仕入れた奴の商売センスにどれだけ致命傷があるのかが良く分かる一品で……。おや？」

店の中に入った俺に早速変な物を売り付けようとするバニルが、俺の後から入ってきた二人に気が付いた。

俺はアクアとダクネスを紹介しようと二人を前に……、

出させようとした瞬間。

「『バニル式殺人光線』！！」

「『リフレクト』ーッ！！」

突如手の平から光線を放ったバニルに対し、アクアが咄嗟に魔法を唱えた！

「え？　え、え、待っあああああああー！！」

アクアの魔法で跳ね返されたその光線は、そのままバニルの横を通り抜け、カウンターの前に座っていたウィズを直撃した。

いきなり光線を食らわされたウィズは、体から煙を上げてカウンターへと突っ伏した。

「ちょっ！？　ウィズ！？　おい、いきなり何やってんだ、ウィズが！　おい、ウィズがっ！！」

俺が慌ててウィズの元へ駆け寄り手を差し伸べると、ウィズはあ

ちこちからパリパリと静電気の様な物を放ちながらも、差し出した俺の手を掴んできた。
「カ、カズマさん……、み、店が……。私はいいから、二人を止めて……。店を、守って……」
そんな健気な事を弱々しく言うウィズに従い、俺はアクアとバニルに向き直ると……。

「いきなり何やってくれてんの？　不意打ちとは流石は小心者の悪魔ね！　でも残念でした！　女神相手にあんな貧弱な光線が効くとでも思ったの？　プークスクス！」
「フハハハハ、なんと女神であったか！　忌々しい神気を発散している迷惑な輩に手加減光線を放ってみれば。あれを気合で消し飛ばすではなく、わざわざ魔法まで使って反射しか出来ぬとは、下級天使か何かだと思ったわ！　いや、失敬失敬！」
そんな事を言い合いながら、額がくっつく程の至近距離まで顔を近づけて、睨み合っている二人。
バニルは仮面に隠れて表情こそ分からないが、アクアは完全に目がマジだ。

普段物事に動じないダクネスが、珍しくビクつきながら二人を横切り、俺の傍へとやって来る。
「お、おいカズマ。なんだあの変な男は。あの二人の空気はなんだ」
女神と悪魔による宿命の対決が、平和な街の魔法店で行なわれてるだけです。

「おいお前ら。まあ、喧嘩するのは良く分かるし仕方ないのかもしれないが、ここはウィズの店の中だ。ちょっと落ち着こうぜ」
俺が二人の仲裁に入ると、二人は、とりあえずはお互いに距離を取った。

「ねえカズマ。ひょっとして、私に会いたがってたのって、コレ？　ねえ、コレの事？　人間の魂掠め取ったり嫌がらせする事しか考えてない、人々の悪い感情すすって辛うじて存在してる、この人類の寄生虫に会わせようとしたの？　やだーもう、笑えない冗談ね！」

「フハハハハ、なるほどなるほど。貴様がベルディアを倒した輩と言う訳だな。我が見通す力が通じなかったのでどんな輩かと思ってみれば。なるほどなるほど、女神なんてバッチイもの見通したくないという、我輩の防衛本能により視界にフィルターが掛かっておったのか。いや失敗失敗」

そのまま二人はお互いに感情の篭っていない笑いを上げると……。

「「……」」

やがてお互い無言になった。

「『セイクリッド・エクソシズム』！」

「華麗に脱皮！」

突然のアクアの叫びに呼応してバニルの足元に光の柱が現れるが、バニルは咄嗟に自らの仮面を投げ、その体は光の柱に呑まれたものの、本体の仮面は魔法から回避した。

床に落ちた仮面は、そのままニョキニョキと、木の床にも関わらず体を生やす。

アクアはその再生途中の体ではなく、本体の方の仮面に飛びつき、それを体から引き剥がそうとしだした。

「あはははは、コレね！　コレがあんたの本体ね！　捕まえたわ！

捕まえたわよ！　さあ、どうしてくれようかしら！　コレ、どうしてくれようかしらっ！」

「フハハハハ、この仮面を破壊したとしても、まだ第二第三の我輩が……。こ、こらっ、喋っている途中で仮面を剥がそうとするな、体が崩れる！　せめてセリフを言い終わってからに……」

「おい、落ち着け。そろそろ落ち着け」

俺は嬉々として仮面を剥がそうとするアクアと、そして自らの仮面を剥がされまいと必死に抵抗するバニルの間に割って入った。

「で、何でこんな所に悪魔がいるの？　返答次第じゃまた一戦やるハメになるわよ？」

なんとか二人をなだめ、椅子に座らせてはみたのだが。

俺は、未だにギスギスしている二人の間に座り、何時でも止められる体勢で二人の話を聞いていた。

展開と話に付いていけていないダクネスは、店の奥であちこち焦げたウィズの介抱をしている。

バニルは、椅子の上で腕を組み、

「我輩は、元は魔王軍の幹部だった悪魔、バニルである。日頃はそっけない態度の癖に、夜になると仲間に劣情催しているそこの男。そこの男の連れに一度消し飛ばされ、無事魔王軍幹部の役目は終えたのだがな。我輩には、悪魔としての大きな夢があるのだ。ここには、それを叶えに来た」

「とりあえず、仲間の視線が凄く痛いから、これから俺を指す時は別の表現をしてくれ。……悪魔の抱く夢って……。えらく物騒な夢

の気がするんだが。とりあえず、どんな夢なのか、聞いてもいいか？」

アクアが険しい視線でジッと見つめる中、バニルはうむと頷くと……。

「我輩にはな、昔から、とびきりの破滅願望があるのだ。それは、至高の悪感情を食した後、華々しく滅び去りたいと言う夢だ。……我輩は考えた。一体何時からそんな事を考え出したのかも思い出せないぐらいに、遠い昔から我輩はずっと考え続けた。どうすれば、我輩好みの至高の悪感情が食せるのか、と。そこで、思い付いたのだ……」

ニヤリと笑うバニルを見て、俺は知らず知らずに息を呑む。

「まず、ここで働き金を貯め、その資金を元に、欠陥店主の膨大な魔力で巨大ダンジョンを造ってもらう。我輩はダンジョンを造る事など出来ないからな。……そして、そのダンジョンには凶悪な魔物を放ち、苛烈な罠を仕掛けるのだ！　そこに挑むは歴戦の凄腕冒険者達！　我がダンジョンに何度も何度も挑戦し、やがていつかは我輩の元に辿り着く者が現れるだろう！」

興奮してきたのか、大きく手を振り、熱弁しだしたバニル。

「そして、深いダンジョンの奥で、最後に待ち受けるのはもちろん我輩！　そこで言うのだ、我輩は。よくぞここまで来たな冒険者よ！　さあ我を倒し、莫大な富をその手にせよ……！　そして始まる最後の戦い！　我輩は冒険者達との激戦の末、とうとう打ち倒されてしまう。そして、我輩が倒れると同時に現れる、厳重に封印された宝箱。打ち倒され、意識も霞んでいく我輩の目の前で、苦難を越えた冒険者達はそれを開け……！」

思わず俺とアクアが静まり返る。

「……箱を開けると、スカと書かれた紙切れが。それを見て呆然とする冒険者達を見ながら我輩は滅びたい」

「止めてやれよ。本当に可哀想だから止めてやれよ……」

「ねえカズマ、滅ぼしときましょう？　私に任せて、サクッと消滅させてやるから！」

俺とアクアにフフッと笑い、バニルが言った。

「まあ、我輩が此処に来た理由はそんな所だ。商売人としては重大な欠陥がある店主だが、魔法の腕は超一流だ。我輩好みのダンジョンを造ってくれるだろう。……さて。貴様には、そこの……そこの……ぐぬぬ、見通せぬ……！　そこのチンピラみたいな女に、約束通り会わせてくれた礼をせねばな。どれ。一つ、約束通り面白い話を聞かせてやろうか」

チンピラ女呼ばわりされたアクアが立ち上がるが、俺はそれを押し留めた。

悪魔の持ち掛けてくる面白い話。

興味が無いと言えば、嘘になる。

それは悪魔だけが知る、取っておきの世界の秘密か。

はたまた、この世の理か。

「では、どの話をしてやろうか。……そうだな、我輩が野良ケルベロスを拾ってきて、魔王城がパニックになった時の話をしてやろう。あれは確か、今から二百年前の事……」

「アクア、もういいぞ、頼む」

「分かったわ！　欠片も残さず滅ぼしてあげるわ！」

俺とアクアからバッと距離を取り、バニルが口元をニヤリとさせた。
「美味である」
……憎たらしい！

バニルはクルリとダクネスを振り向くと。
「まずは、美味なる悪感情馳走である。……では、こうしようか。おいそこの。日夜熟れた身体の性欲を持て余し、処女の癖に夜な夜」
「なあああああああああーっ！！」
ダクネスが、突然大声を上げながらこちらに向かって突っ込んできた。
そのダクネスをバニルがヒョイとかわし。

「……うむ、極上の羞恥の込もった悪感情、美味である。……おい鎧の娘。貴様には、破滅の相が出ているな。あまり会いたくは無い相手だったが、約束通り、ベルディアを倒した者に会わせてくれた礼だ。ここは一つ、我輩が占ってやろう」
悪魔らしく。
バニルは、ニヤリと口元を歪めながら言ってきた。

「おいそんな事よりも、さっきダクネスの事をなんて呼ぼうとしたのかを詳し」

目尻に涙を溜めたダクネスが、耳まで顔を赤くして殴り掛かってきた。

12話

奥歯がガクガクします。

「では、一つ見てやろうか。貴族としての変な義務感だけは高い癖に、実力が伴わず空回りする娘よ。ここに来るがいい」

「……」

バニルの言葉に、無言で悔しそうに歯を食いしばりながらもしぶしぶと、バニルが引っ張り出してきた小さなテーブルの前の椅子に座るダクネス。

俺はそれを見ながら、半泣きになった不器用なクルセイダーに、思い切り殴られた頬を押さえていた。

アクアがヒールを掛けてくれないので、自分でフリーズを掛けながら熱を取っている。

後で、バニルに事細かに聞いてやろう。

「ねえダクネス、悪魔の占いなんて話半分に聞いときなさいよ。そんな怪しげな物より、女神である私のお告げ的な物の方が、絶対ご利益あると思うの」

それはない。

「フン。我が占いは、神々のいい加減などうにでも解釈できる、あんな抽象的な物ではないぞ。……では、今から幾つかの質問をする。中には答え難い物もあるだろうが、正直に答えるのだぞ」

「わ、分かった。……なあカズマ、この変な仮面の男は本物の悪魔の様だが……。この悪魔の言う事を信用しても良いのか？　なぜ聖騎士たる私が、唐突に悪魔に占われなくてはいけないのか分からないのだが……」

信用できるかと言われれば悩むところだが。
「まぁ聞くだけならタダだし。質問に答えるだけならいいんじゃないのか？」
気楽に言った俺の言葉に、それもそうだなと呟いて、ダクネスがバニルと向かい合った。

「うむ、良いようだな。ではまず、この水晶玉の上に片手を乗せるのだ。……よし、後は待っていれば良い。では、これから出す質問に正直に答えて貰おう」
「う……。わ、分かった……」
バニルに言われるままに、ダクネスは水晶の上に手を置いた。

「では、汝に問おう。防御力も大事だが、攻撃に踏ん張れる重さも重要なクルセイダーなのに、最近コッソリ鎧の軽量化を行った様だが。それはなぜか？」

そのバニルの言葉に、ダクネスがビクリと震えた。

「……そ、その……。わ、わ、私は不器用なので、鎧を軽くし、少しでも攻撃を当て易くしようと……。し、しよう……と……」
しどろもどろになりながら、何とか答えたダクネスに。
「……我輩は、正直に答えよと言ったぞ……」

バニルがボソリと呟いた。

……。

「……最近、段々腹筋が割れてきたのを気にして、鎧を軽くして……みた……」

蚊の鳴く様な小さな声で、ダクネスが恥ずかしそうに俯きながら言った。

……割れてきたのか。

……気にしてるのか。

バニルはそれを聞き、満足そうに頷いた。

「よしよし。……では、汝に問う。風呂場にて。洗濯籠に放り込まれていた、仲間の魔法使いの着ていた可愛らしいワンピース。これをコッソリ自分の身体にあて、鏡の前でちょっと嬉しそうにしながら、うん、コレは無い。コレは無いな……とブツブツ言っていたのはなぜか。しかも、自分で似合わないとか言いながら、普段笑いもしない無愛想な顔を、首を稼げてニコッと笑ってみたりしていたのはなぜか。そして頬を染めて周りをキョロキョロ確認し、そのまま慌てて洗濯籠に戻していたのはなぜか」

見通す悪魔様最強じゃないですか。

どこまで知ってるんですかバニル様。

「……。……か、かか、可愛らしい系の服は似合わないし余り興味もなく、買うのも買って来て貰うのも恥ずかしいので、今までは触ることもなく……。ふと目にしてつい、試してみようかな、という出来心で……。こんな無愛想な筋肉女が出来心で合わせてしまいました、ごめんなさい……ご、ごめんなさい……」

赤い顔を両手で覆い隠し、小さな震え声で謝っているダクネス。

別にめぐみんの服を自分の体の上に合わせてみたぐらいでそこまで謝る事もないと思うが、指摘されたダクネスはよほど堪えたのか、もう心の耐久力は限りなく0に近い。

「私は、可愛いワンピースを着たダクネス、悪くないと思うの！

いつもカッコイイ系や大人系の服着てるしね！　お嬢様風のドレスだって着たんだから、可愛いワンピースだって着てもいいじゃない！　ダクネスがコッソリ可愛い系の服着る事の何が悪いのよ！」

きっと全く悪気は無いアクアが、ダクネスにトドメを刺している。

ダクネスがテーブルに腕枕状態で突っ伏して、耳まで赤くして動かなくなった。

バニルが、そんなダクネスに満足そうにウンウン頷く。

そして……、

「では、最後に。同居人のそこの男にイヤラシイ目で見られている事を自覚しながら、それでも屋敷内で、身体の線がくっきり出る服を着てウロウロしているのはな」

「これはっ！　これは本当に占いとやらに関係あるのか！？　あるのかっ！？」

ダクネスが、泣きそうな顔でバンとテーブルを叩きながら飛び起きた。

バニルがそれに、は？　と言った感じで首を傾げ。

「何時我輩が、質問しなければ占いは出来ないなどと言った。質問に答えて貰おうと言っただけだ。占い自体は水晶玉に手を置くだけでいい。質問は、単に占いの結果が出るまでの暇つぶし……、こっ、こらっ止めろ！　なぜお前達は我輩の仮面に気安く手を掛けるのだ！　泣きながら仮面を引き剥がそうとするな！」

散々オモチャにされた事が悔しかったのか、水晶玉に手を置きながらも、完全にそっぽ向いているダクネスに、バニルが水晶玉を覗きながら。

「……ほうほう、これは。……うむ、やはり破滅の相が出ているな。貴様の家、そして父親が、これから大変な目に合うだろう。そして、あまり頭のよろしくない貴様は、自分を犠牲にすれば全てが解決すると、短絡的な行動に出るであろう。その行動は誰も喜ばず。貴様の父親は後悔と無念を抱き、そのまま余生を送る事になる。……良い回避方法は……」

バニルの言葉に、今までとは打って変わって真剣な面持ちになるダクネス。

「……おや、貴様の力ではどうにもならんと出たな。その時が来たならば、いっそ全てを捨てて逃げるが吉。……風呂の度に洗濯籠の中の仲間の衣服が気になるが、迷いながらも何も出来ない小心者なそこの男と、そして、仲間達と共に遠い地でやり直すが良い」

「おい、待ってくれ。本当に待ってくれよ。なんかもうお前が口開く度に、ウチのパーティメンバーからの俺への信頼がマイナスになっていく」

ダクネスが、無言で立ち上がる。

思わずビクッとしてしまった俺だが、どうやら洗濯物云々の事ではないらしい。

当たり前だ、迷っただけで、結局俺はまだ何もしていない。

「……ん、占いには感謝する悪魔殿。……だがどんな事態に陥っても、逃げる事は出来ない。……まあ、話半分に聞いておこう。カズマ。借金は返したのだし、アクアの卵の孵化もある。今日も含め、

どうせしばらくはクエストには出ないだろう？　ちょっと久しぶりに実家に寄って、一応父の顔でも見てくるとしよう。帰りは……。……夕飯までには戻るから」

そう言って、ダクネスは店を出て行ったのだった。

「ねえ木っ端悪魔。あんたもっと具体的な事言えないの？　さっきは神々のお告げを抽象的だとか何とか言ってくれた癖に。あと、私の事も占いなさいよ。とりあえず、じきに生まれるウチのゼル帝が何ドラゴンかとか。ドラゴン族を治めるだけの器があるか。あっ、後あれよ。楽してお金が儲かる方法とか教えなさいよ、あんた何でも見通せるんでしょ？」

ダクネスが店を出た後、アクアがそんな事を言い出した。

バニルは心底嫌そうに顔をしかめると。

「こんな俗物的な女神など初めて見たわ。楽して金を稼ぐ方法があれば、そこで焦げてる産廃店主にでも教えて、我がダンジョン建設の為の資金にしている。我が力は、その者が過去に行なってきた事、そして、その者にこれから起こるであろう事柄を見通せるのだ。こういった技能は欲にかまけて使うとロクな事にならぬ。……貴様はそんな事も分からないとは、それでも本当に女神なのか？」

アクアがそんなバニルを鼻で笑った。

「所詮は悪魔ね。誇大広告も甚だしいわ。はー使えない使えない。カズマ、もう帰りましょう？　帰ってゼル帝の孵化に戻るの。早く

あの子を孵化させて、この悪魔をあの子の養分の足しにでもしてあげるわ」
「……おっと、今我輩、ピンと来た。そのゼル帝とやら、名を照り焼きと改名するが吉。さすれば、晩飯の際にでも皆に愛される事請け合いであろう」

バニルとアクアが、共に口元を半笑い状態で、そのまま同時に立ち上がった。

「……あらあら、何その名前。卵からはドラゴンが生まれるのよ？　高いお金出して買ってきたのよ。なぜそんな美味しそうな名前付けなきゃいけないのかしら」
「見通す悪魔、バニルの名に賭け宣言しよう。節穴女神の御眼鏡にかなった卵からは、さぞかし立派な鶏肉が生まれるであろう事を……」

…………………………。

「『サンクチュアリ』！」
「フハハハハ、広範囲型聖域魔法か！　そんな広範囲型の中威力浄化魔法、この我輩がちょっと気合を入れれば簡単に耐えられるわ！」
「おいバカやめろお前らウィズが！　焦げたまま倒れてるウィズが、浄化魔法に巻き込まれてどんどん薄くなってきてるから！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『一つ、助言をくれてやろう。お前は何やら、面白い世界からやってきた人間の様だな。……汝、今はクエスト等には行かず、元居た世界の、売れ筋の商品を沢山作っておくがいい。借金が無くなり、もう金には苦労しないと思っているな？　先のクルセイダーの娘だが、あの娘にはこう言った。貴様の力ではどうにもならん、とな。……だが、お前の頑張り次第では、どうにもならん事も無いかもしれんぞ？』

ウィズの店から、屋敷へと向かう帰り道。
俺は、店から出る際にバニルに言われた事を思い出していた。

再び暴れ始めたアクアとバニルを引き剥がし、ウィズを介抱した後。
店を後にしようとした俺は、バニルにそんな助言を貰っていた。

バニルの話だと、ダクネスの家、ダクネスの親父さんに不幸が訪れる。
それをダクネスが、自分の身を犠牲にして、短絡的にどうにかしようとする。
それをどうにか出来るかどうかは俺次第。

と言っても、経験値稼ぎしてレベルを上げて何とかする、とかではなく。
売れ筋商品の、商品開発でもしておけと。

……なんのこっちゃ。

俺はアクアを連れながら、自分の屋敷へと帰る途中。
バニルやダクネスに言われて思い出したが、俺はもう借金は無い。
つまりは、そろそろ少しぐらいは贅沢しても許されるはずだと思い、普段喰う物よりも、ちょっと高めの食材を晩飯用に買って帰る。
それを見たアクアが先ほどからやたら興奮して煩かった。

俺達が屋敷に帰ると、ダクネスはまだ帰っていなかった。

屋敷に戻るとめぐみんから卵を返して貰ったアクアは、ソファーの上でいつもの三角座り状態で卵の孵化作業に戻り、エサを待つ雛の如く、晩御飯を早く早くとせっついていた。

「おい喧しいぞ。料理が出来ても、ダクネスが帰ってくるまではお預けだからな。それ以上ピーピー騒ぐと、お前の持ってる卵も晩飯のおかずにするからな」
「ねえカズマ、あの悪魔の言う事鵜呑みにしてない？　この子は鶏じゃなく、ドラゴン。この卵からはドラゴンが生まれるのよ。そんなにこの子を邪険にすると、この子が生まれて大きくなっても、背中に乗せてあげないからね」

そうこうしている間に、俺とめぐみんの手により熱々の晩御飯が完成する。
もう一人は卵の孵化作業があるので、ずっとソファーの上でゴロゴロしていた。

「ねえカズマ、ダクネスが遅いんですけど。私、料理を目の前にもう耐えられないんですけど。とっととダクネス探してきてー、探してきてー」
「お前、金も出さない、料理もしないくせに、随分な態度じゃないか」

俺とアクアがそんな事を言ってる間に、めぐみんが四人分の食器とお茶を用意した。

「今日の料理は、ちょっと凝ってますね。お嬢様のダクネスはあまり食べた事の無い料理でしょう。ふふふ、我が料理を食した際の反応が楽しみです」

「お前、塩振って食器出しただけじゃないか」

やがて、夜の帳が下りる頃。

そんな時間になっても、まだダクネスは帰ってこない。

「ねえカズマー！　もう冷めちゃったわよ、温め直してー」

「……ご飯を前にお預けとか。私はダクネスじゃないんですから、こんなプレイちっとも嬉しくないですよ。……帰ってきたら、罰としてソファーの前に正座させ、しばらくお預けさせて、目の前で食べてやります」

「多分、あんまり罰にならないと思う。むしろ……。……にしても遅いなぁ……。晩飯までには帰るって言ってた癖に、何やってんだよアイツは。バニルの占いの通り、実家でなんかあったのか？　それならそれで、何があったのかぐらい知らせろってんだ」

みんなで愚痴を言いながら、更に待つ。

やがて、その苛立ちは怒りに変わり。

ダクネスが帰ってきたら、どう取っちめてやるかの会議になる。

大概の罰はご褒美に変えてしまうあの女に、一体何が効くのかを真剣に考えた。

それでも、誰一人、もう食っちまおうぜとの案だけは出ない。

アクアコーディネートの超可愛らしい服を着せ、メイクも施し、ギルド及び街中引き回しの上、一日借りるだけでも高額が掛かる、魔道カメラでの記念撮影の刑。

ダクネスへの罰が決まった所で、時刻はやがて、深夜を回ろうとしていた。

「……遅いねぇ……」

アクアがぽつりと呟くが。

それでも冷えた食事には誰も手を付けようとはしない。

実家に寄っただけだから、危険な事がある訳では無い。

心配する様な事など何もないのだが……。

もう、このまま待ってても、今日は帰ってこないかもしれない。

明日にでも帰ってきたら、あいつ思い切りとっちめてやろう。

「今日は帰ってきそうにないな。帰らないなら、連絡ぐらいよこせってんだ。……おい、もう食っちまおうぜ」

俺が二人にそう言うも、困った表情を浮かべ、食事に手を付けようとしない二人。

……ああ、くそっ！

あのドMが、真剣に泣いて嫌がる事をしてやろう。

小一時間バニルに根堀り葉堀り色々尋問される刑。
よし、これで行こう。
帰るのが遅くなればなるほど、バニルに尋問される時間を増やしてくれよう。

俺が密やかにそんな決意を固めていた中。
ダクネスはこの日、帰って来る事はなく。

二日経っても。
三日経っても。

ダクネスが、屋敷に帰ってくる事は無かった。

12話（後書き）

ようやくのシリアス回。
もうギャグ小説とは言わせない。

13話

――――ダクネスから、手紙が届いた――――

「ねえカズマ、それって何？　何書いてるの？」
俺は広間のテーブルで、紙にせっせと設計図を描いていた。
既に、横には俺が描いた他の商品の設計図の数々が。
それは、図は描いてみたものの、作る技術が無い物ばかり。
個人ではとても作れない物ばかりだが、それなら知的財産権の登録だけは行なっておき、後は大商会の経営者や鍛冶師の人達が、これは使えると判断したならその財産権を買って貰おうとの判断だ。
日本でも、物を発明して登録しておくと、優秀な物なら企業から商品化のお誘いが来るが、まあ、それと同じ感じだ。

俺は今自分が描いていた設計図をアクアに見せた。
それは、灯油ポンプの設計図。
石油もプラスチックもないので、勿論作る事は出来ないが……。

「こういった、原理や形は分かってるけど、材質の問題で作れない物を色々書き出してるんだよ。これだけでも、きっと頭の良い先を見る目のある奴なら買ってくれる」
「なるほど、オーバーテクノロジーをそれはもう大量にこの世界に持ち込んじゃう訳ね！　カズマ……恐ろしい子……！」
設計図だけではなく、一応自分で作れそうな物は試作品も作ってみた。
アクアはそんな事を言い腹に卵を抱えながらも、俺の試作品の一つを手に取っていた。

「アクアが今持っている、それは何に使う物なんですか？」
今まで、ダクネスから届いた手紙をじっと読んでいためぐみんが、そう言って顔を上げる。

「これ？　これはね、風船とか水風船とか言われるオモチャよ。これに水を入れたり、空気を入れて膨らましたりして遊ぶのよ。本来はゴムって素材で作るんだけどもね」

そう言って、アクアは俺が試行錯誤の上に作ってみた、薄い素材のグンニョリとした、やたら伸びる材質のソレを口に咥えた。
そのままプーと息を吹き込むと、結構簡単に膨らんでいく。
……手作りだから今の所大量生産は出来ないが、一応は問題無さそうな感じだな。
「ほう……。興味深い。これはタールプラントの樹液で作られているんですか？　私も一つ頂いてもいいですか？　名を、風船と言うんですか……」
めぐみんが、それを見てテーブルに置かれた試作品を一つ手に取った。
そして、めぐみんもそれを膨らます。
「……お、おう。そーだよ、風船だよ……」

すいません、コン○ームです。

まだまだ、薄型にしたり実際に使用したら破れないのかと色々な課題はあるが、その辺はまあ、実際に販売する連中がなんとかするだろう。
あくまで多々ある開発商品の一つだが、全部が当たらなくてもいい。
幾つかが当たってくれれば……。

めぐみんは膨らました風船でしばらく遊んでいたものの、その内、思い出した様に先ほどの手紙を広げた。
それは、ダクネスからの俺達に宛てた手紙。
めぐみんが、一体何度目かになるのか分からないぐらい目を通したそれに、何か隠された意図がないかと再び読み、手紙をテーブルの上にそっと置く。
そして、深いため息を吐いた。

「……ダクネス。本当に、このままパーティ抜けちゃうんですかね……」

……。

俺とアクアはその言葉に無言になる。
アクアはしょぼんとしながら、膨らましたコン○ームを弄んでいた。
別に変な事した訳でもない新品なんだから気にする事はないのだが、それでも罪悪感が沸いてくるから、コン○ームで遊ぶの止めて欲しい……。

俺はペンをテーブルに置くと。

「……しょうがないだろ、実家が実家だ。元々、今まで俺達みたいなのと冒険出来てたって事がおかしいんだよ」
「で、でも！　これって絶対変ですよ！　ダクネスが、私達に何も言わずにパーティ抜けるとか！　手紙一通で済むような、そんな薄っぺらな関係ではないですよ、私達は！」
めぐみんが、俺の言葉に食って掛かった。

「そうよね。私はアレよ、カズマの行き過ぎたセクハラが原因だと思うの。とりあえず、私達の洗濯物に頭を突っ込んで、ウヒョー！ってやつ。あれは止めた方が良いと思うわ」
「やってねえ！　今はまだそんな事はやってねーよ！」
「今はまだって言いました？」

俺は、めぐみんがテーブルに置いた手紙を取り上げ。
そして改めて中を読む。
それを読み返しながら……。

――――突然こんな事を言い出して、本当に済まない――――

俺は手紙をクシャッと丸め。
そのままゴミ箱の中に、叩きつける様に投げ込んだ。

――――込み入った事情が出来た。お前達とは、もう会えない。パーティから抜けさせて欲しい。私の代わりの前衛職をパーティに入れてくれ――――

そんな俺の様子に、ちょっと怯えた表情を浮かべるアクアとめぐみん。
ああ、全く。俺は何をイライラしてるんだ。

――――お前達には感謝している。どれだけ感謝しても、足りない程だ。お前達との冒険は、心の底から、本当に楽しかった――――

元々住む世界も違うお嬢様。
それが、住む世界に戻って行っただけの事。
そう。攻撃がちゃんと当たる、新しい前衛職を入れて、それで解決だ。
俺はペンを手に取ると、再び設計図の作成に取り掛かる。

――――今まで、どうもありがとう。ダスティネス・フォード・ララティーナより。愛する仲間達へ、深い感謝を――――

パキッと音がして、俺の握るペン先が割れた。
知らず知らずの内に力が篭っていたらしい。

そんな俺の様子を見て、めぐみんが口を開いた。
「……何だかんだで、カズマも気になってるんじゃないですか。素直になりましょうよ。そして、もう一度ダクネスの屋敷に行きましょう！」
そう言って、拳を握って俺に迫る。

ダクネスが帰ってこなかったあの日。
結局俺達は、日付けが変わると、冷えた料理をモソモソと食べ。
そのまま朝早くダクネスの家に、心配させんなと襲撃に行ったのだが……。

「また門前払いされるのがオチだって。相手は、仮にも大物の貴族だぞ？　強行突破でもしてみろ、俺ら全員即刻逮捕だ逮捕。ダクネスや親父さん相手だから処刑はないだろうが、ダクネスが会いたがっていない以上どうしようもできないだろ」
俺の言葉に、めぐみんがシュンとうな垂れた。

ダクネスの屋敷に行った俺達は、事情は申せません、お引取りをの一点張りの門番により追い返された。

俺はイライラと割れたペン先の代わりを……。

「カズマ、何だかんだ言ってもダクネスの為に何か出来ないかって考えてるんでしょ？　だからそんな、一生懸命新しい商品開発なんかして。あの、役に立たない悪魔の助言なんか信じちゃってるの？　悪魔ってのはね、屁理屈ばっかこねる、いい加減な連中なのよ？　無償で人助けをする連中じゃないんだからね？」

そのアクアの言葉に、俺は思わず動きが止まる。

「べ、別にそんなんじゃねーし！？　マジメに働きたくないから、楽して大金せしめようと頑張ってるだけだし！」

アクアが真顔で。

「ツンデレ？　ねえカズマ、ツンデレなの？　素直じゃないんだから。ダクネスがいなくなって寂しいって言えばいいのに。……ねえカズマ。私ツンデレは、金髪ツインテール以外は認めない派なの。それが分かったなら、今すぐ頭染めてツインテにしてきなさい」

「……」

調子に乗りましたごめんなさいと叫び、半泣きで激しく抵抗するアクアから、卵を奪い、今日の昼飯にしてやろうとする俺に。

めぐみんが寂しそうにぽつりと言った。

「二人のこんないつものやりとりを見ていても……。なんか、足りない気がします……」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ギルドへと向かう俺の後を、不機嫌そうなめぐみんがちょろちょろと付いてくる。
正直、卵の孵化に忙しいアクアみたく、屋敷で大人しく留守番していて欲しい。
「……なあめぐみん。小遣いやるから、屋敷に帰ってくれないか？」
「嫌ですよ。私だってパーティメンバーなんですから、新しいメンバー決める権利は私にだってあるはずです」
先ほどから、俺の言葉をめぐみんはロクに聞こうともしない。
それもまあ、しょうがない。
俺は今、ギルドにてダクネスの代わりの前衛職を探そうとしているからだ。
めぐみんが、わざわざ俺のすぐ真後ろにトトトッ、と詰め寄ると。
「たかが数日留守にしたぐらいで、よくもパーティメンバーをあっさりと切れますね。カズマは鬼です。鬼ですよ」

…………。

それを言っためぐみんは、再び俺から、トトトッ、と距離を置き、俺の数歩後ろを付いてくる。
「……ち、違うだろ。新しいパーティメンバーを入れて欲しいってのは、ダクネスの願いだからだろ。俺だってダクネスが戻ってきて

くれるならそれが一番いいさ。でも、本人が……」

それを聞いためぐみんが、再びトトトッ、とわざわざ俺の真後ろに立ち。

「そんなのは、ただ単に意地になっているだけですね。先ほどアクアに、あんな事言われたから恥かしがっているんでしょう？　認めたくないんでしょう？　強がってるだけなんでしょう？　いつまでも新しいメンバーを入れないと、ダクネスに未練タラタラだって思われるのが嫌なんでしょう？」

それだけ言うと、再びめぐみんは俺からトトトッ、と離れ、距離を置いた。

う、うっとおしい……！

それからはギルドまで、めぐみんが付かず離れず付いてきた。

隣を歩けばいいのにそれもせず。

俺がダッシュで撒ける程には距離を取らないところが憎たらしい。

ギルドの前に立つと、めぐみんが近付き、俺の服の裾をクイクイと引っ張った。

「カズマ、これ以上は行かない方がいいですよ？　さもなくば、紅魔族の恐ろしさをその身に味わう事になりますから」

「やれるもんならやってみろ。余計な事しやがったなら、お前の大事にしている杖で、二階のトイレの詰まりを直してやるからな」

俺の言葉に引きつった顔をするめぐみんを連れ、久しぶりにギルドに入る。

アクアの卵やダクネスの件もあり、ここ最近クエストも受ける事は無く、ずっとご無沙汰だったギルド内。

俺はそこのパーティ募集掲示板の前に行くと、そこに張ってある

紙の中から目ぼしい物を探し出した。
こちらから募集の紙を張る事は無い。
どうせ俺達の悪名は知れ渡っている。
今更前衛職募集の張り紙を張ったとて、人が来る事が無いのは分かっている。
なので、どこかのパーティに入れてくれって奴をとっ捕まえてスカウトするのだ。

と、早速良さそうなのを見つけてしまった。
職業戦士。得意武器は片手剣。
防御力には自信あり。前衛での盾役希望。
性別は男性。
年は十八。
……悪くないのではないだろうか。

俺はその紙を剥がすと、その冒険者が待っているテーブルへと紙を持って向かって行った。

「えっと。……すいません、この募集の紙を見たんですが」
俺が声を掛けると、その男は明るい表情を浮かべ。
「あっ、はいっ！　初めまして、俺、戦士の……」
その男が言い掛けたのを、付いて来ていためぐみんが遮った。
……嫌な予感しかしない。
「おっと、自己紹介はまだ結構です。それよりも、先に聞きたいことがありますので。それを聞き終わってから、面接を始めましょうか」

俺の背後から付いてきていためぐみんが、実にイヤラシイ笑みをニヤリと浮かべた。

14話

「おい、ちょっとこっち。お前、こっち来い」
「断わる。……あっあっ、フード引っ張るのはやめてください、紅魔族ローブは一着しかないんです、伸びるじゃ無いですか」
俺はめぐみんを連れて、戦士風の男に話を聞かれない位置へ移動する。
「お前、分かってるか？　ダクネスが帰ってきたら五人パーティにすれば良いだけの話なんだからな？　耐久の低い俺じゃ壁は出来ない。アクアも同じだ。お前は論外。つまり、ダクネスがいない今、多数のモンスターを相手にするなら壁役は必須なんだからな？」
「分かってます、分かってますよカズマ。私だって壁職の重要性は良く分かってます。では、面接しましょう」
こいつ絶対分かってない。
確実に何かやらかす気だ。
「いいか、ベルディアを倒したアクアがいる以上、俺達は何時目を付けられたってておかしくない。バニルが派遣されて来たのだって、この街でベルディアが倒されたからなんだぞ。万が一に備えて、最低限の戦闘は出来るようにしておきたい。クリスが他の冒険者パーティに雇われたりしてた様に、あの兄ちゃんには一時雇用って形にしたって良い。分かったか？　邪魔するなよ？」
「分かってます。邪魔しません。邪魔しませんよ」
やたら素直に、コクコクと頷くめぐみん。
ハッキリ言うと、こいつが素直で大人しい時は何かやらかすと考えておいた方がいい。

俺はめぐみんに注意を払いながら、先ほどのテーブルへと戻って行った。

「えっと……。悪いね、急に。俺はサトウカズマ。カズマでいいよ。で、こっちは……」

俺がめぐみんを紹介しようとすると。

めぐみんはマントをバサッと翻し、ギルド中の皆がギョッとする様な大声で言い放った。

「我が名はめぐみん！　紅魔族一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操りし者っ！　このギルドでの通り名は、頭のおかしい爆裂娘！　さあ、我とともに痛っ！！」

ギルド中の視線を集め、いきなりとんでもない自己紹介を始めためぐみんを、慌ててはたくが遅かった。

戦士風のその男は、思い切り顔を引きつらせ。

「……あ、あの……。噂には聞いてましたが、あなたがあの……。す、すいません、あの噂は大げさなものだとばかり……。お、俺には荷が重すぎるんで、その、他を当たって下さい……」

あの噂とは、めぐみんの頭が壊れてる、頭がおかしいなどの噂だろう。

何度も謝ってくる男に対し、めぐみんは満足そうに、それでいて大切な何かを失った様な、何だか煤けた表情で俺に向かって笑いかけた。

「カズマ、彼はダメそうですね。私は自己紹介をしただけですよ。次です。次に行きましょう」

なんという自爆テロ。

俺はめぐみんの妨害の覚悟を甘く見ていた。

まさか、自ら頭のおかしい子を地で行くとは……。
というか、次と言われても……。

俺とめぐみんが掲示板に行き、目ぼしい募集を見つけ、そちらのテーブルを見るも、すかさずバッと目を逸らされる。
……今のギルド中に響く自己紹介が致命傷だった様だ。
くそっ、普段は大して役に立ってくれないくせに、こんな時だけいらん知恵が回りやがる……。

「おいカズマ。なんだよ、メンバー募集してんのか？　なら、俺に声かけてくれよ」

途方に暮れていた俺にそう声を掛けてきたのはダストだった。
今日は他のパーティメンバーとは一緒ではないらしい。
「おっ？　久しぶりじゃ無いか、あの件以降しばらく引き篭もってたって聞いたんだが。お前パーティメンバーならいるだろうに。他の連中はどうしたんだ？」
俺の言葉にダストは嫌そうに顔をしかめ。
「……あの件の事は忘れてくれ……。それより聞いてくれよカズマ。あいつらヒデーんだぜ？　デストロイヤー戦で大金せしめたからって、しばらくクエスト受ける気になれないだってよ！　俺はデストロイヤー戦に参加出来なかったから稼がなきゃならねえ。でも殆どの冒険者達は今、懐が潤っているから臨時のパーティ募集もあまりしてなくってな？　戦士系なんて一番有り余ってるクラスだしよぉ……。って訳でだ。前衛探してるなら、今から俺と、ひと稼ぎどうだ？」
めぐみんが、余計な所に現れやがってとばかりにダストを睨みつける中。
俺達は、急遽臨時のパーティを組む事になった。

屋敷に戻り、しっかりと装備を整えた俺は、ダストとめぐみんと共に、街の郊外の大農場へと出向いていた。

春と言えば、つくしにタケノコ、春キャベツ。
その他にも、元の世界には無い野菜なども数多くある。
そう、春の野菜の収穫の時期。
この季節、農家達は大忙しだ。

そしてこの時期、農家達の一生懸命作った野菜を狙う、不届きな害獣達も現れる。
彼らもきっと必死なのだろうが、こちらも生きる為、害獣は駆除しなくてはならない。

そんな訳で、この時期、冒険者達は害獣対策に狩り出される。

……のだが。

例のごとく、今俺達以外の冒険者達は懐が暖かい。

なので……！

「狙撃！　狙撃狙撃狙撃！　そげ……！　ちょっ、ダストー！　無理だ、倒しきれない、猪が！　デカイ猪が一匹こっち来る！　ヤバイの来てる！」

俺とダスト、めぐみんの三人は、同じくこのクエストを受けた他数名の冒険者達と共に、農場への害獣達の突入を辛うじて防いでいた。

執拗に野菜を狙う、猿っぽい害獣を俺は狙撃で仕留めていくが、いかんせん数が多い。

というか、この猿達は背中に袋みたいな物を備え付けている。

ひょっとして、あの中に野菜を大量に詰めて持ち去る気か。

基本的に人がいれば逃げていく日本の害獣達とは違い、この世界の生き物達は、逞しいってレベルじゃないぞ。

俺達の後ろでは……。

「ぐあーっ！　は、春キャベツがっ！　春キャベツが群れをなして……っ！」

「おいっ！　ジョセフがタケノコに下からケツを突かれた！　重傷だ！　もう野良作業は出来ん、早く連れて行けっ！」

農場で収穫作業にあたっている農家の人達の中から、そんな罵声が聞こえていた。

向こうは向こうで大変な様だ。

農業と言うのは、どこの世界でも大変な仕事だ。

俺の目の前ではダストが地に長剣を突き刺し、その剣の柄をしっかり握って、左手の盾を前に構えた。

前方から突進してくる大きな猪。

それを迎え撃つ腹積もりらしい。

「こいやあーっ！」

ダストが腰を落として、そのまま足を踏ん張り、地に刺した剣の、柄を握る手に力を込める。

ダクネスなら、きっとビクともせずにあれを受け止められるのだ

ろう。
なんせ、冬牛夏草に操られた牛や馬達の群れによる突撃にも耐えた程だ。
だが、それをダストに求めるのは酷と言う物だ。
ほとんど牛ぐらいの大きさのある猪は、そのままダストに向かって突進し……！

「グハアッ！？」

ダストが猪に跳ねられ宙を舞う。

だが猪の方も、流石に鋼鉄製の鎧を着込んだダストへの突撃は頭部にダメージを負ったのか、ヨロヨロとその体躯をよろめかせ、その突進の足を止めた。
俺はそのまま猪に駆け寄り、片手剣で斬りかかる。
大きな傷を負わせるのではなく、スキルによる、動きを封じる状態異常を引き起こすのが目的の為、よろめいている猪に、浅く何度も何度も斬りつけた。
やがて猪が麻痺でも起こしたのか、ビクリと震えて動かなくなる。

猪の動きを封じ、他はどうなっているのか振り向くと、他の数名の冒険者達は大量の猿達にあっさりと防御を抜かれ、次々と農場への侵入を許していた。
ああ、畜生っ！
俺は跳ね飛ばされて、ピクピクしながら転がっているダストは一端放っておき、猿達へ弓での狙撃を再開する。

「カズマっ！　爆裂魔法の詠唱が終わりましたよ！」
めぐみんが俺に魔法の完成を告げる中、俺は逃走する猿の群れを指差し、叫んだ。

「やれっ！　めぐみん！　まとめてぶっ飛ばしてくれっ！」
その俺の指示に、他の冒険者の誰かが叫んだ様な気がした。
「ちょっ……！　待っ……！」

「『エクスプロージョン』ッ！」

サル達を駆除した俺達は、ギルドへと報告にやって来ていた。
討伐報酬は、参加した冒険者一人につき2万エリス。
相手はモンスターではなく害獣だ。
猪はともかく、命の心配まではしなくてもいい猿の駆除でこの値段。
妥当な所か……。

まあ、俺達は……。
「では、サトウカズマさん、めぐみんさん、ダストさんは、報酬は5千エリスと言う事で……」
猿がゴッソリ持って行った野菜ごとまとめて吹き飛ばしたので、報酬もゴッソリ削られていた。
めぐみんに適当に指示した俺のミスだろう。
めぐみんとダストに謝る俺に、だがダストは……、
「へっへ、まぁ、こんな事もあるわな。今日の酒代ぐらいにはなった。あんまり気にすんな。あのままじゃ、どうせ猿どもに逃げられてクエスト自体が失敗になってたしな！」
そう笑うダストは、受け取った報酬で早速冷えたジョッキを頼ん

でいた。

「あれです、アクアもダクネスもいない状態で、私達三人でよくやれたと言うべきですよ。他の冒険者達も少なかったですしね。あれは本来なら、もっと多くの冒険者でやるクエストですから」

めぐみんもそんな事を言ってきた。

そのめぐみんは、クエストを達成できた事には喜んでいるようだったが、どこか浮かない顔だった。

……分かっている、ダクネスの事だろう。

ダクネスと比べるのは酷なのだが、やはりあのドMクルセイダーの壁役としての力は認めていただけに、どうしても比べてしまう。

ダストはダストで、それなりに猿も斬り捨てたりと、立派に前衛として活躍していたのだが……。

ダクネスなら、攻撃は当たらない物の、あの猪の突撃ぐらいじゃビクともしなかっただろうなとか、余計な事ばかり考えて……、

ああ、クソっ！

なぜか内心苛立つ俺に。

「しかし、新しいメンバー探し大変だろうが頑張れよ。俺は自分のパーティ抜ける訳にはいかねーが、たまの臨時なら何時でも付き合うからよ。あのクルセイダーの姉ちゃんも、俺も一回はパーティ組んだ仲だしな。俺が言ってたって伝えといてくれよ。結婚おめでとう、ってな」

そんな事をダストが言ってきた。

……。

「「おい、お前今なんつった？」」

俺とめぐみんが同時に言った。

俺は二人に、ちょっとテンション高く宣言した。
「……と、言う訳で。今から、厳重に警備された屋敷にどうやって侵入し、どうすればダクネスに会えるのかの作戦会議をする。と、言っても大体の考えはもうあるのですが！」

屋敷に帰った俺とめぐみんは、アクアに事情を説明し。
そして今、広間において顔付き合わせて会議をしていた。

「……なんかカズマ、ちょっとテンション高いわね。つまり、街では今、あの熊と豚足したみたいな領主の人と、ダクネスの結婚話で持ち切りなの？　ダクネスの趣味の悪いのは良く知ってるけども、どうしちゃったの？　普通ならダクネスのお父さんが止めるでしょうに、何かあったのかしら。……気に入らないわね。今の所、あの胡散臭い悪魔の占い通り？」
アクアがいつになくマジメな顔で、ソファーの上で卵を抱きながら言った。

確かあの悪魔の占いは、ダクネスの実家が、そして父親が、これから大変な目に合うだろう、だったか。

占いなんて、普通はマトモに信じる奴はいない。
せいぜい話半分に聞くのが関の山だろう。

だがこの世界には、魔法もあれば呪いもある。

「カズマは、その占いとやら信じます？　あの悪魔の言う通り、せっせと商品開発に勤しんでおりますが。私を胸も薄いが影も薄い呼ばわりした、あの憎たらしい悪魔。あいつの言う事は、簡単に信用できると思いますか？　アクアではありませんが、悪魔と言うのは無償で人助けをする連中ではありません。きっと、その占いや忠告はあの悪魔にとって得になる事がある筈です」

めぐみんがそんな事を言ってくるが……。

正直言って、俺だって良く分からん。

初対面に近い相手、それも悪魔。

そんな相手の言う事をいきなりホイホイ信用するのもどうかとは思う。

思うが……。

「俺は、あの悪魔はそんなに適当な事は言ってない気がするんだよ。なんか色々ぼかしてる気はするけどな。ダクネスを助けて、あの悪魔に何の得があるのかは知らないけど。……もう強がらずに言うが。せっせと商品開発してたのは、もし占い通りダクネスに何かあったとしたら、何かの役に立てる様に。占いが外れても、商品開発自体は別に損する事でもない。そんな軽い考えでやってたんだが……」

頭のよろしくないダクネスは、自分を犠牲にすれば全てが解決すると、短絡的な行動に出る。

それがバニルの占いでダクネスが言われていた事だ。

これが、その辺で出会った占い師の言う事なら鼻で笑って済ませる所だが……。

「何にしても、まだ色々と決め付けるのは早い。今の所、ダストが他の人から聞いたっていう、又聞きみたいな状態だし。直接本人に

会って話さなきゃ、何がどうなってるのかがイマイチ分からん。手紙では、パーティ抜けるってだけだったから深く首突っ込む事は出来なかったが。あの領主には俺達だって色んな目に遭わされてんだ、無理やりにでも会って事情を聞く必要がある。だろう？　だろう？」

俺の言葉に、慌てたように、押されたように。

めぐみんとアクアがコクコクと頷いた。

確かあのバカは、領主は貴族としての見合い相手なら、そこそこ悪くないぐらいの下衆っぷりだとか、そんなすっとぼけた事を抜かしていた。

あまり無い事だとは思いたいが、父親に何かあり、ダクネス本人が望んで結婚話を進めている可能性だって全くないとも言い切れない。

あいつはたまに、本気でバカな事を言い出す奴だ。

そうだ。冬牛夏草をご主人様呼ばわりしたり、ベルディアにホイホイ付いて行こうとした時もあったな。

手紙一つ送ってパーティ抜けた事といい、思えば本当に心配ばかりかける奴だ。

とにかくこれは、是非本人に直接会って問い正したい。

そう、これはあのバカ女の妙な噂を案じての事だ。

そして、ついでにあの手紙はどう言う事だと問い正す。

手紙一枚持って聞きに行くのはちょっと気が引けていたが、ダストからあんな話を聞かされてしまってはしょうがない。

ああ、しょうがない。

以前見合いした、バルターとか言ったあんなしっかりした奴ならともかく、相手が相手だ。

ここ最近やきもきさせられた事への仕返しが出来るとか、しばらく会ってないからちょっとダクネス邸へ侵入する事をワクワクしているとか、これであの女に会う為の正当な口実が出来たとか、そんな事は勿論微塵も思っていない。

……ダクネスめ、見てろよぉ……？

俺だって、いつもいつも自分の保身ばかりじゃなく、たまには無茶だって出来る。

手紙一枚で俺達との関係をあっさり終わらせようとしたあの女を、屋敷に乗り込んでちょっと痛い目に合わせてやる。

もちろん、アイツが喜ばない方向の痛い目にだ。

とにかく、これで強引にでも会いに行く大義名分は出来た。

絶対に文句言ってやる。

色々と考えを巡らせている俺を見て、アクアが不思議そうに。

そしてちょっと嬉しげに言ってきた。

「カズマ。なんか知らないけど、ここんとこずっとイライラしてたのに、今は随分と嬉しそうね？」

15話

「「屋根から侵入？」」
アクアが、そしてめぐみんが。
俺の説明を受け、不思議そうな声を上げた。

ダクネスの家へ忍び込む事が決まった。

決行するのは俺一人。
一人の方が何かと都合がいい。
潜伏スキルを仲間にも適用させるには一々手を繋がなければならない。
アクアに屋敷の前まで来てもらい、そしてありったけの支援魔法を掛けて貰い、身体能力が強化された状態で侵入する。
それを説明すると、めぐみんがアクアから卵を受け取り。
「では、私は留守番してた方が良さそうですね。カズマ、ダクネスをしっかり説得してきてくださいね。攻撃が当たらなくたって、ダクネスはウチの自慢のクルセイダーです。代わりなんていませんよ」

ダクネスの代わりなんていない。

今日ダストと組んでみて、めぐみんの言葉が深く染みた。
どんなポンコツクルセイダーでも、これだけ慣れてしまうとそれに合わせた戦い方になってしまう。
今日の昼のクエストだって、ダクネスだったなら。
まず注意を引きつける、囮になるスキル、デコイを使ってもらい、猿の攻撃を引きつけておいて……。

……いや、よそう。

全てはダクネスに会ってからだ。

「さて。時間的にも良い頃合だな。それじゃあアクア、頼むよ」

時刻は深夜2時頃だろうか。

俺とアクアは今、警戒の厳しいダクネス邸の正門と裏口がある場所ではなく、なんの入口も無い、警戒の薄い、屋敷の横側に待機していた。

屋敷を囲う鉄製の柵。

それを間に挟み、俺とアクアはそっと道の陰からダクネス邸を観察していた。

アクアが俺の言葉に、小さな声で魔法を唱えていく。

それは、数々の肉体強化の支援魔法。

筋力増加に速度の上昇。

必要あるのか分からないが、防御力上昇や魔法抵抗力上昇の支援魔法まで……。

「『ヴァーサタイル・エンターテイナー』！」

アクアが、俺が今まで聞いた事も無い魔法を唱えた。

俺の身体が一瞬淡く光った所を見ると、これも支援魔法の一つなのだろう。

「今の、何の魔法？」

「芸達者になる魔法」

俺は無言でアクアをはたいた。

涙目で首を絞めてくるアクアは無視し、俺は背中から弓と、いつかの機動要塞戦で使った、先がフック状になっている矢を取り出した。

その矢の金属部分には何重にも布が巻かれ、その布の間にも軽く綿を詰めてある。

フックが屋根に当たった時になるべく音を立てない様に。

あまり布を巻きすぎるとしっかりフックが引っかかるかが心配になるが、これはやってみないと分からない。

「じゃあ、行ってくる」

俺はアクアに告げると、黒いマフラーで口元を隠す。

万が一にも顔を見られない為だ。

今は鎧も着けてはおらず、危害を加える気も無いので一切の武器も持って来ていない。

弓はあるが、矢は先がフック状の物一本だ。

この弓も、矢を放った後はアクアに持って帰ってもらう。

「しっかりね。何なら、ダクネスを気絶させて攫って来ちゃいなさい」

「……仮にも女神がそんな事言っていいのか」

俺はアクアに見守られながら、弓に矢をつがえ、それを狙撃スキルを使い、できるだけ屋根の天辺部分ギリギリを狙って、力も弱めに放つ。

あまり空高く打ち上げると、屋根に当たった時に大きな音を立てる為だ。

狙いは違わず、屋根の最先端部分、棟の部分に小さな音を立てて

引っ掛かり、ロープを引くとピンと張られた。
そのまましばらく動かずにいるが、今の音で誰かが出てくる気配は無い。
敵感知スキルにも反応は無い。

……なんて潜入に使えるスキル達。
今でも借金を背負った報われない赤貧生活だったなら、転職を考えてしまう所だ。

屋敷を囲っている鉄の柵の一部にロープをピンと張った状態でくくり付け、アクアに静かに告げた。
「俺が屋根に上ったら、鉄柵にくくり付けてあるロープの方はほどいてくれ。屋敷の見回りの人ぐらいいるかもしれない。柵にくくり付けられたロープが見つかれば侵入がバレる。帰りはなんとかするから、アクアは屋敷に戻っていてくれればいい」
ロープを引っ張って手ごたえを確認している俺の言葉に、アクアはコクリと頷いた。

よし、行くか！

レンジャー部隊よろしく、スルスルと張られたロープを上っていく。
筋肉強化の支援魔法がなければ、俺の平均的な体力では苦戦しただろう。
そのまま難なく屋根に上り終えると、俺はアクアに合図した。
アクアがロープを解くのを確認し、敵感知スキルで人の気配を探っていく。
窓から部屋の中を見なくても、敵感知スキルで人が居るかを確認できるのは大きい所だ。

……クラスが盗賊の連中の中に、絶対悪用してるやつがいるだろこれ。

気配を探り、人の居ない部屋を見つけた。
屋根に掛かったままのロープを使い、二階の窓からその部屋へと侵入を……。

……窓に鍵が掛かっている。
当たり前ですね。

支援魔法の力で片手でロープにぶら下がり、全体重を支えたまま、もう片方の手を窓ガラスにかざす様に近づける。
「『ティンダー』」
ガラスの表面に着火魔法で火を発生させ、表面を炙ってやる。
燃える物が無いので魔力が切れるとすぐに火は消えてしまうが、何度も何度も火をつけ炙る。
やがて充分ガラスの表面が熱された所で……。
「『フリーズ』」
小さな声で囁くと、一気に冷却されたガラスは微かな音と共にひび割れた。
音で誰か来ないかと警戒するが、誰かが来る気配は無い。
小さな着火の光も、誰にも気付かれてはいない様だ。

焼き破りとか言われる空き巣のガラス破りの手口だが、通常はライターと水で行なう。
ネットを覚えたての頃、使う気も無いのに危険な知識を収集していた時期があった。
その頃に入手した無駄知識だったが、まさか実際に使う事になろうとは……。
こういった、意味も無く危険な知識を知りたがる現象も中二病に

該当するのだろうか。

ひび割れて、欠けたガラスの部分に指を入れ、そのまま少しずつ、鍵周りのガラスを剥がす様に、ペキペキと割っていく。

やがて鍵を開けられるぐらいの大きさの穴を開けると、窓を開け、そのまま中に侵入した。

冒険者から空き巣にクラスチェンジした瞬間である。

さて、無事に屋敷には侵入できたが、問題はこれからどうやってダクネスの部屋を見つけるか、だ。

廊下をコソコソし、部屋を一つ一つ確認していくか？

いや、見回りでもいれば潜伏スキルを使っても見つかる可能性が高い。

と……。

「音なんかしたか？」

「いや、気のせいならそれでいいんだけど……」

ドアの外、廊下の方からそんな声が聞こえてきた。

先の声は渋めの低い声。

気のせいなら……とか言っている方は、若干高めの若そうな声だ。

俺はワタワタとパニック寸前になりながら、部屋のカーテンを閉めて割れた窓のひびを隠し、部屋の絨毯に散らばったガラスの破片を拾い集めた。

ドアの外で、ガチャガチャと鍵を開ける音。

俺は咄嗟に、部屋に備え付けられていたベッドの下に滑り込むと。

――――潜伏スキル発動――――

そのままベッドの下で縮こまった。

ドアが開く音と共に、人の声が聞こえてくる。

「……ほら、なんともないじゃないか。ノリス、いい加減その小心者な所を治せよ。それより、下の厨房で夜食でも作って貰おうぜ」

「す……すまない……。なんだか、小さな、何かが割れるような音がした気が……」

やがてドアが閉められて小さくなっていく足音を聞きながら、俺はそのまましばらくジッと待機。

……危ない危ない。

厨房で夜食がどうとか言っていたから、きっと屋敷内の見回りの人か何かだろうか。

となると、やはり部屋を一つ一つ確認していくのは無理が……。

……閃いた。

閃いてしまった。

下の厨房。

夜食。

そう、下の厨房とやらに行って、そこの料理人か誰かに、ラティーナお嬢様が夜食をご所望ですとか注文して、完成した夜食をダクネスの部屋に運ぶ奴の後をつけ……！

……色々と無理があるか。

顔を見せる訳にはいかないし、とは言っても先ほどの見回りの声を真似るなんて器用な事は俺には出来ない。

こんな時アクアが居たら、多芸なアイツの事だ、きっと声真似の

一つぐらい出来そうな気もするのだが。

……。

俺は何となく思いつき、一つ咳払いをする。
そして……。
見回りの声の高い方は、ノリスとか呼ばれてたな。

「……私の名前はノリスで……す……！？」

自分であの見張りの声を真似て、その出来栄えにビクッとした。
何だコレ、気持悪いぐらいに似てる！

先ほどアクアに、芸達者になる支援魔法を掛けて貰ったのを思い出し、なんとなく試してみたのだが……！

「や、ヤバイなこれは……。あーあー、ダクネス。……おおう……ダクネスだ……。どこから聞いてもダクネスの声だ……！」
俺はダクネスの声真似もしてみたが、予想以上に似ている事に驚いた。
使える。これは使える！
屋敷に帰ったらアクアに謝っておこう。

……。

「カズマ様、素敵！　抱いてっ！」

俺はしばらくの間ダクネスの声や皆の声でひとしきり遊び続け、そこでハタと気がついた。
いけない、こんな一人遊びをしている場合じゃ無い、目的を見失

う所だった。
今日ほどテープレコーダーが欲しいと思った瞬間は無かったが、今はダクネスに会う事を優先させよう。

とりあえずは、厨房とやらの様子を覗ってみようか。

俺はそう判断し、静かに部屋から出ると、コソコソと廊下を進んで行く。
この屋敷には以前の見合い騒動の時に一度来た事はあるが、通されたのは一階のみ。
暗い屋敷の中を、アーチャースキルの千里眼で見通しながら、灯かりも無く進んで行く。

……本当に空き巣に転職が出来そうだ。

何の問題も無く階段を見つけると、そのままコソコソと一階に。
……と、遠くに灯かりが二つ、揺らめいているのを見つけた。
廊下をドンドンと進んで行くその二つの灯かりは、先ほどの二人の見回りかも知れない。

となると、行きつく先は……。

そのまま灯かりの後を、俺は距離を取りながら付けていった。
やがて、その二つの灯かりは角を曲がり、何処かの部屋へと入っていく。

その部屋の位置を確認し、そのまましばらく時間を潰す事にする。
具体的には、あの二人の見張りが食事を終えて出てくる時間。

俺は二人が入って行った部屋の近くに洗面所を見つけると、幾つ

もあるトイレの奥に、トイレを掃除する為の用具入れらしき場所を見つけ、身を隠した。
そうしてしばらく待っていると、やがて廊下を歩く足音が聞こえてくる。
敵感知スキルを発動してみると二人分の気配が感じられた。
夜食を食い終えた見回りだと思って良いだろう。

その気配が通り過ぎるのを確認し、先ほどの二人が入って行った部屋へと向かう。

ドアの隙間から僅かに光が射すそこは、中を確認するまでも無く、漂ってくる食べ物の匂いからまず厨房で間違いなかった。
先ほど、見回りの一人は夜食を作って貰おうぜと言っていた。
つまり、ここの屋敷では常時料理人がいて、夜食の注文ぐらいはいつでも出来る様にしてあるのだろう。
貴族の家なら、そんなものは珍しくない。

顔を見せる訳にはいかないので、俺はドア越しに厨房に近付いた。
一つ咳払いをして、先ほどの見回りの声を思い出す。
ダクネスの声で注文しようかとも思ったが、本人だと、厨房にも来ていないし頼んでもいないぞと言われればその場で騒ぎになってしまう。
見回りの兄ちゃんの方ならば、そんな事言っていないぞと騒ぎになるにしても、多少の時間は稼げるだろう。

俺はそっと、ドアを少しだけ押し開けた。
こちらの声は聞こえるが、顔は見えない程度の隙間を作る。
そして、俺はちょっと慌てたようにドアをトントンとノックした後、一方的に捲し立てた。
「ノリスだ、さっきはご馳走様！　すまない、夜食で腹が膨れて忘

れていた！　ララティーナお嬢様から、夜食を持ってきて欲しいと頼まれていたんだった！　俺は見回りの仕事があるから、部屋まで届けて差し上げてはくれないか！？」

顔も知らないノリスさんに、すまないと心の中で謝りつつ。

「ったく、そそっかしいなぁ。普段小心者なクセに、大事な事は忘れるんだから。分かった、届けておくよ、ご苦労さん」

ドアの中からは苦笑する様な声でそんな返事が聞こえてきた。

そのまま、いかにも急いでいるといった感じで、

「ありがとう、感謝するよ！」

それだけ言って、慌てる風を装いその場を立ち去った。

そのまますかさず先ほどのトイレの用具入れへと篭り、じっと待つ。

やがてどれだけ待ったのか。

厨房の方から気配を感じた。

「お嬢様、お夜食をお持ち致しました」

そう言ってドアをノックする、コックみたいな服装の男。

俺はその男の様子を、暗がりから覗っていた。

ダクネスの部屋確認。

男が何度かノックをしていると、やがて部屋のドアが開けられた。
そこから出てきたのは、既に眠っていたのか、目を擦りながら寝間着姿で出てきたダクネス。
コックの男は慌ててダクネスの姿から目を逸らし、
「も、申し訳ありません、あの、ノリスの奴から、お嬢様が夜食をご所望だと……」
「……？　覚えが無いぞ？」
眠そうな顔で言うダクネスに、コックは慌てて頭を下げた。
「……！？　も、申し訳ありません、夜分遅くに失礼しました！」
そう言って、慌てて下がるコックを不思議そうに眺めながら、ダクネスが部屋に戻った。

俺が隠れている傍を、コックの人が首を傾げながら通り過ぎる。
……申し訳ない！

人気が無くなった所を見計らい。
俺はダクネスの部屋の前へと立つ。

そして、ドアをノックした。

「お嬢様、起きて下さいませ。こんな夜分に、サトウカズマと言う男が現れ、どうしてもお嬢様に面会したいと……！」
あのノリスとか言った見回りの声で、部屋の中に呼び掛けた。

しばらくすると、中から音がして……、
「……カズマ、アクア、めぐみんと名乗る者が来た際には、絶対に取り次ぐなと言ってあるだろう。……全く、こんな時間にあいつは……。全く……。全く……！」

ドアの向こうで、苦しそうな、それでいてどこか少し嬉しそうな。

腹の底から搾り出す様な、ダクネスの小さな声。

「しかしお嬢様、そのカズマと言う男がこう言っておりまして……。取り次がないなら、ギルドの連中に、ララティーナと言う呼び名を定着させる、と……」

その言葉に。

ドアの向こうで楽しそうに笑う声がした。

そして、

「……ふふっ、あいつは相変わらず……。カズマに、好きにしろと言っておけ。……どうせ、私はもう冒険者ギルドに顔を出す事も無い……」

ダクネスの沈んだ声が聞こえてくる。

……。

「しかしお嬢様、現在カズマと言う男が、色んな事を玄関先でこの家の者に吹き込んでおりまして。最近お嬢様は腹筋が割れてきて、それを気に病んでいる様子なのでお食事はたんぱく質を控えめにしてあげて欲しい、だの」

ドアの前でガタッと音がした。

「他には、お嬢様が実に可愛らしいワンピースを身体に合わせてニコニコと笑っていたので、是非とも可愛らしい服も用意してやって欲しい、だの」

再び、ドアの向こうでガタタッ……、という何かが崩れ落ちる様な音。

ドアの向こうから、ダクネスの震え声が聞こえてきた。

「そ、そそそ、その様な噂は……、その様な噂は全て嘘だ、虚言だ、惑わされるなと家の者達に言っておけ……」

……。

「……しかし。更にとんでもない事を言っているのですが、申し上げてもよろしいですか？」
「……言ってみろ」
俺は息を吸い込むと。
「……お嬢様が、日夜その熟れた身体の性欲を持て余し、処女の癖に夜な夜な……」
目に涙を溜め、頬を赤くしたダクネスが、薄い寝間着姿でドアを勢いよくバンと開けた。
そして、そのまま俺と目が合うと。
「！！？？？？？！？？！？？」
俺を見て、ダクネスはそのまま口をパクパクさせて、目を見開き息を吸う。
俺はもちろん……、
……突入ー！

15話（後書き）

なんか夜這いみたい

16話

カズマです。
日本出身の冒険者です。
夢は、金銭的に何の心配も無い状態でのんびりだらだら好き勝手に生きて行く事。
そんな平凡な夢を持ち、適当に、そして平和に生きてきた俺ですが。

「いたかっ！？　こっちの影にはいない！　相手は潜伏スキル持ちだ！　何も無さそうな所でも、触ってみろ！　絶対に逃がすな、捕まえろ！　ダスティネス家の名に賭けて、あの男を絶対に捕まえ、私の前に連れて来い！」
「「「かしこまりましたお嬢様っ！」」」

現在、マジギレのダクネスからどう逃げようかと思案中です。

「カズマーっ！　どこだっ！　今自分から大人しく出てきたならば、全力パンチ十発で許してやる！　だが、私が見つけた場合はそんな温い物で済むと思うなよっ！」

ブチ切れたダクネスが、潜伏している俺のすぐ傍で叫んでいた。
暗がりに身を潜め、俺はジワリジワリとそこから離れる。
そしてなんとかある部屋の前に辿り着くと、どうか鍵が掛かっていませんようにと祈りながらドアノブへと手を掛けた……！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺はダクネスの口元を右手でガッとわし掴むと、そのまま部屋の中に押し入った。

ダクネスが目を見開きうろたえ、俺の右手を左手で掴んだ。
そのまま俺を引き剥がそうと、俺の肩に右手を置くが……、
アクアの支援魔法で強化されている俺は、そのぐらいではビクともしない。

ダクネスのむーむーと呻く声を聞きながら、後ろ手にドアを閉め鍵を掛ける。
ガチャリという鍵の音を聞いたダクネスが、なぜか一瞬、ビクリと身を震わせた。
俺はそのままダクネスに反撃されない様、右手で口を押さえたまま、左手で俺の肩に置かれたダクネスの右手首を掴み、素早く部屋の中を確認する。
今まで寝ていたからだろう、部屋の中に灯かりは無い。
窓から射す月の光だけが、俺とダクネスの顔を照らしていた。

声真似をしていた時に、顔を隠していた黒いマフラーは下ろしている。
暗視能力の無いダクネスにも、月の光で俺の顔がしっかりと見えているはず。
このまま取り押さえて話をするにも、まさか床に押し付けるわけには……。

ダクネスの後方には大きなベッド。
俺はダクネスに右腕を掴まれたまま、そのまま右腕に力を込め、グンとダクネスを

持ち上げる。

「ッ！？」

まさか貧弱な俺に、片手で持ち上げられるとは思わなかったのだろう。

持ち上げるというよりも、俺が口元を掴んだ右腕をダクネスが掴み、ダクネスが自分の力で俺の腕にぶら下がっている格好だが。

そのまま一気にベッドまで駆け、勢いはそのままに、掴んだダクネスをベッドに押さえつける様にその体を押し倒した。

バフッと柔らかい音と共にダクネスの身体がベッドに埋まり、そのままダクネスに蹴られない様にと、ダクネスの両足の間に身体を入れる。

そして左手で掴んだままのダクネスの右腕を、ダクネスの頭の上、枕の上部に押さえつけた。

結果。

下着も付けず、黒のタンクトップ一枚と同じく黒のスパッツみたいな物を履いた薄着のダクネスを。

俺は片手を掴んで口元を押さえつけたまま、のしかかる様にベッドの上に押し倒す形となっていた。

よし、これでようやく抵抗されずに話ができ……？

……途端にダクネスが、俺の右腕を掴んでいた自分の左手から力を抜いて、そのままクタッとベッドの上に投げ出した。

ダクネスの目尻に薄く涙が浮かび、瞳が潤む。

そして月明かりの下、ほんのりと火照った頬が見て取れた。

俺に口を押さえつけられている為、フウフウと荒い息の音だけが部屋に聞こえ……。

……あれっ！？

ナニこの状況、ヤバくないか。

おい抵抗しろよ、いやされたら困るんだけど！

支援魔法のおかげで今ならダクネスに力負けする気は無い。

が、こんな、諦めたような無防備な状態になられると色々と……！

色々と、色々と問題が……！

俺は暗く静かな部屋の中、小さな声で囁いた。

「お、おいダクネス、誤解するなよ。今凄く妙な状態になっているが、アレだからな。俺はお前に話を聞きに来ただけだからな。勘違いするなよ……、おっ、おいっ！　諦めた様に目を閉じるなよ！　止めろよ！　どんどん妙な空気になっていくだろ！　止めろ！　ヤバイ、色々ヤバイって！」

ナニがヤバイって俺がヤバい。

具体的にはナニがヤバイ。

事情を聞くのと説得の為に侵入してみたら、ダクネスがエロかったのでそのまま流されるままに一線越えてきましたなんて言ったら、連日、あいつらが飽きるまで爆裂魔法とリザレクションのコンボを食らうかもしれない。

領主にダクネスの純潔が散らされるのを阻止する為に、先に俺が散らしてきたのでこれで問題解決！　なんて言えない、言える訳が無い。

俺はダクネスの口を押さえながら、そのままガクガクと揺さぶった。

「おい、いいからそのまま聞けよ！　俺はお前に事情を聞きにここに侵入して来たんだよ！　いいか？　今から口を押さえてる手を離すから、大声出すなよ？　いいか？　俺は話をしに来たんだからな？　な？」

俺の必死の訴えに、ダクネスが薄っすらと目を開けてそのままコクリと頷いた。

良かった……。

どうしてだか、今までのどの敵との戦いよりも緊張したし焦った。

「よし、じゃあ離すぞ？　叫ぶなよ？」

ダクネスが、コクコクと頷くのを見てから俺はその手をそっと離した。

もし叫んだら、またいつでも口を塞げる体勢を取りながら。

口を開放されたダクネスは、そのまま恥かしそうに、フイッと横を向く。

「その……。カズマ、せめてお前も横を向いてはくれないか。こんな至近距離でこんな状態で見つめ合いながら話をすると言うのは……」

そのダクネスの言葉に、俺は慌ててダクネスが向いている方とは反対側に顔を向け。

「お、おう、そうだな。す、すまん、こんな状態で！　……しかし、お前アレだよ、何であんな手紙……」

俺がダクネスから顔を背け、ダクネスから注意を外したその時だった。

「曲者ーっ！　犯され……むぐう……っ！」

ちょっ、やりやがったなこの女！

畜生油断したクソッタレ！

慌ててダクネスの口を押さえたが既に遅く、廊下からバタバタと音がする。

それはこちらに駆けて来る誰かの足音。

ヤバイヤバイヤバイどうするっ！

俺の下では口元を押さえられたダクネスが、勝ち誇った様な挑発的な目で俺を見ていた。

あきらかにその目は笑っている。

この女ー！

「お嬢様！　どうなされましたお嬢様！　只今ドアを開けます、失礼します！」

そんな声が聞こえると共に、ドアの鍵の部分からガチャガチャと……！

くそっ、勝ち誇ったダクネスの顔が憎たらしい！

俺がこれ位で終わると思うなよ……っ！

俺は一つ咳払いをする。

そして、ドアに向け……！

「開けるな！　今ちょっと人に見せられない格好をしている！　すまない、ちょっと激しい遊びをしていて、感極まって叫んでしまった！」

その俺の声を聞いたダクネスがギョッと目を見開いた。

そう、ダクネスの声色である。

「ハ……、しかし、お嬢様の無事を確認しません事には……。それに、こんな夜分に遊びなどと……」
ちょっとこちらの様子を怪しむような、屋敷の住人の声。
それもそうだ。
侵入者に脅されているとも限らないからな。

「激しい遊びと言うのは大人の一人遊びだ、言わせるな恥ずかしい」
「お嬢……っ！？」
ドアの外でギョッとした様な声。

ダクネスが、空いている左手で俺の右手をガッと掴んだ。
「何だ、無事を確認だとか言って、そんなに私のけしからん姿を見たいのか、このど変たいいいいっ！？」

ダクネスが、目に涙を浮かべて物凄い目で俺を睨み、俺の右腕を握り潰すかの様にギリギリと締め上げてくる。
痛みで声が上擦るが、それを聞いた外の人間が、再び慌てた様に声を上げた。

「ど、どうなさいました！？」

俺は右腕を締め上げられる痛みに耐え、
「な、なんでもない！　いかがわしい魔道のおもちゃを付けっぱなしだったのを忘れてえええっ！　あああ、お、折れちゃう！　おかしくなっちゃう！　これ以上は本当に！　本当に壊れるーっ！」

「しっ、失礼しましたっ！　じじ、自分はこれでっ！！」
ドアの外からバタバタと慌てて駆けて行く音。
どうやら外にはダクネスの大声を聞きつけて何人かの人々が集まって来ていた様だったが、今の見回りの人間がどんな説明をしてい

るのか、外からは人が離れていく気配がした。
俺はへし折られる寸前の腕の痛みになんとか耐え、涙目でブルブル震えるダクネスにニヤリと笑い掛けた。

俺の右腕から手を離し、ダクネスが口を押さえている俺の手の平を、指でツンツンと突いた。
もう大声は上げないから離せと言う事だろう。

俺が右手を離すと、ダクネスはふうと息を吐く。
ダクネスに握られていた自分の右腕を見ると、そこには真っ青な手形が付いていた。
アクアの防御力強化の支援魔法が無ければ本気で折られていたかもしれない。

ダクネスが、疲れたようにため息を吐き、
「……全く、相変わらずとんでもない奴だ。どうするんだ、これで明日から私は、家の者に陰で変態令嬢呼ばわりをされてしま……、んん……っ！？」
言い掛けて、ダクネスはブルリと体を震わせた。

「お前今、それも悪くないとか思っただろ」
「思ってない」
「思っただろ」
こんな時でもコイツは……。

「で、一体何がどうなったんだよ。パーティ抜けるってどういうこった。あいつらも心配してるぞ。せめて事情を説明しろよ。俺達は……」

俺達は仲間だろと言い掛け、勢いで臭いセリフを言いそうになった自分に恥かしくなる。

ダクネスは、そんな俺の気持を見透かした様にふふっと笑い。

「大切な仲間だからこそ、言えない事もある。……まあ、大した事では無い。家の事情だ。当家は、あの領主に金を借りていた。それは、父がゆっくり返していくと言う事だったのだが。……実は最近、父の体が思わしくなくてな。それで、あの領主が催促をしてきた。父の存命中に返せるのか、とな。……で、私が嫁に来るなら借金をチャラにするそうだ。ただ、それだけの話だ」

なんだそりゃ。

「お前ん家、あの領主にそんな借りがあったのか？　つーか、お前の父ちゃん国のお偉いさんじゃなかったのかよ、王様とかはなんとかしてくれないのかよ。それにそんなの……」

俺は言葉に詰まってしまった。

そんなの……。

まるで、

「そう、借金のカタに取られる訳だ。……だが、これは貴族の家では珍しいことでは無い。貴族の娘が他家に嫁に行く。ただそれだけの事だ」

ダクネスが、何でもない事を口にするかの様にそう言った。

……。

俺の表情を見たダクネスが、
「そんな顔をするなカズマ。……私の男の趣味は知っているだろう？　あの領主は、よほど早く私を物にしたいのだろうな。結婚の日取りをとにかく早くと、色んな儀礼もすっ飛ばして話を進めている。鼻息荒いあの豚領主は、それこそ結婚式が終わった瞬間に、初夜まで我慢できずに私を控え室で押し倒してきそうな勢いだったな。ふふっ、あの様子では飲まず食わずで数日はこの体を貪られてしまいそうだ。壊されてしまいそうでドキドキするな……！」

俺を誤魔化すかの様に、冗談めいて軽く笑った。
……なら、なんでそんなに悲しそうな、寂しそうな顔なんだと言ってやりたくなる。

俺は覆いかぶさった状態で、月明かりの中、久しぶりに会うダクネスを改めて見た。

ダクネスの、気高そうな、そして気の強そうな青い瞳が俺を真っ直ぐに見つめている。
金糸の髪がベッドに広がり、それが月の光を反射して、淡く輝いていた。
口を押さえられた状態で暴れたせいか、若干荒い息をつき。
火照った頬から鎖骨にかけ、ひとしずくの汗が伝った。
まだ荒い息のせいで、呼吸の度にタンクトップの胸元が強烈な存在感と共に上下する。
そして、俺との揉み合いの所為でタンクトップの裾はめくれ上がり、全身に熱を持ったままのダクネスの体は、艶やかな赤みを帯び……。

……俺は急遽、頭の中で、精神がクリアになる魔法の詠唱を開始した。

――居間に寝転がる半裸の母親――

――誰のだと期待した、黒レースの祖母ちゃんの下着――

――そして赤ショーツに覆われたダストの尻よ――

――願わくば我が心に、一時の平穏を与えたまえ！――

魔法の詠唱が功を奏し、ビックリするぐらいに冷静になる。

よし、大丈夫だ。

これなら余裕で耐えられる。

そんな平静を取り戻した俺に。

下から、じっと俺の顔を見続けていたダクネスが、月明かりの下優しく微笑み、小さな声で囁いた。

「……このままあの豚領主にむざむざと奪われるぐらいなら……。

……カズマ。……いっそ、ここで二人で大人になってみるか……？」

先ほどの魔法の効果はどこかへすっ飛んで行ったらしい。

落ち着け佐藤和真、よく考えろ。

ダクネスはもう嫁に行く気だからそんな事を言っているんだ。

もう諦めているから。

俺達とは二度と会う事は無いと、そう考えている。

このままで終わる訳が無いだろう？

そう、ダクネスをあんな奴の嫁になんざ送り出せるか、絶対なんとかしてやる。

そうなると、ここで一線越えてしまえば絶対に気まずくなる。
パーティの中がギクシャクする。
絶対に今まで通りの関係じゃ居られなくなる。
ダクネスと恋人にでもなるつもりか？
違うだろう、しっかりしろ佐藤和真、お前は此処に何しに来たんだ、落ち着け！

ダクネスが、俺の右手をそっと掴んだ。
その手を自分の体に近づけて……！

流石に、そのままいきなり胸に持っていく勇気は無いのか、ダクネスは不安げな表情を浮かべ、掴んだ俺の手をどこにやるのか持て余していた。
俺は二秒ほど深く悩んだ結果……！

もう後の事は考えず、流される事にしました。

ダクネスに掴まれたままの右手をそっとダクネスの白い腹に置くと、ダクネスがピクリと震え。
そのまま、静かに目を閉じた。

俺は何か言わねばならないと思い、そのままダクネスの白く滑らかな腹の上に手を滑らせ……！

「……お前、本当に腹筋割れてんのな」

俺はダクネスに、みぞおちを思い切り蹴りつけられた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

月明かりを頼りに、俺とダクネスは部屋の中央で対峙している。
さっきまでの色気のある展開はどこへやら、殺気立ったダクネスが拳を握って構えていた。

「悪かった、俺が悪かった！　ついうっかり！　すまなかった、この空気に耐えられなかったんだ！」
「この私だって本気で怒る時もある！　おのれ、覚悟を決めた女をここまで愚弄し、タダで済むと思うなよ！　ぶっ殺してやる！」
「お嬢様！　ぶっ殺すなんてお下品な言葉遣いはおやめください！　……何だよ、お前俺の事好きだったの？　ならそう言えばいいじゃん！」
「誰がお前みたいな大バカ者をっ！　真剣に頭にきた！　あと、お嬢様って言うな！」
ダクネスが、叫ぶと同時に殴りかかった。
それを、支援魔法で速度も強化された俺は簡単にヒョイとかわす。

廊下の方から、ドタドタと人が駆けてくる音。

夜中にこれだけ騒げば、流石にもう誤魔化せないだろう。
「ふふっ、どうだカズマ。今に家の者が来る。このまま見つかればタダでは済まんぞ。貴族の令嬢の寝室に侵入したのだ。私の擁護が無ければ下手をすれば首が飛ぶ。さあ、土下座の一つでもしてもらおうか！」

攻撃をあっさりかわされた事も頭にきたのか、何時に無く怒りに燃えるダクネス。
やがてドアの前に人の気配がし、ドンドンとドアを叩く音。
「お嬢様！　お嬢様、開けますよ！」
その家の者の声を聞きながら、ダクネスが手を広げ掴みかかる体勢を取り、そのまま俺に飛び掛かった。
今の俺はアクアの支援で強化済みだ。
ダクネスにも力負けする事は無い。
散々心配かけさせられて、色々苦労して此処に来てんだ。
今更頭なんて下げられるか！
「掛かって来い、耐久と筋力しか取り柄の無いエロセイダー！　最弱職の冒険者に力でも負けて、泣き崩れるところを拝んでやる！」
俺はダクネスの声で言い返しながら、掴みかかるダクネスと組み合い、がっつり手四つの体勢に入った。
「わ、私の声真似をするなっ！」
「お、お嬢様！？　一体何を遊んでいるのですか！？」
ドアの外から聞こえる戸惑いの声。
俺とダクネスが同じ声で言い合っているので混乱しているのだろう。
続いて、ガチャガチャと鍵を開ける音。
俺はそちらに顔だけ向けて……！
「開けちゃらめえっ！　ララティーナ、今全裸なのっ！　見ちゃらめえーっ！」

「ええっ！？　も、申し訳……！」

俺の声真似に、鍵を開ける音が一瞬止んだ。

俺と組み合う手に力を込め、歯を食い縛りながらダクネスが怒鳴る。

「私の声でらめえとか言うなっ！　おい、遠慮なく入って来い！　侵入者だ、私の声を真似る魔法を使っているっ！」

「はっ、ははっ！　今すぐにっ！」

気を取り直した様な声と共に、再び響く、鍵を開けようとする音。

くそったれー！

「ははははっ！　カズマ、私の勝ちだな！　何時ぞやはこの屋敷の修練場でお前と試合した時には負けてしまったが、嫁に行く前、最後にお前に勝てて良かった！」

ダクネスが勝ち誇った様に言ってくる。

俺が急にフッと力を抜くと、前傾姿勢で勝ち誇っていたダクネスが前のめりになる。

その瞬間、ダクネスと掴み合っていた手のうち左手を、なんとかバッと抜き取ると、そのままダクネスのタンクトップの背中に突っ込んだ。

もう声真似する事もなく、大声で。

「『フリーズ』ッッッ！」

「んああっ！？」

いきなり背中に氷結魔法を掛けられて、ダクネスが悲鳴を上げながらビクンと震えた。

そのまま頬を紅潮させて、身を震わせながらぺたんと膝をつく。

俺はダクネスに掴まれていた右手も引き剥がし、

「お嬢様っ！」

バンと開けられたドアに向け、そのまま右手の手の平を上にして突き出した。

「『クリエイト・アース』！」

手の平の上に生成されるサラサラの土。

それを見たダクネスの、警告の声と俺の魔法の声は同時に響いた。

「全員、目を……！」

「『ウインド・ブレスト』ーッ！」

右手の上の土に左手をかざし、部屋に突入してきた連中に吹き飛ばした！

「いたかっ！？　こっちの影にはいない！　相手は潜伏スキル持ちだ！　絶対に逃がすな、捕まえろ！　ダスティネス家の名に賭けて、あの男を絶対に捕まえ、私の前に連れて来い！」

「「「かしこまりましたお嬢様っ！」」」

そんなダクネス達の声を聞きながら、なんとかあの場を切り抜けた俺は、身を低くしながらコソコソと廊下を進む。

「カズマーっ！　どこだっ！　今大人しく出てきたならば、全力パンチ十発で許してやる！　だが、私が見つけた場合はそんな温い物で済むと思うなよっ！」

完全に頭に血が昇っている様子です。

これでは話にならないので、今日の所は引き上げだ。

と言うか今のダクネスに掴まったら、アクアのリザレクションを知っているだけに、本気で殺されてもおかしくない。

マジ震えてきやがった……！

俺は屋敷から脱出するべく、その辺の手近な部屋に侵入した。

その部屋には運良く、ドアに鍵は掛かっていなかった。

よし、後は窓から脱出だ。

俺がそう考えながら窓に近付くと……。

部屋の中央、ベッドの方から、とても小さな、弱々しい声が聞こえた。

「……そこに……。誰か居るのか……？」

それは、ダクネスの親父さん。

ロクな灯かりも無い部屋の中。

ダクネスの親父さんの顔が痩せこけ、青白く見えるのは、月灯に照らされているからという理由だけでは決してなかった。

１６話（後書き）

本筋と関係ない妙な所に力入れて書いてたら、まさかの続く。
何があって借金したかを書いてサクッと終わるはずが申し訳ない。
今１６話目ですが、三部は２０話目で終了予定です。

三部はダクネス編なので、現在彼女がメインヒロインみたく目立ってております。
四部がめぐみん編。
五部のアクア編で完結を予定。

当作品はＫＥＮＺＥＮを目指してます。

17話

「ああ……君か……。こんな夜更けにこんな所に……。……なるほど。ウチの娘は、良い仲間に恵まれた様だ……」

月に照らされたダクネスの親父さんは、そう言ってこけた頬で笑い掛けた。

この人は、この時間にここにいる俺の姿を見ただけで、何の目的で屋敷に来たのかを見抜いた様だ。

流石王国の懐刀とか言われていただけはある。

しかし、以前会った時の面影が無い。

ビックリするほど痩せこけて、親父さんは、力無く弱々しく笑っていた。

病か何かで、短期間でこんなに悪くなる物なのか？

廊下の外ではバタバタと人が駆け回る音。

「親父さん、弱ってる所申し訳ないんですが、お宅の娘さんが怒り狂ってるんで説得してもらえませんかね？」

俺の言葉に親父さんが布団の中で楽しそうに笑った。

「そうか。ここの所暗く塞ぎこんでいたアレが、そんなに怒っているのか」

親父さん、ちっとも笑う所じゃないです。

……そうだ。

「親父さん。聞いてもいいですか？　この家はあの領主のおっさんに借金があるって聞いたんですけど。でも、あんなおっさんに親父

さんが借金する様にも見えないんですよね。そもそも、ここの家って金の掛かる暮らしをしてる様には見えませんし。なぜ借金なんか……」

俺は疑問に思っていた事を親父さんに尋ねてみた。

体の具合が悪い所を申し訳ないが、ダクネスが教えてくれない以上親父さんに聞くしかない。

「……うん、カズマ君。君はなかなか頭が良いな。やはり、君に娘を任せるとしようか。すまないんだが……。あれを連れて、どこかに逃げてはくれないか……」

また何言い出すんだこの人は。

なぜ借金が出来たかを聞いてるっつーのに、なぜ娘との駆け落ちみたいな事をすすめるのか。

「いやお断りします。凄くお断りしますよ。そもそも俺、今お宅の娘さんに追い掛け回されてここに逃げてきたんですが。随分とおしとやかな娘さんに育てられましたね」

「はっはっ、そうだろう。あれは本来はおしとやかで、とても優しい子だ。純粋で恥かしがりやで誰かに迷惑を掛けるのを一番嫌がる」

それは誰の事ですかと突っ込みたくなったが黙っておいた。

俺の皮肉をサラッと流し、それどころか妙な娘自慢をされてしまった。

何の病かは知らないが、きっと親父さんは病に脳までやられてしまったのだろう。

親父さんは、体の方は弱っているものの、未だ強い光を眼に宿し、俺を真っ直ぐに見つめてきた。

「借金の理由の事は聞かないでくれんか。借金は、娘の意思で出来た物だが……。何、娘を連れて逃げてくれたら、後はこの屋敷でも売り払えばそこそこの金にはなる。それに、今色々と手を尽くして

いる。借金自体が無くなるかもしれん」

借金が無くなるかもって、つまり、不当な借金って事か？
まあ、そっちは敏腕の親父さんがどうにかするのだろう。
健康状態が凄く気になるが……。
だが、それよりも。

「娘が先走り、嫁ごうとしている。これは何としてでも止めたい……。カズマ君、娘は君の事を、憎からず想っている。親の欲目かもしれんが、あれは器量は良いと思う。……どうだ？」

「どうだと言われても。俺、さっきお宅の娘さんにぶっ殺してやるって言われましたが」

それよりも。
「親父さん、どこが悪いんですか？　ウチに優秀な……、いや、魔法だけは優秀なアークプリーストがいるんですよ。なんとリザレクションまで使える程の。どこが悪いのか知りませんが、ちょっとそいつ連れてきますよ」
そう、こんな時こそあの穀潰しを役立てる時だろう。
今日の侵入では地味に支援魔法の数々が役立ってはくれたが。
だが、俺の言葉に親父さんは微かに笑い。

「……いや、無駄だ。回復魔法では病は治せない。そして、病で死んだ者をリザレクションで生き返らせる事は出来ない。病は、寿命だ。寿命で死んだ者には、神の奇跡は起こらない。死因がどうあれ、寿命を全うして神の元へ行く事は、本来喜ぶべきことだ。……だから、君がそんな顔はしなくてもいい」

……俺は、感情が知らず知らずに顔に出ていたらしい。

「……せめて、ちょっとウチのアークプリーストに診察だけさせて貰えませんかね？　どうも、このタイミングで親父さんが体調崩すってのが……」
「領主に毒でも盛られたと思ったかね」
俺が言う前に、親父さんが先に言った。

……その通りだ。
あの領主のダクネスへの執心ぶり。
何かあると考えた方が良いだろう。
が……。
「既にそれは調べたよ。いや、真っ先に調べた。毒は検出されていない」

……それもそうか。
この親父さんは敏腕貴族だ。
きっと俺なんかよりも色々と考えている。

「まだかっ！　まだ見つからんのか！　カズマーっ！！　出て来い！　そして、家の者達にお前が声真似をして言った事を説明し、誤解を解け！」
廊下から聞こえるダクネスの声。
それを聞いて、親父さんが苦笑する。
「なあ……。あれを頼むよ」

い、嫌だなあ……。

「バルターって居たじゃ無いですか。いつぞやの見合い相手の。あいつに金借りるってのはどうでしょう。というか、王様とかに掛け合って、どうにかしてもらうって事はできないんですかね？　親父さんは、あの領主の監視を任されたって聞いてますよ。あの領主は

監視を付けられる様なヤツなんでしょう？　もしその借金が、アイツに不当に背負わされたって言うのなら……」

俺の言葉に、親父さんは目を瞑り。

そして、静かに首を振った。

「そんな事をしても、ウチの娘は嫁ぎに行く。……アレは誰に似たのか、頑固でなぁ……。きっと国王に金を用立ててもらっても、そんな事に国民の税金を使うなとか言って、自分の身と引き換えに借金棒引きにして来るだろう。……本当に、なぜこんな分からず屋に育ったのか」

全くです。

本当に、全くですよ。

あんた親なら、あの頑固な娘をなんとかしてくれよ……。

と、その時突然、ドアがバンと開けられた。

そこに居たのは荒い息を吐き、仁王立ちでこちらを睨むダクネスだった。

「ふふふ、カズマ……。こんな所に居たのか。ははは……、さあて、どうしてくれようか……！」

「おい病人がいるんだから、もうちょっと静かに開け閉めしろよ！　それと落ち着け！　俺はお前が心配で、皆を代表してここに……！」

目の据わったダクネスは、俺の言葉に耳を傾けようともしなかった。

「やかましいわっ！　心配している人間が、よくもこの短時間でここまで私の評判を下げてくれたものだ……！　これは私の家の話だ、お前はこんなドロドロした事には首など突っ込まず、屋敷でせこせ

ことジッポでも作っていろ！」

この女ーっ！

「もういいだろ、借金なんて！　そんなもんシカトして逃げちまおうぜ！　それで、皆で新しい土地でやり直せば良いだろうが！　それに、お前分かってるんだろうな！　このまま俺が何もせず、自分の屋敷におめおめ帰って行ったら、あの二人！　特にめぐみん辺りは絶対に何かやらかすぞ！　お前の結婚式の当日には、式場そのものが消滅してるかもな！」

「そんな事をしてみろ、お前を主犯としてひっ捕らえてやるからな！　それが嫌ならあの二人をしっかりと引き止めておけ！　私は逃げない！　私が逃げれば、その分どこかにとばっちりがいくのだ！　……そして、その話とは別に……！」

ダクネスが、言いながら俺に向かって駆け出した。

嫁に行く前に、さっきの決着を付けておく気らしい！

ヤバイ、殺られるっ！

俺はそのまま踵を返し、部屋の窓に向かって駆け出した。

そしてそのまま部屋の窓に向かって勢いを殺さずに……！

「この分からず屋の頑固女が！　もういい、勝手にしろっ！　後で泣きを見ても知らねえからな！」

俺は捨て台詞を言いながら、窓に向かってライダーキックの要領で飛び蹴りを……！

「助けて欲しくなったなら、屋敷に謝りに来い！　心配掛けてごめんなさい、私はカズマ様の助けが必要ですってな……グハアッ！？」

窓ガラスは意外に硬く、蹴りで簡単には割れてはくれず、俺はそのまま体ごと窓にぶち当たった。
蹴りと言うよりも体当たりに近い状態で叩き割られた窓ガラスと共に、俺はバランスを崩してそのまま地面へと落っこちた。
二階ぐらいの高さとは言え、肩口から受身も取れずに落ちた俺はひとしきり痛みで転げ回る。

そんな俺を、窓に駆け寄ったダクネスが、
「大丈夫かカズマ様！　お前こそ、ごめんなさいダクネス様、治療してください助けてくださいと言えば助けてやらん事もないぞ？」
肩を震わせ、口元に手を当てて、笑いを堪えながら言ってきた。

俺は痛む体を引きずりながら、騒ぎを聞きつけ、こちらに駆けて来る守衛から逃げる為に立ち上がる。
そのまま鉄の柵をよじ登り……！
「ち、ちくしょーダクネスっ！　お前、泣きついて来るまで絶対助けてやらねえからなっ！　クソッ、来るなー！　『クリエイト・ウォーター』！　『フリーズ』ッ！」

俺はニヤニヤと実に楽しそうにこちらを見送るダクネスに、捨て台詞を吐きながら。
俺を追う守衛の人達を足止めしつつ、屋敷へと逃げ帰った。

「ふぐぐぐぐ……！　アクアー！　アクアー！！　ヒールください！　ヒールくださいっ！！」

俺は何とか屋敷に帰り付くと、部屋には戻らず広間のソファーでうとうとしながら、卵を抱いていたアクアに近付く。

ダクネスも、流石にアクアやめぐみんには顔を合わせ辛いのだろう。

屋敷にまではダクネスの家の人達は追っては来なかった。

「……ふあ？　……ちょ、カズマなにそれ？　ズタボロね！　ダクネスに会えたの？　何でそんなにボロボロなの？　またバカな事でも言ったの？」

俺に矢継ぎ早に聞きながら、アクアが俺にヒールを掛ける。

と言うか、なんでお前はボロボロの俺を見てちょっと嬉しそうなんだ。

その騒ぎに、同じく広間のソファーで寝ていためぐみんが目を覚ます。

「……カズマ、お帰りなさい。どうしたんですか？　またロクでもない一言でも言いましたか？　ダクネスの説得は出来ました？」

「……」

お前ら二人が俺の事を日頃どんな目で見てるのかが良く分かった。

アクアのヒールで傷は癒えたが、なんだか無性に胸の奥がもやもやする。

アクアの治療を受けた俺は、イライラが収まらないまま二階の自分の部屋へと向かう。

「あいつの事はもうほっとけほっとけ！　泣きついてくるまで放っ

ておけ！　俺はもう知らねえ、後は任せる！」

ふてくされた様な俺の態度に、アクアとめぐみんが顔を見合わせる。

「えー……。ダクネスに、この子が生まれたら小屋を作るの手伝って貰う約束してるんですけど……」

アクアがしょんぼりしながら、抱いている卵に視線を落とす。

そしてめぐみんが。

「カズマ、何があったか知りませんが、ふて腐れている場合ですか？　ダクネスが、お嫁に行っちゃうんですよ？　本当にこれでいいんですか？」

二階へと向かう俺の背中に、そんな事を言ってきた。

本当にこれでいいのかは、あの頑固者に言ってやれ！

街は連日お祭り騒ぎになっていた。

あのケチで知られる領主が、街に少なくない金を出し、大々的に結婚の話を広めお祝いのムードを作っているらしい。

まるで途中で心変わりなどさせない様に、外堀を埋めていく様な感じだ。

結婚の日取りも決まり、既に発表された。

よほど領主は待ちきれないのか、本当に色んな物をすっ飛ばしている様で、式は一週間後を予定している。
きっと今も、鼻息荒くダクネスと結婚できる日をソワソワと待っているのだろう。

「カズマ。もう何度も言いますが本当にこれでいいんですか？　いいんですか？　いいんですかっ！？」

俺が広間のテーブルでせこせこと色んな物の試作品を作る中、めぐみんが鼻息荒く詰め寄ってくる。
俺はタールプラントと呼ばれる植物の樹液と、あるスライムの消化液を混ぜ合わせたもので、せっせと新しい商品の開発にいそしんでいた。

この二つを混ぜ合わせると、半乾きのビニールみたいな素材が出来る。
これで今、俺は朝から新商品を作っていた。
俺は作業の手は止めないまま、めぐみんに言ってやる。
「もう何度も言ったが、本人があれだけ頑固に言い張ってるものはしょうがないだろ。ほっとけほっとけ。まだ一週間ある。泣きついてきたらなんとかしようぜ。泣きついてこなかったら、俺は放っておく」

言いながら、俺は小さなスポイトの様な物で、ビニールみたいな物の中にチュッと空気を吹き込んだ。
この作業が難しい。
きっと、これをもっと簡単に大量生産できる方法はあるのだろうが、今は試作品を作っている段階だから我慢しよう。

俺とめぐみんのやり取りには全く関わらず、隣でアクアがマイペースにソファーの上で卵を抱いて歌っていた。
何で朝っぱらから歌ってるんだと聞いたら、歌を聞かせてやるのは胎教に良いと聞いたからだそうだ。
うっとうしい事この上ないが、下手に試作品作りの邪魔されるよりはと放っておいてある。
やたら歌が上手いのがなぜかちょっと腹が立つ。

……と、めぐみんがいきなり俺が作っていた試作品をバッと取り上げた。
「こんな事してないで考えるべきですよ！　私はこのままだなんて認めませんから！　このまま結婚式当日を迎えたなら、私にも考えがあります！」

言って、めぐみんが俺から取り上げた試作品を握り締める。

「おい、あまり物騒な事考えるなよ？　あんまり無茶やらかすと、ダクネスだって困るんだからな。……ほら、それ返せよ。朝から大分時間掛けてようやくそこまで作ったんだ」
俺はいきり立つめぐみんを宥めながら、返してくれと片手を出した。

「……これって、何に使う物なんですか？」
めぐみんがソレを掴んだまま、しげしげと見つめている。
「それはな、俺の国にあったプチプチって言われる物を試作してみた。材質や製法は違うから感触は今一だが、まあまあ上手く出来てると思う」

俺の説明にめぐみんが、
「……何に使う物なんです？」

そう言って小首を傾げた。
「潰すんだよ。プチプチと。潰して遊んで、心の平穏を保つ物だ」
「……それだけ？」
「それだけ」
……。
めぐみんが、俺が長い時間掛けてようやく作ったプチプチを、雑巾絞りみたいに一気に捻った。
「なあああああーっ！！」
「あああああーっ！？」
めぐみんが叫びながらプチプチを一気に絞り上げ、それを見て俺も思わず叫ぶ。
めぐみんはふうと満足気に息を吐きながら、絞り上げた元プチプチを俺にぽいと渡してきた。
「……確かに心の平穏は保てました。ちょっと気持ち良かったです」
そう言ってスタスタと外に出て行くめぐみんに、文句を言う事もなく俺はガクリと膝をついた。
お、俺の長時間の作業が……！
俺の隣では、そんな騒ぎなど知った事かとばかりにアクアが歌う。
「ずーいずーいずっころばっし、ごっまみっそずいー」
「うっせぇ！」
俺は思わずアクアに怒鳴った。
……ああクソッ！
アクアにあたってどうする、何をイライラしてるんだ俺はっ！

来てしまった。

本当にこの日が来てしまった。

そう、今日が結婚式の日になっている。

結局アイツは助けを求める事も無く。

「カズマ、行きますよ！　式なんてぶっ潰してやりましょう！　……フフフ、うっかり魔法が飛んで式場が消滅したり、うっかり魔法が飛んで領主邸が消滅したりなど良くある事です」

「おい止めろ、マジ止めろ。また借金背負うどころか、今度こそ犯罪者だぞ」

屋敷の広間のテーブルの上に、俺は今日の商談の為、今までこつこつと作り続けてきた物を整理していた。

俺はここの所ずっと色々な発明品を作り続けていたが、それもようやく終わりに近付いてきた。

これ以上は知恵が出ない。

色々な商品の設計図に、考え付く限りの、物事の効率的な作業法。

農法やらなんやらも、細かいところまでは分からないが、日本人としての基本知識ぐらいは余す事なく書き記してみた。

他にも様々な物があるだろうが、今はちょっと思い付かない。

ダクネスの挙式は今日の昼から始まるそうだ。

俺はそれを見に行くつもりは無かった。
なので、午前中にウィズとの商談を入れてある。
ここの所貯め込んできた、大量の知的財産権や新商品。
ウィズの商売のツテで、俺が持っていてもあまり意味の無い物は売ってしまう事にした。

ダクネスが助けを求めてこない以上、これ以上首を突っ込むのも躊躇われる。

つまらない意地を張っている。
そんな事は分かっているが……、

「カズマ、そろそろ意地張るのもいい加減にしてください、このままダクネスが結婚しちゃっても良いんですか？」

……。

「……。お前以前は、本人が嫌がってるのに見合いさせるなんて間違ってるって反対してたろ。……今回は、本人が望んだ結婚だぞ」
俺の言葉に、めぐみんがうう、と小さく呻き、うな垂れる。
だが、バッと顔を上げ。

「カズマは！　ダクネスにバカな男に引っ掛かって欲しくないから、あのバルターってマトモな人に押し付けようとしたんじゃないんですか！？　このままあの太った領主とダクネスが結婚して、本当にそれで良いんですかっ！？」
「良い訳ねーだろーが！」

思わず俺は、めぐみんに怒鳴り返していた。

いきなりの俺の言葉に驚いためぐみんが、そのままたじろいで動きを止める。

「良い訳ねーだろ！　俺だって嫌だよあんな奴にダクネスを持ってかれるのは！　外見がどうとかじゃ無く、評判だって悪い！　お前は知らないだろうがなぁ！　あのおっさんは、目に付いた可愛い子や良い女はどんな手を使っても物にして、しかも、飽きたら少ない手切れ金渡してポイだとよ！　今まで色んな子を孕ませて、その責任取るでもなく放りだすんだとよ！　一番タチが悪いのは、そんな好き放題やってメチャクチャやってるのに、何故か確定的な証拠が出てこないってこった！」

めぐみんが再び俯いた。

「……すいません。ダクネスの相手を調べてたんですか……」

調べてみるとあの領主は、噂以上にロクでもなかった。

素人の俺が調べただけでも、出るわ出るわ色んな話が。

賄賂に、不当な強制搾取。

しかし、なぜか不思議と物証がない。

被害女性達はなぜか頑なに口を閉ざし、そして悪事の証拠は出ないので、国の方でも持て余しているとの事だ。

だから、ダクネスの親父さんがその証拠を探る為、そして、目付け役、相談役として派遣されたのだ。

めぐみんが、杖をぎゅっと握りしめ。

「なら、なおさら放っておけないでしょう？　カズマなら、また何かロクでもない事考えたりして式をぶち壊したりは出来ないんですか？」

こいつは俺をどんな目で見ているのか、その内問い正してやろう。

「どうにも出来ない。まず、借金が幾らあるのかが分からない。ダクネスが教えてくれない。次に、金を調達出来てもダクネスの説得が出来ない。あの頑固者、絶対に金を受け取らないだろう。あいつをどう説得すればいいのかが分からない。そして最後に……」

めぐみんが首を傾げた。

「最後に？」

「……俺達は一般庶民で、相手は仮にも領主様と貴族の令嬢の結婚式。警備も厳重で、もう今更どうやったって、こっちからは近づけない。……むしろ、それがあるから今までダクネスから助けを求めてくるのを待ってたんだ。ダクネスの屋敷も、一度俺が侵入した以上、もう二度とは侵入させてはくれなかっただろうしな。……俺、貴族にコネなんてないよ。ダクネスの親父さんは重病だし、面会を求めても取り次いでもくれないだろう」

元々の、身分の違いって奴だ。

そもそもが、住む世界が違うのによくも今まで一緒に冒険できたもんだ。

俺がそんな事を幾分投げ槍気味にめぐみんに言うと……。

「……分かりました。カズマも、それなりに相手の調査をしてたり何とかしようとしていた事は理解しました。私にとっては、それだけでも充分です。……後は、私は自分で考え、後悔しない道を行きます。カズマも、どうかよく考え、そして後悔しない道を行かれるように……」

一体何を食べておかしくなったんだとばかりに、何時に無く真面目な顔で、まるで見識ある魔法使いみたいなセリフを吐くめぐみん。

俺が唖然としていると、めぐみんはスタスタと屋敷から出て行ってしまった。

止めるべきだったか？

……いや、アレは止まらないだろう。

俺はめぐみんを見送って、広い屋敷に一人ぽつんと佇んでいた。

アクアは、珍しく来客中だ。

今は二階の自分の部屋で、客の話を聞いている。

何だか仕事の話だとか言っていたが、今日はちょっとアクアの仕事を手伝ってやる気分じゃ無い。

広い屋敷の中に一人で居ると、無性に寂しさを覚えてくる。

……しょうがないよな。

貴族のお嬢様と一緒に冒険だなんて、それこそ日本に居た頃には考えられない事だった。

そう、庶民の子の俺が、アイツと出会えて今まで一緒に居れたって事が幸運だったのだ。

……。

広い屋敷だなあ……。

俺はソファーに深々と腰を埋めながら、深々とため息を吐く……。

広間の前の玄関が、突然バンと開け放たれた。

「へい毎度！　開けてびっくりがっかり店主ではロクな目利きが出来ない為、目利きにおいては定評のある見通す悪魔、我輩が商談に来た。我輩の登場に喜びひれ伏し、よく来なさったと言うが吉。さあ、出来上がった商品の数々を見せて貰おうか」

どうしようもないタイミングで、どうしようもないのがやって来た。

18話（前書き）

最初の部分はダクネス視点となっております。

18話

「とても……！　とてもお綺麗ですよお嬢様……！　式が終わったら、是非お屋敷で伏せっておられる旦那様にもそのお姿を見せてあげてください！」

新人のメイドが、私のドレス姿を見て嬉々として褒め称えた。
その言葉に思わず苦笑を浮かべてしまう。
この新人メイドは、当家の細かい事情も結婚への経緯も知らない。
領主との式が終わって、父にこの姿を見せたなら、きっと父は悲しむだろう。
我侭なのは分かっている。
きっと、誰も喜びはしないだろう。
これは私の自己満足だ。

「お嬢様、それではメイクを施しますので、どうぞ、鏡の前へ……」
もう一人のメイドが、私を鏡の前に座らせた。

……と、ドアを挟んだ廊下の方から罵声が響いてきた。

「なぜ花嫁に会ってはいかんのだ！　ええい、どけっ！　もう待ちきれぬ！　待ちきれんのだ！　もう後数時間もしない内にどうせラティーナはワシの物になるのだ、早いか遅いかの違いだろうが！　そこをどけっ！　……ラティーナ！　ラティーナ！！」

……ふふっ、あの男め、もう本性を隠す気も無いらしい。
ダスティネス様ではなく、既にラティーナと呼び捨てだ。
しかも、物扱いときたものだ。

「なりません。ここから先はダスティネス家の控え室。まだ式を挙げてはいない以上、ここから先にはダスティネス家の者しかお通しできません。どうかご容赦を」

イライラとする領主の声に、家の者が淡々と対処している声が聞こえた。

声からして、普段は守衛をしている男か。

「いい加減にしろ！　いいか、式が終われば貴様の主はこのワシになるのだぞ。そこを良く理解した上で、ここを通すか通さないかを判断しろ！」

有無を言わせないといった怒声を領主が上げた。

それに、更に守衛は淡々と。

「通せません。あなたはまだ、自分の主ではありません」

その言葉に、ドンと何かを殴る音。

領主が壁でも殴ったのだろう。

「……顔は覚えた。式が終わり、貴様らの大事なお嬢様を散々嬲った後は、どうなるか覚悟しておけ」

領主の捨て台詞が聞こえ、そのままドスドスと重い音が離れて行った。

……。

「……ドアの外の者を呼んでくれないか、礼を言いたい」

私の言葉に、メイドが静かに頷いた。

やがて、メイドに男が呼ばれ。

「……お嬢様、これは、とてもお綺麗で……！」

感嘆の声と共に、若干しわの混じったその顔を綻ばせた。

長く家に仕えてくれている守衛の一人だ。

融通が利かず、子供の頃こっそり屋敷の外に一人で出ようとしても、決して通して貰えなかった。

柵をよじ登って出ようとしてもすぐに嗅ぎつける。

いつしか私は、いかにこの守衛を出し抜くかで夢中になっていた時期があった。

庭からボールを柵の向こうに投げ、取ってきてくれと駄々をこね、この男が取りに行った隙に外に出る。

外に出た私をすぐさま追い掛け、あっという間に捕まえられて屋敷に戻されるのだが、それがとても面白く、毎日ボールを柵の外に投げていた。

毎日、男が騙されてボールを拾いに行くのが楽しくて。

今思えば、あれは母を亡くして遊び相手も居なかった私を、この男なりに遊んでくれていたのだと知る。

「すまないな……。アレを通しても良かったのだぞ？　別に私は今更どうって事はない。アレに言って、お前への処罰は絶対にさせないから……。……ありがとう」

ありがとう。

長く家を守ってくれた事に対してのお礼でもある。

それを聞いた男は、照れた様にはにかみながら。

「ああ……。自分はお嬢様が嫁がれた後は、旦那様を守り続け……。

その後は、守衛を辞めるつもりですからお気になさらず。自分の主は旦那様だけですから。……お嬢様が認めた男になら、仕えても良いんですがね？」

その言葉に、私は苦笑を浮かべた。

私の認めた男。

あの、どこの国から来たのかも分からない、口の聞き方も礼儀も知らないあの男。

あの男を、なぜか家の者達は私が認めた男だと思い込んでいる。

分かっている。

父の仕業だ。

父が、私をあいつに押し付けようと画策し、色々と家の者に吹き込んだのだ。

加えて先日のあの男の夜這い。

あいつのロクでもない声真似の所為で、私とあいつが部屋でとんでもない事をしていたのではと勘ぐる者まで出る始末。

最後に窓から落ちて、転げ回るあの姿は何度思い返しても笑ってしまう。

今もつい思い出して、思わず口元が綻んでしまう。

それを見て、男が満足そうに笑みを浮かべた。

「お嬢様は、たまに見せるその笑顔が本当にお美しい。最後にそのお顔を見れて、自分は幸せ者です」

言って、男はそのままクルリと背を向け。

「……そ、その。差し出がましい様ですが、それだけお美しく清楚なのですから……。あまり、激しい一人遊びはなさらぬようご自愛下さい……」

「!?」
男は、固まる私に恥かしそうにそう言って、そのままドアの向こうに行ってしまった。
二人のメイドが、そんな私からそっと目を逸らす。

……あいつを……っ！
ロクでもない噂の元凶になった、声真似をやらかしたあの男をとっちめてやりたい……っ！
身を震わせて、恥かしさの余り涙ぐんでいると。

「お嬢様、どうかお顔をこちらへ。お化粧を施しますので……」

メイドの一人が、改めて私を鏡の前へと促した。
鏡の前に座ると、そこには白いドレスを纏った自分の姿。
貴族の娘に生まれた時から、何時かはと覚悟はしていたが……。
まさか、こんなに早く来るとは思わなかった。

のらりくらりと見合い話から身をかわして来たが、何時までも我侭を言っていた報いを受けたのかも知れない。
だが、後悔は無い。
そう、全く後悔は無かった。

今まで自由でいたからこそ、あの人達に会えたから。

ああ……、楽しかったなあ……。

クリスは怒るだろうか？
きっと怒るだろうな……。
もし再び会う事があったら、きっと物凄い勢いで説教されるだろう。

領主に、決闘だと言って突っ掛かっていくかもしれない。

めぐみんは、血迷って何をやらかすか分からないから、少し不安だ。

でも、彼女は凄く頭が良い。

自重して、自分の身を大事にしてくれる事を祈ろう……。

そういえばアクアと、卵が孵化したら小屋を作るという約束をしていた。

約束を破る事になってしまうな……。

でも私は、あれは絶対に鶏の卵だと思う。

卵が孵化したなら、きっとあの男に散々からかわれるのだろう。

うん、その場に居なくてもその光景が目に浮かぶ。

そう、あの男。

口が悪く、礼儀を知らず、知っていて当たり前の色々な常識を知らず。

臆病で保守的で、それでいて突然無茶をやらかす時もある。

気分次第で善行をする時もあれば、躊躇無く犯罪スレスレの事をやらかす事も。

最弱職で、ステータスも幸運以外は全て普通でありながら、なぜか色々な冒険者達、果てはリッチーにまで頼りにされていて。

そして、雑多なスキルと持ち前の幸運、それと機転だけを武器に、魔王の幹部に賞金首、そして様々なモンスター達と渡り合う変な男。

私が貴族である事を明かした時も、貴族である事実よりも、私の名前の方に興味を示していた変な男。

私が攻撃も当たらない使えないクルセイダーである事が分かっていながら、何だかんだと面倒を見続ける変な男。

そして……。

その変な男と危うく一線を越えてしまいそうになった私も、きっと相当に変な女な事だろう。

これはあの変な男への恩返し。

愛すべき仲間達と、この街の冒険者達への恩返しだ。

彼らはあれだけ頑張ったのだ。

彼らは報われるべきであり、そして本来、彼らの労をねぎらうのが領主の仕事だ。

機動要塞デストロイヤー。

あれの前に立ち塞がった私が生きていられるのも、それは全て彼等のおかげだ。

本来はこの街を守るべきは貴族の仕事。

領主の仕事。

私達の代わりに大切なこの街を守ってくれた冒険者達に対し、あれだけの働きをした者達への賞金が減らされる事などあってはならない。

今回の事は、誰も悪くない。

いや、領主としての責務を果たさない、今から私の夫になるアレは悪だな。

しかし、元気だった父が突然あんなに弱る事になるのは予想外だったが。

だが、弱り果てた父の代わりに、今度は私が領主の下で監視と不正の証拠集めをすればいいだけだ。
辛い事は無い。
今度は私が恩返しをする番だ。
これ以上は、あの領主に好きにはさせない。
この身に色ボケている間に、見ているがいい。
これだけの理不尽な行為や無茶を続けているにも関わらず、なぜ証拠が出ないのか。
その秘密を探ってやる。

例えそれが、何年掛かっても、きっと耐えられる。
うん、耐えられるハズだ、あの連中との楽しかった思い出があれば。

ああ……楽しかったな、本当に。
楽しかった……。
うん……本当に、楽しかった……。

本来自由など許されない貴族の娘が、ここまで自由に生きられたのだ。
感謝こそすれ、これ以上は望まない。

しかし、変な話だ。

昔は、別に嫁に行くのも悪くないと思えていたあのロクでもない鬼畜領主。
それが、今では何の魅力も感じられない。
それも全てはあの変な男の所為だろうか。
あの男の事を思い出し、思わず軽く笑ってしまう。

「あ、あの……お嬢様？」
突然笑ってしまった私に、ずっと化粧を施していたメイドが戸惑った様に手を止めた。

「ああ、すまない、何でもない」
苦笑し、メイドに化粧の続きを促すと。
ふと、あの変な男に思いを巡らせていた。

あの男は、私の借金の理由を知ったら、怒るだろうか。
嘆くだろうか。

いや、きっとまた、バカな事しやがって！　などと説教しながら私の本当に嫌がる事を的確に見抜き、それを速やかに実行してくるだろう。

それこそ、以前あの男の借金の一部を勝手に肩代わりした事が知れたら、きっと激怒するのだろう。

領主との事が、いつかきっちりとけりが付いたら……。

あの男はこんな私でも、また仲間に入れてくれるだろうか？

「お嬢様、お綺麗ですよ……！　本当に……！」

あの領主の為に、わざわざ綺麗になってやる必要も無いのだが……。

メイドの言葉に鏡を見る。

薄い化粧に純白のウェディングドレス。
その姿を見て苦笑した。
これを見せる相手が相手だ……。

一般人は式には参加出来ないが、式が終わった後のお披露目では、教会の前でその姿を見る事が出来る。

あの男は見に来るだろうか。
いいや、きっと来ないな。
今頃ふて腐れて、屋敷に一人で居るか……。

もしかしたら……。
今私がこうして、あの男の事を考えている様に。
あいつも、私の事を考えてくれているかも知れないな……。
不機嫌そうなあの男の姿を思い浮かべ、私は小さく、ふふっと笑った。

◆◆◆

「おい、美人店主を連れて来い！　チェンジだチェンジ！　美人店主へのチェンジを希望！　ウィズ！　ウィズがいい！」
俺はそんな事を言いながら、屋敷の広間のテーブルでバニルと向

かい合っていた。

「あの店主に任せておくとまたロクでもない商談ばかりしてくるからな。我が夢の為、これ以上あの負債生成装置を放置しておけるか。昨日も、これはカップル冒険者に売れますよ！　とか言って、このペンダントをたくさん仕入れてきたのだ」

言ってバニルがペンダントを見せてくる。

「……？　何のペンダントだ？　それ」

「これを付けている者が瀕死の重傷を負うと、その最後の命を燃やし、盛大に爆発するペンダントである。コンセプトは、最後の時には、命を賭けて大切な人を守れるように……だそうだ。ロマンチックじゃないですか？　などとキャッキャと喜んでいたが、威力が強すぎて、敵どころか守るべき愛する人とやらもみんなまとめて吹っ飛ぶという、もう店主の商売センスがどうなっているのか疑いたくなる一品である。……お一つどうか？」

「……いらない。……それより、お前よく此処まで来れたな。道行く冒険者や街の警備の人に退治されないのか？」

俺の言葉にバニルは、何をバカなと言った様にフフンと鼻で笑った。

この野郎。

「我輩、こうみえてなかなかに人望があるのだ。リッチーだからと言い訳し、夜更かしばかりしてなかなかゴミが出せないズボラ店主に代わり、きちんとゴミを分別したり、ゴミを散らかすカラスにビーム食らわせていたら、いつの間にかご近所の奥さんに評判でな。将来は我輩の美味しいご飯製造機になる可能性のあるクソガキ共。これが目を放すとちょろちょろと街の外に出る為、付近の危険なモンスターを適当に駆除しておったら、街の守衛が街に入るのに、もう一々女装したり町人の格好したりしなくて結構ですよ、一々止め

るのも面倒なんで、と言ってくれたのだ」

無害だと判断されて、街に住み着くのを黙認されているのか。

まあ害は無いが実力だけはあるし、下手にちょっかい掛けて反撃食らうよりは、ギルドも街も、放置する方向になったのだろう。

人に害を与えるモンスター駆除もやってくれているのなら尚更だ。

「と、言う訳で商品をキリキリ出すべし。我輩の目利きでズバリ見抜いてくれよう。とまあ、そんな事を言っても我輩は既に、貴様が納得するだけの金をここに用意してあるのだが」

バニルが言いながら、小さな黒い鞄をポンと軽く叩いた。

見通す悪魔さん効率いいですね。

「と言っても、ウィズの店にそんな大金があったのか？　自慢じゃないが、俺の今持っている数々の商品の知的財産権の数々、凄まじい額になると思うぞ？　ウィズの話じゃ、ジッポ一つの財産権を売っても数千万にはなるって言われてたしな。ぶっちゃけ、もう急いで金を作る必要も無くなったしな。俺のダラリとした生活の基本となる、ジッポ版権とか使える物は残しておきたい。別に、財産権買取の支払いは急がないぞ？」

俺の疑問に、バニルはニヤリと悪魔らしい笑みを浮かべた。

「金の心配など無用である。あの貧弱魔法店のコネで、この街の大商人達と既に懇意の仲。連中は我が占いに夢中である為、金の出資にも喜んで応じてくれたわ」

そして、バニルは全て分かっていると言いたげな口ぶりで。

「助けに行きたくて行きたくて、しかし助けに行って鎧娘に助けを

拒絶される事に怖気づく男よ。見通す悪魔バニルが宣言しよう。貴様は、全ての知的財産権と引き換えに、この鞄の中身を所望する」

……見通す悪魔さん、本当に厄介だなあ。

バニルは、俺から受け取った数々の設計図や試作品、そして様々な財産権の所有証明書を、ロクに確認もせずに大きな鞄の中に詰めていった。

きっとこいつにとっては、目を通す必要すらないのだろう。

……。

見通す悪魔、か。

「なあバニル。あんた、色んな事が分かるんだろう？」

俺は世間話でもするかの様に、せっせと鞄に書類を詰め込むバニルに問い掛けた。

バニルは、こちらには目を向けず、鞄へと詰め込む作業を続けながら。

「うむ。全てとは言わんが、大概の事が見通せるな。例えば、今から貴様が聞きたがっている事も勿論分かる。貴様が気にしている鎧娘が、なぜ領主に莫大な借金をしたのか。助ける方法は無いのか。鎧娘の父親が、なぜ急に体を壊したのか。なぜあの領主は、あれだけの事をやらかしているにも関わらず、証拠の一つも出ないのか」

俺はゴクリと喉を鳴らした。

「……なあ。あんたは、悪魔の」

「悪魔の癖に、なぜ貴様に協力的なのか。何か企んでいるんじゃないか。……等々。勿論大体の事が見通せるぞ」

バニルは作業の手を止めて、こちらに顔を向け、改めてニヤリと笑う。

……ぐう、この野郎。

「勿論企んでいる。なにせ我輩悪魔だからな。だがまあ、今回の件では貴様と利害が一致した。だからこれだけ協力的なのだ。例えば、貴様が手元に置いておきたがっている、高値で売れそうな様々な権利も、この際まとめて安く売ってもらおうとな」

なんかペース握られっぱなしだな、くそう……。

「そんな物、俺が売らないって言えばそれまでだろ。それよりも、俺が聞きたい事分かっているのなら、もったいぶらずに教えてくれよ」

「良いだろう良いだろう。では、今貴様が知りたがっている事を教えてやろう！　そう、ウチの店主の今日の下着の形と色であるな！　フハハハハ、なんつって……おや？　美味な悪感情が湧いて来ないな」

「それはそれで後で聞きたいからです」

「そ、そうか……。では、本当に貴様が知りたい事を教えてやろう。あの娘がなぜ借金したのかと言うと……」

「『セイクリッド・エクソシズム』！」

突如聞こえたアクアの声。

それと共に、バニルが光の柱に包まれた。

あっという間にバニルの体が消滅し、カランと音がして、バニルの仮面だけが転がった。

ちょっ、おいっ！

「バニル！　おいしっかりしろっ！　お前大悪魔なんだろ！　大丈夫だ、お前ならあんなトイレの女神の攻撃じゃ終わらないだろ！　おいしっかりしろっ！」

「ああっ！？　ちょっと目を離した隙に、カズマが悪魔に洗脳された！？　ねえなんで悪魔の味方してるの！？　それに私、水の女神よ！」

二階から広間へと続く階段の途中から、出会い頭にバニルに魔法を撃ち込んだアクアが言ってきた。

本当に、毎度毎度余計なタイミングでいらん事ばかりする奴め！

アクアの後ろには、何だか執事みたいな身なりをした爺さんの姿。

あれが、アクアに仕事を頼みに来たと言う客だろう。

だがいきなりのこの状況に、爺さんは目を白黒させていた。

俺の目の前で、バニルの仮面の下からニョキニョキと体が生える。

……毎回ちゃんと服まで付いてくるのは便利だなぁ……。

いや、服も体の一部だからこそ服ごとアクアの魔法で消滅させられるのか。

「フハハハハ、不意打ちとはやってくれるなチンピラ女神、我々悪魔と変わらんではないか！　見ろ、我輩の格好良い仮面にひびが入ったわ！」

「ヤダー、悪魔なんて害虫とかと一緒じゃないですかー！　あなた、害虫駆除する時に一々、これから駆除させて頂きます、申し訳ありませんなんて断わるの？　バカなの？　プークスクス！　あんた、なんで人ん家に上がりこんでんの？　どうやって私の結界越えてきたの？　ゴキブリとかみたく、結界の隙間からコソコソ侵入してきたの？」

二人が睨み合いながらドンドン険悪な雰囲気になっていく中、俺は慌てて二人を止めた。

「おいこらお前ら、そんな事は別の日にやれ！　アクア、今はバニルの話を聞きたいんだよ、邪魔すんな！」

俺の言葉に、アクアが渋々引き下がる。

アクアの後ろに居た執事風の爺さんが、剣呑な雰囲気を察したのだろう。

「そ、その……。なにやらお取り込み中の様で……。で、ではアークプリースト様、始まりは昼からですので、是非とも遅れる事のない様に……。では、私はこれで失礼致します……！」

そう言って、アクアとバニルの対峙する間を、身を低くして通り抜け、そそくさと出て行ってしまった。

一体何の用事の客だったのか気になるが、それよりも今はバニルの話だ。

バニルが、アクアに向けて勝ち誇った様に口元を歪め。

「フハハハ、今回の件で役に立たぬポンコツ女神よ、これからそこで、我輩の有り難味と有用性を見ながらそこで悔しさの余りハンカチでも食いちぎっているがいい！」

案外この悪魔も大人気ない所があるのか、アクアに向かってベロ

ベロと舌を出して挑発していた。
途端にアクアの眉が釣り上がっていくが、もう話が進まないので勘弁して欲しい。
アクアが大事そうに卵を抱いて、ソファーに座った俺とバニルの間に腰を降ろした。
一緒に話を聞くつもりなのだろうが、三角座りの体勢で、超至近距離でジッとバニルにガンを飛ばしている。

「……凄くやりにくいのだが。……まあいい。男よ、貴様が知りたいのは、あの鎧娘の借金の経緯だったな？　まあ端的に言えば、貴様ら冒険者達が機動要塞デストロイヤーを倒した事に起因する」
世間話でもする様な感じで、バニルがそんな事を……。

……。

今、なんて？
「……おい、詳しく」
俺の言葉にバニルが笑った。
そして勿体付けるでもなく、そのまま淡々と。
「詳しくと言っても。今までの街ならば、デストロイヤーにより街は蹂躙され、領主は土地を失うものだ。街の住人は焼け出され、領地を失った領主も貴族も責任を取らされ、街の住人、貴族諸共みんな仲良く路頭に迷う。むしろ根無し草な貴様ら冒険者達には、その方が良い結末だったのかも知れん。だが……。この街は、そうはならなかった訳だ」

……良いことじゃないか。
俺のそんな感情までも見通しているのか、バニルが再びニヤリと笑う。
「街自体は助かった。街中で商業に携わっている者達は、結局なん

の被害も受けてはおらぬ。殆どの住人達もそうだろう。……そしてデストロイヤーは街の目の前で倒された。すると当然、街へと続く穀倉地帯、途中にある治水施設その他、実に様々な物が破壊され、そして蹂躙された訳だ」

……。

それはまあ分かるが。

でも、被害を最小限に抑えられたって事じゃ無いのか。

「フハハハ、人間というものは。人間というものは実に面白い。街が無事だった事で喜び、それで良しとする訳ではなく。穀物地帯を荒らされ、農業に携わっていた者達は、仕事を、財産を失ったも同然だ。荒らされた穀倉地帯は簡単には復興しないだろう。そこで、その者達は領主に助けを求めた」

……もう、嫌な予感しかしねえ。

俺が顔をしかめると、

「そう、貴様の予想通りである！　あの領主は、助けを求める人々にこう言った。命が助かっただけでも儲けものだろう。贅沢を言うな。文句を言うなら、それは穀倉地帯を守り切れなかった冒険者達に言うといい。ほら、冒険者達は今、莫大な報酬を得て潤っている。彼等の報酬を補償に充てて貰えばいいだろう？　……と」

……うわぁ。

悪代官も真っ青だ。

「うむ、今回の件では、ケチで、領主としての責務を放棄した領主以外、誰も悪くは無いのかも知れん。冒険者達は充分以上に健闘した。それはもう間違いない。そして被害に遭った住人達も、そのままでは路頭に迷ってしまう訳だ。その者達の気持ちも分からんでも

ない。天災みたいなものだから諦めろと言われても無理だろう」

……俺の考えている事を見通すのは止めてほしい。

バニルは、実に悪魔らしい笑みを口元に浮かべ。

……そして、聞き捨てならない事をサラッと言った。

「領主に補償を断わられた者達は泣きついた。そう、貴様も知ってのダスティネス家にな。そして彼らはこう言った訳だ。……一介の冒険者が壊した廃城の弁償金。その大半を負担した、慈悲に溢れるダスティネス様。どうか、我等にもお情けを……とな」

……。

「今、なんつった？　廃城が何だって？」

俺の言葉に、バニルが悪魔らしく、実に楽しそうに。

「廃城とは言え、城の値段がたかだか三億程度で済む筈なかろう。貴様はギルドの者に城の賠償を請求される際、言われなかったか？　全額を負担しろとは言わないので、と。ダスティネス家は、屋敷を除くその保有資産の大半を、城の弁償金として肩代わりした。その時に資産の大半を失っていたダスティネス家の鎧娘は、それでも住人達を助けようと、責務を放棄した領主に急いで金を借りた訳だ。こういう条件付きでな。返済できなかった場合には、担保としてその身体で」

俺がテーブルを殴りつけた音で、バニルの言葉が遮られた。

それにビクッといているアクアに、俺はその手をスッと出す。
「……ねえカズマ、怒りに任せてテーブル殴ったら痛かったのね？　痛かったのね？」
治療してくれるアクアに答えず、俺は静かにバニルに尋ねた。
「……その借金の額は幾らなんだ？」
俺の言葉にバニルがスッと、用意していた小さな鞄を突き出した。
「調度この鞄の中身が、借金の額と同額となっております。……では、商談に入ろうか！」
こいつはやっぱり悪魔だった！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

この街で、最も神聖な場所。
アクシズ狂……
ではなく。もちろんエリス教の教会の中である。
参列するのはその殆どが街の有力者。
もしくは、近場からやってきた貴族達。
その誰もが、この結婚式は茶番だと分かっているからなのだろう。
席に座る皆がぺちゃくちゃと好きに喋り、もうすぐ式が始まると言うのに緊張感の欠片もなかった。
教会の入口の前には領主の部下による警備がなされ、それと共に、野次馬達も花嫁だけは一目見ようとごった返していた。

その野次馬の大半は冒険者。
ダクネスは、基本的に貴族である事は隠して冒険者をやってきた。
それが今回領主の嫁として大々的に発表されてしまった為、普段は鎧姿のダクネスの、その花嫁姿を一目見ようと集まったのだろう。
本当に好奇心旺盛な連中だ。
好奇心が強いから冒険者なんてやっているのかも知れないが。

ずっとざわめいていた教会の中が、やがてシンと静まり返った。
教会の入口の、それぞれ左右に備え付けられた、新郎、新婦の控え室。
その控え室から、ダスティネス家の老執事に手を引かれた花嫁が、純白のドレス姿で現れたからだ。

親父さんが体調不良の為、屋敷の執事がその代わりを務めているのだろう。
顔の前をヴェールで覆って、俯きながら歩くダクネスは、ヴェール越しでも人目を惹きつけて離さない美しさを放っていた。

続いて新朗側の控え室からも白いタキシードを着た領主が現れる。
その膨れ上がった巨体で白いタキシードをパンパンにした領主は、その視線をダクネスから離す事が出来ないでいた。
呆けた様に口を半開きにしてダクネスを見続け、そのままフラフラとダクネスの元へ……。
行こうとして、ダクネスを連れていた執事の人に、ゴホンと咳払いをされて我に返る。
そんなみっともない領主の姿も目に入らず、参列者達はひたすらにダクネスの姿に見とれていた。

そこには一人の例外もない。

……もちろん俺も。

そう、この教会の中、ピシッとした儀式用の司祭服を着て堂々と立っている俺も。

領主は、ヴァージンロードをダクネスと共に歩きながら、その目は前を見ず、ひたすらダクネスにのみ向けられていた。
そして、ヴァージンロードを歩くダクネスもまた、下を見たまま歩いている。

俺はそんなダクネスを見ながら、激しい憤りを感じていた。

何が、『あの様子では飲まず食わずで数日はこの体を貪られてしまいそうだ。壊されてしまいそうでドキドキするな……！』だ。

何時ものド変態振りはどうした。
モンスター相手に頬を赤らめてるあの顔はどうした。
魔王の幹部をもドン引きさせた、あの発言の数々はどうした。

寂しそうな顔で俯きながら歩くダクネスは。

やがて結婚の誓いをするべく、参列者達の注目を集めたまま、祭壇の前にやって来た。

俺の目の前に。

そう、祭壇の傍にいる俺の前に。
この世界では、結婚の誓いは神父で無くても良いらしい。
そう、それは女性の聖職者、プリーステスでも良いらしい。

例えば、この駆け出しの街にはたった一人しかいない、希少な存在であるアークプリーストとかでも良いらしい。

その、徳の高いアークプリースト様に助手として付いて来た俺は。
領主様の結婚なのでと、何も知らずに、張り切って勝手に事を進めた執事に誓いの祝福の仕事の依頼をされた、一応この街で一番高い位に就いている聖職者、アークプリーストのアクア様の隣にそっと控えていた。

誓いの祭壇の前に着いてもダクネスを見たまま前を向こうとしない領主と、俯いたままのダクネス。

その二人に。
厳かな音楽が流れる中、あんまり厳かではない声が掛けられた。

「汝ー、ダクネスは。この熊と豚を足したみたいなおっさんと結婚し、神である私の定めじゃないものに従って、流されるままに勝手に夫婦になろうとしています。あなたは、その健やかな時も、病める時も、喜びの時も、悲しみの時も、富める時も、貧しき時も、おっさんを愛し、おっさんを敬い、おっさんを慰め、おっさんを助け、その命の限り、堅く節操を守ることを約束しますか？　出来ないでしょう？　私はこのままダクネスと帰って、カズマの料理つつきながら、キュッと一杯やりたいなぁ……」

その場違いな発言に。
教会中の皆の視線がギョッとした様に、一気にアクアに集められた。

流石の領主もアクアにバッと目をやると。
「……！？　なっ？　お、お前はワシの屋敷に来て散々迷惑掛けていったあの女！　何を！　一体ここで、何をしている！？」
領主の罵声が響く中、ダクネスがアクアと俺を見ながら、驚きの表情で口をパクパクさせていた。

俺はそのまま、驚いているダクネスの腕をガッと掴む。

お父さんお母さん。
普通の子に、真っ直ぐ育てよと言っていた、あなた方の可愛い息子は。
今や、平凡な人生など何処へやら、この地で一番偉い人を相手に喧嘩を売り、貴族のお嬢様を拉致ろうとしています。

「なっ……！　カズマ！　カ、カズマっ、放せ！　手を放せ！　お前は一体何をしている！　もうコレは洒落にはならんぞ！　貴族同士の結婚式に乱入して、処刑以外の刑罰では済まされない！　バカな事を！　本当に、バカな」

激昂し、俺に食って掛かるダクネスの言葉を遮り。

「うっせーこの大バカ女が！！　お前の方こそ勝手にバカな事ばかりしやがって、勝手に俺の借金肩代わりしてんじゃねーぞ！　お前俺の女房気取りか！　そんなに俺の事が好きならそう言えっていってんだろ！」
「誰がそんな事言った！　お前は本当に何を言っている、この大バ

カがっ！」

場を考えずに激しく言い合う俺とダクネスに、それまでポカンと見ていた領主が我に返った。

「こっ、こいつを！　この男と、この偽プリーストを捕えろ！　この……っ、貧乏人の分際で、貴族の結婚を何だと思っている、場違いな一般庶民が！　早く、早くこいつを捕えておけっ！」

領主が叫んで、俺が掴んでいるダクネスを、取り返そうとした。

ダクネスに抱き付くようにして掴みかかってくる領主から、ダクネスをグイと引っ張り背中に隠す。

それを見て、領主が一気に顔をドス黒くさせ……！

「このっ！　関係ない貴様はすっこんでろ！　お前の大好きなラティーナはな！　このワシに、貴様の様な貧乏人が一生掛かっても払いきれない、膨大な負債があるのだ！　そんなにこの女が欲しいならな！　まずはこの女を買う、その代金を用意してこい貧乏人めがっ！」

その領主の、売り言葉に買い言葉。

祭壇の脇に置いておいた鞄を掲げ、

「しっかり聞いたぞその言葉、約束は守れよおっさん！　おら、ダクネスが借りた金、総額二十億エリス！　一枚百万のエリス魔銀貨で二千枚だ！　これでダクネスは貰っていくぞ！　後、別に大好きなんて事はねーよ！　な、仲間だからっ！　大事な仲間ってだけだからっ！」

一応領主の言葉を訂正しながら、その中身を領主の足元にぶちまけた！

そしてすかさずダクネスのその手を掴む。

なぜわざわざ金をぶちまけるかというと……。
「ああっ！？　なっ、二十億！？　ああっ、待てっ、ララティーナを！　ワシのララティーナを……、ああっ金がっ！　拾ってくれ！　おい、拾ってくれっ！」

ぶちまけた金を慌てて拾い集め始める領主。
それを見て、周りの参列者達も慌てて金を拾い始めた。
ちゃっかりくすねる奴もいるかも知れないが、そんな事は俺は知らない。
領主の部下と思われる連中が俺に向かって駆けて来る。

ダクネスが、俺の手を振り払って食って掛かった。
「おっ、お前は！　誰がこんな事をしてくれと言った！　それに、この金は！　この大金は一体どうしたんだっ！」

こんな時まで頑固なダクネスに、イライラしながら。

「売った。ジッポの知的財産権から、ここの所ずっとため込んでいた色んな知識から試作品から何から全部。俺の持ってた自分の国の知識は、一つ残らず売り払った。これでもう、地道に真っ当に稼いでいくしか無くなった。……もう売っちまったもんは仕方が無い。今更買い戻せないからな。分かったら、とっとと逃げるぞ！」

そんな俺に、尚もダクネスは、困った様な、それでいてちょっと嬉しい様な、まるで泣き笑いのような不思議な表情を浮かべ、それでもまだ何かを言い掛けた。

「そんな事までして、お前は……！　お前と言う奴は……っ！　私は、私は……っ！！」

走り来る領主の部下を目の前に、いよいよ我慢の限界に来た俺はダクネスの肩を掴んで思い切り揺さぶった！

「ガタガタガタガタ、いい加減にしろよコラッ！　もうこれ以上、口答えするんじゃねーよ！　領主のおっさんから、もうお前を買ったんだよ！　これから散々酷使してやる！　俺がはたいた金の分！　身体で払ってもらうから覚悟しとけよ、このド変態クルセイダーがっ！！　分かったか！　分かったら、返事をしろぉ！！」

「ふぁ、ふぁいっ！」

揺さぶられ、本気で怒鳴りつけられ、衆目の中ド変態呼ばわりされたダクネスが、目に涙を浮かべた恍惚としたヤバめの表情で、変な返事を返してきた。

そのままダクネスの手を取って、教会の真正面へと向かおうとする。

参列者達は街の有力者や貴族達。

荒事は苦手なのか、厄介事には巻き込まれたくは無いのか、領主の傍で金を拾っている人達以外は、皆、俺達を取り押さえようとはせずに事の成り行きを興味深そうに眺めていた。

「はぁ……はぁ……か、買われてしまった……。貴族の私が、この男に！　……はぁ……はぁ……、か、身体で払えだと……！」

俺の後ろを走るダクネスが、見たことも無いぐらいに頬を火照らせ、何だかヤバイ感じで息を荒げている。

「おっ、おいお前、よだれ！　何かよだれが出てるから！　大丈夫か色々と！」

ダクネスに注意する俺に、アクアが何故か顔を輝かせながら、

「さすが鬼畜のカズマさん！　借金肩代わりしてもらってた借りを返しただけなのに、なぜかダクネスを買い取ったみたいな状態に！

ねえカズマ、ダクネスに身体で払って貰うって、多分めぐみんが聞いたら爆裂魔法叩き込まれるわよ？　完全に死体が無くなっちゃったら、幾ら私でも生き返らせられないから気をつけてね？」

「ち、違っ！？　人聞きの悪い事言うなよ、あれは言葉のあやって言うか！　クルセイダーとして、冒険者として身体で払って貰うって意味で！」

俺が言い募っている間にも、ヴァージンロードの上をダクネスを連れて逃げる俺達の眼前に、領主の部下が立ち塞がる。

それを見て、もう何かが吹っ切れた様なダクネスが、長いドレスの裾を動き易い様に遠慮なく引き裂いた。

そして被っていたヴェールも脱ぎ捨て、長い金髪をたなびかせて領主の部下達に突っ込んでいく。

「ちょっ、俺達はお前を取り返しに来たのに、そのお前が真っ先に敵に突っ込んでってどうすんだ！　アクア、支援下さい！　支援下さいっ！」

「良いわよ！　芸達者になる魔法はいる？」

「是非下さい！　あれはとても良いものだ！」

俺達の後ろには、未だに必死で金を拾う領主と、そして同じく金を拾う、参列者の一部の人達。

俺達の前からは、十を越える領主の部下。

それぞれ武器らしい物は持っていないが、アクアの支援があっても突破出来るかどうか。

ここは、例の如く初級魔法による目潰しコンボ、もしくは氷結コンボを……！

俺がそう思って魔法を唱えようとしたその時。

「『ライト・オブ・セイバー』ッッッ！」

聞き覚えのある声が教会の外、正面のドアの後ろから響き。
鍵の掛かった教会のドア、その周りのレンガの壁を、丸くくり抜く様な形で、白い光がシュッと一瞬だけ通り過ぎた。

一拍置いて、教会のドアが、くり抜かれた壁ごとゴトンと倒れ。

外の眩しい陽の光を背に、そこには二人の人影が立っていた。
教会の外にいた多くの野次馬冒険者達は、二人を遠巻きに、そして今から何が起こるのかと楽しそうに見守っている。
二人を警戒する様に、そして怯えた様に距離を取っている、領主の部下と思わしき警備の人達。

「めぐみん、やったわよ！　私、やったわ！　友達だからね！　とっ、友達の頼みなら、こんな犯罪紛いの事だって大丈夫だから、私！」
「はいはい、ご苦労様ですゆんゆん。流石私の友達ですね。では、もう帰ってもらっても良いですよ」
「ええっ！？」
そこに居たのは、二人の紅魔族の魔法使い。

めぐみんが一歩前に出るだけで、周りの警備の人達が顔を引きつらせて後ずさる。
その後ずさる警備の人達の視線の先には、何時でも魔法が放てる様に先端が光り輝いているめぐみんの杖。

……なんてこった。

この街の中心でなんの躊躇も無く、爆裂魔法を完成させてしまった様だ。

凄まじい魔力と魔法が込められたその杖を握り締めたためぐみんは、見た事も無い真剣な表情で眼に強い決意と光を込め、マントをバサッとひるがえし。

そして、その場の全ての人々に、静かな声で言い放った。

「悪い魔法使いが来ましたよ。悪い魔法使いの本能に従い、花嫁を攫いに来ました」

薄暗い教会の入口。

そこに輝く陽の光を背にして立つめぐみんは、ダクネスを先に奪還に来ていた俺が目立たなくなるぐらい、なんかもうヒーローみたいに格好良かった。

……あれえー？

18話（後書き）

前にも書きましたが、やはりちょっと強引な展開に。
借金の理由なども悩みましたが、もしかすると以前の予告通り書き直すかも。
大きくストーリーが変わる事はありませんので、読者さんに再び読み直して頂く様な負担はかけません。

次回、もしくはその次の回は、悪魔達による少し残酷描写、というか残酷な台詞が有ります。具体的には領主が酷い事に。
苦手な方はご遠慮下さい。

読まなくても、多分四部の頭からでもストーリーは繋がります。

１９話（前書き）

活動報告通り今日は二話更新になります。
無駄に長いですが申し訳ない。

19話

教会の参列者。
そして、領主の部下の警備の者。
それらが半ばパニックになりながら、その悪い魔法使いの一挙手一投足に注目していた。

「私のあだ名は知っていますね？　なら、もちろんこの杖の先の魔法が何かも知っていますね？　先に言っておきますが、この魔法を制御し続けるのにはかなりの精神集中を必要とします。……突然不意を突かれて制御を失えば、ボンッ！　ってなります。そこら辺を良く注意して掛かってきなさい」

要約すると、ちょっとでも手を出したら制御失って爆発するから、それでもいいなら掛かってこいやと言っている。
悪い魔法使いの名に恥じないお見事な脅迫ぶりだ。
顔を引きつらせ、遠巻きにめぐみんを囲む警備の人達。

真っ先に突っ込んで行ったダクネスと揉み合っていた、教会内部の領主の部下も、既に俺達を捕まえるどころでは無くなっていた。

と、めぐみんの傍に立っていたゆんゆんが、教会の中の様子をざっと確認し。
「……あ、あれ？　ねえめぐみん、カズマさんが既に、ほら……」
なんだか戸惑いながら俺達を指差す。
俺とアクア、そして、ドレスのスカートを引き裂いたダクネスを見て、何があったのかを悟ったためぐみんが、ふっと口元を綻ばせた。

そのまま俺達の逃げ道を作る様に、手にした杖をこちらに突き出

す。
それを見ただけで、俺達の前に立ち塞がっていた領主の部下は、慌てて参列席へと逃げ込んだ。
それに合わせて、俺達三人はめぐみんの元へ駆け寄ると……！

「なっ、何をっ！　何を怖気づいているバカ者がっ！　あんなものはハッタリに決まっているだろうが！　こんな所で爆裂魔法なんて放てばどうなるか、それが分からないバカがいるか！　どうせそいつに魔法を撃つ気は無い、取り押さえろ！」
未だに慌てて金を拾っていた領主が叫んだ。

だが、その一言に。

「ほう！　この私が怖気づくと！　爆裂魔法を撃つ事を怖気づくと、本気で言っているんですね！　いいでしょう、いいでしょう！！」
「止めろ！　近付かない！　近付かないからマジで止めろ！」
「攻撃なんてしない！　だから止めろ、止めろ！」
「領主様！　お願いですから挑発は止めて下さい！」
めぐみんの一言に、領主の部下達が顔を引きつらせて慌てて離れた。
一体めぐみんの悪評はどれ程なのだろうか。
幾らめぐみんでも、こんな街中で爆裂魔法は……。

……う、撃たない……よな？

めぐみんが領主の部下を威嚇する中、俺達はめぐみんの元に駆け寄ると、
「助かった！　流石に相手が多かった、めぐみんが来て威嚇をしてくれなかったらちょっと突破は厳しかったかも知れん。助かったよ！」

その俺の言葉に、めぐみんが自慢げにドヤ顔を見せ、
「まあ、いきなりカズマが居るとは予想外でしたが。全くカズマは、口ではなんやかんや言いながら、最後には何かやらかすとは思ってましたが……。まさか、先を越されているとは思ってませんでしたよ」
そう言いながら、何だか少しだけ満足そうな、安心した様な顔をする。

「めぐみん！　め、めぐみんまでこんな事……！　帰ったら……！　話は、帰ってから……っ！　帰ってから、礼を……！」
感極まっているのか、まだ先ほどの興奮冷めやらないのか、ちゃんと喋れないダクネスに、めぐみんが少しだけ照れ臭そうに、はにかんだ。
「何を水臭い。その……、仲間でしょうが、私達は。……ゆ、優秀なクルセイダーをそうそう簡単には手放しませんよ！」
自分で仲間だのなんだの臭い事言っといて照れたのか、めぐみんが誤魔化す様に語尾を荒げる。

そしてそんなめぐみんに、
「仲間かぁ……。仲間って良いよねめぐみん！　その、もし友達の私が同じ状況になってたなら、助けに来てくれた？」
「いえ、ゆんゆんは友達なだけで自称ライバルですし……。仲間では無いですから別に……」
「！？」
やたら友達を強調してくるゆんゆんに、きっぱり拒絶を示すめぐみんが容赦ない。

「ねえ、そんなのん気に話してる場合じゃ無いんですけど！　ジリジリ囲まれてきてるんですけど！」
アクアの言葉に、教会の入口で寄り集まる俺達をジリジリと包囲

しようとする領主の部下達。

現在、ウチの危険人物、めぐみんの導火線に火が付いている状態だ。

この状況で飛び掛ってくる事は無いとは思うが……。

いつまでも飛び掛ろうとしない自分の部下に焦れたのか、突然領主が大声を上げた。

「おい、そこの野次馬達、見るからに冒険者風のお前達だ！　そこにおるのは犯罪者だ！　そいつらから、ワシの花嫁を取り返してくれ！　そうしたら多額の報酬を払おうじゃないか！　なんなら、ワシの屋敷で守衛として雇ってやるぞ！　その日暮らしの冒険者家業から足を洗えるぞ！　頼む！　ララティーナを！　ワシのララティーナを！」

領主の言葉に、面白そうに事の成り行きを見守っていた居合わせた冒険者の野次馬達が、それぞれが互いに顔を見合わせた。

そして……。

「……？　おい、聞いているのかお前達！　報酬を出す！　幾ら欲しいんだ！」

ちっとも動こうとしないどころか、途端にあさっての方を向いたり、突然欠伸をしだして聞こえない振りを始める冒険者達。

どうやら見逃してくれるようだ。

捕まえる側に参加しないだけでも充分だ！　ありがてえ、ありがてえ！

「おいダクネス、アホなお前はアホな考えで自分勝手に嫁に行こうとしたのに、こんだけの人数の連中が今お前を見逃して、助けようとしてくれてんだ。ちょっとはその固い頭を柔っこくして反省しろよ？」

俺の言葉に、ダクネスが頬を染めて、嬉しそうに照れながら、軽く涙ぐんで俯いた。

良い話だなー……。

俺は冒険者連中の考えている事が分かっているから、今のダクネスにこれ以上無粋な事は言わないが。

みんな楽しそうにニヤニヤしているなあ……。

きっとダクネスがギルドに行ったら、当分の間は、

『ララティーナお嬢様、今日はお綺麗なドレスは着ないのですか？』

と、からかわれるに違いない。

売り言葉に買い言葉。

以前ダクネスと喧嘩した時、ララティーナの名を広めるなり好きにしろと言われたが。　腹いせに、本当にララティーナの呼び名を広めてしまった。

この件が決着付いた後、しばらくダクネスには近付かないでおこう。

しかし教会前を警備していた部下に囲まれている間に、既に教会内にいた部下達もこちらに集まり、ちょっとどうにもならない膠着状態になってきていた。

相手だってバカでもないし、都合のいいやられ役の雑魚でもなければ素人でもない。
人数だってこちらより遥かに多いのに、そう易々とは抜かれないだろう。
街中で武器なんて使えばそれこそ言い逃れの出来ない犯罪者だ。
既に言い逃れの出来ない犯罪者な気もするが。

「このままでは良くありませんね。もう面倒くさくなってきました。魔法を維持するのも段々辛くなってきましたし。もうここで爆裂させてしまってもいいですか？」
突然そんな事を言い出しためぐみんに、周囲の人間がギョッとする。
勿論俺も。
こいつはやってはいけない場所なほど、爆裂魔法を撃ちたがる奴だ。

「ああ、もうダメです、維持できません！　逃げて！　みんな、私から離れて逃げてください！」
ちょっ、まさかの制御不能!?
周りに居た連中は、真っ青な顔をして慌ててその場から逃げ出した。
俺は咄嗟に、最強の盾であるダクネスの影に隠れると……！
「『エクスプロージョン』ッッッ！」
めぐみんが、爆裂魔法を空に向けて打ち上げた。

それはある程度の高さまで打ち上げられると……！

凄まじい轟音と共に、空中で閃光と共に大爆発を起こした。
その衝撃波と轟音に、街の中のガラスがひび割れ、人々は頭を抱えて地に伏せた。

「さあ、今の内……に……」
めぐみんが俺を見て、なぜか声のトーンを落としていき……やがて無言で俺をジッと見る。
俺は今の自分の状態に気が付いた。
現在、ダクネスの背中に隠れるように縮こまり……。
……おおう。

「カズマカズマ、流石に助けに来た相手の影に隠れるってのは外道にも程があると思うの」
「……ん、今日のカズマは何だか凄く格好良く見えていて、私の目はどうしてしまったんだと心配していたが、気のせいで良かった」
「か、カズマさん……最低……」
何気に最後のゆんゆんの一言が一番堪える。
おっと、皆さんゴミを見る目ですね。

そんな事より、めぐみんの爆裂魔法で相手が怯んでいる今がチャンスだ。
俺達は領主の部下の囲みを突破し、そのまま通り過ぎようとするが……！
「爆裂魔法は一日一回しか撃てないはずだ！　今だ、取り押さえろ！」
流石に魔法の衝撃で怯んでいたのは一瞬らしく、領主の部下達は今度は何の躊躇も無くこちらに向かって駆け出した！

めぐみんが決意を秘めた目で叫ぶ！
「ゆんゆん！　これから私がどうなっても、決して私の事は気にせず、そして振り返らないでください！　ここはあなたに任せて先に行きます！」

ゆんゆんがそれを聞き……！

「バ、バカッ！　何言ってるの？　めぐみんを置いて行ける訳ない……じゃ……え、あれっ？　今何て言ったの！？」

ゆんゆんが思わずめぐみんの言葉を聞き返した。

「時間稼ぎをお願いします親友！　後日、私の友達を紹介しますから！」

「わ、分かったわ！　任せて！　親友だもの、仕方ないわね！」

嬉々として領主の部下の前に立ち塞がるゆんゆんに、領主の部下達は明らかに警戒の色を浮かべる。

もう、もう、俺で良ければ幾らでも友達になるから……っ！

ゆんゆんを残し、逃亡する俺達の後ろでは、

「魔法使いの女一人だ！　魔法を完成させる前に取り押さえろ！」

そんな領主の部下の声が聞こえてきて、俺の後ろ髪を引っ張った。

しょうがない、俺も残ってダクネスを逃がす間の足止めを……！

俺がそう思って引き返そうとした時。

一人の男が悲鳴を上げ、地に転がる音がする。

「痛えええええっ！　いきなり押されてっ！　ぐあああああっ、骨が！　骨がああああっ！　ダスト、助けてくれぇっ！」

「おい大丈夫かキース！　こいつぁ酷ぇ……。倒れた拍子に、骨が木っ端微塵に粉砕骨折してやがる！」

なんだか聞き覚えのある声と名前が聞こえた。

「なっ！？　触れただけで何を大げさな！　いきなり飛び出してきたのはその男だし、そいつは自分から転んだではないか！　ちょっ、折れてると言っている癖に、なぜ俺の足が掴める！　放せ！」

それは領主の部下の声。

「オイオイオイ！　お前まさかこいつを下半身不随にしておいて、このまま詫びの一つも無く逃げようってのか？　領主様の部下だか何だか知らねえが、それはちょっとばかし横暴ってもんじゃないんですかね？」

俺達は走りながらも、そんなチンピラの声を背後に聞く。

タチの悪いチンピラ達に絡まれている領主の部下達は、めんどくさそうに、

「先ほどは骨が砕けたとか言っていたのに何時下半身不随になった！　ああもう、いい加減邪魔だ、どけっ！　邪魔すると後で痛い目を……！」

きっと、領主の部下がチンピラを押しのけでもしたのだろう。

「痛ぇっ！　こっちが穏便にしてりゃあ暴力を振るいやがったな！　こいつ、先に手を出しやがった！　上等だ、やっちまえ！　こんなんやっちまえっ！」

「ちょっ！？　待てッ、やめっ！？」

「やっちまえ！」

「やっちまえ、やっちまえ！」

「おい、俺も混ぜろ混ぜろ！」

「前からあの領主、気に入らなかったんだよ！」

「待っ！　お、お前、折れてるって！　折れてるって言ってたくせに！　うわああっ！」

俺は三人と走りながらチラリと後ろを振り向くと。
そこには、野次馬冒険者達に袋叩きにされる領主の部下達の姿があった。

今度あのチンピラ連中に会ったら、一番高い酒でも奢ってやろう。

「ラフティーナ！　行くなラフティーナ！　ラフティーナーっ！」

俺達が逃げる、その遠くから、ダクネスを呼ぶ悲痛な叫びが聞こえていた。

「！？　お、お嬢様！？　そのお姿は……！　と、とにかく中へ！」

領主の部下から逃げおおせた俺達は、ダクネスの屋敷へと逃げ込んだ。

守衛の一人が慌てて門を開けてくれる。

突然式を放り出して帰って来た、破れたドレス姿のダクネスに屋敷の者が驚くが、ダクネスはそれらを無視して堂々と歩いて行く。

俺達三人は、そのままダクネスがどこへ行く気かは分からないまま、ダクネスの後を付いて行った。

「お父様、失礼します」

ダクネスが向かった先はとある部屋。

お父様って事は……。

……ああ、以前俺が侵入した時に、親父さんの部屋の窓を脱出の

際に叩き割ってしまった。
それで、親父さんの部屋も別の部屋にかえたのだろう。
ダクネスは返事も待たずに中へ入った。
貴族のお嬢様がそれで良いのかと思ったが……。

違った。

もう、親父さんはロクに返事が出来ない状態だった。
俺が以前侵入した時よりもやせ細り、目の下に黒い隈を作り、深い息を吐きながら眠っている。
その親父さんが、物音に気付き薄っすらと目を開けた。
ダクネスが、そして俺達が。
その、枕元に近付いた。
ダクネスの姿を見た親父さんは……。

「……おお、ラティーナ……。綺麗だなぁ……。まるで、母さんみたいだ……」

そう言って、弱々しくも優しく微笑む。
その親父さんを見て、ダクネスは申し訳無さそうに顔を伏せる。
「……その、申し訳ありませんお父様……。勝手に進めた結婚ですが……。最悪の形でぶち壊して逃げてきてしまいました……」

それを聞いた親父さんは、実に嬉しそうに微笑む。

「そうか……！　それは良かった。気にする事は無い、謝る事もない」
そう言った後。
親父さんは俺を向き。
「……カズマ君、こっちに来てはもらえんか……」

その親父さんの言葉に、俺はベッドへ近付いた。
「……私は、ちょっと外の空気を吸ってきますね」
場の空気を読んだめぐみんが、そう言って廊下へと出て行った。
……そして空気の読めない奴が、ちょろちょろと親父さんのベッドの傍へ。
病人がいる所で叱り付けるのもアレなので、もうこいつは放っておく。

親父さんは俺の顔を見ると、嬉しそうに笑い。
「……良くやってくれた。ありがとう。感謝するよ……」
突然そんなお礼を言われても。
「……俺は、お宅の娘さんに借りを返しただけですよ」
その俺の言葉に、親父さんは再びニコリと笑みを浮かべた。

そして、ダクネスが居る前で、とんでもない事を言い出す。

「カズマ君。ウチの娘を貰ってやってくれ。頼むよ」
「!?」
突然の言葉にダクネスがギョッとする。
「いらないですよ、何の罰ゲームですか」
「えっ!?」
俺の言葉に、ダクネスが更にギョッとして声を上げた。

俺の言葉に、親父さんは楽しそうに口元に笑みを浮かべた。
……参ったなあ。
王国の懐刀とやらな人は、俺の心中などお見通しらしい。

分かってます、変な男に取られるぐらいなら、ちゃんと面倒見ておきますよ。

俺のそんな内心の気持が分かっているのか、安心した様に息を吐く。

もう、かなり弱っている様だ。

「ララティーナ。今の暮らしは楽しいか？　全てを捨てられるぐらいに？」

親父さんが、目を閉じながらそんな事を呟いた。

それにダクネスが、何の迷いもなく即答する。

「楽しいです。全てを投げ出して、仲間達を守りたいと思えるぐらいに」

親父さんはそれを聞き、満足そうに一つ頷くと、小さく、そうか……と呟いた。

「ララティーナ。お前は好きな道を行きなさい。後の事は任せるといい。こんな身体でも、最後に一筆書くぐらいは出来るだろう」

そんな親父さんに、ダクネスが寄り添い、手を握る。

「……愛していますお父様。今まで育ててくれて、ありがとう……！　お父様が元気になったら、また何時か。私が眠るまで話してくれた、死んだ母さんの事を教えてください……」

「愛しているよ、可愛い娘よ……。ああ、また何時か、お前の大好きだった、母さんの話をしてあげよう……」

ダクネスの瞳が潤む。

親父さんが、本当に幸せそうな笑顔と共に、ダクネスの手を握り返すと……。

その親父さんの身体が、突然ベッドを囲むように現れた魔法陣の光に覆われた。

「『セイクリッド・ブレイクスペル』！」

それは空気読めない子さんの放った魔法。

「うわあああーっ！？」

「お、お父様―っ！？」

突然の閃光に、悲鳴を上げる親父さんとダクネスの二人。

その光が収まると、親父さんの顔からは隈が取れ、未だ痩せこけてはいるものの、その肌の色にうっすらと赤みが差す。

……えっと。

呆然としているその場のみんなの視線を浴びて、アクアが褒めてとばかりに自慢気に。

「呪いよ！　このおじさん、かなりの悪魔にすんごい呪いを掛けられていたから、私の力でサクッと解除してあげたわよ！」

空気が読めない女神のおかげで元気を取り戻した親父さん。

親父さんとダクネスは、手を握り合った姿勢のまましばらくの間見つめ合い。

「「……」」

ゆっくりと握っていた手を放したダクネスは、耳まで顔を赤くしてフイッと窓の外を向き、親父さんは布団を上げて、そのまま布団の中に顔を埋めた。

布団から僅かに覗く親父さんの顔の一部がダクネスと同じく真っ赤になっている。

……親子ですね。

「これでもう大丈夫よ！　ダクネス、良かったね！　ダクネスのお父さんも、何度でもお母さんのお話をしてあげてね！」

嬉しそうな、全く悪意は無いアクアの声。

それを聞きながらダクネスがしゃがみ込んで両手で顔を覆った。

……いい話だなー……。

２０話（前書き）

１９話を読み飛ばす方がいるかも知れないのでこちらにも。
本日は昨日の分と合わせて２話更新です。
最初は領主視点となります。

※残酷なセリフがあります。

苦手な方はご覧にならないか、◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆の後の部分まで飛ばして下さい。

20話

屋敷の者達が皆寝静まった頃。

「ああ……、くそっ！　くそっ！　くそおっ！」

自分の寝室の地下にある隠し部屋。

そこでイライラと、私はその薄汚い一匹の悪魔に当たり散らしていた。

願いを満足に叶えられない、この一匹の壊れた悪魔。

それを何度も何度も足蹴にする。

「ヒュー、ヒュー、ヒュー」

蹴られた悪魔は痛みなど感じていないかの様に、ヒューヒューと喘息患者の発作の様な変わった声を上げ、能面の様に無表情のまま、蹴られる度にユラユラと揺れていた。

この下級悪魔を呼び出し、一体どれぐらいの付き合いになるのか。

これだけの付き合いになれば普通はもう少し可愛気も出てくるものだが、こいつだけはどれだけ経っても慣れる事は出来なかった。

「お前がっ！　お前がもう少し使える悪魔だったなら！　あそこで、あそこでワシのラティーナを奪われるはずも無かったのに！　お前の強制力はそんなにちっぽけな物なのかっ！　役立たず！　役立たず！　この、役立たずがぁっ！」

「ヒッ、ヒュー、ヒュー。教会は悪魔の力が弱くなるからね。そんな事より、何者かに呪いが解かれた様だよアルダープ」

変な呼吸音と共に、蹴られている悪魔がそんな事など気にも留めずにサラッととんでもない事を言った。
「呪いが解けた？　呪いが解けただと!?　お前はっ！　満足に、人間一人呪い殺す事も出来ないのか、役立たずがっ！」
怒鳴りつけながら、悪魔を思い切り蹴り飛ばす。
だが、悪魔は蹴られた事などまるで何も無かったかの様にぼうっとしていた。

この痛がりもせず、苦しみもしない所も、自分がこの悪魔を好きになれない理由の一つだ。

こいつを見ていると、何だかゾクリと背筋が凍る時がある。
こんな下級の悪魔が。
こんな、頭の壊れた、見た目も言動も何もかもが壊れた、下級の悪魔ごときがこの自分を、たまに恐れさせる時がある。
この何重にも対悪魔の封印が施された地下室ならば、余程の悪魔でも契約者に手が出せなくなる。
高い金を出して買った魔法の封印の数々。
それらが施されている以上、本来こんな下っ端の悪魔に怯える必要など無い筈なのだが……。

忌々しげにその下等な悪魔を見下ろす。
左右の目の色が違うその悪魔は、見た目は紳士的な貴族の青年といった風だ。
黒いタキシードをキッチリと着こなして、自分よりも気品ある貴族の貫禄が感じられる。
金髪で色白の、ぞっとするぐらいに綺麗な顔立ちのその悪魔は、見た目は普通の人間と変わらない。
右目は青く、左の目は白い。

それ以外の、ある部分さえ見なければ普通の人間と変わりは無い。
そう、ある部分さえ見なければ。

それは、悪魔の後頭部。
無いのだ。
そこの部分がすっぽりと。
元々なのか、それとも他の事が原因なのか。
頭の一部を失っているこの壊れた悪魔は、突如身体を震わせたり、ギョッとする様なおかしな事を口走ったりしてその度に私をゾッとさせる。

酷く忌々しいが、こんな下等悪魔の力でも、その力を利用しなければ今回の事は揉み消せないだろう。
流石に、居並ぶ街の有力者達や貴族の前で、あの言い草は不味かった。
頭に血が昇り、家格は遥かに上のララティーナを巡り、公衆の面前で随分と暴言を吐いてしまった。
今日はバタバタしていて結局ララティーナには逃げられてしまったが。
公衆の面前であれだけの騒ぎを起こしたのだ。
落ち着いた明日の朝には、ララティーナの仲間のあの冒険者達を手配し、捕えさせて処刑しよう。
場合によっては、ララティーナが助命を懇願してその身を差し出しに来るかもしれない。
だが、それには……。

「マクス！　今回の教会への参列者、及び、ワシの言葉を聞いた者達の記憶を明日の朝までに、全て都合の良い様に捻じ曲げておけ！　分かったな！」
そう言い捨てて、その薄暗い地下室を後にしようと……。

「ヒュー、ヒュー……。無理だよアルダープ。僕にはそれほどの、力は無いよ」

その言葉に足が止まった。

……無理？

この壊れた悪魔が、今まで口答えをした事はない。

ましてや、何を望もうが、どれだけ捻じ曲げようが、無理だなどと言った事はない。

それが、今こいつは初めて無理と言った。

「……無理だと？　お前が力が無い悪魔だと言う事は、呼び出したワシが一番良く分かっている。素人同然のワシに呼ばれて来たぐらいだからな。……だが、貴様に拒否権は無い。やれ！　無理だろうが何だろうが、やって来い！　人数が多いからか？　記憶の捻じ曲げはお前の得意技だろうが！　さっさとやれっ！」

何を考えているのかさっぱり分からない壊れた悪魔、マクスに怒鳴る。

だが、それでも……。

「無理。光が……。ヒュー、呪いを解いた強い光が邪魔をするから、それは無理。今はきっと警戒しているからそれは無理」

無理だと拒否する壊れた悪魔。

カッと頭に血が昇る。

「もういい、この無能な悪魔が！　貴様なぞ、契約解除して他の力ある悪魔と契約してやる！　貴様に最後の命令だ！　ワシの前にラティーナを……！　お前の強制力で、今すぐ此処にラティーナ

を連れて来い！　そうしたら、貴様に代償を払ってやる！」

その言葉に、壊れた悪魔が反応した。

「代償？　本当に？　本当に払ってもらえる？」

「ああ、本当だ。本当だとも。お前はバカだから、ワシが何度も代償を払っている事を忘れているだけだ。今度もちゃんと払ってやる。さあ、ララティーナを連れて来るんだ」

そう言って、頭を失い、マトモな記憶力が無く、何度も何度も騙されるこの悪魔に、諭す様に優しく告げる。

……その時だった。

「領主殿。領主殿はいるか？　私だ。今日の昼の事で、謝罪に来た。顔を見せてはくれないか……」

この、誰も存在を知らない筈の地下室。

その地下室への入口が、コンコンと叩かれた。

なぜこんな時間にだとか、なぜこの地下室を知っているのかだとか、そんな事は今はどうでもいい！

その声は、勿論この私が聞き違えることなど無い……！

「ララティーナ！　ララティーナか！　よ、よし、良くやったマクス！　褒めてやる！　褒めてやるぞ！　一体どうやったのか知らないが、約束通り代償を払ってやろう！　契約も解除だ！　貴様を自由にしてやろう！　ああ、ララティーナ、今開けよう！」

「……？　まだ何もしてないのに、ヒュ、ヒュー！　代償を払って

くれる？　契約を、解除？」

何かをボソボソと呟くマクスにはもう注意を払う事もなく、私は急いで地下室のドアを開けた。

そこからこちらを見下ろすのは、間違え様のないラフティーナの姿。

それも、随分と扇情的な……。

黒く、薄いネグリジェの様な物を身にまとったラフティーナは、普段見せない様な親しげな笑顔を見せ、地下室への階段を降りてきた。

その姿に、その笑顔に、即座にどす黒い欲望が身をもたげる。

ラフティーナが申し訳無さそうな顔で甘く囁く。

「申し訳ありません領主殿……。昼の事は謝ります。……なので、どうか、わが身で仲間の命の助命を……！」

その言葉に全てを理解した。

そう、この女は自分の予想通りに、仲間の助命の懇願に来たのだ！

もう、これ以上は我慢できない！

長年ずっと狙っていた娘が、こんな格好で目の前に居るのだ。

ラフティーナが階段を下りきるまで待つ事が出来ず、その身体にむしゃぶりつこうと……！

飛び掛ろうとした、その時だった。

ラフティーナがニイッと笑うと、その姿がグニャリと歪む。

そして、そこには……、

「フハハハハハハ！　ラフティーナだと思ったか？　残念、我輩でした！　おっと、これまた凄まじく強烈な悪感情！　美味である美

味である！　フハハハハハ！」

黒い、パリッとした、マクスが着ている物と同じタキシードを着た、仮面を被った男が立っていた。

「！？　な、なんだ貴様は。なんだ、貴様はっ！　このゾクゾクする感じ。マクスと同じ感じだ！　悪魔だな！　貴様は悪魔だ！」

私は目の前の悪魔とおぼしき者に指を突きつけると、その仮面の悪魔はニタリと笑う。

その笑みを見て、思わず一歩後ずさりながら確信する。

間違いない、こいつは悪魔だ。

「マクス！　この汚らわしい悪魔を殺せ！」

仮面の悪魔を指差し、叫ぶ。

許せない、許せない！

取り逃がした悔しさに歯軋りし、切望していたラティーナに化けて現れるとは、なんて奴だ！

なんというガッカリ感！

なんというどん底感だ！

絶対に、絶対に許さない！

「？　……なぜ僕が同胞を殺さないといけないの？　ヒューッ……？　あれ？　君はどこかで会ったのかもしれないな？」

マクスが、私の言う事を聞かずにそんな事を言い出した。

私に口答えをしたのは、今日はこれで何度目だ？

どうしてしまったのだこの悪魔は。

本当に壊れてしまったのか？

そんな事を考えている間に、目の前の仮面の悪魔が、貴族として羨むような、完璧な作法と共に礼を尽くしたお辞儀をした。

そして、マクスにニヤリと笑いかけ。

「貴公に自己紹介をするのは何百回目か何千回目か。では今回も、初めましてだマクスウェル。辻褄あわせのマクスウェル。真実を捻じ曲げる者マクスウェル。我輩は見通す悪魔、バニルである。真理を捻じ曲げる悪魔、マクスウェルよ。迎えに来たぞ！」

マクスウェル？

この壊れた悪魔はマクスではなくマクスウェルと言うのか？

いや、迎えに来ただと……？

「バニル！　バニル！　なぜだろう、何だかとても懐かしい気がするよ！　以前どこかで会ったような？」

「フハハハハハ、貴公は会う度に同じ事を言うな！　貴公の名前はマクスウェル！　ここは違う別の世界から、記憶を失ったままやって来た我が同胞である！　さあ、貴公が帰るべき場所、地獄へ帰ろう！」

仮面の悪魔の言葉に私はそこに割って入った。

「ま、待て待て！　そいつはワシの下僕だ！　勝手に連れて行くな！」

思わず出たその言葉に、バニルと呼ばれた悪魔が笑う。

「下僕？　我輩と同じく地獄の公爵の一人であるマクスウェルが、貴様の下僕だと？　悪運のみが強い、傲慢で矮小な男よ。貴様は運が良かっただけだ。たまたま最初に呼び出した悪魔がマクスウェルだったから助かったのだ。他の悪魔を呼んでいたなら呼び出した瞬

間に、何の力も持たない貴様は引き裂かれていた事だろう！　だが、貴様は運が良かった！　何も分からないマクスウェル！　力はあるが、頭は赤子のマクスウェル！　彼のおかげでその地位まで上ることが出来たのだ、深く、深く感謝するがいい！」

言っている事が分からない。

私が飼っていたマクスが、地獄の公爵？

いや、私がこの地位まで上り詰めたのは自分の力だ。

この壊れた悪魔の力など微々たる物でしかない筈だ。

バニルの指摘に戸惑う私に、その仮面の悪魔は更に口元を歪めて言った。

「そして、貴様は先ほど我輩が現れた時、マクスウェルにこう言ったな。……約束通り、代償を払ってやろう！　契約も解除だ！　貴様を自由にしてやろう！　と」

その指摘に、しまった、と後悔する。

なんて事だ、あの時マクスが悪魔の力を使い、ここにラティーナを呼んだのだと勘違いしてしまった。

上機嫌になり、我を忘れ、ついあんな事を口走ってしまった。

……そうか。

この悪魔は見通す悪魔だとか名乗ったな。

つまりこうなる事を分かった上で、このタイミングでここに来たのだ。

そこまで考えていたその思考すらも見通すかのように。

「そう、ど素人の貴様の作った、このちっぽけな対魔結界などは我輩やマクスウェルには特に意味など成さないが、契約が交わされて

いるというのが問題だったのでな。いやいや全く、こんな回りくどい事をしてしまった」

……回りくどい？

「き、貴様、貴様……！　貴様が、まさか」

「そう、ご想像の通りである！　我輩があの小僧に借金返済の都合を付け、貴様の事も教えてやったのだ！　フハハハハハハ！　いいぞいいぞ、素晴らしい悪感情だ！　美味である美味である！」

震える拳を握り締め、

「こんな！　こんな事をしてくれて……！　こんな壊れた悪魔が欲しいのなら、言えばいい！　正体を明かして言えば、そうすれば、最初から返してやったのだ！　こんな、街中を巻き込み、ワシに恥を晒させずとも……！」

そうだ、ここまで先を見通せる悪魔がいたと最初から知っていれば、私だってここまで大胆な事は……！

そんな私に、悪魔が告げた。

とてつもなく、バカな事をあっさりと。

「この方が面白いだろう！　フハハハハハ、見物であったわ！　今回は、あの女神ですらが我輩に踊らされた事になるのではなかろうか！　あのチンピラ女神が式に呼ばれている間、この我輩が卵の孵化をさせられるという屈辱は受けたものの、最後に極上の悪感情を味わえた！　恋焦がれ、ようやくその偏愛が実り！　そして、あと少しで手に入ると思った瞬間に嫁を連れ攫われた時の、貴様のあの悪感情！　思わず我輩、このまま滅ぼされてしまっても良いとすら思える程の美味であった！」

何を言っている。
何を言っているのだこの悪魔は！

「さて領主殿。我輩はもう貴様に用は無い。後はマクスウェルを地獄に帰し、我輩はあのへっぽこ店主の下であくせくと働くのみだ」

どうやら、この悪魔はマクスを連れて、もう帰るつもりの様だ。
仕方ない、マクスが強力な悪魔だったとは知らなかったが、それでもこいつが居なくても、きっと私ならまた上手くやっていける。
下手にこの悪魔を怒らせるのもバカな話だ。

だが、明日からどうするか。
これで、これから証拠を揉み消す事も出来なくなった。
いずれ証拠を嗅ぎ付けられる前に、王国の懐刀と呼ばれた、ダスティネス家のあの男の物理的な暗殺を考えなくてはいけなくなった。

私がそんな事に頭を悩ませていた、その時。

「ヒュー！　ヒューッ！　バニル！　バニル！　帰る前に、僕はアルダープから代償を貰わないと！　さっき言ってくれたんだ、代償を払ってくれるって！」

マクスが、興奮したように笛の音の様な声を出し、嬉々としてそう言った。
しまったな、そう言えばそんな事も口にしてしまった。
「分かった分かった、代償だな。払ってやる払ってやる」
今はそれ所ではないのに。

だが、これ以上こいつらの相手をしている暇は無い。
そう言えば、こいつに代償とやらを払うのは初めてだな。

どんな物を請求されるのかは知らないが、まあ、散々こき使ってやったのだ。
最後に代償ぐらい払ってやっ

……ゴギンッ！

……地下室に、突然響く鈍い音。

それが、自分の両腕が折られた音だと気付いたのは、
「……えっ、あっ、あああぁぐあああああああっ！？」
無表情のままのマクスが、私の両腕を握り締めている姿を確認してからだった！

「ひいっ！？　ひいいいいっ！　痛っ、いっ、いだあああああっ！？」

折れた両腕を握り締められ、私は悲痛な悲鳴を上げる。
だが、この地下室の声は誰にも聞こえない。
どんなに助けを求めても、聞こえる事は無い。
元々は、気に入った娘を攫って来た時に、それを嬲るために作った場所だ。
どれだけ叫ぼうとも、外に声が出る事は無い。

「アルダープ！　アルダープ！！　良い声だよアルダープ！　ヒュー、ヒューッ！」

壊れた悪魔が、そんなバカな事を言ってくる。
「何をっ！　離せマクス！　止めろ！　痛い、止めてくれえっ！」
泣き叫ぶ私の声を聞き、マクスが初めて。

そう、長い付き合いのこの悪魔が、初めてその顔に表情を見せた。
無機質だった能面の様なその顔をぐにゃりと歪め、実に楽しそうに笑う。

それを見て、バニルが言った。
「フハハハハ！　マクスウェル、続きは地獄へ帰ってからやればよい。どうせ、この男の貴公への代償は凄まじい量になっている。百年や二百年では払いきれる物ではない。地獄へこの男を持ち帰って、ゆっくり代償を払わせるがいい」

痛みに頭がぼうっとしながらも、その言葉がとてつもない内容を含んでいる事には気が付いた。
今この悪魔はなんと言った。
その、私の考えを見通したのだろう。
バニルが嬉々としながら言ってきた。

「これまでの、貴様がマクスウェルを使役してきた代金は、契約に従い、マクスウェルの好む味の悪感情を、決まった年月分放ち続けて貰おうか。……フムフム。貴様随分と好き放題な生活をして、こやつを酷使したものだなぁ……。だが安心するが良い。代償を払い続けている間はマクスウェルの呪いにより、年を取る事も死ぬ事も無い！　代償を支払い終わると呪いが解け、経過した年月分が一気にその身に掛かり、すぐさま息絶えてしまうだろうが……。だが、喜ぶが良い！　貴様は長い年月を生きられる事になるぞ！　良かったな！　フハハハハハハ！　フハハハハハハ！」
「ヒュー！　ヒュー！　ヒュー！」

バカ笑いする悪魔二人に、私は背も凍るようなおぞ気を感じた。
腕の痛みもどこへやら、身体を震わせ、必死に悪魔に呼びかける。

「わ、分かった！　今まで酷使して悪かった！　こうしよう！　まず、私の莫大な」

「資産ならば、マクスウェルが地獄に帰る事により、貴様は様々な悪事が全てバレ、全財産を没収される。それはダスティネス家に管理され……。調子に乗って全財産はたくんじゃなかった本当に身体で払わせてやろうかあの女、と現在自宅で悶々と悩む男や、街や国へと返還される事になる。見通す悪魔、バニルが宣言しよう。貴様はもはや無一文である」

それを聞いて、カタカタと歯を合わせ、泡を吹きそうになる。

私が貯めた資産が全て……！

「そ……」

「それなら、家の者を何人でもワシの代わりに連れて行っていいから、だと？　残念、支払い義務は契約者にのみ請求される！　……おっと、せっかくの悪感情であるが、今の貴様の、その絶望の悪感情は我輩の好みでは無いな。その感情はマクスウェルの好みの味だ」

それを聞き、いよいよ身体の震えが止まらなくなる。

「ま、まま、マクス……、マクス……！　わ、ワシはお前に色々と酷い事を……。酷い事をしてしまった。頼む、助けてはくれんか？　見逃してくれ、ワシはああ見えて、お前の事が嫌いでは無かったのだよ……！　本当だ！　なあ、頼むマクス！」

その言葉を聞きながら、バニルはニヤニヤと笑ったまま、なぜか私の嘘を訂正しようとはしなかった。

私の腕を握っていた、マクスの手が離される。

私は、そのままペタンと地に座り込んだ。

その行動に、ほんの僅かな希望を抱き、恐る恐るマクスを見上げ

る。

笑っていた。

それは、とても無邪気な笑顔。

ずっと無表情だったこの悪魔は、純粋な子供の様な笑顔を見せていた。

「アルダープ！　アルダープ！　僕もだよ！　僕も、君が好きだよアルダープ！　地下室に、泣いて許しを請う娘の髪を掴んだまま引きずり込み、乱暴を働いた残虐な君が好きだよアルダープ！　君の大切な物をうっかり壊した、命ばかりはと助けを求めた使用人を、躊躇無く殺した君が好きだよアルダープ！　あの、ララティーナという子に少しでも似た娘を何人も何人も攫ってきて、それを嬲って壊してきた、君が好きだよアルダープ！」

その言葉に、ブワッと汗が噴出した。

バニルは、一体何がおかしいのか、私の様子をニヤニヤと笑って見ている。

マクスは。

長年の付き合いの、壊れた悪魔は、その顔を紅潮させて力説していた。

「アルダープ！　アルダープ！　僕が君を、どんなに好きかなんて伝わらないだろう！　君が好きだよアルダープ！　この眼を見てよ、この色の違う瞳を！」

言われたままに、壊れた悪魔のその眼を見る。

右目は青く、左は白い。

壊れた悪魔は、実に楽しそうに手を広げた。

「この青い眼はね、アルダープ！　僕と最初に契約してくれた人の

眼なんだよ！　僕は記憶する事が出来ないからね！　僕は、僕は頭の一部が無いからね！　でもねアルダープ、この眼の持ち主の事は覚えていられる！　何せ、身体の一部にしたんだから！」

その言葉におぞ気が走った。

ああ、私がこいつをどうしても好きになれなかった理由はこれだ。

「どうやって身体の一部にしたか、聞きたいかい、アルダープ！　彼の……、いや、彼女だったのかな？　その身体の一部を食べて取り込んだんだ！　ああ、アルダープ、アルダープ！　残虐な君は素晴らしい！　愛おしい！　君を殺して、食べてしまいたいほどに！」

この悪魔は壊れている。

私は自分の股間がじんわりと温かくなっていくのを感じながら。

もう一匹の悪魔に手を伸ばす。

「た……たす」

「我輩は、人間が好きである。大切な、我輩の美味しいご飯製造機であるからな。……だから、その大好きな人間族の数を減らす輩は、我輩の敵と言えよう！　そもそも、悪魔に助けを求めるなど貴様は滑稽にも程があるぞ！　フワハハハハハ！」

バニルを絶望の表情で見つめる私に、壊れた悪魔が笑い掛けた。

「ヒュー！　ヒュー！　ヒュー！　堪らない！　堪らないよアルダープ、今君が放っている絶望の感情の味は！　ああ、堪らない、堪らない！　こんなに昂ぶったのは何時振りだろう？　そうだ、母さんだ！　母さんを殺した時だ！」

いや、この悪魔は壊れているんじゃない。

「なぜ母さんを殺した事を覚えているんだろう？　……？　ああ、そうか！　母さんも、殺して食ったんだった！　ヒューッ、ヒューッ、ヒューッ！」

狂っている。

この悪魔は狂っている。

ああ、どうか……！

「ねえ喜んでよアルダープ！」

どうか、早く私の精神が壊れて、すぐに何も感じられなくなります様に……！

「君が何度壊れても、僕の力で何度でも、記憶を捻じ曲げて、何時でも新鮮な絶望をあげるから！　あげるから！　愛しているよアルダープ！　ヒューッ、ヒューッ、ヒューッ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

それは、ダクネスを拉致って来た次の日の朝の事。

俺は自分の屋敷の玄関口で。

「領主が失踪？」

朝一で屋敷に来たダクネスの言葉に、自分の耳を疑っていた。

あのダクネスダクネス言ってたおっさんが、なぜいきなりいなくなるのか。

と言うか……。

「……ん、そうだ。使用人達が探しても、姿が見当たらないそうだ」

そのダクネスの言葉に、俺は首を傾げていた。

……？

てっきり、朝になったら領主の私兵が家に来ると思っていたのだが。

「なぜか今日になって、突然あちこちで領主の不正や悪事の数々の証拠がこれでもかと湧いて出てな。領主は、それの発覚を押さえ込む事が出来なくなった為に夜逃げしたのではと言われているな」

なるほど。

ダクネスは、俺を見て。

「……だから、もうカズマが夜逃げをする必要はないからな。とりあえず、その荷物を置くといい」

俺はダクネスの言葉に、背負っていた荷物を降ろした。

俺の後ろに居ためぐみんとアクアも、それぞれ背負っていた荷物を降ろす。

色々なほとぼりが冷めるまで、どこか遠くで畑でも耕そうと言う事になっていたのだが。

「まあ、それなら良かったな。……？　どうしたんだよ、早く中に入れよダクネス」

俺は、玄関先で立ったまま、屋敷に入ろうとしないダクネスを促すが……。

ダクネスは、玄関先でじっと立ったまま、思い詰めた顔で動かない。

「どうしたんですか、ダクネス？　何かありましたか？」

めぐみんの言葉に、アクアがあっ！　と声を上げた。

「そうか、めぐみんは最初から教会にいた訳じゃ無いから知らなかったのよね！　聞いて！　ダクネスは、なんとカズマに買われちゃったのでした！　カズマがダクネスの借金肩代わりしたんだけどね、ダクネスに、その分を身体で払えって……」

「……は？」

「おい、ちょっと話をしようぜ。おかしい、色々とおかしい。いや、言ってる事は間違ってはいないが色々おかしい」

めぐみんが俺をゴミでも見る様な目で見つめる中、ダクネスが首を振る。

「……いや、そうじゃない。カズマには、確かに衆目の中、身体で払えだの、ド変態クルセイダーだのと言われたが……」

おっと、めぐみんが魔法を唱えようとしてるんですが。

ダクネスが、突然頭を下げた。

「すまない。今回は自分勝手な事をして、皆に迷惑を掛けた。……本当に、自分でもバカな事をした。許して欲しい……」

それを見たアクアとめぐみんが、慌ててダクネスに駆け寄った。

「もういいじゃないですか、こうして無事に帰って来れたんですから。私は気にしてませんよ。カズマがちょろっと色々失いましたが、カズマは小金を得ると働かなくなる習性を持っています。これで良かったんですよ」

「そうそう、むしろ、今回の事が無かったら私だってダクネスの家に行かなかった訳だしね。そうでなかったら、ダクネスのお父さんの呪いにだって気付かなかっただろうし！　アレよ！　あの呪いはあの仮面悪魔が掛けたんじゃないかと疑ってるのよ私は！　私のくもりなきまなこで見た感じ、間違いないわね！　お礼参りに行きましょう！」

ダクネスは二人の言葉を聞きながら、俺を真っ直ぐに見つめてきた。

「カズマには、本当に大きな借りが出来た。全てを投げ出して、金を作ってくれたと言っていたが……。カズマの金は……。領主に不当に取り上げられた、廃城の弁償金、そして、私の代わりに払ってくれた金。それらは全て、今すぐにでは無いが還付される。父が体調を回復次第、領主から没収した財産を計算し、それらの補填が行なわれるはずだ。だが……」

ダクネスが、顔を曇らせる。

「……だが、お前が売ってしまった知的財産だのは、もう戻っては来ない。せっかく鍛冶スキルを取ってまで得た、お前の仕事が……」

そんな事か。

「いいよ。それにジッポ作るのも飽きてきてたから、別に……。……あれっ、ちょっと待ってくれ。金が返ってくるの？」

ハタと気付いた俺は真顔で聞き返す。

いや、待て待てちょっと待て。

「ああ、返ってくる。まず今回用立てて貰った二十億。それに、以

前の廃城の件で言い掛かりを付けられて横取りされた、三億の報酬。
そして、領主の屋敷で支払った八千万。計二十三億八千万か。……
しかし、今になってよくよく考えてみれば、なぜあんな素直に領主の言い分を受け入れ、廃城にホイホイとあんな額を払ったのか……。
それに、なぜこんなに急に、次々と領主の不正の証拠が出てきたのか……？」
ダクネスが、合点がいかぬとか言いながら首を傾げているが、それ所じゃない。

それ所じゃないって！

「二十……三億……八千万……」

なんてこった。
もう一生働かなくてもいい訳で……！

……あれっ？
ちょっと待てよ、一日が二十四時間で、あのサービスが三時間で五千エリス……。
あれ？
二十億もあったら、俺、このまま一生夢の世界で暮らす事も……？

そんな俺に、めぐみんとアクアがピタリと寄り添う。

「今日のカズマって、何だかアレよね。凄くアレだわ、男前よね」
「ですね、アレな感じで男前ですね、私は昔から思ってましたよ、カズマは男前だって」
「それしか褒め言葉が思い付かないなら無理に言わなくてもいいぞ。心配しなくても、独り占めしようなんて思ってないからな」

そんな俺達三人を見ながら、ダクネスがまだ玄関先から動かなかった。

「全く、もう良いって。お前は俺の廃城の時、コッソリ内緒で、弁償金の大半を領主に払ってくれただろ？　昨日は何勝手な事してんだって怒ったけどさ。そりゃ、やっぱちょっとは嬉しかったよ。で、今回はその借りを返した。そんで、その金が全部返ってくる。もうそれで、昨日は全部何も無かったって事で良いじゃないか」

ぶっちゃけ、返ってくる予定の金の、金額が金額だからみみっちい事はどうでもいい。

正直もうそんな事はどうでもいいので、今日から宿屋の一番良い部屋借りて、一週間ほど外泊したい。

だがダクネスは、俺の、何も無かった事に、という言葉を聞いて、その表情を曇らせた。

……？

「それは……。私を買う、と言った言葉も無かった事に？」

ダクネスの言葉を聞いて、俺の両脇にピタリとくっついていためぐみんとアクアが、至近距離でジッと俺の顔を見つめ出した。

……や、やめてください。

「勿論無かった事に！　あれだよ、昨日あった出来事は、もう全部忘れようぜ！」

ダクネスが、それを聞き尚更沈んだ表情を浮かべた。

……あれっ？

アレか。

ひょっとして、あなたの物になりたかったみたいな。

そんな、変わった愛の告白展開なのか。

俺のそんなドキドキを他所に。

ダクネスが、泣きそうな顔で俯いたまま。

「……その……。手紙の事だが……。私をパーティーから外して欲しい、と書いた、あの手紙だが……」

ああ、なるほど。

ダクネスの中ではパーティ抜けたつもりでいるのか。

で、昨日の件を無かった事にしたら、クルセイダーとして身体で払って貰うって言った件も、無かった事になるって訳で……。

なあんだ、期待した。

ったく、そんなの……。

「何言ってるんですか、ダクネスはウチの大事なクルセイダーなんですから。絶対に離しませんよ？」

「そうよ、今更何言っちゃってんの？　ダクネスって、たまにバカなの？　ダクネスの居場所なんて此処しかないでしょ？　何パーティー勝手に抜けようとしてんの？」

……くそう、先に言われた。

だがダクネスは、胸の前で手をもにょつかせ、オドオドとした不安そうな顔で、上目遣いに俺を見た。

俺の口から聞かないと、安心出来ないのだろう。

と、俺が口を開こうとしたその前に、ダクネスが先に言ってきた。

「そ、その！　……私は、固いだけが取り柄の、ロクに剣も当てられないクルセイダーだ……、です……。……その、もう一度……。

もう一度、私を仲間にして……、もらえますか……？」
不安そうな、慣れない敬語を使ってきたダクネスに、俺は苦笑しながら言った。
「……当たり前だろ。……お帰り！」
その言葉にダクネスが。
歳相応の自然な顔で、柔らかい笑みを浮かべた。

「ねえ、カズマ。でも、本当はちょっと残念だったりしない？　ダクネスに身体で払って貰うって言葉、あれってちょっとえろい意味も含まれてたでしょ？」
空気を読まない事にかけては他に並ぶ者が居ないアクアが、口元に手を当てながらニヤニヤと、突然そんな事を言い出した。
こいつ、なに言ってんの？

「そう言えば。公衆の面前で……。それって殆ど愛の告白みたいなもんじゃないですかね？」
めぐみんまでもが、そんな事を言ってにやけている。
こいつもなに言ってんの？
ちょっと最近調子に乗ってきやがったなコイツラ。
舐められないように、ここらで一つザックリくるキツイ事言ってへこましとくか？

と、ダクネスの様子がおかしくなった。

おどおどしながらも、恥ずかしそうにこちらを、チラッ、チラッと伺い、俺が何か言うのを待っている。

……なんだろう、イラッと来た。

良く分からないけれど、イラッと来た。

俺はこういった、周囲に冷やかされたり煽られてだのと言った、こういうラブコメみたいな展開が嫌いなのだ。

なので、今はまだ言わないでおこうと思っていた事を、言ってやろうと思う。

「……なあアクア。ちょっと疑問に思ってたんだけどさ。ここの国の結婚って、入籍とかどうなってんの？　式の後から？　それとも籍とかは無いのか？」

突然違う話を始めた俺に。

「なあに、いきなり？　殆ど日本と変わんないわよ。まあ、基本は挙式より先に、まずは書類で籍入れて。それから……。結婚……。……みたい……な……」

アクアは、俺の言いたい事に気が付いたらしい。

途端に顔を引きつらせためぐみんも、同じく気付いた様だ。

「……？　……どうした？　急に？」

世事に疎い、お嬢様なラティーナには良く分からなかったらしい。

めぐみんが、顔を引きつらせながら。

「さ、最近は、バツイチなんて珍しくはないですしね！　ないですし、ええ！」

その言葉に、ダクネスもようやく気付いた様だ。
ハッとして顔を上げる。

「その……、これってどうなるのかしら？　式の最中にダクネスは攫われた訳だけど。次の日に相手が夜逃げって事は……。むしろ、ダクネスがあのおっちゃんに捨てられたって、世間は見るのかしら」

悪気はないアクアの言葉に、ダクネスがビクリと震えた。
そして、恐る恐る不安そうに、正面の俺の顔を見上げると……。

「まあ……籍ぐらい、なんて事は無いさ。気にするなよ……。……バツネス」
ダクネスが、ワッと泣いて背を向け逃げた。

ダクネスが、実家に泣いて帰ったまま出てきません。
謝ろうとしても引き篭もったまま出てきません。
現在、また俺一人による侵入作戦を計画中です。

後で調べたら、式を急いだおかげか、入籍手続きはまだでした。

20話（後書き）

三部終了です。

シリアスは疲れます……。

次回からは平常運転。

マクスウェルの悪魔はもう出てきません。
記憶がないのは伏線でもなく、マクスウェルの悪魔の殺し方に乗っ取っているだけです。
何かある様な感じですが、全く無いです。

1話（前書き）

感想でめぐみんエロをと言うご要望があったので、四部突入記念に今回こそは期待に応えてみます。

毎度お馴染みエロ回です。
苦手な方はご遠慮下さい。

1話

その薄暗い空間に、めぐみんの切ない声が響いた。

「カズマ……！　カズマぁ……っ！　あなたの事が、大好きです！　愛しています！」

荒い息を吐きながら、俺に必死でしがみ付いてくるめぐみん。
そのめぐみんの下半身からは、時折湿った粘液の音……。

「お、俺も……！　俺も、好きだよめぐみん……っ！」
同じく俺も、荒い息を吐きながらめぐみんへと言葉を返す。

そして俺は、めぐみんに申し訳無さそうに。
「ダメだ……！　めぐみん、俺はもう限界だ……！　俺、もう我慢できない……！　もう出る……っ！」
「待ってくださいカズマ！　お願い、お願いですカズマ！　一緒に……！　はあ……はあ……、い、いくなら、私も一緒に……っ！」

めぐみんが、俺を掴む手に力を込めた。

「……もう限界だって！　俺、もういくから！　そ、外に……外に出させろ……っ！」
「待って！　カズマ、このまま！　このまま、中に……っ！」
言いながら、めぐみんは俺の腰に回した手に精一杯の力を込め、ギュッと掴んで離さない！
俺は……
俺は……っ！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺の屋敷の広間において。
「諸君。人類と言うのは会話が成り立つ種族である。我輩と話をしよう」
両腕を強力な呪縛のロープで縛られ、床に正座させられているバニルが言った。
バニルの両脇には、あと数センチも近付けばくっ付いてしまうぐらいの超至近距離で、それぞれアクアとウィズがしゃがみ込み、眉間にしわを寄せながらバニルの横顔をジッと見ていた。
そして、バニルの前には俺が立ち、俺の隣には難しい顔をしたダクネスとめぐみんの姿があった。

領主が突然行方不明になり、隠していた証拠の数々が次々湧き出し、その悪行の数々が明るみに出た。
ダクネスの家の借金や、俺が失った金の諸々も、ダクネスの親父さんの回復に合わせ、全て領主の被害にあった人々に返ってくる事になったのだが。

ダクネスの親父さんが悪魔に呪いを掛けられていたと言う事が判明し……。
今回の黒幕はバニル説が浮上し、俺の屋敷にて現在尋問中である。
なぜそんな疑いが掛けられているのかと言うと……。
「今回の騒動で、一番得するのってあんたなのよねー。カズマから

は色んな商品を安く買い取れて良かったわねー。あんた、聞いたわよ。カズマから手に入れた知的財産権を転売して、すんごい利益出したそうじゃない。ねー、あんた、もっと簡単な解決方法も知ってたんでしょ。本当の事言ってみなさいな？」

威嚇でもするかの様に両手の間に白い光を纏わり付かせ、バニルにそれをチラチラと見せるアクアが言った。

それに続き……。

「バニルさん、私に内緒で何とんでもない事してくれたんですか？　カズマさんから財産権買い叩いて売り払った？　信じられない……！　ああっ、もうどうしよう！　金庫にあったあの大金が、まさかカズマさんから不当に手に入れたお金だったなんて……！　返そうにも、もうお金が……っ！」

ウィズが、顔を覆いながら、申し訳無さそうに俺に謝る。

ウチのバニルさんがごめんなさい、ごめんなさいと謝る姿に、何だかこちらこそ申し訳ない気になるが……。

「おい落ち着くのだ、ヤクザ女神に穀潰し店主よ。まあ、他にも解決方法があるにはあっ……た……。が……？　いや待て。おい天災店主、今なんと言った？　金庫に入れておいたあの金はどうした。おいそれと使いきれる額ではないぞ」

ピタリとバニルの動きが止まった。

「あれですか！　褒めて下さいバニルさん！　以前、デストロイヤー戦で得たお金で最高純度のマナタイト結晶を仕入れたんですが、その時仕入れた商人さんが、わざわざウチのお店まで新たに大量のマナタイト結晶を売り込みに来てくれまして！　安かったので、金

庫のお金で買えるだけ買いましたよ！　本当に良い買い物をしました！　あれは間違いなく！　私が見た所、あの溢れ出る魔力からして、あれは間違いなく最高純度ですよ！」

……。

呆然とするバニルが、ちょっとだけ気の毒になってきた。

そのバニルに、

「まあ、俺はお前がそこまで色々仕組んでたとは思ってないんだが。一応聞いときたいんだが、アクアの話だとダクネスの親父さんは悪魔に呪いを掛けられてたって事らしいんだが。……この街には、悪魔なんてお前しかいないよな」

と、俺が何となく聞くと。

「フハハハハ、我輩が人の命を奪いかねない呪いなど掛ける筈があるまいて！　あの呪いを掛けたのは、たまにおかしな言動をする、頭がぶっ壊れている事で評判の、公爵級の力を持つ大悪魔である」

「まさしくお前の事じゃないか」

アクアとウィズが、その言葉にバニルの両肩をガッと掴み、今回の件で父に呪いを掛けられたダクネスが無言で前に出た。

「おい待て貴様ら。この紳士的な我輩が、おかしな言動をする壊れた悪魔に該当すると申すか。うむ、話をしよう！　確かに今回の件は、回りくどい事をしたのは認めよう。我輩も、あの領主が目の前で花嫁を奪われる悪感情を食したいが為に、こんな展開にしてみたのは認める。だが聞いて欲しい。特に先ほどから我輩を睨みつけている、今回の件でそこの男を僅かに意識してしまい、屋敷でのスカートの丈が三センチ短くなったむす」

「わあああああああ父の敵ー！」

「こっ、こらっ！　仮面を！　仮面を折ろうとするなっ！　貴様の

父親はまだ死んではおらんではないか！」

ウィズとアクアに取り押さえられているバニルの仮面を、突如叫んで襲い掛かったダクネスがギリギリとへし折ろうとしている。

そんな光景を眺めていた俺の服の裾を、めぐみんがクイクイと引っ張った。

「カズマ、なんか大体解決したみたいですし。私は今の内に街の外に、一日一爆裂に行こうと思います、今日は昼から雨が降りそうな天気ですし。早いうちに済ませてきます」

「あ、なら俺も一緒に行くよ。こっちはもうこいつらに任せておこう」

俺はそう言うと、一応の装備を付けて、後の事は広間でバニルを弄り回している三人に任せ、めぐみんと共に出かけていった。

街から出てしばらく歩き、草や木のあまり生えない、岩肌の多い山沿いへと向かう。

最近のめぐみんの嗜好は、硬くて大きい物への爆裂らしい。

カズマの所為で、もう何も無い所に爆裂魔法を撃つだけでは我慢できない身体になってしまいましたとか言われたが、知った事か。

道中にモンスターでもいれば、経験値稼ぎがてらにぶっ飛ばして貰おうと思っていたが、こんな時に限って現れない。

まあ、街の周りの危険なモンスターは軒並み狩られているから仕

方が無い。
そうこうする間に、めぐみんが山すそに適当な大岩を見つけた様だ。

街から数時間掛けて歩いてきたが、もっとこう、ちょちょっと街から出た辺りで何とかして貰えないものだろうか。
実に長い散歩だ。

めぐみんが魔法の詠唱を始め、その声が風に流れる。
やがて魔法が完成し……！

「『エクスプロージョン』ッ！」

めぐみんが叫ぶと同時、杖の先から放たれた閃光が岩に刺さり、そのまま大爆発を起こし、その瓦礫や破片を空高くに振り撒いた。
パラパラと破片が降り注ぐ中。

「うむ、八十五点」
「くっ……。やりますねカズマ、段々爆裂魔法を見る目が出てきたじゃないですか。確かに今日の爆裂はそんな点数の出来です。威力が弱かった所為か、ちょっと破片も大きめで……、あああっ！？」
……？
突然驚くめぐみんに、俺はどうしたと尋ねようと……、した所で、頭に強い衝撃を感じ。
そのまま意識を…………………

◆◆

……。

薄暗い。

目を開けて、一番最初に感じたのはそんな印象。

遠くから雷鳴が聞こえ、それと共に強い雨の音も聞こえてくる。

薄ら寒く、背中が痛い。

いや、それよりも頭が痛い。

俺はどうやら、固い地面に寝かされていた様だった。

……そして、腹の部分になにか温かい物を感じる。

俺は身を起こそうとしながら腹の方に視線をやると……

俺の腹の上に、しがみ付くように投げ出すように両腕を置いて、うつ伏せの姿勢になっているめぐみんと目が合った。

……。

しばらく無言で見つめ合い、やがて沈黙に耐え切れなくなった俺は。

「……何してんの？」

めぐみんに、静かに尋ねた。

めぐみんは俺の腹の上に顎を置いた状態で、まるで枕にでもするかの様にうつ伏せに寝そべっている。

「……気を失ったカズマが心配だったので、こうして心音を聞いていました」

言いながら、めぐみんがにこっと笑った。

俺はこんなに素直そうなめぐみんの笑顔を見た事が無かった。

そして、俺は自分が今どこに居るのかを理解する。

そこは薄暗い洞窟の中。

洞窟の外からは雨の音。
時折聞こえる雷の音からすると、見る間でもなく外は大雨なのだろう。

なるほど、大体把握した。
めぐみんの爆裂魔法で打ち上げられた岩の破片。
それが俺の頭に直撃し、気を失った所に雨が降ってきたのだろう。
それで、めぐみんが俺の身体をどうにかこの洞窟に運んだのだ。
場所が山すそだった為に洞窟があってもおかしくはないが、良くこんな場所が見つかった物だ。

痛む頭を押さえると、そこにはこぶが出来ていた。
更には血が固まったかさぶたの様な物がある事から、結構な重さの破片が降ったのだろう。

……まあ、それはいい。
これは事故だし、こんな事だってたまにはある。
そんな事より。

「めぐみん。……今の俺達の状況を教えて貰えるか？」
俺の言葉にめぐみんは、
「爆裂魔法で破壊した岩の破片が当たり、カズマが気を失った上に、しばらくすると雨が降ってきまして。それで、近場にあったこの洞窟に運びました。この山すそにはよく爆裂に来るので、ここに洞窟がある事を知ってましたから」
そう言いながら、ニコッと笑った。

うん、やはりか。
想像通りだ。

「そうか、じゃあ、もう一つ。俺が目を覚ましたら、何でめぐみんの頭が俺の腹に乗っかってたんだ？」
「さっきも言いましたが、カズマの心音が聞きたかったのと、雨が降ってきて寒かったし、寄り添った方が温かいかなと思いまして……。カズマが気を失っている間に、体を冷やして、体調を崩しては大変だと思い……」
言って、再びめぐみんがニコッと笑った。

……。

「じゃあ、もう俺は大丈夫だから帰ろうか。手を離してもらっていいからな？　……後、他になにも言う事はないなら俺はこれで……」
立ち上がろうとした俺の腰に、めぐみんがうつ伏せで寝たままかさず手を回す。

「……正直に言いますと、気を失ったカズマが起きるまで暇だったので、寝て待ってました。洞窟は固くて痛いので、カズマのお腹を枕にしてました」
めぐみんが、素直にそんな事を言ってきた。
よしよし、偉いぞ。

「じゃあ……。お前の下半身に張り付いているそれは何なのか、どうしてそうなっているのか説明して貰ってもいいか？」

俺は言いながら、うつ伏せになっためぐみんの、下半身を覆っているゼリー状の巨大な物をあごで指す。

「……こいつは魔改造型グリーンスライム。昔、とある魔法使いがその生涯を捧げて開発した、グリーンスライムの亜種ですね。人体

には危害は加えず、繊維製品のみを好んで消化する女の敵の代名詞みたいなモンスターです。カズマのお腹を枕に、寝て起きたらこんな状況になってました。洞窟の奥にこいつが潜んでいた様ですね」

なるほど、人体には害は無いのか。

見れば確かに、めぐみんの下半身を覆った、ヘタをすれば牛ぐらいの大きさはあるそれは、めぐみんのローブやマントのみをジワジワと侵食していた。

「人体に害が無いなら良かったな。じゃあ、ちょっと手を離してくれ。このままだとめぐみんの体の服の部分を伝って、俺の着ている衣類にまで侵食してくる」

そう言って離れようとする俺の腰を、めぐみんが掴んで離さない。

「何言ってるんですか？　このまま放っておかれたら、もれなく私、すっぽんぽんですよ？　こいつを倒すなり私を引っ張るなりしてください」

くっ……！

こいつ、こんな時だけ意外な力を……っ！

「めぐみんよく聞け。俺はあんなスライム系の敵への攻撃手段は持っていない。フリーズでも掛けるか？　いや、動いている粘液が相手だ、表面に霜が出来るぐらいだろう。ティンダーで炙ってみるか？　いや、こんなデカイのが俺の着火魔法ぐらいでどうにかなるとも思えない。スライムに状態異常なんて効かないだろう。なら、ここで俺まで真っ裸にされるよりも、俺だけでも洞窟の外に出た方が良いに決まってる」

諭すようなその俺の言葉に、

「ちょっと何言ってるんですか？　帰る際、私にカズマの服を貸してくれるんですか？　それなら今の内に、お互い服をどう分けて、

どういった状態で街に帰るのかを話し合いましょうよ。このままでは私は全裸です。となると、カズマの服を二人で分けるって事になります」

めぐみんは口調は冷静ながらもギリギリと歯を食い縛り、絶対に離すかとばかりに力を込めて言ってきた。

「いや、ちょっと待って欲しい、ここは俺が服を着たまま一人で街に帰って、着替えを持ってまたここに来るってのは」

「すっぽんぽんの女の子をこんな所に放置する気ですか？　誰かに会ったら大変な事になりますよ？　それなら、私がカズマの服着て着替えを取りに……！」

それから五分後。

「カズマ……！　カズマぁ……っ！　あなたの事が、大好きです！　愛しています！　だから……、だから、見捨てないでくださいっ！」

「お、俺も……！　俺も、好きだよめぐみん……っ！　だから……、だから離せ……っ！」

めぐみんは、いよいよ腰の辺りまでスライムに侵食され、俺はちょっとスライムさん、良く見えないんでそこどいてくれませんかね、と頼みたくなるぐらいの惨状にはなっていた。

「ダメだ……！　めぐみん、俺はもう限界だ……！　俺、もう我慢できない……！　もうこっから出る……っ！」

「待ってくださいカズマ！　お願い、お願いですカズマ！　一緒に……！　はあ……はあ……、い、行くなら、私も一緒に……っ！　さもなくば、ここで道連れですよっ！」

荒い息を吐きながら、俺に必死でしがみ付いてくるめぐみん。

そのめぐみんが、俺を掴む手に力を込めた。

「……もう限界だって！　俺、もう行くから！　そ、外に……外に出させろっ！」

「待って！　カズマ、このまま！　このまま中にいてください……っ！」

言いながら、めぐみんは俺の腰に回した手に精一杯の力を込め、ギュッと掴んで離さない。

俺は、後ろから腰に手を回して離さないめぐみんの顔面を、ガッと後ろ手にわし掴んで力を込め、下半身をスライムに覆われているめぐみんを何とか自分から引き剥がそうとした。

そうしてめぐみんと揉み合いながら、俺はハタと気が付いた。

そうだ、そうだよ、このスライムが繊維のみを食べるのなら……！

「めぐみん！　俺のダガーを貸してやる！　それで、まだ侵食されてない部分の布を切れ！　そうすりゃそれ以上は侵食してこないだろ！」

俺の言葉にめぐみんが、パアッと表情を輝かせた。

そして、ようやく俺の腰から手を離す。

俺は立ち上がると、万が一俺まで侵食されてはかなわないので距

離を取る。
そしてそのままめぐみんに、ダガーを差し出し……！
「ほら、俺じゃめぐみんの服の中がどうなってるのか分からないし、危ないから自分で切れ！　自分なら、胸元とか色々、見えない所でも今どこの部分が布が余っているのか分かるだろ」
「一言多いですよカズマ！　あ、ちょっと向こう向いててください」
俺は渋々洞窟の入口の方を向く。
すると、背後で布をビッ！　と切り裂く音。
それらの音がしばらく続き……。
「……カズマカズマ、こっち向いてもいいですよ。侵食されてた部分を切り取る事には成功しました。カズマの読み通り、侵食は収まったんですがね……」
その言葉に振り返ると。
そこには、へその辺りまでローブやマントを切り裂いためぐみんの姿があった。
もちろん、スライムを下半身に生やしたまま。
「こいつ、侵食の動きを止めただけで、私を離してくれません。どうしたものでしょうか」
「よし分かった、待ってろ、今俺が全力で引っ張ってやる」
この状態なら、もう巻き込まれる事もない。
俺は気合を入れてめぐみんの両手を掴むと……！
「ちょ、待ってください！　カズマ、待って！　このままスライムから引っこ抜かれると、下半身があらわなままスポンと抜けます！　既に下着が手遅れな感じなんですが！」
「バカッ！　そんな下らない事言ってる場合かっ！！　このまま万

が一スライムが、気まぐれで上半身の方にまで移動し始めたら、お前下手すりゃ窒息させられるぞ！　よし、それじゃいくぞ！」

俺は足を踏ん張り力を込めると……っ！

めぐみんの腰に纏わり付いている巨大なスライム。

その邪悪なスライムから、俺は大切な仲間を、めぐみんを助ける為に。

全身全霊を捧げ引っ張った！

「ぬあああありゃあああああーっ！！」

「カズマ！　私今まで、カズマのそこまで必死な顔見た事もないのですが！」

めぐみんが叫ぶ中、俺は多分今までの人生で一番の本気で頑張ってみたが、めぐみんを引き抜く事は出来なかった。

だが俺は、ここで仲間を見捨て、諦める様な男ではない。

大切な仲間を助ける為ならば、このぐらい……！

「くっそがああ！　何時までもめぐみんの下半身隠してんじゃねえぞこらあああ！」

「カズマ、本音が！　本音が出てます！　せめてそこは、何時までも私を捕まえてるんじゃねえぞとか言ってください！　……ああっ！　そうです、カズマ、あなたの外套を！　それを、スライムがそちらに侵食するよう体に触れさせた状態で、洞窟の奥に放ってください！　それだけの大きさの外套なら、それを侵食する為に私の上から移動するはずです！」

めぐみんが、こんな時にだけ紅魔族の知力の高さを発揮させた。

俺は渋々自分の外套を外すと、洞窟の奥へとバサッと放り投げる。

それは一部分だけをスライムの上に触れさせて、洞窟の奥へと広

がった。
スライムは、それに広がっていく様にめぐみんの上から移動する。
「ああっ？　カ、カズマ、早く向こうを！　向こうを向いてください！」
スライムが洞窟の奥で俺の外套をモゾモゾと貪る中、洞窟の入口を向いた俺の背後でめぐみんが、短くなった自分のマントをスカート代わりに腰に巻き付けていた。
「……ふう。これでひとまずは。もうこっち向いていいですよ。……なんだか、下半身の防御が薄いと心許ないですね」
振り向くと、そこにはヘソ出しルックみたいな格好のめぐみんの姿。
しょうがないから俺のズボン貸そうかと言ったのだが、全裸を免れためぐみんは、生き残ったマントを使うと言い出した。
短いマントを腰の横で縛っている為、片側がスカートのスリットみたくなっている。
……俺が初めてめぐみんに色気を感じた瞬間である。
まあしかし、確かに下着も無ければ心許ないか。

流石にこればっかりは、俺の着用済み下着を貸す訳にもいかないし……。

何か無いかと思っていたら、俺は自分のポケットを探ってある物を見つけ出した。

俺はこの世界にジャージ一丁で来た訳だが、公園で子供達と遊ぶ事が多かった、良いお兄さんだった俺は、よく怪我をする彼らの為にポケットに入れていたある物を思い出す。

回復魔法があるこの世界では、使う事もなかった為忘れていたのだが。

俺はそれを、めぐみんにハイと差し出した。

「……？　なんですか、それは？」

俺がポケットから出したそれを見て、めぐみんが不思議そうな顔をする。

俺はソレをペリペリと剥がして、手の甲にぺたりと張って使い方を示して見せて……。

「これはバンソーコって言うアイテムだ。今、下着を履いてないんだろ？　使えばいいよ」

「今とんでもない事口走りましたね！　そのバンソーコとやらで私に何をしろと！？」

1話（後書き）

謝りません

冒頭で何を想像したんですか？
この作品はＫＥＮＺＥＮ作品ですよ。

2話

裸足で雨上がりのぬかるむ地面を歩くのは大変気持ち悪い。

「カズマは意外と足大きいんですね。靴が大分ブカブカなんですが」

雨が止み、短いマントを腰に巻いたためぐみんと、共に街へと帰る中。

俺の靴を履いたためぐみんが、俺の腕に掴まりながら歩きにくそうにしていた。

「だから俺が靴履いておんぶしようかって言ってるのに」

「嫌ですよ、背負われてる所を誰かに後ろから見られたら、お尻丸見えじゃないですか」

そんな事を言いながら、街の入り口へと差し掛かる。

俺とめぐみんは、そこに見覚えのある少女を見つけた。

その子は外で討伐でもしてきた帰りなのか、トボトボと街の正門へと一人歩いて行く。

きっと討伐途中に雨に遭ったからなのだろう。

その少女は全身をびしょ濡れにさせ、そして濡れたままトボトボと歩くその姿は、何だか深い哀愁を誘う。

正門前には珍しく人が多く、通り抜けチェック待ちの冒険者が列を作って並び、顔見知りが多いのか、チェックを待つ連中が親しげに会話していた。

今日に限って人が多いのは、みんな突然の雨で、討伐を切り上げて帰って来たからかもしれない。

その皆が会話する様子を羨ましそうに眺めながら、列の最後に並ぶ少女。

やがて、ちょっと遅れて一人の冒険者が平原の方から街の正門前に駆けて来た。

ソロで何かのクエストでもやっていたのだろうか。

その冒険者は息を荒げたまま少女の後ろ、列の最後に並んでホッとした表情を浮かべていた。

やがて、そのソロ冒険者もチェック待ちをしていた連中と顔見知りなのか、少女の後ろから親しげにその連中に話しかけ……。

親しげな人達に挟まれる形となったその少女は、それを見てどうぞどうぞと自分の番を後ろのソロ冒険者に譲り、自ら最後尾に並んでいった。

ソロ冒険者に礼を言われ恐縮していた少女は、楽しげに話している人達の話をちょっと離れて聞きながら、その連中が何かの話題か冗談で盛り上がり、ドッと笑うと、少女もちょっと距離を置きながらも釣られたように一緒に笑い……

何だか見ていて涙が零れそうになった俺は、その少女、ゆんゆんの元へ駆け出した！

「ちょっ！　カズマ、いきなり走り出さないでください！　あんなに人がいる前で転んだら、私、大変な事に……！」

ブカブカの俺の靴でカポカポと音を立てながら、必死に付いて来るめぐみん。
そして、そのめぐみんの手を引きながら近寄る俺に気付いたのか、ゆんゆんがぱあっと嬉しそうな顔をする。
それから、急に取り繕った真面目な顔で、列から離れて俺達の方に近付いて来た。

「めぐみん、酷いじゃない、親友とか言っときながら私にあれからどうなった……の……かも……。あ……、あああえええ？　ちょっとどうしたのその格好！　その半分になった服って、ひょっとして紅魔族ローブ！？」

ゆんゆんの顔が、怒りの表情から驚愕の表情へと変わっていく。
というかゆんゆんに散々世話になっときながら、こいつはあの後、置いて行ったゆんゆんに何のフォローもしなかったのか、なんてヤツ。

「見ての通りの紅魔族ローブです。魔改造スライムにゴッソリ食われてしまいました。私、これしか持って無かったんですがこれからどうしましょう」
いや困ったとか言いながら、特にはあまり困っていなそうなめぐみんが、
「それよりも、現在下着を履いていないのですよ。そちらの方に困らされています」
「なぜ！？　腰周りがそんな短いマントの切れ端なだけでも不安なのに、下着履いてないのになぜそんな平然としていられるの！？」

ゆんゆんがそんな事を叫びながらマントを外し、慌ててめぐみんに駆け寄ると、めぐみんの腰に自分のマントを押し当てた。

ゆんゆんが甲斐甲斐しくめぐみんの腰にマントを巻きつけるのを、めぐみんは万歳の体勢を取りながら流される様に自然に受け入れている。

なんだか、外で遊んでてスカートを破き、更にぱんつを忘れてきたバカな子供の世話をする、お母さんと子供みたいな絵面だ。

「それより……！　ローブを、ローブをどうするの!?　あれが無いと……！　紅魔族ローブが無いとめぐみん死んじゃう！」

マントをめぐみんの腰で縛りながら、ゆんゆんがそんな事を……、

「おい今なんつった」

今、ゆんゆんが聞き捨てなら無い事を言った。

ローブが無いとなんだって？

そんな疑問に答えるように、万歳したままのめぐみんが。

「紅魔族は、優秀な魔法使いとしての資質を秘めています。どれぐらい優秀かと言うと、睡眠時の魔力の回復量、吸収量が半端なく、うっかり魔法を使わずに寝ると、寝てる間に容量をオーバーしてボンッてなるぐらいには優秀です」

「それって優秀なのか？」

めぐみんの腰に身を屈めてマントを巻き付けていたゆんゆんが、マントを巻き終え立ち上がった。

「紅魔族は、誰もが生まれつき高い魔力容量と質の高い強い魔力を持って生まれますが、魔力の自然放出が下手なんです。紅魔族ローブは、体の許容量を越えた魔力を放出してくれる物なので、紅魔族

は生まれた頃から、最低でも一人一着はこれを持っています。なので、魔法を使える様になって魔力を放出出来る様になっても、寝る時はこれを着るのが基本なんですが……」

そこまで言って、ゆんゆんが顔をくしゃっと歪めた。

「ああもう、めぐみん、なんで！？　私みたいに予備があるならともかく、一着しか持っていないのなら、普段着に使わなきゃいいのに！」

今にも泣きそうな顔でめぐみんに訴えかける。

……なるほど、めぐみんはともかく、常識人のゆんゆんも野暮ったいローブ着て同じ格好しているのはその為か。

そんなゆんゆんに、めぐみんがさも当然とでも言う様に……。

「それは勿論、紅魔族ローブは格好良いからですよ。ローブは一人一人特注ですし、自分専用の魔法のローブを着ない訳がないじゃないですか。あ、マントありがとうゆんゆん」

以前からたまに思っていたが、こいつは色々と大物なのかも知れない。

「どう致しましてっ！　そりゃあ紅魔ローブは格好いいから、私も普段着に着ているけれど！　ああもう、どうするの！？　ちゃんと分かってるのめぐみん？　毎日必ず魔法を使って魔力を消費すること！　それと、魔力を吸収しちゃう睡眠時間は極力削って、朝起きたら我慢せず、すぐに魔法を使いに行く事！　いい！？」

紅魔族の名前のセンスや美的センスってやっぱどこか変だ。

ゆんゆんも、そこら辺は紅魔族の血がちゃんと入ってはいるらしい。

「なんかゆんゆん、お母さんみたいですね、私の母に名前も似てますし」

「分かったの！？」
「分かりました、分かりましたよ。今も魔法を放ってきた帰りですしね」
まるで母親の様にめぐみんに色々指示するゆんゆんは、やがて手を打つと。
「ああ、そうだわこうしちゃいられないわ！　私は今から紅魔の里に、めぐみん用の紅魔族ローブを急いで作ってくれって手紙を書いて速達で出しておくから、めぐみんは紅魔の里へ帰る支度を！」
そう言って、わたわたと街へ駆け出して行こうとするゆんゆんに。
めぐみんが、首を傾げながら言った。
「……ゆんゆんは、どうして私にそこまでしてくれるんですか？」
めぐみんの言葉に、ゆんゆんがバッと振り向くと、何を言ってるんだとばかりに勢い込んで……！
「何言ってるのよ！　そんなの当たり前じゃない、私達……！　私達……、その私達……」
勢い込んで……
「その……親ゆ……親……、と、とも……友だ……ち……だか……ら……」
親友と言いたい所が、不安なのか友達に代わり、更に友達でしょ？　と言って、違うよ？　と言われるのが不安なのか、それも段々自信なさ気になっていく。
そのゆんゆんに、めぐみんが。
「そうですね。親友ですからね」
それを聞き、ぱあっと嬉しそうな顔をするゆんゆんに、更に続ける。

「……では、親友にして自称我がライバルのゆんゆんよ。……もしかしたら最後になるかも知れないので……。今日、ここで長年の決着を付けておきましょうか」

言いながら。

めぐみんは、ざっと一歩引いて、その場にゆらりと身構えた。

なんだこれ、めぐみんが……。

ウチのめぐみんがちょっとカッコイイ！

「……分かったわ。そうね、ヘタをすれば、今日の夜にでも……。ううん、そんな事は考えたくない。……けど、そうね！　私一回も勝てた記憶が無いけれど、決着はつけておくべきねめぐみん！　勿論手加減なんてしないから！」

そう言いながら、めぐみんと対峙するゆんゆんに、めぐみんが静かに告げた。

「もう対等な立場です。一方的に対価をよこせなんて言いません。ゆんゆん、あなたが私に勝ったなら、私のこの紅魔族ローブとあなたのローブを交換してあげます！　その代わり、私が勝ったらあなたのローブを貰います！」

「分かったわ！　紅魔ローブ……。……え？　だ、ダメよめぐみん、私も予備は一着しか無いからそれは流石に賭けられ……。……あ、あれっ！？　ねえ待って、おかしいわ！　勝っても負けても私がローブを盗られる！」

こいつやっぱりロクでもねえ。

俺は涙目のゆんゆんに襲い掛かろうとしている、めぐみんのスカート、いや、ゆんゆんに巻いて貰ったばかりの長いマントの端を引

っ張ると。

「ほら、アホな事言ってないで帰るぞ。紅魔の里とやらに行く旅支度をするんだろ」

「あっあっ、止めて下さい、引っ張らないで下さい、大惨事になりますから！」

マントを押さえて慌てるめぐみんを、そのまま屋敷へ連れ帰った。

無事何事もなく屋敷の玄関に着くと、めぐみんが安心した様に息を吐く。

「ふう……。よこしまな事にかけては定評のあるカズマが、何時スカートめくりをやからすかと心配でした。しかし、お蔭でゆんゆんからローブを巻き上げ損ねたではないですか。まあ、紅魔族ローブはそれ自体が一人一人魔力の波長を合わせたオーダーメイドなので、ゆんゆんのローブを巻き上げても意味は無いのですが」

「お前、俺をどんな目で見てるんだ。期待に応えてウインドブラストと叫んでやってもいいんだぞ。と言うか、使えないのなら取り上げようとするなよかわいそうに」

めぐみんに言いながら、俺は屋敷の玄関のドアノブに手を掛けた。

そしてそのまま、玄関のドアを開け……。

「予備があると言っていましたので。ゆんゆんって、見てるとからかいたくなる……から……」

めぐみんが、何か言いかけ絶句した。

……もちろん俺も。

屋敷の中に入ると、そこでは……

「返してよおおお！　返して！　私の可愛いゼル帝を返してええええっ！！　わあああああっ、返してよおおおっ！」

「フハハハハハ！　ざまあみろ寝取られ女神め、貴様の大事なペットは……、フハッ……、ああクソッ、こっ、こらっ！　付いて来るでないわ鳥類め、飼い主のもとへ行け！」

そこには、泣きながらバニルの背中を、拳でバシバシ叩くアクアの姿。

……そして床には、ウィズとダクネスが白目を剥いて転がっていた。

と言うか、ウィズに到っては何だか薄く消えかけていた。

……そして何より、アクアが泣いている原因であろう。

アクアにバシバシと叩かれるバニルの足元には……

「ピヨッ」

それは紛うことのない一匹のヒヨコ。

それが、バニルに擦り寄る様にしてその足元にくっ付いていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「で、何がどうしてこうなった」

俺は二人をその場に正座させ、説明を求めていた。

経緯は分からないが、ウィズが薄くなりかけ、ダクネスが白目を剥いていると言う事は、この二人が何かをやらかしたのは間違いない。

アクアの攻撃でダクネスがやられる事は無いし、バニルの攻撃なら、ウィズが消え掛ける事はないだろう。
二人は広間の絨毯の上に正座しながら、それぞれが同時に互いを指差した。

「「こいつが……」」

全く同じセリフを言いかけ、お互いが至近距離で睨み合う。
アクアは眉根を寄せて歯をギリギリと食い縛って怒りをあらわにし。
バニルは、仮面で表情こそ分からないものの、口元の端を引きつらせている。
その正座しているバニルの膝には黄色い毛玉が乗っていた。

もう、なんか色々どうしよう。
仕方ないので、一人ずつ話を聞く事にした。

「聞いて！　聞いてよカズマ！　私や皆がこのヘンテコ仮面を尋問してたら、いきなり切れて襲い掛かってきたの！　バニル式なんたらって叫んでね！　私は魔法で跳ね返したんだけど、そしたらダクネスがそれに巻き込まれて倒れちゃったから、私も反撃の浄化魔法を食らわしてやったのよ！　そしたらこいつはウィズを盾にしてウィズは変な感じで消えかかって！　もうこれはこいつを消し去るしかないって思ってた矢先にね……！」

なるほど。
分からん。

「フハハハハ、都合の良い事ばかり並べ立てるインチキ女神め！
この女神はな、そこの娘と店主と共に、大体無実だと評判の清く正

しい我輩を黒と断定。そもそも弁護士がいないこの裁判は無効であり受け入れられず、我輩は正当防衛と言う名のバニル式殺人光線にて反撃に出たのだ。すると女神はそれを反射し、そこの鎧娘が巻き込まれ、理不尽女神が反撃とばかりに魔法を放ってきたので我輩は咄嗟の店主障壁にて事なきを得た。ここは有史以来の神と悪魔の決着を付けるしかないと思った矢先……！」

「「ゼル帝が生まれた」」

二人が声を揃えた。

なるほど。

分からん。

2話（後書き）

異世界のヒヨコは、殻を破るのに二十四時間も掛からず一瞬で蹴破り、生まれたてでも目が見えるという、作者に優しい親切設定な生き物です。

3話

キングスフォード・ゼルトマン。
水の女神の眼鏡に適い、数多ある卵の中から選ばれた、由緒正しきヒヨコである。

「名前は良いな。威厳溢れる立派な名前であるとは思う。我輩に懐くだけの事はある」
「当たり前でしょ、誰が付けたと思ってるの。あんたに懐くのが許せない所だけれど、この子は神である私に選ばれし、ドラゴン族の帝王となるべき定めの者よ」
絨毯の上に正座したままのバニルとアクアがそんな事を言い合う中、そのヒヨコは全く動じる事もなく。

日本におけるヒヨコと姿形はなんら変わらず。
生まれたばかりで脆弱な存在であるにも関わらず、神や悪魔を前にしても恐れる事もなく、威風堂々と大悪魔の膝に佇み、その悪魔から目を逸らす事もない。

キングスフォード・ゼルトマン。
やがてドラゴン族の帝王になるだろうとの願いを込め、その名をゼル帝。
その、バニルの膝上のゼル帝を、俺はひょいと両手で持ち。

「……で、これどうするんだ。唐揚げにでもすんのか？」

「しないわよ！　カズマ、前から思っていたけれどあんたは鬼よ！　こっちの仮面悪魔の方がまだ人間味を感じる時があるわ！」
「失礼な事を言うな寝取られ女神よ。領主が居なくなった事でこの

街において、鬼畜な事にかけては他に追随を許さなくなったこの男と、子供達の学び舎への登下校時には近所を見回り、わりかし評判である所の我輩を同列視するな」

ちょっと泣いていいかな。

……しかし、大体分かった。

つまり、アクアとバニルが争っている時にゼル帝が生まれ、最初にバニルを見て刷り込みを起こしたのか。

俺が両手で包み込む様に持つゼル帝を、めぐみんが俺の隣から覗き込み、ソワソワしていた。

多分、触ってみたいのだろう。

俺はめぐみんにゼル帝を預けると、ウィズとダクネスの介抱に向かう。

「……生まれたての生き物は、なぜこんなにも愛くるしいのでしょうか。その可愛らしさで、捕食者から攻撃されない様にとの防衛本能でしょうか」

めぐみんが、ゼル帝を手の平の上で大切そうに包み込んで見守る中、俺は転がっているウィズとダクネスの下へ。

ウィズは……。

体が透けてきているが、これは俺にはどうしようもない。

なので、俺はぐったりとしているダクネスを抱き抱えると、その頬を軽く叩くが目覚めない。

「とにかく、あんたが居るとゼル帝の教育に悪いからもう帰んなさい。これからこの子には英才教育を施すの。……見なさいな、ゼル帝を見るめぐみんのあのだらしない顔を。……たらしだわ。ゼル帝ったら、生まれながらの女殺しよ。英雄色を好むって言うし、これ

は将来が楽しみね」
「フン、言われなくとも我輩は帰るとする。そこに転がっているお荷物店主の所為で、我輩が稼いだ大金を石ころに変えられたからな。ではな人間どもよ。小金が貯まったらウィズ魔法店へよろしくどうぞ！」

バニルは、半分ぐらい体が薄くなっているウィズの襟首を掴み、
「おい、すまぬが砂糖水を貰えるか。このまま放っておくと、瀬戸際リッチーがおだぶつリッチーにクラスチェンジしてしまう。栄養補給をさせてくれ。砂糖水でも染み込ませておけば、きっとカブト虫の如く復活するであろうて」

ウィズは普段どんな食生活送ってるんだ。
バニルは、そう言いながら台所方面へと向かおうとするが……。

「あっ！？　ど、どうしたんですかゼル帝！？」
めぐみんが、突如手の中で暴れだしたゼル帝に驚きながら、ゼル帝をそっと絨毯に降ろす。

なんだろう、めぐみんまでもが普通にゼル帝と呼んでいるが違和感ないのか。
ヒヨコだろ。
ヒヨコのクセに、なんでこの中で一番偉そうな名前なんだ。

「……む？」
皆がゼル帝を見守る中、その偉そうな名の黄色い毛玉はバニルの下へよちよちと歩いていくと、その身をバニルの靴へと摺り寄せた。
それを見たアクアが俺にすがり付く。
「わあーっ！　ゼル帝が盗られたっ！　カズマ、カズマーっ！　お願い、仮面悪魔を退治してゼル帝を取り返してよ！」

「いやなんで俺が。俺よりお前の方が、バニルに対しては強いだろうが。そもそも、これヒヨコだろ。ドラゴンじゃないんだがそれはいいのか？」

その言葉に、アクアがバニルに寄りそうゼル帝に近寄り、そっと大切そうに胸に抱く。

「私が仮面悪魔を退治したら、そいつに懐いてるゼル帝に嫌われるかも知れないでしょ。……そして節穴な目をしたカズマには分からないのだろうけど、この子は、その身を体毛に覆われた極レアなドラゴン種、シャギードラゴンに相違ないわ」

「騙された事を認めたくないのは分かるけど、もう諦めろよ。そいつはヒヨコだ」

その俺の言葉を耳を塞いで聞こうとしないアクアを見ながら、俺はハタと気付く。

「……いや、バニルに懐いているのなら丁度いい。めぐみんの事で話があるんだよ」

「フハハハハハハ、フワーッハッハッハッハッ！　な、なんと言うネタ種族！　我輩、貴様らみたいな愉快な種族は嫌いではないぞ！

魔王のヤツは、強力な魔法使いをポコポコ生み出す紅魔族を危険な種族として目の敵にしていたが、なかなかどうして憎めぬわ！フワーッハッハッ！」

「カズマ、私は魔法を撃たずに残しておくべきだったと今ほど後悔した瞬間はないですよ」

「まあ落ち着け。相手は悪魔だ、相手にするな」

ひとしきり説明を終えた後。

紅魔族の体質を聞き、ゲラゲラ笑うバニルを前に、俺達は今後の予定を決めていた。

ダクネスは未だ俺の手元でぐったりし、バニルに荷物のように襟首を掴まれてぶら下げられているウィズは、砂糖水の効果なのか、意識は失ったままなものの、体は段々くっきりしてきていた。

「つまりめぐみんは紅魔の里に行かないといけないのね。でもどうしようかしら。ドラゴンとはいえ、生まれたばかりのゼル帝に旅は厳しいかも……」

こいつはまだドラゴンと言い張るのか。

俺はアクアをちょいちょいと突き、

「まあ、と言う訳でこいつに、な？」

そのままバニルを指差す俺に、アクアが実に嫌そうな顔をした。

「まあ、待ってくださいカズマ。旅に出るのはまだ早いですよ。紅魔族が魔力の放出が下手なのは、あくまで子供の間だけですよ。私はそろそろ紅魔族として成人します。肉体的にも、もう充分大人ですしね。出来るだけ眠らないようにして今晩様子を見て、それでダメそうなら紅魔の里に行きましょう」

平然と言ってくるめぐみんに、俺はなるほどと納得した。

ゆんゆんがあれほど慌てていたのに、道理で本人はローブより下着を気にしていた訳だ。

しかし……。

俺は思わずめぐみんを見た。

俺と共に、バニルとアクアも。

「「「……大人……」」」

「おい、言いたい事があるなら聞こうじゃないか」

俺は気を失ったダクネスを抱えたまま。

同じく気を失ったままのウィズを、手荷物の様にぶら下げるバニルを玄関先で見送っていた。

「おい、ところでダクネスが一向に目を覚まさないんだが。これ大丈夫なのか？」

俺は抱えたままのダクネスに視線を落とす。

それにバニルは、不思議そうにダクネスを覗き込んだ。

「ふうむ、傷はそこの女神が治療したはずだが。しかし、我がバニル式殺人光線を食らって息がある事の方が驚きであるわ。殺人光線は、その名の通り人が食らえば殺人される。なぜ息があるのやら、こちらが聞きたい。余程イカれた魔法抵抗力を持っておるのか……。しかし今回は、人を傷つけない事に掛けては定評のある我輩の名の名折れである。……その娘が目覚めたら、あなたどんな筋肉してるんですか？　と聞いておいてくれ」

「俺が殴られるだろ。……まあいい、それじゃあ、もし紅魔の里に行く事になったなら、ゼル帝預かっといてくれよ」

バニルは口元をニヤリと歪め。

「よかろう。その際には、貴様らが帰って来るまでには、目びーむの一つも放てるぐらいには鍛えておいてやろう」

「あんた、もしそんな事になってたなら即座に浄化してやるからね」

……さて。

「それじゃ、こいつをどうするかだが」

俺はそう言って。

バニルの足元にまとわり付いて離れない、黄色い毛玉を見下ろした。

もうこれ、連れて帰ってもらってもいい気がするが。

「ふむ。この街の主婦達の、アイドル的存在である所の我輩に、恋焦がれるのは仕方がないが。鳥類と悪魔族との種族の壁は流石に障害が大きかろう。ゼル帝にはすまぬが、我輩の事は諦めてもらうしかない」

「いやこれ、お前を親だと思ってるんだよ」

それを聞いたバニルはふうむと唸り。

「……仕方ない。おい、ゼル帝の寝床はどこか？」

アクアがそれに、無言で広間のソファーの上を指差した。

いや、そんな所を寝床にするなよ。

バニルはそれを受け、ゼル帝をヒョイとつまみ上げ、ソファーの上に腰かけた。

ゼル帝はバニルに摘まれた時だけは、動きもせずにジッとしてい

る。
　こいつは本格的にバニルを親だと思っている様だ。
　バニルは、そのまま抱き込むように屈みこみ、そしてゼル帝を両手で包んでやると……、
「脱皮！」
　メリッと音がし、バニルが二人に分裂した。
　ゼル帝はバニルの分身に抱きこまれている為、二人に増えたバニルが見えず。
　無事、ゼル帝を抱いたまま身動きしないバニルの皮にあたる方を残して、何でも有りのその悪魔は片手を上げた。
「では、我輩はこれで失礼する」
「この世界の生き物にはもういい加減慣れたつもりの俺だったが、お前も大概だな」
　俺はもう何も言う事も無くウィズの襟首を掴み、持ち帰るバニルを見送った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「さて。それじゃあそろそろ寝る時間な訳なんだが」
　俺はめぐみんの寝室の前にいた。
　大丈夫と言い張るめぐみんが心配で、なんとなく来てしまったのだが。
「大丈夫ですよ、そんな顔しなくても。大人になれば大丈夫だって言ったでしょう？　あれは、大人になるとボンってなる前にちゃん

と目が覚めるからなのです。許容量を越えそうになってきたら、ちゃんと起きるので心配無いですよ」
「なるほど、つまり寝小便みたいなもんか」
「魔力が無くたって、色々と痛い目に遭わせる方法はあるんですよカズマ」

なんだかんだ色々余裕がありそうなめぐみんを見て、俺は少しだけ安心し。
「それじゃあ、何かあったらすぐ呼ぶんだぞ。後、とにかく無理はするなよ」

俺の言葉にコクリと頷き。
「なんかカズマはお父さんみたいですね。心配性な所がそっくりですよ」
そう言って、ふふっと笑いながら、めぐみんは部屋に引っ込む。

アクアは、下でバニルの抜け殻から離れないゼル帝と。
ダクネスは、目が覚めたものの未だフラフラしていたのでとっとと寝かせた。

ドアを閉める前に、めぐみんがぼそりと言った。
「それじゃあカズマ……また明日。おやすみなさい」

俺はそれを聞いて少しだけ安心し、自分の部屋に戻って横になる。
めぐみんには一応、散々嫌がったものの、しこたまブラックコーヒーを飲ませてやった。
本当は一緒に起きてて付いていた方がいいのだが、それを申し出たらめぐみんが嫌がったのだ。
曰く、年頃の娘の部屋に残るだなんてとんでもない！　という事

らしいのだが。

静かな夜だ。

俺はなかなか寝付けず、何度も寝返りをうった。

そして、何だか嫌な考えばかりが頭をよぎる。

めぐみんは、ボンってなるの具体的な事を言わなかったが、一体どうなるのだろう。

ゆんゆんの話だと死ぬと言う事だが……。

そんな中、やはり嫌な考えばかりがよぎる。

めぐみんが俺を遠ざけたのは、ひょっとして、万一の時、巻き込む事を避ける為……。

俺がそんな取りとめの無い事を考え続けていたその時だった。

それは誰もが寝静まる時刻。

街中の誰もが飛び起きるような轟音が、夜のしじまに響き渡った。

4話

街中に響く轟音と共に、屋敷の窓ガラスが割れた。

「おわーっ！？」

自分の部屋で物思いに耽っていた俺は、突然のその惨状に、部屋中に飛び散るガラス片から頭を守っていた。

おいなんだ今のは。

と言うか、轟音の前に一瞬窓の外が明るくなった。

と、言う事は……！

俺は自分の部屋を飛び出し、めぐみんの部屋に駆け出した。

めぐみんの部屋のドアを、そのままノックもせずに押し開ける！

「めぐみんっ！　無事か！？」

「ッ！？」

そこには。

僅かな月明かりのもと、窓を開け、そして窓から空に向けて爆裂魔法を放った体勢のめぐみんが……。

上はヘソが見えそうなぐらいに短くなった、まるでパーカーみたいな状態になったローブを。

そして下は黒いパンツ一丁の姿で、突然飛び込んできた俺を見て驚愕に目を見開き、それは悲鳴を上げる前兆だろう、思い切り息を吸い……！

俺はそのめぐみんより先に、口を開いた。

「そのパーカーっぽい黒いローブなら、下は白が良いと思う」
冷静に告げた俺に、めぐみんが息を止め。
「……紅魔族は黒を好むんですよ。……乙女の下着姿を拝んでおいてまた随分ですね」
「今更めぐみんの下着姿を拝んでもなぁ……。今朝は生尻を拝む寸前だった訳だし。……で、何があったんだ？」

そのまま目も逸らさず平然と会話を続ける俺に、恥ずかしそうに短いローブの裾を前に引っ張り、なんとか下着を隠そうと努力しながらめぐみんは、
「その……眠っている最中に、ボンってなりかけまして……。慌てて跳ね起きて、窓を開けて魔法をぶっ放しました。……ガラス割っちゃいましたね。スイマセン……。……あと、こういった姿に遭遇した場合って普通はもっと、ゴメン！　とか言って目を逸らすべきだと思うんです」
「お構いなく」
「構いますよ！　ちょっとあっち向いててください！」

渋々俺が部屋の出口へと振り向くと、ドアの陰から頭だけを覗かせ、じっとこちらをうかがっている、アクアとダクネスの二人と目が合った。
二人も爆音を聞いて駆けつけたのだろう。
だが二人は部屋に入ろうとはせず、下着姿のめぐみんと俺の姿を交互に見ている。
というか、アクアの俺を見る目がおかしい。
凄くおかしい。

「……あわわわ、カズマが……。カズマがとうとう同じ屋根の下の美女達に我慢が出来なくなり、牙を剥き始めたわ……！」
「おい滅多な事言うな、俺は何もしていないから！」

慌ててアクアの言葉に反論するも、
「……そんな事を言われても、お前の場合は私に対しての夜這いの前科があるからな……」
「「ええ!?」」
余計な事を言ったダクネスに、アクアと、更には俺の後ろで着替え中のめぐみんまでもが驚きの声を上げた。

「お、おい、止めろよ……、マジで止めろよ……、あれは未遂だっただろ……」
弱々しい俺の声に、めぐみんとアクアが叫ぶ。
「「未遂!?」」
なんと言う墓穴。

「まあ夜這いと言っても……。深夜に私の部屋に押し入り、叫ぼうとする私の口を塞いでベッドに押し倒し、抵抗する私の片手を封じてのしかかり……。そのまま私のお腹をまさぐったぐらいだ」
「「えっ」」
「おい待ってくれ！　いや、合ってる！　合ってるんだけれども！！」
「「!?」」
俺のその叫びを聞いて、スカートを履き終わったためぐみんが、たたたっと俺の脇をすり抜けた。
そのままアクアとダクネスの後ろに隠れると……。

「カズマがダクネスを性的な目で見ていたのは前から知っていましたが、まさか越えちゃいけない一線をあっさり飛び越えようとする人だとは見抜けませんでした。カズマの事は、そんな度胸は無いヘタレだと思っていたのに」
「いや違うから！　あれは場の雰囲気に……！　と言うか、そもそ

も夜這い目的で入った訳じゃなくてだな、」

　そのめぐみんの言に必死で弁解する俺に、更にアクアが追撃を…！

「なんて事なの、私とカズマがまだ馬小屋で隣同士で寝ていた頃、このけだものは私の熟れた肢体を虎視眈々と狙っていたのね！」

「それはない」

「なんでよー！」

　半泣きで首を絞めようとしてくるアクアの頭を片手で押さえる俺に、ダクネスが勝ち誇った様にニヤニヤしていた。

　この女は、どうやら以前の夜這い未遂事件の時に、実家の連中に俺がダクネスの声色で色々やらかした事への仕返しをする気らしい。

　俺が困り果てるそんな様子を、腕を組みながらニヤニヤと見ているダクネスに。

「……お前の方から、一緒に大人にならないかとか誘ってきた癖に……」

　俺は、そうボソリと呟いた。

「「！！」」

「ちちちち、違っー！？　あれはもう嫁にいく位なら、それならもういっその事、と……！」

「！　認めた！　ダクネスが自分から誘ったって認めたわ！　なんという事でしょう！　……じゃあ私は、気を利かせてもう寝るわね！」

「なんというＧＯＵＩ！　……それじゃ私も、魔法撃ってスッキリ

したのでもう寝ますね」
「待っ……！？　ちょ、ちょっと待って欲しい、待って欲しい！！」
涙目で、寝ようとする二人を必死で止めていたダクネスは、恨めしそうに俺を見る。
それに不敵に笑い返し……！
「……あの件をほじくり返すのはお互いダメージが大きいだろう。……あ、あまり触れないでおこうぜ。でないとその……。思い出します……」
「そ、そうしようか。……その……。お、思い出すからな……」

引き分け。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「それじゃあ、紅魔の里とやらに行こうと思います」

騒動があったその日の朝。
めぐみんが魔法で叩き割ったガラスをあらかた掃除した後、広間で朝食を食べながら、俺は三人を前に切り出した。
この屋敷が郊外にある事がせめてもの救いだろう。
ご近所さんとはそこそこ離れているから、ガラスが割れる程の被害はないと思う。
一応菓子折り持って、あの爆音の事を謝りに行くが……。

屋敷の、めぐみんの部屋のあった側のガラスは一階、二階、共にほぼ全滅状態。
改めて爆裂魔法の威力の凄まじさが思い知らされた。

だが、
「いや、ちょっと待ってください。夜の事は、私も油断していたからです。なので、もうちょい様子を見ましょう！」
両手で掴んで齧っていたパンから顔を上げ、めぐみんがそんな事を力説してくる。

いやお前……。
「……ひょっとして、里に帰るのが嫌なのか？」
俺の何気ないその言葉に、めぐみんがビクッと震えた。
「……違いますよ？」
「おいこっち見ろ」

そっぽ向いていためぐみんがこっちを見る。
その目はあきらかに泳いでいた。

「だがめぐみん、無理せず紅魔の里に行った方がいいんじゃないのか？　今日は助かったが、これが毎日上手く行くとも限らない。何か、帰りたくない理由があるのか？」
食事を終えていたダクネスが、優雅に食後の紅茶をすすり聞いてくる。
こんな所はちゃんとお嬢様に見えるのが何とも……。
ちょっと困った表情を浮かべながらもそれには答えないめぐみん。
本人が言い張るなら、待ってみてもいいけれども、だがどうすんだ、今日は窓が無いんだぞ。
俺もめぐみんも別の部屋で寝なきゃいけない訳だし、めぐみんが今日もガラスを叩き割ればちょっとシャレにならない事態になる。

割れたガラス代にしても、めぐみんが全部払うとは言っているが、バカにならない額なのだ。
没収された領主の資産から補填金が分配されるまでは、めぐみんだってそこまで懐が暖かい訳でもない。

やがて、アクアがゼル帝にパンくずをやりながら。
「……ねえカズマ。ゼル帝の前で目玉焼き食べるの止めてあげてくれない？　何だかこの子がカズマの方を見て怯えているの」
「そいつはドラゴンなんだろ？　なら怯える必要ないじゃないか。……それより、そのバニルの抜け殻を何とかしろよ。それ、凄く存在感があって、おかげで食事が進まないんだが」
俺はアクアの隣でゼル帝のベッド代わりになっている、バニルの抜け殻をハシで指す。
中身は無いものの、その見た目は完全にバニルであり、アイツの強烈な存在感の所為で、それが動かなくても凄く気になる。

「しょうがないじゃない、ゼル帝が気に入ってるんだもの。それより、行かないの？　紅魔の里。私、何気に旅とかちょっと楽しみなんですけど！」

アクアの言葉にちょっと俺も心が動く。
そう言えば、せっかく異世界に来たってのにまだロクに旅もしていない。
冒険者と言えば旅だろう。

……だがその前に。
「とりあえず、ちょっとめぐみん連れて行きたい所があるんだよ。それがダメだったなら、その紅魔の里に行くとしようか。アクアは留守番しててくれ。その毛玉の世話があるだろう。ダクネスは、ちょっとギルドで頼まれてくれないか」

「……ここに一体なんの用が？　私を連れて、どうするんです？　ここにはあの失礼なのが居るからあまり来たくないのですが……」

めぐみんを連れて来たそこは、ウィズの店。

今日はウィズに用事があって来たのだが……。

俺は店のドアに手を掛け押し開いた。

そして勿論、出迎えてくるのは……

「へいらっしゃい！　……おっと貴様かむっつり小僧。それにおもしろ体質の紅魔の娘ではないか。良い所に来た。今日のオススメの一品はこちらである！　広げるだけでその上に強力な結界を張ってくれる、野外でキャンプをする際でも安心して眠れる、結界発生魔法陣が封印された魔法の絨毯である。旅に出る冒険者であれば是非ともオススメしたい一品であるな」

……お？　それは何だかちょっと使えそうだな。

丁度紅魔の里に旅に出るかもしれない訳だし。

「……それって、何か欠点は無いのですか？」

同じくちょっとだけ興味を示した様で、めぐみんもバニルが手にする絨毯をしげしげ眺めた。

バニルがフハハハと楽しそうに笑いながら。

「うむ、この店で扱っている商品において落ちが無い訳があるまいて。この絨毯は広げた瞬間から結界が発生する。つまり、絨毯を地

面に広げると、その上に発生する結界の為、誰も絨毯の上に座れない。入れない。……つまり結界が守るのはこの絨毯自身のみ。防犯の為にこれを仕入れ、早速店の中にこれを敷いた当店の面白店主が、結界の力が切れるまで店に入れなくなったという面白商品である。……お一つどうか？」

「いらない。前から聞きたかったんだがこの店はちゃんと儲ける気はあるのか？」

まあ、俺が今日用事があるのはコイツじゃない。

最近はバニルが接客してくれている為安心しているのか、それとも単に客が来ない為か。

俺が用があるのは、店の奥でうつらうつらと船を漕いでいるウィズである。

5話

店主が苦手な日光を避ける為か、窓が付けられていない薄暗い店内。

その奥のカウンターでは、日は射していないとは言え春の暖かな陽気の所為か、店の店主が気持ち良さそうにうつらうつらと眠っている。

なんだか起こすのが悪い気持ちではあるのだが……。

眠っているウィズを起こそうと、手を伸ばそうとしたその時……

「いつまで寝ている怠慢店主、客である！　起きぬなら！　焦がして見せよう殺人光せ……」

「ハッ!?　殺気！」

バニルが、軽いノリで嬉々としてウィズに光線を放とうとするが、その殺気を感じたウィズが跳ね起きた。

それを見て、残念そうに光線発射を中断するバニル。

「ふうむ、つまらん。商売においては全く学習しないくせに、危険感知能力だけ無駄に高くなりおってからに」

「ふふっ、私だってリッチーの端くれ、そう何度も何度も焦がされてばかりでは……。あら？　カズマさんじゃないですか、それにめぐみんさんも！」

そう言いながら、ウィズがいらっしゃいませと笑顔を見せてくる。

ジッポを売りに来る事も無くなったから、このいらっしゃいませを聞くのも久しぶりだ。

なんと言うか、普段キワモノばかりと関わっているだけに癒され

る。

俺はそんな店主に切り出した。

「ウィズ、今日は客じゃなくってな。ちょっと、頼みがあって此処に来たんだよ」

「……？　頼みですか？」

小首を傾げるウィズに頷くと。

「実は……」

俺はめぐみんの事情を話し、ウィズは確か、テレポートの魔法が使えた事を思い出し、めぐみんを送り届けて貰えないかとここへ頼みに来たのだが……。

それを聞き、ウィズが困った表情を浮かべて言った。

「申し訳ありません、テレポートの魔法は、移動先を固定してしまうんです。テレポートの移動先を変えるには、一度移動したい場所に行き、テレポートの出口を指定しなくてはいけません。私のテレポートのスキルレベルでは、あまりテレポートの固定先が多くは無く……」

俺とウィズが話をしている間、めぐみんは店の商品を物色している。

「現在、この街の入り口に一つ、そして魔法の素材を集める為にと、この大陸で最も深いと言われる巨大ダンジョンの入口に一つ。……後は、これは強敵を問答無用で倒す為の、私の切り札の一つなのですが……。最後の一つの移動先を、火山の火口の真上に固定してあります。なので、私の魔法で送り届けるのは……」

申し訳ありませんと謝るウィズに、俺は慌てて手を振った。
まあ、そんな簡単に上手く行くとは元々思ってはいなかった。
こちらの件は、一応ダメもとで聞いてみただけだ。
謝るウィズに、俺は残りの頼みを切り出した……。

「ほう、これは一時的に特定の魔法の効果を上昇させるポーションとありますが。爆裂魔法の威力を上昇させるポーションは無いのですか？」
「うむ、現在店に置いてある効果上昇ポーションの該当魔法は、呪縛魔法、泥沼魔法、の二つが売れ残っているな。呪縛魔法の魔法効果上昇の効能は、魔法の及ぶ効果範囲を上げる作用がある。なので、敵に使うと自分も一緒に動けなくなる仕様となる。泥沼魔法も同じく範囲の増大が見込めるので、使うと術者も溺れて死ぬ」

「ダメじゃないですか。……この存在感のある変な人形は何ですか？」
「それはバニル人形だな。我輩の抜け殻の一部を埋め込んで作った代物で、我輩を恐れて悪霊が寄ってこなくなる一品である。現在、当店での唯一の売れ筋商品だ。夜中に笑うが効果は抜群。貴様達の住んでいる屋敷にも、悪霊ではないが貴族の少女の幽霊が住み着いておるぞ。……お一つどうか？」
「夜中に笑うとかそれが一番悪霊臭いですよ。それに屋敷に幽霊なんていたら、ウチのアクアが放っておくはずないじゃないですか。それより、そこの黒ローブください」
「まいどありー！」

そんな内容の二人の会話を後ろに聞きながら、俺はウィズとの話を終えた。
そして、俺とウィズは頷き合うと立ち上がり……。

店内を見ると、つい先ほどまで会話していたはずのめぐみんとバニルの姿は見られない。
さっきローブがどうとか言っていたから、めぐみんは試着室にでも居るのだろうか。
小さな店内に二つある試着室。
確かにそこから人の気配が感じられた。
だが、今はめぐみんはどうでもいい。今俺とウィズが用があるのはバニルの方だ。

と、試着室がシャッと開けられ、そこからバニルが現れた。
試着室にはてっきりめぐみんが入って着替えているものだと思っていたが、こいつはそんな所で一体何をしていたのか。

俺はそっと、そのバニルの背後に近寄ると……

そのまま背後から、バニルの両腕を押さえつけた！
「今だ、頼むウィズ！」
「失礼しますバニルさん！　参ります、ドレインタッチ！」
「なっ！？　えっ、ちょっ！？」

珍しく戸惑うバニルに、俺はしっかりと背後から抱きついたまま、
「悪いなバニル！　ちょっと訳あって、ウィズのドレインスキルを覚えたいんだよ！　俺が食らったんじゃ覚えられない、すまんが技を食らう所を見せてくれ！」
「そんな訳です、日頃、隙があると光線食らわされている仕返しで

はありません！　バニルさん、ごめんなさい、ごめんなさい！」

ウィズの両手がバニルの首筋に触れる。

そしてそのウィズの指先から、リッチーのスキル、ドレインタッチにより、バニルから体力と魔力が奪われて……！

大悪魔を名乗るバニルは、やがて意外にも、あっさりと気を失った。

……？

悪魔が気を失う？

俺が何となく違和感を覚えていると。……二つある試着室。

その、バニルが出てきたはずの試着室とは違う、もう片方がシャッと開けられ。

「フハハハハハハ！　それが我輩だと思ったか？　残念、それは我輩の力により、一時的に我が姿に似せられたネタ種族である！　見通す悪魔に不意打ちが効くとでも思ったか？　バカめ！　我輩には、貴様らのこの後のセリフですらも見通しておるわ！」

そこから現れたのは、もちろん仮面の悪魔。

その悪魔の言葉と同時、俺が背後から抱きしめていた方のバニルの姿がグニャリと歪み……。

俺は、買ったばかりの黒いローブを着たまま白目でぐったりとしているめぐみんを抱いていた。

俺とウィズは同時に叫ぶ。

「「「めぐみん（さん）、しっかりー！」」」

バニルまでもが、楽しそうにそのセリフを被せてきた。

……この悪魔は本当に苦手だ！

手違いはあったが、これで何時でもドレインスキルを覚えられる。
と言っても、スキルポイントが足りないので覚えるのはまだ先だが。
俺は背中にめぐみんを背負いながら、店を後にし、屋敷への帰路を歩いていた。
「……うう、いきなり酷い目に……。これ、店に私を連れて来た意味はあったんですか？　まあ、黒のローブを買いたかったので全くの無意味ではありませんでしたが……」
背中でぐったりしたままのめぐみんが、恨みがましく言ってきた。
テレポートの件意外にも、変な物ばかり扱うウィズの店の事、もしかしたら、魔力の回復を阻害するとか、付けているとドンドン魔力を吸われる呪いのアイテムとかがあるかなと思って来たのだが。
流石に都合よくそんな物は見つからなかった。
なので、万が一の時の為にとドレインを教わってきたのだが……。
「悪かった、まあほら、覚えて損するスキルじゃないからな、今はまだ覚えられないが、これ覚えたなら夜中にめぐみんの魔力も吸えるだろう。体力まで吸っちゃうのは問題だが、万が一の緊急用にはなるだろ？」
その言葉にめぐみんはグッと黙る。
背負われたままふうと息を吐きながら、
「仕方ないですね。私の為を思ってスキルを覚える為にあんな事さ

れたんじゃ、これ以上文句言えないではないですか。死に掛けましたが、大量に魔力を吸われて、今晩は昨日よりもなんとかなりそうですし」

そう言って、背負われためぐみんは苦笑しながら俺の首に回す手に力を込めた。

やがて屋敷の玄関前に立った俺は、めぐみんを背負ったままそのドアを開けると……。

「ねえダクネスー！　お願い、カズマが帰ってきたら私も一緒に叱ってあげるから！　だから、いい加減トイレから出てきてー！　そこに引き篭もられると地味に迷惑だから！　二階のトイレは詰まってるのよ！　ねえお願い、早く出てー、早く出てー！」

一階のトイレの前で必死にドアを叩くアクアの姿。

……どうやら、中にダクネスが立て篭もっているらしい。

「……ただいま。おい、どうした。俺が帰ってきたら叱ってやるって何事だよ」

俺は広間のソファーに今だぐったりした、ダルそうなままのめぐみんを寝かせると、喚くアクアに近付いた。

「ちょっとクソニート！　あんたがギルドでダクネスの可愛い本名を広めた所為で、ギルドに行ったダクネスが半泣きで帰って来たのよ！　散々ラティーナお嬢様ラティーナお嬢様ってからかわれたんだって！　ねえ出て来てよダクネス！　私はラティーナって名前、とても可愛くて良いと思うの！　ほら、以前めぐみんのワンピース着て喜んでいたんでしょ？　その名前とワンピース、似合ってると思うの！」

説得したいのか更にトイレに引き篭もらせたいのか分からない空気の読めないアクアがそんな事を喚く中、

「おいダクネス、そこは皆に迷惑だから出て来いよ。大体、あの時はお前がその呼び名を広めても良いって言ったんじゃないか。でもまあ、悪かったよラティーナ」

ドンとトイレのドアを殴る音。

ラティーナはもう泣くのは止め、今はかなりご立腹らしい。

アクアの呼び掛けにも応じる事はなく、俺が何を言っても返事が返ってくる事はなかった。

しかし、何時までもトイレに篭られると本当に迷惑だ。

「おいダクネス、俺も悪かったがあれはお前も悪かっただろ。売り言葉に買い言葉って奴だ。謝るから、もう仲直りしようぜ。……と言うか、そろそろ出て来ないとアクアが大変な事になりそうだから、出て来てやれよ」

「女神はトイレ行かないから大変な事にはならないけどね！　一階のトイレ掃除は私の担当なの！　ダクネスが出て来てくれないと、日課のトイレ掃除が出来ないからよ！　他に理由なんてないからね！　だから、早く出てー！」

モジモジしながらアクアが叫ぶ。

もうちょっとそんなアクアを焦らしてやりたくなるが、早くダクネスに頼んでおいたギルドでの用事の件を教えて貰いたい。

俺はドアの前で、ダクネスへと最終勧告をする事にした。

「おいダクネス。お前はそろそろ長い付き合いなんだから、俺の事を良く分かっているだろう。このままトイレに引き篭もり続けると、お前が泣いて謝って止めてくれって言う様な目に遭わせるぞ」

その言葉に、トイレの中からフンと鼻で笑う音。
そして、ずっと閉じ篭もり、一言も喋らなかったダクネスが。

「貴様こそ、私と長い付き合いなら、そろそろ私が大概の事なら喜びに変換できる事は分かっているだろう。何だ、得意の口汚い口撃か？　こちらはトイレを押さえている。何を言おうが私が耳を塞ぎ耐え続ければ、不利なのはお前の方だぞ。昨日の夜は引き分けたが、今日は折れる気はないぞ。ダスティネス家は耐える事に関しては他の追随を許さない。……さあ我慢比べだ！　今日は貴様が、許してくださいダスティネス様と謝るまで立て篭もってやろう！」

……。

その言葉を聞いた俺は、広間の中央の重いテーブルをズルズルと引きずり、トイレのドア前にそれを置く。
トイレは広間横の廊下にあり、廊下の幅の広さと同程度の大きさのこのテーブルを置く事で、テーブルがドアのつっかえ棒の様な働きをする事になる。

俺はアクアにぼそぼそと耳打ちすると、そのままスタスタとトイレ前を後にした。
アクアが俺を見送りながら、ドアに向けて呼び掛ける。

「ダクネスー！　カズマが、今からダクネスの部屋に行ってタンスからクローゼットからベッドの下から全て引っくり返して、隈なく探索して欲望の限りを尽くしてくるって。カズマ、本当にダクネスの部屋に向かって行ったわよー」

トイレの中からガタンと響く大きな音。
そのまま更に、ドアを開けようとしたのか、ガッとドアがテーブ

ルに当たる音。
俺はそれらの音を全く気にする事もなく、二階へと続く階段を……。
背後から何度も、ドアがテーブルにつっかえる音が響く中、ダクネスが罵声を上げた。
「カズマーっ！　止めろっ！　貴様、止めろ卑怯者が！　おい止めろ！　止め……！　冗談だろう？　アクア、カズマはまだそこに居るんだろう？　めぐみん、カズマはそこに居るんだろう！？」
段々不安そうな泣き声になるダクネスの声。
それに、広間のソファーでグッタリとだるそうにしながらも、バニルの抜け殻の上で眠るゼル帝をだらしない顔で眺めていためぐみんと、アクアがハモった。
「「居ないよ」」
「カズマ、私が悪かった！　悪かっ……！　ちょっ、出してくれ！　出られない！　アクア、めぐみん、出してくれ！　カズマ、すまない！　ごめん！　ごめんなさい！　許してくださいカズマ様！」
今日は勝ち。
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

広間のテーブルを囲む様に全員が顔を突き合わせた。
ダクネスの所為でえらく手間を掛けさせられたが、これでようやく話が進められる。
「ほら、ギルドから貰ってきた物だ」
ダクネスがテーブルの上に放ったそれは、この世界の地図。
そこには紅魔族の里へ続くそこまでの道のりと、季節毎に出没するモンスター分布が事細かに載っていた。

「紅魔の里までの地図ですか。でもカズマ、私、今日は頑張りますよ？　今日は深夜とは言えちゃんと爆裂魔法は放っていますし、残った魔力もウィズに思い切り吸われましたし。頑張って遅くまで起きていればきっと大丈夫ですよ。今日が大丈夫だったなら、里へ行く必要はないでしょう？」

地図を見ためぐみんが、意図を察して言ってくる。
俺には、もうその言葉はフラグにしか聞こえない。

何にしても、今の内に旅の計画を立てておくべきだ。
日程はどれだけ掛かるのか。
道中の食料に、出没するモンスターへの備え。
宿泊予定地に、他に様々な、旅に必要な道具類。

ハッキリ言って、旅は危険だ。
モンスターと遭遇しても、いつもみたいに討伐が終われば安全な街に帰れる訳でもない。
モンスターと連戦だってするだろうし、地図を見る限り、何日かは野宿が必要だろう。
一応ほぼ毎日、他の街への馬車を使っての商隊が出ているらしいので、できればそれに同乗させてもらう。

弱くても、人数が多いってだけで武器になる。
旅の準備はいくら念を入れても悪い事など何もない。

そしてなにより、今回の旅に入念な準備が必要な一番の理由。
「それに、紅魔族の里の周辺には、凶悪なモンスターが生息してます。なので、出来ればそう言う面でも里帰りはしたくないですね。そしてあの里は魔王軍に目の敵にされていますから、いつ魔王軍の襲撃があるかも分かりません。ここの様な安全な街とは訳が違いますからね。あんな危険な所には行かないで済むならそれに越した事はありませんよ」
と、言う事らしい。

優秀な魔法使いを輩出する紅魔族。
バニルも言っていたが、彼らのその里は、魔王軍の最重要攻略目標として目の敵にされているそうな。
魔王とか。
軍とか。

そんなもの、俺達の様なパーティには一番縁の無い言葉だと思う。
「そう言えば、めぐみんはそんな危険な紅魔の里からどうやってここまで来たのだ？」
ダクネスの最もな質問。
それにめぐみんが、眠るゼル帝を愛でながら。
「テレポートで送り届けて貰いました。修行の一環として、そうやって外に飛ばしてもらえるんですよ紅魔の里では。そして再び里に帰るなら、自力で里に帰れるだけの力を身に着けて来いと、そういう事ですね。ちなみにゆんゆんは、自分の力のみで私を追って来たみたいです」
そう言えば、あの子はめぐみんと勝負して勝つだとか、そんな理由で来たんだったか。

誘ったら付いて来てくれないかなあ……。

「地図で見るとかなりの距離だが、途中は、大きな街には大抵あるって言うテレポーターサービスとやらを使う。限られた場所にしか行けず、料金もえらい割高らしいが。そうやって短縮すると、大体日程は5日って所か？」

その分の食料の用意が必要だ。

飲料は少なめにして、俺のクリエイトウォーターで何とかするとして。

後は野宿用の道具。

それらを今日中に用意して、紅魔の里方面への商隊を探し、それへと混ぜて貰う約束を取り付ける。

そして、道中遭遇が予想されるモンスターへの有効な道具の用意。

明日までにやっておくのはこんなもんか。

俺が頭を巡らしているそんな中。

地図を手に、ふんふんと鼻息荒く眺め回していたアクアが言った。

「水の都アルカンレティア。ここは是非に。ここは是非にも寄っておくべき所ね！　あと、温泉の街ベレス。ここも是非寄らないと！」

「観光に行くんじゃないからな。道中、いつめぐみんが我慢できずに爆発するか分からないんだし、極力街に寄るのは避けたい。野宿がメインになると思う」

そんな俺の言葉にアクアがぶー垂れるが、

「大丈夫ですよ。そもそも私が、今晩ちゃんと魔力を放出できればいい話ですしね。それが出来ればそんな危険な旅をする必要もありません。大丈夫、きっと耐えられますよ」

めぐみんが、未だぐったりしながらも微笑んだ。

時刻は深夜。

めぐみんは、夜中急にもよおした場合に備え、窓が割れた側の部屋に寝てもらっている。

春とは言え夜はまだまだ冷え込むものだ。

そんな中ガラスが無い部屋で寝てもらうのは酷な様だが、もしもの時のガラス代を考えると仕方ない。

一度眠りに就いたのだが、何だかこんな時間に目が覚めてしまった俺は、広間に置いてある荷物をチェックし、旅の準備の最終確認を行なっていた。

これらが必要無くなればそれは良い事だが、まあそうもいかないだろう。

ソファーでは、アクアが座りながら寝たままゼル帝を抱き、眠ったまま手の平から柔らかい光を放っている。

眠ったままながら、器用にヒヨコの体温調節をしているのだろう。

普段からも、もうちょっとだけこの有能さを生かして欲しい。

そのアクアの隣には圧倒的な存在感を放つ抜け殻が。

……もうこれどうしよう。

こんな時間に見てると凄く不安な気持ちになる。

しかし、異世界に来ての旅はこれが初めてになる訳だ。

不安はあるが、正直少しだけ楽しみな所もある。

旅は冒険者の醍醐味だ、ワクワクしないと言えばもちろん嘘になる。
だが、めぐみんが耐えられるのならそんな必要も無いのだが……。
……。

とてもとても、静かな夜。
それは、当然と言うべきか。

……今日もまた。昨日に続いて、街中に轟音が轟いた。

よし、里に行くか！

6話

駆け出しの街アクセル。
どんどん遠ざかっていく駆け出しの街を遠目に見ながら、俺は感慨深く三人の仲間達と談笑していた。

それはもう和やかに。

「感慨深い物だ……。まさか自由の無い貴族の娘として生まれた私が、あの街から離れ、こんなにも自由に遠く離れた地を旅する事になるだろうとは思いもしなかった。……カズマ、お前のおかげだ、ありがとう」
ダクネスが、言いながらふわりと優しげに微笑んだ。

どう致しまして。

「……本当に。カズマとパーティを組んだ時には、まさかこんな事になるなんて思いもしませんでしたよ。私、一人前になるまでは絶対に里には帰らないって決めていたのに。……人生とは、ままならない物ですね。でもカズマ、私の魔力の暴発を防ぐため、危険を承知で里に付いてきてくれる。何だかんだ言いながら優しいカズマに、私も改めてお礼を言います。……どうも、ありがとう」
めぐみんが杖をいじり、にこりと笑った。
全く、何を今更水臭い……。

「……思えば不思議なものよねカズマ。私がここに来たのも、カズマの所為……、ううん、カズマのおかげ。ありがとうねカズマ。私が超エリート女神たる地位を奪われ、今まで散々な目に合わされ……。屋敷での日課はトイレ掃除。……今こうしてお尻が痛いのにも

耐え、我慢して我慢してこんな場所で馬車に揺られているのもカズマのおかげ。…………そんなカズマさんに、この中で一番付き合いの長い私からちょっと頼みがあるのよ。……聞いてくれる？」
それは、今からとても大事な事を打ち明けようとするかのように、恥ずかしそうにもじもじと俯くアクア。
水臭い奴だ。
今更遠慮なんかする間柄じゃ無いだろうに。
長い付き合いだ、今更口にしなくたって、言いたいことぐらい分かっている。

俺はもちろん…………。

「お断りします」

ガタゴトと馬車に揺られながら。
硬い荷台の上に膝を抱えて座るアクアに、俺は馬車の座席の一番良い場所を死守しながらきっぱり言った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

旅支度を終えた俺は、アクアと共にウィズの店へと寄っていた。
旅に出る前に頼みたい事がある為だ。
それは……、
「へいらっしゃい！　……おっと、相も変わらず貴様か、最近ロクな活躍もせず、いよいよパッとしなくなってきた小僧。丁度今、店主が勝手に仕入れた魔道具を返品する為の作業を行なっていた所だ。なので我輩はちょっと忙しいので、仕置き光線で奥で焦げてる店主

に勝手に会いに行くがよい」

何かをせっせと箱詰めするバニルが言った。

だが、今日の俺達の目的はウィズではなくこいつにあるのだ。

「いや、今日はウィズには用は無いんだ。お前なら一々説明しなくても分かるだろうに。……と言うか、返品って出来たんだな。今度は一体何を仕入れたんだ？」

俺が聞くと、バニルが嫌そうに口元をしかめ。

「貴様の後ろでゼル帝を抱いて、我輩に剣呑な視線を送る女神がやたらと眩しい所為で、見通す事が出来んのだ。不具合店主に用でないと言うのなら、我輩に用事か？　……これはな、送られてきた購入受領書に、あと少しでサインしようとした店主からすかさず奪い、その中身を確認したら……。これである」

言って、バニルは箱に入れようとしていたそれを見せ。

「この四角い固形物はモンスターなどに食わせると、そのモンスターの魔法の抵抗力をしばらくの間、劇的に下げてくれる罠餌の一種である。そこの生焼け店主が、『これは魔法使い職にとっては素晴らしい物ですよ！　売れます！　今度こそは売れるんです！　だからバニルさん、光線を撃つ構えでジリジリとにじり寄って来ないで下さい！』と、先ほど半泣きで見せびらかしてきた物だ」

それだけ聞くと大した物の様な気がするが。

「……どうせ何かあるんだろ？」

「無論だ。これを食べたモンスターは魔法抵抗力は確かに下がる。だが、副作用として防御力が劇的に上昇する。……結果、これを食わせると、こちらの魔法を無効化したり弾いたりする事は無くなる

が、代わりに大概の攻撃魔法が効果自体を成さなくなるほどの防御力を誇るように……」

……それは、物理攻撃すら効きにくくなる以上、事態が悪化してるじゃないか。

……まあ、いい。

「それをくれ、一つ買うよ。……その代わりに、頼みがあるんだ」

「ほう、まいどあり！　では購入受領書に、一つは買い取り。残りは返品……と。これでよし。……で、頼みとは何か？　サイフに入れておくと幸運のお守り代わりになると評判の我輩の抜け殻の欠片か？　最近貴様の家で脱皮した為、しばらくは脱皮できぬぞ」

「ちがわい。……そうじゃなくてな。おいアクア」

俺の言葉に、アクアが渋々と抱いていたゼル帝を差し出した。

「……旅に出る間、この子を預かって頂戴。……虐待とかしたら、もれなくこの店に毎晩聖歌を歌いにくるからね」

「近所迷惑なので止めるがいい。……だが、ゼル帝は大事に預かってやろう。そこの店主よりも良い物を食わせてやる。店主の現在の主食はパンの耳に砂糖をまぶした物だ。それよりはマシな物を食わせてやろう。我輩の食事並にはな」

バニルはピーピー鳴いて喜ぶゼル帝をヒョイと摘み、それを仮面に近付けしげしげ見る。

「お前、飯なんて食べるのか？」

「うむ、食えない事はないぞ。魔力で作り出したこの肉体の維持に使うのだ。すると維持する為の魔力の消費が減る。……もっとも、我輩が食事する最大の意味は、パンの耳を小動物の様にかじる店主の前でステーキを頬張り、涙目の店主の悪感情で腹を満たす為なのだが。……よしよし、よく来たなゼル帝よ。貴様には我が殺人光線

を伝授してやろう。それで、屋敷に帰った暁には隙あらば女神を葬り去ってくれるがいい」

ゼル帝が嬉々としてバニルの手の中で丸くなる中、それを恨めしそうにアクアが眺め。

「あんた、帰ってきてゼル帝がおかしな事になってたなら本当に消滅させてやるからね」

「フン、やれるものならやってみろ。この我輩を舐めるなよ？　我輩とて悪魔の端くれ、呪いの一つも掛けられるのだぞ。……貴様の尻の辺りに、常時、射的の的の様な図柄が浮かび上がる呪いを掛けてくれようか。一撃必殺の構えを取る、わんぱくなガキ共の格好の的にされる貴様の姿が目に浮かぶわ」

「やれるもんならやってみなさいな木っ端悪魔。アンタ如きの呪いが効くと思ってんの？　バカなの？　例え効いても、ゴッドブローで泣かされる子供達が増えるだけだからね」

相変わらず、こいつらはもう少し仲良く出来ないものなのか。

バニルから受け取った手の中のキューブを、俺は無造作に荷物の中に放り込む。

するとバニルは、俺にズイと近付き、その口元をにやりと歪めた。

「……ふむ。ピカピカと鬱陶しいのがいる所為であまりクッキリとは見えないが。ガラクタをお買い上げ頂いた貴様に一つ、予言をやろうか。……貴様はこの旅の目的地にて、仲間に迷いを打ち明けられる時が来る。貴様の言葉次第では、その仲間は自らの歩むべき道を変えるだろう。……見通す悪魔が宣言しよう。汝、よく考え、後悔の無い助言を与えるようにな。……フハハハハハハ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

あの悪魔の意味深な助言を受けた後、俺とアクアは商隊の馬車の集合場所に向かっていた。

冒険者である俺達は護衛として雇われる事も出来たのだが、万が一の際にはあまり戦いたくないので、普通に料金を払い相乗りさせて貰う事にした。

戦いたくない。
そう、この街の周辺の雑魚モンスター相手ですら拮抗した勝負をしている俺達が、道中の、それも人が大勢いる馬車に襲い掛かるような危険なモンスター相手にまともに渡り合えるなんて思えない。
なのでお客さん待遇で馬車を利用する事にした。

待合場所に着くと、そこには荷物を持ったダクネスとめぐみんの姿。
何台もの馬車がそこいらに並び、乗客や、護衛と思われる冒険者風の連中が次々と馬車に乗り込む。

俺の持ち金が、今は二百万ちょいだ。
旅をするには充分な額だと思うのだが、問題は残りの連中だ。
ダクネスは元々、無駄遣いをする奴じゃない。
こいつは大丈夫だろう。

次にめぐみん。
こいつもあまり無駄遣いする様な奴ではないが、屋敷のガラス代

で相当な額の出費が掛かったはずだ。
ガラスは、俺達が旅から帰れば業者が直してくれている手はずになっているが、料金を前払いしためぐみんは、あまり懐が潤っているとも思えない。
まあ、これは体質の問題もあるし仕方の無い事だろう。

問題は……。

「ねえカズマ！　あの馬車にしましょうよ！　私の目利きによれば一番乗り心地が良さそうよ。ちなみに私は窓際ね。景色が良く見える席を予約するわ。ほらカズマ、切符買ってきて。他の客にあの馬車の席取られない様に、早く切符買ってきて」
そんな舐めた事を言いながら、一番料金が高そうな馬車をキラキラした目で見るこいつだった。

そんなアクアに。
「……お前、金持ってんの？」
俺はそう、きっぱり告げた。

小さめのその馬車は、御者台と半ば一体になった乗客席の後ろに、荷台部分が接続された形と成り、そこには既に沢山の荷物が積まれていた。

御者席の後ろの、木製の簡単な乗客席。
そこは四人分の席になるはずなのだが……。

「……ねえおっちゃん、何で既に一席埋まってるの？　これ何？　邪魔なんですけど」
四人分の座席のうち、既に一つが埋められていた。
それは、小さな檻に入れられた一匹のトカゲ。

赤い瞳を持つ、猫ほどの大きさのそのトカゲは凶暴そうな瞳を輝かせていた。

……えっと、これって……。

「お客さん、そりゃドラゴンですよ。レッドドラゴンの赤ちゃんです。飼い主さんは向こうの馬車の方なんですが、そのドラゴンの分、ちゃんと客席分の値段を頂いておりますんで、お客さんはどなたかお一人、座り心地は悪いですが後ろの荷物席に移って頂かないと……」

俺はなるほどと、御者のおっちゃんの言葉に納得した。

知らない連中と相席だとか、みんなと別々の馬車に乗るのも嫌だったもので、四人がまとめて乗れる馬車をと頼んでいたのだが……

実は席料が一人分だけ安かったのだ。

これはそういった事だったからか。

費用は、結局俺持ちとなったのだが……。

「……それじゃ、金を払った俺は……」

「じゃんけんで！　私、こんな時はじゃんけんで決めた方が良いと思うの！」

俺が何かを言い掛けると、それをアクアが遮った。

コイツは俺が何を言うつもりか察したらしい。

普段ならば、うるせー今回文無しで宿代も払えないお前が荷台に行けと言う所だが……。

「いいぞ。じゃんけんだな。構わんぞ」

「えっ」

あっさりと応じた俺の言葉が意外だったのか、アクアが間抜けな声を上げる。

じゃんけんか。よし、受けて立つ。

この世界にもじゃんけんはちゃんとあるらしい。
俺の先にここに来たチート持ち連中が、色々広めたのかもしれないな。
ダクネスとめぐみんは疑問に思う様な事もなく、素直にじゃんけんの体勢を取った。
アクアが気合を入れるかのように拳を握り……！
「それじゃいくわよ！　じゃーんけーん、ぽんっ！」
俺がチョキで残りはパー。
一抜けである。
俺が席に座ろうとすると、アクアから待ったが掛かった。
「誰が勝ち抜け戦だなんて言ったのよ、四人でじゃんけんして、一人だけ負けを決めるまでは続けるルールよ」
「舐めんな」
じゃんけんを言い出した時点で何かやらかすとは思ったが。
……よし。
「おいアクア。それじゃ俺と勝負するか？　俺と一対一で三回じゃんけんして、三回中一度でもお前が勝ったら俺が荷物席に座ってやるよ」
「マジですか。……カズマってやっぱり案外バカだったの？　ねえ確率の計算って知ってる？　カズマが三回連続で勝つとか凄く無茶振りなんですけど」
そんな事を言ってくるアクアと向かい合い、俺は二人に先に座るよう促すと。
「俺、じゃんけん負けた事ねーから」
三回勝負。
じゃーんけーん……！

「おかしいわ！　おかしいわよ、ズルしたわね！　お願い、もう一回！　これで負けたらちゃんと荷物席に行くから！」
あっさりと三回連続で負けたアクアが、半泣きでおかしいおかしいと食って掛かっていた。
しつこい奴め。
「本当だぞ？　これでまだ駄々捏ねたら、旅から帰ったらゼル帝を唐揚げにするからな」
俺の言葉にアクアはフフンと鼻で笑った。

「受けたわね。受けたわねカズマ！　あんたがどんなズルをしているのか知らないけれど、そっちがその気なら私にだって考えがあるのよ！　『ブレッシング』！」
「あっ！　こいつ汚ねえ！」
アクアが祝福の支援魔法を自分に掛けた。
これは神の祝福を授ける魔法。
個人差はあるが、効果は一定時間の間、運が良くなる。
「運も実力の内ってね！　いくわよ！　じゃーんけーん、ぽんっ！」

俺の勝ち。

「何でよー！」
喚くアクアに、荷台に行けとばかりにシッシと手で追いながら。
「俺、ガキの頃から不思議とじゃんけんに負けた事無いんだよな実は」
「卑怯者！　なにそれズルイ！　そんなのチートよ、チート能力じゃない！　あんた、生まれながらのチート持ちだったの!?　なら、

私と言うチートを授かった事は無効よ無効！　帰してよ！　私を天界に帰してよこのクソチート！」

この女！

「てめーこのクソビッチが！　俺の特殊能力は『じゃんけんに勝てる能力』ってか？　お前バカか、こんなもんでどうやってモンスターと渡り合えってんだ！　魔王相手に、じゃんけんで俺が勝ったら、人に迷惑掛けるの止めて下さいって言うのかこのバカ！」

「だって！　だって！！」

尚も食い下がるアクアに、俺はとうとう掴みかかった。

「一番俺が腹立つ所は、だ！　お前が自分の事を、授かったチート能力の一つだと言い張っている所だよ！　お前ふざけんなよ、何がチートだ！　お前を返品して特殊能力でも貰えるのなら、とっとと返品してやる所だ！」

「わあああああーっ！　カズマが言っちゃいけない事言った！　ひゃめへ！　ほおをひっはらないれっ！！」

ガタゴトと馬車に揺られ、どれ程が経ったのだろうか。

俺達の住んでいた街は、もう遥か遠くに豆粒のような大きさになっていた。

馬車の横手には小さな窓の様な物が付いており、街からロクに離れた事の無かった俺は、そこから珍しそうに外の風景を眺めていた。

俺の隣ではダクネスが、座席の上に鎧のまま膝立ちで、まるで珍しい物を見る子供の様に窓にぺたりと張り付き、移り変わる外の景

色を目を輝かせてじっと見ていた。
お嬢様にとっては、俺と同じく街の外の世界が珍しいのだろう。

めぐみんは俺達よりは外の世界を見た事があるのか、窓の外よりも目の前のケージに入ったドラゴンの子供を興味深そうに眺めていた。
ゼル帝の方が可愛いですねとか小声で言っているが、ドラゴンに餌でもやってみたいのか、ポケットに手を入れもぞもぞさせ、何かないかとまさぐっている。

そんな中。
「カズマさーん、カズマさーん！　お尻痛いんですけど！　あの仮面悪魔に本当に呪いでも掛けられたのかってぐらいに、お尻痛いんですけど！　ねえカズマ、最近思うんだけど、女神に対する扱いが雑だと思うの。ここの所、私それほど迷惑掛けてなくない？　結構役に立ってる自信があるんですが！」
ガタゴトと揺れる荷台で、アクアがそんな事を喚いていた。
……しょうがねえなあ……。
「じゃあ休憩になったら場所代わってやるから、それまでは我慢しろよ」
その言葉にアクアが喜び、荷台で膝を抱えたまま上機嫌で鼻歌を歌い出した。

俺達の乗っている馬車以外にも、何台もの馬車が続々と列を作って道を行く。
それらの馬車には、商隊の護衛を請け負った冒険者や旅行者、そして様々な荷が積まれている。
人や馬車が多ければ、弱いモンスター等は逃げていくものだ。

……このどうしようもない世界の事を、もう良く知っていながら。

俺は、のん気にそんな事を考えていました。

それに一番最初に気が付いたのは俺だった。

千里眼スキルにて、ここぞとばかりに窓からあちこちを眺めていた俺は、その土煙に気が付いた。

それは商隊が行く街道の横手から、土煙を上げながらこちらの方へと向かって来ていた。

未だかなりの距離ながら、ぐんぐん大きくなる土煙から、それが相当の速度を持って迫ってきている事が分かる。

「……なあ、なんだアレ」

俺は隣の席で座って窓を見ていたダクネスに、その土煙を指差した。

千里眼のスキルが無いダクネスは、俺が指す方の土煙すら見つけられない様で、眉間に眉をしかめている。

俺は何だか嫌な予感がし、御者のおっちゃんへと近付いた。

「すんません、なんかこっちに土煙が向かって来てるんですが。それも結構な速度で。……何か分かりません？」

その言葉に、御者台でのんびりと手綱を引いていたおっちゃんが。

「土煙？　ここらで結構な速度で土煙を上げて移動する生き物って言ったら、リザードランナーの群れですかね？　しかし、王様ランナーという群れを統率するモンスターが現れない限り無害な生き物達ですしね。きっと、砂くじらが砂吹き上げてるんじゃないですかね？　他に考えられると言えば、走り鷹鳶ぐらいでしょうか」

なんだその、くだらないダジャレみたいな名前のモンスターは。

「おっと、お客さん止めて下さいよそんな目は。自分が付けた訳じゃ無いんですから。タカとトンビの異種間交配の末に生まれた鳥類界の王者ですよ。鳥の癖に飛べないモンスターでして、代わりにとんでもない脚力を持って高速で走り回り、獲物を見つけるとそのままジャンプしてかっ飛んで来る、大変危険なモンスターですよ」

そんなふざけた名前のモンスターにだけは襲われたくないな。

俺のそんな表情を察したのか、おっちゃんが軽く笑い、

「大丈夫ですよお客さん。春は連中の繁殖の季節なんです。この時期のこの鳥達は、メスの気を引く為に、メスの前で勇敢さを競い合う、チキンレースと言われる求愛行動を取ります。それは、激突すると大惨事になりそうな硬そうな獲物にかっ飛んで行き、ギリギリで回避すると言う変わった求愛行動です。中には勢い余ってそのまま激突する事もザラですが。連中は、本能的に硬い物を探し出すと言われてましてね。きっとその辺の木や石にでも突っ込んで行きますよ」

なるほど。なら安心だ。

俺はその言葉に納得し、再び自分の席に付く。

そして再びその土煙に視線を向けて……。

……近付いていた。

それは明らかに先程よりも近付いていた。

しかも、その土埃はこちらを真っ直ぐに目指している。

「すいません。すいませーん！　なんかこっちに凄い勢いで突っ込んで来てるんですけど。あれって大丈夫なんですかね？」

俺の言葉に御者のおっちゃんは手綱を引いて馬の速度を落とし、その土埃の正体を見極めようと……。

「……おや、あれは走り鷹鳶ですね。ええ、間違いない。でも、こちらに向かって来るにしてもおかしな話ですよ。お客さん、もしかすると商隊の中に、アダマンタイトみたいな凄まじい硬度を誇る鉱石でも積んでいるのかもしれません。連中は本能的に硬い物を追いかけますから。他の商隊の連中も気付いたみたいです、安心して……。……？　なんか、こっちに来ますね。と言うか、この馬車に。と言うか……！」

と言うか、この馬車の客室。

つまりは……！

「カズマ！　物凄く速い生き物が、真っ直ぐこちらへ向かって来ている！　と言うか……。連中が、私を凝視している気がするぞ！　なっ、なんという熱視線！　はあ……はあ……！　た、大変だ、カズマ、大変だ！　このままでは私はあの高速で突っ込んでくる集団に激しく激突され、蹂躙されてしまうのでは……っ！！」

「お前かー！！」

俺は思わず頭を抱えそうになった。

「お客さん、馬車を止めますよ！　そうすれば、他の馬車に乗っている護衛の冒険者達が、この馬車とお客さんを守ってくれますから！」

すいません、ウチのクルセイダーが硬くてすいません！

俺はダクネスに耳打ちした。

「おいダクネス、あのモンスターの狙いはお前だ。あいつらは硬い物を好んで突撃していくんだと。連中の標的はお前の硬い腹筋だ」

「おいカズマ、私の腹をまさぐった癖に、硬いとか言うな！　あれ

だ、私の鎧はアダマンタイトも少量含んだ特注品だ。それに私の防御スキルも合わせれば……。きっと、それでこちらに来ているのだろう。……ほ、本当だ。だからそんな目で見るな、腹筋はそこまで硬くない……！」

馬車が止まり、俺とダクネスは馬車から飛び降りる体勢に。

「めぐみん、アクア、出番だぞ！　本来俺達は戦わなくてもいいが、今回は俺達が招いた敵みたいだ。自分達の尻拭いは自分でやるぞ！」

その言葉に、めぐみんとアクアが俺とダクネスに続いて馬車を降りた。

事情を知らないおっちゃんが叫ぶ。

「お客さん！　お客さんは護衛を引き受けた訳じゃ無いんですから！　金払って馬車に乗ってるんですから、安全な所に隠れてください！」

すいません！　原因は多分ウチの仲間なんです！

そんな俺の内心の謝りに。

「冒険者の先生方！　お願いします！」

それは馬車の護衛の依頼を受けた冒険者達だろう。

それらの人がゾロゾロと、商隊のリーダーの様な男の声を受け、武器を手に、次々と馬車から飛び出した！

ダクネスは商隊の横手側から突撃してくる走り鷹鳶の群れに対し、そのまま真っ直ぐ歩いて行く。

情けない話だが、もちろん俺はダクネスの後方に隠れたままだ。

俺が矢面に立っても、あんな速度の、あんな大きさのモンスター

の一撃を受けたら間違いなく命は無い。
鷹の頭を持つ、ダチョウの様な体系のその鳥は、馬より速く、馬より大きく。
その速度を落とす事なく真っ直ぐに突っ込んでくる。

「おい、そこのクルセイダー！　あんた、護衛とは関係ないんだから下がってろよ！」
それは、とある護衛の戦士風の男の声。
それを聞いてもダクネスは歩みを止めない。

「おい……！　あのクルセイダー目がけて、モンスターが真っ直ぐに向かっていくぞ……！　デコイだ！　クルセイダーは、デコイって言う囮になるスキルを使う！　あのクルセイダーは、護衛でも無いのにそれを使って敵を全て引き付けて！」
それは、とあるアーチャーの声。
すいません。使ってません。すいません。

「おい、あのクルセイダー、あれだけの敵を前にして、一歩も引かない気だ！　なんて……、なんて勇敢なんだ……！」
それは、ある魔法使いの声。
すいません。多分全然違う理由だと思います。すいません。

ダクネスが、なぜか頬を火照らせてウズウズしながら前に出る中、ある盗賊風の冒険者がロープを手に、果敢にもダクネスの後ろを追いかけた！

「本来は客の、護衛料も貰っていない冒険者にばかり、危険な目に合わせられるか！　援護は任せろ、くらえ『バインド』ッ！」
「なにっ！？」

その言葉を聞いたダクネスが、一も二も無く反応した。

ああ、そうか。確かクリスに聞いた事がある。

盗賊のスキルには、拘束と言う物がある。

ダクネスはクリスとパーティを組んでいた頃、クリスにこのスキルを敵に使ってもらい、動きを封じられたモンスターにダクネスがトドメを刺す戦法を取っていたらしい。

ああ、だからか。

スキルの名前を聞いただけで、それほど素早くもないダクネスがこんな動きが出来たのも。

ダクネスは、目前まで迫る走り鷹鳶……！

……ではなく。

まるで、その盗賊風の男が放ったバインドの標的である、走り鷹鳶を庇うかのように。

盗賊風の冒険者と走り鷹鳶の間へと、嬉々として飛び込んだ。

即座にロープに絡め取られたダクネスは、あっという間に手と足を拘束されて、ミノムシみたいな姿になり、そのまま地面に転がりモゾモゾ動いた。

呆然とする盗賊に、ダクネスが頬を赤らめて、熱のこもった声で叫ぶ。

「くうっ！？　何と言う事だ！　敵を目前にして拘束されてしまった！　このままではっ……！　このままではあのモンスターの集団に、蹂躙されてしまうっ！」

すいません。本当に、ウチの変態がすいません。

転がるダクネスを目がけ、土埃を上げながら突撃してくるモンス

ター達。
盗賊風の男が、そのダクネスを見て悲痛に叫ぶ。
「まさか、俺がバインドを食らわせる事により、モンスターの群れのターゲットが俺に向かうのを心配して、代わりにバインドを受けたのか！？　すまねえ！　援護のつもりがかえって邪魔しちまった、許してくれええっ！」
すいません！　ウチの仲間がすいません！　本当に、本当にすいません！

7話

チキンレース。
それは猛スピードで、崖だとか、命の危険がある障害物へと突撃し、死ぬ寸前で止まったり身をかわす、度胸試しのスピードゲーム。
今、その危険なゲームの障害物に。

「カズマ、カズマ！　来たっ！　次が来た！　今度こそは、今度こそはもうダメだ！　あああああ、ぶつかるーっ！」

両手足を拘束されたダクネスが選ばれていた。
地に転がるダクネスに、頭を低くして突撃してきた走り鷹鳶が、そのまま突っ込む……！
そう思われた瞬間に、背面跳びの様な体勢でダクネスの上スレスレを高速で通過した。
そのまま何事も無く走り出すと、風の様に俺達や他の冒険者達の隣を駆け抜けて行く。
その後もダクネスに向けて突っ込んでくるが、正面跳びに挟み跳び、果てはベリーロールの様な体勢で、ぶつかる寸前で次々とダクネスを飛び越えて行った。

「カズマ！　これは焦らしプレイの一環なのだろうか!?　このギリギリでのお預け感がまた……！　ああ、なんて事だ……、私の体の上を次々と発情期のオス達が通り過ぎていく……！」
「よし、人目もあるんだお前はもう黙ってろ！」

俺の隣のアクアが、褒めてとばかりに胸を張り、ドヤ顔でこちらを見ていた。
「はいはい、偉かった偉かった。これが終わったら座席は代わって

やるから」
その言葉に、アクアがヨシ！　と拳を握る。
ダクネスに、一時的に運が良くなる支援魔法、ブレッシングを掛けてもらったのだ。
焦れてモジモジしているダクネスは、魔法で一時的に運が高まっている為そうそう激突される事はないだろう。

そうこうしている間に、護衛の冒険者達が動き出した。
「魔法だ！　動きが速いから、魔法を使え！」
誰かのその言葉に、魔法使い達が一斉に魔法を唱え……！

「『ファイアーボール』！」
「『ライトニング』！」
「『ライト・オブ・セイバー』ッ！」
「『ファイアーボール』！」

次々と魔法が乱れ飛び、それを受けた突っ込んで来る走り鷹鳶が、スピードはそのままに意識を失い、次々と馬車や冒険者達に突撃していく。
速度が出ている為、仕留めてもそのまま慣性に従って、簡単には止まらないのだ。
相当の速度が出ていた走り鷹鳶に激突された冒険者や馬車は、手酷いダメージを受けていた。

生き残った走り鷹鳶の群れは全員一通りダクネスを飛び越え終えると、速度を落とさず走り抜けたまま、そのまま大きく旋回する。
その姿を見た商隊の人や冒険者達が大きくどよめいた。
まだ来るつもりか！

あかん、これはどうした物か。

俺の視線の先には、モンスターの群れの標的にされている、未だモジモジしているダクネスの姿。
……それを見て、ピンと閃いた。

「おっちゃん、この辺りに崖とかは無いか！？」
俺は、近くで呆然と成り行きを見ていた御者のおっちゃんを捕まえ、尋ねた。
ダクネスを餌に群れを誘い、そのまま連中を自爆させるのだ。
崖の寸前に、落ちない様にロープでも付けたダクネスを転がす。
すると、ダクネスを飛び越えた後、崖に向かって次々と……！

「いや、この辺りにはそんな崖なんて……。あるのは、急な大雨に降られた時に休憩に使っている小さな洞窟ぐらいな物で、この辺には、それ以外には何もないですよ」

俺はおっちゃんの答えを聞いて、まあ、そう簡単に都合良くはいかないかと……。

……洞窟。

「おっちゃん、その洞窟って近い！？　近いなら、馬車を走らせてくれ！　めぐみん、アクア、馬車に乗れ！」
俺は回りに指示を出し、ダクネスへ向かって駆け出した。
そして、ダクネスを縛ったロープを解こうと……！

「！？　なんだこれ、結び目が無い！？　どうなってんだ！」

ロープを解こうにも、解く為の結び目が……！
俺は拘束スキルをダクネスに掛けた盗賊風の男を振り返る。
「す、すまない！　拘束スキルは、一度発動させると時間が来るま

で解けない！　ダガーか何かで、絡み付いているロープを一本一本切っていくしか……！」

おいマジか。

旋回していた走り鷹鳶の群れを振り返ると、その先頭の一匹がこちらを向いたのがうかがえた。

時間が無い！

「カズマ、どうするつもりかは知らんが、私ならこのまま引きずって行け！　頑丈なロープだ、一々切っているよりその方が早い！」

まごまごするな、事態は急を要する！」

「正論なんだが、ややこしい事態にしたお前が言うな！」

俺は重いダクネスを引きずりながら、既に駆け出す準備が出来た馬車へと向かっていく。

「走り鷹鳶がそっちに向かったぞーっ！」

誰かが俺達に警告する。

それと同時に、次々と聞こえてくる魔法の炸裂する音。

それらを聞きながら、俺は馬車へと乗ろうと……、

「おい、これどうすんだ！　お前が重すぎて、俺じゃ馬車に持ち上げるとかは無理だぞ！」

「お、お前が重すぎてとか言うな、ちゃんと、私の鎧が重すぎてと言い直せ！　ロープか何かで私を馬車に縛り付けて引っ張って貰ってもいい、緊急事態だ、仕方が無い！　遠慮するな、仕方が無いのだから！」

何かを期待するかの様な眼差しで、そう力説してくるダメネス。

「おいあんた、ロープならこれ使ってくれ！　悪かったな、色々と！」

そう言って、俺にロープを放ってくれたのはダクネスを拘束した盗賊風の冒険者。
こちらこそ色々すいませんでした。
俺は受け取ったロープでダクネスを馬車に縛ると……！

「お客さん、もう限界ですよ！　馬車が壊されちゃいますよ！」
御者のおっちゃんの緊迫した声に、俺は叫び返していた。
「いいぞおっちゃん、出してくれー！　ダクネス、キツかったら言えよ！　すぐ解くからな！」

俺の言葉も既に聞こえないぐらいに、縛られた状態でもじもじしながら頬を染め、これから自分の身に何が起こるかを期待したダクネスは。
「ああ……。縛られたまま、このまま馬で引きずられてしまうんだ……！　そして、そんな状態の私を追いかけてくる、餓えたオス達……！」

もうこいつは、縛ったままここに放置してやった方が幸せなのかもしれない。

そんなダクネスを引きずりながら、馬車は勢い良く走り出した。
「ねえカズマ、ダクネスが！　カズマは鬼畜だとは思ってたけど、これはあんまりなんじゃないかしら！」
「ひ……、酷過ぎる……」
「ち、違うから！　縛って引っ張って行けって言うこれは、俺が発案したんじゃなくて、ダクネスが……！」

馬車に乗った俺に、ドン引きした二人からそんな非難が飛び交う中、御者のおっちゃんが悲痛に叫んだ。

「お客さん、どうします！　連中がこっちに向かってきてますよ！　どこへ向かえばいいんです！？」
御者のおっちゃんは本当は俺達など放り出したい所なのだろうが、既に金は受け取っている為それも出来ないで苦しんでいるのだろう。
「洞窟へ！　さっき言っていた洞窟へと向かってくれ！」

馬車が爆走する中、その後ろを走り鷹鳶が迫ってきていた。
速度は向こうの方が上だ。
後ろを見ると、走り鷹鳶の群れがグングンと迫り、その連中の矛先のダクネスは……！

「んあああ、こっ、こんなのはっ！　鎧がガリガリ言っている！　ああっ、マントが破け、次々と私はボロボロに……！　や、止めろぉ！　カズマ、見るな、こんなボロボロにされていくみすぼらしい私を見るなあああっ！」
頬を染めたダクネスが、見るなと叫びながらも楽しそうだ。
たまにこちらを余裕がありそうにチラチラ眺め、みんなの視線を受けて更に恍惚としながら頬を染めている。
根っこの所はこんなもん。

あの、領主騒動の時の凛として格好良かった俺の仲間はどこに落としてきたのだろう。

「『ヒール』！　『ヒール』！」

俺の隣では、アクアが一心不乱に引きずられるダクネスへと回復魔法を掛けていた。
既にダクネスには、防御や筋力を高める支援魔法が掛けられているが……。

「カズマ！　洞窟が見えてきました！　私はそろそろ魔法の詠唱を始めればいいですか！？」
「よし、めぐみん頼む！　くれぐれも舌は噛むなよ！」
激走し、ガクガクと揺れる馬車の中。
めぐみんへと指示を出し、俺は弓を取り出し矢をつがえ……！

「おっちゃん、洞窟が見えたらそのわきに馬車を止めてくれ！　アクア、俺にも筋力増加の支援魔法を！　狙撃狙撃狙撃狙撃ーっ！」
迫り来る走り鷹鳶の群れに向かい、次々と矢を放つ。
それらの殆どはスキルのおかげで狙いは違わず、タカの頭へと突き立っていく。
崩れ落ちて行く仲間を見た走り鷹鳶達は、走りながら翼を広げ、威嚇する様に甲高く鳴き叫んだ。

「ピィーヒョロロロロロロロローッ！」

なるほど、走り鷹鳶か。
鳶の要素はどこに消えたんだろうとの疑問が解消されスッキリしていると、御者のおっちゃんが必死に叫ぶ。
「お客さん、洞窟前です！　あの洞窟は雨でも降らない限りは人なんて近付きもしません、遠慮なくやっちゃってください！　……急に止まりますから、何かにしっかり掴まっていてくださいよっ！」
その言葉に全員が手近な物に掴まる中、馬車は勢い良く洞窟の入口のわきへと滑り込む様に急停車した。

すぐ後には走り鷹鳶の群れがいる。
こちらは止まったが、連中は全く勢いを落とす事は無い。
それどころか、攻撃された怒りの為か一層速くなっていた。

アクアの支援で筋力が強化された今ならいける！

俺は馬車から飛び降りると、そのままダクネスと馬車を繋いでいたロープを引っ張り、ダクネスをハンマー投げでもするかの様に洞窟前に放り投げた！
「あああああっ！？　悪くない、悪くないぞこの仕打ち！　流石カズマだ！　散々引き回した挙句にモンスターの餌として放り投げぶっ……！？」
放り投げられたダクネスが、洞窟の前へと顔から落ちて静かになる。

それと同時に……、
「ピィーヒョロロロローッ！」
甲高い鳴き声と共に、走り鷹鳶の群れが転がるダクネス目がけて突っ込んだ。
それらは地面すれすれまで頭を下げ、ダクネスに激突する寸前で勢いは殺さずにヒョイとその身をかわしていく。
正面跳び、背面跳び。
ベリーロールに挟み跳び。
走り鷹鳶の群れは、一陣の風の如く次々とダクネスの上を跳び越え駆け抜けていくと、そのまま洞窟の中へと突っ込んで行った。
あっという間に群れが洞窟へと消えて行き、最後の一匹が洞窟へと駆け込んだその瞬間。

「めぐみん！　やれっ！」
俺はダクネスに繋がるロープを引きながら、転がるダクネスを少

しでも洞窟前から引き離し、走り鷹鳶が引き返してくる前に、既に詠唱を終えていたためぐみんへと指示を出す。

「『エクスプロージョン』ッッッ！」

それを受け、洞窟の中へ必殺の爆裂魔法が放たれた。

杖の先から放たれた一筋の閃光が、洞窟へ駆け込んだモンスター達の後を追う様に、暗い穴の中へと吸い込まれ……！

その小さな小山の様な洞窟は、轟音と共に吹き飛んだ。

辺りはすっかり暗くなり、商隊の人達と共にキャンプファイアーの様な大きな焚き火を幾つも作る。

その焚き火を中心として円を描いて囲む様に、商隊の馬車が止められていた。

こうしておくと、野営の時に風除けになる上に、いざモンスターに襲われた時にも、馬車をバリケード代わりに出来るからしい。

その代わり急に馬車を走らせる事は出来ないが、どの道この暗闇の中、馬を走らせる事は出来ないのだ。

そう考えると、実に合理的な陣形なのだろう。

「さあ、どうぞどうぞ！　良い所が焼けたので召し上がってくださ

い！」

そう言って俺達によく焼けた何かの肉を差し出してくるのは、この商隊のリーダーをやっているおじさんだった。

昼間の走り鷹鳶の撃退において活躍した俺達は、何だか凄い歓待を受けていた。

多分ウチのクルセイダーにひかれて集まってきたんですがなんて、今更言えない……。

そんな訳で後ろめたさもあり、俺達は酷く遠慮しながらその歓待を受けていたのだが……。

「しかし、お見事でした！　まさか、爆裂魔法をお使いになられる程の大魔法使いがおられたとは……！　しかも、負傷者の数々を簡単に治療してしまったアークプリースト様に、あの走り鷹鳶の群れを相手に一歩も引かず、それらを一身に引き受けた勇敢なクルセイダー様……！　そして、見事な判断で敵を洞窟へと導き、一網打尽にしたあなた様のその機転……！　いや、お見事です！」

マジ勘弁してください。

本当にそんなんじゃないんです、俺達の所為なんです。

「いやいや、タマタマですよタマタマ。その……、何度も言いますが、護衛の報酬はほんとに結構ですので……」

「何を言われるんですか、殆どの走り鷹鳶を倒したのはあなた方ではないですか！」

そう。

なんか俺達は、護衛の報酬を払うとか言われてました。

「いやいやいや、本当に！　本当に結構ですから！　冒険者なら、あの場にいたなら戦いに参加するのは当たり前ですよ！　結構です

から！　結構ですから！！」
俺は必死になってその話を断わっていた。
マッチポンプに近いこの状況、これで堂々と報酬を貰えるほどには、流石に俺も面の皮は厚くない。

だが、このリーダーの人はなぜか感動した様に身を震わせ……。
「……なんという方々だ！　私は感銘を受けましたよ、この世知辛い世にまだあなた達の様な本物の冒険者がいたとは！」
そんな事を言いだした。
……ボロが出る前に、もうこの人とはあまり話さない方が良さそうだ。

アクアは、他の焚き火の元へ行き、宴会芸を披露して喝采と共に酒を貰っていた。
洞窟の前に餌として転がっていたダクネスは、俺が洞窟前からロープを引いて引き離した事もあまり効果は無く、洞窟内部から吹き返してきた爆風に飛ばされて、鎧やマントを傷だらけにしていた。
本人自体は軽傷で、それも既にアクアの治療を終え、今は鎧を脱いで、俺の隣で自分の鎧が修理されるのをじっと見守っている。
鎧を修理するのは俺である。
ジッポ作る為に取った鍛冶スキルが、こんな形で役立つとは分からない物だ。
鎧を修理する俺の手元を、ダクネスと共にめぐみんも、同じくじっと見守っていた。

二人共、こんな地味な作業を眺めていて何が面白いのか……。

鎧の表面のへこんだ部分は、鎧の裏に縫い付けられた衝撃吸収用

の素材を一端剥がし、鎧のへこみを裏から叩いて、叩いた部分を紙ヤスリで磨いて跡を消す。
その後は、再び衝撃吸収素材を縫い付けて……。

……。

「お前らが見てると凄くやり難いんですが」
そんな俺の言葉にめぐみんが。
「いや、器用に修理するものだなと思いまして。鍛冶で食べていく事も出来そうですね」
「……ん、何だか、自分の鎧が目の前で綺麗になっていくのを見ているとワクワクするな」
と、めぐみんに続きダクネスまでもが、目をキラキラさせながらそんな事を言ってきた。
伊達に毎日ジッポ作り続けて鍛冶スキルを磨いた訳では無い。

馬車の数は十台を越え、当然商隊の人数はそれに見合った数がいた。
数十人を越えるそれらが、こうして野営し、星空の下焚き火しながら歓談している姿は、まさしくファンタジーな異世界での光景だと言えるだろう。

そんな中、アクアが混ざり込んでいた焚き火が突然どよめいた。
何事かとそちらを見ると、何かとって置きの芸でも披露したのだろう。
アクアがやんやと持て囃され、
「もう一度！　アクア様、今の芸をもう一度お願い致します！」
「金なら払う！　なので、是非もう一回お願いしたい！」
商隊の人達が、口々にそんな事を言っていた。
……もうあいつ、こっちの道で食っていけばいいのに。

この商隊の人達は、遠くの街から商売に来た連中なのだそうな。
それで納得した。
ウチの連中の悪評を知らない事に。
今回の騒ぎも、俺達を良く知っているあの街の住人達ならば、またお前等がやらかしたのかとでも言われそうだ。
商隊の護衛の冒険者達も、見覚えの無い連中ばかりで……。

……？

今なんか、ちょっと見覚えのある、
「カズマ、ちょっと相談があるのですが、良いですか？」
俺がちょっと気を取られていた時に、めぐみんがそう切り出した。
続きを促すと……。

「今日の夜、極力熟睡しないよう気を付けますが……。ぐっすり眠ってしまったなら、それを叩き起こしたりとか……、その、フォローをお願いしたいのです。広い野外ですから壊す物などはありませんが……。私が咄嗟に飛び起きて爆裂魔法を唱えたら、それのフォローもお願いしたいです」
そう申し訳無さそうに言った。
そんな事か。
「分かったよ、それじゃ今晩は隣にいろよ。俺はこのまま焚き火の傍で寝っ転がってるから。めぐみんがウトウトしたら、一発で目が覚める事をしてやるよ」
「すいません、心配で寝られなくなるので、一応何をされるのか教えてもらえますか」
心配で寝られなくなるのは良い事なので、教えない。

商隊の人達が殆ど寝静まった頃。
俺は何かの物音で目が覚めた。
見張りの人間はいるものの、それらの人はその物音に気付いている様子が無い。
ふと隣を見ると、焚き火を前に、こちらに寄り掛かる様にして、マントにくるまっためぐみんがスヤスヤと……。

おい。

「おいこら、お前熟睡しちゃダメなんだろ、ほれ起きろ。でないと大変な事をするぞ」
めぐみんの肩をゆさゆさと。
だが、めぐみんは口の端から涎を垂らし、気持ち良さそうに眠っていた。
「……おいめぐみん起きろ。起きないと、何日か恥ずかしくて俺の顔見れない様な事するぞ。起きなくても俺はちっとも構わんし、困る事は無いが。お前を起こす為って言う大義名分がある以上、遠慮なくいくぞ。起きないって事は、いいのか？　いいんだな？」

「良い訳あるか。何をする気だお前は」

「うわおうっ！」
突然背後から声を掛けられ飛び跳ねる。
し、心臓に悪い！

「おい、ダクネス驚かすな。起きてるなら言えよ、あと少しでお前の目の前で凄い事する所だったぞ」
めぐみんと同じく俺の隣で仮眠を取っていたダクネスが、
「……本当に何をする気だったんだ。いや、そんな事より……」
ダクネスが声を潜め、辺りを警戒している。
昼間のがっかりクルセイダーはどこへ行ったのか、辺りに注意を向ける今の姿は、ちゃんとした冒険者だ。

……おお？
何かピンと来た。
これはそう、敵感知スキルに反応だ。

見張りに就いていたのは昼間の盗賊風の冒険者だったのだろう。
俺と同じく敵感知スキルに引っ掛かったのか、そいつは突然鋭い叫びを上げた。
「おい、何か居るぞ！　全員起きろ！」
その声に次々と冒険者や商隊の人間が飛び起きるが、めぐみんはまだ眠ったままだ。
今が何時なのかは分からないが、いつ跳ね起きて魔法を唱えてもいいはずだが。

いや待て、今起きてもあれか。
魔力最大まで回復していないから跳ね起きたりしない訳で、回復しきっていないと言う事ならば、まだ起こさない方が良い訳か。
間違いなく何かが居る。
となると、戦闘になるならめぐみんの一撃が使えるかどうかは大事な所だ。
魔力が回復しきるまで、このまま寝かせておいてやろう。

千里眼スキルを発動させて周囲の闇を見渡すと、暗闇の中には蠢

く多数の人影が。
……なんだこれ、人間か？
でも、それにしては動きが鈍い。

「おい、結構な数がいる！　姿は人型で動きは鈍い！」

すかさず叫ぶと、それを聞いた連中が焚き火の火を長めの木の棒へと移し、それでバリケード状に並べられた馬車の外側を照らし出した。
灯かりに照らされ蠢くのは……、

死体から、所々腐った肉が崩れ落ちた、見るもおぞましいその姿。
……そう、メジャーアンデッドモンスターのゾンビさんだ。

「「「おわあああああーっ！」」」

暗闇の中、灯かりに照らされたインパクトあるその姿を見た人々は、皆一様に悲鳴を上げた。
もちろん俺も。

ダクネスが鎧は外した状態で立ち上がり、立てかけていた大剣を手に取った。
そのダクネスに、この状況でも図太く眠る大物なめぐみんを預けると、
「こいつを頼む！　俺はアクアを呼んでくる、こんな時ならあいつの独壇場だろうから！」
ここで昼間の借りをこっそりと返させて貰おう。
昼は、ダクネスに釣られた走り鷹鳶により、多くの人が怪我をし、馬車に被害を受けた人もいた。
多分昼間の襲撃は俺達の所為なんでと、今更怖くて謝れないのが

俺の小さい所だが、今こそ昼間の借りを返し、スッキリした気分になりたいのだ。

俺はアクアの姿を探そうと、辺りに視線を巡らせて……！

「わあああああーっ！　何事!?　なんで私、目が覚めたらアンデッドにたかられてんの!?　カズマー、カズマー！」

その声に視線を向ければ、馬車を背に寝ていたらしいアクアが、ゾンビ達にワラワラとたかられていた。

……あれっ。

おい待て、これってもしかして……。

「私の寝込みを襲撃なんて、やってくれるわねアンデッド！　迷える魂達よ、眠りなさい！　『サンクチュアリ』！」

アクアが叫び、広範囲に暖かな白い光が広がった。

それを見た周囲の人が、おおっとどよめく。

アクアの浄化の光に触れたゾンビの群れは次々と浄化され、崩れ落ち……。

それを見た人々は、どよめきを歓声へと変える。

だが、それを見る俺の胸中は、ある一つの感情で埋められていた。

すいません。

「あはははは、この私が居る時に出くわしたのが運の尽きね！　さあ、片っ端から浄化してあげるわ！」

堂々と胸を張り、焚き火に照らされて立つその姿は、まさしく迷える者を天へと還す女神と言えた。

そして、それを見ながら、俺はぼそりと小さく呟く。

「……す、すいません……」

次々とゾンビを浄化していくアクアに対し、既にお気楽な勝利ムードと化していた人々は、皆口々にアクアを褒め称える。
「なんて美しいプリースト様……！　まるで女神の様じゃないか！」
「ああ、次々とゾンビ達を浄化され……！　昼間我々を守る為に立ち塞がったクルセイダー様の連れの人だよ、あの方は……！」

すいません。
すいません。
ウチの仲間が、次から次へとすいません。

「ゾンビの襲撃を受けるなんて珍しい事もあるもんだが、丁度あのプリースト様が居合わせてくれて良かったな！」

すいません、ウチの女神がこの場に居なかったなら、多分このゾンビ達はワザワザ寄ってきませんでした。

「まあ、ざっとこんなもんよ。どう、カズマ。この私の女神っぷりは。ここの所活躍しっぱなしじゃないかしら。そろそろ私にお供え物の一つも捧げても、罰は当たらないわよ」
アンデッドを呼び寄せる体質なのだから仕方が無いが、ドヤ顔で俺の元へと寄って来たこいつを引っぱたいてやりたい。

あらかたゾンビの浄化が終わった頃。
先ほどの、商隊のリーダーの人が、アクアと話している俺の元へと寄ってきた。
「いや、また助けられてしまいました！　今度こそは礼金を受け取って貰いますから！」
すいません、絶対に頂けません。

ゾンビの姿が見えなくなった頃、やがて再び、人々は寝静まった。

……そんな中、焚き火にあたりながら、俺はすっかり忘れてしまっていた事を思い出す。

隣では、すでにアクアとダクネスが眠り。

そして起こしてくれと言っていためぐみんも、その二人に挟まれる様にして眠っていた。

先ほどめぐみんを起こそうとしていた俺を見て、ダクネスがこの体勢で寝るのが良いと言い出したのだ。

何だか酷い誤解を受けている様だが仕方ない。

と言うかダクネスとアクアが寝ているなら、今がチャンスだ。

いや、チャンスじゃない。

これは頼まれてやる事であり、なんらやましい行為ではない。

大丈夫だ。

大義名分がある。

訴えられても勝てる。

いや何を言っているんだ、めぐみんを起こすだけだ、訴えられる訳が無い。

俺はめぐみんを起こそうと、そっと手を伸ばすと……！

めぐみんが、カッと眼を見開き跳ね起きた。

そして、早口で、よどみなく魔法の詠唱を……！

「ちょっ、待っ！　待て、俺はまだ何も！　まだ何もしてはいない！　冤罪だ！　せめて、訴えるならちゃんとしてからにして貰いた……！」

俺が後ずさりながらめぐみんに言い訳をする中。

赤く輝くめぐみんのその目が、俺なんて見ていない事に気が付いた。
見ているのは、壁の様に並べられた馬車の外。
その、遠く広がる平原の彼方を見つめており……！
ああそうか、魔力がボンッてなりかけてるのか。
「『エクスプロージョン』ッッッ！」
夜空に閃光が走り抜け、広い平原の真ん中へとその魔法が突き刺さる。
轟音で飛び起き何事だと大騒ぎする人々が、魔法を放ったのがめぐみんだと分かり、途端に落ち着きを取り戻した。
誰かが言った。
「あそこのパーティの魔法使いさんか。きっと、凶悪なモンスターでもいて退治してくれたんだろう。いや、ありがとうございます！」
「ああ、そういう事か。あのクルセイダーさんとプリーストさんのパーティだもんな」
「でなきゃこんな夜中に、いきなりあんな魔法撃つはずないしな」
いよいよ良心の呵責に耐え切れず、俺は土下座の体勢で謝った。
「すいません、すいません！　本当に、今日はウチの仲間達がすいませんっ！」

8話

「それじゃあ、どうかお気をつけて！　いや、本当に助かりました、ありがとうございました！」

商隊のリーダーが何度も手を振り、去って行った。

温泉の街ドリス。

俺達は馬車で揺られた末に、この街へとやって来ていた。

商隊のリーダーの人に、多分俺達を狙ってモンスターが来たんだと思いますと説明しても、またまたご冗談をと一切本気に取ってもらえなかった。

それよりも、俺達が報酬を頑として受け取らない為の理由をでっち上げたと勝手に思い込んでいた。

金を受け取れないならこれを、と、貰ったのは一通の手紙。

この辺り一帯の街には顔が利くので、何か困った事があったならこれを見せてくださいと押し付けられた。

このメンツだと間違いなく困った事になるだろうが、とても使えない。

絶対に使えない。

「ああ……じゃりっぱ……じゃりっぱが、行ってしまいました……」

めぐみんが馬車を見送りぽつりと呟く。

俺達の他にも多くの客や冒険者がこの街で降りたのだが、それらの人が街へと消えても、めぐみんは遠ざかる馬車を、姿が見えなくなるまで見守っている。

「なんだよじゃりっぱって。何の事だ？」

めぐみんの言葉に、アクアがハッとした様に。
「あのドラゴンの子供の事？　そういえば、お金持ってそうな客の一人に、色々と助けてくれた大魔道士様に良い名前を付けて欲しいって、頼まれてたわね」
紅魔族に名付けを頼んでしまったのか。
「……ドラゴンは一度名前を付けると、二度と他の名で呼んでも反応しなくなると聞いたんだが……」
ダクネスがぽつりと、そんな重大な事を言った。
めぐみんが、ええ、と感慨深そうに頷きながら。
「あの子はじゃりっぱの名をとても喜んでくれていましたよ。飼い主さんには、檻の中に名前を書いた紙を添えて置きました。飼い主さんに可愛がって貰えるといいですね」
……気の毒に。
この温泉の街ドリスは観光地として有名で、到る所から観光客が来るためにテレポートサービスが充実しているらしい。
なので、ここから紅魔族の里に一番近い街へと転送して貰う訳だ。
……が。
「来たわ、温泉の街ドリス！　ねえカズマ、入浴料ちょうだい。三軒は回りたいから、三軒分ね。あと、お風呂入った後に冷たいの飲みたいからそれの分も！」
「……お前、観光に来た訳じゃないからな。めぐみんの深夜の発作もあるんだし、この街には泊まれないぞ。とっとと次の街にテレポートして、そこの街の外で野宿だ野宿」
当たり前の様に手を出して入浴料を要求してきたアクアにきっぱり告げた。

だが、当のめぐみんが。
「いえ、宿泊が野宿と言うのなら、尚更温泉ぐらい入って疲れを癒しておきましょう。睡眠があまり取れないので、その分体の疲労だけでも取って置きたいですし」
……むう。
そんな事を言われてしまうと、温泉好きな民族としてはどうしても心動いてしまう訳で。
「温泉か……。話には聞いていたが、私も是非一度入ってみたいな……」
お嬢様も温泉が珍しいのか、そんな事を言い出した。
……しょうがない、ひと風呂浴びていくか！

「おお？　随分と綺麗な冒険者だ。ねえ、そこの金髪の美人のお姉さん、そんな冴えない男放っておいて、俺達と温泉でも巡らない？」
「本当だ、すげえ美人だ！　俺、あの超美人の青髪の姉ちゃんが好みだ！」
「俺は黒髪の赤眼の美少女だな……」

それは街に入ってすぐの事。
一言で言えばチャラそうな、軽い雰囲気の三人の若い男達。
見た感じ、俺よりも年下だろうか。
めぐみんと同じくらいの年齢かもしれない。
浴衣とバスローブを足したみたいな温泉地用の簡素な服を着て、足元はサンダル履きのその三人はニヤニヤ笑い、俺達を見ていた。

全員が金髪で、体格はひょろそうで、何だか観光に来た金持ちのボンボンといった印象を受ける。
季節は春。
この世界の学校システムがどうなっているのかは分からないが、卒業旅行な感じなのだろうか。
その三人の男達に声を掛けられた俺の仲間達は……。

「「「？」」」
三人ともキョロキョロと周囲を見回し、その男達が言った特長に該当しそうな子を探している。
……やがて、それが自分達しかいない事に気が付いた様だ。
「「「！？」」」
俺の三人の連れは途端に挙動不審になりオロオロしだした。
ダクネスが慌てて後ろを向いて髪を手櫛ですいて、めぐみんは旅の間に付いたローブの埃を手で叩いて払っている。

アクアが言った。
「ねえあんた達、今、私達の事を美人って言った？　綺麗って言った？　ちょっと、もう一度言ってみなさいよ！」
……。
街にはもう、こいつらを口説こうなんて奇特な奴いないもんな……。

たまには、外見ぐらいは褒めてやろうかな……。

一端の美女扱いされて戸惑っている三人を見て俺がホロリとしていると、
「えっ。……いや、綺麗なお姉さんだな、と……。一緒に温泉巡りませんか、と……」
アクアの反応に戸惑ったのか、三人の男の一人が言ってくる。

それを聞き、アクア達は頭を突き合わせて円陣を組みだした。
そして、何かをぼしょぼしょと話し込んでいる。

やがて三人を代表するかの様に、めぐみんがズイと前に出た。
「つまりあなた方三人は、超絶美少女な私やこの二人の美女とデートする為ならば、財も命も惜しまない覚悟があると。だから、一緒にデートしてくれないかと。そう言いたいんですね？」
「「「そこまでは言ってないです」」」
即座に否定する三人の男達。

……！

俺は気が付いた。
気が付いてしまった。
ここはせっかくの温泉の街。
そして、俺にとって初めての異世界での観光地であり、テンションだって上がっている。
そんな中、この三人の問題児と一緒に行動していたら？
考えろ、考えるんだ佐藤和真、この連中がなにかやらかさない訳が無い。
そしてそのとばっちりは必ず俺に降りかかる。

だが、問題が起きた際にそこに俺はおらず。代わりにこの三人の男達が居たら？

……。

「なあ……。ひょっとして変なの捕まえちまったか？」
「おい……、これってヤバクないか？　せっかくの観光地だからっ

て、ちょっと羽目外し過ぎたかな？」
「い、いやでも、ちょっとぐらい中身が変でも、あれだけの美人だぜ？」
三人の男がそんな事をぼそぼそと相談している中、完全に空気になっている俺にアクア達が近付いて来た。
三人が誇らしげなドヤ顔なのがちょっとイラッとする。

「ねえカズマ、どうしようかしら？　困ったわー、美人ですって。私達とデートしたいんですって。あの三人に冴えない男呼ばわりされてたカズマは、普段一緒にいる所為で慣れちゃったのかもしれないけれど。まあ、私達みたいな美女達とパーティ組めてる有難みってヤツを、ちゃんと理解した方が良いと思うわよ？　でないと、大事な私達がホイホイとあの男達に付いて行っちゃうかも知れないからね？」
「どうぞどうぞ」
「「「「「えっ」」」」」

俺のどうぞの言葉に、アクア達だけでなく男達までもが時が止まる。

「……あのう、カズマ？　今、なんて……」

不安そうなアクアの声。
俺の仲間が、流石にこんな普通の兄ちゃんみたいなのに遅れを取るとも思えないし、それに、こいつらが誰とデートしようが俺がどうこう言う立場じゃない。
と言うか既に、今日一日こいつらにこの三人を押し付ける気満々な俺は、ソワソワしながら。
「どうぞどうぞと言ったんだよ。と言うか、俺もお前らのお母さんじゃないんだから、お守りばかりじゃなくてこの観光地で羽伸ばし

たい。たまにはこんな事考えたって罰は当たらないと思うんだ」
「「「あれっ」」」
俺の言葉があまりにも意外だったのか、変な声を出すアクア達。
「……おい、今あの男、お守りって言ったぞ。ど、どうする？　益々嫌な予感が……」
「やめよう、せっかくの観光なのに、変な事になるんじゃ……」
「そ、そうだな、触らぬ神に……って言うし、諦めるか……。美人なのに、勿体無いな……。あ、あの！　俺達は、用事を思い出したんで、……」
逃げようとする三人を、俺はガッと捕まえた。
「俺の連れとデートしたいんだって？」
その言葉に顔をひく付かせ、男の一人は俺が掴んでいる手を振りほどこうと……。
……して、出来なかった。
「あれっ、あっ……、い、いててて……！　ちょ、スイマセン、嘘です、あんたの連れに粉掛けて悪かったよ！　さ、冴えない男だなんて言って悪かったよ！　俺達はもう行くから！」
俺だって既にそこそこのレベルはある冒険者。
ステータスも上がっているのだ、流石に一般人に力負けする事は無い。
「いやいや、いいんだよ、いいんだって。俺の連れの三人は綺麗だもんな。うんうん、分かるよ、分かる」
「は、はあ……」
俺を胡散臭い怪しい男でも見るような目で見つめ、不安そうな顔を隠そうともしない男達。

それに俺は声を潜ませ、
「あの金髪の鎧の姉ちゃんいるだろ。あの姉ちゃんは、鎧を脱いだらそれはもう凄いぞ。特に、腰周りなんてそれはもう！」
俺の言葉に、三人の男はゴクリと唾を飲み込んだ。
そんな三人に、俺は更に言葉を続ける。
「あそこの青髪の姉ちゃんな、酒が好きでさ。酒でも奢るって言えば大喜びだ」
それに、三人が顔を見合わせた。

「あの黒髪の姉ちゃんは……。あれだな、可愛い物が好きだな。可愛い生き物だとかがいる所へ連れてってやると喜ぶかもな」
その言葉に三人は頷き合う。
「「「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」」」

にやけながら態度を軟化させた三人から離れ、俺はアクア達にじゃあ、と手を上げる。
「それじゃお前等、また後でな。今日は思いっきり羽伸ばして良いからな。その分、明日からは俺に迷惑掛けない様にしてくれよ。今日は好きにしていいから」
「「「えっ」」」
俺の言葉を聞いた三人の男の不安そうな声。

アクアがその三人を見ながら言った。
「いいの？　私、お金持ってないからたかるわよ？　この水の女神のアクアさんは安いお酒は受け付けないからね？」
その言葉に、三人の一人が自分の胸をドンと叩いた。
「ま、任せとけ！　俺達三人、金はあるんだ。親が上流階級だしな。何があっても、この街での全ての費用は俺が持ってやるよ！」
言っちゃった。

その言葉をしっかり聞いた俺は、
「それじゃあ、お前等、楽しんで来いよ。俺も羽伸ばして来るから。あんたら三人、しっかり頼むぞ。俺の連れを置いて、色んな責任から逃げたりするなよ？」
そう告げると、背を向けて……。

「お、お前と言う奴はどこまで予想外なんだ……。強がりではなく本気で言っていそうな辺りが、なんと言うか堪らんな、ゾクゾクする……。駆け引きだろう？　唯の駆け引きだな？　……おいお前達、一応言っておくが私達に変な事は考えない方が良いぞ。さもなくば、駆け出しの街アクセルで、鬼畜と有名なあの男に後で何をされるか分からんからな」
「「「えっ」」」

俺の背後で失礼な事を言っているダクネス。
街では俺に対してそんな失礼な話は流れていない。
……いないはずだ。

「ですね。アッサリとこうして、か弱い美少女達を残して置いて行くあの態度。どんな人間かぐらいは想像がつくでしょう？　丁重なもてなしをしてくれないと、後であの男が牙を剥きますよ。ああ見えて警備の厳しい貴族の屋敷にもアッサリ侵入する能力を持ち、遠くからでも標的を狙撃出来る力もあります。敵に回すと四六時中狙われますよ」
「「「！」」」

おい、止めろ。
「ねえ、二人共あんまり酷い事は言わないであげて！　カズマはそれほど鬼畜じゃないわよ。昨日だって、縛られたダクネスを馬で引き回した挙句にモンスターの囮にして、モンスターもろともダクネ

スを吹き飛ばしたぐらいで！」
おい、アクア、頑張れ。もっと頑張れ！　フォローになっていないから、もっと頑張れ！

「「「……」」」

静まり返る三人を、俺は恐る恐る振り向くと……。
「……あの、やっぱり俺達遠慮しておきます、関わりたくな……、あああああっ！？　逃げたっ！？」
何か言い掛けた一人の男。

「「「行った！　あの男、本当に置いて行った！」」」

更に、何かを叫ぶアクア達を置いて俺は温泉の街ドリスへと突撃した！

観光地と呼ばれるだけあり、この街は商売人の客引きが凄まじい。
と言うか、まるで戦争でもしているかの如くだ。
俺がある店を覗いていると、突如声が掛けられた。

「お客様、そんな下品な店で物を買うとお客様の品位が疑われますよ？　当店の商品は、高貴なお客様に相応しく高級な物ばかりです。エルフ印の、体に良いと評判のドリス饅頭です。どうか、こちらを見て行ってくださいませ」

そう声を掛けてきたのは……。
耳の長い、緑色の髪の、肌の白い美形の男性。
そう、エルフである。

「おうコラ、お高くとまりやがってこの野郎！　物ってのはな、高けりゃ良いってもんじゃねえんだ！　お客さん、ワシん所のドワーフ印のドリス温泉マグカップ、百年使っても壊れやしないよ、どうだいっ！？」
そのエルフを怒鳴りつけたのは、俺が覗いていた店の主。
俺の胸ぐらいの高さの身長しかないその店主は、横に太い体型をし、そしてモッサリとヒゲを生やしていた。
何と言う典型的なドワーフ。

エルフもドワーフも、見事に俺の思い描いていた姿である。
こんな所で商売をしている事を除けば、この世界に来て初めて会ったファンタジーっぽい存在かもしれない。
高貴で上品な美形のエルフ。
口が悪くて頑固者な、立派なヒゲをたくわえたドワーフ。
その二人の客引きの店主を見て、俺は軽い感動を覚えていた。
エルフもドワーフも、遠くから見た事ぐらいはあったが、こうして会って会話するのは初めてだ。

俺は目を輝かせて無言で交互に二人を見ていたのだが、単に異世界への憧れめいたもので二人を見ていた俺の視線は、どうやら違う受け取り方をされたようだ。
「御覧なさい、お客様が困っておいでではないですか。当店の商品が見たいのに、あなたがそんなに威圧感を出しているから困っているのですよ。お下がりなさい、下品なドワーフよ」
「何言いやがる！　お客さんはウチの商品が見たいのに、いきなりテメエに絡まれて困ってるんだろうが！　お客さんにはウチで買っ

てもらうんだよ！　引っ込んでろ青白エルフが！」

途端に喧嘩を始めた二人を見て、俺は慌てた。

そういやエルフとドワーフは仲が悪いだとか、そんな話を聞いた事がある。

「ちょ、二人共喧嘩は止めてくれ！　あれだよ、買うから！　二人の所で、それぞれちゃんと商品買うから！」

俺の言葉にその二人は即座に喧嘩を止め、同時に笑顔を見せた。

「「まいどありー！」」

なんて事だ、余計な物買ってしまった……。

マグカップはまあいいが、饅頭なんてどうすんだ。

日持ちするみたいだし、旅の間の保存食代わりにでも……。

俺は物を買わされた店を後にし、そんな事を考えながら歩き……。

……おっと、せっかく物買ったんだし、どうせならオススメの温泉聞いとけば良かったな。

そう考えた俺は、再び先ほどの店へと引き返した。

だが、先ほどの隣同士の店の店主はそのどちらもが姿が見えない。

休憩にでも行ったのだろうか？

俺は店の奥をヒョイと覗くと、奥で何やら話し声が聞こえる。

ああ、間違いない、先ほどのエルフの声だ。

……いや待て、さっきのドワーフの声もする。

おい、まさか……っ！？

「おいあんた達、もう喧嘩は……っ！」

店の奥で先ほどの喧嘩の続きをしていると思った俺は、そこに飛び込み……。

「あっ、お客さん。ここは休憩室になりますから入ってこられちゃ困るっスよ」
先ほどの口調はどこへやら、軽い口調でエルフが言った。
……いや、エルフ。……エルフ？
俺の視線に気付いたのか、エルフ？　の店員が自分の耳を引っ張った。
「ああ、これっスか？　あ、先に断わっておきますが本物のエルフですからね？　偽者なんかじゃないですよ」
何と言うか、そう。
耳が丸い。
普通に俺達人間とほとんど変わらない耳をしていた。
そして、胡坐をかいてドワーフと共に部屋に座り込み、膝の上に付け耳が置かれている。
……ちなみドワーフの方は、モッサリとしたヒゲを外し、その顎を撫でていた。
「……えっと、何事なんでしょう、これは」
呆然とする俺の言葉に、エルフ？　とドワーフ？　が顔を見合わせ、
「いやあ、森で暮らすエルフは人と混じり合わないから耳が長いんスがね。ほら、私らみたいに、こうして人に混じって暮らしていると、どうしてもね？　血が混ざっちゃうっしょ？　すると、やっぱり耳の方も丸くなってきちゃうんスよね。で、お客さんに、自分はエルフだって明かすとビックリされちゃうんスよ。で、ガッカリもされちゃうんです、イメージじゃないって。それならって事で、エルフっぽいイメージを保ってるんスよー」
エルフがそんな事を言ってきた。
……なんてこった。

いや俺だって、今確かにガッカリはしているけれど。

それを見ていたドワーフが口を開いた。

「私の場合は、衛生面での事もあるもんで。みやげ物屋は夕方までなんです。で、夜や朝なんかは宿泊しているお客さんの食事作ったりと色々ありましてね？　ヒゲだらけで食事作って、食べ物にヒゲが入ってたぞなんて苦情が来たら困るじゃないですか。……あ、ひょっとして喧嘩の続きでもしてると思いました？　すいません、あの喧嘩はね、毎回やるパフォーマンスなんですよ。ほら、エルフとドワーフって仲が悪いとか変な噂が流れてるじゃないですか。それに乗っかっとこうかと」

あれか、アフリカの観光地の人達が客が来た時だけ槍とか持って、客が帰ったら携帯いじってる、アレと似たようなもんか。

この世界に、ファンタジー的な物を求めていた俺がバカだったよ。

ガックリ来ている俺に、二人は途端に申し訳無さそうな顔になる。

「あー……。申し訳ねえっス、夢を壊しちゃいました？」

「お客さん、思い込みは良くないですよ？　この世には不器用なドワーフだっているし、弓の扱いが下手なエルフだっていますからね」

「おいおい、そりゃ俺の事だろ？」

言って、二人が笑い出す。

……こんなロクでもない世界は大嫌いだ。

夢を一つ壊されたがしょうがない、そんな事よりも。

「まあいいや。今更返品とか言わないからさ。どこか、この街でオススメの温泉とかあるか？　それを聞きに戻って来たんだよ」

俺の言葉に二人が顔を見合わせる。

「何スか？　お客さん、宿の予約もしないでいきなりこの街に来た

んですか？　今から部屋取るの大変っスよ？」
エルフが心配そうに言ってくれる。
あんな商売してるくせに根はそんなに悪い人ではないのか。
「いや、街に泊まる気は無いんだ。訳あって、紅魔族の里に着くまで野宿しか出来ないもんで」

俺の言葉に、二人は、えっ、と声を上げた。
「……お客さん、紅魔族の里へ行くって本気っスか？　何があるのかは知りませんが、今は止めておいた方が良いですよ？」
エルフの言葉にドワーフも頷いた。
「あそこは元々魔境とか呼ばれて危険な場所ですがね。それが、今は何でも……。魔王の幹部の一人が、軍を引き連れて里を襲撃してる真っ最中らしいですよ。まあ、紅魔の連中がそうそうやられるとは思わないんで。しばらくしてほとぼりが冷めてから行った方が良いかと」

……こんなんばっかり。

「しっかし、参ったなー……」

俺は温泉に肩まで浸かり、思わず独り言を呟いた。
魔王の幹部とかアホか。
またベルディアとかバニルみたいなのと出くわすとか、もうホン

トに勘弁して欲しい。

……と、

「お客様、申し訳ありません……。当旅館は団体客専用なので、一名様用の個室のお部屋とかは無いんですよ……。二名様以上のお部屋はあるのですが……」

「あっ……。そっ、そうですか、すいません！　他を当たります、ごめんなさい！」

この温泉旅館の玄関から近い場所に風呂がある為か、玄関口の会話が聞こえてくる。

一人旅か何かの女の子が、部屋を借りようとして断わられたようだ。

……俺はお湯をすくって顔にかけた。

まあ、紅魔の里は大量の魔法ジャンキーしかいないらしいから、敵が来ても超火力であっさり仕留められる事だろう。

となると、ちょっと旅の日程を遅らせた方が良いのだろうか。

……でも、めぐみんがなあ。

今はまだ体力があるみたいだが、ちゃんと睡眠を取れないのはキツイだろう。

……と、その時。

「誰か来てェーっ！！　原泉が！　原泉があーっ！」

どこかで悲鳴が上がり、そして聞こえる、従業員か誰かがバタバタと駆け回る音。

それを聞きながら、俺は何も聞かなかった様に湯をすくって顔を洗う。

めぐみん本人は強がっているが、きっと大分参っているはずだ。
寝なくても良くなる魔法の道具、なんて、そんな都合の良い物も無かったんだよなぁ……。

………ふう。
温泉なんて入れるとは思わなかったなぁ……。
ゆっくり湯に浸かっている内に、心の中のササクレなどもすっかり抜け落ちていく。

……と。
突然凄まじい爆発音が聞こえ、温泉の建物がビリビリと振動した。
もちろん、全てから解放された今日の俺には関係のない事だ。
それを聞きながら、俺はのんびりと手足を伸ばす。
あー……。
堪らんな。
いっそこの街に住みたくなってくる。
だが、何時までものんびりはしていられない。
里が襲われている事を一応めぐみんに告げ、旅程を遅らせるかどうかはめぐみんの体調を見て考えよう。

……よし、行くか！
俺はたっぷりと鋭気を養い、勢い良く風呂から上がった。

「あ、帰ってきましたか。どうでしたか？　温泉は」

時刻は夕方。

場所は、昼間皆と別れた街の入り口だ。

俺がそこに着くと、既に俺の仲間達は揃っていた。

何故かアクアが泣きじゃくり、ダクネスは満足そうな顔でホコホコと湯気を上げている。

めぐみんも、どこかスッキリとした顔をしていた。

そして、それをエスコートしていた筈の男達は……。

まず、一人足りない。

そしてそこにいるのも、一人は白目を剥いてぐったりと気を失って倒れており、もう一人は、何かトラウマでも植え付けられたかの様に、膝を抱えて震えながら何事かをブツブツと呟いていた。

……今良い気分だから、あまり何があったのかは聞きたくないなぁ……。

俺のその気持を、顔を見ただけで察しためぐみん。

「カズマ、嫌でしょうけど一応聞いて貰えます？」

「……聞こうじゃないか」

しょうがない……。

俺は何となく、白目を剥いた男に視線をやった。

「……ええと。まず、私達は全員で温泉に行ったんです。で、男女別でお湯に入っていた訳なんですが……。ダクネスが、サウナに入ると言い出しましてね」

ほう。

「……ん。タオルを巻いた上に熱した砂を乗せ、蒸し風呂の様にするサウナなのだが……。そいつがサウナにホイホイ着いて来てな。

よーし、俺ダクネスちゃんより長く残って根性あるカッコイイ所見せちゃうぞーとか言い出したのでな、私もついつい本気になり……」

……なるほど、意地張った男の方がこうなったと。

俺は膝を抱えた男に視線を送る。

すると、めぐみんが気まずそうにフイッと視線を横に向けた。

「……その、ですね。その人が、取って置きの場所に案内するよとか言い出しまして。連れて行かれたのが、ちょっと街から離れた川だったんですよ。……で、その男の人が、どうだい見てごらん、可愛いだろうとか言って、高経験値を得られる事で知られる、ネギガモと言う大変おいしいモンスターの群れを見せびらかしてきたんです。可愛いんです。可愛いんですよ？　でも、そんなのが居たら、爆裂魔法で一掃するじゃないですか。……おかげで、先日の走り鷹鳶と合わせて、レベルが凄く上がりましたよ」

……自分だけが知っている、内緒にしておいた可愛らしいモンスターの生息地へ連れて行き、こっそり群れを見せてあげたら、目の前で爆殺されたのか。

俺は尚もカタカタ震えている男から視線を外し、泣いているアクアを見る。

……なんか、一番ロクでもなさそうな。

「アクアが長いこと温泉に浸かっていたら、なぜか、原泉から唯のきれいなお湯しか出なくなったと言い掛かりを付けられまして。金は全て持つと言っていたあの男の人が、この街の責任者に連れて行かれました」

「わ、私、もう温泉に入るなって……っ！　何も悪い事してないのに……！　お風呂上りのお酒、楽しみにしてたのに……っ！」

アクアが原泉を浄化してお湯に変えたのか。

「……あ……。あのう……」

突然の声に振り返ると、それは最初に声を掛けてきた男。

アクアの尻拭いのため、責任者に連れて行かれた男だった。

ようやく開放された、精魂尽き果て疲れ果てた感のその男は、泣き腫らした様な目をして言ってきた。

「……原泉の一つをダメにしたって事で、弁償金が凄い事になってるんです……。その、俺達が悪かったんで、幾らか金を……ああっ!?　ちょっ！　待っ！　待ってくれ！　待ってくれー！」

俺達は男に皆まで言わせず、野宿する為に街の外へと走って行った。

9話

深夜に轟く爆裂魔法の爆発音。
もう俺達にとってはすっかり慣れてきた現象だ。
現にアクアなどは、もう爆裂魔法の音がしても、それは危険なものではないと安心しているかの様に、それを聞いても起きもしない。
これはこれで、野宿している冒険者としてどうかと思うが。
「いっぱい出してスッキリしたか？　それじゃ、もう一回寝ろよ」
「……なんだか、深夜に女の子に言うセリフじゃないんですが」
俺の言葉にめぐみんが、なぜか不満そうだ。

そのめぐみんの頭をポンポンと撫でながら、爆音で目を覚ましたダクネスが、起こされた事は気にしていないとでも言うかの様に、自分のマントでめぐみんを包んでやる。
……あれ、なんかそういうのって俺の役目じゃないのか。
俺に頭をポンポンされて、めぐみんがちょっと嬉しそうに頬を染める所じゃないのか。
なぜめぐみんが、ちょっと照れ臭そうにしながらダクネスと笑い合っているのか。
ダクネスのそこ、俺の位置じゃあ……。

……しょうがないので、俺は見張りをしながら焚き火に薪をくべた。
見張りは敵感知スキルを持っている俺の仕事だ。
と言うか、長いニート生活で培った、有用な特性も持っている。
明け方まで眠くはならず、明るい昼間でも夕方暗くなるまでぐっすり寝れる、日本のニートならば大概の奴が習得済みの優秀な特性だ。

温泉の街ドリスの、街の入り口から少し離れた、小さな川の近く。
俺達はそこに野宿していた。

春とはいえやはり夜は冷える。
この辺りには森も無いので、街で薪を買っておき、今はそれを火にくべて暖を取っている。
最初、わざわざ街から出て野宿しようとする俺達を見て、街の守衛の人が随分といぶかしんでいたものだったが。
なんせこちらからも街の入り口が見える様な距離だ、そんな所で焚き火を焚いてマントに包まって寝る俺達は、随分と変に写っただろう。

「……でも、本当にいいのかめぐみん。すぐに紅魔の里に帰らなくても」
俺の言葉に、軽くウトウトしかけていためぐみんが、
「魔王の連中が攻めてきてるってヤツですか？　今に始まった事じゃありませんしね。私が子供の頃からしょっちゅうでしたよ。その度に大人達が飛び出して行って、里の周りに数百発の上級魔法が乱れ飛んだものです」
なにそれ紅魔の里超怖い。

先ほど焚き火を囲みながら、めぐみんに紅魔族の里が襲撃を受けている事を話したのだが、ふーんの一言で済まされた。
その後、紅魔の里の近くをうろついて、交戦中の紅魔族の邪魔にでもなるといけないので、戦闘が終わるまで、街の観光でもしながらゆっくり行きましょうか、と言われた。
俺としてはそれでも構わないのだが。
問題はめぐみんの体力の問題だ。
今も、既にうつらうつらと船を漕ぎ始めている。

……参ったな、もう少しぐっすり眠らせてやりたいものだが。

……と、そう考えていた時。

「貴様ら、そこを動くなーっ！」

俺達は、街の方からやってきた人達に、遠巻きに武器を突き付けられていた。

朝になり、窓から陽が射してくる。

薄暗かった部屋の中を、柔らかな春の日差しが照らし始めた。

そんな気持ち良さそうな夜明けの中、俺達の気分はどん底だ。

「ちょっとー出しなさいよ！　罪状を！　罪状を言いなさいよ！　不当逮捕よ！」

アクアが叫び、朝から格子をガンガンと叩いていた。

そう、俺達がいるのは牢の中。

まさか、拘留なんて珍しい事が体験できるだなんて、この世界はなんて素晴らしいんだろう。

今は全員が武装を解除され、俺達は、警察の人の詰め所の牢に閉じ込められていた。

詰め所は建物自体は石造りだが、中は意外と暖かい。

牢は完全な石造りで、鉄格子がはめられた牢の中は、暴れる囚人

を押さえておく為の鎖、そして粗末なトイレがあるだけだ。
ダクネスがなぜか牢の中で頬を染め、微動だにせず正座しながら、じっとその鎖を見つめているのが凄く気になる。

アクアの言葉に、牢の前で書類を書いていた看守がその表情を引きつらせた。
「ざ、罪状だと……？　まさか抜け抜けとそんな事を言うとは思わなかったが……。お前ら、街の周りで深夜にあんな轟音を立てる大魔法を使っておいて、誰にも怒られないとでも思っているのか」

めぐみんが牢の格子を両手で握り、
「アクセルの街では、私が毎日街の前で魔法を放っていたら、一週間ぐらい経ってから、街の周囲の地形が変わるからもっと離れた所でやってねとの、警告だけで済みましたよ。この街ではまだ一回目じゃないですか。随分とこの街の人は狭量ですね」
「バカっ！　そりゃどちらかと言うと、アクセルの街の連中がおかしいんだ！　街の住人が、戦争でも始まったのかと飛び起きたんだぞ！」
看守がそんな正論を放つ。

「もう少し時間が経ったなら、検察の方が来る。言い訳はその方にしろ。まあ、深夜に魔法を使って住民を叩き起こしたって程度だから、そこまで酷い罪状にはならない。罰金刑ぐらいで済むとは思うが、それまで騒がずに大人しくしていろ」
看守の言葉に、俺達はそれ以上は何も言わず、大人しく牢の中で待っていた。

夜が明けて、建物の外に起き出した人のざわめきが聞こえ始める頃、その女性が現れた。
キッチリとした身なりをした、いかにも切れ者ですと言わんばかりの整った顔立ちをした、赤毛でポニーテールの、目つきの鋭い女性だった。
黒いコートを部屋に掛け、紅茶か何かを入れている。
その女性は牢の中の俺達を一瞥し、看守に無言で視線を送った。
こいつらは？　と言う事なのだろう。

「深夜に街の外で、意味も無く爆裂魔法を使用し、街の住人の安眠を妨害した為確保して参りました。この連中については、色々と調べておきました。報告書はそちらに」

看守の人がスラスラ答え、書類が置かれたテーブルを指差した。
牢の外は絨毯が敷かれ、テーブルと共にイスやソファーも置かれている。
ここが警察の犯罪者収容施設と言われてもピンと来ない。

俺の視線に気付いたのか、検察官が紅茶を口に含みながら、
「ここは観光の街ドリス。元々凶悪な犯罪者が来る様な街ではありません。ここは、どちらかと言うと酔った観光客が外で寝て、凍死しない為の保護施設みたいなものなのですよ。……さて、では一人ずつ奥で話を聞きましょうか」
そう言って、冷たい目を光らせた。

それは意図的なのか、取調べは俺達がいる牢の目の前で堂々と行なわれた。
狭い別室などに連れて行かれるでもなく、絨毯の上のテーブル席

で聴取を行なう様だ。

聴取される人間の後ろに看守が立ち、変な動きをした際にはすぐに取り押さえられる様に佇んでいる。

一応今から一人ずつ話を聞くみたいなのだが、取調べにおいて一人ずつ事情を聞くのは、何を聞かれたかの情報を共有させず、仲間同士で口裏を合わせたりしない為だと思っていたのだが。

そんな俺の疑問は、検察官の一言で解消された。

「では、色々とお聞きしましょうか。……ちなみに。この建物内では誰かが嘘をつくと、コレが鳴り、教えてくれます。高名なプリーストが掛けてくれた魔法で、嘘をつく際の邪な気を感知するものです。……なので、口裏を合わせようとしたりしても無駄なのであしからず」

検察官は、言いながらテーブル上に小さなベルの様な物を置く。

そして指を組み合わせ、目の前の人物に向けて鋭い眼を向けた。

「……うむ、仮にもこの身はクルセイダー。我が信仰するエリス神の名において、この場において嘘などつかないと宣誓しよう」

……そう、なんだか頬を火照らせて、期待に目をキラキラと輝かせたダクネスに。

検察官はそれに、よろしい、とだけ呟き。

書類に目を向けたまま、改めて口を開いた。

「職業はクルセイダー。信仰はエリス教……と。では、まずはお名前を……」

「黙秘する」

ダクネスが、きっぱり告げた。
「……は？」
検察官が思わず顔を上げ、訝しげにダクネスを見ると。
「黙秘すると言ったのだ。この私の名を知りたくば、拷問でも審問でもするが良い！　だが、誇りあるダスティネス家の名に懸けて、簡単には口を割ったりはしない！」
「ダスティネスさんですね。……ええと、拷問だの尋問だのといった事はしませんよ。そんな前時代的な事しなくても、魔法で幾らでも真偽が調べられる世の中です。安心してください。……ダスティネス家。……あのダスティネス家？　……まさかね……。しかし、ベルが鳴らないが……？」
検察官が訝しげにベルを見て、何かをブツブツと呟いている。
……これ、俺が一人で事情を説明した方が良いんじゃないだろうか。
これから予想される展開に、俺が検察官を気の毒に思っていると……、
「ではダスティネスさん、あなた方はなぜ、あんな所で野宿をしていたのです？　街が見える様な距離でわざわざ危険な野宿なんて、意味が分かりませんが。そして、なぜあんな夜更けに爆裂魔法を放ったのですか？」
「黙秘する。口を割りたければ力尽くで割らせるがいい」
ダクネスが頑なに聴取に応じるのを拒む。なんて迷惑で面倒くさい奴だろう。
「……黙秘する、と言う事は何かやましい事があると取られますよ？　先ほどは前時代的な手は使わないとは言いましたが、ここにだってそれなりの道具はあります。それを使う気はありませんがね。

心配せずとも、それほど重い量刑にはなりませんよ。強がらず、素直に話した方が良いですよ。被疑者が何か重大な事を隠していると判断された場合には、拷問の行使は許されております。あまり軽率な事は……」

「望む所だ！　一番キツイのを、ドンと来い！」

検察官の言葉を食い気味に、テーブルに身を乗り出して叫ぶダクネスに、検察官が若干身を下げて表情を引きつらせた。

そして、テーブルの上のベルを見る。

……もちろん鳴らない。

その、鳴らないベルを見て検察官は更に顔を引きつらせた。

「……その、もう結講です。……次の方！」

「なんて事だ……。捕らえられての尋問や拷問など、こんなシチュエーションは二度と無いだろうに。あっという間に終わってしまった……」

「お前、自分の性癖で、善良な人様にあまり迷惑を掛けるなよ」

次に取り調べられるめぐみんと入れ替わりに、しょぼんとした表情のダクネスが牢内に帰ってくる。

若干疲れた様な表情の検察官が痛々しい。

めぐみんがイスに座ると、検察官は気を取り直した様に険しい表情を作り、テーブルの上に指を組み直した。

「……さて。あなたが魔法を放った人ですね。職業はアークウィザ

ードでしょうか。では、まずはお名前をお聞かせ願いましょうか」
「めぐみんと申します」
検察官が、指を組んだまま険しい表情を崩さずに。
「……今、なんとおっしゃいましたか？」
「めぐみんと言いました。ちなみに、母はゆいゆい。父はひょいざぶろーと申します」

めぐみんの言葉に、検察官がなんとなくベルを見る。
もちろん鳴らない。
その行動を見てめぐみんが。
「おい、私の名について言いたい事があるのなら聞こうじゃないか」
「い、いえ！　申し訳ありません、失礼しました」
その言葉にハッとして、慌てて気を取り直す検察官。
気の毒に……。

しかし、嘘つくとベルが鳴るってのは、なかなか便利そうな魔道具だな。
この建物内に、その魔法が掛けられているとか言っていたが。

「では、なぜあんな物騒な魔法を深夜に放ったのか、お聞きしてもいいですか？」
「魔法を使わなかったなら、私の命が無かったからです」
めぐみんの一言に、検察官が固まった。
そしてやはりベルの方を覗うが、もちろん鳴らない。

……俺はなんとなく、あのベルを鳴らしてみたくなった。
「なあアクア、今日のお前ってほれぼれするぐらいに美しいな」
「あれあれ、なあに、いきなり？　カズマったらどうしちゃったのかしら。昨日私達があの男達にナンパされて、実は妬いてたり……」

チリーン。
アクアが何かを言う最中、突然テーブルの上のベルが鳴る。
「……聴取の邪魔はしないでください」
「すいません、ちょっと気になったもんで。……なるほど、こんな音が鳴るのかおわっ！　おい止めろ、なんだよ、褒めてやって何で首絞められなきゃなんねーんだ！」
俺が、首を締め付けてくるアクアを引き剥がしている中、ベルが鳴った事にちょっと安堵した様子の検察官が、
「それでは、なぜ魔法を使わないと死ぬ所だったのか、説明して頂いても？」
めぐみんに、若干態度を軟化させながら尋ねた。
「夜中に爆裂魔法を使わないと、ボンッてなって死ぬからです」
その言葉に再び固まる検察官。
やはり視線はベルに向くが……。
「……ええと、次の方……」
鳴らないベルを見たまま疲れた様に肩を落とし、検察官がウンザリと言った。
「名前はアクアよ。あの三人のまとめ役みたいな、保護者みたいな役割をしているわ」
アクアの言葉に、牢の中の俺達三人はギョッとしてアクアを見る。
正確には、アクアの前に置かれている嘘発見のベルの方を。

「アクアさん……と。水の女神様と同じ名前なんですね」
検察官はそんな事を言っているが、なぜかベルは鳴らなかった。
……あれっ。

「ではお聞きします。……あの場で、なぜ野宿を？」
「私達の連れの、性欲を持て余しているカズマと言うあの男が、目を離した隙に街の人達に夜這いを仕掛けないかと心配して引き離したのよ」
あの野郎、さっきベルを鳴らす為についた嘘の仕返しか。

というか、先ほどのまとめ役だの保護者だのといった発言は、単に自惚れているか、あいつの頭が平常運転でおかしな事になっているだけかと思っていたのだが……。

検察官が思わずベルに視線をやるが、今度もなぜかベルは鳴らない。
それを見て、検察官の俺を見る視線がちょっと軽蔑した様な物になる。
……ち、違うんです。

……しかしあのベル、ぶっ壊れたのか？

「ええと、では……。なぜ、あんな深夜に爆裂魔法を……？」
「迫り来るモンスターの群れから、この街を守る為。そう、あの三人と共に、深夜にこっそりと、この私が街を守っていたのよ！」
とんでもない大嘘を吐き始めたアクアだが、やはりベルは鳴らなかった。

それを見て、いよいよ弱り果てた様子の検察官が。
「……嘘は……。言っていない様ですね。……なんて事……。この

街を守っていた、と……？」
検察官は、途端に申し訳無さそうな表情で、アクアに真摯な目を向ける。
背筋を正して、そのままアクアに向き直ると。
「この街を代表して、お礼を言わせてください。アクアさんと申されましたか。職業は、アークプリーストでよろしいのでしょうか」
検察官のその言葉に、アクアが突然立ち上がった。

そして……！
「ふふっ、アークプリーストとは仮の姿！　何を隠そう、この私は正真正銘の水の女神！　そう、女神アクア、その人なのよっ！」
その言葉に、俺達はおろか、検察官だけでなく看守までもがベルを見る。
……鳴らない。
それを見て検察官がため息を吐いて呟いた。
「なんだ、故障か……」
「なんでよーっ！」

暴れだし、看守に取り押さえられたアクアが牢に再び押し込められた。
三人の聴取を終えた検察官は、疲れた様に自分の目頭を揉んでいる。
……気の毒に。

俺はそんな検察官に同情しながら、戻って来たアクアに小さな声で疑問をぶつけた。
「おい、お前なんでベルが鳴らない訳？　何か便利な魔法でもあるのか？」

その言葉にアクアは、
「あのベルは、人が嘘をつく際の邪な気を感知するって言ってたでしょ？　私は仮にも女神様よ。多少の嘘なんてつこうが邪な気なんて発生する訳が無いでしょ？　発生しても、私の輝かしい聖なるオーラで即座に掻き消されちゃうわよ。あれに感知されようと思ったら、よほど心にも思っていないような、良心が痛む大嘘でもつかないとね」
そんな事を平然と言ってのけた。
たまにこいつは女神の能力を発揮するな。
それが良いか悪いかは置いておいて。

「では、最後の方。……どうぞ」
俺は牢を出され、疲れたきった様な声の気の毒な検察官の元へと案内された。

「……なるほど。紅魔族は必ず黒のローブを着るといいますが、そんな事情が……。いや、そんな止むに止まれぬ事情があれば、素直に言ってくだされば良かったのに」
俺の前にはすっかり態度の軟化した検察官。
事情を説明し平謝りする俺に、若干同情の目を向けて、そんな事を言ってくれた。

「分かりました。今回の事は不問とします。……実は、あなた方の荷物のチェックの最中に、この手紙を見てしまいましてね……。も

ちろん、勝手に中身を見てしまったのは我々です。この方に貸しを付けた等とは思いませんので、その辺はご安心を」

言って、申し訳無さそうに出してきたのは一通の手紙。

……なんてこった、あの商隊のリーダーの人が、困った時に使えと言っていたヤツじゃないか。

使わないでおこうと思っていたのに、大変な貸しが出来てしまった。

一体なんてお礼をすれば……。

「あの方は、最近名うての商人でしてね。なんでも、物凄い商品の知的財産権の数々を大量に仕入れて大儲けをしているとか。ジッ……？　何とか言う、手でシュッとするだけで火を付ける道具だとか。そんな、不思議で便利な道具を販売して荒稼ぎしている方なのですよ」

……。

世の中分からない物だなあ……。

「それに、テレポートサービスで他の街へ行く様ですしね。……昨日の騒ぎも色々と聞いております。正直に申し上げて、ここであなた方を拘留するよりも。その……」

そこまで言って、検察官が言葉を濁す。

早く出て行って欲しい訳ですね。分かります。

「ええ、このままテレポートサービスを使ってもう出て行きますよ」

その言葉にホッとするかの様に、検察官が笑顔を見せた。

検察官が、詰め所の入口までわざわざ俺達を見送ってくれる。

正確には、目を離さない様にしていると言ってもいい。
「しかし……。確認の為にあの後嘘をついてみましたが、ベルはちゃんと鳴りました。そちらの女性には、なぜ反応しなかったのか……」
不思議そうに首を傾げる検察官。
しかし、まさか事情を話す訳にも……。

……と、検察官がチラリと俺に視線を向けた。
「……一応お聞きしたいのですが。あちらの青髪の女性が先ほど言っていた言葉。あなたがその、性欲を持て余していて、彼女達が目を離すと街の人達に夜這いを仕掛ける、と言うのは……」
「嘘ですから！　あれ、もちろん全部嘘ですから！」
俺の言葉を聞きながらも、検察官は俺からちょっと身を離す。
「そ、そうですか。何にしても、この街を出て行ってくれるのなら私は何も言いませんので……」
そんな、ちょっと俺から距離を置く検察官の言葉を聞いて、ダクネスがポンと俺の肩を叩いた。

「そ、その……。私達はお前の事をちゃんと信頼している。お前と二人きりで無防備な姿でいたとしても、何かしでかしたりする様な奴ではないと。それで、いいじゃないか」
チリーン。
ダクネスの言葉に、建物の奥で何かが鳴った。
それを聞き、検察官が俺からそっと、一歩離れた。

「カズマがそんな事する人だなんて誰も思ってませんから。カズマが焚き火の番をしている時は、ちょっと警戒する為に眠りが浅いなんて、そんな事もありませんし」
チリーン。

……無言で検察官がまた一歩下がる。
そして、空気が読めない奴が、拳を握る。
……が、こいつは大丈夫だ、よほどやましい大嘘をつかない限りは、邪な気は発生しないと……
「私は、私は信じているから！　カズマはちっともエロくなくて、ダクネスに夜這いなんて仕掛けた事もなくて、本当はとっても優しい心を持つ潔癖な人だって、信じてるから！　私がさっき言った事は、あれ全部嘘だから！」
チリーン、チリーン、チリーン、チリーン……、
「チンチンチンチンうるせーよ！　そんな目で見てやがったのかクソッタレ！　でも少し自覚もあるし反省もするから、もう言わないでくれごめんなさい！」

◆◆◆

俺が冷ややかな検察官の視線で送り出されながら、大分へこんだ状態でテレポートサービスセンターへと向かうと。
そこは、凄まじい人混みだった。
この小さな温泉の街に、一体どれだけの人がいたのかと言うぐらいの人の量。
センターとは名ばかりで、街の広場に魔法陣を設置して街へと送り届ける形らしい。
「アルカンレティア行きー。こちらは、水の都アルカンレティア行きのテレポートサービスでーす」
「あっ、乗ります！　次、お願いします！」

人混みで先が見えないが、俺達の行く紅魔の里は、アルカンレティアとか言う場所から徒歩で行くはず。
確か、水の都だとか言ってアクアがえらく興奮していた所だ。

「あー……。すいませんお客さん、テレポートは、一度に連れて行ける人数が四人までなんですよ。術者の魔力の上限により一日の転送回数が決まっておりますので、効率を考え、四人組のグループか、二人組の方を二グループ、これらの方を優先させて頂いております。なのでお客様の様にお一人ですと、三人組のお客様が転送を希望された場合の、相乗り転送となりますので……」
「あっ、そ、そうですか、すいません！　あの、それじゃあ私を入れてくれる三人組の方が現れるまで待っておりますので……」
「そうですか、では、そちらのお一人様の予約のノートにお名前を書いてお待ち下さい」
「はっ、はいっ！」

混雑で見えないが、先の方からそんな会話が聞こえてきた。
なるほど、魔法で転送を行なう以上、上限一杯で転送させた方が確かに効率は良さそうだ。
俺達は四人組で良かった。
と言うか、重量制限なんてないだろうな？

「アルカンレティア！　アルカンレティア！！　カズマ、水の都アルカンレティアよ！　そこはなんと、アクシズ教徒が最も多いとされている都なの！」
「えっ」
興奮するアクアの言葉に俺は思わず聞き返した。
どうしよう、凄く行きたくない。
絶対にロクな事にならない気がする。
嫌な予感しかしない。

「おい、滞在なんてする気はないからな。即行で素通りだぞ。めぐみんの体の事があるんだからな？」
「……？　何を言っているんですかカズマ、野宿する前にちゃんと決めたじゃないですか。早く行っても、紅魔族の戦闘班の邪魔にでもなるといけないから、戦闘が終わるまでは街の観光でもしながらゆっくり行こうと」
めぐみんが、余計な事を。
しょうがない、なんだか絶対嫌な予感しかしないが腹を括るか……。
そうだ、よく考えれば、アクアはアクシズ教のアークプリーストみたいな扱いだ。
もしかしたら、案外大変なもてなしをしてくれるやも……。

「では、次の方。どうぞー」
俺は四人分のテレポート料金を支払い、初めてのテレポート体験に、若干の緊張と共に魔法陣の上に乗る。
そんな時。

「ねえねえカズマ、知ってる？　テレポートによる転送って、極稀に事故が起こるんだって！　テレポート魔法陣に飛び込んだ、他の動物と混ざっちゃったり！　ワーウルフやラミアって、そうやって出来たものなんだってさ！　だってさ！」
アクアが、ちょっと緊張している俺を怖がらせようとするかの様に突然そんな話をしてくるが……。

「じゃあ、今度ゴブリンか何かを三匹ほど捕まえてきて、お前と一緒に転送するか。いい感じに混ざり合えば、お前の知力がちょっとは上がってくれると思うよ」
「なんですってクソニート、あんたこそ働き蟻と転送させて、その

ニート体質直してあげるわよ！」
「あ、あの……。本当に転送事故が起きかねないので、魔法陣の上で暴れるのはお止めに……」
受付のお姉さんが困った顔で言ってくる中、俺達四人は魔法陣の中に立つ。

そして術者が魔法の詠唱をする中で、俺はふと、相乗り客を待つベンチの方に目がいった。
そこには、他に誰も居ない広いベンチの隅っこに、遠慮がちに座る少女の姿。
見覚えのあるその少女は、膝の上に両手を置いて、たまに辺りをキョロキョロしては、すぐさま恥ずかしそうに俯いていた。

見間違いじゃ無いよな？

……俺は少女に声を掛けようと片手を上げて……、
「では、魔法が完成しましたので、転送させて頂きます。転送先はアルカンレティア。では、行ってらっしゃいませ！」
「あっ！　ちょっ！」

俺が何かを言うより早く、俺達は下から突き上げるような魔法陣の光に飲まれ、そのままフワフワした感覚に包まれ目を閉じた。
そして、思わず閉じてしまった目を開けると……。

「「「アクシズ教の総本山、水の都アルカンレティアへようこそっ！！」」」

青い衣を身にまとった人達が、満面の笑顔で立っていた。

やっぱり、嫌な予感しかしない！

10話

水の都アルカンレティア。

澄んだ湖に隣接するその大きな街は、街中の到る所に水路が張り巡らされている。

建物は青を基調とした色で統一され、その街並みは美しく、そして誰もが活気に満ち溢れた大きな街。

街の東には紅魔族の里へと続く街道があり、街の西には、悪名高い魔王領へと続く道。

紅魔族の里より魔王の城に近いこの街は、普通に考えればもっと魔王の脅威に晒されてもいい筈だ。

だが、この街は平穏だった。

一度だけ魔王の手先と戦闘になった事があったそうだが、それ以降、魔王の魔の字も見受けられないほどにこの街には近付いてこないらしい。

曰く。プリーストを数多く抱えるこの街は、魔王軍の者にとって戦い辛い相手だからだ。

曰く。この街は、水の女神、アクア様の加護に守られているからだ。

曰く。

「ようこそいらっしゃいましたアルカンレティアへ！　観光ですか？　入信ですか？　冒険ですか？　洗礼ですか？　ああ、仕事を探しに来たならぜひアクシズ教団へ！　今なら、他の街でアクシズ教の素晴らしさを説くだけでお金が貰える仕事があります。その仕事に就きますと、もれなくアクシズ教徒を名乗れる特典が付いてくる

！　さあ、どうぞ！」

この街は大量のアクシズ教徒がいるから、それに関わりたくないからだ、と。

俺達は街に転送された途端に、いきなりアクシズ教徒とおぼしき集団に声を掛けられた。

どうしよう、いきなり勧誘されるとは予想外だ。

というか……。

「なんて美しく輝かしい青い髪！　地毛ですか？　羨ましい！　羨ましいです！　その、アクア様みたいな青い羽衣も良くお似合いで！」

アクアが、一人の女性信者に熱烈な歓迎を受けていた。

……というか、これ、不味くないか。

もしいつもみたいに、私は実は女神なのでしたー！

とか言い出したら、例のごとく偽者扱いされたら、こいつ袋叩きにされないか。

めぐみんとダクネスは、既に勢いに押されて引き気味だ。

アクアだけは、一人の女性信者にやたらと容姿を称えられながら、満更でも無さそうな表情で目を輝かせながら街を見ていた。

俺はそんなアクアに近付くと、その耳元に囁いた。

「おい、ここで水の女神だとか名乗るなよ。絶対にえらい事になるからな。極力名前も名乗るな、偽名を使え」

「分かってるわよカズマ、私だってバカじゃないわ。それより、早く街に行きましょうよ！　ここは水の街なのよ！　水の女神としてテンション上がるわ！」

そわそわしているアクアを放っておく訳にもいかず、俺達を歓迎してくれた信者に頭を下げ、

「すいません、ウチにはもうアクシズ教徒がいるもので。今は街の観光とかに来ているので、また……」
そう言って立ち去ろうとする俺達に、満面の笑みでアクシズ教徒達が手を振った。
「そうでしたか！　さようなら同士、あなた方に良き日であらん事を！」
正確には、ウチにいるのは教徒じゃなく、信仰されている女神な訳だが。

ようやく離れてくれたアクシズ教徒にめぐみんとダクネスがホッとする。

しかし……。

「アルカンレティアへようこそ！　アクシズ教入信者からは、病気が治っただとか宝くじに当たっただとか芸が上手くなっただとか、様々な良い実体験を聞く事が出来るんですよ。どうです？　あなたも入信してみませんか？」
……なんて胡散臭い宗教団体なんだ。

俺は半ば呆れながら熱心に勧誘する信者達を遠巻きに眺め、アクシズ教が避けられている一端を垣間見た気がした。
「……と、とりあえずあれだ。まずは情報を集めようか。ここから紅魔の里までは三日ほどの距離らしい。だが未だ紅魔の里は戦闘中だと言うのなら、ここでしばらく滞在する事を考えないと。寝泊りは街の外で野宿するとしても、紅魔の里の戦闘が何時まで続くのかが分からないしな」
その言葉に、アクアがにんまりと笑みを浮かべる。
「それなら、私に任せてよ！　考えがあるのよ！」

アクシズ教。
国教とされるエリス教の影に隠れ、この街を除き、非常にマイナーな宗教である。
だがその存在感は凄まじく、旅をしていて野盗などに襲われた際にはアクシズ教徒であると告げると、怖がった野盗達に見逃して貰える事もあるとか。
だがこれは諸刃の剣で、野盗達がアクシズ教徒に関わり、酷い目に遭わされた事がある場合、悲惨な末路を辿る事にもなる。
それほどまでに恐れられるアクシズ教徒。
魔王にすら敬遠されるアクシズ教徒。
俺は今。

「俺、今からエリス教の教会に行って懺悔してくる！　エリス神の肖像画見てると欲情するんですがいけない事ですか、って！　一緒に行く者この指とーまれー！」
「おい、俺も行くぞ！」
「俺も俺も！」

この自由奔放な集団を見て、その意味を嫌になるぐらいに理解した。

「行きなさい行きなさい。またエリス教の女神官が顔真っ赤にして怒鳴り込んで来るでしょうが、またそれが良い！　是非とも行きなさい」

嬉々として出掛けて行く信者達に、ニコニコしながらそんなとんでもない事を口走るのは、アクシズ教のプリースト。
この街の教会の管理を行なっている、ゼスタと言う名の温厚そうな白髪のおっさんだった。
アクシズ教は戒律や管理がゆるゆるで、ちゃんとした宗教団体の体をあまり成していないらしい。

と言うのも、本来なら上に立つべき熱心な信者ほど……

「やがて、エリス教の美人神官がここに怒鳴り込んで来る。私は教会の入口に上着を脱いで寝そべり、美人神官を迎撃する態勢に入る。誰か魔道カメラを借りてきてくれ！　エリス教の美人神官が裸の私を踏みつけ、涙目になっている姿を激写するのだ！　美人神官は泣いて帰り、私にとってはご褒美になる。そして『裸のアクシズ教徒を踏みつけるエリス教神官』と題を打ち、写真を撒いてやる事でさらなるダメージが狙える！」
「素晴らしい！　流石はゼスタ様、明日以降のエリス教徒の女神官襲撃の際には、是非俺にも！」
「ずるい、俺だって美人神官に踏まれたい！」

……この通り、上に行くほどどうしようもない。
俺は無言でアクアの方を見ると、アクアがふいっと目を逸らす。

俺達が今居るのは、アクシズ教の教会だった。
アクアが、アクシズ教のアークプリーストである事だけを明かして、教団の協力を得ると言い出したのだが……。
俺達四人が教会の入口で立ち尽くす中、ゼスタと呼ばれた神官がこちらに来る。

「やあ同士達。私はこれから、エリス教徒との聖戦の準備をしなけ

ればいけない。なので、ちょっと忙しい為、しばらく奥でくつろいでいてくれないか。何なら、街を見て回るのも良いだろう」

このおっさん、美人神官へのセクハラを聖戦と抜かしたか。

俺は三人を振り返ると。

「……そうだな。私は街を見に行こうか。アクセルの街からロクに出た事も無い。良い機会だ、観光しよう」

ダクネスが、若干ソワソワしながら言ってきた。

「俺もちょっと街をブラブラしてくるよ。めぐみんは最近ロクに眠れてないだろうし、ウロウロしないで休んでおくか？　……というか、ここから紅魔の里に手紙でも出して、この街までテレポートで迎えに来て貰うとかはダメなのか？」

「……手紙自体は送る事は出来るでしょうが……。魔王軍も恐れない大人達が、ここの街と関わる事だけは避けてましたからね。きっと、テレポート先にこの街を登録している術者はいませんよ。かと言って、現在戦闘中の里の人達に、ここまでロープを持ってきて欲しいとか迎えに来て欲しいとか言う訳にもいきませんし。私はここでゆっくりしています。二人共、気をつけてくださいね」

そんな不安になる事言われると、俺もこの教会で待機したくなってくるんだが。

「私も教会に残るわ。この水の都を見て回りたい所だけれど、私の信徒が華麗にエリスの信者を撃退する様を見届けないと」

「いや、お前あれ止める気ないのか」

そう言って俺の指す方には、いそいそと教会の玄関前で服を脱ぎ、仰向けになったりうつ伏せになったりするゼスタの姿。

あれが一応、この街で一番偉い教団関係者らしい。

大丈夫なのか色々と。
いや、大丈夫じゃ無いからこんなに悪評が立っているのか。

「アクシズ教の教義の一つにね。我慢はしない。それが犯罪でない限り、望むままに自分のやりたいようにやれば良いって物があるから、私からは止められないわ」
「セクハラは犯罪ですよ女神様」

ダクネスと街をプラプラと歩きながら、俺はその辺の屋台で買った串焼きを手に、キョロキョロと辺りを見回していた。
あちこちに水路が張り巡らされ、随分と清潔そうな街並み。
これだけ見ていると、住み易そうな良い街に見えるんだが……。

……と、前方から重そうな荷物を抱え、フラフラと歩いてくる若い女性が現れた。
俺は何となく道を開け、ダクネスと共にその隣を通り抜けようと……。

「きゃあっ！？　どうしましょう、せっかく買ったりんごが……！」

俺が通り抜けようとした瞬間、女性がバランスを崩して買い物袋の中身をぶちまけた。
転がるりんごを慌てて拾い、せっせと袋に詰めていく。

俺とダクネスも、慌ててそのりんごを拾い集め……。

「どうもありがとうございました！　おかげで助かりました！　ああっ、何かお礼をさせては貰えないかしら……！」

その女性は、言いながら俺の腕を取る。

おっと、何このフラグ的な……！

ちょっと期待した俺に、その人が言った。

「この先に、アクシズ教の運営するカフェがあるんです。そこで私とお話しませんか？」

「……結講です」

その女性は、先ほどまで大事そうに抱えていた買い物袋を無造作に道に置き、そそくさと立ち去ろうとする俺とダクネスのマントを後ろからガッと掴む。

「まあまあお待ちになってください。私、実は占いが得意なんです。お礼代わりに占わせては頂けませんか？」

「け、結構です……、ちょ、本当に結構なんで、はな……、離せ！」

マントを掴むその手を振りほどいて何とか逃げようとすると、女性は俺の腰にしがみ付いてきた。

「今、占いの結果が出ました！　このままではあなたに不幸が！　でも、アクシズ教に入信すれば、その不幸が回避出来ます！　入りましょう！　ここは入っておきましょう！」

「不幸なら、今正に遭遇している！　ちょ、離せ！　ダクネス、助けてくれ！」

その、俺の腰にしがみ付く女性の腕を、ダクネスがそっと掴んだ。

そして、胸元から何かのペンダントの様な物を取り出すとそれを女性に見せ付ける。

それはきっとエリス教徒である事を示す物。

地球においてキリスト教徒である事を示す、十字架みたいな物なのかも知れない。

「……すまない、私はエリス教の信者でな。その男を勧誘する気なら、一言断ってもら……」

「ぺっ」

女性が道に唾を吐いた。

そして無言で俺の腰から手を離すと、買い物袋を拾い上げ、そのままスタスタと遠ざかる。

今まで、そんな扱いを受けた事のないダクネスが固まっていると、女性はチラリとダクネスを振り返り。

「……ぺっ」

もう一度道に唾を吐き、そのままスタスタと去って行った。

……ちょっ……。

「……おいダクネス、その、あれだ。アクシズ教とエリス教は仲悪いみたいだし、そのペンダントみたいなのは隠しておけ。……ま、まああんまり気にする事は……」

固まったままのダクネスに声を掛けると、軽くブルッと身を震わせた。

「……んっ……！」

……。

「……お前、ちょっと興奮したのか」

「……してない」

……。

無言で立ち尽くす俺とダクネスの前に、ごつくて強面の男と、そこそこ可愛い女の子が現れた。

「きゃあああっ！　助けてっ！　すいませんそこの方、助けてくださいっ！　あの凶悪そうな、エリス教徒とおぼしき男が、私を無理やり暗がりへ引きずり込もうと……っ！」

「へっへっへ、おいそこの兄ちゃん、お前はアクシズ教徒じゃねえな？　ハッ！　強くて格好いいアクシズ教徒だったなら逃げてた所だが、そうじゃないなら遠慮はいらねえ！　暗黒神エリスの加護を受けた俺様の、邪魔をするってなら容赦はしねえぜ！」

「ああっ、なんて事！　今私の手元にあるのはアクシズ教団への入信用紙！　これに誰かが名前を書いてくれさえすれば、このエリス教徒は逃げていくのに！」

……。

俺は見なかった事にして、そのままスタスタと立ち去ろうと……、

「ああっ、見捨てないでそこの方！　大丈夫、この紙に名前を書くだけでアクア様から授けられるアレな超パワーで強くなれます！　その力に恐れをなして、このエリス教徒も逃げ出すでしょう！」

「そうだぜ！　しかも、入信すると芸達者になったり、アンデッドモンスターに好かれ易くなったりと様々な不思議な特典もあるんだぜ！」

その二人に対し、ダクネスが例のペンダントを見せ付けた。

「……私は見ての通りのエリス教徒だ。そのエリス教徒の前でエリス様を暗黒神呼ばわりとは」

「「ぺっ」」
ダクネスが何かを言い終わる前に、道に唾を吐き捨て去っていく少女と男。
……アクシズ教徒はこんなのしかいないのか。
……と、ダクネスが、しばらく無言で固まっていた後ブルッと震えた。
……エリス教徒は、こいつみたいなのばっかじゃないんだろうな……。

その後も……。

「おめでとうございます！　あなたはこの大通りを通られた、１００万人目の方となります！　つきましてはこちらで記念品を贈呈したいのですが、この記念品、実はアクシズ教団がスポンサーとなっておりまして！　なので、ほんの書類上の事だけなので、記念品受け取りの為にちょっとお名前だけ、入信、と言う形でお借りしてもよろしいでしょうか？」
俺はダクネスを連れて、入ろうとした通りをクルリと引き返す。

「あれっ？　あれあれ？　ひっさしぶりー！　わたしわたし！　元気してた？　ほら、学校の！　同級生の！　同じクラスだったんだけれど、覚えてる？　アクシズ教に入信して、わたし大分変わったから分かんないかもねー！」
こちらの世界の学校に通っていない上に、そもそも、こんなに親しく話せる女子がいなかった俺は、無言でその子の隣を素通りする。

「……どうなってんだこの街は。と言うか、アクシズ教団ってのは何なんだ」

俺はぐったりと疲れ果て、ダクネスと共にオープンカフェで休憩していた。

向かいに座るダクネスは、首からぶら下げたエリス教徒のペンダントの所為で散々な目に遭い、ほんのりと頬を火照らせている。

俺がテーブルへ突っ伏していると、注文した食べ物がウェイトレスによって運ばれてきた。

テーブルの上に皿が置かれ、飲み物が添えられる。

俺は身を起こし、それを食べようと……。

「あ、エリス教徒のお客様。こちらは当店からのサービスです」

食事を運んできたウェイトレスが、何かをダクネスの足元にコトリと置いた。

皿に盛られた犬のエサ。

「ではごゆっくりどうぞー」

にこやかな笑顔を浮かべ、綺麗に礼をして去っていくウェイトレス。

ダクネスが頬を赤らめ、ブルリと体を震わせた。

「……なあカズマ。めぐみんの件が片付いたら、皆でこの街に住まないか？」

「……絶対嫌だ」

……しかし、改めて街を見回すと、そこかしこであらゆる手段で勧誘が行なわれている。

あちこちで聞こえてくるアクシズ教団の勧誘の声。

そう、こうして耳を澄ませば……、

「どうですか、アクシズ教！　アクシズ教に入れば、きっとあなたの願いも叶いますよ！」

「ほ、本当ですか！　……あ、あの、私……。と、友達がいなくって……。仲間も、いなくって……。し、親友は！　親友は一人いるんです！　その子をこっそり助ける為にここまで来たんですけど、見失っちゃって……！　こ、こんな私でも、アクシズ教に入信すれば、友達とか出来ますか！？」

「あー……。ええっと、ごめんねー。基本的に誰でも歓迎なアクシズ教団なんですが、出会い目的の方の入信だけはお断りしてるんですよー」

「あっ……！　ごっ、ごめんなさい、ごめんなさいっ！　私、そんなつもりじゃ……！」

ちょっと耳を澄ましただけでも、遠くからそんな会話が聞こえてくる。

俺は椅子から立ち上がると、顔を赤らめホコホコさせたダクネスを引き連れ、教会へと帰ろうとした。

ここはおかしい。

この街は、色々おかしい。

教会に帰り、総元締めのクソ女神を問い詰めたい。

あと、あのゼスタとか言うおっさんも。

……と、帰ろうとする俺の目の前を、てててっと駆ける一人の女の子。

年の頃は十歳位だろうか。

そんな女の子が、目の前で突然転んだ。

慌てて俺とダクネスが駆け寄ると、その子は痛そうにしながらも。
「あ……。ありがとう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」
言って、にこりと笑顔を浮かべた。
俺のささくれ立っていた心が癒される。
「大丈夫か、気をつけろよ？　ほら、立てるか？」
言って、女の子に手を貸してやると、その子は嬉しそうに手を取りはにかんだ。
もう凄く癒されるが、俺はロリコンではない、子供が好きなだけだ。
「うん、もう大丈夫！　ありがとう！　……ねえ親切なお兄ちゃん、名前教えて？」
そんな事を聞いてくる女の子に、
「カズマだよ。サトウカズマ。こっちの怖そうなお姉ちゃんはダクネスだよ」
そんな俺の言葉にダクネスが、俺のこめかみの辺りを小突いてくる。
それを聞いて、女の子が一枚の紙とペンを取り出した。
「サトウカズマ？　ねえ、どんな字を書くの？　書いてみてお兄ちゃん！」
「ああ、俺の名前はね……」
名前を書こうとして紙を見る。
『アクシズ教団入信書』
「くそったりゃあああーっ！！」

「あああっ、お兄ちゃーんっ！！」

俺はその紙を真っ二つにした。

11話

「おらっ！　責任者出て来い！　説教してやるっ！」

俺は教会に駆け込むと、そのままアクアとゼスタの姿を探そうと……！

「あら、お帰りなさいませ。早かったですね」

教会内には、床の掃き掃除をしている女性信者が一人のみ。

俺達にそう挨拶してくれたその女性信者以外には、教会内には誰も居なかった。

「……あれ、他の連中はどこいった？」

俺の言葉に女性信者が、

「ゼスタ様は色々あって警察の方に連れて行かれました。他の信者の方は、布教活動と言う名の遊び……、いえ、アクア様の名を広める為の活動に出掛けて行きました」

「おい、今凄い事言っただろ、面白半分にあんな迷惑な事やってんのかお前ら。……いや、あの変態のおっさん逮捕されたのか？　それって大丈夫なのか」

その女性信者は、ほうきで床を掃きながら、

「変態のおっさんではありません、ゼスタ様です。大丈夫ですよいつもの事ですから。今日もきっと夕ご飯までには、疲れた顔した警察の方に連れられて、平気な顔して帰ってくると思います」

「お前ら、教団ごと爆発すればいいのに。……えっと、俺の連れを知らないか？」

アクアとめぐみんはどこに行った。
教会の奥だろうか？

女性信者が首を傾げ、
「お連れさん？　あそこで子供達に石を投げられている、あの鎧の女性の事ですか？」
「えっ？……ああっ！　こらーっ、クソガキども、何やってんだ！　あっち行け、シッシ！」
教会の玄関先で、ダクネスが子供達に囲まれ石を投げつけられ、頭を抱えてしゃがみ込んでいた。

それを慌てて追い散らすと、
「カ、カズマ……。この街は色々とレベルが高いな……。女子供に到るまで、その全てが私に牙を剥いて……！　とても体が持ちそうに無いのだが……っ！」
「もうお前、面倒くさいから街に出るな。あとそのエリス教のペンダントもちゃんと仕舞っておけ」
「断わる」
聞き訳の無い、アクシズ教徒並に手の掛かるエリス教徒を連れ、俺は再び教会内に戻る。

「ええと、コイツ以外に後二人。俺の連れがここに居ると思うんだが」
「お一人は、奥の客室でウトウトされておりましたよ。随分お疲れの様だったのでベッドのある部屋をご用意させて頂いたのですが。アークプリースト様は……」
言いながら、女性神官は教会の中にある、小さな部屋に視線をやった。
教会入口のわきにある小さな部屋。
なるほど、俗に言う懺悔室ってヤツか。

「ゼスタ様が連行されてしまったので、その間アークプリースト様に懺悔室の方をお任せしたのです」
本物の神様が懺悔を聞いてやるってのも随分な話だが。
「カズマ、私はめぐみんの様子を見てくる。アクアを頼む」
言って、教会の奥へと向かうダクネス。
……が、掃除をしていた女性の隣を通ろうとした瞬間、集められたゴミが、ほうきでダクネスの方へと撒き散らされた。
足元を埃まみれにされたダクネスが、頬を染めて立ち止まる。

「あらごめんなさい、エリス教のペンダントが目に入ったので、ゴミと間違えてしまいました。申し訳ありませんでした」
「……い、いえ……っ」

何かに耐える様にふるふる震え、搾り出すように小さく答え、そのまま奥へと消えて行くダメなエリス教徒を見送りながら、もうその信者とあまり関わりたくないので懺悔室へ。

中に入ろうとしたが中から鍵が掛かっていて入れない。
ノックをしても返事は無かった。
寝てるのか？
しょうがなく、俺は本来懺悔をする人用のドアから、懺悔室へと入る。

中に入った瞬間に聞こえてきたそれは……、
「ようこそ迷える子羊よ……。さあ、あなたの罪を打ち明けなさい。神はそれを聞き、きっと赦しを与えてくれるでしょう……」
部屋の雰囲気にのまれ、完全に役に入り込んでいるアクアの声。
どうやら、何人かの懺悔を聞くうちに、こいつはすっかりその気になってしまったらしい。

仕切りの為に顔は見えないが、きっとノリノリなのだろう。

「子羊じゃない、俺だよ。俺だ俺。おい、この街どうなってんだ。なんか頭痛くなってきたぞ。ゼスタっておっさんも逮捕されたみたいだし、どうすんだコレ。とっとと紅魔族と魔王軍の情報集めて、今後の事考えようぜ」

その言葉にアクアが一瞬シンと黙り……。

「……なるほど。オレオレ詐欺を働いた……と。深く、深く反省しなさい……。さすれば、慈悲深き女神アクア様は赦しを与えてくれるでしょう……」

「おい、俺だって言ってんだろ、ナニすっとぼけた事言ってんだ。あれか、お前ちょっと楽しいんだろ？　普段出来ないプリーストっぽい事が出来て、ちょっと楽しいんだろ」

その言葉に、アクアがもう一度無言になる。

「……他に懺悔はありませんか？　無ければ、この部屋を出て、再び前を向いて生きなさい……」

「おいこら、遊んでないでちゃんと聞けよ。お前この街では崇められるような存在のアークプリーストだろ。お前が信者に色々指示してくれればすぐ解決するんだよ。お前の所の教義か何か知らんが、自由に遊んでないでそろそろ動け。ほら、外に行くぞ」

それを聞き、更にアクアが無言に……

「もう何も無い様ですね。……では、私は次の迷える子羊を待つとします……。さあ、おいきなさい」

「いや、お前何言って……！　部屋から出ろって言って……」

「出て行って！　懺悔が終わった人は出て行って！」
　このバカが、懺悔聞いて信者に感謝される事に喜びを覚えやがったのか、なぜこんなにもすぐ影響され易いんだコイツは！
……。
　俺は椅子に座り直すと、いかにも反省している低い声で。
「……実は、この場で打ち明けたい話があるのですプリースト様……」
「！？　なるほど、聞きましょう、聞きましょう……。さあ、あなたの罪を告白し、懺悔なさい。仲間のクルセイダーの洗濯物に興味深々な事ですか？　魔法使いのしっとり滑らかな黒髪に、顔を埋めたいと言う事ですか？　美しくも気高いプリーストに、不相応にもニートのクセに劣情を抱いてしまったとかですか？」
　嬉々として言ってくるアクアにキッパリ告げた。
「仲間のプリーストが大事にしていた、宴会芸に使う専用のコップをうっかり割ってしまい、ご飯粒で形だけ整えてこっそり戻しておきました」
「！？」
「……あと、現在仲間を助ける為の旅に出ている最中なのですが……。仲間のプリーストが芸に使用する為に、部屋で飼っていた訳の分からない生き物達。旅に出る前、プリーストが、それらにちゃんとエサをやる事も忘れている風だったので……。帰ってきて全滅していた際、泣かれるのも面倒なので、それらをこっそり逃がしてしまいました」
「！？　何を言っているの？　ねえ、何を言っているのカズマ！」

なおも俺の懺悔は続く。
「バニルと言う胡散臭い男に預けたペットのヒヨコ。俺達が旅に出た後は、カラッと揚げておいてくれと頼んでおき」
「わあああーっ！　背教者め、天罰食らわせてやる！」
アクアが懺悔室の仕切りをスパンと開けて、俺に掴みかかってきた。

「俺とダクネスは、お前の所の頭のおかしい信者連中に悩まされ、情報収集どころか観光もままならなかったよ。……で、お前の方はどうだったんだよ。紅魔族の里と魔王軍の戦闘状況とか、少しは分かったのか？」
アクアが立て篭もっていた、懺悔を聞く側の部屋。
現在アクアと共に、俺もその部屋にいた。

話の内容にやましい所はないのだから、別に教会内で堂々と話してもいいのだが、アクアがその部屋を気に入ったのか、出て来ないのでなんとなく。
「私はここで迷える子羊達の声を聞き、正しき道へと導くのに忙しかったから収穫はないわね。……本当に、ゼル帝唐揚げの件は嘘なんでしょうね」
「本当だっての。最初の二つはともかく。それより、懺悔室で遊んでいてすっかり忘れてましたって言え」
「ねえちょっと待って。今最初の二つはともかく、って言った？」

……と、懺悔室のドアをコンコンと叩く音。

おいマジか、懺悔しに来た人か。
と言うか、俺がここにいちゃまずいだろ。
と、ガチャリとドアが開く音がして、続いて誰かが入る音。

俺は無言でアクアをつつくと。
自分を指差し、ついで床を指差して、首を傾げた。

俺は、ここに、いていいのか？

そんな意味のジェスチャーだったのだが、アクアが真面目な顔で、指を組み、部屋の一角にそちらを見ろとばかりに視線を向けた。
そこには組んだ指の影により、一目でソレだと分かる、ワシャワシャと動く見事な出来のデストロイヤーが……！

……このバカ、何一つ分かっちゃいねえ！

「ようこそ迷える子羊よ……。さあ、あなたの罪を打ち明けなさい。神はそれを聞き、きっと赦しを与えてくれるでしょう……」
俺が部屋を出ようとする間も無く、俺に芸を見せて満足したアクアが、懺悔に来た人に静かに告げた。
ちょっ……！

「ああ……、どうか聞いて下さい……！　自分は長くアクア様を崇めてきたアクシズ教徒です。しかし……！　エリス神の肖像画の、あの豊かな胸……！　あれが自分を惑わせるのです！　あの胸は悪魔の胸だ！　ああ……、どうか、どうか他の女神に心を傾けてしまった罪深い自分をお赦しを……！」
どうしよう、下らない事で来るなと今すぐ懺悔に来たこの人を引っぱたいてやりたい。
だがアクアは、酷く真面目な顔で、一切茶化す事なく優しく告げ

る。

「安心しなさい、神は全てを赦します。汝巨乳を愛しなさい。汝貧乳を愛しなさい。アクシズ教は全てが許される教えです。それは、例え同性愛者でも。人外獣耳少女愛好者でも。ロリコンでも。ニートでも。アンデッドや悪魔っ娘以外であれば、そこに愛があり犯罪でない限り、それらは全て許されるのです」

ちょっとだけ、アクシズ教に入信したくなった俺はやはりダメなのだろうか。

入信したら、俺はもうアクアにニートだのロリコンだの呼ばれる事も無くなるのだろうか。

いや違う、俺はもうニートじゃないし、そもそもロリコンではないので関係ない。

「おお……。おおおお……」

懺悔にきたその人は、なにか感動した様子で声を震わせている。

声の感じからして泣いているのかもしれない。

「汝、敬虔なる信徒よ。悪魔に惑わされない為の、聖なる呪文を授けます。エリスの胸はパッド入り。惑わされそうになったなら、これを唱えなさい。他に惑わされている者がいれば、これを教えてあげるのも良い事です」

「なんだか一気に目が覚めました！　素晴らしい呪文をありがとうございます、感謝します！」

懺悔していた者が、礼を言って立ち去っていく。

「……おい。お前、後輩の女神陥れてそれで良いのか」

「何言ってるの、神にとって信者数と信仰心はとても大事な事なの

よ？　それがそのまま神の力になるんだから。エリスの所は信者は多いけど、私の信者達は、数こそ少ないけれどそれはもう強い信仰を抱いてくれているわ。その可愛い信者達を守る為なら何だってしてやるわよ」

お、お前……。

俺が何か言おうとしたその時。

外に出る間も無く、再びドアがノックされた。

「どうか聞いて下さい！　昔引っ越して行って、離ればなれになった幼馴染が帰ってきたのですが……。それが、エリス教徒になって隣の家に帰って来たんです。それを知り、毎日彼に会う度に、地面に、ぺっ！　ってしたり、回覧板をそこだけ飛ばしたり。そんな嫌がらせをしている間に……！　そ、その幼馴染が……、ストレスで、は、ハゲて……っ！　私、そこまで追い込むつもりじゃ……、どう責任を取ればいいのか……っ！　どう謝ればいいのかすらも……っ！」

声からして若い女性。

それが仕切りの向こうで泣いている。

……もうこの街と一緒に消えてなくなればいいのにこの教団。

そんな女性にアクアが、目を瞑り、うんうんと深く頷きながら静かに告げた。

「そんなあなたの罪、神は全てを赦してくれるでしょう……。その男性にはこう謝りなさい。べ、別にっ！？　別に、あんたの事が気

になって今まで嫌がらせしてた訳じゃ無いんだからね？　アクシズ教徒の私の前で、エリス様、エリス様ってうるさいから、ちょっと痛い目に遭わせようとしただけなんだから！　や、妬いてたんじゃないんだからっ！　……でも、悪かったわよ、ごめんねっ！？　……と、そっぽ向き、頬を赤らめながらこんな謝り方をしなさい。さすれば、彼はきっと許してくれるでしょう……」

散々嫌がらせしてきた女がそんな事言い出したなら、俺ならその子の頬にグーを埋め込む自信がある。

「あっ……！　ありがとうございますプリースト様！　為になりました、感謝します！」

だがこの女性は実行する気の様だ。

この教会本当に大丈夫なのかと不安になったが、来るのはどうせアクシズ教徒達ばかり。

信者ではない一般の人も懺悔に来てもいいのだが、この街でアクシズ教に入らない様なマトモな人であれば、それはみんなエリス教の教会へと懺悔に行くだろう。

と思っていると、再びノックがされ。

アクアが優しげな声で入室者に促すと、仕切りの向こうでその子はぽつりぽつりと喋り出す。

「……失礼します。……その、私アクシズ教徒ではないのですが……。懺悔ではないのですが、相談と言うか……。私、友達が居なくって、どうして友達が出来ないんだろうって悩んで……。寂しくって、何とか人の輪に入れる様に頑張ろうって思って……！　でも、私が入ると空気が悪くなったりしないかなとか、色々考えてしまって勇気が出なくて……。ど、どうしたら……。どうしたら、友達と

か出来ますか……っ！？」

きっと、その子はここにも勇気を振り絞って来たのだろう。

声が微かに震えている。

これだよ、こういう子をちゃんと導いてやるのが……！

「ウチは結婚相談所とかでは無いので、そういったご相談はちょっと……」

「えっ！？　あっ！　ご、ごめんなさいっ！　先ほど、この教団の方に少し声を掛けて頂きまして……！　入信希望は断わられちゃったんですが、その時、そうだ、教会に相談に行けば……って安易に考えてしまって……！　ごめんなさい、ごめんなさい！」

その子は謝りながら部屋から退出していき……。

俺は無言でアクアの頬を引っ張った。

「いはい！　はにするの、はなひて！」

と、その時。

もう今更聞き間違う事などない、聞き慣れた轟音と共に、教会がビリビリと激しく震えた。

「おいおいっ、こんな街中でやっちまったのか！」
教会の奥にある客間兼休憩所。
そこにアクアと共に駆け込むと、
「……ああ、カズマ……。申し訳ないです、やってしまいました、どうしましょう……」
そこには熱に浮かされた様に赤い顔をしためぐみんと、珍しく厳しい表情のダクネスの姿。
例のごとく、飛び起きた瞬間窓から魔法を放ったのだろう、窓は開け放たれ、魔法の衝撃で教会の一部の窓が割れている。
教会の裏手は街の湖に面しており、それが幸いしたのか、ガラスの被害はこの教会だけの様だ。
……と、赤い顔で申し訳なさそうに謝るめぐみんを置いて、ダクネスが俺の肩をポンと叩いて廊下に出る。
ちょっと付いて来いと言う意味らしい。
そのまま無言で付いて行くと、ダクネスが真剣な顔で口を開いた。
「おいヤバイぞ。めぐみんが、いよいよまともに魔力の放出が出来なくなっている。今も、寝ていためぐみんが赤い顔で汗を流し始め、酷い熱を発し始めたから慌てて起こした。そうしたら、起きた瞬間にあの有様だ」
……おお？
その言葉に、部屋の中のめぐみんを見れば、黒髪を汗で頬に張り付かせ、どことなくフラフラし、赤い顔のままだった。
「すいませんカズマ、教会の人に、謝罪と、ガラスの弁償をしてきます。もしお金が足りなければ、ちょっと貸してもらってもいいですか？」

「いや、そりゃ構わないし、俺だって負担してやるよ。……そんな事より……」

なんだか、暴発の周期が早くなっていないか？

今日の明け方に魔法を暴発させてそのまま捕まり、それからこの教会へ着くまでは、めぐみんは一睡もしなかったはず。

そして、めぐみんを教会で休ませ俺とダクネスが帰ってくるまで、二時間も経っていない。

どう考えても魔力の回復量が早くなっている。

……めぐみんにその事を尋ねると。

「ああ……。どうやら大量レベルアップが原因ですね。魔力容量も伸びましたが、魔力回復量がそれ以上に伸びた様です……。実は今朝も、ずっとウトウトしていたのですが油断して、小一時間ほど熟睡したらボンッてなりそうになったのですよ。高経験値を誇るモンスター達の大量撃破により、今の私のレベルは３８の大台に。……ふふふ、このパーティーで一番高レベルになりました」

そんな事を、苦しそうな赤い顔で、苦笑いしながら言ってくる。

「アホか、言ってる場合か。……しかし、そうなると」

今以上に、めぐみんはロクに体を休める事も出来なくなる訳だ。

街から離れ、野宿しながらこまめに魔法を放ち続けて休ませても、紅魔族の里に近いこの付近のモンスターは凶悪なのが多い。

そのモンスター達も、なぜかこの街にだけは寄って来ないらしいが、野宿している冒険者となれば別だろう。

爆裂魔法で音を立て続けていればやがてモンスターに襲われる。

もう、様子見だの言ってられない事態になった。

俺は無言でダクネスとアクアを見る。

ダクネスが頷き返し、普段は空気を読まない事で定評のあるアクアが。

「……この街に居るのも飽きたわね。カズマ知ってる？　美人は三日で飽きるって諺を。私ぐらいの超絶美人になると、三日と言わず三時間ぐらいで飽きちゃうの。紅魔族の里とやらに行きましょうか」

そんな、珍しく空気を読む事を言ってきた。

美人は三日で飽きるの諺の、意味と使い方が間違っているが、あれほど楽しみにしていたこの街を出ようと自分から言うのだ、今日は突っ込まずにそっとしておいてやろう。

めぐみんが、俺達三人が今からどうするつもりかを察した様だ。

「紅魔の里近辺の生息モンスターは非常に強く、しかも現在魔王軍との交戦状態。そんな危険な所に行く事は無いですよ。大丈夫です、耐えて見せますから」

弱った状態で、めぐみんがそんな説得力の無い事を言ってくる。

その簡単に空気を察する高い知力は、本当にもっとマシな所で発揮して欲しい。

と、部屋のドアが開けられた。

「何事ですかっ！？　庭掃除をしていたら爆音が……！　ああっ！？」

部屋に飛び込んで来たのはアクシズ教徒の、先ほど掃除をしていてダクネスにゴミをぶつけた女性。

部屋の割れたガラスを見て、そしてそのまま驚愕する。

「すいません。私がガラスを割ってしまいました……」

申し訳なさそうに謝るめぐみんに、女性信者が、

「ガラス？　ああ、そういえば割れていますね。そんな事より、こ

うしちゃいられないわっ！」
ガラスが割れた事などどうでも良さそうに、突然部屋から飛び出した。

どこへ行くのかと思えば、女性信者はそのまま湖へと駆けて行く。
手には大きな網とバケツを持って。
そして、湖にはめぐみんの魔法の衝撃だろうか、大量に湖面に浮かんだ魚達。
……っておい、まさか。

「あはははははっ、大漁よ！　これも日頃の行いが正しい私への、アクア様からのプレゼントよ！　やったわ、ギャンブルで大負けして給料日まで後三日！　エリス教の教会で出される炊き出しを奪いに行こうかとすら悩んでいたのに！　ああっ、アクア様、感謝します！」
こんな奴しかいないのかこの教団は。

と、窓からそんな信者の様子を見ていたアクアが。
「……ねえカズマ。めぐみんの里へ行く前に、ちょっとだけ時間をくれる？　この街の住人に、少しだけ恩恵を与えていってあげたいの」
そんな事を言って来た。
「いえ、里にはまだ行かなくていいですよ。私なら大丈夫、大丈夫ですから……！」
未だ頑なめぐみんの言い分を無視し、俺はアクアにコクリと頷いた。

やがて、観念した様に大人しく付いてくるめぐみんを引き連れて、アクアは女性信者が嬉々として魚を獲っている湖へと、服を着たまま入っていく。

「「「「!?」」」」
それを見て驚く俺達と、魚を獲っていた女性信者。

それを見て合点がいった。
あいつはこの水の都の一番の売りである湖を、綺麗に浄化していくつもりらしい。
そのまま湖の中に遠慮なく入って行き、やがて……、
……って、おいバカ!

「「ええっ!」」

ダクネスとめぐみんが同時に叫ぶ。
アクアが、完全に頭の先まで湖に潜って行ったのだ。

そういえば、あいつは以前、アクセルの街のそばの汚染された湖を浄化する際に、ずっと水の中に居ても不快感も感じず、それどころか水中で呼吸も出来るとか言っていたな。
しかし、この三人の前で堂々とそんな異常体質を披露してどうするんだ。

ダクネスがオロオロと、
「カ、カズマ! アクアが湖の中に! 溺れてしまうぞ!」
そんな事を言いながら自分も湖に入ろうと……。
する前に、女性信者が事もなげに言ってきた。
「アクシズ教のプリースト様なら、水の中で呼吸できる支援魔法が使えますよ?」
その言葉にダクネスとめぐみんがホッとする。
アクアが水に入る前に魔法なんて使っていなかった事には誰も突っ込まないらしい。

そうして、アクアは湖に沈み込み、そのままジッと動かなくなり……。

一時間後。

俺はアクアが沈んだ辺りに石を投げ込んでいた。
石を投げ込んでも水がクッション代わりになり、湖の底で動かないアクアに届く頃には威力は失っている訳なのだが。
つまるところ、上がって来いという合図を出してる。
湖の底にいたアクアが、上から沈んでくる石をうっとおしく思ったのだろう。
やがてアクアが底から浮かび上がり、湖から頭だけをプカリと出した。

「……何よ。石なんか幾ら投げ込んでも、金には変えてあげないわよ。私は湖の女神じゃ無いんだからね」
「くだらない事言ってないで周りを見ろ！」

俺の言葉に、アクアがキョロキョロと周囲を見ると、
「ねえカズマ！　魚が！　さっきよりも大量の魚が浮いてるんですけど！」
「この姉ちゃんの話だと、ここの湖の底には岩塩があって、湖の水は大量の塩分を含んでるんだと！　ここの魚はそれに適してるのにお前が淡水に変えていくから、魚が浮いてきてるんだよっ！　ここの所余計な事しないなと思ったら、よりにもよって環境破壊とか！　お前は大人しくしていると、その分災厄が溜め込まれるのか！

原泉をお湯に変えただけじゃ気が済まなかったのかお前は！」
「良かれと思ってやったのに！　良かれと思ってやったのに！！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆

ダクネスとめぐみんが、俺から離れた所で水から上がってきたアクアをタオルでかいがいしく拭いてやる中、俺は、せっせと浮いた魚を集めていた女性信者に近付いた。

「えぇっと……。すいません、色々と。俺達はちょっと急用が出来たので、もう行きます。浄化は途中で止めたから湖の生態系が大きく変わる事は無いと思うんだけど。……ああ、それと。ガラスの弁償代を払っておくよ」

そう言ってサイフを出す俺に、両手のバケツに魚を一杯に詰め、満足そうな笑顔で女性が笑う。

「ああ、お気になさらず。魚のお礼です、割れたガラスは、ゼスタ様が帰って来たら、エリス教徒にカチコミされたとでも言っておきましょう」

それはダメだろう。

「いやいや、ちゃんと払う、払うよ。罪の無いエリス教徒にとばっちり食らわせないでくれ」

そんな俺の言葉に信者は笑い……。

「いえいえ、アクア様のお連れ様から、お金なんて頂けませんし。エリス教徒に色々罪をおっ被せるのは何時もの事ですので。それに、先ほどの爆発でも、誰も警察の人も駆けつけては来ないでしょう？

この街ではこの程度の事は、もう日常茶飯事ですから。警察は、通報を受けない限りはこの街では動きませんよ。きっと詰め所でお茶でも飲みながら、こう言ってます。またあいつらか、って」

本当に、この世界から蒸発すればいいのにアクシズ教団。

……あれっ。

「……あいつ、お姉さんに名前名乗ったんですか？　アクアって」

名前は偽名を使えと言ったのに。

だが女性信者は首を振り。

「いえいえ、まず、水の中で呼吸が出来る魔法なんてありませんし。それに、水に入っただけで浄化できるだなんて、アクシズ教のアークプリーストだろうが無理ですよそんな事」

言って慈しむ目で、未だ長い髪をタオルで拭われているアクアを眺めた。

女神だと分かっていたのか。

ダクネスとめぐみんがアクアの正体を知らない事に気付き、色々と気を使ってくれたのかこの信者は。

それに、と女性は間を置いて。

「私達がアクア様を見て、分からない筈がないじゃ無いですか！　お美しい青髪、類稀なる美貌、何にでも好奇心旺盛で、やる事なす事空回りしそうなあのフワフワ感。あの、一人では放って置けないダメな感じ……。最初に転送されてきた時にアクア様を見た女性信者が、あれは間違いない、女神様が下界に遊びに来られたと触れ回りまして。この街の信者達は皆慈しむ目でアクア様を見守っておりますよ。……どうか、あなた方の旅に加護があらん事を。……いつの日かアクア様がまたこの街に来て、私達を頼って頂けたその際には、アクシズ教団の力と結束を見せてさしあげますよ」

そう言って、ニコリと笑う女性を見て、なぜか俺は本能的にブルッと震えた。
それならアンタ方、紅魔の里まで送ってくれないかと言おうとしたが、なぜか余計に悪い事が起こりそうで言い出せなかった。
なんかもうここは絶対関わりたくない。

「ねえカズマ、何時まで話し込んでるの？　めぐみんの里に行くわよ？　……ええっと、それじゃあ、あなた！　ゼスタってあのおじさんによろしくね。汝に女神アクアの加護があらん事を！」

アクアの言葉に女性信者が恭しく頭を下げ、俺達を笑顔で見送ってくれた。

そのまま教会を後にして、街の中を歩いて行く。
あの信者が言う様に、街の者は誰もがアクアを遠巻きに見てそ知らぬ顔で通り過ぎ、アクアに気付かれない位置に来ると、そのまま慈しむ様な目で見守っている。

……本当に変な街だ。

そんな連中をキョロキョロ見ている俺を、めぐみんが見上げてきた。

「カズマ、本当に良いんですね？　紅魔の里は危険な場所です。もう、道中後悔しても知りませんよ？」
「このいかれた危険な街に来て免疫付いたよ。俺の中ではこの街に負けず劣らずな里だと期待している。期待を裏切るなよ、頼むぞ」

「お、おい、善良なウチの里をこの街と比較するのは止めて貰おう

か！　危険と言うのはこの街の中の様なロクでもない意味での危険じゃない！」

12話

危険な紅魔族の里へは乗り合い馬車は出ていない。
そこは商隊で群れを成して向かう事も出来ないぐらいに危険な場所なのだとか。
なにより、紅魔の里の連中はテレポートの魔法で街々を自由に行き来ができる。
今更商隊が危険を冒してまで向かう必要が無いと言う訳だ。

「里までは徒歩で三日。道中危険なモンスターが生息していますが、その辺はカズマの敵感知スキルが頼りですね」

街で魔法を放ってしばらくして、顔色が平常に戻ったためぐみんが言った。

アルカンレティアを後にした俺達は、今は整備された街道を歩きながら紅魔族の里へと向かっていた。
現在の時刻は昼の三時ぐらいか。
危険なモンスターがわんさか居る中での野営は正直言ってかなり怖い。
だが今はそんな事も言っていられないだろう。

「おいめぐみん、少しでも体を休める為に、休憩はマメに取るぞ。……いよいよ辛くなったら言えよ、おぶってやるから。……アクアが」
「私なの!?　ねえ、こういう時は格好よく男のカズマが背負ってあげるものじゃないの!?　それで、体が弱った所に優しくされて、めぐみんがクラッとくるのが王道じゃないの!?」
ダクネスを先頭にして、俺、めぐみん、アクアの順に街道を行き

ながら。

「普通の体力と筋力しか持たない俺と、頭と運以外は高ステータスなお前。どっちが背負った方が早く着くかは明白だろうが。ついでに言っとくけど、もしめぐみんを背負う時は、俺もめぐみんも両手が使える様に、ロープで縛って完全に荷物状態にするからな」

「な、なんて色気もクソもない……。いえ、私も荷物扱いなそちらの方が助かりますが。でも、大丈夫ですよ、まだまだ頑張れますから」

そんな事を言い合いながら、俺達はある小さな林に差し掛かった。

そこには……。

「あれ？　誰かいるわよ」

アクアの言葉に、俺達はそちらを向く。

すると、林の入口に出っ張った岩、そこに腰かけた緑髪の少女が、こちらに気付いた様に手を振ってきた。

こんな所に一人で？

……と、その少女の足元に目がいった。

少女は右足の足首に血の滲んだ包帯を巻き、それをチラチラと見ては痛そうに顔をしかめる。

そして、その少女は上目遣いでこちらを見た。

……なんと言うか。

……この世界は、何と言うか本当にロクでもないな！

「怪我してるじゃない、ねえあなた、大丈夫？」

言って、ホイホイと少女に近寄ろうとするアクアの肩を、ガッと掴んで引き止めた。

その行動に、アクアはおろかめぐみんとダクネスも俺も見る。

「敵感知スキルにモンスターの気配をビリビリ感じる。敵意なんか

は感じないけど、あれ、擬態したモンスターだわ」
「「「えっ」」」

俺は悲しそうな顔でこちらを見る少女の視線を無視し、少女を遠巻きに見ながら、アクセルの街のギルドから貰った、紅魔の里までのモンスター分布地図を見る。
水の都アルカンレティア。
そこから紅魔の里までの間に生息しているモンスター。
その分布図から、この少女に該当しそうなモンスターを探すと……。

……見つけた。

安楽少女とか言うのが、多分こいつの名前なのだろう。
それを読み進める俺を尻目にアクアが言った。

「ねえカズマ、なんかもの凄く悲しそうな目でカズマを見てるわよ。なんか私、あの子にヒール掛けてあげたい気分なんですけど」

そんな事を言い出すアクアの肩を掴んだまま、俺は安楽少女の説明欄を読んでいく。

『安楽少女。植物系のそのモンスターは、物理的な危害を与えてくる事は無い。……が、通りかかる旅人に対して強烈な庇護欲を抱かせる行動を取り、その身の近くへと旅人を誘う。その庇護欲は強烈で、一人旅をしている者は一度引っ掛かると、止めてくれる者が居ない為、そのまま死ぬまで囚われる事となるだろう。一説には、このモンスターは高い知恵を持つのではとも言われるが、定かではない。……このモンスターを発見した冒険者グループは、辛いだろうが是非とも駆除して欲しい』

「おいカズマ。な、なんだかこちらを泣きそうな顔で見ているぞ。本当にモンスターなのか？　あれは……」
　ダクネスが、珍しくオロオロしながら言ってきた。

『このモンスターの傍に居る間は、酷く安心した笑顔を浮かべる為、とにかく離れる事が難しい。離れようとすれば泣き顔を浮かべてくる。善良な旅人ほど、このモンスターに囚われ易くなるので注意されたい』

「カ、カズマ、あの子が、目尻に涙を浮かべて泣き出しそうなのを必死に堪える様な笑顔で、バイバイと手を振っているのですが。ちょっと抱きしめてきたらダメでしょうか」
　俺は掴んでいたアクアから手を離し、代わりに、そんな事を言い出しためぐみんの襟首を掴んだ。

『一度囚われると、そのままそっと寄り添ってくる為脱出は困難。そして、本来ならば腹でも減ればその場から立ち去ろうとする物なのだろうが、この少女の危険な所は、自らに生えている実の部分を、痛そうにしながらももぎ取り、それを旅人に笑顔で分け与える所にある。実の味は非常に美味で、腹も膨れる。……が、このモンスターの実は殆ど栄養素を持たない為、いくら食べても意味が無い。旅人は、自らの実を千切って痛がる少女を前に、良心の呵責からやがて食事をする事すらなくなり、栄養不足で死ぬ』

「くっ……！　たとえモンスターと言えども、怪我をしている相手を放って置くのは……」
　耐え切れなくなったダクネスが、安楽少女に近付いていく。
　物理的な危害は与えてこないと書いてあるので、俺はダクネスを

放って続きを読んだ。

『安楽少女の差し出す実を食べ続けると神経系に異常を来たす成分があるのか、やがて空腹や眠気、痛み等、体への危険信号が遮断され始める。その為、寄り添う少女と共に幸せに夢見心地で衰弱して死んでいく。年老いた冒険者が安らかな死を求め、このモンスターの生息地へ向かう例も見られる事などが、安楽少女と呼ばれる由縁である。……その後、安楽少女は死んだ旅人の上に根を張り、旅人を養分とする。安楽少女自体は栄養価が低く、植物型モンスターでもある為に、他のモンスターに襲われる事は少ない。そして、安楽少女を倒して得られる経験値は非常に高く……』

……俺は、そこで読むのを止めた。

いつしか俺の手を離れていためぐみんが、アクアと共に少女の下へと駆け寄っていく。

みんな、相手がモンスターだと聞いてまだ安易に触れようとはしないものの、それでも一様にソワソワしていた。

安楽少女がそんな三人を見て、不安そうな、それでいて、ひょっとして傍に居てくれるの？

という、淡い期待を込めた目でジッと三人を見つめていた。

三人はその目に完全にやられた様に、ソワソワしながら手をわきわきさせている。

「一応物理的な危害は加えてこない植物系のモンスターみたいだ。その保護欲で旅人を足止めして、餓死させてそこに根を張るんだと」

俺の言葉を聞き、三人は安楽少女に駆け寄った。

足止めして餓死させるって所、ちゃんと聞いてたか？

「今傷を治してあげるからね！　……あれっ？　これって怪我じゃ無いのね。包帯じゃなくて、そんな感じに見える様、擬態してるんだわ」

アクアの言葉に俺も近寄って少女を見る。
街の普通の子みたいな服装をしている安楽少女。
靴は無く、裸足の姿で、みんなに囲まれ嬉しそうにニコニコしていた。
よく見ると、腰かけている岩も擬態した体の一部なのだと気付く。
と言うか、腰かけている岩の後ろから枝のような物が伸び、それから小さな実が生っていた。
その着ている服の様な物も、血が滲んだ包帯も、それらは全て人を引きつける為の植物の擬態なのだ。
怪我して動けない少女を装うとか、なんてタチが悪いんだ。

そんな俺の想いを他所に、三人が安楽少女をチヤホヤしだした。
めぐみんがそっと手を差し出すと、安楽少女は差し出されたその手を、握ってもいいのかな？　と不安そうにめぐみんの顔色をうかがいながら手を伸ばす。
そして、めぐみんの手をぎゅっと握ると、心底嬉しそうにぱあっと表情を輝かせた。

アカン。

今のその表情に、三人は完全にやられたようだった。
紅魔の里は危険だと聞いていたが、違う意味で危険なモンスターだ。
モンスター分布図に書かれていた注意書きを思い出す。

『一人旅をしている者は一度引っ掛かると、止めてくれる者が居ない為、そのまま死ぬまで囚われる事となるだろう。このモンスターを発見した冒険者グループは、辛いだろうが是非とも駆除して欲しい』

俺は安楽少女の前に立つと、静かに剣を引き抜き……、

「ちょっと何する気よカズマ！　あんた、まさかこの子を経験値の足しにするとか言う気じゃないでしょうね！」

そんな俺を見て、アクアが安楽少女を庇う様に抱きしめながら食って掛かってきた。

いや待て女神、そいつはモンスターだ。

しかも人の命も奪う系の。

ソロの旅人だと大変危険らしい、ヤバイ奴だ。

「ま、まさかこんな女の子の姿をしたモンスターを、傷つける気ではないですよね？　カズマは、鬼畜だの外道だのと評されていますが、何だかんだで仲間想いですし、優しい所があるのは知ってます。しませんよ、そんな事。……しません、よね……？」

めぐみんが安楽少女の手を握りながら、訴えかける目で見つめてくる。

まるで、拾ってきた子猫を、保健所に連れてかないでくれと親に訴えかける子供の様に。

「……いや、カズマが駆除するべきだと判断したのなら、そうすべきだ。怪我をしていると思って駆け寄ってみれば、近寄ってみればこのモンスターは怪我なんてなかった。……とすると、よほど狡猾な擬態モンスターだと言う事だ。放置しておいたならば、今後余計な被害が出ないとも限らない」

言いながらダクネスが大剣を抜き、安楽少女に対して身構える。
すると、安楽少女が初めて声を出した。
子供の様な、舌ったらずな、聞き取り辛い声で。

「……コロス……ノ……？」

めぐみんの手を両手で握り締め、岩に腰かけたままダクネスを見上げながら、目に涙を浮かべて泣き出しそうな顔で、安楽少女はフルフル震えた。

喋るのかー……。

構える大剣をカタカタと震わせ、安楽少女と全く同じ表情でダクネスが俺を見た。
お前までそんな目で見てきてどうする。

動かなくなったダクネスを押しのけて、俺は抜き身の剣を片手に安楽少女の前に立つ。
それを見て、アクアが安楽少女の前に立ち塞がり、ボクサーのシャドウでもするかの様に俺にジャブを繰り出し警戒する。
不安そうな顔で、手を握るめぐみんを見上げる安楽少女は、そのまま恐る恐る俺を見た。

「……コロス……ノ……？」

涙目で俺を見ながら首を傾げる少女を見て、心の深い所を抉られる。
三人が、そして一匹のモンスターが俺を見つめる。

しっかりしろ、このモンスターは人の命を奪う。
放っておけば、知らない所で誰かが犠牲になるのかも知れない、

別に綺麗ごとを言うつもりじゃ無いが、これって、放置した方が悪なんじゃないのか？
それとも、退治する方が悪なのか？

ぐううううう、なあああああああー！

剣を地面に突き立て、頭を掻き毟って迷う俺を見て、アクアが言った。
「カズマ、迷っている時に出した決断はね、どの道どっちかを選んだとしてもきっと後悔するものよ。なら、今が楽な方を選びなさい」
なんて助言だ、ダメ人間の考えじゃないか。
だが待って欲しい、俺がこの安楽少女を見逃せない理由はもう一つ。

めぐみんの事だ。

万が一と言う事でドレインタッチスキルを教えては貰ったが、ぶっちゃけスキルポイントが足りなくて覚えていない。
だがこの安楽少女は、強敵ばかりウロウロする紅魔の里近辺で生き抜くモンスター。
アクセルの街近辺のモンスターとは、比べ物にならない経験値が貰えるだろう。
と言うか、さっきのモンスター分布図にも高経験値が得られると書いてあった。

と言う事は、この弱そうなモンスターをここで狩っておけば、いきなりスキルが覚えられるぐらいにはレベルが上がるかも知れない。
葛藤する俺を、三人が見詰めている。
そして、不安げな安楽少女も。

俺には大義名分があるはずだ。
このモンスターを狩っておかないと、犠牲者が出るかもしれないという事。
そして、めぐみんの発作を押さえる為のスキルの習得。

俺は改めて少女の顔を見詰めると、安楽少女は首を傾げた。
あああ、くそっ、仕方ないんだ、許してください！
そう、人の姿をしていてもこれはモンスター、モンスター、モンスター……っ！

安楽少女が呟いた。

「クルシソウ……。ゴメンネ、ワタシガ、イキテル、カラダネ……」

そう言って、安楽少女は儚げに微笑んだ。

「ワタシハ、モンスター、ダカラ……。イキテイルト、メイワク、カケルカラ……」

安楽少女は少しだけ涙を浮かべ。
「ウマレテハジメテ、コウシテニンゲント、アウコトガデキタケド……」
そして、微笑んだ。
「サイショデ、サイゴニアエタノガ、アナタデヨカッタ。……モシ、ウマレカワレルノナラ……。ツギハ、モンスタージャナイト、イイナア……」
そう言って、観念するかの様に両手を胸の前で組み、そのままそっと目を閉じた。

……出来る訳ねーだろ……。

安楽少女を見逃して、そのまま街道を歩いて行く。
もう知るか。
全く見知らぬ赤の他人の命の為に、あんな事を言ってくる女の子型モンスターを殺せるほど、俺は人命至上主義じゃない。
ああ、でもきっと、あの安楽少女はあそこを通る奴を惑わせるんだろうな……。

見逃した後も、みんなが散々後ろ髪を引かれる様な状態だったし。
アクアやめぐみんがなかなか先に行こうとしなくて大変だった。
ああくそ、見逃しても倒しても後味が悪いモンスターだなんて、なんてタチが悪いんだ。
でもあれだ、今日初めて人間に会ったとか言っていたし、とすると、あの子が手にかけた犠牲者はまだ誰もいないのだろう。
なら、見逃してやっても……。
良かったんだろうか……？

「でもカズマにもちゃんと人の心が残っていたみたいで良かったわ。経験値の足しになれとか言って、襲い掛かった後にティンダーで火

を付けるかと思ったもの」
「お前は常々、俺をどう思っているのかを話し合う必要があるな。お前らは、俺がそんな事はしないって分かってたよな？」
言いながら、俺はダクネスとめぐみんを見ると……
「「……」」
二人は無言で、気まずそうに目を逸らす。

……俺をちゃんと理解してくれる様な、そんな優しい仲間が欲しい。

……。
あれっ？
「……おいちょっと待て。やばいんじゃないのか、この道に安楽少女が居るってのは」

優しい仲間、で、俺はある一人の女の子の事を思い出した。
それは、唯の見間違いだったのかも知れないが、温泉の街ドリスの転送所で、アルカンレティアに送られる瞬間に見たあの子の姿。
友達がいなくて、寂しがりで、人一倍まわりに気を使うあの子。
俺の見間違いではなかったら。
そして、あの子は、めぐみんを助ける為に紅魔の里へと向かっていたのだとしたら。
安楽少女は俺達に、人間に会ったのは初めてだと言っていた。
つまり、もしあれが本当にゆんゆんだったなら、まだこの道は通っていない訳で……！

「……？　どうしたの？　そんな青い顔して。お腹でも痛くなったの？　そこに茂みがあるわよ。ちょっと離れててあげるから行って来なさい」
「違うわ！　おい、お前らちょっと先行っててくれ！　俺はあの安

楽少女の下へ行って、ちょっと話をしてくる！」
俺はそう言って、すぐさま来た道を駆け出した。
「えっ、ちょ、ちょっとカズマ！」
慌てるアクアの声を聞きながら。

まだ、安楽少女と別れてから五分と経っていない。
走ればすぐ着くはずだ。
身勝手な事かも知れないが、あの少女に頼んでみよう。
赤い目をした女の子がこの道を通っても、手を振ったり笑いかけたりしない様に、と。

俺は走りながら尚も考えた。
そうだ、もし説得が効くのなら、もう旅人を誘うのを止めてくれと頼んでみてもいい。

……そうだ、そうだ！

アルカンレティアの街の教団関係者に頼み、あの優しいモンスターが人を襲わずに済む様に、養分になる物を、定期的に届けてもらうとか……！
なんならエサ代ぐらい、出したって構わない……！

俺は嬉々として来た道を駆け戻り、その考えに満足し……！

そして、先ほどの場所に戻ると、誰かと話をしている安楽少女の姿を見つけた。
俺はすぐさま潜伏スキルを使い、千里眼を用いて様子をうかがう。

それは一人の木こりの様な男だった。

アルカンレティアに住む木こりだろうか。
それが斧を手にして安楽少女に歩いて行く。

ヤバイ、あの男はあの優しいモンスターを駆除する気か……！

俺は潜伏は解かないままに、そのまま身を低くして近寄ると、そっと聞き耳を立てて様子をうかがう。

すると、男の声が聞こえてきた。

「ああ……。くそっ、なんて事だ……。すまない、すまない！　勘弁してくれ！　お前さんを見つけたら駆除しなきゃいけないって、木こりの決まりなんだよ……！」

それは泣き出しそうな木こりの声。

ヤバイ、安楽少女をやる気か！

俺は慌てて潜伏を解こうと……！

「ワタシハ、モンスター、ダカラ……。イキテイルト、メイワク、カケルカラ……」

解こうとしている俺の前で、先ほど聞いたのと同じセリフを、

「ウマレテハジメテ、コウシテニンゲント、アウコトガデキタケド……」

一言一句間違える事無く、

「サイショデ、サイゴニアエタノガ、アナタデヨカッタ。……モシ、ウマレカワレルノナラ……。ツギハ、モンスタージャナイト、イイナア……」

安楽少女は木こりに言った。

……。

「あ……。ああ……。出来ねえ。俺には出来ねえよ、畜生ーっ！」

木こりは叫ぶと、そのまま背を向けて走り出す。

俺は呆然と、そのまま潜伏スキルを解く事もなくそのまま木陰に無言で佇んでいた。

……あれっ。

最初に会ったの俺達だって言ってなかったか。

「……あーあ、また失敗か。今の木こり、肉付き良くていい養分になりそうだったのに……」

木こりが居なくなった後、流暢な独り言を呟く安楽少女の声を聞き。

……俺は、安楽少女の背後に回り、潜伏スキルを解除した。

だが安楽少女は、まだ俺に気付く事無く、

「……くああ……っ。くっそ、エサ来ねーなー……。曇ってるけど、光合成でもするかぁ……。あーめんどくさ……」

ブツブツと呟きながら、太陽の光を全身に浴びるかの様に、その体をうーん、と伸びをして……。

そうして背を反らして、真後ろにいた俺と目が合った。

「「……」」

お互い無言で見つめ合い、やがて安楽少女がぽつりと言った。

「イマノハ、ナカッタコトニハ、デキマセンカ……？」

「お前流暢に喋ってただろうが、ボケがあああああっ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺がアクア達を追い掛けると、三人は俺を待っていたのか先ほどの場所で休んでいる。

駆け寄る俺の表情を見て、アクアが笑い掛けてきた。

「なんかスッキリした表情ね！　どうしたの？　あの子と何かあった？　そもそも、何しに引き返したの？」

ニコニコするアクアに、俺は嬉々として冒険者カードを見せつけた。

「見ろよこれを！　一気にレベルが三つも上がって、新スキル、ドレインタッチが使える様になったぜ！　これでめぐみんの急な発作の時にも少しは役に立てるだろう！」

俺のその言葉に三人が凍りつく。

そして……。

「わっ……わあああああーっ！　カズマの外道！　鬼畜外道っ！　あんたはバニルが可愛く見えてくるぐらいの悪魔だわっ！」

「あ……ああ……。あああああ……。私の所為……。カズマはきっと、私の体を心配して、スキル習得の為にあの子を殺したんです……。ああ……、カズマ、カズマ！　仲間想いなのは良いけれど、これは……！　これでは、幾らなんでもあんまりな……！」

いや待って欲しい。

「……」

と、阿鼻叫喚な二人とは逆に、ダクネスだけは静かに俺を見ていた。

……？

そんなダクネスに首を傾げると、

「辛かっただろう？　……お前は、冒険者の義務を果たしたんだ。スマナイ、お前にだけ嫌な役割を押し付けて……」

辛そうな、真面目な顔でそんな事を……。

三人に説明するのに、小一時間が掛かりました。

夜の帳が下りる頃、街道沿いの地面の上に、寝やすい様に大き目の石を取り除いた後、寝そべる為の布を敷く。

レジャーシートぐらいの大きさのそれは、まあ、使用法はそのままレジャーシート代わりだ。

この辺りはモンスターが強いと聞くので、灯かりを目印に寄って来られても困るので火は焚かず、暗闇の中、身を寄せ合って眠る事に。

広げた布の中央に全員の荷物を置き、それに全員が背を預け、闇の中、みんなで身を寄せてゆったりとくつろいでいる。

今日は曇っている所為か、星の灯かりも見られない。

俺は千里眼スキルによる暗視と敵感知スキルにより、闇の中でも危険は察知出来る。
こんな状況なので、今日の見張りは俺だけ。
めぐみん以外の二人には寝てもらう事にした。
めぐみんには、頑張れるだけは起き続け、耐え切れなくなったら眠るのでよろしくと言われた。

「……カズマ、本当に大丈夫なのか？　めぐみんもほとんど寝ていないが、実はお前もあまり寝ていないだろう。野宿では大概お前が一番多く見張りをしている訳だし」
ダクネスが、闇の中そんな事を言ってくる。

「気にすんな。スキル的に、俺が起きて他は寝ている方が良い。……それに、俺は徹夜には強いという特性を持っているんだよ。俺が住んでいた国では、徹夜なんてしょっちゅうだったからな」

その、俺の言葉にめぐみんが。

「そう言えば、カズマが住んでいた国の話が聞きたいですね。ジッポみたいな、便利な道具がたくさんあったりする国みたいですが。カズマがそこで、どんな暮らしをしてきたのかが気になります。徹夜に強いだなんて、一体どんな暮らしをしていればそんな特性が身に付くのか……」
めぐみんのその言葉に、ダクネスも興味があるのか、隣でこちらをうかがう気配がする。

どんな暮らし……、か……。
静かな静かな闇の中。
平和な日本での日々を思い出していた。

そして、ゆっくりと語り出す……。

「そうだなあ……。俺は、国じゃあランカーだったんだ」

「「……？　らんかー？」」

めぐみんとダクネスが、同時に言った。

この世界じゃランカーは分からないか。

「言ってみれば、上位者って事だ。仲間達には、レア運だけのカズマさん、だの、インしたらいつもいるカズマさん、だのと……。まあ、頼りにされていたな。戦友達と一緒に他ギルドへの城攻めとか、楽しかったなぁ……。徹夜なんて当たり前。ロクに食事も取らず、連日、二時間ほど寝て、またすぐにモンスター狩りへと戻ったもんさ……」

その言葉に、俺の隣で驚嘆のため息の声が聞こえた。

「す、凄いな……。城攻めだの、連日のモンスター狩りだの……！　なるほど、カズマがこれだけ機転が利くのはそういう事か……！　す、凄いな……っ！」

顔は見えないが、ダクネスが、なんだか尊敬する様に目を輝かせていそうな口調で、興奮しながら言ってくる。

「カズマは、本当に何者なんでしょう。深く詮索しない方がいいんでしょうね……。普段なら信じられない様な今の話。ですが、なぜか全く嘘を言っている気配が感じられませんでした。今のカズマからは、強い自信と確かな懐かしさを感じました……」

めぐみんまでもが、静かにそんな事を言ってきた。

俺の真後ろに位置するアクアが言った。

「ねえカズマ、ここぞとばかりに思い切り突っ込んでもいいかしら」
「止めてくれると助かるかな」

13話

日が暮れて、もうどれぐらいの時間が経ったのか。

「……二人はもう寝たみたいですね」

「だな。……めぐみんも、少しは寝られるんだろ？　熱を出したり異常があれば凄い事して起こしてやるから、辛けりゃ寝ろよ」

ダクネスとアクアの静かな寝息を聞きながら、俺とめぐみんは小さな声で言葉を交わす。

「……その、凄い事って本当になんなのでしょうか。仲間の一線は越えちゃいけませんよ？　大丈夫ですよね？」

「男って生き物はな、越えちゃいけないなんて言われる壁があると越えたくなるもんなんだ。……そう、大きな山ほど越えたくなる。あれと同じだ」

「違います、違いますよ！　そんな前向きな良い話と一緒にしないでください！　カズマの隣にいるのが危険な気がしてきました！」

興奮しためぐみんの言葉にアクアが寝返りを打つ。

「「……」」

起こしてはまずいと、思わず二人で黙り込み静まり返る。

やがて聞こえてくる静かな寝息。

それを聞き、安心した様に息を吐いた。

「そう言えば……」

めぐみんが、小さな声で。

「そう言えば、先ほど二人が寝る前の話ですが……。カズマは、ここじゃない国から来たんですよね？　……その。カズマは、国に帰る事は考えないんですか？」

そんな事を、ちょっと、恐る恐るといった感じで尋ねてきた。

「考えた事も無かったな。というか、帰れないんだよ、どう考えても。まあ、国に帰ってものんびりした元の生活に戻るだけだしな。最近は、今の暮らしも悪くない気はしてきた。紅魔の里から帰る辺りには、領主に取られた俺達の金も清算されて戻ってくる頃じゃないか？　そうなると、一気に金持ちだ。みんなでのんびり暮らそうぜ」

この世界でニートやるのも日本でニートやるのも大した違いは無い。

親に迷惑掛けるか掛けないか。

後は、パソコンがある代わりにサキュバスサービスが無いか。

そんな程度の認識しかない。

親の顔ぐらいは見たい気はするが、俺はもう日本じゃ死んだ事になってるしなあ……。

その言葉にめぐみんが、安心した様に息を吐いた。

「そうですか。……私も今の暮らしは気に入ってるのでこのままがいいです。……ちょっと安心したら眠くなってきました……。少しだけ、眠ってもいいですか？　と言うか、魔力容量が一杯になる前に起きたいんです。危険な道中、魔法を撃てる様にはしておきたいもので。私がちょっと熱くなってきたら、起こしてください」

そう言って、隣に寄り添うめぐみんが俺の左手をギュッと握ってきた。

めぐみんのひんやりした手。
それを握り返しながら、俺は。
……なぜか急に緊張していた。
やだ、なにこれ甘酸っぱい！
どうしよう、女の子にこうして手をギュッとされるのは小学校以来だ。
昔の甘酸っぱい記憶を思い出す。
俺の初恋の女の子。
小学生の頃、大きくなったら結婚しようねと言ってくれたあの子は、高校一年の頃。
年上の不良と出来ちゃった婚をして学校を辞め、今では二児の母になった。
その間俺はと言えば、日々高みを目指し、寝る間も惜しんで努力し、モンスター退治に明け暮れて、いつしか俺の名を知らない人間の方が少ない高みに上っていた訳だが……。
そんな、人生の大事な時を自己鍛錬に費やして、高校生活とかを無駄にしてきた俺が、今こうして、肩を触れさせるぐらいに近くに座る、美少女と手を握り合っている。
なにこれヤバイ、緊張してきた。
キュンキュンしてきた！
なに！？　こう言う状況ではどうしたらいいの？
誘ってんの？　気の利いたセリフの一つでも言えばいいの？
俺は、意を決して気の効いたセリフを吐こうとして……。
気が付いた。

「……すかー……」

そんな俺の緊張と葛藤を他所に、よほど疲れていたのかめぐみんは、すぐに静かな寝息を立てていた。

……なんだよもう、誘ってんのかハッキリしてくれ！

女にあまり免疫の無い童貞は、手を握られると高確率で意識してしまうって事、知らないのかよ！

めぐみんが寝付いてどれ程の時間が経ったのだろうか。

それはめぐみんの手を握る俺の手の平がじっとりと汗をかき、手を拭きたいなー、でも手を離すのも嫌だなと、しょうもない事で葛藤していた時だった。

それは、遠くから。

敵感知スキルにより、僅かにモンスターの気配が感じられた。

火は焚いてはおらず、星明かりも無い闇の中、夜行性のモンスターと言えど俺達を見つけられるとは思えないのだが……。

それでも念には念を入れて、闇の中、めぐみんだけではなく全員に触れ、潜伏スキルを使用した。

これで、そうそう見つかる事はないと思うのだが。

……だが、敵感知で感じられるその気配は、明らかにこちらを目指して向かって来ている。
今の時刻は多分、あとしばらくすれば夜が明けてきてもおかしくない程の深夜遅く。

そこで、俺はモンスターの正体に気が付いた。
きっと、アクア目当てのアンデッドだ。
アクアと二人でダンジョンに潜った時も、確か潜伏スキルが作用せず、大量のアンデッドにたかられた。
仕方ない、アクアを起こすか？

いや、ゾンビ一体くらいなら、こいつらを起こさず俺一人で倒してきてもいいのだが。
と言うか、こいつらを起こして戦うとなると、灯かりを付けて戦わないといけなくなる。
それは新たな他のモンスターを呼び寄せるかもしれないし、何より灯かりに照らされるアンデッドのインパクトは酷いものがある。
ゾンビ相手ならば、極力、サーモグラフみたいな感覚で敵の姿を捉えられる、千里眼スキルの暗視状態でやり合いたい。

街道のわきに野宿をしている訳なのだが、今いる所はまばらに木が生え、敵感知スキルで気配を感じる方を見ても、今一姿がよく見えない。
小さな人型なら、弓で何発か狙撃して倒してしまおう。
大きな人型なら、嫌だが、接近して剣で……。

そう考えながら、静かにそれが近付いてくるのを待っている。
だが暗視では、なんだか蠢いているなーぐらいにしか形が把握出来なかった。

もう結構近付いてきている感じなんだが……。

ズルッ。

それは、何か湿った大きな物を引きずる音。

ズルッ。

それは少なくとも、ゾンビ程度の大きさの生き物が立てる音じゃ無い。

何だか嫌な予感がし、やむなく皆を起こす。

「おい、何か来てる。多分だが、アンデッドだ。……おい、起きろって。アクア、アクア！」

ダクネスとめぐみんがすぐに目を覚ますが、こんな時に一番必要なヤツが目を覚まさない。

重い鎧で歩き続けるダクネスや、連日見張りをする俺、ほとんど眠れないめぐみん。

そんな中、一番軽装で旅をし、一番寝こけているこいつはなんなのか。

ズルッ。

その重い音に、剣を抜き、暗闇に向けて身構える。

「おい、そこのアホを起こしてくれ！　あと、なぜか暗視じゃ敵の輪郭が捕捉出来ない。灯かりを付けるぞ！」

ダクネスが大剣を鞘ごと引き寄せて立ち上がり、めぐみんがアクアを揺さぶる。

「アクア、アクア！　起きて下さい、アンデッドだそうですよ！」

めぐみんの声に、アクアは動こうともせず。

「眠いからー……、今日の所は見逃してあげるわって言っといてー……」

「このクソバカが、寝ぼけてんじゃねえ！　お前目当てに寄ってきてるんだよ、とっとと起きて何とかしろっ！　『ティンダー』ッッッ！」

いつもより魔力を込めて、大声で着火の魔法を前方の地面に向けて唱える。

火種の無い地面に突然灯った魔法の灯かり。

大量の魔力を込めたとはいえ、それはすぐに消えてしまうだろう。

灯かりに照らされたソレを見て、なぜ暗視で視認しきれなかったのかを理解した。

とっくに視界に入っていたのだ。

相手の輪郭が分からなかったのは、ただ端に、ソイツが大き過ぎただけだった。

「あっ……あわわわ……、どっ……、どどど、どっ……！」

めぐみんがソレを見て、挙動不審にうろたえた。

普段は強敵相手だと嬉々として突っ掛かっていくダクネスが、ソレを見てゴクリと喉を鳴らす。

「……は、早くアクアを……。ア、アクアを起こしてくれ……」

俺はソレを見ながら呆然と呟く。

「――――――――――ッッッッ！」

ソレが例え様のない音を出す。

多分、咆哮を上げようとしているのだろうが、既に声帯が腐り落ちているのだろう。
大きなアギトをガパッと広げ、その音を出そうとする度に、何かが辺りに吐き散らされた。
地に落ちて湿った音を立てる吐き散らかされたそれは、腐り落ちた体の一部だろうか。

「腐った死体とは言え、仮にもドラゴン。聖騎士として、これほどの誉れがあるだろうか！　めぐみん、カズマ、下がっていろ」
ダクネスが、大剣を抜いてその巨大なアンデッドに身構えた。

「――――――――――ッッッ！」
ダクネスからの敵意を感じ取ったからか、ソレは再び声にならない音を響かせ、巨体を引きずりこちらに向かって……！

「アクアーっ！　アクア様あああああーっ！　ドラゴンがっ！　ドラゴンゾンビが現れた！　早くっ！　頼む、早くアレ何とかしてくれえええええ！」

民家ぐらいならのしかかっただけで押し潰されそうなその巨大な体躯。
腐りかけた翼を広げると、その巨大な体が更に倍にでもなったかの様に映る。
ともすれば絶望のどん底に叩き落されそうな気分で俺はアクアに呼び掛けていた。

アクアがうるさそうにゴロンと寝返りを打ち……。
「んー……。ドラゴンゾンビぐらい……ゼル帝の手に掛かれば……」
「寝ぼけてないで起きろってんだよボケが、ドラゴンゾンビのエサにすんぞ！」

ドラゴンゾンビが、ダクネス目がけて飛び掛かった！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「『ターン・アンデッド』ッ！」
「――――――――――――――ッッッ！」
アクアの魔法を受けたドラゴンゾンビが、声にならない悲鳴を上げて光と共に浄化される。
アンデッドに対しては本当に頼りになる奴だ。
俺はアクアに感謝の言葉を言おうと……。

……？
いや待て、よく考えたらこのドラゴンゾンビを引き寄せたのはコイツだ。
しかも……。と、俺はめぐみんが揺り動かしている、地に横たわったダクネスを見る。

「ダクネス！　しっかりしてくださいダクネス！　傷は浅いです、目を覚ましてください！」
アクアがとっとと起きてサクッと浄化していれば、こうしてダクネスが気絶させられる事もなかった訳で。
「ふふん、ドラゴンゾンビと言えど、この私の敵ではなかった様ね。カズマ、私を崇め奉ってくれても良いわ……あああああーっ！？」
俺は無言でアクアの頬に触れると、ドレインタッチでアクアの体力と魔力を吸い取った。

「ちょっと、何すんのよ！　いきなりそんな事されたら抵抗出来ないじゃないの！」
その俺の手を振り払い、涙目のアクアが食って掛かる。
「抵抗されない為に不意打ちしたんだよ。見ろ、ダクネスの惨状を！　お前が呼び寄せたドラゴンゾンビだろ、呼ばれたらとっとと起きろ！　俺が見張りで眠れない間、紅魔の里に着くまではお前の体力分けて貰うからな？」
「ええっ！？　い、嫌よっ！　今は不意打ち食らったけれど、次からはスキルレベル１のあんたのドレインタッチぐらい簡単に抵抗してやるからね。本家リッチーのドレインですら抵抗した私から、吸えるもんなら吸ってみなさいな！」
どこまでも協調性の無い奴め！
俺はダクネスの元へ駆け寄ると、ティンダーでその周囲に灯かりを灯し、ダクネスの容態を見る。
俺がアクアを叩き起こしている際に、ダクネスはドラゴンゾンビの攻撃を一手に引き受けていたのだが……。
「『ヒール』！　……流石ダクネスねえ。ドラゴンゾンビは生前のブレス能力は無くなっているけれど、不死化してリミッター外れたその物理攻撃は、生前のドラゴンの力を越える事すらあるのよ？まともに正面から攻撃を食らって、良くクシャッってならなかったわね」
アクアがダクネスにヒールを掛けながら、そんな物騒な事を言ってきた。
よく考えたら、ダクネスがこうもアッサリ沈むのも珍しい。
それ程までに、この辺りのモンスターが凶悪だって事か。
……しかし、ドラゴンゾンビが居るって事はドラゴンも居るって

事なんじゃあ……。
いや、この辺りのモンスター分布図にドラゴンゾンビの名はあったが、確かドラゴンの名前は無かった。
大丈夫だと信じたい。
鎧の一部がひしゃげ、ぐったりとしているダクネスに、覆いかぶさる様にしてめぐみんが心配そうにくっついている。

……と、俺はある事実に気がついた。

「……参ったな。今の戦闘の魔法の光やティンダーの灯かりで、モンスターがこっちに向かって来ているぞ。敵感知にビンビン来てる。しょうがない、移動するぞ。荷物は俺が畳んで全員分背負っていく。アクアはダクネスを背負ってくれ」
「ええっ！　ダクネスを背負うって、鎧着たダクネス超重いんですけど！　それに、この暗い中移動するの!?」

俺はテキパキとみんなの荷物をまとめながら、
「自分に筋力増加の支援魔法を掛けてくれよ。あれ掛ければいけるだろ。ついでに、俺にも掛けてくれ。全員分の荷物を持つんだ、支援がないと、ちとキツイ。アクアはダクネスを背負ったまま、俺の右手を掴んでいてくれ。めぐみんは左手な。お前らの手を引きながら暗視で進むから、転ばない様に気をつけてな」

言いながら、みんなの荷物をよいしょと背負った。
ぐう……。流石に重い……！

「ええー。良いけど、一応筋力増加とかの支援魔法って諸刃の剣だからね？　一時的には増加されるけども、体を無理やり強化して思い切り酷使するんだから、後で筋肉痛とか酷いわよ？　体力が失われるのも早いし」

アクアがそんな事を言いながらも、自分と俺に魔法を掛けた。
そのままダクネスを背負い、俺の右手を掴む。
そして俺の左手を、めぐみんがスッと掴んだ。

鎧を着たダクネスを背負うアクアが歩く度、ガシャガシャと鎧の音がする。
曇り空の下の為、ほとんど星明かりも見られずに、暗闇の中を進んで行く。

「なんか、こうして真っ暗な中をカズマに手を引かれて歩いていると、二人でダンジョンに潜った時の事を思い出すわね。あの時はカズマに暗闇の中お尻触られそうになったんだっけ」
「根も葉もない噂を広めると、お前だけ置いて行くぞコラ」

闇の中、そんな事を言い合っているとめぐみんが吹き出した。
「ドラゴンゾンビに遭遇して、しかもこの危険地帯で他のモンスターから逃げている最中だと言うのに、なんでしょうねこの安心感は。二人と……いえ、みんなと居ると何が遭っても大丈夫な気になってきますよ」

めぐみんがそんな事を……、
って、あれっ!?

「おいお前、手が熱いぞ！　魔力が篭ってるんだろ！」
「ええ、今は丁度いい具合に魔力が溜まってますよ。魔法も使えるし、ボンッてならない状態です。こんな危険な場所ですから、魔法を放てる今の状態は維持したいです」
　何でもなさ気にそんな事を言うめぐみんは、先ほどはあれだけひんやりしていた手をホコホコさせて、杖で、見えない足先を探るようにしながら歩いている。
　いや、魔法撃てる状態ってのはありがたいんだが……。

「ねえめぐみん。無理せず魔法撃っちゃいなさいな。紅魔の里まで、急いだって後二日は掛かるんでしょ？　なら、もう一日はどうしたってまた野宿しなきゃならないのよ？　めぐみんが魔法使えなくても、カズマが何とかしてくれるわよ。今までだってどうにかなってきたでしょう？」
　おい俺に無茶振りすんな。

　だがめぐみんは、
「大丈夫です、耐えられます。紅魔族は魔法が命です。魔法が使えない紅魔族なんてお荷物以外の何物でもありませんしね。ちゃんとカズマの役に立ってみせますから」
　そんな事を言いながら、熱っぽいまま歩いていた。

　……そんなめぐみんの言葉に、俺は益々不安にかられた。

　なんかこいつおかしいな。
　こんなカッコイイ事言い出す奴だったか？

一体どれぐらいを歩いたのか。
最初は寄って来たモンスターから離れる事が目的だった夜間行軍だったが、めぐみんの様子が変なので、そのまま少しでも距離を稼いでいた。
ダクネスが目を覚ましたら、めぐみんは誰かが背負ってやればいい。
多少無理をしてでも、何だか一刻も早く里に向かった方が良い気がする。

ちょっとした焦燥感を抱きながら進む中。
その内段々と夜が明けて、空が白み出した頃……。
「……ん……っ？」
アクアに背負われていたダクネスが、ようやくその目を覚ました。

それを受け、俺達はちょっとだけその場で休憩に入る事に。

「ドラゴンゾンビは倒したのか。ここは……。そうか、すまない、不覚を取ったな……」
何となく状況を把握したダクネスに、一応ダクネスが気を失った後の事を説明しながら、俺達は朝食の用意を始めた。
空が明るくなってきたから、火が使える。
各自、荷物の中から思い思いに保存食を取り出すと、ティンダーで起こした焚き火で炙り出した。

コーヒーを入れながら干し肉を軽く炙っていた俺は、アクアが取り出した物を見て。
「おい」

思わず突っ込まざるをえなかった。
「なあに？　分けて欲しいなら、あんたの干し肉の良い部分をよこしなさいな」
「いらんわ。と言うか、煙や臭いが立つから魚の干物は止めろ、魚は。臭いでモンスターが来たらどうすんだ」
このバカは焚き火で干物を焼こうとしていた。

まさかとは思うが、保存食が全部魚だけだとか言わないだろうな。
「そんな事言ったって、私、魚の干物しか持ってきてないわよ。干物がダメならカズマの干し肉分けなさいよ。でも、朝は魚を食べたいんですけど……」
そのまさかでした。

俺よりも日本人臭い事言い出すアクアに、仕方なく炙っていた干し肉を渡してやる。
数日の日程だったので、本格的なカラカラに乾いたジャーキーではなく、ちょっとジューシーさが残っている干し肉だ。
何と言うか、サラミみたいな。
「……これかじってると、お酒が欲しくなってくるんですけど……」
「飲むなよ」
一応釘を刺しながら、改めて明るくなってきた辺りを見回す。

街道とは言え、アスファルトみたいな道路が敷設されている訳じゃない。
草木が処理されて歩き易いように整備されているだけだ。

そんな街道沿いには、まばらに木が生え、街道を離れればちょっとした林に出られる。
敵感知でモンスターの気配を感じたら、そういった林に逃げ込んで潜伏を使う予定だ。

ハッキリ言って、先ほどのドラゴンゾンビにダクネスがやられたのを見て思い知った。

この辺りのモンスターは俺達にはとても手に負えない。

正直、最初は不死王の手で状態異常にでもしてしまえばなんとかなるのでは、ぐらいに考えていたのだが……。

「……ねーめぐみん、魔法使っといた方がいいんじゃない？　顔が真っ赤よ？　それか、体力も一緒に持っていかれちゃうけれど、ちょっとカズマに魔力を吸ってもらうとか」

アクアが、俺が渡した干し肉をかじりながら、めぐみんを見ながらそんな事を……。

と言うか、めぐみんは飯も食わずに熱にうなされた様な赤い顔でフラフラしていた。

「大丈夫、大丈夫です……。大丈夫なので、カズマはそんな顔で手をワキワキさせるのはやめてください」

おっと、顔に出てましたか。

「でも本当にヤバクなったなら、意地張らずに言えよ。幾らでもまさぐってやる。ちなみにウィズから聞いた話だが、粘膜接触のドレインキスとかの方が魔力吸収力は高いらしいからな。皮膚が薄い所なほど吸い易いんだと。……なので、あまり無理して本当にヤバくなったら緊急手段を取らざるを得なくなるからな。先に言っておくぞ。これは緊急の手段なんだからな」

「なぜ強調するんですか。大丈夫です、ヤバクなったらタッチの方をお願いします。……ふう」

めぐみんが熱っぽい息を吐き、もそもそと干し肉をかじりだす。

既に俺から見るとヤバそうなんだがなあ……。

俺達は休憩を終え、再び里へと歩き出した。
ダクネスが意識を取り戻したので、みんなの荷物は俺とアクアで持つ事に。
ダクネスは傷は魔法で癒したとはいえ、気絶から回復したばかりだ。
こいつもあまり無理させる訳にもいかない。

皆満身創痍に近い状態だなあ……。

荷物を持つ事にアクアが多少文句を垂れたが、干し肉を与えてやるとそれを口に入れたまま大人しくなった。
俺は軽い眠気はあるものの、アクアから体力を吸ったおかげか、徹夜明けだと言うのに体調は良好だ。
そんな俺の隣では、はあはあと、熱っぽい息を吐きながらふらつくめぐみん。

……。

……ふらつくめぐみんの頬にぽんと触れる。
「おいほっぺたに、かじってた干し肉が張り付いてんぞ。口に入って水分含んでちょっと戻った干し肉は、そのまま乾くと臭いからちゃんと取っておけよ」
言いながら、触れた場所から少しだけ、めぐみんから体力と魔力を吸った。
それにめぐみんが、俺が触れた場所を、恥ずかしそうに慌ててゴシゴシ擦り。

「……カズマはいい加減、デリカシーって言葉を覚えると良いですよ。だから何時まで経っても童貞なんですよ」
「どどど、童貞言うなよ！　アクセルの街で、俺はもう色々凄い経験しちゃってるんだからな！」
未だふらつきながらも先ほどよりも少し顔色が良くなり、ぶつぶつと俺の悪口を言い出しためぐみん。
そんなめぐみんに言い返しながら歩く中、俺は視線を感じて振り向いた。

「「……」」

それは、俺とめぐみんをニヤニヤしながら見詰める二人。
アクアがダクネスの傍に近寄り、その耳元でぼそぼそ喋っている。
……が、それは明らかに俺に聞こえるように言っていた。

「ねえ見た？　カズマさんがイケメンよ。イケメンみたいな行動したわ。頬になんか付いてるとか誤魔化しながら、こっそり吸ったわよあのイケメン気取り！　プークスクス！」

……。

「そんな事を言うなアクア、カズマは元々イケメンじゃないか。どんよりと濁った瞳、りりしく、その辺に幾らでも居そうなパッとしない顔立ち。そんな男が、さり気なさを装ってドレインを……ふっ、ふふっ……！　か、カッコイイじゃないか、ふふふふっ……！」

「う……うわあああああああーっ！」
二人にそんな指摘をされて、俺は恥ずかしくなり顔を熱くさせながら駆け出した。

こいつら、嫌い！
ちっとも甘酸っぱい展開にならねえ！

13話（後書き）

シリアス展開に合わせてなんとか淡いラヴコメも混ぜてみようかと頑張ったけども諦めました。

次回はようやくぼっち嬢参戦

……を予定。

１４話（前書き）

主人公のハーレム回。
猫耳だの、獣耳だの、肉球だのモフモフだのが出ていなかったなと思い、ファンタジーの名に恥じない王道を。
報われない主人公にモテ期到来。
過激な描写があるかも知れません。

ポロリもあるよ。

１４話

人にはモテ期と呼ばれる物があるそうだ。

「愛してる！　愛してるわ！　だから、ちょっと話をしましょう！」

どうも、今俺は、そのモテ期らしい。

「あの尻！　あの腰！　あの顔！　全てが好みよ！　逃げながらも誘ってんのかしらっ、悩ましく腰振って逃げちゃって！」

俺は今、生まれて始めて女性に明確な好意を持たれ、追いかけられていた。

「はふーっ、はふーっ、はふーっ、はふーっ！」

それも複数に、だ。

そして同時に、俺は神に祈っていた。

アクア様でも、エリス様でも。

今の状況から助けてくれるなら誰でも良いです。

「待ちなっ！　逃げるんじゃないよ、優男！」

お願いです、もう、仲間へのセクハラはあんまりしません。

「あたしの獲物だよ！　あいつはあたしが貰う！　さあ、逃げるんじゃないよ。大事にしてあげるから！」

だから、どうか神様、助けてください。

助けてください！

「はあはあはあはあはあはあはあはあはあはあはあはあ……！」

助けてくださいっっっ！

恐らくは、百メートル走のタイムを今計ってくれれば相当な記録が出るはずだ。

それ位の勢いで俺は逃げながら……！

「いやああああああああ！　嫌ああああああああー！　強姦魔ー！　誰かっ、誰か来てええええええーっ！」

俺は、貞操を奪われると言う事がこれほど恐ろしい物なのかと心底震えながら、悲鳴を上げて泣いて逃げ回っていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

休憩後、俺に魔力を少し吸われためぐみんは、少し顔色を戻して、おぼつかなかった足取りもしっかりしたものになっていた。

めぐみんは、誰かに背負われた方が良いと言っても聞かず。

仕方ないので自分の足で歩かせているのだが、どうにも見ていて不安だった。

赤かった頬は、今ではほんのりとピンク色程度に落ち着いている。

明け方に休憩を取った後はずっと歩き続け、その間、モンスターの気配を感じると街道を外れて迂回したり、潜伏してやり過ごした

りして着実に紅魔の里への距離を稼いでいた。
このまま順調に旅が進んでくれれば、今日の夜、もう一度野宿をして、明日の夜ぐらいには里に着くかもしれない。
そう思っていた矢先の事。

俺達は、街道の真ん中で立ち止まっていた。
「……参ったなあー……」
俺は呆然と呟いた。

目の前に広がる、隠れる所が何も無い大平原の中央に伸びる街道を見て。

こんな中を歩いて行ったら、潜伏スキルが使えない。
今なら、めぐみんが一撃なら魔法が撃てる。
だが、こんなだだっ広い所で魔法を撃って、それを聞きつけて何かが来たらどうしようもない。
だが、紅魔の里に行くには街道を行くしかない訳で……。
これだけだだっ広いと、敵感知スキルでモンスターを感知する頃にはこちらが見つけられている訳で……。

……しょうがない、こんな時こそ千里眼だ。
要はこちらが先にモンスターを見つけてしまえばいい訳だ。

そして、今の状況は一刻を争う。
こんな所でもたついている訳にはいかない。

「おい、俺が一人で先行するから、お前らはめぐみん連れて何時でも逃げられる様にしておいてくれ。アクア、いざって時逃げられる様に、俺に速度増加の支援魔法を頼むよ」

俺が敵を見つけられなくても、囮になって引きつけ、三人から引き離した所でどこかに影を見つけて潜伏し、やり過ごす。
ダクネスが囮を務めても、鎧が重くて逃げられない。
俺は胸当てや篭手、すねあてを外すと、それらをまとめてアクアに渡す。
万一に備えて俺は身軽になっておきたい。
持っていた荷物も全部預け、走り易いように武器の類もダガーを残してアクアに渡した。

「もう、逃げる気満々な状態ねえ。いっそ潔いわね」
そんなアクアの言葉に。
「ここいらのモンスターを舐めていたよ。ドラゴンゾンビがあれだけヤバイともデカイとも思わなかったし。モンスター分布図を見ても、他にも名前だけでヤバそうなモンスターがズラズラ載っている。相手が一匹で来るとも限らない、極力戦闘は避けて逃げ回る方向で行く」

モンスター分布図には、ドラゴンゾンビの他にも見るからに強そうな名前のモンスター名しか載っていなかった。

いや、一つだけ。
メジャーな名前で、しかもゲームやなんかでは雑魚モンスターに分類される奴が載っていたが……。
万一出会うのが、そいつだったらいいなと思いながら、俺は皆の前を先行するべく。

「それじゃあ、俺のかなり後を付いてくるんだぞ。見失わない程度には距離を保てよ。何かあったらジェスチャーを送るからな。そうしたら、すかさず逃げろよ」
「分かったわ。この私に任せておいて」

「お前にはジェスチャーが通じないのは分かっている。ダクネス、めぐみん、頼むぞ」
俺の言葉にダクネスとめぐみんが頷いた。

だだっ広い平原地帯に伸びる道。
そこを、軽装で一人歩いて行く。
辺りを神経質にキョロキョロと見回し、モンスターの影がないかを確かめる。
慎重に平原地帯を進んで行く俺の後方を、三人がちゃんと着いて来ているかを時々振り返り、確認した。

今の所順調だ。
モンスターで特に注意したいのは、空を駆ける類の連中だ。
分布図に載っている中では二種類ほどのモンスターが該当したが、今の所空を見上げても飛び回る影は見当たらない。

既に、数体の大型のモンスターを遠目に発見し、俺達はそれの回避に成功していた。
順調だ。
このまま平原地帯を抜けたら、皆と合流すればいい。

……と。

平原のど真ん中。
そこに、ぽつんと立つ人影が見えた。

その人影はまだこちらに気付いている様子は無い。
普通に考えて、こんな所に人間がぽつんと突っ立っている訳が無い。
そう、あれは恐らくモンスターだ。

俺は、まだ遠目ながらそのモンスターの正体に予想が付いた。
こんな危険なモンスター達が生息する中で、一つだけあった場違いな名前。

オーク。

豚の頭を持つ二足歩行型のモンスターで、繁殖能力が高く年中発情している生物。
人型の生き物ならその殆どの種と交配が可能で、こいつらに捕まった場合は悲惨な事になるので、捕まりそうな場合、即座に自決した方が良いとまで言われるモンスターだ。
ゲームの類ではコボルトやゴブリンと並ぶ大変メジャーな名前の雑魚モンスター。
そいつらの名前が、なぜかここのモンスター分布図に載っていた。

相手は一匹。
今まで遭って来た大型のモンスターと比べ、わざわざ迂回する必要も無い気がする。
ダガーしか持っていないが、接近して一撃くれてやれば状態異常にでも出来るのではないだろうか。

めぐみんの事もある。急いでいる事だし、迂回はせず倒してしまおう。

俺はそう判断し、その遠くに見える人影に向かって行った。

別に身を隠すでもなく、堂々と。
と言うか、だだっ広い平原に身を隠す場所が無い。

かなり人影に近付いた所で、そいつも俺に気付いたのか、こちらに向かって歩いていた。
自然とダガーを握る手に力が篭る。

「……ズ……マ……！　カズ……！！」

それは俺の遥か後方から聞こえる声。
何事だと振り向くと、それは俺に何かを叫んでいるアクア達だった。
遠めに見れば、ダクネスとめぐみんが、何かジェスチャーじみた事をやっている。
しばらくそれを見て、何を言いたいのかを把握した。

逃げろ。

そのジェスチャーはそんな意味を示していた。
いや、相手はオークだろうと俺は再び前を見る。
そいつは既にかなり近くまで接近していて、俺を真っ直ぐに見つめている。
三人のジェスチャーを受けて少し不安になった俺は、念の為。
もしもに備え、小声で魔法を唱えた。
「『クリエイト・アース』」
左手にこっそりと目潰し用の土を生成し、不意打ちの準備をする。

チラリと後ろを見ると、三人はオークに向かう俺の姿を見て、慌てふためいた様にバタバタしていた。
必死に何度も、逃げろのジェスチャーを送ってくる。

と言うか、女のお前らの方が逃げろと言いたい。
オークが狙うとなれば、女であるお前らだろう、と。
まあ、ここで俺がオークを倒してしまえば逃げる必要もないのだが。

俺は再び前を向くと、既にお互いの顔がハッキリと見えるまでには近付いていた。
それは、俺が予想していたオークよりも人に近い姿だった。
鼻と耳は豚だが、顔の造形やらがかなり人に近い物がある。
旅人から奪ったのだろうか、一丁前に服を着て、右手には抜き身の小振りの斧。
そして、特徴的なのは髪がある事。
ザンバラな髪をした、緑色の肌を持つそいつは、パッと見には本当に人に近い姿をしている。
そいつが言った。

「こんにちは！　男前なお兄さん。ねえ、あたしと良い事しない？」

……。
そいつはメスだった様で、甲高い声でそんな事を流暢に話してくる。
なんてこった、こいつは予想外。
オークにだってメスはいるよな。
いやいや、繁殖力旺盛とは聞いていたが。
他種族との交配が可能とは書いてはあったが。
パッと見、人に近い姿をしているとは思ったが、それはあくまでオスとして見た場合で……。

せっかく誘ってくれたこのオークには申し訳ないが、これを女性と見れるほど、俺のストライクゾーンはそこまで寛容ではない。

俺は当然の事ながら。

「お断りします」

生まれて始めての女性の誘いを、俺はキッパリと断わった。

それを聞いてもそのオークはなんら表情を変える事は無く。

「あらそう。残念ね、あたしは合意の上での方が良かったんだけど」

そう言って、ニタリと歯をむき出しにして笑いかけてきた。

ザンバラな髪に黄色い歯。

全体的に丸い体型。

豚の鼻や耳が無くても、キッパリとお断りしたい相手だ。

……と言うか、合意の上とか何言ってやがるんだコイツは。

「話が出来るみたいだから一応頼んでみるが、スマンが此処を通して欲しい。通してくれるなら、お礼に食料を分けてもいい。……どうだ？」

食い物を条件にしてみれば、案外通してくれるかも……。

そんな淡い期待を込めてみる。

あれ、そういやあの干し肉って何の肉だったか。

多分牛だよな？

豚じゃないよな？

豚肉だったら共食いをさせてしまう事になる、あれだ、もし食べ物で通してくれると言ったらアクアの干し魚をくれてやろう。

俺がそんな事を考えていると、オークが口元に垂れたよだれをジュルリと拭った。

やはり食べ物は効果が大きかったらしい。

……そんな俺の考えは、次の一言でぶち壊された。

「そんな物はどうだっていいわ。ここはあたし達オークの縄張り。通ったオスは逃がさないのよ。お兄さん、一見強そうには見えないあなたからは、なぜか強い生存本能を感じるわ。……そう、いい男の一番大切な条件ね。さあ、あたしと良い事しましょう？」

……ええっと。

こいつは、どうやら冗談で言っている訳ではないらしい。

俺は困った様に遠く後ろの連中を振り返った。

連中は、相も変わらず逃げてのジェスチャー。

そんな俺の行動を見て、オークも後ろの連中に気付いた様だ。

「あら、あそこに居るのは……。なんだ、全員メスのようね。彼女達は見逃してあげるわ。あなたは、そうねえ……。三日。三日ほどウチの集落に来て頂戴。うふふ、ハーレムよ？　この世の天国を味あわせてあげるわ。大概、捕まえた人は本当に天国に行っちゃうけどね」

そう言いながらニヤリと笑うオークを見て、俺は本能的に恐怖を覚え、魔法を唱えた。

「『ウインド・ブレスト』ッッッ！」

「！？」

隠し持っていた一握りの土を、風の魔法でオークに飛ばす。

不意打ちの目潰しに目をやられ、オークが呻きながら身を屈めた。

それに駆け寄り、ダガーではなく素手でオークに殴りかかった！

オークを麻痺させ、トドメは刺さずにその場に放置。
アイツは集落がどうとか言っていた。
退治してしまうと、あだ討ちだとかが厄介そうだ。
そう判断し、その場に放置し後にしたのだが……。

オークを倒してしばらく歩いていると、後方から気配を感じた。
振り向けば、それは慌てて俺を追いかけてくるアクア達。
「……どうした？　こんな近くまで来ちゃ俺が先行している意味が無いだろ。もっと後ろを歩けよお前ら」
そんな俺の言葉に、
「何言ってるんですかカズマ！　カズマはオークを倒してしまったんですよ！　この平原は、どうやらオーク達の縄張りの様です。と言う事は、この平原を抜けるまではカズマが狙われると言う事ですよ！」
めぐみんが強い口調でそんな事を……。

……いやいや。

「俺が狙われるんなら良い事じゃないか。なんの為に身軽になったと思ってるんだよ。注意を引いて囮になる為だぞ？　つーか俺、お前らがオークに捕まる所なんて見たくないぞ」
性欲旺盛なオーク達。
そんなのに仲間が捕まって色んな目に遭わされるだなんて想像したくも無い。

そう考えていた俺に、アクアが言った。

「そう言えば、カズマはこの世界の常識を知らないアンポンタンだったわね。しょうがないから教えてあげ……いひゃいいひゃい！」

偉そうに言ってきたアクアの頬を引っ張り、俺はめぐみんとダクネスにどういう事だと促した。

「……カズマ、よく聞け。現在オークにオスは居ない。とっくの昔に絶滅した。今ではたまにオークのオスが生まれても、成人する前にメス達に弄ばれて干乾びて死ぬ。おかげで、今居るオーク達は混血に混血を重ね、各種族の優秀な遺伝子を兼ね備えた、もはやオークとは呼べない様なモンスターだ。現在、オークと言えば、縄張りに入り込んだ他種族のオスを捕らえ、集落に連れ帰り、それはもう凄い目に遭わせる、男性にとっては恐るべき存在。……そして、その、カズマは……」

ダクネスが説明しながら、最後になると言いにくそうに声を落としていく。

それをめぐみんが引き継いだ。

「カズマはオークのメスの一匹を倒してしまいました。彼女達は優秀な遺伝子を持つ強いオスを欲しています。仲間を倒したカズマを、このまま放っておく訳がないですよ。……ほら、あんな風に」

めぐみんが、言いながら指す方向には。

先ほど、俺が麻痺させて動けなくしたオークを先頭に、多数のオークのメス達がそこにズラリと並んでいた。

俺が先ほど麻痺させたオークが言った。

「いい男ねお兄さん。絶対に。……絶対に逃がさない。惚れちゃったわよ、どうしてくれるの？　あたし、絶対にあなたの子を産むわ」

俺は今日ほど、心の底からの凄まじい恐怖を感じた事は無かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

この平原を抜ければ、オーク達の縄張りから抜けられる。

俺は必死になって走っていた。

オーク達が全く興味を示さなかったアクア達はその場に残し、俺は息も絶え絶えに、重い足を必死に動かし、駆けずり回っていた。

「逃がさない！　逃がさない逃がさない逃がさない！　絶対に逃がさないっ！」

「はあはあはあはあはあはあはあはあはあはあ……」

「子供が産まれたら、名前は決めさせてあげるわ！　だから！　だから私と一緒に！」

既に結講な数のオークを撒いた筈だが、それでも未だ数匹のオーク達が俺を追い掛けて来ていた。

それらは様々な種族の遺伝子が交じり合った結果なのか、実に色々な特徴を備えている。

豚耳だけではなく、猫耳や犬耳がいる。

ワーキャットだとかコボルトだとかとでも交配したのかもしれな

い。
手に肉球が付いているのもいれば、フワフワの毛皮を持ったものまでいる。

俺は思った。
人外が良いだとか言う輩は多々いるが、この言葉が必ず必要だ。

ただし、美少女に限る。

支援魔法を受けて強化されている俺の足に追い付くとか、他種族の遺伝子を取り込んだオーク半端無い。

俺は必死に泣き叫んだ。
「やめてえ！　男漁りなんて良くない！　お前らも女性であるならば、恥じらいぐらいは持つべき！　俺は恥らう女性が好きなんです！」
俺のその叫びを聞いて、
「あたし達の事を心配して言ってくれるのかい？　女なんだから体を大事にしろって？」
そう叫んだオークの声に、他のオークが興奮する様に色めき立つ。
何を言っても逆効果。

神様、神様。
俺は生まれてこの方、これほどの目に遭う悪い行いを何かやらかしてしまったのでしょうか。
親に迷惑を掛け、ニートやってたからでしょうか。
本物の神様を普段適当に扱っているから、その罰でしょうか。
仲間達へのセクハラが酷いからでしょうか。

反省します。

全て反省します。
だから、どうかお願いです。

「もうダメ！　もうダメよおおおおーっ！　我慢できないわ、捕まえたらその場でメチャクチャにしてあげるからっ！」

助けてくださいっ！
助けてくださいっ！！

俺は既に、半泣き、ではなく。
鼻まで垂らしてガチ泣きしながら、それはもう全力で逃げていた。

その時。
遥か遠く後ろでは、聞き慣れた轟音が轟いた。
オークの注意を引く為か、その数を減らす為か。
ちょっかい出さねば自分達はオークには狙われないと言うのに、
俺の愛する仲間が、援護の為に爆裂魔法を放った様だ。

皆の顔が見たい。
超見たい。
アクアとダクネスは、本当に美人だなあ……。
めぐみんは怠惰な気だるげな表情ながら、それでも何時だって美少女だ。

三人の顔が見たい。
整った顔を見て、心の平穏を保ちたい。

俺はあんな三人と一緒に居られるなんて……、
「うふふふふふっ、もう逃がさないわ。逃がさないわよ！　あなたはあたしと、集落で一生一緒に過ごすの。子供は百匹は欲しいわ

ね」

俺は、何て幸せ者だったんだろうか。

俺の目の前には、いつの間にか最初に麻痺させたオークが回りこんでいた。

そして後ろには数名のオークの気配。

目の前のオークが言った。

「あなたは運が良いわよ……。あたしはオーク族の中でも一番美人とされているの。だからああして、平原の真ん中で男を捕まえる役をしているのよ。さあ……、これを見て……。どう？　その気になってきたでしょう？　……ほら、これを見てどう思う？」

オークは、言いながら服を脱ぎ、上半身を露にした。

「……どうしてそんなにおっぱいが沢山あるのと思いました」

「それはね！　あんたの子を沢山産んでも困らない為さ！」

もう気を失ってしまいそうです。

子沢山な哺乳類は、乳が沢山あるらしい。

豚は七対。

俺は後ろから迫ってくる気配を感じ、半ば観念しながら、ダガーを手に、震えながらそれを目の前のオークに向けた。

頑張れ、長年守り通してきた俺の貞操を……おおおおっ！？

目の前のオークが荒い息で飛び掛かってくる。

あかん！　殺らなきゃ犯られるっ！

俺はもう一切迷う事無くダガーをオークに突き出すが、様々な優

秀な種族の遺伝子を良いとこ取りしたそのオークは、容易く俺のダガーから身をかわし……！

「よおーし！　すぐ済むから。すぐ済むからじっとして、目を瞑りな……？」

あっさりと俺が握っていたダガーを弾き、俺を地面に押し倒した。

バカでした。

この危険地帯に生息するオークの力、舐めてました！

俺はオークに圧し掛かられながら、必死に叫ぶ。

「話をしよう！　話をしようっ！」

「エロトークなら喜んで！　さあ、話してごらん？　あんたの今までの恥ずかしい性癖とかを！　ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

オークがとてつもなく荒い息を吐きながら、俺の着ている上着をビリッと破る！

不死王の手！　殴って、状態異常で無力化を！

俺は馬乗りに乗られながらも下から拳を振るうが、それをスイッとかわされ、あまつさえ拳の先を舐められた。

許してくださいっ！！

「やっ、止めてえええええ！　名前を！　そういや俺まだ、あんたの名前も聞いてない！　俺、これが初体験になるかも知れないんだ！　せめてまずは、自己紹介から！　わたくし佐藤和真と申します！」

「オークのスワティナーゼと申します！　さあ、あんたの下半身にも自己紹介してもらおうか！　あんたの息子を紹介しなよ！」

「ウチの息子はシャイなんです！　今日の所は、お互いの名前を知った所でお開きおおおおおおー！　誰か、誰か助けてえええっ！」

その時……！

「『ボトムレス・スワンプ』！」

突如背後から聞こえた声。

なんとなく聞き覚えのあるその声は、魔法を発動する声だったのだろう。

それが響き渡ると同時、俺の背後から悲鳴が上がった。

思わず首だけで後ろを振り向くと、そこには大きな泥沼の中でもがく、俺を追い掛けていたオーク達の姿がある。

そして、その後ろには……！

「ゆんゆん！　ゆんゆんじゃないかっ！　うっ、うわあああああっ！」

俺はその紅魔族の少女を見て、思わず安心して泣き叫んでいた。

「ッ！？」

俺の上に乗っていたオークから、息を呑む様な音が聞こえる。

自分の仲間が突然出現した沼で溺れさせられ、混乱しているらしい。

ゆんゆんを警戒しながら俺の上からユラリと立ち上がるオーク。

俺はそれから逃げる様に、泣きながらゆんゆんの元へと駆け寄った。

「ゆんゆん！　ゆんゆんっ！　感謝しますううううっ！」

俺はそのままゆんゆんにすがり付く。

「きゃ……！　ちょ、ちょっとカズマさん！？　だ、大丈夫、もう大丈夫ですから泣かないで……、あ、あのっ……、大事なローブが……鼻塗れに……なるんです……が……」

困った様にボソボソと何かを言うゆんゆんから目を離さず、俺を執拗に追っていたオークが、チラリと沼でもがく仲間を見る。

どうやら、仲間を助けたいがゆんゆんを警戒して動けない様だ。

……と、遠くからこちらに向かって来る影があった。

「カズマ！　無事ですかっ！」

俺に真っ先に叫んできたのはめぐみん。

そのめぐみんに続き、他の二人も無事な俺を見てホッとした様な顔を見せた。

あかん……、また泣きそうだ……。

俺はオークに追い回されてよほど弱っていたらしい。

アクアが、地にうずくまる俺の傍に立ち。

「大丈夫そうで良かったわねカズマ！　心配したわ……ど、どうしたのカズマ、なに！？」

そんな事を言ってくれるアクアの足に、俺は泣きながらしがみ付いた。

「よしよし、怖かったのねカズマ。もう大丈夫、大丈夫よ。皆で守ってあげるからね」

そんな事を言いながら頭を撫でてくれるアクアに、不覚にもちょっと安心する自分が情けない。

こちらをジッと警戒するオークをチラリと見ると、ゆんゆんがちょっと恥ずかしそうにしながらも、マントをバサリとひるがえし、ワンドを前に突き出したポーズを取り、宣言した。

「我が名はゆんゆん。アークウィザードにして、上級属性魔法を操る者。紅魔族でも五指に入る魔法の使い手。やがては紅魔族の長となる者……！　紅魔の里の近くに集落を作るオーク達。ご近所のよしみで今回の所は見逃してあげるわ。さあ、仲間を連れて立ち去りなさい！」

そんなゆんゆんの言葉を聞いて、オークが、溺れていた仲間に先ほど脱いだ上着を裂いて、それをロープ代わりにする様に仲間に放った。

「カズマさん、今の内です、行きましょう」

オークの縄張りの平原地帯を抜け、森の様な場所に出た俺達は、そこで小休止する事にした。

爆裂魔法を放ったおかげか、めぐみんの顔色は悪くはない。

……悪くはないが、油断すると頭の位置が低くなり、そのまま前に倒れ込みそうになる。

眠らない事に加え、毎日歩き詰めの疲れが出ているのだろう。

だが今日の夜を持ちこたえれば、里に着く。

この道を自力で通ってアクセルの街へ来たゆんゆんの説明では、今日一杯、暗くなるまで歩き続け一晩休み、明日の朝一で向かえば、今のペースならば暗くなるまでには里に着けるだろうとの事。

そして何より……。

「ゆんゆんが居れば、モンスターは怖くないからね。何よ、もう楽勝じゃないの」

アクアがまたそんな良くないフラグになる様な事を言う。

だが、その意見も良く分かる。

一人でここを抜けてきた実績があるゆんゆんが居ると言うのはや

はり心強いものだ。

……そして、俺は先ほどからアクアの傍を離れない。

長い付き合いのアクアの傍に居ると、何となく安心する。

戸惑った様なアクアが、そんな俺に珍しく文句も言わず、ずっと傍に居てくれるのがありがたい。

本当にありがたい。

どうやら俺は、先ほどの体験によほどのトラウマを植えつけられたらしい。

と、言う訳で。

「ゆんゆん、改めてありがとう。感謝するよ、本当に。どのぐらい感謝しているかと言えば、これからの人生で、尊敬する人は？　と聞かれたならゆんゆんですと即答するぐらいに感謝してる」

「や、止めて下さい、何かの嫌がらせみたいです……」

アクアの羽衣の端を握り締めたまま、感謝の言葉を言う俺に、恥ずかしそうに困るゆんゆんに。

「ところで、ゆんゆんはなぜこんな所に？」

めぐみんがそんな事を言ってきた。

……そんなもん、分かってるだろうに……。

「えっ！？　ええっと……、さ、里帰りよ！　里帰りしたくて、何となくここを通ったら、たまたま爆裂魔法の音を聞いて、それで慌てて駆けつけただけで……！」

慌てて言うゆんゆんの言葉に、めぐみんが、

「ほうほう。……でも、ゆんゆんは私に勝つまでは里には帰れないとか言っていませんでしたっけ」

そんな身もフタも無い事を言ってくれた。

ゆんゆんが、困った様に俯きながら、やがて、良い事を思いついたとばかりにぱあっと顔を輝かせ、

「里帰りの為に！　そう、その里帰りの為に、めぐみんを待ち伏せていたの！　やがてローブを取りに里へ帰って来ると踏んでね！　里の前でめぐみんに勝利して、そしてそのまま堂々と凱旋するつもりだったの！」

嬉々としてそれをめぐみんに告げる。

「なるほど。私が弱っているであろう事を見越して、このタイミングで襲う事にした、と。なんというど外道。カズマ級の称号をあげましょう。まさかゆんゆんを親友だと思っていたのは私だけだったとは……。ショックです」

「！？」

めぐみんの言葉に泣き顔になるゆんゆん。

お、お前……。もちろん、全部分かってて言ってるだろ。

１４話（後書き）

四部１３話において、闇の中アクアの手を引くシーンがありましたが、アクアには暗視能力がある事をコロッと忘れておりました。
感想での指摘で気がつきました。
そのうち皆さんが忘れた頃にこっそり修正致します。
アホな作者めと罵ってやってください。

15話

温かいコーヒーをすすると、その温もりがぼろぼろにされた心に染み渡る。
ティンダーで自前で作ったコーヒーを入れたマグカップを、両手で包み込む様にして持ちながら。
俺は自分のマントに包まりながら、皆を見ながらしみじみと。

「……お前らって、四人ともみんな綺麗な顔してるよな」

街道沿いの森の中、俺の言葉に皆が固まった。

「ど、どうしたのかしら。カズマが、いつも言動のおかしいカズマが、今日は特におかしいわ！」
「お、落ち着け！　こいつは何かを企んでいる。上げて落とすのが大好きなカズマの事だ。喜んだ所で何か罠がある！」
アクアとダクネスが、そんな失礼な事を言ってくる。
めぐみんは、そんな俺の言葉すら殆ど聞こえないかの様にうつらうつらとしながら。
そしてゆんゆんは、頬を赤くさせながらぼーっとこちらを見ていた。

今の時刻は夜半過ぎ。
辺りはすっかり暗くなり、今晩の野営を行なうべく準備をしていた。
オークから無事逃げ仰せ、深く安心していた俺は、四人を見て改めて息を吐く。

「お前らって、本当、美人だよな」

「どうしたのかしら！　ねえどうしたのかしらっ！　カズマが変よ、どうしたのかしらっ！」
「落ち着けアクア！　まずはカズマに回復魔法を掛ける事から始めるんだ！」
「……ッッッッ――――ッ！」
バタバタと騒がしい二人と、赤くなって俯くゆんゆんを見ながら、俺はしみじみとオーク達から逃れられた喜びを噛み締めていた。

そんな中、ちょっと大丈夫じゃなさそうな感じのめぐみんが、前のめりにガクンと崩れた。
そのまま盛大に、焚き火の準備をしていた薪の中央へと顔を突っ込む。

「「「「ちょっ！」」」」

ダクネスが慌ててめぐみんを起こすと、めぐみんはブツブツと。
「あ……。大丈夫です……大丈夫……」
そんなちっとも大丈夫じゃない事を言いながら、めぐみんは、ダクネスに抱き起こされながら、自分の荷物を背にしてもたれかかった。

いよいよヤバそうな感じだなあ……。
今晩を乗り切って、明日になれば……。
いやいっそ、夜間行軍を決行するか？
ここで休んで朝一で向かうのと、無理しながらでも、夜通し少しずつでも進んで行くのとどっちが早く着くのだろう。

と……。

「ねえ、めぐみんどうしたの？　魔法を使って魔力を空にしてから、少しだけ寝てまた起きて、魔法を使いまくればいいんじゃないの？」

そんな事をゆんゆんが言い出した。
この子は事情を知らないのだろうか。

「……事情があるのです。特に、私を虎視眈々と狙う刺客にはとても教えられない事情が……」
「！？」
刺客ゆんゆんが涙目になる。

……が、彼女は知らないのだろうか、めぐみんが爆裂魔法しか使えない事を。
一撃放てばもう魔法は使えないので、連戦が出来ない事。
なので、こんな危険地帯のモンスターを呼び寄せたくはない為、極力魔法は控えている事を。
……アクセルの街でも有名な訳だし。

と、そこで俺はハタと気が付いた。
そういやこの子は、噂話を聞ける相手すら居なかったのか。

……いや、しかし待てよ。
「なあ、ゆんゆんは強いだろ？　もしめぐみんが大きな魔法を放ってここいらのモンスターを呼び寄せても、それを返り討ちに出来るか？」

もしそれが出来るなら、めぐみんをもう少し寝かしてやる事も……、
「ええと、大丈夫ですよ、めぐみんも居ますし……。多少の敵なら返り討ちに」
「大丈夫です、ゆんゆんの力は借りません」
「ええっ！？」
ゆんゆんが言い終わる前にめぐみんがきっぱりと言った。

ショックを受けたようなゆんゆんを尻目に、めぐみんが更に言葉を続ける。
「大丈夫です。私は紅魔の里でも随一の魔法の使い手。……今晩ぐらい乗り切って、そのまま紅魔の里に帰るんです。そして……、そして……、またみんなと一緒にアクセルの街で……。皆で一緒に、またのんびりと面白おかしく暮らすんです」
そんな事を、かなり朦朧とした感じで呟いた。
なんだろう。
こいつやっぱり言動がおかしいなぁ……。

なし崩し的に紅魔の里へ同行してくれる事になったゆんゆん。
俺の勝手な予想だが、彼女はきっとここへ来るまでに、色々苦労してきたのではないのだろうか。
そんな彼女は、今は焚き火から少し離れて、めぐみんの傍で眠っている。

焚き火。

そう、焚き火だ。
明かりを灯すとモンスターを引き寄せる為我慢していたのだが、ゆんゆんの使える魔法の中に、光の屈折を捻じ曲げる魔法がある。
要するに、姿を見えなくしたりする魔法らしい。
現在、これを焚き火のまわりに掛けてもらい、焚き火の半径数メ

ートル外からは、そこは暗闇にしか見えない様にされていた。
その焚き火に一人薪を放り込み、相変わらず俺が寝ずの番をしている。

ちなみに寝ずの番をする前にアクアから、ドレインタッチでごっそりと体力を吸い取っているのであまり眠気は感じられない。
意味もなく激しい抵抗をされたが、どうしても抵抗するなら、鼻に指突っ込んで粘膜から直にドレインするぞと脅したら大人しくなった。
体力が回復するだけで脳が休まる訳では無いので、あまり何日もこれをやるのはマズイ気はするが。
それでも紅魔の里はもう近いのだ、着くまではこれで頑張れるだろう。

体は元気な俺とは違い。
頑張れそうになさそうなのが……。

「……カズマ、皆はもう眠った様です……。申し訳ないのですが、何か話をしてはくれませんか？　カズマしか起きていない今だから言いますが、何かに気を逸らしていないと、正直いつ倒れてもおかしくない状態だったりします」

こいつは……。

「お前、意地張ってないで寝たらいいじゃないか。ゆんゆんだって居るんだ、何時ものお前の発作が起きても、魔法撃って、それでモンスターがやってきたって、何とか撃退出来るだろ」
そんな俺の言葉にめぐみんは、
「いえ、こんな所で爆裂魔法を放てば大量のモンスターが寄ってきますよ。昼間、平原で放った際に無事だったのは、あそこの平原が

オークの縄張りだったからです。こんな森の中で爆裂魔法を放てば、びっくりする様な量のモンスターにたかられますよ？」

こんな危険地帯のモンスターの群れか。

ちょっとゾッとしないが、でも……。

「それに……。ゆんゆんは、私が爆裂魔法の他にも、上級魔法ぐらい使えると思っています。つまり、私の事も戦力として数えての、先ほどの大丈夫発言でしょう。なので、後一日。今晩一晩耐えて、明日には里に着ければ何とかなります」

……めぐみんにそんな事を告げられて、俺は何も言えなくなってしまう。

普段ろくでもない事はすぐ思い付くのに、こんな時に限って何もいい手が思い浮かばない。

めぐみんが、そんな俺の心の内を見透かしたかの様に笑った。

「カズマは何時もみたいに、皆をいやらしい目でジロジロ見て、軽い感じでいればいいんです。緊張してソワソワしているなんてカズマらしくもない。そんな事よりも……。眠らないように、何か話をしてくれませんか？　そうです、出来れば……。カズマの国の話が良いですね……」

「……で、俺は咄嗟の機転を利かせて、お隣の家の娘さんにこう言った訳だ。このお金でチョコ買って、当日家に届けてくださいって

な。お釣りは全部差し上げますから、と。この作戦が上手くいき、結局俺の弟はかーちゃんからの一個のみ。俺はかーちゃんとその子からの、合わせて二個。この時に、俺と弟との長い長い戦いに終止符が打たれたんだ。こうして俺は、兄の威厳を保つ事に成功したんだ」

俺の話をずっと聞いていためぐみんが。

「……つまり、お金でサクラを雇って勝ったんですね。カズマは昔からそんな感じだったと知って安心しました。……しかし、変わったシキタリですね。その日にチョコとやらを貰えないと、そんなに困るのですか」

興味深そうに、今は俺の国の忌々しい日についての説明を聞いていた。

「困るなんてもんじゃない、俺は一度だけ過去に行けると言われたなら、このおかしな風習を考えた奴をシバキに行く。それぐらいに貰えない男性にとっては迷惑で困ったものなんだ。……そういや、季節は春。今頃はそうだな、お返しの日が近いのかもしれないな」

「……？　お返し？　何ですかそれは？」

めぐみんに、俺はその悪質な仕組みを説明した。

「女性にチョコを貰った場合はな、その一月後。貰った物の三倍の金額に値する品を差し出さなくてはならないと言う、悪意に満ちたシキタリもあるんだ。これを怠ると、女性達の間で社会的に抹殺される。貰えなければ後ろ指さされて笑われ、貰ったら貰ったで散財する。そんな悪魔のイベントなんだよ、バレン何とか言うその日は」

めぐみんが、それを聞き。

そして意外そうに首を傾げた。

「……なぜカズマはチョコを貰えなかったんですか？　カズマは人間的には色々大事な物が欠如してますが、それでも。一緒に居るとカズマの良い所は色々と見えてきます。例えば凄く……。凄く……？　優しい人……では無いですね。真面目……？　ないですね。……あれっ？　……あれっ？　世渡りが上手い？　いえでも借金作ってましたし。……あ、あれえー？」

あれえー？　じゃねえ、おい、頑張れ。

そこは頑張れ、色々出てくる所だろ。

「……まあ、素直では無いですが、何だかんだで仲間想いですよね。私はカズマのそんな所、嫌いじゃ無いですよ」

仲間想いとか。

それって結局女友達に言われる、異性としては見ていない代表的な褒め言葉、あなたって良い人ねみたいな事じゃないですか。

まあ色気なんて求めてないから、別に悔しくも何ともないけど。

今はただ、オークに追われたせいで色々弱ってるだけだから。

だからお前らの事が普段の三割増しに見えているだけだから。

だから、まともな褒め言葉が無くても別にちっとも気にしてないから。

「もし私がカズマの国に行ったなら、そのなんとか言う日には私がチョコをあげますよ。弟さんにはそれを見せびらかすと良いですよ」

こいつはこいつで、たまにそんな優しい事を言ってくれる。

オークに襲われかけて弱っている今そんな優しくされたら、うっかり勘違いしてしまう所だ。

「お前、俺の話をちゃんと聞いてなかったろ。一応その何とかタイ

ンは、好きな人にチョコ渡す日だからな。お前みたいな、ちょっと仲が良いだけでほいほいとチョコ渡す女は、すぐ男に勘違いされてエライ目に遭うからな。お前、見てくれはいいんだから、俺の国でそんな事ばかりしてたらとんだ悪女扱いされるぞ」

そんな俺の言葉に。

「私はカズマの事好きですよ」

そんな事を、めぐみんはなんでもなさ気にサラリと言っ……、

「今言ったことを詳しく。もう一度言ってみろください」

俺は大事なセリフがいい所で聞こえない、そんな厄介な耳は持っていない。

めぐみんはマントに包まり頭だけ出した、てるてる坊主みたいな状態でおかしそうに笑うと。

「嫌いじゃないですよカズマの事は」

「おいさっきとセリフが違う、俺の記憶力はそんなに悪くないぞ」

めぐみんがその言葉に、またおかしそうに……。……笑おうとしたその目が、驚愕に見開かれた。

そのめぐみんの顔を見た俺はゾクリとする。

これはアレだ。

何度も味わったあの感じ。

そう、死ぬ瞬間の感覚だ。

多分、何かに背後を取られている。

敵感知スキルには何も感じない。

それなのに。

俺は動けば死ぬ、叫べば死ぬ予感を感じながら。

「全員起きろおっ！　敵じゅ……う……ごぶっ……」

敵襲、と、最後まで言い切る事無く。
喉奥から溢れてくる鉄サビ臭い血の味を感じながら。
それに喉を詰まらせ、振り返る。

首後ろに違和感を感じるが、不思議と痛みは感じない。
まるで、一撃で急所を的確に突かれたみたいな……、
「カズマーッ！」
めぐみんの悲痛な叫びを聞きながら。
振り返った俺は、一瞬だけ、黒い影みたいなそいつを目の端に捉えながら、やがて意識を…………

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺は例の場所で例の如く、呆然と突っ立った状態で、女神エリスと見詰め合っていた。
しばらく二人で見つめ合い。
やがて……。

「……どうも、また来ちゃいました」
「……また来ちゃいましたか」

そこは、俺が何度も殺された時に来た神殿みたいな部屋の中。

相変わらずの、長い白銀の髪と青い瞳の、人間離れした美しさをしたエリス様。
その正真正銘の女神様は、困り顔でぽりぽりと指で頬を掻きながら。
「その……。もう、ここに来ても動じもしなくなりましたね。……ええと、お仲間は無事ですよ。あの後すぐに、ゆんゆんさんと言う方があなたの声で飛び起きて、魔法を放って追い払いましたから」
流石出来る方の女神、エリス様。
俺が仲間の事を聞く前に、先に安否を答えてくれた。

「……アレ、何だったんでしょうか。人型の黒い影ってぐらいしか確認出来なかったんですけど。敵感知にも反応なかったし」
一瞬だけ捉えた黒い影。
何だか無機質な暗殺者みたいな、そんな印象の人影が……。

「アレは魔導技術大国ノイズで作られた、ずっと昔からあの森を守り続けている魔導ゴーレムですね。森の奥にはノイズ国の廃棄された生体改造施設があったのです。施設が廃棄された今でも、ずっとそこを守り続けているのですよ」

エリス様が俺を殺した相手の説明をしてくれる。
……魔導技術大国ノイズ。
なんだっけ、どこかで聞いた事があるような。
ああ、思い出した！
「昔、機動要塞デストロイヤーを作って滅んだ迷惑な国ですよね、確か」
俺の言葉に、エリス様が。
「そうです。機動要塞デストロイヤーや、戦争用改造魔導兵、紅魔族を作った、とても罰当たりで迷惑な国です」
そんな事を、サラリと言っ……、た……？

……えっ。

「すいません、今なんて？」

俺は思わず聞き返す。

ちょっと聞き捨てならないとんでもない事が聞こえてしまった。

エリス様は、ちょっと困り顔を浮かべ、

「ええと……。機動要塞デストロイヤーや、戦争用改造魔導兵、紅魔族を作った……」

えっ。

……ちょっと意味が分からない。

「戦争用改造魔導……って、なんでしょう？　ええっと、紅魔族が作られただとか。ちょっと意味が分からないんですが……」

俺の言葉にエリス様は。

「言った通りの意味です。紅魔族は、元々戦争用に作られた改造魔導兵。生まれつき極端に魔力が高いのも、その様に改造されたからです。僅かな睡眠であっという間に魔力が回復するのもその為です。戦争時には、彼らは戦闘をおこなった後数時間だけ眠り、また出撃して行きます。そんな彼らは、異常な魔力回復力の代償として、魔力の自然排出が上手く出来ない体になりました。大人になれば多少は融通が効くみたいですが、それでも特殊なローブを着ていないと、大人でも油断すると、魔力が体に溜まってオーバーヒートを起こし、ボンッとなります」

そんな事を。

エリス様は、事もなげにそんな事をサラッと言った。

「それは、紅魔族の連中は知ってるんですか？　自分達が戦争用の兵器として、改造されて生み出された存在だと……」

戦争の為に肉体改造された紅魔族。
いきなりの重い話に戸惑ってしまう。
そんな悲しい存在である事をめぐみんが知ったなら……。

深刻な表情を浮かべながらの俺の質問に、エリス様がなんでもなさ気に。
「もちろん知ってますよ？　なにせ、紅魔族への肉体改造は志願制でしたから。彼らは、自らこぞって肉体改造を希望し、その応募者数越えのあまりの人気に抽選となり……。その後彼らは、戦争用改造魔導兵って響きが悪いなと言い出し、自らを紅魔部隊と名乗り、色々な勝手な決まりを作っていきました」

……あれっ？

「曰く、名乗る時は紅魔部隊員全員で決めた、キメポーズを取って名乗りを上げる。隊員は元の名前を捨て、インパクトある名前に改名。生まれた時に、体に機体ナンバーとかあると改造兵器っぽくて格好良くね？　などなど……。戦争には関係ない事までドンドン勝手に決めていき……。そもそもあの赤い瞳自体、その方が格好良いから、肉体をいじるついでに、出来るのなら瞳の色を赤くしてくれと……」

……あれっ。

「その後、魔導技術大国ノイズがデストロイヤーの暴走によって滅び、デストロイヤーの暴走に世界中が迷惑を被り出すと、何事も無かったかの様にノイズ国とは関係ない体を装い、我々は伝統ある魔法使い一族、紅魔族であると名乗り出して……」

おい。

俺の表情を見たエリス様が、困った表情を浮かべて言葉を止めた。

……めぐみんの悲しい過去を知ってしまったと、ちょっと悩んだ俺の気持ちを返して欲しい。

色々とガッカリしている俺を見て、エリス様が慌てて言った。

「そ、その……。紅魔族の今の若い人達は、自分達の祖先が好き好んで肉体改造をして喜んでいた変わった人達だとは知りませんから……。お仲間のめぐみんさんは、ご自分の体に生まれた時から刻まれている、機体ナンバー等を気に病んでいたりするかも知れませんですから、その時は……」

俺を慰める様に、眉根を寄せて心配そうな顔でそんな事を……。

……。

エリス様はやっぱり優しいなぁ……。

俺の周りにこんな人は居ただろうか。

ウィズ？　ゆんゆん？

いや、あの二人も優しいが、エリス様は心の底からの抱擁感みたいな、安心感みたいなものがある。

「……エリス様、たまには地上に遊びに降りてきたりしないんですか？　以前、コッソリ色んな所に遊びに行ってるとか言ってましたが。死ななきゃ逢えないとかちょっと寂しいですね……」

そんな俺の言葉に、エリス様はクスッと笑い。

「もう地上で何度も会ってますけどね？　そろそろ気づいてくれてもいいと思いますよ？　ちょっとだけ、寂しいです」

そんな事を、イタズラっぽく言っ……。

えっ。

「……今、なんて言いました？　会った事がある？　えっ、それはアクセルの街で、ですか？　えっ？　えっ？」

ショッキングな紅魔族の生い立ちを聞かされて、ちょっと落ち着いた頃に更にそんな事を言われても、ちょっと脳が追いつかない。

何度も会ってる？

何時どこで？

ええっと、それらしい人は居たか？

混乱している俺にくすくすとイタズラっぽく笑いながら。

「ではヒントです。地上では、私は違う外見をとっています。それにもっと活発で、言葉遣いだって違います」

違う外見。

もっと活発で、言葉遣いだって違……！

「そして、この場では私は女神という職業ですが、先輩の様に、地上でもアークプリーストをやっているとは限」

「ああっ、分かった！　キースに、『エリス教のプリーストは、信仰心の高さと胸の大きさは反比例するって本当なんですね。うひゃーっひゃっひゃっ！』　ってからかわれて、キースの鼻を拳でへし

折ったマリスさん！」
　更にヒントを言い掛けたエリス様を遮り、俺は確信を持って叫んでいた。
　エリス様は笑顔を絶やさないままで。
「……違います」
　あれっ。
　ああっ、あの人か！
「『女神エリスはパットだとかって噂を聞いたんですが、そのエリス教徒が巨乳だなんて、女神に破門とかされないんですか？　そもそもそれって本物なんですか？　パットじゃないんですかお二人さん？　違うと言うなら証明して見ろ！』と、ギルド内にて酔ったダストに絡まれ、ダクネスと一緒にそんなダストをボッコボコにしていたセリスさん！」
「違います」
　全く笑みを絶やさないエリス様は、何だか少し怒っている気がする。
　と、そんな時だった。
《カズマー！　カズマー！　もう蘇生は済んだからはやくきてー！　めぐみんが泣きじゃくっていて、ゆんゆんが怒っていて、何だか凄い事になってるの！　はやくきてー、はやくきてー！》
　相変わらず空気を読まないアクアさん。
　めぐみんが泣きじゃくっているだとか、ゆんゆんが怒ってるだとかが気になるが、今はそれよりももっと気になる事がある。
「エリス様、ギブ！　ギブアップです、すいません、答えを教えてください、お願いします！」
　結局誰なのか思いつかなかった俺に、エリス様は少しだけ。

どうしようかと悩むような様子を見せて……。
「……内緒です。……あと、先輩の言葉を鵜呑みにしないでくださいね？　い、一応今の状態で、パッドは入れていませんから！」
エリス様が、ちょっとだけ頬を赤くし、言いながら片手の指をぱちんと鳴らした。
そして目の前に現れたのはおなじみの白い門。
それを見て、俺は慌てる。
まだエリス様の正体を教えてもらってない！
慌てる俺を他所に、その白い門が開き、中から眩しい光を輝かせ……！
「ちょ、エリス様、すいません！　怒ったんですか？　拗ねてるんですか？　いやだって、本当に胸の大きさを気にしてるなんて思ってませんでし」
「それでは、佐藤和真さん！　今度は、あなたが天寿を全うした時か、私の正体が分かったあなたに会えます様にっ！　では、また！　さあ、行ってらっしゃいっ！」
俺はエリス様に、問答無用で門の中へと、背中をどんと突き飛ばされた！

15話（後書き）

ハッキリ言って二部読み返せば誰かはバレバレなので、これって伏線？ぐらいの質問なら答えます。
が、一応感想での、エリスは〇〇ですか？等のストレートな質問にはすっとぼけさせて貰います。

作者を泣かせる様な質問はちょっと喜びますが極力お止めください。

16話

手と胸と頭の辺りに温かい物を感じる。

「なんとかっ！　なんとか言いなさいよめぐみん！　どうして？　里で一番魔力があって、頭だって一番良くって！　ずっと昔から頑張ってきたあなたが、なんで爆裂魔法しか使えないの？　習得に一番コストが掛かるのに、高威力すぎて使い勝手の悪い爆裂魔法なんて、どうしてそんな魔法にスキルポイントつぎ込んだのよ！？」

ぼんやりと聞こえるのはゆんゆんの怒鳴り声か。

会話からしてめぐみんが怒られているのか……。

うっすらと目を開けると、俺を膝枕しながら頭に手を置くアクアの姿。

そしてめぐみんが、俺の手を両手で掴み、俺の胸に顔を埋めて泣きじゃくりながら、ゆんゆんに叱られていた。

えっと、これはどういう状態なのか。

目を覚ました俺を見て、アクアが言った。

「お帰りなさいカズマ。今回は駄々こねずにすぐ帰ってきたわね。すんなり帰って来なかったら、今回はめぐみんが泣いてる事だし次は私の番だとか言って、ダクネスがカズマの体に何かやる気だったのよ？　すぐ帰ってきて良かったわ！」

その言葉にダクネスに視線を向けると、何かをポイと地面に捨ててダクネスが余所見した。

地に落ちたそれは、一束の頑丈なロープ。

「……お前、俺の裸体を拝んだぐらいで赤くなる、なんちゃって痴女の癖に何する気だったんだよ。これからはもうセクハラはあんまりしないとヒッソリ誓った俺だったが、お前がそんな行動に出るなら俺にだって考えがあるぞ」

「由緒正しき貴族の娘をなんちゃって痴女と呼ぶな！　……貴様はそんな事よりも、何とかすべき事があるだろう。……ほら、早く何とかしろ」

最初は激高し掛けたダクネスだったが、言いながら、俺の手を掴んで泣くめぐみんとゆんゆんを顎でさす。

俺が収拾つけるんですかこれ。

「めぐみん、泣いてないで何か言ってよ！　学園時代あれだけ頑張ってきたからこそ、紅魔族随一の使い手を名乗っていいって、卒業の時に許可を受けたんでしょ？　ずっと私の先を進んでたじゃない！　だったら、ちゃんと上級魔法の一つぐらい……！　づかっで、みぜてよおおおお……！」

めぐみんを叱っていたゆんゆんまでが、なぜか突然泣き出した。

……すいません、本当に俺が収拾つけるんですかこれ。

「なるほど。紅魔の里の人間は、皆お前が爆裂魔法のみの使い手だって事は知らない訳か。だから何だかんだ言いながら、里に帰るのは嫌がっていたと」

俺は自分の首の後ろをさすりながら、めぐみんとゆんゆんの説明を一通り聴き終わって言った。
首の後ろは既にアクアの手により傷跡も残されてはいない。
……が、服の襟首などが血まみれだった。

「ごめんなさい、ごめんなさいっ！　私がちゃんと魔法を使えていたなら、カズマが死ぬ事はなかったのに……！」
めぐみんが、俺の胸に顔を埋めた状態で、そんな事を言って泣いている。

えっと、ちょっと意味が分からない。
そんな事よりも、死ぬ直前のめぐみんとのやり取りのせいで、こんな状態だと場違いに変な気分になってしまいます。

「いや、めぐみんは関係ないだろ。ここは俺達の手に余る強力なモンスターがワラワラ出る危険な場所だ。むしろ、全滅せずにすんで良かったよ」
と言うか、敵感知が出来るから俺が見張りについていたのに、そのスキルに反応しない敵だとかどうすりゃいいのか。
確かエリス様の話だと、魔導ゴーレムだとか言っていたが。
あれか、機械的な、感情も何もない敵だのは敵感知スキルで捉えられないのだろうか。

俺がそんな事を悩んでいると、ゆんゆんが未だ涙ぐみながらも口を開いた。
「アレは……っ。紅魔族の間では有名なこの森の守り神。赤い瞳をした、紅魔族の者が力を使う所を見れば立ち去って行く、変わった習性を持つモンスターなんです……」

……ああ、確かエリス様が、森の中の魔導技術大国ノイズの廃棄

施設を守っていたとか言っていた。
つまり、廃棄されたその施設で紅魔族への改造が行われていたのだろうか。
だから、紅魔族にだけは反応し、見逃してくれるとか。
そしてノイズが滅ぶと、その施設から近い所に里を作ったと。

周囲の森は、ゆんゆんの魔法のせいだろうか。
一部の木々が鋭利な刃物で切りつけられたかの様にバッサリと切り倒され、切られた木の幹がそこらに転がされていた。
光の手刀でバッサリやるあの魔法で切り倒したのだろう。

めぐみんは今もなお俺の傍から離れず、鼻をグスグス言わせていた。

ダクネスとアクアの二人は、俺に事態の収拾を押し付けて、見張りと称して俺達三人からそそくさと離れてやがる。

未だ涙ぐんでいるめぐみんを見ながら、同じく鼻をグスグス言わせているゆんゆんが、
「グスッ……、め、めぐみんは……。ずっと学園生活時代、魔法の理論学でも魔力の扱いにおいても、なんでも一番の成績で……。里の人達もこぞって、天才だって、期待されてて……。そんなめぐみんが、爆裂魔法しか使えない欠陥魔法使いに成り下がったなんて知られたら……！　うっ……。ううーっ……」
そんな事を言って、また涙をポロポロ零す。

そんなゆんゆんに、めぐみんが顔を上げ。
「……おい、欠陥魔法使い呼ばわりはよしてもらおうか。一応魔法攻撃力においてだけ言うならば、間違いなく紅魔族随一なはず。嘘偽りなんて言っていない。我が人生のほぼ全てを捧げている爆裂魔

法の悪口はやめてもらおう」

「爆裂魔法の使い所なんてどこにあるのよ！　ダンジョンでは威力が高すぎて崩落の恐れがあるから使えない！　射程は一番長いけれど、威力が高すぎて接近されたら自分も仲間も巻き込むせいで使えない！　よほどの高レベル魔法使いですら、一撃打てばまず二発目は使えない、非効率的な魔力消費！　唯一の長所の威力にしたって、どう考えたってオーバーキルでしょ！　爆裂魔法なんて、里の誰も取りもしない、スキルポイントだけをバカ食いするネタ魔法じゃない！」

めぐみんの言葉に、ゆんゆんが食って掛かった。

「いでででっ！？」

それを聞いたためぐみんが、俺の脇腹に置いていた手で思い切り俺の腹に力を込める。

そのままゆらりと立ち上がると、めぐみんは真っ向からゆんゆんに向き直り。

「……言ってくれましたねゆんゆん。言ってはいけない事を言いましたね。この私の名を馬鹿にするよりも、最も言ってはいけない事を、言いましたね」

「な、なによ。やる気なの？　上級魔法を使えない以上、体格も小さいめぐみんに勝ち目はないわよ」

ゆんゆんは警戒しながらめぐみんから距離を取った。

そして……！

「カズマ。ゆんゆんの秘密をそっと教えてあげましょう。実は我々紅魔族には、生まれた時から体に刺青が入っているのですよ。それは個人によって入っている場所が違い、ゆんゆんの体に刻まれてい

る刺青の場所は……」
「やめてえ、ちょっとカズマさんに何を言うの！　魔法を使えない今、体格で劣るめぐみんを取り押さえる事ぐらいできるんだからね！」
半泣きのゆんゆんが突っかかっていくが、それを見てめぐみんがヒラリとかわし。
「アクア、支援魔法をください！　この子に痛い目見せてやります！」
「ひ、卑怯者！　めぐみんはやっぱりズルい！　いつだってズルいっ！」

そんな事を言い合いながら、取っ組み合う二人に俺は叫んだ。
「おい、そんな事よりもゆんゆんの刺青の場所とやらを詳しく！」

ひとしきりゆんゆんと取っ組み合ったためぐみんは、何かに吹っ切れた様な晴れ晴れとした表情を浮かべていた。
地面には、めぐみんに取り押さえられてスカートを剥がれそうになり、泣きながら負けを認めたゆんゆんが、今もシクシクと泣いている。
もうあまり体力的にも限界に近かっただろうに、アクアの支援魔法でドーピングされためぐみんは、ゆんゆんに勝利した事もあり、何だかハイテンションになっていた。
「決めました！　カズマ、私は決めましたよ。このまま里に帰り、

そして私は皆に告げるのです。私の爆裂魔法への愛を。そして、今の私の現状を！」

そのめぐみんの宣言に、ゆんゆんが跳ね起きた。

「ちょっとめぐみん何言ってるの！？　里の皆がどれだけめぐみんに期待していたか分かってるでしょう！？　皆がどれだけめぐみんを評価していたか、それはあなたが一番分かっている事じゃない！　それに……！　そんな事言ったなら将来性を見込まれたからこそ免除してもらっていた学費、返せって言われるわよ。その……、言いたくないけどめぐみんの家って、貧乏じゃない……」

「おい、貧乏って言うな。裕福な家庭じゃないとかオブラートに包んでもらおうか」

ゆんゆんにそんな事を言いながら、めぐみんが今までに無いぐらいにやる気な表情で笑っていた。

「もう私は決めました。紅魔の里よりも大事な物が出来たのです。文句言う輩がいたならば、ゆんゆんの言う所の私のネタ魔法を里のど真ん中でぶっぱなしてやります」

「や、やめてぇ！　冗談よね？　そんな冗談言っちゃって、そ、そんな事しないよねめぐみん？」

不安そうな顔ですがるゆんゆんの言葉を無視し、めぐみんがバサッとマントを翻した。

「カズマ！　夜間行軍になってしまいますが、もうこのまま行きましょう！　しょうもない事でアクアに支援魔法をかけてもらってしまいました。一時的に各種身体能力が増加している今の内に距離を稼いでしまいましょう！　支援魔法が切れれば、酷使した肉体の反動で多分私は寝てしまいます。と言うか、気を失う勢いで。行きま

しょう！　今の内に里へと殴りこみに！」

「お、おう……」

吹っ切れたウチの魔法使いの事が少しだけ不安です。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

明かりを灯した松明を中心に、ゆんゆんが光を屈折させる魔法を掛ける。

それにより、俺達の半径数メートル外からは唯の暗闇にしか見えないだろう。

そんな状態で俺達は、唯一この道を踏破した事のある、ゆんゆんを先頭にして歩いていた。

俺の隣にアクアが並び、

「カズマ、分かってる？　もしモンスターが出ても、カズマはしばらく安静だからね。本当は、こうして歩きまわるのも控えたほうがいいんだけれど」

俺に、そんな術後の医者みたいな事を言ってきた。

ああ、そうか。

死んだ後は安静にってやつか。

「激しい運動を控えろってやつか。流石にお前の魔法でもどうにもなんないのかこれは。まあ、死んだ人間蘇生させるんだもんな」

俺のそんな言葉にアクアがぽんと手を打った。

「そうだわ！　ねえカズマ、次に死んだらエリスにも蘇生魔法かけ

て貰いなさい。女神二人掛かりの蘇生魔法。これなら多分、生き返ってすぐに動いても、一度くらいは戦闘を行えると思うの。……多分」

「おい多分って何だ。と言うか、俺がまた死ぬような前提で話を進めんな。蘇生したばかりで激しく動いてうっかりまた死んだらどうしてくれる。最近は慣れてきたがこれって結構ショックなんだぞ」

しかし、これでしばらくは戦闘に参加できなくなった。

と言うか、走ったりだの激しい運動も。

……あれっ、これって今凶悪なモンスターに襲われたら、俺だけ逃げられなくて、俺だけ詰むんじゃないか？

そんな事を考えながら、どれぐらいの間夜の森を進んだのだろう。

一度だけアクア目当てに寄ってきたアンデッドを退治した以外は、特に問題もなく旅が進む。

やがて空の色が白みはじめ、そろそろ一度休憩でも、と思った時だった。

「……めぐみん、何だか先ほどから手が熱いのだが大丈夫か？」

それはめぐみんの隣を歩いていたダクネスの一言だった。

またふらついて倒れないようにとの為か、負担を少しでも軽くしようとしていたのか、ずっとめぐみんの手を引いて歩いていたダクネスが、心配そうにめぐみんの顔を覗き込む。

その言葉に、他の皆もハッとしてめぐみんを……。

「……おい」

俺は思わず声が出た。

めぐみんは歩きながら眠っていた。

「……これは芸ね！　この私が立派な芸として認めてあげるわ！」
「うるさいぞ芸の女神、いやこれまずいだろ、手が熱くなってきたって言うのなら起こさないと。アレだ、めぐみんを起こして一度休憩でもしようか。今日は皆もあまり休めていない訳だし、休まないとキツイだろ」
言いながら、休憩と朝食の用意を始める。

めぐみんを起こすのはゆんゆんに任せ、俺はダクネスとアクアが拾い集めてきた少量の小枝に魔法で火を。
ちょっとした休憩程度だから、簡単な焚き火で充分だ。

と、アクアとダクネスが俺のそばに来て何か言いたそうにしている。
「……カズマー、カズマー。ええっと、水を出して欲しいんですけど。それも沢山」
……？
「なんで？　飲み水なら充分あるだろ。水なんて何に使うんだよ」
水を出すには魔力だって使うのだ。
別にその分の魔力をアクアからドレインで吸っても良いのだが。
……と、ダクネスがちょっと恥ずかしそうにしながら言ってきた。

「その……、な？　ほら、ちょっとその…衛生面と言うか、紅魔の里にも今日中には着くだろうし。ちょっとした身だしなみを……」
ああ、なるほど。
そうか、体を拭きたいのか。
野宿続きだもんな、そりゃあ仕方ないよな。
と言うか、めぐみんとゆんゆんも体ぐらい拭きたいだろう。
皆の分も出してやろう。

俺は紳士だ。
こんな時に覗きだとかそんなお約束通りの事はしない。
俺はつい先日、もう皆にはあまりセクハラはしませんと誓ったのだ。

……。

「おーいゆんゆん。今からアクアとダクネスが体を拭く為の水を出すんだが、ゆんゆんとめぐみんも水、いるかー？　あと、ちょっとした個人的なお願いがあるんだが、上級魔法を教えてほしいなーなんて思ってさ。いや、スキルポイント足りないし今は覚えられないんだけどさ」

俺はそんな事を言いながらゆんゆんとめぐみんの元へと近づいた。
俺が上級属性魔法を覚えられたならば大変な戦力強化になるだろう。
今は覚えられないが、来たるべき戦いの時の為にいつでも習得出来るようにしておいても良いのではなかろうか。

「カ、カズマさんっ！」
ゆんゆんが、そんな俺に鋭く叫ぶ。
「いや待って欲しい！　別にやましいことを考えた訳じゃないんだ、ただ俺は、仲間を守る為の戦力強化の一貫で……！」
昔読んだファンタジー物に、光の屈折を悪用した覗きがあったなとか、そんな事を思い出した訳じゃない。
「カズマさん、めぐみんがっ！　めぐみんが、起きないんです！」

「めぐみん起きて、でないとカズマが凄い事するって言ってるわよ！　大変よ、神聖な女神の口からはとても言えない様な凄い事をするんだって！　はやく起きてー、はやく起きてー！」

アクアの呼びかけに応える様子を見せず、めぐみんはゆんゆんに抱きかかえられながら、まるで意識を失ったかの様に眠っていた。

その体は少し触れただけでも熱く、顔色もかなり赤くなっている。

なぜ俺の名を出すのかとアクアを問い詰めたいが、今はそんな事している状況ではない。

アクアが静かに首を振り、代わりにダクネスがめぐみんの耳元で慌てた様に。

「めぐみん起きろ！　でないとこのケダモノが、今からもの凄い事をするそうだぞ！　どれぐらいもの凄いかと言うと、この私ですらがもう許して欲しいと泣いて懇願するレベルの凄い事だそうだ！　そう、きっと、きっとこのケダモノは私の体を縛り上げ、じっくり嘗め回す様に私の体を見やるんだ……！　そうしておいて、すぐには手は出さず、焦らす様に一枚一枚服を……！」

「よし、お前はもういい！　次だ！」

途中から趣旨が変わってきた、頬を赤くし出したダクネスを押し退ける。

次はもう一度ゆんゆんだ。

学生時代からの知り合いなゆんゆんは、俺達よりも付き合いが長い。

ゆんゆんの呼びかけならば……！

「めぐみん起きて！　お願いよ！　私、まだあなたに一度も勝ってない！　ズルい！　こんなのズルいよ！　勝ち逃げは許さないわよ、起きなさいよ！　ねえお願い起きて、本当は、勝ち負けなんてどうでもいいから！　ねえお願い、お願いめぐみん！　お、起きてよぉ……！」

ゆんゆんの半泣きの呼びかけに、それでもめぐみんは目を覚まさない。

いよいよ泣き顔になり、俺を見上げるゆんゆんから、俺はゆんゆんが抱きかかえていためぐみんを受け取った。

触れただけで、思わず反射的に落としてしまいそうなぐらいに熱くなっためぐみんの体。

それは既に、普通の人ならとっくにどうにかなっていそうな体温だ。

揺さぶっても頬を叩いても、背中に手を突っ込んでフリーズを唱えてみても。

それでもめぐみんが起きる気配はない。

ヤバい、何これヤバイ！

ボンッてやつか？

ボンッてなる前兆なのか！？

いよいよなりふり構っていられず、モンスターを呼び寄せるとかは既に気にもせず。

全員で大声で、めぐみんの耳元で呼び掛けた。

「おい、めぐみん起きろ、起きろってんだよ！　起きないと俺がこの場の全員から、半年ぐらい口きいてくれなくなるレベルのすんごいセクハラすんぞ！　おい、脅しじゃないからな！　俺がやる時は

やる男だって、お前はもう分かっているだろう？　いいのか？　やるぞ？　起きないなら大変な事をやっちまうからな！？」

「めぐみん起きろ、起きろ起きろ、起きろ起きろ起きろーっ！　めぐみんの大好きな爆裂散歩に、私で良ければまたいつでも付き合おう！　また一緒に一日一爆裂に行こう！　そうだ、今度は廃城なんかじゃなく、もっと大きな建造物を破壊しに行こう！」

「めぐみん起きてー、はやく起きてー！　今から私が取って置きも取って置き！　恐らくは私の生涯において、一度か二度位しか見せない、凄い芸を披露するわよ！　花鳥風月、宵闇桜、そんな数多ある私の芸の中でも、奥義とも言える取って置きの一芸披露よ！　見ないと一生後悔するわよ！」

俺達三人が叫ぶ中。

めぐみんに何かを叫ぼうとしていたゆんゆんが、ハッとした様にある方向を振り向いた。

それを見て、俺はしくじったと後悔する。

こんちくしょう、俺はアホか、こんな時の為の敵感知スキルだろうが！

めぐみんへの呼びかけに必死になり、敵の接近に気が付かなかった。

ゆんゆんが、めぐみんを庇う様にして立ち上がり、激しい敵意を持って見つめる先。

そこには……、

「紅魔族を二匹見つけた！　後は冒険者風の人間だ！　おい、こっちだ、こっちに来い！　紅魔族が二匹だ、しかも一匹は弱っている

！　今がチャンスだ、大手柄だっ！」
それは一匹の、鎧を着たモンスター。
耳の尖った、肌の赤黒い、例えるなら筋骨隆々ではなくスリムな鬼。
そんな印象のモンスター。
額に一本の角を生やし、そのギラつく視線を眠り続けるめぐみんから離さない。
その姿を見て、アクアとダクネスが立ち上がり……！
「んー？　あんた、見た感じ下級の悪魔モドキじゃないですか、ヤダー！　下級悪魔にすら昇格できない、鬼みたいな悪魔崩れがなんですか？　なんですか？　あんたみたいな下級モンスター相手だと、対悪魔魔法が効かないのよね。良かったわね、悪魔の成り損ないで。今は悪魔崩れのモンスターに構ってる暇無いの。ちゃんとした悪魔に成れたら相手してあげるわ。今日は見逃してあげるから、あっちへ行って。ほら、あっちへ行って！」
挑発しているのか脅しているのか分からないアクアの言葉に、その鬼みたいなモンスターがギリッと歯を食いしばる。
それを見て、ダクネスが無言で大剣を抜いて前に出た。
鬼みたいなそいつは鎧を着ている所からして、紅魔族と交戦中だとか言っていた魔王軍の兵隊なのだろうか。
もう紅魔族の里へは近いのだ。
魔王軍の連中とやらがウロウロするのも当たり前だ。
そいつは手に短めの槍を握り、その赤黒い顔を更にドス黒くして怒りあらわにこちらを睨む。

と、その後ろからバラバラと、似たような姿の連中が現れた。
手に持つ得物はマチマチだが、それぞれが武装している魔物の兵士だ。
ちょっとこれはまずいだろ。

と言うか、数が多い……、多いって！

「見逃してやるとか言ったか。なんだって？　なんだって？　そこのプリーストさん、なんだって？　……散々煮え湯を飲まされている紅魔族が二匹だ。見逃す訳がねえだろうが！　おい、八つ裂きにしちまえ！」

その鬼の後ろには、二十を越える同じ姿のモンスター。

……今の俺は絶対安静。
めぐみん抱えたまま、走って逃げる事すら出来ないんですが。

「『ライト・オブ・セイバー』ッ！」
その声と同時に光の筋がシュッと走った。
それと同時に数匹の鬼みたいな奴が体の一部を切り落とされ、そのまま地に崩れ落ちる。

「囲め囲め！　周りを囲んで一度に襲えばどうにも出来ない、まず

はあの紅魔の娘を殺っちまえ！」

仲間の崩れ落ちる姿を見て、激高した鬼が叫んだ。
ゆんゆんを囲もうとする鬼を牽制するかの様に、ダクネスがゆんゆんと鬼達の間に立ち塞がる。
アクアがそんなダクネスとゆんゆんに支援魔法を掛ける中。

「おい、ヤバイぞこれ、ヤバイって！　魔王の手先とやりあってる場合じゃねーってば！　めぐみんが！　めぐみんがボンッってなる！」

俺は起きないめぐみんを抱えたまま、大声で皆に呼び掛けた。
ヤバイヤバイ、どんどんめぐみんが熱くなる！

それを聞いた鬼が叫ぶ。
「おい聞いたか！　紅魔の娘がヤバイってよ！　このまま時間をかけて嬲ってやろうぜ！」
その声に他の鬼からも下卑た笑いが広まっていく。
それにカッと頭に血を上らせた俺の仲間達が……！

何かを叫ぼうとしたので、その前に俺は敵に告げた。
「おい、いいか、よーく聞け。今、この子は爆発寸前だ。紅魔族の話では、このまま放っておくとボンッてなるんだそうだ。分かるか？　ボンッてなるの意味は俺は知らない。でも。……果たして、ボンッてなった際にお前達は無事なんだろうか」

そんな俺の言葉に、鬼達が鼻で笑う。

「ハッタリかよ。魔王様の尖兵たる俺達が、そんな作り話信じるかってんだ」
おっと、作り話と言われてしまった。
やはりこいつらは魔王の手先か。
だが、鬼の一人が恐る恐るといった感じで呟いた。
「……紅魔族は、魔力が体にこもって大爆発する事があるって聞いた事が……」
それを聞き、シンと静まり返る魔王軍の手先達。
今が絶妙のタイミング。
「……おい、ここは見逃して通せとか言っているんじゃない、この子はこのまま寝続けると本当にボンッてなる。と言うか、寝ているこの子の顔色を見ろ。ヤバイ色してるだろ。何なら誰か触れてみてもいいぞ。その上でボンッてなるかどうかを判断しろ」
俺の言葉に鬼達が顔を見合わせ、ゆんゆん達も、俺と魔王軍の連中の交渉の成り行きを見守っている。
やがて一人の鬼が、武器をその場に突き立てて恐る恐る、めぐみんの片手に手を伸ばした。
それが軽くめぐみんの手に触れると、その鬼がビクッと後ずさりする。
「おい、熱いぞ！　病の熱の熱さじゃない！　尋常じゃなく熱い！」
それを聞き、数匹の鬼が逃げ出した。
なんという潔さ。
途端にざわつく鬼達。
これで少しは時間が稼げる！

俺は敵味方が見守る中、めぐみんの頬を張る。
俺は元々女相手でも手加減はしない男女平等主義者だが、今はそれも関係ない。
女の子だとかヌルい事は言ってられない、起きなきゃ死ぬ。
「オラオラ起きろ、起きろ！　お前起きないと冗談抜きで死ぬんだぞ！　おい起きろ、起きろって！　お前はこんな衆人監視の中、凄い事されたいのか！　とっとと起きろってんだ！」
魔王の手先が見守る中、俺は遠慮なくめぐみんの頬を張る。

「お……、おい、アイツなんて奴だ、仲間じゃないのかあの子は……」
「弱りかけの女相手になんて奴。起きなかったらこんなに大勢が見ている中で何する気なんだ……」
魔王の手先がヒソヒソ囁いているが、こっちはそれどころじゃない。
言うなら勝手に言ってろ！

「ねえダクネス、あそこでめぐみんを叩いて魔王の手先にどん引きされてるのって、一応私達の仲間なのよね？　どうしたらいいと思う？　もうカズマの更生は不可能なのかしら」
「シッ、アクア、あれであいつは結構傷つきやすかったりと面倒くさい性質を持つんだ。もっと小さな声で……。めぐみんへのあの仕打ちを見ていると少し……、いや、かなり興奮するが、アレでもたまに良い所もある大事な仲間だ……」

……。

魔王の手先達が成り行きを見守り続け、アクアとダクネスがそれを牽制する中、ゆんゆんが俺の元へと駆けて来た。

そのままめぐみんに縋り付く。
「めぐみん、めぐみ……、熱いっ！？　カズマさん、どうしよう！　めぐみんが、めぐみんが！」
「おおお、落ち着け！　起きる事を、めぐみんが飛び起きそうな事を言ってくれ！　ああクソッ、一つだけ助ける方法があるにはあるが、それだけは本当に最後の手段だ！」
俺の叫びにゆんゆんは、泣きそうな困り顔でオロオロしながら。
「あるんですか！　助ける方法があるんですかっ！？」

俺に縋り付いてくるゆんゆんに、俺は言うべきか言わないべきか。
俺は全員の注目を浴びながら。

「……いや、……。これ言うと、きっと皆ドン引きするから……」
俺はシンと敵味方が静まり返る中、小さな声で呟いた。

だがそれを聞き、ゆんゆんやアクア、ダクネスが、こぞって言った。
「引きません！　引きませんからお願いします！」
「カズマ、方法があるなら何とかしてー！　引かないから！　だって、カズマが鬼畜で外道な事なんて、何を今更って感じだから！」
「カズマ、私達を信じろ、引きはしない。今更だ。何か手があるなら、それでいい！」

……。
俺は悩んだ末に小さな声で。

「……。まずめぐみんに、いっそとどめを刺します。するとボンッてなる事はないでしょう。その後紅魔の里へと、フリーズで遺体を冷やしながら運び、紅魔族ローブを調達して遺体に着せます。後は

アクアに蘇生して貰え……ば……」
俺はそこまで言って、周囲の反応に気がついた。
「「「「「うわあ……」」」」」
アクア達だけでなく、魔王軍の手先達もが一斉に引いた。

アクア達はおろか、魔王の手先にすらドン引きされ、俺は一人泣き出しそうになっていた。

分かってるよ、最低な事言ってるのは！

もういい、めぐみんがこのまま体も残らずボンッてなるぐらいなら、悪者にでもなんだってなってやる！

俺は、せめてめぐみんが苦しまないで済む方法を模索して……。

そして、今更ながらにある事に気がついた。
どうせなら、今こそドレインタッチの出番だろ！
めぐみんが弱り切っていた為躊躇していたが、体力を吸われて死ぬか、もしくはそれまでに目が覚めるか。

どっちにしてもやる事が最低なのは自覚している。
非難でも罵倒でも甘んじて受けてやる。
俺はめぐみんの頬に手を触れて、そのまま遠慮無くドレインする。

体力と共に魔力がグングン俺の体に吸収され、それと共にめぐみんの顔色が戻っていく。
だがそれと同時に、今度はめぐみんの体が、段々生気が無くなる様にグッタリしてきた。

「カズマさん！　カズマさんっ！　本当に、本当に、めぐみんを殺す気なんですか！？　それしか方法は無いのかもしれないけれど、でも……、でも……！」

「「「「「う、うわあ……。うわあ……！」」」」」

泣くゆんゆんの言葉に、俺がめぐみんに何かをしていると知り、本気でドン引きしている魔王軍の手先達。

……と言うか、一人の鬼が青い顔で俺を何度も振り返りながら走って逃げた。

……心がへし折れそうになる。

……めぐみんを助ける、めぐみんを助ける……！

何か無いのか何か！

こんな時こそ俺は、なんか思いつかないのかよ、頼むよ本当に！

「ゆんゆん、なんか無いのか、めぐみんが本気で嫌がりそうな事はっ！　紅魔族が気にしてる事とかなんか無いのか！」

半泣きになりながら、俺は情けなくもゆんゆんに縋る。

その言葉にゆんゆんは、恥ずかしそうに俯いて、それから意を決した顔で。

めぐみんの着ているローブのスカート部分を、俺にだけ見える角度でまくり上げた。

「！？」

訳が分からず固まっていると、ゆんゆんはそのままめぐみんの下着に手を掛けて……！

そ、それ以上はいけない！

ありがとうございます！　ありがとうございます！

いや違う、いけない！
止めなきゃいけな……！

「これが、紅魔族の秘密の一つです！　紅魔族は、他人にこの刺青を見られる事を恥ずかしがります！」

ゆんゆんがめぐみんの下着を少しだけ下げ、俺の目にめぐみんの、尾骨の下、尻のごく一部が少しだけ飛び込んできた。

そこにあるのは黒い刺青。
これが機体ナンバーと言っていた奴だろうか。
でもこれは、刺青……、と言うか。
機体ナンバーと言うか……。

この世界ではなく、日本で見覚えのあるそれは……。
そう、それは……！

「めぐみん、お前……！　……ケツにバーコードが付いてんのか」

俺の何気なく言ったその一言に、めぐみんがカッと目を見開いた。

「『エクスプロージョン』――――――ッッッ！！」

17話

体が痛い。
と言うか、首が痛い。
具体的には、俺が殺された時に攻撃を食らった所が凄く痛い！

「アクア、首が痛い！　これ大丈夫なのか？　俺、いきなりまた死んだりしないのかよ!?」

絶対安静と言われた俺は。

「大丈夫よ。……多分。その痛みは体の痛みじゃなくて、カズマの魂の方が、死ぬ瞬間のダメージを覚えているの。つまり、体の傷は癒えたけれど心の傷がまだ癒えていない感じね。そっちの傷は、魂だけの存在になってる時にでも蘇生魔法のでもかけてもらえばいけるんじゃないかしら。もう一度エリスの所に行って治してもらって来る？　一日に二度も蘇生させるなんて前代未聞だけど、なんとかなるんじゃないかしら。……多分」
「だから、多分はやめろよこえーんだよ！」

現在、支援魔法で一時的にドーピングされて紅魔の里への道を進んでいた。

「ううう……。すいませんカズマ、私をおぶる際、もうちょっと手を……。手を、太ももとかにはやれませんか？　さっきからお尻こねくり回してません？」

そんな体でめぐみんを背負いながら、
「こねくり回してはいない。少しでもお前を効率的に運び易い様に、

数分刻みで持つ位置を変えたり尻を握り直したりしているだけだよ」
「それをこねくり回すと言うのですよ！　なにか私、一番カズマに色々されている気がするんですが」
そんなめぐみんの苦情を背に受け、聞き流していた。

遠くで何かが弾ける音。
何気なく振り返ると、その方角には炎の柱が立ち上っていた。
それをめぐみんが、俺の背中から首だけをそちらに向け、心配そうに見続けていた。

「ゆんゆんの魔法は凄いわね！　大丈夫よめぐみん、ダクネスも付いてるし！　ちゃんと後から追いついてくるわ！」

ダクネスとゆんゆんは、現在魔王の手先と交戦中。

先ほど目を覚ましたためぐみんが、遠巻きに見ていた魔王の手先を大量に巻き込み、盛大に爆裂魔法を炸裂させた。
敵の近くにいたダクネスが爆風で転がったが、平気な顔ですぐに起き、そして、戦えない俺とめぐみんがいると凄く邪魔だと言われてしまった。
そしてなんだか凄く嬉しそうに、ここは私に任せて先にいけとか騒いでいた。

既に魔王の手先達は凶悪な爆裂魔法の威力を見て、ほとんど戦意を失っていたのだが。
ダクネスがはあはあ言いながら、本当に嬉々としていたので置いてきた。
ゆんゆんが火力要員として付いててくれると言うので遠慮無く。

爆発の音を聞きつけて、きっとワラワラとモンスターが集まって

来るのだろうが、ダクネスがゆんゆんを守り、ゆんゆんが攻める。
あの二人だと何だか凄くバランスが取れている気がする。
うん、任せておいても大丈夫だろう。

俺は、ドレインでギリギリまで体力を吸われ、動けなくなったためぐみんを背に、里への道を早足程度の速度で歩く。
隣には、アクアが皆の荷物と俺の武器や鎧を背負いながら、文句も言わずに運んでいた。

そんなアクアが、少しだけ懐かしそうに、楽しそうに。
「ねえねえ、こうして三人で居ると最初の頃を思い出すわね！　カズマがまだ何のスキルも覚えていない、ショートソード振り回すだけの子だったあの頃！」

そんな舐めた事を言い出したアクアに、俺も過去を懐かしく振り返る。

「あったな、そんな頃が。お前が、手も足も出ずにカエルに食われ、泣きじゃくっていた頃な。そういや弱っためぐみんをおんぶするのって久しぶりだな。あの頃は、魔法を撃つ度に動けなくなっていたな」

「……懐かしいですねえ。あの頃は、まだカズマも今よりずっと紳士的でピュアでした。何度もおんぶしてくれましたが、こうしてお尻触ったりはしませんでしたよね」
背中のめぐみんが、懐かしそうにクスッと笑った。
「お前が、ゆんゆんに物事には対価が必要だって言ったんじゃないか。おんぶにだって対価が必要だろ？」
「対価と抜かしましたね、やはり気のせいでなくお尻まさぐっているんじゃないですか！」

俺にかなりギリギリまで体力を吸われたためぐみんは、何だか結構元気そうだ。

めぐみんが耳元で騒ぐ中、再び遠くから音が響いた。

向こうも頑張ってくれている様だ。

今のうちに距離を稼いでおかないと……。

「……でも、本当にこうしていると昔を思い出します。馬小屋で寝泊まりして、カエル相手に苦戦したり、ダクネスが、モンスターの群れに嬉々として突っ込んでいったり」

背中でのんびりと、懐かしそうに言うめぐみん。

思い出すなあ、苦労したあの頃を。

思えばあの頃は、全員にもっと手を掛けさせられたもんだった。

アクアはヘマをやらかし、めぐみんは魔法を撃つ度に倒れて俺がおぶり。

ダクネスは嬉々として敵の囮になりたがり、俺もとばっちり食らったり死んだりしたり……。

それが今となっては、皆も随分と頼もしく……。

頼もしく。

頼もし……？

「……なあ、俺は相変わらずアッサリ死ぬし、こうしてまためぐみんをおんぶしている。そしてダクネスは現在、嬉々としてモンスターの群れに突っ込んで囮になっている。……なあ、ちゃんと成長してるのか？　俺達、昔と比べて実はあんまり変わってなくないか？」

俺のそんな言葉に、めぐみんとアクアが黙り込む。
「……わ、私は成長しているわよ！　ほら、今だってこうして荷物背負って二人を守りながら里に向かっているでしょう？　少しは頼りにしたっていい頃だと思うの。私だっていつまでも、カエルに食べられて泣いている訳じゃないわ。この辺りはさっきみたいな悪魔崩れのモンスターがウロウロしているでしょうね。今は二人が戦えない状態だし、何かが出たら私を頼りにしていいからね」

アクアが強気でそんな事を言ってくるが、こいつがそういった系の発言をするともう嫌な予感しかしない。
だが、確かに今戦えるのはアクアのみだ。
正直、こうしてめぐみんを背負って歩いているだけでも首後ろがズキズキ痛み、そこからジンワリ血が滲んでいる様な感覚に囚われてくる。
触ってみると血など付いてはいないのだが。

しばらく進んでいると遠くから敵の気配を感知した。

体は万全では無くとも、こんなスキルぐらいはちゃんと使える。
俺はアクアに立ち止まるように合図をすると、しばらくその場に留まった。
先の気配は動かない。

「……この先に敵がいるな。動く様子も無い。……検問でも張ってるんじゃないだろうな」

そんな予想は当たるもので、先ほど見た鬼みたいなモンスター十匹近くが街道を封鎖していた。

俺は、遠く離れた茂みの中から千里眼スキルでそれを確認し、めぐみんを背負ったままアクアに尋ねる。

「一応このままダクネスとゆんゆんを待とうと思う。あいつらもそろそろ追いついてきてもいい頃だ。ここで連中を遠目に監視しつつ、ちょっとだけ休んでおこうか」

それにアクアが頷いて、背負っていた荷物を街道脇にドンと下ろした。

なんだかんだで結構歩いた上に、よく考えたら朝飯も食っていない。

時刻はそろそろ昼になりそうだが、ダクネス達はそろそろ現れてもいい頃合いだと思うのだが。

めぐみんを、街道から離れた、地面に敷いたレジャーシートみたいな布に寝かせると、俺もその隣で寝転んだ。

生き返った後は絶対安静と言っていた意味がよく分かった。

今までは安静にしていた為にそんな事は無かったのだが。

今は、酷くダルく、首が痛い。

ぐったりしている俺とめぐみんを見ながら、珍しくアクアがテキパキと動いていた。

甲斐甲斐しく朝食兼昼食の用意を始め、俺とめぐみんの分のコップを用意してくれる。

一体どうしたんだこいつはと思っていたら。

「ねえ、どう？　どう？　昔と比べてどう？　私だって頼りになるようになったでしょ？」

……ああ、先ほどの話を引きずっていたのか。
「偉い偉い。頼りにしてるよ。それよりもめぐみん、何か少しでも腹に入れておけよ。里までは後少しだからな。寝るなよ？　次に寝たら流石にもう、ドレインでの緊急措置は出来ないぞ」
アクアを適当にあしらって、グッタリしているめぐみんを見る。
……と、めぐみんが、アクアが下ろした荷物を背にして寝転んだまま。

「……そう言えばカズマ。……見ました？」
そんな事を聞いてきた。

見ました。

「……ええと、どれの事だろう。心当たりが多すぎまして……」
「お尻の刺青の事ですよ！　他に何を見たんですか！？　そう言えば、目が覚めたら下着がずり降ろされていたんですが、本当に、どこまで見ました！？」

興奮しためぐみんが食って掛かるがどこまで答えていいものやら！

「お、落ち着け、お前今、体力がギリギリな状態だろ！　安静にしとけ！　見たのはケツのバーコードだけだよ、大丈夫、それ以外は見てない、見てないから！　て言うか距離はあるけど静かにしろよ、敵に見つかったらどうすんだ！」

興奮しためぐみんが俺の胸ぐら掴んではあはあ言ってのし掛かって来る。

そんなめぐみんは俺の言葉に、掴んでいた俺の胸元から手を離し、

「はあ……。全く、本来ならば紅魔族は、あの刺青を見られる事が最も恥ずかしいはずなのですが……。ですが、カズマ相手だと見られたのが刺青で良かったと思えてくるから不思議です」

そう言ってため息を吐き、再び荷物を背にして横たわった。

ケツバーコードは、そんなに恥ずかしいものなのか。

……いや、と言うかなぜバーコードが。

あれか、日本からのチート持ちが異世界入りした時に、ノイズって国に仕官でもしたのだろうか。

でもバーコードなんて作れる技術、ちょっと現実的じゃない気がする。

バーコード付いてるって事はピッてする奴もあるって事だろ？

それに紅魔族の肉体改造だの、技術大国と言われた、俺の居た日本ですらそう出来ない事だと思うのだが。

アクアがここに送った奴の中に、そんな技術チートを貰った奴がいたと考えるのが一番妥当なのだろうが。

大体、時系列とかどうなってるんだ。

と言うか、紅魔族の歴史は浅いそうだが、そもそもの疑問が……。

「……なあアクア。お前って今幾つなのか聞いてもいいか？」

カランッ、と音がした。

それは、火を起こそうとでもしていたのか、アクアが、拾い集めていた薪を落とした音。

「……ねえカズマ、女神に年聞くってどういう事？　あんた、そろそろ本気で罰当てるわよ。……言っておきますけど、私があなたと出会ったあの部屋は、時間の流れが凄くゆっくりなんです。つまり、あなたの言う所の年齢計算では、私の年齢を表すことが出来ないと

言う事。その辺が分かったなら、二度とこんな質問はやめてください。でないと本当に天罰を与えますよ佐藤和真さん」
妙に真面目ぶった口調でそんな事を言ってくるアクアに、俺は聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で呟いた。

「……なんだ、ババアか……」
「なんですってえええええ！　ふざけんじゃないわよあんた誰がババアよ住んでた場所の時間の流れがゆっくりだからあんたよりも長く生きてるだけでババアではないわちょっと待ちなさいよっ、わあああああああああああああーっ！」
「アクア！　アクア、声が大きいです、向こうの敵に気づかれますよ！」
そんな警告をするめぐみん自身も、結構小さくない声を出す。

もちろん気づかれました。

◆◆◆

「やっぱりだ！　やっぱり、ちっともお前は成長していない！　いつもより役に立つ時は絶対に何かやらかす、そんな奴なんだよお前は！」

こちらに向かって駆けて来るのは、先ほど戦った鬼みたいな姿の魔王の尖兵達。

「あんたたちょっと待ちなさいよ！　私がついつい叫んじゃったのは、あんたが失礼な事言うからでしょ！　言ってみれば、今回の件は私じゃないわ！　私が成長していないんじゃない、カズマがちっとも成長していないのよ！　このヒキニート！　ロリコンニート！」

「お前って奴はまた言いやがったなクソビッチが！　俺はロリコンじゃないっていつも言ってるだろうが！　俺は子供好きなだけなんだよ！　頭に来た、今日こそここで決着つけてやる！」

「二人とも、いい加減に少しは成長してください！　ほらっ、こっちに来ますよ！」

めぐみんの言葉の通り、十匹ほどの魔王の手先がこちらに向かって駆けて来た！

「おいどうすんだ！　お前、あいつら相手に戦えるのか！？」

俺のその言葉に、アクアが首をクリクリとひねって見せた。

……どうも、ゴキゴキと首を鳴らしたかったらしい。

そのまま、地を何回かザッザッ、と蹴り、体を半身にして拳を構え。

「ふふ。私の事を成長していないって言ったカズマ。私が近接格闘スキルを持っていたのを忘れていない？　あんな雑魚が相手なら片手で十分。まあ見てなさいな、たまには女神らしい所を見せてあげるわ！」

……アカン。

もうこの後の展開が目に見えるので、俺はめぐみんを背負おうと立ち上がる。

見れば、もうかなりの距離にまで魔王の手先が接近している。

めぐみんを背負ったままどこまで逃げれるか分からないが、もう、いつゆんゆんとダクネスが追いついてきてもおかしくない頃合いだ。

来た道を引き返せばなんとかなるかも知れない！

「アクア、逃げるぞ！　変なポーズとって威嚇していないでとっとと来い！」

魔王の手先相手にちょろちょろと色んなポーズで威嚇するアクア。

俺は、既にアクアに背を向けて、そのままめぐみんを背負おうと……。

俺がそんな逃げる準備をしていると、アクアが小さく呟いた。

「……あっ」

その声に振り向くと、そこに見えるのは必死の形相でこちらに向かって駆けて来る魔王の手先。

それらが皆、武器を構えるでなく、その場に武器を投げ捨てながらこちらの方に駆けて来ていた。

……！？

何事だと思ったその時、突如として何もない空間から黒いローブを着た集団が現れた。

いや、全員が黒いローブではない。

二人ぐらいは、黒色の、ライダースーツみたいなツナギを着て、指先が空いた手袋をはめていた。

その集団は、それぞれが短めの杖を持っていたり、手に何も無かったりと武器の類はマチマチだ。
他にもまだ隠れているのかも知れないが、現れた人数はざっと四人。

持っている武器や服装はマチマチだが一つだけ共通して言える事があった。

それは、彼らの瞳が赤い事。

めぐみんやゆんゆんと同じ、深い真紅の瞳だった。

紅魔族。

俺はすぐさま理解した。

何もない空間から突然現れた様に見えたのは、ゆんゆんが使っていた光を屈折する魔法の為だ。

きっと魔王の手先を襲撃する為に、姿を隠して襲いかかったのだろう。

今、俺達にその姿が見えているのは、きっと光を屈折する魔法の効果範囲の中に入った為。

そして、魔王の手先がこちらに向かって必死になって逃げているのは、きっと俺達に気付いたから襲いかかって来ていたのではなく、いち早く紅魔族の襲撃に気がついて慌ててこちらに逃げて来たのだろう。

その証拠に、魔王の手先が今更ながらに足を止め、追って来る紅魔族と、こちらの俺達三人を、戸惑った様に交互に見ていた。

やがて、そいつらは俺達三人の方が与しやすいと踏んだのだろう。

こちらに向けて駆け出そうと……！

した、その瞬間。

「肉片も残らずに消え去るがいい、我が心の深淵より生まれる、闇の炎によって！」

「もうダメだ、我慢が出来ない！　この俺の破壊衝動を鎮める為の、贄となれえええーっ！」

「さあ……！　とこしえに眠るがいい……。我が氷の腕に抱かれて……！」

「お逝きなさい……。あなた達の事は忘れはしないわ……。そう、永遠に刻まれるの……。この私の魂の記憶の中に……」

それは、魔法の詠唱……。

ではなく。

きっと、それぞれの決め言葉か何かだったのだろう。

彼らは魔法で身体能力を強化しているのだろうか、あっという間に魔王の手先に追いつくと。

やがて、全員が全く同じ魔法の詠唱を開始した。

それを見て、魔王の手先が手を突き出し……！

「ちょっ……！　待っ……！　やめっ……！」

魔王の手先の一人が何かを言おうとした瞬間、既に紅魔族の魔法は完成していた。

「『ライト・オブ・セイバー』！」

「『ライト・オブ・セイバー』ッ！」

「セイバーッ！」「セイバーッッッ！」

次々と叫ぶと同時、彼らの手刀が輝いた。

その輝く手刀が魔王軍の兵士達に向かって、次々と振るわれる。

やがて……。

ズッタズタ。

その場には、ズッタズタにされた魔王の手先十体分の残骸が残るだけとなっていた。

何これ怖い、紅魔族超怖い！

数の多かった魔王の手先の方が逃げる訳だよ！

先ほどお前らが決め台詞で言っていた、闇の炎だの氷の腕だのはどこに行ったんだなんて、そんなツッコミすら躊躇するほどに恐ろしい。

……と、その紅魔族の一人が俺達に視線を向けた。

思わずドキリとするが、大丈夫。

俺達はめぐみんの仲間な訳だ。

そう、紅魔族の仲間の命を助ける為にやってきたのだ。

その内の一人、先ほど、魔王の手先相手に肉片も残らずに消え去るがいい、だの言っていた男が。

「遠く轟く爆発音に、魔王軍襲撃部隊員と共になんとなくこんな場所まで来てみれば……！　なんと、そこに居るのはひょいざぶろーさん家のめぐみんじゃないか？　一体こんな所でどうしたね？」

そんな普通の口調で気さくに話しかけてきた。

めぐみんがそれを受け、よろめきながらも立ち上がると。
「おっと、靴屋のせがれのぶっころりーじゃないですか。お久しぶりです。ゆんゆんから手紙が届きませんでしたか？　実は恐るべき強敵との死闘の末、紅魔族ローブが使い物にならなくなりまして。ぶっちゃけ、もうすでに体力の限界に近いのです。ボンッってなる瀬戸際なのですよ」
そんな、どこからツッコめばいいのか分からない事を言い出した。
そんな中、他の紅魔族の人達も、こちらを興味津々といった感じで眺めている。
「なんとまあ……。そりゃあ難儀な事だろう。ゆんゆんからの手紙？　そりゃひょっとして、『ゆんゆんの癖に生意気だ！』とか言いながら、族長の姪っ子のねりねりが、紙飛行機にしていたヤツかな？」
ゆんゆんはこっちじゃそんな扱いなのかオイ。
ぶっころりーだとか言ったその男は、やがて遠くを見ながら片手を両目の上にかざし。
「おお？　噂をすればだ。ありゃゆんゆんじゃないか？　鎧の騎士と一緒だが」
その言葉にそちらを向くと、遠目に見えるそれは確かにダクネスとゆんゆんの姿。
それに俺は手を振ると、二人はこちらに向かって走り出した。
やがて、無事合流できた二人を見ると、二人とも目立った傷も無く、元気そうな姿にホッとする。
やがて、俺の傍に並ぶダクネスとアクアを見て。

「ところでめぐみん、こちらの方達はお前さんの冒険仲間かい？」
そんな事を尋ねてきた。
それに、少しだけ嬉しそうにめぐみんがはにかみながら、コクリと頷く。

それを見て、ぶっころりーがいたく真剣な表情を浮かべ、マントをバサッと翻した！

「我が名はぶっころりー。アークウィザードにして、上級属性魔法と空間転移魔法を操る者。紅魔族随一の靴屋のせがれ。やがては紅魔族の靴屋となる者……！」

突然そんな自己紹介を始めるぶっころりー。
本来ならば唖然とする所なのだろうが、俺は、既にめぐみんとゆんゆんの二人によって耐性が付いている。

「これはどうもご丁寧に、我が名は佐藤和真と申します。アクセルの街で数多のスキルを習得した者。どうぞよろしく」

俺が何となく、軽く相手に合わせた自己紹介をすると。

「「「「おおおおーっ！」」」」
突然、紅魔族の人達がそんな驚きの声を上げた。
……やらかしちまったか？

「素晴らしい、実に素晴らしい！　普通の人は、我々の名乗りを受けると微妙な反応をするものなのですが……！　まさか、普通の人がそんな返しをしてくれるとは！」

そのぶっころりーの言葉に他の紅魔族がウンウンと頷く中。

「……。カズマ、随分と仲良さそうでいいですね！　私の自己紹介の時には、そんな返しはしてくれなかったのに！」
めぐみんが、妙な事を口走り出した。
何だろう、これはどう反応をするものなのだろう。
普通ならば妬いてるのか？　とかちょっとドキドキする所だが、相手は年上の兄ちゃんで、しかもさっぱり意味が分からない。
……が、紅魔族の感性からすると何かイラッと来るものなのだろうか。
何だろうコレ。
妬かれてる気も全くしないしちっとも嬉しくない。
ラブコメめいた物に発展する色気も全く感じられない。
何これ。
そんな中。
「我が名はアクア！　水の女神にして、世界中で崇められし存在にして、現在はアークプリーストにその身を落とせし者！」
突然、誰かに求められたわけでもないのにそんな自己紹介を始めたアクア。
どうやら紅魔族の連中に早速影響されたらしい。
「「「「そうなんだ、凄いですね！」」」」
「待ってよー！　なんで？　ねえ、なんで私だけいつもそんな反応なの！？」
喚くアクアから視線を外し、紅魔族の人達が少し期待を込めた目

でダクネスを見る。
それを受けて、ダクネスがたじろぎながら……！
「……うう。わ、我が名はダスティネス・フォード・ララ……ティー……ナ……。アクセルの街で……ううううう……っ！」
皆の期待に応えようとするも、恥ずかしいのか、注目を集めながら徐々に声が小さくなっていくダクネス。
恥ずかしさに涙目になり、頬を染めてボソボソ言うダクネスを、ニコニコと見ていたぶっころりーが。
「いやいや皆さん素敵な仲間達で何よりだ！　そうだ、めぐみんもそんな状態ならば急いで里に帰りたいだろう。私がテレポートの魔法で紅魔の里へ送りましょう！　さあ、皆さんこの魔法陣の中へとどうぞ」
おおっ、なにそれ助かった！
めぐみんが、これ以上苦しまなくて済みそうだ！
俺達四人は嬉々として魔法陣の上に乗る。
それに続いて、紅魔の里の人達とあまり喋りもせずに、なんだかずっと大人しくしていたゆんゆんも。
……と、それを見て、ぶっころりーが申し訳なさそうにゆんゆんに。
「悪いゆんゆん。テレポートの魔法って四人用なんだ……」
「！？」

18話

紅魔の里。

ぶっころりーに転送されて、俺達四人はあっけなく紅魔の里の入口に着いていた。

一拍おいて、俺達から少し離れた場所に、あの場の人達がフッと唐突に現れる。

それはあの場に残っていた三人の紅魔族。

そこにはちゃんとゆんゆんの姿もあり安心する。

ちょっと泣き顔だが。

最後にぶっころりー自身がフッと一人で現れた。

「それでは、我々は哨戒任務に戻りますので。めぐみん、新しいローブを用意してもらって早く休むといい」

ぶっころりーは、言って俺達から距離を取る。

そして先ほどの三人と寄り集まると何かを唱え……！

「それでは！」

そのまま小さく魔法を唱えると、ぶっころりーは忽然と他の三人と共に姿を消した。

すっげえ、本物の魔法使いって感じだ。

テレポートでまた戦場へと戻っていったのか……！

「なんかあの人達格好いいな。戦闘のエキスパート集団って感じで」

俺が、彼らが消えた場所から未だ目を離せずに惚れ惚れとそんな事を呟くと、

「そうですか。それを聞いて、きっとそこで四人とも喜んでますよ」

めぐみんが俺に寄り掛かりながらそんな事を……。

……？

「そこで喜んでいる？　もうあの人達はテレポートで飛んでっちゃったじゃないか」

その俺の言葉に、今度はゆんゆんが。

「消えたのは、光を屈折させる魔法ですよ。テレポートの魔法は魔力を大量に消費しますから、あんな戦闘の後に日に三度もテレポートなんて使ったら、魔力は殆ど残りませんよ？　格好良く立ち去る演出の為に姿を消したんだと思いま……あいたっ！？」

突如として、先ほどまで彼らが居た何もない所から小石が飛び、それが、言いかけていたゆんゆんの頭にコツと当たった。

余計な事を言うなとばかりに。

……そこに居るのか。

「ちなみに。光の屈折魔法は術者の指定した人や物の、数メートル内に結界を張り、その結界内を周囲から見えなくする魔法です。……なので、そこに近づけば見えますよ」

めぐみん何気なく言ったその言葉に、

「……」

アクアが無言で、何も無い空間に向かって一歩踏み出した。

「……ッ！」

息を飲む様な音と共に、何かがズザッと後ずさる様な音。
それを聞いたアクアが、じっとそこを見つめたまま動かなくなる……。

「……」
「……」

アクアが無言でそちらを見つめる中、ズザッと音がした場所がシンと静まり返り……。

突然、アクアが無言で、その何もない空間に向かって走り出した。
「……ッ！？」
同時に、複数名が慌てて逃げて行く様な、駆け出す様な音がする。

や、止めてやれよ……。

嬉々として見えない何かを追い掛け回しているアクアは放っておき、めぐみんのローブの調達をするべく里の中へ足を踏み入れた。
ゆんゆんとダクネスに両脇から支えられ、フラフラしながらもめぐみんが自力で歩く。
正直言って、蘇生したばかりの俺も早く休みたいところだ。

とりあえず、里の住人のめぐみんとゆんゆんの後に付いて行けばいいだろう。
やがてアクアが、もう追いかけるのに飽きたのか帰って来た。

「ねえ、あの人達やるわね。この私の足でも追いつけなかったわ」
頭や運以外は高ステータスのアクアが追いつけないとは。
最後の立ち去り方はアレだったが、確か、魔王軍襲撃部隊だのと言っていた。

きっと紅魔の里のエリート達なのだろう。

そう思っていた俺の憧れじみた幻想を、めぐみんがあっさりと。

「肉体強化魔法でドーピングして逃げたんでしょう。日頃ゴロゴロしているあの無職集団に、そこまでの体力があるとも思えません」

……そんな聞き捨てならない事を言って砕いてくれた。

「……無職集団？　いや、魔王軍襲撃部隊なんだろ？　哨戒任務があるって立ち去って行ったぞ」

そんな俺の質問に、

「あの人達は唯の仕事にあぶれた暇な人達ですよ。他の街にでも行って冒険者でもやれば引っ張りだこでしょうに、里を出たがらず、親元を離れない人達です。日頃暇を持て余していて、その辺の人達にフラフラしていると見られない為に、ああして勝手に魔王軍襲撃部隊を名乗り、里の周りをウロウロしているのですよ」

めぐみんが、そんな聞きたくなかった情報を教えてくれた。

それじゃ何か？

この里ではニートですらあんな高スペックなのか？

そんな俺の感情を読み取ったのか、ゆんゆんが。

「紅魔族は大人になれば、大概の者が上級魔法を使えます。里の者のクラスは、その殆どがアークウィザード。上級魔法を覚えたら、後は、ポイントが許す限り色んな魔法を習得していきます。それが常識なのに……」

そう言いながら、めぐみんをちらりと見た。

めぐみんはそんな視線をどこ吹く風とばかりに無視し、懐かしの自分の里をキョロキョロと見回していた。

紅魔族の里は、小さな町といった大きさの集落だ。

里の周りには囲いもなく、普通に家々が立ち並び、その間に店が立つ。
そんなごく普通の町といった場所だった。

ハッキリ言って、その、のどかな姿は魔王軍と交戦中だとはとても思えない。

数百人ぐらいの人々が生活する規模の大きさの集落。
その他の町と殆ど差のない紅魔の里。
唯一違うと言えば、住人達の目が赤い事。
俺達を連れためぐみんやゆんゆんを見て、里の人達が驚きの顔でこちらを見る。

色々と気になるが、今はめぐみんのローブが先だ。
ゆんゆんが先頭に立ち案内する中、様々な里の人達が横を通り過ぎ、その度に俺達に注目が集まり、そしてめぐみんとゆんゆんへ視線がいく。

そして気がついた。
めぐみんへの視線は懐かしい人を見たといった親しみある視線なのだが、ゆんゆんを見る視線はどこかよそよそしい視線だった。
それは、なんだかよそ者を見る様な……。

やがて俺達は、一件の店の前へとやってきた。
それは服屋か何かだろうか。
古めかしい看板が下がっており、ドアのガラス越しに、黒いローブを着てメガネをかけた、厳しい顔の店主が見える。

ゆんゆんとめぐみんが、ドアを開けて中に入ると、その店主は俺達を一瞥し……。

「おやいらっしゃ……。……んん？　めぐみん、ゆんゆん。そこに居るのはひょっとして、外の人間かね？」
そんな事を尋ねながら、メガネ越しの鋭い視線で俺達をじっと見る。
その鋭い視線に、アクアが少し怯んだ様に俺の背に隠れ、更にダクネスが俺の前に出た。

な、何だろう、何かしただろうか。
あれか、外から来たよそ者の人間には偏見があるとかそんな人だろうか。
俺がドキドキしている中、めぐみんとゆんゆんがコクリと頷く。

すると突然立ち上がったその店主は、ローブに付いたマントを狭い店内で、器用にバサリと翻した。
「我が名はちぇけら！　アークウィザードにして上級属性魔法を操る者。紅魔族随一の服屋の店主！　やがてはこの里のファッションリーダーとなる予定の者……！」

ここの人達は、これをやらないと名乗れないのだろうか。
真剣な表情で名乗った服屋の店主が、満足そうに笑みを浮かべ。

「改めていらっしゃい！　いや、外の人間なんて久しぶりだよ！　名乗りを上げるなんていつ以来だろうか！　やあ、スッキリしたよ」
……スッキリする行為なのか。
ま、まあいいや。

俺は、自己紹介をしながら急いで本題に入る事にした。
「ええっと、我が名は佐藤和馬と申します。数多のスキルを操る者です。それより、めぐみんのローブが欲しいんですよ。……というか、さっき紅魔族随一の服屋とか言ってましたが、凄いじゃないで

すか？」

そんな俺の言葉に、気を良くしたのか、店主がメガネをクイッと上げて。

「ああ、紅魔の里には服屋はウチしか無いからね」

「バカにしてんのか」

俺は思わず突っ込んだ。

この里の連中は物騒だから、極力穏便にいこうとしたが反射的に口に出た。

だが店主は特に気にする事もなく。

「いやいや、この里にはそんなに店自体が無いからね。服屋はウチだけだし、靴屋も一件しかない。他の店なんかもライバル店なんか一つも無いよ」

さっきの靴屋のせがれも紅魔族随一のとか言ってなかったか。

その言葉に、俺は思わず二人の紅魔族の娘を見る。

俺のうさん臭い物を見る様な視線にジッと見られたためぐみんとゆんゆんは、気まずそうにフイッと目を逸らした。

「まあ、そんな事よりも。めぐみんがローブを必要としているんだな？　新品のローブは今すぐだと、一着は用意出来るが。どうするね？」

俺達は店を後にして、めぐみんの家へと向かっていた。
紅魔族ローブを受け取ったためぐみんは、早速それに袖を通し、今ではダクネスの背中で思い切り眠っていた。
新品の紅魔族ローブは、一度紅魔族が袖を通すと、その最初に袖を通した人専用になるそうな。
最初に着た者の魔力の波長をローブが覚えるだの、どうのこうのと言われたが、魔法の基礎も知らない俺にはチンプンカンプンだった。

ともかくめぐみんが、これで休める様になったのならそれでいい。
高価な物らしいが一着では心許ないので、この際もう二、三着ほど、新しい予備のローブを用意してもらう事にした。
これでアクセルの街に帰った時に、また同じ事があっても安心だ。

新品のローブは数日で手に入るそうだ。
春という季節もあり、卒業シーズンと言う事で、その際にローブを新調する人達が多く、新品のローブが殆ど無かったらしい。
一着でも残っていてくれて助かった。

「めぐみんが何とかなって、良かったです……！　これで安心してアクセルの街に帰れますよ……！」
ゆんゆんが嬉々としてそんな事を……。

そう言えば。

「ゆんゆんはここには残らないのか？　めぐみんが爆裂魔法しか使えない事はもう知っただろ？　もう、勝負だとかに拘る必要は無いと思うぞ。今勝負なんてすれば、ゆんゆんが勝つだろうし。こいつ

説得して、ゆんゆんに負けたって事にしてもらえばいい」
俺は言いながら、ダクネスの背で深く眠るめぐみんの頬をつつく。
そんなめぐみんの寝顔を見ながら。
「その……。私は、実はちょっと、この里には居場所が……」
寂しそうに何かを言い掛けたゆんゆんに、突然、大声で呼びかける者がいた。

「ゆんゆん？　ゆんゆんじゃないっ！」
それは二人の紅魔族の少女だった。
年の頃は多分めぐみんやゆんゆんと同じ位か。
それを見て、ゆんゆんがちょっと嬉しそうに顔を輝かせ……！

「ふにふらさん！　どどんこさん、久しぶり！」

その二人の少女に笑いかけた。
もうおなじみの黒いローブを着たその二人は、こちらに向かって笑みを絶やさないまま近づいて……。
そして、ダクネスが背負っているめぐみんを見て、表情を引きつらせた。

「えっ……。めぐみん？　その、寝てるのはめぐみんなの？」
少女の一人が顔を引きつらせたまま尋ねると。
「えっ……、と……。そうよ？　ちょっと里に帰る旅の間、寝てなくて。今は疲れ果ててグッスリ寝ちゃってるんだけれど……」
ゆんゆんの言葉に、二人の少女がホッとした表情をした。
……めぐみんは、この二人に一体何をしたのだろう。

「そ、そう……。それよりも、ねえゆんゆん。本当に久しぶりね！　久しぶりに会ったんだけれど、ちょっと私達困ってるのよ！」
「そうそう！　ちょっと、友達として頼みたい事があるんだけれど

……！」

二人の少女が張り付いた笑みを浮かべながら、そんな事を言ってくるが……。

……そういやなんか、ちょっとだけ聞いた事のある名前だな。

ふにふら。どどんこ。

インパクトあるから一回聞いただけで印象に残ってるんだが何だったか……。

「どうしたの？　と、友達の頼みなら、何だって……！」

ゆんゆんがそんな事を口走る。

すると二人は、ゆんゆんにわざとらしく困った表情を浮かべて見せて……。

……ああっ、思い出した！

「実はさあー……。ちょっと今月、困って」

「思い出した！　月末になると金をたかりに来る、なんちゃって友達のふにふらとどどんこ！　そうだ、デストロイヤーの賞金貰って、めぐみんとゆんゆんと一緒に露店巡りとかしていた時に聞いた名前だ！」

ああそうだ、スッキリした。

思い出せそうで思い出せない時ってのは、どうもイライラする。

思い出せて良かっ……。

……。

「……。ええっと、あなたはどちら様？　初対面でいきなり失礼じゃない？」

どちらがふにふらで、どちらがどどんこか。

そんな事はまあどうでもいいが、そのどっちかの女の子が口元を引きつらせながら聞いてくる。
それを見て、ゆんゆんが一人オロオロしていた。

「……どうも、ゆんゆんの友人にはあまり見えないな。何の要件かを聞きたいのだが」

ゆんゆんの前にスッと庇うように立ち、ダクネスが静かに告げた。
自然と、ダクネスが背負っている眠るめぐみんにも、少女二人の視線がいく。

二人は、よほどめぐみんを苦手としているのか表情を引きつらせながらも、
「ふっ……。要件ね。その前に、名乗らせてもらうわ！　我が名は……」
「いいよ、それ長いから。で、あんたら二人はゆんゆんに何の用？」
マントを翻しながら、名乗りを上げようとした少女を遮り、俺は少女に問いかけた。

名乗りを邪魔された少女は、凄く悲しそうな残念そうな顔をする。
だがやがて、開き直った様にバッと顔を上げると……。

「ふうん？　あなた、何者かは知らないけれど、この私達にあんたら呼ばわりとはいい度胸ね？　いいわ、今日はその背中に背負われたのが凄く気になるから見逃してあげる。でも、そうね。次にあった時は私の自己紹介を聞いてもらうわ！」

次に会った時に何かされる訳じゃあ無いのか。
二人の少女のウチの片方が何かを小さく呟くと。

「それでは、御機嫌よう、外の人達！」

そう言って、何かを唱え忽然と姿を消した。

……。

それが所見だったならちょっとはカッコイイ立ち去りシーンだったのかも知れない。

だが、多分これも、テレポートではなくて……。

……と、アクアが無言で一歩前に出た。

「……ッ！」

息を飲む音と共に、地面を後ずさる様な音。

……うん。居るな。

それを聞いてアクアが無言で……！

「「……ッッ！？」」

二人が消えた場所に向かって、アクアが再び走り出した。

それに合わせて、何かが慌てて逃げる足音が。

どうやらアクアは、先ほどの、消えた紅魔族を追いかけた事で味をしめたらしい。

……楽しかったらしい。

アクアは嬉々として、消えた二人の少女を飽きるまで追いかけていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「俺達が言うのもなんだけれど、一応友達は選べよ？　あれは友達とは言わないと思う」
「そ、そんな……！　で、でも二人は私の事を、大事な友達だって……！　昔、めぐみんにお昼ご飯を取られて私がお腹を空かしていた時、あの二人はお弁当のパセリをくれた事も……！」
　止めてくれ、泣きそうになってくるから止めてくれ。

紅魔の里をしばらく歩き続け、やがて一件のこじんまりとしたボロ家の前。
ゆんゆんの案内で、その前に俺達は立っていた。

どうやら、そこがめぐみんの実家らしい。

紅魔の里には旅人なんてロクに来ない為、ここには宿屋が無いらしい。
そこで、めぐみんの予備のローブが手に入るまで、何日か泊めて貰えないかと思った訳だ。
せめて、弱っているめぐみんだけでも実家で寝かせてもらった方が良いだろう。

「あの……！　私もちょっと実家に顔を出してきますね！」
　案内してくれたゆんゆんがそんな事を言い出した。
ゆんゆんにとってもここは故郷だ、実家に顔ぐらい出したいだろ

う。
俺達は、何度もこちらを振り返りながら去って行くゆんゆんを見送ると。

「すんませーん！　こちら、めぐみんさんのお宅ですかー？　娘さんをお連れしたんですけれどー！」
大声で叫びながら俺はその小さな家のドアを軽く叩いた。
軽くじゃないと、なんだか壊してしまいそうに思えたからだ。

すると、やがてそのドアがそっと開けられて……。

中から、めぐみんによく似た小学生低学年ほどの女の子が現れた。
めぐみんを小さくした感じのその女の子は、それはもう美少女だった。

「お、おいカズマ、初対面の女の子をそんな食い入るように見るんじゃない、怯えたらどうするんだ」
「カズマ、目がマジなんですけど。怖いんですけど。今までからかい半分にロリコンニートって呼んでたけれど、あんた本当に警察呼ぶわよ？」

二人が失礼な事を言ってくるが、俺は何度も言うがロリコンじゃない、単に子供が好きなだけの優しいお兄さんなだけだ。
そうだ、確か、荷物の中にアレがあった！
俺は警戒心を解くために、その女の子に優しい声で話しかける。
「お、お嬢ちゃん、お菓子はいるかい？　今、お家の人は誰か居るかな？」
「「カ、カズマ……」」
紳士的な俺の言葉になぜか二人が軽く引く中、人形の様なとの表

現がシックリくるその女の子は、驚いた様に目を見開いていく……。

そして。

「おとうさーん！　おねえちゃんが、私を餌付けしようとする怪しげな男つれて、帰ってきたー！」

ちょっとお嬢ちゃん！　お兄さんと話をしようっ！

19話

「ほーら見てごらん？　このテーブルの上のひっくり返したマグカップ。これがスイスイとテーブルの上を動き回りますよ！」
「すごい！　すごい！！　どうやって？　ねえどうやってるの？　青髪のお姉ちゃん、どうやってるの！？」
「磁石だ！　きっと、テーブルの下から磁石で動かしてるんだ！　そうだろう？　当たりだろアクア！？」

めぐみん宅の居間において。
アクアがコップを使った芸を披露し。
それを、めぐみんの妹さんである、こめっこ。
そしてダクネスが、それを食い入るように見つめていた。

きっとダクネスが当たりだろう。
マグカップは鉄製だ。
それをテーブルの下から磁石を使って動かしているのだろ……。

……俺は話を聞きながら種を推測し、何気なくそちらを見て絶句する。
アクアは居間の真ん中にぺたんと正座し、手はきちんと膝の上に置かれていた。
そのままじっとテーブルの上のマグカップを見ているだけで、マグカップはスイスイと動いている。
……！？

俺が、一体どうなっているんだと目を疑い、そちらに注意を取られていると……。
「あー……！　ゴホンッ！」

俺の目の前から、わざとらしく大きく咳払いをする声。
おっといけない！

居間に敷かれた絨毯の上に、なんとなく雰囲気に飲まれて正座している俺の前には、厳しい顔でじっと俺を見るめぐみんの親父さん。
一見すると、黒髪の普通の中年のおじさんといった感じだが、その目は鋭く、先ほどから静かな威圧感を醸し出している。

そう、彼がめぐみんの父、ひょいざぶろーさんだ。

「……家の娘を助けてくれて、感謝する。いや、君が居なかったならボンッとなっていた事だろう。それは、本当に感謝しよう」
言いながら、ひょいざぶろーはペコリと深く頭を下げた。

そして、その隣にはどことなくめぐみんの面影がある、黒く艶やかな長い髪の、若干口元や目元に小じわのある綺麗な女性。
「本当に、家の娘が大変お世話に……。娘からの手紙で、よくカズマさんの事が書かれていまして……。あなたの事はよく存じておりますよ……？」
めぐみんの母親、ゆいゆいさんも深々と頭を下げた。

その二人と俺の間には布団が敷かれ、めぐみんが深く眠っている。
そして、そのめぐみんを感慨深そうにしみじみ眺め、それからキッと表情を引き締めたひょいざぶろーが。

「……で。キミは、家の娘とはどのような関係なんだね？」

俺に、三度目になる同じ質問を投げかけた。

「……何度も言いますが、ただの友人で仲間です」

それを聞いて、もう堪え切れないとばかりにアクアが芸を披露していたテーブルにザッと移動し、そのテーブルに手を掛けた。

「なあああああああああああああああ！」

「あなたあああああああああ！　止めてっ！　テーブルひっくり返して壊すのはもう止めてください！　今月は特にお金が無いのよおおおおおお！」

紅魔族は、本当に変わった人が多いです。

ひょいざぶろーが、奥さんの入れてくれたお茶をすすり息を吐いた。

「失礼。取り乱した。いや、キミが白々しくもただの友人だなどとヌケヌケとぬかすものだからね」

た、ただの友人ですが……。

喉まで出かかったその言葉を飲み込み、俺は話題を逸らそうと、リュックに入っていたある物を取り出した。

本当は、めぐみんの妹にあげようと思ったのだが。

それは先日、温泉街ドリスで買わされたドリス饅頭詰め合わせ。

健康に良いと評判の日持ちするお土産らしいし、あげても失礼に

はあたらないだろう。
それをスッとひょいざぶろーの前に差し出すと。
「あのこれ。……つまらない物ですが……」
俺がスッと差し出した饅頭の箱を、ひょいざぶろーと奥さんが同時に掴んだ。
ひょいざぶろーと奥さんが無言になり、お互いに顔を見合わせる。
「……母さん、これはワシにカズマさんがくれたものだろう。手をどけなさい」
「あらあら、やだわあなたったら。さっきまではキミなんてよそよそしい呼び方しておいて、お土産を頂いたら急にカズマさん呼ばわり。止めてくださいな恥ずかしい。これは、今日の晩ご飯にするんです。あなたのお酒のつまみにはさせませんよ？」
奥さんが笑えない系の冗談を言い出した。
いやそれ饅頭ですから。
温泉饅頭ですから、晩ご飯にもつまみにもなりませんから。
俺がそんなツッコミを入れたいのを我慢していると、こめっこが突然嬉々とした声を上げた。
「食べ物！？　ねえそれ、固い食べ物なの！？　いつも食べてる様な、薄めたシャバシャバのおかゆとかじゃなくて、ちゃんとお腹に貯まる食べ物なの！？」
……。
俺はリュックに入れておいた保存食類を全て出し、それを無言で広げると。
「凄く……つまらない物ですが……」
「よく来てくれたねカズマさん！　母さん、一番良いお茶を！」

「家にお茶なんて一種類しかありませんよ、すぐさま入れて参りますので、お待ちくださいねカズマさん！」

奥さんが入れてくれたお茶をすすっていると、俺の持ってきた饅頭を両手に一つずつ持ち、それをせっせと、リスみたいに頬を膨らませて頬張るこめっこ。

そのこめっこが、もぐもぐさせながら隣でじっと俺の横顔を見つめていた。

俺は、ロリコンではない。

ハッキリ言うし、何度でも言う。

俺は、ロリコンではない。

むしろ、子供に手を出す様な輩には、全力で制裁を加えたい。

子供にお菓子をあげたり遊んであげたりするのは何よりも好きだが、俺はロリコンではない。

そんな大切な信念を持つ俺に。

こめっこは、自分の手にある2つの饅頭をしばらくじっと眺めてから、ゴクリと音を立てて喉を鳴らし……。

「……はい。美味しいよ」

こめっこが、手に持った、かじっていない方の饅頭を差し出してくれた。

お腹を空かしていたはずのこめっこは、その差し出した饅頭から目が離れない。

俺は、ロリコンじゃない。
俺は、こんな優しい子を守れる紳士でありたい。

「こめっこちゃん、それ以上はいけない！　こっち！　こっちに来なさい、お姉ちゃん達の所に！」
「そうだぞこめっこ！　その男はお前の姉にいつもイケナイ事をしている悪いお兄さんだ。その男が牙を剥く前にこっちに来るがいい！」
アクアとダクネスがそんな事を言ってくるが、こめっこは首を傾げて俺を見る。

あいつらは後で制裁するとして、こめっこちゃんマジで天使だ。
俺はロリコンじゃない。
俺はロリコンじゃない。

「ありがとう、それは全部こめっこが食べるといいよ、お兄ちゃんは今お腹が一杯なんだよ」

俺が言うと、こめっこは、そうなんだ！　とだけ言って嬉しそうに再び饅頭をかじり出す。
そしてそのまま俺の隣にぺたんと座り、無言で黙々と饅頭をかじる作業に戻った。
その微笑ましい姿を見て思わず、口元が緩んでしまう。

……俺はロリコンじゃないから。

そんな俺を見て、ひょいざぶろーが険しい顔で。
「……幾ら食べ物を持ってきても、こめっこはやらんぞ」
「誤解ですから！　あの二人の言う事は信じないでください！」

必死に叫ぶ俺の隣から、後ろからそっと忍び寄ってきていたアクアが饅頭をかじるこめっこをバッと抱きしめ、俺の隣から引き離す様にかっさらった。

アクアはそのままこめっこをダクネスの隣に連れてくると、膝の上にこめっこを抱っこしたままこちらから視線を離さない。

ダクネスも警戒する様に俺から視線を離さない。

あいつら後で本気で覚えてろよ。

こめっこは、突然アクアに抱きかかえられた事もかっさらわれた事も一切気にせず、そのままされるがままに、黙々と饅頭をかじっていた。

この子も結構な大物なのかも知れない。

そんな事を思いながら、俺はお茶を一口すする。

そんな中、奥さんが俺にやんわりと笑みを見せながら。

「そう言えば、カズマさんは凄い借金持ちだと聞いたのですが……。めぐみんとの事は大丈夫なのですか？　私は、カズマさんは良い人そうだし反対はしませんが……。家の娘と一緒になるのは、せめて借金を返されてからにした方がよいのでは……？」

俺は含んでいたお茶を全力で吹き出した。

「ぎゃー！？　な、何をするか！」

顔面にお茶ぶっかけられたひょいざぶろーが悲鳴を上げるがそれどころではない。

「一緒になるって何の話してるんですか！　ただの友人だって言ってるでしょうが！」

むせながら言う俺に、奥さんが。

「娘から送られてくる手紙を読んで、よほど親しい、そういう間柄

だと思っていたのですけれども……？」
そう言って首を傾げた。
待って欲しい。

と言うか、
「すんません、その手紙に何書いてあったのか、聞いてもいいですか？」
俺が気を落ち着けながら呼吸を整える中、ひょいざぶろーと奥さんが、二人して顔を見合わせた。

やがて奥さんが。
「……手紙では、家の娘はカズマさんと行動を共にしてからは、二度も粘液でヌルヌルにされ、トイレを我慢していた際にはそっと空の瓶を差し出されたり。そんなセクハラは日常茶飯事な間柄で……。そう言えば。ずっと疑問に思っていたのですが、家の娘は一体何があって紅魔族ローブをダメにしてしまったんでしょう……？」
俺はそこまで聞いて、ご両親に土下座した。

そんな俺に、ひょいざぶろーが後を引き継ぎ、
「だが、そこまでされても大切な仲間だから平気で耐えられる。それに、とても放っては置けない大切な仲間だから、と。例え借金まみれでスケベで中途半端な戦闘力しかなく、口を開けば暴言ばかりで常識も無い男だが、何だか放っては置けないから、と……。娘がそこまで言うからには、きっと何かあるのだと思っていたが……」
そんな事を、深く眠るめぐみんの頭を撫でながらしみじみ言った。

……。
借金作った原因の一つはお前もだろうとか、他にも沢山突っ込みたい所は多々あるが……。
ちょっと引っ掛かる所があるが、それでも少しだけ嬉しくもある。

そう、何だかんだでお互いの欠点も許しあえるぐらい、固い絆が出来ている今、そんな事を言われていたぐらいでは、俺のめぐみんに対する信頼と気持ちは……。

奥さんが。

「なんでもカズマさんのパーティのメイン火力を務めていて、娘が抜けたらパーティが成り立たないぐらいだとか。なんでも家の娘が、魔剣持ちの剣士とゆんゆんが二人掛かりでも、傷も負わせられなかった魔王軍の幹部を一人で討ち取り、更には、別の魔王の幹部の城に魔法で連日攻撃を仕掛けておびき出し、その幹部も討ち取ったとか」

……いや嘘ではないが。

……ええと。

「うんうん。しかも、あの機動要塞デストロイヤーに最大のダメージを与え足を止めて、討伐に最も大きな貢献をしたとか。そして、悪徳領主に結婚を強要されていた大貴族の令嬢を、結婚式に颯爽と乗り込みこれをさらって行ったとか！　いや、我が娘ながら素晴らしい大活躍だ！」

ひょいざぶろーが実に嬉しそうにそんな事を……。

……間違ってはいない。

いないが……。

俺は思わず、深く眠るめぐみんをじっと見た。

それまで深い呼吸をしていためぐみんは、ゴロンと俺とは反対の方向に寝返りを……。

……こいつ起きてるんじゃないだろうな。

ちょっと不審な目でめぐみんを見る俺に、奥さんが、

「他にもまだまだ、あなたの事やお仲間の事が沢山……。……それで、借金はまだかなりの額があるんですか？　娘のパーティの事ですし、何とか助けてあげたい所ですけど、家もあまり裕福な方でも無いもので……」

そんな事を少し申し訳なさそうに言ってきて……。

「ああ、いえ。元々不当な借金だったんですよ。それでもなんとか完済したんですが、そのお金やその他諸々の金が、この旅が終わる頃には結構な額として返ってくる予定でして。なので、もう大丈夫です、ご心配なく」

俺が、何気なく言ったその言葉に、ひょいざぶろーがピクリと反応した。

「……ほう。ちなみに、お幾らほど返ってくるのか伺ってみても……」

そんな質問に、俺はめぐみんの実家で少し緊張していた事もあり、特に疑問を持つこともなく。

「二十億……ぐらい？　それ以上ですかね？　確か、そんなものだっ」

「「二十億!?」」

俺が最後まで言い終わる前に、二人が大声で遮った。

……あれ、ナニコレ。

ちょっと余計な事言ったか？

ひょいざぶろーが、寝ているめぐみんを間に挟んだまま、少しこちらににじり寄った。

ひょいざぶろーが、実に良い笑顔でポンと手を打ち。

「ああ、そうだカズマさん。今日は家に泊まっていきなさい！　こ

の里には宿が無いし、泊まる所がありません！　是非とも！　ええ、何ならずっとここに住んでもらっても構わないから！　冒険者なんてやっているなら、家なんて無いだろうし！」

「そ、そうですね！　ああ、こめっこは、今夜はこの居間で、お父さんと私の三人で一緒に寝ましょうね！　そちらのお二人は私の部屋で眠るといいですよ！　しかし、家は手狭でして、部屋が居間と私の部屋、後は、昔めぐみんが使っていた、今はこめっこの物となった部屋しかありません……。ああ、住んでもらうにはちょっと手狭ですねえ……。ねえあなた、いっそ改築とかも……」

とんでもない事を言い出した二人に、俺は若干引きながら、

「い、いえ……。俺は、あの、アクセルの街に屋敷を持っているもので……」

そんな事をおずおず告げた。

「「屋敷！！」」

やっちまったか。

俺は、目を輝かせながらこちらを見る二人から視線を逸らし、助けを求める様にアクアとダクネスの方を見る。

「さあ次は！　なんと、この小さな箱にびっくりする事が起こりますよ！」

「きっと、あの箱が開いて中から何かが飛び出すんだ！　違いないぞこめっこ！」

「す、すごいね！　すごいねっ！」

……三人はそれどころでは無い様だ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時刻は夕方をとっくに過ぎる中、未だこんこんと眠り続けるめぐみん。

無理もない。

いつ襲われるかと緊張が耐えない野外での旅を続ける中、一日中ひたすら歩き続け、そして連日、眠る事は殆ど許されなかった訳だ。

そんな、眠り続けるめぐみんを……。

「お、お母さん！　お肉！　お肉だよ、す、すごいね！」

「母さん、白菜は美容に良いと聞く、肉は任せろ、ワシは母さんにいつまでも美しくいて欲しい！」

「あらあらあなた、あなたこそ最近頭の方が薄くなってきましたし、添え物の海藻サラダを召し上がればいいと思います」

めぐみんの家族達は誰一人そんなめぐみんを気にする事もなく、俺が先ほど買い出しに行って手に入れてきた食材をがっついていた。

献立は鍋。

アクアは食材と一緒に買ってきた酒を飲み、ダクネスは、こんなに狭い空間の中で、ちゃぶ台並の小さなテーブルを囲んでワイワイと皆で食事する事が初めてなのか、少し緊張した様な面持ちで作法等が間違っていないのかと、皆をキョロキョロ見ながら上品に食べている。

何だろう、凄く日本の実家での食事を思い出す状況だ。

しかし……。

「そう言えば。さっき買い出しに行って来て思ったんですが、ここの里が魔王軍に襲撃を受けてるとかって聞いていたんですが、なんか平気そうですね？」

俺は目の前で肉の取り合いをしている夫婦に何気なく尋ねる。

事前に聞いた情報だと、確かそんな事を聞いていたのだが。

と言うか、あの鬼みたいな連中は魔王の手先なのだろうし。

それとも、あの連中が里を襲撃するまでに、魔王軍襲撃部隊を自称するあの無職の集団に滅ぼされているのだろうか。

そんな俺の疑問に、なんでもない事の様にひょいざぶろーが、

「ああ、一昨日来たな、魔王の幹部が。確かシルビアとか言ったかな？　巨大な改造モンスターを引き連れてやってきたが、里の者に、連れていたモンスターを一瞬でズタズタにされて半泣きで逃げ帰っていったよ。マメに来る人だから、多分今夜か明日にでもまた来るんじゃないか？」

明日の天気の話でもするかの様に、そんな事をサラッと言った。

……この里の事は、心配するだけ無駄なのだろう。

なにせ里を囲む防壁も無いような集落だ。

それにも関わらず、里の中にモンスターが現れることは無いらしい。

モンスター達も馬鹿ではない、生存本能ってヤツで里には近付かないのだろう。

こめっこが目をキラキラさせて、

「ねえお父さん、お母さん！　青髪のお姉ちゃん、すごいんだ！　小さい箱の中からね！　大きなネロイドを出したの！」

そんな事を自慢気に夫婦に言って……。

俺は、ダクネスとアクアを見る。
その視線に気付いたダクネスが、俺の聞きたい事を察してくれたらしい。
「凄かったぞカズマ。物理的にあり得ない事が起った。小さな箱から、箱よりも大きいネロイドが飛び出し、それが窓から逃げて行った！　あれは一体どうなっているんだとずっと悩んでいて……」
それを聞き、俺は酒を飲んで良い感じにご機嫌なアクアに。
「……なあ、実はちょっと前から気になっていたんだが。一度お前の持っている芸を、じっくり見せてもらってもいいか？」
「嫌よ。芸ってものはね。請われてやるのではなく、自らが盛り上げたいって感じた時にこそ披露するものなの。どうしてもって言うのなら、私が一芸披露したくなる様な宴会の場でも作って頂戴」
言いながら、酒のつまみにしていたさやエンドウの中の豆を、片手でキュッと皮から押し出し、器用に飛ばし、それを俺の口元にペシと当ててきた。
……。
「ヘタクソねえ……。せっかく口元狙って飛ばしたんだから、ちゃんと口で受け止めて……、や、止めてえ！　あんたあんまりお酒飲まないクセに、私のさやエンドウ全部持って行かないで！」
そんな和やかな夕食の時間。
そんな中、俺は久しぶりに実家の家族団らんの食事を思い出しながら、ここ数日の野外での緊張も忘れ、安心して食事を楽しんだ。

やがて、辺りは完全に暗くなり、他所の家々からも明かりが消える頃。

「何を馬鹿な事を！　あなたは自分の娘が可愛くないのか！　一週間絶食させた野獣のオリに、美味そうな子羊でも投げ込む様なものだぞ！」

それは、俺が風呂から帰って来た時だった。

ここは紅魔族の里。

魔法を使える者しかいない、そんな里だ。

初級属性魔法や中級属性魔法を習得している者など珍しくも無い為か、里の中には無料の大衆浴場が備え付けられている。

手の空いている者が暇を見ては浴場に魔法で水を張り、ファイアーボールをぶち込んでいく。

そんなお手軽浴場にて、俺は久しぶりに風呂に入ってきた所だった。

俺より先に風呂から帰って来ていたアクアとダクネス。

アクアは既にあてがわれた部屋に居るようだが、ダクネスが居間の方で何やら揉めていた。

揉めている相手は奥さんか。

俺がいる玄関にまで二人の声が聞こえてくる。

……と言うか、居間を覗くと、ひょいざぶろーは既に居間の真ん中で高いびきを上げて眠っていた。

俺が風呂に行く、ほんのついさっきまで起きていたはずなのに。

なんだか寝るのが早くないか？

俺がそんな事を考えていると、二人の会話でダクネスが一体何を騒いでいるのかを理解した。

「そうおっしゃいましても、今まで旅をしてきて間違いなど起きなかったのでしょう？　なら、ちっとも問題なんてありませんよ。家の娘はもう立派に冒険者をやっている年ですし、カズマさんも分別ある大人……。もし何かあったとしても、それはお互いの合意の上で、ではないでしょうか！　なら親として何も言いませんとも。……それともダクネスさん。何か、家の娘とカズマさんに間違いがあると困る事でも……？」

つまり、俺とめぐみんが同じ部屋で眠ることにダクネスが抗議しているらしい。

……あれっ、これってちょっとアレですか？

ひょっとして、軽く修羅場みたいな、ダクネスかめぐみんかどっちを取るの！？　みたいなそんな……、

「ええっ！？　そういう言い方をされると、何だか私が妬いていると思われそうな非常に不愉快な不名誉を被るので、本当に、真剣に止めて頂きたいのだが……」

……あれっ。

「そ、そうですかすいません。ち、ちょっと読み違えていました。しかし、家の娘をそちらの部屋に移すと大変手狭ですしねえ……。誰かにカズマさんと同じ部屋で寝て頂かないと……」

そんな奥さんに、ダクネスが。

「なら、そちらの旦那さん、ひょいざぶろーさんとカズマを一緒に寝かせれば解決だろう！」
「えっ」
えっ。

いや正論なんだが、思わず、奥さんがこぼした声と同じ事を思ってしまった。
「そんな色気の無い……、もとい、娘の手紙でカズマさんを知る限りでは、こめっこと一緒に寝かせる事は論外として、家の主人と一緒に寝かせるのも少しだけ不安が残りますし……」
えっ。

奥さん何言ってんの。
俺をなんでも有りなケダモノだと思ってんの？
明日にでもめぐみんが送ったとか言う手紙を全部見せてもらおう。

と、ダクネスが段々興奮してきたのか大声で、
「なら……！　この私が一緒に寝よう！　私ならば、あのケダモノに万が一無茶をされたとしても必死に抵抗すればきっと何とか……！　……いや、抵抗虚しくあの男の人並み外れた欲望の赴くままに、凄い目に遭わされてしまうのかも知れない。そ、そうだ、この旅の間、あいつはきっと欲望が溜まりに溜まっている事だろう。しかも、男性と言うのは徹夜明けなどの、多少疲れている時などは特にムラムラくると言う……！　きっと無理矢理押さえつけられ、騒ごうとすると、こめっこが起きちゃうだろ静かにしろと脅され、あの時の様に口元を押さえつけられ……！」
「『スリープ』」
奥さんが魔法を唱え、バカな事を口走っていたダクネスが、崩れ落ちる様にその場に倒れた。

……やりやがった。
と言うか、ひょっとして……。
俺はこの騒ぎの中全く起きようともしないひょいざぶろーに視線をやった。
……これって。
ひょいざぶろーを居間の入り口からじっと見る俺に、奥さんが、うとうとと眠そうなこめっこを片手で抱きながら。
「あらカズマさん。いつの間に帰ってきていたんですか？　ダクネスさんが寝てしまいましたので、ちょっと部屋まで運ぶのを手伝って頂けませんか？」
そんな事を、にこやかに言ってきた。
「助かりました。ダクネスさんも、旅の疲れが溜まっていたのでしょう、きっと朝まで起きる事はありませんよ。そして、私も主人もこめっこも、一度眠ると大きな音や声がしても、なかなか起きませんの。……では、カズマさんもお疲れでしょうし。ささ、もうお休みになってくださいな」
そんな事を言いながら、奥さんが俺をグイグイとめぐみんが寝かされている部屋へと押し込んだ。
「え、えっと……。それじゃあ、遠慮なく寝かせて貰います。……

一応言っときますが、めぐみんとは長い付き合いですから間違いなんて起きませんよ？　日々悶々としている変態クルセイダーが、さっき言っていた事は信じないでくださいね？」

「分かってます、分かってますよ大丈夫ですから！　万が一があっても、ちゃんと責任取って頂ければそれで……！」

全然分かって無いだろこの奥さん。

俺は、ドンと突き飛ばされる様にしてめぐみんの部屋へと入れられた。

「ではごゆっくりー……！」

そんな奥さんの声を背中に聞きながら。

俺は、やれやれと暗い部屋の中に目を向けた。

そこには部屋の中央に寝かされているめぐみんの姿。

きっと、奥さんの手によるものだろう。

旅で少々汚れていためぐみんの顔が、今は綺麗に拭われていた。

こうしていれば、めぐみんは本当に美少女だ。

窓から差す微かな月明かり。

それが、眠るめぐみんの顔を優しく照らす。

艶やかな、しっとりと濡れた様な長い黒髪が、月明かりの下引き込まれる様な不思議な感覚を覚えさせ……。

……と、見惚れていてどうする。

このままだとあの奥さんの思い通りにいってしまう。

俺も疲れている事だしとっとと寝るか。

……と、その時だった。

「『ロック』！」

そんな声が部屋の外から聞こえたのは。

それは声からして奥さんだろう。

魔法で鍵でも掛けたのだろうか……。

迂闊にこれから入ってくる金の額を口走ってしまった俺も大概だが、あの奥さんもどうなのか。

幾ら娘がマメに手紙に色々書いてくる男相手だからって、親として大丈夫なのか。

よほど娘の見る目を信頼しているのだろうか。

まあいい、とりあえずとっとと寝るか。

トイレだって済ませておいた、朝までは大丈夫だろう。

そう思い直し、俺は改めて狭い部屋の中をキョロキョロと。

……見回して、ふと気づく。

めぐみんが寝ている布団以外、どこにも俺の寝る場所が無いんですが。

20話

窓から差す月明かり。
それにほんのりと照らされながら、俺はひたすら固まっていた。

俺の視線の先には深く眠るめぐみんの姿。
今この空間には二人きり。
酒が入っているアクアは既に寝て、何か言ってきそうなひょいざぶろーとダクネスは、奥さんの手により眠らされている。
……何よりも、外から魔法で鍵が掛けられ、部屋には誰も入れないし出られない。

何と言う据え膳。

部屋の中に布団は一つ。
今の季節は春とはいえ、こんな時間帯はまだまだ冷える。
部屋の中とはいえ、布団も被らず寝たら風邪ぐらいはひくかも知れない。

万が一風邪をこじらせて肺炎にでもなったら？
そう、この世界の回復魔法は病は治せないと聞く。
つまり、戦闘で死んだりするよりも、病で倒れる事は最も恐ろしい事だと言えるだろう。
俺が布団に潜り込んでめぐみんの隣で寝ていてもなんら問題は無いわけで……。

何と言う大義名分。

「……」

俺は深く考えてみた。

ここでスヤスヤと眠るめぐみんにいたずらしてしまっては、俺はそれこそダクネスやアクアの言う所の、鬼畜だの外道だののいわれなき中傷を否定出来なくなってしまう。

俺は紳士だ、そんな男ではない。

しかし、今の状況はつまり親御さんが許可をくれているのだ、訴えられても勝てるだろう。

いやいや、勝てるだろうか？

そもそもこの世界の裁判システムはどうなっているのだろう。

クソッ、もっとしっかりと法律とかも勉強しておくべきだった！

こんな事ならもっと……。

……違うそうじゃない。

訴えられたらとかそんな話じゃない、論点がズレている。

ダメだ、俺も色々と混乱している様だ。

落ち着け、落ち着くんだ佐藤和真、まずは落ち着いて考えよう！

何か考えるにしても、とにかく寒い。

こう寒くては、何かを考えるどころではない。

まずは布団に入って落ち着いてから考えよう。

俺は、めぐみんを起こさない様に細心の注意を払いながら布団の

中に潜り込むと、隣のめぐみんの体温を感じながら、深い寝息を聞きつつ、今一度良く考えを……。

……。

……そうじゃない！

なんという狡猾な罠だろう！

気がつくと、俺は無意識の内にめぐみんの隣に添い寝していた。

俺は慌てて身を起こそうとして気がつく。

今慌てて布団から飛び出したとしよう。

すると、丁度めぐみんが目を覚ますんじゃないのか？

そして、そんな時は漫画やアニメで実に簡単に予想できるお約束の展開だろう。

そう、俺が何を言っても問答無用で制裁を受ける流れだ。

そんな展開になれば、俺は何もしていないとか親御さんが勝手にだとか幾ら言い訳しても、どうせ誰も聞く耳持ってくれないのだ。

そう、痴漢冤罪と同じな訳だ。

何と言う理不尽。

俺は、そんな先人達と同じ轍は踏まない。

どうせ、何もしていないのにそんな不当で理不尽な展開が予想出来ると言うのなら……！

冤罪では無くしてしまう事にしました。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

めぐみんの深い寝息。
眠るめぐみんの隣で、布団の中でそっと手を握ってみる。
ひんやりとしためぐみんの手が心地良い。
もう魔力が体に篭る事も無い様だ。

俺は考えた。

このままガッと行ったら唯の強姦魔だ。
俺は出来るだけ紳士でありたい。
となると、めぐみんの布団の中でモゾモゾしている事への正当な理由が欲しいのだが。

そこで俺は閃いた。

めぐみんが目を覚まし、なぜ布団の中で寝ていたのかと聞かれたら、春とはいえ今夜は特別寒くて……と言い訳しよう。

そして、それを言い訳ではなく事実にしてしまえばよい。
俺には、それを事実にするだけの力がある。
そう、俺がこの力を手にしたのは恐らくはこの日の為だったのだろう。
長い時を掛けて鍛えあげた俺の初級属性魔法スキル。
コツコツと使い続けてきた結果、初級属性魔法のスキルレベルは、俺の所有スキルの中でも最も高い物になっている。

俺は右手でめぐみんの手を握ったまま、布団から頭と左手だけを出すと、部屋の窓に左手を向けて魔法を唱えた。
「『フリーズ』ッッッ！」

体内にある殆どの魔力を込めた、鍛え上げた俺のフリーズ。
それは容易く部屋の窓の表面を凍りつかせると、窓全体を暑さ数センチの氷で覆った。
一々地面に水を撒き、それを凍らせていた頃が懐かしい。
今ならば地面に直接フリーズを掛けても、大気と大地の水分で地表を軽く凍らせる事も出来るだろう。

俺が、そんな自身の成長に喜んでいると……、
「……ん……」
俺の隣で、今のフリーズの声でめぐみんが目を覚ました様だ。

めぐみんは、そのままトロンと眠そうな目で状況を把握しようと隣で寝ている俺を見てくる。
「おはようございます。よく眠れたか？」
「ああ……。おはようございますカズマ。ええ、大分楽になりました。私はどのぐらい寝ていたのでしょうか……？」

今の時刻は夜半過ぎ。
深夜とまでは言わないが、めぐみんがローブに着替え、それから崩れるように眠りに落ちて既に十時間以上は過ぎたのだろうか。

「半日ぐらいかな？　寝てたのは」
俺が告げると、めぐみんはなるほどと呟いて……。

そして、ハタと今の状況に気がついたらしい。
「……で、なぜ私はカズマと手を繋いでいるのでしょう」
そんな事を、俺の顔は見ずに天井を見上げたまま言ってくる。
言いながらも、布団の中で手を振りほどいたりはしない様だ。

俺も同じく天井を見上げたまま。
「そりゃお前、ちゃんと魔力の発散が出来ているかが心配だからだよ」
俺のその言葉に、めぐみんがなるほどと呟いた。

そのまま天井をじっと見上げたまま。
「……ここはどうやら、元私の部屋のようですが。なぜカズマが一緒に同じ布団で寝ているのでしょうか」
そんな事を、静かな、消え入りそうな声で呟いた。

それに俺は……。
「……言わせんな恥ずかしい」
「何をっ！？」
その俺の言葉に、めぐみんが手を振り払って跳ね起きた。

「おい、布団めくるなよ寒いだろ。まあ落ち着け」
「何を平然としているんですか！　寝て起きたら懐かしの自分の部屋で、カズマと手を繋ぎながら一緒に寝てたんですよ！？　落ち着

いていられるはずが……！」

言いながら、めぐみんが布団から飛び出してバッと自分の体を手で探る。

何かされたのかと確認しているらしい。

そして、そのままホッとしたような表情を……。

「おい、俺が本気で、寝ているお前に何かをする様な最低な奴だとでも思っていたのか？　お前らアレだよ？　最近、俺に対する扱いが酷過ぎないか？　さっきだって、ダクネスとアクアの奴、俺がお前の妹に何かするとでも思ったのか随分な扱いだったぞ。俺とめぐみんが一緒に寝るって事に関しても、ダクネスの奴えらい言い草だった。……そもそも俺がここ、紅魔の里に居るのは、めぐみんを助ける為、この危険な道のりを頑張って来たからなんだからな？」

俺はめぐみんが飛び出したせいでめくれた布団をモソモソと直し、寒いので布団から首だけ出した状態で言ってやる。

それに対して、めぐみんが少しだけ言葉に詰まった。

「……う。そ、それは……まあ、感謝していますし……、いつも、なんとかしてくれているのはカズマです……。そ、そうですね、ごめんなさい……。私もちょっと言い過ぎました、起きたらこんな事になっていたのでちょっと混乱しまして……。そ、そうですよね、カズマは冗談のノリではセクハラしますけど、こんなシャレにならない状況では、本気で何かをしてくる様な人ではないですもんね」

言いながら、めぐみんが少しだけ安心した様に微笑んだ。

凍りついた窓から漏れる、淡くおぼろげな月光の中でめぐみんが立つと、しっとりと濡れた様なその黒髪が、普段はあまり色気を感じさせないめぐみんを、急に大人びて魅せた。

そんなめぐみんに、俺は相変わらず布団から首だけ出した状態で。

「当たり前だろ、見損なうな。そもそも俺がこの部屋に居るのは、お前の母ちゃんに閉じ込められたからだからな？　背中を突き飛ばされて部屋に入れられ、ドアに魔法で鍵を掛けられた。だから、仕方なく布団に入らせてもらった訳だ」

その俺の言葉に、めぐみんが深くため息を吐いた。

それで全てが合点がいったとばかりに。

「全く、家の母は……。すいませんカズマ、謝ります。いらぬ誤解をしてしまいました、随分と失礼な話ですよね、カズマはここまで私を連れてきてくれて、そして、今もこうして隣に寝ていただけで何もせず……。……そうです。私は、いつかカズマに言いたかったのですよ」

めぐみんが、おぼろげな月明かりの中照れた様に。

普段は、怒ったり、呆れたり、可哀想な物を見る目で俺を見たりと、そんな表情ばかり印象にあったためぐみんが。

珍しく、素直そうな少女の顔ではにかんだ。

「……あの時、爆裂魔法しか使えない手の掛かる魔法使いを拾ってくれてありがとう。魔法を使って動けなくなった際、いつも背負って帰ってくれてありがとう。私が廃城を破壊した時、私に借金を全て被せて追い出してしまえば良かったのに、文句の一つも言わずパーティに残らせてくれてありがとう」

そのまま、淡い月明かりの下。

黒髪とは対称的な白い頬をほんのりと赤く染め。

紅魔族の名の元になった、その赤い瞳を幻想的に輝かせながら。

「毎日爆裂魔法を撃ちたいなんて、そんなわがままにも付き合ってくれてありがとう。私が遭難した際も、文句も言わずに捜索隊と一緒に救援に来てくれてありがとう。そして、他にもまだまだ……。沢山の借金を背負わせたり、私が迷惑を掛けた際、いつも尻拭いばかりしてくれて。……皆がいつも一緒に居られる様に頑張ってくれてありがとう。……カズマが居ない所では、いつもダクネスと、カズマの事ばかり話しているんですよ」

そんな事を、照れながら言ってきた。

あれっ、何だか凄く気恥ずかしいんですけど。

普段の俺への扱いが扱いなだけに、急にそんな、改まってお礼を言われたりすると困るんですけど。

俺は、まともに返す言葉もなく。

戸惑いながらも、布団に入ったままでなんとか言った。

「……お、おう。まあ、アレだよ。俺もその、何だかんだ言いながらも、お前らの事嫌いじゃないからな。アレだ、お前ら風に言うと……。我が名は佐藤和真。最弱職にして、厄介事にばかり巻き込まれる者。アクセルの街において随一の冒険者。やがては大金を手にし、お前らとおもしろおかしく暮らす予定の者。……こ、今度ともよろしく頼むよ！」

自分で言っておきながら途中で恥ずかしくなってきて照れる俺に、めぐみんがクスクスと笑った。

「こちらこそ、今後ともよろしくです。……所で、何だか今日は凄く寒いですね、部屋の中だと言うのに。まあ、ボロ家なので隙間風でも入ってくるのかも知れませんが。……そ、その。カズマは何も、しません……よね？　寒いので、私も布団に入りますよ」

そう言いながら、めぐみんがちょっと頬を赤くしながら、布団の中にゴソゴソと潜り込んでくる。
こんな雰囲気の中で布団に入って来られると、物凄くその……、緊張するんですが。
まあ、確かに今日は寒いししょうがな……。

……俺は今更ながらに気がついた。

何と言うフリーズの魔法。

凍りついた窓を見られたら、何と説明すれば良いのやら。
あれを見られたなら、せっかくここまで上昇したカズマ株が大暴落するのは間違いない。
と言うか、ダクネスやアクアに、ドヤ顔でそら見た事かド変態がと罵られるのが目に見えてくる。

俺は何を血迷ってあんな頭の悪い事をしてしまったのか。
きっと、俺も少しヤケッパチになっていたのかもしれない。

めぐみんが、ピタリと俺にくっついてきた。
先ほど隣で寝ていた時よりも密着している。
「……め、めぐみん、ちょ、ちょっと近い気が……」
先ほどまでとは違った意味で緊張している俺に、めぐみんが可笑しそうにクスクス笑った。

「いつもはあんなにセクハラとかしてくるクセに、こんな時は怖じ気づくんですね。それに、さっき言ったじゃないですか。カズマは何もしないんでしょう？　なら、別にいいじゃないですか」
いいんですけど。
いや、別にいいんですけどね。
でもあんな会話の後で、しかもそんなに信頼してくれている状態で、今凍った窓とか見られたら普段の比じゃないほどに切れられそうな気がする。

そんな事を考えていると、俺の右手がひんやりした物に包まれた。
めぐみんが手を握ってきたらしい。
「……お、おい、年頃の若い娘さんがそんな積極的な事をするんじゃありません。……さっきお前ん家の親御さんにダクネスが言っていたが、ダクネスいわく、俺と一緒に寝かせるのは、一週間絶食させた野獣のオリに、美味そうな子羊でも投げ込む様なものらしいぞ」
」
緊張で若干上ずった声で、俺は寒い部屋の中だと言うのに変な汗をかきながら言った。
それに、めぐみんはクスクスとイタズラっぽそうに笑う。

「ダクネスがそんな事を言っていたのですか？　でも以前は、本気でそんな雰囲気になると冗談で誤魔化そうとするヘタレだと言ってましたよ？」

あんのアマー！

めぐみんが、俺の手をワキワキと握りながら。
どこか楽しそうに、からかうように聞いてきた。

「……その後、ダクネスは何か言いませんでしたか？」

……なんだっけ。

「確か、お前の父ちゃんのひょいざぶろーさんと俺が寝れば解決だとか言っていたな」

「あ、あれっ？　そ、そうですか……」

その後は、他になんか言ってたか？

いつものごとくバカな妄想を口走って、めぐみんの母ちゃんに眠らされていた事ぐらいしか記憶にない。

何だろう、めぐみんのこの反応。

凄く気になる。

「……なあ、さっき、ダクネスと二人で居る時はよく俺の話をするとか言ってたな。いつも何話してんの？」

そんな俺の言葉に、めぐみんがちょっとだけ慌てた後、フイッと首を横に逸らした。

「……おい。どうせロクでもない事ばっか言ってんだろ」

「内緒ですよ。そ、それより、もう寝ましょう。カズマも何だかんだ言いながら、私と同じぐらいに寝ていないじゃないですか？　いくらアクアから体力を吸っていたとは言っても、体はともかく、寝ないと脳が休めませんよ」

こいつ誤魔化しやがった。

……と、そんな時、めぐみんのお腹が軽く鳴る。

「……ちょっと、何かお腹に入れて来ますね」

そんな事を恥ずかしそうに言って、めぐみんがムクリと起き上がる。

まあ、よく考えたらめぐみんは、ろくに食事も取らず、昼から今までずっと寝ていた訳だ。

……あれ、ちょっと待て。

「あ、オイ。ドアに外から魔法の鍵が掛かってる。お前の母ちゃんが掛けていったぞ」

そんな俺の言葉に、めぐみんは苦笑する。

そして……。

「全く。カズマ、私の母に大金が入る事でも言ったのでしょう？家は事情があり、昔から困窮していましてね。私も、朝と夜の自分のご飯はこめっこにあげて、族長の娘ということで裕福なゆんゆんから、良心が痛む中、毎日あの手この手で昼ご飯を巻き上げたものです。まあ、家は見ての通り貧乏なボロ家です。二階でもないんですし、窓から出れば……」

めぐみんは、言いながら窓を見て固まった。

……俺は布団の中に頭を潜らせ丸くなる。

そう、今こそ潜伏スキル発動の時。

俺がそんな事をしている間、めぐみんが窓を見ながら呆然と。

「……カズマ、これは一体なんなのでしょう」

「……さっき、通りすがりの冬将軍が窓を凍らせて立ち去ってったよ」

めぐみんが、俺が隠れていた布団をバッと捲り上げた。

「カズマ、これはどういう事ですか！？　いや、カズマがやったんでしょう？　カズマがやったんでしょうけれども、意図がサッパリ分からないんですが！　何を血迷って窓を凍らせたんですか！？」

寒い！

布団取られると本当寒い！

俺は丸くなりながらもめぐみんから目を逸らしたまま。

「……素直に言ったら怒らないか？」

「何も言わない気なら、アクアの蘇生を前提に明日の朝には爆裂魔法を撃ち込みますよ」

俺は素直に全てを白状した。

「……アホなんですか？　カズマは、賢いのかアホなのかどっちなんですか？　先ほどの私の気持ちを返してください。後、思い切りダクネスやアクアの言った通りじゃないですか」

「何も言い返す言葉もありません。今思えば、俺もなぜこんなバカな事をやらかしたのやら」

俺も長旅で脳がおかしくなっていたのかも知れない。

めぐみんが、凍りついた窓に張り付きそれを軽く叩いてみる。

殆ど全ての魔力を注ぎ込み、そして長い間に鍛えられた俺の全力

のフリーズは、ちょっと叩いたぐらいでは割れない程度の氷の厚さを保っていた。

それを見ためぐみんがドアに駆け寄ると、
「我が母ゆいゆい！　ここを開けてください！　ちょ、開け……！　お母さーん、お母さーん！」
叫びながらドアをドンドンと叩く。
だが、家の中はシンと静まり返り誰も起きてくる気配はない。

俺は、寒いのでモソモソと布団を自分に掛け直し。
「……もうアレだよ、寒いし寝ようぜ。大丈夫だよ、何もしない、俺を信じろ」
「先ほどまでなら信じられましたが、今はこれ以上にない身の危険を感じますよ」

めぐみんが、言いながら部屋の隅っこで膝を抱えて丸くなる。
さっきまでの良い雰囲気はどこへ消えた。
「悪かったよ、何もしないってば。窓にフリーズ掛けた時は、色々とムシャクシャしてたんだ。反省している。悪かった」

そんな俺の言葉に、
「……せめて布団から出て言ってくれればいいのに」
言いながらも、やはり寒いのか何かを諦めたかの様に、めぐみんは布団の中に入ってきた。
「わあい！」
「カズマ、本当に、夜が明けたら覚えておいてくださいね」
喜ぶ俺に、めぐみんが赤い瞳を爛々と輝かせて釘を刺す。

明日の事は明日になったら考えよう。
先ほどは自分から手を握ってきてくれたためぐみんが、今では布団

の端っこでこちらに背を向けていた。
何だか倦怠期の夫婦みたいだ。

「……おい、寒くないか？　俺は寒い。もっとこっちに来ようぜ」
「……本当に、先ほどの良い雰囲気を返して欲しいですよ」
ため息をつくめぐみんに、俺は出来るだけ小さく呟いた。

「『フリーズ』」

「今、寒いとか言っときながらまた凍結魔法を使いましたか！？
どれだけくっつきたいんですか！」
めぐみんが、呆れたように怒った後。

「はあ……。枕は一つしかないですから、カズマが使ってください。
その代わりに腕を貸して貰います」
何かを諦めたかの様に、そんな事を言いながらくっついてきた。

「あれっ、そんな急に素直にくっつかれるとそれはそれで困るんですけど」
そんな俺の言葉を他所に、俺の右腕を勝手に枕代わりにし、布団を頭まで被っためぐみんは、胸元に顔を埋めてきた。
そのまま、俺の胸元に顔を寄せた状態で。

「ダクネスに、『本気でそんな雰囲気になると冗談で誤魔化そうとするヘタレ』と言われるだけはありますね」

めぐみんは、そんな事を布団の中で言いながらクスクス笑った。
そんな近くで布団の中で息を吐かれると、めぐみんの吐く息で熱がこもって、胸元が熱いんですけど。
ドキドキするんですけど。

と言うか、このままだと俺の下半身がエクスプロージョンを唱える事態に。

「おい、好きでも無い相手にこういう事すんなって以前言っただろ、お前、男ってのはな、こういう事されると勘違いするんだよ。もてない男なんてな、手を握られただけでもうっかり好きになったりするんだからな。マジ気をつけろ」

俺が緊張で上ずった声で、布団を被ったままぐみんに言う。

すると、布団の中でそっと背中に手を回されて、そのままギュッと抱きしめられ。

「野宿してた時、言いませんでしたっけ？」

布団の中で表情が見えないまま、めぐみんのくぐもった声が聞こえてきた。

「私はカズマの事好きですよ、って」

２０話（後書き）

続きはノクターン（ｒｙ

この作品なので、次回でラブコメ展開か？
などと淡い期待はしないでください。

21話

俺は漫画が好きだ。
ライトノベルが好きだ。
ゲームが好きだ。
アニメも見る。
そして、常々こう考えていた。

なんでそんな美少女に迫られて手を出さないんだよ、お前年頃の男だろうがこのヘタレが、とか思っていた。

俺は今、そんな、漫画の主人公みたいな展開になっている。
そして思った。

ごめんなさい。
今までそんな事考えていてごめんなさい。

これはどう対応していいか本気で悩みます。

俺は今、布団の中で美少女に抱きしめられ、好きですよとか言われていた。

めぐみんが、俺を抱きしめる手に力を込める。
痛いほど締め付ける訳じゃない。
俺に心の内の何かを伝えたいかの様に、キュッとしがみついてくるだけだ。

……アカン。

寝ているめぐみんにちょっとイタズラする程度だった筈が、今では、ちょっと勇気を出せば一線を越えられる状態だ。

いや、越えられるじゃない、越えちゃダメだろ！

考えろ佐藤和真、考えるんだ。

これは以前の様に、ダクネスと一線を越えそうになった時とは訳が違う。

あの時はダクネスは嫁に行く覚悟の上での事だった。

だが今は、二人共が合意の上で一線を越えそうになっている。

パーティメンバー皆で一緒に生活している今の状況で、俺とめぐみんが一線を越えればどうなるかを考えろ！

と言うか、早まるな。

そう、まだしがみつかれて、好きと言われただけじゃないか。

俺が上ずった声で、

「お、お前は大人になったら絶対に悪女になると思う。こういう事はな、シャレにならない。お前、アレだよ？　こういった事されるとだ、男の人達はもう色々とアレがああなって我慢できなくなるんだよ。今さえ良ければもう後はどうなったっていいやー、みたいな。俺が鋼の精神を持つ漢で良かったな。でなきゃお前……」

そうやって、誤魔化すかの様にめぐみんに言う最中。

相変わらず、布団から頭は出さない状態で、俺の胸元に熱い息を吐きかけながら。

めぐみんが、クスリと笑って言った。
「……大人になったら？　旅に出る前に、屋敷の中で言いませんでしたか？」
そして、俺を抱く手に力を入れ、ちょっと小さな声で呟いた。
「……私はもう大人ですよ、って」

俺は、明日からの事は明日考える事にしました。

枕代わりにされていた右腕で、そのままめぐみんの頭を抱く様にして、ひんやりと冷たい黒髪に指を突っ込む。
手櫛を入れる様に、そのまま黒髪を手ですいてやる。
するとしがみついていためぐみんが顔は俺の胸に伏せたままで、俺の背中から手を上にやり、俺の後ろ髪を撫でてきた。
俺は左手をめぐみんの背中に回すと、右手ではめぐみんの頭を抱いたまま、左手でめぐみんの体をギュッと抱きしめる。
めぐみんが、抱きしめられて安心でもするかの様に、胸元にほうっと深く息を吐きかけてきた。

……童貞の俺としては、これから一体どうしたらよいのでしょう。
教えてください。

誰か教えてください。
あれです、まずは慌てず騒がずキスでしょうか。

そんな事を自問自答しながら、めぐみんと抱き合ったまま、お互いに髪を撫で合っている。
ひんやりと、そしてしっとりとした黒髪が触っていて心地良い。
俺はそっと布団の中に自分の頭を潜り込ませ、暗い布団の中でめぐみんの顔の近くまで頭を下げた。
お互いに、暗い布団の中で表情は見えず。
俺は千里眼スキルのおかげでめぐみんの顔の輪郭はくっきり分かった。

緊張で頭がおかしくなりそうだ。

それと同時に、期待で胸がいっぱいだ。
アカン、胸が苦しくなってきた。
ドキドキが止まらない。
そして下半身もえらいことに。
そうか、これが恋なのか。
俺はめぐみんの事が好きだったのか。

そんな色んな事を考えながら、俺は静かに覚悟を決めた。
大丈夫だ、これから大金が入ってくる。
家もある。
めぐみんとならきっと上手くやっていけるだろう。

そんな事を考えていると、めぐみんが再びキュッとしがみついてくる。
頭の位置を同じにしたので、しがみつかれるとめぐみんの口元が

俺の首筋近くに来る事に。
当然呼吸の度に首筋に、その熱っぽい息が当たり。
もう俺は堪らなくなってめぐみんのその唇に……！

「シルビアが来たぞーっ！」
そんな声が窓の外から響き渡った。

…………どうせそんな事だろうとは思ったよ！

◆◆◆

布団の中から頭を出す。
窓の外からは何か大きな物が動く音。
それと同時に、大勢による掛け声が聞こえてきた。

どうやら、魔王軍の幹部が部下を率いて攻めて来たらしい。

ぶっ殺したい。

心底本気で殲滅してやりたい。

もし俺に爆裂魔法を撃つ力があったなら、一も二もなく撃ち込む所だ。

だが、それと同時にほんの少しだけ冷静になり、そして同時に、少しだけなぜかホッとしていた。

一線を越えていたら、これからの皆との関係が違った物になるだろう。

それは、めぐみんが以前言っていた、街に帰って、これまで通りに皆で一緒に面白おかしく暮らしたい。

そんな願いが叶わなくなると言う事だ。

なら、これでいい。

女の子とデートすらまともにした事がない俺が、いきなりの一足飛びは早かったと言う事だ。

「そっちに行ったぞー！　雑魚モンスターを大量に率いてやがる！　焼き払え！　まとめて焼き払ってしまえ！　さあ、我ら紅魔族の紅き瞳を、最後の記憶としてその目に焼きつけていくがいい！」

そんな怒声が響く中、突如窓の外がカッと明るくなった。

魔王軍が盛大に焼かれているらしい。

俺とめぐみんも、他の連中を起こして外に出た方がいいだろう。

放っといても簡単に撃退しそうではあるが、この里に居る以上は戦力の足しにでも……。

俺がそう思いながら、身を起こそうとして気がついた。

めぐみんが、しがみついたまま離れない。

……あれっ、外はえらい事になっているのにまさかの続行ですか？

「め、めぐみん、外が……。こ、こんな事していていいのか、俺達は……？」

俺は布団から頭だけ出した状態で、何となくそんな事を。

そんな俺にめぐみんはくっついたまま。

「……カズマは蘇生されてまだ日が経っていないですから、戦闘は無理ですよ……。それに、この部屋からは出られません……」

そんな大変説得力のある事を言ってきた。

そうか、確かにこの部屋からは出られない。

なら、ここで続きをするのが建設的だろう。

俺は、もう何も考えない事にした。

「我が蒼き轟雷にてその身を撃ち砕かれるがいい！　そして、その汝が魂を我が力の一部とせよ！」

どこかの紅魔族が、そう遠くない所で叫び、一拍置いて、窓の外に蒼白い光がほとばしった。

そんな事には一切関与せず、俺とめぐみんは布団の中で再びくっつき合っている。

お互いに、いきなり一足飛びに触る勇気は無く、現在は背中を撫であっている状態だ。

めぐみんが恥ずかしそうに顔を伏せながら、心なしか、背中を撫でられるそれだけでも微かに息づかいが荒くなってきた気がする。

もうここまで来てしまったなら、俺も今更止まれない。

仲間との絆？

屋敷で皆で居づらくなる？

知るか。

そうだ、キスとかする前に、ここは言っとかないとまずいんじゃないのか？

めぐみんは好きだとか言ってくれたんだ、俺も甘い言葉の一つも囁かないと。

「め、めぐみん。あれだ、俺を好きだって言ってくれたな。その……、俺もめぐみんが好きだよ……」

これにて完了！

後はもう行くところまで行ってしまえばいい。
俺が先に進もうとすると、めぐみんが、
「……本当？　私の、どこが好きなんですか？」
ふと、伏せていた顔を上げ、少し期待するかの様な表情で見上げてきた。

口説き慣れてもいない童貞が、適当な事を言うものではない。

「……え、ええっと、その……。爆裂魔法だとか……」
「困った時には、とりあえず爆裂魔法を褒めておけとか適当に思ってませんか？」
俺の言葉にめぐみんが鋭く突っ込んだ。

畜生、慣れない事はするものじゃない、やっちまった。
俺はなぜ、いつもこういった時には雰囲気をぶち壊してしまうのか。
一生童貞の呪いでも掛けられているのかも知れない。

めぐみんが、再び俺の胸に顔を埋めながら、くすくすと笑い出す。
「私は、そんなカズマのいい加減な所が好きですよ。自分の力を良く分かっていて、強敵に遭っても変に気取って女性を守ろうとするでもなく、平気でダクネスの影に入り。それでいて、本格的な悪事に手を染める度胸も無ければ、正義の味方な訳でもなく。人が見ていない所ではたまには悪い事もすれば、機嫌が良ければ善い事だってする、そんな善くも悪くもない中途半端な普通の人で」

あれっ、褒められてるのかこれ？

「借金があればせっせと働き、そのクセお金に余裕が出来れば途端に働かなくもなり。その日の気分次第で、優しかったりもすれば意

地悪したりもする。仲間想いかと思えば、そのクセ平気で仲間をトレードしたりもする。機転が利いて凄く賢いのかと思えば、一体なぜそんな事をしたのかと思う様なバカな所も……」

うん。これ間違いなく褒められてないな。

めぐみんは、聞いてる内にどんどん微妙な表情になっていく俺を見ながら心底可笑しそうに笑って、

「そして、いつも何だかんだ文句を言いながらも皆を助けてくれる、本当は優しいのに素直じゃないあなたが好きですよ。肝心な所になると三枚目になってしまう、今みたいなこんな所も。あまりカッコ良くなくて、肝心な時に締まらない、そんなあなたが好きですよ」

そんな事を笑って言いながら、俺の背中に回していた両手を、俺の首の後ろに回してきた。

凍った窓越しのぼんやりとした月明かり。

そこに照らされるめぐみんの顔に、吸い寄せられそうになる。

何という魔性のめぐみん。

俺は、気が早いとは思いながらもめぐみんに。

「アレだ、これから大金も入る。そうしたら、残る人生はあんまり危ない事はせずに、楽しく暮らそう。皆でまた温泉行ったりしてさ。そ、そして、その内、こ、子供とか出来たら、泣いた時には、アクアに芸をしてもらってさ。ダクネスにはお嬢様って事で、一流の教育を施して貰ったりしてさ……」

そんな俺の言葉をくすくすと笑って聞きながら。

「もし今夜、子供が出来たりしたら名前は私に付けさせてくださいね」

そんな事を言ったためぐみんに即答した。

「それだけは絶対に許さない」

「おい、私のネーミングセンスに文句があるなら聞こうじゃないか」

俺はそんなめぐみんのローブを、背中に回していた手で……。

「あれっ、そういやこの紅魔族ローブ脱がしちゃったらまずいのか？　もしや着たままプレイ？　いや俺は一向に構わないと言えば構わないんだが、もうムードもへったくれも無いから言わせてもらうと、めぐみんの貧乳が見たいです」

「おい、私がいつから貧乳になった。他が目立つからそう見えるだけだ、今見せてやるから貧乳かどうか確認しろ。全く……本当に、ムードもへったくれも無いですね。何か色々ともう諦めました。……しょうがないですね、こんな変な男を好きになった私の頭がどこかおかしいんです」

呆れた様な、諦めた様な、それでいてちょっとだけ嬉しそうな表情で。

言いながら、めぐみんが袖口からローブの中に両手を入れて、何やらモソモソと……。

「シルビア様ー！　お逃げください、もうダメです！　シルビア様手製の大型の改造モンスター達も、軒並みやられました！　ここは我らに任せてお下がりください！」

うるせえなあ。

これ以上に無い良い所なのに、窓の外からそんな怒声が聞こえて

きた。
声は随分と近く、正直言って凄く迷惑だ。
既に良い雰囲気はぶち壊されているものの、ハッキリ言って邪魔な事には変わりない。

めぐみんがその声を気にする様に、ローブを脱ぐ手を止めて、俺の下に寝そべったまま自分の頭上の方にある窓を見上げている。

俺はもう期待を抑えきれずにめぐみんに。
「めぐみんさん、手が止まってますよ」
「あっ、すいません……。…………本当に、ムードもへったくれも無いからお互いちょっと黙りましょうか」
「そうしましょうか」

窓の外にうつる黒い影。
それが突然大きくなると、唐突に、凍った窓と壁を砕きながらめぐみん宅へと突っ込んで来た。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「めぐみん、無事かっ!?」
俺は慌てて、抱きかかえたままのめぐみんに呼び掛けた。
両手をローブにしまい込み、中でもぞもぞしていためぐみんが、俺の腕の中から出て、そのままの状態で立ち上がる。
それに合わせて俺もめぐみんを見ながら立ち上がる。

……と、ずっと見ていた俺の目の前で、黒い何かがめぐみんの足元へとシュルリと落ちた。

そう、ブラである。

それを見た俺は、もう魔王軍でも紅魔族でもなんでもいいから他所でやってください、こっちは早く続きがしたいんです、早く早くというソワソワした感情で頭の中が一杯になる。

「ハア……ハア……！　ま、マズイわ……！　これはどうやら逃げ切れない……あら？」

そんな声が。

そんな、ちょっとハスキーな声が何かが突っ込んで来た場所から聞こえてきた。

だが俺は、未だに何かローブの中でモゾモゾしているめぐみんから目が離せず、そちらに視線は向けずに。

「お前は……っ！　お前は、一体何者だ!?」

突然の侵入者に対し、俺は何者かと呼び掛ける。

そんな俺の声に、

「うふふっ、この私を知らないとは、あなたこの集落の人間じゃないわね？　……へえ！　あなた、目が紅くない……！　丁度いいわっ、アタシはなんてツイているのかしら！　アタシの名はシルビア！　魔王軍の幹部が一人。強化モンスター開発局局長、シルビ……、ちょっとあなた、な、なんでこっち向かないのよ、ちょっと、こっち向きなさいな」

「お構いなく」

今は魔王のなんたらよりも、足元から落ちたブラを慌てて拾い直

し、てるてる坊主みたいな状態になり、ローブの中でブラを付け直すめぐみんから目が離せない。

そんな俺にシルビアとやらが、

「お構いなくじゃないわっ！　人間風情が、このアタシを」

「だあああらあっ、クソッ！　オウコラッ、しばき回されてーのかオイッ！　一番良い所で邪魔しておいて、お前なんだコラ！　人様の迷惑考えろっ！」

シルビアの言葉を途中で遮り、俺は生まれてこの方これほど怒ったことはないとばかりに、その魔王の幹部を叱りつけた。

「ごっ……、ごめんなさ……！」

本気でキレた人間の怒りを受けて、思わず一瞬怯んだシルビアは、すぐに我に返り言ってくる。

「ちょっとあなた、このアタシを叱りつけるとはいい度胸ね。そこに居る紅魔の娘共々、人質にしてあげる！」

俺はその言葉にようやくそちらを向いた。

半壊した窓に壁。

そこに突っ込んでいたのは小さな小屋ほどもありそうな巨大なムカデ。

そのムカデはまるでよく躾けられたペットの如く、触覚だけを蠢かせ、それ以外はピクリとも動くことなく待機している。

そのグロテスクな甲虫の上には、上半身はビキニみたいな服装で下半身にはパレオみたいな物を巻いた、一見するとサキュバスか何かに見える、二本の角を生やした美女が立っていた。

月の光の下、黄色く輝く猛獣の様な瞳に、茶色くくすんだウエーブのかかった長い髪。

悪魔族か何かなのだろうか、その尖った右の耳には青いピアスが

輝いていた。
そして腰には一体何に使うのか、ロープの様な物を吊るしている。

「あそこだっ！　あそこに居るぞ……、……おいなんてこった、よりにもよってひょいざぶろーの家に突っ込みやがったぞ！　あそこは唯でさえ貧乏なのに、更に困窮させる気か……！」

遠くからはそんな紅魔族の声がする。

それを聞き、魔王の幹部、シルビアが、チッと舌打ちして崩れた壁から部屋の中へと土足でズカズカ上がり込んできた。

部屋の中には、奥さんが俺をここで寝かせると決めた際に運んでおいてくれたのだろう、俺の荷物と武器があった。
俺はすかさず武器と荷物を取り、ようやくブラを付け終わり、ローブの袖から両手を出しためぐみんの前に、庇うように立ち塞がる。

シルビアがそれを見て、舌なめずりをしながら妖艶な笑みを浮かべた。
「あらあら。ひょっとして取り込み中だったのかしら？　それは悪い事をしたわねえ」
シルビアは、そんな挑発的な事を言いながらも、俺とめぐみんの方へと怯むこと無く真っ直ぐに歩いて来る。

「ねえー！　何か凄い衝撃と音がしたんですけど！　どうしたの？　めぐみんがまた爆裂魔法でも撃ち込んだの？」
そんな声がドアの外から掛けられた。
寝ていたアクアが起きてきたのだろう。
だが、ドアには魔法で鍵が掛けられている。

「おいアクア！　魔王の幹部が逃げ込んできた！　ドアには魔法で鍵が掛かってる、なんとかしてくれ！」

その声に、アクアがドアの前で何かを唱えているのが聞こえてきた。

「あまり時間は無さそうねえ！　紅魔のお嬢ちゃん、やっぱりあんたは見逃してあげるわ！　代わりにそこの、いい男を貰っていくわよっ！」

そんな事を言いながら、真っ直ぐこちらに突っ込んでくるシルビア。

俺達を舐めきっているのか実力を見切っているのか。

そのどちらかは分からないが相手は仮にも魔王の幹部、俺やめぐみんが真っ向から勝てる相手では無いだろう。

ドアの外で、声が聞こえた。

「『マジック・ブレイク』！」

その声と同時に、ドアの鍵がカチャンと鳴る。

アクアが施錠の魔法を解除したのだろう。

めぐみんが、何か自分に出来る事は無いかとオロオロする中、俺はそんなめぐみんを庇うようにして、シルビアから目を逸らさずに、持っていた武器ではなく、色んな物が入ったリュックを牽制として投げつける。

土と風の魔法での目潰しコンボでも食らわせてやりたいが、先ほどアホな事に魔力を殆ど注いでしまい、ロクに魔法が使えない。

目潰し代わりにリュックを投げて、それを避けたら即座に斬りかかってやる！

「あら、なあに？　アタシへのプレゼント？」
投げつけられたリュックを避けずに片手でヒョイと受け止めたシルビアは、片手が塞がっている状態にも関わらず、斬りかかった俺の剣を空いた手で受け止めた。
魔剣やら強力な剣と言う訳ではないが、それでもちゃんとしたそれなりの剣だ。
幾らなんでも片手で受け止められるとは思わなかった。

だが……、
「……？　なっ、何これっ！？　力が抜ける！？　レベルドレイン！　あなた、レベルドレインを使ったの！？」
俺の剣を掴んだままで、驚愕の表情を浮かべるシルビア。
ちきしょう外れか！
スキル不死王の手の効果だが、麻痺か昏睡の状態異常に陥って欲しかった！

バンとドアが開けられる。
そこから現れたのはアクアの姿。
その姿を一目見て、シルビアが思い切り表情を引きつらせた。

それを見てピンと来る。

この幹部は女神に弱い系の種族か！
バニルみたいに見通す力は無いものの、本能的にアクアが危険な存在だと見抜いたのかも知れない。
俺がアクアに何かを言うより早く、シルビアが俺の剣を思い切り引っ張った。
咄嗟の事で剣が離せず、俺はたたらを踏みながらシルビアへと引き寄せられる。
慌てて剣を手放すが既に遅く。

俺はシルビアの胸へと顔面から飛び込む形となっていた。
そのままシルビアは掴んでいた剣を捨て、律儀に俺の荷物の方は掴んだままで、空いた方の手で俺の後頭部を掴み、そのまま自分の胸へ埋める様に抱き寄せた。

ありがとうございま……。

いや違う！
今の俺にはめぐみんが！
そう、こんな巨乳で肌もあらわで大柄だけれども全体的にはバランスとれててスラッとしてる相手だからって、鼻の下伸ばしている場合じゃない。
とっとと終わらせればさっきの続きが出来るのだ。

俺は顔をシルビアの胸に埋められたまま、拳を握り殴ろうとするが……！
「ごめんなさいね！　大人しくしてなさいなっ！　『バインド』！」
それはいつぞや聞いた事のある拘束スキル。

確か、盗賊風の冒険者が使ってた奴だ！
こいつ、まさかの盗賊系の魔王の幹部か！？
俺はシルビアの胸に顔を埋めた状態のまま、シルビアが腰に吊るしていたロープで、あっという間に上半身を縛られた。

ヤバイです。

「この男は貰っていくよ！　そこの紅魔のお嬢ちゃん、なぜ魔法を撃たなかったのかは知らないけれど、この状態で魔法を撃てばこの男も巻き込むからね！」

叫んで、シルビアは俺を連れたままで巨大なムカデに走り、飛び乗った。

ヤバイです。

「ほーん？　あんた、なんか悪魔っぽいわね！　逃さないわよ、胸に顔を埋めてホコホコした顔してるのはウチの大事な……！　大事な……。ねえカズマ！　私とカズマってどんな関係なの？　こんな時、どんな決め台詞を言えばいいの！？」

何かの魔法を放って止めようとした、肝心な時には使えない事で定評のあるアクアが叫ぶ。

どうも紅魔の里に半日ほど滞在しただけで、ここの連中に変な影響を受けたらしい。

そんなの、大事な仲間でも何でもいいからとっとと助けろと叫びたかったが、シルビアの胸の谷間に顔を挟まれて上手く喋ることが出来ない。

と言うか、今喋ると本当にヤバイ。

具体的にどうヤバイかと言うと、先ほどまでめぐみんとくっついていた事で限界まで高まった俺の色々な物が、本当にヤバイ。

そう、何がヤバイって、シルビアの胸に顔を埋めた状態で、シルビアの体に両腕を拘束された状態で縛り付けられているのがヤバイ。

長身のシルビアの胸に顔を埋め、俺は今、本日二度目の女性との密着状態というご褒美を与えられていた。

今日はどうしたんだろう。

ついに俺の高い幸運が火を吹いたのだろうか。

そんな俺を連れたままシルビアが、乗っていたムカデに対して何かの合図を送る。
すかさずその身を蠢かせ、意外な速さで進んでいく巨大なムカデ。
そのムカデの周囲を取り囲むように、多数の紅魔族が並んでいた。
それを見てムカデが動きを止める。
だが紅魔族達はシルビアに張り付いた俺を見て、手出しが出来ずにうろたえていた。

アカンて。

シルビアさん、これ以上動いたらアカン。

俺は胸の谷間に顔を埋めたまま、ふうふうと荒い息を吐いていると、
「ちょっとボウヤ、そんなに熱い息を吐き付けないでよ、体が火照ってきちゃうでしょ？　いい子にしてれば後でご褒美をあげるから」
そんな、今の俺の状態には更に危険な事を言ってきた。

アカン。

ダメだ、俺には先ほどのまで甘ったるい時を過ごしたためぐみんが……！
意識を強く！
強く持つんだ……！

俺が歯を食いしばって耐える中。

「『セイクリッド・エクソシズム』！」

アクアの声が轟いた。

その声と同時、俺とシルビアが乗っているムカデの真下から、巨大な光の柱が下から突き上げる様に空に向かってほとばしった。

当然ながら、俺とシルビアもその光の柱に包まれて……！

「ッ！？　あああああーっ！？」

シルビアが、突然のその光に甲高い叫びを上げた。

だが、同じく光に包まれた俺は何ともない。

きっと対悪魔の魔法か何かだったのだろう。

だが、俺にとっては違う意味でダメージが来ていた。

それは……！

「やっ、やってくれたわねえ……！　お陰で下級悪魔の皮でこしらえたブラが台無しになったじゃないの……！　でも残念ね、私は純粋な悪魔じゃないわ。その魔法で多少のダメージは受けても、一撃で仕留められるほどではないわね。次に攻撃を仕掛けたなら、この男の命は無いものと思いなさいな！」

アクアにそんな脅しを掛けてくる、上半身を真っ裸にされたシルビアさん。

それを聞いて、アクアがビクッとして動かなくなる。

俺は、そんなシルビアの胸に顔を挟まれたまま。

深く、深く、葛藤していた。

ありがとうございますアクアさ……、いや違う、有難くな……。

……ありがとうございます、ありがとうございます……！

シルビア様、アクア様、ありがとうございま……！

「カズマーッ！」

そんな、シルビアと密着したままの俺に、半壊した壁から顔を覗かせためぐみんが、悲痛な声で叫びを上げた。

めぐみん。

つい先ほどまで、愛を語り合った俺の好きな女の子。

そう、俺の好きな……。

……？

……あれっ？

「カズマ！　今私が助けますから！　そこの魔王の幹部、カズマを放してこの私と死合いなさい！　仮にも魔王の幹部なら、一対一の勝負なら逃げたりはしないでしょう！　私に勝ったなら、そのまま逃げるがいいです。でも私が勝ったなら……。カズマを、カズマを返して貰います！」

めぐみんが叫ぶ中、シルビアが面白そうに振り向いた。

それにつられて、縛り付けられた俺も一緒にプランと動く。
俺はそれらの事に一切逆らう事はなく、されるがまま、なすがままになっていた。

「へえ……！　聞いた？　ボウヤ。あの健気な可愛い恋人さんは、あなたの為に命を賭ける覚悟の様よ？　さあ、何か喋る事を許してあげる。……さあ！　このアタシに、美しい愛の物語を見せてちょうだい！」

言いながら、シルビアは俺の肩口を縛り上げていたロープの一部を鋭い爪で切り裂いた。
俺は肩から上を自由にされて、コキコキと首を鳴らすと、首だけをめぐみんの方に向けた。

めぐみんは、半壊した壁から裸足で地面に降り、両手で愛用の杖を握ってぺたぺたとこちらに歩いて来ていた。

紅魔族達がジリジリとムカデを牽制しながら距離を詰めていく中で、めぐみんはそんな紅魔族達よりもこちらへと近づいて、俺を真っ直ぐ見つめ。
やがてめぐみんは、俺を体に縛り付けたままのシルビアと、最も近くで対峙する距離に来る。

「……今からこいつを倒して、命に賭けても必ずカズマを取り返しますから。それが、例え刺し違えてでも。それが私が今までカズマに助けて貰った事への恩返しです！」

そして、めぐみんは声のトーンを急に落とし。
ボソボソと、ほんのりと頬を赤くしながら。
「……そして、先ほど言っていた……。その、カズマ……。その……。私と子供を作って、皆で一緒に幸せに……って、あの話をじっ

くり……と……」

そんな事を、俺やシルビアにだけ辛うじて聞こえる大きさで呟いた。

照れながら言ってくるめぐみんを見て、それを聞いていたシルビアが、関係ないのにちょっと恥ずかしそうに頬を染め、片手でその頬を軽く撫でながら、初々しいわあ……！　とか言っている。

紅魔の人達やめぐみん、そして、崩れた壁からこちらを覗いているアクア等の視線が、自然と俺へと向けられた。

何を話していたかは聞き取れなかっただろうが、それでも次は俺が何かを言う番だという事は分かるらしい。

俺はめぐみんに。

「……ええっと。まだ俺もめぐみんも若いしな。そういった、大事で難しい話は冷静な時に話そうぜ」

「「えっ」」

めぐみんとシルビアが同時に言った。

ئۇيغۇر.....

21話（後書き）

こんな落ちですが謝らない。
下品な回で申し訳ない。

22話

多数の紅魔族が俺とシルビアの乗るムカデを囲み、遠目から成り行きを見守る中、めぐみんが、こちらに杖を突きつけたままの姿勢で固まったまま。

「……お、おい、今なんて言ったのかをもう一度聞こうじゃないか」

俺は、そのめぐみんの声を聞きながら。

シルビアの胸の感触を頬に感じながら、ひどく落ち着いた心で、荒ぶるめぐみんへと諭すように。

「めぐみんは今幾つだっけ。十七ぐらいじゃなかったっけ。その、いきなり子作り、結婚！　とかじゃなく、まずは清いお付き合いからスタートした方が良いと思うんだ。冷静になって考えてみたら、俺達まだデートすらした事ないのに、その場の勢いだけで子供作って出来ちゃった婚とか、子供の為にもイケナイ事だと思います」

「あなたが言い出したんですよ子供が出来たら云々の話は！　どうしたんですか？　そこの魔王の幹部に何か術を使われたんですか！？　と言うか、胸に顔を押し付けた状態でそんなマトモな正論とか言われると凄くイラッとくるんですが！」

めぐみんがそんな事を言って、シルビアをキッと睨んだ。

「ア、アタシっ！？」

冤罪はよくない。

「いや、違うよ。凄くクリアな頭でお互いの将来の事を考えてみたんだ。よく考えてみたら、まだお互いの事を殆ど何も知らない状態

だろ？　めぐみんに妹が居た事だとか、今日初めて知ったんだぜ。めぐみんはもう大人なんだろ？　好きになった、結婚しよう！　だなんて、幾らなんでもそれは子供の考えだと思うんだ」
「だから、それはあなたが言い出したんですよ！　どうしたんですか本当に、いつもおかしいですが今日は特に……！」

めぐみんが慌てる中、シルビアが何かに気付いた様に小さく呟く。
「……あっ……」

それは、モゾモゾしている俺と引っ付いているせいで分かったのか、どうやらシルビアに察知された様だ。
そんなシルビアが、困った表情を浮かべ、俺の頭を優しく撫でてきた。
「ごめんなさいね、アタシの所為ね……。お嬢ちゃん、彼氏の事は許してあげて？　あなたの彼氏はね、しばらくの間全く欲望の無い状態になっちゃったのよ」
そんな事を、同情する様に言ってくる大人なシルビア。
大人の女性というのはここまで物分かりが良い物なのか。

そのシルビアの言葉に、めぐみんもどういう事かを察した様だ。
その表情がみるみるうちに冷めたものになり……。

俺を見るその目が……、
それは、そう、屋敷を薄着でウロウロしているダクネスを、ジッと見ている俺に送る、虫けらを見るようないつもの視線だ。

「ど、どうしましょうこの男……。予想外です、ここまでどうしようもない男だとは思ってませんでした……。私とあれだけ色んな事したクセに、その数分後には他の女で満足して冷静になるとか……！」

「おいちょっと待て、まだ布団の中で抱き合ってただけで何もしていないのに、あれだけ色んな事したと言われるのはおかしい」
「よし、それ以上くだらない事を何か喋る気なら私にも覚悟がある」
おっと、ゴミでも見るような目ですね。

「まあ、邪魔したアタシが言うのもなんだけれど、そんなに嫌わないであげなさいな。やりたい盛りの男の子はね、目先の一晩の欲望の為なら人生を棒に振る事も多々ある物よ？　むしろ、スッキリした今の彼なら本当の想いを聞けるってものよ？　今こそ彼の、飾らない本音を聞いてあげてごらんなさいな」
未だに俺を胸に縛り付けた状態のまま、そんな物分かりの良い事を言ってくるシルビア。

シルビアのそんな言葉に、未だ険しい表情ながらも、俺を見るめぐみんの視線が、ゴミを見る目から胡散臭い物を見る目ぐらいに和らげられる。

「そんなフォローをしてくれるのは嬉しいんですが、胸に顔を埋めた俺をめぐみんが凄い目で見ているので開放してもらえませんかね」
「あら。それじゃあ、ちょっとだけよ？　逃げたりはしないでね？」
シルビアが、俺を縛り付けていたロープを爪先でヒュッとなぞると、それだけで俺を縛っていたロープが切断されて、はらりと落ちた。
俺はシルビアから一歩離れ、硬いムカデの背に立つと。

めぐみんが、そんな俺の言葉を待つかの様に、真っ直ぐ俺を見詰めたまま動かなくなる。

しかし、飾らない本音だとか言われても。

正直、めぐみんとは長い付き合いだがいきなりこんな関係になるなんて思わなかった訳だし、そもそも自分の気持ちが分からない。
付き合った事はおろか、ロクに女とデートした事もない俺には、好きになるだとか、恋焦がれるだとか、そんな気持ちがイマイチ……。

……。

あれっ。

何だろう、いきなり結婚、子持ちになるのは重いなと思ったが、別にめぐみんと付き合うとか、そういうのはちっとも構わない気がする。
むしろ色々溜まっていた旅の間の諸々がスッキリ解消した今なのに、これからめぐみんと一緒に、デートとかするのも結構楽しみだったりもする。

何をするでもなく一緒にグダグダとダベって、おいめぐみん、暇だから弁当持って、景色のいい湖に行って、爆裂魔法で波でも起こして遊ぼうぜ！　とか言って。
……あれっ。
何だろう。
何だろう、これ。

「お、おいめぐみん、大変だ！　俺、本当にお前の事が好きかも知れん！」
「最低です！　あなたは最低です！　本当に本当に最低ですよ！

私の事が本当に好きかも知れんだとか！　それは告白してくれているんですか!?　もう少し言葉を選べないんですか!!」

童貞にそんな高度な事を求められても。

俺が変な汗をかきながら困り顔でオロオロしていると。

そんな困り果てた様な俺をめぐみんが、

「……はあ……。本当に、肝心な時には締まらない男です全く。そんな所も好きだと言ってしまった手前、怒るに怒れない所がまた……」

何かを諦めた様な、それでいてちょっとだけ面白い物でも見るような表情で呆れた様に言ってくる。

そんなめぐみんの顔を見て、安心した様にホッと息を吐くとめぐみんにジロリと睨まれた。

ご、ごめんなさいっ！

「……はあ。……それで、これからどうします？　その……。そ、その……これからの、関係……と、言うか……」

めぐみんが、少し不安気な表情で。

そしてちょっとだけ頬を赤くしながらボソボソと。

ええっと、ど、どうしようか。

「ど、どうしようか。本音を言うと、俺は今までの人生の中でロクに浮いた話も無かったのに、唐突にお前みたいな美少女に告られたってだけで、実は俺にとってはいっぱいいっぱいだったりする。友達以上、恋人未満な関係で、少しずつ進みたいなと思うんですがダメでしょうか」

そんな俺の言葉にめぐみんが。

「……い、良いです……。とりあえずは、それで……。……そ、そ

れに、そんな間柄なら皆とも気まずくならずに済みますし……」
照れながら。
美少女呼ばわりとか色んな事に照れながら。
杖で足元をほじくりながら、少しだけ、安心した様にホッと息を吐きながら、めぐみんは小さな声で言ってきた。

そんなめぐみんを見ながら、俺も何だか照れてくる。
何だこれ、初々しいカップルみたいだ。
ヤバイ、何これヤバイ、なんか新鮮で甘酸っぽくてドキドキしてきた！

あれっ、つまりコレって、ダクネスやアクアにはどうすんだ。
言った方がいいのかコレ。
どんな関係になるんだろう。
恋人未満……。
恋人未満って事は、恋人っぽいことはしてもいいんだろうか。
恋人っぽいというと、大体どこらへんまでが……。

そんな事を悩む俺に、めぐみんが。
「ではとりあえずは、ちゃんとした恋人に昇格するまではダクネスとアクアには内緒の方向で。……あと、内緒の方向なので、もちろんキスとかえっちな事はお預けです」
「えっ」

◆◆

「ウフフッ、いいわー。あなた達、最高よ！　最高に甘酸っぱくてドキドキしちゃったわよ！」

完全に空気だったシルビアが、唐突にそんな事を言ってきた。

しまった、俺の後ろに居たのに完全に存在を忘れていた。

そんなシルビアに対し、めぐみんがキッと睨みながらも。

「……あなたが乱入して来なかったなら、なし崩し的にこの男の嫁になり、きっと毎晩えらい目に遭わされていた事でしょう。……そ、その。今となっては、私としても、少しだけ、早すぎたかなとちょっとだけ安心もしています。なんでしょうか、旅の間衰弱していた事もあり、色々と弱っていた所に優しくされ、グラッと来ていたのでしょう」

あれっ。

「なので、丸く収まった事では一応あなたに感謝します。……そこで、どうでしょう？　私も今は、里の外で暮らしているとはいえ、れっきとした紅魔の者。私から、今日の所は見逃してくれるように皆に頼みましょう。……カズマを置いて、立ち去る選択肢はありませんか？　ハッキリ言ってそこのアホな男には、モノ好きな私以外の者にはそこまで人質としての価値などありませんよ？」

……あれっ。

「……なあめぐみん、一応聞きたいんだけど、お前って俺の事好きなんだよな？」

「好きですよ？」

めぐみんが何を今更といった表情でサラッと言ってくる。

そ、そうか……。

釈然としないながらも、とりあえずは自分を納得させてみる。

と……、

「残念だけれどそうはいかないのよ、ごめんなさいね！　アタシ、人間の言う事は信用しない事にしているの！　その昔、このアタシに甘い声で近づいておきながら、一晩を共にした後はアッサリと逃げていった男が居たのよ！　その男は人間でねえ！　いつだって、人間は小さな事で区別する。差別する。アタシの場合も、取るに足らない些細な事を理由にその男に逃げられたわ！」

そんな事を口早に並べたて、素早く俺の背後に密着する。

「我が名はシルビア！　強化モンスター開発局局長にして、自らの身体に複合と改造を繰り返してきた者！　そう、私は強化キメラのシルビアよ！　さあ、この男は貰っていくわ！　里から安全な場所まで逃げ切ったなら開放してあげてもいいわよ！　可愛いボウヤ、もう一度一つになりましょう！　『バインド』ッ！」

……この人も、紅魔の里の連中との長い交戦により、多少影響されたのかもしれない。

シルビアは叫ぶと同時、俺の背後で自分の手をバンザイさせて、すかさずロープを使って俺を再び拘束した。

ハッキリ言って、蘇生後で不調な今の俺の状態じゃあ、背後を取られている以上はとても抗う事など出来はしない。

抵抗する事も無く、俺はされるがままに拘束された。

「カ、カズマっ！　カズマを返し……！　……カズマ、今大した抵抗も見せずに再び拘束されたのは、わざとではないですよね？」

「違うよ」

後頭部をシルビアの巨乳の間に埋めたまま、俺は長身のシルビアの体へと、再び両手を縛られて拘束された。
シルビアは満足そうに、俺のリュックの、背負う部分に指を掛け、それを人差し指一本でブンブンと振り回している。
先ほど俺が、めぐみんの家で目潰し代わりに投げたリュックを、まだ律儀に持っていたらしい。
顔を胸に埋める体勢ではなくなってしまったものの、それでもこの体勢は非常に収まりが良い。
シルビアが背が高い為に、胸の部分に俺の後頭部がある状態でも俺はまだ足が地面に届かず、シルビアと一体となったまま、プランとぶら下げられていた。

なんだろうこの安心感は。
……と、そんな俺にめぐみんが、シラッとした冷たい視線を送ってくる。

そんな時だった。

「くっ……！　この私が、こんな時に何と言う……！　何と言う不覚……っ！」

その聞き慣れた声に顔を向けると、そこには鎧は外し、ラフな格好のダクネスが荒い息で立っていた。
薄手の黒シャツにタイトスカート。
足元はめぐみんと同じく裸足で立ち、手には大剣だけを持っている。
奥さんに起こされ、慌てて飛び出して来たのだろうか、軽い寝ぐせが付いたままのダクネスは、シルビアをキッと睨みつけた。
その後ろからは、同じく半壊した壁から靴も履かずに飛び出して、裸足で小さな石を踏んで痛そうにしているアクアの姿。

ダクネスがシルビアに向け言い放つ。
「魔王の幹部！　そこで貴様の胸に後頭部を埋め、幸せそうに目を瞑っているどうしようもない男を返してくれっ！　私がその男の代わりになるからっ！　頼む、カズマの代わりにこの私を人質にしてくれっ！」
突然そんな事を言い出したダクネスに、シルビアが実に愉悦そうにその妖艶な口元を歪めて言った。
「あらあら……！　随分とまあ、罪作りなボウヤだこと……？　あなた、良い人が二人も居るの？」
多分そこの女は違う目的だと思うんだ。
さらって欲しいだけだと思うんだ。
そんな二人のやり取りを聞きながら。

「おい変態クルセイダー、くだらない事言ってないでこの状況を何とかしてくれ。と言うか、完全に膠着状態だ。……なあシルビアさん、ここは一つ俺を信じてくれないかな。初対面で何も知らない人間をとても信じられないってのは分かるんだが。今日の所は引き分けって事でどうだ？　里の入り口までは俺を連れてって、そこで開放してくれるとか。……ハッキリ言って里の外で開放されちゃうと、俺の実力だとモンスターにあっさり食われる」

俺は、シルビアにすがる視線を向けながら言ってみた。

そんな俺にシルビアは、
「フフフッ、ダメよ。それにあなたの事は少しだけ知っているわよ？　里への街道を見回っていたアタシの部下達が、逃げ帰ってきた際にあなたの事を話していたの。ウチの軍の幹部連中にも匹敵する様な非道な男が居たってね？　フフフッ、アタシは悪魔の一部も合成しているキメラだからねえ……。そんな、非道なあなたは嫌いじ

ゃないわよ？」
俺の頭を空いた手でヨシヨシと撫でながらそんな事を言ってくる。
……あれっ、今日はめぐみんといいシルビアといい、本当にどうしたのだろう。
運というのはぶり返しがあると聞く。
良い事があると悪い事。
めぐみんとの事は、正直言って物凄くご褒美だった訳なのだが……。

「……ねえ、何だか知らない間にカズマが敵と仲良くなってるんですけど。頭撫でられたりしてるんですけど」
アクアが俺をジッと見たままそんな事を言ってくる。

「……カズマ。おいカズマ。一体何をどうしてそんな所に張り付いている。……全く、油断でもしたのか？　大方、その女の胸にでも魅了されたのだろう。相変わらずな奴め、今助けてやるから、そこを……」
ダクネスが、剣を構えてそんな事を……。

……。

俺はダクネスに向けて、ぽつりと一言。

「お構いなく」

……。

「「「「えっ」」」」

その場の女性四人が同時に言った。
それに対して、俺は後頭部を高級なソファーにでもくつろぐ様に、シルビアの胸にゆったり沈め。

「お構いなくと言ったんです。おいお前ら、特にダクネス。お前、最近俺に対して随分とおざなりな扱いじゃないか。ええ？　お前、アレだよ？　こちらのシルビアさんはな、俺の事を嫌いじゃないってよ。非道な所が見所あるとか言われちゃったよ。全く、最近の俺への扱いの酷さから、うっかり魔王軍へ寝返っちゃおっかなーとか思う所だよ？　謝って。そろそろ、いつも頑張っている俺に対して謝って！　めぐみんなんかはさっき、俺に対して日頃のお礼とか言ってくれたぞ。ほら、謝って！」

そんな事をダクネスに対して言ってやる。
一部をアクアに影響されたかの様なその言葉に、ダクネスはしばし呆然とし。

「お……、おいカズマ。悪い冗談はよせ。お前がそういう事を言うと、あまり冗談に聞こえないんだ。そ、その……、お、おざなりだったのは悪かった。スマン、謝る……。いやしかし、実はそれには訳が」
「誠意を見せて！　言い訳しないでちゃんと誠意を見せて！　お前、良く見ろよこの状態を。魔王さんとこのシルビア嬢は、俺にたわわな実りでアピールしてんだ。お前の取り柄はなんなんだ？　言ってみろ。ほら言ってみろ！」
ダクネスの言い訳を遮った俺は、ここぞとばかりに言ってやる。

アクアが、俺達を取り囲む紅魔族と共に興味津々に成り行きを見守り、めぐみんは先ほどのお礼の件を持ち出されて今更ながらに思

い出し、赤くなる中。

ダクネスが、怯みながらオズオズと、

「うう……。ぼ、防御力……？」

「違うでしょっ！　あなたの取り柄はその無駄に男を誘う、いやらしい体でしょっ！　何をすっとぼけた事言ってカマトトぶってるんですか！？」

そんな事を言ってきたダクネスに、俺はシルビアに縛り付けられたままキッパリと。

その俺の言葉に、ダクネスが恥ずかしそうに自分の体を何となく手で隠し、

「わ、私は……っ！　べ、別に、誘ってなんて……！」

泣き出しそうに顔をしかめ、そんな事を反論しようとするダクネスに、俺は更に追撃を。

「誘ってるでしょう！　あなた、温泉の街ドリスでナンパされたのを忘れたんですか！？　全く、無駄にけしからん体しやがって！　今夜はなあ！　恐らくは俺の幸運が最高潮に達している日なんだよ！　恐らくは人生で一番のモテ期到来って奴だ！　ほら謝って！　そんな、モテ期で絶好調な俺がホイホイシルビアさんに着いて行かない様に、ちゃんと謝って！」

調子に乗った俺がそんな事を言ってダクネスを困らせていると、ふと、頭に手を置かれた。

どうやらシルビアが手を置いたらしい。

「いいわぁ……。あなた、アタシの見込んだ通りのいい男だったわ！　ねえ、本当に魔王軍へと連れて帰って行きたい所よ！」

興奮した様なそんなシルビアに、俺は、彼女にしか聞こえない小声で囁く。
「い、いやあの……。先ほどからのめぐみんとのやり取りを知ってるでしょう？　本気で連れて行かれると困るので、勘弁してくださいね？」
そんな俺に、シルビアもまたコソコソと囁きかける。
「分かってるわ、分かってるわよ色々と。あなた、そんな所も素敵よ、本当に。でもね……？」
シルビアが、今度は皆にもハッキリと聞こえる声で。
「そこのクルセイダーのお嬢ちゃんも大事にしてあげなさいな？　あなた、女心に疎いわよ？　なんならアタシが色々と教えてあげたいぐらいだわ」
そのシルビアの言葉に、ダクネスが若干動揺した後、シルビアを睨みつける。
そんなダクネスが。
「魔族の者が、随分と人間の女心が分かるものだな。……魔族の年は分からないが、女としての長い経験か何かなのか？」
軽く挑発する様にシルビアへと告げると……。
「あら、そりゃあもちろん分かるわよ。女心も。男心も」
シルビアが、何を当たり前の事をとばかりに言ってくる。
なるほど、男心も女心も全て分かる、魔性の女って奴だな。
めぐみんにはこんな人にはなって欲しくはないものだ。
……だが、後頭部の感触は大変よろしい。
めぐみんには、胸の面ではこんな人になって欲しいものだ。

シルビアが、俺の頭を撫でながら。

「だってアタシ、半分は男ですもの」

そのハスキーな声で、そんな事を言ってきた。

「……なんて？」

俺は今聞いた事が理解出来ず、首を少しだけ前に出し、シルビアの方を振り向いた。

もう夜明けが近いのかほんのりと、そのシルビアの背後の空が明るくなって来ている。

そしてまだ薄暗いその明かりの中、俺はある事に気がついた。

それはシルビアの顎の下。

それ以外にも、頬の周りが、何だか青っぽい様な……。

「あら、聞こえなかった？」

シルビアが、俺の言葉に反応し。

その尖った右の耳に付いた青いピアスを煌めかせ……。

「アタシ、キメラだから。あなたの大好きなこの胸は、後から合成して付けたのよ？」

そんな事を何でも無い様に言ってくる。

俺の脳が、その言葉を聞かなかった事にしようと頑張っている。

理解しようとするのを拒否している。

いやだって、それって。

アレですか？

俺は、男性の胸で興奮して、その……？

えっ？　……あれっ？

「……カ、カズマ？　そ、その……。き、気を、気をしっかり持ってくださいね？　……ね？　しっかりしてくださいね？　だ、大丈夫です、落ち着いて……、落ち着いて……！」

そんなめぐみんのか細い声を聞きながら。

俺は、昔どこかで聞いたある話を思い出していた。

右の耳にだけピアスを開けている男は、確か……。

「でも、あなた本当にいい男ねえ……。こうして撫でているだけで、こう、胸も下半身もキュンキュンきちゃうわ」

そんな事を言いながら。
身長差があるせいか、俺の尻の部分に丁度シルビアの下腹部が当たるのだが。
そこが……。

「……シルビアさんシルビアさん。気のせいか、俺のケツになんかあたってるんですが」

シルビアが。
俺が是非一度、女の子に言われたいなと願っていた、俺の世界では有名なあのセリフを、恥ずかしそうにポツリと言った。

「あててんのよ」

「　」

脳が止まった。

23話

……。

ここは、どこだ……？

ふと我に返ると、俺は見知らぬ場所にいた。
そこは剥き出しの岩が転がる平野の真ん中。
その、剥き出しの岩を背にした状態で俺は地べたに座っていた。

……？

俺はなぜこんな所に。

ここは紅魔の里の近くだろうか。
遠くからは人々の罵声が聞こえる事から、俺はそんな推測をしてみた。
……？
思い出せない。
何か、人として、男として心にくる様な衝撃を受けたような。
その後、何か更にショックな出来事があった様な……？

なんだろう、凄く気になるが、自分の本能が思い出すなと強く叫んでいる気がする。

……と、何かが地面を這いずる様な音がし、岩陰からそれがヒョイと姿を現す。

……シルビアだった。

「あら、正気に戻ったみたいね。ちょっとお尻に押し付けただけでピクリとも動かなくなるから心配したわよ？　……気分はどう？　何か、したい事やして欲しい事はあるかしら？」

そんなシルビアに即答する。

「下着を変えたいです」

その言葉に、シルビアが笑いながら俺のリュックをポンと放ってきた。

ちょっとお尻に押し付ける？

動かなくなる？

何の話をしているんだろうか。

俺が投げつけたリュック、まだ持ってたのか。

俺はそれを受け取ると、どうしてだかちょっと大変な事になっている下着を……。

「……。すんません、恥ずかしいんでちょっと向こう向いてて貰えます？」

「あら失礼。ごめんなさいね、可愛らしいお尻してるから、つい」

シルビアが、そんなドキッとする様な事を……。

……？

なんだろう、こんな美女にそんな事言われてもちっとも嬉しくないのはなぜだろう？

まあいいか。

俺の本能が、思い出すなと警告している。

冒険者たるもの、自分の勘や本能は大事にした方がいい。

俺はモソモソと下着を着替え、岩から上半身だけを出して時折こちらをチラチラ見てくるシルビアを気にしながら。

「……ええっと。なんか、ふと我に返ったら状況が掴めないんですが。今、何がどうなっている状態なんでしょう？」

俺は、着替えを終えるとその場から立ち上げった。

……？

そういえば、俺はいつの間にシルビアの胸の前から開放されたんだろうか。

シルビアの胸を枕に心地良い状態で縛り付けられて……。

……？

なんだろう、その辺もなんだか思い出さない方が良い気がする。

シルビアは、見れば胸に布を巻きつけ、大きな岩から、その上半身だけをこちらに覗かせていた。

顔の顎の下や頬が軽く青くなっているのはなぜだろう。

まるで、ヒゲの……ッ？

なんだろう、思い出そうとしたら軽い頭痛が。

思い出そうとしない方がいい気がする。

やがて、そのシルビアが、

「あら？　記憶が飛んじゃったのかしら。アタシがアレを押し付けたら、あなたはそのまま固まっちゃって。ボウヤの仲間や紅魔族が、ボウヤを取り返そうと襲ってきたのよ。で、アタシはボウヤを人質にしながらなんとかここまで逃げてきたってわけよ」

別段大したことでも無い様に、そんな重大な事を言ってきた。

よくよく見れば、シルビアは体のあちこちに傷を負い、所々に火傷や凍傷を負っている。

紅魔族は本当に恐ろしいなぁ……。

しかし、どうやら俺は人質って事で里の外に拉致られたらしいな。

この魔王の幹部は、どうも紅魔の里の人達以外には友好的な感じだし、交渉次第ではここで見逃しては貰えないだろうか。
逃げ切ったら開放してあげるとか言っていたし。

「ええっと……。それじゃあ、ここまで来ればシルビアさんも逃げられるでしょう。では、紅魔の里とは無関係な、部外者な俺はこれで……」

そう言いながら、俺はリュックを手にそそくさと立ち去ろうと……。

「あら、ダメよぉ……。あなたにはここに居てもらわなくちゃいけなくなったの。ちょっと事情が変わっちゃってね？　お陰でアタシも覚悟が出来たわ」
して、シルビアにやんわりと止められる。

……里の方角は分かる。
なぜなら、未だ俺とシルビアを探す罵声が遠く響いているからだ。
恐らくは里から数キロとは離れていないのでは無いだろうか。

……ここから飛び出して、そちらの方へとダッシュを……。
……逃げきれるか？
無理だろうなあ、現在の、蘇生された後であまり動かない体では。
それに身体能力が違う。
逃げたとしても、すぐに追いつかれるのがオチだろう。

ここは会話で少しでも時間を稼ぎ、紅魔の人達に見つけてもらえる様にするのが一番だ。
俺は再び地面に座り込み、逃げませんよアピールをした。

幸いな事なのかどうかは分からないが、俺は都合の良い事に、相

手にも通じる共通の話題を持っている。
そう、変な人脈をここぞとばかりに使わせて貰おう。

「そう言えば、シルビアさんは魔王軍の幹部なんですよね」
「ええ、そうよ。さっきみたいにもっと砕けた感じで話して欲しいわね？　アタシ達は、さっきまでは、ずっと一緒だった仲じゃないの」
俺の言葉に、気さくにそんな事を言ってくれた。
……うん、これならいけそうだ。

「バニルとかウィズって知ってるよな？」

俺の言葉にシルビアがビクッとして表情を引きつらせた。
「し、知ってるわよもちろん。同僚だもの。……でも悪名高いバニルの奴はともかく、魔王軍の上層部でも殆ど知られていない、ウィズの名前なんてよく知ってたわねあなた。ひょっとして、彼女の居場所も知ってるの？」
「知ってると言うか、同じ街に住んでるしなあ。たまに世話になってるよ」

魔王の幹部とちょっとだけ親しいアピールだ。
これにより、少しでも見逃してもらえる確率や生存率を上げると言う姑息な作戦。

「へえ……。じゃあ、ウィズが魔王城の結界の維持に一役買ってる事も知ってるのね？」
「まあ一応は」
そんな俺の言葉に、シルビアが嬉しそうに目を細めた。
「そう……。それはますますあなたを逃してあげる訳にはいかなくなったわね」

あれっ。

「いやいや、違うから。別に俺は、魔王とやりあう気も無いし、ウィズの秘密は墓まで持って行こうと思ってるから。そ、それに！ウィズが魔王の幹部だって知っているのは俺だけじゃないから、口止めしたって無駄だから！」

慌てて弁解する俺の言葉に、

「あら、そうなの？　でもまあ、ウィズが元気ならそれでいいわ。あまり仲が良い間柄でも無かったけれど。それでも、彼女が存命な限りは城の結界も破られないでしょうから」

自分の顎を指でさすりながら、シルビアが呟いた。

ジョリジョリという音が聞こえる度に、何だか胸が苦しくなり、何かを拒絶するかの様に頭痛がする。

なぜだろう？

まあ、今はそんな事を気にしている場合じゃない。

幹部二、三人ぐらいが維持している結界なら、アクアが破れるという話らしいが、そんな余計な情報は与えなくてもいい。

「それにしてもウィズと知り合いって事は、あなたはアクセルの街に住んでいるのね。となると……。ベルディアやバニルを討ち取った人間も知っていたりする？」

主に俺の仲間達です。

もちろんそんな事は言えないが。

ここはバニルの情報を売って誤魔化そう。

「ベルディアはともかく、バニルはピンピンしてるぞ。あいつ、魔

王の幹部は晴れてお役御免だとか言って、ウィズの店で店員やってるよ」
「へっ！？」

シルビアが絶句し、やがて、深くため息をつく。
「ま、まあ……。バニルが何を考えているのかはアタシにもさっぱり分からなかったし。そもそも、城に居ても、
『鬼族の悪感情などちっとも美味くないが、しょうがないから貴様らで我慢しよう！』
とか言って。アタシの部下達にロクでもない事してたからねえ……。しょうがないわね、あいつはもうそっとしておいてあげましょう。アタシもあまり関わりたくは無いし、そもそも魔王様も、たまには魔王軍の仕事をして欲しいな、ぐらいの気持ちで送り出しただけだしねえ……」

そんな適当な理由であんなの送って来られても、こちらも凄い迷惑なんだが……。

「それよりも。悪いけれど、あなたのそんな時間稼ぎに付き合っていられる状況じゃないのよ」
シルビアが、口元をペロッと舐めて言ってきた。
あれっ。
思い切り時間稼ぎってバレてる。

「ねえ。さっきアタシは、事情が変わった、覚悟が出来た、って言ったわよねえ……？」

言ったっけ。
言ってたな、そう言えば。
「……そ、それは、どんな事情でしょうか……」

何だか嫌な予感しかしないが、俺は恐る恐るシルビアに尋ねる。

するとシルビアが、岩場の影から下半身をあらわにし。

「こういった事情なのよねぇ……」

言いながら、その黒々とした下半身……。

……その、グロテスクなムカデの胴体と融合した下半身を見せつけてきた。

そして、シルビアが困り顔で言ってくる。

「紅魔の連中に、この子の頭を飛ばされちゃって。アタシの足だとまず逃げきれなかったからやむなく一つになったんだけれども。……ねえ、男性の目から見てどう思う？」

「……それだけ生足を見せびらかすだなんて、随分自信家ですねと思います。でも下半身はちゃんと隠した方が、男受けは良いですよ」

「素敵な助言をありがとう。でも大丈夫よ。アタシ、いい男は力ずくでモノにするタイプだから。嫌がる可愛い子を力ずくで組み伏せるのが大好きなの。……所で、ボウヤ。一つお願いがあるのよね」

シルビアは、言いながら妖艶な笑みを浮かべた。

今や朝日が昇り、その青い顎が目立つ顔で。

嫌な予感しかしない。

嫌な予感しかしない嫌な予感しかしない嫌な予感しかしない！

「……な、何でしょう……？」

恐る恐る尋ねる俺に。

「紅魔の連中に部下を軒並みやられちゃってねえ……。何とか一泡吹かせてやりたいの。そこで考えたのよ。あなたも取り込んじゃえば、紅魔の連中は手が出せないんじゃないか、って」

俺は傍にあったリュックに手を伸ばし、ジリジリと後ずさる。

こんな物置いて手ぶらで逃げてもいいのだが、完全に丸腰の今、何か手元に無いと不安過ぎる。

「俺はアクセルの街でも、強烈な毒を吐くカズマさんとか言われ、有名でして。あまりオススメ出来ないと思います」

マジ勘弁。

本当に勘弁してくれ。

いやこれはシャレにならない。

「ツレナイ事言わないでよボウヤ。さっきまでずっと一つになっていた仲じゃないの。これからはずっと一緒になれるわよ？　……大丈夫よ、安心して。こんな姿になっちゃったからには吹っ切れたわ。いっそ、行く所まで行きましょう。あなたの大好きなあのお嬢ちゃんも取り込んであげる。そうすれば、ずっと一緒にいられるわ。悪い話じゃないでしょう？」

シルビアは、言ってクスクスと笑い出す。

……今なんつったこの野郎。

この野郎。

……あれっ？

……この野郎？

「あらあら随分と怖い顔……、ど、どうしたの？　き、急に青い顔

でガクガク震えだして……？」

……………………俺は全てを思い出した。

自然と自分の記憶に蓋をしていたのが、それをうっかり開けてしまった。

俺はこいつの胸に顔を埋め、その感触で……！

「ぐあああああああああああああああーっ！」

俺は何の脈絡もなく、突然シルビアに襲いかかった！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

首の後ろが痛い。

凄く痛い。

「はあ……はあ……！　ま、待ちなさいよ……！　ねえあなた、ほら、こっちへ戻って来なさいな……！　出ないと、アタシが捕まえた時酷い場所に取り込むわよ……！　今なら、素直に戻ってきたなら、サービスで、アタシの右隣にあなたの上半身を丸々生やしてあげるわ。でも、このままアタシが……グフッ……！　……捕まえたなら、あんたはアタシの腰の辺りにでも……っ、顔だけを生やしたまま一生を過ごすハメになるわよ……！」

俺の後ろからは、そんなおぞましい事を言ってくるシルビアが迫って来ている。

ハッキリ言って、絶対に捕まる訳にはいかない。

……と言うか、こいつに捕まるぐらいなら死んだ方がマシだろう、本当に。

「はあ……、はあ……っ！　ぐっ……！　ガハッ！　待ちなさい、待ちなさいなボウヤ……！　はあ……！　はあ……っ！　ま、待てって言ってるだろうが……！　お前を取り込んだ後は、絶対にあの娘も取り込んで……！　そして、二人共悲惨な場所に生やしてやる……！」

シルビアが、そんな事を荒い息で叫んでいる。

怖い。

本気で怖い。

と言うか、シルビアからは既に、最初に会った頃の雰囲気や余裕も感じられず、強烈な悪意と憎しみだけが感じられた。

こいつは魔王の幹部だって事を甘く見ていた。

他の連中が変なのばかりだったから、どうせこいつもそんなんだろうと……！

俺は首後ろに走る激痛に耐えながら、昨日蘇生されたばかりの痛む体を、引きずる様にして必死に逃げた。

その後ろからは、時折、苦しそうに体をビクビクと痙攣させて、シルビアが顔を歪めながらズリズリと追って来ていた。

先ほどシルビアに突然不意打ちを仕掛けた俺は、シルビアがまた受け止めてくれるかなとリュックを投げつけ、そのリュック越しに拳で一撃を食らわせた。

そのリュック越しの攻撃でも、ちゃんと不死王の手のスキルが発動してくれた。

不死王の手の効果は、毒、麻痺、昏睡。魔法封じにレベルドレイン。

今回は毒の状態異常が効果を及ぼしてくれた様だ。

本当に使えるスキルだ、これのお陰で今まで何度助けられた事か。

これを教えてくれたウィズの爪の垢を、俺に宴会芸を教えようとしたヤツに飲ませてやりたい。

毒に侵されたシルビアは、俺に攻撃された後、そのまましばらくうずくまり、ビクビクと痙攣しだした。

その間に俺は再びリュックを拾い、今は紅魔の里へと逃げている。

シルビアは、その後苦しそうに顔を歪め、俺を必死で追っていた。

ムカデの足が幾本か痙攣を起こし、しばらく這いずる様に進んだ後、また再び痙攣する。

戻って、麻痺か昏睡に陥るまで殴り続けてやろうかとも思ったが、それでアッサリ取り込まれでもしたら意味が無い。

後ろが気になり、どうしても肩越しに振り返ってしまう。

シルビアは苦しそうに顔を歪めながらも、ジリジリと距離を詰めて来ていた。

あかん、里まではまだ距離がある、これはいずれ追いつかれる…！

首後ろに走る激痛で意識がぼうっとなりそうになりながらも、そ

れでも走りながら考える。
……あかん、何も思い付かん！
魔法を使う魔力も無く、武器も無い。
さっきみたいにリュック越しに戦おうにも、今度は不意打ちではない、きっとアッサリかわされるかして捕まる。

くそ、全力で窓を凍らせたりだとかアホな事しなきゃ良かった！
ちくしょう、マジで誰か助けてくれ、こいつ本当に怖い！

「ウフフフッ、さあ……！　いよいよ追いつき……、グブッ……！
始めた……わよ……！　そろそろコレの射程距離ね……！　覚悟はいい？」
すぐ後ろから聞こえるシルビアの声。

あ、あかん……！

いっそこのまま反転して、一か八か殴りかかるか？
毒に侵されている今なら、何とか一発くれてやる事が出来るかもしれない。
でも、うまく不死王の手が効かなかったら？
発動しても、今の状況でレベルドレインや魔法封じでは意味が無い……！

そんな事を考えている内に、シルビアが大きな叫びを上げた。

「『バインド』ッ！」

後ろで聞こえたその声に、凄く嫌な予感がし、咄嗟に振り向きリュックを投げた。

それは例の拘束スキル。
リュックがシルビアの放ったロープに巻かれ、地に落ちた。

あかん、スキルを一回防いだだけだ……！

里まではまだ距離がある、そして、この世界には都合よく助けてくれるヒーローなんてどこにも居ない。
覚悟を決めて殴りかかるか……。
俺は拳を握り、シルビアを睨みつけると……！

そのシルビアは動きを止めて地面を見ていた。

いや、正確には、地面に転がり落ちた俺のリュック。
そのリュックからこぼれたある物を凝視している。

「……あなた、随分と……、随分と良い物を持っているじゃないの……！　あなた、随分と運が……、ぐう……っ……、い、良いわねえ……！　これがあれば、紅魔の連中にも一泡吹かせてやれそうだわ……！　これはもらっておくわよ、ボ、ボウヤ……ッ。その代わりに見逃してあげる！　あのお嬢ちゃんも見逃すかは気分次第だけどねえ……っ！」

シルビアは、苦しそうに喘ぎながらその物体を拾い上げた。
それは小さな黒いキューブ。
俺が旅に出る前に、ウィズの店で買ったガラクタだ。
ガラクタ。
……そう。

それは、モンスターに食わせると魔法抵抗力が劇的に下がり、副作用として防御力が劇的に上昇するという罠餌の一種。

……結果、こちらの魔法を無効化したり弾いたりする事は無くなるが、代わりに大概の攻撃魔法が効果自体を成さなくなるほどの防御力を誇る……。

「人間の街でしか手に……、でに……っ、入らず……！　そして、その人間達も誰も取り扱わない様な、こ、ごんな……！　め、珍しい物を持ち歩いているなんて……！　それよりも、こ、この毒を……っ！　確か里に、あんたの仲間のプリーストが、い、居たわね……っ！」

苦しそうに喘ぎながら、シルビアは、一時的に強力な防御を得られるその黒いキューブを、そのままゴクリと飲み込んだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ああ、クソッ！

なんで立場が逆転してんだ、ああっ、首が痛い、脇腹痛い……！

俺は先ほどとは違った意味で泣きそうになりながら、必死で目の前のシルビアの背中を追っていた。

キューブを飲んだシルビアは、その肌の色を黒く照からせていた。その黒い肌は、硬質の昆虫か何かの皮を連想させる。

俺は今、シルビアを追うというか、正確には紅魔の里へと向かっている。

こいつより早く里の人達に会い、今はシルビアが、一時的に殆ど

の魔法に耐える事や、現在毒の状態異常にかかり、逃げ回っていればドンドン弱っていく事を伝えないと……！

ああクソッ、あのキューブのおかげで見逃してもらえて、運が良いのか悪いのか……！

こいつは里で、アクアを取り込んで毒の治療でも行う気なのだろうか。

そんなに何でもかんでもホイホイと取り込めるとも思えない。

幾らでも取り込んで強くなれるなら、もっと色んな奴をガンガン取り込んでいてもいい筈だ。

単に見栄えが悪いからやらなかっただけかも知れんが、何か制限ぐらいはあるだろう。

色々と都合の良い方に考えたくなるが、今はもう走る以外に何も出来ない。

と言うか、ようやく里に近づいて来た。

里の連中も、里へと向かって来るシルビアの姿に気付き出す。

二人の紅魔族の男性が、こちらに向かって駆けて来た。

一人で魔王の幹部を追いかけていた俺は、その姿に少しだけ安心感を覚えながらも、

「おーい！　今のシルビアには、魔法が効かない！　そいつは今、毒に侵された状態だ、ひたすら逃げろ！」

俺は遠くから、その紅魔の人達に大声で警告する。

聞こえたか？

クソ、まだ遠いか……？

だが、俺は少しだけ期待もしていた。

確かあの時バニルは、こう言った筈だ。

副作用で、殆どの魔法が効かなくなる防御力を得る、と。

だが紅魔族の連中は魔法のエキスパート達しかいない。

彼らの魔法なら、今のシルビアにもダメージを与える事が可能なのでは……！

そんな俺の淡い期待の中、駆け寄って来た紅魔族の二人が……！

「シルビア……。お前との決着を付ける時が来たようだ……！　安らかに眠るがいい。そのあまりの威力に、俺がずっと封印してきたこの魔法でな……！」

「この俺に付けられた別名、蒼き閃光の赤蜥蜴の意味を教えてやろう……。行くぞっ、シルビアーっ！」

そんな事を叫びながら、シルビアへと魔法を放った。

「「『ライト・オブ・セイバー』ッッ！」」

……。

前置きの割にそれかよとか、お前らどれだけその魔法が好きなんだとか色々とツッコミたかったが、今はそんな時と場合ではない。

紅魔族の連中が好んで使う、大変物騒なその魔法。

彼らが放った光の刃は、シルビアの体の表面をシュッと撫で……。

そのまま何事も無く、シルビアは二人を気にするでもなく真っ直ぐに里へと向かう。

シルビアの体表に光の筋が走ったが、その体は切断されず、体表に仄かな白い筋だけを付けただけに留まった。

それを見た紅魔族の二人は、驚くでもなく冷静に言い放つ。

「……なるほど。シルビアめ……あの力に目覚めたらしいな……」

「……ああ。とうとうあの力を覚醒させた様だ。……なら、俺達も少々本気を出しても許されるだろう……」

なんだろう、あの力って。

俺の持ってきたキューブではなく、あの力の所為だったのか。

良かった、俺の所為じゃなくて。

しかし、まだまだ紅魔族の二人は余裕の様だ……！

流石は魔法のエキスパート、紅魔族。

里に向かって迫るシルビアに、その紅魔族は余裕の表情を見せながら……！

「『テレポート』」

唱えると同時に足元へと魔法陣を輝かせ。

その上に居たその二人は、光に包まれ掻き消えた。

おい。

……おい。

……おい。

シルビアが、どす黒く染まった体色のまま目をギラつかせ、紅魔の里へと攻め込んだ……！

24話

紅魔族の里に、甲高い音が鳴り響く。
それは、俺とめぐみんが布団の中でイチャついてた時には聞こえなかった音。
シルビアが部下を率いた状態で夜中攻めて来た時でも、こんな音は鳴らなかった。

それはカンカンと鳴り響く鐘の音。
つまりそれは、里中へと緊急事態を知らせる音なのだろう。

魔法が効かないシルビアに、魔法しか使えない紅魔族では歯が立たない。
最悪の場合、紅魔族の者が蹂躙されるのでは無いだろうか。
なんてこった、最悪だ。

あのキュービのお陰で俺は見逃して貰えた訳だが、あんな物、とっとと捨てておけば良かった。
これが原因で何かあったなら、俺はとても皆に顔向け出来ない。

俺が息も絶え絶えに、痛む首と脇腹を押さえながら里の入り口へと立つ。

……そこから見た光景は、毒に侵されながらも這いずるシルビアと、それを遠巻きにしながら様々な攻撃魔法を撃ち込む紅魔の人々の姿。
里の人達はシルビアに近づかれると距離を置き、そしてまた魔法を放つスタイルを取っている。
だがどの魔法も効果は薄く、シルビアにロクなダメージを与えら

れないでいた。

だがシルビアも、距離を置く里の人々には攻撃を加える事が出来ずに焦れている様だ。

毒にでも侵されていなければ、もう少し早く動けもしたのだろうが。

と、焦れたシルビアが、数人の紅魔族に向けて深く息を吹い。

激しい殺意と敵意を持った目で、その数名の集団に向け灼熱の炎を吹き出した。

キメラってからには何か特技の一つでもあるかとは思っていたが、オーソドックスながらも炎のブレスってのは地味にキツい攻撃だ。

燃え盛る業火が紅魔族を包み込もうとする寸前、その中の一人の紅魔族がすかさず唱える。

「『テレポート』！」

瞬間、その数名の足元に魔法陣が浮き上がり、炎にのまれる寸前でその紅魔族達は掻き消えた。

……炎のブレスを吐いたシルビアは、流石は魔王の幹部だとちょっとビビッたが、咄嗟にテレポートで回避していく紅魔族も大概だと思う。

テレポート係と攻撃係を混ぜ合わせ、詠唱を終えて待機しているテレポート係が、緊急時にはいつでも脱出可能な様にしているのだろう。

そんな中、攻撃を加えようとした瞬間に獲物に逃げられ、イライラしたシルビアが、紅魔族の一人の女性に目を付けたようだ。

他の者に魔法を叩き込まれながらも目もくれず、一番近くに居たその女性のみを真っ直ぐに追いかける。

どうやらシルビアは、一人一人仕留めていく戦法に切り替えたようだ。

それを遠巻きに見る一人の紅魔族の青年が悲痛に叫んだ。

「やっ、止めろシルビアーっ！　頼む！　その人には手を出すなっ！」

その青年は、その女性の恋人なのだろうか。

悲痛にシルビアに向けて叫びを上げ、懇願する様に地に膝を付き、シルビアと対峙する女性の動向を見守っていた。

その声を聞きながら、シルビアが愉悦そうに口を歪め、

「はあ……はあ……、ご、ごめんなさいね……！　あんた達も、アタシの部下達を皆殺しにしてくれたじゃないの……！　そ、そのお返しよ……！　安心なさいな、その娘とあんたを取り込んで、アタシの中でずっと一緒にいさせてあげる！　さあ、覚悟なさいなっ！」

ようやく煮え湯を飲まされ続けてきた紅魔族に、一矢報いる事が出来ると、嬉々としてその女性に迫る。

その紅魔の女性はニコッと笑い、悲痛な表情を浮かべる青年へと呼び掛けた。

「あなただけでも逃げ延びて……。あなたが逃げ切れる様に、せめて私の最後の力でシルビアへと仕掛けてみる……！」

おい止めろ！

俺の持ってきたキューブの所為で、ついに犠牲者が……！

嬉々として飛び掛かろうとするシルビアを、女性はキッと強い決意を秘めた表情で睨み返す。

「シルビア、これが私の最後の切り札よ……！　その目で良く見ておきなさい……！　そして……」

言いながら、女性は青年の方をチラリと見て、儚く笑った。
「お願い。……私の事は忘れて、あなただけでも幸せになってくださ い」

おい、止めろ。
ちくしょう、止め……！
こんな距離では何も出来ない、せめて弓でもあれば狙撃が……っ！

「良い覚悟だわ！　アタシは魔王軍幹部が一人、シルビアよ！　あなたの最後の切り札を見せてご覧なさい！　さあ、どんな魔法でも受け止めてあげ……！」
「『テレポート』」

シルビアが何かを叫ぶ中。
女性の足元に魔法陣が浮き上がり、その姿が掻き消えた。

……。

消えた女性はそのテレポート先にこの里の入り口を登録していたらしい。
里の入り口、つまりは呆然と言葉も無く立ち尽くす俺の隣に、その女性は忽然と現れた。

それを見て、今まで悲痛な表情を浮かべていた青年は、何事も無かったかの様に真顔に戻り、膝を払いながら立ち上がり。
俺の隣に現れた女性も、何事も無かったかの様に平然とシルビアを眺めている。

盛り上がっていた所を突然標的に逃げられて、シルビアが少し寂しそうに、困った様にこちらを見た。
正確には、俺の隣のその女性。

「……あの、恋人の所に行かなくてもいいんですか？」
俺が思わずその女性に尋ねると、キョトンとした表情を浮かべながら。
「……恋人？　……ああ、彼は唯のご近所さんよ」
そんな事を言いながら、女性は、先ほどの青年に会釈した。
それを見て、青年が愛想笑いを浮かべながら会釈を返す。

ただ単に、その場の雰囲気とノリに合わせただけらしい。

……もう、ここの連中はシルビアに滅ぼされたらいいのに。

「カ、カズマさん、こんな所に……！　シルビアに攫われたって聞いて、慌てて探しに来たんですよ！　無事で良かった……！　ダクネスさんやアクアさんも、里の外へカズマさんを探しに行きましたから……。里で鳴らされている緊急警報を聞いて、その内帰って来ると思いますよ！」

里を進むシルビアの後を、付かず離れず追いかける俺に突然声を掛けて来たのは、戦闘態勢を終えたゆんゆん。
荒い息を吐いている所から、よほど必死に探してくれていたらしい。
感謝を述べるとゆんゆんが照れたような笑顔を見せる。
ダクネスとアクアにも、後で礼を……。

「あれっ、そういやめぐみんはどこだ？」
俺は肝心のめぐみんの姿を探す。
その俺の言葉に、ゆんゆんがその表情に影を落とした。
更には段々泣きそうな顔に……。
「お、おいどうした。めぐみんに何かあったのかよ」
それを見て慌てた俺は、ゆんゆんの肩を掴んで問い正す。

「……わ、私……。めぐみんに、酷い事を……」
ゆんゆんがそんな事を言って、ほろりと涙をこぼした。

ちょっ、泣かれると困ります！
俺は慌てて、ゆんゆんを人目の付かない建物の影に連れて行く。

何処かへと進撃するシルビアは、里の連中に色々とちょっかいを掛けられてかなりイライラした様子ながらも、ジワリジワリと里の中を進んでいた。
シルビアが向かう先はアクアの所だろうか。
解毒が出来るアクアを取り込む魂胆なのだろうが、肝心のアクアは里の外に俺を探しに出ていると聞く。
シルビアが俺の毒で弱っていくのを遠巻きに見守りながら、後は時間を稼いでいれば勝てるだろう。

紅魔の人達は、既に魔法が効かない事を念頭に置いて戦っている。

俺がまだ誰にも告げていないにも関わらず、シルビアが毒を食らって弱っている事すら見抜いている様子だった。
そう言えば、この連中を見ているとあまりそうは思えないのだが、紅魔族は魔力の他にも、知力が高いんだったか。
シルビアは、ある紅魔族の名乗りを受けたり、または、別の紅魔族の、我が切り札を食らえ宣言を受けて身構えたりと、様々な嫌がらせを受けていた。

俺は建物の影に引っ張りこんだゆんゆんから、めぐみんと何があったのか事情を聞く。

「……私……。カズマさんが攫われた時の状況を聞いて、めぐみんに言っちゃったんです……。めぐみんが上級魔法を使えていたなら、シルビアがめぐみんの家に襲撃してきた時、カズマさんと一緒に撃退出来たかも知れないのに、って……。めぐみんが、爆裂魔法なんかに拘らず、空間転移魔法とか、ちゃんとしたスキルを取っていればカズマさんを攫われたりもしなかったのに……って……！　どうしよう、私、めぐみんに酷い事言っちゃった……」

言って、ゆんゆんがポロポロと涙をこぼして泣き出した。
あれだ。
上辺だけじゃないちゃんとした友人だからこそ、そんな事が言えるのだろう。
ゆんゆんとしては、めぐみんに一端のアークウィザードになって欲しいというのも、あるのかも知れない。

何にせよ、俺が死んだ時にもめぐみんはゆんゆんに、上級魔法をちゃんと使えていたならと随分と叱られたみたいだし。
それで今もそんな事を言われたなら、きっとヘコんでいる事だろう。

ゆんゆんが、メソメソしながらも。

「……で、でも……。私、めぐみんには上級魔法を覚えて欲しいんです。カズマさん、知ってますか？　上級属性魔法は、普通の魔法使いには習得自体が難しいスキル。でも、紅魔族の魔法使いなら、スキルポイントがあれば誰でも取れる。……めぐみんは今、ここ最近の急成長で、上級魔法を習得できるポイントが貯まっているんです。……それを使えば爆裂魔法のスキルレベルも上げれるのに、それを使っていないんです。……きっと、本人も悩んでいるんです」

泣き顔のまま、そんな事を言いながら顔を上げた。

「……だ、だから……。めぐみんは、私のただ一人の友達だけど……。き、嫌われても、仕方ないけど……！」

言いたい事がうまく出てこないのか、ゆんゆんが言葉に詰まる。

だが、もうそれ以上は言わせる必要は無い。

「一緒に行こうか。めぐみんの所に」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

一人の紅魔族の男がシルビアの前に立ち塞がる。

その男は、悲しげに、寂しげに、ただシルビアを見つめていた。

「……なあに？　グ、グブッ……。掛かって来ないのなら、向こうに行って欲しいのだけど」

苦しそうに喘ぐシルビアに、男が言った。

「……俺さ……。あんたの事、嫌いじゃなかったよ。何度も何度も紅魔の里に攻めてきて。……そして、何度撃退されても挫けず、諦めず。……俺、最初はあんたの事を、笑ってたんだ。なんて諦めの悪い奴だろう、って。でも、その内に諦めないあんたの姿を見る度に、段々興味が湧いてきてさ」

男のその独白に、シルビアが足を止め。

他の紅魔族が固唾を飲んで見守る中、シルビアは荒い息で耳を傾けた。

そんな中、その男の独白は続く。

「俺さ……。やがて、いつしかあんたが来るのを楽しみに待ってる自分に気が付いたんだ。何度襲撃に来ても、あっさり撃退され、毎度半泣きで帰って行くあんたをさ。……思えば、俺はあんたの事が好きだったのかもなあ……」

男に、シルビアは俯きながら、そう……。とだけ呟いた。

「……でも、アタシとあなたは魔王の幹部と紅魔族。本来、決して結ばれてはいけない敵同士よ。……良かったわ、あなたみたいな男が居て。こんな事になっていなかったなら、あなたと付き合うのも悪くなかったわねえ……」

言いながら、シルビアがその男に向けて顔を上げた。

それに、男が儚く笑いかけ。

「随分と変わり果てた姿になったなあ。……せめて俺の手で……。今、楽にしてやるさ」

言ってシルビアに対して不敵に笑い、身構えた。

それにシルビアが、男を抱きしめるかの様に手を広げ、そのまま男に叫びながら飛びかかった！

「さあいらっしゃいな！　見せてちょうだい、このアタシにあなたの想いを！　その力を！　せめて、最後にあなたの名前」

「『テレポート』」

シルビアが、抱きしめる体勢で飛び掛かるも、男はアッサリと姿を消した。

いきなり標的に消えられて、両手を広げて飛び掛かったシルビアが顔面から地に落ちる。

そのまましばらく地面に顔を付けた体勢のまま、何かに耐える様にしばらくジッと動かない。

やがてムクリと起き上がると、小さな声で呟いた。

「……アタシ、あんた達紅魔族って大っ嫌いよ」

……気持ちは分かる。

そんなシルビアは、毒に侵された重い体を引きずりながら、もはやちまちまと挑発的に魔法を放つ紅魔族には見向きもせず。

里の外れ、ロクに家も建っていない場所。

そこには小屋の屋根ぐらいの高さの岩が突っ立っており、それ以外には一つを除き、特に目立つものは見られない。

そんな場所に、その背の高い岩以外にもう一つ、そこにぽつんと佇むのは、一件のこじんまりとしたボロ家だった。

……そう、シルビアはめぐみんの実家へと向かっていた。

あれか、瀕死の体を何とかしようと、プリーストのアクアが居そうなめぐみんの実家へと向かっていたのか。

そんなシルビアの前に、再び一人の紅魔族の男が立ち塞がった。

そして、物憂げな表情で……。

「……俺、あんたの事、嫌いじゃなかっ……おわあっ！？　あ、熱いじゃないか、人の決めセリフを聞かないのはマナー違反だぞシルビア！」

シルビアに何かを言い掛けた男は、炎のブレスを吹きかけられて慌ててその場から飛び退いた。

「もうあんた達と付き合ってはいられないわ！　……はあ……はあ……！　フ、ウフフフッ！　ここね、あの娘の家は……！」

……俺はその言葉にドキッとする。

こいつは、毒の治療を行わないと時期に死ぬ。

麻痺や昏睡ほどには即効性は無いが、それでも治療手段が無ければ致命傷となり得る危険な状態異常。

なので、こいつの最優先の目的はアクアを探して治療する事。

ずっと、勝手にそう思い込んでいたのだが。

確かにシルビアは、めぐみんを取り込んでやるだのと言っていたが、強靭な防御力を手にした今となってはそんな事にはあまり意味は無い。

ただの私怨や嫌がらせ……？

そんな俺の考えを見透かしたかの様に。

シルビアは、自分を追っていた俺の姿は、先ほどからずっと視界の隅には映っていたのだろう。

家の前に這いずると、シルビアは俺の方をチラリと一瞥し。

「……あのアークプリーストは只者じゃあないみたいね。先に、お仲間のお嬢ちゃんを取り込ませて貰うわ。そうすれば、あのプリーストに攻撃を受けるどころか、場合によっては取り込んだお嬢ちゃんを助ける為に、毒の治療をしてくれるかも知れないでしょう？毒を治療しないと、あなたのお仲間も一緒に死ぬとか言っちゃって」

その言葉にブワッと体に鳥肌が立つ。

そして、隣に居るゆんゆんに。

「めぐみんは!?　おい、めぐみんは今何処に居る!?」

何となくは分かってはいるものの、否定してくれという思いで尋ねるが、

「い、家の中……。ままま、まだ家の中で、こめっこちゃんを守ってると思います……！　ゆいゆいさんとひょいざぶろーさんはアクアさんやダクネスさん達と里の外に……！　どどど、どうしたら……っ！」

そんな予想通りの事を、ゆんゆんは激しく動揺しながら言ってきた。

今のシルビアは、動き自体はあまり速くはないものの、それでも万が一捕まったならそこで終わりな存在だ。

狭い家の中に侵入されてはそこにはもう逃げ場は無い。

「ゆんゆん頼む！　お願いだ、なんとかシルビアの注意を引けないか！」

俺はすがる思いでゆんゆんへ頼み込む。
そんないきなりの言葉に、ゆんゆんが慌てて首を振り。
「そそそ、そんなっ！　む、無理です無理です！　この里の他の人達でも、もうシルビアの注意を逸らせない状態なのに、里でも特に目立たない私なんて……っ！」
そんな、自信の無さそうな表情で、それでもめぐみんは心配なのか辛そうに言ってくる。

日頃人に注目もされないゆんゆんには、それは酷な頼みなのかも知れない。

しかし……。
もう他に頼れる奴は居ない状況。
これを言うのはとても卑怯で、あまり言いたくは無かったが。
ゆんゆんにとって、今、一番力になりそうなセリフを言った。

「……頼むよゆんゆん。……俺達、もう友達だろ？　頼みを聞いてくれないか。……ゆんゆんの親友を助けてくれよ」

友達の居ないゆんゆんに、卑怯なセリフだとは分かっている。
それでも……。

ゆんゆんは、しばらく俯いたままブルッと身を震わせた。
そして……。

「……やります。と、友達の頼みなら仕方ないし……。……それに、親友を助けるためだから……！」
目に強い決意を秘めて、ゆんゆんがバッと立ち上がった。
「頼むゆんゆん、俺は裏から、壊れた壁から中に入ってめぐみん達を連れ出して来る！」

俺は叫ぶと同時、シルビアが侵入しようとしている玄関とは逆方向、家の裏側へと駈け出した。

チラリと見るとシルビアが、律儀に玄関から、その閉じたドアに手を掛けて、それをベキベキと引き裂いている。

それを遠巻きに見ながら、紅魔族の人々がシルビアに魔法を放つのを躊躇していた。

あのボロ家を壊してしまうのをためらっているのだろう。

ああ……。家を直す金なんて無さそうだし、ひょいざぶろーさんとか、みんな路頭に迷うんじゃあないだろうか……。

俺が裏口へと回りこもうとしていると。

突然、背後から声が聞こえる。

「『ストーンバインド』！」

ゆんゆんの声と同時に、シルビアがそのムカデ状の足元を土に取られた。

そのままメキメキと鈍い音を立てながら、シルビアが下半身を、そしてそのまま上半身をも土に拘束されていく。

シルビアを固めていく土は、すぐに固まり石化していく。

それをシルビアは気にもしないで、フンと力を込めただけでその拘束を解き放つ。

それを横目にしながら、俺は家の裏へと回り込んだ。

「めぐみん！　おい、どこに……っ！」

めぐみんは、すぐに見つかった。
きっとシルビアが玄関を破壊しているのだろう、バキバキという不快な音が狭い家に響く中。
めぐみんは、俺と一緒に居た部屋の真ん中に膝を抱え、膝の部分にその顔を埋めていた。
その隣にはこめっこがぺたんと座り、突然現れた俺をマジマジと見ながら、そんなめぐみんに寄り添っている。

俺の言葉と玄関の破壊音にハッと顔を上げためぐみんと、俺はそのまま目が合った。
目元が赤いのは、ひょっとしてゆんゆんに言われた事で泣いていたからだろうか。
「おい、シルビアがお前を狙ってる！　外に出るぞ、着いて来い！」

俺はシルビアに攫われた時からずっと裸足のままでいたわけだが。
泥で汚れた足のままでも、もう構わずに部屋に上がる。
俺が、侵入してきたシルビアが恐らく現れるであろう、この部屋のドア側を警戒する中。

めぐみんは戸惑った表情ながらも、片手でこめっこの手を握り、もう片方の手で自分の杖を握り締めた。

……と、家の破壊音が止んでいるのに気付く。

シルビアが、もう家の中に侵入したのだろうか？
敵感知スキルで辺りを警戒するも、家の中には居ない感じだが……。
…………と、めぐみんとこめっこを連れて外に出て、俺はシルビアがなぜ家に入って来ないのかを理解した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「族長の娘のゆんゆんが……っ！」
「ゆんゆんが……！」
「ゆんゆん……」
紅魔族の人々がざわめき、遠巻きに見守る中。
険しい表情のシルビアと、そしてゆんゆんが対峙していた。
それも、ゆんゆんは家から少し離れた、切り立った高い岩の上に、マントを風にたなびかせて立っている。
そんなゆんゆんを、紅魔族の人々が固唾を飲んで見守っていた。
それは、常日頃の彼女へ向けていた、異端な者を見る目ではなく。
そう、それはまるで、憧れのヒーローでも見るかの様な目で紅魔族の人々はゆんゆんを……。
「自分の立派な名前の、名乗りすらも恥ずかしがる変わり者のゆん

ゆんが、一体どういう風の吹き回しだ……？」

一体どういう事だと、めぐみん達を引き連れながらコソコソと見ていると。

シルビアが、ゆんゆんを前にして嘲笑うかの様にジリジリと距離を詰めていた。

もう紅魔族には目もくれないと思っていたのに、どういう事だろう。

そんな疑問は、次のシルビアの言葉と、ゆんゆんがシルビアの前に突き出した物を見て解消された。

「……確かにあなたの冒険者カードのスキル欄には、空間転移魔法は記されてはいないわね。……いいの？　あなた、自分がテレポートで逃げられない事を教えちゃって」

俺が居なかった間の二人の会話の流れは分からないが、予想はつく。

ゆんゆんは、シルビアの注意を惹くために、自分がテレポートで逃げられない事を明かしたのだろう。

今まで散々紅魔族の連中にからかわれたシルビアは、寸前でテレポートで逃げられる事に、よほどウンザリしていたのだろう。

それが今、目の前にはテレポートが使えないと自ら教えるゆんゆんを見付けたのだ。

しかもゆんゆんは高い岩の上に登り、すぐさま逃げられるとも思えない場所に居る。

飛び降りる事は出来ても、そのまますぐ駈け出したとしても、遠巻きに見ている仲間の元へ行く頃には、シルビアには追い付かれる

だろう。

いくら注意を逸らしてくれとは言っても、命がけでやれなんて言ってない。

無事、家からめぐみんを連れ出した俺は、ゆんゆんに呼びかけようと……。

して、めぐみんに袖を引っ張られた。

……？

「ゆんゆんが……。ゆんゆんが何かしそうです！　ここで邪魔しちゃいけませんよ！　大丈夫、岩の周りの踏まれた草を見るに、既に助けは入っています。ここはジッと見ていましょう！」

めぐみんが、ワクワクと何かを期待した様な表情で言ってくる。

助けが入っている？

いや、見た感じ誰もゆんゆんに近付こうとすらしていないんだが。

そんな、里の多くの紅魔族の注目を浴びるゆんゆんは、そびえ立つ高い岩の上が狭いからか、そのまま片足を鶴の様に上げてピタリとバランスを取り。

「我が名はゆんゆん！　アークウィザードにして、上級属性魔法を操る者！　そして……」

そこで遠目から、一瞬だけチラリと、俺の隣に立つめぐみんを見ると。

「私は、紅魔族随一の魔法の使い手！　やがては紅魔族の長となる者！」

「ああっ！？」

そんなゆんゆんの堂々とした宣言に、めぐみんが愕然とした声を

上げた。
紅魔族随一って所に引っかかったらしい。

ゆんゆんは、紅魔族の人々の注目を集めたまま。
そのまま、いつもの様にか細い声で恥ずかしがる事など一切なく、
バサッとマントを翻し。

「魔王軍幹部、シルビア！　紅魔族族長の娘として……！　あなたには、紅魔族の族長となる者にしか伝えられていない、封じられた禁呪をお見せしましょう！」

片手のワンドを高らかに上げて、空に向かって軽く何かを呟いた。
それは、きっと詠唱を終えていた雷系の魔法だったのだろう。
朝の明るい空にも関わらず、ハッキリと分かるほどの蒼い稲妻が、
ゆんゆんを中心にして空に轟音と共に迸しる。
その様は、まるで、ヒーローが現れる時のエフェクトの様。

雷鳴轟き、背後に稲妻が迸る中。

そんな、決めポーズを取るゆんゆんを見ていた紅魔族の面々が、
ハラハラと涙をこぼした。

えっ。

「……うっ……うう……っ……！」

その泣き声に隣を見ると、めぐみんまでもが泣いている。

えっ。

何事かと俺が止まる中、突然紅魔族の人達が湧き上がった。

「ゆんゆん！　ゆんゆんが！　ゆんゆんが覚醒したぞ！」

「族長の娘ゆんゆんが、とうとう殻を破って目覚めたんだ！」

「カッコイイ！　ゆんゆん、カッコイイ！」

「ゆんゆんが秘めたる力に目覚めたんだ！」

紅魔族の人達には、今のは飛び切りカッコイイ演出に映ったらしい。

今の一連の過程で、ぼっちだったゆんゆんは、どうやら里の住人達に本当の仲間だと認められたようだった。

そう、一人のマトモな少女がとうとう堕ちた瞬間である。

今はめぐみんを助けたい一心で、恥ずかしげもなくやっているのだろう。

だが後日、ふと我に返ってこれを思い出した時、あまりの黒歴史ぶりに彼女がうっかり死のうとしないか、目を光らせておく必要がある。

何かに吹っ切れた様なゆんゆんは、シルビアと対峙したまま動かない。

ゆんゆんは、一瞬だけ自分の傍の何もない空間をチラと見た。

「どうしたの？　テレポートが使えないお嬢ちゃん。奥義だの隠し持った必殺技だの、口だけの紅魔族。その紅魔族の代表って事かしら？　そんなあなたはその禁呪とやらを見せてくれるんでしょうねえ？」

焦れたシルビアが挑発するも、ゆんゆんは一歩も動かない。
それを見て、シルビアがズゾゾッとゆんゆんに向かって這いずり出した。
それを見ても、なおゆんゆんは動かない。
やがてシルビアが、溜める様に体を沈めると、そのムカデ姿の下半身で岩の上のゆんゆんに向けて飛び掛かった。
それよりも一瞬速くゆんゆんが岩から飛び降り、そのまま駆ける！
そんなゆんゆんを見て、今まで散々からかわれ、逃げられた為に怒りに目を血走らせたシルビアが。
「逃さないわよ、逃さないわよ、逃さな……！？」
狂喜しながらゆんゆんを追い掛けようと、飛び乗った岩の上からゆんゆんを見て、シルビアがピタリと動きを止めた。
ゆんゆんが向かう先に、見えない何かを見付けた様に。
どうしたのかと見ていると、ゆんゆんが駆けた先、その何もない空間に、突如として二人の男が現れた。
その二人は見た事がある。
確か、自称魔王軍襲撃……。
つまりは、ニートの二人だ。
光の屈折魔法で姿を消してここまで近づき、その術を解除したのだ。
片方の男についてはその名前も知っている。

靴屋のせがれのぶっころりー。
テレポート魔法の使い手だ。

ゆんゆんが注意を惹いている間、光の屈折魔法で、ゆんゆんにだけ姿が見える位置まで近づき、待機していたのだろう。
ゆんゆんがその二人の男の傍に駆け寄ると、それを見たシルビアが、慌てた様に片手を伸ばし……！

「ちょ……！　待……！」
「『テレポート』！」

……これは酷い。

シルビアが呆然と佇む中、ゆんゆんを含めた三人が、めぐみんの実家から遠く離れた店の前に姿を現す。
なるほど、あそこが靴屋か。

紅魔族が固唾を飲んでシルビアを見守る中。
シルビアが、岩の上に飛び乗った体勢でカタカタと震えだした。
怒ってるんだろうか。

「……ウフフッ、アーッハッハッ！　どいつもこいつも、何が最強の魔法使い集団紅魔族よ！　唯の口だけの根性無し集団じゃないの！　そんなあんた達紅魔族と関わる者も、みんな根性無しのヘタレだわ！」

シルビアが、怒りの為か、おかしさの為か。
ともかくも、その体を震わせながら岩の上で笑いを上げた。

それを聞いても、紅魔族の面々は特に気にする事もなく、誰一人として挑発には乗ろうとしない。
……先ほどの光の屈折魔法での救助と連携といい、こいつらは実は相当に頭が良いのだろう。
それをもっとマトモな方に使って欲しいが。

いや。

挑発に乗る奴が一人居た。

「おい。私もその紅魔族の一人な訳だが。その論調で行くと、私の仲間もヘタレとなる。訂正してもらおうか」

その、いつもどこに沸点があるのか分からない、意外に短気な魔法使いは、俺の隣からズイと出て、シルビアに対して握り締めた杖を向けた。

それを見て、シルビアが舌なめずりをして笑みを浮かべる。

「あらあら……。あなたを探していたのに、挑発に乗って肝心のあなたがノコノコ出るなんて。……そう言えば。ウヤムヤになっちゃったけれど、お嬢ちゃんとは決闘の約束をしていたかしら？　そこ

のボウヤには逃げられちゃったから、決闘のご褒美は無しだけれど」

挑発的なシルビアの言葉に、めぐみんがポツリと言った。

「あなたには、まだ名前を名乗っていませんでしたね。めぐみんです。私が本当の、紅魔族随一の魔法使いです」

さっきのゆんゆんのセリフを気にしていたらしい。

いつもの派手な名乗りではなく、めぐみんは唯淡々と、静かに告げた。

それを聞いて、シルビアが不思議そうな顔をする。

「あなた、珍しい紅魔族ねえ……。あの変な名乗りをしないなんて。紅魔族なら、変なハッタリが大事でしょう？　どうしちゃったのかしらお嬢ちゃん？　あなたも口だけなんでしょう？」

からかう様なシルビアに、めぐみんは一切動じる事も無く、眉一つ動かさない。

そんな中。

「お姉ちゃんは凄いんだよ！」

それは、ジッと俺とめぐみんの傍に居たこめっこの声。

めぐみんは、そんなこめっこをチラリと見る。

そしてこめっこの手をそっと離し、俺を見た。

「すいません、ちょっと私の必殺魔法であいつ消し飛ばして来ますから、その間こめっこをお願いします」

「お、おい……」

めぐみんはそんな事を言い残し、シルビアの方へと向き直る。

そんなめぐみんの言葉を聞いて、シルビアが。

「あらあら、出たわね必殺魔法！　もう何度聞いた事やら！　ええ、一体、何ポートなのかしらねえ！　期待しているわよお嬢ちゃん？」

そんなからかう様な事を言って来た。

そんな中、紅魔族の面々からはボソボソと声が聞こえる。

「どうしたんだ、ひょいざぶろーの所の娘さんは。以前はもっとキレがあったろう」

「必殺魔法を使うなら、もっとタメないとな！」

「前振りが弱いよ、前振りが」

……あれっ。

そう言えば、紅魔族の人達は、めぐみんが本当に必殺魔法を使える事は知らなかったんだっけ。

そんなシルビアの挑発や紅魔族の声を聞き。

「お、お姉ちゃんは、凄いんだよっ！」

こめっこが、ちょっと半泣きになりながら叫ぶ。

その声を聞きながら、めぐみんが一歩出る。

……アカン。

俺は今の配置に気が付いた。

シルビアを中心にすれば、この距離ならめぐみんが全力で放っても多分いける。

つまり、多分いけるという状態なら、こいつならやる距離だ。

長い付き合いだ、俺には分かる。

こんな状況でめぐみんが我慢なんてする訳がない。

こんな里の中にクレーターを作ってもいいものだろうか。

どうせシルビアは、もう逃げ回っていれば何とかなるのだ。

俺はめぐみんを止め……、

ようとして。

そっと、その考えを諦めた。

めぐみんの目が爛々と赤く輝いている。

シルビアが、そんなめぐみんを面白そうに。

「お嬢ちゃん、もう時間稼ぎに付き合う気はないの。どうせあなたも、自分からは来ないんでしょう？　アタシがそっちに向かえば逃げて、テレポートでも使うんでしょう？」

そんな事を挑発的に言って来た。

それを聞き、めぐみんは静かに告げる。

「……おい。私の仲間を馬鹿にした事、取り消してもらおうか。後、この男に新しいトラウマを植え付けたり、攫って行った事を謝ってもらおうか。……と言っても、今の私は謝ってもらっても気が済まないので、別にいい。……では参ります。私が全てを捧げてきた我が必殺魔法。その身に叩き込んでやりましょう」

めぐみんが、宣言して杖を振り上げた。

……アカン。

俺はめぐみんの爆裂魔法の威力を知っている。

この位置は、本当にギリギリだ。

紅魔族の人達は面白そうに眺めているが、俺の見立てでは、彼らはギリギリで被害が出そうな距離にいる。

「おいお前ら、逃げろ！　シルビアから早く離れろ！　出来るだけここから逃げるんだ！」

俺の叫びを聞き、紅魔族がおおっ、と声を上げ。

「流石はめぐみんのお連れさんだ！　外の人なのに盛り上げ方が分かっている！」

「やるなあ……。あの必死な顔、とても演技には見えないよ」

次々と、そんな呑気な事を……！

「馬鹿っ！　本当に今から必殺魔法が飛ぶんだよ！　逃げろ！　早く逃げろ！」

俺の言葉に、紅魔族とシルビアが笑い出した。

こいつら……！

揃いも揃って冗談だと……！

俺は、もう知ったことかと諦めて、こめっこを片手でしっかりと抱き、めぐみんの隣に並んだ。

何だかんだで術者の近くが一番の安全地帯だ。

めぐみんが、そんな俺とこめっこの姿を見て、少しだけ口元を緩めた。

「太古の真名の名において、原初の力を解き放て……」

その一言を聞き、紅魔族の連中が一瞬で静まり返る。

それは俺が聞き慣れた、めぐみんの大好きな魔法。

流石に魔法のエキスパート、紅魔族の連中には分かった様だ。

めぐみんが冗談を言っている訳ではない事を。

紅魔族の面々が、引きつった顔でこぞってその場から逃げ出す中、シルビアは何が起きたのかが分からずに、辺りをキョロキョロと見回した。

何度も何度も聞いたためぐみんのその魔法の詠唱。

長い付き合いだ、それが終わる時間も俺には大体分かっている。

どうやら、めぐみんから湧き上がる魔力の流れ、そして紅魔族の反応により、流石にシルビアも冗談ではないと気が付いた様だ。

今までの肩透かしで気が抜けていた為か、本気のめぐみんに若干引き気味になりながら。

「必殺魔法ですって？　……さっ……！　炸裂魔法でも、爆発魔法

でも、どんな上位魔法でも撃ち込めるもんなら撃ってみなさい……っ！」

そんな虚勢の声を張り上げた。

残念。もうワンランク、上の魔法だ。

めぐみんが、紅い瞳をカッと見開き。

渾身の魔力を込めて、魔法を唱えた！

「『エクスプロージョン』ッッッ！」

25話

耳をつんざく轟音と共に凄まじい爆風が吹き荒れる。
向かい来る突風にとても目を開けていられない。
片手にしっかり抱いたこめっこが飛ばされない様俺自身も身を屈め、もう片手で突風や小石からこめっこの顔を守りながら、隣に目をやる。

そこには、向かい来る風にマントをなびかせて、杖を突き出し魔法を放った姿勢のまま。

「……カズマ、今のは何点ですか？」

何か、色々と悩んでいた事を吹っ切った様な、スッキリした表情で笑みを浮かべ。
めぐみんがそんな事を聞いてきた。

今日の爆裂魔法の破壊力は、多分過去に見てきた中でも最大級だ。
長い付き合いで爆裂魔法を見る目が養われてきた、俺の鑑定眼からすると……。
「九十八点」
「くっ……！　二点足りませんでしたか……！　しかし、確かに今のはそんな物です。かなりの会心の出来でしたが、史上最高の出来とは言えませんでした」
俺の評価に、どことなく嬉しそうな表情でめぐみんが言って来る。

吹き荒れる突風が収まり、俺は片手で抱いていたこめっこを放してやる。
すると、こめっこは目を丸くして爆裂魔法が放たれた後の光景を

眺めていた。
「やっぱり……！　やっぱり、お姉ちゃんは凄いねっ！」
拳を握って嬉々としてはしゃぐこめっこの頭に、めぐみんが優しく微笑み、ぽんと手を置いた。
未だ凄まじい爆煙が立ち込める中、めぐみんの爆裂魔法による惨状を見て思った。
これは酷い。
まず、シルビアが居た場所を中心に、巨大なクレーターが出来上がっていた。
俺と最初に出会った頃の爆裂魔法の威力とは、既に比較にならない程だ。
毎日コツコツと爆裂魔法のみを唱え続けてスキルを鍛え、得られるポイントも全て注ぎ込んできた努力の結晶。
天才と呼ばれた魔法使いが全てを捧げた爆裂魔法は、シルビアを爆心地として辺りの物を全て薙ぎ払っていた。
例えば、逃げ遅れた紅魔族の数名の者が目を回して地面に転がり。
そして何より……。
「……お家、無くなっちゃったね」
こめっこがポツリと呟く。
そう、シルビアが飛び乗った大岩の傍に、ポツンと佇んでいたためぐみんの実家。
それが、物の見事に吹っ飛んでいた。

ひょいざぶろーさんとか、帰って来たら腰抜かすんじゃないか。
どうすんだコレ。
……と、そんな中。
遠巻きに見ていた紅魔族の人達が、爆心地を覆う爆発後の粉塵を見ながら口々に言う。

「……やったか！？」
「……ハッ、何だ、口ほどにもない……」
「さーて、帰って一杯やるかぁ！」

おい止めろ。
お前ら、本当に止めろそういうフラグになりそうな事言うのは。
しかも、なんでちょっとワクワクした顔でそんな事言うんだよ。
紅魔族の面々が、何かを期待する目で見守る中、徐々に爆発後の煙が晴れてくる。

そして……。

「……今日のはかなりの出来の爆裂魔法だったのですが」

めぐみんが、爆心地の中心部を見ながら呟いた。

そこには変わり果てた姿のシルビア。

シルビアは腰から下のムカデだった部分は欠片も残さず消し飛ばされ、全身をボロボロにして、今は何も纏わない状態で地面に転がり、かろうじて息をしていた。
綺麗な女性だったその顔は、もはや殆ど原型も無い。
……いや。
「……流石キメラ……なのか？　なんか、メキメキ再生していって

るな」

シルビアが、徐々にその体を修復させ、ボロボロだったその顔も、元通りの美しい女の顔に……。

……元通り……？

めぐみんが、再生したシルビアの顔を見て呟いた。

「……元は男だった者が体型も顔もほぼ完全な美女へと変えるのに、一体どれだけの美女を取り込んだのでしょうね」

そこに再生されたのは美女の顔。

いや、確かに美女なのだが。

それは、明らかに先ほどまでのシルビアとは違った印象の美女だった。

消し飛ばされたムカデ状だった下半身からは、人の足が生えてくる。

その体は再生はされたものの、流石に爆裂魔法の強烈な衝撃の後には、すぐに体を動かす事は出来ない様だ。

先ほどの俺の持ってきたキューブの効果がまだ残っているのだろう。

体が再生する傍から、その肌が黒く染まっていく。

そして……。

「……な、なあめぐみん。……そ、その。あいつの目……」

俺は恐る恐る、めぐみんへと問い掛けた。

再生したシルビアの顔。

そこにあるはずの、先ほどまでの黄色い猛獣の様な瞳ではなく。

その、シルビアの紅く輝く両目を見ながら。

「……その顔は、紅魔の里でも随一の美しさを誇った……。先週、何の意味も無いけれど、暇だから山に篭って修行っぽい事して来ると言って、里を出てったそけっとか……。シルビア……。お前、何人の女を取り込んだ？」

そんな事を尋ねながら、一人の紅魔族の男が、瀕死のシルビアへと静かに歩いて行く。

ビクビクと、毒と爆裂魔法のダメージでその身を震わせているシルビアが。

……既にもう、そのままロクに指も動かせず、視線だけをそちらに向け、

「……さあ？　忘れ……ちゃった……。散々おちょくられたあんた達に、最後に報いる事が出来たわね……。一度取り込んだ相手は……もう、この私にはどうする事も出来ないわ……。悔しい？　このままアタシは死んでいくでしょうね。……あんた達は、慣れ親しんだ仲間の顔になったアタシが死んでいくのを、何も出来ないまま看取って頂戴……。フフッ、最後の最後に、少しだけスッキリしたわ……」

掠れた声でそう呟いて、満足そうに目を閉じた。

「あのお嬢ちゃんが吹き飛ばした……。最初の顔と身体……。あれは、アタシが最後に取り込んでこの身体を完成させた、とあるヴァンパイアの顔と身体。ウフフフッ……。キメラって、便利でしょう……。日の下に出れないヴァンパイアも、アタシと一つになれば外に出れる。この身体に、どれだけの美女の命が詰まっているか分かる？　あんた達はそれらがまとめて失われる様を、そのまま大人しく見てるがいいわ……」

後は、弱々しい呼吸音が聞こえる中、辺りはシンと静まり返って

いる。

そんなシルビアの周りには、一人、また一人と紅魔族の連中が無言で集まっていく。

皆、一様に怒るでも無く悲しむでも無く。

ただ、じっとシルビアを見守っていた。

きっと、泣いたり叫んだりして悲しめば、シルビアが喜ぶ事を理解しているからだろう。

そんな中、めぐみんも、瀕死のシルビアへと歩いて行く。

と、突然背後で絶叫が上がった。

「……なっ……！　なななな、なんじゃこりゃあああああああー！？」

それは、アクア達と共に俺を探してくれていたのだろう。

ダクネスやアクアと共に、奥さんとひょいざぶろーが現れた。

驚愕の声を上げるひょいざぶろーの視線は、会心の爆裂魔法により消し飛ばされた、自分の家の跡地へと向けられている。

そのまま地にペタンと膝を付き、誰にともなく呟いた。

「お……おのれ魔王軍……！　こんな……。こんな血も涙も無い事を……」

お宅の娘さんがやったんですよ。

俺に抱かれていたこめっこが、その姿を見て奥さんの元へと駆けて行く。

「お母さん！　お姉ちゃんが格好良かったんだよ！」

自慢気にそんな報告をするこめっこの横を通り過ぎ、アクアとダ

クネスがこちらへとやって来る。
「カズマ、大丈夫だった!?　新しい心の傷は受けてない？　気が紛れるように、楽しい芸でも見せてあげようか？」
アクアがこちらに来ながらそんな気遣いをしてくれるが、むしろ余計な事を思い出させないで欲しい。
と言うか、相変わらずの空気が読めないヤツめ。
この重々しい雰囲気が分からないのか。

そんな中、ダクネスも俺を見てホッとした顔を受かべた。
二人の足元を見れば、アクアはちゃっかり靴を履きに戻った様だが、ダクネスは裸足のまま俺を追い掛け、今まで探してくれていたらしい。
素足を泥だらけにしてあちこち擦りむいている様だ。
「無事で良かったな……。……しかし、また随分と派手にやったな……」

ダクネスが、瀕死のシルビアとその周囲の惨状を眺め言ってくる。
既にそこは、シルビアを看取る会みたいになっていた。

俺も二人と共にシルビアに近付き、既にその最期を見守っているめぐみんの傍へ。

めぐみんが、虫の息のシルビアへ静かに告げた。
「流石は魔王の幹部です。何の支援魔法も無い状態で私の必殺魔法に耐えるとは、流石に予想外でした」
めぐみんが、そんな事を言いながらシルビアをジッと見る。

そういえば、言っておかないといけない事がある。
紅魔族の人々が沢山いる中で言うのは正直キツイが、自分の招い

た事だ、仕方が無い。
仕方が無い……。
ううん、ちょっと怖い……。

「めぐみん、済まない！　そいつがそれだけ硬いのは、俺が持っていたキューブの所為だ」

俺はめぐみんに、今までの経緯を説明した。
一時的には魔法抵抗力とやらは劇的に下がるが、その代わりに殆どの魔法に耐えてしまう硬さを得られるキューブ。
俺がそれを盗られた為に、こんなに紅魔族の人達が手こずるハメになった事。
その結果、俺は見逃して貰えたが、代わりに里が危険に晒されてしまった。
それらを説明し、俺は頭を下げながら謝る。

「言ってみれば、こんな騒ぎになったのも……」

俺の所為だ。

俺が頭を下げながらそう告げようとすると、めぐみんが、
「何か問題を起こす私達の後始末をしてくれる、保護者みたいな立場だったカズマ。そんなカズマの立場が、今日だけ逆転しましたね。……これで、私達は保護者と問題児な間柄ではなく、少しは対等な間柄になれましたか？」
そんな事を言いながらクスクス笑った。
……何だろう、このちょっと胸が甘酸っぱくなる感覚は。

そしてそんな俺に、紅魔族の人々が口々に言ってくる。
「外から来た兄さん、悪気は無かったんだろうし気にしなさんな。

被害らしい被害は無いんだから良かったじゃないか、こうしてシルビアも仕留められたんだし。ひょいざぶろーさんの家が吹っ飛んだ事がちょっとアレだが……」

「そうね。それに、何だかんだで盛り上がったのは事実だわ。……これだけの派手な展開での劇的な最後なら、取り込まれていたそけっとも浮かばれるでしょう……」

「……そうだな。そけっとも、こんな悲劇のヒロインみたいな感じで散るなら満足だろう……」

皆がそう言いながら、再び全員が、瀕死のシルビアに目をやった。

と、そんな時。

「……アレっ。なあ、外から来た兄さん。あんた、さっきこう言ったよな。一時的に、魔法抵抗力自体は下がっている、って」

それは何かを思いついた様な表情の紅魔族の青年の一言。

それを聞き、他の紅魔族の人達が次々に、ハッとした様な表情を浮かべた。

「……？

「ええ、まあ……。元々それが目的のアイテムですから。代わりに、凄まじい防御が得られる様になるから、殆どの攻撃魔法自体が意味を成さなくなる欠陥品で……」

そんな俺の言葉に紅魔族の人達が静まり返った。

「……？

俺が訳が分からずに戸惑っていると、めぐみんが俺の肩をポンポンと労うかの様に叩き。

「カズマ。……グッジョブ！」

言って、俺に親指を立てて……？

めぐみんにはピンと来たらしい。

俺は訳が分からないままでいると、紅魔の人達が円陣を組んで相談を始める。

「いやしかし、喜ぶのはまだ早い。このままではシルビアが毒で死ぬ。例え毒がなんとかなっても、ここまでの重傷だと……」

一人の男が言った一言で、その人達が一瞬明るくなっていた表情を沈ませた。

……？

ますます意味が分からない。彼らはどうやら、シルビアの毒を治す算段をしている様だ。

だが、とりあえず……。

「おいアクア、出番だぞ。……分かるな？」

こんな時には、腕だけは確かなウチの女神の出番だ。

俺がアクアに促すと、アクアが真顔でコクリと頷く。

「任せておいて。暗くなったあそこの雰囲気を、私の必殺芸で明るくしてくればいいのね」

「ちがわい！　お前の力で解毒と回復をしてこいって言ってんだ！」

そんな俺達のやり取りに、紅魔の人達が一斉に視線をこちらに向けた。

正確には、俺の隣のアクアへと。

急な視線を受けてビクッとしながらも、アクアが素直にそちらへと歩いて行く。

俺はアクアを促してはみたものの、未だ事態が飲み込めず、隣に立っているめぐみんへと聞いてみた。
「……しかしどういう事だ？　あいつを回復させてどうするんだ？　危なくないのか？」
そんな俺の疑問にめぐみんが、まあ見ていてくださいとだけ言ってくる。
……？

紅魔族の人達に頼まれるがままに、アクアがシルビアから距離を置きながら、離れた所から魔法を掛けた。
もはや殆ど意識を失いかけていたシルビアは、毒の治療と体の治療を施され、やがてゆっくりとその目を開ける。
そのままユラリと立ち上がると、自分を取り囲む紅魔族の面々を不審な顔で見回した。

「どう言うつもり？　このアタシを治療したとしても、この体に取り込んだ生物は自分の意志で取り出すなんて出来ないわよ。……残念ねえ……？　毒を治療された以上、あの状態異常を与えてくる厄介なボウヤ以外は、警戒する事もないわ。爆裂魔法のお嬢ちゃんも二発目は撃てないんじゃないのかしら？　……今のアタシの顔が、仲間の顔だったから情けを掛けちゃったのね？　……アタシは魔王軍幹部、シルビアよ！　いつもみたいに舐めて、バカにしていると後悔するわ……っ！」

そう宣言すると、アクアの治療はそれほどに効果があったのか、先ほどまでの瀕死の状態などどこへやら、シルビアが、今、最も警戒するのはアクアだとばかりに、紅魔族の人達に守られる様に囲まれるアクアへと。
その紅い瞳をギラつかせて襲い掛かって来た……！

「ゴボッ……！　や、やめっ……！　やべでえ……っ！　あっ……、足が……！　お、溺れ……っ！」

里に出来たクレーター。
その中心に大きな泥沼が出来上がり、その沼のど真ん中ではシルビアが必死にもがいていた。

……あれっ。

「ねえ、あのシルビアが本当に魔法抵抗力が無くなっているわ。見て、私の石化魔法で下半身が完全に石に……！　泥沼を作成する魔法陣を足元に出されても抵抗も出来なかったし！　いけるわ、今ならいける！」

……あれえ？

先ほどまでの苦戦は何だったのか、アッサリとシルビアを無力化してしまった紅魔族。
その中の一人の男が、実に嬉しそうな表情で周囲に宣言した。
「よし。これで普段とは違い、シルビアの魔法抵抗力が大きく下が

っている事が実証された。ではこれより、シルビアが今までに取り込んできた生物の、分離実験を行います！」
「わあーっ！」
「いいぞいいぞ！」
「ヒューヒュー！」

何だろう。
どうしたんだろうこの人達は。
何なんだろうこのテンションは。

盛り上がる紅魔族の人達に、俺が若干引き気味になっていると。
「カズマは知らないと思います」
めぐみんが突然言った。
「カズマは知らないと思います。……私達紅魔族が、肉体改造などの魔法の実験に、異様に興味を示すのを。どうしてだか、肉体改造だとかの言葉に非常に惹かれるのですよ私達は。本当に、なぜだかは分からないのですが」

俺はエリス様から真実を教えてもらっている。
紅魔族の生まれた経緯やその歴史を。

確かこいつらのご先祖様は、皆、自ら志願して肉体改造をされたんだったな。
その変わり者達の血脈が、ちゃんと受け継がれているのだろう。

めぐみんが、盛り上がる紅魔族を遠巻きに見詰めながら。
「魔法が効くという状態ならば、きっと彼らならば何とでもするでしょう。何故だか、肉体改造だとか、キメラだとか……。私達は不思議と、こういった事に対して相性が良いのですよ。温泉の街ドリスの転送所で、テレポートの魔法を使うと極希に、他の生物と混ざ

り合ってしまうという話をした事があるでしょう？」

シルビアが一人の紅魔族の女性に、パラライズとか叫ばれ動けなくされている中、めぐみんが言ってくる。

「テレポートで合成が出来るなら。きっと使い様によっては分離も出来るんじゃないかとか、既に彼らの頭の中では色々な研究がシミュレートされている筈。散々いじくり回されて、取り込んだ生物は、全て摘出される事かと……」

そ、それって取り出された人とかは大丈夫なのか？

心のケアだとか色々、何だか手遅れ感も否めないんだが……。

と言うか、紅魔の人達の目がマッドサイエンティストの目だ。

既に、取り込まれた人を救出するという事よりも、早くシルビアの体を弄りたいとの気持ちの方が勝っている気がする。

俺達の目の前では、痺れて動けなくなったシルビアが泥沼の中から引きずり出されていた。

体は痺れてもかろうじて声だけは出せるのか……。

「ひゃめ……、ひゃめてえ……。こ、このわたひの美を、崩さらいれえ……」

舌が麻痺している為か、舌っ足らずな言葉で半泣きで懇願していた。

そんなシルビアを、紅魔族の面々が、にこやかに笑いながら。

「心配するなシルビア！　俺達は、何だかんだ言って、笑えるお前の事が嫌いじゃない。殺すなんてしないさ、ちょっとお前の体を弄らせて貰うだけだ」

これから何をされるのかと、怯えた表情のシルビアに一人の男が

爽やかに答えた。
殺される事は無いと知ったシルビアが、少しだけホッとした顔をする。

俺は、知る事になる。

「ところでシルビア。お前さん、取り込んだ生物を全て摘出されたらどうなるんだ。どんな手段で他の生物を取り込んできたのかは知らないが、一番最初の、元となった生き物はなんだったんだ？」

シルビアなんかより、今こうしてにこやかに笑い掛ける、この紅魔族と言う連中がどれほど恐ろしい存在なのかを。

「ア……アタヒは……、アタヒは元は、下級悪魔にもなれなひ鬼族の男らったのよ……。い、今からすへてをうひなっても……。アタヒはまた、うつくひい存らいを取り込んれ……。そ、そしてきっと、あんら達に……！」

シルビアがキッとその紅魔族の男を睨む中。
その男は言った。

「うん、待ってるよシルビア。……俺、あんたの事、本当に満更で

もなかったんだ。何時までもずっと、待ってるからな」

それは、先ほどシルビアに対して、あんたの事が好きだったのかもなとか言いながら、おちょくってテレポートでトンズラこいた男だった。

痺れて動けないシルビアは、両手両足を紅魔族の人達にしっかりと持たれ、荷物の様にぶら下げられながら。

「……あ、あんた……。こ、紅魔ろくとアタヒ達は敵ろうし。べ、別に、そんな事言われたぐらいれ、ろうにかなると思わないれよね……っ！？」

シルビアは、その男を少しだけ眩しそうに、そして悔しそうに睨みつけた。

「おう、また来いよ魔王軍幹部シルビア。……ああ、そうだ。取り込んだ生物を全て摘出されて男に戻った後は、俺のテレポートで里から飛ばすからな」

それはその男なりの優しさなのか。

「……あ、あんた……」

シルビアは、その言葉にグッと押し黙った。

そして……。

「礼は言わないわよ……」

その男が見守る中。

シルビアはポツリと言い残した後、紅魔の人達に何処かへと運ばれていった。

シルビアを見守りながら、その男はハッとした様に独り言を呟いた。
「……いっけね。俺のテレポート先って、紅魔の里とドリスの街。後は……」
……？
「男殺しと呼ばれた、対男性用の必殺の転送先。紅魔の里近くの、オークの集落ど真ん中じゃないか……。人間の街のドリスに送る訳にも行かないし……。まあいいか、モンスター同士仲良くやるだろ」

ちょっ……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

シルビアの襲撃の日から、俺達が里に滞在して3日が経つ。
あれから、泣き叫ぶシルビアを散々おもちゃにした紅魔族は、シルビアの体から無事に紅魔族の女性を分離させた。
それだけではなく、複数名の色んな種族の女性達も。
最後にシルビアが取り込んだと言うヴァンパイアの女性は助からなかった訳だが、もうコレばっかりは仕方が無い。

主にエルフが多かったが、攫われてきた人間の女性も居た。
長い事モンスターと一体となっていた事で、精神に異常をきたしていないかと心配したが、皆、シルビアに取り込まれた瞬間からの記憶が無いらしい。
その為、モンスターの中に居たと言う事には不快感を覚えていたものの、精神がぶっ壊れた様な人は居なかった。
……良かった……。
シルビアは、魔王の手先の鬼達と変わらない姿に戻され、そしてある男のテレポートによって転送された。
どこに送られてどうなったのかなんて想像したくもない。

ひょいざぶろー宅が消し飛んだので、俺達は今ゆんゆんの実家で寝泊まりしていた。
アクアとダクネスは、こめっこが気に入ったのか、ゆんゆんの実家の庭で色々と遊んでやっている筈だ。

そんな中。
俺は今、めぐみんとゆんゆんと共に、入荷しためぐみんの予備のローブを受け取りに、服屋へと向かっていた。

あの騒動の後。この紅魔の里では、１つだけ変わった事がある。

「あっ！　蒼き稲妻を背負う者ゆんゆん！　これから皆で飯食いに行くんだけれど、どう？　皆で一緒に？」

俺達と共に歩くゆんゆんに、多分めぐみんやゆんゆんと同じ位の年の娘から、そんな声が掛けられた。
それを聞き、ゆんゆんが顔を真赤にして小刻みに首を振った。
そんなゆんゆんの様子に、特に気分を害する事もなく、ゆんゆん

に声を掛けてきたその娘は、そう、残念。とだけ言って笑って手を振り去って行った。

「……モテモテですね、蒼き稲妻を背負う者。食事ぐらい一緒に行ってあげれば良いではないですか」

「止めて！　その名前で呼ばないで！　ああっ……！　私、私どうしてあんなバカな事を……！」

めぐみんの言葉に、ゆんゆんが半泣きになりながら、両手で真っ赤になった顔を覆う。

あれから、ゆんゆんへの扱いが一変した。

里一番の変わり者で、変なセンスの娘という扱いから一転して、里では、一躍カリスマ的な存在として扱われていた。

通りすがりの兄ちゃんが、ゆんゆんを見掛けて声を掛ける。

「おっ、雷鳴轟く者ゆんゆん！　今から飯食いに行くんだが……」

「行きません！　行きません！！」

泣き出しそうな表情で即座に拒否するゆんゆんに、特に気にした様子もなく、おっと残念とか言いながら、若い兄ちゃんが手を振り、立ち去っていった。

一応これは、新しいいじめではないらしい。

「……モテモテですね、雷鳴轟く者。付いてって奢って貰えばいいじゃないですか」

「止めて！　お願い止めて！　私に変な通り名を付けないで！」

顔を覆ってブンブンと大きく首を振るゆんゆん。

めぐみんは、突然自分の持つ杖の先をゆんゆんのほっぺたにグリ

グリと押し付けながら。

「何を言うのですか、紅魔族随一の魔法の使い手！　この私を差し置いて勝手に名乗っておいて、そのくせ通り名は嫌だとかワガママですよ！　ほら、もう一度あのカッコイイポーズを取ってみるが良いです！」

「や、止めてえ！　めぐみん、もう3日も経つのにまだ気にしてたの!?　ちょっとぐらいいいじゃない！」

杖でグリグリするめぐみんに、ゆんゆんが激しい抵抗を見せる中。

俺は何となく呟いた。

「仲良いなあお前ら」

俺のその呟きを耳にして、めぐみんがこちらをチラッとだけ見る。

そのまま、めぐみんは怒った様に杖をブンブンと振りながら。

「ほら、とっとと行きますよ！　ローブ受け取って、テレポートで街まで送って貰うんです！」

「ああっ、待ってよめぐみん！」

慌ててその後を付いて行くゆんゆんを微笑ましく見ながら、俺もその二人の後をのんびりと付いて行く。

そんな、俺の前を行く二人の前に、見覚えのある少女達が現れた。

それは確か……。

「あ……。ふにふらさん。どどんこさん……」

その二人は、確かゆんゆんの自称友人。

確か、月末になるとゆんゆんにたかっていたという二人だ。

そんな二人が、ゆんゆんとめぐみんの前に立ち塞がった。

そして、二人はめぐみんを警戒する様にジリジリと距離を置き、めぐみんからは視線を離さない様にしながらゆんゆんへと話し掛け

てきた。

「ゆんゆん、ちょっと話があるんだけど。いいかしら？」

やはりチラチラと、めぐみんを気にしながら。

めぐみんは、学生時代この二人になにをしでかしたんだろう。

「おい、久しぶりに会った懐かしの同級生に対して、その態度はどういう事だ」

「い！　いやその！　べ、別にっ？　めぐみんとは、ほら！　私達、あまりその仲良くなかったから……！　よ、よく私達がゆんゆんと仲良くしていると、めぐみんが後から来て、その……色々と……」

片方の少女の声が、どんどんとか細い物になっていく。

……どうやら、ゆんゆんが絡まれる度に、めぐみんは後からこの二人に何かとチョッカイを掛けていたのだろう。

何だかんだ言いながら、めぐみんとゆんゆんはずっと昔からそんな間柄だった訳だ。

言葉を詰まらせていた少女とはもう片方が、突然バサッとマントを翻した。

その場に、ピンと片足で立ち、まるでシルビアを相手取ったゆんゆんの様にポーズを決めて。

「我が名はふにふら！　アークウィザードにして、上級属性魔法を操る者。紅魔族随一の本屋の娘。現在彼氏を求める者……！」

そう叫ぶと同時、ゆんゆんにビシと指を突き付けた。

どうも、ゆんゆんの片足上げポーズが里の中で流行ってしまったらしい。

それを恥ずかしげに見ながらも、ゆんゆんはジッと聞いている。
「……その。……色々、バカにして悪かったわよ……。都合の良い時だけ友達面して……」
ふにふらは、突き付けた指と共に声にも段々と力が無くなり、やがてその指を下に向けた。
そしてどどんこが、そのふにふらの後を続ける。
「……その。今までの事、謝るわ。……だから。……その……」
二人の少女が、ゆんゆんにペコリと頭を下げた。
「「今度は、本当の友達になってください！」」

ゆんゆんは、それを聞いてしばし戸惑い。
そして……。
「……はいっ！」
実に良い笑顔で返事をした。

それを聞き、二人の少女はホッとした様に顔を上げた。

良い話だなあ……。
何だろう、ここ最近殺伐としていたからか、何だか胸が熱くなってくる。

と、ゆんゆんが、俺に向かって笑い掛けてきた。
「カズマさん、改めて紹介します。二人と初めて会ったあの時は、眠るめぐみんを運ぶのにバタバタしてましたから……。二人は、ふにふらさんとどどんこさん。私の、学生時代の友達です」

そう言って、にこっと嬉しそうに、自慢そうに言ってくるゆんゆんの紹介に、俺は改めて二人の少女にどうもどうもと頭を下げた。
そんな二人も、友達と言われた事に照れながら、ペコペコと会釈する。

「どうも、佐藤和真です。ゆんゆんには日頃お世話になっている、ゆんゆんの友人の一人です。……あの時は悪かった。あれだ、お互いに以前の事は忘れて、これからは仲良くしてくれ」
「「こ、こちらこそ」」
初対面の時はお互い喧嘩腰だったせいか、どうしてもお互い照れながら、ぎこちなくギクシャクしてしまう。
そんな俺達を見て、めぐみんがサラッと爆弾を投下してきた。
「おいお前ら。男が居なくて寂しいのは分かるが、私の男に色目を使うのは止めて貰おう」
「「「!?」」」
突然のその言葉に、驚きの表情で完全に固まるめぐみん以外の三人の少女。
「お……、おい、男って……。その、皆には内緒にするって話じゃなかったのか？」
「「「!!」」」
俺の言葉に、三人は更に驚愕し。
どどんことふにふらが、アワアワと狼狽えながら、
「おおおお、男!?　あの、魔法にしか関心の無かっためぐみんに、男!?　う、嘘よね？　アレでしょ？　男友達って事でしょ？」
「そそそ、そうよねー？　あんまりオシャレとかには無頓着だっためぐみんが、いきなりその、お、男だなんて……。ね、ねえ？」
二人でそんな事を言い出した。
何だろう。

何だろうこれ。
ゆんゆんが、同じくアワアワと狼狽えながら。
「カ、カズマさん？　本当なんですか？　め、めぐみんと、その、お、お付き合いを……」
そんな事を小さなか細い声で聞いてきた。
俺がめぐみんを見ながら、言っちゃってもいいのか？　とアイコンタクトをしてみると。
「まあ……。アクアとダクネスには、まだ内緒にしといてくださいねゆんゆん。それにまだ、家の親にお菓子持って来て挨拶したり、深夜、一枚の布団の中で抱き合ってもぞもぞしたりと、その程度の関係ですから」
「「「ッ！！」」」
青い顔で、フラフラと後ずさるふにふらとどどんこ。
いやまあ確かに間違った事は言ってはいないが。
そんな二人にめぐみんが、勝ち誇った様に口元を歪め。
「……フッ」
「「！！」」
鼻で笑った。
「……わ、わあああああああ！　お、男が出来たぐらいでなにさあああ！」
「くっ、悔しくなんてないからねっっ！　悔しくないからあああっ！」
二人はそんな捨て台詞を残して駆け出して行った。

そして、その場に残って真っ赤な顔でアワアワと狼狽えているゆんゆんに。
「あ、ゆんゆん。私ちょっとカズマと行きたい所があるんです。悪いんですが、代わりにローブを受け取ってきて貰えませんか？」
「えっ！　そ、その……。う、うん、良いけど……！　やっぱりその、二人は、その……？」
ゆんゆんが、恐る恐るといった上目遣いで俺とめぐみんを交互に見る。
めぐみんが。
普段使わない様な女子高生みたいな軽い口調で言った。
「私達、どっちかが彼氏が出来ても、ずっと友達だよね！」
「わ、わあああああん！　またあぐみんに負けたなんて、思ってないからあああ！」
ふにふら、どどんこに続きゆんゆんも走って行った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺はめぐみんに里の外へと連れられていた。
そこは林の中に入った人気の無い静かな所。
ここで聞こえるのは虫や鳥の声だけだ。
そんな中、めぐみんが、突然俺の方を振り向いた。

……あれっ、何このシチュエーション。

え、何？

告白？

いや、告白はされてるだろう。

え、振られるとかじゃないよな？

いやいやナイナイ、だって、さっき俺の事を、私の男って言ってくれたし！

いやでも、さっきのは同級生の前で背伸びをしたかったからだとか……！

そんな考えが一瞬で頭を巡り、俺がオロオロしていると。

めぐみんが俺をジッと見ながら口を開いた。

「カズマ。……カズマは、優秀な魔法使いが欲しいですか？」

……？

何だろう。

どういった意図だろうか。

そりゃあ……。

「欲しいか要らないかで聞かれたら、そりゃあ欲しいさ」

当たり前の事を、当たり前に答えた。

めぐみんは、その答えに満足した様に。

「そうですか。……うん、私も覚悟が出来ました」

そう言って、突然笑顔を見せた。

アカン。

デートすらした事のない童貞に、そんな不意打ちの笑顔はアカンて。

こんな人気の無い所で、覚悟が出来ただの、魔法使いが欲しいかどうかだのと言われると、童貞の俺としては凄くドキドキするんですが。

するんですが！

「……私、上級属性魔法を覚えようかと思います」

めぐみんが、そんな過激な、童貞にはいきなりハードルが高い事を……なんて？

「……おい。今なんつった？」

俺は素で返していた。

我慢しないなら三度の飯が二度になると言われても、我慢などせずに魔法ぶっ放す爆裂狂が、今なんて？

めぐみんが、自分の冒険者カードを取り出した。

それを見ながら。

「……ずっと、悩んでいたんです。ゆんゆんに、何度も言われる前からも。多分、カズマやアクア、ダクネスと会わなかったなら、こんな事は考えずにずっと爆裂魔法を鍛え続けていたでしょう。紅魔の里の人達は、そんな素振りも口にも出しませんが、きっと、私に対してガッカリしている事だと思います。……私は、もうカズマのお荷物にはなりませんから……。今度は、カズマや皆を私が助けるんです。……だから。……だから、爆裂魔法は今日で、封印するんです」

そんな事を言いながら、俺に笑い掛けた。

いやいや。

いやいやいや。

「おい待てよ。そりゃあ上級魔法が使えりゃ助かる。助かるけれども……。そうだ、別に爆裂魔法を封印なんて言う必要はないだろ。討伐とかに出ない日だってあるんだし。そんな時は、また一日一爆裂に行けばいいしさ……！」

そんな俺の言葉に、めぐみんはクスッと可笑しそうに笑い。

「爆裂魔法を唱えると、もうその日は魔力切れで、多分他の魔法は使えません。上級魔法を覚えたら、それを毎日使い続けてスキルレベルを上げないといけませんから……。大体、一度爆裂魔法を使えば、もう我慢が出来なくなると思います。それに、カズマだってコツコツとスキルを鍛えて努力していたでしょう？　唯の初級魔法で、窓に分厚い氷を張れるぐらいに」

言いながら。

俺に笑い掛けためぐみんは、そのままじっと自分の手元の冒険者カードを見る。

俺は思い出していた。

街を出る前に言われたバニルの言葉を。

『貴様はこの旅の目的地にて、仲間に迷いを打ち明けられる時が来る。貴様の言葉次第では、その仲間は自らの歩むべき道を変えるだろう。……見通す悪魔が宣言しよう。汝、よく考え、後悔の無い助言を与えるようにな』

ああ、これはこの事を言ってたのか。

クソ、あのチート悪魔め、こうなる事も知ってやがったのか？

帰ったら店のドアノブに聖水掛けといてやりたい所だ。
だが、ウィズがドアノブ掴んで大火傷する光景しか見えて来ない。

めぐみんが、大切な思いでの品を眺めるように、じっとその手元のカードを見詰めている。
やがて、静かに目を閉じて。
深く息を吸って、目を開けた。

そのまま、何かを堪える様にバッと俺に背中を見せて、後ろ手に自分のカードを突き出してくる。
そのめぐみんが、肩を少しだけ震わせていた。
「……すいません、カズマ。凄く酷い事を頼んでもいいですか？」
「……自分じゃ押せないから、俺に上級魔法スキル取得のボタンを押してくれってか？」
めぐみんが、コクリと頷いた。

……アホだなあ……。

「お前、良く考えろよ？　もう俺達は大金が転がり込んで来るんだからな？　そんな、討伐だとか危険な事にはあまり首突っ込まなくてもいいんだ。屋敷でのんびりしながら、たまに爆裂魔法で雑魚を一掃したりして、皆でそんな風にのんびりと生きていこうぜ」
そんな俺の言葉に、めぐみんが可笑しそうに吹き出した。

「……以前は、中級魔法取る気は無いのかだとか、散々私に言っていたカズマなのに」
そう言って、可笑しそうに肩を震わせ、俺の方に再びカードを差し出してきた。

俺は無言でそれを受け取ると。

「……後悔はしないのか？」
めぐみんの背中に言った。
「……しません。私はもう、足手まといになんてならないって決めたんです。私が普通の紅魔族だったなら。きっと、カズマを死なせる事も無かったし、シルビアにカズマを連れて行かれる事も無かったでしょう。……私は紅魔族随一の魔法の使い手。上級属性魔法を操る者。……今後は、これで行くとします。上級属性魔法が使える様になれば、ゆんゆんよりも潜在魔力が高い私の方が、絶対に紅魔族随一です。ゆんゆんに、紅魔一の座は渡しません」
めぐみんは、そんな事をきっぱりと。
……アホだなあ、本当に。
何よりも爆裂魔法が好きで、その為にだけ全てを捧げてきたクセに。
俺は無言でめぐみんのカードを操作した。
しかし、他人でもカードって操作出来たんだな。
もっと早く知っていたなら。
例えばこいつらに出会った頃なら、ダクネスやめぐみんのカードをパクって、勝手に操作していただろうに。
俺は操作を終えると、それをめぐみんに手渡した。
めぐみんは、そのカードを見もせずに、自分の胸元に無造作に突っ込む。
そして、バッと振り返ると。
「さあ、ではそろそろ皆の元へと帰りましょうか！　アクアやダク

ネスと一緒に、アクセルの街に。……まあ、しばらくの間、カズマの屋敷にウチの家族がお邪魔させて貰いますから、四人で水入らずって訳にはいかないのが残念ですが……」

「お、親御さんをそんなに嫌ってやるなよ？」

「嫌ってませんよ？　でも、年頃の娘の親に対する想いなんてそんなもんです。新しいお家を建ててあげるんだから、文句は言わせませんよ？」

そう言って、フフッといつも通りの不敵な笑みを浮かべて言った。

ひょいざぶろーさん家が消し飛んだ為、めぐみんの家族はアクセルへと引っ越して来る事になった。

アクセルに戻り、ダクネスの父ちゃんから金が返ってきたら、その金は皆で山分けしようと言う事になっていた。

だが、めぐみんは自分の分はいいから、両親に適当な家でも建ててやりたいと言い出した。

入ってくる額は二十億を超える。

山分けすると一人五億以上なわけだが、めぐみんはそれを辞退してしまった。

めぐみんいわく、俺が考えた知的財産だの何だので稼いだ金だし、借金払ったのも俺だから、だそうだが。

でも、魔王幹部ベルディアの賞金や、デストロイヤー戦で得た賞金もそこに含まれていたりする訳で。

めぐみんが頑なに受け取ると言わない物はしょうがない、とりあえずご両親には飛び切り良い家建てて、受け取る気になるまで一旦預かって置こう。

ちなみに、ダクネスにも要らないと言われた。

と言うか、その大金を用意するハメになった原因なのに受け取れ

るかと叱られた。

そして……。

清く気高く穢れ無き女神様は、目をキラキラさせて何を買おうか悩んでいた。

俗世にまみれたあいつは絶対に女神じゃないと思う。

しかし、居場所を見付けたゆんゆんまでがアクセルに帰ると言い出したのは意外だった。

まあ里の人達の反応を見れば仕方の無い事なのかも知れない。

里の人達的にはゆんゆんを褒め称えたりしているのだろうが、あれは新手のイビリなのかと疑ったものだ。

めぐみんが里へと帰ろうとする中、俺はそれを引き止め。

「ああ、めぐみん。ちょっと一発、爆裂魔法を撃ってくれよ」

俺は突然、そんな事をめぐみんに頼む。

そんな俺の言葉にめぐみんが、

「……あなたと言う人は、本当にどうしてこう……。私が決意して、五分も経たない内に爆裂魔法を撃ってくれとは、何を考えているんですか？」

そう、呆れた様に言って来た。

「いや、俺の国にはな。明日から頑張るって言葉があってだな。それにほら。俺まだ、百点と言える爆裂魔法を見てないぞ。シルビア相手の爆裂魔法ですら九十八点だった。いいのか？　お前の最後の爆裂魔法が九十八点で？」

「……言ってくれましたね。良いでしょう、私の最後の爆裂魔法。それはもう渾身の一撃をお見せしようではないですか！」

言って、めぐみんが大仰に、離れた岩を目標にそこに向かって杖を構えた。

「……ああ、めぐみんめぐみん。それは止めとけ。そんな近いのじゃなくて、もっと遠くの……、この林の木々を盾にして、あそこの岩を目標に撃ってくれよ」

そう言って、俺が指さしたのは林を抜けた平地になる大きめの岩。

俺の突然の注文に、めぐみんが首を傾げた。

「別に構いませんが。射程ギリギリですよ、あんなに遠い場所ですと。……では、カズマにお見せしましょう。我が渾身の爆裂魔法を！」

言って、さっきまでの何かを堪える様な偽りの笑顔では無く、心の底から嬉しそうに。

めぐみんは、嬉々として、心底楽しそうに爆裂魔法の詠唱を開始し……！

「『エクスプロージョン』ッッッ！！」

めぐみんのかざす杖の先。

そこから放たれた光が走り、それが目標の岩に突き刺さった。

それは間違いなく、過去最大最高の爆裂魔法。

耳をつんざく爆音と共に、未だかつて無い、とんでもない規模の爆風が吹き荒れた。

恐らくは、これをシルビアへと放っていたならば跡形も残らなか

ったろうと思う。

自らが放った爆裂魔法のその威力を目の当たりにし、めぐみんが驚きの表情で慌てて懐からカードを取り出し。

それに目を走らせると、こちらを、困った様な、それでいて滲み出る嬉しさを我慢出来ない様な、なんとも言えない微妙な顔でじろっと一度だけ一瞥し。

やがて、バサッと自分のマントを翻して、吹っ切れた様に笑みを浮かべ、俺に向かって言ってきた。

「我が名はめぐみん。アークウィザードにして、爆裂魔法を操る者。アクセル随一の魔法の使い手。やがて爆裂魔法を極めし者」

そんな、普段通りのめぐみんがそこに居た。

俺はめぐみんの意に反し、残っていたスキルポイントを、全て爆裂魔法のスキルレベル上げに突っ込んだ。

優秀な魔法使いが欲しい？

ウチのめぐみんは、何だかんだで優秀な魔法使いだろう。

なんせ、魔王の幹部達を爆裂魔法一つで翻弄したり、撃退したり。

これ以上の戦果を上げた魔法使いが、居るというなら連れて来いってんだ。

自信満々の、どや顔のめぐみんが、薄い胸を張りながら聞いてく

る。

「今のは何点でしたか？」

そりゃあもちろん。

「百二十点」

25話（後書き）

五部開始は4月に入ってからを考えております、申し訳ない。
一応五部で完結を考えておりますので、少しだけお時間を。

それまでは、番外編、「仮面悪魔の見る夢は」などで少々お待ちください。

1話（前書き）

本編再開につき、番外編の別作品、『仮面悪魔の見る夢は』の方は不定期更新と致します。

1話

どうしてこうなった、と言う言葉がある。

それは、意図的にそうなったのではなく、偶発的に起こってしまった時。

それは、本人が全くそんな気は無いのに、なぜかそんな事態になってしまった時。

そして……。

そう。

「いないんですけど。アクセルに帰って来てこの方、ニートの本領発揮して、産廃よりも迷惑な存在になったカズマはおろか、カズマのお守りしててって頼んだダクネスまでいないんですけど」

「どうしたのでしょうか。暇を持て余したカズマならば、意味も無くどこぞにフラフラと出歩いて行ってもおかしくは無いのですが。お守りを頼んだダクネスまでもが一言も無しにいなくなるというのは……」

居間の隅にある狭苦しい物置の中で。

「……フー……フー……フー……」

俺のハンカチで即席のさるぐつわを噛まされた状態で、荒い息を吐きながら両腕をワイヤーでガチガチに縛られた状態のダクネスに、上半身裸な俺がのしかかり、必死に潜伏スキルを発動させているこんな時。

俺とダクネスが隠れている物置内は非常に狭く、やたらと露出の激しい私服のダクネスと、否が応にも密着する形となる。

ハッキリ言おう。
恐ろしいまでの苦行である。

デヘヘ、エロい身体しやがって、役得でござるなんて感情が一切湧かない。
それどころか変な汗ばかり出てくる。
こんな状態を見られたら間違いなくアウトだ。
と言うか、なんでこんな漫画みたいな展開にならなきゃいけないんだ。
俺が半泣きになっていると、ダクネスが上半身を縛られたまま、もう我慢出来ないとばかりに、上にのしかかっている俺を跳ね飛ばそうと突然バッと動き出した。

それを、慌てて上から更に力を込めて押さえつけ、ダクネスの耳元で囁きかける。
「おい、大人しくしてろ！　お前さえ我慢してくれれば丸く収まるんだ。そもそも、俺の言う事を聞かなかったお前が悪いんだぞ！　ジッとしてろ！」
俺の言葉に、ダクネスが何かを諦めたかの様に、そっと、観念するかの様に目を閉じた。

◆◆◆

紅魔の里から帰って来て早一週間。

とうとうダクネスの父ちゃんから俺達の金が補填され。
俺は今、一生働かなくても余裕で生きていけるだけの大金を手にしていた。
つい先日までめぐみんの家族がこの屋敷に同居していたのだが、新居が完成したのでそちらに引っ越して貰った。
めぐみんの家族の新居は返還された大金の中から出したのだが、金に糸目は付けないから良い感じに仕上げてくれと言ったら、一週間ほどで出来てしまった。
欠陥住宅を疑ったが、めぐみんやアクアいわく、特に問題は無いらしい。
この世界には魔法という物がある。
それが魔法であれ科学であれ、技術という物は、最も進歩が早いのが軍事である。
次いで生活の利便性。
戦争時には即座に砦などを築く必要がある事から、魔法による建築速度の向上が図られたらしい。
結局、めぐみんは家族の家を建ててもらったから、後はカズマが好きに使えと言って金は受け取ろうとはしなかった。
ダクネスも同じくだ。
ダクネスの父ちゃんから入ってきた金は二十五億。
内訳は、俺がダクネスの借金返済に用意した二十億。
そして、本来ならば俺達に支払われるはずだったベルディア討伐

による賞金三億。
そして更に、領主に吹っ掛けられた借金が数千万。
もっともその数千万の借金に関しては、アクアがやらかしたネズミ講、そして、めぐみんが遭難した際の救助費用など、真っ当な請求も含まれていたのだが。

それら諸々を引っ括めて、更にはダクネスの父ちゃんが、貴族が庶民に金を借りて、利子も付けないなど貴族の恥だ、当家の危機を救ってくれた礼でもあると、何やかやと色を付けてくれて二十五億。

没収された、行方不明になった領主の財産は、俺以外にも順次様々な形で街に還元されているらしい。

受け取った二十五億の中からめぐみんの家族の家を建てたが、それだって大した額でもない。
新築の家の中に、勝手に、めぐみんからとの書き置きを残し、ささやかな生活費もそっと置いておいたが。

しかし、返ってきた金の大半は、俺が知的財産権を売った金だとはいえ……。
お前らもうちょっと欲とか出せよと言いたい。

そう。

「カズマさん、美味しいお茶が入りましたわよ。本来はお貴族様が飲むお茶らしいですわ。今やわたくし達もセレブですもの。お茶ぐらい最上級の物を嗜まないと笑われますわ」
ソファーでゆったりと寛ぎ、大金を手にして毎日浮かれているこいつみたいに。

アクアには、三億やった。
ベルディア討伐時の報酬分を丸々だ。
個人的には２５億を四分割した額でもいいのだが、どうせこいつに大金持たしても、ロクな使い方はしないだろうとの事で。
そして、その考えは間違ってはいなかったと思う。

「カズマさん、こちらは王室で使われているお紅茶らしいですわ。香りがとても素敵ですわね。ダクネスさんもお一ついかが？　あなたもお貴族様ですし、お紅茶の味にはお詳しいでしょう？」

大金を得てから妙な言葉遣いになったアクアから、紅茶の注がれたカップを受け取り一口すする。

「……お湯やんけ」

それを聞いたアクアは特に悪びれる事も無く。
「あらあら、庶民のカズマさんには上品なお紅茶の味は分からなかったようですわね。この繊細な味が分からない様では、なんちゃってセレブと笑われますことよ？」
言いながら、アクアが自分も紅茶をすすり。

「……お湯だこれ」

微妙な表情で言ってきた。
茶葉を入れたティーポットの中に、アクアがうっかり触れでもしたのだろう。
ポットの中身は完全にただのお湯と化していた。

そんなやり取りを見ていたダクネスが、ポットを持って台所へと向かう。
「どうせなら私がお茶を入れてやろう。貴族の嗜みだ、いつもメイドが入れているのを見てやり方ぐらいは分かる」
「不器用なお前がお茶とか。紅茶なんだから、砂糖だの塩だのといった変な隠し味は要らないからな。オリジナリティ出すなよ」

激不味料理が出てくる定番のアレを心配しながらダクネスを見送る中、アクアが自分の膝上に置いたヒヨコを満足気な顔でそっと撫でる。

多分本人としては、映画などに出てくる、金持ちがよくやる、高級なペットを撫でるセレブを演じているつもりなのだろうが、荒ぶるヒヨコことゼル帝は、自分に向けて伸ばされるアクアの指先を神経質にくちばしでつついていた。

「ところでめぐみんさんは、先ほどから何をなさっておられますの？　何かを作っているようですけれど？」

「これは紅魔族に伝わる魔術的なお守りです。このお守りの中に、強い魔力を持つ者の髪の毛を入れておくのですよ。そして、それを仲間に渡すのです。まあ気休め的な物ですが、よく死ぬカズマにあげようかと」

本当に俺ばかりコロコロとよく死ぬが、これを貰うと尚更死ぬフラグとかが立ちそうな気がしないでもない。
「いいじゃないか。それは、誰の髪でもいいのか？　こう、多ければ多いほど効果があるとか」
ダクネスが、ポットに沸かし直したお湯を入れて帰って来た。

そんなダクネスにめぐみんが、お守りにせっせと自分の髪を一本詰め込みながら答える。

「多いほうが良いですよ。長旅に出る者なんかに持たせるお守りには、里の者全員分の髪の毛がギッシリと詰め込まれ、お守りからはみ出すほどに。それぐらいのお守りにもなると、それはもう霊験あらたかな事請け合いです。持ち主の身を守るだけでなく、例えばその辺にポンと荷物を置いておいても、それを荷物に入れておいただけで中の物が盗まれなかったり。荷物を落としたのに、それがすぐに届けられたり。効果は絶大ですよ」

なにそれ怖い。

そいうかそれは、髪の毛はみ出してるお守りを見て、気持ち悪がって荷物を盗むのを避けたり、変な祟りを恐れて返しにいくからだと思う。

と、ダクネスが長い金髪を一本引き抜き。

「なら、こいつも入れておいて貰えないか。まあ、私の魔力は高くは無いのであまり効果は期待できないとは思うが」

言いながら、それをめぐみんへと手渡した。

めぐみんはそれを受け取ると、何だか嬉しそうにお守りに詰め込んで。

「……」

やがて、自然と皆の視線がアクアへと向かう。

ゼル帝に指先をつつかれて痛そうにしていたアクアが、その視線に気付いてキョロキョロと。

「……？　なーに？　ひょっとして、身の程知らずにも恐れ多くも、

この女神様の髪の毛よこせとか言う気じゃないでしょうね。いい？
女神の髪ぐらいにもなるとね、その神々しさと希少価値は……」
「いいからお前も、空気読んでとっとと髪の毛よこせ！　あと、もう口調がいつも通りに戻ってやがるぞ！　セレブごっこはもう飽きたのかよ！」
「いやあーっ！　止めて止めて！　分かったから髪の毛引っ張んないで！　痛い痛い、せめて抜くんじゃなくて一本だけ切って頂戴！」

アクアから強引に抜いた髪の毛もめぐみんに渡し、詰めてもらう。
日本でもお守りの中に毛を入れる的な物はあるが、それに似た感じなのだろうか。

ダクネスが、ポットの紅茶を皆に入れてくれる中。
「それじゃあカズマ、これをどうぞ。まあ気休めなので、適当に荷物の中にでも突っ込んでおいてください」
「おっ、おう。悪いな。ありがとう」

俺はめぐみんからお守りを受け取ると、部屋に置いてある荷物入れではなく、それを大事そうに懐に。
と言うか、めぐみんは里での事を気にしてはいないのだろうか。
気にしてるのは俺だけなのだろうか。

なんか、里から帰って来て一週間。
確かに、アクアとダクネスには内緒の体でとはなったのだが、以前と一切変わらないというのもそれはそれでとても寂しい。
……と言うか、悶々する。
友達以上恋人未満でと言い出したのは俺なのだが、もうちょっとこう、こう……！

そんな俺の内心を知ってか知らずか、澄ました顔でダクネスの入

れてくれた紅茶をすするめぐみん。
そんなめぐみんをぼーっと見ながら、俺もダクネスの入れてくれた紅茶をすすっていると、その視線に気付いたのか、俺と視線が合ったためぐみんが。
少しだけ、口元をほころばせた。
童貞には、そんな何気ない仕草一つ一つが致命傷。
思わずそんなめぐみんを、紅茶の入ったカップを手にボーっと見ていると……。
「熱！　ダクネス、溢れてる！　私のお茶溢れてるんですけど！」
そんなアクアの悲鳴で我に返った。
見れば、ダクネスが俺とめぐみんをほんのりと赤い顔でぼーっと見ながら、アクアが持っているカップへ注いでいた紅茶を溢れさせていた。
「ああっ！　す、すまないアクア、今拭く物を……！」
言って、バタバタと拭く物を取りに行くダクネスを尻目に、アクアが、テーブルに置かれた紅茶が溢れたカップへと、顔の方を近づけてカップから直接すする。
その行動は、既にセレブだとかいった言葉とはかけ離れた姿だ。
アクアはテーブルまで身を屈めて紅茶をすすり。
それは恐らく、アクアの手に紅茶が掛かった際、その手がカップの中に触れたのか。
「……お湯なんですけど……」
アクアが、悲しそうに呟いた。

困った。
……実に困った。
何が困るかって、今のこの状況の事だ。

俺は、手持ち無沙汰な空気を何とかしようと、ダクネスがポットに作ってくれた紅茶を注ぎ、それをすすった。
そして……。

「めぐみんも、おかわりいる？」

俺は軽く緊張しているのを誤魔化すかのように、めぐみんに。

「私はもういいですよ。お気遣いなく」
言って、めぐみんが自然に微笑む。
まるで、そんな俺の緊張も見透かされている気がしてしまう。

ヤバイ、何これヤバイ。
何かもう、そういった動作一つ一つが気になってしまう。
好きって言葉は偉大だ。
たった一言言われただけで、こんなにも色々と気に掛かってしまう。

ダクネスとアクアはゼル帝の小屋を作りに行った。
なんでも前々からの約束なんだそうな。

という訳で、現在めぐみんと二人、居間の中で二人きり。
何だろう、普段はちっとも気にしないのに、あんな事があってからこうして改めて二人になると、色々と意識してしまう。

「そう言えば……」
「！？」

めぐみんが何気なく口を開いただけで、思わずビクリと身構えてしまう。
そんな俺を見て、紅茶のカップを両手に持っためぐみんが、クスクスと笑った。
「そんなに緊張しなくても。以前はもっと凄い事したクセに、二人きりなだけで何を動揺しているのです？　……そう言えば、シルビア戦が終わり、私の予備のローブが出来るまで、里に滞在していた数日間。里の人達に養殖してもらっていたそうじゃないですか。それで、大分レベルも上がったでしょうし、次は何のスキルを覚えるのかなと思いまして」
そんな事を言いながら、俺を見て、紅茶のカップを両手で包む様に持っためぐみんが小首を傾げる。

シルビアを撃退した後、紅魔の里に何日か残っていた訳だが。

シルビアを強化してしまったのは俺なのだが、俺のおかげで色々丸く収まったと、なぜか紅魔族の人達に感謝されてしまい。

そして、滞在中に彼らなりのお礼を……。
紅魔族が俗に養殖と呼ぶ、特殊なお礼を受けた。

「一応、新しいスキルを覚えてみたよ。シルビアや盗賊の人が使っ

てて便利そうだったスキルを。……と言うか、改めて思うのは紅魔族ってつくづく凶悪だよな」

めぐみんにそんな事を言いながら、紅魔族から受けたお礼を思い返す。

養殖。

つまりは、紅魔族の里周辺の凶悪なモンスター達を紅魔の人達が適当に痛めつけ、魔法で身動き取れ無くしてから俺にトドメを刺させると言うレベル上げ行為。

おかげで五分ほどで一気に3つもレベルが上がったものの、彼らを見ているとどうにも腰が引けてしまった。

一箇所に集められ、魔法により首から下を石で覆われ、完全に身動き取れなくなったモンスター。

泣き叫ぶ様々な形のモンスターの首に、剣を突き立てていくだけの簡単なお仕事。

ハッキリ言って、三体倒すので精一杯だった。

紅魔族の人達は一日で上級冒険者のレベルにしてあげようとか言っていたが、生き返ったばかりで身体が……と適当に言い訳し、途中で切り上げてもらった。

甘っちょろいとは思うが、あれはどうにも良心が痛む。

めぐみんは、そんな俺の話をカップを持ったままで、居心地の良さそうな自然体で、のんびりと聞いていた。

剣の角度がどうのだの、あのモンスターは俺に殺されそうになる前につば吐きかけやがっただの。

そんな色気の無い話を、めぐみんは静かに黙って聞いている。

「……二人きりなのにこんな色気の無い話で悪いな」

と言うか、甘ったるいトークとか俺には無理です。

だがめぐみんはとても満足そうに微笑むと、

「好きな人の話しなら、どんな話だって面白いですよ？　特に喋ることがなければ、一緒に同じ部屋に居て顔を見ているだけでもいいんです。本当に好きな相手なら、別にあちこちデートだの何だのと、無理に出かける必要もありませんよ？」

そんな、ロクに女性付き合いの無い俺には一撃必殺なセリフをさらっと言った。

「……お前、さらっとそんな事言われると一々顔が熱くなるから止めろよ……」

困った様に言う俺の言葉に、めぐみんがカップを口元に寄せながらクスクス笑う。

と、そんな時。

「めぐみんすまない、ちょっと来てくれ！　アクアが呼んでいる。不器用な私では使い物にならないから、めぐみんと交代だと……！　アクアに、小屋を壊してくれなんて言ってないんですけど！　作るのを手伝ってと言ったんですけど！　代わりにめぐみん呼んで、ダクネスは暇なカズマが私の邪魔しに来ない様に相手をしてて、と、言われて来た」

そんな事を言いながら、ちょっと泣きそうな顔のダクネスが玄関から飛び込んできた。

……なんて言うか、タイミングの悪い。
いや、良かったのか？

「と言うか、物作りなら俺の出番じゃないのか。鍛冶スキルまで持っている本職だぞ俺は。なぜめぐみん？　俺がまだ死後の安静期間だからって、気を使ってるのか？」

そんな俺の言葉にダクネスが。
「いや、私もそう言ったのだが。何でも、カズマにやらせると絶対に何か余計な事をするはずだから、と。ゼル帝の小屋の形をオーブンやかまどの形にしかねないから、と」

よく分かってるじゃないか。

「それじゃあ、ちょっと行って来ますね。ダクネスは、カズマのお守りを頼みます」
「おいこら、お守りって何だ、逆だろおい」

そんな俺の抗議にクスクス笑いながら、めぐみんが出て行った。
ううむ、何だろう。
どうにも手玉に取られている気がする。

「……おいカズマ。貴様、あの夜めぐみんに何かしたか？」
ダクネスが唐突に、本当に唐突にそんな事を言ってきた。
あの夜って、あの夜か。
ダクネスが、めぐみんの母ちゃんに抗議していたあの日の夜。
まあ、結果的に言えば。

「なんもしてないよ」

「嘘を付くな！」

俺の言葉はいきなり真っ向から否定された。

「おい。おいこらお前。前々から思ってたんだがな、お前らって俺の事を一体どう思っている訳？　そろそろお前、縛り上げてレベル一にまで下げてから泣くまでスティール食らわせるぞコラ。俺は嘘は言っていない。お前の言う何かってのが分からんが、少なくともお前が想像している様な事は何もなかったぞ」

そんな俺の言葉に。

「……何かとは、その、何かだ……。お前は分かっていて私に言わせたいのか？　その……。めぐみんと、その、キスだとか……。胸を触ったりだとか、その……！」

頬を赤くして、ダクネスが恥ずかしそうにそんな事を聞いてくる。

相変わらず、羞恥の基準がどこにあるのか分からない奴だ。

「いや、キスもしてないし胸タッチもなきゃ見てもいないぞ。この俺を見損なうな。俺の目をしっかり見てみろよ。これが嘘を言っている目をしているか？」

言いながら、俺はダクネスを真っ直ぐに見る。

そんな俺のくもりなきまなこを見たダクネスは、やがて徐々に狼狽えだした。

「……う。その、嘘を付いている様には見え……ない……。すまない、確かに何も無かったんだな。いや、めぐみんの様子を見ていると、何かあったのかなと思わざるを得ない態度だったので……、何でもない、忘れてくれ。本当にすまない……」

ダクネスが、そんな事を言いながら、徐々にその声が小さくなっていった。

そして、気を取り直すかのようにその場にスッと立ち、その胸を強調でもするかの様に腕を組む。

「最近は、何かとめぐみんへのセクハラが目に付いていたのでな。とうとう一線を越えてしまったかと心配したのだ」

言いながら、ダクネスはツカツカとソファーに近づき、腰を下ろす。

そして自分のカップに紅茶を注いだ。

それを、何か胸の支えが取れたかの如く、安心した様に一息に飲むダクネスに。

言いたい放題された腹いせも少し込め、ポツリと言った。

「……そう言えばさ。……お前って、ボス戦とかになると途端に役立たずになるよな」

俺の言葉に、ダクネスが紅茶を盛大に吹き出した。

「おまっ……！　何しやがんだ、紅茶まみれじゃねーか！」

俺は慌てて、紅茶まみれになったシャツを脱ぎ、それをバタバタと仰ぐ。

「ゴホッ！　ゲハッ！　ゴハッ……！」

むせるダクネスが立ち上がり、ハンカチで口元を拭いながら、

「お、お前と言う奴は！　言うに事欠いて、いきなり何を……！　そんな無礼な暴言、……！　暴言を……！　根も葉もない暴言……」

最初は怒りながら食って掛かろうとしていたダクネスが、徐々に声のトーンが落ちていく。

自分でも色々と思い当たる節があるのか、激しくむせて涙目で俺を睨んでいたダクネスが、徐々に視線を脇に逸らした。

「おっ、心当たりがあるみたいだな。そう、例えば、絶対に街を守ると意気込んでいたデストロイヤー戦。そう、例えば、旅に出る時は、めぐみんを必ず助けてやると意気込んでいた、そんな今回のシルビア戦。……クルセイダーさん、皆を守ると張り切っている時に限って、役に立たないですね」

その言葉に、ダクネスがソファーにストンと腰を下ろし両手で顔を覆い隠す。

肩を震わせているのは恥ずかしさか。

やがて顔を覆っていた手を離し、そこには若干赤いながらも普段と変わらない冷静なダクネスの顔が現れる。

今までならば、これだけ言われれば半泣きになって部屋に逃げ帰り、閉じ込もっていたものだが、ダクネスも長い年月の間に少しは成長したらしい。

何事も無かったかの様に紅茶を入れ直してそれをすすり、ほうと一息ついた。

そして……。

「私が悪かった。お前をセクハラ男と勘違いしていた事を謝ろう。そして、次こそはちゃんとクルセイダーとしてお前達を守ると誓おう。……なので。……そろそろ許してください……」

「お、おう……。俺も言い過ぎたな。……仲直りしようか……」

泣いて逃げるだけだったダクネスが、芸風が増えたな。

「そう言えば、紅魔の里での養殖でレベルが上がり、新しいスキルを取ったらしいな。一体何のスキルを取ったんだ」

何杯目かの紅茶を飲み干し、ダクネスが聞いてくる。

平静を装っているが、精神的にはまだ動揺しているのだろう。

「お前も良く知ってるスキルだよ。お前も養殖して貰えば良かったのに。……ていうか、そんなに紅茶ばっか飲んでるとトイレ近くなるぞ」

俺の言葉にダクネスが、こちらをチロリと睨む。

「お前は少しデリカシーと言うものを……。今更か。……と言うか、強者揃いの集団で敵を一方的に動けなくしてトドメを刺すと言うやり方は好かん。クリスと組んでいた時は、クリスの拘束スキルで動けなくなった敵を仕留めはしたが、紅魔の狩りはそれとは違う。あれは何と言うか……。蹂躙？　……何か、絶対的な強者が獲物を弄ぶ様だった」

その気持はまあ分かる。

泣き叫ぶモンスターが可哀想になり、俺も三匹で切り上げてしまった。

「……で、私もよく知るスキルとは？」

聞いてくるダクネスに、俺は一本のワイヤーを取り出した。

ロープではなく、鋼鉄製のワイヤーだ。

この世界では、技術的な事と需要的な事から、針金という物があ

まり無い。
そこで金に物を言わせて、俺が鍛冶スキルを教わった所の職人さんに、針金を幾つも編み込んだ特注のワイヤーを作って貰った。
そして、ワイヤーを使うスキル。
つまりは……。

「バインドか！　もしや、拘束スキルを取ったのか！」
俺の習得したスキルを予測し、変態が興奮しだした。

そう、変態の言う通り、俺はシルビアに散々苦しめられた拘束スキルを習得したのだ。
習得には、街をウロウロしていたクリスを捕まえ教えてもらった。

変態は、途端に赤い顔でモジモジしだす。

「その……。カズマ、私は拘束スキルについては一家言ある。どうだ、一つお前の拘束スキルを試してみないか？」
言いながら、ダクネスは俺の持つ鋼鉄製のワイヤーをチラチラと見た。

「いやお前……。これは見ての通り、大型の強力なモンスター拘束用だからな、このワイヤーは。試して欲しいなら、物置かどっかから細めのロープを……」
言いながら、俺が居間の隅に付いている物置からロープを出そうと……。

すると、変態が、
「いや！　それがいい！　……ではなく、それでいい。大型モンスターの拘束用と言ったが、それで私一人を拘束出来ない様であれば、果たして大型モンスターに効くだろうか？　いいや、効かない。だ

から、それで私を拘束してみろ」
何かを期待する様なワクワクした目で、頬を火照らせながら言って来た。

そしてそのままそそくさと、居間の中央に立つ。

「……今お前、これがいいって言ったろ」
「言ってない」
「いや、確かに言ったろ」
「言ってない。……良いから早くしろ、そんな頑丈そうな硬くて重そうなワイヤーを見せびらかせておいて、貴様お預けする気か」

お預けとか、既に隠す気も無く開き直った変態に、俺はやむなく立ち上がった。
片手に持っていた紅茶で濡れたシャツをソファーに放り、ダクネスへ向き直る。

そんな、上半身裸でワイヤーを構える俺を見て、ダクネスが赤い顔で途端に狼狽えだした。

「お、おいカズマ。お前、せめて服は着ないか。その格好のお前に今から拘束されてしまうとなると、なんだか凄くいけない事をしている気分に……」
「お前は今更何をバカな事を言っている」
既に色々と手遅れなクルセイダーに、俺は遠慮なくワイヤーを突き出すと。

「面倒臭いから、全魔力を叩き込んで、縛り上げる力は弱めにし、代わりに拘束時間を凄く長くするからな。そしてアホな事ばかり言うお前はその辺に転がしておく」

「なっ！？　この私をその頑丈なワイヤーで縛り上げただけでは飽き足らず、地に転がされてしまうだと！？　さるぐつわは！　さるぐつわは必要無いのか？　もし私が縛られた痛みで泣き叫んだりしたらどうするつもりだ！」
「どうもしないよ」
ウチの変態は今日も絶好調な様だ。
こいつはとっとと縛り上げて転がして、アクア達の元へと見に行こう。
と言うか、邪魔しに行こう。
俺はワイヤーをダクネスにかざすと、
「『バインド』ッッッ！！」
叫ぶと同時に突き出した！
それを受け、俺が手にしたワイヤーがダクネスの身体にシュッと飛び、その身体を縛り上げていく。
「なっ……！　こっ、これは……！　くう……っ、……ああっ！？」
縛られたダクネスが、そんな大声を上げる中。
俺は縛り上げられたダクネスを見て、呆然としていた。
というか、呆然と見ていた。
というか、見ざるを得ない。
「……っ、はあっ……はあっ……！　お、お前と言う奴は……！　お前と言う奴は……っ！　どうしてこうも、こんな、こんな予想を越える不意打ちを……！」
艶っぽい息を吐くダクネスは、胸の部分だけはしっかりと避けた状態で縛り上げられ、その胸を余計に強調させられる状態になって

いた。
　両手を完全に拘束されて、拘束の縛り上げる威力が強すぎたのか、ダクネスが力が抜けるように膝から絨毯の上に崩れ落ちる。
　肩口から腰の近くまでをワイヤーで縛り上げられ、その胸の双丘だけはしっかりと強調するように避けられて、絨毯の上に赤い顔で転がされるその姿は、その手の雑誌の表紙を飾ってもおかしくないぐらいに艶めかしい。

　これはいけない。
　実にいけない。

　こんなダクネスの状態を見られたら、アクアもめぐみんもドン引きである。

　と言うか、これはちょっと言い訳出来ないぐらいに酷い。
　しかし、俺は別に胸の部分は避けて拘束しようだなんて思っていなかったのだが。
　そもそも、ロクに使っていないスキルなのでそんな器用な扱い方は出来ない。

　俺の使うスキルは、女性にスティールを使えば下着を剥いだりと、色々と偏っている気がしてならない。
　俺はモジモジしながらハアハア言っているダクネスの傍に屈み込むと。

「おい、大丈夫か？　何と言うか、一応それでも拘束の力は弱めにしたつもりなんだが」
「こっ……、これで弱め……！　その、カズマ……っ。今度、金を払う。金を払うから、ぜひ強めの」
　俺の言葉にダクネスが何か言い掛けた、その時。

俺は背後から何かが来るのを感じ取った。

それは、長らく鍛えられた敵感知スキルによる警報だったのかも知れない。

本来は、モンスターや、こちらに敵意を持つ相手しか感知出来ないこのスキル。

俺がコツコツと鍛えてきたそのスキルが、主人に危機を知らせてくれたのかもしれなかった。

俺はその咄嗟の勘と本能のままに……！

「ふう、疲れちゃった。一旦休憩にしましょうか。めぐみん、お疲れ様！」

「疲れちゃったって、アクアはゼル帝と遊んでいただけじゃないですか……おや？」

そんな声が居間から聞こえる。

「フウ……フウ……フウ……」

俺の片手に掛かるのは、縛られたままのダクネスが放つ熱い息。

「カズマとダクネスが居ませんね。どこ行ったのでしょうか」

そんな、不思議そうなめぐみんの声。
「んんー？　この私の、くもりなきまなこによると、カズマかダクネスの部屋でボードゲームでもしていると見たわね」
そんなアクアの声が響くと同時に、パタパタとどこかへ駆けて行く音。

恐らくアクアが、俺かダクネスの部屋へと行ったのだろう。
やがて、めぐみんがソファーにでも座って紅茶でも飲んでいるのだろうか。
居間の中から、茶器か何かが皿と触れ合うカチャカチャという音がする。

俺は、左手にダクネスの温かい体温を感じながら、咄嗟にダクネスを抱いて隠れてしまった狭苦しい物置の中、これからどうしようかと悩んでいた。

人間、慌てるととんでもない行動に出てしまうものだ。

と言うか、あの状態で見つかるよりも、今の状態を見つかる方が遥かにヤバイ。
なぜ俺は隠れてしまったのか。
別にやましい事なんてしていないのに。
ダクネスに頼まれてやっただけなのに。

……いや、白状しよう。
縛られて艶っぽい顔したダクネスに、ついクラッと来た。
そんなやましさから、ついつい隠れてしまったのだろう。

大丈夫、めぐみんなら分かってくれる。
ダクネスが縛られたがるなんて想定内だろう。

そして、俺が上半身裸だなんて、それこそ想定内の事だろう。

……いやアウトだこれ。

俺はダクネスに顔を寄せ、その耳元で囁いた。

「おいダクネス。お前がおかしな事頼んでくるから、おかしな事になっただろ！　この姿をあいつらに見られると色々と妙な事になる。それはお前にも分かるな？」

俺のその言葉に、ダクネスが潤んだ瞳でコクコクと頷く。

何だろう、前にもこんな展開があったな。

ああそうだ、ダクネスの屋敷に侵入した時か。

と言うか、なぜ俺はダクネスの口まで押さえてしまっているんだろうか。

「よし、それじゃこの状況をどうするかを考えるぞ。いいか、手を離すぞ？」

ダクネスに言い聞かせながら、俺はダクネスの口元を抑えていた手をゆっくりと……、

「ッ！？　いだだだっ！　お、おまっ……！　何人の手に噛み付いてんだ、離せ！　痛い！　痛いってこのバカッ！」

ゆっくり離していった右手にいきなり食いつかれ、俺はそのダク

ネスの頭を左手でバシバシ叩いて引き剥がした。

「お前何してくれてんの!?　見ろこれを！　クッキリ歯型付いてんじゃねーか！」

半泣きで小さな声で食って掛かる俺に、ダクネスが。

「……我慢……出来ないんだ……。何かを噛んで、歯を食い縛っていないと……！」

そんな、狂犬みたいな事を言い出した。

何を言い出すんだこいつは、もう本当どエム属性だけで勘弁して頂きたい。

それは、先ほどまでの艶っぽい頬の赤さではなく。

それは、泣き出しそうな羞恥に染めた赤い顔で。

「……トイレ行きたい……」

「言ったじゃん！　だから俺、さっき言ったじゃん！　紅茶ばっか飲んでると、トイレ近くなるからって言ったじゃん……！」

1話（後書き）

長くなったので続きます。

2話

暗く、狭い物置の中。
縛られたダクネスが頬を赤く染めている。
それは、いつもみたいな興奮による火照りではない。
それは……。

「カズマ……。カ、カズマ……！　どうしよう、マズイ、これはマズイ！　というか、洒落になっていないレベルでマズイのだが……！」
小さな声で囁きながら、上半身を縛られたままモジモジし、半泣きになっているダクネス。
狭い物置の中で、俺はダクネスにのしかかる体勢でピッタリとくっついていた。

「人の言う事聞かずにお茶ばっか飲むからだ！　実は前々から思っていたんだが、お前はひょっとして結構なバカなのか？　脳筋なのか？　たまにアクアと大差ない頭の時があるぞお前は」
俺のその囁きにダクネスが、ギリッと奥歯を食い縛ってこちらを恨みがましい目で睨んでくる。
言いたい事はあるが、今はそれどころではないので黙っているという感じだ。
というか、俺もここで争っていてもしょうがない。

「仕方が無い……。もうこうなったら、今の内に出て謝ってしまおう。めぐみんはお前と違って直情的で短気なアホじゃない。ちゃんと説明すれば分かってくれる。こういう時は早めに出て見つかった方が傷は浅いんだ」

「お前が私をどう見ているのか一度徹底的に話し合いたい所だが、ちょっと待ってくれ。その……。お前は知らないだろうが、めぐみんと二人でいる時、ちょっと色んな話をしていてな……。とにかく、今こんな姿を見られるのはマズイ、めぐみんを傷付けそうだ！　も、もうちょっと待とう！」

何だよ、俺の居ないところで何話してるんだよ、確かめぐみんもダクネスと二人でいる時には色んな話をしているとか、そんな事言っていたが。

「……しょうがない。もうちょっと待つぞ」

「おい、ちょっと私の口に何か咥えさせてくれ。歯を食い縛って耐えているから」

絵的に更にマズイ事になると知りつつも、俺はダクネスに、さるぐつわ代わりにハンカチを咥えさせた。

物置の中でじっと待つ。

確か、アクアとめぐみんは休憩だと言っていた。

という事は、待ってさえいればいずれ休憩も終わって出て行くと言う事だ。

パタパタと、誰か騒々しい奴が走る音。

「いないんですけど。アクセルに帰って来てこの方、ニートの本領発揮して、産廃よりも迷惑な存在になったカズマはおろか、カズマのお守りしててって頼んだダクネスまでいないんですけど」

あの女覚えていろよ。
夜中に鳥小屋を改造してやる。
確かに金が入ってからゴロゴロしかしていないが、人を産廃呼ばわりとはいい度胸だ。

「どうしたのでしょうか。暇を持て余したカズマならば、意味も無くどこぞにフラフラと出歩いて行ってもおかしくは無いのですが。お守りを頼んだダクネスまでもが一言も無しにいなくなるというのは……」

……。
そんなフラフラ出歩く遊び人みたく思われているのかなあ……。

……と、その時。
「……ッ！　……ッッ！」
ダクネスが、何かを訴えかけるように小さく呻く。

見れば、この狭苦しい物置の中で我慢している所為もあってか、汗ばんできたダクネスが非常にエロティックな具合になって息を荒げている。
うなじを流れ落ちる一滴の汗。

密室で、こんな状態と言うのは本気で洒落にならない……、うおっ！
「コッ、コラッ！　いきなりどうした、暴れるな！」
突如動き出したダクネスから、俺は囁きながら咥えさせていたハンカチを取る。
「……ハアッ……！　だ、ダメだ……！　予想以上にダメだ……！」

「お前、頑張れよ！　もうちょっと頑張れよ！　あいつらはただの休憩だから、すぐにまた作業に戻るって！」

というか、ダクネスがこの狭苦しく暑苦しい物置で中途半端に我慢した所為で、お互いが汗ばみ火照り、余計に事態が悪化していた。

「言ったじゃん！　だから、俺言ったじゃん！　出るんなら早めの方が良いって！」

「す、すまん……！　でも、でも……！」

まだ何かを言おうとするダクネスの口に、俺はこれ以上は問答無用とばかりにハンカチを突っ込む。

先ほどまでならばともかく、今更ダクネスを出す訳にはいかない。じっとりと滲んだ汗で黒いタンクトップが肌に張り付き、これはもう何も無かった事を理解して貰っても、こんな状態のダクネスと一緒に居たってだけで軽蔑されそうなレベルだ。

せっかくリア充になりかけているのだ、このアホの所為でぶっ壊されてたまるか。

俺がそんな事を考えていると、ダクネスがもう我慢出来ないとばかりに、上にのしかかっている俺を跳ね飛ばして飛び出そうと、突然動き出した。

それを慌てて上から押さえつけ、ダクネスの耳元で囁きかける。

「おい、大人しくしてろ！　お前さえ我慢してくれれば丸く収まるんだ。そもそも、俺の言う事を聞かなかったお前が悪いんだぞ！　ジッとしてろ！」

俺の言葉に、ダクネスが全てを諦めたかの様に、観念する様にそっと目を閉じた。

……おい止めろよ、目を閉じるな、以前屋敷に侵入した時といい、お前はこういう状況になった時に諦めるのが早すぎる。
こんな状況で見つかったら本当に洒落にならないだろうが。

俺はダクネスの口に咥えさせていたハンカチを抜き取ると、
「おい止めろ、そっと目を閉じるな、それは本当に止めろ色々とヤバイから！　いいか、アホなお前に説明してやる。この状況で飛び出せば間違いなく皆とは気まずい事になる。アクアに見つかってみろ、ギルドの連中に嬉々としてこう言って回るぞ。大変よー！　ウチの二人が、片方が半裸で片方が縛られた状態で、物置に篭って汗だくになってたの！　何があったかはご想像にお任せします！　ってな」
「ううううう……」
ダクネスの泣きそうな呻きを聞きながら、暑い物置内で少しでも涼を取るため、僅かに残っていた魔力で自分にフリーズを掛ける。

フリーズで涼を取る俺を羨ましそうに見上げるが、自分にも掛けてくれとは言わないダクネス。
今の状態で冷えるのは危険だとは分かっているらしい。

と、ダクネスがモジモジしながら……。
「……な、なあカズマ……。こんな状況なのに、トイレを我慢させられているこの状況が少し楽しくなってきた私はちょっと変なのだろうか」
「よし、もうお前は出来るだけ黙っていろ。極力喋らないでくれ」

そんな救いようもない事を言い合っている俺達の耳に、やがて、物置の扉越しにこんな会話が聞こえてきた。

「なーに？　めぐみん、そのお守り何個作る気？　カズマの荷物袋がパンパンになるまで持たせるつもりなの？」
どうやら、めぐみんはまだ他にもお守りを作っているらしい。
「違いますよ。これは……。皆の分です。こっちがアクア、これが私。……そして、いつも最前線で私達を守ってくれるダクネスには、この一番頑丈に作ったやつです」
そんなめぐみんのいじらしい言葉を聞いて、モジモジしていたダクネスが大人しくなる。
……どうやら、俺とダクネスの思いは一つになったようだ。
この状況をめぐみんに見られて、ガッカリされるのは何としてでも避けたいという思い。
ダクネスが、上に乗っかる俺に囁いてきた。
「……おい、この状況をなんとか出来ないか。機転が利くのがお前の取り柄の一つだろう。何かないのか？」
こんな状況でそんな事を言われても。
俺は、人二人がギリギリで座っていられる小さな物置の中を、何か無いかと探してみた。
……と、俺はある物を見つけ出す。
俺が運がいいと言うのは本当だったらしい……！
「ダクネス喜べ！　良い物を見つけたぞ！　これで、一番の難題は解決した！」
そう言って俺はダクネスに、嬉々としてソレを見せつけた……！

ジュースの瓶。

「……ッ！　……ッ！！」

「や、やめっ……！　止めろ！　真顔で、無言で何度も頭突きすんな！」

俺が差し出した小瓶では不満らしい。

「ちっ……。何か無いかと言ってきたのはお前だろうに……。全く、これだからプライドだけは高いお嬢様は……」

何気なく俺が言ったその一言に、ダクネスがバッと頭を上げた。

「……おい待て、貴様、今何と言った。私は貴族としてのプライドで拒否しているのではない！　女だ！　女としてのプライドだ！　人として、捨ててはいけない何かだろうコレは！　こんな物に済ませる奴がどこの世界にいるこの変態が！」

「俺のいた国で自宅を守る仕事に就いていた人達は、席が離せない時や忙しい時には、これに似たペットボトルと言う物で済ませる上級者がいたぞ」

「！？」

そんなバカな会話を続ける俺達に比べ、扉の向こうでは……。

「ねえねえめぐみん。何だか、嬉しそうにそれ作るわね。私、なんかめぐみん見ててホッコリするわ」
そんな、のんびりとしたアクアの声。

「嬉しいですよ。だって、私は紅魔の里へ行くと決まった時、実は結構ボンッてなる覚悟をしてましたからね。またこうして、皆で平穏な日々を送れるなんて夢のようですよ。このお守りは願掛けなんです。誰も欠ける事無く、ずっと皆一緒に居られますようにっていう。……アクアにも、いつも感謝してますよ？　ずっと一緒に居ましょうね」
「めっ……めぐみんっ！　なんて……、なんていじらしいの！　分かったわ、どうせ天界には帰れないんだし、ここで楽しく暮らしましょう！　お金はカズマが何とでもしてくれるわ！　豪遊よ！　皆でおもしろおかしく豪遊をするの！」
居間の方では、そんな、ちょっと楽しげでほのぼのとした会話が進む中。

「大体な、前々から思ってたんだよエロ貴族！　お前、やらしい身体でやたらと男を誘う色気を振りまくクセに、何だかんだと身持ちが堅いってどういう事だ！　色気でムレムレの身体してるクセに、変なところで恥ずかしがりやがる！　何なの？　変態痴女なのか純情娘なのかハッキリしろよ！　どスケベなクセに処女とかどうなんだよ半端者が！」
「よし、貴族の権力を行使するのは嫌いだが、貴様だけは別だ！　貴族を侮辱した罪で、貴様は処刑だ、処刑してやる！」

ダクネスが、先ほどはうつ伏せの体勢で物置の中に屈み込んでいたのが、今は両腕を縛られたまま、この狭い中で仰向けの体勢を取っていた。
その体勢で、狭い中逃げ場もない俺に向かって何度も何度も蹴りつけてくる。

「やってみろ！　やってみろよお嬢様！　最弱職の冒険者に勝てないクルセイダーさんよ！　俺に一対一の勝負じゃ勝てないからって、お父様のお力にすがりに行くんですか、ララティーナ様格好良いですねぐあっ！」
「上等だ、あの二人が外に出たら決闘だ、ぶっ殺してやる！」
「やりやがったな、貴族の令嬢がはしたなくも人の顔足蹴にするってどういう事だ！　さすが貴族のお嬢様は言葉遣いも違いますね！」
「ああっ、やっ、止めろっ！　腹を押すな！　こんな所で私が我慢できなくなったなら、お前だって他人事では無くなるからな！」

こんな緊急事態にも関わらず、俺達は小さな声ながらも喧嘩していた。
居間で和やかに会話している二人と比べ、俺達の人間の小ささが良く分かる。

「……ねえ、なんかどこかで、カタカタと音がしない？」
「……？　そうですか？　それよりも、そろそろ作業に戻りましょうか。夕飯までに作業を終えて、今日は鍋にでもしませんか？　その頃には、あの二人も帰って来るでしょう」
「いいわねー、そろそろお花見の季節だし、屋敷の庭の花でも見な

がら鍋で一杯やりたいわね！　あの二人は、帰って来たら鍋の仕込みをさせましょう！」
そんな和やかな事を言いながら、再び屋敷から出て行く二人。
そして…………。

「舐めやがってこのエロいだけが取り柄の肉盾が、お前の存在意義を教えてやんよ！」
「やってみろ！　肝心な所でヘタレる根性無しが、やれる物ならやってみろ！」
俺とダクネスは本来の目的も忘れ、アクアとめぐみんが出てった後も、狭い物置の中で喧嘩していた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺は荒い息を吐きながら、物置から引きずり出した、両手を縛られたままのダクネスをなんとか立たせる。
「クソッ、アホな事に時間取られた……。何やってるんだ俺達は……。もういいから、とっととトイレでも何でも行ってこい。……はあ、俺は疲れたから部屋に戻ってちょっと寝てくる。死んでから一週間とちょっと。こうして暴れたりすると、首の後ろが痛むんだよ」
ダクネスが、首の後を気にするそんな俺を一瞥し。

「全く、こっちこそくだらん時間を取られた。寝るなら寝て来いぐーたら男め。私も、トイレに行ったらお前のバインドの効果が切れるまで、自室で大人しくしている事にする。いいか？　貴様の体がキッチリ元通りになったなら、その時こそ一度真剣に勝負しろ。ここまで舐められっぱなしでは気が済まん」

そんな捨て台詞を残して、縛られたまま、てくてくとトイレに向かって歩いて行った。

……全く、なんて女だ。

アイツには、物分りの良いめぐみんの爪の垢とかを、少し煎じて飲ませてやりたい。

俺はヨタヨタしながらもトイレに向かうダクネスを見送り、二階の自室へと歩いて行った。

やがて自室のベッドで横になり、暴れたせいで未だにジンジンと痛む首後ろをさすっていると。

部屋のドアが、ドンドンと叩かれる音がした。

……と言うか、思い切り蹴られる音が。

一体何だとドアを開け、俺はそこに立つダクネスの姿を見て不審に思う。

それは、困った様な、今にも泣きそうな表情を浮かべるダクネスだった。

どうしたんだ。

先ほどの事を気にして謝りにでも来たのか？

別に、気位の高いこいつとは喧嘩ぐらいはしょっちゅうするし、今更謝りになんて来なくても……。

俺がそんな事を考えていると。

ダクネスが、膝をこすり合わせてモジモジしながら言ってきた。

「す、すまない、カズマ……さん……。その、手が使えないので、トイレのドアが開けられません……」

めぐみん達に見られたらヤバイ展開第二弾です。

俺の部屋から一番近いトイレとなると、二階にあるトイレとなる。

ここなら急にめぐみんやアクアが帰って来ても、玄関から距離もある事からまだ大丈夫だろう。

「は、早く早く、早くしろ！　ヤバイ、もう本当にヤバイ！」

泣きそうな顔で急かすダクネス。

早くしろと言うのは、トイレのドアを早く開けてと言う事だ。

……先ほど散々喧嘩した後だ、もうちょっと追い詰めてみたい。

「何がどうヤバイのかを、そこん所詳しく」

トイレのドアの前でモジモジしていたダクネスが、

「おおおお、お前と、お前と言うやつは……！　こんな時にこん

なプレイをしてくるだなんて、お前はどこまで私好みな……！　ああもう、私が悪かった！　悪かったから、開けてくれ！　今はこんなプレイを楽しんでいる余裕は本当に無いんだ！」

今にも本当に泣きそうに言ってきた。

「しょうがねえなあ。ああ、しかし首が痛い。この首が治ったらお前との決闘かあ……。嫌だなあ、それを思うとどうしても、このドアノブを開ける手が鈍く……」

そんな、ネチネチと嫌がらせをする俺をジッと見詰めていたダクネスが。

「……グスッ……」

「悪かった！　俺が悪かった！　全面的に俺が悪かったから泣くな！　おいズルいぞ、女が泣くのはズルい、本当にズルい！」

ポロッと一粒涙を零したダクネスに、俺は大慌てでドアを開ける。

だが……、

「……もういい。このまま漏らしてめぐみんやアクアに泣きついてやる」

「悪かった！　本当に俺が悪かったから！　調子に乗った！　謝るから許してください！」

とんでもない事を言い出したダクネスに、今度は逆に俺が泣き顔になり、開けたドアの前から立ち退いた。

両手を縛られたままのダクネスが、そのままトイレの中に入り、そのドアを閉めると……。

「お、おいカズマ、下着！　どうしよう、下着が脱げない！　ああクソッ、これ……、もうどうしよう……っ！」

トイレの中から聞こえるダクネスのそんな泣き声。

……しょうがない、非常事態だ。
非常事態という名の、誰に恥じることも無い大義名分が出来てしまった。

「分かった分かった、今、俺がパンツ下ろしてやるよ」

言いながら、再びドアを開ける俺にダクネスが大慌てで言ってくる。

「おい待て！　待ってくれ！　……うう、クソッしょうがないか……。おいカズマ、せめてトイレの窓に掛かっているカーテンを閉めてくれ！　それで暗くすればなんとか……！」

なるほど。
しかし……。

「千里眼スキルなんて物を持っていて、本当にすいません……」
「あああもうっ……！　もうっ……！　お前って奴は、お前って奴はどうしてそう便利な奴なんだ！　そんなだから肝心な時にいつもいつも頼りになる！　ありがとうっ！」
完全にパニックになっているダクネスが、訳も分からず泣きながら、ヤケクソになって礼を言う。
これは本当に限界が近いのだろう。

と、ダクネスが、何かを閃いたかの様にパアッと顔を輝かせた。
「スティールだ！　カズマ、トイレのドア越しに私にスティールを仕掛けてくれ！　お前のセクハラじみたスティールならば、私の下着だけ剥ぎ取れるだろう！　下着を見られるのはもう仕方が無い、スカートの中に手を突っ込まれて下着を下ろされるよりはマシだ！」

なるほど、それは良い考えだ。
しかし……。

「先ほどの、お前にほぼ全力で掛けたバインドの所為で、魔力は空に近い状態に……。その上、物置でチマチマとフリーズで涼を取っていたから完全に魔力は空です」
「さっきの、肝心な時にいつも頼りになるという言葉と、ありがとうの言葉を返せ！　ああもう、ああもう、ああもう……っ！！」

結果、少しだけ下着を下ろし、後はトイレの中でダクネスが、壁を使って自力で下ろす作戦に。
ゴソゴソと聞こえてくる音が凄く気になるが、これ以上居る必要も無いだろう。
俺はトイレから外に出ようと……。

「カッ、カズマ！　カズマ！　行く前にちょっと待て！　で、出ない……っ！　どうしよう、出てこない……！」

苦しそうなダクネスの声。
いや、それこそ俺にそんな事言われても。
我慢をし過ぎて身体に支障をきたしたのか？

ともあれ、ドアの外の俺に出来る事と言ったら……！

俺はその場で軽快に手拍子を打ちながら。

「頑張れ頑張れダ、ク、ネス。頑張れ頑張れダ、ク、ネス」
「バカッ！　お前はどうしてそうなんだっ！　紙だ！　トイレ紙がロールから出てこない！」
ああ、なるほどそっちか紛らわしい。
この世界のトイレ文化は、使用するのは古い布か、荒い落とし紙だ。
紙自体がそこそこの値段がするこの世界。
トイレットペーパーなんて使っているのは一部の金持ちくらいのものらしい。
紙を、壁に掛かっているロールから出してやった所で、両手が使えないのにどうやって使用するんだろうとも思ったが、まあ何とかするだろう。
俺はドアノブに手を掛けて、中のダクネスに呼び掛けた。
「分かった分かった、それじゃあ開けるぞー！」
「一体何を開ける気なんですかあなたは」
……いつの間にかトイレの入口に、アクアとめぐみんが立っていました。

「……まったく、アホですねえ……。長い付き合いですし、今更そんな状態でも誤解なんてしませんよ」

ざっと事情を説明しただけで全てを理解し、呆れた声で言ってくるめぐみん。

この理解の早さと知性を他の二人にも見習って欲しい所だ。

そんなめぐみんを見て、ダクネスが縮こまる様に身を小さくしながら呟いた。

「うう……。面目ない……」

そんなダクネスにめぐみんが。

「……それに」

実に嬉しそうに笑いながら、そんなダクネスと、ついでにアクアへお守りを差し出してきた。

それは俺に渡してくれたあのお守り。

皆一緒に居れます様にって願掛けの掛かった、あのお守りだ。

「それに、こんな風に訳も分からず毎日バタバタしている方が、私達らしいじゃないですか」

そう言って、実に嬉しそうに笑う。

それに釣られるかの様に、自然とダクネスや俺にも笑みが戻り……。

そんななごやかな空気が、相変わらず空気を読まないアクアの言葉で凍りついた。

「ところで、間に合ったの？」

そこは俺も気になってました。

2話（後書き）

間に合いました。

下品な話で申し訳ない。

次回からは、ようやく死後の傷も完治して平常運転。

3話

「……」

アクアが、ソファーの上で体育座りの体勢でジッと俺を見ている。

……どうしたのだろうか。こいつは朝から飽きもせずに俺を見ている。

最近モテ期が来たと言えなくもない俺を。

これはもしや、惚れた男を見る女の目と言うやつなのだろうか？

俺は居間のソファーの上でゆったりくつろぎ。アクアに言った。

「……どうした、そんな風にじっと見て。ああ、これが欲しいのか？　アクアも飲むか？」

そんな事を言いながら、手にしたシャンパンみたいな物を一気に飲み干す。

シュワシュワというかシャワシャワというか、変わった味だ。

アクアいわく、これはちょっと良い酒らしいが、どこら辺が良いのか俺には酒の味が分からない。

セレブだ何だと言い出し、高い紅茶飲みだしたアクアを真似てみたのだが。

朝からこういった物を飲んだくれると言うのは、ある意味勝ち組の人間の特権ではないだろうか。

やはり、そんな俺をジッと見ていたアクアは。

「……紅魔の里から帰って来たら、カズマがビックリするぐらいのダメ人間になったなーと思って」

おっと、惚れた男を見る目ではなく、ダメ男を見る目でしたか。

だが、今の俺はそんな一言では動揺もしないし怒りもしない。

若くして、屋敷と共に一生遊んで暮らせる大金を得た男の余裕というヤツだ。

「おいおいアクア。お前は何を言っている。俺達は成功者だぞ？お前も大金を手にしたセレブみたいなもんだろ？　身の丈に合った暮らしをして一体何が悪いんだ。お前だって、こないだだったか、これからの人生は皆で豪遊するって言ってたじゃないか。銀行に大金預けている以上、利子だけで食べていけるんだぞ。もう労働なんてバカらしい。気が向いた時に冒険行って、後はおもしろおかしく遊んで暮らそう」

俺の言葉に、アクアがなるほどと呟く。

そして、テーブルの上に置かれていた俺のシャンパンを手に取った。

「言われてみればそれもそうね。じゃあ私も、この高級ネロイド割り、ちょっと貰うわね」

「……それ、シャンパンだろ？」

「ネロイド割りよ。この世界に炭酸なんて無いもの。シャワシャワする飲み物には大概ネロイドが混ざってるわよ」

言いながら、アクアがそそくさとグラスを取りに行く。

と、そんなアクアと入れ替わりに、ダクネスとめぐみんがやって来た。

……というか、二人とも冒険にでも出るような格好だ。

ダクネスは鎧をガチガチに着こみ、めぐみんもしっかりと愛用の杖を握っている。

それを見て。
「一日一爆裂か？　気をつけてなー。金は後で払うから、帰りに晩飯を買って来てくれないか。出来れば、夜はこってりした物が食いたい」
俺はソファーに横になったまま、二人にそんな事を言った。

そんな俺の姿をめぐみんがじっと見る。
今度こそ、惚れた男を見る女の目って奴だろう。
「……ダクネス、働きもせず朝から飲んだくれてるこの男、どうしましょうか」
「……ん、私は、どこかに捨ててきてもいいと思う」

あれっ。
どうも今回も違ったらしい。
これは愛想尽かした男を見る目ですね。

そんな二人に、俺はハッキリと言い返した。
ソファーに仰向けに寝転がりながら。

「お前らな。ハッキリ言うが、今の俺はもう働く意味が無いんだよ。人はなぜ働くんだ？　それは、お金を得て生活をする為だろう。そして、俺はもう大金を得ている。なら、残りの人生自堕落に暮らして一体何が悪いんだ。別に人様に迷惑掛けている訳でもあるまいし」

そんな事を言いながら、俺はテーブルの上に置いておいたツマミ代わりのさやエンドウをポリポリかじる。
そんな俺を見て、ダクネスが重々しくため息を吐いた。
「嘆かわしい……。大金があるからもう働かない？　皆がそんな考えであれば、世の中上手く回っていかなくなるぞ。例え働く必要が無いぐらいに金はあっても、何がしか世に貢献するのが人としての

役割だ」

そんな立派な事を言うダクネスに、俺はポツリと。

「お前ら貴族と同じ様な毎日を送っているだけじゃないか」

「ぶ、無礼者！　貴族をバカにするな！　お前達の目には何もしていない様に見えるかも知れないが、民が平穏に暮らしていける為に粉骨砕身働いているんだぞ。お前には、民の為になれる力があるだろう。金の為とは言わず、人の為と思ったらどうだ。人に害を成すモンスターを倒すだけでも、ここでゴロゴロしているよりずっといい」

俺は何か立派な事を言っていたダクネスに背を向けるように、ゴロンとソファーの背もたれ側に身体を向け、アクビした。

「あっ！」

それを見たダクネスが、何か声を上げているが気にしない。

長いお嬢様人生の中、自分が熱く語っている途中で、誰かにそんなぞんざいな扱いを受けたのは初めてなのだろう。

俺の名は佐藤和真。

権力には屈しない男。

権力者側のダクネスが働けと言うのならば、それに断固として歯向かうのが俺の務めではないだろうか。

俺の態度に腹を立てたのか、ダクネスがツカツカと俺が横になっているソファーに歩いて来る。

そして、俺の服の背中部分を引っ張り。

「カズマ、いいからちょっと一緒に来い。毎日ゴロゴロしていて、もう身体は治ったのだろうが。我々と共に討伐……。こ、こいつっ

！　コラッ、手を離せ！　抵抗するな！」
ソファーにがっしりとしがみついて抵抗する俺を、ダクネスは本格的に引き剥がそうと……！

と、そんなダクネスにめぐみんが待ったをかけた。
「まあまあダクネス、ここは私に任せてください。……カズマ、里から帰って来てからずっとゴロゴロしてますが、たまにはカズマが活躍する所を見せて下さいよ。イザって時は頼りになる、そんな格好良い所を私に見せくれませんか？」
ソファーにしがみ付く俺にめぐみんが屈み込みながら、口元に優しい笑みを浮かべて諭すように言ってくる。
俺はそんなめぐみんを、一瞬だけチラリと見て。
「……」
俺は再びプイッとソファーの方を向き直り、しがみ付いた。
「あれっ！？」
めぐみんが軽くショックを受けた様な声を上げる。

俺の名は佐藤和真。
一時の情に流されて、本質を見失う事などしない男。

最近良い感じになっためぐみんと言えど、そこは簡単には譲れない。
今日はしばらく飲んだくれたあと、夕方まで昼寝をし、飯を食ったら夜遊びに行くという過密なスケジュールが立てられているのだ。

俺はソファーに横たわったまましっかりとしがみつき、そのままの体勢で二人にチラッと視線を向けた。

「……モンスターは人に害を成すから駆除をする、その他の、人に利益を与える生き物は生かしてやる。俺は、そんな人間のエゴみた

いな考え方は嫌いだな。人は賢い生き物だ。俺達はもっと、彼らに対して優しくなれる……。お前らも、子供の頃に持っていた優しい気持ちを思い出して欲しい……」

二人に告げると、さやエンドウをひとつ摘み、それを口にして再びソファーの背もたれへ向き直り……。

「お、お前は自分が借金まみれの時は、血眼になって美味しいモンスターはいないかと探していたではないか！　こんな時だけ綺麗事を言い出すな！」

「そうですよ！　紅魔の里でも、養殖と言うレベルアップ方法があるがお礼に受けるかと言われ、嬉々として付いていったじゃないですか！　それが、途中でヘタレて帰って来た人間が何を今更綺麗事を！　ダクネス、そっち持ってください！　引き剥がしましょう！」

ダクネスが俺の足を掴み、めぐみんが俺の背中にピタリと張り付き、ソファーから引き剥がそうと俺の腰に手を回す。

背中にめぐみんの体温を感じながら俺は言った。

「おい、俺の背中にくっ付けた胸をもっと強調するんだ。そうしたらソファーにしがみ付く力を弱めないでもない」

「最悪です！　やはりこの男は最悪ですよ！　ダクネス、この男にロープでも掛けてギルドまで引きずって行きましょう！」

「も、もうこの男は本当にどこかに捨ててきてしまった方がいいんじゃないのか……？」

二人がそんな事を言いながら、ソファーから俺を引き剥がそうとする中。

台所からアクアが、グラスとツマミ、更にはライムか何かを乗せた皿を持って戻って来た。

「……？　一体またどんな斬新な遊びしているの？　遊びのルール

を教えて頂戴」
「違う！　これから皆で討伐に行こうという話をしていた。だがカズマが行きたくないと駄々をこね……。というかアクア、お前までこの男に毒されないでくれ……」
ダクネスが、アクアが持つ酒の肴などが乗ったお盆を見て、困った様な顔をする。
……毒されたとは失礼な、むしろアクアは昔からこんなもんだっただろうが。

アクアが首を傾げながら、皿の上のライムを摘んで口に入れ、酸っぱそうに顔をしかめながら言った。
「ふーん？　私は別に行ってもいいけれど、クソニートの本領を発揮したカズマを連れて行くってのは至難の技だと思うの。ここは、最弱職のカズマさんは置いて行って私達だけで行けばいいんじゃない？」

そんな、流石に聞き捨てならない事を。

俺はアクアの何気ないその一言にムクリと起き、
「……おいおい、言ってくれるな上級職のアクアさん。何だかんだ言ってこのパーティ内で一番強いのは俺だろ常識的に考えて。そんな俺を未だに最弱職呼ばわりですか？　パーティ内で、それぞれ役割の違う俺達が強さを比較するのは意味のない事だが、弱っちい上級職さんに言われるとカチンと来ますよ」
そこはキッチリと言っておくべきとばかりにアクアへと向き直る。
アクアは、酸っぱそうにしながらも二個目のライムを口に入れ。

「あら、カズマったらこの中で一番強い気でいたの？　確かにカズマのスキルは便利ね。不死王の手なんて使ったなら、ダクネスなんて簡単に無力化されちゃうでしょうし。……でも忘れちゃったの？

私の着ているのは神器よ神器。あらゆる状態異常を無効化し、強い防御を誇る最強装備。カズマにどうにか出来ると思っているの？」

「おい待て、私だってそんなに弱くはないぞ、私の防御スキルの中には状態異常耐性を向上する物があってだな……」

ライムを口の中で転がしながら、アクアが挑発的に言ってくる。

こんな挑発に乗るのはバカらしい。

バカらしいが、ここはちょっと言っておかなければならない。

「おいアクア、俺が状態異常だけが武器の男だと思うなよ？　剣を使わせれば、当たらないダクネスなんて勝負にならないぐらいにはスキルレベルが上がっている。遠距離からの狙撃、そして接近しての剣での攻撃。お前、俺に勝ち目なんてあると思ってんの？」

「お、おいっ！　私だって、当たらないとは言え体力と耐久力には自信がある！　長期戦に持ち込めればお前と互角に戦う事も……！」

俺の言葉にアクアがピクリと眉を動かした。

そして、持っていたお盆をテーブルに置くと。

「あらあら、カズマさんたらちょっと勘違いしちゃってるみたいね？　私は今のクラスはアークプリースト。とは言え、その高いステータス的に、魔法使い系以外のクラスなら何にだってなれた女よ？　ちょっと剣が使える？　ちょっと弓が使える？　私が自分に支援魔法を掛けて近接格闘スキルで殴りかかったなら、カズマなんて一分と持たないわよ？　ああ、それと……」

アクアは、その長い青髪をファサっと後ろに払い、自信たっぷりに言葉を続けた。

「他にも、バインドってスキルを覚えたみたいね？　でも残念ね、

そんなので絡め取られるのはダクネスぐらいよ？　私にはスペルブレイクっていう、あらゆる魔法やスキルを強制解除しちゃう魔法があるの。そして私は長い付き合いですもの、カズマの小賢しい小手先の技なんて通用しないわよ？」

「お、おい……。確かにバインドを使われると無力化はする、するが……。と言うかアクア、そんな事が出来たのなら私が先日拘束されて不自由していた時も、さっさとそれを使ってくれれば……」

自信たっぷりな顔で不敵に笑うアクアに、俺はキッパリ言った。

「……よし、じゃあ勝負するか」

俺の視界の隅で、なぜかちょっとだけ頬を染め、軽く落ち込んでいるダクネスの肩を、めぐみんがポンポンと叩いていた。

久しぶりの冒険者ギルド。

ここに顔を出すのは何週間ぶりになるだろうか。

そこかしこに見覚えのある顔を見かけ、そんな見覚えのある彼らは俺と目が合うと、片手を上げて挨拶してくる。

テーブルの上でうつ伏せになり、昼間からクダを巻いているチンピラの隣を通り過ぎ、俺は張り紙が貼り付けてある掲示板へと向かった。

俺の隣ではアクアが掲示板とにらみ合い、勝負に相応しそうな獲物を探している。

まさかお互いに喧嘩する訳にもいかず、どちらが上かはモンスターの討伐数の多さで決める事になった。

めぐみんは審判だ。

武器を持たないアクアには、流石に素手ではキツかろうとおまけでダクネスを付けてやった。

おまけ呼ばわりされたダクネスが涙目になっていたが。

討伐数を競うのだから、出来るだけ数の多いモンスターが良い。

最近は、カエルは狩り尽くされてあまりいない。

となると、何か良い物は……。

隣から、ブツブツと声が聞こえる。

「……つがいのマンティコアの討伐……。ワイバーンの亜種が岩山に巣を作り始めているからこれの駆除を……。……どれもこれも、インパクトに欠けるわね……」

クエストは絶対に俺が決めてしまおう。

と、一枚の紙を見つけた。

それは、俺達とは何かと因縁のあるモンスター。

クエスト、初心者殺しとゴブリン討伐。

初心者殺し。
これを倒せる事が中堅冒険者と呼ばれる条件だとも言われる強敵で、俺が一度殺された相手でもある。
俺達は、もう駆け出しとは言えないレベルだ。
何だかんだ言って、初心者殺し以上の強敵とも渡り合っている。

リベンジだ。

一度倒した事はあるものの、その時は俺も殺されたので引き分けみたいなもんだ。
俺はその紙を剥がし、三人に見せつけた。
途端に、三人も嫌そうに顔をしかめる。
こいつらにとってもトラウマみたいなもんなのだろう。

なんせ、目の前で仲間を殺したモンスターだ。
俺は殺されたのは一瞬の事だったので、不思議とそれほどまでの苦手意識は無い。

「こいつはゴブリンだのコボルトだの、弱いモンスターの群れを利用して、それをエサに初級冒険者をおびき寄せるだろ？　勝負方法は、こいつが守っている雑魚モンスター、ゴブリンの討伐数の多さ。そして……。初心者殺しを倒した方には大幅得点って事でどうよ？
俺達もそろそろ中堅を名乗っても良い頃合いだ。……ここらで一発、こいつを倒しておこうぜ？」

俺のその言葉に。

三人は、今度は自信有り気に不敵に笑った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

初心者殺しの目撃情報があった場所。
そこは、街からかなり離れた林の中。
森林と言う程には木々が生えている訳ではないその場所に、武装した小鬼集団、ゴブリンが現れたらしい。
そして、その群れを守る様に初心者殺しが周囲をうろついているそうな。

弱いモンスターを狩りのエサ代わりに使うその狡猾なモンスターは、どうやら今は留守らしい。
「いるわねゴブリン達が！　あの程度の相手なら、私のゴッドブローで一撃ね！」
アクアの言葉の通り、目の前の林の奥には、エサを探しているのか、木の根元を掘って芋みたいな物をほじくっていたり、木に生った小さな実を、棒で叩き落としていたり。
メジャーモンスターであるゴブリン達が、思い思いにそんな行動を取っていた。

そんな様子を俺達は茂みの中から伺いながら、少しずつゴブリン達と距離を詰める。
ゴブリンの数は三匹。
いやに少ない。

俺は、やけに自信たっぷりな様子で隣に佇むアクアに。

「お前、以前カエル相手に手も足も出なかったじゃないか」
「カエルはあのブヨブヨのお腹が打撃を吸収するの。物事には相性ってものがあるのよ？　カズマったらそんな事も知らないの？　バカなの？」

俺がそんな事を言ってくるアクアの頬をつねりあげて半泣きにさせていると、ゴブリン達がこちらに気が付いたようだった。
バカな事やって騒いでいるからだ。
二匹のゴブリンは、武装した俺達を見て、怯んだ様に怖気づきながらも身構え。
残る一匹のゴブリンは、耳障りな奇声を上げて何事かを騒いでいた。
もしかすると仲間を呼んでいるのかもしれない。
初心者殺しが来る前に、片付けてしまうのが良いだろう。
そんな事を考えていると、めぐみんが。

「では。ゴブリン討伐、開始です！」
合図を出し、一人その場から距離を取った。

「見てなさいなカズマ！　ゴブリン三匹ぐらい、この私がアッサリと仕留めてみせるわ！」
ゴブリン達に、そんな事を叫びながら嬉々としてアクアが突っ込む。
そのアクアの身体がぼんやりと光っているのは、何かの支援魔法を自分に掛けたからだろう。
駆けるアクアの後ろをダクネスが、重い鎧をガチャつかせながら必死で追う。

そんな二人をのんびりと見送り、俺は離れた位置から弓を出すと……！

スコーン！

「「ああっ！」」

先行していた二人より先に、今まさにアクアが襲いかかろうとしていたゴブリンの頭を狙撃した。

それを見て、アクアとダクネスが驚き、そして……。

「ヒギッ！？」

「ギャフッ！？」

ゴブリン達とは二十メートルほど。

この距離で狙撃スキルを使えば、まず外す事など有り得ない。

アクアとダクネスに先駆けて、俺は早々と三匹のゴブリンを弓で仕留めてしまった。

「ちょっとカズマ！　今から戦おうと思ってたゴブリンを、先にやっつけちゃうってどういう事よ！」

食って掛かるアクアに言った。

「お前らが倒そうとする敵を先に食っちゃえば、俺は絶対に負けない作戦です」

アクアとダクネスが同時に叫ぶ。

「「卑怯者！」」

生い茂る草木の間を駆け抜け。

「あっちよ！　今、あっちで影が見えたわ！　私の目からは逃れられないわよカズマ！」

そんな、背後からの声を聞きながら。

「横合いから何度も何度も獲物を掻っ攫いおって！　流石に頭に来た！　貴様、正々堂々と勝負しろっ！」

俺は、林の中を宛もなく駆け抜けていた。

現在の成績は、俺が八匹で向こうはゼロ。

あいつらの後を潜伏スキルを使ってストーキングしまくり、あいつらがゴブリンを引きつけている間に、俺が安全な場所から狙撃で倒す。

そんな戦法を取っていた所、とうとう二人がマジ切れし、現在は俺が追い回されていた。

勝負に勝てないからといって実力行使に出るとはなんて卑怯な連中だろうか。

重い鎧を着ているダクネスをちっとも振り切れないのは、アクアの支援魔法で強化を受けているからだろう。

普段は特に感じないが、敵に回ると地味に支援魔法というものは厄介だ。

俺は潜伏スキルを使いつつ逃げ回り、途中、地面に魔法で水を撒き、それを即座に凍らせた。
そして、逃げながら潜伏スキルをあえて一時的に解除する。
実に原始的な即席の罠だが……。

「あっ、居たわねカズマ！　そんな所に立ち止まって、とうとう観念……ふぐっ！」
「い、いたなカズマ！　はあ……、はあ……。きょ、今日こそは貴様に一矢報いてはぶっ！」

物の見事に氷に足を滑らせすっ転んだ二人に対し。

「……ざまあ」

その言葉にアクアが跳ね起きた。
「ダクネス、あの男を二人で囲むわよ！　ボコボコよ！　囲んでボコボコにするの！」
アクアの言葉にダクネスが、凍り付いた地面からノロノロと起き上がりながら。
「……必死に追い回すものの、ここまで一方的に手玉に取られ……。確かに悔しいんだが、こう……。こんなのも悪くないと思えてきた私はおかしいだろうか……」

おかしいと思います。

「……まったく、何やってんですか。三人ともゴブリン討伐を忘れないでください」

俺達を追い掛けて来たためぐみんが、茂みを掻き分けながら現れた。
俺も討伐に集中したいのだが、俺の知的な作戦をこの二人が卑怯だ卑怯だと非難するのだ。
めぐみんの言葉に、俺は敵感知スキルを発動させて付近にゴブリンがいないかを探ろうと……。

「ようやく逃げるのを止めたみたいねカズマ。とりあえず、ごめんなさいしなさい。あんたをどうするかはそれからよハイエナニート」
「おい待て。……囲まれてるぞ」

当たり前と言えば当たり前。
あれだけ叫びながら追ったり逃げたりしていたのだ。
まるで襲ってくださいと言わんばかりだろう。

その言葉に、アクアとダクネスもふざけている場合ではないと気付いた様だ。
木々のそこかしこから顔を覗かせるゴブリン達。
その数は十を越え、流石に単独で撃破出来る数でも無い。

更には……。

「出やがったな」

遠巻きにこちらを囲むゴブリン達。
そのゴブリン達の守護者であると言わんばかりに、ど真ん中から堂々とこちらに歩く黒い獣。

初心者殺し。

俺達とは何かと因縁のあるこいつを倒し、俺達も晴れて中堅パー

ティを堂々と名乗れる様に。

喧嘩している最中でも、その思いは同じな様だ。
ダクネスが、敵の注意を一身に集めようと前に出た。
一番注意を引く場所に出て、囮となるスキル、デコイを使うつもりだろう。

「ほらカズマ、仕方ないからあんたにも支援をあげるわ」

言いながら、アクアが俺にも魔法を掛ける。
一瞬俺の身体が光り、身体能力が向上しているのが手に取るように実感出来た。
よし、これなら行けそうだ。

守るダクネス。
癒すアクア。
そして、そんな二人のフォローを俺がする。

それぞれにちゃんと役割があるのだ。
誰が一番かだなんて、決める必要なんてどこにもない。
今回は、カッとなった俺も反省しなければ。

俺は弓を構えてダクネスの右後方に立つ。
「間違えて、お前の背中を撃つことは無いから安心しろ。頼りにしてるぞダクネス」
「お前こそ、頼りにしている。敵は一匹も後ろには通さないから安心しろ。攻撃は任せたぞ」
ダクネスが、大剣を地に突き立てて、それで地面に踏ん張るように前を向き。
後ろも見ずに言ってきた。

その頼りになる背中を見ているだけで、どんな敵が来ても大丈夫という気持ちになる。
「そんなダクネスが怪我したら、即座に癒してあげるから安心なさい！　行くわよ、今回は誰一人欠ける事無く勝って見せるわ！」

ダクネスの左後方に待機していたアクアが、このメンツならば怖いものなど何も無いとばかりに胸を張る。
俺はめぐみんの方を振り返り。
「おいめぐみん。さっき屋敷で、俺が活躍する所を見せて下さいよ。イザって時は頼りになる、そんな格好良い所を私に見せくれませんかと言ってたな。見せてやるよ、俺達が結束すれば、どんな相手にだって負けない……」

「『エクスプロージョン』ッッッ！！」

轟く爆音。
吹き荒れる爆風。

俺がカッコ付けながら言い終わる前に突然吹き荒れた、そのあまりにも理不尽で圧倒的な暴力は、ゴブリンや初心者殺しを全て巻き込んだだけでは飽き足らず。
付近の木々はおろか、俺達までをも吹き飛ばした。

最前線にいたダクネスが、剣を突き立て、踏ん張り、重い鎧を着ていたにも関わらずぶっ飛ばされる。
その後方にいた俺達ですらが、吹き荒れる爆風に成す術もなく転がされた。

……俺は地面にうつ伏せの状態で倒れながら、倒れたまま、その惨状を首だけを上げて見渡した。
ゴブリンも初心者殺しも既に居ない。
消し飛んでしまった。

ダクネスは、飛んできた何かが頭にでも当たったのか、白目を剥いてぐったりしている。

「ぐずっ……。う、うえええ……。口の中が、じゃりじゃりする……」

アクアが、俺と同じく地面にうつ伏せの体勢で転がったまま、そんな泣き言を言ってきた。

そして。
俺のすぐ傍には、この惨状を招いた元凶ですらが仰向けの状態で転がっている。
その元凶がポツリと言った。

「美味しい所は持って行く。そんな紅魔族の本能には抗えませんでした。そして、これで私がパーティ最強だと言う事が決まりましたね」

「お前って奴は！　お前って奴はっ！　最近大人しくなったと思ってたらこれだよ！！　お前審判じゃ無かったのか！」

4話

「うっ……うっ……。ここんとこあまり酷い目に遭うこと無かったのに……。ダクネスが重いんですけど……。髪の中にまで泥が……。お風呂入りたい……。お風呂入りたい……」

初心者殺し討伐を終えた帰り道。

「俺も帰って風呂入ってゴロゴロしたい。あちこち転がされて泥まみれだ……」

俺は魔力を使い果たし動けなくなっためぐみんを背負ったまま、重い鎧を着たダクネスを背負ってメソメソしているアクアに賛同する。

ダクネスは、飛んできた石か何かを頭にぶつけたのか、傷はアクアに癒されたものの未だアクアの背中でダラリとしていた。

初心者殺しを倒したものの、この惨状は、胸を張って中堅冒険者と言えるのだろうか。

俺の背中では、先ほどからめぐみんがうっとりしたため息を吐いていた。

「岩や建造物を破壊するのもいいのですが、やはりモンスターの群れの中に全力の爆裂魔法を放つ快感には劣りますね。……カズマ、またああいった、モンスターの群れの討伐に行きましょう」

「行かねーよ！　それと動けなくなるまで魔力を注ぐな！　もうちょっと手加減してくれ！　……ああもう、俺達が初めて冒険に出た頃と何にも変わってない……」

本当に何も変わってない。
俺達はあれからレベルは大分上がっているのに、あの頃から何の進歩もないのはなぜなのだろう。

そんな事を考えながらも、俺達は何とか無事に街の入口にたどり着いた。
ああ、今日はもう帰って風呂入りたい。

でもギルドに行かないと。
討伐の報告と報酬の受け取りに……。
「なっ！？　ど、どうしたんだその姿は！　アクア様、美しいあなたがそんな……！　無残にも泥まみれになって……」
受け取りに……。
……。

久しぶりに変な奴に会ったなあ……。

街の入口で、久しぶりに魔剣使いのソードマスターに出会った。
マツルギとかいった、俺と同じく日本から来た男。
取り巻きの女の子がいたはずだが、今日は一人の様だ。

アクアが、ダクネスを背負いながら泥だらけの状態で、その剣幕に若干怯えながら恐る恐る尋ねる。
「……だ、誰？」
自分で送り出しておいたクセに、もう存在を忘れていたらしい。

マツリギは、それを聞き実に可笑しそうに吹き出した。
「相変わらず冗談がお好きですね女神様。そんな泥だらけになっても、相変わらずお美しい。……所で、その有様は一体どうしたんです？　佐藤和真、確かキミ達は最近かなり活躍していると聞いたん

だが。そんなキミ達がここまでボロボロにされるなんて、どんな強敵と渡り合ったんだい？」
「初心者殺しとゴブリンだよ」
「！？」
俺の一言に、驚愕の表情で動きを止めるマツラギ。
やがて、そのままふるふると震えだした。

「き、キミは初心者殺しなんかに手間取っているのか！？　初心者殺しとゴブリン相手に、これほどまでにボロボロにされて……！　アークプリーストとクルセイダー、そしてアークウィザードまで引き連れてこの有様なのか！？」

そんなカツラギの言葉に、俺の背中からめぐみんが。
「おい、どこの誰だか知らないが、それ以上カズマを悪く言う気ならこの私にも考えがあるぞ」
そんな格好良い事を、おぶわれて身動き取れないままで言い放つ。

一見良い事言っている風だが、俺達がこんなボロボロになっているのは大体お前の所為だからな。

「どこの誰だか……って、何を言うんです。僕ですよ。魔剣を与えられ、この世界を救うべく神に選ばれた者。ソードマスターの……」
「この人はカツラギさんだよ。以前会ったろ」
「だっ、誰だそれは！　ミツルギだ！　人の名前ぐらいちゃんと覚えておいてくれ！」
額に青筋立てて怒鳴るミツルギ。

と言うか、アクアとめぐみんはミツルギと言われてもまだピンと来ていない様だ。
一応デストロイヤー戦の時とかも顔ぐらいは合わせてるんだが。

「ミツルギじゃ分かんないか？　魔剣の人だよ魔剣の人」
その言葉でようやく思い出したのか、アクアとめぐみんがああと頷く。
流石にミツルギも冗談ではなく本気で忘れられていたと気付いた様だ。
「……お、おい佐藤和真……。キミは、僕の名前を本気で間違えたんじゃないんだろう？　試しに、僕の下の名前を呼んでくれないか？」
「まだ俺達、下の名前で呼び合うほど仲良くないし」
「キョウヤだ！　覚えてないなら素直にそう言ってくれ！　ミツルギキョウヤだ、覚えておいてくれ！」
声を荒げるミツルギは、やがて手を頭にやりながら頭を振る。
やがて気を落ち着ける様に息を吐き。
「……まったく、頼みがあってこの街でキミを探していたんだが。どうやら、その前にキミとは決着を付けておかないといけない様だ。あれから僕も腕を上げている。今度はあんな無様な真似はしない！　さあ、僕ともう一度……」
「お前は何を言ってんの？　決着ならもう着いてんだろ。今は何レベルなのか知らないけれど、俺より遥かに高レベルだった頃のお前に勝ったじゃないか。その事実だけで充分だ。そして俺はもう再戦はしない。このまま、駆け出しの頃にお前に勝ったという事実を抱いて勝ち逃げさせてもらう」
「……キミは……」
ミツルギがショボンと寂しそうにしているが、真っ当にやりあったら魔剣持ちの上級職に勝てるわけがない。
と、ミツルギが深い溜息を吐きながら。

「……ま、まあいい。そんな事よりも、本題に入ろうか。……実は、この街を魔王軍が襲撃しにくるかも知れないって噂が流れているんだ」

さらっと、そんなとんでもない事を言い出した。

俺とアクアは、街中の喫茶店にてミツルギと向かい合っていた。

何だか込み入った話になりそうだったので、ぐったりしていたダクネスと魔力を使い果たし、弱っているめぐみんは屋敷へと置いて来た。

ついでに、俺とアクアはザッと風呂に入って泥も落として来た。

店にて、俺達は一通りの注文を終え。

ミツルギが、テーブルの上に両手を組んで若干前のめりになる。

「じゃあ、改めて。……と、その前に、アクア様に渡したい物があるんです」

言いながら、ミツルギが何かを取り出す。

取り出されたそれは、可愛らしくラッピングされた小さな小箱。

ミツルギは、それを、ナプキンを折って何かを作っているアクアの前へとスッと差し出しながら。

「アクア様、見ればあなたは、いつもアクセサリーの類を身に付けておられませんよね？　そんな物は身に付けなくても充分お美しい

のですが……。もしよろしければ、どうか、これを……」
何の前触れもなく大して親しくもない女性にプレゼントが出来るとか。
こいつは日本に居た時から、きっとリア充だったんだと思う。

「……？　なに？　くれるの？」
「ええ、どうぞ。安物ですので、アクア様のお気に召すかは分かりませんが……」
言いながら、ミツルギは爽やかそうな笑顔を見せた。
実にイケメンである。
むかつく。

アクアがその小箱を開けると、中からは小さな指輪が出てきた。
それは、とても安物とは思えない高級そうな指輪。
安物とか謙遜しつつ、かなり本気の一品だ。

しかし、アクアの指のサイズなんて知ってたのか？

と、思ったら。
「……？　サイズ小さくて入らないんですけど」
アクアが自分の指にちょっと試して、早々と諦めた。

それを見て、ミツルギが苦笑しながら。
「それは魔法が掛かってまして、サイズの調整が……」
何かを言い掛けた時だった。

「カズマカズマ、見て見てー」
アクアが、言いながらナプキンをその指輪に被せ。
「ででーん」
そんな声と共にサッとそのナプキンを除ける。

すると、そこにあったミツルギから送られた指輪は消えていた。

「……凄えな。凄いけれども、指輪はどこに消えたんだ？」

俺の言葉にアクアが言った。

「……？　消しちゃったんだから、私にもどこに消えたのかなんて聞かれても困るわよ」

「えっ」

ミツルギがそんな間の抜けた声を出す。

……ちょっとだけ気の毒だ。

「サイズの合わない安物だったとしても、一芸に使えたわ。ありがとうね」

言って、屈託の無い無邪気な笑顔を見せるアクアに、ミツルギはそれ以上は何も言えなくなったらしい。

「い、いえ……！　アクア様の芸のお役に立てたのなら僕も嬉しいですよ」

そんな事を言いながら、乾いた笑いを上げるミツルギ。

……気の毒に。

アクアは、何事も無かったかの様に鼻歌を歌いながらナプキンを折る作業に戻る。

そんなアクアを慈しむ様な目で見た後、ミツルギが俺へと視線を向けた。

「それじゃあ話をしようか。これはキミ達にも人事じゃない話なんだ」

それからのミツルギの話をまとめると。

何でも、魔王の幹部のベルディアが最初にこの地へと派遣されてきたのは、この地に大きな光が舞い降りたと、魔王の城の預言者が言い出した事がキッカケだったらしい。
当初は半信半疑でベルディアを派遣した魔王。
それが、ここに送り出したベルディアが討たれ、バニルが行方不明になり。

しかも、紅魔の里を攻略していた魔王の幹部が最近行方知れずになったそうなのだが。
実は、その件に関してもこの街の冒険者が関わっていると噂になっているそうな。

現在、魔王の興味はこの街へと向けられているとの事。
攻めてくるかも知れないし、また誰かを派遣してくるかも知れない。
それらの事を聞いて、ミツルギは魔王との激戦地であるこの国の首都周辺から、慌ててこの街へと帰って来たらしい。

……と言うか。
それってモロに俺達が関係者じゃないか。

「……お前はどっからそんな噂を仕入れてきたんだ？　魔王の手下に知り合いでもいるの？」
「いや、最近国の首都周辺への攻撃が弱まってきた事を疑問に思った、国のお偉いさん方が魔王の手下を捕らえ、色々と尋問して得た情報らしい。それを教えてもらった。……僕は国の上の人達にも顔が利くからね。向こうじゃ腕利きのソードマスターとして名を売っているから」
ふーん。

「……しかし、この地に舞い降りた大きな光って……」
俺は何気なく、隣でせっせと何かを作っているアクアを見る。

釣られて、ミツルギも視線をアクアに向けた。
「……僕は、アクア様の事だと思っている。最初は、魔王が警戒する大きな光とは、僕の事かなとも思ったんだが。……そ、そんな目で見ないでくれ……」
俺の、うわあ……といった視線に気付き、嫌そうに顔をしかめるミツルギ。
そんなミツルギに。

「出来たわ。はい、これあげるわ。指輪のお礼ね。タイトルは、変形合体エリス神。三段階の変形が可能なの」
そんな訳の分からない事を言いながら、アクアはせっせと折りたたんでいたナプキンを手渡した。
そんなアクアに、苦笑しながらそれを受け取り。
「ハハッ、ありがとうございますアクア様。大切に……」
ミツルギは笑いながら、そのまま受け取ったナプキンに視線をやる。
何気なく、俺もミツルギと一緒にそれを見る。
「「凄っ！？」」
思わずミツルギと同じ声が出た。

何となくエリス様の面影があるナプキン製の人型の折り紙は、既に折り紙と言う域を越え、最早アートと化していた。

「……おいアクア、これ俺にも作ってくれよ」
「嫌よ、私は同じ物は作らないわ。高速飛行冬将軍なら作ってあげてもいいわよ」
「じゃ、じゃあそれで頼む」

俺の頼みを受けて、黙々とナプキンを折りたたみ始めるアクア。
それを見て、ミツルギが笑いながら立ち上がる。

「佐藤和真。……キミに頼みたい事があったんだが、今日の所は忙しそうだ。また、今度にするよ。……アクア様を、しっかりとお守りしてくれ。少なくとも初心者殺しに手こずっているようじゃまだまだだ。…………では、女神様。僕はこれで失礼します。この折り紙は大切にします」
そんなミツルギに、アクアがうん？　と顔を上げ。
「……？　ああうん、またね。……ねぇカズマ、変形機能は必須よね？」
「必須に決まってるだろ常識的に考えて」
そんな俺達二人のやり取りを、ミツルギは少しだけ寂しそうな顔でジッと見た後。
「キミはアクア様と本当に気が合うんだね」
そんな事を言った後、それじゃあと言い残し、去って行った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

屋敷への帰り道。
「そう言えばカズマ、私、久しぶりに女神様って呼ばれた気がするの。あのカツラギさんって人、そんなに悪い人じゃないのかも」
そう思うなら、名前は正確に覚えてやれよと思う。
最初にカツラギなんて呼んだ俺も悪いのだが。

俺は、ウキウキとそんな事を言ってくるアクアを見ながら考えていた。

この浮かれたのを魔王が気にしてる？

……やっぱり無いよなあ……。

うん、無いわー。

「まあいいか。それよりも、晩飯買って帰ろうぜ。今日はこってりした物が食いたい。待ってるあいつらの為にも、今日は良い肉買って帰ろうぜ」

「私、今日はあっさり系の気分なんですけど。生野菜と何かのタタキとかで強めのお酒をきゅっとやりたい気分なんですけど」

あいつは俺がアクアと気が合うだとか言っていたが、早速意見が食い違ってるんですが。

「じゃあ、公平にじゃんけんな。あいつのおかげでお前が女神って事思い出した。女神様なんだから、特別にハンデやるよ。三回勝負で一回でも勝てたらお前の勝ちで良い」

「あらー？　なになに？　カズマったら随分と殊勝な心がけね。それならいっそ、私の言い分を素直に聞いてくれればいいのに。じゃあいくわよ！　じゃーんけーん……！」

俺がじゃんけんに強い事をすっかり忘れている、学習能力という

ものが欠如した女神を連れて、俺は高級肉を手に帰宅した。
「ただいまー。今日は良い肉買ってきたから、すき焼きって言う俺の国の料理を……。……どうしたんだ一体？」
俺達二人が帰宅すると、そこには風呂あがりのめぐみんとダクネスが、居間のテーブルに置かれている封筒を前に難しい顔をしていた。
風呂に入って泥を落とした二人は、ラフな格好でソファーに座り。
「お帰りなさい。……その、手紙が届いてまして。どうやら、宛先はカズマになっているのですが」
めぐみんが、言いながらテーブルの上に置かれていた封筒を指す。
俺に？
「……？　なんぞ、これ？　誰からだ？」
封筒を見ても、そこに相手の名は書いていない。
と言うか、手紙なんて寄越してくる奴に心当たりが無いのだが。
俺の知り合いなら直に言いそうな。
「……それは国からの手紙だ。封筒の表に印があるだろう。それは王家にしか許されていない物だ」
ダクネスがサラッと言った。
……。
「えっ」
国から？
つまり、王様からって事？
……。
「えっ。……えっ。おい待ってくれ、俺、ここんとこ何も悪い事してないぞ」

「わ、わわ、私もしてないわよ！」
「も、もちろん私だってしてませんよ？　一日一爆裂だってちゃんと考えて撃ってますから、何も壊してませんし！」

俺に続いて、アクアとめぐみんも慌てて言って、そして自然と俺達の視線がダクネスに……。
「こらっ、わ、私を見るな！　私だって何も悪い事などしていない！　王家から手紙が届いただけで、そこまで卑屈になるな！　良い事が書いてあるかも知れないだろう、読んでみろ」
俺はそんなダクネスの言葉に従い封筒を開ける。
中には丁寧な字で、以下の文章が書かれていた。

『冒険者、サトウカズマ殿。魔王軍幹部、ベルディア討伐。魔王軍幹部、シルビア討伐。更には、高額賞金首機動要塞デストロイヤー討伐等、それらの偉業の達成において貴殿が大きく関わっている事を聞き及んでおります。尽きましては、近日中に王家からの使者を送り、貴殿の功績を称え、表彰したい旨を手紙にてお伝えしました。場所は、王国貴族であるダスティネス家の屋敷にて執り行う事となります。その際には、是非お仲間の方々と共にお越しくださいますよう……』

そんな文と共に、最後に王様の印か何かと署名がされている。

……えらいこっちゃ。
俺はドキドキしながら三人に手紙を見せた。
それにザッと目を通す三人は、みるみる内にそれぞれその表情が変わっていく。

アクアがパアッと顔を輝かせ、めぐみんはあわあわと狼狽えて。

そして、ダクネスは……。

「……ゆ、許してください……っ！！」

絞り出すような声でそんな事を呻きながら、ダクネスがその場にドッと膝を付いた。

見れば、その顔が真っ青になっている。

「おっ、おいどうした！　朝の魔法のとばっちりで、今頃どっか具合が悪くなったのか？」

俺が呼び掛けると、ダクネスが力なく首を振る。

そして……。

「ち、違……。ああ……。ああああ……。よりによって、どうしてこんな事に……！　国からの使者が来る？　そして、私の実家が会場に！？　ああっ、どうしようっ！」

ダクネスが、青い顔で途端にオロオロと慌てだした。

そして、バッと俺にすがりつくと、

「カズマ、この話は断ろう！　な？　表彰と言ったって、紙切れ一枚と幾ばくかの金が貰えるぐらいだ！　相手は国のお偉いさんだ、きっと堅苦しいものになる！　な？　皆、この話は気にしないでおこう！」

何時になく必死の形相で、ダクネスがそんな事を訴えかけてくる。

……。

「お前、俺達が、国から来たお偉いさんに何か無礼を働くとか思ってるだろ」

俺のその一言に、ダクネスがビクッと身を震わせる。

ダクネスの、俺を見ていた視線が泳ぎ、やがてちょっと顔を下げ、おぼつかない敬語で言ってきた。

「そ、そんな事はない……ですよ？」
誰だお前は。

「おい、ちゃんと俺の目を見て言ってみろ。その妙な慣れない敬語は止めてちゃんと言ってみろ。俺達が何かやらかして、ダスティネス家の名に泥を塗るとか、そんな心配しているんだろ」
「そうなの！？　ダクネス酷い！　私だって礼儀作法の一つや二つ、知っているんですからね！」
「まったく心外です！　ダクネスは、私達があなたの不利になる様な事をするとでも思っているのですか？　私達は仲間でしょう！　信頼してください！」

俺の言葉を聞いて、アクアとめぐみんが口々に言った。

「う……うう……。ハッキリ言って、お前達の事をこれ以上無いぐらいに理解しているからこそ、不安になっているのだが……」
ダクネスが、泣きそうになりながらそんな事を言ってくる。

そんな不安で一杯な顔のダクネスに俺は言った。
「おいおい、一体何をそんなに心配してるんだよ。相手は使者だろ？　お偉いさんって言っても、こんな駆け出しの街までわざわざ来る使者に、そこまでの重要人物を寄越さないだろうに。少なくとも、ダクネスの父ちゃんより偉い人なんて来ないだろ？」

そんな俺の言葉に、ダクネスが力なく首を振る。
「いいや、来る。こんな面白そうな話しならば、絶対に来る人がいる。この国の第一王女が、冒険話が大好きでな……。腕の立つ冒険者を城に呼び、その冒険譚を語らせるほどに冒険者が大好きな方だ。……そんな方が、二人の魔王の幹部討伐と、色んな国を悩ませた大物賞金首討伐に大きく関わったお前の事を、気にかけない訳がない。

ここは首都から離れた辺境とは言え、テレポートで簡単に来れる御時世だ。なんやかやと理由を付け、きっと来る」

「……ほう」

とんでもない事を聞いてしまった。

第一王女。

つまりはお姫様である。

お姫様に会えるだなんて、日本に居た頃には考えられない事だった。

元ニートの俺が、一国のお姫様に冒険話を語って聞かせる。

どんだけ大出世だって話だ。

「ヤバイな……、お姫様か！　何か俺、ドキドキしてきた！　上流階級のお嬢様に会うなんて、それだけで緊張してくるな！」

「わ、私も一応は上流階級のお嬢様なんだが！」

泣きそうな顔になりながらも、その辺はちゃんと抗議してくるダクネス。

珍しくオロオロしているダクネスに新鮮味を感じながら、

「おっと、服とか買って来ないとな。お前らもドレスなんて持ってないだろ？　一緒に仕立てて貰おうぜ」

「良いわね！　私もたまには羽衣以外を着てウロウロしたいわ！　でも近日中って事でしょ？　仕立てるのに間に合うかしら」

「私はもちろん黒のドレスですかね。大人な魅力が滲み出るヤツを仕立てて貰いましょうか。まあ、間に合いそうになければダクネスのドレスを借りましょう」

俺達はそんな事を言いながら、ドンドン盛り上がる。

二人は既に参加する気満々の様だ。

そんな俺達を見て、ダクネスがいよいよ泣きそうな顔になりなが

らも。

「お、お前ら……、相手は一国の王女様だからな？　以前の領主へのあんな態度は取るなよ？　場合によっては本当に首が飛ぶからな？　頼んだぞ？　何だかんだ言いながらも信じているからな？」

そんな事を、すがるように言ってきた。

ダクネスは、父に詳しい話を聞いてくると言って実家へと帰って行った。

手紙には近日中に来ると書いてあったが、それまでに着るものを用意しなければ。

お姫様に会うとかテンション上がる。

それなりの格好をしたい所だ。

気合入った格好をしたいが、着物なんて作って貰えないよなあ。

そもそも、詳しい構造が俺にも分からん。

となるとやっぱりスーツになるのか。

スーツ着てる人なんて見かけないが、ちゃんとスーツとかあるんだろうな。

俺よりずっと先に日本から来ているチート持ち。

そんな連中が、色んな文化を広めてくれてはいる様だが。

「さてお前ら。分かってるな？」

ダクネスがいない居間において、俺はアクアとめぐみんを前に言った。

ダクネスに恥をかかせる訳にはいかないと言う事を。

「もちろん分かってるわ。こんな機会滅多に無いもの。私も、取って置きの宴会芸で全力で盛り上げてみせるわ。そう、ダクネスが恥をかかない様にね！　……ところでカズマ、帽子から虎が出る芸をしようと思ったんだけれども、そもそも虎がいないのよ。この際虎っぽい初心者殺しで我慢するから、捕まえるのを手伝ってくれない？」

「私も紅魔族流のど派手な登場で、使者を驚かせてみせましょう。カズマ、派手に煙を焚く物と花火が要るんですが、そういった物はどこで買えば良いのでしょうか？」

……とりあえず今の内に、なんてダクネスに謝るかを考えておこう。

5話

ダスティネス邸。
アクセルの街において最も大きなその邸宅は、厳戒態勢がとられていた。
普段は少ない使用人も、見栄えの為か今日はその数を増やしている。
それもその筈。
既に王国よりの使者である第一王女が、先日からこの屋敷に泊まっているからだ。

只今の時刻は夕刻過ぎ。

そんな、ダスティネス邸の玄関にて。
「サトウカズマ様。並びに、皆様方。当屋敷にご足労いただき感謝いたします。本日は、わたくし、ダスティネス・フォード・ラフティーナがホストを務めさせて頂きます。どうかご自分の家だと思い、ごゆるりとおくつろぎくださいませ」

純白のドレスを着たダクネスが、長い金髪を鎖骨の辺りで綺麗に三つ編みにし、それを右肩から前に垂らしている。
真っ白で清楚なドレスだというのに、元々の体付きの所為か何だかえらくエロい。
完全に貴族の令嬢にしか見えないダクネスが、後ろに数人の使用人を引き連れて俺達に深々と頭を下げて、そんな丁寧な挨拶をしてきた。

完璧な作法で丁重なもてなしを受けた俺達も、ここは何か挨拶を交わすべきか。

「ほ、本日はごまねき……」
いきなり噛んだ。
俺が噛んだ事で、柔らかな微笑を湛えていたダクネスが、一瞬で顔を赤くしてバッと顔を俯かせた。
肩を震わせている所から、笑いを堪えているらしい。
この野郎。

慣れない事はするものではない。
「おいダクネス、笑ってないで案内してくれ。この服、窮屈で辛いんだよ」
そんな俺は貸し衣装屋で借りた黒スーツ。
タキシード的な物は、一緒に借りてきて着用した所をアクアとめぐみんに思い切り笑われたので、一生着ないと心に決めた。
アクアとめぐみんは、結局ダクネスのドレスを借りるらしい。

「それでは皆様方、どうぞこちらへ」
ダクネスは未だ肩を震わせながら俺達を、屋敷へと招き入れた。

「少々こちらでお待ちください。只今、お嬢様がドレス等を見繕っておりますので」

そう言われながら、使用人に通されたのは応接室。
そこのソファーに座らされ、使用人はお茶を入れてくれた後は、

ごゆっくりと言い残して部屋を後に。
流石は大貴族の応接間。
質素に見えても、ちゃんと失礼にならない程度には金をかけている。

しばらくは大人しく座っていた俺達だが、すぐさま大人しく待っているのに飽きがきた。
俺は応接間の中を落ち着きなくウロウロしながら、飾られている調度品の数々を手に取って見る。
その価値は鑑定眼を持たない俺には分からないが、きっとどれもこれもがお高いのだろう。
例えば、この飾ってある絵画など。
一見子供の落書きにしか見えない絵だが、前衛芸術と言うヤツだ。
俺はその絵を見ながら顎を撫で、ふうむとか言いながら、いかにも絵心が分かる風を装ってみる。

「カズマ、そんな落書きが気に入ったのですか？」
芸術を分かっていないめぐみんが、俺が眺めていた絵を見てそんな事を言ってきた。
「おいおい、これだから無教養の人間は。これは前衛芸術と言ってだな、見る人が見れば素晴らしい物なんだよ。これはきっと、名のある画家が描いた物だな」
知ったかぶって言う俺の言葉に、めぐみんがほうと感心する。
ソファーにくつろぎお茶をすすっていたアクアが言った。
「絵心のある私の目からすると、それはただの落書きだと思うの」

全く、こいつまでそんな芸術の分からない事を。
絵が上手いのと鑑定眼がある事とは別物なんだな。
そんな中、ダクネスが部屋の中に入って来た。

「待たせたな皆。……おいカズマ、その絵は私が子供の頃に父を描いた物だ。それを気に入った父が客に自慢する為に飾ったのだが、恥ずかしいからあまり見ないで……、こっ、こらっ何をする！　三つ編みを引っ張るな！」

アクアとめぐみんのからかう様なニヤニヤ笑いを受けながら、大恥かいた俺がダクネスの三つ編みを引っ張っていると、使用人がドレスを持って入って来た。

使用人がドレスを持ったまま俺達に一礼し、隣の控え室へと消えていく。

ダクネスに続き、アクアとめぐみんも隣の部屋へと入っていった。

やがて……。

「ねえダクネス、腰の辺りがブカブカなんですけど。もっと腰回りが細いのがいいんですけど」

「そ、それが一番腰回りが小さいサイズなんだ……。仕方ないだろう、クルセイダーは筋肉が無いと……！　めぐみん、どうした？」

「……何と言うか、ストンと落ちます。胸も腰も大きすぎます。もう少し小さいのは……」

隣からそんな楽しそうな声が聞こえてきた。

「その、無い事はないんだが……。一応そのドレスは私の子供の頃の……、痛たた！　めぐみん、三つ編みを引っ張らないでくれ！」

しばらく、中から使用人とのやりとりが聞こえ、手早くドレスの手直しをしたのか……。

やがて、疲れた表情のダクネスが二人を引き連れて部屋から出てきた。

「……ほう」
俺が思わず声を出すと、めぐみんがそれを聞いて恥ずかしそうに少し俯く。
肩口がむき出しになっている所為で白い肌が大きく露出し、それと相反する黒いドレスのおかげでなんだかえらく艶かしく見える。
ついで、純白のドレスに身を包んだアクアが現れた。
「カズマ、見て見てー。どう？　馬子にも衣装ってヤツよ」
それは褒め言葉じゃないんだが、まあ今のアクアには合っている言葉だと言えるのか。
普段の青を基調とした羽衣ではなく、純白のドレスに身を包んだアクアは、黙っていれば本当に女神だと崇められてもおかしくは無い美しさを誇っていた。
「ちょっとカズマ、これだけ美女揃いなんだからちょっとぐらい褒め称えて崇めてみたって罰は当たらないわよ？」
本当に黙っていればいいのに。
「はいはい綺麗綺麗。そんな事よりお姫様だ。昨日からここの屋敷に泊まってるんだろ？」
俺は期待もあらわにダクネスに尋ねると、ダクネスが心底不安気な表情を浮かべた。
「……本当に、無礼を働くなよ？　お前はたまに、素でとんでもない暴言を吐く時があるからな。冒険者は口の悪い者が多いと言うことで多少は多目に見られるかも知れんが、言葉遣い一つで本当に首が飛びかねんからな？」
そんなダクネスの言葉を聞きながら、俺の期待は否が応にも高まっていく。

お姫様。
そう、お姫様である。
美人でたおやかで、花と蝶と小鳥とかを愛するようなお姫様。
いや、冒険話を好むと言うから案外お転婆なのかも知れない。
やる事なす事ことごとく失敗していた俺達が、とうとう王族が会いに来るまでになった。
これは多少は調子に乗ってしまっても仕方ないのではないだろうか。

「おいお前らに言っておく。……屋敷は惜しい。愛着も湧いてきた俺達の屋敷は惜しいが、もしお姫様が俺を親衛隊か何かに是非にという話が出たら、俺は引越しも考えてしまうかも知れない。その辺は覚悟してくれ」
「お前の頭の中ではどれほどまでに話が進んでいるんだ。唯の表彰と言っているだろうが」

ダクネス自らの案内を受けて、俺達はパーティ会場に向かう。
途中で見かける様々な調度品。
それらをアクアが目ざとく見つけ。
「ほう、これはなかなかの物のようね……」
物珍しそうにアクアが取っ手付きのツボをしげしげと。
こいつはドラゴンと鶏の卵の見分けは付かないクセに、美術品の目利きは出来るらしい。

そんなアクアが見ていたツボに興味を示し、俺はそのツボを何気なく持ち上げる。
結構重い。
「これって高いのか？　幾らぐらいする物なんだ？」
「お、おい……。あまりあちこち触らないでくれ、それは父が大切にしていたツボで……」

ダクネスが、俺が持ち上げたツボの両サイドに付いている取っ手に何となく手を伸ばす。

「私のくもりなき鑑定眼で見た所、このツボは……」

パキャッ！

「「あっ！？」」

そんな音が響く中、ダクネスと俺の小さな声と共に、その手の中にはもぎ取られたツボの取っ手が。

「……このツボは、私の見た所ゴミになったわね」

「どどど、どうしよう！　父の物なのにどうしよう！」

ダクネスが折れた取っ手を手にしながらオロオロと。

「おっ、落ち着け！　親父さんは今居るのか！？　居るのなら、お姫様の前で打ち明ければ高貴な身分のお客様の手前、怒れないだろう！　居ないなら、とりあえずご飯粒か何かで応急処置をしつつ、親父さんが手に取った時にうっかりツボが床に転がり落ちる位置に配置換えしておけ！」

「な、なるほど、それだ！　さすがカズマ、機転が利くな！　父はこの話が来た時点で私に全てを押し付け逃げた！　倒れやすい位置に置いて、使用人達には触らないようにと厳命しておこう！」

俺とダクネスのやり取りを聞いていた使用人の女性が言った。

「……お客様申し訳ありませんが、当家のお嬢様は世間知らずでございますので、あまり変な事を教え込まれませんよう……」

晩餐会用の大きな部屋。
俺達はその部屋の扉の前に立っていた。

その先頭に立つダクネスが、改めて俺達を振り向くと。
「よし、いいなお前達。相手は一国の姫君だ。……カズマ、お前は何だかんだ言って常識は一応はあるし、あまり心配はしていない。アクア、お前は過度な芸は止めて欲しい。危なっかしそうな物は特に。めぐみんに関しては……。今から身体検査をさせて貰う！」
「ええっ！？　ままま、待ってくださいダクネス、なぜ私だけ！？　身体検査も何も、先ほど同じ部屋で一緒に着替えを……！　ああっ、待ってください、カズマが見てます！　ほら、ここぞとばかりにカズマがガン見してますって！」

目の前で揉み合いを初めた二人を見ながらアクアに言った。
「お前、どんな芸をやらかすつもりだ？」
「やらかすって何よ、失礼ね。せっかくの王族相手なんだから、お姫様にだけ見せるってのもつまらないわ。即興で似顔絵を……。それも、砂絵で仕上げてみようと思うの」
「ほう。お前はホントに色々出来るなあ……」

そんな俺達の前では。

「ほらみたことか！　めぐみん、何だこれは！　このモンスター避けの煙玉と、空気に触れると爆発するポーション！　これを何に使うつもりだったんだ！　不自然に胸元が大きいから気になっていた

んだ！」
「やりますねダクネス、しかし私には第二第三の派手な演出手段が……！」

未だじゃれ合う二人を見ながら、ドレスの着付けの時からずっと付いて来ていた使用人が、深くため息を吐きながら。
「……とばっちりで私達にまで被害及ばないかしら……」

同感ですよ。

「……では行くぞ。いいか、王女様の相手は主に私がするから、お前達は飯でも食いながらただ頷いてくれていればいい。私がその都度説明する」

言いながら、ダクネスが先頭に立ち扉を開けた。

そこは広く、そして派手過ぎないながらも高級感は醸しだされている晩餐会用の広間。
中は燭台に明々と火が灯されて、それなりの明るさを保っていた。
そして数名の使用人が、テーブルを囲む様に無言で待機している。

真っ赤な絨毯がしかれたその部屋には、大きなテーブルの上に色とりどりの豪勢なご馳走が並べられ、そのテーブルの奥には、ダクネスやアクアと同じ、純白のドレスを着た女性が座っていた。

その後ろには二人の年若い女性。
一人はドレス以外武器を帯びてはいないものの、その手に輝くフアッションを無視したゴテゴテした指輪の数々で、恐らくは魔法使いなのだろうと伺わせた。
この女性がテレポートを使って送り届けてきたのかも知れない。

そしてもう一人は恐らく護衛の騎士なのだろう。
その女性はドレスではなく、白いスーツを着用し、腰には剣を帯びていた。
護衛が二人共女性なのは、年頃のお姫様の傍には男の騎士では色々と不味いからなのだろう。

そんな三人の傍に、俺達を連れたダクネスがゆっくりと歩いて行き。

「お待たせいたしましたアイリス様。こちらが我が友人であり冒険仲間でもあります、サトウカズマとその一行です。さあ、三人とも。こちらのお方がこの国の第一王女、アイリス様です。失礼の無いご挨拶を」

そう言って俺達に、白いドレスを着た一人の少女を手で差した。
それは、まさしくお姫様とはこういう物ですとばかりの中学生ぐらいの年の、金髪の美少女。
何これヤバイ、この世界で初めて期待が裏切られなかった稀有な例じゃないのか。
付け耳エルフにヒゲ無しドワーフ、キメラみたいなオークにドラゴンと呼ばれるヒヨコ。

感動の余り脳が止まっている俺の隣で、アクアが完璧な作法と仕草でドレスの端を軽く摘み、一礼した。

その仕草に、俺はおろかダクネスまでもがギョッとしていると、
「アークプリーストを努めております、アクアと申します。どうかお見知り置きを。……では、挨拶代わりの一芸披露を……」
言いながら、アクアが早速何かを始めようとしてダクネスにその手を掴まれる。
「ちょ、ちょっと失礼アイリス様。仲間に話がありますので……」
そんな事を言いながら手を掴んでいるダクネスの、三つ編み部分をアクアが軽く引っ張って抵抗していると、アクアに気を取られているダクネスの隙を突き、めぐみんが突然自分のドレスのスカートの中に手を入れた。
太ももの部分に巻きつけていたそれは、一枚の薄く黒いマントの様な布切れだった。
それをバッと広げて自らのむき出しの肩に掛け、そのまま例の自己紹介をしようとバサッと翻そうとした所で、その布切れをダクネスに掴まれる。
それぞれの手でアクアとめぐみんを捕まえているダクネスは、アクアに三つ編みをワキワキと揉まれながら、今にも泣き出しそうな顔で必死に笑顔を取り繕おうとする。
アクアはダクネスの三つ編みの手触りが気に入ったのか、それを揉む手を止めようとしない。
……と、俺の目の前の王女様が、お付きの白スーツの騎士っぽい女性に、俺を見ながら耳打ちした。
恥ずかしがり屋さんなのだろうか。

「下賤の者、王族をあまりその様な目で不躾に見る物ではありません、本来ならば身分の違いから同じテーブルで食事をする事も、直接姿を見る事も叶わないのです。頭を低く下げ、目線を合わさずに。それよりも、早く挨拶と冒険話を。……こう仰せだ」

白スーツのその言葉に、俺は動きが止まった。

そして、しばらくして理解する。

日本でも、その昔の侍とかが居た時代。

殿様と家臣は、身分の違いから同じ席で食事をしなかったり、食事時間をずらしたりしていたとか。

一々白スーツが通訳みたいな事をしているのも、直接下々の人間と会話するのを避けているのだろう。

ダクネスや親父さんで貴族に少し親しみを持っていたが、本来の貴族やら王族やらってのはこういう物なのだ。

なるほど、把握。

俺は一言。

「チェンジ」

「アイリス様、少々お待ちください。仲間達が緊張の余り興奮しております。少々仲間と話をしてまいりますので……！」

俺は、ダクネスに腕を掴まれて広間の隅へと引っ張って行かれた。

「お前って奴は、お前って奴は！　お前って奴はどういうつもりだ！」

ダクネスが俺の首を絞めようとして来る中、俺もやられっぱなしではなくダクネスの三つ編みを引っ張って抵抗する。

「お前、どういうつもりだはこっちのセリフだ！　お姫様とか期待させやがって、なんだありゃ！　もうちょっとこう……。わたくし外の世界に憧れておりますの！　勇敢な冒険者様、是非ともあなたの冒険譚を聞かせてくださいまし！　みたいなのを期待してたのに、あの態度で何が表彰したいだ、バカにしてんのか！」

「こっ、こらっ止めっ……！　んあっ、きょ、今日はどうして皆して私の髪を引っ張るんだ……！　んっ……、こ、こんな場所ではダメだ、こういう事は二人きりの時に……！」

三つ編みを引っ張られ、バカな事を口走りながら頬を染めるダクネスに、俺は王女様の方を指差した。

「というか、早速何か始めてるがアレは放っておいていいのかよ？」

俺の指す先には、アクアが一枚の紙の上に指でなぞる様にノリを付け、そこに砂を振っている。

それは恐ろしく早く、そしてとてつもなく凄まじい精度で作られていく砂絵。

遠目に見てもそれが余程の出来だと言う事が良く分かる一品で……。

「お姫様にお近付きの印にまずはこれを……。口の端にだらしなく付いてるソースまで、キッチリ再現された一品で……」

そのアクアの言葉に慌てて王女様が口元を拭う中。

「アイリス様、今この無礼者どもを叩き出しますので少々お待ちをっ！！」

ダクネスが鋭く叫びながら、ドレスの裾を両手で鷲掴みにして駈け出した。

王女様が、隣の白スーツに耳打ちする。
「昔は、大人しく、殆ど喋りもしなかった寡黙なラティーナの慌てる、そんな珍しい様を見られたから良しとします。冒険者は多少なりとも無礼なもの。水に流しますので、それより早く冒険譚を、と仰せだ」
白スーツが通訳する中、懐に砂絵を隠して必死にそれを守るアクアから、その砂絵を何とか取り上げ破り捨てようとしているダクネスへ、王女が少し楽しそうにニコリと笑った。

ダクネスは、そんな王女様に深々と一礼し、
「申し訳ありませんアイリス様！　何と言いますか、この三人は特に問題ばかり起こす連中でして……！」
王女様に必死にそんな事を言い募る中、アクアが、あげると言って王女様に砂絵を渡す。
それを見た王女様が、驚きの表情を浮かべ白スーツに耳打ちを。
「この短時間でこれほどに見事な砂絵を……！　素晴らしい、素晴らしいわ！　褒美を取らせます！　と、仰せだ」
白スーツが、言いながらポケットから何かを出してアクアに渡す。

……ほう。
それは小さな宝石だった。
素人の俺ですら、それが結構な価値のある物だと分かる。
それを貰ったアクアが、綺麗な宝石を親指と人差し指で摘み、燭台の光にかざして嬉しそうにしげしげと眺めている。

そんな中、恥ずかしそうに俯きながら、ダクネスが自分の席へと着いた。

それは王女様の右隣の席。

そのダクネスの更に右隣には、めぐみんとアクアが並んで座った。

王女様の背後には、王女様を守ろうとするかのようにお供の二人がジッと立っている。

やがて、俺は王女様に手招きされて、王女様の左隣に来る様に指示された。

俺は大人しく王女様の隣に座る。

そんな俺をチラチラ見ながら、王女様はその白スーツに耳打ちした。

「あなたが、魔剣の勇者ミツルギの話していた人ね？　さあ、聞かせて頂戴、あなたの話を、と仰せだ。……私も聞きたいものです、あのミツルギ殿が一目置くと言うあなたの話を」

ミツルギの奴は、国の上の方じゃ結構な評判なのか。

そう言えばそんな事も言っていたな。

白スーツと王女様の、少し期待に満ちた視線を受け、俺は過去の思い出話を語り出した……。

「そこでマトモに正面から戦っても勝ち目がないと判断した俺は、機転を利かせて罠を張った訳です。その罠餌として使われる魔法のキューブを、わざとシルビアに見つかるように荷物の上の方に隠し、それが荷物の中から転がり出る様に……！　シルビアは、俺の荷物から飛び出したそれを見て、俺の仕掛けた罠だとも気付かずにまんまとそれを……！」

「凄いわ！　わたくし、これまでにも色々な冒険者の話を聞きましたけれども、あなたの様な頭を使った戦い方をする人を初めて知りました！　そして、こんなにもハラハラ・ドキドキするお話を聞いたのは！　他の冒険者の話ですと、やれこの様にして華麗にモンスターを全滅させただとか、やれ、あそこの山のドラゴンを剣一本で退治しただとか……。今までの方のお話は、確かに凄いのですが、絶対に負けない勇者が一方的に邪悪なモンスターを退治するお話ばかりでしたので……！　と、仰せだ」

俺の冒険譚を、王女様は子供の様に目を輝かせて聞いていた。
身分の高い人が俺の話を期待しながら聞いている。
そんな状況に、俺も多少なりとも気が良くなるのは仕方が無い。

「……ねえ、あの男あんな事言ってるわよ」
テーブルの斜め向かいから聞こえるアクアのヒソヒソ声。

俺はそんな声は気にせず話を続けた。

「それはですね王女様、他の冒険者達は自分の身の丈にあった相手を退治に行くからですよ。それが悪い事とは言いませんが、この俺の様に常に格上の相手と戦い、日々上を目指そうとする人間との違いと言う奴ですね」
「素晴らしいわ！　カズマ殿は、日々上を目指しているとの事です

が、日頃どのような生活を……？　と、仰せだ。……私も気になります、あなたの様な方の日々の暮らしが……」

感心している王女様と白スーツに。

「そうですね……。日頃は、昼間はあえて屋敷に閉じこもり英気を養い、夕方暗くなる頃になると街に出ます。そして、人知れずこっそりと街の中を回り、この街の治安の維持のお手伝いをさせて頂いております」

俺は手元の豪勢な料理にはあまり手は付けず、飲み物だけを口につけながら説明していた。

テーブルを挟んで斜めの位置から、めぐみんの小さな囁きが聞こえてくる。

「アクア、あの男、夕方までゴロゴロして夜になるとフラフラ遊びに出歩く自堕落な生活を、治安維持活動とか抜かしましたよ」

「シッ、もうちょっと様子を見るの。きっとあの男の事だからもっと調子に乗るわ。そしてきっと墓穴を掘るわよ、見てなさい？」

アクアのそんな囁きが聞こえてくるが、俺はそんなマヌケではない。

王女様の表情と反応を見ながら言葉を選んで会話している。

ダクネスの方を見ると、なんだか恥ずかしそうに俯いて、隣の席のめぐみんに三つ編みを揉まれていた。

どうも、めぐみんもダクネスの三つ編みの感触が気に入ったらしい。

ダクネスは、自分の髪をいじらせておけばその間は大人しくしてくれると気付き、めぐみんにされるがままにされていた。

……俺も後でちょっと三つ編み揉ませてもらおう。

俺の話を聞いていた王女様が、満足気にため息を吐き、白スーツに耳打ちした。

「あなたはとても素敵な冒険者ですね。今まで見てきた冒険者達とは何かが違う気がします。冒険者になる前は、どんな仕事をなさっていたのですか？　と、仰せだ」

前の仕事、か……。

俺は日本での暮らしを懐かしくも振り返りながら。

「前の仕事ですか……。この国に来る前は、大切な家族の帰る場所を守る仕事をしてました。日々襲い来る災厄から大切なその場所を守り、それでいて誰にも理解も評価もされない悲しい仕事をしてましたね……」

そんな俺の言葉に。

「それは首都のお城を守る城兵の様な仕事でしょうか？　……彼らも、日頃はあまり評価されないのです。彼らが評価をされないと言う事は、それだけ街や城が無事で平和な証拠なのですが……。あなたも人知れず、故郷を色々な災厄から守ってきたのでしょうね……と、仰せだ」

その白スーツの言葉に、俺は深く頷いた。

「三ヶ月で良いから契約をと迫る相手をやり過ごしたり、財産を狙ってくる相手を撃退したりと、まあ色々ありましたね」

そう、新聞の勧誘員と某局の電波受信料の徴収員の事である。

そんな俺の言葉に、驚いた様な白スーツが王女様にボソボソと囁いていた。

「契約を迫る……きっと悪魔を撃退……。財産を……きっと野盗などから……」

断片的にそんな声が聞こえてくる中、アクアが何か言いたそうにこっちを見ていた。
そのアクアの視線からフイッと顔を逸らすも、尚も俺をジッと見ている。

止めろ、俺は嘘は言っていない。
こっち見るな。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

それは、皆が程よく食し、歓談も一通り終わった頃。
調子に乗ってペラペラ喋っていた俺に、白スーツが突然言ってきた。
「まさか、あのミツルギ殿に勝った事があるとは……。そんな魔剣の勇者、ミツルギ殿が一目置くカズマ殿の、冒険者カードをよろしければ拝見させては頂けないでしょうか。カズマ殿のスキル振りやステータス等を、後学の為に参考にさせて頂ければ……」
そんな、とんでもない事を。

俺の、クセのある冒険者カードを見せられる訳が無い。

俺のカードは不味い。
冗談抜きで不味い。

どこでリッチースキルなんて覚えたんだと言う話になれば、本気で不味い。

そんな俺の焦りを察しためぐみんが、

「ええと、我々冒険者にとって手の内をあまり明かすというのは、流石に王女様のお付きの方でもちょっと……。ああ、それよりも！　アクア、宴もたけなわになった事ですし、そろそろ取って置きの必殺芸の披露でも……！」

なんとか話を逸らそうと、そんな援護射撃をしてくれる。

もちろんアクアも……！

「……？　今日は良い感じの砂絵が描けたからもういいわ。なーにめぐみん、そんなに私の芸が見たかったの？　しょうがないわね、また明日、気分が乗ったらすんごいのを見せてあげるわ。ねえ、このお酒もっと持ってきてー、持ってきてー」

今日もアクアの空気の読めなさは絶好調だ。

屋敷の使用人に酒のお代りを催促している。

白スーツが、怪訝そうに首を傾げた。

「カードを見るだけですよ？　別にスキルをいじったりなどしませんとも。カードを見せるのを拒む人なんて初めて見ましたが……。別に見せられない理由もないでしょう？」

見せられない理由があるから困っているんだ。

と、その時。

「その男は、最弱職と呼ばれるクラス、冒険者なのです。なので恥ずかしいのでしょう。どうかこの私に免じてカードを見るのは許してやっては頂けないでしょうか？」

ダクネスが、言いながら白スーツに微笑を浮かべる。

「そ、そうなんですよ、実は先ほどは省きましたが俺は最弱職に就いてまして。いやお恥ずかしい、バレちゃいました」

俺がそう言って頭を掻くと、白スーツが呆れたように表情を変えた。

「なんと、最弱職……。あなたは本当に先ほど言った様な活躍をなされたのですか？　先ほどあなたはミツルギ殿との勝負にも勝った事があるとおっしゃっていましたが、それは本当なのですか？　それが本当ならば、あなたはミツルギ殿にどうやって勝ったのかを教えては頂けませんか？」

口調は一応は丁寧だが、その内容は明らかに俺の事を疑っている。

ミツルギには、スティールで魔剣奪った後リッチースキルでえらい目に合わせて勝ちました。

そんな事、言える訳がない。

……と、王女様が白スーツの服の裾をクイクイと引く。

そして、俺を見ながら白スーツの耳元でボソボソと……。

それを聞き、白スーツが若干戸惑った様に一瞬口ごもった後。

「……そ、その……。イケメンのミツルギ殿が最弱職の者に負けるだなんて信じられない。王族であるわたくしに嘘をついているのではないのですか？　魔剣使いのソードマスターの名は首都においてその名は知れ渡っております。そんな彼が、駆け出しの街の最弱職に負けるとはとても信じられません、彼はイケメンですし。……と、仰せだ。……私もそう思います、彼はイケメンですし」

「おいお前ら流石の俺でも引っ叩くぞ」

イケメンイケメンうるさい白スーツに、どうせイケメンではない俺は思わず突っ込んだ。
そう、いつもの調子で。
相手が、王族である事も忘れて。

それを聞き、突如白スーツが激昂した。
「無礼者！　貴様、王族に向かってお前ら呼ばわりとは何事だ！」
叫ぶと同時に椅子を蹴って立ち上がる。
こ、これはいけない！

「申し訳ない私の仲間が無礼な事を……！　何分、礼儀作法も知らない男なので、私に免じ、どうかご容赦を……！　その、この男の功績を称える為に来られたのに、それで罰してしまっては王族の名にも傷が付くと言う物ですので……！」
ダクネスが、咄嗟に平謝りに頭を下げた。
それを見て王女様が、白スーツに耳打ちする。

「……アイリス様はこう仰せだ。今までこの国に対して多大な功績のある、ダスティネスの名に免じて不問とする。ですが気分を害しました。そこの口だけの最弱職の嘘吐き男は、賞状と褒美を持って立ち去るがいい、と」

おっと、キツイ物言いですね！

……ふう。
しかしダクネスのおかげで助かった。
でも、突っ込んでくださいと言わんばかりのあんな言い方をしておいて、突っ込んだら怒られるとはどういう事だ理不尽な。

俺は、とっととその場を後にしようと……。

「……いたたっ！？　こ、こらっ、めぐみん何を……！」

それは、突然上がったダクネスの悲鳴。

どうやらめぐみんが、今まで揉んでいたダクネスの三つ編みを引っ張ったらしい。

怒りに任せて。

その事に気付いたダクネスはおろか、俺も思わず青くなる。

自分の事よりも仲間が悪く言われる事を何より嫌うめぐみんが。

短気で、一番我慢を知らないめぐみんが、この状況で何かやらかさない訳が……！

「……」

めぐみんは、そのままダクネスの三つ編みを数度ニギニギとした後。

それで気が紛れたとでも言うかの様に、三つ編みから手を放し、手元の皿の上の料理を食べる作業に入った。

おい、もう一度言ってみろだの何だのと、俺以上の暴言を吐くかとヒヤヒヤしたのだが拍子抜けだ。

ダクネスが突然上げた悲鳴に王女様と白スーツが気を取られている中。

「……めぐみん、今日はやけに大人しいな。てっきり爆裂だなんだと騒ぎ出すかと……」

ダクネスがめぐみんに、不思議そうに、そう尋ねた。

めぐみんは黙々と料理を口に運びながら、それを咀嚼し飲み込んだ後。

とても冷静で落ち着いた、小さな声で。

「私一人だったならばもちろん我慢なんてしませんが。ここで私が言いたい事言ったなら、ダクネスが困るじゃないですか」

それを聞いたダクネスは。

その場でスッと立ち上がり、王女様の方を向く。

「申し訳ありませんアイリス様。……先ほどの言葉を訂正しては頂けませんか？　この男は大げさには言ったものの、嘘は申しておりません。それに、口だけでもなく、イザと言う時には誰よりも頼りになる男です。お願いしますアイリス様。どうか先ほどの言葉を訂正し、彼に謝罪をしては頂けませんか？」

ダクネスの言葉に白スーツがいきり立つ。

「何を言われるダスティネス卿、アイリス様に、一庶民に謝罪せよなどと……！」

そんな中、王女様がスッと立ち上がり。

自分の口でハッキリ言った。

俺達にも聞こえる様に。

「……謝りません。嘘ではないと言うのなら、そこの口だけの嘘吐き男にどうやって勝ったのかを説明させなさい。それが出来ないと言うのなら、そこの男は弱くて口だけの嘘ッ！？」

その王女様の言葉が、途中で遮られる形となった。

ダクネスに、無言で頬を引っ叩かれて。

「何をするかダスティネス卿っ！」

激昂した白スーツが、頬を張られて呆然とする王女様の前に立ち、怒りに任せてダクネスへと斬りかかる。

「あっ！　ダッ、ダメ……！」

それは、切羽詰まった様な王女様の声。

その静止の声も届かずに、白スーツの剣がダクネスへと振り下ろされ……！

「！？」

ガツッと言う鈍い音と共に、その剣が、ダクネスが自分の顔の前にかざしたむき出しの白い腕にめり込んだ。

赤い鮮血が散り、王女様とダクネス、そして白スーツの、それぞれが着ている白い物が血に染まる。

屋敷の使用人達が悲鳴を上げる中……。

白スーツは動かない。

と言うか、動けない。

恐らくは、怒りに任せて腕を斬り落とすつもりで振るったのだろう。

だがその一撃は、ダクネスの腕の皮膚と筋肉を多少切り裂いただけで止まっていた。

驚愕の表情で動けない白スーツに目もくれず、ダクネスは無言で王女様へと向き直る。

ウチの自慢のクルセイダーは硬いのだ。
こいつは誰よりも硬くて頼りになるのだ。

「アイリス様、失礼しました。ですが精一杯戦い、あれだけの功績を残した者に対しての物言いではありません。彼には、あなたが言った、どうやって魔剣使いに勝ったかを説明する責任はありません。そして、それが出来なかったとしても、彼が罵倒される言われもありません」

腕から血を流し、引っ叩いた王女様に、まるで子供に優しく諭すように、ダクネスが静かな声で言った。
そんなダクネスを呆然と見上げる王女様。

俺は、未だ青い顔で驚きの表情を浮かべている白スーツに。

「……よし分かった。ここまで仲間が庇ってくれて、見せない訳にはいかないだろ。面倒臭い事になる覚悟は出来た。……見せてやるよ、俺がどうやってミツルギに勝ったのか」

俺は立ち上がりながらそう告げた。

ダクネスが俺の名誉の為にここまでやってくれているのに、俺が自分で嘘じゃないと証明しなくてどうする。

白スーツは俺の言葉に目を見開くと、ダクネスの腕に軽くめり込んでいた剣を手元に引き、構えを取る。
「も、もういい、もういいのよ！　わたくしはもういいから！」
それは悲痛な王女様の声。
根は悪い娘では無いらしい。

「……カズマ、お前が良いのなら、私は何も言う事は無い。やってやれカズマ。まさか、この相手に遅れを取ったりはしないだろう？」
傷口を片手で押さえながら、俺を信頼しているとばかりに、そんな挑発的な事を言って笑い掛けるダクネスに。
俺は白スーツに片手を突き出し、
「当たり前だろ、俺が渡り合ってきた相手を考えろ！　魔剣使いに魔王の幹部、果ては大物賞金首！　日頃そんな連中とやり合ってんだ、これでも食らえ！　まずは『スティール』ッッ！」
未だ俺の出方を伺っている白スーツに向かって叫ぶ！
まずは剣をぶん取って、そのまま一気に……！
俺は一気に行く事は無く。
白スーツに小さな声で謝った。
「……ごめん。……これ……。返します……」
「……？　えっ、あっ……！　きゃあああああ！？」
剣を手放して慌てて下腹部を探る白スーツのお姉さんに、俺は握りしめた白い下着を差し出した。
「お前って奴は、お前って奴はっ！　どうしてお前のスティールはそうなんだ！　なぜ何時も最後に決まらないっ！」

「その……。カズマ殿を表彰に来たはずなのに、こんな事になってしまい申し訳ないです……」
俺達に謝る白スーツ。
その隣では、王女様が白スーツの背に隠れるように白スーツの腕に顔を埋めていた。

そんな白スーツに、ダクネスが。
「お気になさらず。こちらにも非礼があった。傷はこうして跡形も無く癒えた事だし、水に流すのが一番だと思います」
言いながら、ふっと優しく笑い掛けた。
それを見て、白スーツが恥ずかしそうに頬を赤らめる。

王女様も白スーツも、もう俺がどうやって勝っただとかはどうでも良くなった様だ。

「……しかし、あの傷をあっという間に跡も残らず治してしまうとは……。いや、なんと凄まじい腕のアークプリーストでしょうか」
白スーツが、言いながらテーブルに突っ伏しているアクアを見た。

大人しいと思っていたら、こいつは一人で出来上がって今まで寝ていた。
ダクネスの傷を治させる為に一度叩き起こしたが、治すと同時にまた寝てしまった。
まあ、起きてもこの空気を壊しそうなので寝かしておこう。

白スーツは更に続ける。
「そしてダスティネス卿のあの硬さ。しかもそちらの方は紅い瞳から察するに紅魔族……。そんな優秀な仲間が付き従う以上、カズマ殿が弱い訳がない。……お恥ずかしい、本当に申し訳ないです……」
そんな事を言いながら、頭を下げる白スーツ。
その隣でモジモジしていた王女様が、白スーツではなくもう一人。
今まで一言も話さず、身動きすらしなかった為、ずっと存在すら忘れていた魔法使い風のお姉さんに耳打ちした。
やがて、耳打ちされたお姉さんは。
「アイリス様。それは、ご自分のお口でおっしゃった方が良いですよ？　大丈夫です、先ほどから見ていましたが、カズマ殿はアイリス様の様な年若い方には優しそうな方ですよ」
おっと、何だか初対面でロリコンと言われている気がします。
王女様は、俺の前に俯きながら歩いてくると。
「……嘘吐きだなんて言ってごめんなさい。……またわたくしに、冒険話を聞かせてくれるかしら？」
恥ずかしそうにしながらも、王女様は上目遣いに言ってきた。
「喜んで！」

「さて、では夜も遅いですし、そろそろ我々は城へ帰ると致します。ダスティネス卿、そして皆様方。大変ご迷惑をお掛けしました」
魔法使いのお姉さんが、そんな事を言ってくる。
隣には、王女様がウキウキした歳相応の笑顔を浮かべていた。
これからテレポートでひとっ飛びするのだろう。
なんとも便利な魔法だ。

「こちらこそ、あまりお構いも出来ませんでしたが……。アイリス様。また城にでも参じた時にお話を致しましょう。その時には、様々な冒険話を携えて参りますので」
ダクネスが、言いながらニコリと笑い掛けた。
そんなダクネスに、王女様が応える様にはにかむ。
そのダクネスと王女様の姿は、何だか面倒見の良いお姉さんとそれを慕う子供の様だ。

さて。

「それでは。これまでのあなた方の多大な功績は、王国の記録にも残され、後世伝えられる事でしょう。さあ、これを授与します」
言いながら、魔法使いのお姉さんが、賞状と何かの袋を……。

俺ではなくてダクネスに。

……いやまあ良いんだけどね。
「これはかたじけない事です。……では、アイリス様。どうかお体にお気をつけて……！」
ダクネスが、それらを手にして笑顔を見せて、めぐみんもその隣

でバイバイと手を振る。

「それじゃあ、王女様。また、いつの日か俺の冒険話をお聞かせに参りますので」

そう言って、俺も王女様に手を振ろうと……。

した、その時だった。

魔法使いのお姉さんがテレポートの魔法の詠唱を終える中。

王女様が俺の腕を手に取ると。

「何を言っているの？」

王女様は不思議そうな表情を浮かべる。

「『テレポート』！」

そんな、魔法使いのお姉さんの声と共に、俺は光に包まれ、目を閉じる。

やがて目を開けると……。

そこには、王女様が俺に無邪気に笑い掛けていた。

……大きな城を背にしながら。

王女様に腕を掴まれていた俺は、テレポートの定員数に空きがあった為か、どうやら一緒に城まで連れて来られたらしい。

「「アイリス様！？」」

白スーツと魔法使いのお姉さんが声を揃えて驚く中。

「さっき、またわたくしに、冒険話をしてくれるって言ったでしょう？」

王女様が、そんな事を言って笑い掛けてきた。

おっと、これは誘拐って言うんですよお姫様。

6話

その日。
目が覚めた俺は柔らかなベッドの上から降りようとはせず、そのままパンパンと手を叩いた。
ドアの前に立つ執事を呼ぶ為である。
その音を合図にドアを開け、現れたのは執事服にキッチリと身を包んだ白髪の老人。
「お呼びでしょうかカズマ様」
その執事は、俺に対して深々と頭を下げる。
「ああ、目覚めのコーヒーを頼むよセバスチャン」
「ハイデルです」
「頼むよハイデル」
俺は執事のハイデルにコーヒーを頼むと、そのまま再びベッドの上に横になる。
やがてメイドのメアリーがベッドのシーツを替えに来るのだろう。
だが、そう簡単にシーツを替えさせてやる訳にはいかない。
メイドさんには、簡単に仕事をこなさせないよう様々な妨害をする。
これが、どこかのクルセイダーに教わった、正式なメイドの扱い方である。
やがて、ドアをコンコンと叩く音。
「失礼します」
そして聞こえる女性の声。

ほうら来た。
俺の専属メイドのメアリーだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

既に辺りは完全に闇に包まれ、そろそろ人々は眠りについてもおかしくない時間帯。
今はそんな時間にも関わらず。

「「「お帰りなさいませアイリス様！」」」

まるで到着を待ち構えていたかのように、多くの侍女が一斉に出迎えの声を掛けてきた。

そこはこの国の首都の中心にある王城の大広間。

俺は、一体どうしてこうなったと半分以上脳が止まった状態で、目の前を歩く白スーツを着た女性と、その後ろに続く王女様、そして、その王女様を白スーツと挟む体勢で、後に続く魔法使いのお姉さんの、更に後に続いていた。
多くの人々が跪く中、俺はとんでもなく場違いな場所に居る事を自覚しながら、おっかなびっくり付いて行く。

白スーツに案内された所は城の中の階段を相当登った、城の上部にある豪奢な部屋。
そこへと案内してくれた白スーツは、報告があるからと言い残して何処かへ行き、俺と王女様と魔法使いだけがその部屋に取り残さ

れた。

途中通り過ぎた人達が、俺を見ても見咎めることもなく、一礼して素通りしていった。

自分で言うのもなんだが、こんな胡散臭いのを城に野放しにしておいてもいいのだろうか。

王女様と一緒だから問題無いのだろうか。

と言うか、こんな城の中に普通にウロウロしている人達だ。

と言う事はもちろん、ここに居る全員がそれなりに身分の高い人達なのだろう。

そんな城の中に元ニートが一人。

どうしよう、凄く帰りたい。

ちょっと前まで、お姫様に気に入られて城の近衛兵だとか、お姫様専属の騎士だとかに是非にとか言われたらどうしようと浮かれていたのに。

唐突に拉致られて未だパニックに陥っている俺に、王女様が魔法使いのお姉さんにボソボソと耳打ちした。

それを聞いていた魔法使いはコクコク頷き、やがて俺に向かってにこやかに。

「サトウカズマ様、ようこそ当城へ。客人として招いたのですから、余計な礼儀作法や気遣いは無用です。どうか、ここを我が家だと思い寛ぎなさい。この部屋が当面のあなたの部屋となります。……では、早速冒険話の続きを！　との事です」

「ちょっとすいません、すいません。お姉さん、すいません。魔法使いのお姉さん、ちょっとだけこっち来て貰っていいですか？」

俺は魔法使いの言葉を聞いて、その部屋の隅っこへと向かい、魔

法使いにこっち来いとばかりにクイクイと手をやった。

「……なんでしょうか？　ああ、自分の事はレインで結構。自分に対しては敬語も結構。一応は貴族の端くれですが、ダスティネス家とは比べるべくもない小さな家です。ダスティネス卿のご友人となれば、むしろ貴方様の方が自分よりも格上と言える立場ですので……」

魔法使いのお姉さん、レインがそんな事を言ってきた。

「なるほど。ではレインさん。ちょっと聞きたい事があるんですよ」

「自分に敬語は結構だと言いましたのに……。名前も呼び捨てでも。……なんでしょう？」

レインは少し残念そうにそんな事を言ってくるが、初対面の年上の貴族の女性を、いきなり呼び捨てに出来るほど太い神経はしていない。

と言うか、つい先ほどダクネスの家で白スーツに無礼者と怒られたばかりだ。

相手が良いと言っても、今は万が一の際に庇ってくれるダクネスも居ないのだ、流石に俺も腰が引ける。

気を取り直して、俺はレインに改めて。

退屈そうにしている王女様を少し気にしながら、小さな声で。

「ええっと、レインさん。……そろそろ状況を説明して欲しいんですが。……王女様は客人としてお招きだとか言い張ってますが。……これ、誘拐ですよね？」

「違います。客人としてお招きしたのです。申し訳ありません、アイリス様の悪いクセなのです。気に入った冒険者がいると無理やり城に泊め、何日も話をねだるのです。どうか、アイリス様が飽きるまではご滞在くださる様にお願い致します」

……えっと。

「いやいや、正直に言って俺の冒険話なんて先ほどので大体終わっちゃいましたよ。これ以上何か話をしろって言われましても。その辺を王女様に伝えて帰して頂けませんかね？　俺にはもう、王女様の気に入る様な冒険話はほとんどありませんと」

俺の言葉に、レインは王女様の元へ行き、それらの事をボソボソと説明していた。

やがて……。

「あなたを強引に連れて来たのは、悪かったとはいえ、私を叩いたラティーナへのちょっとした仕返しも兼ねているので……」

レインがそんな通訳を始めるのを、その隣で王女様がいたずらっ子が浮かべる様な軽い笑みを浮かべながらクスクス笑う。

「……なので、そこまで気を使わなくても大丈夫、普段のお話で結構ですわ。例えばそう、ラティーナと普段どんな事をしているのかだとか……。冒険以外のお話なども是非聞かせて欲しいです、との事です」

……参ったなあ。

王族とか権力者って皆、こんなワガママなのか？

……ワガママなんだろう。

でも、あまり無理に断って、心象悪くしてダクネスの評判落とすのもなあ……。

「……分かりました。では、ダクネス……。……ラティーナとの話でも。……レインさん、仲間が心配するんであいつらに、こちら

に泊まるって事を説明して欲しいんですが」

俺の頼みに、レインが畏まりましたと言い残して部屋から立ち去った。

当然この豪奢な部屋には、俺と王女様の二人きりとなる。

一応ドアの外には王女様の護衛なのか、女性の兵士が二人ほど。

ドアの前で、何かあった際には何時でも駆け込めるように待機はしていた。

余所者の俺が心配する事でも無いのだろうが……。

年頃の王女様が夜に若い男の部屋に二人きりで居ていいのだろうかとか、会ったばかりの不審者をいきなり泊めるとかどうよとか、そもそも王女様のワガママでこうなったとはいえ、俺ここでこうしていて王様とか偉い人とかに怒られたりしないのか等々、どんどん悪い考えが頭を巡る。

そんな俺の心配を見透かしたのだろうか。

王女様が微笑みながら。

「お父様は、将軍と共に魔王軍との最前線となる街へ遠征に行っております。城を預かる宰相は、とても多忙でわたくしの事に構っていられる余裕などありません。……なので、誰も咎める者などおりませんよ？　そして……。こうして二人きりの時など、家臣がいない時であれば、普段、ララティーナ……。いえ、ダクネスと呼んでいるのですよね？　……今晩だけは、無礼は許します。その、ダクネスに話しかける様な言葉遣いで結構です。……教えてくださいな、城の外の世界の色々な事を」

世間知らずな王女様は、部屋のベッドに腰掛けながらそんな事を

言ってきた。

白スーツが、様々な報告やら手続きを終え帰って来た。

「失礼します。……アイリス様、色々と手続きを済ませて参りました。これでカズマ殿は正式な客人となりましたので、カズマ殿の都合の許す限りこの城に滞在していただければ……」

俺が王女様に語っていた話の、まさに一番盛り上がっていた所に。

「で、ダクネスが言ったんだ。……このままあの豚領主にむざむざと奪われるぐらいなら。……いっそ、ここで二人で大人になってみるか？　……ってね！　そして月明かりの下、その白い肌を赤く火照らせたダクネスと見つめ合い……！　や、やがてダクネスの腹部に伸ばされた、おお、俺の手が……っ！」

「おおお、俺の手が……っ！？　俺の手が、どうしたのですか……っ！？」

「俺の手がどうした！　アイリス様に何を教え込んでいる、ぶった斬られたいのか貴様はあああっ！」

白スーツが、俺の話に前のめりになって聞き入っていた、ベッドの上の王女様を庇う様に俺の前に立ち、剣を抜いて罵声を浴びせた。

「ま、待ってくれ！　待ってください！　これはアイリス様が是非にと……！」
「貴様、唯の冒険者が恐れ多くもアイリス様の名を口にするとは……！　王女様と呼べ！　それに、先ほどのアイリス様への口の利き方は何だあああああ！」
こいつ面倒くせえ！
「待ちなさいクレア、カズマ様にはわたくしが名前で呼んでいいと言ったのです。言葉遣いも自然なままで良いと言ったのです。それよりもカズマ様、ダクネスは……！　ダクネスのお腹に伸ばされたカズマ様の手は、どうなったのですか……！」
「アイリス様、いけません！　その話は聞いてはいけない話です、カズマ殿、アイリス様にその手の話を吹き込まないでください！」
と、と言うか、庶民のあなたとダスティネス卿が、その……。そ、そんな関係にだのと……。う、嘘ですよね？」
先ほどからベッドの上で、拳を握りしめて食い入るように俺の話を聞いていた王女様。
その王女様が早く早くと続きを催促して来る中、俺は部屋の椅子に腰掛けながら、王女と同じく俺に食い付くように聞いてくる、クレアと呼ばれた白スーツに。
「何一つ嘘は言っていない。なんなら、ホレ。これだけ大きな城ならアレは無いのか？　大きな街の警察署だのにある、尋問する時に使う魔道具。あの、嘘をつくとチンチン鳴る魔道具だ。あるならアレを持ってきてもいいぞ？」
俺のその言葉を聞いて、どうやら嘘を言っている訳ではないと納得したらしい。

クレアは剣を収めると。
「あなたが嘘は言っていないと信じましょう、先ほどもダスティネス卿の屋敷であなたを嘘吐き呼ばわりしてしまったばかりですし……。で、ですが、この手の話はアイリス様には話さないで頂きたい！　……そして、私に対してはちゃんと敬語を使う様に！」
そう言って、俺をキッと睨んでくる。

こいつ嫌い。

「俺の話を聞くかどうかはアイリス様がお決めになる事でございます。アイリス様のお付き人たるあなた様に指図される言われはない筈でございます。楽しくお話していたのにとんだ邪魔が入ってガッカリでございます！　ほら出て行って！　先ほどの続きを話すんだから出て行って！」
「話させるかたわけ！　私は付き人ではないぞ無礼者めが！　私は、カズマ殿が懇意にされているダスティネス家にすら並ぶ、シンフォニア家の長女クレア。アイリス様の護衛にして……」

何か自慢話を始めたクレアを他所に、王女様に。
「この話はダメだと白スーツがいちゃもん付けるので、別のお話にしましょうかアイリス様」
「し、白スーツとは何だ下賤な無礼者、クレア様と……！　ああもう、何なんでしょうこの男は……。ダスティネス卿もきっと日頃苦労しているに違いない……！」

一々食って掛かってくるクレアの言葉を気にしたのか、王女様がちょっと残念そうな顔をして。
「仕方ないですわね……。残念ですが、先ほどの続きはまたの機会に」

そんな聞き分けの良い王女様の言葉に、クレアがホッとした様に息を吐いた。

「では、別のお話を。この俺が、上半身をワイヤーで縛られたダクネスと、暗く狭い物置で組んずほぐれつしたお話などでも……」

「ぜぜ、是非とも！　是非ともそれを！」

「い、いけません！　いけませんアイリス様、この男の話は聞いてはいけません！　この男、ダメな奴です！」

時刻はとっくに深夜を回っただろうか。

先ほどまでは王女様と一緒に俺の話を聞いていたクレアは、怒ったり怒ったり、そして怒ったりと忙しかったのだが。

やがて怒り疲れたのか、ウトウトしていたクレアは、今は王女様が腰掛けているベッドに倒れ込むようにして眠っていた。

王女様はと言えば、そんなに俺の話が気に入ったのか眠そうな気配も見せないまま、未だに興味深そうに話を聞いていた。

俺は既に、冒険話も仲間の話もネタが尽き……。

「それで？　その、ガッコウと言う所の、ブンカサイと言うのをもっと詳しくお願い！」

「詳しく……。まあ、アイリス様と同年代ぐらいの子達だけで、色

々な出し物とかをするんですよ。例えば喫茶店だのと言ったお店だとか」

話は、俺の元居た世界の話題になっていた。

異世界とは言わず、遠い国としか言っていないが。

過去の学校生活の様子を話すだけで、王女様は羨ましそうに、遠く見知らぬ俺の国に想いを馳せる。

モンスターもおらず、王女様と同じ位の年の子達が日々平和に勉強したり遊んだり。

そんな、俺にとっては実に退屈だったあの毎日が、王女様にとっては……。

「なんて楽しそうで夢の様な所なの？　そんな、そんな……。ああ、でもわたくしと同年代の方だけでお店を出すだなんて、お金を払わないと言い出す悪いお客が来たらどうするのかしら。それに、大勢でお店を切り盛りするのでしょう？　全員分の給料を賄う利益は出るのかしら……？」

それは、とても羨ましい暮らしに映ったらしい。

俺よりも大分年下の王女様が考えこむ姿を、微笑ましく見ながら。

「お店を出して楽しむのが目的ですからね。儲けようなんて思わないんですよ。言ってみれば、お店ごっこをして楽しむと言いますか。お揃いの制服を着て、お客さんを呼んでみたりだとか。そういうのが楽しくてやるんですよ」

そんな俺の言葉に、王女様が心底羨ましそうに、そして少しだけ寂しそうな顔をした。

それもその筈、この少女は王女様だ。

下々の者と共に学校なんて行かないし、そもそもこの世界には、高い知性と独自の文化を持つ紅魔族の連中を除き、義務教育という物が無い。
一部の金持ちぐらいしか学校になんて通えない。
そう考えると、規模は小さいながらもちゃんと子供の頃から学校に行かせるシステムを取っている紅魔族は、やはり知力が高い連中という事なのだろう。
……その性格は置いておくとして。
羨ましそうに、ガッコウ……と呟く王女様。
そんな王女様に、俺は何気なく言った。
「そんなに気に入ったなら、ここに学校を作っちゃえばいいじゃないですか。作って損になる施設ではないですよ？　絶対にこの国の為になりますって」
その俺の言葉に、王女様が一瞬何かを言おうとして、そして止めた。
……？
そんな中。
俺が不思議に思っていると、唐突に夜の静寂にけたたましい鐘の音が鳴り響いた。
その鐘の音に寝ていたクレアが跳ね起きる。
寝起きだというのにクレアは直ぐに落ち着きを取り戻し、

「……なんだ、また来たのですか」
そう呟くと、そのままベッドから降りて立ち上がった。
また来たのかって何が？
俺がその疑問を口に出す前に、夜の街に大きな声が響き渡った。
それはアクセルの街で偶にあった、緊急クエストを知らせる時の様なアナウンス。
『魔王軍襲撃警報、魔王軍襲撃警報！　騎士団は直ぐ様出撃。冒険者の皆様は、街の治安の維持の為、街の中へのモンスター侵入を警戒してください。高レベルの冒険者の皆様は、ご協力をお願いします！』
そのアナウンスを聞いて、王女様がちょっとだけ寂しそうに。
「こんな状況ですもの。とてものんびりと、学業だけに勤しんでいるなんて出来ません」
そんな事を呟いた。
俺は、この世界に来る前にアクアに言われた事を思い出す。
ああ、そういやこの世界は、魔王とやらの所為で色々ヤバイ状態だったなあ……。

『魔王軍による夜間奇襲は鎮圧された模様です。ご協力頂いた冒険者の皆様には感謝致します。今回ご協力頂いた方々には、臨時報酬が出ますので、ご協力頂いた冒険者の方は冒険者ギルドの窓口へ……』

そのアナウンスは、あの後剣を携えたクレアが飛び出して行き、それから一時間もしない内に流れてきた。

案外アッサリと済んだものだ。

しかし、ここはこの国の首都だと言ったが、そんな所が夜間襲撃を掛けられるとか、戦況的に結構押されてんのか？

日本から来たチート持ち連中は何をやってるんだ、もっとしっかりして頂きたい。

何の力にもなれないお前が言うなと言われそうだが。

全く、こんな最前線に近い物騒な城とはとっととオサラバしたいものだ。

そんな事を思っていると。

恐らくはそれが、顔に出ていたのだろうか。

「……カズマ様、今日は楽しいお話をありがとう。……日が登ったなら、レインに街まで送ってもらうと良いですわ。……ラティーナに、ごめんなさいと謝っておいてはくれませんか？　勝手にあなたを連れて来てしまってごめんなさいと……。魔王軍との最前線で

はないとはいえ、ここも、たまにこうして襲撃がある、決して危険がないとは言えない場所ですし」

王女様が、俺を気遣うようにそんな事を……。

……そうだな、俺が残った所でこの街を守れる訳でもなけりゃ力になれる訳でもなし。

王女様には悪いが、この危険な地からはとっとと帰らせてもらおう。

「ワガママに付き合ってくれてありがとう、カズマ様。……また、いつの日か冒険話をしてくれますか？」

王女様が、歳相応の笑顔でそんな事を言ってくる。

可愛いじゃないか全く。

俺は王女様に笑い返した。

「もちろんですよアイリス様。正直、結構小心者なんで早く帰りたいのが本音ですが。……それでも、アイリス様の為にまた来ます。ええ、きっとまたここに来ますよ」

そんな俺の言葉に、王女様がはにかんで言った。

「ふふっ、ありがとう。わたくしに兄弟はおりませんが……。カズマ様は何だか、お兄様みたいです。本当はまだ残って欲しいですが、あまりワガママを言うと……」

「今、なんて？」

俺は王女様の何気なく言った一言に。

「……えっ？　あ、あの……。せっかく知り合えたのですから……。

本当は、まだ残って欲しいですが、と……」
王女様が恥ずかしそうにしながら言った。
だが違う、そこじゃない。

「その前の事です。その前に、俺が何みたいだと言いました……？」

俺の言葉に王女様が。

「ええっと……。お兄様みたいだと……」
「すいません、もう一度言ってもらえませんか？」

若干の戸惑いを覚えながらも。

「お、お兄様みたいです」
「お願いします、出来ればもっと砕けた感じでもう一度……」

その一言を言ってくれた。

「お兄ちゃんみたい」
「残ります」

この城に残る事にしました。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

魔法使いのレインさんが、アクセルの街に俺がこちらに滞在する

事をダクネス達に報告し、あれから一週間が経つ。

毎晩遅くまで妹に色んな話をしてやるのが、今の俺の仕事だ。

そして遅くまで起きているのだから、当然遅くまで寝ていてもいい筈だ。

今の時刻は昼過ぎだろうか？

その日、目が覚めた俺は柔らかなベッドの上から降りようとはせず、そのままパンパンと手を叩いた。

これはこの城で覚えた事の一つ。

ハッキリ言おう。

この城は、ニートにとっては天国だ。

俺は手を叩いてドアの前に立つ執事を呼ぶ。

その音を合図にドアを開け、現れたのは執事服にキッチリと身を包んだ白髪の老人。

「お呼びでしょうかカズマ様」

そう。

「ああ、目覚めのコーヒーを頼むよセバスチャン」

俺の専属執事のセバスチャンである。

「ハイデルです」

「頼むよハイデル」

名前の間違いなど些細な事だ。

俺は執事のハイデルにコーヒーを頼むと、そのまま再びベッドの

上に横になった。

これから、もう一つの日課が待っている。

やがてメイドのメアリーがベッドのシーツを替えに来る。

だが、そう簡単にシーツを替えさせてやる訳にはいかない。

メイドさんには、簡単に仕事をこなさせないよう、様々な妨害をする。

これが、俺の友人の大貴族に教わった、貴族の嗜みと言う奴である。

やがて、ドアをコンコンと叩く音。

「失礼します」

そして聞こえる女性の声。

ほうら来た。

「おはようメアリー。だがそう簡単に、この俺がシーツを取り替えさせると思うなよ？　さあ、手早くシーツを取り替えて他の仕事に取り掛かりたいのなら、こう言うんだ。ご主人様、どうか……」

入って来たのはクレアだった。

「……ご主人様、どうか……何だ？　言ってみろ。ええ？　言ってみろこのクソニートがっ！　貴様、ゴロゴロゴロゴロ毎日毎日！　やる事と言ったら昼寝かメイドへの嫌がらせ！　何なんだ！　ダスティネス卿は、本当にどうして貴様の様な奴と仲が良いのだ……っ！」

この人は、毎日毎日俺を飽きもせずに説教にくる。

最近では俺に対しての言葉遣いなど、それはもう酷いもの。

非常に短気で典型的な、身分を大事にするタイプの貴族な女で、無礼者呼ばわりされて何度か斬りかかられそうになったのだが。

「余計なお世話だよ白スーツ。ところで何しに来たんだ一体」

「いい加減、白スーツと呼ぶのは……！　……聞きたかったのですが、カズマ殿は私の事が嫌いなのですか？　……私も結構言いたい放題に言わせては頂いておりますが、カズマ殿も貴族である私を相手に随分と色々言ってくれますね？」

クレアが相変わらずの白スーツで、若干不機嫌そうにそんな事を。

「いやお前、ダクネス自身は許したけれども、俺の中ではお前さんは、大事な仲間のダクネスに斬りかかって傷を負わせた狂人扱いだからな」

「きょ、狂人呼ばわりするな！　……まあ、いいでしょう。今日はカズマ殿に頼みがあって来たのですよ」

……？

頼み？

「何だろう。俺に、何か出来る事が？」

「ありますとも、あなたにしか出来ない事がありますとも！」

言いながら、途端に手のひらを返したようにニコニコと笑顔を浮かべるクレア。

そんなクレアの後ろから。

「お久しぶりですカズマ殿」

魔法使いのレインが現れ、室内へと入って来た。

この二人が同時に来るとはどうしたのだろう。

レインが、実に言いにくそうに。

「その……。カズマ殿が、アイリス様に毎晩色々なお話をしてくれる様になってから、アイリス様は大変明るく、そして毎日が楽しそうになられ……」

そんな事を言い出したレインの後を、クレアが引き継ぐ。

「そう、毎日楽しそうにしておられます。その事に関しては感謝します。連日、何時魔王軍の手の者に襲撃を受けるかも分からないこの都市において、歳若いアイリス様が、表に出さないだけでどれだけ不安な想いをされているか……。それを少しでも解消して頂けた事には本当に感謝しております。そして、そんな所にダスティネス卿が惹かれたのかとも思いました。……しかし、しかしですね……！」

一体クレアとレインは何を言いたいのやら。

と、そんな俺の部屋のドアをこんこんと叩く音。

ドアは開いているのだが、礼儀上ノックをしたのだろう。

そしてひょっこりと顔を覗かせたのは、初めて出会った時のあのツンケンぶりはどこへやら、笑顔を浮かべた俺の妹の姿があった。

妹は、俺の教え込んだ通りの呼び方と喋り方で。

「お兄ちゃん、もうとっくにお昼は過ぎてるよ？　早く起きて、アイリスと一緒に遊びに行く約束でしょ？」

クレアとレインがそれを聞き、突然頭を下げながら泣き出した。

「「カズマ殿、お願いですから帰ってくださいっ！」」

だが断る。

6話（後書き）

次回は主人公による、自分の屋敷奪還戦。
お姫様以下今回登場のキャラは多分もう出て来ません。

7話（前書き）

昨日、もう出ないと言ったキャラ二人ですが、いきなり出ました。
謝らない。
今度こそ、もう出ません。

7話

現在激しく抵抗中。
かつてこれ程までに頭を巡らせ、これ程までに激戦を繰り広げた記憶はちょっと無い。

「相手は一人だとて侮るな！　その男は魔王の幹部や賞金首と互角以上に渡り合った男だ、素手だからといって油断はするな！」
聞こえてくるのは俺を追うクレアの声。

俺が帰るのを拒んだ為強制送還しようと、俺が妹と離れている隙を突き、こうして追い掛け回されていた。

そのクレアの声を聞いてか聞かずか、俺の前に数名の兵士が立ち塞がる。
「客人、此処から先には行かせません！」
「どうか、無駄な抵抗は止めて大人しく……！」

そんな兵士の言葉には耳を貸さず、俺は手元を懐に隠しながら、小さな声で呟いた。
「『クリエイト・アース』」

初見殺しのお馴染み戦法。

「カズマ殿！　諦めて……、どうか、諦めてアクセルの街へとお帰りに……！」

そんなクレアの叫びを聞きながら。

「『ウインド・ブレスト』ッッ！」

「ッ！？　ぐあああっ！？」

「目がぁっ……！」

目潰しを食らってその場にうずくまる数名の兵士。

と……、見れば俺を捕縛する為か、その兵士の内の一人がロープを持っていた。

うずくまり、無抵抗になった兵士から、すかさずそのロープを奪い、俺は更に逃走する。

このままこいつらを何とか振りきり、俺は妹の元へと行かなければならない。

そう、俺もつい最近知ったのだが俺には妹がいたのだ。

子供の頃に生き別れになった、血の繋がらない妹が。

お前は何を言っているんだと言われそうだが、妹と相談しながら楽しく決めた設定だ。

何者にも文句は言わせない。

「カ、カズマ殿！　本当に……！　本当にあなたって人は……！

いえ、もしかしたら本当に強いのかなとは思っていました。思っていましたが、まさかここまで色々やるとは……！」

俺は、いつの間にか袋小路に追い込まれていた。

俺の後ろからは四名の兵士を引き連れたクレアの声。

俺は振り向き、クレア達に対して身構えた。

素手なのは問題ない。

軽く引っ叩いてやれば、不死王の手の効果が見込める。

俺は何としてでもここを切り抜け、妹の元へと行かねばならない。

そう、あそこにさえ行ければ妹がきっと俺を庇ってくれるだろう。

ここ一週間の間に色々教え込み、すっかり仲良くなった俺の妹が。

「そこを通してもらおうか白スーツ。でなければあんたを、泣いて嫌がる目に遭わせなければならなくなる」

「……た、例えば？」

俺の言葉が既にハッタリでは無いと分かっているクレアが、恐る恐る尋ねてくる。

この一週間の滞在で、俺とクレアはお互いに普段の口調で会話出来るぐらいの間柄にはなっていた。

そして、その間俺の事も色々と理解したのか、既に彼女は、俺が意味のない脅しはしない事も理解している。

「このロープでバインドスキルを使って縛り上げ、その上であんたが泣いて謝るまでスティールを唱え続ける事になる」

「ひいっ！　ちょ、ちょっと待って！　ま、待って頂きたいカズマ殿！　私は仮にも貴族の娘、そ、そんな大それた事は……。し、しません……よね？」

不安気に聞いてくるクレアに俺は、威嚇する様にロープをヒュンヒュンと振り回し。

「ちなみに俺は、ダクネス相手に水をぶっかけた事もあればバインドで縛った上で馬車で引きずり回した事もある。信じる信じないはそちらの勝手だ」

「退避ー！」

表情を引きつらせてそんな悲鳴じみた声で退避命令を出すクレア

とは対称的に、なぜかその場にいた兵士達はジリジリと俺との距離を詰めて来た。

こうやって、真正面から数で来られると俺の力ではどうしようもなくなってしまう。

「我々にお任せをクレア様！　あの男は我々が……！」

相手は四人。

そしてその兵士達には、既に俺の目潰しを遠巻きながらも見られてしまっている。

彼らに同じ手は通用しないだろう。

となると……！

「さあ客人、大人しく我々と共に……ッ！？」

「『バインド』ッ！」

何か言い掛けた兵士に対して、すかさずバインドを仕掛けた。

流石に素人でもないその兵士は、咄嗟に自らの剣でロープを切り払おうとするも、それでも宙を舞う不安定にだらけたロープは易々とは切れず。

そのまま剣と共に、不恰好な状態ながらも縛られた。

だが掛かりが浅い。

この状態ではいずれ切り払われるだろう。

しかし、その僅かな隙で十分だ！

「確保っ！」

叫んで、俺に飛びかかろうとする一人の兵士に、片手を突き出し一声叫ぶ。

「『ウインド・ブレスト』！」

それは思い切り魔力を込めた風の初級魔法。

ごっそりと魔力を消費したその魔法は、相手に一瞬たたらを踏ませた程度だが、それでも俺を囲んでいた包囲に隙間が出来た。

「小手先の技ばかりだ！　怯むな、一気に行けえっ！」

そう叫んだのはその隊の小隊長か何かだろうか。

俺はその相手の懐に自分から飛び込むと、そのまま相手に手を取らせるように、握手をする様に片手を差し出す。

反射的にか、訳も分からずに俺の左手を握ったその兵士に、右手の先で軽く小突いた。

「ッ！？」

麻痺でも食らったのか、途端に崩れ落ちるようにその場に膝を付くその兵士を見て、たたらを踏んで怯んでいた兵士ともう一人の兵士が、何が起こったのか分からずに、警戒する様に動きを止める。

その隙を突き、そのまま兵士達の脇を通り過ぎ……！

「そこまでですカズマ殿、既にここは包囲されています！　さあ、自分と一緒にアクセルの街へと帰りましょう」

袋小路から抜け出ると、既にそこには十を越える兵士の姿。

それらを引き連れていたレインがそんな事を、若干青ざめた顔で言ってきた。

動きを止めた俺の後ろから、脱出してきた袋小路の中から兵士二

人とクレアも出てくる。

クソッ、何か無いか、何か！

そんな俺の僅かな期待も虚しく、レインが連れて来た兵士達が隙間なく包囲を固める。

アカン、これは都合良くどうにかできる数ではない。

「さあ、カズマ殿。もうこれ以上の抵抗は止めて大人しく帰ってください。……この一時間余りの逃走劇で、凍らされた地面で転んで怪我を負った者数名、バインドで未だに縛られている者数名、どういった方法を使ったのか、眠っている者、痺れている者……。よくもまあ、たった一人でこれ程までに色々と……」

呆れたような、それでいて感心した様なレインの声。

「全く、信じられない男だ……。ミツルギ殿が一目置く理由が嫌ってほどに良く分かりました……。我々の気配を簡単に察知して逃げるわ、追い込んだ筈なのに簡単に姿を見失うわで……」

俺に何度も撒かれたクレアが、疲れた顔でそんな事を言ってくる。

敵感知と潜伏スキルの事を言っているのだろう。

動きを止め、諦めたかの様な俺の姿に安心し、クレアがゆっくりとこちらへと近づいて来るが……。

「……なあレイン、取引をしよう」

俺は抵抗する素振りは見せないままで、レインに静かに語りかけた。

その言葉にクレアが途端に表情を強張らせ。
そして、レインの眉がピクリと動いた。

「……レインの家は、確か小さな貴族なんだろう？　俺は知っての通り、ダクネスとは仲が良く、そしてダクネスの親父さんにも覚えが良い。一度、あいつを連れて逃げてくれなんて言われたぐらいには懇意にして貰っている」
「止めろ！　聞くなレイン！　その男の言葉に惑わされるな！」

俺が語り出したその言葉に、レインは喉をゴクリと鳴らし、クレアが叫んだ。

「……そして、アイリスとは既に、お互いに名前の呼び捨てすら許しているような間柄だ。そんなに俺を慕ってくれているアイリスから、俺を引き離してしまうのか？　それをアイリスが望むのか？　ここで俺に貸しを作っておくと、引いては、ダスティネス家とアイリスへの覚えが良くなるって事だよレイン君」
「聞くな！　聞くなレイン！　ダスティネス家に貸しは出来ても、私に借りが出来る事になるぞ！　私を敵に回すと後が怖いぞレイン！　それに、それにだ！　アイリス様の将来を考えるなら、いかにこの男に懐いていても引き離すのがアイリス様の為だ！　良く分かっているだろう、この男と一緒に居たらアイリス様はどんどんダメになるぞ！　最近のアイリス様のあのお姿を思い出せ！」

俺とクレアの言葉に挟まれ、困った様な表情でオロオロしているレイン。
レインが連れて来た十を越える兵士達は、多分全員がレインの私兵か何かなのだろう。
主のレインが困っている為、俺の捕縛に動けない。
そして、そのレインの私兵が動かない事で、クレアと共に俺を追

っていた兵達も事の成り行きに着いて行けず、動けないでいた。
レインは無言で、汗を垂らしながら俺とクレアを交互に見ている。
悩んでる悩んでる。
あともうひと押しだ。

「なあ、レイン……。良く考えてみてくれ。魔王の幹部や賞金首と戦った俺は、戦力にはなれないか？　ここの城に滞在して、アイリスの遊び相手をしながらイザって時は城の防衛だってしようって事だよ。悪い事なんて何も無いだろう？　アイリスは遊び相手が出来て幸せ。俺も幸せ。国民は戦力になる冒険者が増えて幸せ。レインはダスティネス家やアイリスに気に入られて幸せ。……これでいいじゃないか？」

「……！」

「レイン、黙り込むな！　なるほどそうか、とばかりに手を打つな！　……よ、よし分かった！　レイン、確かお前の家は幾ばくかの負債を抱えていたな？　あれをウチが肩代わりしてやろうじゃないか！　確か、数千万ほどだっただろう？　どうだ、悪い話じゃないだろう？」

俺の言葉に納得仕掛けていたレインだったが、クレアのその一言は効いたらしい。
俺に向かってレインが、ごめんなさいと小さく呟き頭を下げた。
それを聞いて、ようやくクレアが安心した様な、ホッとした表情を浮かべる。

俺が一介の冒険者だったなら、話はここで終わっただろう。
だが、ここで男の甲斐性を見せなくてどうするのか。

「俺は個人的な資産が二十億以上ある。この意味が……」
「とっ、取り押さえろっ！　これ以上この男に喋らせるなっ！」
言葉を言い終えるよりも早く、俺は不覚にも、背後から忍び寄っていたクレアの部下に取り押さえられた。
「お、おのれ卑怯者！　今は俺の交渉中だったはずだろ、途中で妨害するな！　白スーツ、お前またパンツ剥かれたいのか！　俺を敵に回すのは得策じゃないぞ！」
「分かってます、分かっておりますよカズマ殿！　私は、ハッキリ言ってどんな政敵やモンスターよりもあなたの方が恐ろしい！　個人的な能力もあれば口も回りコネもある。オマケに金まで持っているとは……。レイン、私の指示通り、記憶を消去するポーションは持って来ているな？」
おい止めろ、なんだ記憶を消去って。
不吉な事言うな。
俺を取り押さえる兵士達。
そんな兵士達に俺の両腕をしっかりと押さえるように指示しながら、クレアが言った。
「こんな手荒な真似をするのは不本意なのですが、あなたはアイリス様の側に置いておくと本当に悪影響を与えます。そして、強制送還なんて手荒な真似をする以上、あなたはきっと我々を恨みに思うでしょう。ハッキリ言って、私は何をしでかすか分からないあなたが怖い。申し訳ないが、ダスティネス邸から此処に来た、あの日以外の出来事は忘れてください。さあ、レイン！」
「わ、分かりました。いいんですね？　このポーションは、運が悪ければ副作用でバカになる可能性がある、人道的な理由から禁忌と

されたポーションですが……。ほ、本当によろしいんですね？」
　クレアの言葉に、レインがそんなとんでもない事を言いながら、ポーションを持って俺の傍に……！

「や、止めろお！　そんな妙な物飲ませるんじゃない！　お前ら覚えてろよ！　今が昼間で良かったな！　俺は夜に真価を発揮する男。暗視や敵感知、そして潜伏スキルでどんな屋敷にだって忍び込めるし、弓があればどんな遠くからでも狙撃が出来る！　覚えてろよ！
　覚えてろよっ！」
「は、早く！　早くポーションを飲ませろレイン！　怖い！　この男、本当に怖い！　あれでまだ本領じゃないだとか！　私が色々とやった記憶を綺麗さっぱり消させてくれ！」
「じ、自分も！　自分の分の記憶も絶対消したいですから、ポーションを多めに飲ませますよ！　この方とんでもないです、早くポーションを……！　ほら、カズマ殿口を開けて……！」

　城の敷地の隅で兵士に取り押さえられる俺を、二人の貴族の娘が挟み込み、俺の顔に手を伸ばして必死に口を開けさせようとする。
　傍目には両手に花な状態なのかも知れないが、冗談ではない！

「『ティンダー』！」
「あっつ！　熱い熱いっ！　ああっ、大事にしていた高価なマントに穴がっ！」

「この男、こんな状態になってまで最後まで抵抗を……！　心の底からあなたを畏怖しますよカズマ殿！　レイン、そんな物私が後で買ってあげるから、はっ、早くっ！　早くポーション飲ませて、この危険な男を送り返せ！！　この男の報復が恐ろしすぎる、多少バカになってもいいから多めに飲ませて！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

気が付くと、俺はなぜかアクセルの街の入り口に立っていた。

…………？

はて、何があったのかが思い出せない。

何だろう、なにか大切な物を失った様な……？

探し求め続けてようやく出来た、大切な家族が失われたような……？

なんだろう、この喪失感は。

確か、俺の宿敵である白スーツに……。

白スーツに？

なんだっけ、俺はなぜ白スーツを宿敵などと思っているのか。

でも何だろう、あの白スーツには何かやり返さなければいけない気がする。

と言うか、俺は城に連れて行かれてアイリスと話をして……。

そして、俺の事をお兄ちゃんと呼んでくれたアイリスの傍に、しばらく滞在すると……。

……あれえー？

何だろう、やはり何か腑に落ちない。

腑に落ちないが、白スーツにだけは後で何かやり返しておこう。

本能に近い部分がやっとけやっとけと訴えかけているので。

まあいい。

連れ攫われたのは昨日の夜。

俺が城に攫われた後、レインに、城に泊まると伝えてもらった筈だ。

だが、きっと皆心配している事だろう。

……うん。良く分からんが、帰るとするか。

街中を屋敷に向けてテクテク歩く。

昨日まで居たこの街なのに、なんかちょっと久しぶりみたいな気がするのはなぜだろう？

そんな事を思いながら、俺は自分の屋敷の前に着いた。

そして、玄関を開けようと……。

……して。

ドアが開かない事に気が付いた。

「……？」

なんてこった、誰かいれば鍵は何時も開いているはず。

という事は、皆出てったのか。
きっと飯でも食いに行ったのだろう。
まあ、その内帰って来るはずだ。

俺は昨日のままのスーツという格好だ。
金も持って来てないし、鍵はめぐみんが持っていた。

しょうがない、ここでしばらくのんびり待つか。

――――三時間後――――

「お、遅え……！　何やってんだあいつらは……！　人が攫われたってのに、その翌日にはのんびり飯食ってるとかどういうこった！」

俺は屋敷の庭に作られた鶏小屋の前で愚痴っていた。
小屋の中、ふわふわの毛布が何重にも巻かれた暖かそうな寝床の中には、屋敷から閉めだされている俺とは対称的に、綺麗な水と餌を置かれた、ＶＩＰ待遇で深い眠りにつくヒヨコの姿。

最近は、毛が生え変わってきて黄色から白色へと変わりつつある。

……と、俺はふと気が付いた。
「……お前、何か昨日に比べて随分成長してないか？」

俺は、眠るゼル帝の姿を見ながら、じっと体育座りで鶏小屋の前に座っていた。

そんな時。

「ドラゴン泥棒ー！」

屋敷の二階の窓が開けられて、俺に向かってそんな声が掛けられた。

誰がドラゴン泥棒だとか色々言いたいことはあるが。

これをドラゴンと言い張るのはこの屋敷には一人しか居ない。

「お前、誰が泥棒だコラ。と言うか、いい加減鶏だと認めろよ。屋敷に居たなら鍵はちゃんと開けといてくれ。おかげで誰も居ないと思って、ずっと待ってたんだぞ」

そんな俺の言葉に、アクアが無言で俺をジッと見る。

……？

「ちょっと何を言っているのか分からないんですけど。めぐみんとダクネスとの相談の結果、ここは麗しき女神アクア様の屋敷となりました。ダクネスは実家があるし、めぐみんもこの街に新しく出来た実家があるし。と言う訳で、ここは私の屋敷になったんです。あなたはお城に住むんでしょう？　出て行って。早く庭から出て行って」

……。

「お前って奴は、普段からバカだバカだとは思っていたが、今日は

一体どうしたんだ。重症のバカに成り果てているじゃないか。お前、ちょっと自分の頭に治癒魔法を掛けてみろよ。それでも治らないなら病院に連れて行ってやるから」

そんな俺の言葉に、アクアが二階の窓をぴしゃんと閉めた。

……。

俺は玄関へと回り込むと、そのドアをドンドン叩く。

「帰ったぞー！　ダクネス、めぐみん、居るならここ開けてくれー！　アクアのバカが鍵掛けやがったんだ！」

ドアを叩きながら俺が叫ぶと、玄関の上の部分に位置する、二階部分の窓が開く。

またアクアかと思ったら、そこから顔を覗かせたのはめぐみんとダクネスだった。

これで安心。

……と、思っていたのも束の間の事。

「……よくもまあ、今更ノコノコと顔を出せたものだなカズマ。城での一週間の暮らしは楽しかったか？」

……？

一週間の暮らし？

俺がダクネスの言葉に疑問に思っていると。

「ふふふ、随分と舐められたものですね私達も……！　攫われて、

何日も帰らない事を心配していれば、そのまま城に居座るとか……！　流石の私も予想外でしたよ！」

荒ぶるめぐみんが、窓からそんな事を言いながら杖をブンブンと振り回している。

だが、ちょっと待って欲しい。

「おいちょっと待て。俺が一週間だとか何日も城に居ただとか。そりゃ一体どういうこった。俺が拉致られたのは昨日の事だろ。それがなんで……、……あれ？」

おかしい、何かが引っ掛かる。

何だろうこのもやもや感は。

俺のそんな言葉に、めぐみんが益々猛り。

「おい、すっとぼけるとは良い度胸じゃないか。爆裂魔法で人はどれだけ飛べるのかという実験をしてやろうじゃないか！」

そんな物騒な事を口にする中、ダクネスがふと首を傾げた。

「……カズマ。お前は一体、城で何をやらかしてきた。王家でも滅多に使われない、禁忌とされている記憶削除のポーションを飲まされたな？　服用した量により、記憶がスッポリ抜け落ちる。あれは、運が悪いと副作用で頭がおかしくなる筈だが、その辺は心配なさそうだな」

「私からすれば、この男はもう既に頭がおかしいと思いますが。……しかし、記憶消去のポーションですか？　……確かに、ちょっと先ほどから態度がおかしいのですが。……記憶を失った振りでもして誤魔化しているんじゃないでしょうね？　……どうしたものでしょうか、記憶を失っているというのは……。そんな中で制裁加えると言うのも、何だか良心が痛むのですが……」

若干不満そうながらも、ため息を吐きながら何かを諦めた様な表情のめぐみん。
良く分からないが、俺は記憶を消されたらしい。

「ええっと。俺は拉致られた夜の事ぐらいしか覚えてないんだが。その後、アイリスと明け方近くまで話をしていたぐらい……？」

……そういえば、俺は何時から王女様をアイリスなんて呼び捨てに。
……なるほど、記憶の消去か。

きっと、俺は何か重大な国家機密でも知ってしまったのだろう。
そして、秘密を知ってしまった俺をどうするかで揉めたのだろう。
俺という、多大な功績を上げた勇敢な冒険者を口封じするには惜しいと、妥協案として記憶の消去に到ったのだろう。
うん、きっとそうだ。
自分でもなんかそんな気がして来た。

「おい、良く分からんが、俺は何か重大な国家機密を知ってしまった気がする。そして、俺という重要人物をどう処理するかを何日も掛けて緊急会議でも行なっていたんだろう。その間、俺が帰らない事をお前らが心配しない様に、適当な理由をでっち上げられたと思われる。……で、会議の結果俺を殺すには惜しいとなり、こうして記憶を消されて帰された、と。何だかそんな予想を立ててみたんだがどうか」

言ってて自分でもどんどんそんな気がしてきた。
そして、その全ての黒幕ともいうべき人物を俺は多分知っている。

「むう……。あながち的外れでもない……のか？　しかし、他にこの男に、わざわざ記憶消去のポーションなんて物を飲ませる理由も……」

ダクネスがそんな事を言いながら、腕を組みながら首を傾げ。

「ど、どうなんでしょうか。この男の事だから、年下のお姫様に甘えられて、ホイホイ残っていただけな気もしますが……。ですが、そんな事が記憶を消される理由にもなりませんし……。うーん……」

そんな事を言いながら、悩みだすめぐみん。

そんな二人に、俺は一つだけ心当たりのある事を告げた。

「あの時ダクネスに斬り掛かった白スーツ。あいつが全ての元凶という気がする。何だか知らないが、あいつに対して何か報復をしなきゃいけない気がするんだ。もちろん単に、俺の大事な仲間のダクネスに傷を付けた相手って事で、嫌っているだけかも分からんが……」

そんな俺の言葉を聞いて、ダクネスが若干頬を赤くしながら。

「……む、そ、そうか。カズマの記憶は完全には消しきれなかったのかも知れないな。確かクレアとか言ったなあの白スーツは。我がダスティネス家と並ぶ家柄の貴族だが、政略でも仕掛けているのかも知れん。カズマが報復するまでもない、当家から何か嫌がらせの一つでもしてやろうか」

そんなダクネスに続いてめぐみんも。

「まあ、こうしてちゃんと帰って来てくれただけで良しとしてあげましょうか。その代わり、ここしばらくは爆裂散歩に付き合って貰えなかったんですから、明日からは」

明日からは、爆裂散歩に付き合って貰いますよ？

きっと、そう言うつもりだったのだろう。

「何を言ってるの二人とも？　バカなの？　あの、口から先に生まれた様なクソニートの言う事真に受けるとか、大丈夫なの？　このロリコンニートの事だもの、きっと、お兄ちゃんとか呼ばれたらそれだけで残りますとか言い出す男よ？　そのまま、執事やメイドに身の回りの世話とかしてもらう生活が居心地良すぎて、もう私達なんてどうでもいいやー、ここでのんびりと暮らそうとかって、そんな感じだったに違いないわ」

折角まとまり掛けた空気を、この女が邪魔しなければ。

俺は三人が顔を覗かせる二階の窓を見上げながら。

「お、おい、失礼な事言うな。そんな事あるわけ……？　無い……。……あれえー？」

何だろう、その言葉で大切な何かを思い出しそうな。

そんな俺の態度にアクアが言った。

「ほらみなさい！　暫くの間は、この屋敷への出入りを禁じます。どうしても入れて欲しくなったなら、アクア様ごめんなさいと土下座して、これから一日三回、この私を崇め奉る祈りを捧げること。そうしたら入れてあげてもいいからね。それが出来ないのなら、あっちへ行って！　ほら早く、あっちへ行って！　まったく、これ以上ウチのダクネスとめぐみんをたぶらかさないでくれます？」

そんな舐めた事を言いながら、アクアがぴしゃんと窓を閉じ、これ以上は話す事など何も無いとばかりにどこかへと行ってしまう。

……あんのアマー！

俺は、もう一階の窓を叩き割って強行突入しようと手近な窓を……。

「……おい何だこれ」

窓を見て、絶句した。

ざっと見た感じ、一階の窓には外から木板が打ち付けられ、窓からの出入りは難しい状態だ。

きっと、板を引き剥がしている間に、それを聞きつけたアクアに妨害される事だろう。

どうしたものか。

かと言って、あのアホになぜ俺が土下座しなくてはいけないのか。

……と、俺が悩んでいると、突然足元に何か小さなものが落ちてきた。

俺がふと見上げると、そこにはこっそりと窓を開け、そこから何かを落としてきためぐみんの姿。

二階から落とされた物を見てみると、それはどこかで見覚えのある……。

ああ、そうか。

それはめぐみんが愛用していた財布。

どうやら、めぐみんは現在無一文な俺を心配したのか金を落としてくれたらしい。

やがてめぐみんはこちらを見向きもせず、何くわぬ顔でその場を

去った。

めぐみんの財布を拾い上げていると、突然黒い影が差す。
その影に上を見ると、布に包まれた何かがポンと放られた。
窓からチラと見えたのは、陽の光に煌めく金色の髪。

ダクネスも、何かこっそりと投げ落としてくれたらしい。

二人共、有難いは有難いのだが、そんな事してくれるならあのバカを説得するなりしてくれりゃいいのにと思う。

ダクネスが落とした包を広げると、そこにあるのは俺の普段着と装備が一式。
剣と鎧は無いが、弓と、矢じりがフック状になったロープ付きの矢は付いていた。

俺はそれだけで意図を知る。

めぐみんの金で飯でも食って、夜になったならダクネスの落としてくれた装備で、二階の窓からでも帰って来い……、と。

……まさか、自分家に潜入するハメになるとは思わなかった。

8話（前書き）

更新遅くなりました、申し訳ない。

8話

しかし、どうしたものか。

「お会計、九百エリスになります」

深夜に屋敷に侵入するとしても、以前俺がダクネスの実家に侵入できたのは、アクアの支援魔法で肉体が強化されていた事が大きい。

ダクネスが弓とロープ付きの矢を落としてはくれたが、果たして支援魔法もない普段の俺の身体能力で、以前の様に音を立てずに侵入が可能だろうか。

飯屋で夕飯を食い終わり、その会計を済ませようとめぐみんが落としてくれた財布を開き……。

「……」

ポイントカードやらクーポンでギチギチの財布から、千エリスを出すと支払いを……。

「では、百エリスのお返しです。ありがとうございました、またのお越しをー！」

……めぐみんの金を使うのに凄く抵抗があるのはなぜだろう。

いや、ポイントやらクーポンやら、良い主婦になれそうで良いとは思うんだが、この金を使うのはなんだか良心が痛む。

……めぐみんが嫌がっても金は多めに返そう。

しかし参ったな。

今回の屋敷への侵入は、とにかくアクアが厄介だ。

あいつは、普段はぼーっとしているクセに、本当に余計な時だけは勘が良い。
しかも、俺以上の暗視が可能だ。
とっとと酒でも飲んで寝こけてくれれば良いのだが、空気を読んでくれないあいつはこんな時だけしっかりと起きている気がする。
なぜだかは分からないが、そんな気がする。

一度中にさえ入ってしまえばアクアに負ける気はしないが、登っている最中に見つかると厄介だ。

俺は屋敷への侵入経路を考えながら、アクア達が寝静まるであろう深夜まで時間を潰そうと、街をウロウロしていると。

「おや、久しいな。自らに惚れた女から貰った金で腹を満たし、現在ご満悦のヒモ同然の男よ。こんな夜更けに散歩であるか。今宵は満月。魔力も満ちて非常に良い散歩日和であるな。……これから散歩ついでにエリス教会の天辺に登り、屋根に付いている女神を模したシンボルマークを、セクシーな大根に取り替えに行こうと思うのだが貴様も来るか？」
「……行かない。お前、その内見つかって八つ裂きにされないように気を付けろよ」

出くわしたのはバニルだった。
その手には、確かにセクシーな形をした大根が握られている。
悪魔は眠る事も無い。
なので、夜は毎晩暇なのだろう。

……。

「……なあバニル。お前今暇なんだろ？　ちょっと、頼みを聞いて

貰えないか？」

女神が守る屋敷に侵入する為に、悪魔の力を借りる。

なんだかとても背徳的な気がするが……。

「ほう？　悪魔に頼み事をするという意味をちゃんと分かって言っておるのか？　悪魔に物事を頼む際にはそれなりの対価が必要。大悪魔である我輩の対価は高いぞ？」

バニルが悪魔らしく邪悪そうにその口元を歪めた。

多少は怖気づく場面なのだろうが、それより手に持つセクシーな大根が気になってしょうがない。

「今度ウィズの店で、いらない高額商品大量に買い取るよ」

「任されたし！　我輩に、超任されたし！　……オマケでこの大根付けてやろうか？」

「い、いらない」

草木も眠る丑三つ刻。

その時間こそは、悪魔やニートが最も活性化する時間帯。

「フハハハハハ！　フハハハハハハハ！」

「こ、こらっ、こんな時間に笑うな！　なんでそんなにテンション高いんだよお前は！」

そんな誰もが眠りに就く時間帯に、俺とバニルは自分の屋敷の前へとやって来ていた。

「フハハハハハ！　今宵の我輩は昂っておる！　満月の夜に女神を襲撃！　これが昂ぶらずにいられようか！」

こいつを頼ったのは間違いだったのだろうか。

手順はこうだ。

まずは、俺が普通に侵入を試みる。

支援魔法抜きではあるが、それでなんとかなるようならばそこで作戦は完了だ。

俺の力ではよじ登れなかったり、もしくは侵入途中で気づかれた場合。

その際には、バニルに屋敷へと侵入してもらう。

サキュバスの侵入を防いだ時の様に、きっとアクアが対悪魔用の結界を張っているだろう。

それにバニルが触れるなりなんなりすれば、きっとアクアはそっちに行くはずだ。

俺はその隙に何とか侵入する。

目標としては、完全に屋敷内に侵入し、アクアを取っちめるなりなんなりして、和解、もしくは屋敷の制圧。

次点の目標としては、屋敷の俺の部屋に置いてある、自分の財布と預金通帳を奪還する事。

ぶっちゃけ、金さえあれば締め出された所で、ほとぼり冷めるま

で宿屋暮らしをして遊んで暮らしていれば良い。
いや、むしろ堂々と遊び呆けられる分それも良いかも知れない。

とりあえずの作戦はこれで行くと決め、俺はバニルの見守る前で、屋敷の自分の部屋がある屋根へと向けて、弓を……！

「……あれっ」

ふと違和感に気が付いた。

昼間はそんな事は無かったのに、俺の部屋の窓が中から板を打ち付けられている様だ。
俺は慌てて他の二階の窓を確認するも、他の窓も木板が打ち付けられていた。
こんな事にだけマメで暇な奴は一人しか居ない。

あんのアマー！

俺はいきなり計画が頓挫した事で、どうしたものかと悩み……。

ふと気づいた。
全ての窓が塞がれてはいない事に。

それは、この屋敷の住人が使っている部屋の窓。
自室の窓を完全に閉じきってしまう事に、めぐみんやダクネスが反対したのだろう。
アクアも、中にダクネスやめぐみんが居るなら俺が入って来ても大丈夫とばかりに安心しているに違いない。
財布や弓を落としてくれた事から、めぐみんやダクネスは協力者だと考えても良いだろう。

となると……。

「バニル、お前の見通す力でちょっと俺を見てくれないか。めぐみんの部屋の窓か、ダクネスの部屋の窓か、どっちから浸入した方が良いかをさ」

「ふむ。相変わらず貴様を見ようとするとえらく鬱陶しい光が纏わりついていて見難いが……。……どれどれ。どちらから侵入しても結果は同じな様だが、ネタ種族の娘の部屋の窓から侵入した方が吉と出た。ちょっとしたご褒美があるな。行って来い」

俺がバニルに尋ねると、アッサリとそんな事を。

……どっちから侵入しても結果が一緒って所が気になるが、ご褒美とはなんだろう。

「めぐみんの部屋の窓だな。よし、行って来る！」

めぐみんの部屋の真下に陣取り、そこから屋根を目掛けて矢じりがフック状になった、ロープ付きの矢を放つ。

出来るだけ音を抑えるために、狙うのは屋根の天辺ギリギリの部分だ。

こんな距離ならば狙撃と暗視の合わせ技で、まず外す事は無い。

狙い違わず放った矢は屋根へと掛かり、それから伸びるロープを、念入りに何度もグイグイ引いた。

いきなりは登らずしばらく様子を伺ってみるも、誰も起き出す気配は無い。

バニルに一度振り返り、登る旨を目で伝える。

後は屋根から垂れ下がったロープを伝い、めぐみんの部屋へと……。

部屋へ……。

「……はあ……はあ……！」

支援魔法が無いと、こ、これは、思った以上にキツイ！

ロープが滑りやすいのが悪いのか、ほぼ腕だけで登ることになる為に、俺の筋力が足りないのか。

日本の自衛隊や消防士の人達は偉大なんだなと思い知る。

ああクソ、登りやすいようにロープの途中途中を何箇所も丸結びにでもして、足を掛けられるようにしておくべきだった。

それでも何とかロープにしがみつき、ようやくめぐみんの部屋の窓の際に手が掛かる。

左手でロープ、右手で窓の縁にしがみつき、俺は呼吸を整えた。

そして、呼吸が多少整った所でコンコンと窓を軽く叩く。

それを暫く続けていると、やがてカーテンが開けられ、俺の姿を確認しためぐみんがふっと笑った。

めぐみんが窓の鍵を開けようとカチャカチャやっていた、その時である。

「見回りですよー！　めぐみん、ちゃんと起きてるー？　あの男の事だからね！　きっとこのぐらいの時間帯に、めぐみんかダクネスの部屋から侵入を試みようとすると思うの！　しばらくは昼夜逆の生活になると思うけど、我慢してね？」

めぐみんの部屋の、ドアの外から聞こえてくるのはそんな声。

あんのアマー！
普段は頭が回らないクセに、なんでよりによってこんな時だけ……！
その、先をちゃんと予想出来る頭を、常日頃から生かしてくれればどれだけ俺の苦労が減る事か……！
ドアの外から聞こえてきたその声に、めぐみんが慌ててカーテンをシャッと閉め。

「起きていますよアクア。大丈夫、こちらは問題ないです。アクアも、少し休んだらどうですか？　それに、ちょっとぐらい侵入されたって良いではないですか。カズマも薬を飲まされて記憶を失っていたみたいですし、そろそろ許してあげても……」

めぐみんのフォローに、ドアを勢い良く開ける音がした。
「駄目よめぐみん、ニートを甘やかしちゃ！　アレね、めぐみんは好きになった男が駄目男でも甘やかしちゃう様な、男に甲斐甲斐しく尽くして苦労するタイプね！　そして好きになった駄目男が何度も浮気とかしても、なんだかんだで好きな相手だから許しちゃう様なタイプよ！　私のくもりなきまなこで見た所、間違い無いわ！」
「ななな、何言ってんですか！　そ、そんな事は無いですよ……！？」

アクアのそんな指摘に途端に狼狽えるめぐみん。
そんなめぐみんに対して、アクアがふーん？　と、何やら訳知りな声を上げている。
いや、いいから。
そんな、普段ならちょっと聞きたい話も、今はいいから。

「めぐみんめぐみん、ひょっとして……」
「何ですか！？　何ですか！？」

めぐみんとアクアがそんな会話をする中、俺の、ロープと窓の縁に掴まったままの手が汗で滑り始め、それを腕力で支えている為に腕がプルプルと……！

いいから！
今はそんな会話マジでいいから……っ！

「めぐみん、あなた……！　ひょっとして、あのダストとか言う駄目男の事を……！」
「違います」

クソッタレー！

俺は汗で滑る手では窓の縁とロープを掴み続ける事が出来ず、とうとう手を滑らせて、バランスを崩して落ちかけた。
反射的に窓の縁を掴んでいた手で引っ掻く様に手を伸ばす。
伸ばした手が、窓枠の下にある木の囲い部分を強打する。

それは小さな音だった。

だが、こんな余計な時だけ勘の良いアクアにとっては、それは十分に大きな音だったらしい。

「ねえめぐみん。今何か聞こえたんですけど」
「……気のせいじゃないですか？　今日は風が強いですし」

アクアを何とか誤魔化そうとするめぐみんの声を聞きながら、俺は先ほどの位置よりも少しずり落ちながら、両腕で必死にロープに

しがみついていた。
これは真剣にいけない。
やばい、ロープにずっと掴まってはいられない、そろそろ落ちる……！
いっそ一度撤収するか！？
いや、この屋根に掛かったままのロープを見たら、今後アクアが益々警戒する。
やるなら今夜だ。
「めぐみん、そこどいて！　何だか嫌な予感がするの！　女神の第六感に、ビンビン来てるの！」
「って夢を見たんですね！　寝ましょうアクア、もう寝ましょう！　きっと夜更かししていて疲れてるんです！」
あかん、落ちる！
誰か、誰か助けて！
そんな俺の願いを聞き届けてくれたのは。
女神を自称する変な奴でも、俺が死んだ時にしか会えない本物の女神様でもなく。
「フハハハハハ！　フハハハハハハハ！　出あえ出あえトイレの女神よ！　今宵は満月、我々悪魔族の魔力が高まりに高まる高貴な夜！　この地獄の公爵である大悪魔バニルが、貴様に引導を渡しに来てやったぞ！」
日々赤字で悩む魔道具店のバイトが、屋敷の正面玄関で名乗りを上げた。

「早く、今の内ですカズマ！　アクアは血相変えて玄関先に飛び出して行きました、ほら掴まって下さい！」

めぐみんが差し出す手を片手で掴むと、俺はそのままもう片方の手で部屋の窓の内側を掴み、上体を持ち上げる。

そんな俺の手を引きながら、更には俺の服の背中の部分をもう片方の手で引っ張りながら、めぐみんが俺を抱え込むようにして部屋に引っ張った。

遠くから声が聞こえる。

「ワレー！　とうとう本性現したわね、あんたこそ今夜ここで引導渡してやるわ！」

「やってみろやってみろ！　出来るものならやってみろ！　これでも食らえ、バニル式……！」

そんな二人の叫びを聞きながら、

「はあ……はあ……はあ……っ！」

俺は、荒い息でめぐみんの手を掴んだまま部屋の中にへたり込んだ。

めぐみんが、俺の身体を抱き寄せる様な体勢で、そのまま部屋の窓を閉める。

何とか部屋に侵入した俺は、そのままめぐみんと片手を繋いだまま抱き合う形で、荒い息を吐いたまま動けないでいた。
「はあ……はあ……！　めぐみん、め、めぐみん、はあ……はあ……！」
「ちょっ……！　カ、カズマ、息が……！　息がヤバイです、ヤバイです……！　抱き合ったままで私の名前を呼びながら、荒い息を吐くのは絵的にマズイですから……！」
めぐみんに礼を言おうとするも、呼吸がなかなか整わず言葉にならない。
端から見ると、確かにこの絵はどう考えても夜這いにしか見えない。
「アクア、この騒ぎは一体何事……、貴様か仮面悪魔！　この、皆がイライラしている最中に一体何を……！」
「ほう、これはこれは。いつも虐げてくれる小僧が一週間もの間居なくなり、ここ最近顔が見れない寂しさと欲求不満でイライラしていた娘よ、今宵は」
「なあああああああーっ！」
玄関先で、そんなダクネスやバニルの楽しそうな声が響いてくるが、こっちはそれどころではない。
とりあえず、息を整えてめぐみんから離れようと……。
離れようとした俺の背中に回されていためぐみんの手が、服の背中部分をきゅっと掴んで離さない。
……あれっ。

「いいわ、ダクネスそのまま取り押さえていて！　『セイクリッド・エクソシズム』！」
「ぐあああああっ！？　バカな、こ、この我輩が……。魔力満ちたる満月の夜の、この魔力漲る我輩が、このまま滅び去るだと……！？」
「「や……、やった……！」」

遠く聞こえる騒がしい声。
そんな、他の連中がいつもの如くバタバタと騒いでいる中、こうしてめぐみんと二人抱き合っていると、何だか物凄くいけない事をしている気分になってくる。

何だか、学校で他の皆が授業を受けている中、こっそり授業をサボって、女子と二人で体育用具室とかに隠れている様な。
いえ、もちろんそんな経験は無いんですが。

「フハハハハハ！　討ち取ったと思ったか？　残念！　我輩かと思われたそれは、唯のセクシーな大根でした！　残念賞としてその大根はくれてやろう！　煮物にでもするのが吉！」
「「……」」

「おっと、無言で追い掛けて来るのはなしにして頂こう！　久しぶりに美味なる悪感情を馳走になったし、既に目的は達成したので我輩はこれにて帰る！」
「ダクネス、そっちに回って！　仕留めるの！　今夜こそ、人をからかう事を生き甲斐にしているこいつを仕留めるのよ！」
「ア、アクア、この仮面悪魔かと思って捕まえていたセクシーな大根は、ど、どうすれば……！？」

そんな楽しげな声が聞こえる中。

「……お帰りなさい、カズマ。やっぱり、こうして皆が居て、バカバカしく騒がしいこの屋敷じゃないと寂しいですよ。もうどこにも行かないでくださいよ」

言いながら、めぐみんがそっと抱きしめながら、背中に回した手で背をポンポンと叩いてくる。

……ちょっとだけ、ジーンとした。

呼吸が整い、落ち着いてきた俺はめぐみんから身体を離そうとする。

……が、めぐみんが背中を掴んだまま離さない。

「お、おいめぐみん、もう何処にも行かないって。帰って来たんだからもう離して貰って大丈夫だって」

何時までも抱き合ったままだとけしからん事になる。

と、めぐみんがギュッとしがみついたままで言ってきた。

「私より力のある、ダクネスの部屋の窓に小石でもぶつけて窓を開けてもらい、そこにロープを放って引っ張りあげてもらうとかすれば、もっと楽に侵入できたのに。わざわざ苦労して私の部屋から入

って来てくれたんです、ちょっとぐらいくっついていても良いじゃないですか」

言いながら、しがみついたままクスクス笑うめぐみんに。

深い意味は無く、単にその考えに到らなかっただけでしたとは今更言えないので、黙っておいた。

しかし、どうしよう。

これはアレか、紅魔の里以来久しく無かった、友達以上恋人未満なアレな雰囲気なのか。

恋人未満って言っても本当に何処までが良いのだろう。

抱きついてくれている事から、めぐみん的にはとりあえず、ギュッとするまでは許容の範囲内らしい。

見通す悪魔様、ご褒美ってのはコレの事でしたか。

今度大量に商品買わせて頂きます。

では、こちらからも……！

俺は意を決してめぐみんを抱きしめようと……。

「アクアと仲直りしてくださいね？　カズマが居ない間、ずっと、放蕩ニートはまだー？　まだー？　って、毎日随分と暇そうに、寂しそうにしてましたから」

……。

「これは帰って来ない放蕩ニートの分、とか言って、毎日カズマの分のご飯も皆のご飯と一緒に作ってましたから。で、その余った分をダクネスが無理やり食べさせられてました」

……ダクネスも迷惑な話だろうに。

そんなめぐみんの言葉に、俺は抱きしめようとした手でめぐみんの肩を掴む。
せっかくの良い雰囲気だが。
「……ちょっとあのアホとスカッとケリを付けてくる。帰って来たら、是非この続きを」
「しませんよ？　しませんからね？　まだ恋人未満ですから」
言いながら、めぐみんがちょっと残念そうに。
それでいて、仲間想いのめぐみんは、どこか嬉しそうな顔で。
「では、行ってらっしゃい！」
部屋を出て、アクアの元へ向かう俺の背にそんな声を掛けてくれた。
「あーっ！　曲者よ！　ダクネス、曲者がいるわ！　捕まえて！　あの曲者を捕まえて！」
屋敷の玄関口に向かった俺と鉢合わせたアクア。
出会い頭にいきなりそんな事を言いながら、足は裸足で、着ているのは変な帽子とパジャマ姿という、女神の威厳もクソも無い格好で言ってきた。

俺を捕まえてと言われたダクネスは、もうおなじみの、黒のタンクトップとスパッツ姿というけしからん格好で、同じく裸足で立っている。

そんなダクネスは、俺とアクアを困った様な表情で交互に見ながら。

「……その、アクア。そろそろカズマとは仲直りをしたら……いたたた！　やめ、止めてくれアクア、髪を引っ張るな、屋敷から帰ってから私の髪をいじりたがる変なクセを……！」

髪を引っ張られ、泣き声を上げるダクネスにアクアが言った。

「ダクネスったら、そんなにまた裏切りニートに捨てられたいの？　王女様だかにカズマを攫われた時も、これがネトラレとか言ってハアハアしてたけれど！　皆が甘やかしたら、唯でさえこれ以上なく駄目なカズマが、本当に駄目になっちゃうでしょ？　もう手遅れ気味ですけど！」

このクソ女神。

「おいコラ、もうお前と口でやり合う気は無いけどな、ハッキリ言うが、俺はお前らを裏切ってなんていないからな。よく考えろ、俺がぽっと出のお姫様にちょっと頼まれたぐらいでお前ら捨てて向こうに残るだとか、本気でそんな事考えていやがるのか？　そんな風に思われているなら、俺だって流石に怒るぞコラ」

そんな俺の言葉に、アクアが一瞬は怯むものの。

「汝、生前はゲームしか取り柄の無かった男よ。今一度、汝がなぜ死んだのか。老人相手ならば素通りしたはずの汝が、一体誰を庇ってこの世界に来たのかを思い出し、そのしょうもない自信を捨てて名乗りなさい。我こそはサトウカズマ。我こそはロリコンニートと」

「てめーいよいよ調子に乗りやがって、ぶっ飛ばしてやる！」

そんな挑発をしてきたアクアに、俺はとうとう我慢できずに吠え掛かった。

「ダクネス、守って！　危険な侵入者の手から、私を守って！」

「えっ、ちょっ！？　待っ……！」

咄嗟にダクネスの影に隠れるアクアに、俺は腕まくりしながら襲い掛かった。

「状態異常無視の羽衣着てないお前なんぞ、麻痺させた後で簀巻きにして、ゼル帝の鳥小屋に放り込んでやる！　覚悟しろやあああああ！」

「掛かってきなさいよクソニート！　こっちは二対一よ、勝てると思ったら大間違いよ！」

「待っ……！　私は、まだ……！」

「う……嘘だろ……！」

俺はアクアに、腕を取られて、絨毯の上に取り押さえられた状態

で呟いた。
俺の隣には、紐で縛られた上に昏睡させられ、絨毯の上に転がるダクネス。
アクアにバインドを仕掛けても魔法で簡単に解除され、状態異常にしてやろうとしても、ダクネスを盾にする為に攻撃が届かない。
そうこうしている内に、魔法で身体能力を強化したアクアに取り押さえられたのだ。
しくじった、そういやこいつは基礎ステータスだけは誰よりも高いのだ。
しかも格闘スキルだとかを持っていたはず。
本当に、こういった優秀さを日頃からほんの少しでいいから出して欲しい。
ちなみにダクネスは、俺とアクアの喧嘩のとばっちりだ。
「はあ……はあ……！　な、なかなか手こずらせたわねカズマ。でもこれで決着は付いたみたいね！　さあ、ごめんなさいを言いなさいな！　たった一言ごめんなさいを言ったら許してあげるわ！」
俺の上に乗り腕を取った体勢のまま、勝ち誇った声でアクアが言った。
そんなアクアに。
「……俺は今回、何も悪い事はしていない。王女様に連れさらわれて、そのまま記憶まで消された被害者だ、何一つ謝る事なんてしていない……！　お前、俺にも最後の手段って物があるからな？　宣言しよう、明日の朝にはお前は泣いて謝る事になる」

俺は堂々と。
何一つ恥じる事なく言い放った。
「ほー！　あくまでそんな事言い張る訳ね！　穏便に済ませてあげようと思ったけれどしょうがないわね！　そっちがそんなつもりなら、私にだって意地があるからね！　水の女神の名に賭けて、あんたがごめんなさいを言うまで絶対に屋敷には入れないわよ！　このまま外に放り出してあげるわ！　明日には、カズマの方こそ泣いて謝る姿が目に浮かぶわね！」
それを聞いたアクアが、俺にそんな事を宣言してきた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌朝。

俺は、屋敷を遠巻きに見守りながら考えていた。
漫画やアニメなどでよくあるのが、浮気もしてない主人公があらぬ誤解を受け、ヒロインなどに理不尽に暴力を振るわれたり。
もしくは、主人公はちっとも悪くなく、不可抗力で覗いてしまったのに、やっぱり理不尽な暴力を受けたり。
更には、主人公と付き合っている訳でもないヒロインに、主人公が他の女性に親しくされるだけで理不尽な八つ当たりを受けたりだの。
これらの事は、漫画等で見ている分には良いのかも知れない。
端から見ている側には、人事であるし、どうでもいいのかも知れ

ない。

だが、俺はこう思う。

「カズマさーん！　カズマさーん！！」

もし俺がそんな主人公と同じ立場だったとしたら、そんな理不尽系ヒロインには遠慮なく折檻してやろうと。

「わあああああーっ！　カ、カズマさーん！　カズマさーん！！」

この世には、理不尽な暴力や不当な行いに対する、ちゃんと確立された力がある。

善良なる市民はそれに頼る事は恥ずべき事でもないし、恥ずべきは、理不尽な暴力を振るいながら、もしくは、理不尽な犯罪行為を行いながらも、自らが女であるからと、それらが全て許されると思っている連中の方だと思う。

「カズマさーん！　私、以前から思ってたんですけど、カズマさんって凄くその、そこはかとなく良い男だと思うの！　そして、私達は長い付き合いなんだし話し合う事ってとってもとっても大事だなって……！」

俺は、泣きながら二階の窓からそんな事を叫んでいるアクアを指さし。

「おまわりさん、あいつです」

「あれは確かに、以前ねずみ講犯罪で処分保留となった、犯罪者管理番号１２１３番ですね。不動産会社に問い合わせた所、確かに屋敷の所有者は、サトウカズマさん、あなたのようだ。では、これよ

り屋敷の奪還作戦を開始します」

俺は、自分の屋敷を不当に占拠した犯罪者を、市民の義務にもとづき通報していた。

「カズマさーん！　カズマさーん!!　わあああああカズマ様ー!!」

「わわわわ、私はその、カズマの同居人というか、その……！」

「本当ですね？　ダスティネス家のご令嬢が犯罪者の仲間だなんて、シャレになりませんよ？」

制圧された屋敷の中で、逃げ遅れたダクネスが事情聴取を受けていた。

めぐみんは、屋敷が囲まれる前に朝一でとっくに逃げた。

そして……。

「わあああああああああー！　カズマ様ー！　カズマ様ー！　許してくださいカズマ様ー！　ごめんなさい、私が悪かったので許してくださいカズマ様ー！　謝りますからカズマ様ー！」

泣きながら謝り続けるアクアが、今まさに警察の人達の手により連行されようとしていた。
俺はそんなアクアに近付くと。

「よう水の女神様。俺はまだごめんなさいを言ってはいないが、屋敷に入ってもいいですか？」
「ごめんなさいカズマ様ー！　これからはちゃんと言う事聞くし、今後カズマ様の事を疑ったりはしませんから、許してください！　許してください！　調子こいた私を許してください！　でないと私、今度は実刑食らっちゃう！」

二人の警察官にしっかりと両手を掴まれてズルズルと引きずられながら、アクアが泣きじゃくりながら助けを乞う。
俺は勝ち誇った顔でアクアを見ながら。

……しょうがねえなあああああ！

久しぶりの自分の屋敷。
そして、久しぶりの屋敷の居間のソファー。
ここにゆったりと寛ぐと、確かに自分が一週間近くも他所に泊まっていたのだと知る。
それほどに、この場所はしっくりと落ち着いた。

「カズマ様、お茶が入りましたよー！」

ソファーの背もたれに手を回すように両手を投げ出し寛ぐ俺。

そんな俺の元にお茶が運ばれてきた。

「ご苦労」

甲斐甲斐しくお茶を持って来たアクアに一言。

そしてそれを一口含み……。

「この駄メイドが！　こりゃなんだ、お湯じゃねーか！　何度も何度も言っただろうが、お前はちょっと身体の一部が中身に触れでもしたらお湯になるんだから気を付けろと！　やり直し！　ほら、早くやり直し！」

「ああっ、申し訳ありませんカズマ様！　直ちに新しいお茶を淹れ直して参りますですわ！」

お湯と化したお茶を飲まされた俺の言葉に、アクアが妙な口調で甲斐甲斐しくも新たなお茶を淹れに走った。

アクアが嫌がりもせずに何だかノリノリなのは、多分斬新な遊びのつもりなのかも知れない。

「丸く収まったみたいで良かったですね。私としては、なんだかんだで皆でこうして広間で寛いでいるのが一番安心しますよ」

俺の隣でめぐみんが、アクアに入れてもらったお茶を飲みながらのんびり言った。

アクアは、他の皆にはちゃんとしたお茶を入れてくるのに、俺に入れるお茶だけは嫌がらせのごとくお湯ばかり持って来る。

俺に叱られる事が目的の様に。

そんなアクアの様子を少し羨ましそうに見ていたダクネスが、
「何にせよ、無事帰って来たのだからよしとしようか。……頼むから、今後は警察沙汰は控えて欲しいのだが……」
そんな事を、訴えるような視線で俺を見ながら言ってきた。
なら、こちらとしても犯罪行為は止めて欲しいのだが。

「お茶が入りましたよー！」
「ご苦労」
アクアが、いやに手早く新しいお茶を持って来た。
それを受け取り口に含むと……！

「だから、お湯じゃねーか！　学習能力が無いのかお前は！」
「ああっ！　申し訳ありませんカズマ様！　直ぐさま新しいお茶を……！」

楽しそうに受け答えるアクアにダクネスが。

「……ん、そんなに失敗するなら私が淹れてきてやろうか。その方がアクアもカズマにイビられることもあるまい。カズマにイビられるのは私一人で十分だ」
言いながら立ち上がろうと……。

「ちょっとダクネス、せっかくダスティネス家のメイドごっこをしていたのに邪魔しちゃ駄目じゃないの」
「！？」
ダクネスの言葉に、アクアがそんな事をしれっと言った。

「おいコラ、お前ダクネスの家のメイドの真似したいが為に、わざと毎回指突っ込んだりしてお湯に変えて持って来てたのかよ」
「違うわよ、最初から唯のお湯ばっかり持って来てたわよ」

「待てお前達、当家のメイド達はそんなドジっ子ではない！」

ダクネスが抗議してくる中、アクアが一本のインク付きの筆を持って来る。

「カズマ様、失敗ばかりするダスティネス家のメイドたるわたくしに、罰として、これで落書きをしてくださいませ！」

「ええー……」

「だから、当家のメイドにそんな事を希望する奴はいない！」

ダクネスの抗議を受けながらも、俺は嫌々ながらにアクアから筆を受け取ると、結果が分かっていながらもアクアの顔に落書きを……。

それはもちろん、書かれる傍からインクは全て水になった。

そんな俺達の様子を眺めていためぐみんが、実におかしそうに笑っていた。

そんなめぐみんに笑い返そうとして……。

「あっ、いててて……」

俺は、昨夜アクアに取り押さえられた時に痛めた、アバラの辺りを片手で押さえる。

それを見たアクアが、あっと声を出しながら。

「昨日のヤツね。ごめんねカズマ様、今治してあげるわ。今日は特別に最強の癒し魔法で。『セイクリッド・ハイネスヒール』！」

そんな事を言いながら、お手軽に俺に回復魔法を……。

回復魔法を……。

……。

「……あっ……」
「……？」

アクアに魔法を掛けて貰った俺は、無意識に小さな声が出た。
それを聞いたアクアが不思議そうな顔をする。

「どうしたのカズマ様？　一応最強の回復魔法だったんだけれど、まだ足りなかった？」

そんなアクアの言葉に、
「えっ……。ああ、いや、そんな事ないよ。ああ、ありがとうアクア、楽になったよ。……それと、その、なんだ。俺達は仲間なんだしさ、その、カズマ様呼ばわりはそろそろ止めようか。今まで通りカズマって呼んでくれ、なんか違和感があるからな」
俺は出来るだけ挙動不審にならない様に。

「……ん、なんだ急に。見上げた心がけだなカズマ。俺を一週間疑っていたんだから、今後一週間は様付しろっていうのはお前が言い出した事なのに。そうだな、仲間同士だ、仲良くしよう」
ダクネスが、そんな事を言いながらフッと口元を緩ませた。
めぐみんも釣られて笑みを浮かべ。

そして……。

「……」

アクア一人が、俺の顔を至近距離でじーっと見ていた。
「……な、何ですか？」
「……別に。私はもう、カズマの事は疑わないって言ったばか

りですから。……ですから」

そう言いながら、凄く至近距離で俺を見続けるアクア。

……アクアの回復魔法のおかげだろう。

消された記憶を取り戻した俺は、とてもアクアの方を見る事が出来ずにいた。

ご……ごめんなさい……。

目を逸らす俺から、何か不審な物を感じ取ったのかずっと俺の顔を見続けるアクア。

根負けした俺が、いっそアクアに謝ろうかとした瞬間だった。

『緊急クエスト！　緊急クエスト！　街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！　繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』

鳴り響くのは冒険者ギルドからの緊急事態のアナウンス。

これを聞くのも久しぶりだ。

それだけで、この街に帰って来たと実感出来る。

「よし、お前ら行くか！　アクセルの街を守る為に！」

「……」

言って、勢い良く立ち上がった俺の横、数センチの超至近距離から、アクアがじっと俺を見ていた。

……根負けして、俺が皆に土下座したのはそれから三分後の事でした。

9話

冒険者ギルド。
それはこの街の中心に位置する、対モンスター戦においての管制塔。
冒険者達の砦にして最も信頼を寄せるべき所。

その、冒険者ギルド前には。

「さあ冒険者の皆さん、こちらに並んでくださいね。緊急です。緊急のお呼び出しです。申し訳ありません冒険者の皆様方」

日頃受付をしているギルド職員が、そんな事を言いながら冒険者達を並ばせていた。

……はて、緊急クエストの報を聞いて、装備を整えて慌ててやって来たんだが。
緊急とか言いながら、俺たちをこんな所に並ばせる意味はあるのだろうか。

そんな事を疑問に思っていると、ギルドの職員と、更には街の公務員と思われる人達が、ズラリと並ぶ俺たち冒険者の外側に、まるで壁を作って守るように……。

と言うか。

まるで、俺達を逃がさない様に立ち塞がっていた。
そんな、何だかキナ臭い雰囲気に、居並ぶ冒険者達がざわめき出す。

何だこれは。
「お、おい、何か変な感じだぞ。逃げた方が良くないか？　俺の第六感が、とっとと逃げろと訴えかけてるんだが」
「奇遇ねカズマ、何だか私も嫌な予感がするの。女神の勘かしら」
アクアの言葉に俺は益々不安になる。
そんな俺達二人に、ダクネスが。

「心配無い。別に、犯罪行為が行われる訳でもなければ、非道な行いがなされる訳でもない。安心しろ」
一人腕を組みながらそんな事を……。
……って言うか。
「お前、これが何の緊急クエストか知ってんの？」
俺は、一人腕を組んで立っているダクネスを……。
他の冒険者達が重武装に身を固めている中、一人だけ普段の服装、黒のシャツにタイトスカートという格好のダクネスを見ながら聞いた。
だがダクネスは、それには何も答えない。

やがて、そこかしこで交わされる不安気な小さな囁き。
辺りに広がる不穏な空気。

だが、俺達冒険者は知っている。
冒険者ギルドは、冒険者の為に作られた国の機関。
俺達を支援する為に存在する、そんな組織だ。
俺達は、彼らから貰う仕事を誠実にこなしてきたし、彼らもまた、俺達が困った時は助けてくれた。
言ってみれば、冒険者と冒険者ギルドというのはまず敵対しえない関係なのだ。

俺達に敵対する理由もなければ、俺達がギルドを嫌う理由もない。

そんな内容の囁きがそこかしこで交わされて、居並ぶ冒険者達の間の緊張した空気が若干和らいだ、その時だった。

「皆さんに、緊急のお願いがございます。そう、緊急のクエストです。というのも、本日で年度末から丁度一ヶ月となりました。……そう、今日が納税の最終日です」

ギルドの前に並ぶ俺達の、一番前に立っていた職員が。

そんな事をにこやかに言ってきた。

「……この冒険者の中に、まだ税金を納めていない人がいます」

その場に居た冒険者達の顔が引きつった。

「どど、どういうこった？　どういうこった！　おいアクア、これって何が……！」

「おおおお、落ち着いて！　カズマ、落ち着いて！　落ち着くの！　ほら、今職員が何か言うわよ！」

そのギルド職員の言葉に、逃げようとする冒険者達を、壁の様に周囲を取り囲んでいたギルドの職員と公務員達が押し留めていた。

逃げようとする者、泣く者、怒る者。

その表情は様々だが、唯一つ共通して言えるのは、その場の冒険者達は皆悲痛な叫びを上げている事。

「ええ、もちろん今までは、こんな事はお願いしてきてはおりませんでした。当然です。冒険者の皆様は、基本的に貧乏です。ええ、

ですので、今までは免除、では無く。温情、と言う形で見逃してきただけなんです」

それは、冒険者達の並ぶ最前列の前に立っていたギルド職員。

彼は、更に淡々と言葉を続けた。

「この冒険者ギルドは、もちろんこの街の皆様の血税で賄われております。そして、そのギルドから出る報酬も。モンスターを退治しているからと言って、本来は特別扱いはなされません。それでも温情として、見逃されていたのです。そんな中、今年度は皆様には大きな収入があったはずです。……そう、大物賞金首、機動要塞デストロイヤーの賞金です。……今までは、温情で税金を見逃してきて貰ったのですから、大金が転がり込んだ時ぐらいは、キチンと義務を果たしませんか？」

その言葉に、逃げようとしたり、抵抗しようとしていた冒険者達が押し黙った。

それもそのはず。

今聞かされる真実。

今までは、冒険者というだけで税を見逃すという特別扱いをしてくれていたのだ。

金が入った今、それぐらいは支払っても良いだろう。

俺達だってこの街で暮らしているのだ、義務ぐらいは果たさないと。

ある一人の冒険者が、ぽつりと言った。

「えっと、税金って幾らぐらい取られるんスか？」

それに、ギルド職員が。

「収入が一千万以上の方は、昨年得た収入の、半額が税金と……」

その場の全ての冒険者達が、蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「アクア、どうすりゃいい!?　半額だとかバカ言ってんじゃねえって感じだぞ！　俺、十億ぐらい税金取られる！」

「私だって、最低でも一億五千万も取られちゃう！　逃げましょう！　カズマ、逃げるの！　この世界の税の方式は単純でね、毎年３月末日が年度末。そして、毎年３月までに得た収入から税金が算出されて、その額を４月の終わりまでに払わなきゃいけないの！」

悲鳴を上げる俺に、アクアが言った。

「分り易いな！　ていうか、４月の最終日って今日じゃねえか！　で、逃げてどうする。今日中にそれを払わなかったらどうなるんだ」

「税は免除よ。４月の最終日、それも、役所の営業時間を過ぎたらそれまでの税は免除されるわ！」

なんて豪快な。

「いや、それっていいのか？　遡って税金払えとか……」

「何言ってるの！」

俺の戸惑った声に、アクアが言った。

「この世界の法律なんて貴族の人達が作るのよ？　貴族の人達が自分達に都合の良い様に法律を作っているに決まってるじゃないの。低所得の庶民なんかは旅行に行って逃げたりするより、払った方が安上がりな額だから、わざわざ逃げもせずに真面目に支払うわ。でも、大金持ちや貴族達は毎年４月になれば旅行に行くのよ。そして、月が変わったら帰って来るの」

なんて無法な。

いや、日本みたいな文明国ですら汚職が何だと言っていたのだ。

この世界の貴族なんて……！

「なんて肥え太った豚なんだ貴族って連中は！　ズルい！　俺達だって同じ事してやる！」

「ま、待て……！　その、中には善良な貴族もいるんだ、皆一緒にしないでくれ……！」

俺とアクアに、困った様に言ってくるのはダクネスだった。

と言うか、ダクネスは逃げないのか。

お前だって貴族だろうにと言おうとして。

ダクネスが、手に何かを持っているのに気が付いた。

抵抗して怪我を負わせると流石にマズイのか、冒険者達は皆、ただ闇雲に逃げ回っている。

そんな状況だと言うのに、ダクネスが持っている物がどうしても気になる。

「手に何を持ってんの？」

「これか？　……これは、こうする物だ。先ほどカズマが呼んだ警察の一人から借りたのだ」

言って、手にしていた鎖付きの鉄製の枷をダクネスは自分の右手に嵌めた。
それは日本で言えば手錠みたいな物なのだろうか。

ド変態な事はもう十分知っているし、今更な感じではあるのだが。
「お前は何をやってんの」
そんな呆れた様な俺の言葉に、ダクネスはどこ吹く風だ。
と言うか、ダクネスに構っている暇は無い。
要するに、今日を逃げ切れば罪にも問われず合法的に脱税が出来ると言う事か。

俺はアクアとめぐみんに、逃げようと促そうと……。

「はい、めぐみんさんですね。ええっと、どれどれ……。めぐみんさんは所得が少ないので、税は免除ですね。ご協力感謝します！」

……めぐみんは、いち早く納税の手続きを済ませていた。
俺たちを見て、勝ち誇ったドヤ顔をしてくる貧乏娘。
くそう、となると残りは、俺とアクアとダクネス……。

ガチャッ。

……。
「……お前は何をやってんの」

俺はダクネスに、先ほどと同じセリフを言っていた。
この変態は何をトチ狂ったのか、自分の右手に嵌めた鎖付きの枷の反対側を、事もあろうに俺の左の手首に嵌めている。
バカなのだろうか。

こいつは、たまにアクア並のバカをやらかす脳筋だから困る。

ダクネスは、俺にとても爽やかで清々しい笑顔を浮かべると、まるで散歩にでも誘う様な気軽さで。

「納税は市民の義務だ。さあ行こうか、この街一番の高額所得冒険者」

……そういやこいつ、この街の代理領主の娘じゃないですかヤダー！

「はっ、離せ！　畜生、この……っ！　お前って奴は、お前って奴はっ！」

「まあそんなに邪険にするなカズマ！　ほら、アクアも一緒に行こう！」

阿鼻叫喚のギルド前。

あちこちで冒険者が捕まってギルド前に連行されていく中、俺の腕を取ったダクネスが、アクアの腕も取り言ってくる。

「いやあああああー！　ダクネスお願い、見逃して！　カズマさーん！　カズマさーん！　何とかしてー、何とかしてー！」

アクアが泣きながらダクネスの手をペシペシ叩き喚いているが、

ダクネスは手を離そうとしない。
俺はアクアにすかさず叫んだ。
「おい、支援魔法を頼む！　筋力と速度が上がるヤツだ！　あれで強化して、鎖で繋がったコイツごと連れてっちまおう！　俺とお前の二人がかりなら、ダクネスぐらい簡単に抱えていける！」
「むっ……」
ダクネスが、そんな俺の叫びに掴んでいたアクアの手をスッと離した。

「……アクア、お前は見逃してやろう。そのまま何処へなりとも逃げるといい。既にこの街の中には色んな所に徴税官がウロウロしている。それから逃げ切れるなら、後は好きにしたらいい。……だが、見逃す代わりにこの男に支援魔法は掛けないでくれ」
「ああっ、卑怯者！　おいアクア、これは俺達二人に対する分断工作だ！　聞くな！　そして、俺に支援魔法をくれ！」

「……」

俺の言葉に、アクアが無言で後ずさる。
そして……。
「……ご、ごめんねカズマ、一人でも私より足が遅い人がいてくれた方が、私の逃げ切れる確率が増えると思うの……。それにカズマに逃げられると、この街で二番目に所得の多い冒険者は私になるわ。私の方に回される徴税官の数が増えると思うの……」

本当に、なぜこんな時にだけ知恵が回るんだコイツは。

「よし分かったアクア、支援魔法を掛けてくれたら、お前一人なら絶対に逃げ切れる方法を教えてやる。これでどうだ」
「……昨日まで私達を忘れて放ったらかしておいて、城で暮らして

たカズマの言う事を、ホイホイ信じろって言うの？」

なんて正論。

「よし、先にその方法を教えてやる。それで納得がいったら、筋力増強か速度増強、どちらか片方だけでもいい、支援をくれ！」

「う……、分かったわ、どんな方法？」

おそるおそる近付くアクアに耳打ちする。

すると……。

「カズマ、お互い、無事逃げ延びたら屋敷で会いましょう！　支援は両方掛けてあげるわ！」

言いながら、アクアは両方の支援魔法を掛けてくれた。

そして、自らにも魔法を掛けると未だあちこちで揉みあっている包囲をかい潜り、街中を駆け抜けて行った。

「何を教えたのかは知らないが、随分と自信満々で駆けて行ったな」

俺とアクアのやり取りを、邪魔もしないでずっと聞いていたダクネスが言ってくる。

こいつの余裕は何なんだ。

「お前、随分と余裕だな。筋力が強化されている以上、お前に力負けする事も無いぞ。このまま眠らせるなり何なりして、お前を荷物よろしく運んで行くからな」

そんな俺の言葉にダクネスが。

「そんなセリフは、この私を持ち上げてみてから言うんだな」

言いながら、ダクネスが不敵な笑みを浮かべてバンザイし、さあ抱え上げてみろという体勢を取る。

そのダクネスを、抱きかかえようと……。

「ダクネスさん、公衆の面前でこういうのって……。ちょ、ちょっと緊張するんですが……」

「そ、そう言う事を言うな、こちらも緊張してくるだろう……」

お互いに顔を反対側に向けて照れながら、俺は真正面からダクネスを抱きしめ、持ち上げようと……。

「ビクともしねえ」

そんな俺の言葉にダクネスは、勝ち誇った様に言ってきた。

「フッ、今回の計画は、以前から綿密に計画されていたものだ。本来は4月に入った時点で決行するはずだったのだが……。めぐみんを優先して里へ向かったり、その後お前の身体が癒えるまではと気を使ったり……。計画が伸び、さて決行となった途端、アイリス様にお前が攫われた時は頭を抱えた物だ。だがこうして最終日になんとか間に合い……！　そして、この計画を立てた時からお前が逃げようとする事は予想していた。そんな高額所得者のお前の妨害をするのがこの私だ。お前に逃げられない様、私はこの日の為に……！」

「この日の為に……！　お、お前、この日の為にわざわざ太ったのか……！　腹筋硬いの気にしてたもんな、腹に肉をあぶあっ！？」

俺はセリフの途中でダクネスに引っ叩かれた。

「重りだ！　見ろこれを！　服の下に、たくさんの重りを仕込んでいるのだ！　ほらっ！　ほらっ！！」

ダクネスが言い訳する様に慌ててシャツをまくり上げると、そこには鉛か何かの小さな塊が、大量に取り付けられている。

……と言うか、コイツは今までこんな状態でここまで歩いて来たのか。

しかしヤバイ、本当にヤバイ！

「ちっ、畜生！　受付のお姉さん、あんたは俺達の仲間だと思ってたのに！」

「ごめんなさい、私達も公務員なんです！　これを達成しないと、夏のボーナスが出ないんです！　ごめんなさい、ごめんなさい！」

あちらこちらでそんな声が聞こえ、俺の見知った冒険者達も捕まっていた。

ギルド前には席が設けられ、納税を終えた冒険者達はそこでグッタリと座り込んでいる。

めぐみんは、我関せずとばかりにそこでのんびりと、職員にお茶を貰って寛いでいた。

「畜生、なんでこんな回りくどい事するんだよ！　金持ってる奴の家にでも乗り込んで、直接私財をむしればいいのに！」

「すいません、それは出来ないのですよ。衝撃を与えると爆発するポーションをわざと家に置いて、強制徴税に来た者にそれを触らせ、高価な私財が被害を受けたと逆に訴えて抵抗を図る輩が続出しまして……」

そこかしこで職員達に食って掛かる冒険者も、その数を段々と減らしていっている。

これはマズイ、そろそろ列の後ろの俺の方にも……！

「……テコでも動かないと言った表情だなダクネス。説得は無理か

？　お前の事だ、賄賂送るから見逃してって言っても動かないんだろうな」

俺の言葉に、ダクネスがキッと眉根を寄せた。

「バカにするなカズマ。ダスティネス家は何者にも屈しないし、どのような不正にも応じない。さあ観念して……」

「『スティール』」

何か言い掛けたダクネスから、俺はスティールで重りを一つ、盗み取った。

それを道端に、ポイと投げる俺にダクネスが。

「……おいカズマ。お前のスティールは高確率で下着を剥ぐ。こんな往来で、そんなシャレにならない真似は止めろ。無駄な抵抗は止めて、とっとと納税」

「『スティール』」

おっとハズレ。

むしり取ったのはダクネスの履いていた黒タイツでした。

俺がゴソゴソとポケットにしまい込むタイツを見ながら、ダクネスが小さな声で。

「……ほ、本気？」

「……本気だよ。お前を全裸にしてでも軽量化して、そしてお前ごと運び去る」

……。

「高額所得者のサトウカズマさんですね？　どうぞこちら……ああっ！？　逃げた！　引き止める役のはずのダスティネス卿までっ！？」

俺はダクネスを引き連れて、職員達の包囲をくぐり抜けた！

「ああっ……、逃げてしまった……。私は我が身可愛さに逃げてしまった……！　自己を犠牲にしてでもこの男から税を徴収すべき立場なのに……っ！」

街の路地に逃げ込んだ俺の隣で、ダクネスが、付けていた重りを外しながら泣きそうな顔でブツブツ言い続けている。

こんな重りだらけでも走れるダクネスは大概だが……。

「ほれっ、何時までもメソメソしてないで一緒に来い。鍵まで捨てて来るとか、本当にバカなのかお前は。このまま街の郊外に出るぞ」

「……鍵を持っていると、運の良いお前の事だ、スティールで一発で持って行かれそうな気がして……。と言うか、郊外には既に見張りがいるぞ。もう諦めたらどうだ、大金抱えているお前よりも、借金背負っていた頃のお前の方が男前だぞ」

余計なお世話だ。

俺はダクネスと鎖で繋がれたまま、路地をコソコソと進んでいった。

何と言うか、この状態は目立つ。

表通りはとても歩けない。

と言うか、緊急クエストだなんて言って呼び出された所為で、あの場の冒険者の殆どが重装備で馳せ参じてしまった。
あの格好では、誰が見ても一発で冒険者だとバレてしまう。
クソ、ギルド職員と徴税官め、考えやがったな。

畜生、俺はなんでこんな街に帰って来たんだ。
正確には送り返された訳なのだが……！
覚えてろよ白スーツ、そして待ってるんだ俺の妹……！

ああ、アイリスの顔が見たい。
こんな世知辛い街で、なんで俺はこの女と繋がれたままで逃げ回らなきゃあ……。

何にしても、人気の無い所で時間を稼がないと。
アクアは逃げ切れただろうか。
めぐみんは、のんびりと寛いでいるのだろう。

そしてコイツは……！

「ふう……」

普段は頑強なダクネスは、いかにも疲れて動けない風を装い、その場に屈み込んでいる。
「おいこら、お前は俺より体力がある鉄女だろうが。こんな程度でヘタる訳無いだろ、さっさと立てよ」
「誰が鉄女だ。……ララティーナ、お嬢様だからもう歩けなーいあうっ！？」
普段使わない口調で舐めたこと言い出したダクネスを、手首に繋がった鎖を思い切り引っ張り無理やり立たせた。
「……素直に立ってちゃんと走る。だから今の、鎖を思い切り引っ

張って無理やり連れて行こうとするのをもう一度……。手首に枷が食い込んで、その……

「……お、お前って奴はこんな時ですら……」

頬を染めてモジモジするダクネスを見ながら、俺はもう諦めて税金払ってしまおうかと心が折れかけていると。

「居たぞ！　あそこだ、ダスティネス卿が足留めしている！　相手はアクセルの鬼畜男だ、人を呼べ！　絶対逃すなー！」

遠くから、そんな叫びが聞こえてくる。

「ああクソ、行くぞダクネス！　いいか、足引っ張るなよ！　邪魔しようとしたら即座にスティールの刑だからな！？」

そんな俺の警告に。

「……カ、カズマ、この公衆の面前でお前に剥かれてしまうかもとか想像したら、何だかそれも悪くない気がしてきた私は、もうダメなのだろうか……！」

「お前は出会った時からずっとずっとダメだったよ！」

職員達が、俺達に向かって走って来た！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時刻はそろそろ夕刻だろうか。

お役所仕事な人達が、そろそろ終業となるはずだ。

今俺が居るのは冷たい石の床の上。

そして、俺の向かい側には、憮然とした表情のダクネスが、こちらは柔らかいクッションを敷いた椅子の上に座っている。

ダクネスが、小さな声で呟いた。
「……お前はズルい……」
ズルくて結構。

「頭が良いと言ってくれると何かと助かります」
「お前はズルい！　何と言う、何と言う卑怯者だ！　なんかこう、真正面から堂々と、知略を尽くして逃げるとかこう、何かあるだろうが普通は……！　どうするんだ、多分これを聞いた他の貴族達が、上手く逃げられなかった際に同じ手を使うぞ！」
ダクネスが、憤りながらそんな事を言ってくる。

「それはお前の国の勝手と言うか……。ちゃんと法整備をするなり部署を同じにするなりして、上手い事対策考えたら良いじゃないか」
俺は、そんな憤るダクネスに膝を抱えて座ったままで言ってやる。
現在、俺とダクネスは、この街で最も安全と思われる場所で保護されていた。
この街の中で最も権威があり、正義の名の下、犯罪者を取り締まる市民の味方。

そう、警察署の留置場の中である。

「役所が違えば仲が悪いってのは、どこの国も一緒なんだなー」
「お前はズルい！　お前はズルい！　本当にズルい！」

徴税官に追われていた俺は警察署に駆け込むと、その場に居た婦人警官にスティールを唱えてみた。

罪状は、窃盗と猥褻行為。
何を盗ったかは伏せておく。

「……うう、警察の連中も頭が硬い……。こいつらの給料も、お前からの税金で賄われているんだぞ……。手枷を貸すのは快く貸してくれたのに、どうしてこういった融通は利かないんだ……！　大体お前、朝は被害者ぶってアクアを通報しておいて、昼には脱税の為逃げたり、軽犯罪を起こして自らがワザと捕まるとか、その辺はどうなんだ……！」

ダクネスが、そんな事を悔しそうに呟いた。

「いやあ、お前が一緒に繋がれていて助かったよ。おかげで今日の夜には帰れそうだ」

「やかましいわ！」

警察に逮捕された俺は、徴税官達の抗議も虚しく留置場に拘留となった。

徴税官と警察の人がしばらく押し問答をしていたが、俺の身柄の引渡しは行われないらしい。

一緒に居るダクネスの恩恵か、初犯という事で、取り調べが終われば帰してくれるという事だ。

取り調べはもう終わり、現在は書類だのなんだのを作っている。

それらが終わる今日の夜には帰れるとの事。

お互い鎖で繋がれた状態の為、犯罪者でもないダクネスも、待遇は椅子を用意されたりと良い物だが、俺と一緒に牢に入れられていた。

やがて時が経ち、すっかり日も暮れる頃。

俺とダクネスに声が掛けられた。

「出ろ。釈放だ、迎えも来てるぞ。……ダスティネス卿には不自由

をさせました……。どうぞこちらへ」

「ただいま。……なんだ、アクアは逃げ切れなかったのか」

俺とダクネスが屋敷に帰ると、そこには屋敷のソファーで泣くアクアを、めぐみんが慰めていた。

アクアにしか実行できない完璧な潜伏手段を教えてやったのに。

「ああ、お帰りなさいカズマ。いえ、時間ギリギリで何とか耐え切ったらしいんですけれど……」

アクアの頭に手をやって、ヨシヨシと慰めているめぐみんが、困った様に言ってくる。

そんなアクアは泣きながら。

「うっ……、うえっ……！　カズマが言う通り、街の外の湖に向かおうとしたんだけどね……っ！　途中で見づがっで……！　仕方ないがら、街の農業用水の貯水池の底に隠れだの……！　ぞじだら……！」

俺が教えたのは、街の外の湖の底に夜まで沈んでいるという作戦だった。

一応水の女神のアクアは、水の中でも呼吸が出来るし不快感も感

じ無い。
湖の中ならば誰も手出しは出来ないと思ったのだが……。

「なんでも、農業用水の貯水池に、職員の人達がファイアーボールを撃ち込んでアクアを茹でようとしたらしく……。幸い、その作業の途中で終業時間になり諦めたみたいですが、よほど怖かったらしく、ずっと泣いてまして……」

この国の徴税官は容赦無いな。

……良い作戦だと思ったんだが、悪い事したかなあ。

「……おや？　その手首の枷はまだ外せてないのですか？」

めぐみんが、俺とダクネスの手を見て言ってきた。

そう、警察の人から借りたこの枷。

警察からの帰りに、捕まったついでに、丁度良いとばかりにこれを外してもらおうとしたのだが。

「……ん、なんでも、鍵が奪われても簡単に外せない様にと、鍵はそれぞれの枷につき一つ一つ違うらしくてな……。そして、枷の鍵はその……」

恥ずかしそうに口ごもるダクネスの後を、俺が引き継ぐ。

「このバカは、俺に枷の鍵をスティールされそうだって理由で、その鍵を捨てたらしい。まあ、枷はこの屋敷に来た警察から借りたらしいから。鍵は、枷を借りたその時、この屋敷の敷地内に適当にポイしたらしいんだ。今日は暗くて探せないし、明日の朝、コイツに探させる事にするよ」

言いながら、バカな事をしたとばかりに恥ずかしそうにしているダクネスを小突いてやると。

「……ほう、すると二人は、今晩はお風呂も一緒、トイレも一緒、寝るのも一緒と言う訳ですか。仲良しさんですね」

めぐみんが、そんな事を……。

そんな……事……を……。

……。

「「……」」

俺とダクネスは、無言でお互いの顔を見た。

9話（後書き）

こんな引きでなんですが、最近更新がない日を作りがちなので、いっそ更新は2日に一話にしようかなと思います。
早く書ければ不意打ちでその日に更新してしまうかもですが。

１０話

カチャカチャと鳴る食器の音。
不器用なクセに、普段は、食事の時は上品に音も立てずに食べるダクネス。

そんなダクネスが、今日は緊張でもしているのか、珍しくナイフとフォークをカチャつかせていた。

現在、皆でテーブルを囲んでの夕食の最中である。

「カズマさーん、醤油とってー」
「お、おう……」

俺は手近にあった醤油を空いていた左手で取り、それをアクアに渡してやろうと……、
「あっ……！」
渡してやろうとして、俺はダクネスの小さな声で、左手がダクネスの右手と繋がれていた事を思い出す。
醤油をアクアに差し出した際に、釣られてダクネスの右手も引っ張られていた。
「わ、悪い……」
「い、いや……」
謝る俺に、小さな声で返事するダクネス。

「ありがとー」

アクアが、そんな俺達の様子を気にも止めずに醤油を受け取り礼を言う。

今日の夕方頃、徴税官達に茹でられ、先ほどまで泣いていた様子はもう見受けられず。
既にそんな事は忘れたかの様にアクアは晩飯をぱくついていた。

こいつの気楽さがちょっと羨ましい。
鎖で繋がれていたのがコイツだったなら……。

「……ご、ご馳走様……」
緊張しているのか、半分以上も食事を残し、ほんのりと赤い顔をしているダクネスが、小さな声でポソリと言った。

そんなダクネスにめぐみんが。
「……二人共、今更なにを緊張してるんです？　長い付き合いの中、一緒に寝るなんて今更でしょうに。そんなに二人きりが心配だというなら、私やアクアも一緒に、皆で仲良く寝れば良いではないですか」
「「ぜ、ぜひ……！」」
不覚にも、俺とダクネスは返事がハモった。

それを聞きダクネスの眉がピクリと動く。
「……おい、女である私がめぐみんに一緒に寝て欲しいと頼むならともかく。……男であるお前が、なぜそんな事を言い出す。一応私も女の端くれ、多少なりとも不愉快なのだが」
そんな面倒臭い事を言い出したダクネスに。

「いやお前、どうせ色気のある展開になんてならない事ぐらい分かってるしさ。あらぬ誤解を招くぐらいなら、めぐみんにも一緒に寝て欲しいじゃないか。怪力キャラなお前の事だ。どうせ、寝ぼけて隣に寝てる俺に抱きついてきて、そのまま締めあげて背骨をへし折るとかそんなオチだろ」

「バッ、バカにするな！　どこの世界にそんな寝ぼけ方をする奴がいる！」

変に緊張して寝られないよりはめぐみんやアクアにも一緒に寝てもらった方がいい。

まあ、皆で野宿したり馬小屋で寝たり、ぶっちゃけ一緒に寝るぐらいは今更って気もする。

「ほうほう。そう言えば、屋敷の中で皆で寝るとか初めてかもしれないわね！　それじゃ、寝る前に私が取って置きの怖い話をしてあげるわ！」

「い、いえそれはちょっと止めてほしいのですが……」

「だ、だな……。ここは元幽霊屋敷なのに、怪談とかシャレにならん」

この屋敷を手に入れた時の悪霊騒ぎを思い出し、俺とめぐみんが怖気づく。

……と。

「まったく。仮にも冒険者が怪談を怖がってどうする。そんなだからここ最近、冒険者達が腑抜けになったと当家に陳情がくるのだ。もっとしっかりして欲しいものだ」

ダクネスが、呆れたようにそんな……。

……そんな……。

「……最近の冒険者が腑抜けになったってなんぞ？　……陳情って、そういやお前ん家、今、代理領主やってるんだもんな」

俺の疑問にダクネスは。

「この街の冒険者が、討伐クエストをちっとも受けないらしい。と言うのも、以前の大物賞金首戦で冒険者一人一人が結構な大金を手にしただろう。少なくとも数年は働かなくても済むぐらいの額を。……それでここ最近、多くの冒険者達がカズマの様になってきていてな。街のすぐ近くですらモンスターが蔓延るようになりだして……」

「おい待て。俺みたくなってきたって……。つまり、この街の冒険者がニート化してきたって事か？　……ひょっとして、今日の緊急の呼び出しで、今までは見逃してくれていた税金を、訳も分からずいきなり払えとか言い出したのも……」

ダクネスが、フッと笑った。

「良く分かったな。今までの様に街を守ってくれていたならともかく、ニートと化した冒険者達に、わざわざ税の優遇措置をしてやる必要など無いだろう。今回の緊急な徴税は、ニート対策としての特例措置だ。ギルド職員達も、コレだと大喜びしていたな。税収は増えるし懐が寂しくなった冒険者達は働くだろうし。今後は街周辺のモンスターも駆除される様になるだろう。そして、今回徴収した税金は、全て冒険者の……」

「待てやあああああああー！」

俺は立ち上がり、手に繋がっていた鎖を引っ張った。

当然、ダクネスがたたらを踏みながら立たされる。

「じゃあ何か！？　今日の騒ぎは金持ってて働かない連中を働かせようと、そんなくだらない理由で追い掛け回されたのか！」

初犯の為処分保留になったとはいえ、俺が前科持ちにならざるを得なかった原因を作った犯人が、身近に居た！

「たわけ！　くだらないとは何だ、納税と労働はこの国の国民の義務だ！　労働しない相手から、本来払うべき正規の税金を取り立てて何が悪い！　我が国にニートは要らん、害悪としかならないニートなど、全て敵国にでも捨ててしまえ！」

「俺の人生を全否定するパーティメンバーがここに居た！！」

俺とダクネスがそのまま掴み合いの喧嘩を始めると、そんな姿を見ていためぐみんが、呆れたように言ってきた。

「……どう見ても間違いなんて起こり得ない感じですし。今日はいっそ、二人で寝てください。そして、もうちょっと仲良くなってくださいよ……」

晩飯を終えたなら、次はもちろん……。

そう、日本人なら風呂である。

「お前ふざけんなよ！　日本人はな、毎日風呂入らねーと死ぬんだよ！　お前らみたいな風呂嫌いの、香水とかで匂いを誤魔化す貴族連中とは違うんだよ！　分かったら邪魔すんな！」

「ふざ……！　ふざけるな貴様、貴族だって風呂ぐらい毎日入る！　風呂嫌いとはどこの国の貴族だそれはっ！　……ただ、今日はこんな状況だから風呂は控えて湯で身体を拭く程度に留めておこうと……っ！」

そんな俺の主張に、ダクネスが真っ向から反対していた。

「今日はあれだけ走り回って汗かいたんだ、風呂入らなきゃ死ぬ。別に、お前も一緒に風呂入れなんて言わないよ、俺が湯船でゆったりくつろいでる間、お前は適当に濡れタオルかなんかで身体拭いていればいいよ」

「いや、風呂に入るという事は、裸になるという事で……！　私が身体を拭く隣では、お前が全裸で……！」

俺とダクネスがぎゃあぎゃあ騒いでいる中。

「私のターン。マジックカード、泥沼魔法。アクアのモンスター達は三ターン行動不能です」

「……うう。また何も出来ないわ。パス」

言い争う俺とダクネスを放置して、居間のテーブルの上でアクアとめぐみんはカードゲームに興じている。

もはや、喧嘩する俺達を止めようともしない。

「俺は別に、裸の一つや二つ見られても気にしないから大丈夫だよ。むしろ、ある意味御褒美とも言えるからお気になさらず」

「私が気にすると言っている！　誰がお前の羞恥心を問題にしている、お前の裸を見せつけられる私の事を考えろと言っているんだ！」

「私のターン。マジックカード、爆裂魔法。相手は死ぬ」

「わあああああーっ！　めぐみん、さっきからマジックカードの

使い方がいやらしいわ！　私、これで三回も何も出来ないまま負けたんですけど！」

マイペースに遊んでいる二人は放っておき、俺は尚も何かを喚き続けるダクネスを連れ、着替えを持って風呂へと向かった。

アクア達が晩飯を作っていた間に、既に風呂は沸かしておいた。

俺は、手早く服を……。

「……これどうしよう。手枷があるから上着を脱げないじゃないか。……切るか。この服も随分ボロボロだし」

言いながら、そろそろ捨てようと思っていたシャツをダガーで切り……。

「……お前は、隣に私が居ても何の迷いもなく全裸になるというのはどうなんだ」

ダクネスのそんな抗議を聞き流しながら、俺は手枷とタオル一丁の姿になる。

ダクネスは、タオルを持ったまま足元だけ裸足になった状態だ。

俺が風呂に入る隣で、身体だけは拭くつもりらしい。

嬉々として浴場に入っていく俺の後を、恥ずかしそうに付いてくるダクネス。

風呂に浸かる前に身体を洗う俺の背後で、背中合わせ状態になったダクネスは、シャツやスカートは脱がないままで、タオルを湯に浸し、恥ずかしそうにシャツの下にタオルを突っ込んで身体を拭いている。

俺は手早く身体を洗い終えると、そのまま湯船に。
もちろん鎖に繋がれたままのダクネスも、湯船の際まで付いて来た。

「ふいー……。風呂に入ると、実に色々あった今日の事も、何となく水に流せてしまう不思議……」
「……妙齢の貴族の娘の前で、堂々と全裸で風呂に……。いや、もうお前のやる事に関しては何も言うまい」

ダクネスが、鎖で繋がれた右手を湯船の中に入れ、そのまま湯船の縁に寄り掛かるようにして、濡れた床にペタンと座る。
そのまま風呂に浸けた右手を、湯を掻き回すようにチャプチャプと動かしながら。

「……なあ、冒険者達は私を恨んでいるだろうか？」

深々とため息を吐きながら。
唐突に、そんな事を言ってきた。

「……？　知らんがな。そもそもお前の指示だって知らないんじゃないのか？　まあ今までは非課税にしててくれたんだろ？　なら、皆そこまで恨んじゃいないんじゃねーの？　最も、俺は逃げ切れたからそんな人事で済んでるんだけれど」
湯船に寛ぐ俺に、ダクネスが、はあと呆れたように再びため息を吐く。

「……私だってこんな事はしたくは無かったんだが。正直に言って、別に財政は苦しくは無い。いずれ、今回彼らから徴収した税金は彼らの為に、倍以上になって還元される時が来る。……冒険者達がキチンと働いてくれるなら、こんな事はするつもりもなかったんだが

……」

理不尽な。

「労働は義務だとか言うけどな、働かなくてもいいだけの金があって、なんでまだ働かなきゃいけないんだよ。しかも、よりによって冒険者稼業なんて危険な仕事をさ。俺の国にも納税と労働は国民の義務だとかあったが、俺みたいなニートと呼ばれる上級職はたくさんいたぞ」

「それでよく滅ばないなお前の国は。……何と言ったか。確か……、漫画？　お前の国では、そう呼ばれる娯楽があるんだろう？　お前がたまに言っていたじゃないか、絵が上手ければ、漫画でも描いて一山当てて遊んで暮らすのに、だとか。……例えば、その漫画という物を描いている者がいるとする。で、そいつが売れて大金を手にしたとする。金を手にしたからもう遊んで暮らす。完結なんて知るか、続きは描かない、などと言い出したら困るだろう？」

……それは困るな。

……凄く困るな。

「仕事には責任が付いて回る。ここは駆け出しの街。駆け出しの冒険者達を育てる為に、様々な支援が成されている。それらは、いずれは民や国を守ってくれると、駆け出し冒険者に期待しているからこそ行なっている優遇措置だ。中堅やベテラン達ならば、大金を手にしても冒険者としての役割や義務をちゃんと認識しているのだが、いかんせんこの街の駆け出し達は……。どういう事だか、最近おかしな考えが蔓延していてな」

……？

「おかしな考え？」

風呂でゆっくり足を伸ばしながら、何気なく聞く。

「ああ。……なんだか冒険者達の間で、働いたら負けと言うバカな言葉が流行り出していて……」

「……」

流行らせた奴には心当たりがある。

「……？　どうした、急に黙り込んで」

「……な、何でもないです……」

俺が普段から他の冒険者に言っていた事じゃないですか。

風呂から上がると、アクアが半泣きでめぐみんにすがっていた。

「もう一回！　次で最後だからもう一回！」

「もうダメですよ。何度やっても同じです、アクアでは私には勝てません。それじゃ約束通り、何か一つ、私の言う事を聞いてもらいますよ？」

どうやら、めぐみんにカードゲームでボコボコにされたらしい。

めぐみんはボードゲームにカードゲームなど、頭を使うゲームに関しては無敗と言っていい。

流石は知力が高い紅魔族と言いたいが、その知力をもっと建設的な事に使って欲しい。

「さて。早いが、もう寝てしまおうか。早く寝て、早く起きて。そして、夜明けとともに鍵を探す。朝一のトイレの前に鍵探して欲しいしな」
「……そ、そうだな」
俺の言葉にダクネスが恥ずかしそうに同意した。

先ほどトイレを済ませてきたが、ダクネスが用を足している間、音が聞こえない様にと、俺は大声で歌わされていた。
なんか、以前この屋敷で悪霊退治をした際に、めぐみんと一緒に居た時も同じ事をさせられた気がする。

音を聞かれたくないなら、ダクネスが自分で歌えと抗議したが、結局俺がアカペラで歌わされた。
何となく理不尽な物を感じたので、歌っている途中何度も無言になってやったりして邪魔してやると、俺が用を足す際、ダクネスにジッと無言で背後に立たれ、用を足している最中後ろから肩を掴まれ揺らされたりした。

案の定その後再び掴み合いの喧嘩になったが、こんなバカな事はもうたくさんだ。
今日はとっとと寝て、朝もよおす前に鍵を探してしまいたい。

「それじゃ俺達は寝るけど、本当にめぐみんとアクアは一緒に寝てくれないのか？」
「今日は二人で寝てください。先ほどからの様子だと、間違いなんて起こらないでしょう。と言うか、間違いの一つでも起こりかねない程度に仲良くなって欲しいですよ。二人共、ちょっと大人になってください」
喧嘩ばかりしていた俺とダクネスを呆れた表情で見ながら、めぐみんがそんな事を言い出した。

大人になれとか言われると、違う意味を考えてしまうのは俺が煩悩に塗れているからだろうか。

……と、隣のダクネスを見ると、煩悩に塗れているのは俺だけではなかったらしい。

赤い顔でダクネスがまた良からぬ事を想像している風だったので、手枷を引っ張り妄想を中断させ、部屋へと向かった。

ちなみに今の俺は、手枷と鎖の所為でシャツが着れない。

なので、上半身は裸の状態。

もう暖かいし、布団をしっかり被っていれば風邪をひくことも無いだろう。

寝るのは俺の部屋のベッド。

俺が左手、ダクネスが右手を枷に繋がれているので、ベッドでは俺が右手側となる。

俺は早々とベッドに寝転び。

「……俺が上半身裸でセクシーな裸体を晒しているからって、寝ている間にいたずらするなよ」

「するか！　セクハラが皮を被って歩いている様なお前こそ、私が寝ている間に色んな所をこねくり回すつもりだろう」

そんな難癖を付けてくるダクネスに、ゴロンと背を向けて。

「おやすみー」

「おっ、おい！　なんだ、本当に寝てしまうのか？　……ね、寝るのか……」

そんなダクネスの声を聞きながら、俺は頭から布団を被った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

……一体どれほど眠ったのだろうか。

俺はいつの間にかダクネスの方へと寝返りを打ち、そちらへ向いて寝ていたらしい。

目を開けると、すぐ近くには目を閉じた状態の、整ったダクネスの顔。

俺はそのダクネスと、おでことおでこをピタリとくっつけ合っていた。

その、ダクネスの顔が凄く間近まで迫っている。

と、言うか。

「………………お前何しようとしてんの？」

「ッ！？」

眼前まで顔を寄せていたダクネスに、何の気無しに尋ねていた。

俺の言葉にダクネスが、ビクッと震えて目を閉じたまま動かなくなった。

「……………スー……スー……」

「おい、寝たふりすんな、お前、今……」

言いながら、俺は自分の右の首筋に違和感を覚え、それに何となく右手を置くと……。

…………そこが、なんとなく湿っていた。

これはつまり……！

「お前……！　吸ったな！　俺の寝ている間に、俺の首筋を吸って、ねぶって、体中をまさぐったんだな！」
「ちちちち、違ー！　まだそこまではしていない！　待ってくれ、違うんだ！　これは本当に違うんだ！」
俺の言葉にダクネスが頬を染め、目に涙を浮かべながら跳ね起きた。
俺は未だに湿った首筋に手をやりながら。
「何が違う！　この首筋の湿りは何だ！　お前が性欲を持て余しているのは知っているが、俺が寝ている間に本当に、俺の無垢な身体にいたずらするとは……！」
ダクネスが、それを聞いて必死に口の前に人差し指を立て。
「こ、声が大きい！　違……！　ほ、本当にまだ何もしていない！　その、目が覚めたらお前の首筋に顔を埋めていたんだ！　それで、お前の首に私のヨダレが垂れてて……！　拭かなきゃと思ったんだが、手枷と鎖で繋がれた無防備な寝顔を見せているお前に、何だか凄くいけない気持ちが……、背徳感が湧いてきてしまい……！　それで、何だかどんどん盛り上がってきて……ッ！」
やっぱりいたずらしてたんじゃないか。
俺はムクリと上体を起こし、自分の身体を触ってみる。
「……なんだ。まだベルトも付いたままじゃないか……。本当にまだ何もしていないのか……」
「ど、どうしてちょっと残念そうなんだお前は……」
どう盛り上がっていたのか、ダクネスは上気して肌をほんのり赤

く染め、軽く息が荒くなっていた。

「……お前ってヤツは、エロい身体を持て余したドスケベなのは知っていたが、まさか寝込みを襲うとは思わなかったぞ。お前本当にそろそろ痴女ネスとか呼ぶからな」

「そ、それは止め……！　……ん……くっ！　……こ、こんな状況でお前に怒られながら、ドスケベだの痴女だのと罵られて、少しドキドキする私は、もう本当にダメなのだろうか……」

「今更そんな心配しなくても、お前は出会った時からぶっち切りでダメだったよ」

俺は言いながら、乱れた布団を直し、ベッドへとモソモソ寝直す。その俺の隣に、ダクネスが恥ずかしそうにしながらも横たわった。

「……思えば、出会った時はこんなバカな事を言い合う間柄になるとは思いもしなかったな。あの頃は、私はもっと何も言えなかったものだ。もっと、意志の疎通がヘタだったものだ。……そして、もっとお前とも距離を置いていたものだ……」

暗く静かな部屋の中。

ダクネスがそんな事を言ってきた。

「まあお前はお嬢様だし、ホイホイと誰とでも距離を縮めてたらそれはそれで問題だろうよ。……出会った当初のお前は、もっと無口で寡黙で、俺に説教なんてせず、もちろん俺と喧嘩なんてしない様な、エロくて変な奴だけれど、もっと大人しいイメージだったんだがなあ……」

仰向けに寝転びながら言う俺の言葉に、ダクネスが可笑しそうに含み笑いをしながら。

「私は、出会った当初のお前は、もっと勤勉な働き者で、悪事には手を染めない様な、誠実で真面目で優しい奴だと思っていたよ」

そんな事を、ベッドの上でこちらにゴロンと向きを変え、俺の横顔を見ながら言ってきた。

「何だか、今は不誠実で不真面目で簡単に悪事に手を染める鬼畜な男みたいに聞こえるじゃないか」

「そう言ったつもりなんだが？」

俺の言葉に、ダクネスが可笑しそうに笑いながら。

「……なあ。カズマ」

世間話でもするかの様に。

「？」

寝転がった体勢で、何気なくダクネスの方に首だけを向けた俺に。

「……お前は、めぐみんの事が好きなのか？」

11話（前書き）

久しぶりのシリアス回

11話

外は曇っているのだろう。
昨夜は満月だったはずだが、今、窓から射しているのはとても淡い月の光。
そんな淡い光の為か、ダクネスの細やかな表情まではうかがえない。
だが……。
「……す、すまない、おかしな事を聞いてしまったか……」
そんな事を照れながら言うダクネスの、滑らかな白い肌がほんのりと赤く染まっていくのはよく分かった。
いきなりこんな流れで、そんな事を言われても……。
「いや、そりゃ嫌いな訳は無いだろ。好きだよ、そりゃあ。もちろんアクアの事も。当然、お前の事も」
俺の言葉にダクネスが、シンと静まり……。
「……それは私の事を。……異性として、では無く。……仲間として、好きなのだろう？」
暗い部屋の中そんな事を、少しだけ寂しげに、ポツリと言った。
……あれ、なんだこれ。
ヤバイ雰囲気だ。
凄くヤバイ雰囲気だ。

童貞で、女性と付き合った事がない俺でもそれぐらいは分かる。
この会話は続けたらいけない気がする。
絶対にマズイ気がする。
なぜだろう、俺、まだ童貞で生乳すら拝んだことも無いのに。
なぜだろう、俺、まだキスもした事無い人間なのに、なぜこんなリア充が陥るような悩みに直面しているんだろう。

俺が答えに窮していると、ダクネスが、自分の右手に付いている枷の鎖を少しだけ引っ張った。
ほんの、少しだけ。
当然、それに釣られて枷が付いた俺の左手が引き寄せられる。

「なあ……。お前は、めぐみんの事が……。異性として好きなのか？」

ダクネスが、言いながら、引き寄せた俺の左手を両手で包み込むようにして握りしめた。
ほんのりと暖かく柔らかい、ダクネスの手の感触。
それを感じながら。
酷く緊張しつつ、なんて答えればいいのかを考えていた。
めぐみんとの関係は、友達以上恋人未満。
アクアやダクネスには内緒にって話だが、ダクネスには勘付かれてしまったのだろうか。

……俺はめぐみんの事を……

「……わ、分からない。正直言って、自分でもよく分からない。でも、嫌いじゃない。多分、異性としても好きなんだと思う。一緒に居るとなんか落ち着くし、何て言うか……。……めぐみんと居ると、

自然体でいられる」

何となく、そんな言葉が口から出ていた。
それはきっと、今の正直な気持ちだったのだろう。
普段特に意識はしていないが、以前めぐみんに告られてから、段々自分の中で存在が大きくなっていったのは感じている。

めぐみんに告られたって所だけは省き。

暗い部屋の中ダクネスと見つめ合い、俺はそんな今の気持ちを、そのまま伝えていた。

なぜだろうか。
自分でも分からないが、俺は誤魔化したり茶化したりする事もなく。
ただ、そのまま伝えていた。

「……そうか」

そう一言呟いて、両手で握っていた俺の手を、そっと俺の胸に押し戻し。
ダクネスは、そのままゴロンと反対側を向いてしまった。
……。
ダクネスは、そのまま何を言うでもなく静まり返る。

……いい加減、俺が何かを言おうとしたその時。

「このままがいい」

ダクネスが、そんな事を呟いた。

何が？　とか。
どう言う意味だ？　とか。
俺がそんな事を聞く前に、ダクネスが背を向けたまま。

「……このままがいい。アクアが何かやらかして泣き、お前がそれを、しょうがねえなーとか言いながら尻拭いする。めぐみんが魔法を放って物を壊し、お前がめぐみんと一緒に謝りに行く。私がバカな事を言い出したら、お前が怒ってくれて……」

そんな、意味の分からない独白を、ダクネスは背を向けたまま並べていく。

「めぐみんの爆裂散歩に付き合って、皆で弁当を持って湖へ行ったり。私とお前が、くだらない事で取っ組み合いの喧嘩になったり。アクアが唐突に、どこかへ旅行にでも行きたいとか駄々こね出して、それをお前が、何だかんだ言いながら皆で旅行に行く計画を……」

そんなダクネスの声が少しずつ震え声になっていく。

「それで、たまにはのんびりしたいとか言うお前の言葉とは裏腹に、そんな旅先では……また、何か問題が起こって……っ」

俺は、ダクネスの肩に手を伸ばし、
「お、おい。どうしたんだよ、ちょっと落ち着けって」
言いながら、こちらを振り向かせようと力を入れるが。

「……でも、お前が誰かと結ばれたら、きっと今の関係は変わってしまう。きっと、このままではいられなくなる……。このままじゃダメか？　ずっと、このまま変わらずに……。借金返済の為に、お前があの手この手を使って、金を工面しようと色々やったり……。

それで、予想外の強敵に出会って、皆で命からがら逃げ帰ったり。
……あの頃のままじゃダメか？」

頑なにこちらを向こうとしないダクネスは、そんな独白を続けていた。

……そして。

「……恋人が欲しいのか？　……それは、めぐみんじゃないとダメなのか？」

こちらを向こうとはしないまま、ダクネスが静かに言った。

「い、いや……。恋人が欲しいって言うか……」

俺がそこで言葉に詰まると。

「……ただ女が抱きたいというのなら、私でいいじゃないか。私なら、お前の望みに何だって応えてやれる。どんな事だって受け入れてやるぞ」

このバカ女は何を言い出すんだ。

「お前は俺をバカにしてんのか。そんなんじゃねーよ、あれだ、その……」

俺は再び言葉に詰まる。

俺はどうしたいのだろう。

……と、ダクネスが肩を震わせているのに気がついた。

「……お前、今日はおかしいぞ色々と。どうしちゃったんだよ、本当に。一旦寝ろ。今日は寝て、また明日……」

俺がそこまで言い掛けた時。
ダクネスが、バッとこちらを振り向いて。

「……ッ」
その顔を見て息を呑む。

泣いていた。
ダクネスは、ポロポロと涙を溢し。
そのまま、ダクネスの肩を掴んでいた俺の右手をギュッと握ると。
「私じゃダメか……？　……私じゃ、ダメか……っ？」
泣き顔でそんな事を言ってきた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺は、子供の様に泣き続けるダクネスの、その肩に手を置き続けたまま掛ける声も思いつかず。
一体どれほどの時が経ったのだろう。

泣いていたダクネスが、俺の手をそっと手に取り、自分の肩から引き離した。
「……みっともない所を見せたな」
ダクネスは、まだ鼻をグスグス鳴らしながら、赤い目で恥ずかしそうに呟いた。

女性に泣かれるとか、ハードル高過ぎてどうしたら良いのやら。
いつもアクアを泣かせているのとは訳が違う。

こんな時、気の利いたセリフが思い浮かばない。
と言うか、なぜいきなり泣き出したのかも分からないから俺は未だに童貞なのだろう。

ダクネスが、泣いた後の赤い目でジッと見てくる。
何か、俺の言葉を待っている様な、そんな顔で。
何を言ったら良いんだろう。

俺が何も言えず、狼狽えながら黙り込んでいると、ダクネスが俯き、ぽつりぽつりと独白を始めた。

「……私は、本来ならばあの領主の物になっていた身だ。でも、それをお前が救ってくれた。助けてくれて、自由をくれた。……今の私が望むのは、お前に貰ったこの幸せな生活を守る事。皆で変わらずにこのままでいれるなら、その為なら私は……」

……。

「だからって、自分がその身を差し出すってか？　お前はバカなのか。あの領主の時もそうだったな、自分の身を差し出して何とかしようとか。俺を見くびるなよダクネス、俺は別にその、そういった事がしたいから恋人が欲しいって言ってるんじゃないし、恋人になってくれるなら誰でもいいと言ってる訳でもない。……その。……めぐみんに、告られたんだ。それから、何か……。俺の中でも段々と、めぐみんの事が気になりだして。で、何かその……、ああ、俺もめぐみんの事が好きなんだな……って意識する様になって……」

自分でも何が言いたいのかよく分かっていない、そんな俺の言葉を、ダクネスが俯きながら無言で聞いていた。

「……私も」

ダクネスが、俯いたまま。

「……私も、お前の事が好きだ」

唐突に、そんな事を言って……。

……えっ、ちょっ……。

突然の告白に、戸惑いながら息を呑む。

「……最初はただ漠然と、好みのタイプの男だと思っていた。……お前は……。外見はパッとせず、スケベで、出来るだけ楽に人生送りたいと人生舐めてるダメな奴で。働きもせずに朝から酒を飲んでみたり、しまいには借金まで作って。……フフッ」

こいつの好みのタイプの男って、そういやそんなろくでなしだったな。

少なくとも、こいつが全く俺を褒めていない事はよく分かった。

「その借金の原因に、お前も絡んでいた事を忘れるなよこら」

そんな俺の言葉に、ダクネスがくすりと笑う。

「なら、借金分を今こそ身体で返そうか？」

「すいません、もう言いません、すいません」

すかさずヘタれる俺の言葉に、ダクネスが可笑しそうに肩を震わす。

ダクネスは、顔を伏せたままで尚も続ける。

「……そんなお前が、色んな強敵を相手どり、次々と倒していったのには胸がすく思いだった。お前よりも強くて経験もある魔剣使い。遥かに格上の魔王の幹部。数え上げたらキリが無いが、お前は何時

だって私を驚かせてくれたな。……あの領主の前で金をぶち撒けた時なんて、堪らなかったぞ」

……。

今度は一応褒めてくれているらしい。

「……最初はどうしようもなかったお前は、ドンドン変わっていったな。どんな相手でも、どんな強敵でも。最弱職のお前は、特別強力な装備に身を固めるでもなく。変わった形の特注の片手剣一本携えて、どんな難題でも解決してきた。そして、いつの間にかあんな莫大な借金までどうにかしてしまって……」

ダクネスの言葉を聞いていると、何だか自分が凄い人間に思えてくるから不思議だ。

「お前はいつの間にか、私の好みとはかけ離れていったな。最近でこそ仕事もせずにゴロゴロして、昼間から酒を飲んだりもしているが。……いつの間にか、私の好きなダメな男のタイプからはかけ離れていった」

なんだろう。

「……お前が好きだ。最初は、お前が私好みのタイプのダメ男だったから、惹かれていった。だがいつの間にか……。私の好きなタイプは、お前自身になっていた。もう、お前がどんな人間に変わろうとも、きっと、私はお前の事が好きなのだろう」

なんだろう、ヤバイ。

嬉しい。

凄く嬉しい。

「お前が好きだ。……そしてお前は、めぐみんが好きだと言う。だがそれでも、私はお前が好きだ。……私は、めぐみんも好きだ。アクアも好きだ。今の、皆の関係を壊すぐらいならばと、ずっと胸の内に秘めておくつもりだった。でも……」

ダクネスが、顔を上げた。

そして、俺の顔を真っ直ぐ見る。

泣いて、赤くなった目で。

涙の跡が残るその顔で。

「私は、あまり我慢強く、強い女では無かったらしい。私はめぐみんの事も好きなのに。……お前をとられてしまうのが、辛いし、怖い」

大切な何かを失う事を恐れている、まるで怯える少女の顔で。

「……なあカズマ。……私じゃ……ダメか……？」

返事を聞くのを怖がるように、恐る恐る言ってきた。

ああ、ヤバイ。

嬉しい。

ダクネスに、好きだと言って貰えるのが凄く嬉しい。

……こんなにも、嬉しいのに。

ヤバイぐらいに胸が痛い。

「ダクネス……。その……」

胸が苦しい。

本気で苦しい。

「ダクネス、俺もお前が嫌いじゃない。と言うか、俺の今までの人生振り返ってみて、お前みたいな美女に好かれるなんて、まず無かった」

苦しい。

言ってて苦しい。

畜生、なんでこの世はエロゲーみたいな世界じゃないんだ。

俺は胸の痛みに泣きそうになりながら、泣いた後の顔でジッとこちらを見上げているダクネスを、至近距離で真っ直ぐ見詰め。

「……俺はさ、もとの国じゃ、色恋沙汰なんて全く縁がなくってさ。まあ、ずっと思ってたよ。このまま一生誰とも付き合うこと無く終わるんだろうなあ……って。女の子とロクに会話もせずに、一生を終えるんだろうなあ……って。そんな俺がお前に好きだと言われてる。嬉しくない訳が無い」

俺の言いたい事、俺の真意を読み取ろうと、ダクネスが不安そうな顔でジッと俺を見ていた。

……胸が苦しくて、泣き出しそうだ。

ラノベみたいに、ゲームみたいに。

ハーレム系の漫画みたいに。

「……でも。……ごめん。俺は、既に誰かに告られた状態で、他の

誰かに臆面もなく好きだとか言えないし、二股掛けれるほど経験に長けてる訳でもなきゃ、そこまでのクズでもない。……俺は、お前とは付き合えない」

都合良く、丸く収まってくれればいいのに。

ダクネスは、スッと目を閉じ、顔を伏せた。

お互い無言のまま、一体どれだけの時間が過ぎたのだろう。

やがてダクネスがポツリと呟く。

「……ありがとう、真剣に答えてくれて。……困らせて、悪かったな」

言いながら、そのままベッドの上に上体を起こし、何か吹っ切れた様に笑みを浮かべた。

それは、いつもの自信に満ちたダクネスの笑み。

穏やかさを兼ね備え、それでいて芯の強さも秘めた笑み。

吹っ切れた様なダクネスは、スッと両手で、顔の前に掛かっていた髪を払うと、そのまま立ち上がり、清々しそうな顔で腕を組んだ。
そのままダクネスは、自信と慈愛に満ちた顔で笑い掛けてくると。
俺にクルリと背を向けて、堂々とした背中を見せた。
「……ではな、カズマ。また……明日。……やはり私はお前が好きだ。幾らでも上手い誤魔化し様はあるのに、こうしてちゃんとケリを付けてくれた、お前が……」
言いながら、ダクネスがそのまま部屋から……、
おい、ちょ！
「待っ……！」
ジャラリと鳴る鎖の音。
場の雰囲気で熱くなったせいか、お互いが繋がれている事をすっかり忘れ、格好良い締めのセリフを言いながら勢いよく退出しようとしたダクネスは。
「ハブッ！？」
俺の左手に繋がれた鎖に、思い切り右手を引っ張られ。
そのまま、寝ていた俺の上体を引っ張りながら、繋がった右手を軸に半回転し、ベッドの縁に顔面から突っ込んだ。
……。
ダクネスは、痛かったのか、そうじゃないのか。
顔面からベッドの縁に突っ込んだまま動かない。
「……お、おい、大丈夫か……」

その言葉にダクネスは、顔を俯かせて俺に顔を見せないで、そのまま絨毯の上に三角座りした。
そして、そのまま顔を膝に埋める。
見れば、微かに肩が震えている。
そして、僅かに覗く耳の部分が恥ずかしさの為、真っ赤に……。
「………………………ぶふっ！」
「ッ！？」
俺が思わず吹き出してしまったのは、これはもう仕方ないんじゃないだろうか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「フーッ……フーッ……！　ぶっ殺してやる、ぶっ殺してやるっ！　そして、お前を殺して私も死ぬ！」
「そして朝になったら、二人仲良くアクアに蘇生されるんですね、分かります！　笑ったのは悪かった！　でも仕方ないだろうが、お前も悪い！　緊張した後にあんな事されたら笑わないわけねーだろ！」
こんな深夜に、現在ダクネスとチェーンデスマッチ中。
「私は、あれで本気だったのだ！　女が勇気を出して告白し、その後どんな失敗をしたとしても、それを笑う行為は殺されたっておかしくはない！　……ああ、そうだ……。コイツは、この男はこういうヤツだった……っ！　おい、せめて一発殴らせろ！」

理不尽！

「お前、だってだって……！　あんな真面目な顔して立ち去ろうとしておいて……！　ふっ……、ぶはっ……！」
「ぶっ殺してやる！」

先ほどの状況を思い出し、再び笑ってしまった俺にダクネスが掴みかかってくる。
「わ、悪かった！　分かった、分かったよ！　俺が悪かった、確かにあそこで笑ったのは悪かった！　一発な！　一発殴らせてやるからそれで勘弁！」

俺の言葉にダクネスが、振り上げていた拳をスッと下ろし。
「……分かった。なら、その場に立って目を閉じろ」
ハアハアと荒い息で、俺を睨みつけながら言ってきた。

怖いんですけど。
怖いんですけど！

畜生、怪力のダクネスのパンチでも、一発ぐらい耐えられるだろう！
耐えられる……！
耐えられる、はず……！

「いくぞ。覚悟はいいな？」

絨毯の上に立ち、目を閉じた俺の前にダクネスが身構えた。
俺は覚悟を決めて。

「ど、どんと来い！」

そう言った、目を閉じたままの俺の顔に何かが触れた。

触れられた瞬間にビクリと身を竦ませるが、それは俺の頬を撫でるダクネスの手。

そして、俺の唇に柔らかい物が押し付けられる。

「……！？」

キスなんてした事も無かった俺だが、押し付けられたそれが何なのかは、目を閉じていてもなぜだか一発で分かってしまった。

目を開けると、怒った様な表情ながら、その顔を耳まで赤く染めたダクネスが、左手で俺の頬を撫でている。

そして、俺からそっと離されるダクネスの唇の隙間から、チロッと舌先が見え、俺の唇と触れ合った部分をペロッと舐めた。

「おっ……、お前……っ！」

何かを抗議するべきなのだろうが、何をどう言えばいいのか。

俺が言葉に詰まっていると、ダクネスが鎖に繋がれた右手を引き、俺の左手を引き寄せる。

そのまま俺の手首を掴むと、俺の耳元に口を寄せ。

「……先ほどまでは大人しく諦めるつもりだったが、もう止めだ。私は私らしく生きる事にする」

そんなゾクゾクする事を囁いた。

そしてそのまま、俺の手首を掴んだままでベッドに倒れ込むよう

に俺ごと押し倒してくる。

「おい、ど、どうしたダクネス！　待て！　マズイ、この流れはマズイって！　何がマズイって凄くマズイ！」

ベッドの上に押し倒され、そのままダクネスにのしかかられながら、俺はこの状況をどうしたらいいかを考えた。

そんな俺に、ダクネスが頬を染め、荒い息で言ってくる。

「実は最近、お前とめぐみんが良い感じになっている事を、あるチンピラに話したら助言を受けてな。……その男はこう言った。……お前は仲間を守るクルセイダーだろ？　なら、自分の身を犠牲にして試してやれ、と。仲間の魔法使いを案じるのなら、お前は遠慮なく迫ってやれ！　と。それでお前に奪われる男なら、そんな男に仲間がたぶらかされなくて良かったと喜べ。……奪えなかったら、仲間が遊びではなく、本気で愛されてるんだと喜べ！　……と」

ダクネスを煽ったのはどこのチンピラだ、ぶっ飛ばしてやりたい。

「よし分かった落ち着け。こ、こんな流れでお互い初めてを失っちゃうってのはあんまりにもあんまりだと思うんだ、まあ落ち着……けっ！？」

言いながら起き上がろうとした俺の、左手を。

ダクネスがしっかりと右手で掴み、そのまま体重を掛けるようにベッドの枕元へと押さえつけた。

当然俺は、上体が完全にベッドに横たわる体勢となる。

ダクネスは、そのまま俺の左手を枕元に押さえつけたまま、俺の腰の上へとマウントを取るように跨ってきた。

これはイケナイ。

この体勢は本格的にイケナイ。

「おい待てダクネス、本気で落ち着け！　止めろって、マズイマズ……！」

尚も説得しようとする俺の顔のすぐ右脇に、ハアハアと上気した荒い息を吐きながら、ダクネスが左手を添えて撫でてくる。

「いつか、私の実家でお前に押し倒された事があったが……。今夜は立場が逆になったな……！」

これはイケナイ、本当に。

何がイケナイかと言えば、具体的にはアレがああなる。

「……？　……あっ……」

腰の上に跨っていた為、気付いたのだろう。

ダクネスが、恥ずかしそうに小さな声で呟いた。

だが、アレがああなった後だというのにダクネスはその場から降りようとしない。

ダメだ、流されるな、こんなエロゲームみたいな展開に流されるな！

冷静になれ佐藤和真、お前はめぐみんを裏切るのか？

このまま流れに身を任せれば、健気に尽くしてくれためぐみんの気持ちを裏切る事に……！

いかにダクネスに無理やり襲われ、抵抗が出来なかったという大義名分があるとはいえ……！

ダクネスが、若干恥ずかしそうにしながらも、俺の頬に左手を付けてそっと撫でながら顔を寄せる。

「や、止めろお！　こんな事は止めろダクネス！　くそう、なんて事だ……！　最弱職の俺の筋力では、上級職のお前の力には力負けしてしまう……っ！」

俺は必死にダクネスに呼び掛けながら、空いた右手で……！

……空いた右手……。

「おいダクネス、右手！　俺の右手が空いてる！　お前の空いた左手で、俺の右手を掴んでおかないと俺に抵抗されるだろうが！　俺は不死王の手なんて厄介なスキルを持ってるんだ、気を付けろ！」

「えっ？　あっ……！」

俺のそんな指摘に、ダクネスがハッとしたように慌てて俺の右手首を押さえてきた。

なんて事だ、これで俺は両手の自由を奪われてしまった。

クソッ、俺にはめぐみんが……！

ここでむざむざと好き放題されてしまう訳には……！

俺が必死になってダクネスの下でもがいていると。

「……おいどうした。なぜ止まる？」

「……えっ？　い、いや、お前を押さえつけるのに両手が塞がってしまったから、どうしようかと……」

俺の両手首を掴んで押さえ込んだ状態で、ダクネスがそんなくだらない事を言ってくる。

「バカ、お前の口は何の為に付いている！　既に俺の上半身は裸なんだぞ、その口でやりたい放題が出来る状況じゃないのか！？」

「あっ……！　そ、そうか……」

ダクネスが、狼狽えながらも俺の首筋に向けてその舌先を……！

舌先が触れるか触れないかの所で、逡巡するかのように戸惑っているダクネス。

そんなダクネスに、俺は悲痛な声を上げた。

「クソッ、そんな、じらしプレイだなんて流石エロネス、だが俺は屈しない！　でも、躊躇してないで早くやってください！」

「あっ、ああ！　では、い、行くぞ……！」

ダクネスが、言いながらその舌先を……！

「あっ、ちょっと待って！　何かもう、下半身がパンパンに！　ちょっとだけ下を先に緩めてくれ！　いいか、ちゃんと……。口では嫌々言っていても、身体は正直じゃないか……！　とか言いながらベルトを緩めるんだぞ！」

「あっ、ああ、分かった……！」

言いながら、ダクネスが俺の手首から両手を離してベルトに手を……！

「バカ、両手を離すヤツがあるか！　ちゃんと俺が抵抗できない様に掴まえておけ！」

「あっ！　す、すまないっ！」

俺の鋭い叱咤に、ダクネスが反射的に謝った。

「こう、残念だが俺の上からちょっと降りて貰ってだな、寝ている俺に対して横側からのしかかるように……。そうそう、それで、お前の右腕の二の腕の辺りで俺の左手首を、そして、そのまま更に右

手を伸ばして俺の右手首を掴む。……そうそう、そうすればお前の左手が空くだろ？　ああ、そのまま俺が起き上がれないように、お前の巨乳を俺の腹とか胸に押し付けながらだな……！」
「こ、こうか……！　よ、よし、空いた左手でベルトを……！」

俺の悲痛な声での指示により、ダクネスが抵抗もできない無力で哀れな俺のベルトを……！

「いだだだだ！　締めてどうする！　外すんだよ！　ベルトを外すんだ！　そして、ふふっ……、随分と苦しそうじゃないか……！　とか言いながら、少しずつベルトを外すんだぞ！」
「は、はいっ！　ぶ、不器用ですまない……っ！　ふ……、ふふっ、随分と苦しそうじゃないか……！　ここは既に、嫌だなんて言ってはいないな……！」
「いいぞ、ナイスアドリブだ！」

抵抗できない俺に対してダクネスが、左手でベルトをゴソゴソと……。

「あ、あれっ？　あれっ？」
「おい、早くしろよ！　頑張れ！　もっと頑張れよ！　後、ベルトを外す際は、口が空いてるんだからな、ちゃんと空いた口で無抵抗な俺の裸体に対して、どうする事が出来るかをよく考え……！」

バンとドアが開けられた。

開けられたドアの前に立っていたのは、不機嫌そうな表情のめぐみんと、グッタリと疲れた顔のアクアの姿。

それを見て、俺はすかさず悲鳴を上げた。

「助けてえ！　この女に犯される！」

「ああっ！？」

手にした鍵で、アクアがカチャカチャと手枷を外していく。

アクアが、全ての闇を見通すと自称する、夜でも昼間の様に見えるという、暗視で見つけた枷の鍵。

わざわざアクアを叩き起こしためぐみんは……。

先ほどカードゲーム勝負で手にした、アクアになんでも言う事をきかせる権で、ダクネスが朝捨てた、枷の鍵を探させていたらしい。

なぜそんな事をしたかと言うと……。

「全く、こんな夜中に近所迷惑な……！　二人共、仲良くと言ったんですよ……！　誰が夜中に騒いで喧嘩しろと言いましたか」

そんなめぐみんの説教を聞きながら。

ダクネスは、部屋の絨毯の上に正座していた。

「……す、すまない……」

仁王立ちで腕組みしているめぐみんに、ダクネスが正座したまま頭を下げた。

「私、もう眠いんですけど。鍵探すの頑張ったし、もう寝たいんですけど」

眠そうに言うアクアに、めぐみんがご苦労様と告げてやると、アクアはそのままフラフラと部屋を出て行く。

枷を外された俺はと言えば、ベッドの縁に腰掛けて、足をブラブラさせてめぐみんの説教を聞いていた。

めぐみんに、頭を下げるダクネスに。

「まったく、とんだ女だよお前は。寝ている俺の体に欲情していたずらしたばかりか、激しく抵抗する俺にあんな事を……！」

「あっ！　き、貴様という奴は……！」

俺がそんな事を言うと、ダクネスが正座したままこちらを睨んだ。

……めぐみんも。

「……」

なんだか、全て分かっているとでもいう様なめぐみんの視線に耐えかねて、俺はベッドから降り、ダクネスの隣に自ら正座した。

「……俺も何となく正座しときますね」

「良い心がけだと思います」

めぐみんのそんな返事に、ダクネスが俺の横目で見ながらざまあみろとばかりにほくそ笑む。

このやろう。

そんな俺とダクネスを見て、めぐみんがため息を吐いた。

「まったく。一晩一緒に居ればお互い少しは素直になるかと思ったのに……。……ダクネスは、ちゃんと想いは伝えられたんですか？」

「「！？」」

めぐみんの言葉に、俺とダクネスは二人揃ってギョッとする。

こいつはどこまで見越してるんだろう。

紅魔族の知力侮り難し。

本当に、こいつはなぜ普段からこの知力の高さを生かしてくれないんだろうか。

「そ……その……。めぐみん、すまない……」

ダクネスが、正座したままシュンとなり。

そんなダクネスに対し、めぐみんが、

「……？　何を謝るんですか？　私はカズマと付き合っている訳ではありませんし、カズマが誰を選ぼうが私がとやかくは言えませんよ。ダクネスは、ちゃんとカズマに想いを伝えられましたか？」

そんな大人な意見を言いながら、ダクネスに優しく微笑み掛けた。

そんなめぐみんに、ダクネスが両手の拳をギュッと握ったまま正座した膝に置き、めぐみんを見上げてコクコク頷く。

それを見て、めぐみんは一層嬉しそうに微笑んだ。

その姿は、俺には何だか、一人で何かをやり遂げて、それを母親に報告する子供と、それを優しく見守る母親を思わせた。

めぐみんの方が年下なのに。

なんだろう、そんなめぐみんを見ていると、少しだけ胸が苦しくなる。

アレか。

これは、少しは妬いて欲しいとか、そんな感情なのだろうか。

俺が誰を選ぼうがとやかく言えないって言葉が地味に痛かったのかもしれない。

俺は自分でも、なんて面倒臭いヤツだと思う。

そんな複雑な心境の俺に、めぐみんが、そんな俺の気持ちも全て分かってるとでも言う様に笑い掛けてきた。

「甲斐性の見せ所ですね。私達二人に愛想尽かされない様に。たまには、派手にモンスター退治する格好良い所を見せて下さいね」

そんなめぐみんの言葉に、ダクネスが追従するようにコクコクと頷く。

そういやダクネスは、昔は、働かないダメな男が良いとか言っていたクセに。

それが今回の徴税騒動といい、一体どんな心変わりだ。

ああクソ、こうまで言われたら何時までもニートやってる訳にもいかないよな。

俺は苦笑しながら二人に言った。

「しょうがねえなあ……！」

そんな俺の言葉に、ダクネスとめぐみんが嬉しげに笑い。

やがて……。

「そう言えば。一応聞いてはおきますが、どうせ何も無かったんですよね？」

めぐみんが、ちょっとだけソワソワしながらそんな事を聞いてくる。

……あれっ、ちょっとは妬いてくれてたりするんだろうか。

そんなめぐみんに、

「ああ、この男は激しい抵抗を見せて私に何もさせなかった」

ダクネスは、しれっとそんな事を言いながら、俺に対してイタズラっぽい視線を投げ掛けてきた。

なんだろう、何だか手玉に取られているみたいだ。

それを聞き、どこかホッとした様なめぐみんと、ちょっと勝ち誇った様にチラチラこちらを見てくるダクネス。

そんな二人になんとなく。

「……そういや、さっき目を閉じてる時にダクネスに不意打ちでされたアレって、俺、ファーストなんたらってヤツでした」

「「！？」」

めぐみんの顔が引きつり、ダクネスがバッと顔を伏せた。

12話（前書き）

ストーリー展開になるので、コメディ成分がしばらく減ります

12話

愛用の装備をしっかりと着用したのを確認し、忘れ物は無いかをチェックする。

冒険者は危険と隣り合わせの商売だ。

準備の入念なチェックは、幾らやってもやり過ぎという事はない。

準備に不足は無い事を確認し、俺は勢いよく立ち上がる。

「よし、行くか！」

俺は同じく準備を終えた三人を見回すと、威勢よく声を掛けた。

「……ん、こっちは問題ない、何時でも行ける」

「私も何時でも行けますよ。今日は気分が良いので、極上の爆裂魔法を放てるでしょう」

ダクネスとめぐみんの、どことなく嬉しそうな返事を聞きながら、俺は屋敷の玄関のドアに手を掛けて……。

「カズマってばどうしちゃったの？　昨日の夜、私が寝ちゃった後に何があったの？」

そんな不思議そうなアクアの声を聞きながら、冒険者ギルドへと……！

「……今日はもう帰ろうか。また明日から頑張ろうぜ」
「「早い！」」
冒険者ギルドに着いた俺が、ドアを開けて開口一番に出した提案は、ダクネスとめぐみんによって却下された。

「ええー……。私はカズマに賛成よ。帰りましょう、帰りましょう。今日は混み混みだし帰りましょう。そして、帰ってお酒を飲んで、また明日から頑張るの」
「おっと、気が合ったなアクア。そうしようか。今日はもうモンスターは売り切れてるよ」

「コラッ、帰るな！　モンスターはいつも通り平常運転だ、仕事は幾らでもある、とっとと行くぞ！」
帰ろうとした俺とアクアがダクネスに首根っこを掴まれた。

俺は、しょうがないとばかりにため息を吐きながら。
「……何でこんなに人が多いんだよ……」
仕事を求めて掲示板に群がっている、大量の冒険者達の姿にうんざりして言った。

大量の税金を納め、懐が寒くなった冒険者達。
それらが目を血走らせて仕事を求めていた。
「山に巣を作った、ワイバーン狩りに行く人はこちらです！　現在、バインドが使える盗賊と、空の敵という事で、狙撃が可能なアーチャーなどは取り分が大きいですよー！　強敵ですが、実入りは大きいですよ！　参加者あと六人です！」

「森に昆虫型モンスターが大発生してまーす！　大量にいるので、

こちらも人数を必要とします！　数十人による大規模な討伐となります、職不問、レベル不問！」

「平原にも草食型のモンスターが大量発生してますので、そちらの方もお願い致しますね。放っておくと、彼らを餌にする大型のモンスターが集まってきます、その前に駆除を願います。現在ギルドでは、様々な支援物資を無償で提供するキャンペーン中です！　討伐報酬も普段より上乗せです！　この機会に頑張ってお仕事してくださーい！」

あちこちでそんな声が飛び交い、人がバタバタと駆けて行く。
今まで冒険者達がゴロゴロしていた分、モンスターに安全だと判断された街周辺には、かなりのモンスターが住み着いてしまっているらしい。
贅沢に慣れてしまった冒険者達は、元の生活を取り返そうと必死で仕事を探していた。

「……よし、俺達も大規模なモンスター討伐に参加するか」
「是非ともっ！！　是非とも行きましょう、大規模狩りに！」
俺の呟きにめぐみんが鼻息荒く賛同する。
きっと、モンスターの群れのど真ん中に、爆裂魔法を叩き込みたいのだろう。

「私としては、大物の強敵の方がいいな……。大物のモンスターの重い一撃を食らって倒されて、それでも何度も何度も立ち向かい……痛たたたっ！　な、何をする、めぐみん、髪を引っ張るのは……っ！」
ダクネスが途中まで言い掛けて、めぐみんに髪を引っ張られて妨害された。

今日のダクネスは、討伐に気合を入れている為か、長い髪を戦闘の邪魔にならないように、肩の辺りから先を三つ編みにし、左肩から前に垂らしていた。

そして、その三つ編みは早速めぐみんのおもちゃにされている。

「この私の爆裂欲を邪魔するだなんて、なかなか良い根性してますね。ダクネスは昨夜、違う方の欲を満たしていたんでしょう？　なら今回は私に譲るべきではないですかね！」

「ままま、待って……！　違う欲なんて別に満たしては……！」

そんな二人は放っておき、俺はアクアと二人、掲示板の依頼を確認。

美味しいと思える部類の依頼はあらかた持って行かれている。

というか、他冒険者達がこれだけ頑張っているのだ、もう俺達は頑張らなくてもいいのでは無いだろうか。

と、混雑するギルド内で冒険者達に各種支援物資の供給をしていた職員が、

「皆さん、森に大発生したモンスター討伐、頑張ってくださいねー！　今年の夏を快適に過ごせるかどうかは、皆さんの手に掛かっています！　是非とも増えすぎたモンスター駆除にご協力を……！」

冒険者達に大声で、そんな激を飛ばしていた。

「……なあ、夏を快適に過ごすのと、モンスター退治がどう関係あるんだよ」

俺の疑問にアクアが言った。

「？　そんなの、モンスターが増えたら街の人達が近場の森で仕事が出来なくて困るからでしょ？」

「いや、そりゃ分かるんだがな、そんなの夏に限らず何時だって困

るだろ」

そんな俺の言葉に、めぐみんが。

「蝉です」

ポツリと一言、忌々しそうに言ってきた。

蝉。

あのミンミン鳴く、夏の風物詩はここにも居たのか。

「そう。モンスターが森に蔓延っていると、蝉取り業者が仕事が出来なくて困るのだ。蝉取り業者が仕事が出来ないと言う事は、それは当然蝉が街まで飛来する。すると、当然街が蝉の音で喧しく、快適な夏を送れないと言う事だ」

ダクネスが、めぐみんに三つ編みを揉まれながら真面目な顔で言ってくる。

「蝉が何だってんだよ。夏の風物詩だろ。あいつらは長く土で暮らした後、夏の間だけ短い命を振り絞って精一杯鳴くんだぞ。ちょっとばかり五月蝿いからって、可哀想な事すんなよ。そんなのは人間のエゴだし、その考えは俺は嫌いだな。……だから、俺はそんな蝉達をそっとしておく為、家に帰って寝るとする」

言いながら、帰ろうとする俺の襟首を、ダクネスとめぐみんが同時に掴んだ。

「そう言えば。カズマはこの世界に詳しくないあんぽんたんだって事を忘れてたわ。いい事カズマ。この世界の蝉達はね、それはもう気合が入っているの。日本の蝉の命は一週間。でも、この世界の蝉は激しく生きる為に、その生命は5日と保たないと言われるわ」

アクアが、腕を組みながら説明しだした。

激しく生きるって言ったって。

「アレか、どうせここの蝉は何かあるんだろ？　飛び立つ時に引っ掛けていくオシッコが強烈に臭いだとか。蝉だってオシッコくらいするだろ、命が短いなら尚更そっとしといてやろうぜ」

そんな俺の言葉に、めぐみんとダクネスが顔を見合わせる。

こいつは本気で言っているのかとでも言うように。

「あのね、カズマ。この世界の蝉は、日本の蝉とは大きく違う所が二つあるわ。一つは、蝉の声量がとても大きい事。そうね、日本の蝉の二倍ぐらいだと思ってちょうだい」

あの喧しいのが二倍の声量。

いや、それは確かに迷惑だが……。

「あと……。この世界の蝉は夜だろうと鳴き続けるわ」

超迷惑。

街の近くの森の中。

今までならば、こんな所に住み着くモンスターなどとっくに駆除されていたらしい。

が、ここ最近の冒険者ニート化問題により、何処からともなくモンスターが住み着いた。

そして現在。

「では、防御に自信がある前衛職の方は、モンスター寄せのポーションを体に塗ってくださいねー。皆さん、相手は格下の昆虫型モンスターばかりとはいえ、数が多いので油断はしない様にお願いします！」

多くの冒険者達を従えたギルド職員が、森の中心部にてアナウンスを行なっていた。

大規模狩りと言うらしい。

数が増えすぎて一パーティでは討伐が困難になったモンスターの群れを、ギルド職員指揮の元、多くの冒険者パーティが寄り集まって退治する。

日頃こんな所には出張ってこない職員だが、こういった、統率する者が必要な場合には出てくるそうな。

と言うのも、冒険者と言うのは協調性がない自由な連中が数多く、職員が指揮しないと必ず何か揉め事が起こる。

例えば、そう。

「私が全てのモンスターを引き受ける！　ポーションを全部寄越せ！」

「ダメですよ、これは単にモンスター寄せってだけでは無いんですから。大量に塗りこむと、モンスター以外の生物にまで攻撃を喰らいますよ」

「ぜ、是非とも望む所ではないか！」

こんな奴とか。

「おい変態、ギルドの人に迷惑掛けるな。お前はウチのパーティの連中だけ守ってくれればいいから」
「ああっ！　髪を、髪を引っ張るのは……！」
モンスター寄せポーションを全部寄越せと駄々をこねるダクネスを、三つ編みを引っ張りズリズリと連行していく。
他の冒険者は俺達を合わせて二十人ほど。
大体が四人か五人パーティの様だ。

そんな連中の中でも、一際頑強そうな連中がポーションを体に塗り付けている。
それに習ってダクネスも、支給されたポーションを体に……。

「……お前って奴は……。ちゃんとギルド職員の話を聞いていたか？」

ダクネスが、職員から数本多めに貰ってきたらしいポーションを、自分の体に振りかけていた。
呆れたような俺の言葉に、だがダクネスは、
「フフッ。お前に散々働けだの言っておきながら、自身が矢面に立たないでどうする。クルセイダーは盾職だ。私が全てを引き受ける。お前は安心して暴れてこい！」
そんな、昨日の夜は何だったのかとでもいうような格好良い事を宣言し、自信たっぷりの表情と共に不敵に笑った。

「……言いますねダクネス。なら私は、誰よりも多くのモンスターを討ち取って見せますよ。カズマ、見ていてください」
そんなダクネスに対抗でもするかの様に、めぐみんも自信あり気に微笑する。

となると、この流れだと当然……。

「……？　どしたん？　なんで私を見ているの？」

「あれっ？　……いや別に。こういった時って、大概お前が真っ先に調子に乗って何かやらかすのにって思ってな」

珍しく大人しいアクアに言うと。

「あんたねー、私を何だと思ってるの？　私にだってちゃんと学習能力ってものはあるんです。見てなさいな。きっと調子に乗ったこの二人は、この討伐の終盤にはロクな事にはならないわ。……私は学習したの。調子に乗るとロクな事にはならないんだって」

「！？」

俺は思わず、自分の耳を疑った。

アクアが……。

この、何かすれば余計な厄介事を引き起こし、何もしなくてもアンデッドにたかられるこのアクアが……！

俺はアクアの成長に、何だか目頭が熱くなり……。

「！？　ど、どうしたの！？　一体どうしたの！？　ねえ、カズマはどうして泣いてるの？」

俺は、不安気な声を出すアクアから視線を離し、仲間の成長に感動して、そっと目頭を押さえていた。

そんな俺とアクアのやり取りは聞こえなかったのか、ダクネスとめぐみんが不思議そうにこちらを見る中。

「冒険者の皆さーん！　モンスター、第一陣！　集まって来ましたよ！　さあ皆さん、殺虫剤も大量に用意してあります。では、お願いします！」

ギルド職員の声が轟いた。

迫り来るモンスター達。

耳障りな羽音を立てて、敵寄せのポーションを被った連中に対して突撃を敢行している。

「うあー！　ちょっ……！　数が多い！　援護を頼むー！」

それは、とある前衛冒険者の叫び声。

見れば、飛来してきた子犬大のカブトムシみたいなのにたかられていた。

子犬ほどの大きさとは言え、それは十分な脅威と言える。

飛んでいるカブトムシの角は、走っている車のフロントガラスに突き刺さる事もあると聞く。

どうせこの世界のカブトムシも、気合が入っているだか何だか知らないが、きっとロクでもないのだろう。

と、そんな思いで見ていると、飛来してきたカブトムシ達が勢いはそのままに。

その小さな体に回転でも掛けるがごとく、角を捻ってえぐり込むように……！

「あふっ！？」

一人の冒険者が、その突撃を腹に受けて悶絶する。
金属を打つ甲高い音。
金属鎧を着込んでいたその冒険者の腹には……。

「いってえええええ！　畜生、少しだが腹に刺さってる！　気を付けろ、安物の金属鎧だと穴が開くぞ！」

痛みを堪え、涙声で叫ぶ冒険者の鎧の腹の部分には、カブトムシが深々と突き立っていた。
なんて攻撃的なカブトムシ！
その冒険者の鎧に刺さったカブトムシを、慌てて他の冒険者が抜いてやる。
それと同時に、腹にダメージを受けた冒険者の体が淡く光った。

「うおっ……！？　……おおっ、回復魔法か……！」

アクアがヒールを掛けたのだろう、その冒険者が痛みが無くなった事に驚きの声を上げた。
続いて、盾代わりとなっていた冒険者達の体が、ほんわりと淡く輝き出す。
アクアが、そこかしこの冒険者達に支援魔法を掛けまくっているのだ。

どうしたんだ今日のアクアは、なぜこんな出来る女に……！
俺が感動と驚きに包まれていると。

「二十匹までいける！　二十匹までいけるっっ！！　もっと、もっとおかわりを！」
次々飛来するモンスターから、盾代わりとなっている冒険者達の中央で、ウチのクルセイダーが一番多くの攻撃を受け止め、嬉々と

してそんな事を叫んでいた。
先ほどの宣言通り、今日のダクネスはちょっと頼りになるし格好良い。

仲間達の思わぬ活躍。
俺もこうしてはいられない。
ギルドから支給された、竹筒に詰められた、ケツから棒を押して、先端から霧状に放出するタイプの殺虫剤。
それらを向かいくる昆虫型モンスターに散布した。
他の冒険者達も、盾職の連中を援護するように次々と散布を始める。

飛来するのはカブトムシだけではない。
クワガタみたいなヤツや、カマキリみたいなヤツ。
他にも様々な昆虫型モンスターが飛来してくるが、どれも軒並み体がデカイ。
たかが虫だっと思っても、腐ってもモンスター。
そこかしこに負傷者も出る中で、アクアが頑張って治療していた。
それも、調子にも乗らず、黙々と。

俺がそんなアクアを援護しようと殺虫剤を振り撒いていると、俺の服の端がクイクイと引っ張られる。

それは、赤い顔をしてモジモジしているめぐみんだった。

……？

俺がめぐみんをジッと見ていると、めぐみんは恥ずかしそうに。
「……その。もう我慢が出来ません。その……！　ズルいです。……ダクネスだけ、ズルいです……」
俺の服の裾を掴んだまま、照れるように、恥ずかしそうに。

めぐみんは、片手で杖を握りしめ、その顔を俯かせた。

……ピンと来た。

漫画やらの鈍感な主人公じゃないんだ、ここで、え？　何が？
なんて野暮ったい事は聞き返さない。
つまり、ダクネスとだけキスしといて、めぐみんとはしていない事を気にしているのだろう。
我慢できないだとか、ダクネスだけズルいとか、つまりはそういう事だ。
周りの冒険者達は昆虫駆除に忙しく、誰もこちらに注視してはいない。
こんな時に何やってんだとか、不謹慎だとか、そんなヌルイ事を言っていたら一生童貞だろう。

そう、俺達はいつ命を落とすかも分からない冒険者。

俺はゴクリと喉を鳴らし、若干緊張しながらも、めぐみんに頷くと、我慢する必要なんてないとばかりに言った。
「俺達はいつ果てるとも分からない冒険者だ。後悔しないよう、やりたい事は何でもやって、日々を精一杯生きればいい。遠慮するな、ドンと来い！」
俺の言葉にめぐみんが顔を上げ、パアッと表情を輝かせた。

そう。これが、友達以上恋人未満の関係から、一歩進んだ瞬間であり
「『エクスプロージョン』ッッッ！」

俺達がいた森の、かなりの上空。

そこに轟く轟音と、目もくらまんばかりの輝く閃光。
それらと共に爆風が吹き荒れると、そこに残っていたのは地に倒れ伏した冒険者達とダクネスの姿。
小さな昆虫型のモンスター達は、その衝撃波の余波に耐え切れなかったのか、全て地に転がって動かなくなっていた。
辺りにうめき声が聞こえる中、アクアだけはどう回避したものか、そんな地に転がる人達にせっせと回復魔法を掛けて回っている。

めぐみんが、俺と共に地に転がったままでポツリと言った。

「めぐみんは、レベルが上がった」
「バカ野郎！」

俺はムクリと起き上がると、恍惚とした表情で満足気に仰向けに寝転がっているめぐみんを起こしてやる。

こいつが我慢出来ないだとか言っていたのは、ただの爆裂欲の方らしい。
ダクネスだけが攻撃を受けまくり、自分の欲求を満たしていたのが不満だったようだ。

勝手に盛り上がって損した。
めぐみんの手を取って、深々とため息を吐きながら、引っ張り起こす俺に。
「……では今晩。部屋で待っていてくださいね」
めぐみんが、耳元でボソリと囁いた。
「！？」

慌ててめぐみんを振り返るが、めぐみんはダクネスやアクアの元へとスタスタと歩いて行ってしまう。

……たった一言で、こう、モヤモヤと、ドキドキとさせてくる所が女ってズルい。

俺も皆の元へと近づくと、ダクネスが起き上がろうとしているが、鎧が重く、苦戦中の様だった。

そんなダクネスが、起き上がろうとジタバタしながら。

「……なんだろう、体がチクチクするんだが」

言って、そのまま起き上がろうと……。

俺はダクネスの鎧を見て、ギョッとしながら後ずさる。

「おま……っ！　鎧！　鎧に、蟻がたかってる！」

見れば、地面に転がったダクネスは、そこら中を蟻にたかられていた。

職員の言葉を無視して敵寄せポーションを大量に浴びたせいだろう。

蟻にたかられているダクネスから後ずさる、俺やアクア、めぐみんの視線を受けながら、

「ああっ……！　ちょっ、カズマ、頼む、なんというか、痒い！　蟻が鎧の中に侵入してきているらしい、私に殺虫剤を振り掛けるか、クリエイトウォーターで水を……！」

自分では鎧の中がかけず、ジタバタしているダクネスはそんな悲鳴を上げていた。

もう面倒臭いし自業自得なので放っておく。

やがて、転がっていたギルド職員も、荒くれ冒険者達のこんな行動には既に慣れているのか、文句を言う事もなく起き上がる。

「……皆さんご苦労様でした、ではそろそろ第二波が参りますので

……」

……第二波？

淡々とした職員の言葉と同時に、大量の虫の羽音が聞こえてきた。
それは、森を揺さぶるような爆裂魔法の衝撃と振動で、木々の虫達を怒らせてしまったのだろう。

「……これはあかん」
「わあああああ、カズマさーん！　私、凄く嫌な予感がするんですけど！　するんですけど……っ！」

今回は珍しく大人しかったアクアが、不安が入り混じった表情で叫びを上げた。
その予感は的中したらしく、縄張りを荒らされて怒った、数百を越える虫達が……！

「退避、退避ー！」

俺の叫びに辺りの冒険者達とギルド職員が、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑った。

◆◆◆

「……うっ……。ぐずっ……。私、今回は真面目に頑張ってたのに……。調子にも乗らずに大人しくしてたのに……」
ギルド職員や他の冒険者達と、街に帰る道すがら。
虫にたかられて髪を乱し、泣いているアクアを引き連れて、俺は

深々とため息を吐いた。
一人、モンスターの群れに爆裂魔法を叩き込めてご機嫌なめぐみん。
いや、他の冒険者達も、最後は危険に晒されたものの、比較的安全に大量のモンスターが討伐された。
その多額の討伐報酬が均等に分け与えられる事となり、彼らもご機嫌な様子だった。

そして。

「んっ……。んん……っ。ハア……ハア……カズマ……。カ、カズマ……、新感覚だ……。新感覚だぞコレは……」
未だに鎧の中は蟻にたかられているのか、赤い顔でバカな事を口走っているダクネスが、先ほどまでは痛痒いと半泣きになっていたのに、今では満悦そうだった。
先日の俺の胸の苦しさとトキメキを返して欲しい。

そんなこんなで、無事ギルドへ帰り着いた俺達は、他の冒険者達と別れて受付に。
後は報酬貰って帰るだけだ。
とっとと帰って、ダクネスを風呂に放り込んでやろう。

……そして、俺は最後に風呂に入り、今日は念入りに体を洗っておこうか。
別に、今夜部屋に来るとか言ったためぐみんの言葉にちょっと期待している訳ではない。

「ご苦労様でした、こちらが討伐報酬になります。まだまだモンスターは蔓延っておりますので、明日以降もぜひ、ご協力くださいね！」

そんな受付の言葉を聞き流し、俺は今夜の事を考えながらソワソワと……。

「あの……。あなたが、サトウカズマ様ですか……？」

ソワソワと……。

……今夜の事を考えて挙動不審な行動を取っていた俺に、突然声が掛けられた。

そこに居たのは落ち着いた大人の雰囲気を醸し出す、特徴ある泣きぼくろの綺麗な女性。

ダクネスには及ばないものの、肉付きの良い、男好きする体をしている。

黒い髪を肩口で切り揃え、随分と色気のある黒い瞳で俺に流し目を送ってくる。

ただそれだけで、何だかドキリとしてしまう。

その女性はプリーストなのだろうか。

ゆったりとした白い神官服みたいなローブを纏い、腰にはメイスを下げていた。

その女性から怪しげな大人の魅力を感じるのは、その泣きぼくろの所為なのか。

それとも、俺の周りの人間に、大人の魅力がある女性が皆無な為なのだろうか。

その女性は、優雅に俺に一礼すると。

「お噂はかねがね……。貴方様のご高名は伺っております。わたくしはセレナと申します。……どうか、貴方様のパーティに入れて頂く訳には参りませんでしょうか？」

12話（後書き）

月末までバイト中につき不定期更新。

ネット代稼いでまいります。

そんな事情に付き、月末までは余裕があるまで感想返しは活動報告にて行います、その分更新出来るだけ早めに。

申し訳ない！

13話

「はあー？　いきなり現れて何言ってるの？　なんですか？　なんですか？　このパーティには私という優秀なアークプリーストが既にいるので、他のプリーストなんて要りません。分かったら、あっちへ行って。ほら、あっちへ行って！」

ギルド内に、憤るアクアの声が響き渡った。

いきなり現れたプリーストに、自分の存在意義が取られないかと警戒している様だ。

セレナと名乗った女性は、そんなアクアを全く相手にする事は無く。

「サトウカズマ様。どうか、このわたくしを貴方様の従者の一人として傍に置いて頂くわけには参りませんか？　このわたくしは、貴方様の足を引っ張る様な事は決して致しませんとも」

言いながら、セレナと名乗ったその女性はニコリと笑顔を浮かべてみせた。

セレナのその言葉に、どこかピリピリしながら食って掛かろうとしていたためぐみんが、ビクッとして無言でダクネスの影に隠れる。

まさに今、盛大に迷惑を振り撒いてきた帰りなので何も言えなくなったのだろう。

自然と、アクアとめぐみん、そしてセレナの視線が俺へと向けられた。

まあ、俺が決めろとでも言うのだろうが。

と、言うか。

「……あんた、魔王の手下か何かだろ。こんな突拍子もなく仲間になりたい？　俺の悪評を知っていたら、ウチのパーティに入ろうだなんて輩は居ない。数多の魔王の幹部討伐に関わってきた、優秀なこの俺を危険視した魔王が、俺を始末しようと送ってきた暗殺者……」

「『セイクリッド・ハイネスヒール』！」

セレナに詰問していた俺の言葉を遮って、突然アクアが魔法を唱えた。

俺の体が淡く光り、やがて収まる。

確か、傷はおろか、体に悪影響を及ぼしている物なんかをまとめて治してしまう、強力な回復魔法だ。

しかし、当然の事だが今の俺はどこにも傷なんて負ってはいない。

「……おい、今なんで回復魔法を掛けた」

「最弱職でステータスも低くてレベルもそんなに高くないカズマが、魔王に狙われる妄想に取り憑かれておかしくなったのかなと思って」

トレードしてやろうか。

「そんなにお疑いになるなんて……。カズマ様、貴方様は過小評価されているのです。数多の幹部や賞金首を打ち倒し、若くして財を成した偉大なる冒険者。あなた様はきっと、魔王に対抗するべく神に選ばれた勇者様なのではないかと……」

セレナが両手を組んで、祈るようなポーズで目を閉じながら俺に言った。

魔王が絶賛侵略中のこの世界に、移民として、神であるアクアに送り込まれた俺。

何というか、一応合ってる。

「『セイクリッド・ハイネスヒール』！」

再び響いたアクアの声。

それと同時に、セレナの体が淡く光る。

「……なぜ、私に回復魔法を？」

「ウチのカズマを勇者だなんて、頭がおかしい人なのかなと思って」

……。

「ええっと。とにかくだ、本当に不本意ではあるんだが、一応こいつがウチのパーティのプリーストなんだよ。悪いが、今現在パーティメンバー募集はしていないんだ。他を当たってくれないか」

「痛い痛い！　カズマさん痛いんですけど！　痛いんですけど！！」

アクアの耳を引っ張りながら言う俺に、セレナが笑みを絶やさず言った。

「……仕方ありません。今日はこれで失礼します。でも、カズマ様。わたくしはあなたのパーティにて、きっとお役に立てますよ？」

自身たっぷりにそんな事を言いながら、セレナと名乗ったプリーストはその場から堂々とした態度で去って行った。

そんなセレナを見送りながら、俺は自分のメンバーを見る。

先ほどまで俺に引っ張られていた耳を触りながら、痛そうに涙を浮かべるアクア。

セレナが去って、ホッとため息を吐きながらダクネスの影から出てくるめぐみん。

そして……。

「……お前、何モジモジしてんの？」

「こ、こんな公衆の面前で、実はこの鎧の下は、凄いことになっていて……。先ほどから、中に侵入した蟻達が私の体をチクチクと……。カズマ、衆人監視の中で蟻にたかられ興奮している私は……！　こんな醜態を晒している私は……、ああっ、私は貴族の令嬢なのに……っ！！」

ダクネスは背徳感満載の切なそうな表情で頬を染め、モジモジしながら潤んだ瞳でこちらを見ている。

そんなダクネスを見ながら。

「……俺、さっきの人追いかけて来てもいいか？」

漲っていた。

今は、そろそろ日付が変わろうかという時間帯。

念入りに体を洗った俺は、ソワソワしながら自分の部屋に居た。

そう。

俺は今、今晩部屋に来ると言っていためぐみんを待っていた。

なんだろう、何する気だろう。
ダクネスとアレしちゃったから、アレ止まりだろうか。
いやいや、ここは盛り上がってしまって一線越えちゃっても仕方ないだろう。
というか、コレもう一線越えちゃうしかないだろう。
めぐみんなら、何だかんだ言いながら流されてくれそうな気はする。
というか、邪魔さえ入らなければ行くとこまで行ってしまえばいいと思われる。
いや待てよ、あんまりがっつき過ぎると嫌われたりしないだろうか。

いやいや、そんなん言いながらも、女って奴は何もしないでおくと意気地なしだとか、女心を察してよとか後で言い出すんだよ、でもこっちが強引に行こうとすると一歩間違えれば犯罪者。

なんなの？
なんでたった一言で、こんなに悩まされなきゃいけないの？
あああもおおおおおおおー！

布団の中でゴロゴロと転がって悶々としていると、やがて部屋のドアがノックされた。

思わず、嬉しさのあまりに声を上げそうになる。
落ち着け、がっつくと嫌われる。

俺は深く深呼吸すると、ドアの向こうに声を掛けた。

「ど、どうぞー」

緊張で声が裏返りそうになるが、それを何とか押し留め。
そんな俺の声を聞き、ドアがゆっくりと開けられた。

「寝てたー？　ちょっと気になって来たんですけど……痛っ！　ちょっと何すんのよクソニート！　なんで部屋に来ただけで枕投げられなきゃいけないの！？」

そこに居たのはアクアだった。

「こんな時間に何しに来たんだよ！　とっとと寝ろよ、明日も討伐に行くんだからな！　俺はもう眠いんだよ、用事なら明日にしてくれ！」
「何よ、普段は夜中まで意味もなく起きてたり、フラフラ夜遊びしてるダメ人間のクセに！　……ちょっと、昼間の件で気になってたのよ。用事はすぐ済むわ」

アクアが、怒りながらも普段とは違う真面目な顔で言ってくる。
そんなアクアにちょっとだけ気圧され、俺は布団から頭だけ出した状態で。

「よく分からんが、手早く済むならまあいいんだけれども」

そんな俺の言葉にアクアは右手を掲げると、何事かを高らかに唱えて部屋の窓に向けてその手を突き出す。

それと同時に、一瞬だけ部屋の窓が淡く輝き、やがて何事も無かったかの様に元に戻った。
「窓に強力な結界を掛けておいたからね。昼間、カズマが自分で言っていたでしょ？　魔王の手先がカズマを狙ってどうこうって。カズマの妄想だとは思うんだけど、念の為に各窓に結界を張っている

の。屋敷の外には通常のヤツを。窓には強力なヤツを。これで、何人たりともこの屋敷には侵入できないわ」
そんな事を言いながら、アクアが笑った。

ドキドキしながら待っていた所にアクアが現れ、ついイライラして枕を投げた自分が恥ずかしくなる。
コイツはコイツなりに、色々と考えてはくれているらしい。
確かに、昼間のプリーストは何の脈絡も無くいきなり仲間になりたいだとか言っていた訳だが。
めぐみんとの事で、そんな事はすっかり忘れていた。
いや、俺も本気で魔王の手先だ何だと言っていた訳ではないのだが。

「それじゃ、私も部屋に戻るわね。ちっとも眠くないからまだ寝ないけれども。おやすみカズマ」
「おう、おやすみ。悪かったな、眠くてイライラして枕投げて。あっ、枕取って枕」
俺はアクアから自分の枕を受け取ると、そのまま部屋を出て行くアクアを見送る。

「……おや？　こんな時間にこんな所でどうしました？　アクアはまだ寝ないのですか？」
廊下の方から聞こえてきためぐみんの声。
「ちょっと気になって、各部屋の窓に結界張って回っていたの。めぐみんこそどうしたの？　枕なんて抱えちゃって、カズマに何か用事？」
そんなアクアの声も共に聞こえる。

今、枕なんて抱えちゃってって言ったか。

言ったよな。
行ける……！
今夜のめぐみんはお泊りコースだ、今夜はどこまでだって行ける……！

「えっと、ええと……。寝られないので、誰かの部屋でちょっとゲームか何かで遊ぼうかと……。ほら、カズマはニート気質があるので遅くまで起きているではないですか、なので……！」
「ほう。枕なんて抱えてカズマとゲーム？　……ほう、ほう……」
「いやその……！」

めぐみんは、廊下でアクアに追求されている様だ。
めぐみん頑張れ、何か上手い言い訳を……！

「なるほど、カズマと枕投げでもするつもりね！　私も、ここに顔出した瞬間にカズマに枕投げつけられたわ！　枕投げが最近のトレンドなのかしら。……でも止めといた方がいいわよ、今日のカズマは気が立っているわ。目が血走っていて攻撃色だったもの、めぐみんも、今夜は眠いから明日にしろって怒られちゃうわよ？　寝られないのなら私の部屋でゲームしましょう」

ちょっ……！

「ええっ！？　いえその……！　ええと……。……は、はい……」
そんな、めぐみんの諦めたかの様な声。

クソッタレー！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌朝の冒険者ギルド。

そこに入ると、何だかいつもとは様相が違っていた。

「では、討伐に出る方はこちらに並んでくださいね。効果が長時間持続する支援魔法を、無料で掛けさせて頂きますので……」

ギルド内には列を作っている冒険者達。
その先頭には、一人一人支援魔法を掛けていくセレナの姿。

冒険者達に、無償で支援魔法を掛けているらしい。

基本的に、プリーストというクラスは需要の割になり手が少ない。
なので、こういった支援魔法の無償サービスは、プリーストがいないパーティにとっては実にありがたい事だろう。

「あら、カズマ様ではありませんか。どうですか？　支援魔法のサービスを受けていきませんか？　支援魔法は、宗派が違えば重複します。わたくしは、そちらのプリーストの方とは宗派が違うと思いますので、きっと重複が可能ですよ？」
セレナが俺の姿に気付き、ニコリと笑って声を掛けてきた。
宗派が違うとか、よく断言出来るな。
というか、断言出来るのか。
アクアを見れば、どこからどう見てもアクシズ教徒にしか見えないもんな。
しかし、無償奉仕か。

何だか初めて、まともなプリーストっぽい人を見た気がする。

「ちょっとあんた、ここで勝手にそんな事されると、私達他のプリーストに迷惑なんですけど。プリーストのありがたみが薄れるので、同業者のお仕事奪わないで頂けます？」

ウチのパーティの、チンピラ……。ではなく。

ウチのパーティの一応は聖職者が、無償奉仕するセレナに因縁をつけだした。

セレナは、チラリとアクアを一瞥すると。

「その様な言動は慎んだ方がいいですよ？　でないと、カズマ様の評判が落ちる事になります。カズマ様に悪評が多いのは、あなた方の所為でもあるのではないですか？　……それに、プリーストが無償奉仕をして何が悪いのですか？　プリーストのいないパーティに救済の手を差し伸べる。その行いは、悪い行いなのですか？」

「悪くないです」

セレナの正論に、自称女神が同意した。

「別に、あなたに無償で支援魔法を掛けろとは言いません。私よりもプリーストとしての力がありそうなあなたですが、今まで他の冒険者に支援魔法を掛けなかった事にも何も言いません。……ですが、私の行いは誰に恥じることもない、正しい行いのはず。それを止める権利はあなたにはありませんよ？」

「はい」

完全に言い負かされたアクアが、俯きながらトボトボと。

「……負けたんですけど……」
女神がプリーストに言い負かされてどうする。
俺達がセレナの方を見ていると、俺の視線に気づいたセレナが、ニッコリと微笑んだ。
……どう考えても向こうの方が聖職者っぽい。

……と。

「……気に入らねえなあ……」

唐突にそんな事を言ってきたのは、今度こそ正真正銘のチンピラこと、ダストだった。
ダストは何が気に入らないのか、テーブルの上にダルそうに突っ伏したまま、セレナの方をうろんな眼差しでジッと見ている。
「気に入らねえなあ……。あんな聖職者らしい聖職者、見た事ねえ。……他の連中は支援魔法一つでホイホイ心を許してやがるが、俺は騙されねえぞ。プリーストとしての腕なら、昔、俺を生き返らせてくれたアクアの姉ちゃんの方が上だろ。俺はアクアの姉ちゃんを推すぜ。……気に入らねえ、気に入らねえなあ……」
この捻くれた男にとっては、綺麗な心を持った真人間というのは相容れない存在らしい。
なのに、なぜ俺なんかと仲が良いのだろうか。

何にしても、このギルド内にはちゃんとアクアを信頼している冒険者も数多くいる。
何だかんだ言って、アクアの方がポッと出のセレナよりも付き合いが長いのだ。

と、ギルド職員がギルド内の冒険者達に声を上げた。

「冒険者のみなさーん！　本日も、張り切って討伐に行きましょう！　さて、本日は少々いつもとは事情が異なりまして……」

セレナが冒険者達に支援魔法を掛け終わるのを待っていたらしい。

ギルド職員達が、普段とは違い、今日は掲示板に討伐依頼の紙を張り出す作業は行っていない。

「実は、昨夜から……。街の共同墓地周辺に、大量のアンデッド……。ゾンビやスケルトンが大量発生してまして。本日は他の討伐を中止して、これらの討伐を行なって頂きたいのです。なにせ街に近いものですから、何時住人に被害が出るか分かりません。特に、プリースト職の方は絶対参加でお願い致します！」

……共同墓地にアンデッドが大量発生……。

俺とダクネス、めぐみんの視線が、自然とアクアに向けられた。

確かウィズとの約束で、これからはマメに共同墓地の浄化をアクアが行うと……。

「なに！？　どうしてそんな目で私を見るの！？　私、ちゃんと週一ぐらいで墓場の浄化に行ってるから！　今回は私、手抜きしてないから！」

「……お前には、手抜きの前科があるしなあ……」

アクアの必死の弁解に、疑惑の視線を送る俺。

コイツは以前、マメに墓場に浄化に行くのが面倒臭いと、墓場全体に神聖な結界か何かを張った。

その結果、墓場に留まれなくなった悪霊達が街に蔓延り出した事があったのだが……。

「ねえ、皆そんな目で見ないで！？　私、今回はちゃんと仕事して

ましたから！　嘘じゃないですから！　いいわ、見てなさいな！
今日はアークプリーストの本気を見せてあげるわ！　ゾンビやスケルトンなんて私一人で十分よ！」

アクアが、開き直ったかの様にギルド中に響く大声でそんな事を宣言した。

誰かが叫んだ。
「なんじゃこりゃー！」

共同墓場。
そこは金の無い人間や、家族がどこに居るのかも分からない冒険者などが眠る墓地。
街の郊外にあるその大きな墓地は……。

百や二百ではきかない大量のアンデッドでひしめいていた。

予想を越えるアンデッドの量に、他の冒険者達も顔を引きつらせて怖気づく。
いや、怖いのではない。
現在の天気は曇り。
だが、曇っているとはいえ、昼間のアンデッドモンスターなど、恐れるに足りない。

足りないのだが……。

「……な、なあ……。帰っていいか？」

「ダ、ダメよカズマ。私だってこの異臭で泣いて帰りたいのは山々だけれど、今から私の格好良い所を見せつけるの。そして再び冒険者の人達に、ああ、やっぱりアクセルの美人プリーストと言ったらアクアさんだよなーと言わせるのよ」

再び言わせるとか、お前そんな事言われた事ないだろ。

と言うか、臭い。

物凄く臭い。

この頃暖かくなってきたせいか、ゾンビの放つ異臭がエライ事になっていた。

「しょうがない、行けアクア。お前が突っ込んでいけばアンデッドは皆お前の方に群がっていくだろう。そこを広範囲の浄化魔法で蹴散らしてやれ」

「ええっ！　アンデッドには強い私も、流石に夏間近のアンデッドにたかられるのは勘弁して欲しいんですけど……」

その臭気に怯むアクア。

「では私が代わりに」

そう宣言して、ソワソワしながら爆裂魔法の詠唱を始めようとするめぐみんを、ダクネスが後ろから捕まえた。

「よし、ダクネスはそのままめぐみんを押さえておいてくれ。墓ごと消し飛ばされちゃ適わん。それじゃアクア、行くぞ！」

ここ最近贅沢三昧して弛んだ冒険者達は、汚れ仕事などまっぴらだとばかりに、誰もゾンビの群れに近づこうとはしなかった。

遠巻きに魔法を撃ったり飛び道具で攻撃したり。
だが、それらは芳しい効果を見せてはいない。

そんな中で、俺はアクアを連れてアンデッドの群れの中へ。
こいつらは、きっとアクア目掛けて殺到してくるはずだ。

「ちょっ、ダクネス、離して下さい！　あそこに爆裂魔法を叩き込めば、きっと凄く爽快なはずなんです！　このままではアクアがまとめて浄化してしまいます！　私の爆裂魔法の方が、絵的にもスッキリするはずですから！」
「それでは墓場もスッキリしてしまうだろう！　私は仮にも神に仕えるクルセイダー、墓荒らしは見過ごせない！」

めぐみんとダクネスが揉み合っている間に、俺とアクアはアンデッドの群れに近づいた。
アクアの、アークプリーストとしての腕だけは認めているこの街の冒険者達が、俺とアクアの援護をすべく、武器を手にアンデッドへと挑発を始める。
だが、そんな挑発はアンデッドに絶大な人気を誇るアクアの特異体質の前には……！

「……あれ？」
「……こっちに来ないんですけど」

アンデッドモンスターの群れは、攻撃を仕掛けた冒険者にのみ反撃を行なっている。

「あれか、とうとう辛うじて残っていたお前の神様っぽさにも陰りが見えてきたって事か」

「アンデッドの前にあんたを成敗してやろうかしらクソニート。あんたその内、絶対に地獄に落ちるからね」

こちらを悔しげに睨みながら、アクアがギリギリと歯を食い縛る。

「地獄に落ちたらバニルとでも楽しくやるよ」

「悔しい！　あんたの無駄に広い交友関係が憎たらしいわ！」

とうとう掴みかかってきたアクアを適当にあしらっていると、アクアは俺に食って掛かるのを止め、やがて自分の仕事を執り行う。

腐っても女神。

トイレ神だの宴会神だのと呼ばれても、その力だけは一流だ。

この世界において、多分あらゆるプリーストよりも高い能力を保持しているだろう。

そんなアクアの力は、この街の誰もが認めている。

なにせ、蘇生してもらった冒険者もいるぐらいだ。

蘇生が出来るプリーストというだけで、本来ならば信仰の対象になってもおかしくないだろう。

そんなアクアが魔法の準備を始めるだけで、そこかしこの冒険者が安堵の表情を浮かべていく。

やがて、アクアの魔法が完成し。

「『ターンアンデッド』！」

アクアの声が響くと共に、墓地全体がアクアを中心にして白い光に包まれた。

光に触れたアンデッド達は……！

「「……あれっ？」」
俺とアクアの声がハモる。

アンデッド達は崩れ去ることもなく、ピンピンしていた。
そして、今の魔法を攻撃と受け取ったのだろう。
アクアに向かって一斉にアンデッド達が……！

「おおおお！？　アクア、アンデッド退治はお前の唯一とも言っていい長所だろ！　何とか、何とかしろよ！」
「おかしい、おかしいわ！　アレ、アンデッドじゃないかも！　ていうかカズマ、どうして私から離れるの！？　私達、パーティメンバーでしょ？　パーティメンバーでしょ！？」
いち早く離脱しようとする俺の服を、アクアが掴んで離さない。
ちくしょう離せ！

頼みの綱のアクアの魔法が不発だった事を受け、のんびりと見守っていた冒険者達も慌てだした。

そんな中。

「ターンアンデッド！」

それは、よく通るセレナの声。
そのセレナの言葉と同時に、彼女を中心に衝撃波の様な風が吹き抜けた。
それに煽られるかの如く、アンデッド達が、まるで糸の切れた操り人形の様に次々に地に崩れ落ちる。
それはアンデッド達に次々と伝播していき……。

「「「「おおおおっ！？」」」」

多くの冒険者達が見守る中。

墓地にいた大量のアンデッドは、全て動かぬ死体になっていた。

大掛かりなはずの討伐が、サクッと終わってしまった。

ギルドでは、一日仕事になる予定だったらしく、他の討伐依頼を用意していなかったらしい。

なので、今日は午後からは全冒険者達がお休みだ。

そして、臨時休業となった冒険者達は……。

「いや、あんた凄いな！　ウチのパーティに入らないか？　ウチには一人だけだが上級職がいるぜ？」

「いやいや、ウチに入ってくれよ！　ウチのパーティはそこそこ名の売れたパーティだからさ！」

「ぜひ私達のパーティに！　女ばかりのパーティだから、色々安心ですよ！」

「……いえ、その……。わたくしは、カズマ様のパーティに入りたいので……」

ギルド内の酒場の中心で、困った表情を浮かべているセレナを取り囲んでいた。

一体、なぜアクアの魔法は通用せず、なぜセレナの魔法だけが効いたのか。

そこら辺が未だによく分からないが、一つだけ分かっている事がある。

「さあ！　テーブルに置かれたこのコップに、離れた所からこの松ぼっくりを投げ入れます。するとコップの中から、ニョキニョキと……！」

とりあえず、今のお前の方向性だけは間違っている。

アクアが何かの芸を披露しようとしているが、冒険者達はセレナを勧誘しようと忙しく、誰もアクアの方を見向きもしない。

「……ニョキニョキと……。中から……最上級の天然物の松茸が……」

アクアの声が段々小さな物へと変わっていく。

「……生えて……きますよー……？　……きますよー……」

アクアは、誰にも見向きもされないまま、寂しげな表情で、コップの中にポンと松ぼっくりを投げ入れた。

するとコップの中からはニョキニョキ……と……。

「……おい、お前今それどうやったんだよ。夏に天然物の松茸が生えるとか、色々おかしいだろうが。というか、それ、もう二、三本……」

コップの中から生えてきた立派な松茸を手に取ると、アクアに後二、三本生やしてもらおうと説得するが……。

アクアは無言でテーブルに突っ伏すと、やがて、そのまま動かなくなった。
そんなアクアの頭をめぐみんが、ヨシヨシと撫でてやっている。
そんな中ダクネスだけが、テーブルの傍に立ったまま、何やら考え込む様に口元に手を当てていた。

「しかし、本当に良いのかセレナさん？　今回の討伐はほとんどあんた一人の活躍だ。それなのに、報酬を俺達だけで分けていいってのは……」

ある冒険者がセレナにそんな事を言っている。

「わたくしは聖職者です。寝る場所と、飢えないだけの食事代があれば、それで十分ですから」
そう言って、笑顔を見せるセレナを見て、冒険者達がため息を吐く。

美人でスタイルも良く、性格も良くて能力もあるプリースト。

「……」

俺はしばらくセレナの方を見ていたが、やがて無言でアクアの方を見ると、アクアは未だテーブルに顔を伏せて突っ伏したまま動かない。

「……おい、お前負けてるぞ。それでいいのか本職として」
「……ほっといて。私は、マイナーなアクシズ教の女神様よ。私はメジャーになれなくたっていい。数少ないマニアックな信者を

大事にするの。さっきの、ダストってチンピラが言っていたでしょう？　私の方を推してくれるって。数は少なくても、ちゃんと私を見てくれている人だっているの。だから、負けただなんて思ってなんか……」

「いやー、最初見た時から、あんたは違うなって思ってたんだよ！　どこぞのがっかりアークプリーストに比べてなんて人間出来てるんだあんたは！　金に汚くないって所が良いな！」

それは、セレナの方から聞こえてくるチンピラの声。

どうやら金に困っていたチンピラは、気前の良い報酬の分配に目が眩み、アッサリ向こうに付いたらしい。

「……あいつ、あんな事言ってるぞ」

「……ねえカズマさん。カズマさんは、最後まで私の味方よね？」

アクアが、テーブルに突っ伏して顔も上げないまま、鼻をグスグス言わせ始めた。

13話（後書き）

しばらくは重い話が続きます

14話

セレナがこの街に来て、しばらくの日にちが経った。

「セレナさん、ちょっと討伐で傷負っちゃってさ。治してくれないか？」

「ええ、もちろん構いませんとも。傷を見せて下さい」

「セレナさん、次、俺お願いします！」

「セレナさんマジ女神！」

冒険者ギルドの酒場内。

暗黙の了解でセレナ用と決められたテーブルの一角では、傷を負った冒険者達がセレナの下へと集まっていた。

それを……。

「……気に食わないわね……！」

ギルド受付のカウンター内に勝手に入り込んで身を隠して、そこから頭だけを覗かせるアークプリーストが、遠巻きに監視していた。

「アクアさん、こんな所に勝手に入って来られると困るんですが……」

ギルド職員が注意するも、アクアは一切取り合わない。

職員が俺に視線を送ってくる。

どうにかしてくれ、と。

「……おいアクア、そんな所に居ると迷惑だから。多分バレバレだし出て来いよ」

「……あの女、ギルドでの私の人気を横取りするなんて良い度胸だ

わ。本来、あそこで冒険者達を治療して癒しの女神扱いされるのは私の仕事なはずよ」

お前、今までそんな事一度もした事なかったじゃないか。

ダクネスとめぐみんは、調べたい事があると言い残して朝から何処かへ行ってしまった。

今日だけではなく、セレナというあのプリーストが来てから毎日だ。

そして俺はといえば、討伐に行かないなら夕方まで寝ていようかと、部屋でゴロゴロしていた所をアクアに襲撃された。

何の為に部屋に来たのかと言えば……。

「なあ、幾ら調べてもあのねーちゃんの弱点なんて出てこないって。もう帰って寝ようぜ」

……つまりはこういう理由である。

アクアに無理やり付き合わされている俺がうんざりして言うも、アクアは未だにカウンターから出て来ない。

「嫌よ。大体、あの女は何だかとても気に食わないの。完璧過ぎるのよ。美人でスタイルも良くて性格も穏やかで誰にでも優しい。それでプリーストとしての実力もある。あの女は完璧過ぎるわ。そう、まるで私やエリスの様な女神クラスの完璧さよ」

「突っ込まないぞ」

アクアに言いながら、俺は冒険者の治療を行うセレナを見る。

セレナは俺に見られている事に気付くと、こちらに向かって目を細めて笑顔を浮かべ、ヒラヒラと手を振ってきた。

そのセレナの周りには、取り巻きのように冒険者達がたむろして、セレナに治療してもらうのを順番待ちしている。
というか、中にはほとんど傷らしい傷もないのに並んでいる、追っかけの様な者までいた。

「ねえカズマ、お願いがあるの」

アクアがカウンターから立ち上がり、唐突に言ってくる。
そして俺に右手の人差し指を突き出すと。

「カズマのダガーで、ちょっと私の指の先っちょをチクッとやって頂戴。あの女に治療して貰ってくるわ」
「……お前自分で治せるだろ。因縁付けに行く気か。やめとけよ、何だかんだであの人は今、冒険者達に評判良いんだぞ。余計な事すると他の冒険者を敵に回すぞ？」

俺はアクアに忠告するも、頑として聞き入れない。
人差し指を突き出したままじっと立ち尽くすアクアに、俺はしょうがなくダガーを引き抜くと……。

「……おい、自分で言い出したんだろ。指動かすなよ」
「だって、やっぱりちょっと怖いんですけど。ほんの少し、血が滲むか滲まないか位の皮一枚ぐらいの傷だからね？　ちょっとよ？」

そんな事を言いながら、俺が近付けるダガーから逃げる様にチョロチョロ指を動かすアクア。
怖気づく自分の右手を押さえる様に、アクアは左手で自分の右手を包み込み、左手の指の間から右手人差し指を出す。

分かった分かったと言いながら、なぜこんな事をやらされている

んだろうと悩みつつも、俺は慎重にダガーをアクアの指先に……。

「おおっと、指が無くなっちゃいましたー。本物の人差し指はどれでしょう？」

ダガーが触れるか触れないか。

その瞬間にそんな事を言いながら、アクアが楽しげな顔で右手人差し指をヒョイと引っ込め、それを隠しながら左手の指の間からピョコピョコと……。

……。

俺は無言でアクアの左手を掴むと、ダガーの先で軽く突く。

「……ッ！　……ッ！」

ダガーで突かれた左手を押さえ、痛みで声も出せずにうずくまるアクア。

「ほら行って来い」

アクアに声を掛けてやると、アクアは涙を浮かべて恨めしそうにこちらを睨み、そのままノシノシとセレナの下へと向かって行った。

遠巻きにアクアを見守っていると、一体何のつもりなのか、アク

アはよたよたと妙な動きをしながらセレナのいるテーブルへと歩いて行く。

まずは、酔っ払いの物真似でもしながら接近する模様だ。

そして、セレナの前に並んでいた列の真ん前の冒険者に近付くと。

「すいませーん。わたしー、見ての通りの重傷者でー。か弱い女性な私に順番譲ってくれませんかしらー？」

よたよたしながら近付いたのは酔っ払いの物真似ではなく、弱った重傷者のふりをしていたらしい。

そして妙にくねくねしながら、その冒険者にアクアが言った。

くねくねしているのは妙な儀式を始めたのではなく、どうやら色気を振り撒いているつもりらしい。

顔を引きつらせたその冒険者は、

「いや、アクアさんなら傷は自分で……。……わ、分かったよ、お先にどうぞ、分かったから変な動きで威嚇するのは止めてくれよ……！」

怯えた様に言いながら、割って入ったアクアに順番を譲……

「待って下さい」

順番を譲ろうとしたその冒険者をセレナが止めた。

そしてセレナは、そのままアクアをジッと見る。

「？」

セレナはそのまま、頭に疑問符を浮かべた様な顔でキョトンとしているアクアに言った。

「なぜご自分で傷を治さないのかは、まあ良いでしょう。……です

があなたは、聖職者ではないのですか？　本来ならば傷ついた者を癒すのがあなたの役目。それが、他の傷ついた者を押しのけて自らを先に癒して貰おうとはどういうつもりですか？　聖職者として、間違っているとは思いませんか？」

「思います」

セレナにやんわりと叱られ、アクアは素直に頷いている。

当たり前だ、正論だ。

これ以上ないぐらいの正論だ。

「あなたがプリーストだから治療しないと言っている訳ではありません。苦しいのは他の人も同じです。なので、順番はきちんと守ってくださいね？」

「はい、ごめんなさい」

順番を譲ってもらった冒険者にごめんねと一言謝り、アクアはそのまま列の最後尾に並び直した。

……だから、簡単に言い負かされてどうする。

傷を押さえながらアクアが大人しく待っていると、やがてアクアの番が回ってきた。

セレナの前の席に付き、左手の傷をセレナに見せる。

「先生、通りすがりのクソニートに重傷を負わされました。この傷治ります？　それとも私、死んじゃいますか？」

左手のちんまりとした傷を見せながら、アクアがそんな事を言い出した。

セレナはその左手を取りながら、自分の片手を傷口にかざすと苦笑する。

「かすり傷ですよ、すぐ治りますから……。はい、『ヒール』。さあ、これでもう大丈夫……」

言いながら、セレナが傷口にかざしていた手をどけると、そこには癒えることも無く、なんら変わりのない傷口が。
「……？」
セレナがそれを見て固まっていると、アクアがわざとらしくさめざめと泣いた。

「先生、私やっぱり死ぬんですか！？　先生にも治せないぐらいの重傷ですか？　それとも、先生は私の事が嫌いだからわざと治してくれないんですか？　どうなんですか、先生！」

どうやら、アクアはセレナの魔法に抵抗したらしい。
そういや昔、ウィズが俺にドレインタッチを教えようとしてくれた時も、そのスキルにわざと抵抗して嫌がらせしていたな。
リッチーのスキルにすら抵抗できるのだ、プリーストの癒しの魔法ぐらいは簡単に……。

「『ヒール』！　『ヒール』！　……ど、どうしたのでしょうか、効果が……」
「先生、どうして治してくれないんですか？　まさか、このギルドで最強のプリーストである、私の力と人気を妬んで治したくないと言うんですか！？　それとも、先生の腕がヘボだから治せないんですか？　ああっ……、私このまま死ぬんだわ。この小さな傷口からばい菌回って死ぬんだわ……！　カズマさーん、カズマさーん！聞いて！　この女が私を癒してくれないの！」
俺は、そんな事を大声で喚いているアクアに近付いて行く。
というか、ばい菌で死ぬも何もお前に毒は効かないし、そもそもお前に触れた時点で浄化されちまうんじゃないのか。
そんな事を心の中で突っ込みながら、俺はアクアの後ろに立つと。

「私が死んだ暁には、街の真ん中にピラミッドを越えるお墓を建て

てちょうだい。そして、中には私の部屋にある、カズマがいつもガラクタ呼ばわりしている財宝の数々を収めてちょうだい。お墓の番人はゼル帝ね。お供えは、朝昼晩の三回、きちんと、お酒と美味しいおつまみお供えしてね。そして墓標にはこう記すの。偉大なる……」

バカな事を大声で喚き続けているバカの後頭部を、ダガーの柄の部分で軽くどついた。

「偉大なるバカここに眠るって書いといてやるからな。すいませんねセレナさん。ほら行くぞ！」

「……ッ！　……ッ！！」

俺は、後頭部を押さえながら痛みに転がり回るアクアの襟首を掴み、そのまま立ち去ろうとする。

というか、周りの冒険者達の視線が痛い。

どう見てもアウェイ感満載だ。

「あの……。カズマ様、大切なお話があるのですが。少々お時間よろしいですか？」

セレナが、アクアを回収して立ち去ろうとしていた俺に言ってきた。

そんなセレナに、自分で手の傷と後頭部にヒールを掛けて復活したアクアが、勢いよくバッと立ち上がると。

「ちょっとあんたいい加減にしときなさいよ！　ウチのカズマさんにしつこいんですけど！　ギルド一の美人プリーストとしての立場を持っていっただけじゃ飽き足らず、その色香でカズマさんまで持っていくつもり？　ウチのカズマさんは、年下の子にお兄ちゃん呼ばわりされただけでコロッと落ちちゃう意志の弱い人なので、そういうの止めてくれます？」

この野郎。

と、冒険者の誰かがポツリと言った。
「ギルド一の美人プリースト……」
「「……ブフッ！」」
「今笑ったの誰よー！　そっちから聞こえたわよ、出て来なさいよ！　あっ、あんた昔私が蘇生してあげた人じゃない！　笑うんだったらお金払って！　蘇生は本来高いお布施を貰う超高等魔法なんだから、お金払って！」
アクアが他の冒険者達に絡みだす。
「おっ、俺じゃねえよ！　俺は笑ってねえって……、おい、酒に指突っ込むのは止めてくれよアクアさん、……って水だこれ！　何で俺の酒を使って芸をするんだよ！」
「芸じゃないわ、体質よ！　あんた達の事は良く分かったわ！　何だかんだ言いながら、私、賞金首や大物モンスター相手のピンチの時には、蘇生したり癒してあげたり、支援魔法掛けたりしてあげたのに！　腹いせにギルドのお酒、全部真水に変えてやるわよ！」
「止めて下さい！　アクアさん、そんな事されるとギルドが一番困ります、止めて下さい！　止めて下さい！」
ギルド内の酒樽に駆け寄り手を突っ込もうとするアクアを、ギルド職員や冒険者達が慌てて制止しようとしている中。
「参りましょうかカズマ様。ここは騒がしいので、出来れば人気のない場所で……」
セレナが、ギルドの騒ぎなど我関せずと言った感じで笑い掛けて来た。

騒ぐアクアはそのままギルドに置き、俺はセレナに連れられ、街の中心部から外れた、あまり人気の無い路地へと移動していた。
あまり人通りの無いこの辺りには、建っている店といえば、客の来ない某魔道具店ぐらいのものだ。
話があると言うのなら、こんな場所ではなくどこか喫茶店にでも入った方が良いと思うのだが……。
そんな俺の疑問を感じ取ったのか、セレナが目を細めて笑みを浮かべる。
「あまり、お店の中でする様なお話ではありませんので……」
セレナは、そう言って辺りを見回すと、道の脇に腰を下ろした。
「ここは、人通りもありませんし。誰かが来ても話題を変えれば良い話です。ここで、ちょっとお話をさせて頂きましょうか」
今までの穏やかな笑顔とは一変し、途端に真剣な面持ちとなった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

それは、とてつもなく壮大で、とても悲しい話。

セレナが語ったその話は、とても一言では語り尽くせない様な。
それを聞いた誰もが、やり切れなさと切なさを引きずったままになるだろう、そんな話。

「……そして、その者はやがて邪悪な力に飲み込まれ……。いつしか世界中の人々に、この名で呼ばれる様になったのです。……魔王、と。魔王は、何も自ら望んでこの世界の人達を傷付けようとしている訳ではないのです……！」
「なんてこった……。……そんな、そんな漫画みたいな展開が現実にあるだなんて……！」
セレナの話に、俺は軽い感動を覚えて言った。

そんな俺の言葉にセレナは僅かに首を傾げ、
「……漫画？　……ともかく、そんな理由でその美しい少女は魔王と呼ばれる事になりました。今も、呪いでその姿を醜悪な魔族の姿に変えられておりますが、その呪いもやがて解けようとしています。……お願いですカズマ様、貴方様こそは神に選ばれし者。きっと、今も人類を苦しめる魔王を退治したいと願っている事でしょう、ですが……！　元は哀れな一人の少女、魔王を退治するのは今しばらく待っては頂けませんか？　そして、どうしても待てないと……！　どうしても魔王を退治すると言うのなら、どうかこの私をパーティに入れて、連れて行って欲しいのです……！」
俺の手を両手で掴み、下から見上げる様にして、訴える様な眼差しですがってきた。

なんてドラマチックな展開……！
これだよ、俺がこの世界に、俺が異世界に求めていたのはこれなんだ……！

カエルに食われる女神や、パンの耳に砂糖をまぶして齧る魔王の幹部。
逃げるキャベツの収穫をしたり、土木工事のバイトをする冒険者。
猫耳の付いたオークに、長い付け耳をするエルフ達。

そう、今までのそれらの事が間違っていたんだ。
この世界にだって、こんな王道的な悲劇のストーリー、真っ当なファンタジー展開があったじゃないか……！
今までの連中がおかしかっただけなんだ……！

「でも待ってほしい。セレナさんは、どうして俺を神に選ばれた存在だなんて思うんだ？　ハッキリ言っておくよ。俺が賞金首や魔王の幹部討伐に関わったのは、何と言うか巻き込まれただけに近いんだが」
そんな俺の言葉にセレナは目を閉じ、静かに頭を振った。
「わたくしは、貴方様の名を聞いただけで直感致しました。カズマ様、知っていますか？　この世界には、稀にとてつもない力を秘めた者達が現れる事を。それらは、頭脳であったり力であったり。魔力であったり武器であったり。皆、その能力の種類にはバラつきこそありますが、一つだけ言えるのは。その者達が、魔王軍の者達にとても恐れられていると言う事です」

ピンと来た。
日本から来たチート持ち連中の事か。

「ええっと、その連中の事は何となく分かるよ。で、俺が変わった名前しているからその連中と同じだとでも思ったのか？　その、悪いんだが、俺はそんな特殊な力は何も……」
「いいえ、変わった名前だから、と言う事ではありません！」

言い淀む俺に、セレナが断言する。
「確かに、その特殊な力を持った者は変わった名をしています。ですが、わたくしが貴方様を特別な存在だと確信したのは……！　そう、かつて魔王軍にとてつもない被害をもたらし恐れられた、伝説の剣士。わたくしは貴方様の名を聞いた時に確信しました。貴方様は、その伝説の剣士の末裔なのだと！」

なんだと、この俺が……！

……。

「……いや、なんで？」
「その者の名はサトウ。伝説の剣士、サトウと言います。これほどの偶然の一致があるでしょうか？　いいえ、ありませんとも！」

俺の国で一番多い苗字です。
全くの赤の他人だと思います。

……まあ、しかし。

「セレナさん、悪いけども、俺は唯の最弱職の冒険者なのは間違いない事実なんだよ。セレナさんのその話は、確かに凄くテンション上がる話だし、ワクワクするのは事実なんだけれども。まあ、俺に魔王退治なんて無理だから。その気も無いし、そんな力も無い。それに、今の話じゃ魔王の正体は、そろそろ呪いが解けそうな美少女だって言うんだろ？　無理無理、絶対無理。俺、人を殺せる根性なんてないぞ。人型のモンスターが精一杯だ」

そんな情けない俺の言葉を聞き、セレナはさぞガッカリするかと思ったのだが。

意外にも、ホッと安心した表情を浮かべ。
「そんな、力が無いなどと謙遜など……。しかし、そうですか……。分かりました。ふふ、カズマ様はとてもお優しい方なのですね」
言いながら、セレナは目を細めて笑みを浮かべた。
そして、俺に深々と一礼すると。

「それでは、わたくしは……」
「セレスディナさん？　セレスディナさんじゃないですか！？」

別れの挨拶をしようとしたセレナに、突然声が掛けられた。
それは……。

「あっ、カズマさんまで！　どうしたんですか、こんな所で？　カズマさんってば、私といいバニルさんといい、幹部とは随分とご縁がありますね。もうセレスディナさんと仲良くなったんですか？」

この近くにある魔法店の店主、ウィズだった。
と、言うか……。

「……人違いではありませんか？　わたくしはセレナと言う名のプリーストです。どなたかと間違われて」
「セレスディナさん、セレスディナさん、せっかくこの街に来たのなら、私の店に寄って行きます？　カズマさんもご一緒に。お茶でも入れますよ？」
人違いで誤魔化そうとするセレナの言葉を、天然なのか、自然と遮るウィズ。

セレナは目を細めて笑顔を浮かべ、俺に向けて言ってきた。
「カズマ様、この方とはお知り合いで？　カズマ様から言ってくださいませんか？　人違いだと言う事を」

「セレスディナさん、どうしてこっちを見てくれないんです？　それに、どうしちゃったんですかその上品な口調は？　似合いませんよ？　忘れちゃった訳ではありませんよね？　私ですよ、魔王さんのお城に住まわせてもらっていたウィズです、あなたと同僚のウィズですよ、セレスディナさん！」

にこやかな笑みを浮かべているセレナの肩を、とうとうゆさゆさと揺さぶり始めたウィズ。

それに、とうとう我慢が出来なくなったのか、セレナがウィズの手を掴んで引き剥がす。

「ちょっ……、止めてくれます？　わたくしはセレナです、セレスなんとか言う人とは別人ですから、いい加減にして下さいませんか？」

そのセレナの言葉に、ウィズがええっ！　と声を上げた。

「何言ってるんですか？　どこからどう見てもセレスディナさんじゃないですか。ダークプリーストのセレスディナさんでしょう？　策略を考えるのが得意で、魔王軍唯一の人間である事を生かして、よく街に潜入」

「あなた、髪の毛先に枝毛がありますね！　ちょっと癒してあげましょうか！　『ヒール』！　『ヒール』！」

「痛い！　痛いっ！　な、何するんですかセレスディナさん！　なんなんですかもう！　いいですよ、もう知りません。せっかく面白い魔道具を仕入れてきたから見せてあげようかと思ったのにまったく……！　カズマさん、またお店に遊びに来てくださいね？」

ウィズは、俺にそう挨拶をすると、プンプンと怒りながら店の方へと帰って行った。

それを見送っていたセレナは、気を取り直したかのように両手を

組み。
「……変わった方でしたね、ヒールを掛けたら煙が出ました」
「まあ彼女はリッチーだし、そんな事はご存知でしょうセレスディナさん」
何とか誤魔化そうとするセレナに、俺もにこやかな笑顔を浮かべた。

それでも全く笑顔を絶やさないこの女は、なかなか大した物だと思う。
やがて、セレナはしばらく俯き黙り込むと、やがて意を決した様に顔を上げた。
「違うんです！」
「ほう」

まだ諦めない気らしい。
この女、根性あるなあ。

……あっ。
「確かに彼女の言う通り、わたくしは魔王の幹部、セレスディナ。でも聞いて下さい。貴方様に語ったあの話は本当なのです！　わたくしは、実は、呪いで魔王と化した少女の姉。妹を助けたいが為に、仕方なく魔王軍へと入ったのです！　ああっ……、今でも妹の事を想うと……！」
熱い演技をしているセレナの背後に、一度見たら忘れられないインパクトを持つ奴が現れた。

「妹の事を想うとなんだ？　久しぶりであるな、記憶を取り戻し妹の事を想うも、ここで再び妹の元へ会いに行ったら今度こそ仲間に愛想尽かされそうだなと、日々悶々としている男よ。今方、嬉々としてガラクタを仕入れて帰ってきたガッカリ店主から、貴様が店の

近くに居ると聞き参上したぞ。店の近くまで来たなら寄って行ってはどうか？」

セレナの背後からそいつが声を掛けてくる。

セレナ自身もその声には聞き覚えがあったのか、その身をビクリと震わせた。

毎度お馴染み、ウィズに続く魔王軍の元幹部、仮面の悪魔バニルである。

その声に、セレナが恐る恐る後ろを振り向くと、背後に立つバニルとセレナはバッチリと目があった。

「……こ、こんにちは初めまして、わたくしセレナと申します。カズマ様のお知り合いの方ですか？　あの、カズマ様。どうもお忙しい様なので、わたくしはもうこれで……」

「初めましてぶりであるな、なんら怪しい所など何一つ無い清く正しいプリーストよ。まあそう急いで帰る事もあるまい。ここはお近づきの印として、現在は炭素と化している丸焦げ店主が、先ほど嬉々として仕入れてきた愉快な品を譲ってやろうと思う」

バニルの言葉に、セレナがホッと息を吐いた。

そんなセレナの前に、バニルが小さなカップアイスみたいな形状の物を取り出し。

「本日のオススメはこちら！　これからの夏場に最適、虫コロリンである。この可愛らしい名前とは裏腹に、その力は絶大。鼠よりも小さな生物を対象に、この魔導具の周囲に強烈な死の呪いを掛ける品。すなわち、これを枕元に置いておけば煩わしい虫刺されなど気にすること無く眠りに就ける」

「「へえ」」

思わずセレナとハモってしまった。
この世界にも蚊ぐらいいるだろう。
金に困っている訳じゃないし、それは少し欲しいな。
しかし……。

「どうせ、ロクでもない副作用があるんだろ？　低確率で人にも呪いが掛かって死ぬとか」
「とんでもない。鼠よりも大きな生物にはなんら効果は無い。死ぬのは鼠よりも小さな生物のみである」
俺の疑問に、珍しくバニルが否定した。
なんだよ、本当にオススメなんじゃ……。

「素晴らしいです、つまり、枕元に置いておけばあの黒くて素早い艶やかなアレも、近寄ったら死ぬ訳ですね！　是非ともお一つ……！」
「毎度あり！」

嬉々としてそれを受け取るそんなセレナの言葉を聞いて、俺はふと疑問を持った。
「……なあバニル、それって虫以外にも、鼠より小さければなんでも死ぬのか？」
「もちろん死ぬ」

即答するバニル。

「……じゃあ、人の体の中の微生物やら抗体やらなんやかんやは」
「もちろん死ぬ」

ガラクタじゃねえか。

微生物だのミトコンドリアだのは知らないだろうが、俺の雰囲気で何となく欠陥品だと悟ったのだろう。

セレナがそれを、バニルにオズオズと返そうとするが……。

「おっと、初対面の人よ。商売人としてお客様の個人情報は厳重に守る我輩だが、返品などされると汝はお客様ではなくなってしまう。ふうむ、見える。見えるぞ、誰かの未来が……。とある仮面紳士により様々な事がぶちまけられ、冒険者達に袋叩きにされる誰かの姿……」

「買います！　ぜひ買います！　お幾らですかっ！？」

気の毒に。

「フハハハハハ、本日の我輩は機嫌が良い、ポンコツ店主が仕入れたガラクタが、珍しくこうして金になったからな！　本来ならば四十万エリスのこのアイテム、特別に、初めまして価格と上機嫌価格をサービスし、百二十万飛んで八百エリスにしてくれようか！」

「増えてるじゃねーかクソッタレ！　なんであたしの持ってる金の額を知ってやがる、なんでもかんでも見通すんじゃねえぞ！」

セレナが怒鳴り、自らの財布ごとバニルに向かって投げつけた。

突然豹変したその口調は、まるでガラの悪い冒険者の様。

バニルは投げつけられた財布をキャッチすると、

「フハハハハハハ、ではまたな小僧！　ついでに初対面の短気な人よ！　悪感情、美味である、美味である！　フワハハハハハハ！」

愉快そうに笑いながら、そのまま店の方へ悠々と消えていった。

それを見送りながら、セレナが呆然と呟いた。

「……あ、有り金が……」

……き、気の毒に……。

１４話（後書き）

しばらくは大人の事情で週一更新。
毎週日曜日を心掛けます。
詳しくは活動報告にて。

申し訳ない！

15話

俺とセレナは、人気のない空き地で屈み込んでいた。

まるで、コンビニ前にたむろするアッチ系の人達の様に。

バニルに有り金巻き上げられたセレナに連れられ、ここに来た訳だが。

セレナが俺に、人差し指と中指を、パクパクと閉じたり開いたりして見せた。

？

その意味が分からずにいると、セレナがイライラと言ってくる。

「煙草だよ。煙草無いか煙草。お前、あれだけ悪名高いんだから煙草ぐらい持ってんだろ？　一本くれよ。この街に来て猫かぶってた所為で、ずっと吸ってないんだよ」

「い、いや、持ってないっス」

この世界の煙草って言うと、どんな煙草だ？

紙巻き煙草は流石に無いんじゃないのか。

と言うか、この女チンピラかよ。

何となくこの手の人種には敬語になってしまう。

同じチンピラのダスト相手だと平気なのになぜだろう。

俺の返事を聞いたセレナは、下を向きながらイライラと頭を掻いた。

既に今までの清楚なイメージなど欠片も無い。

やがてセレナは深々と溜息を吐いく。

「今更誤魔化してもしょうがねえな。……あたしは魔王軍幹部、謀略と諜報を担っているセレスディナ。傀儡と復讐を司る邪神、レジーナを崇拝するダークプリーストだ」

「自分のとこの神様を邪神って言っちゃうんスね。宗教関係の人達は、自分の所の神様こそが絶対であり、他は邪教であるとか言うのかと思ってました」

その俺の言葉に、セレナがフッと顔を上げる。

その目は先ほどまでとはうって変わって、暗く、冷たい、人形の様な無表情になっていた。

見た目は美人なだけに、急にそんな顔をされるとかなり怖い。

……あれっ、さっきはウィズやバニルがいたから安心しきっていたが。

よく考えると俺、現在ロクな装備も無い状態で魔王の幹部と二人きり？

おいちょっとヤバくないかこれ。

「まあ、あたしん所の神様は自ら邪神を名乗ってるから。傀儡と復讐を司るんだぜ？　邪神以外の何だってんだよ」

そう言いながら、目を細めて張り付いた様な笑顔を浮かべた。

傀儡を司る神に仕えるだけあり、正体を知った今となっては、その笑みがまるで人形が浮かべる作り笑いの様に映る。

何と言うか、本性を知ってしまうとその笑顔が怖い。

穏やかなセリフの時なら似合うその笑顔が、粗野なセリフには全く似合わなかった。

「……傀儡って。ひょっとして、ターンアンデッドが効かなかった墓場のゾンビも……」

「おう。あたしあたし。ありゃゾンビじゃなくて、あたしの傀儡だ。

大変だったよ、夜中に墓から一体一体、死体引きずり出してな。ありゃ、邪神の力で操られた唯の死体だからな。他のプリーストが手も足も出ない所をあたしが退治する。……あの手は、街の冒険者からてっとり早く信頼を得る時によく使うんだよ」

こいつ、ロクでもねえ。

流石は魔王の幹部なのか。

「……それじゃさっき話してた、美少女が呪いで魔王に云々とかってのは……」

「ああ？　あんなもん本気で信じてたのかよ？　魔王の敵になりそうな、実力のある冒険者にはとりあえずあの話をしておくんだよ。人間ってのは楽な方へ行くもんさ。危険を冒して魔王退治なんて頑張らなくても、やがて時が経てば少女に掛かった呪いは解け、魔王は居なくなって平和になりますよって吹き込んどけば、大概の奴はそれで大人しくしてくれる。誰だって自分の身は可愛いからな。危険を冒す必要のない言い訳を与えてやれば、大概の奴は楽な方に行っちまうもんだ」

情に訴えたりとか、やり方が汚い。

魔王の正体が元美少女とか事前に言われてたら、いざ魔王と対峙した時に躊躇する奴もいるだろうし。

流石謀略担当の魔王の幹部、狡い手を使う。俺の感動を返して欲しい。

「でも、何で俺にはそこまであっさりバラすんだ？　バニルとウィズのお陰で正体は見破ったが、俺にそんな手の内明かす様な事をするのがちょっと」

俺の疑問に、セレナは全く笑みを絶やさないまま言った。

「なに、これ以上嘘を重ねて苦しくなるより、本当の事を話して取引しようと思ってな。……ここ最近の大体のお前の言動や行動を見させて貰ったが、魔王がお前を危険視する理由がサッパリ分からねえ。……お前、働きたくないだけの唯のニートだろ」

「その通りです」

セレナの言葉に即答する。

「お前、人類の為に命を掛けて、魔王退治をしたいとは思わないだろ？」

「もちろんです」

俺は更に即答する。

「……お前、自分の知らない所で、見知らぬ赤の他人が魔王軍に苦しめられていると聞いて、どう思う？」

「ふーんとしか」

小指で耳をほじりながら、俺はもちろん即答を……。

「……」

即答する俺を、セレナが無表情な真顔になって見つめていた。

……無表情なのだが、何だか蔑まれている様な気がする。

ハッキリ言うが、裕福な日本に住んでいた時も、アフリカで飢えた人々がどうのと聞いても、特にどうしようなんて思わなかった。

多分、日本に住んでいた時に俺が一億円持っていたとしても、恵まれない子供達に寄付しようなんて思わなかっただろう。

だが、俺は別に鬼畜ではなく、普通の人だと思う。

……思う。

……思……。

「……あの、俺だけじゃなくて大概の人が同じ反応すると思うんで、

その顔止めてくれませんかね」
「えっ、あ、ああすまない。似た様な質問に同じ返答をした奴は今までにも居たけど、ここまで何の迷いも躊躇もなく即答した奴は初めてで……」
表情は変わらないものの、ちょっと慌てた様子のセレナ。
「……あたしは魔王から、二人も幹部が姿を消したこの街、そして、紅魔の里といいこの街といい、ちょくちょく色んな所で名前が出てくるお前を調べるよう言われた訳だが……。調べた結果、この街での中心人物がお前だって事は分かった。そして、お前の性格もな」
セレナは、一拍置いて笑顔を浮かべた。
「……そこで。取引しよう」
「ほう」
セレナは地面に腰を落としたまま、淡々と説明を始めた。
「現在、戦況は魔王側が優勢なのさ。ちょっと前まではどこからともなく、今まで名前も聞いた事がない、常識を無視した強い奴が、何の前触れもなく突然現れたりしたんだ。その度に、あたし達は泣かされてきたんだがね。……それが、去年の夏が終わった辺りからかね？　勇者気取りの変わった名前の連中。その連中の新手が、パッタリと現れなくなったのさ」
常識を無視した変わった名前の勇者気取りの連中ってのは、恐らく俺みたいに日本から送られてきた奴等の事だろう。
それがパッタリと現れなくなったと。

去年の夏の終わりと言うと、俺とアクアがここに来た辺りからか？

……あっ。

「……？　どうした？　勝手に納得した様な顔しやがって。……ど、どうした、急にオロオロしだして？　……まあいい。それで、お前さんに取引を持ち掛けたいのさ」

新手のチート持ちがパッタリと来なくなった理由について、これ以上無いぐらいに心当たりのある俺は、何とか平静を装いつつ。

「ど、どんな取引？」

ついカッとなって勢いだけでアクアを連れて来た事を今更ながらに後悔しつつ、誤魔化す様にセレナに尋ねた。

セレナは、そんな俺の態度には興味は無いのか、

「……お前さ。魔王軍に入れよ」

そんな事を、まるでクラブか何かの勧誘でもするかの様な気楽さで……。

「……は？」

こいつ今なんつった。

「は？　じゃねーよ。魔王軍に入れって言ったんだ。……分かるよ。

お前はこっち寄りの人間だ」
おいふざけんな。
「見損なって貰っちゃ困るぞ。確かに俺はあんたが調べた通り、世間では鬼畜だのロクデナシだのニートだのロリコンだのと言われちゃいるが」
「いや、最後のロリコンってのは知らなかった」
セレナの言葉は無視し、俺は立ち上がって拳を握った。
「確かに俺は、人よりも多少はダメな所はあるかも知れない。金ならあるんだし、残る余生はいかがわしい店で一生分の予約をして、俺に好意を寄せてくれる仲間にチヤホヤされ、甘やかされながらヌルい人生を送りたい。たまに無駄な浪費をしてみたり、金に物を言わせて意味もなくギルドの酒場を一日貸切り、皆を困らせてみたい」
「……あたしの予想以上にダメ人間だったよあんた」
俺は握った拳を振り上げると熱く語った。
「でも俺にだって、小さな良心と正義の心はあるもんだ。知らない所で知らない誰かが困っていてもそれは知ったこっちゃない。だが、目の前で誰かが助けを求めていたら、それを無視するほどのクズでもない。……俺の強力な力が欲しいと言うお前らの気持ちは分かる。分かるがしかし、俺は世話になった人達と敵対するつもりはない！」
「……いや、別にお前の力が欲しいとまでは言ってないんだけど……」
……。
「なんだよ、俺の力を恐れて仲間に引き込もうとかそんなんじゃないのか？」

「違うよ。あたしは、あんたは放っておいてもいいと思うんだがね。でも、さっき言ったろ？　変わった名前の連中は急に現れなくなったって」

セレナが立ち上がり、俺にズイと顔を寄せた。

「この、変な名の連中はな。どうも、神々が遣わした者じゃないのかって話があるんだ」

その通りです。

……もちろん口には出さないが。

「そして、今までポコポコ湧いて出たその連中が、お前を最後にピタリと出現しなくなった。まるで神々が、お前一人で十分だとでも言うようにな？　魔王の奴は、お前の事をお伽話によく出てくる様な、伝説のなんたらとかそんな類の奴だと思ってるぞ」

何その勘違い。

俺がアクアを連れて来た所為でチート組がこの世界に来れなくなったのに合わせ、魔王の幹部討伐とかに俺の名前がチョコチョコ出る。

なるほど、これは誰でも俺を警戒する。

なんて嫌な勘違いだ。

「俺はモンスターに囲まれて生きていけるほど強靭な精神力は持ってないんだよ。……魔王さんに伝えておいてくれ。俺はそんな大層な奴じゃないって。毎回、たまたま居合わせてただけだって。貧弱な最弱職の冒険者なんで、俺を注視するのはマジ怖いんで止めてくれませんかって、そう伝えておいてくれよ」

そんな俺の言葉に、セレナはにこりと作った様な笑顔を浮かべた。
「だろうな。実際のあんたを見て確信したよ。あんたを仲間に引込めだとか言っているのは、魔王の奴一人だしな。まあ、魔王の奴も気にし過ぎだと思うんだがねえ。……でも良いのか？　こっちに付いておいた方がお得だと思うぜ。戦況はこっちが有利だし、……ああ、そうそう。お前童貞だろ。こっちに来れば欲望の赴くままに爛れた性生活が送れるぞ。ちなみに、魔族はスタイルの良い美女が多いからな」
「……い、行かない。以前の俺なら心を動かされた所だろうが、今の俺はモテ期到来中なんだ。そ、そんな甘言には踊らされない」
「……なんでそんなにソワソワしてるんだよ。……まあいいさ。魔王の奴には、あんたは取るに足りない小物だって説明しといてやるよ。これで、もうあんたが魔王に目を付けられる事は無くなるだろうさ。……その代わり。あんたの仲間にも、あたしの正体はバラさない事。そして、この街であたしがする事に手出しはするなよ？　そして、ウィズやバニルとどんな関係なのかは知らないが、あの二人……。特にウィズには、あたしが何かやろうとしてるだなどとチクるなよ？　……それが、取引の条件だ」

セレナはそう言い残し。
先ほどまで地べたに座っていた尻の部分を手で払うと、俺を残したまま、悠然と立ち去ろうと……。
「……あっ。……悪いんだがよ……。……ちょっと金貸してくれないか……？」
俺は無言で、先ほど同僚に、有り金を巻き上げられた魔王の幹部に金を貸してやった。

「……貸し一つな」
「……ぐっ……」

しかし、魔王の幹部とは。
まあでも、これで俺の安全は保たれた。
モンスターと戦う冒険者としてこれでいいのかと思わないでもないが、そもそも俺一人が抗ったってどうにもならない。
今までの魔王の幹部討伐にしろ、関わっているとは言っても正直俺は何もしてない。

ベルディアに関しては、頭をスティールしたのはクリスだし。
バニルに関してはめぐみんが爆裂魔法をぶっ放しただけだ。
シルビアに到っては、むしろ俺が持ってきた魔道具でパワーアップする事態を引き起こした。
どれもこれも、結果として上手くいっただけで、俺はほとんど何もしていない。

俺が真正面から魔王の幹部なんぞと戦ったなら、まあ間違いなく瞬殺されるだろう。
そんな弱っちい俺が、魔王の注視を解けたのは有難い。

「ただいまー。帰ったぞー」

俺は、そんな事をボンヤリと考えながら屋敷のドアを開けると……。

「ふあああああ！　ふわあああああ！！」
「ほらほら、もういい加減泣き止んでください。そろそろカズマが……、あっ、カズマ！　お帰りなさい、丁度良い所に……」

俺は中に入らず、そっと玄関のドアを閉めた。
それが再びバンと開く。
「こらっ！　そっと閉めるな、大変だったんだぞ！」

閉めたドアを開け放ったダクネスの言葉に、俺は嫌な予感がしつつも一応尋ねた。
「……で、今度は何をやらかしたんだよ？」

広間のソファーで裸足になり、体操座りをして泣くアクアは嗚咽が止まらず会話にならない。
代わりに、めぐみんが溜息を吐きながら。
「……どうも、ギルドで暴れたか何かして、冒険者や職員達にギルドから締め出された様で……。何をしたのかは知りませんが、アクアはしばらく、出入り禁止措置を受けた様です……」

……あの後、本当にギルドの酒を水に変えたのか。

「私とめぐみんがあの女の調査を終えて屋敷に帰ると、何かの請求書を握りしめてアクアが泣きじゃくっていた」

水に変えた酒代を請求されたのか。

……調査？
「あの女って、セレナの事か？　ここの所、お前とめぐみんが朝から出掛けてたのはそんな理由か」

ダクネスに水を向けると、ダクネスは嬉々として言ってきた。
「そうだ！　おい、聞けカズマ！　あの女はおかしいぞ！　あれだけの量のアンデッドを退治出来る腕だ、さぞかし名のあるプリーストだろうと、私のツテで名うての商人達に聞いて回ってみたのだが……。セレナなんて名のプリーストは、どこの街でも噂にもなった事が無いのだとか」

そのダクネスに続き、めぐみんが、アクアの頭を撫でてやりながら。
「……しかもギルド職員によりますと、あの女は未だに報酬を一度も受け取ってはいないのだとか。唯の一度も報酬を受け取らないと言うのは、幾ら人の良いプリーストと言っても限度があります。……よもや、冒険者カードを見せられない理由でもあるのかと」

……こいつらも、普段はおかしな事ばかり言い出すクセにこんな時だけは鋭いなあ。

「その有能さを、もっと普段から生かしてくれればいいのに……。……それはそれとして、あれだ。あいつの事は調べるな、話は付いたから。あいつはもう、俺には近付いては来ないし仲間に入れろとも言わないから」

そんな俺の言葉に。
めぐみんとダクネスは、キョトンとした顔を見合わせていた。

翌日。

「お前と二人きりで出掛けるのは何だか新鮮だな。しかし、一体ギルドに何の用だ？　ここの酒場で食事でもするつもりか？」

俺は、ダクネスを引き連れてギルドへとやって来ていた。

めぐみんには、未だ屋敷でいじけているアクアのお守りを任せている。

それにイザって時には、街中ではめぐみんの魔法は使えない。

という訳で、ダクネスに付いてきて貰ったのだが……。

「……お前何なのその格好」

ダクネスが鎧も着ずに、珍しくお嬢様風の服装をしている。

動き易いタイトスカートなどではなく、白のワンピースに白手袋などを付けている。

手には武器も持たずに白い日傘なんて持っていた。

「……何なのと言われても、私を誘ったのはお前だろうに。どうせこの街の連中には、私の実家の事は既にバレているからな。もう開き直ることにした」

ダクネスが、少しだけ恥ずかしそうに俯きながら言ってくる。

……まあいいか。

多分いきなり戦闘にはならないだろうし。

そう、俺はセレナの行動を監視に来ていた。

魔王の幹部と取引した事が正義感の強いダクネスにバレると、色々と面倒くさそうなので内緒にしてある。
同じく、魔王の幹部だと知ったら嬉々として喧嘩を売りに行きそうなので、アクアにも内緒に。
めぐみんは、まあ良く分からないがなんとなく内緒にしていた。
セレナに正体をバラすなと口止めされた事もあるが、それよりも、皆に知られると何かやらかしそうな気がする。

身の安全の確保の為に、魔王の手先と取引。
我ながら最低だとは思うが、これでセレナまでもがこの街で討伐されたとあっては、いよいよ魔王の注目を浴びてしまう。
自分だけの保身じゃない。
場合によってはこの街自体が魔王に危険視される事になるだろう。

セレナは言った。
この街でやる事には、手出しするなよ、と。

俺はその一言が気になり、何となく監視に来たのだが……。

「レジーナ神の名は誰も聞いた事がないでしょうが、必ず皆様にご利益がありますよ。レジーナ様のお力は本物です。様々な願いが叶いますよ？」
「本当ですか！　私にも……、私にも彼氏とか出来ますか！？　馬小屋で寝るのが当たり前なので、冒険者以外の男性に告っても、馬臭いのはちょっと……って言われるんです！」
「叶います、叶いますとも。意中の男性の髪を持って来ると良いですよ。レジーナ様のお力で、両想いになれるおまじないをかけてあげます」
「セレナさん、俺にも！　俺にもぜひ、そのおまじないを！」

「おい、順番守れよ！　こっちが先だ！」

……何の騒ぎだこれは。

ギルドの中央では、すっかりセレナがギルドの顔となっていた。

色んな冒険者の相談を受けたりしながら、ずっと笑みを絶やさない。

「さあ、どんな悩み、どんな相談にもお応え致しますよ。それが、プリーストとしての務めですから……」

「……あ、あの……！　私、この街でなかなか友達が出来なくて……！　親友と一緒にこの街に戻って来たんですけれど、その親友も最近忙しそうで……。と、友達が……！　一緒に晩ご飯を食べてくれる様な、友達が欲しいんです！　もう、一人でご飯を食べるのが寂しくて……！」

「それは偉大なるレジーナ様のお力でも、どうしようも……」

「……そ、そうですか……。すいません……」

それは、本来プリーストとはこう有るべきだとでも言う様なセレナの姿。

一部の娘を除き、ほとんどの冒険者達の悩みを次々と解決している。

「おいカズマ、どういう事だ。ひょっとして、私を誘ってギルドに来たのはあの女を……」

ダクネスが、クイクイと俺の袖を引きながら、不安そうな表情で……。

「？　そうだよ、セレナの監視に来たんだよ。あいつが何するつもりかが気になってな」

「お、お前……っ！　昨日はあの女とは話が付いたと！　私達に、もうあの女の事を調べるなと言ったのはお前じゃないか！　せっか

く……！　せっかくこんな格好までしてきたのに……」
ダクネスが、俯きながら段々声のトーンを落としていく。
……。

「……お前、デートかなんかの誘いだと思ってたの？」
「！　ち、違……！　ちちちち、違……！」

ダクネスが、分かり易く頬を染めて慌てふためく中。
俺に気付いたセレナが、立ち上がると共に、俺に対してこっちに来いとばかりに手招きした。
セレナはそのまま、酒場の隅へと移動する。
そこに歩いて行く俺に気が付き、他の冒険者達も気を利かせてくれたのか、俺とセレナの傍から離れ、二人きりの状態にしてくれた。

セレナは、目を細めて張り付いた様な笑顔を浮かべ。
「よお。あたしの事は誰にも話してないだろうな？　言っておくが、これはお前らの為でもあるからな。あたしは戦闘が得意なタイプじゃない。だが、一応は魔王の幹部だ。邪神レジーナの力は傀儡と復讐。あたしの命が絶たれると、あたしを殺した相手はおろか、その周囲にとびきり強力な呪いが振りかかる。まあ、この街の住人の半数ぐらいは呪いに掛かるんじゃないのか？」
そんな事をサラッと言った。
それを聞いた俺の顔が引きつるのを、セレナは表情は変えないままで、面白そうに眺め。

「呪いの種類は様々で、体に障害が残るもの、石化や死なんて凶悪な物まで揃ってる。正体がお前以外の奴にバレたら、あたしも戦わない訳にはいかない。その際には多くの被害が出るだろうな？　それらをよく考えて、しっかりあたしの秘密を守るんだな」
この女は、なぜ俺にのみペラペラと秘密を喋ってくるんだろう。

……自分が死んだら呪いが掛かるとか、ハッタリじゃないのか？
先にそう言っておけば、誰からも殺されないだろうと。

そんな俺の考えが顔に出たのか、セレナがスッと手を差し出した。
「ダガーか何かで刺してみろ。ああ、軽めにしておいた方がいいからな？」
……？
「何のつもりだよ。公衆の面前でそんな事出来るか、アクア相手じゃあるまいし」
俺は言いながら、ダガーの代わりにテーブルに備え付けてある爪楊枝でセレナの手を軽く突いて……。
「ッ！？」
爪楊枝でセレナの右手を突いた瞬間、俺は自分の右手に小さな痛みを感じた。
見れば、俺の右手の甲の部分に小さく血が滲んできている。
そしてそこには、セレナの右手の甲と同じ様な傷が。

セレナは笑みを浮かべたまま言ってきた。
「……と、言う訳だ」
「……この街は俺の安住の地なんだよ。俺、敵対しないからさ。一体何するつもりなのか知らないが、この街で変な事企まないで、とっとと魔王の城に帰ってくれないか？」

そんな俺の言葉に、セレナは無言で笑みを浮かべるだけだった。

俺はセレナの下を離れ、ダクネスが待っていたテーブルへ。
「ダクネス、待たせた……」

「お嬢様！　ララティーナお嬢様、なんだよコレ！　なあ、このヒ

ラヒラした格好は何なんだよお嬢様！　可愛いじゃねえか！」
「ラティーナちゃん、ヒラヒラが可愛い！　ねえ、顔隠してないで私にもちゃんと見せてよ！」
「おいお嬢様、何赤くなってんの？　ホラ、顔隠してないで見せてみろよ！」
普段と違った格好のダクネスは、椅子に座ったまま耳まで赤くなった顔を両手で覆い隠し、フルフルと肩を震わせていた。
普段顔を合わせる常連の冒険者達に囲まれて、ここぞとばかりに思い切り冷やかされている。
「こらっ、ウチのお嬢様をいじめんな！　見世物じゃないぞ、しっし！」
俺はダクネスを囲んでいた冒険者達を追い散らしながら、セレナが一体何を企んでいるのかを考えていた。

◆◆

「セレナ様のお言葉が聞けるそうだぞ！　急げ！」
「おいこっちだ、急がないとセレナ様の御尊顔が見れなくなるぞ！」
あれから数日。
アクアの、ギルドへの出入り禁止措置が解けたのだが。
街の様子は何だかおかしな事になっていた。
「こっち、こっち！　セレナ様のお話が始まるわ！　早く早く！」
「ね、ねえ待ってよー！　どうしたの？　皆おかしいよ、セレナ様

セレナ様って……。唯のプリーストでしょー？」

そこかしこで聞こえるのはセレナ様と言うその名前。

あの魔王の幹部は、あっという間にこの街の聖女として崇められていた。

「……何ですか？　何なんですか？　この私が屋敷に封印されていた間に、一体この街に何があったの？」

「封印とか何カッコイイ言い方してんだ引き篭もり。お前が謹慎してる間に、あの女はこの街の顔になったんだよ」

久しぶりに屋敷から出て、街の様子に驚くアクアに言ってやる。

「……本当に胡散臭い女です。まあ、私はカズマが関わるなと言うなら何もしませんし言いませんが」

めぐみんが、俺とアクアの後を付いてきながらポツリと言った。

「……まあ、あの女の行い自体は褒められる物だしな。……何だか気に食わないが。私も、カズマが言うなら大人しくしていよう。何だかんだで、お前の忠告はいつだって的を射ている。私はもう、お前の言葉を無視して勝手な事はしない」

それに続いてダクネスまでもがそんな事を。

……なんだろう、ちょっと胸が痛い。

俺が魔王の幹部と取引して黙認していると知ったら、二人はどう思うだろうか。

蔑まれるだろうか。

ぶん殴られるだろうか。

でも、我が身可愛いさもあるが、こいつらの身の安全の事もあるのだ。

特に、アクアが女神だなんて知られれば、まず魔王が放っておくはずが無いと思う。
そう、関わらないのが一番だ。
俺は三人を連れて、ギルドへと……。

「セレナ様！　セレナ様！」
「セレナ様、どうか、どうか私の願いを！」
「はいはい、押さないで押さないで。どうか皆様順番に……！　レジーナ様は幾らでもあなた方の願いを叶えて下さいます、もちろん対価など要りません、さあ、どうぞ」
「ああっ、セレナ様！」

……その道中、セレナが多くの冒険者に囲まれていた。
それはあたかも、アイドルか何かが熱心なファンに取り囲まれている様な。

それを見たアクアが、コソコソと俺の背中に隠れる。
どうもここ最近言い負かされていたのが効いているのか、セレナに苦手意識を持っているらしい。
セレナは俺と視線が合うと、こちらに小さな会釈をした。

そんな中。

「セレナ様ー！　すいません、討伐の最中にコイツが怪我しまして……！　かなりの重傷で……！　どうか助けては貰えませんか！？」
街の入り口の方から冒険者が現れた。
二人の冒険者が、即席のタンカで重傷と思しき冒険者を運んでい

る。

それはかなりの重傷なのか、傷を負った冒険者は視線も虚ろで荒い息を吐いていた。

そして、聞き取れるか聞き取れないかぐらいの、微かな声でボソボソと。

「……クア……、アクア……の……姉ちゃん……の……所……」

その微かな声は、俺だけでなくアクアにもちゃんと聞こえたらしい。

「私なら、ここにいるわよー！　任せなさいな、そんな傷一瞬で完治させてあげるわ！」

アクアは頼りにされた事が嬉しかったのか、嬉々としてその重傷者に駆け寄ろうと……。

して、セレナの取り巻きの連中に遮られた。

「あっ、ちょっと何よ！　あんた達邪魔よ！　ゴッドブローで総入れ歯にされたいの!?　その人を癒さないと……」

アクアが憤る中、セレナが重傷者の傍に屈み込む。

そして……。

「『ヒール』！　『ヒール』！　『ヒール』ッ！」

セレナが何度も何度もヒールを掛け、重傷者の傷が塞がっていく。

やがて傷を負っていた重傷者は、虚ろだった目に光を取り戻し始めた。

「……あ、ああ……。ありがとうございますセレナ様……！」

先ほどまで、治療にアクアを指名していたその冒険者は、ハラハラと涙を溢しながら……。

……？

何だこれ。

魔法で傷を癒してもらう事なんて、冒険者にとって日常茶飯事だ。
だが、普通は傷を癒して貰っただけで、涙を零して様付けする事なんて無い。
アクアなんて、冒険者の蘇生まで行なっているのにこの有様だ。
もちろん感謝はすれど、彼らだって命懸けでモンスターと戦っている。
プリーストが傷を癒すのが仕事なら、彼らは傷を負い、プリースト達の盾になるのが仕事のはずだ。
その関係は、本来ならば対等なもの。
プリーストだけではモンスター退治なんて出来ないし、プリーストがいるかいないかで冒険者達の生存率は大きく変わる。

だから、セレナはプリーストとして普通に仕事をしただけだ。
もちろん、それに感謝するのは当たり前の事ではある。
あるのだが……。

と、傷があらかた塞がったその冒険者に、アクアが近付いて手をかざした。
見れば、傷が塞がったとはいえ未だあちこちに小さな傷が残っている。
セレナの力では、完治とまではいかなかったのだろう。
アクアがそれを癒そうと……。

ペシッ、と。

アクアのかざした手が払われた。

それも、重傷を負っていた冒険者自らの手によって。
「えっ……」
アクアが驚いた様に小さな声を上げる中。
「俺はセレナ様に癒して貰いたい。余計な事はせず、放っておいてくれ」
男は、アクアにキッパリとそう告げた。

アクアがとぼとぼと帰ってくる。
その寂しげな姿を見ながら、俺は何だか胸の辺りがモヤモヤしていた。
……違和感を感じる。
ダクネスとめぐみんは、複雑そうな表情でセレナとその取り巻きを眺めていた。

ニコニコと、張り付いた様なセレナの笑顔。
なぜこんな、弱い連中しかいない駆け出しの街で、魔王の幹部が何時までもこんな事をしているのか。
一体何を企んでいるのか。
もっと分かり易い悪事でも企んでいてくれれば対処のしようもあるのに。

もう取引なんぞ破棄してしまうか。
何だか、酷く胸の辺りがモヤモヤする。

セレナを取り囲む連中は、何だか操られているかの様に、狂信的にポッと出のプリーストに夢中になっている。
……唯の予想でしかないが、傀儡の力で操っているとか？

ああ畜生、胸の辺りがモヤモヤする！
でも、相手は魔王の命令でここを調べに来た幹部。
無事に帰って貰わないと、間違いなくここが狙われる。
ハッキリ言って、強面のチンピラに絡まれたってビビる俺だ。
それが、魔王に睨まれるだとか……！

……ポンと、肩を叩かれた。
「……カズマ。何を悩んでいるのかは知りませんが、私ならカズマの決めた事に従いますよ？　どんな事になっても後悔しませんから」

肩を叩いたのは、胸のモヤモヤが益々加速する事を言うめぐみんだった。

「……私はもうお前の言う事を無視して勝手な事はしないと決めた。世間知らずな私とは違い、お前は色々と考えての事だろうから。……だから。……お前の好きにやればいい」

セレナの正体を知っている俺からすれば、もう煽っているとしか受け取れない、ダクネスの言葉。

相手は魔王の幹部だ。

倒されると周囲に呪いを振り撒くらしいが、ひょっとしたらアクアが何とか出来ないものか？

いやいや短絡的になるな、やってみてダメでしたじゃ済まされない、危険な賭けには出られない。

一応相手は人間だし、状態異常が効くかも知れない。

不意打ち食らわせて麻痺状態にでもして、簀巻きにしてダンジョンにでも捨てて来るか？

いや、邪神を崇拝する様な奴だ、どんな加護があるかも分かったもんじゃない。

ああもう、相談相手もいないしどうしたら！

約束破ってウィズやバニルに相談するか？

でも、それを知ったセレナが、街に呪いを振り撒いたら……！

そんな俺の葛藤を他所に、セレナが笑みを湛えたまま近付いて来た。

アクアがビクリとして俺の背後に回る。

取り巻きを引き連れたまま、セレナが俺の隣を通り過ぎようと……。

……通り過ぎ様にセレナはその足を止め。

俺だけに聞こえる小さな声で、俺の耳元で囁いた。

「取引は覚えているな？　あたしの正体をバラすなよ？　それをやったなら、お前の所為でこの街に災厄が降りかかると思いな。……

しかしお前、苦しそうな顔をしているなあ。……ああ、お前には取引の他に金を貸してもらった借りがあったな。……正体を知っているバニルやウィズには頼らずに。そして誰にもあたしの正体をバラさず、お前一人だけがあたしの邪魔をするってのなら。……街に呪いも振り撒かず、堂々とお前の相手をしてやるよ。だが、お前はこっち寄りの人間だ。打算が出来る人間だ。そんな愚かな真似はしないって信じてるぜ？」

そのまま、セレナは笑顔を浮かべたままで通り過ぎた。

自然と拳を握り締める。

胸糞悪い。

俺は別に正義の味方でもないし、もちろん自分の身が一番可愛い。

それでも、何だかんだでこの街の連中にも愛着がある。

いや待て、よく考えろ、短絡的になるな。

ここで余計な事をすれば、場合によっちゃこの街自体がピンチになる。

いやでも、既にこの街は今ピンチなんじゃないのか？

俺一人にしか正体を教えないって所が一番いやらしい。

畜生、なんで……！

なんで俺一人でこんなに悩まなきゃいけないのか……！

……と、拳を握って動かなくなった俺の右腕に、めぐみんがそっと手を置いた。

ジッとこちらを見つめたまま、何も言わない。

「……な、なんでしょう」

「……」

俺が尋ねるも、めぐみんは無言で俺を見つめていた。

と、左腕にも何かが触れる感触が。

「……お前まで何だよ」
「……」
見れば、ダクネスが俺の左腕に手を置いている。
二人共、言いたい事があるなら言ってくれ。
……いや、長い付き合いだ、俺が何か隠している事ぐらいもう分かっているのだろう。
言えない事情がある事も、察してくれているのかも知れない。
……やってしまおうか。
今までは流されたり巻き込まれたりしただけだったが、今度は自分の意志で魔王の幹部に喧嘩を売る。
それを考えると腰が引ける。
最弱職の俺が、たった一人で魔王の幹部に喧嘩を売る。
……そんな大事に、一時の感情で流されていいものか。
でも、あと一つ。
あと一つ、吹っ切れる為のキッカケがあったなら。
……と。
「……何だよお前まで。お前は何か言ってくれよ」
俺は、服の背中の部分を掴んでくるアクアに言った。
こいつらは、三人とも無言で訴えてくるのは止めて欲し……。
「カズマさん。カズマさん」
アクアは二人とは違い、小さな声で言ってきた。
後ろを振り向くと、普段はテンション高く、落ち込むなんて言葉を知らないアクアが。

あの、物事を深く考えもせず、悩みとは無縁そうなアクアが。
先ほど、冒険者に手を払われたのがよほど堪えたのだろう。
珍しく落ち込んだ様子で、上目遣いで不安気に言ってきた。

「……私、この街にいらないプリーストですか？」

……。

「おい、離せ」

俺は、腕や服を掴む三人に静かに告げる。

「あ……」

アクアはよほど落ち込んでいるのか、ぶっきらぼうな俺の物言いにも文句も言わず、素直に服を手放した。

そのアクアに背を向けて。

「おい、支援魔法を頼む。筋力強化と、速度が早くなるやつな」

その言葉に、アクアは何も言わず、俺に素直に魔法を掛けた。

俺は既に三人を見ていない。

だから、三人が今どんな表情をしているのかも分からない。

「おいアクア」
「？　なに？」
俺は去って行くセレナから視線を逸らさず、背中のアクアに。
「多分、今から俺、気を失うと思うから。そうしたら治療を頼む。後、ダクネスは気を失った俺を屋敷に持って行ってくれ。めぐみんは、セレナの取り巻き連中が騒ぐだろうから、それをなだめる役目を頼む」
「な、何？　おいカズマ、一体何を言っている」
「ちょっ、カズマ、何をする気ですか？」

俺は三人に告げた後、その場に屈み、クラウチングスタートの姿勢を取る。

視線の先にはこちらに背を向け、悠然と去るセレナの姿。

「カズマさんカズマさん、何するの？」

そんなアクアの声を聞きながら。

「お、おいカズマ！　待て、いきなり何をする気だお前……！　私は好きにやればいいとは言ったが、怪しいと言うだけでまだ相手は犯罪行為をした訳ではないのだし、あまり手荒な事は……！」

支援魔法で強化された俺は、セレナに向かって猛然と駈け出した。

「カ、カズマ、何をする気かは知りませんが、何だかカッコイイですよ！　紅魔族的には大変ワクワクします！」

俺の名は佐藤和真。
真の男女平等の名の下に、女の顔面にドロップキックだって放てる男。

「めぐみん、煽るな！　カズマ、ちょっ、待っ……！」

俺は仲間達の声を背中に受け、思い切り助走を付けたままセレナに向かって駆け寄ると……。

「今日はお互い寝るとしようぜ！　お前の妨害に、明日から本気出すわ！」

声に驚き、振り向いたセレナの顔面に、俺は助走を付けたドロップキックを叩き込んだ。

15話（後書き）

重い話はこれでしばらくなしです。
あんまり重くなかったと言われても謝らない。

16話

薄暗い部屋の中。

「……自分がいつまでも温厚でいると思うなよ。もう一度だけ聞くぞ。……サトウ殿。貴公は先日、何の罪も無いプリーストにドロップキックを食らわせた訳だが、この件において間違いはないな？」

「ないです」

もう何度目かになる俺の素直な返答に、目の前の茶髪の女騎士が、コメカミをひくつかせながらも頷いた。

「……よし。では、貴公は突然通りすがりのこのプリーストの後ろ頭が気になって気になって仕方がなくなり、発作的に追いかけ、ドロップキックを食らわせたくてしょうがなくなった。そして、その気配に気付いたプリーストが振り向いた為、貴公は彼女の顔面にドロップキックを食らわせてしまったと。つまり、ムシャクシャしてやった。こういう事か」

「そういう事です」

パキンという音と共に、女騎士の握っていたペンがへし折れた。

「……そのプリーストは、私が先日、ダスティネス卿の命により身辺調査を頼まれていた相手なのだが、今回の件に関してその辺は全く関係ないんだな？」

「な、ないと……。思います……」

女騎士が、手にしていたペンの残骸を投げ捨てた。

そして、バンと俺と女騎士の間にある机を叩くと……！

「貴様！　我々を無能な大馬鹿者だとでも思っているのか！　あのプリーストについては我々も色々と調べているのだ、そんないい加減な言い訳が本気で通じるとでも思っているのか！」

「や、止めろお！　暴力による違法な取り調べだ！　弁護士だ、弁護士を呼べえ！」

机越しに俺の胸ぐらを掴んでくる女騎士。

その手から逃れようとするが、いかんせん今の俺は両手を鎖で拘束されている。

逃げようとした所を、手に繋がれた鎖を引っ張られ、あえなく女騎士に首根っこを掴まれた。

「サトウ殿！　自分とてこの街の騎士の端くれだ！　この警察署の監督を任されている者だ！　当然、最近この街がおかしな雰囲気になっている事ぐらい、自分にだって分かる！　貴公は何かを知っているな？　貴公は悪名高いとは言え、何の意味もなく女性に蹴りをくれる男ではないはずだ！　度々この街に貢献している貴公の功績から考えみるに、何かある！　さあ言え！　何を隠している！　そして、この街に何が起こっている！」

「お、俺は何も知らない！　や、止めろお、お前ダクネスの家より格下の騎士だろ！　チクるぞ！　取り調べの際に、あんたからとても口に出せない様なセクハラされたって、ダクネスにチクってやるからな！」

「お、おい、捏造するな！　大体、ダスティネス卿は公正で知られる方だ。貴公がダスティネス卿と同じパーティなのは知っているが、あの方はそんな事を言われたぐらいで不当に権力を行使したりはしない。残念だったな！」

堂々と宣言しながら、俺を上から押さえ込み勝ち誇った笑みを浮かべる女騎士。

悔しいっ！

「し、失礼します！」

そんな折、ドアの外から声がした。

女騎士は、俺から視線は外さずに。

「なんだ、自分は今忙しい。先ほどから屁理屈ばかりゴネるこの男を……！」

「その……。ダスティネス卿がお見えなのですが……」

「！？」

そのドアの外の声に、茶髪の女騎士が俺を掴んでいた手を離した。

ここは街の警察署内の取調室である。

セレナに大衆の面前で蹴りをくれてやった俺は、気が付くとここの中に拘留されていた。

セレナへの攻撃は、やはり全て跳ね返ってくるらしい。

ドロップキックをくれてやった瞬間に強烈な激痛と共に気を失った俺だったが、あの後アクアが治療したのか、今は痛みも傷もない。

そして現在。

先ほどから、ここの警察署の署長を務めているらしい、女騎士直々に事情聴取を受けていた訳なのだが……。

「ダスティネス卿がどうして此処に？　あの方は公正な方だ。仲間だから手心を加えろとはおっしゃるまい。何か隠しているこの男から聴取が終わり次第、ダスティネス卿の元へ顔を出す。この男は曲がりなりにもかなりの功績のある冒険者だ。留置場内での短めの拘

留措置だけで済むだろう。ダスティネス卿にはそれを伝え、詳しい事は後で報告すると、そう伝えてくれ」

女騎士が、取調室のドアに顔も向けずにそう告げた。

マズイなあ……。

俺としては、セレナの事をペラペラ喋る訳にはいかない。

頭の硬そうなこの女騎士やダクネスなんかには、特に言う訳にはいかない。

ダクネスに頼んでここから出してもらうつもりでいたのだが、不正を嫌うダクネスだ。

事情も話せないとあっては、流石に聞く耳持ってはくれないだろう。

そんな事を考えていると、報告に来た男の困った様な声がした。

「そ、それが……」

「……？　どうした？」

報告に来た男の様子に、女騎士が怪訝そうにドアの方を振り向くと。

スッとドアが開けられて、そこには……、

「ああ、すまない私だ。勝手に入らせて貰っている」

報告に来た男の後ろに、ダクネスが居た。

男が一礼し、ドアの外から立ち去る中。

女騎士はダクネスの姿を見るやいなや、途端に直立し、敬礼した。

女騎士から開放された俺が叫ぶ。

「ララティーナ様ー！」

「こ、こらっ、ララティーナと呼ぶな！　……失礼。ええと、どう

だ？　この男から何か聞き出せたか？」
　俺の呼び掛けに若干困った顔をしながら、ダクネスが女騎士に尋ねた。
　女騎士が直立不動の姿勢のままで。
「ハッ！　この男、何かを知っているのは間違いないのですが、遊ぶ金欲しさにやっただの、ムシャクシャしてやった、今は反省しているだのと、聞く度に動機や言い訳がコロコロ変わり……。少々お待ちを、必ず隠している何かを吐かせてみせますので！」
　その生真面目な女騎士の返事に、ダクネスが俺を真っ直ぐ見つめた。
「……カズマ。あの女の秘密は、私やめぐみん、アクアにも話せない事か？」
　それに、俺は無言でこっくり頷いた。
　それを見て、ダクネスがしばらく無言になる。
「……誰かに話すとマズイ事になるんだな？　この件は、お前一人で解決する。そういう事か？　……答えられないなら無言のままで構わないぞ」
「……」
　俺は無言のまま、ダクネスの目をジッと見る。
　やがてダクネスの方から目を逸らし、そして女騎士の方をチラと見て、後ろめたそうに目を泳がせながら頬を掻く。
　そして、女騎士に実に申し訳なさそうに。
「ん……、その……。署長。どうだろう、ここは一つ、私の顔を立ててこの男を見逃してやってはくれないか？　これまでのこの街での功績、そして今回は初犯という事で……」

「はっ？　……ええっと。その。……ほ、本気ですかダスティネス卿？　被害者からは被害届は出ていませんから構いませんが……。しかし、そういった事に権力を使う事を嫌っていたあなたが？」

女騎士が、驚きと共に戸惑った表情で俺とダクネスを交互に見る。

ダクネスを見る女騎士のその顔は、信じられないとでも言いたげな表情だ。

女騎士は驚いた顔をしながらも、俺の片手に繋がれている手枷の鍵をダクネスに手渡した。

と言うか、多分俺がダクネスを見ている表情も女騎士と同じような顔だろう。

領主に身売りする様な状況に陥ってすら権力の行使をしなかったコイツが、こんな形で力を使うとか。

そんな俺や女騎士の視線を気にもせず、ダクネスが。

「カズマ、何も言わなくていい。後の事はお前に任せた。だが、後始末ぐらいは私に任せろ。……その、こんな時ぐらいは私を頼れ」

「ダスティネス様ー！」

「こっ、こらっ抱きつくな！　暴れると鎖が解けない！」

頭の硬いダクネスが。

あの、規律やら人としての義務だとかに口やかましいダクネスが。

自分を曲げてまで俺を信じて助けてくれた事に嬉しくなり、鎖をジャラつかせてしがみ付くと、ダクネスが抱きつかれたまま抵抗もせず、困り顔で俺の手枷の鎖を解く。

そんな俺とダクネスの様子を見ていた女騎士は、呆然とした表情のままダクネスに。

「そ、その……。ダスティネス卿、サトウ殿とはただのパーティメ

ンバーな間柄ではないのです……か……？」
おずおずと。
そんな事を聞いてきた。

ダクネスは若干頬を赤らめつつも、無表情を装って、俺の手の鎖を解きながら。
「……ただのパーティメンバーだ。……そうだな？　カズマ」
「……まあ一応」
俺の返事に、ダクネスがホッとした様な、それでいてその顔に、どこか寂しそうな翳りを見せた。
それを聞いて、女騎士もホッとした様に息を吐く。

「で、ですよね……。ダスティネス卿は、凛としていて自分に厳しく、自分達独り身の女騎士達の憧れの様なものです。それが、こんな悪名高い男に……。しかも、平民の男となんて無いですよね……。そうですか、パーティメンバー……」
「そうです、パーティメンバーです。一緒に狭い空間に閉じ込もって二人きりで密着してみたり、ダクネスの実家に夜這いに行って押し倒したり、最近では、逆に俺がベッドに押し倒されたり。そんな程度の間柄です」
「！！？！」
「ちちち、ちがー！？　違うんだ、そそ、それはちがー！」

愕然とした表情で立ち尽くす女騎士と、途端に慌てふためくダクネス。

「おおおお、お二人は……！？　その、アレですよね！　仲間同士ですもの、お遊びと言いますか、じゃれ合っているとかそんな感じですよねダスティネス卿！」
「あわわ、そ、そうだ、そんな感じで！　そんな、そんな感じなの

で……！」

なぜか必死な女騎士と、オロオロと言い訳するダクネス。

俺はそんな二人を見ながら手枷を付けられていた部分をさすり。

「……キスはされた」

「「！？」」

女騎士が、立ち尽くしたまま赤い顔で口をパクパクさせる中。

ダクネスが、耳まで赤くして俺の背中に顔を埋め、そのまま背中にしがみついたままズルズルと崩れ落ちていった。

警察署から無事開放された俺は、ダクネスに愚痴られていた。

「……全く。お前と言う奴は全く。どうするんだ、あれでは他の貴族や騎士達に噂される。もうお前が捕まっても私は助けに行かないからな。……と言うか、もう絶対あそこには行けない……っ！」

「でも嘘は何一つ吐いていないんですが」

未だ赤い顔をしているダクネスが、俺の言葉にキッと睨みつけてきた。

しかし若干ソワソワし、困った顔ながらも、別に怒っている様子ではない。

そこまで機嫌は悪くなさそうだと踏んで、俺はダクネスに切り出した。

「なあダクネス。頼みがあるんだ」

「どうか、恥ずかしがらずにお話下さい。さあ、どんな悩みでも遠慮なさらず……あら、これはこれはカズマ様」
「やあセレナ。カズマ様だなんて余所余所しい。呼び捨てで構わないさ」

冒険者ギルドの前の通りでは、セレナが一人の悩んだ様子の冒険者に手を差し伸べていた。
そこに丁度出くわした俺は、こちらにニコニコと笑い掛けてくるセレナに、こちらも同じく笑い掛ける。

ダクネスには、アクアやめぐみんと共にしばらく家から出ない様に頼んでおいた。
更にはアクアに、屋敷に念入りに結界を張る様に。そして、アクアとめぐみんに、俺がしばらく帰らない事を伝えて貰った。

セレナは、先日俺に攻撃を受けた事など無かったかの様に、平然と話し掛けてくる。
俺も何事も無かったかの様に、笑みを浮かべたまま話し掛けた。
「相変わらず迷える冒険者達の相談に乗ってやっているのか。毎日大変だな。手伝ってやろうか？」
「いえいえ、お忙しいカズマ様の手を煩わせる訳にも参りませんから。どうか、カズマ様はそのお力でモンスターなどを退治に行かれ

てはどうですか？」

何気ない世間話をしているだけなのだが、セレナの取り巻き冒険者達がなぜか怯えた表情を浮かべる。

取り巻きの連中は、先日、俺がセレナにドロップキックを食らわせた際に居合わせていた者が多い。

彼らの目には、そんな事があったというのに自然に会話している俺とセレナが奇異に映ったのだろう。

セレナにやんわりと断られたにも関わらず、取り巻きから少し離れた位置に腰を下ろした俺を、取り巻き含め、セレナが少し迷惑そうな顔でチラチラと気にしていた。

しばらく俺を気にしていたセレナは、やがて気を取り直したかの様に。

「……失礼しました。では、どうかあなたの悩みをこの私に話しては頂けませんか？」

俺とセレナのやり取りを見守り、大人しく待っていた冒険者に、にこやかな笑顔を浮かべて言った。

その冒険者は、しばらく逡巡した後、意を決した様に。

「その……。俺、どんなに告白しても上手くいかなくて。いつも、女性とそこそこ仲良くなると、大概の女性はあなたってとっても良い人ねって言ってくれるんです。言ってくれるんですけど、じゃあ俺と付き合って欲しいって言うと、やんわりと断られるって言うか……」

ありがちな話だ。

俺は興味も無さ気に地面の小石を拾いあげ、指で弾いて飛ばしていると、そんな俺の行動をちょっと気にしながら、セレナが悩める冒険者にニコリと笑う。

「良い人と言うのは、最高の褒め言葉ではありませんか。格好の良い人というのは、いずれ年と共にその魅力は衰えていきます。でも、良い人というあなたの魅力は、年を取っても決して色褪せない素敵な魅力です。……そのまま良い人でいて下さい。色んな方に良い人と呼ばれるあなたは、とても魅力的な方だと思いますよ？　悩んだり、落ち込んだりするのはまだ早いです。あなたの事を好きだと言ってくれる方が、必ず現れますから……」

穏やかに笑みを浮かべて、当たり障りの無い助言をするセレナ。

こういった悩み事には、一々邪神の力は使わない様だ。

相談していた冒険者は、暗かった表情を少しだけ輝かせ。

「は、はい……！　その、毎回同じ断られ方ばかりするもので、少し落ち込んでいたんですが……。おかげで少し元気出ました！　セレナ様、ありがとうございい……」

「そんなにそいつが魅力的だと言うのなら、セレナが付き合ってあげたら良いじゃない」

冒険者がセレナに礼を言う寸前。

俺が無責任に放った一言に、セレナや取り巻きが固まった。

悩みを打ち明けていた冒険者が、ゆっくりと俺を見る。

その顔は、その発想は無かったとでも言いたげで、それでいてどこか不安そうな。

そんな冒険者に、俺はそっと後押ししてやる事にした。

俺だって、たまには人助けだってするのだ。

鬼畜だの何だの心無い事を言われちゃいるが、目の前で困っている奴がいれば俺だって。

「セレナはあんたの事を魅力的だとまで言ってくれたんだぞ。ここまで向こうから積極的にアピールしてるのに、あんたが勇気を振り絞らなくてどうすんだ！　お前さんが今まで振られてきたのは、今この時、セレナと結ばれる為だったんだよ！」

「ま、マジかよ！　よ、よし……。セレナ様！」

「い、良い人なんですけどちょっと……」

まだ告白もしていなかった冒険者は、セレナに先に言われ、ワッと声を上げて駆け出そうと……。

その逃げようとする冒険者の手を俺は咄嗟に捕まえた。

「お前、いきなり諦めてどうすんだ！　女の言う事真に受けるなよ、言葉の裏を読め！　お前ツンデレって言葉知らないのかよ！」

「……ツン……デレ……？」

「あ、あの……」

冒険者の説得を始めた俺を、セレナが不安そうな声を上げ、一筋の汗を垂らして見つめている。

「嫌よ嫌よも好きの内。お前、この有名な言葉を知らないのかよ」

「き、聞いた事がある、その言葉！　そうか、女の言葉の裏を……！」

「ちょっ……！」

俺に煽られた冒険者が、セレナの手をギュッと掴んだ。

「セレナ様！　俺、俺……！」
「待って下さい、ちょ、ちょっと落ち着いて……！　ああっ、テメ……、カ、カズマ様……！」
セレナの声を背に聞きながら、明日からの妨害活動の拠点を探す為、俺はその場を後にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺が警察署から開放された時から、数日が経った。
とある飲食店から出てきたセレナ、そして数人の取り巻き連中が、周囲の様子を警戒する様にキョロキョロと辺りを伺っている。
恐らくは、ここ数日の何者かによる嫌がらせを警戒しての事。
すっかりセレナの取り巻きと化した冒険者の一人が、セレナへ何事かを話し掛けていた。
想像だが、大丈夫ですセレナ様、辺りに誰もおりませんとか、そんな所だろう。
そんな、セレナと取り巻きの姿を。
「……風良し。距離良し。角度良し」
俺は、しっかりと捉えていた。
セレナが出てきた店から、遠く離れた建物の屋上で、弓に矢をつ

がえた状態のまま。

現在千里眼スキルで遠視中。

この距離なら、こちらからは確認出来ても向こうからは俺だと認識出来ないだろう。

もっとも、セレナ本人には誰から攻撃を受けたかは分かるだろうが。

これでセレナの頭を狙っても、もれなく俺も一緒に死んでしまう。

それどころか、ヤツの脅しが本当ならば、付近の住人に呪いが撒かれる。

視線の先、遠く離れた場所に立つセレナの手には、出てきた店で買ったと思われるカップが握られていた。

中身が何かは知らないが、冷えたジュースかコーヒーか。

おあつらえ向きだ。

矢の先は丸く削り、万一セレナに当たっても命に関わらない様にはしてある。

今からやるのは暗殺じゃない。

そう、俺がここから狙撃スキルで狙うのは……。

ビュッと風を切る音と共に、手にしていた矢が放たれた。

その矢が狙うのは……！

「っっ！　あづあああああ！　っっ、夏も近いのに熱いコーヒー飲んでんじゃねえ！」

俺は突然自分の手を襲った熱さに耐えかね、転がり回った。

遠くセレナも、手にしていた熱々のコーヒーカップを撃ち抜かれ、手に掛かったコーヒーを、慌ててバタバタと払っている。

クソ、これもダメか。

俺は気を取り直して立ち上がり、遠く離れたセレナを見る。

この数日の嫌がらせで、色々と分かった事がある。

まず、間接的な攻撃を仕掛けても自分にダメージが返ってくる事。

直接狙撃するのではなく、今の様に俺が射抜いてこぼしたコーヒーで火傷をすると、それすらも返ってくる。

間接的な事象は大丈夫だったなら、ウィズの店で、衝撃を受けると爆発するポーションでも買ってくる所なのだが……。

セレナは、自分の手を治療しながら辺りをキョロキョロ見回している。

見つかる事は無いとは思うが、念の為に場所を移しておくとしようか。

次に、セレナの力について分かった事。

「あ、あの、カズマさん……？　その、手伝って欲しい事があるって聞いてついて来ましたが、これってひょっとして犯罪なんじゃあ……？」

それは、やはりあの冒険者達の豹変ぶりは、セレナの力が関係していると言う事。

そして、セレナの事を様付けで呼び、無条件でセレナの言う事に従う連中にも、個人差がある事。

だが一つだけ共通しているのは、セレナの信者みたいになっている連中は、皆セレナに深く関わった事のある人間だけだ。

「まあ、行為自体は褒められた事じゃないけどな。……頼むよゆんゆん、今の所、めぐみんにも頼れないんだ。ゆんゆんだけが頼りなんだよ」

「やります。超やります、手伝います。友達ですもの、任せてください。幾らでも頼ってください」

頼りにされたのが嬉しいのか、鼻息荒く拳を握るゆんゆん。

時刻は深夜。

俺の無茶なお願いにも関わらず、以前ギルド内でセレナに相談していたはずのゆんゆんは、こうして拒否する事無く手伝ってくれている。

他の冒険者の様に相談に行ったはずなのに、ゆんゆんだけはしゃんとしていた。

ゆんゆんが傀儡の邪神にすらハブられているのでもない限り、セレナと関わったのに平気でいるというのはなぜだろうか。

俺とゆんゆんが今居るのは、セレナが寝泊まりしている、窓一つ

無い頑丈そうな小屋の前。
セレナはここ最近、何者かの謎の攻撃に晒されているらしく、セレナの取り巻きの連中が、こうして窓も無いしっかりした作りの小屋を用意した。

いくら取り巻きとはいっても、流石に見張りはしていない。
俺はゆんゆんを引き連れて、小屋の前で準備を始めた。

俺はゆんゆんに合図を出す。
それを受け、ゆんゆんがコクリと頷きあまり大きくない声で魔法を唱えた。

それは紅魔族が大好きな、光を屈折させる魔法。
そう、姿を見えなくする魔法である。
それを俺の周りに掛けたゆんゆんは、小さな声で囁いた。
「これでいいんですかカズマさん？　後はドア付近の音を消す、サイレントの魔法ですね？　と言うか、ここ最近街の様子が変ですけど、カズマさんがやっている事に何か関係があるんですか？」
「あるある。これは一見犯罪に近い行為だが、この街をコッソリ救う為の正義の行いだから、安心してくれ。あ、今夜の事は他言無用で頼むよ」
「……はい……」
「あっ……！」

他言無用と言う言葉を聞き、そもそも他言する相手がおらず、涙目になって項垂れるゆんゆんを慰めながら俺も魔法の準備を始める事に。

恐らくは大量の魔力を消費する。
事前にウィズの店で買っておいた、マナタイトと呼ばれる石を取

り出した。
石が大きく純度が高いほど、値段も跳ね上がり内に秘める魔力も高い物らしいが、俺が買ってきたのは中位の石を数個。
季節は夏が近いとは言え、この時間帯はまだまだ肌寒い。
そうそう朝までに溶ける事も無いだろう。
俺は右手を小屋の前にそっとかざすと……！

明け方頃から仮眠をとり、セレナが寝泊まりしている小屋の前を通ってみる。
すると……。
「ッ！　ッッ！　ッッッ！！」
何か、小さな悲鳴の様な声と共に、小屋の中からドンドンと扉を叩く音。

「セレナ様！　今この分厚い氷を何とかします！　ですので、もう少々お待ちを！」
「ああ、だから言ったんだ！　こんな倉庫ではなく、ちゃんとした警備がいる宿屋を用意しようと！　そうすれば、トイレだって付いていたのに！」
「仕方ないだろ、金が無いんだ！　ああっ、セレナ様、トイレはも

う少し我慢して下さい！　おい、炎系の魔法を使える冒険者かお湯はまだか！　それか、ハンマーか何かで叩き割れないのか！」
「これ、ハンマーじゃ無理だよ！　どこの捻くれた奴がやらかしたのか、執念深く念入りに水を掛け、ドアの周りをガチガチに分厚く凍らせてある。ああもう、どうしたら……！」

しかし、セレナの目的が未だに見えて来ない。
この駆け出し冒険者しか居ない街で傀儡化した信者を増やして、一体なんの意味があるのか。
ゆんゆんに姿を見えなくして貰った後、夜通しクリエイトウォーターとフリーズでせっせと凍らせ続けた小屋のドア。
俺はセレナの目的と今後の事について考えを巡らせつつ、それが溶かされるのを離れた所でぼーっと眺めながら露店で買ったかき氷を頬張った。

◆◆

更に数日が経過した。
ちょっとダクネスに連絡を取ってみたが、アクアが外に出たいと駄々をこねている以外は特に何事も無いらしい。
セレナが痺れを切らし、俺ではなく屋敷の皆に攻撃を仕掛けに行くかと心配したが、今の所なかなかに我慢強い様だ。

俺は黙々と次の仕掛けを作りながら、考えを巡らせていた。

最近、セレナが目に見えて弱ってきている。

つい先日、彼女の悪い噂を流したのが余程堪えた様だ。

「こ……、ここ、こんな所にいらっしゃいましたかカズマ様……！ずずず、随分と、さ、探したぜ……、ささ、探しましたですわよ？」

俺が作業をしてる中、聞こえてきたのは隠し切れない強烈な怒気を孕んだ声。

既に言葉遣いも何だか怪しい背後からのその声に、俺は平然としながら振り向いた。

「やあセレナ、久しぶり。どうした、そんな怖い顔して。取り巻きの人達も怯えてるだろ」

俺が拠点として借りていた宿の裏庭。

普段はここで、馬小屋で寝泊まりしている冒険者達が、剣の素振りをしてみたり、鎧を干したり手入れをしたりと色々やる場所なのだが。

今日はあまり客がいないのか、今現在は俺が一人で専有していた。

俺のフレンドリーな挨拶に、セレナが口元をひくつかせながらも笑顔を浮かべ。

「ええ、お久しぶりですカズマ様。……それは何をしているのですか？」

セレナが、庭で俺がいじっていた物を見て、訝しげに聞いてきた。

「風船って知らないか？　これはな、水風船って名の水で膨らませるアイテムだ。水の代わりに、中にサラサラの糊と塗料を混ぜた物を流し込んで膨らませようかと」
「おい止め……！　……何に使うつもりかは知りませんが、それを悪用なさるならわたくしにも考えがありますよ？」
言いながら、セレナが一歩後ろに下がった。
それと同時に、セレナの後ろに控えていた数人の取り巻き冒険者が前に出る。

「……おい、なんの真似だよ」
「何の真似とは何でしょうか。……と言うかな、もう限界に近いんだよ。この連中はもうほぼ完全に傀儡と化してる。こいつらはあたしの言いなりだ。お前を殺せと命じれば、躊躇なく殺すだろうな。……いや、お前を舐めてたよ。舐めてたぜ。……いやいや、本当によくもまあ、たった一人でここまでやってくれたなあ……！　やってくれたよなあオイ！」
辺りには俺とセレナと取り巻きしかいない。
セレナは、顔は笑みを浮かべているが目がちっとも笑っていない。
しまったやり過ぎたか。

「おい、お前が俺一人で妨害出来るならやってみろって煽ったんだろうが、幹部が最弱職の俺に反撃してくるとかズル……」
「うるせえよおおおおおおおおおーっ！！」
俺の抗議がセレナの絶叫によって防がれた。
これはいけない。

「おおおお、お前よくも……。あたしの事をよくもまあ、面白おかしく愉快な噂流してくれたな！？」
セレナが血走った目で俺を見る。

「お、おい待てよ！　俺は約束通りお前の秘密は言っていない！　なら、チンピラ冒険者に金払ってどんな噂を流そうが、別に構わないはずだろうが……」

「構わない訳、あるかあああっ！　てめえよりにもよって、あたしが男!?　男だと?　普段の口調はもっと荒くて一人称はあたしだとか、微妙に本当の事も混ぜて流しやがって……！　ふざけやがって、色んな奴が確認に来たわ！　中には、むしろ男の方が……とか言い出す奴まで……！　どうなってんだよこの街は！　てめえ……、てめえ殺してやるっ！」

セレナが魔法か何かを唱えようと、目を血走らせて腕を振り上げ……！

俺は通行人のおっちゃんの姿に気が付き、咄嗟に声を上げた。

「や、止めろ、落ち着け！　ほら、人が！　通行人が見てる見てる！」

「！　……お、おはようございます、良い天気ですね」

「ああ、これはセレナさん、おはようございます、良い天気ですね！」

流石はこの街の聖女、セレナ様。

どうやらその通行人とは知り合いらしい。

セレナは当たり障りの無い世間話を始め、取り巻き連中はよほど傀儡化が進行しているのか、皆虚ろな視線でボーッとしていた。

マズイな、魔王の幹部がマジ切れしやがった。

謀略担当とか言っていたからもっと頭脳戦とかになるかと思っていたが、アッサリと街中で実力行使に出てくるとは思わなかった、どうしよう。

俺一人でセレナと傀儡化した取り巻きを相手に戦う。

うん、無理だ。
多分瞬殺されてしまう。

セレナは会話も終わりに入り、おっちゃんはそろそろ立ち去ろうとしている。
「では、あなたの今日一日の無事を祈って、祝福の魔法を……」
「ああ、これはどうもセレナさん、ありがとうございます」

警察署にでも逃げるか？
いや、俺は足が遅い方ではないが、セレナが取り巻きを支援魔法で強化すれば簡単に追い付かれる。
と、セレナが両手を自分の胸の高さまで上げそれを組み、祈りを捧げるようなポーズを取った。

……チャンスだ。

「では、貴方様の今日一日の無事と幸運を願い、祝福を」
「『ウインド・ブレスト』ッッッ！」
「！？」
セレナが通行人に魔法を掛ける寸前。
俺は、手を下から上に勢いよく。
まるでセレナのスカートめくりでもするかの様に、手をバッと振り上げて、地面側から上に向けて風の魔法を発動させた。

それを受け、両手を胸の高さまで上げていたセレナは、着ていたローブを頭上まで、思い切り捲り上げられた。
普段は清楚なロングスカートも、こんな時には命取り。
頭の上までローブの裾が捲れ上がった事を確認し、セレナの上半身、頭から上を狙い、腰に下げていたワイヤーを投げつけ……！

「『バインド』ーっ！！」
「ちょっ！」

ローブの中からくぐもった声。
そのまま捲れ上がったローブごと、バインドでセレナを拘束した。
通常ならばただの時間稼ぎ程度のこの技だが、今は……！

「セレナ様っ！？」
「セ、セレナ様が！」
「セレナ様が茶巾包みにっ！」

バインドで上半身を拘束され、まるで茶巾包みの様な姿になったセレナを見て、ほとんど傀儡と化していたはずの冒険者達が一瞬だけ我に返った。

「ああ、ありがたやありがたや……！　なんて神々しい清楚なケツ……！」

今までセレナと会話していた通行人が跪き、セレナの下着姿の尻を拝みだす。
「ちょっ……！　待っ……！　止めっ……！」
セレナが茶巾状態になったローブの中でもがいているが、以前ダクネスにも使ったバインド用の特注ワイヤー。
幹部とは言え一応は人間のセレナに、もがいてどうこう出来る物ではない。

「ああっ！　ケッ、ケツが、ケツがああっ！　セレナ様のケツが公に……！」
「ちょっ、隠せ隠せ！　囲んで隠せ！　壁になれ！」
「セレナ様が、セレナ様が黒下着だなんて……！　漲ってきた……

！」

なぜか半分ぐらい正気に戻ってきている冒険者達が、それでもセレナの下半身を隠そうと壁になる。

もはや取り繕っていられる余裕が無くなったのか、セレナがローブ越しにくぐもった声で喚きだした。

「てめえサトウカズマ！　覚えてやがれ、タダで済むと思うなよ！　この拘束が解けたらどうなるか……！」

どうなるのかは知らないが、怖いので今の内に対抗策を打ち出す事に。

俺は深く、深く、息を吸い。

街中に轟く大声で。

「大変だあああああああ！　聖女と名高いセレナ様が、下半身丸出しでここに居るぞーっ！！」

「やややや、止めろおおおおおおおーっ！！」

17話

「また来ましたかサトウ殿」
「また来ちゃいましたよ署長さん」

間に小さな机を挟み、俺と見つめ合う女騎士。
再びの事情聴取である。

セレナの下着大公開事件の張本人として、俺はまたも警察署に収監されていた。

流石にあの騒ぎはまずかった。
取り巻き達は、セレナのローブを破る事も出来ず、気合と魔力を込めに込めた俺のバインドは、セレナを長時間茶巾状態にした。
俺の呼び掛けに集まった人々が、セレナの周りに人だかりを作り、セレナの尻を肴に酒の路上販売まで始まる盛況ぶり。
騒ぎを聞きつけ駆けつけた警察に、俺はまたも逮捕された訳なのだが。

警察署内の狭い部屋の中。
ここの署長である女騎士が溜息を吐く。
「サトウ殿。ハッキリ言おうか。迷惑だ」
「そんな事言われても、俺だって困ってるんですが」

俺が再び捕まり、警察の職員がダクネスの元へお伺いを立てに行ったらしい。
だが、ダクネスいわく、もう身元引受人にはなりたくないとの事。
前回、この女騎士の前でダクネスをからかった事が災いした様だ。

「……今回は、あのプリーストから被害届が出されている。流石にこれは、ダスティネス卿と懇意の仲のあなたでも簡単に釈放する訳にはいかない。釈放するならばそれなりの立場の人間が、貴公の保証人となってもらわないと……」
「まあそうですよね」
流石に何度もダクネスに頼るのも申し訳ない。
身元を保証して貰っても、多分また捕まりそうな事を今後も続けるつもりだし。

俺の言葉に女騎士が、再び深々と溜息を吐く。
そのまま机に突っ伏して、今までの真面目そうな態度とは一変し、机に突っ伏してバタバタしながら頭を掻き毟りはじめた。
「ああもう！　ああもうっ！　なぜまたすぐにとっ捕まるのだ！　多少手荒な事をすれば、貴公ならウチの職員から逃げられただろうに！」
「おい、署長が言っちゃっていいのかそれ」

俺の言葉に女騎士がバッと顔を上げ。
「大体、あの女はなんだ？　彼女の下着を見た者は、軒並み彼女の熱心な信者となってしまった。確かに彼女の素行は良い。変わり者が多いこの街において、珍しく良識ある人間だ。……だが、幾らなんでも信奉者の増えるペースがおかしい。あれか？　下着か？　下着見せてもらったから、信者になりますって言うのか？　堅物な自分でも、下着の一枚でもチラ付かせればファンが出来るのか？　この街の連中がアレなのは、職業柄自分が一番分かっているが……。ああもう、いっそ自分も……！」

……！？

「あの時の見物客がみんな信者に？　パンツ見ただけでか？　いや、俺だってプリーストのお姉さんがパンツ見せてくれる宗教団体ならそりゃ入りたいが……」

違和感を感じる。

サキュバスサービスで訓練されたこの街の連中が、今更セレナの下着を見たぐらいで……？

いや、良い物を見せてもらったとお礼ぐらいは言うかもしれないが、下着見ただけで信奉者とかは流石におかしい。

……お礼。

なんだろう、引っ掛かる。

復讐の神様に仕えているって所にも何かありそうだ。

セレナの傍にいた取り巻き達。

彼らの中には、セレナに重傷を治して貰った男がいた。

そりゃあ、あれだけの傷を治して貰えたなら信者になるのも仕方がないのかもしれない。

だが、それ以上の治療をアクアだって行なってきていたはずだ。

普段の素行がと言われれば何も言えないが、蘇生までしたアクアの方が、もっと崇められそうなものだ。

なんだろう、後少しの所まで来ている気がする。

セレナの元へ相談に行ったが、願いを叶えてもらえなかったゆんゆんはまともでいられた。

そして、セレナが俺の手によって下着姿になり、それを拝んだ連中は軒並み信者に。

つまり……！

「サトウ殿！　ぼーっとしていないでちゃんと答えて頂きたい！　あの女の秘密についてだ！　ほら、とっとと言わないか！」

……あっ。

「あああああああああ！　んだよもおおおおおー！　後少しで考えがまとまりそうだったのに、良い所で邪魔しやがって行き遅れ騎士が！」

「ああっ、言った！！　今、言ってはいけない事を言った！　我々女騎士は好きで行き遅れている訳ではないぞ、子供が出来れば任務に支障が出てしまうので、その辺をサポートしてくれる理解ある素敵な男性が現れるまで期待して……、耳を塞ぐなサトウ殿！　自分の話を聞いて欲しい！　そして行き遅れ呼ばわりするなら、サトウ殿の知り合いの素敵な男性を……！」

机を揺らしてわあわあと騒ぐ女騎士の言葉を頭から締め出して、俺は考えをまとめていく。

セレナに傀儡にされる条件として、まあ貸しを作るとか感謝の気持ち的な物を利用されるとかそんな所だろう。

では、傀儡化を解くには？

もしかしたら、アクアを連れてくれば手っ取り早いのかもしれないがそれも出来ない。

……まあ、そんな事に頭を巡らせる前に。

「サトウ殿！　性格は破綻していてもいいから年収がそこそこあって、後は……。家事だな、家事が出来る旦那がいい。そして、一日一回、ちゃんと愛してるよと言ってくれる……！」

「おい署長。ちょっとちょっと」

「……なんだ？」

何か妙な事を口走っていた女騎士は、なぜか不機嫌そうな顔をした。

そんな女騎士に。

「ちょっと頼みがあるんだけど。手紙を出したいんだよ、超速達で。金に糸目は付けないから、王都に居る知り合いに手紙の配達を頼みたいんだが」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「では、サトウ様、どうかお気をつけて！　何か困った事がありましたら、何時でも自分を頼って頂ければ！」
「あ、ああ……。ど、どうも……」
俺が手紙を出してから数日後。
態度が豹変した女騎士の俺への敬礼は、先日ダクネスに対して行なっていた敬礼にも匹敵する、それは見事なものだった。
彼女の中では、どうやら俺は大貴族に匹敵する人間として認識されたらしい。

俺がサラサラッと書いた手紙を、王都に住んでいる二人の女性に届けてもらったのだが。
「まさか、サトウ様がダスティネス卿だけでなく、クレア様にまで繋がりをお持ちのお方だったとは……。しかもあのクレア様が直筆で、絶対に絶対にサトウ様には失礼の無い対応をするようにと言及されるだなんて、こんな事は初めて聞きましたよ……」
手紙を送ってもらったのはクレアとか言った白スーツ。
ついでに、レインと言った魔術師のお姉さんにも手紙を送ってもらった。
女騎士が、昨日までのあの凛とした態度はどこへやら。

手揉みしながら、ニコニコと素敵な笑顔を浮かべている。
「レイン殿が、クレア様の手紙を携えて泣きながらここに駆け込んできた時は何事かと思いましたよ。サトウ様ったら、なんて女たらし！　ダスティネス卿だけでなく、クレア様やレイン殿まで……！」
「いやまあその……。違うんだけどもまあいいか……」
と言うか、お前は誰だと言いたい。

女騎士は、俺がクレアやレインとも親しい仲だと思い込んでいる様だ。
手紙には、俺が記憶を取り戻した事と、いずれ是非ともお礼に行きたい事などを書いておいた。
後は追伸として、現在ちょっと困った状況に陥っており、二人のお墨付きでも貰えたら何かと助かりますと添えただけだ。
手紙を届けに行った職員から俺の現在の状況を聞き、クレアとレインの連名で俺の仮釈放の保証人となってくれたらしい。

「……所でその肝心の二人は？　あいつらに一言挨拶してやりたいんだが」
「クレア様は、今日からしばらく、遠く離れた隠れ別荘に避暑に行くので、王都に来ても絶対に居ませんとの事。レイン殿は、先ほどサトウ様を急遽開放するようにと言及し、連名の保証人としての書類を置いた後、テレポートでどこかに消えてしまいましたよ」

おっと、どれだけ嫌われているのか。

俺は女騎士の案内を受けて警察署の入り口へ。
見れば、他の職員達も直立不動の敬礼でピクリとも動かずに見送り体勢でいた。
女騎士が後ろ手に腕を組み、小首を傾げながら笑顔を浮かべた。
「サトウ様。これで今後は、この街で多少の事があっても見て見ぬ

振りが出来ますので、どうかあのプリーストをご存分に、調査なり嫌がらせなりなんなりどうぞ！」
「あ、ああ、どうも……」
この街は大丈夫なんだろうか。

分かり易い騎士と言うか貴族と言うか……。
「というか、ダクネスに対して憧れだとか言っていたから、もっと真面目な人だと思ってたんですが」
「あれだけの大貴族ならばどこの美形貴族の長男でも食い放題なのに、それでも独り身を貫く所が、我々独り身貴族の憧れでありカッコイイと言っているのです。……そう言えば。サトウ様はこんな素晴らしい人脈その他を持ちながら、確か屋敷までお持ちだった様な。……しかも富豪と呼んでも良いぐらいの財産を築き上げてはいませんでしたか？」
「……い、一応」

……。

「自分は、二三歳独身、意外と尽くすタイプで、脱いだら凄いと評判のアロエリーナと申しま……」
「それでは！　大変お世話になりました、いずれまたお礼はさせて頂きますので！」
嫌な予感しかしない俺は、慌てて警察署を後にした。

手厚い見送りの中警察署を出ると、その眩しさに目が眩む。
暗い留置所に慣れたせいだろうか。
目が眩んで良く見えないでいると、俺はそこに誰かが立っているのに気が付いた。

夏の朝の日差しを受けて、眩しくも鮮烈に輝く流れる青髪。
優しげな印象を与える淡い水色の羽衣。
そこには、久しぶりに会うアクアが、穏やかで優しげな笑みで手を広げて立っていた。
まるで、久しぶりに帰ってきた仲間を迎えてくれるような。

「カズマ、お帰りなさい！　お勤めご苦労様！」

屋敷に閉じ込もっていろと言ったのに、どうして毎度毎度コイツだけは人の言う事聞けないのか。
しかし、ほんの少しだけ嬉しくもある。
事情は知らないとはいえ、現在屋敷の外は危険だと聞かされても、わざわざこうして俺の出所を出迎えてくれたのだ。
俺はアクアに、何となくホッと安心しながら近付くと……、
「これでカズマは私よりも犯罪歴が多くなっちゃったわね。もう私の事を前科者だとか言えないわね。ねえ、どんな気持ち？　以前は私の事を散々前科者ってからかってくれたカズマさん。どんな気持ち？　今どんな気持ちなの？」

……。

こんのアマー！

「お前、ひょっとしてそんなしょうもない事言う為だけにここで待ってたのか！　お前ふざけんなよ、そもそもなんで俺が何度も何度も警察に厄介になってると思ってやがる！　大体、俺のは軽犯罪だぞ！　裁判まで行われたお前のネズミ講と一緒にすんな重犯罪者が！」
「わあああああーっ！　女神様に重犯罪者って言った！　あんたふざけんじゃないわよバチ当たるわよクソニート、じゃあ何で何度も

何度も警察のお世話になってるのか言ってご覧なさいな！　ほら言ってみて！　やましい事がないなら早く言ってみて！」

ああもう、久しぶりに会ったのに引っ叩いてやりたい、それが言えたら苦労は無いのに！

と言うか、あれだけ怒り狂っていたセレナの事だ。

俺の出所を待って襲撃してこないとも限らない。

万が一最悪の事態に陥ったとしても、極端な話、アクアさえ無事でいてくれれば蘇生の魔法でどうにかなってしまう。

それはあくまで最後の手段だが。

俺はしっしっと手をやりながら、アクアに言った。

「ああもう、悪かったよ。あのプリーストが気に食わなくてムシャクシャしてやったんだ。他には特に理由なんてないから、お前はとっとと屋敷に帰って閉じ篭ってろ。そもそもダクネスとめぐみんはどうしたんだよ、お前のお守りを頼んどいたのに」

「あの二人は私の必殺芸、百式朧の虜になっているわ。一度発動すると、終わるのに半日を超える大演目よ。と言うか、もう屋敷に篭ってるのに飽きたの。閉じ籠るのがお仕事のニートと違って、ずっと家に篭ってるなんて飽き飽きなんです。カズマばっかりズルイわよ、ここ最近外泊ばかりじゃない。私も連れて行きなさいよ」

言いながら、俺の隣に立つアクア。

どうやらコイツは、俺が今から何をする気かも知らないくせに付いて来る気満々の様だ。

その必殺芸は俺も今度見せてもらうとして、コイツはどうすればいいのだろう。

まあ、取り敢えずは腹ごしらえだ。

警察署の飯は量が少ない。

飯でも食いながら、そこでアクアの説得でも……。

今後の事に頭を巡らせながら、勝手に付いて来るアクアを連れて、適当な店に入ろうと街中を歩いていると。

……目の前から見覚えのある集団が現れた。

それはもちろん。

「よう、早かったなサトウカズマ。待ってたぜえ……？　今日はお仲間も一緒か？　さあ、とっととケリを付けようか。今のあたしはハラワタ煮えくり返ってるんだよ！」

目を血走らせて、元の温厚そうな上っ面なんてどこかに行ったセレナと、その取り巻き達だった。

「カズマさーん！　カズマさーん！！　どういう事！？　なんで皆が追い掛けて来るの！？　私、皆に追い掛けられる様な事なんて……！　……少ししか心当たり無いんですけど！」

「少しはあるのか、アイツらが正気に戻ったらちゃんと謝っとけ！　ちくしょー！　あの女、俺が警察に居る間にどれだけ信者を増やしたんだよ！　街中の連中もこんな事態だってのに見向きもしねえ！」

俺とアクアは街中を逃げ回っていた。

と言うか、追い掛けて来る冒険者の人数は十人程度のものなのだ

が、街中の連中がこんな騒ぎを見ても何の反応もしない。
一時的にアクアの支援魔法で足を強化され、今の所は何とか追い付かれずにはいるものの、やがて追い詰められるのも時間の問題だろう。
と言うか。

「あいつ、もっと頭脳派だと思ってたのに！　ちょっと嫌がらせしたぐらいで短気すぎるだろ、どんどん行動が大雑把になって来てるぞ！」
以前俺を襲ってきた時は人の目を気にしてはいた。
それが無くなり、行動にも制限が無くなってきたと言う事は、それだけこの街での洗脳が進んでいると言う事でもある。

隣を半泣きで走るアクアが叫ぶ。
「ねえー！　私、カズマの罪状はセクハラだって聞いたんですけど！　あの温厚だったプリーストがあんなに怒るだなんて、一体どんな事したの！？」
「大した事はしてねーよ！　ちょっとした嫌がらせの数々の後、ちょっと家から出られないように氷で入り口固めてみたり、変な噂流してみたり、大量の人を呼んで、そいつらに小一時間位セレナの下着姿を晒しただけだ！」
「それは多分、殺されたって仕方ないと思うの」
ちくしょー！

道中の店先に並ぶ商品をワザとひっくり返して、道に障害物として果物などをぶちまける。
俺が駆け抜けた後で背後から罵声が飛ぶが、一々謝ったり弁償したりする時間も無い。
セレナがこうして街中を堂々と追い掛けて来ている以上、相当数の人間が敵に回っていると考えるのが自然だろう。

もはや誰が傀儡化しているのか、俺にはもう分からない。
なので、俺とアクアは自然と人の少ない方へと駆けて行く。
アクアは事情は分からないながらも、素直に俺の隣で逃げている。
コイツに何かあれば蘇生自体が出来なくなる。
アクアを警察署に逃げ込ませるか？
それとも、このまま屋敷に……！

「おいアクア、お前この街の連中を見て何か感じないのか！？　ダクネスの親父さんに呪いが掛かってた時は一発で見抜いただろ！　邪悪な力を何も感じないのか！？」
「私のくもりなきまなこによれば、この街で今一番邪悪な男が私の隣を走っているわね」
このアマ！

もうコイツを逃がすとか考えず、いっそ足を引っ掛けて転ばして、その隙に逃げてやろうかと考えていると、背後からセレナの勝ち誇った様な声が掛けられた。
「その曲がり角の先は行き止まりだサトウカズマ！　残念だったな、道々の人の配置に気付かなかったかい？　あんたは人の少ない方へと誘い込まれていたって事さ！　その先には……！」

そう、この角の先は行き止まりで、しかも高い壁がある。
そんな事は一年近くこの街で暮らしていれば、もちろん知ってる。

「おいアクア、このままじゃ追い付かれる。お前は壁に手を付いて背中を丸めろ！　そうしたら、俺がお前を台にして壁を登る！　そして俺が、壁の上からお前を引っ張り上げるって寸法だ！」
「なるほど素晴らしい考えね！　じゃあカズマが壁に手を付いて！　私が先に登ってカズマを引っ張り上げるから！」
こっ、こいつ……！

俺の全力疾走に併走していたアクアは息も切らさず、すかさずそんな事を叫んできた。
お互いが何を考えているのかぐらい、一年近く一緒に居ればもちろん分かる。
俺とアクアはほぼ同時に角を曲がると……！

「はあっ……！　はあっ……！　や、やっと観念したのかサトウカズマ……！　い、良いプリースト連れてるじゃねえか、なかなかの……、はあ……はあ……、支援魔法だ……、はあ……はあ……」
息も絶え絶えのセレナが、曲がり角の手前で立ち尽くしている俺とアクアに追い付くと、荒い息で言ってきた。

やがてセレナは気付いたらしい。
俺とアクアが、観念したから立ち止まっている訳ではない事に。
セレナが、立ち止まっている俺とアクアの視線の先を目で追った。

そこには……。

「へいらっしゃい！　お待ちしておりましたよお客様！　本日は天気も良いので、店主と共に出張露店である！」
「あっ、いらっしゃいませ！　バニルさんの言う通り、本当にこんな所にお客さんが！」

ウィズとバニルが袋小路の地面に敷物を敷いて、そこで露店を開いていた。

もうやだ、この見通す悪魔。

◆◆

「ねえこれ何売ってるの？　……ってゆーか、あんた大丈夫なの？　頭から煙が出てるわよ？」
「日焼け止めを塗ってきたんですが、今日は特に日差しが強いので……。でも大丈夫ですよ。バニルさんが今日は儲かる日だとおっしゃって、私の朝ご飯を大盛りにしてくれましたから。多少蒸発してもすぐに体が再生されますし、いよいよ危なくなったなら、どこかでお水でも……、あっ、アクア様、それはバニルさんの今日のオススメ商品らしいですよ」

アクアがウィズの傍に屈み込み、その商品を物色している。
ウィズとアクアが場違いに和やかな会話をしている中。

「おいこらバニル、どういう事だ。あんた、あたしから有り金巻き上げといてまだ足りないってのか？」
「お前、この世の全ての事象を裏で操ってたりしないだろうな。と言うか、なんで緊張感満載で追い詰められた先で行商してんだよ。お前何処まで見通してたんだよコラ」
俺とセレナがバニルに対して詰め寄っていた。

散々俺を追いかけていたセレナの取り巻きは、命令でも受けたのか、ちょっと離れた所でジッとしている。
詰め寄る俺とセレナにバニルが笑い、
「フハハハハハハ！　まあ、そう怒るな御両人！　現在の我輩は金を稼ぐのが仕事である為、金の匂いのする所には何処にでも現れる。なに、ちゃんとお互いが欲しがるオススメアイテムを用意してきた。

どうだ、見ていくか？」
バニルはともかく、ウィズの前で戦いをおっ始める訳にもいかず。
俺とセレナは互いに目配せをし合うと、取り敢えずは休戦と言う事に。

いや、いっそウィズにチクっちまうか？
バニルやウィズがいて女神のアクアすらいる状況なら、どうにでもなりそうな気がする。
問題は、俺と仲が良いとはいえウィズやバニルがどちらに付くかだが。
俺はウィズやバニルが、セレナとどんな仲なのかを知らない。
知っているのは元同僚だと言う事ぐらいだ。
ウィズに関しては、名前だけとは言え一応は今でも幹部だ。

まさか二人共、セレナと共にこの街を攻撃するって事は無いとは思うが……。
「おい、妙な考えは起こすなよ？　お互い、今日の所は穏やかに行こうぜ」

そんな俺の考えを見透かしたように、セレナが耳元に顔を寄せて囁いた。
……こいつは、今までの幹部連中と違って頭が回るのが厄介だ。

「さあさあお二人さん。そんな所で内緒話などしておらず、我輩の商品を見てはいかんかね？　見通す力など使わなくとも、きっと二人が飛びつく事請け合いである」

バニルの胡散臭いその言葉に、俺とセレナが顔を見合わせた。
やがてバニルが一枚の紙を取り出すと。
「まずはこちら！　この街でどんな事を企んでいようが、その者の

邪魔をしないと言う我輩の誓約書……」
バニルが皆まで言い終わる事なく、それをセレナが奪い取った。
そう言えばバニルは、セレナの正体はお客様の個人情報だから守ると言ったが、セレナの邪魔をしないとは言ってない。
悪魔であるバニルは、契約にはうるさそうだ。
くそっ、俺が奪っちまえば良かった。

「なあバニル、俺の方が間違いなく高値を出せるぞ。それ、俺に売らないか？」
俺の言葉にセレナが勝ち誇った様に。
「おいおい、こう言うのは早い者勝ちだろ？　ほらバニル、幾らだ？」
「二十三万飛んで三百三十エリス」
「また有り金か！　ここ最近少しずつ貯めたってのに、お前いい加減にしろよ！」
セレナが怒鳴りながら、財布をバニルに投げつけた。
「毎度ありー！」

……あっ。
「おいセレナ、そう言えばお前に金貸してたよな！　おい、今返せ！　人を追い回すなら今返せよ！　そうすりゃバニルから買ったそれは返さなきゃいけなくなるよな？」
「こっ、この野郎……！　畜生、おいお前！」
俺の言葉に、セレナが取り巻きの一人を呼んだ。
ぼーっと突っ立っていたそいつは、無表情のままセレナに近付く。
「おい、金寄越せ。ええっと、幾らだっけ。……ああ、お前はあたしの下着を見やがったからな、その分の金を引いといてやる！　ほらよ、これでいいか！」
セレナは取り巻きの一人から金を奪い、それを俺に渡してきた。

クソ、流石にそう上手くはいかないか。

……と。

「……？　……あ、あれ……？　俺、こんな所で何やって……？」

「チッ！」

セレナに金を取られた冒険者が、一瞬正気を取り戻し。

それを見てセレナが舌打ちした。

……ほう。

「あの、ちょっといいですか？」

「おかしいな、俺は確か……。あ、はい、なんすかセレナさん。スカートの端なんて持っちゃって……。……ッ！？」

セレナが恥ずかしそうにしながらも、自らスカートの端をまくり、そのスカートの中身を男に見せつけた。

「その……。これを見てどう思う？」

「ありがとうございます！　ありがとうございます！　ありがとうございま……す……」

セレナのスカートの中身を見て、拝み出した男。

それがやがて、表情がぼーっとした物になっていく。

……ほほう。

「ねえ見た？　ちょっとあの清楚系のふりしたプリースト、今とんでもない事やらかしたわよ！　とんだ痴女だわイヤラシイ！」

「セレスディナさんったら、あんなにガサツだったのに、ちょっと見ない内に大胆に……」

「？　なーに、セレスディナって。あんた、あのプリーストと知り合いなの？」

セレナの行動を見ていたウィズとアクアが、それを遠巻きにしてヒソヒソと話していた。

そんな二人を意に介さず、大人しくなった男を見ていたセレナが、俺の視線に気付いたのかチッと舌打ちしてソッポを向いた。

「おいバニル！　これで、あたしの邪魔はしないんだな！　この紙はあたしとの契約って事でいいんだな？」

「うむ、契約でいいぞ。我々悪魔は契約は決して破らぬ。安心するといい。……さて小僧」

ううむ、やはりセレナに借りを作ると支配されるって事らしい。

そして、傀儡状態を解くには、セレナに別の形でもいいから受けた恩でも何でも、その借りを返す事。

先ほど、男がセレナに金を取られた時の様に。

セレナが男にパンツ見せたのは、きっと俺に茶巾にされた時に一気に信者が増えた為、それで味をしめたのだろう。

確かに、手っ取り早く傀儡化させるには良い手段かもしれない。

「おい小僧。次は貴様に取って置きの商品があるぞ」

……あれっ、でもそう言えば。

セレナが茶巾状態になった時、セレナの下着を見た、既に傀儡化していた取り巻きが一瞬正気に戻っていた。

あれはどう言う事だろう。

「……おい、ここ最近の外泊続きで、とあるサービスを使い、屋敷の二人はおろかこの場に居る女性陣の殆どをお楽しみ対象にした……」

「よし商品を見せてもらおうかな！　何だバニル、一体何を買って

欲しいんだ！　懐暖かいから何だって買ってやるぞ！」

セレナが俺をゴミを見る目で見詰める中、俺はバニルの用意した商品を……。

「……なにこれ」

「それはウチのポンコツ店主が昔仕入れた、特殊な状態異常である、傀儡という状態異常を解除するポーションでな。本来ならばそんな特殊能力を使うモンスターなどもう生存しておらず、現在ではどこかのマイナーな邪神ぐらいしか扱わない状態異常なのだが……」

「ちょっ！？」

とんでもない便利アイテムを出してきたバニルに、セレナが驚いて声を上げた。

俺はバニルからそのポーションを受け取ると。

「これしか無いのか？」

俺のその質問に、バニルがウィズの方を指さした。

そこに屈み込むアクアの前に、沢山のポーション瓶が置いてある。

クソ、確かに助かるは助かるが、ここまでバニルの思う通りに手球に取られると、流石に悔しい物がある。

敵同士とは言え、恐らくはセレナも同じだろう。

セレナがそのポーションを見て、苦々しげに言ってきた。

「……あたしの邪魔はしないって話じゃなかったのかよ？」

「フハハハハ、見通す悪魔が断言しよう！　このポーションを小僧が持っていても、貴様の邪魔にはならぬ！　それどころか小僧がこれを持っている事を、きっと貴様は深く感謝する時が来る。さあ小僧、今くれてやったのはサービスだ！　あちらに並ぶ一ケース！　お値段据え置きの……」

機嫌良さそうに大声で笑いながら、バニルがポーションの入ったケースの方へと手を向けた。

「ああっ、アクア様何するんですか。それは、今はもう使い道の無いポーションですが、バニルさんがせっせと朝から用意していた物なんですよ。瓶に指突っ込んじゃダメですよ」
「そんな事言ったってあんた、太陽の光を浴びて大分薄くなってきてるわよ。ちょっと水分取りなさい。使い道の無いポーションなら良いじゃない。ほら、全部綺麗な水に変えてあげたからこれ頭から被んなさい」
「すいませんアクア様、ありがとうございます……。……でも、アクア様の神聖な力が少し混じっててピリピリするんですが」

「「「……」」」

二人のやり取りを見て、思わず俺とバニル、セレナの三人が無言になる。
そんな中、散々人を手玉に取ってきたバニル一人が、ウィズとアクアを見ながら呆然として固まっていた。

「「……ブフッ！」」
「！」

本当は笑い事では無いのだが、俺はセレナと同時に吹き出した。

17話（後書き）

セレナ編、もうちょっとだけ続くんです。
引っ張って申し訳ない。

※現在ピクシブにて、様々な方がイラストを描いてくれております。
今まで何度かメッセージでイラストの掲載許可を求められたりもしましたが、わざわざ作者の許可なんて要りません。
筆の荒ぶるままに、どんなものでもお好きにどうぞ。
ありがてえありがてえ。
感謝ですよー。

18話

「フハハハハハ！　フハハハハハハッ！　我輩ともあろう者が抜かったわ！　貴様をとっとと始末しておくべきであったなトイレの女神よ！」

「やれるもんならやってみなさいな仮面悪魔！　ウチのカズマさんに何を売り付けようとしたのか知らないけれど、思惑通りにいかなくって八つ当たりとか恥ずかしくないんですか？　それで本当に大悪魔なの？　大悪魔って自称なの？　商品ダメにされちゃってどんな気持ち？　ねえどんな気持ち？　ちょーうけるんですけど！　クスクスクス、プークスクス！」

「「……」」

「『バニル式殺人光線』！」

「『リフレクト』ー！」

俺は大変な騒ぎになっている背後を指さし、嘆息しながらセレナに言った。

「……おい、あの二人どうするんだよ」

「……聞くなよ、どうしたら良いのか分かんないよあたしにだって。そもそも、バニルとまともに渡り合ってるあのプリーストはなんなのさ」

一応は女神です。

セレナが深々と溜息を吐き、攻撃の煽りを受けたのか、焦げてるウィズを見て目を閉じた。

「唯一止められそうなウィズが真っ先にやられたんじゃ、もうどうしようもないだろ。言ったろ、あたしは幹部の中でも強くは無いんだ。……あーあ……。なーんか、バカらしくなってきた。お前と関わるとロクな事が無さそうだなー……。お前の周りにはキワモノが多すぎる。バニルと互角に渡り合っているあの女以外にも、どうせお前の周りや知り合いには、物騒なのがゴロゴロいるんだろ？」

否定は出来ない。

ウチの自慢の頭のおかしい子を筆頭に、紅魔の里の人達からアクシズ教団の皆さんに到るまで。

そんな俺の微妙な表情を見て取ったのか、セレナがうわあ……と、嫌そうな顔をした。

「はあ……。もういいよ、この街は諦めた。正直に言う。お前を舐めてたよ、最初から本気で当たれば良かったね」

そんな事を言いながら、セレナは深々と溜息を吐いた。

そんなセレナの視線は、未だ暴れているバニルとアクアに向けられている。

まあ無理もない。

こんな連中を、まともに相手なんてしていられないだろう。

「このアバズレ女神め、貴様があの小僧と共に大金を手にした事は我輩にも知れている！　貴様がダメにしたポーション、全額弁償して貰おうか！」

「あはははは！　なんじ、全てを思い通りに動かしているつもりで、毎度毎度最後の最後で報われない悪魔よ！　弁償なんてお断りします。アクアの美味しい水に変えたポーションの請求先は、お宅の、太陽の下に出るとすぐ乾く店主に言いなさいな」

「貴様！　我輩が人を呼称する時の語呂を真似るな、それは我輩の

アイデンティティーであるぞ！　もう我慢ならぬ、ぶっちめて貴様の有り金巻き上げてくれるわ！」

……うん、無理もない。

まあ、丸く収まるなら俺もその方が良い。
アクアの敵討ちは一応完了してる訳だし。

……。

……いやいや！

別にアクアがションボリしていたから蹴りくれた訳じゃない。
アクアの為に魔王の幹部に喧嘩を売った訳じゃない。
あの穀潰しは関係ない、自分の胸のモヤモヤをスッキリさせる為にやった事だ。

俺は自分に何度も言い聞かせながらセレナに言った。
「それじゃあ、和解って事でいいのか？　言っておくけど、俺は本当に魔王になんぞ興味無いし、俺なんかを危険視する必要は無いからな？　正直こんな平和な街で暮らしてると、世界の何処かで戦争中とか言われてもピンと来なくてさ。一度王都に行った事はあるけれども、その時に夜襲警報が鳴ってた時ぐらいだな、ああ、戦時中なんだなって実感したのは。本当に、俺としてはそっとしといてくれれば波風立てるつもりなんて無いからな？」
「分かった分かった。それじゃあ、魔王の奴にはお前は何の問題も無い奴だったって言っといてやるよ。そしてあたしは、この街から素直に出て行く。それでいいな？」

セレナの投げやりなその言葉に、ホッと息を吐きながら。

「よし、それじゃあこれで手打ちって事で。……はあ、あんたは幹部の中じゃ強くないって言ってたが、それでもあんたと対峙した時なんてヒヤヒヤしてたんだからな。俺みたいな最弱職に構ってないで、幹部なら幹部らしくもっと大きな謀略でも企んでいてくれよ……」

俺は思わず、ここ最近の、それなりに緊張感のあった日々を思い出し、愚痴を零した。

それにセレナが、未だに視線はバニルとアクアの対決を見詰めたまま肩を竦める。

「まあ、こっちにも色々あったんだよ。それもどうでもよくなっちまったけどな。……あーあ、気が重いねぇ……。あんたはこれでいいかも知れないが、あたしはこれから魔王の奴に報告だ。仲間に引き込むか、もしくは殺す。それがあんたに対する指令だったんだけどねぇ……。……ま、上手く言っておいてやるよ、あたしもあんたと関わるのはコリゴリだからね。あたしを大衆の前で晒し者にした事も忘れてやるよ。だから、あんたも色々と忘れてくれ」

言いながら、セレナが神官衣の懐から、キセルみたいな物と煙草を出した。

キセルの先に煙草を詰めて、その先に、とても見覚えのあるジッポで火を付ける。

ゆっくりとそれを吸い込みながら。

「……これであんたはもう、魔王軍に狙われる事もないだろ。……はあ。ったく、少しは感謝しなよ？」

言いながら。

セレナは、その視線は未だ俺に向けず、アクア達の戦いをぼうっと見ながら、吸い込んだ煙を吐き出した。

「ああ、見逃してくれて感謝してるよ。でも、俺はともかくこんな街で一体何企んでたんだよ。ここって、駆け出し連中の……」

……あれっ？

何だろう、この違和感。

「……言ったな？」

セレナが、未だ俺の方には目も向けず。

紫煙を吐き出しながら呟いた。

……言ったなって、……俺、今何を言った？

何だ、この体の違和感……、……と言うか、頭がぼーっと……？

……あっ。

……や……ばい……！

「いやいや、お前、大したもんだよ。もうあたしの能力にも見当付いてんだろ？　ここまであたしの力に迫った奴は、お前が初めてかもな」

ああ、やばい……、こ、こいつ汚ねえ……！

バニルやアクアが騒いで、こんなグダグダな流れになって油断した所で……。

「こんな駆け出しの街で何企んでたんだって？　よしよし、幾らでも教えてやるから感謝しなよ？　聞かれたら答えないとな。お前が

聞いたんだから、これは貸しだからな？」

やばい……、やばい……！

おい止めろ、やっぱいい、これ以上言うな……！

頭ではそう考えていても、声が出ない。

と言うか、体の動きも自分の意志に反して酷く鈍い。

「あんた卑怯よ、さっきからウィズを盾にするのは止めなさいよ！　なんかウィズが透明になってきてるんですけど！」

「なら貴様が破魔の魔法を放つのを止めればよい！　……やや？　いかん、やり過ぎた。危険信号である、このままでは店主が無くなってしまう」

「どどど、どーするの！？　ねえどーするの？　回復魔法なんて掛けたらウィズが消えちゃう！」

「よ、よし、そこの鞄に砂糖水が入っているので、店主に染み込ませてみよう。きっとカブトムシの如く復活するであろう……。……多分……」

アクアとバニルは、何だか透明になってきているウィズを間に挟み騒いでいる。

そんな中。

セレナがやっとこちらを向いた。

口元に、勝ち誇った様な笑みを浮かべて。

「実はな？　そう遠くない内に、この街に軍が派遣される。と言っても、ここは最前線から遠く離れた隅っこの街だ。街道通ってこんな所まで進軍なんて出来ないからな。それほど多くない限られた部隊が、テレポートで転送されてくる。でもまあ、駆け出し冒険者し

かいないこの街の連中には、それでも十分過ぎる量だ」

おい止めろ、言うな。

「この街は、以前から攻撃目標にされてたのさ。幹部が何人も姿を消したり、大物賞金首が破壊されたりして注目を浴びる前からな」

止め……！

……。

「な、なんで……？」

自分の意志ではなかなか動かない、重い口を無理やり開く。

セレナの大事な秘密を教えてもらえば、それだけ傀儡化が進む。

それは分かっている。

分かっているが。

「ここが駆け出しの街だから。始まりの街だからさ。今は魔王の幹部とはいえ、あたしは人間。これでも昔は冒険者をやっていてね。もちろんあたしも、冒険者を志した時、最初にこの街に送って貰ったよ。誰もが、ここで初めてのクエストだ。ここは駆け出しの街。この世界で最も弱いモンスターが生息している地に作られた、初心者冒険者の修行の街」

ゲームで言う、スタート地点みたいなもんか。

そんな初心者の街のはずなのに、なぜか俺達はえらく苦労した覚えしか無いんだが。

「じゃあ、この駆け出し冒険者の街が無くなったら？　初めて武器を手にした冒険者には、美味しい部類のモンスターと言われるゴブ

リンの集団ですら、ちょっとした脅威になる。満足に鎧も買えない駆け出しには、ゴブリンの持つ赤錆だらけの刃物ですら脅威なんだよ。ジャイアントトードなんて、人数さえ揃えば余裕なお手軽モンスターは、ここいらにしか生息しない。さあ、この街が無くなったなら、駆け出し達は一体何処で鍛えればいい？」

……なるほど。

「分かるか？　養殖なんて名の謎の修行法を行う紅魔族。そんな極一部の例外を除いて、どんな名うての冒険者も最初はここから始めるんだ。そしてレベルを上げて、レベルに応じた他の街へと移って行く。特別な理由でもない限り、そこそこレベルが上がった連中はこの街を後にする。そうして育っていった冒険者は、いずれあたし達の前に立ち塞がる訳だ」

駄目だ、どんどん頭の中がぼうっと……

「変わった名前の連中が現れなくなった今、ここの街が無くなれば冒険者の供給はほぼ止まる。……魔王軍幹部の筆頭、魔王の娘がな？　近々王都に、大部隊での襲撃を計画してるのさ。きっと冒険者の被害は大きな物になるだろうね。……だが、今も新しい戦力が来るのを待ちながら戦っている連中が、冒険者の訓練所代わりのこの街が、滅ぼされたなんて話を聞いたら？」

……士気は当然落ちるだろう。

モンスター蔓延るこの世界で、一つの街を復興させるなんて何十年の時間が掛かるのやら……

ああ……、や、ヤバイ、意識が遠く……

「……そろそろ、あたしの話を聞くのも限界？　この力は呪いじゃない。どんな奴でも抗う事など出来はしないさ。あんた程の男でも、絶対にね。でも安心すると良い、本当に嫌な命令には、激しい苦痛が伴うが抗う事も出来る。どうせあんたの事だ。大人しくあたしの傀儡に収まっている訳もないだろう？　……さあ、あんたがあたしの命令に、一体どれだけ抵抗出来るのかを楽しみにさせてもらうよ……！」

愉悦そうなセレナの声。

それを聞きながら、俺はいよいよ何も考えられなくなり……

そして最後に、セレナの囁くような声を聞いた。

「さあ、あたしの言葉に耳を傾けるんだ……。自らの胸の底に燻る物があるだろう？　それは、お前が今までに受けてきた屈辱、理不尽、不当、嘲り……。ほら、思い出せ。お前はこの街の住人に舐められてきただろう？　最弱職だと馬鹿にされたりしなかったか？　足を引っ張る仲間にすら、怒りを覚えはしなかったか？」

その言葉が、甘美に胸に染みていく。

「そう、どうして何時も、俺が後始末ばかりするんだと……。もう我慢する事は無いんだよ。良心を捨てろ。常識を捨てろ。我慢を捨てろ。道徳を捨てろ。……さあ、あたしと一緒に復讐しよう。いずれこの街に、あたしの仲間が押し寄せる。あんたはその時、あたしと傀儡達と共に、内側から手引きをするんだ。さあ、この街の住人へ。お前の、元仲間だった連中に逆襲しよう……！」

「……ウィズ、大丈夫？　ほら、私が誰か分かる？」
「……？　アクア様？　それとバニルさん？　どうしたんです、そんな近くで私の顔を覗きこんで……？」
「うむ、前後の記憶が無いなら何があったかは特に気にしなくてもいい。無理に思い出さない方が吉と出た」
「そ、そーね！　思い出せないなら、それはきっと思い出さない方が良い事よ！」

ウィズの傍に屈み込んでいたアクアが、
「カズマー、そろそろ私達も帰るわよ。カズマが居ない間、ダクネスとめぐみんが屋敷の中を熊みたいにウロウロしてて怖かったんですけど。とっとと帰って、二人をなだめて欲しいんですけど」
言って、俺の方に向かって歩いて来た。

アクアは、セレナに若干の警戒をしつつも俺に近付き、俺を連れ帰ろうと手を……。

……俺は、伸ばされたアクアの手をひょいと躱した。
「……？」
アクアがキョトンとした顔で首を傾げて俺を見る。

そんなアクアを、セレナ様が実に楽しげに。
肩を震わせ、笑いを堪える様にして言った。

「この男はね……。もう、あんた達の元には帰りたくないんだとさ。このあたしの仲間になったんだよ。そうだろうカズマ？　その傀儡を解くポーションも、もう必要ないだろう？　さあ、そいつに言ってやんな！」

そのセレナ様の言葉に、俺は。

「俺、今日からレジーナ教徒になるわ。そしてセレナ様とよろしくしてくる。という訳で、みんなによろしく」

◆◆

セレナ様が、俺の前を歩きながら何やら考え込んでいる。
どうしたのだろうか、俺の敬愛するセレナ様が悩み事だろうか。

……と、セレナ様が足を止める。
そして俺を振り向き言ってきた。
「……なあ。お前、今は傀儡化してるんだよな？　あたしの言う事は絶対だよな？」
そんな、不思議な事を。

セレナ様が、俺と言う優秀な手駒を手に入れたので、新しい拠点に引っ越すと言い出した。
セレナ様は、念には念を入れて、他の傀儡への支配を弱め、代わりに俺への支配を強めてくれたそうだ。
何でも容量がどうとか言っていた。

一度に傀儡化出来る人数は限られているのかも知れない。

そして、俺への支配を強めるというのは、それ程までにこの俺の力を必要としてくれていると言う事だ。

俺はセレナ様に、何を言っているんですとばかりに言った。

「当たり前じゃないですかセレナ様。俺はセレナ様の為なら、その重そうな胸を支えるために一日ブラの代わりになれと命じられても、喜んで応じますよ」

「お、おう……。そ、そうか……。でも、そんな馬鹿な事は命じないから安心しろ。今までの傀儡はレジーナ様を信仰するだなんて事口走らなかったから、ちょっとな。うんまあ……気にするな……」

セレナ様が、俺の言葉にやはり首を傾げながらも歩き出した。

アクアにレジーナ教徒になると告げた後。

アクアが泣きながら何かを喚き散らしていたが、勝ち誇った様に笑うセレナ様に連れられて、俺達はその場を後にしていた。

ちなみに、バニルに貰った傀儡化を解除するポーションはアクアに渡した。

アクアは、そのポーションが何か分かっていない様子だったが。

セレナ様の敬虔なる配下となった今、俺にはもうあんな物は不要だ。

俺は、前を歩くセレナ様に、今の内に聞いておかねばならない事を聞く事にした。

「そう言えばセレナ様。俺の傀儡化が解ける条件とかって何なんですか？」

俺の言葉に、セレナ様がピタリと足を止め。
「……お前、本当に傀儡化してるんだよな？　なぜそんな事を聞く必要がある？」
厳しい声で、俺の方を振り向きもせずに言ってくる。
「いえ、万が一にもセレナ様の俺への支配が解けると、この俺が困りますから。傀儡化が解けそうな物には近寄らないでおこうかと」
俺が平然とそう答えると、セレナ様が驚いたように振り向いた。
やがて、俺の顔をマジマジと見る。
「……お前……？　……うん、確かにレジーナ様の力をお前からは強く感じる。どういうこった。アレか？　支配を強め過ぎて、洗脳が強力に作用し過ぎたのか……？　傀儡ってよりも、自分でちゃんと考えて行動する、下僕みたいな……。……まあいい、あたしにとっては好都合だ。その調子で頼むぞ」
「もちろんですセレナ様」
俺の返事に、セレナ様は満足そうに頷くと。
「よしよし、それじゃあ教えてやろうか、これもお前への借しになるしな。……まず、あたしに受けた借りへの代償の返還だな。これはまあ、お前は既に知っているだろう。次に、強い信仰心。……ほら、お前があたしを縛り上げてパンツを傀儡に見せた時、あいつら一瞬我に返っただろ。ああいった偶然の産物って言うか、思わず信仰している神に感謝しちまうよーな幸運な出来事が起こるのは危険だな。お前がどの神を信仰しているのかは知らないが、注意しろよ？」
「大丈夫です、俺が信仰するのはレジーナ様です、セレナ様と浴場で鉢合わせてうっかりエロとかがあれば、レジーナ様に感謝ですよ」

「そ、そうか……。いや、無理するなよ？　どんな人間でも、何かを信仰しない奴なんていない。その信仰は、神に向けられなくても、悪魔崇拝者だとか邪神崇拝者だとか、何がしかを信仰するもんさ。お前は、レジーナ様を信仰する前は何を信仰していたんだ？」

「いえ、無宗教です」

「はは、そうか。ま、言いたくなきゃ別にいいさ。仲良くやろうぜ相棒」

相棒と言って頂いた。

これは益々セレナ様の為に努力しなければ。

「よし、今日の宿はここにするか。ちょっと高そうだが、たまにはいいだろ。よしカズマ。金払ってこい」

「断る」

小綺麗な宿の前。

俺はセレナ様に即答した。

「……お前今なんつった？」

「お断りしますと言いました。俺が金払ったらセレナ様から受けている借りを返す事になるじゃないですか。俺の傀儡化が解けちゃいますよ」

「あ、ああ……、そうか……。いやでも。ええー？　ま、まあいいか……」

セレナ様が、何かを悩みながらも財布を出した。

そしてその中身を開き……。

「あっ！　しまった、そういやバニルにまた毟られたんじゃねーか！　おいカズマ、今は借りとかいいから、ちょっと金出せ！　他の

傀儡を何体か開放して、その分お前への支配は強めてあるんだ。金出したぐらいじゃ多分傀儡化が解ける様な事は……」

「ダメですセレナ様！　その油断が命取り！　俺が知っている漫画やゲームの悪役の幹部は、大概最後の詰めの部分で油断して負けるんですよ。しょうがない、ここは俺がその辺の人から金を調達して来ますから」

「ま、漫画……？　げえむ……？　ま、まあいいか、すまないな……。……あれっ？　でもそれって結局、お前に借りを返して貰うって事に……？」

何やらブツブツ言っているセレナ様を他所に、俺はたまたま宿の前でブラブラしていた冒険者に近付くと。

「すいません、ちょっといいですかね？　実は、こちらのセレナ様がお金に困ってまして、宿代も支払えない状況でして……。貧相で生活能力も無いかわいそうなセレナ様に、どうか恵んでやっては頂けないですかね？」

「ええっ！？」

俺の背後ではセレナ様の驚いた声。

と、目の前の冒険者の男は何の疑問もなく財布を出した。

「セレナ様がお困りだって？　任せてくれ、そんな貧相なセレナ様も……。……セレナ様？　何だって俺はセレナ様なんて、様付けて呼んでるんだ？　……まあいいや、ほら。ったく、人に尽くしてくれるプリーストが逆に施されるってどうなんだ？　セレナさん、しっかりしなよ？」

「あ……、そ、その……、どうもすいません……」

その言葉に、恥ずかしげに俯くセレナ様。

冒険者の男は幾ばくかの金を寄越すと、そのまま何処かへ消えて行った。
どうも今の男はセレナ様の信徒の一人だったらしい。
今ので傀儡化が解けた様だが問題ない。
なんせ、この俺が居るのだ。

「あ……ああ……。あいつ、結構な腕利きの冒険者だったんだが……。仕方ないか、ほらカズマ、行くぞ。その金でとっとと支払い済ませて来い」

「了解です。では、その前に」

何だか疲れた様子のセレナ様。
俺は宿へ支払いに行く前に、そのセレナ様の豊かな胸をわし掴んだ。
そして、そのまま無言で揉みしだく。

「「……」」

俺はそのまま、無言のまま呆然としているセレナ様と見つめ合った。
やわこい胸を揉み続けながら。

と、突然俺の手がセレナ様によって振り払われる。

「おおおお、お前!?　えっ、ちょっ！　何やってんの？　おい、何やってんの!?」
パニックになりながら、セレナ様が人目もはばからずに大声で。
「落ち着いて下さいセレナ様。人が見てます」
「こっちのセリフだよ！　そうだよ、人が見てるよ！　お前いきな

り何してんの!?　なんでいきなりあたしの胸を揉みしだいた!?」

おかしな事を言うセレナ様。

「何言ってんですか、俺はセレナ様の為に金を調達して来たんですよ？　つまり、俺に対してのセレナ様の借しは弱まった。ならセレナ様から再び代価でも貰わないと、俺の傀儡化が解けてしまう訳です。でもセレナ様は金が無い。なら、ここは体で払って頂かないと」

「!!??　そうなのか？　いや、あれっ？　おかしくないか？　いやだって、さっきの冒険者はあたしに対して金を施したって思ってたし……。あたしは、あんな蔑まれる目で見られて、あの男の傀儡化は解けた訳で……。あれえー？」

良く分からない事を言っているセレナ様。

俺はそんなセレナ様を置いて、早速手にした金で部屋を取りに宿へと向かった。

「ふう……。切り札を手に入れたんだか、どうなんだか……。良く分からない状況になってきたなあ……」

セレナ様が、溜息を吐きながら両目を瞑り、ベッドの上に仰向けに寝転んだ。

どうしたのだろう、何か悩み事だろうか。

お疲れのセレナ様。

ここは一つ、肩でも揉んであげようか。
「大変そうですねセレナ様。肩でもお揉みしましょうか？」
「んあ？　そうか？　悪いな、じゃあ……」
セレナ様が閉じていた瞼を片方だけ開き……。
「……おい、お前何でここの部屋にいるの？」
そんなおかしな事を言い出した。
「何でと言われても。あの金では一人分の部屋しか取れなかったもので。ああ、俺はベッドが狭くとも文句は言いませんからお構いなく」
「構うよ！　あたしが構うよ！　お前、何！？　なぜ当たり前の様に一緒に寝ようとしてる訳！？　あんたって、もっと女に対して奥手なもんだと思ってたよ！」
「セレナ様が、俺に対して命令したんじゃないですか。……もう我慢する事は無いんだよ。良心を捨てろ。常識を捨てろ。我慢を捨てろ。道徳を捨てろ……って。俺はそれに従っているだけですが。何だか生まれ変わった気分です」
「あれかあああああああー！」
セレナ様が、ベッドで起き上がり頭を抱えた。
そのまま疲れた様に。
「……なあ、その命令を取り消すとなると、お前に大きな借りとか出来るか？」
「セレナ様が俺の心のリミッターを色々と取っ払ってくれたお陰で、現在、随分と人生満喫してますからね。再び自制しろって言われたら、その代償はセレナ様のおっぱいぐらいじゃすまないですよ」
「……うう……」

呻きながら、ベッドに腰掛け、頭を抱えるセレナ様。

「なあ……。何であたしがお前の寝る所を用意しなきゃならないんだ？　自分の寝床ぐらい自分で確保してくれよ……。他の傀儡達は、ちゃんと自分で用意してくれたぞ？」

「俺の場合は事情が異なるじゃないですか。他の冒険者と違い、セレナ様の所為で家に帰れない状態になりました。そこはちゃんと、俺を養って頂かないと」

俺の言葉に、セレナ様が項垂れた。

○月？日

セレナ様が、俺の傀儡状態はどう考えてもおかしいと言い出した。俺の心の内を把握する為に、今日から日記を付けろと言われた。人の日記を読もうだなんてそれは大変な代償を貰わなければいけない。

毎晩、寝る前に、カズマ様と呼びながら俺の背中に胸を押し付ける事を代価にして貰った。

セレナ様が、何か大切な物を失った様な顔で落ち込んでいた。

しかし、今書いているこの日記を、毎日セレナ様が読む訳だ。

つまり、内容によってはセレナ様に合法的にセクハラが出来る訳だ。

漲ってきた。
これから毎晩、日記の終わりに官能小説を書いてやろうと思う。
では早速……

〇月△日
セレナ様が、官能小説を書くのは止めろと言ってきた。
そんな理不尽な要求には多大な代償を貰いますよと言ったら、畜生とか言って諦めた。
そんなセレナ様の困った顔が素敵だった。
今夜の官能小説はセレナ様物を書こうと思う。
セレナ様が、やはりお前の傀儡状態はどこかおかしいと言っている。
こんなにペラペラ流暢に喋るのがおかしいのだとか。
まあ、それはさて置き今晩の小説はセレナ様物だ。
さて、何を書くか……。

『と、これを書いている俺の背中に柔らかい物が押し付けられた。
そう、裸のセレナ様が俺の背にその双丘を押し当てているのだ。
「カズマ様ぁ……。あたし、もう我慢できないのお……」
やれやれ……。
俺は、上目遣いで甘えてくるセレナ様を抱き寄せると……』

おっと、止めて下さいセレナ様、横から人の日記を覗いて暴れ出すのは。
大きな代償貰いますよ？

〇月〇日
セレナ様が、自分を題材にした官能小説は本当に止めてと半泣きで訴えてきた。

そんな理不尽な要求には多大な代償がと言い掛けた瞬間、殴られた。
殴られた際に、謎な現象が起きた。
俺を殴ったセレナ様が、俺を殴った箇所と同じ所に傷を負ったのだ。
セレナ様が、どういう事だとパニックになったがそんな事はどうでもいい。
殴られた代償として、下着姿で頭の後ろに手を組んだ体勢で、そのままスクワットを百回ほどして貰った。
畜生畜生とブツブツ言っていたが、涙目で汗を滴らせてスクワットするセレナ様は麗しかった。
次は目の前で腕立てして貰おう。

△月〇日
めぐみんやアクア、ダクネス達が、俺の行方を探しているそうな。
そう言えば、俺には自分の身を案じてくれる、そんな素敵な仲間達がいたのだ。
その事を部屋で内職していたセレナ様に告げ、俺に帰られたくなければもっと良い代償をおくれと言ってみた。
セレナ様が、俺の宿代を稼ぐのにも苦労してんだぞ、何でそんなワガママばかり言うんだと泣き出した。
冒険者ギルドで仕事を請ける事も出来ないセレナ様が、もっと泊まる場所のランクを落としてもいいかと言い出した。
屋敷持ちで裕福な暮らしを送っていた俺にこれ以下の宿で寝ろだとか、それ相応の代償を……と言ったらセレナ様が無言で内職を再開しだした。
何でも、軍がこの街に来るのはまだ先の話の様で、それまではこの街に滞在しなければいけないそうだ。
街の襲撃の際には、俺や他の傀儡と共に内部から手引きをするらしい。

セレナ様が、俺の晩飯である高級焼肉定食を羨ましそうに見つめている。
もちろんこれを分け与える訳にはいかない。
そんな事をしてセレナ様に借りを返しては、俺の傀儡化が解けてしまうからだ。
そう、このままセレナ様からどんどん借りを作っていき、俺はやがて、忠実なセレナ様の右腕になるのだ。

そんなセレナ様の今日の晩ご飯はコーンスープ一杯です。

□月〇日
セレナ様と宿に暮らし始めて数日。
最近、セレナ様がやつれてきた。
日々贅沢三昧をする俺を養うのに色々苦労している様だ。
でも、我慢をするなと俺のリミッターを外したのはセレナ様だ。
これぱっかりは仕方がない。

傀儡と化していた冒険者達からは軒並み金を借りて傀儡化が解けてしまい、もはや傀儡は俺一人しかいないらしい。
最近は、そこらの冒険者にパンツを見せて傀儡化し、その冒険者から金を借りる商売を始め、警察に怒られていた。
風営法がどうたらと説教を喰らい、稼いだ金を没収されたセレナ様は色々と限界に近い様だ。
俺への代償は体で払ってくれればいいですよと言ったら、自費で泊まってくれるにはどんな事をすればいい？　と聞いてきた。
詳しく説明したら、セレナ様がおかしな事を言い出した。
俺の傀儡を解くから、もう何処へでも行けばいい、と。
確かセレナ様は言っていた。
本当に嫌な命令には抗う事が出来ると。

激しい痛みに耐えながら全力でセレナ様の命令に抵抗していると、セレナ様が妙な行動を取り出した。
何だか嫌な予感がして何をしているのか尋ねると、俺の傀儡化を無理やり解く最中だと言い出した。
セレナ様はトチ狂ってしまわれたらしい。

俺はセレナ様の傀儡化の解除に激しく抵抗すべく、深く信仰する神に祈った。
偉大なるレジーナ様、我に力を与え給え……！

○月？日
セレナ様が、最近おかしな行動ばかりする。
俺に様々な命令を下そうとする。
それは、まるで俺を傀儡化から開放でもするかの如く、代価を無視した無茶な命令ばかりだ。
敬虔なレジーナ信徒であり、セレナ様の優秀な下僕である俺は、当然のごとく、遠慮無くその代価を体で払って貰う事にした。
俺の傀儡化が解けてしまってはセレナ様が困るだろうからだ。
俺の紳士的なセクハラに、セレナ様が何だか疲れた顔で、明日は俺を連れて行く所があると言い出した。
とうとう一線を超えてしまうつもりだろうか。
今から期待で眠れそうに無い。
明日は念入りに体を洗っておこう。

「……」
セレナ様が、俺が書いた日記から顔を上げ。
それを閉じて、ふうと小さく息を吐く。
「今日はお前を、あのプリースト達の元へ返品しに行こうかと思ったんだが……」
「お断りします」
俺の即答を聞き、セレナ様が深々と息を吐く。
セレナ様は、最初に会った時から随分とやつれて見える。
それに比べ、俺は非常にツヤツヤしていた。
ここ数日の充実した日々のおかげだろう。

と、セレナ様が、無言で俺の手を取る。
そして、片方の手には爪楊枝。
それで……。

「ッ！？」

突然、セレナ様が俺の手の先をそれで突いた。
俺の手の先から、赤い物が膨れてくる。
すると、セレナ様の手の先からも、血が滲み出し、それが血膨れとなって床に滴った。

「……お前、本当に無宗教の人間だったのか。本当にレジーナ様の信徒になっちまったんだな！？」

セレナ様が、青冷めた顔でそんな事を。
何を今更。

どうしたんだろう、俺がレジーナ信徒になると何か不味いのだろうか。

「俺はずっと言ってたじゃないですか、無宗教の人間だって。そして、レジーナ様を信仰するって」

「無宗教なんて奴、この世にいるか！　それが神であれ邪神であれ悪魔であれ！　この国の連中は必ず何か拠り所を作るものだ！」

「いや、この国の人じゃありませんし。それに俺の国じゃ、別に珍しい事でも無いんですが。特定の宗教に入っていない人間なんて沢山いましたよ」

「！？」

セレナ様が驚きの表情で言葉を詰まらす。

「ま、マジか？」

「マジですよ。ああ……、無宗教とは違うのかもしれないです。年末にはある宗派の教祖の誕生日を国民総出で盛大に祝って、その同じ月の終わりには、別の宗派の年末行事の鐘の音を聞きます。そして年が明けたら、神道って言われる宗派に従って、一年の健康を祈りに行きます」

「お前の国は世界中のプリーストに喧嘩売ってんの？」

そんな事言われても。

セレナ様がコメカミを押さえながら息を吐く。

「どうしたもんだか……。お前の傀儡化をどうやって解けばいいんだよ。お前に借りを返して貰おうとしても、頑なに返そうとしない。部屋から出てけって命令してもこんな時だけ痛みにすら耐えて激しく抵抗。かといって、お前を始末しようにもレジーナ様の信徒になったお前に手を出すと復讐の呪いが……」

敬虔なレジーナ信徒の俺に、なんて物騒な事を。

「ああクソっ！　どうしたらいい、どうしたら……！　どうしたら、お前はあたしから離れてくれる？」

「セレナ様が俺に付いて来いって言った所為で、俺はもう仲間との関係もボロボロだと思うんですよ。責任とって、このままずっと養って頂かないと困りま」

「あああああああーっ！　聞こえない聞こえない！　……ああっ！　そう言えばっ！　おいお前、確かバニルから傀儡化を解除するポーションを一本だけ貰ってたよな！　アレってどうしたっけ！」

言いながら、俺に涙目ですがってくるセレナ様。

アレは確か……。

「俺の仲間の、液体を真水に変えられる力を持つ、アクアってプリーストに渡してしまいまし……」

「うわあああああーっ！　よりにもよって！　よりにもよってっ！　よりにもよって、なんでそんな能力持つ奴にっ！」

セレナ様が、泣きながら全力で部屋を飛び出して行った。

18話（後書き）

次回で決着。シリアス回。

ちょっと色々苦しいかなと思う回ですが、後日修正するかも知れません。
その際には修正箇所を後書きにて書きますので……

前書き後書きが増えてきて読み辛いと思うので、近々、最新話以外は前書き後書き消去いたします。

19話

「どうしてこうなった……！　ずっと上手くいっていたのに、何処でどう間違えてこうなった！　後少しで……！　この街の冒険者の傀儡化も進み、後少しで準備も完了したってのに……！　一体何処で間違えたっ！」

半泣きで、ブツブツと愚痴をこぼしながら駆けるセレナ様。

俺はそんな彼女の後を追い。

「大丈夫ですよセレナ様。この俺が居るじゃないですか」

「お前が全ての元凶だろうがあああああー！」

前を駆けていたセレナ様が、堪えていた何かが切れた様に突然俺に襲い掛かってきた。

「お前が……っ！　お前がちっとも、あたしの言う事は聞かない癖に、ワガママばかり言うからこんな……っ！　うぐぐぐぐ……！」

「あぐぐぐ……！　セ、セレナ様、俺の首を締めたらセレナ様も……！」

俺に掴みかかり、そのまま首を締め始めたセレナ様は、自らも苦しそうにしながら手を離す。

「くそ……！　くそ……っ！　くそったれ……っ！　なんでだよお……！　なんで、お前はそんなに簡単に宗教に入っちゃうんだよお……っ！　神を信仰するって事は、一生涯の事なんだからよく考えて入信しろよお……っ！」

セレナ様が、俺の胸に拳を何度も叩きつけ、そのまま地面に崩れ落ちていく。

声が震え声なのは泣いているのか。

「そんな事言われても、俺の居た国では色んな宗教があるもので……。そもそも、俺の国には神様が八百万は居るとか言われてまして。……なもんで、お手軽な感覚で信者になったんですが。確かどこかに、空飛ぶスパゲティモンスター教なんてのもありましたし」

「あたし、お前の国嫌いだ……。大っ嫌いだ……」

地面に崩れ落ち、顔を覆って声を震わせるセレナ様。

俺はそのセレナ様のスカートの裾をぴらっとめくった。

俺の首を締めた代償を貰っておかないと。

「……黒好きですね」

「……ぬあああああああああーっ！」

セレナ様が涙目で立ち上がり、スカートをめくっていた俺の手を跳ね除けた。

「お前の屋敷に行くぞ！　来るなって言ってもどうせ付いて来るんだろうからとっとと来い！」

「それは命令ですか？　なら、それなりの代償を……」

「じゃあ来なくていい！」

「俺に一人寂しく留守番しろと？　俺を退屈させるだなんてとんでも無い、謝罪と代償を請求する」

「もういい喋るな、お前は喋るな！　今のお前と話していると頭がおかしくなる！」

セレナ様が、もはや人目もはばからずに叫びながら、俺の屋敷の方へと駆け出した。

ここ最近の奇行により、街の住人のセレナ様への目は痛々しい物になっている。

巷では、パンツを見せつけてくる痴女なんて噂すら流れているらしい。
どうしてそんな事になったのかは分からないが気の毒な事だ。

セレナ様が、もはや本性を隠そうともせずに必死の形相で街中を疾走し、やがて懐かしき我が屋敷の前へと辿り着く。
セレナ様は、息を整える間もなく屋敷のドアへとすがり付き。
「開けろーっ！　おい、居るんだろ？　開けろーっ！　お前らの大事な仲間を返品しに来たぞ、開けろおっ！」
そんな事を大声で喚きながら玄関のドアを叩き出す。
だが、しばらく待っても誰も出ない。
どうやら留守にしている様だ。

「くそったれ！　こんな時に……っ！　おい、行くぞ！　ギルドにでも居るんじゃないのかあいつら！」

言って、セレナ様が駆け出していく。
……俺はそんなセレナ様の後を追いながら、何となく屋敷の方を振り返った。
……。
無駄にデカく、そして今は誰も留守番がおらず、ポツンと佇むその屋敷。
それを見ていると、何だか後ろ髪を引かれる様な……。

「おいっ！　何してんだ、お前が来ないと話にならねえだろうが！　とっとと行くぞ……！」
セレナ様が、後を付いて来ない俺を振り返り、イライラと急かしてくる。
付いて来るなと言ったり早く来いと言ったり、忙しい人だ。
俺はもう一度だけ屋敷の方を振り返ると……。

……？

「おい、早く来いってんだよ！　本当に、なんでお前はちゃんと言う事聞いてくれないんだよ！」

「いやセレナ様、俺の屋敷の窓に、なんか女の子が……？」

ほんの一瞬だけ。

屋敷の、二階の窓にピタリと張り付いた金髪の女の子が見えた気がした。

あいつら、あんな小さな少女を屋敷に泊めるとか。

そんな大事な事はもっと早く言って欲しい、そうすれば俺だって帰る事を考えたのに。

「そんなもんどこに居るんだよ！　女の子だあ？　お前いよいよ見えちゃいけない系の物が見え出したのか？　……いや、何だかこの屋敷からはゴースト臭が……？　というかお前、レジーナ様の加護で簡単なプリーストの能力まで付いてるんじゃないだろうな？　ほら、早く早く！」

……？

疑問に思い、もう一度屋敷を振り返る。

そこには、先ほど見た気がした金髪の女の子は見えなかった。

……何だろう、凄く気になる。

後ろ髪引かれると言うか、長く一緒にいた誰かが、寂しそうに俺を見ている様な……

俺はもう一度だけ屋敷を振り返ると、そのままセレナ様の後を追って駆け出した。

「は？　街の外？」
「この時間帯ですし、恐らくは」

冒険者ギルドに駆け込んだセレナ様。
セレナ様は、アクア達の姿が見えないのを確認し、そのまま宛もなく飛び出そうとしたのだが。

「街の外にワザワザ何しに行くんだよ？　外に何かあるのか？」
「外に何か、というか。ウチの魔法使いの日課がありまして。多分それで、皆で外に行ったんだと思います。何時もこのぐらいの時間帯に行ってましたし」
そう答える俺の言葉に、ガクリと脱力したセレナ様は。
「もっと、早く言えよおおおおおおおお！」

ギルド内で、人目もはばからず喚きだした。
もう色々と限界なのかも知れない。
そんな事より。

「セレナ様、ついでなので何か食って行きたいです」
言いながら、手近なテーブルに着く俺を、セレナ様が恨めしそうに睨み付けた。
「……金は払わねーぞ。もうお前に貸しを与える必要は無いからな」

「すいませーん、メニューのここからここまでを、この人のツケで」
「払わねーぞ！　あたしは払わねーからなっ！　……あっ。あたし

は……、私は水をお願い致します……」

店員に、今更ながら取り繕って水を頼むセレナ様が、ソワソワと落ち着きなく。

「なあ、なあ……！　お前、仲間が何処で何してるか知ってるんだろ？　早く言えよ。あたし、ちょっと行って来るからさ。お前はここで食ってればいいから」

「お断りします。セレナ様を一人で行かせる訳には参りません。俺の仲間には頭がおかしいと評判のアークウィザードを筆頭に、セレナ様の力を超えるかもしれないプリースト、硬い以外にはあまりパッとしない娘がいます。あの狂犬みたいな連中が大人しくセレナ様の言う事を聞いてくれるとは思えません、街の外で会ったなら、恐らくは戦闘になりますよ？」

その言葉にセレナ様が少し考え込んだ後。

やがて……

「……よし、注文した物を食い終わったらちょっと来い。相手は街の外に居るんだからな。使える手がある。……今日こそ、お前にちゃんとした仕事を与えてやる」

顔を上げたセレナ様が、そう言って不敵に笑った。

「遅かったですねセレナ様。待ちくたびれましたよ。どうするんで

すか、せっかく奢って貰ったのにこれだけ待たせた所為で、貸し借りはトントンですよ？」

「……お、お前……お前って奴は……」

地面に座ってだらけていた俺に、セレナ様が疲れた様に項垂れた。

そこは街の外の共同墓地。

飯を食い終わったら墓場へ行くぞと言われたので、頼んだ物を適当に食べた後、俺は気を利かせて一人で先に来ていたのだ。

大量に注文したので、食い切れない分を、ここ最近ロクな物食べてないセレナ様に分けてあげたいという下僕心だ。

セレナ様にはトイレに行くと言って、ギルド職員に言伝を頼み、そのままそっとギルドを後にしてきたのだが。

「美味しかったですか？」

「ああ美味かったよ！　金が無い所為で、その後こんな時間までタダ働きさせられなきゃもっとな！」

泣き顔で食って掛かるセレナ様。

「お前とのお喋りにかまけている暇はねえ。ほら、やるぞカズマ！　この墓地の下に眠っている死体を掘り起こせ、あたしはここから先をやるから、お前は向こうな」

「すいません、信仰上の理由で仏さんにそんな罰当たりな事出来ないんですけど」

「お前、レジーナ教徒だろうが！　信仰上の理由って何だよ！　死体に触りたくないってそう言えよ！　良いからやれ！　ワガママ言うな、たまにはちゃんと働いて貰うぞ！」

「マジ勘弁」

死体を掘り起こすだとか、流石に無理だ。

これぱっかりはと、激しい痛みに耐えて本気で命令に抵抗しているとセレナ様がいよいよ泣き出しそうな顔をしながら諦めた。
「くそ、もういいよ！　お前はそこでじっとしてろ！」
半泣きのセレナ様が、シャベルを片手に墓を掘る。

セレナ様が働いていた所為で、時刻はすっかり夕刻近くになってしまった。
これでは、アクア達も自宅に帰っている頃では無いだろうか。
つまり、死体を傀儡化してアクア達を襲撃するとしても、もう街中に戻ってしまっている為……。

今更死体掘り起こして操っても、街中じゃ使えませんよと言おうとしたが、セレナ様に有利な助言をすると、せっかくセレナ様から受けた貸しを返してしまう事になる。
俺は、汗だくで墓を掘るセレナ様を暖かい目で見守った。

「はあ……、はあ……っ！　よ、よし……最初の一体！　後はコイツを操って、墓を掘らせればいい……『マリオネット』！」
「だが傀儡ポイントが足りない」
「！？」
セレナ様が俺の言葉にギョッとした表情で振り返る。
そして、俺の言葉通り掘り返された死体は動きもしない。

「お、おい！　傀儡ポイントって何だよ、これ、どういう……」
セレナ様が呟き、そしてはたと手を打った。

「傀儡ポイントって、お前に注いでいる支配力の事か！　勝手な名前付けやがって！　おいカズマ、抵抗するなよ？　今からお前に送っている支配力、お前に貸し付けている借りを少しだけチャラにする。いいか、本当にもう抵抗するなよ！　お前の支配を解きたいの

は山々だが、それをするとお前が邪魔するのはもう理解した。だから、いいか？　今回お前の支配を弱めるのは他に傀儡を増やす為だからな？　抵抗するなよ？」
「そこまでしつこく言うって事は、お笑い芸人的な前振りと受け止めていいんですかね」
「違うよ！　いいか、抵抗するなよ？　いくぞ……！　………抵抗するなって言ってんだろうが！　お前あたしの傀儡なんだろ、たまにはちゃんと言う事聞けよお！」
俺は、体内に宿っているセレナ様の力が外に抜け出そうとするのに激しく抵抗。
この俺が居るのだ、他の傀儡など必要ない。
セレナ様が、ちっとも言う事聞かないそんな俺の胸ぐらを、涙目になって締め上げた。
「うぐぐ、ちょ、ちょっと聞いて下さいセレナ様……！　セレナ様がタダ働きしたりモタモタ墓掘り返してる間に、もうすっかり夕方近くに……。多分、もう街に戻り家に帰って……」
「早く言えよおおおおおおお！　大体誰の所為でタダ働きしたり墓を掘るのが遅れたと……！　ちっくしょおおおおおお！」
セレナ様は、もうこぼした涙を拭きもせず、再び俺の屋敷へと……！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ぐったりと疲れきったセレナ様。

美女の気ダルそうな表情というのはなかなかどうして悪くない。
そんなセレナ様が、俺の屋敷のドアを力無く叩いていた。
もう、声を出す気力も無い様だ。

やがて、ドアが開けられるでなく、屋敷の内から声がする。
「こんな時間にどちら様？　物売りなら間に合ってるんですけど。宗教の勧誘なら論外ですけど」
それは久しぶりに聞く、すっとぼけたアクアの声。

「よう、あたしだよ。お前の所の大事な男を返しに来たぜ」

そんなセレナの声を聞き、一瞬シンと静かになり。
やがて、ドアがほんの少しだけ開けられた。
その隙間から、こちらを覗うようなアクアの視線。

「……カズマさん？　本当に？　……本当に？」

恐る恐るといった感じで、アクアがドアの隙間から俺を見てくる。
そんなアクアの背後から、ガタンと大きな音がした。
そして、バタバタとこちらに駆けて来る音。

セレナ様が、俺の耳元に顔を寄せ囁いた。
「いいか、ややこしくなるからお前は黙ってろよ？　大人しくしてたら、宿に帰った暁にはちゃんとお前が満足する代償をやるからな」
「帰ったらと言わずに今ください」

セレナ様が、ぐっ、と何だか悔しそうに一瞬呻く。
セレナ様は、そのまま気を取り直した様に腕を組んで堂々と立つ。
やがて玄関のドアが開けられると、何だかオドオドしているアクアの背後に、めぐみんとダクネスが並び立った。

めぐみんとダクネスが、俺の顔を見て、その表情がパアッと明るくなり。

そして……、

「……その男は、何してるのかを聞いてもいいですか？」

めぐみんが真顔で言った。

その男とはもしかしなくても……。

「この男の事は、今は気にしないでいい。と言うか、こいつを返品しに来たんだ」

そんな事を言うセレナ様の隣に膝を抱えて座り込み、堂々とスカートをめくって、間近でパンツ見ている俺の事だろう。

体育座りの姿勢でセレナ様の隣に座り、片手でスカートの裾をめくる俺。

そんな俺を、セレナ以外の三人が呆然と見つめていた。

まじまじとパンツ見る俺から、まるで痛々しい物から目を逸らすかの様に視線を外し、めぐみんがそのまま前に出る。

「……カズマに一体何をしたんですか？　ヘタレのカズマがこんなに堂々とセクハラするなんておかしいですね。セクハラ大好きな男ですが、こんな風に堂々とはしないはずです。不可抗力を装ったり理由付けをしてみたり。私にセクハラする時は何だかんだと小賢しい手を使っていたカズマが、こんな……」

言い淀むめぐみんの言葉の続きが気になる。

こんな……、何だろうか。

「ん……、私が迫ってみてもすぐ怖気づくヘタレな所が、この男の駄目な所でもあり良い所でもある。貴様が怪しいのは以前から気付

いていた。何をした？　そもそも、ここ数日カズマと貴様との噂を色々と聞いた。一旦は手懐けたカズマを返すとは、何を企んでいる。この男のこんな痛々しい姿は……こんな……こんな……」

こんな、何だろうか。

「……と言うか。このカズマさんはちょっと要らないんですけど。返すなら、ちゃんと元に戻して返してくれます？　人から物を盗んで、壊れたからやっぱり返すってのは酷いと思うの」

最後にアクアがそんな事を……。

人を、要らないとか壊れたとか、言いたい事は山とあるが、今の俺はセレナ様に喋る事を禁じられている。

と言うか、パンツを拝むのに忙しい。

と、セレナ様がアクアに向けてスッと片手を出した。

「取引しよう。この男を元に戻してやる。代わりに、あんたが大事そうに抱えているそのポーションを寄越しな。そうしたら、この男をちゃんとした状態で返してやるよ」

そのセレナ様の言葉に、アクアが、大事そうに持っていた俺が渡したポーションをじっと見る。

そして。

「お断りします。これはね、まともだったカズマさんから貰った物なの。あんたなんかに渡す義理なんてありません。このポーションは何に使う物なの？　あの仮面悪魔は何て言っていたの？　これを何に使う気か教えなさいな」

ギリッ、と。

セレナ様が歯を食い縛る音がした。

多分、俺によって散々な目に遭って色々限界なのかもしれない。
セレナ様が、顔を俯かせながら静かな声で。

「……あたしが耐えてる内に言う事聞いた方がいいぞ？　あたしを舐めてもらっちゃ困る。これでもあたしは……」

そんなセレナ様の言葉を最後まで言わせる事なく。
「カズマから貰った物だし大事にしてるの。お断りします」
「そうかい分かった、それじゃ交渉はここまでだ！　くたばんな！」
セレナ様が、アクアを指すと同時に叫ぶ。
ダクネスが、それを聞き咄嗟にアクアの前に出た。
「『デス』！」
鋭く叫んだセレナ様の、その指先が輝き、そして……！

「……あれっ？」

セレナ様が間抜けな声を出すと同時に、その指先に灯っていた光が消えた。
「……確保ー！」
アクアとダクネスが、そのままアッサリとセレナ様を取り押さえた。

セレナ様が地面に押し倒され、その上にダクネスが跨っている。

今のダクネスは鎧は着ていないものの、プリーストのセレナ様とでは鍛えた体による体重差がある。
「畜生、魔法が……！　なんでだよお……っ！　レジーナ様、レジーナ様……っ！　あたしに力を……！」
ダクネスの下で逃れようともがくが、身動き取れないセレナ様。

そんなセレナ様に、ダクネスが首を締め上げながら詰問した。
「さあ、この男の呪いを解いて……、な、なんだコレは、私も苦しい……っ？」
ダクネスが戸惑う中、セレナ様が上に乗られたままダクネスを指し。
「『デス』ッ！　『デス』！　デ……」
何度も魔法を唱えるも、何も起こらず、やがてダクネスに口を塞がれた。
さて、俺はどうしたものか。
ここはセレナ様をお助けするべきなのだろうが……。

「……ねえ二人共、本当にこの男、返して欲しいの？　私、コレ、要らないんですけど」
「う……、いやまあ、私もコレは……要らない……かな……」
コレとは、取り押さえられたセレナ様のスカートを捲って、未だパンツを覗いている俺の事だろうか。
と、そんな俺の服の袖が横からクイクイと引っ張られた。
そこには、どことなく嬉しそうなめぐみんが立っている。
めぐみんは、自分のローブの裾を両手で掴み、それを少しづつ持ち上げて……。

「……みんな、黒が好きなだなあ……」
めぐみんが見せつけてきた黒い下着を、体育座りの体勢で超至近距離でまじまじ見ながら俺は呟いた。

「めっ、めぐみん！？」
「めぐみんが超大胆なんですけど！」

騒ぐ二人を尻目に、パンツを見る俺の頭に満足そうに片手を置いて。
「では、みんなが要らないならこの男は私が貰っていきますね」
「あっ！」
どや顔で勝ち誇った様に宣言するめぐみんに、ダクネスが困った様な驚き顔で声を上げた。

しかし妙な状況だ。
セレナ様に馬乗りになるダクネスに、口元を押さえられもがくセレナ様。
俺の頭を撫でるめぐみんに、そのめぐみんのパンツを見続ける俺。
そして……。

「……ほうほう。あんた、レジーナとか言うマイナー神からの加護が半減してるわね。神の加護は、本来は信者に公平に分配されるの。つまりあんたの所の神様は、マイナー過ぎてあんたぐらいしか信者が居なかったのね。今まではマイナー神の力をあんた一人で独占出来ていたけれど、ウチのカズマさんが信者になっちゃったもんだから……」
「！？」
セレナ様が口を塞がれたまま、俺に殺意の篭った視線を送ってきた。
どうも、俺が傀儡どころか勝手に信者になってしまった所為で、セレナ様が弱体化してしまったらしい。
しかし、俺をそんな目で睨まれても。
アクアが、そんなセレナの傍で屈み込み。

「さあ、早くカズマさんを元に戻して！」

「……そのポーションをかければ元に戻る。もっとも、その男は激しく抵抗するだろうがな」

セレナ様が、観念した様にぐったりしながらアクアに伝える。

どうしたものか、セレナ様の忠実な下僕である俺はどう行動するべきか。

というか現在、めぐみんが俺の片手をぎゅっと握り、離さない。

そして、もう片方の手で俺の頭を撫で続けている。

俺はと言えば、相も変わらず体育座りの状態で、片手でめぐみんのスカートめくって見ている訳だが……。

「ふふっ、久し振りですねカズマ」

めぐみんが、少し恥ずかしそうにしながらも嬉しそうにはにかんだ。

俺としても、セレナ様を助けに動きたい所なのだが、こんな嬉しそうな顔した魔性のめぐみんに誘惑されると……。

今の俺はセレナ様に全ての本能を開放され、自らの制御が効かない状態だ。

だから、仕方ないんですセレナ様、許してください。

「と言うか、どうしてこんな事態になったんだ。貴様は何を考えている。ウチのカズマをこんなド変態にして、一体何が面白いんだ？」
「あたしだってこんなんなるとは思ってなかったよ！　あたしはコイツを傀儡にしようとしただけだ。本能を開放して、良心を切り捨てさせただけで……。後は、コイツが予想以上に勝手に懐いてきただけだ！」

セレナ様が悔しげに唇を噛み締め。

「……ここ数日、本当に酷いもんだった……。理由を付けては働く事を常に拒否し、隙があればセクハラ、何かあればセクハラ。人生舐めててワガママ放題の贅沢放題……」
「……それは、元のカズマさんとあんまり変わってない気がするの。まあいいわ、とにかくこのポーションをかければ元に戻るのね？」

言いながら、アクアが俺に近付いて来る。
「……私としては、別にこのままでもいいのですが……」
めぐみんが、俺にパンツをガン見され、ほんのりと頬を染めながら言ってきた。
めぐみんの隣で、俺はセルフでスカートを捲っているのだが、めぐみんに片手を握られているので逃げられない。
俺がこのままでいいと言うのなら手を離して欲しい。

そんな俺に、アクアがそろそろと警戒するかの様に近付いて来ると。
「ねえカズマさん、今から元に戻してあげるから、余計な事しないでね？」
「このままでいい」

即答する俺に、アクアがジリジリと距離を詰める。

「そうもいかないの。そのままよ、そのままジッとしてるのよ……？」

「おいプリースト、抜かるなよ！　その男は絶対に何かするぞ！」

アクアにセレナ様が鋭く警告する中、アクアがそんな事は分かっているとばかりに言い返す。

「わ、分かってるわよ、私がどれだけカズマと付き合っていると思ってるの？　めぐみん、カズマが逃げたり何かしたりしない様に捕まえていてね！　さあ、それじゃあ……」

「『スティール』」

「「「「あっ！」」」」

俺はめぐみんの下着から視線を外し、アクアに向けて片手を出す。

そのスティールは、一撃でアクアからポーションをもぎ取った。

そして……。

「そおい！」

「わあああああーっ！」

俺は無造作にポーションを投げ捨てる。

それが地面に落ちる寸前、アクアが叫びながら、咄嗟にスライディングし受け止めた。

「だから言っただろうが！　その男は何かするって！」

「だってだって、仕方ないじゃないの！　あんただってこの男に色々されたんなら分かるでしょ！　この男、突然何しでかすか分かんないんだもの！　めぐみん！　めぐみーん！！」

アクアが半泣きで、今度こそ俺に盗られまいと、大事そうにポーションを胸に抱きかかえながらめぐみんに泣きついた。
それに続いてセレナ様もが、ダクネスに乗っかられた仰向けの状態で言ってくる。

「我が傀儡サトウカズマに命ずる！　そのまま！　そのまましばらく動くな！」
「しょうがないですね、私としてはこのままでもいいのですが……。ほら、カズマ。ギュッとハグしてあげましょう。……そのままじっと……、じっと……？　ちょっ、モゾモゾしないでじっとしていて下さい、アクア、早く！　この男、私のブラを……！」
「めぐみんそのまま！　こっちを向かせないで抱きしめていて！」

めぐみんの胸元に顔を埋める俺の後頭部に、冷たい物が振りかけられた。
それを受け、体から何かが抜けていくのを感じ取る。

おい止めろ、俺はまだこのままでいい。
まだセレナ様にやり残した事が残っているのだ。
その為には復讐の女神の力が必要で……！

……あれっ？
なんで復讐の女神の力が必要なんだっけ。
と言うか、セレナ様？
なんで俺は魔王の幹部を様付けで……。
そもそも、なぜ俺はロクに知りもしない女神をいきなり信仰なんてしたのだろう。

……ああ、そうか。

確か操られそうになる直前、魔王の幹部に、ウチの駄女神を傷付けた代償を払わせると、絶対復讐してやると強く願って……

「カズマ、どうですか？　治りましたか？」

ぺちぺちと頬が叩かれる。

ふと顔を上げると、目の前にはめぐみんの顔。

……。

「もう少し強めにハグしてくれると何かと治ると思います」

「治ったようですね。では……ちょ、も、もう治ってるなら離れて下さい」

めぐみんに引き剥がされて、俺は仕方なく立ち上がる。

と言うか、何だか夢を見ていた様な。

何だか、とても良い感じの神様に仕えていた様な。

まあいいか、俺は基本無宗派だ。

「カズマさんカズマさん。大丈夫？　レジーナだなんて、私も聞いたことないようなマイナー神を拝むぐらいなら私を信仰した方が良いと思うの。今なら、カズマさんの下手くそな字が達筆になったり

と様々なご利益があるわよ」
「いらねえ。そもそも、なぜ俺がマイナー神なんかを崇めたと思ってんだ……。……あれ？」
……？
何でだっけ？
「何で崇めたの？」
「さあ？　よく分からん」

自分でも腑に落ちないが、今はそれ所じゃない。
「よう。無事に元に戻れた様だな」
ダクネスに馬乗りになられたまま、未だ地面に寝そべるセレナ。
コイツをこれからどうすればいいのやら……。

「……あんた、始末に困るなあ……」
「なら、このまま見逃す気は無いかい？　しばらく一緒に暮らした中だろ？　そうすりゃお互い、幸せに慣れると思うよ」
両手を投げ出したまま、セレナが投げやりに言ってくる。
自分でも分かっているのだ、俺がコイツをどうにも出来ない事を。

……警察にでも突き出す。
……何だろう、凄く不安が残るしスッキリしない。

いっそ、復讐の呪いを受けてもアクアに蘇生してもらう事を前提に、遠く離れた街の外に連れて行き、俺がセレナを。
……うん、殺人は無理だ。
俺にそんなクソ度胸があれば、ヘタレだなんて罵られる事も無いだろう。
……簀巻きにしてダンジョンに持って行って放置とか。
いやいや、それも結局は殺人みたいなもんだしなあ……。

クソ、下手に数日一緒に暮らした所為で、中途半端に情が移った。
しかし、このまま見逃すってのも……。

「……悩んでるみたいだな。なあ、カズマ。あたしを見逃せば、この街への襲撃計画は見直す事になるだろうさ。あんたが居るこの街に関わるのはもうコリゴリだよ。……これは本音だ。……それに、名前だけの魔王の幹部、ウィズ。そしてバニル。街を襲っても、気まぐれなこの二人がどう出るか、全く分からないからね。あたしは城に帰って、計画を練り直すよ。あたしを見逃せば、この街は見逃される。どうだい？　今度こそ、ちゃんとした取引だ」

セレナが、悩む俺を見透かしたかの様に。
そして、そんなセレナに跨るダクネスが、静かに言った。
「……おいカズマ。この女は何だ？　魔王の関係者か。街の住人を守る為なら、私がぶっ殺してやろうか」

物騒な事を言うダクネスの、その肩を掴む。
ダクネスは貴族で、この街の仮の領主の娘でもある。
意外と短気なこの女は、街の住人を守る為ならセレナの殺害くらいやりかねない。

そして、そんなダクネスの言葉に覚悟を決めた。

もう一度、一からやり直そうと。

「悪いなセレナ。交渉は無しだ。俺も痛いが、今回はお互い痛み分けって事にしとこうぜ」

レジーナの復讐の呪いにより、俺もレベルが一になるだろう。

「何する気だ？　……おい、止めろよカズマ。一緒に暮らした仲だろ？　賢くなれよ、ここはあたしを見逃しとけって」

俺は右手を閉じたり開いたりしながら、セレナへと近付いて……。

「……レベル一からやり直してくれ。……俺、レベルドレインが出来るんだよ」

「！？」

それを聞き、途端にセレナが暴れ出す。

ダクネスが、暴れるセレナの腹に拳を入れた。

「ぐあっ！」

「あぐッ！？　な、なんだこれは？　おいカズマ、この女を殴ったら、私の腹が……！」

戸惑うダクネスに静かに告げる。

「そいつを攻撃すると、ダメージがそっくりそのまま返ってくる。間違っても殺そうとするなよ。殺されると、辺りに大量虐殺の死の呪いを振り撒くらしいぞ」

そんな俺の言葉に、

「……なるほど。以前ドロップキックを食らわせてカズマが気を失ったのはそういう訳ですか」

めぐみんが、一人納得した様に頷いた。

「……」

ダクネスがそれを聞き、無言でセレナの頬をつねり出した。

「いたたた、何すんだ！」

「あうう……！　貴様、何か隠している事があるだろう？　さあ、

吐け！　私の目は誤魔化せない！　はあはあ……、い、痛い……！
くうっ……、だが、こんな痛みではこの私は……！」
「何言ってんだ、そこのカズマが大体知ってる！　痛い！　おい止めろ、カズマに話した事以外特に何も無いって！　痛い、止めろ！　お前にも痛みが返ってくるんだぞ、止めろ！　止めろって！」
セレナを使って特殊な一人遊びを始めたダクネスを、必死に押し退けようとするセレナ。
そんなセレナに近付くと。

「おい、カズマ、この女を止め……！　ちょ、ちょっと待て、お前も近付くな、分かってんのか、お前もレベルが下がるんだぞ？　考え直せよ、あたしのレベルを下げてお前にどんな得がある？　か、考え直せって！」

慌てるセレナに手を伸ばし。

「今後はまあ、ゆっくりとレベルを上げるさ。金もあるし、装備を最高級品にしてのんびりとな。……さあ、一緒にやり直そうぜ」

セレナが引きつった顔で、自らの頬をつねるダクネスの手を掴み。

「お前って、やっぱり魔王軍にとって、最も危険な奴だと思うよ」

「そりゃ過大評価だろ。今後はのんびり生きてくから、魔王の城に帰ったらよろしく頼むよ」
セレナは、冗談めかした俺の言葉を無視し、こちらに指を向けてきた。
……？
何のつもり……。

……あっ。

「やっぱりお前は生かしておけない。お前が治ったって事は、レジーナ様の信者はまたあたし一人になったって事だ。さよなら、ワガママな傀儡」

俺はセレナがこちらを指さす手を掴もうと。

そしてダクネスが口元を掴もうとしたが、セレナが呟く方が早かった。

「『デス』」

19話（後書き）

こんな引きなのに全くドキドキしない問題点。

前話に続き、色々ご都合主義でやはり苦しいかなと思います。
しばらく置いてみて、読み返して納得いかない様なら、後日修正するかもです。
ご迷惑をお掛けします。

今話でセレナ編の決着付けると言いましたが伸びました、申し訳ない……。

20話

「おおカズマ。死んでしまうとは情けない！」

そこは、お馴染みの白い部屋。

ふと目を開けた俺は、ノリノリでそんな事を言うエリス様と突っ立ったまま見つめ合っていた。

この人も意外とお茶目なのかも知れない。

と言うか、日本の事も色々と知っているのか。

「……ノリノリですねエリス様」

「すいません。有名なセリフなので、一度言ってみたかったんです。ここって暇なんですよ。もちろん、私が暇なのはとても良い事なんですけどね？」

茶目っ気たっぷりにエリス様が、そんな事を言いながら目を細めた。

「……あ、あいつどうなりました？　俺にデスを掛けた後」

「激昂したダクネス……さん、に。そのまま思い切り殴られて、殴ったダクネスさんと一緒に気を失ってますよ。先輩はカズマさんの蘇生を。めぐみんさんは、魔王の幹部を念入りに簀巻きにした後、気を失ったダクネスさんの介抱をしています。……ご安心を。みんな無事ですよ？」

言って、ニコリと微笑むエリス様の言葉にほっとした。

なら、後はアクアに蘇生して貰ったら俺の出番だ。

レベル一になるのは正直キツイが、セレナを無力化するにはこれが一番の方法だろう。

他にも色々考えてはみたが、やはり自分の手でケリを付けたい。

俺は少しだけ安心し、その場に膝を抱えて座り込んだ。

……しかし、いつもいつもポンポン死ぬなあ……。

理不尽で弱者には優しくない世界だし仕方ないが、もうちょっと何とかならないもんか。

こうもアッサリ死ぬと、流石に落ち込んでしまう。

なにより、段々ここに来る事に抵抗が無くなってきているのが問題だ。

死ぬのに慣れるというのもどうかと思う。

と、エリス様がじっと俺の顔を見ながら、何も言わずに微笑んでいた。

両手を胸の前に組んで部屋の中央に立っているエリス様は、何と言うか何も喋らなくても一緒に居るだけで癒される。

これが本物の女神様となんちゃって女神との実力の差か……。

ああ、そうだ。

「エリス様。以前俺がここに来た時、もう俺と何度も会ってるって言ってましたよね？　そろそろ教えて下さいよ。でないと、俺、知らない間に女神様相手に失礼な事とかしちゃったら、罰とか当たるじゃないですか」

「……失礼な事とか、罰だとか今更……。そもそも、初対面の時に……」

「えっ？」

「……何でもありません。正体は内緒です」

言って、自分の口元に人差し指を当てるエリス様。

くそう、気になる。

しかし、本当に誰だろう。
地上では、口調も外見も職業も違うと言っていたが……。

人差し指を唇に当てて、ニコニコしているエリス様。
そのエリス様を見ていると、もう色んなしがらみから開放されて、ずっとここに居たくなってくる。
何で俺が魔王の幹部なんかと戦わないといけないのか、なんで俺は異世界なんかで、やたらと強敵とばかり関わっているのか。
せっかく大金を手にしても、魔王の娘が首都を攻めるだの、俺達の街にも部隊が転送されてくるだの……。
ああ、嫌だなあ……。
死んだ直後な所為か、流石に鬱にもなってくる。
でも戻らないと。
今の所、首都への襲撃計画や街に魔王の部隊がやって来る情報を知っているのは俺だけだ。
そして、セレナのレベルを下げて俺もレベル1に戻って……。

「……はあ……」

これからの事を思うと、ついついため息が出てしまう。
膝を抱えながらため息吐く俺に、エリス様が心配そうに首をかしげた。

「大丈夫ですか？　大丈夫……な訳ないですよね、死んだのですから……」

言いながら、エリス様が俺と向い合ってしゃがみ込み、膝を抱えた状態に。
視線の高さを俺に合わせ、心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。
やはり、メインヒロインはここにいたんだ。

やさぐれていた俺の心が急速に癒されていると。

《カズマさーん、カズマさーん！　もう準備は出来たから帰ってきてー》

このゆったりとした癒し空間に、空気を読まない事にかけては類稀な才能を持つ、偽ヒロインの声が響き渡った。

あの理不尽な世界へ戻りたくないと、俺は膝に顔を伏せながら、自分の両耳を抑えて、聞こえないフリをして現実逃避を始める。

「あ、あの……、先輩が呼んでますよ？　気持ちは分からなくも無いですが……」

現実逃避しようとする俺に、エリス様が困った様に言ってくる。

「……こう何度もポンポン死ぬと、流石に落ち込むし、また死なないかと帰るのにも腰が引けますよ。いっそ、このまま新しい人生やり直した方がいいんじゃないかって」

「それは……。しょうがないですね、普通は一度死んだだけでそのショックは相当な物ですし……。カズマさんの場合は、毎回楽な死に方ばかりですから、まだ精神的なショックが小さい方ですが……」

目の前で困り顔で膝を抱えているエリス様。

やがてエリス様が、穏やかな笑みを浮かべた。

そして小首を傾げながら。

「……でも、思い出してください。この世界では、素晴らしい仲間達との楽しい思い出があったでしょう？　まだ、やり残した事があるんじゃないですか？　ほら、思い出してみてください、あの世界の事を……」

その言葉に、俺はゆっくりと、これまでの異世界での出来事を振り返る。

アクアとの、あの世界に来たばかりの時の、苦労に苦労を重ねた

馬小屋暮らし。
理不尽な理由で背負わされた多額の借金。
ロクな事しかしない仲間達。……そして、その尻拭い。
一癖も二癖もある街の連中……。
そして、その反動か実にポンポン死ぬ俺。

「……やっぱり、もう生まれ変わりたいんですが……」
「ええっ!?」
地球に送ってもらって金持ちの家の猫にでも生まれ変わろう。
そして、生涯を勝手気ままに寝て過ごすのだ。

《カズマさーん、早くきてー、早くきてー》

そんな、気楽なアクアの声。
頑張った。
もう俺、頑張ったよ。
生き返っても、どうせまた、アッサリと死ぬ様な気がする。

「俺はもうこのまま、新しい人生送るからー！　そっちの事はお前らに任せたー！　二人には、達者でなって伝えてくれー！」
「えええっ!?」
俺がどこへともなく大声で叫ぶと、エリス様が驚き。
やがてシンと静まり返る。

そして……。

《この男、またバカな事言い出したんですけど！　あんたふざけんじゃないわよ、何で定期的におかしな事言い出すの？　バカなの？　やっぱりバカなの？　そんなだから、あのプリーストにホイホイ付いてく羽目になるのよ！》

あっ！？

アクアの罵声にカチンと来る。

「お前ふざけんなよ、そもそも誰の為に魔王の幹部に喧嘩売ったと……！　あのな、俺は街を守るため、人知れずあのプリーストと戦いを続けてたんだぞ！　その激しい攻防の果てに洗脳されて連れて行かれたんであって……」

《えっ。めぐみん何してるの？　えっ。えっ……！》

……おい。

「お前、そんな事言ったってもう関係ないからな！　俺の体にイタズラでも何でもすればいいさ！　お前らが泣きながら、お願い帰ってきてって言うまでは……」

《めぐみん何してるの！？　ねえ、何をするの！　カズマさーん、カズマさーん！　早く帰ってこないと……！　帰ってこないと……！》

……だ、騙されないし釣られない、今更自分の亡骸に何されたって……。

そう、もはやそんな脅しには……！

《カズマさーん！　めぐみんが……！　めぐみんが、カズマの初めてを貰うって言って凄い事しようとしてるんですけど！　って言うかめぐみん、真っ昼間からそれはどうかと思うの！》

色仕掛けかあああああ！

「……」

膝を抱えてソワソワしだした俺を見る、エリス様の視線が何だか余所余所しい物になる。

ああどうしよう、やばい、帰らないと大人になれる瞬間を逃す事に……！

いやでも、ここでノコノコ帰ったら俺はめぐみんの色仕掛けに簡単に屈する単純な男だと思われて……、いやいやいやしかし……！

《めぐみん、初めてのカズマさんに、いきなりそんな大きいのは無理だと思うの！　カズマさんのカズマさんが壊れちゃう！》

！？

「おい、俺の初めてを貰うってそっちの初めてかよ！」

《めぐみん駄目よ、それは食べる物よ！　そんな事する物じゃないわ、罰が当たるわよ！》

「止めて！　アクア、今すぐ帰るから早く止めろー！」

《だってだって、カズマの見えちゃいけないものが色々と……、ああっ、めぐみん駄目よ！　駄目……、だ……、……ああっ……》

「諦めるな！　諦めるなよ、頑張れよ！　今そっち帰るから！」

俺はすぐさま立ち上がり、

「じゃあエリス様、急を要するんでこれで！」

そのまま大慌てで例の門の前に駆け出すと……！

「い、行ってらっしゃいませ……。……あっ！　カズマさん、お急ぎの所すいません！　実は、先輩にちょっと伝言を頼みたいのですが……」

「で、伝言！？　今超急ぎなんですが……！」

《あああっ、めぐみん！　めぐみんっ！　だ、駄目よそれ以上は、時間切れよ！　もうカズマが帰ってくるって言ってるわ！　早くズボンを……！》

俺は泣き出しそうになりながら、エリス様を振り返る。

そんな俺に、エリス様が申し訳無さそうな表情で。

「実は、上の方からの伝言でして……」

「あっ！　カズマ、お帰り！　危機一髪だったわね！」
「お、お、お帰りなさい……」
目が覚めると、俺をアクアとめぐみんが覗き込んでいる。
めぐみんがほんのりと頬を染め、少々荒い息で、何かを後ろ手に隠していた。
俺と目が合うと、めぐみんがフイッと目を逸らす。

自分のズボンが慌てて履かせた様に乱れているのが恐ろしい。
挙動不審なアクアとめぐみん。
そして、遠く離れた所には、白目を剥いたセレナとダクネスが横たわっていた。

「ちょ、ちょっと私はダクネスを起こしてきますね」
言って、俺から目を逸らしながら、逃げる様に慌ててダクネスの下へと行くめぐみん。

そんなめぐみんを見送りながら、俺は、残された、何やらオドオドしているアクアに向き直る。
「おいアクア」
「何かしら!?　私は止めたわよ?　めぐみんと二人で、カズマさ

んのカズマさんをマジマジと見たりなんかしてませんから！」
……こ、こいつ……。
俺は気を取り直し、アクアに告げた。
「……お前、天界に帰りたかったりとかするか？」

◆◆◆

「カズマ、起きて！　朝よ朝！　ほら早く！　早く起きて！」
翌日の朝。
一切のノックもせずに、アクアがけたたましく喚きながら、俺の部屋へと飛び込んできた。
モゾモゾと布団から顔を出すと、窓の外はまだ薄暗い。
「……今何時だよ……」
「そろそろ五時？」
早えよ……。
俺が再び布団の中にモゾモゾと潜り込むと、アクアが布団の上に飛び乗ってきた。

「なに二度寝なんてしようとしてるの！？　ほら早く、起きて起きて！　さっさと支度して、クエストに行ってレベル上げするわよ！」
「勘弁してくれよー……。俺、夜中まで飲み歩いてたから今日は夕方まで寝たいんだよー……。昨日は、魔王の幹部撃退祝いをしてたんだよー……」

昨日、アクアにエリス様からの伝言を告げた後。
俺は予定通りセレナのレベルを1にして、自らもレベル1になった。
そのまま、気絶したままのセレナを警察に預け、セレナや魔王軍の連中の計画など、洗いざらいぶちまけてきたのだが。

弱体化したセレナは、もう強力な呪いをばら撒く事も出来ないだろう。
警察署の署長が、これからセレナ相手に色々と取り調べをするとか言っていた。
魔王の娘による王都襲撃計画や、この街への襲撃などなど、それらへの対策の手も打ってくれるそうだ。
魔王の幹部を捕らえた事とその計画を事前に止めた事により、結構な額の賞金も出るらしい。

……となると、後はもうレベル1になった俺に出来る事などない。
王都の事なんてどうにも出来ないし、この街への襲撃にしても、セレナによる主力冒険者達の傀儡化、そして内部からの破壊工作が織り込まれての計画だ。
それらが失敗した以上、簡単にこの街が落とされる事もないのではなかろうか。
というか、セレナと言う指揮官を失った以上、この街への襲撃自体が無くなるかもしれない。

と、言う訳で。
俺は安心して、昨日遅くまで、祝勝祝いとして飲んでいたのだが。
「起きてー、起きてー！　ほら、早く起きて！　そして、人類のため、未来のため！　魔王退治に行くの！」
アクアが、布団越しに俺の上に乗っかったままバタバタと暴れながらそんな事を。
魔王退治。
こいつがそんなバカな事を言い出したのには理由がある。
そう、エリス様からの伝言だ。
「魔王なら、その内どこかの女神様に選ばれし伝説の勇者とかが倒してくれるよ……。おやすみなさい……」
「ここにもれっきとした女神様がいるでしょ！　私があんたを勇者認定してあげるから、ほら起きてー、起きてー！」
創造神からの伝言。
それは、魔王が倒された暁には、アクアは天界に帰して貰えるとの事らしい。
俺のレベルが下がる前で、それでいてまだコイツとの付き合いが浅く、とっとと放り出してやりたいと思っていたあの頃ならいざ知らず。
今の状態で、なんで俺が魔王退治になんぞ行かなければならないのか。
というか、無茶振り過ぎる。
セレナの企みだって、偶然に偶然が重なって運良く勝てたってだけだ。

しかも、アレであいつは魔王の幹部の中でも弱い方で。
更に言うなら、そんなセレナに、俺は最後に殺された訳だ。
それが、城に篭って、強力な部下に囲まれた魔王を退治に行く？

……アホか。

俺は未だ布団の上でバタバタしているアクアに、首から上だけを布団から覗かせると。
「……お前、魔王だよ？　魔王なんて、俺が倒せる訳がないだろ？　お前、それ程までに俺の事を評価してんの？　魔王を倒せるような男だって？」
「まさかー。そんな訳ないじゃない、私だって現実ぐらい知ってるわよ」
……この野郎。

「じゃあ、何だってんだよ。俺がレベル上がった所で、俺達でノコノコ魔王の城に向かったって、途中の強いモンスターに食われるか、城に付いた所で魔王の軍勢に袋叩きにされて終わりだぞ。お前やダクネス、めぐみん辺りは、魔王に捕まって凄い目に遭わされるだろうな。喜ぶのはダクネスぐらいのもんだぞ、分かってんのか？」
「分かってるわよそれぐらい。ちゃんと私に考えがあるの。カズマがそこそこのレベルになって、魔王の城に近付ければそれでいいのよ」

……ほう？

「何か、良い考えがあるなら聞こうじゃないか」
「聞いて頂戴。あのね、まずは私達で魔王の城に行くじゃない？で、魔王の城の周りには……。そこには、結界が張ってあるって話でしょう？　魔王の幹部達が張った結界が」

……？

そんな話だったか。

俺には関係ないと思って、そんなもん今まで聞き流していた。

俺が無言で聞いていると、アクアが説明を続けていく。

「つまり、昨日カズマが魔王の幹部を一人無力化させたわ。レベル1の魔王の幹部じゃ、結界の維持なんて出来ないし、これで結界を維持している魔王の幹部は……。何人だっけ？」

「……魔王の幹部って八人居たんだったか？　その内一人が遠い昔に戦争かなんかで死んで。後は、ベルディアって、あの最初に来たデュラハンに。バニルにシルビア、セレナが無力化。……後は……ウィズも含めて三人か？」

「そう！　魔王の幹部は残り三人！　私の凄い女神パワーなら、その位の数で維持してる結界程度、破壊は出来なくても一時的に人が通れる穴ぐらいは開けられるわ！　いいえ、三人の幹部が維持している結界ぐらいなら、頑張れば破壊出来るかも！　結界が破壊出来ればよし、破壊出来なくても、人が通れる穴ぐらいなら開けられるの！」

ほうほう。

……で？

「それはいいんだけども、魔王を倒す肝心の方法は？」

俺の疑問にアクアが、自信満々に言い放つ。

「結界が壊れれば儲けもの。私の可愛いアクシズ教徒の子達や、紅魔族の人達、ついでに、国の偉い人達にチクるの！　今まで築き上げたカズマのコネを生かして、これらの人達に教えるのよ！　今魔王の城に攻め込めば、城の結界はありませんよって！」

何という他力本願。

「でも、城の結界が破壊出来なかったら？」

「その時はしょうがないわね。レベルを上げたカズマさんの出番よ」

ほほう。

「聞こうじゃないか」

「敵感知と潜伏を使って魔王の寝所まで一人で潜入して、魔王を暗殺してきて頂戴」

「なめんな」

俺は、布団の上でぎゃあぎゃあ喚くアクアを他所に、頭から布団をかぶり直した。

広間にて、ダクネスやめぐみんと昼飯を食べていると。

「ねえカズマ。ちょっといいかしら」

アクアが真剣な表情を浮かべ、後ろ手に手を組みながら言ってきた。

まるで、これから大切な話を打ち明けるように。

「……どうしたんだよ。そんな深刻そうな顔して」

俺が鴨のローストをモリモリ食べている中、ダクネスとめぐみんも同じく食事を続けながら、俺とアクアを交互に見ている。
アクアが、ぱっと顔を上げ。
「聞いて頂戴！　私達、このままではいけないと思うの！」
また唐突に、そんな事を言い出した。
口の中でローストをモゴモゴしながら、取り敢えず聞いてやる。
「何がこのままじゃいけないんだ？」
「この、自堕落な生活よ！　ねえ、このままでいいの？　昼過ぎに起きだして、食っちゃ寝食っちゃ寝！　変わった！　カズマさんたら、変わったわ！」
いきなりなんだ。
そんなアクアに、めぐみんとダクネスがフォークを置く。
「そうですか？　この男は大体昔からこんな感じでしたが」
「うん、大体こんなもんだろう。まあ、今は生き返ったばかりという大義名分がある。普段にも増して、ゴロゴロと駄目人間と化しているが」
……。
「そうだけど！　元からこんなんだったかもしれないけれど！　でも、私は昔のカズマさんに戻って欲しいの！　あの、莫大な負債を抱えて、毎日涙目でヤケクソになりながら、小銭を稼ぐ為にあくせく働くカズマさんに！」
「よし、掛かって来い、お前を経験値の足しにしてやる」
フォークを片手に席を立つと、アクアが警戒し、シュッシュッと

シャドーしながら後ずさった。

「どうしたんです？　普段はカズマと同じレベルでゴロゴロしているアクアが急に」

「ん、あのプリーストの騒ぎも収まった事だし、これからは特にクエストに行かなくなるなと危惧していたのだが」

そんな二人の正論に、アクアがぐっと返事に詰まった。

「その……。ぼ、ぼーけんしゃの義務と責任、みたいな……」

「「「……」」」

「……みたいな……」

俺達三人の視線に晒され、言葉尻が小さくなっていくアクア。

「ぼ、冒険者として、世間の困っている人達を……うう……、わ、わあああーっ！」

耐え切れなくなったアクアが逃げた。

「アクアは急にどうしたんです？」

食事を終えたためぐみんが、フォークを置きながら言ってくる。

ダクネスも不思議そうにナプキンで口元を拭っていた。

「気にしなくていい。急に正義感に目覚めたらしくて、魔王を倒し

たい病気をこじらせたんだよ」

「「魔王！」」

「うおっ！？」

魔王の言葉に突然反応する二人。

「魔王ですか！　いいですね、魔王退治ですか！　我が最強の名を確固たるものにするため、ちょっと殺っときますか」

いつからお前が最強になった。

というか、ちょっとコンビニ行って来るみたいな感覚で言うな。

「魔王……。魔王かあ……。きっと、その攻撃は凄いんだろうなぁ……。私の自慢の鎧でも、一撃で破壊されてしまったり……」

ほんのりと頬を染め、夢見る女の様にぼうっとした表情を浮かべる変態。

そういえばこの二人はこんなんだった。

「一応言っとくが、行かないからな。ちょっと魔王の幹部を立て続けに退治出来たからって、変な勘違いはするなよ？　俺達のパーティはどちらかと言うと駄目な方のパーティだからな？　だから……。……そんな、目をキラキラさせて俺を見ても、絶対に行かないからな？」

「……ったく、なんなんだあいつは」
時刻は深夜。
俺は自室で、両腕を枕にしながら物思いに耽っていた。

全く、何考えてんだかあいつは。

そりゃあ、俺に無理やり連れて来られた訳だし、帰れるものなら帰りたいのだろう。
あいつの場合は自分の意志でこの世界に来た訳じゃないし。
しかし、こうもアッサリ帰りたがるとか、なんという薄情者。
俺達の関係はそんなアッサリしたものだったのかと、少しだけショックだ。

……いや、めぐみんの話では、ここ最近のセレナによる街の連中の傀儡化で、冒険者達に必要とされなくなったアクアの落ち込みようも酷かったらしい。
きっと、それらの事が重なったのだろう。
あいつも、そこまで考え無しのバカでは……。

……。

……単に、皆に会えなくなるとかそこまで深く考えていないだけかも知れない。

まあ、女神には女神の感性や考えがあるのかもしれない。
一応アレでも、崇めてくれる信者もちゃんといる、神様なんだよなぁ。

そりゃあ、何だかんだで長い付き合いの腐れ縁だ。
本気で望むのなら、魔王ぐらい……。

魔王…………。

……無理ゲー。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

一体どれくらいの間眠ったのだろう。

何か、遠くから声が聞こえる。

「…………ばれし…………あなたの…………」

それは、とても心地良い響きで。

なんだか、心の奥底から自信が湧いてくる様な…………。

「神々に選ばれし…………偉大なる伝説の…………」

そう、俺は神に選ばれた伝説の…………。

…………伝説の？

ふと目を開ける。

すると、耳元に何者かのボソボソと囁いてくる吐息を感じた。

「神々に選ばれし偉大なる伝説の勇者、サトウカズマよ……。あなたのその手に、人類の命運がかかっているのです……。さあ、今こそ魔王を倒すために立ち上がりなさい……。そして、儚くも美しい女神の願いを叶えるのです……！」

ふと横を見ると、俺の耳元でボソボソと囁きかけているアクアと目が合った。

「……お前、何してんの？」

「……カ、カズマさんの、可愛い寝顔が見たくなって……」

俺は布団を跳ね除け飛び起きた。

「めぐみん、ダクネス、ちょっと来てくれー！　アクアが夜這いをかけてきたー！」

「わあああああああーっ！　ごめんなさい、洗脳しようとしてましたあああああ！」

20話（後書き）

セレナはしばらく後でまた登場。
そこで真の決着、というか大変な目に遭わされてきちんとケリが付く予定。

前回更新が出来なかった理由は活動報告に書かれております。
仕方ない理由ですので、そりゃあ仕方ないなとご理解頂けると、何かと助かります。

21話

「ねえカズマ。ちょっとこれを見て頂戴」

セレナのデスで死亡して、死後の肉体と魂の損傷を癒すため、屋敷でゴロゴロして既に3日。

綺麗な死に方だった為にあまり療養はいらないと言われたのだが、俺は毎日を快適にゴロゴロと過ごしていた。

現在俺は、屋敷の広間のソファーの上で裸足であぐらをかきながら、鍛冶スキルを使用してある物を製作中。

それを同じくソファーに腰掛け、隣から興味深々でダクネスが見守る中、アクアが俺に1枚の紙を渡してくる。

……？

俺は作業の手を止めて、アクアからその紙切れを受け取った。

ダクネスも、その紙を俺と一緒に覗き込む。

そこには、えらく達筆な字でタイトルが書かれていた。

『魔王に対する好感度アンケート』

「……魔王って響きがなんかカッコイイ（パン屋の店主）。部下に隠れて野良ドラゴンとかにエサやってそう（ペット屋の人）。そんな事より金貸して欲しい（チンピラ）。城を出て店を出すと言ったら、それは良い事だと最初の資金を少し貸してくれました（顔色の悪い店主）。魔王より我輩の方が強い（問題外）。ウチのカミさんが魔王（疲れた顔のおじさん）。……えっと、なにコレ」

「ああっ！　違う、そっちじゃないわ！　そっちは見せちゃいけない方のアンケートまとめ！」

それは既にアンケートとは言わない。

「さあ、コレを見て頂戴！　ここに、街の住人達がいかに魔王に対して苦しみ、怯えているのかが書かれているわ！」

言言いながらアクアが再び差し出してきた紙を、俺は渋々受け取った。

「……この街で店を出しましたがちっとも客が来ません。よく分からないけど、多分魔王の所為だと思います（えっちな店の店長）。魔王が怖くて夜も眠れず昼寝してます。おかげで仕事したくても出来ません。俺が親のスネ齧っているのも魔王の所為です（ニート男性）。魔王が実在する所為で、ウチの神様の人気がちっとも出ません（破壊神崇拝者）。怖い怖い、魔王が怖い、あとはキンキンに冷えたネロイド怖い（劇場の人）。彼女が出来ないのは魔王の所為（中年男性）。彼氏が出来ないのは魔王の所為（冒険者のお姉さん）……。もう一度言うぞ。……なにコレ」

俺がアクアに尋ねると、アクアは驚愕の表情を浮かべ、オーバーアクション気味に後ずさる。

「なんて事！　カズマったら、こんなに困っている街の人の声を聞いて、何にも思わないの！？　そんなだから、巷ではカスマさんだのクズマさんだの言われるのよ！」

「お、おい、聞き捨てならない事言ったな、今なんつった」

アクアは俺の言葉には耳を貸さず、こちらに指を突き付けながら。

「一冒険者として、恥ずかしくはないの？　カズマがこうしてダクネスとイチャイチャしている間にも、世界中の人達はこうして魔王に怯えているの！　謝って！　冒険者を名乗ってごめんなさいって謝って！　世界の人達に謝って！」

「べ、別にイチャイチャはしていない、カズマが何か作っているから見ていただけだ！」

「……めぐみん、まだかなー。腹減った……」

アクアとダクネスを放置して、今日の昼飯当番のめぐみんを待つ。

そんな俺の態度に、アクアがバンとテーブルを叩こうと……！

「ねえ、ちゃんと私の話を……！」

「おいバカ止めろお！　いいか、衝撃を与えるなよ！」

俺は慌ててアクアを止めると、テーブルの上に置いてあった、作業に使っていた小瓶をそっと持ち上げた。

俺の慌て様に、アクアが興味を持ったように。

「……それ、なーに？」

「ウィズの店で買ってきた、衝撃を与えると爆発するポーション」

「「えっ！？」」

俺の言葉にダクネスが慌てて立ち上がり、アクアと共に一歩離れる。

テーブルの上には俺が作業途中だった物が散乱している。

それらは、紙にスポイト、そして、吸水性が高く燃えやすい、何かの植物が腐敗してできた特殊な土。

俺は先ほどから、衝撃を与えると爆発するポーションの中身を、スポイトで少しづつ吸い取り、せっせと紙の上に乗せた土に染み込ませていた。

アクアがジリジリと後ずさりながら、不安気にこちらに問いかけ

てくる。
「ね、ねえ……。なぜそんな物騒な物を持ってるの？　それで一体、何をするつもりなの？」
俺は手にしたポーションをそっと離れた場所に持って行く。
そして、静かに床に置くと。
「いやな、今までずっと、これって魔法のポーションか何かだと思ってたんだよ。そしたらさ、これ、火を付けても爆発するんだわ。ほんの一滴、火に近付けたらボンってなった。つまり、これってニトロに近いものなんじゃないかと思ってな」
俺の言葉に、テーブルの上の材料を見たアクアが、何を作っていたのかピンときたようだ。
そう、あの有名な……
「なるほど……。季節は夏。カズマさんに流れる日本人の血が、打ち上げ花火を作らせるのね」
「ダイナマイトです」
ダクネスが、不思議そうに。
「にとろ？　だいなまいと？　聞かない言葉だな。それは何をする物なんだ？」
そう言って首を傾げるダクネスに、俺は既に完成した2本のそれを見せつけた。
「昼飯食ったら見せてやろう。驚くぞ？　めぐみん辺りが特にな」
自信満々に言う俺の言葉に。
「ご飯ですよー。さあ、テーブルの上を片付けて、みんな手を洗ってくるのです。……？　どうしました？　みんなして私の顔をジッと見て」

お盆の上に食事を乗せて運んできためぐみんが、不思議そうな顔をした。

街から離れた、岩の多い山の中。

ここは、めぐみんの爆裂散歩のオススメ地なのだが。

「みんな珍しいですね、今日は全員で私の散歩に付き合ってくれるなんて。こんな事なら、お昼はお弁当にして外で食べれば良かったです」

日課の一日一爆裂に全員が付き合ってくれるのが嬉しいのか、杖を振りながらいつになく上機嫌なめぐみん。

そんなめぐみんは、早速爆裂魔法を唱えると……。

「『エクスプロージョン』ッッ！」

轟音と共にビリビリと辺りを震わせる衝撃波。

あらゆる物を粉砕する最強の魔法は、いとも容易く目標物の大岩を爆散させた。

頭を低くして、パラパラと降ってくる岩の破片から身を守っている俺達。

その俺達の傍にさり気なくダクネスが立ち、それらの破片から守ってくれる。

「ほう、今日のは高得点だな」
「でしょう。自分でもなかなかの出来でした。ふう、満足です。では帰りましょ……？　カズマ、それは何です？」

そんな中、懐から取り出した二本の紙巻きのダイナマイトもどきを取り出すと、それにめぐみんが興味を抱いた。
爆発するポーションを染み込ませた土を紙で何重にも巻き固め、中心に、同じくポーションを染み込ませた導火線を入れただけの質素な物。
試作品一号なのでこんな物だ。
あのニトロもどきが無ければ作ろうとも思わなかったが。

「これはな、レベル１になってしまった俺でも、金に物を言わせて簡単に敵を葬れないかと試作した物の第一号だ。まあ、見とけ？」

俺はそれを近くの岩の陰に差し込むと、導火線を良く見える様にこちらに向ける。
そして一定の距離を取り。

「『ティンダー』」

導火線に、離れた所から着火魔法で火を付けた。
それがジリジリと火花を散らし……。

ふと思い付き、俺は片手をそちらに突き出して、大声で叫んでみた。

「エクスプロージョーン！」
「えっ！？」
その声に、めぐみんが声を上げ。

それをかき消す爆音と共に、簡易ダイナマイトは見事に爆発し、それを差し込んだ岩にヒビを入れた。
流石に発破工事に使える程の威力は出ないか。
だが、武器としてなら十二分に使える。

「あ……ああ……」

隣では、めぐみんが呆然としながら小さく震え、ダクネスが顔を赤くして拳を握った。

「す、凄いぞカズマ！　お前、いつの間に爆裂魔法を習得したんだ！」
「ふ……。努力家な俺は、お前らが寝ている間にひっそりと鍛錬していたのさ」
興奮するダクネスに、俺は調子に乗って適当な言葉を返す。

「ああ……あああああ……」

めぐみんがわなわなと震える中、アクアが俺の服の袖をクイクイと引っ張った。

「カズマさんカズマさん、私にも一つ頂戴。私も爆裂魔法が使いたいの」
「これは試作品だから、もっと導火線伸ばしたヤツが出来たらな。俺もおっかないから、遠くからティンダー使ったんだから」

「あああああ……ああああああああ……」

「分かったわ。それじゃあ、ちゃんとしたのが完成したら遊ばせて

頂戴」
「いいけど、このポーションって結構高いし数が少ないからな。そう何度も遊びには使えないぞ」
「そ、それを使えば、クルセイダーの私にも爆裂魔法が撃てるのか？　本当に魔法を習得したんじゃないんだろ？　な、なあ、新しいのが出来たら私にも試させて欲しい……」
興味津々のアクアやダクネスと違い、めぐみんの反応が非常に気になる。
先ほどから小刻みに震えて小さく声を上げるだけだ。
俺は、そんなめぐみんの前に立つと片手を突き出し、ポーズを決めた。
「我が名はカズマ！　アクセル随一の冒険者にして、爆裂魔法を操りし」
「あああああああああああああああーっ！！」
途中まで言い掛けた言葉を遮り、めぐみんが叫びながら掴みかかってきた。
「あんなものは！　あんなものは、爆裂魔法じゃありません！　威力にしたって、精々が炸裂魔法程度の物！　あんなものは！　あんな……あんな……っ！」
「ちょっ、分かった落ち着け、待ってくれ！　あれは唯のアイテムだ、ちょっとした冗談だよ冗談！」
喚きながら、俺の胸ぐらを掴んでくるめぐみん。
やがてめぐみんが、俺の懐に手を突っ込み残りの一本を取り上げる。
「あっ、こらっ！　おい、それ一つ作るのに結構金と手間掛かってるんだから、返してくれよ！」

「駄目です！　この私がいるのですから、こんな物は必要ないです！　なんですか、こんな物っ！」
叫ぶと同時、めぐみんがせっかく作った俺の力作を放り投げた。
あーあ……。

「今後、あれを見つけたら捨てますからね！　あんな物は邪道です！　認めませんよあんな物！」
「分かった分かった、分かったよ」
めぐみんに見つからない様に、今後は自室でこっそり作ろう。
「えー……。あれを大量に作れれば、魔王退治だって出来そうなんですけど……」
「駄目です！」
しょんぼりと残念そうなアクアにめぐみんが噛み付く。

せっかく作ったのに……。
……。
……俺は、遠く離れた地に落ちている、めぐみんが捨てたダイナマイトに手をかざし。
未だ怒っているめぐみんの隙をつき、小さな声で魔法を唱えた。
「……『ティンダー』」

……。

「エクスプロージョーン！！」
「！？」
捨てるのも勿体無いので、本日二度目の擬似爆裂魔法。

めぐみんが、晩飯の時まで口を聞いてくれなくなった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

死んだ後の後遺症を癒すため、ゴロゴロする毎日。
そんな大義名分があるため、なんら恥じる事もないニート生活。

「コケコッコ――――――――！」

……そのはず、だったのだが。

「コケーッ！　コッコッコッコッ」
「ダメよゼル帝！　騒いじゃダメ！　あの男は、昨日もあなたを晩御飯にするべきだって騒いでたのよ！　やるわ。鬼畜のカズマさんならきっとやる！　いいこと？　素直で可愛く、大人しかったあの頃に戻って頂戴。荒ぶるあなたもとても気高く美しいけれど、こんな早くから騒いじゃダメ。そう、魔王退治には、ドラゴンであるあなたの力が必要なの。もっともっと成長して、私達を乗せて飛べるぐらいに大きくなるまでは、まずは大人しくして力を蓄えるのよ」
「コケエエエエエエエ！」
「ダメよゼル帝、静かになさい！」
「お前の方がうるせーよ！　朝から何だよ、静かにしろよおおおおおお！」

俺はベッドから飛び起きると、窓を開けて怒鳴りつけた。
俺の部屋の真下の部分。
そこにゼル帝の小屋がある。
最近、ひよこから上質の鶏肉にクラスチェンジしたゼル帝は、毎

朝、ああして騒ぎ立てていた。
強制的に朝早く起こされるようになった俺は、昨夜、提案したのだ。

そろそろ食おう、と。

そして結果は……

「ほらみたことですか！　ゼル帝、ここは私があの悪魔を食い止めるからあなたは早く逃げなさい！　私の事はいいから早く逃げて！　そして、立派に成長した暁には、共に魔王退治に旅立ちましょう！　三丁目の肉屋のおじさんには気を付けるのよ！」

「コケッ、コッコッ……」

「ああっ、ゼル帝！　私を置いては行けないって言うの？　いいわ、共にあの悪魔と戦いましょう！　あなたのお母さんとして、ちゃんと守ってあげるからね！」

妙な小芝居をして、ゼル帝を鳥小屋から出して抱きしめるアクア。

「もう何でもいいから静かに寝かせて欲しい。頼むから。ほんと頼むから」

「なら、もうゼル帝を食べるとか言い出さない？」

「分かったから。もう言わないから、代わりに鳥小屋を他の場所に移動させろ」

そう告げると、アクアは両手で目の前に掲げたゼル帝に向かって、力持ちのダクネスに小屋を運んでもらおうねとか語りかけている。

「……しかしお前、まだ魔王魔王言ってるのかよ。もう諦めようぜ。魔王の城なんて、まだ幹部が二人も残っていて、きっと精鋭なモンスターもワラワラいるんだぞ。そんな危ない事は強い人達に任せて、

俺達はのんびり暮らそう。大丈夫だよ、誰かなんとかしてくれるって。せっかく大金手にしたんだし、俺達はこれからだろ？」

窓枠に肘をついて二階からアクア達を見下ろしながらの俺の言葉に、アクアがゼル帝を抱いたままやれやれとばかりに首を振る。

「これだから平和ボケした日本人は……。どうしてそう、良い方向良い方向へとしか考えないの？　そんな甘っちょろい考えだから、スペランカーごっこが趣味なんですかってぐらいにカズマさんはポコポコ死ぬのよ？」

アクアが、ゼル帝を自分の目線の高さまで持ち上げて、視線を合わせて、ねー？　とか言ってる。

このやろう、俺が死ぬ一番の原因はお前らのお守りがあるからだ。

アクアは、俺が二階にいる事で手が出せないと踏んでいるのか言いたい放題だ。

「平和ボケも大概にして頂戴。現在、この世界では戦争中なんです。これから、国の首都が魔王の娘率いる大軍に攻められそうなのよ？　しかも、この街まで敵が攻めてくるって言う時……に……」

平和ボケと言われても、ピンとこないものはしょうがない。

これが長年平和馴れした日本人のサガ……。

……？

「ど、どうした急に、そんな口をパクパクさせて。人をスペランカーごっこが趣味とか言っときながら、鯉の真似か？　お前にしてはありきたりな芸だな」

俺も二階でアクアを真似し、口をパクパクさせてみる。

アクアは慌ててゼル帝を小屋に戻すと。

「違うわよ！　そうよ、魔王よ！　ねえカズマ、今が魔王を倒すチャンスなの！」

まだ言ってんのか。

「あっ、あっ！　待って！　カズマさん二度寝しないで、ねえ聞いて！　これから王都が魔王の娘と大軍に攻められるって事は、魔王の幹部の一人と、魔王軍の大半が城を留守にするって事なのよ！　しかも、おまけにこの街にも攻めてくるって事は……！　連中は結界があるから、安心しきって大軍を送り込むわ！　軍が出払った後に襲撃すれば、城には魔王ぐらいしかいないかも！　だって、結界があるから留守番を残す必要なんてないでしょ！？　魔王の所にカチコミに行くなら、これ以上無いチャンスじゃないかしら！」

……確かに平時に攻めるよりは、少しはチャンスがあるのかも知れない。

だが問題は、幾らなんでも魔王しか居ないなんて事はありえない事。

そして、例え魔王一人だったとした所で、俺達にはその魔王一人ですらまずどうにもならないと言う事。

俺は高所から、浅い考えのアクアを見下ろし。

「……フッ」

鼻で笑った。

「……二人とも、朝から何を騒いでるんだ？　カズマ、朝食ができたから……。……な、なんだか楽しそうだな……」
朝飯が出来たのか、部屋まで俺を呼びに来たダクネスが、俺達を見ながらそんな気楽な事を言った。

「止めろこらっ！　窓に穴が開いたら蚊が入ってくるだろ！　窓が割れたら、直るまでお前の部屋と取り替えてもらうからな！　『ウインド・ブレスト』ッ！」
「魔法を使うのはズルイわよ！　窓割られるのが嫌なら、もう少し前向きに魔王退治に協力しなさいよ！」
庭に落ちている石を広い、それを窓目掛けて投げるアクア。
俺はその石を風の魔法で撃墜していた。

しかし、このままでは分が悪い。

「『クリエイト・ウォーター』！」

アクアの頭上に突如水が出現し、それがバシャンとアクアに掛かる。
ずぶ濡れになったアクアは、だが涼し気な表情で勝ち誇っていた。
「暑苦しいこの季節、涼しい水のサービスですか？　忘れちゃったの？　私にとっては、水の中での生活だって苦痛じゃないんですけど。もっと寒い季節ならいざ知らず、こんなもの、ただのご褒美……」

俺は、アクアが皆まで言う前に。

「『クリエイト・アース』！」
「そ、それは止めてええー！」
水で濡れたアクアの上に、大量の土が降り注いだ。

アクアを泣かせて満足し、一階の広間へと降りて行く。
そこには、ここ最近は黒のワンピースがメインで、寝る時以外は脱いでいた暑苦しい紅魔族ローブを着込み、しっかりと杖を握っためぐみんが、ソファーに腰掛けお茶を飲んでいた。
「食事を終えたら、ちょっと付き合ってもらって良いですか？　用事があるので、立ち会ってもらいたいのです」
泥まみれにされたアクアは風呂に入り、ダクネスがその間、アクアの一張羅の羽衣を洗ってやっている。
「別にいいけど。……立ち会い？　何だか決闘でもするみたいな言い方だな」

◆◆

「私達、友達なのに！　ねえ、友達じゃなかったの！？　親友じゃなかったの！？」
「何を言いますか！　大事な話があるから森まで来て欲しいだなんて手紙を寄越しておいて！　ほら、とっとと掛かって来ると良いです！」
街の近くに広がる森林の近く。
めぐみんが、杖を振り回して猛っていた。

泣きそうな顔で手をワキワキさせて怯えているゆんゆんと対峙しながら。

「なんだ、ゆんゆんに決闘を申し込まれてたのか」

「違います！　違いますよ！　決闘じゃないです、めぐみんに話があって呼び出しただけなんです！」

俺の言葉にゆんゆんがいよいよ泣き出しそうになる中、威嚇するかのようにめぐみんが杖を振る。

「だったら、なぜこんな人気の無い所に呼び出すのですか！　用があるなら家にでも来ればいいではないですか！」

「えっ！　その……、私が家に行っても……。……い、いいの……？」

めぐみんの言葉に、ゆんゆんが言葉尻をどんどん小さく、自信なさ気に言ってきた。

ああ、事前に約束してたり誘われないと、友達の家に遊びに行けないタイプなのか。

「来るなら勝手にくればいいじゃないですか。タイミングが悪かったりと、邪魔な時はちゃんと帰れと言って追い払いますよ」

「えっ！」

それは余計にダメージきそうだが。

「で、めぐみんに用事って一体何なんだ？」

俺の言葉にゆんゆんが、手紙をめぐみんに向かって差し出した。

「これが、紅魔の里の人から送られてきて……」

それを受け取ったためぐみんは、手紙に目を通していく。

「……魔王軍が王都を攻める。紅魔の里へ、国から王都防衛の要請が来た為、各地の紅魔族は全員集合、ですか。……フフ、とうとう我が力が必要とされる時が来たわけですね。いいでしょう！　ゆんゆん、それでは共に魔王の連中……を……」

手紙に目を通していためぐみんが、途端にその言葉を途切れさせた。

それを見たゆんゆんが、気まずそうに。

「あの……。一応、めぐみんにも見せろって書いてあったから……。そ、その……」

動きの止まっためぐみんの傍に寄ると、横からひょいと手紙を覗いてみる。

そこには……。

「……おっ、ゆんゆんの名前が一軍の頭に載ってる。めぐみんは……。二軍の隅っこに名前があるな。横に、めぐみんだけ（補欠）って書かれてるが」

「以前、紅魔の里に帰った時に、めぐみんが上級魔法を使えない事がみんなに知れたせいだと……ああああーっ！」

めぐみんが、ゆんゆんから預かった手紙を紙飛行機にして森に飛ばした。

「何するの！？　あの手紙、この街にいる他の紅魔族にも見せなきゃならないのに！」

ゆんゆんがめぐみんに訴えかけるが、当のめぐみんはどこ吹く風だ。

「そんな事はどうでも良いのです。それよりゆんゆん、あなたはどうするんです？　里に帰るのですか？」

めぐみんの言葉に、ゆんゆんが返事に詰まる。

なにか、言いたい事があるのに言い出せない。

ゆんゆんが、そんな態度でもじもじしていると。

「全くこの娘は！　なぜそうも、いつもいつもウジウジと！　言いたい事があるならハッキリと言えばいいんです！」

「痛い痛い！　言う言う、分かったから髪引っ張らないで！　……そ、その……。この街にも、魔王の手下が来るって聞いて……。ほら、この街にも、と、友……知り合いの人が増えてきたし……」

小さな声で、俯きながら両手の指をモニョ付かせるゆんゆん。

……ああ、そうか。

「里の人達には帰って来いって言われてるけど、この街に友達もできたし。出来れば残って、街を守りたいって事か」

「えっ！　あ、……は、はい、と、友達……。友達が、何人かできたので……！」

友達ってのはアレの事だろうか。

最近ゆんゆんが、あまり関わり合いにならない方がいい連中とつるんでいる事が多い。

関わり合いにならない方がいい連中とは、とあるチンピラと流行らない魔道具店の店員だ。

ゆんゆんが、こくこくと何度も頷きながら、やがて表情に翳りを見せた。

「でも紅魔の里からの招集は、滅多な事では行われないんです。その、滅多に行われない呼出があった以上、無視する訳にも……」

なるほど。

それでどうしようかとめぐみんに相談に来たのか。
その、相談を受けたためぐみんはゆんゆんとは別の方を向いており……、お、おい！
「めぐみんちょっと待て、何を……！」
俺が静止する間もなく、めぐみんが叫んでいた。
「『エクスプロージョン』ーッッッ！」
突如森に向けて放たれた爆裂魔法。
それは、先ほどめぐみんが手紙を飛行機にして飛ばした一帯を跡形も無く消し飛ばし……。
「あーっ！　何するのめぐみん！　まだあれ、他の人に見せてないのに！　どうしよう、どうすれば！」
頭を抱えて騒ぐゆんゆん。
魔法を放っためぐみんが、これ以上にないドヤ顔で俺の方を振り向いた。
「どうですカズマ。これが本物の爆裂魔法です。昨日のカズマの使ったものを爆裂と呼ぶのはおこがましいですよ？」
どうも、昨日のダイナマイトもどきを作った事を、今でも根に持っていたらしい。
自信満々なめぐみんに、ゆんゆんが半泣きで食って掛かった。
「ど、どーするの？　ねえ、どうしたらいい？　って言うか、なんでめぐみんはいつもいつも私を困らせる様な事ばかり……！」
「うるさいですねこの小心者は！　あの手紙は、郵便屋さんが野良オークにでも捕まったか、家で飼ってる山羊が食べたとかなんとか

適当に言っとけば良いのです！　この街を守りたいんでしょう？
ゆんゆんは、ごちゃごちゃ考えずにもっと図太くなった方がいいです！」

めぐみんの、そのあんまりにも理不尽な言葉に、だがゆんゆんは頬を紅潮させて、困った様な、それでいて少しだけ嬉しそうな微妙な表情を浮かべた。

強引に手紙を処分された事が、ちょっとだけ嬉しかったらしい。

堂々と胸を張って開き直るめぐみんを、ゆんゆんが眩しそうに見ながらはにかんだ。

確かに少しばかりめぐみんの押しの強さを見習った方がいいとは思う。

思うのだが……。

俺はめぐみんの背中に向けて。

「お前、自分の扱いが補欠だったから行かない事にしたんだろ」

「ッ！？」

めぐみんがビクッと震えた。

21話（後書き）

本来は、番外編の仮面悪魔をもう少し進めてからの今回の話の予定でした。
もうちょい、街の人達との絡みを通して、街を守りたい説得力を持たせる筈が。
仮面悪魔の方を合間を縫って何話か書くかも知れません。
向こうを読まなくても勿論話は通じます。

ああ、色々と時間が欲しい。

でも時間があっても、多分遊ぶ時間が増えるだけ……。

22話

「……ちゃん。……に……ちゃん、起きてよ……」

何だか布団が重い。
そして、遠くから声が聞こえる。
それはとても優しげで、俺が長い間望んでいたセリフ……。

「お兄ちゃん、起きて！　遅刻しちゃうよ！　ほら、早く早く！」

お兄ちゃん。
その甘美な言葉に、俺はふと目を開ける。

「おはようお兄ちゃん！　さあ、今日も元気に魔王退治にいこっ！」

布団越しに、年齢不詳の自称妹が俺の上に跨りながらそんな事を……。

「おらあああああっ！」
「お兄ちゃーん！」

立ち上がりながら布団の端を掴み引っ張って、布団上のアクアごとベッドの上から放り出す。
ベッドから転がり落ちたアクアには目を向けず、そのままかけ布団を被って再びベッドに横に。
俺は布団から頭だけを出して、絨毯に転がるアクアをチラッと見た。

「……今日のはちょっとだけ良かった」
「やはりロリコンのカズマさんには、お兄ちゃんの効果はばつぐん

のようね」
アクアがそんな事を言いながら立ち上がる。
ここの所、連日アクアがこんな感じだ。
魔王退治に行かせようと、あの手この手を仕掛けてくる。

「ねえカズマ、そろそろ折れてもいい頃合だと思うの。みんなが何か問題起こすと、涙目になりながらも最後にはなんとかしてくれるのがカズマさんの良い所でしょ？」
「俺をなんでも叶えてくれる青だぬきと同列視してんのか？　本来なら、仮にも女神のお前の方こそ、最後にはなんとかしてくれるのが筋じゃないのか」

そんな俺の皮肉にも、アクアはどこ吹く風といった表情でベッドの脇にぺたんと座った。
そのまま絨毯の上に、膝を抱えて体育座りになると。

「私に出来る事って言ったら、水の浄化に、悪魔やアンデッド退治、後は蘇生ぐらいのものよ。女神なんて、それほど大層な存在でもありがたいもんでもないわよ」
「お、お前とうとう開き直りやがったな。女神なら、魔王ぐらい封印出来ないのかよ。邪悪を封じるとかも女神の仕事みたいなもんだろ」

アクアが膝を抱えたまま、布団の下の俺の下半身の場所をじっと見る。

「今の私に出来るのは、その邪な存在を封印する事ぐらいね」
「や、止めろよ……、止めてください、仕方ないだろ朝なんだから。そ、そんな事より」

俺は話を逸らすように、寝たままでアクアに顔だけ向ける。

「あと一人魔王の幹部が倒されれば、城の結界とやらはお前の力で確実に解除できるんだろ？　だったら、それまで待とうぜ。魔王の娘だったか？　どれだけ強いのか知らないけど、仮にも首都を攻めようってんだから、魔王の娘だって無傷で済むとは思えないぞ。首都ともなれば、チート持ち連中がウロウロしてるだろうしな。魔王の娘が返り討ちにあったら、国の偉い人に頼んで強い護衛付きで結界の解除に行く。国の強い人達が負けたら、その時はその時でまた考えよう」

物凄く他力本願だが、俺に出来る事といったらこんなもんだ。

運良くなんとかなってきた今までとは訳が違う。

俺達は英雄でもないし勇者でもない。

むしろ、そこらのちゃんとしたパーティーよりも駄目なグループだ。

それこそ、今まで全滅しなかったのが不思議なレベルで……。

「……幹部……。あと一人、魔王の幹部が……」

アクアが、膝を抱えたままブツブツと呟いている。

……？

「おい、一体どうした……」

「そうよっ！　魔王の幹部があと一人！　あと一人、魔王の幹部が倒されれば、確実に結界は解除出来るの！　そうすれば、きっと誰かが魔王を始末してくれるかも！　そうよ！　そうだわ！」

突然アクアが立ち上がり、そんな事を口走り……

おい、まさか！

「ちょっと出掛けてくるわ！」

「おいこら待て！　ちょっと待て！」

アクアは、静止も聞かずに俺の部屋から飛び出して行った。

朝っぱらから屋敷を飛び出して行ったアクアを追い、俺は目的の場所にやって来た。

悔しいがあいつの方が足が早い。

基本ステータスの差ってやつだ。

「ウィズはどこよ！　隠してないで出しなさいよー！」

「話を聞かないヤツめ！　サボり店主は留守であると言っておろうが！　目を離すとロクな物を仕入れてこないポンコツ店主を我輩も探して……、こっ、こらっ！　いい加減仮面から手を離すがいい！」

案の定、ウィズの店から騒がしい声が聞こえる。

どうやらウィズは留守の様だ。

俺が店に入ると、そこではアクアがバニルの仮面に手をかけて、それを引き剥がそうと暴れていた。

バニルは激しく抵抗しながら、店に入ってきた俺を見る。

「ぐううういらっしゃいませ！　飼い主よ、この狂犬女神をなんと

かするがいい！」
「飼い主にするなよはた迷惑な。ウィズは留守か。と言うか、話が出来ないから止めてやれ」
俺の言葉にアクアが渋々仮面から手を離す。
「ちょっとへんてこ悪魔。あんたの力が詐欺じゃないなら、ウィズが今どこに居るのかぐらい見通してみなさいよ」
「フン、たわけ。全知全能を謳いながら何の役にも立たぬ神々。その詐欺のような誇大広告と、この我輩の力を一緒にするな。だが我輩とて万能ではない。我輩に匹敵する程の力を持つ相手ともなると見通し辛くなるのだ。あのポンコツ店主は、商才は無いが力だけはあるのでな」
「偉そうな事言ってるけど、つまり分かんないって事ね。あんたって、肝心な時になるとあんまり役に立たないわね」
「……よかろう、久しぶりに我輩の本気を見せてくれる。表に出るがいい、今日こそ忌々しい神との決着を付けてくれるわ」
こいつらは、本当に仲悪いなあ……。
と、店の入口に立っていた俺は背後に気配を感じた。
振り向くと、そこにいたのは……。
「あっ、カズマさんにアクア様、いらっしゃいませ！　丁度いい所にいらっしゃいました。実は、面白い物を仕入れて来まして……！」
そう言いながら、ウィズは幸せそうな笑顔を浮かべ、抱えていた紙袋を俺に見せた。
それを見てバニルが固まる。
アクアが早速興味を抱いたのか、ウィズに近寄り紙袋の中を覗き

込んでいた。
バニルが動かなくなったので、代わりにウィズに尋ねてみる。
「えっと……。何買ってきたんだ？」
「よくぞ聞いてくれました！」
ウィズが嬉々として、俺に紙袋の中身を取り出して見せた。
そこにあったのは……。
「……てるてる坊主？」
「てるてる坊主って何ですか？　これは、天候制御が可能な強力な魔道具なんです。これを軒先に吊るしておくだけで強制的に天候を晴れにできるんですよ！　天候制御の魔法というものは、通常は長い儀式と希少な触媒をたくさん使ってようやく行うものなんです。それが、これを吊るすだけ！　どうです？　凄くないですか？　凄いですよね！」
それは凄い。
確かに凄いとは思うのだが。
「……で、それって何か欠点とかは無いのか？　例えば、使用すると十年ぐらい雨が降らなくなるとか……。膨大な魔力を使うとか……」
「副作用なんてありませんよ？　私だって、バニルさんにしょっちゅう怒られ、勉強しました！　使用するには、ある程度魔力のある人が手ずから魔力を込めて軒先に吊るす事。あとは、使える時期が限定されているぐらいで、デメリットと言うものがありません！　どうです？　とても良い買い物だと思いませんか？」
固まっていたバニルが、ゆっくりとこちらに歩いてくる。

バニルは、ウィズが自慢気に見せびらかしていた、てるてる坊主みたいな物をヒョイとつまみ上げ。

「で、この道具を使える時期というのはどの時期なのだ？」

「今です！　夏限定の商品ですよ！　せっかく買ってきたのにすぐ使えないなんて、そんなドジは踏みませんよ？　バニルさんも心配性ですね」

「……お客様、ちょっと来るがいい」

満面の笑みを浮かべるウィズを残し、バニルが俺の肩を掴んで店の隅へ。

「……先に言っておくけど、買わないからな」

「そう言うな、このガラク……素晴らしい商品からは、たしかに強力な魔力を感じる。その性能には嘘偽りはないであろう」

性能は本物なのだろう。

ウィズが商品を仕入れる際は、商品の魔力の大きさで物を仕入れると聞いた。

だが、一つだけ疑問がある。

「……夏に入ってから、ずっと雨なんて降った記憶が無いんだけど。夏って、ここら辺りって雨は振るのか？」

「……二十年ほど前の夏、一日だけ小雨が降ったな」

「買わない」

突き放す俺にバニルが仮面を寄せてきた。

「そう言うな、この世界は広い。夏場、雨に困らされている地域があるやも知れん。そういう所へ持っていけば、きっと重宝される事

間違いなしだ。今なら、夜中に笑うバニル人形もおまけに付けてやろう」

「買わない」

「更には、店主に内緒で開発している時期主力商品、等身大お色気店主抱きまくらも付けてやる」

「買わな……。……おい、詳しく」

俺とバニルが、店の隅っこでそんな話をしていると。

「あの……？　どうしたんですか、アクア様？」

ウィズの、そんな不思議そうな声が聞こえてきた。

「ウィズ……。思えば、あなたと出会ってそろそろ一年近くが経とうとしているわ。皮肉な物ね……。私は女神であなたはリッチー。本来ならば、決して相容れない間柄なのに！」

「もうそんなに経つんですね。……あ、魔道具と一緒にクッキー買ってきたんです。アクア様も食べますか？」

「頂くわ。……そうじゃないの。ねえウィズ。私達、慣れ合いが過ぎたようね。本来ならば、出会ったその日に浄化するのが私の仕事。そう、神とアンデッド。絶対に相容れない間柄なのだから……！」

アクアが、ウィズから貰ったクッキーをポリポリかじり、そんな事を言い出した。

その不穏な空気に、バニルがツカツカと歩いて行き、ウィズとアクアの間に立つ。
まさかアクアも、本気じゃないとは思うのだが。
バニルが、ウィズを庇うように立ち塞がりながら、口元を不敵に歪めた。

「なんだ？　暴力女神め。今の貴様からは物騒な気配が出ておるぞ。何があったかは知らぬが、この店で暴れる気ならば莫大な修繕費用を吹っかけてくれる。それを覚悟の上で掛かって来い」

言って、バニルはクイクイと右手の人差指を動かしながら挑発する。
だが、アクアはそんなバニルを意に介さずに。

「ウィズ……。分かって頂戴、あなたを倒さないと、世界の平和が守れないの！　友人であるあなたを倒すのは私だって心苦しいわ！　でも分かってウィズ！　私だって天界に帰りたいの！　お願い、私の為に土に還って！」

アクアが、芝居掛かった大袈裟なセリフを吐きながら、ウィズに対して身構えた。
ウィズはといえば、怯えるでもなくキョトンとしている。
やがて、首を傾げると。

「……私が成仏すると、アクア様が天界に帰る事が出来るんですか？」
そんな事を、なんでもなさ気に。

「そうよ！　残念ねウィズ！　今回は事情が事情なだけに、見逃してあげる事が出来ないの！　恨むなら恨んで頂戴、でも、私は女神

として……！」

「いいですよ」

「女神として……！　……。……いいの？　ていうか、ダメよウィズ、そんなに生きる事を簡単に諦めちゃ。命を何だと思ってるの？　罰が当たるわよ？」

ウィズを倒すだの言ってるお前が言うなとか、リッチーのウィズに命があるのか、とか。

ツッコミ所が多すぎるアクアの言葉に、ウィズが未だキョトンとした素の表情のまま。

「私が成仏すると、アクア様が天界に帰れるんですよね？　よく分かりませんが、何か事情があるのでしょう？　もう長い付き合いです。私は知ってますよ、アクア様の事。本当はとても慈悲深くて優しい方だって。そのアクア様が、私を浄化すると言うのなら従います」

そんな、突拍子もない事を言い出したウィズに、今度はバニルが慌てだした。

「何を言うかウィズ！　貴様、我輩との約束を忘れたのか！？　悪魔との契約を破ろうとは良い度胸だ！　貴様が成仏してしまっては我輩のダンジョンを誰が造る！　これまで店で働いてきたのは、全てはその為なのだぞ！」

バニルの言葉に、ウィズが一瞬驚きにこりと微笑む。

「バニルさん、初めて名前で呼んでくれましたね。約束を守れなくてごめんなさい……。その、長い眠りについてますが、一人だけリ

ッチーの知り合いが居ます。その方を紹介するので、どうか、それで……」

その言葉に、バニルがギリッと歯を食い縛る。

そして、未だ納得がいっていない様で、アクアとウィズの間から退こうとはしなかった。

ウィズは、立ち塞がるバニル越しにアクアに向き直り、両手を前に組んで微笑むと。

「本来なら、出会ったあの時に浄化されているのが当然なのに。今まで、一年近くも見逃してくれてありがとうございました、アクア様。お陰で、こうしてバニルさんとお店を経営したり、いろんな方と知り合えたり。随分永く生きてきましたが、この一年が人生の中で一番楽しかったです。本当ですよ？　ですから、感謝こそしても恨みなんかしませんから」

「……」

バニルが、そのウィズの言葉を聞いて無言のままスッと退いた。

未だ歯を食い縛っている所を見ると、納得はいっていないがウィズの意志を尊重させるつもりの様だ。

アクアは……。

「う……うう……」

予想外のウィズの言葉に、泣きそうな顔で後退っている。

そんなアクアを見て、ウィズが苦笑した。

「アクア様、私はいずれ誰かに浄化される存在ですから。でなければ、永遠に生き続ける存在です。そして、いつか誰かに浄化される

と言うのなら、私はアクア様に浄化されたいです。それで、お世話になったアクア様のお役に立てるのなら。それに……」

ウィズが、嘘偽りのない優しい表情で、アクアを安心させようとするかの様に。

「私は、アクア様の事が好きですから」

そう言って、微笑んだ。

何となくアクアを見る俺とバニル。

そして、ちょっとだけ困った様な、心配気な表情でアクアを見るウィズ。

そんな、皆の視線に耐え切れなくなったのか……。

「う……うう……、わ、わあああああーっ！」

良心の呵責に苛まれたアクアが、店を飛び出して行った。

……この街で一番優しくて一番真っ当な人物がリッチーと言うのは、俺達は人としてどうなのかと悩みつつ、俺は屋敷に戻るとアクアを探した。

屋敷には、一階の広間のソファーでダクネスとめぐみんがボードゲームをしている。

「なあ、アクアが帰って来なかったか？」
「アクアですか？　先ほど凄い勢いで帰ってきて、自分の部屋に閉じ籠もりましたよ。朝食が出来てると言っても部屋から出てきませんし。朝っぱらから、何かあったんです？」
めぐみんの言葉に、うーむと唸る。
どうしようか。
しばらく放っておくべきか。
……いや。
「ちょっとな。……アクアの分の食事をくれ。ちょっと部屋まで持って行ってくるわ」
俺はめぐみんから食事を貰うと、アクアの部屋へと向かっていった。
「おーい、お前、気持ちは分かるけども先に帰るなよー。めぐみんが食事作ってくれたぞ、ここ開けろよ」
「……ほっといて。今、私は少しだけ女神としての自信を無くしているの」
……少しだけなのか。
俺は、ドア越しにもう一度アクアに呼びかける。
「なあ……。もう、魔王退治なんて考えなくてもいいんじゃないのか？　そこまでして天界に帰る必要ってあるのか？」
「……」
何だかんだ言いながら、アクアもウィズの事を嫌っていた訳ではないはずだ。

ウィズが陽の下で煙を出していると、心配しながら水をかけてやったり。
ウィズに因縁つけたり、バニルとの喧嘩に巻き込んで浄化しかけたりだのと、それなりに大変な目にも遭わせてはきたが。
それでもまあ、相反する存在ながらも二人の仲は悪くなかった。

俺はもう一度呼び掛けた。
「……天界に帰っちゃったら、もうウィズには会えなくなるって分かってるのか？」

もちろん、俺達とも。

……いや、エリス様は正体を隠してたまに地上に遊びに来ていると言っていたが。
でも、アクアの場合はどうなんだろうか。
アクアは日本を担当する女神だ。
そんなアクアが、この世界にホイホイやって来れるのだろうか。

返事もなく、静まり返るドアの前。
俺はアクアに呼び掛けた。

「……めぐみんが作ってくれた食事持ってきたけど。食わないなら下に持って行くぞ？」
「……ご飯はそこに置いといて」

飯は食うのか。

「アクアは一体どうしたんです？　いつもは一番先に食卓に着くのに。お腹でも痛いんですか？」

広間に戻ると、めぐみんがそんな事を聞いてくる。

めぐみんとゲームで相対するダクネスが、腕を組みながら困った顔で唸っている様子を見るに、ゲームはめぐみん優勢な様だ。

「気にするな。一応持っていった朝飯は食べるみたいだし。昼頃になれば、腹が減ったら降りてくるだろ」

俺はそう言ったが、結局アクアは、夜になっても部屋から出ては来なかった。

◆◆

眠れない。

時刻は深夜を回っただろうか。

虫の声すらあまり聞こえない、静かな夜だ。

今朝みたいな騒ぎは特に珍しい事でもない。

アクアが騒いで暴れて、人に迷惑を掛けて、そして最後には泣いて帰る。

いつもの事で、いつもの通り。

それなのに、何だか今日はやけに気になる。

……ウィズの事だ。

ウィズにもう会えなくなっても良いのかと聞いて、ドアの向こうで黙り込んだアクア。
……本当は、ウィズをダシにするんじゃなく、もっと踏み込んだ事を聞きたかった。
俺達と離ればなれになっても良いのかよ、と。

……。

……。

「あああああああああああ！」

布団の上で転がり回った。
なに恥ずかしい事を考えてるんだろう。
枕に顔を埋めて悶絶する。

いやいや、本当はこう聞きたかった訳だ。
もう長い付き合いなのに、俺達を置いて帰るのか、と。
この面子での生活に慣れた以上、今更アクアが抜ける生活と言うのもちょっと想像がつかない。

アクアが帰る。
居なくなる。
そうなったならどうなる？

めぐみんとダクネスとの三人暮らし。
二人には好きだと告られていたりする。
そんな二人との三人暮らし。
大金と屋敷を持って、もうアクアが駄々こねたり問題起こしたり

する事も無く……。

……あれっ。
俺は何を悩んでいたんだっけ。
別に悪くない生活な気がしてきた。

……いやいや。

これを聞いたら流石にアクアが泣くな。
というか、あいつが居ないと何と言うか退屈しそうだ。

そう、問題は起こらなくなるだろうが、毎日暇を持て余しそうだ。
でも、アクアはどう思っているんだろうか。
と言うか、そもそもなぜ俺はアクアの事でこんな時間まで眠れなくならなきゃいけないのか。

イライラしてきた。
うん、モヤモヤしてきた。

「……」

俺は布団を跳ね除けて立ち上がる。
こんな時間だが、あのバカを起こして問い詰めてやろう。
そして、こんこんと説教してやろう。
魔王を倒す事へのリスクだの、それで得られるメリットの少なさだのを。

俺は部屋を出ると、出来るだけ音を立てずに移動する。
多分寝ているとは思うのだが、こんな時間にめぐみんやダクネス

に見つかって、アクアへの夜這いだと思われると大変困る。
俺はコソコソとアクアの部屋へと……。

……アクアがいた。

アクアの部屋へと向かう途中。
屋敷の二階、正面玄関の上の部分がバルコニーになっているのだが、アクアはバルコニーに出て、座っていた。

今夜は満月。

アクアは、いつもの淡い水色の羽衣を身に纏い、体育座りの体勢でぼーっと月を見上げていた。
何と言うか、叩き起こすつもりでこうして来た訳なのだが……。

何も言わず、ただ月を見上げるアクアは、その見てくれだけは確かに女神だった。

そう言えば、俺が日本で死んで初めてこいつに会った時。
一目見ただけで女神だと理解できた。
その姿は、本当に美しくて……。

俺は思った。

コイツ、普段から喋らなきゃいいのに。

俺が少し離れた所からアクアを見ていると、アクアもこちらに気付いた様だ。

「……？　どうしたの？　そんな所で。寝られないの？」

アクアの言葉に、俺はバツが悪そうに頭を掻きながらバルコニーへ出る。

覗き見してたなんて言えないし、何て言おうか。

見惚れてたなんて絶対に言えない。

言えば間違いなく調子に乗る。

だから、思っていたのとは全く関係ない事を。

「……まあ、ちょっと昼寝し過ぎて。……お前こそ何してんだよ。蚊に食われるぞ」

アクアはこちらに背を向けたまま、相変わらず自堕落でダメ人間なカズマさんねーとか言いながら、ぼーっと月を見上げ続ける。

……。

「食い気しかないお前が月なんて眺めてどうしたんだよ。天界って月にあるの？　お前らってかぐや姫かなんかなの？」

「違うわよ。綺麗だから見てるだけよ。あんた、前々から思ってたけど、私を何だと思ってるの？　私だって美しいものを愛でる時もあるわよ。どう？　月を見上げる女神って絵になるでしょ？」

確かに絵になる。

絵になるし、正直ちょっと見惚れてしまった。

もちろん口になんて出さないが。

「……なあ。お前、そんなに天界に帰りたいのか？　ここに来て、何だかんだでそろそろ一年だろ。色んな連中と知り合ったし、そいつらと会えなくなったら寂しいとか思わないのか？」

「……」

アクアはそれには応えず、俺に背を向けて相変わらず月を見上げ続けている。

やがて、独白の様にぽつりと言った。

「まだ一年しか経ってないのよねー。不思議なものだわ。天界では、天使の子達や他の神々と、もっと永い時を過ごしたものだけど。ここでの暮らしって、毎日が、なんて言うか波瀾万丈よね」

波瀾万丈な生活を送る羽目になっているのは、大体がお前の所為だ。

喉から出かかったが、そこは堪えておく。

代わりに、俺は……。

「天界でもっと永い時を過ごしたって、お前やっぱりババ……」

「それ以上何か言うつもりなら、あんたの下半身に人の力じゃ永久に解けない封印を施してやるからね」

俺は生まれて初めて心底アクアに恐怖した。

アクアは、独白じみた言葉を続ける。

「天界って所はね。特に変わらない毎日が続くだけなのよ。ずーっ

と変わらないの。正直言って、つまらないわね。……まあその分、変わらないって事は辛い思いもしない訳なんですけど」

辛い思い。

先日の、セレナとの戦いの時の、冒険者達の手の平返しの事だろうか。

俺が何も言えずにいると、アクアがなおも続けた。

「あれから、街の色んな人に謝られたんですけど。なんて言うのか、もう私は気にしてないんだけどね？」

嘘つけ。

めぐみんから、あの件ではアクアが結構凹んでいたと聞いた。

と、アクアが、月を見上げながら小さな声で呟いた。

その横顔は、別に寂しそうではなく、悲しそうでもない。

ただ、元いた自分の居場所を遠くから見上げている、まるで迷い子の様な、そんな、ぼーっとした表情で。

「……帰りたいな……」

それは、俺に向けたものじゃなく。

催促している訳でも、駄々をこねる訳でもない、ほんの小さなアクアの呟き。

アクアがどれぐらいの間天界に居たのか、俺は知らない。

向こうではどんな知り合いがいて、どんな友人がいて。

アクアが、天界でどんな暮らしを送っていたのかは、俺は知らない。

……コイツを無理やり連れてきたのは俺な訳で、本人が望むのなら、俺が帰してやるべきだろうか。

でもなあ、魔王かあ……。

……なんて声を掛けてやるべきか。

「……あれだ、少しだけ、少しだけ、魔王退治を前向きに考えてやるからさ。……て言っても、俺が直に倒しに行くんじゃないからな？　例えば、ウィズの店で爆発系のポーションを大量に買ってきてさ、めぐみんは怒るかもだけど、それで大量の爆発物を作って。で、魔王の城周辺にテレポートで送ってもらったりとかさ。あ、そうだ。お前知ってるか？　ゆんゆんが、とうとうテレポートを使えるようになったんだぞ。今の所、紅魔の里とこの街しか登録してないそうだから、最後のテレポート登録先を魔王の城の近くにして貰ってさ……」

若干早口になる、俺のそんな言葉に。

「……プークスクス！　あれだけ抵抗してたカズマが、とうとう折れ始めたんですけど！　ほら、やっぱりカズマさんは、最後にはなんとかしてくれるじゃない。……でも、まあいいわ。ただでさえ弱っちいカズマが今のレベルで魔王の攻撃を食らったら、下手したら体も残らないかもしれないしね」

こ、この野郎。

コイツはいつもいつも、一言多い。

俺はバルコニーから廊下に出ると、アクアの背中に向け、

「俺が弱っちいのは、チートの代わりにお前を貰ったからだからな。

俺が弱いって事は、お前が役に立ってないって事な訳で、その言葉はお前自身にも帰って来ると知れよ。分かってんの、駄女神様？」
「ねえ、封印かけてあげるからちょっとこっちにいらっしゃいな」
「ごめんなさい」

これ以上ここに居ると、気まぐれでほんとに封印を掛けられかねない。
未だバルコニーから動こうとしないアクアに、早く寝ろよとだけ告げて、俺は自分の部屋へ帰ろうと……。

そんな、帰ろうとする俺に、アクアがこちらを向くこと無く膝を抱えたままの姿勢で。
未だ月から視線を離さずに言ってきた。

「カズマさん、カズマさん」

俺はその場で足を止めると、
「……？　何だよ」
未だこちらに背を向けたままのアクアを見る。

「……カズマは、この世界に送られて良かった？　後悔はしてないですか？」

アクアは、そんな事を聞いてきた。

俺は日本に居た頃は先の見えないニートだった訳で、それが今では一財産を築き上げ、家まで持って、しかも美女と美少女に好かれると言う快挙を成し遂げた。
感謝こそしても、今となっては後悔なんてある訳がない。

「後悔なんてしてないさ。ここに来れて良かったよ」

俺のその言葉を聞いたアクアは、心底安心した様に、ほう、と小さく息を吐く。

「なら、良かったわ。……お休みなさい。……月を眺める私が美しかったからって、邪な想いを抱いて今から変な事しちゃダメよ？罰が当たるからね？」

「それは無い」

俺の即答にアクアが、即答されるとそれはそれで腹が立つんですけど、やっぱりちょっと封印を……などと、物騒な事をブツブツ言い出し。

俺はそれを聞きながら、慌てて自分の部屋へと逃げ込んだ。

自分の部屋のベッドで寝転がりながら、俺は物思いに耽る。

……魔王かあ……。

流石に無理だよなあ。

何か、簡単に倒せるいい手があれば。

……いやいや、やっぱり無理があるだろ。

でも、ゆっくり考えれば良い考えの一つや二つは……。

そこまで考えて、俺はふと気が付いた。

何で本気で魔王退治なんて考えているんだ、と。
バカな考えを振り払うように目を閉じて、そのまま寝に入る。
心地良い睡魔に身を任せながら、俺はぼんやりと考えた。

今まではそれほど思わなかったけど。

…………魔王と渡り合えるぐらいの、チートが欲しい…………。

◆◆

「おい、カズマ！　カズマ、起きろ！　起きないか！」

その声で、直ぐに目が覚めた。
眠りが浅かったのか直ぐに意識が覚醒する。
ダクネスが俺を激しく揺り動かし、大声で呼びかけている様だ。
…………。
俺は再び目を閉じて、ダクネスを抱きしめると、そのままゴロンと寝返りを……。
「むにゃむにゃ、もう食べられないよ……」
「こっ、こらっ！　お前起きているだろ！　ああっ、ちょっ……！　ちょ…………。………………………」

……抱きしめられるまま抵抗しなくなったダクネスに、ちょっとふざけてみただけなんだがどうしようと困っていると、

「……なにしてるんですか。……カズマを起こしてきて欲しいと言ったのですよ！　全く、ちょっと目を離すとすぐこの男を誘惑するんですから、朝っぱらからとんだ痴女ですね！」

「!?　ちちち、ちがー！　私はまだ、何も……！」

どうやらめぐみんも部屋に入ってきた様なので目を開ける。

当然、抱きしめているダクネスと目があった。

「……また俺を襲いに来たのか！」

「ああっ！　おっ、お前っ……！」

濡れ衣を着せられ、泣きそうな顔ながらも頬を染めているダクネスから離れると、俺は伸びをしながら二人に尋ねた。

「なんだよ二人して。朝っぱらから騒がしいぞ」

「もう昼ですよ！　そんな事より、大変なのです！　これを見てください！」

俺はベッドで上体だけを起こしたまま、めぐみんから手渡された物を見る。

手紙だ。

それを開いてみると、恐ろしく達筆な字が書かれていた。

『拝啓　すがすがしい初夏の季節となりました。皆さんいかがお過ごしですか？

ダクネスは、タンスの角に足をぶつける遊びを程々に。

めぐみんは、爆裂魔法を程々にしないと、やがて来るであろう温暖化現象の理由の一つに数えられると思います。
カズマは、性欲を持て余しているのは分かるけれど、いい加減みんなの洗濯物を床に敷いて、その上を転がり回るのは止めてください』

俺は、読んでいたそれをクシャッと丸め、部屋の隅に放り投げた。

「「ああっ！」」

放り投げられた手紙をめぐみんが拾って持ってくる。
「気持ちは分かりますが、ちゃんと最後まで読んでください」
その言葉に、仕方なく続きを読む。

『さて、今の世は魔王が蔓延る荒廃した世界です。そんな中、麗しくも美しい女神である所の、この私が魔王を放置しておく事ができるでしょうか？　できませんとも。
世界に散らばる敬虔なるアクシズ教徒。
この私を信仰する、十億の信者達の想いに応え、この私は旅立ちます。
そう、伝説となるために……』

俺は手紙から顔を上げ、二人に尋ねる。
「……アクシズ教徒って、十億もいたのか？」
「……ん、世界中の信者を集めても、数百人がいい所じゃないか？」
ダクネスの言葉に、俺は安心して再び手紙に目を向けた。

『という訳で、そんな崇高なる目的のために……！

ちょっと、魔王退治に行ってきます』

俺は思わず、ベッドの上で立ち上がった。

「あのバカ……ッ！」

ダクネスが、慌てる俺の様子を見て。

「……アクアは、カズマ程ではないが、結構な額の金を持っていたはずだ。道中、腕の立つ冒険者でも雇う気なのかも知れないな……」

そのダクネスの言葉を聞いて、俺はベッドから飛び降りる。

直ぐさま後を追い掛けないと……！

俺は二人の顔を見て……、

……二人の、困った様な微妙な表情に違和感を覚えた。

そんな俺に、めぐみんが俺が持っている手紙の隅っこを指で差す。

俺は釣られて視線をやると……。

それは、よく注意して見ると微かに分かる、何かを書いて消した跡。

おそらく、これを一度書いて、カッコ悪いので消したのだろう。

『……追伸。　探してください』

……探さないでください、じゃあないのか。

……あのバカ。

22話（後書き）

ちょっとだけシリアス。
次回も多分ちょっとだけ。

23話

「さて、冒険者の皆様に集まって頂いたのは他でもありません。この街に、魔王の軍勢が襲撃に来るとの噂についてです」

アクアが書き置きを残して屋敷を出て行ったのが今朝の事だ。

俺とめぐみんとダクネスは、アクアを追うのではなく冒険者ギルドへとやって来ていた。

間の悪い事に、久しぶりの緊急招集を受けたからだ。

本当は、そんなものは放っておいてアクアを追い掛けたいところだが、この街の防衛に関してはちょっと気になる所もある。

俺はめぐみんとダクネスを連れて、ギルドのテーブル席に着いていた。

ギルドの中のテーブルは、いつぞやの機動要塞デストロイヤー対策の時の様に、企業の会議室を再現したみたいに、円を描くように並べ直されている。

そして現在。街中の冒険者達が所狭しと席に着いていた。

呼び出しの内容は、魔王の手先による、この街への襲撃計画に対する対策らしい。

現在捕縛中のセレナを尋問したところ、今回の計画の指揮官であるセレナが不在でも、既に街への襲撃計画は進行中であるとの事。

と、魔法使いの女性が手を上げた。

「えっと……。それって大体いつぐらいに攻めてくるって、分かっているんですか？　規模はどの位、とか。来ると事前に分かっているなら、王都の騎士団に救援要請をすれば……」

その言葉に、他の冒険者も頷くが、司会進行をしているギルド職員が首を振る。

「先日捕らえられた魔王の幹部の話ですと、計画当初では、街の内部からの手引きなどを考え、少数部隊による襲撃が計画されていた様です。しかし、魔王の幹部が捕らわれた事により、その身柄を取り返す事も視野に入れるでしょう。なので、敵の規模は増大すると見られています。その正確な数は分かりませんが、初心者ばかりのこの街の冒険者では、少々厳しいレベルの敵の強さと規模が予想されます。そして、王都への救援要請ですが……。実は、魔王軍主力による、王都への襲撃も計画されているらしく……。王都襲撃の時期は、この街への攻撃と同時に行われる模様です」

ギルド職員は、ため息をこぼしながら、

「なので、はっきり申し上げまして、応援は期待できないものと思って下さい。なにせ、国の中枢が落ちてはどうしようもありません。各街のギルドにも既に襲撃計画が知らされ、腕利きの冒険者や兵士達は、現在続々と王都へ援軍に向かっております。なので、この街は我々だけで守らなければなりません」

職員はそれだけ告げると、どんよりとした空気のギルド内を暗い表情で見渡した。

つまりは、デストロイヤー以来の街の危機と言う事なのだろうか。

冒険者達が、思い思いに意見を言う。

街の門を完全封鎖して閉じこもる、街の周囲に落とし穴を掘りまくる、住人にも武器を取ってもらい、臨時の自警団的なものを……等々。

そのどれもこれもが、多少の効果はあるかも知れないといった程

度のもので、街を守れる決定打になるものは少ない。

しかし、冒険者達からは機動要塞デストロイヤーの時の様な、深刻な絶望感は感じられない。

単純に戦力差があるというだけで、相手は武器も通じる魔王の手下だ。

例え低レベルな冒険者達と言えど、この場の全員が団結すればなんとかなる。

ギルド内には、そんな前向きな意見が飛び交っていた。

……どうしようか……。

俺がここに来たのは、緊急の呼び出しによるものではなく、アクア捜索の手を借りたいってのがあったんだが……。

……みんなと街を守ってからアイツを探しに行くか？

でもアクアは、魔王軍が王都を襲撃して、城が空になる時こそがチャンスだとか、確かそんな事を言っていた。

となると、マゴマゴしていれば、あの鉄砲玉みたいな女神が魔王の城へ乗り込んでしまう可能性がある。

というか、レベル一の俺が街に残っても、出来る事はたかが知れている。

しかし、皆で一致団結して街を守ろうってこの空気で、俺達は仲間を追い掛けるために旅に出ますとか、ちょっと言い出しにくい雰囲気だなあ……。

何と言うか、敵前逃亡する言い訳みたいなんだが……。

「佐藤。……佐藤和真。アクア様の姿が見えないがどうした？」

腕を組み悩む俺に、突然声を掛けてきた奴がいた。
それは……。

「……なんだ、マツルギか」
「ミツルギだ！　いい加減に僕の名前を覚えてくれ！　わざとやっているんだろう？　そうなんだろう？　……ま、まあいい、そんな事より、アクア様はどうしたんだ？　今日は一緒じゃないのか？」

そこにいたのは、二人の取り巻きの女の子を引き連れた、魔剣使いのソードマスター、ミツルギだった。

「アクアなら書き置き残して家出しちゃったよ。ていうか、お前まだこの街にいたのかよ。お前みたいに強い奴は、もっと敵が強い地域の街を拠点にするもんじゃないの？　聞いたぞ、お前って、王都でもそこそこ噂になってる冒険者なんだろ？　王都に応援に行かなくてもいいのかよ。以前俺に下げられたレベルもいい加減元に戻ったんじゃないのか？」

俺がミツルギに尋ねると。

「ああ、レベルか。実はその事で君に頼みたい事があったんだけれど……。……しかし、家出？　とうとうアクア様に愛想を尽かされたのか？　アクア様は今どこに？」

ミツルギが、アクアが家出した事に食いついてきた。
……というか、俺に頼み？
そういやこいつ、以前から、会う度に俺に頼みがあるとかそんな事言っていたな。
毎回うやむやになって聞けなかったが。

「アクアがどこほっつき歩いているか、俺だって知りたいよ。アイツ、魔王退治に行くって書き置き残して、夜中の内に出てっちゃったみたいでさ。魔王の幹部が減ったから、今なら魔王城の結界を破れそうなんだとさ。……それより、俺に頼みって……」

「魔王退治!?」

ギルドに響くミツルギの声。

突然の大声に、ギルド内が静まり返った。

そんな中、ミツルギが俺の胸元を掴んでくる。

「魔王退治だと？　アクア様は、たった一人で魔王退治に旅立ったのか!?　君はこんな所で何をやっているんだ!」

「いや何をやっているって言われても！　アクアがいなくなったのに気が付いたのがついさっきで、そのあと緊急招集があったから、ここにこうしているんだろうが！」

その、俺とミツルギのやり取りを聞いていた、ギルド内の冒険者達が……。

「アクアさんが一人で旅に!?　おいおい、無茶だろそれは」

「あの人を一人で旅に出させるなんて、無謀にも程があるだろ！」

「アクアさんの生活力の無さは筋金入りよ。あの人、この街に住んでもう長いはずなのに、今でもたまに迷子になったりするのよ？　魔王の城になんて、行けるわけないじゃない！」

まるで蜂の巣を突いた様な騒ぎになった。

……というか、散々な言われようだ。

「落ち着いて！　皆さん、落ち着いて下さい！　……この中で、今日、アクアさんを見かけた人はいませんか？」

ギルド職員が声を張り上げると、ギルド内が一瞬静まり返った。
やがて、そこかしこでアクアについての情報が飛び交うが、有力な手掛かりは得られない。

何と言うか、アクアは俺の知らない間に、この街で色んな人と交友を深めていた様だ。
俺ですらあまり話した事のない冒険者が、皆、アクアの身を案じている。

……アイツ、意外に人望あったんだなあ。

これだけ交友を深めていたら、セレナ戦で傀儡化した冒険者達の手の平返しで、ショックを受けるのも仕方がない事なのかも知れない。

……でも、これだけ色んな人に心配掛けているのだ。
アクアを見つけたら、泣くまで説教してやろう。

その為にはまず、アイツを……！

「こ、こうしちゃいられない！　僕はアクア様の後を追う！　佐藤和真、君はどうするんだ!?　もちろん後を追うんだろ？　僕と一緒に行くかい？」

……ミツルギに先に言われた。

「こ、困りますよ！　ミツルギさんの様な高レベル冒険者には、ぜひこの街の防衛をお願いしたいのですが……！　アクアさんの捜索願いについては、各街のギルドへ至急伝達しますから……！」

ミツルギの言葉に、ギルド職員が慌てて言った。
そんな、ギルド職員に。

「おい、行かせてやれ！」

昼間から酔っ払った、腰に剣を帯びたチンピラが、突然罵声を浴びせた。

眼つきの悪いチンピラは、椅子に腰掛けながらだらしなく足を投げ出し。

「この街の防衛ぐらい、ここにいる連中だけでどうにでも出来んだよ。おい、職員！　お前が知らないだけでなぁ、ここには高レベル冒険者がたくさん居るんだからな。女を二人も連れたイケメンなんかに頼らずに、俺達に頼れや！」

そんな、カッコイイのだか悪いのだか、良く分からない事を言い出した。

そのチンピラ……、ダストの傍で、オロオロしながら、その暴言を止めようか止めまいか迷っているゆんゆん。

この子はなぜそんな所にいるのだろう。

そんなダストの隣では、面白そうに騒ぎを眺めるキース達もいる。

ゆんゆんにもついに、ギルドで一緒にたむろする友人達が出来たのだろうか。

でも、俺が言うのもなんだが、友達は選んだ方が良いと思う。

……しかし、高レベル冒険者がたくさん居る？

「いえ、そうは言いましても……！　この中に、レベル二十以上の冒険者の方はどれだけ居ますか？　レベル十以上から二十未満の方が殆どだと思います。冒険者の基本としまして、レベル二十を超えると、この街を出てもっと実入りの良いモンスターが生息する地域へ拠点を移すのが当たり前です。この中に、レベル二十以上の方が

数人居れば良い方でしょう……」
ギルド職員が、困った表情を浮かべながら反論する。
……レベル二十を超えたら拠点を移すのか。
俺達の場合はこの街に家があるから、そんな事は気にしなかったが……。
と言うか、毎回雑魚相手にすら苦戦するからちっともそんな気はしなかったが、俺達って結構な高レベル冒険者だったんだなあ……。
一年足らずでレベル三十超え。
普通の冒険者のレベルアップペースがどんなものかは知らないが、強敵と渡り合ってきた俺達の成長速度は、間違いなく早い思う。
……と、一人の冒険者の男が立ち上がり、ポツリと言った。
「……俺、レベル三十二だけど……」
「えっ？」
男の言葉に、ギルド職員が声を上げた。
やがて、続いて他の男が立ち上がる。
「あの……。俺、レベル三十八です……」
「えっ」
それを皮切りに。
冒険者達が続々と立ち上がり、自分のレベルを告げていった。
立ち上がった者は、誰も彼もがレベル三十以上の者ばかり。
中には、レベル四十超えの者まで居た。
やがて、ギルド職員のお姉さんが、その冒険者達のカードを確認

して回ると……。

「……な、なぜ皆さん、これだけレベルが上がっているのに、この街に居たんですか！？　この街周辺のモンスターなんて、レベル上げの効率も悪いでしょうに……？」

そんな、驚きと疑問が入り混じった声を上げた。

それに、ある一人の冒険者が恥ずかしそうに頭をかく。

「そんなの、この街が好きだからに決まってるさ」

そんな、カッコイイ事を……。

……。

……俺は気づいてしまった。この街に彼らが残っている、その理由を。

「み、皆さん……！　……守りましょう！　いけます、いけますよ！　これだけ腕利きの冒険者が揃っているなら、きっとこの街を守れます！　頑張りましょう！　皆さん、力を合わせてこの街を……！」

職員のお姉さんが感極まって涙ぐみ、そんな事を言う中。

俺は、立ち上がった高レベル冒険者達が、男しかいない事に気がついていた。

そして、そんな彼らの顔には、見覚えが。

……サキュバスの店の常連さん達じゃないですか。

ギルド内が異様な盛り上がりを見せる中、そんな冒険者達を気にもせず、ミツルギが地図を取り出し、テーブルの上に広げた。

それは、俺達が以前、紅魔族の里まで旅した時に手に入れた地図よりも、もっと大きく、詳細に描かれた地図。

ミツルギは、その地図のとある場所を指差した。

「ここだ。ここが、魔王の城だよ」

言って、ミツルギが指したのは地図の北西に位置する場所。

そこには、黒い城のマークが描かれている。

そして、魔王の城の下へずっと南下した所には、王都と描かれた城のマークがあった。

「見ての通り、魔王の城へ行くなら王都へテレポートで送ってもらい、そこから徒歩で向かうのが一番早い。王都と魔王の城の境界線となる国境付近には、要塞化した小さな街がたくさんある。そこで食料の補給も出来る事だろう」

ミツルギが、俺達に説明しながら魔王城へのルートを指でなぞる。

それに対して、俺の右隣に座っていためぐみんが、

「……あのアクアが、果たしてそんな風に素直に向かうでしょうか

？　きっとややこしく考えたり妙な事を始めたり……。ともかく、何かしら余計な事をして、真っすぐは向かわないと思うのですが」

そんな、アクアの行動をよく分かっている事を言う。
俺の左隣に座っているダクネスもこくこくと頷いている。
もちろん俺もそう思う。

と言うか、途中でヘタれて及び腰になり、俺達が追いかけて来ないかと少しだけ期待しながら、出来るだけ遠回りで安全なルートを使うな、アイツなら。
俺は地図をしばらく眺め……。

「……アルカンレティアからも魔王の城へ行けるんだな」
俺はポツリと言った。

水の都アルカンレティア。
紅魔族の里へと繋がる、アクシズ教の総本山。
そこから、北東に向かうと紅魔の里。
そして、街から北西に向かうと、途中幾つかの村を経由して、魔王城へと至る道が記されていた。

アクアの思考を予想してみよう。
家を飛び出し、最初は意気揚々と旅に出る。
だが、あの手紙の追伸の部分から察するに、内心では既に結構へタれていた事だろう。

となると、一人で行くのは怖がる筈だ。
先程、意外と高レベル冒険者もいる事が判明したが、基本的にこの街の冒険者は駆け出しが多い。

アクアが人でも雇おうとするなら、もっと先に行った街で腕利きを雇おうとするのではないだろうか。
そして……。

「……どうせ、アイツの事だから。この街で一番最初に仲間を募集した時みたいに、メンバー募集のハードル上げるんだろうなあ……」

俺とアクアがまだ二人で行動していた頃、パーティメンバーの募集要項に、ただし上級職に限ると書いて、結局めぐみん一人しか来なかった事を思い出した。

……懐かしいな。
あの頃は、カエル五匹討伐のクエストですら手に余って、メンバー募集をしたんだっけ。

「最初の頃を思い出しますね。確かあの時、私はお金も尽きて何日もご飯を食べていない状態で、たまたま目についたメンバー募集に……」

めぐみんも、当時を思い出したのか、懐かしそうにそんな事を……。

「……私は、最後に仲間入りしたからな。そ、その……。あまり、私の知らない話題はしないで貰えると、仲間はずれな疎外感が無くていいのだが……」

ダクネスが、もじもじしながらちょっと寂しそうに言った。

話を戻し、俺は地図の上を指でなぞる。
「アクアの向かうルートはこうだな。王都へは行かず、以前旅した事のある経路で行くと思う。今朝早くの乗合馬車で温泉街ドリスに

向かい、そこからアルカンレティアへ転送して貰って、徒歩で魔王城へ向かったんじゃないかな。温泉街ドリス、水の都アルカンレティア。そのどちらかで腕利きの冒険者を雇おうとするだろうが、どうせ高望みして仲間が誰も集まらないだろう。そして、どうしようもなくなって、一人で行くのは怖いと、アルカンレティアのアクシズ教徒達に泣きつくんじゃないかな」

「……ん、間違いないな」

「その様子が手に取るように想像出来ますね」

「いや待ってくれ。アクア様を何だと思ってるんだ君達は」

俺の完璧な予測に、ミツルギだけが異を唱えた。

そういや、コイツは未だに、アクアがどんな奴かを知らないのか。

「色々言いたい事はあるかも知れないけど、多分このルートで間違いないよ。俺達は伊達に長い付き合いじゃない。途中、温泉街ドリスで温泉に入ろうとして、店員に、出入り禁止だと追い出されたりする様子すら目に浮かぶ。アイツは、もたくさと旅をすると思うから、今から追い掛ければすぐ追い着きそうだ」

俺の言葉に、ミツルギは半信半疑ながらも、

「……君が言うならそうなんだろうね。……時刻は昼か……。急げば、今日の乗合馬車のニ便に間に合いそうだな。それを使って、その後も強行軍をすれば、アクア様には追い着けるだろう。それじゃあ……」

そう言って、急く様に立ち上がった。

そんなミツルギを見ても、もうギルド職員は止めはしない。

事情が事情だ、行かせてくれるのだろう。

ギルド職員は、現在大声で冒険者達に呼び掛けている。

「では、冒険者の皆さーん！　これから班分けをします！　既にパーティを組んでいる方は、各パーティごとに集まって下さい！　それぞれに部隊番号と、防衛時の役割を振りますので……」

それを聞いて、冒険者達は思い思いに小さな集団になって職員の前に立った。

俺とめぐみん、ダクネスは、ミツルギとその取り巻き二人と共に、離れた所に立っている。

やがて、冒険者達がパーティーごとに番号を貰っていく中。

……ゆんゆんが、ポツンと取り残されていた。

……あかん。

そういやあの子は、こういった、仲間同士とか班分けとかが苦手な子だった。

ゆんゆんは、しばらくオロオロと周囲を見渡した後、やがて、一応の知り合いであるダスト達のパーティーからちょっと離れた所に、遠慮する様に一人ポツンと立った。

……所を、早速ダストに絡まれた。

「おい、何やってんだよ。ここはお前のいる所じゃねーから」

口の悪いチンピラの、あんまりと言えばあんまりな言い草。

ああ、そういやコイツはこんな奴だった。

初めて会った時、俺に絡んできた事を思い出す。

最近では少しは丸くなった気がしていたのだが、あくまで気のせいだったらしい。

「あ、あの……。ご、ごめんなさい……」

ゆんゆんが、ペコペコと謝りながら、ダスト達から離れようとする。

これは幾らなんでもあんまりだろう。

流石に、ちょっと一言……

「どこ行こうってんだよ。お前の居場所はあそこだろうが」

項垂れ、その場からトボトボと離れようとするゆんゆんを、ダストが捕まえ、俺達の方へと引っ張ってきた。

……おおっ？

「……？」

連れて来られたゆんゆんが、キョトンとした顔で不思議そうにダストを見上げた。

「お前は多分この街で、一、二を争うぐらいの実力を持つ冒険者だろ。そこのいけ好かない魔剣の兄ちゃんと、なんちゃって紅魔族じゃない、本物の紅魔族であるお前が手を組めば、案外魔王相手にも良い勝負が出来るんじゃないのか？　おめー、ちょっとクソ迷惑な魔王のとこまで行って、俺達の代わりに一発かましてこい」

「おい、なんちゃって紅魔族と言うのはひょっとして私の事じゃないだろうな」

ダストの言葉に、めぐみんが反応する。

不思議そうに見上げるゆんゆんに、ダストはなおも続けた。

「こいつらだけじゃ、どうにも心配だ。アクアのねーちゃんを連れ

帰って来るだけならいいが、どうせこいつらの事だ。また、ろくでもない事に巻き込まれるかも知れないしな。なんちゃってアークウィザードじゃない、本物のアークウィザードなお前が着いて行ってやれ。……なに、お前はテレポートが使える様になっただろ？　いざって時にはこいつら置いて、一人だけでも帰って来ればいい」

このチンピラ、最後にサラッと何言ってくれてんだ。

「おい、なんちゃってアークウィザードとは、ひょっとしなくても私の事か」

めぐみんが、ダストに向かって詰め寄った。

そんな中。

「……わかりました。私、アクアさんの手助けに行って来ます！　と、友達……を、助けるのは当たり前ですし……」

ゆんゆんが、恥ずかしそうに口籠りながら笑顔を見せた。

一連の流れを聞いていたギルド職員は、上級魔法を使えるゆんゆんの離脱に少し渋い顔をしていたが、チンピラに絡まれるのが怖いのか、口出しはしてこない。

「おい、紅魔族は売られた喧嘩は買う種族だ、その喧嘩買おうじゃないか。ほら、街の外へ来るがいい！」

めぐみんが、言いながらダストの服を掴んでグイグイと外に連れ出そうとする中、ミツルギは爽やかそうな笑顔を浮かべ、ゆんゆんに片手を差し出した。

「……決まったみたいだね。それじゃあ、……ゆんゆんって言ったかい？　一緒に行こうか。アークウィザードだなんて心強いよ。パ

ーティも決まっていないみたいだし、なんなら僕のパーティに入って、ずっと一緒に居てもいい」

「あの……。そ、それは、結構です……」

ゆんゆんは、差し出してきたミツルギの手をオズオズと掴んで軽く握手すると、パーティ入りはキッパリと断った。

「……」

「だ、大丈夫よキョウヤ！　私達が居るじゃない！」

「そ、そうよ！　アークウィザードが入ってくれればバランスはいいけど、彼女はこの街でも有名な魔法使いだし……！　仕方ないって……！」

ちょっと傷ついた表情のミツルギが、取り巻きの女の子二人に慰められている。

「おいダスト、イケメン様の勧誘が失敗したよ！　調子こいて、ナンパするみたいに手を差し伸べたけど、イケメン様だって振られるんだよ！」

「ぶひゃひゃひゃ、ざまあー！　ぼっちで有名なコイツでも、友達ぐらいは選ぶってよ！」

「ち、違……！　わ、私なんかが入っても、迷惑掛けそうだって意味で……！　ちちち、違うんです……！」

俺とダストがここぞとばかりにミツルギをからかうと、ゆんゆんが慌ててフォローに入る。

そして、

「ウ、ウザ……ッ！　この二人、ほんとにウザッ！　キョウヤ、こんなモテなさそうな二人の言う事なんて、気にしちゃ駄目だからね！」

「ちょっとチンピラ、あんたあっちに行ってなさいよ！　ほら、しっしっ！」

ミツルギの取り巻き二人が嫌な顔をする中、ミツルギはなんとか立ち直ると。

「そ、それじゃあ、そろそろ行こうか……。アクア様を追い掛けるのは、僕と、僕の仲間の二人。そして、君達四人だね。……でも、僕はこの旅は好機だと思っているよ。魔王軍が街や王都へ攻め入ると言うのなら、魔王の城には最低限の敵しかいない事だろう。結界で守られていると油断しているそこを、アクア様が結界を解いて、僕が乗り込む。……どうだろう、上手くいくと思うんだが」

アクアと似たような事言うなあ。

「却下だ却下。あのな、言っとくけど俺は今レベル一だからな。そんな状態で魔王との戦闘なんて論外だから。と言うか、道中の旅ですら正直厳しい。凄く厳しい。こんなんで、魔王との戦いなんて無理だからな」

そんな俺の言葉に。

「君もレベル一に？　……ああ、そうか。アレを行なったのか。あの、レベルを下げるスキルは自分にも効果があったのか？　うーん……。アレに関しての頼み事は、アクア様の件が片付いてからでいいか……」

ミツルギが、妙な事をブツブツと呟き出す。

また、その頼み事って話か。

「お前、以前から言ってたその頼み事ってのは何なんだ？　俺に何をして欲しいんだよ。またアクアを賭けて決闘しろとか言われても、そんなもん聞かないからな」

その、俺の言葉に。

「うん？　いや、君への頼みって言うのは……。最近、レベルが上がり難くなってきてね。君にまた、レベルを下げて欲しかったんだよ」

ミツルギが、そんな事を言っ……。

……えっ。

コイツ、今なんて言った？

「貴様！　レベルダウンを求めるとか、なかなかに上級者じゃないか！　この私でも躊躇する弱体化プレイを望むだなんて、私はお前の事を過小評価していた様だ！」

「や、ややこしくなるからお前は黙ってろ。……いや、何でレベルを下げて欲しいとか変わった事言い出すんだよ。そんな事されて喜ぶタイプの人間なら、見ての通り、もう間に合ってるぞ？」

興奮しだしたダクネスを黙らせながら、俺はミツルギに尋ねる。

すると、ミツルギは意外そうな表情で。

「何だ、君は自分で持っているスキルなのに知らなかったのか？　レベルは、一度下がっても、習得したスキルは忘れない。そして再びレベルを上げる際には、スキルポイントはちゃんと加算されるんだよ」

……えっ。

「普通の冒険者にとっては、レベルダウンは致命的だけど……。僕の様に強力な武器を持つ冒険者なら、レベルが下がっても、再び上げ直すのにそれ程時間は掛からない。……ちょっと、強力な攻撃スキルを覚えたくてね。君にもう一度レベルを下げてもらおうと思っていたんだが……。レベルを下げるとステータスは当然下がる。アクア様を探しに行く旅は厳しいものになりそうだ。だから、レベルダウンは、アクア様を無事探した後でお願いしたいんだけど……」

俺は、そんなミツルギの言葉なんて既に聞いちゃいなかった。

あれ……？

そういえば、俺ってレベル一になったけど、ダイナマイトもどきを爆発させる時とかも、普通にティンダーが使えていたな。

……あれっ。

俺が最強の冒険者になれるフラグじゃないのか？

俺の就いている職業、最弱職と呼ばれる冒険者は、スキルポイントさえ足りていて、そのスキルを使う職業の人に教えてもらえれば、あらゆるスキルを習得できる。

あれ？
ひょっとして、この俺が最強の勇者とかになるフラグが……

「……何を考えているのか知らないけれど、冒険者の君が強力な攻撃魔法を覚えても、直ぐに魔力が枯渇するし、本職には当然敵わない。ソードマスター特有の攻撃スキルを覚えても、それも当然、僕ほどの威力は出ないよ？　まあ、今より更に器用貧乏な感じにはなるだろうけど……」

早速俺の最強フラグをへし折るミツルギ。
いや、でも。
それでも、これは……。

「……ゆんゆん、今からマクラギさんを連れて、アクアを探しに行ってくれませんか？　アクアはアンデッドにたかられるという、厄介な性質を持っています。なので、今もこうして一人にしておくのが心配なのです」
めぐみんが、ゆんゆんにそんな事を言い出した。
「僕はミツルギだよ」
ミツルギが横で訂正する中、めぐみんは、
「私は、今からカズマを連れて行く所が出来ました。ゆんゆんは、先に行っていて下さい。私達も後から追い掛けますので」
と、何を思い付いたのかは知らないが、そんな事を。

「わ、分かった！　きっとアクアさんを見つけるから！　アクアさんを見つけたらどうしたらいい？　テレポートでこの街に送ればいいの？」
「いえ。ここに送り返しても、根本的な問題を解決しなければアクアはまた家出するでしょう。アクアと合流したら、そのまま、魔王の城へと向かって下さい」

えっ。

「わ、分かったわ！　めぐみんも、カズマさんもダクネスさんも！　気をつけて追い掛けて来てね！　が、頑張るから！　私、頑張るから！」

「頼みましたよ。なに、アクアと合流出来れば、ゆんゆん達のパーティ構成は理想的です。魔剣使いのなんとかさんと、そちらの槍を持った戦士の方。そして、同じくそちらの盗賊の方。それに、ウィザードのゆんゆんと治療役のアクア。非常にバランスの取れたパーティになるでしょう」

「ミ、ミツルギだよ……」

まあ、確かに理想的なパーティ構成ではある。

では、あるのだが。

俺は、これからの事で、非常に嫌な予感がしていた。

めぐみんは何を思い付いたのか。

俺に何をさせようと言うのか。

というか、アクアの根本的な問題を解決するって、既に嫌な予感しかしないんだが。

「でも、めぐみん達は、三人で大丈夫なの？」

ゆんゆんが、心配そうに言った。

「大丈夫です」

それに、めぐみんは自信満々に言ってのける。

俺を指差しながら。

「この男を連れて、紅魔族流レベル上げ、養殖を行なって来ますから」

23話（後書き）

次回、大悪魔とリッチー無双。
そこには、本来は敵対する女神を助けたいとの、種族の垣根を超えた想いと、愛と友情の物語が……！

そんな話にならなくても謝らない。

以前、一部を書いている時に、ミツルギのレベルダウンに関連して、先の展開を見抜き、予想された方がおりました。
その際、感想を消させて頂いた方、及び、消して頂いた方々に改めてお詫びと感謝を。

主人公、最強になるん？
カッコイイ主人公になれるん？
そんな疑問と期待が沸くかもしれませんが、当作品に主人公最強要素はありませんので、そんな期待はしないで下さい。
あくまで、更なる器用貧乏化が進むだけです。

24話

――地下一階――

「フハハハハ！　フハハハハハハ！　失せろ失せろゴブリンども！　貴様らまとめて、お客様の経験値になりたいのか！　貴様らの様な経験値効率の悪い雑魚に用はない！　ほうれ、道を開けるがいい！」

地獄の公爵にして、元魔王軍幹部の大悪魔。
バニルが先頭を行き、ゴブリンを筆頭とする弱いモンスター達を追い散らしていた。
地獄の公爵として相応しい、高貴で恐ろしい格好……

……ではなく。

ステテコとサンダル、肌シャツというイカした格好で。

こんな格好でダンジョンに挑むのもどうかと思うが、もうコイツの事に関しては気にしない。
しかし、そんな格好で仮面だけはしっかり付けているのが、余計に場違い感を醸し出していた。
今の姿を、このダンジョンに潜っている冒険者が見たりしたらどう思うのだろうか。

「カズマさんやバニルさんと、こうして冒険が出来る日が来るなんて思いもしませんでしたよ……！　私、張り切っちゃいますから！

今日は、いつもバニルさんに叱られている駄目な店主じゃなく、かつて名を馳せた大魔導師の実力を、ぜひともお見せしますからね！」

俺の後ろからウィズが言った。

バニルとウィズは、現在、俺を挟んで守る様にしてダンジョン内を行軍している。

今日のウィズは、いつも困窮している駄目店主とは違う頼もしさを感じる。

ただ……。

「バニルはともかくとして、その……。ウィズは、武器とか防具はいらなかったのか？」

店で使うエプロンを着用したままの、ウィズのその格好は、何と言うかバニルの現在の格好とあまり変わらない場違い感。

ステテコに肌シャツ、サンダル姿で風呂敷を背負った仮面の男に、エプロン姿の女性、そして、一人だけ重装備の俺。

これは一体どんな集団なんだろうか。

「大丈夫ですとも！　リッチーは、魔法の掛かった武器や、強い魔力を持つモンスターからの攻撃、もしくは魔法ぐらいでしか傷付けられません！　これでも私は、アンデッドの王ですからね！」

鼻息荒く返事を返してくるウィズに、若干の頼もしさを感じつつも。

俺は早速、軽く後悔し始めていた。

「フワーッハッハッ、フハッ、探して下さい！　なんという構って女神か！　誰かが追いかけて来てくれるのを心待ちにしながら、後ろをチラ見しながらの魔王討伐の旅！？　ブワハハハハハハハハ！」

　例の手紙を見せたところ、さも楽しそうに笑うこの悪魔。

「バニルさん、笑い過ぎですよ！　アクア様が一人で旅に出ちゃったんですよ！？　ああっ、どうしましょう……。きっとアクア様の事ですから、また何かに巻き込まれて泣いていたり……！　先日アクア様が言っていた、私が成仏すれば……って話は、お城の結界を解くためだったんですね……」
　そんなバニルを咎めながら、ウィズがオロオロと狼狽え、アクアの手紙を読み返していた。

　めぐみんに、ウィズの魔道具店へと連れられてきたのだが……。

「まあ、現在こんな事になっているのですよ。……以前、私がローブを失って紅魔族の里に行くはめになった時。カズマがウィズに、テレポートの魔法の登録先を尋ねていましたよね？」
　めぐみんの言葉に、ウィズはコクリと頷くと。
「ええ……。私のテレポート登録先は、この街の入り口に一つ。そして、敵を強制的に転送して屠る場所として、火山の火口の真上に一つ。……後は、魔法の素材を集める為、この大陸で最も深いと言われる巨大ダンジョンの入口に……」
「そこです！」

「「？」」
めぐみんの言葉に、皆が首を傾げた。
「レベル一と化したこの男を、そこで鍛え直したいのです。今のカズマは、そこらの一般人と変わらない身体能力です。アクアを追う旅の途中に、高い確率で死ぬでしょう。そして、今のカズマでは、魔王と戦うなんてまず現実的ではありません」
「待って欲しい、お前今なんつった」

俺は思わず待ったをかけた。
今の俺の身体能力は、そこらの一般人と変わらない。
これは、その通りだ。
そして、アクアを追う旅の途中、高い確率で死ぬ。
……うん、これも有りそうだ。

問題は、その後である。
「お前、魔王と戦うって言ったか」
「言いました。……だ、大丈夫です、私に考えがありますから、そんなに怯えないでください」
それを聞いて逃げようとする俺の服の裾を、めぐみんが掴んで離さない。
魔王なんて、広域暴力団の親分みたいなもんじゃないか。
何が悲しくてそんな相手に喧嘩を売らなきゃいけないのか。

ギルドであった事の説明をされたバニルが、興味深そうに。
「……なるほど、なるほど。面白い事を考えるな人間は。レベルを何度も下げて、再び上げ直し、スキルポイントを稼ぐと。……でもまあ、普通はそれが出来てもわざわざやらないだろうな」
「……やらないのか？　なんで？　スキルポイント稼ぎ放題じゃないのか？」

俺の疑問に、バニルはフッと鼻で笑う。
むかつく。

「女神がいなくなり、ここぞとばかりにそこの二人へのスキンシップが増えた小僧。よいか？　普通の者は、そこまでスキルポイントに困らぬのだ。人は誰しもが、生まれながらにスキルポイントを持っている。まあ、一般的に才能とか呼ばれるものだ。……あの女神なんかは、アークプリーストになった時、あらゆるスキルを取っていたであろう？」

……そういえば、アクアはあらゆる宴会芸に加えて全てのプリーストの魔法を取り、その上近接格闘スキルを取ったとか言っていた。

……あれっ。
俺って、何もポイントなかったんだけども、才能なんて全くないって事ですか？

バニルが、なおも続ける。
「あのチート女神の例はあくまで規格外としてもだ。例えば、生まれながらに魔法使いとしての高い素養を持つ紅魔族。その紅魔族のほとんどの者が上級魔法を習得しているのは、アークウィザードになった時、最初に持っているスキルポイントで、上級魔法を習得するからだ。彼らはそれだけ、最初から高い素養がある。最初のポイントだけでは習得に届かない場合でも、連中は、養殖と呼ばれる経験値稼ぎで、魔法を覚えられるまで仲間を手伝ってやるのだ。上級魔法さえ覚えれば、後は一人で簡単にレベルを上げられるからな」

一人だけ上級魔法を覚えていない例外が俺の隣にいるが。
まあ、めぐみんやダクネスも、スキルの振り方がおかしいだけで、真っ当なスキル振りをすれば、ポイントに困る事は無いのか。

「……それでも、誰だってたくさんのスキルポイントは欲しいもんだろ？　ミツルギだって、俺にレベルを下げてくれって言ってきたぞ」

「それは、あの魔剣使いはよほどレベル上げに自信があるのだろう。例えば、レベル一ですら、上位のモンスターを相手にしても渡り合えるぐらいの武器があるとかな。というか、だ。レベルを下げれば弱くなる。過酷なこの世界に生きる者は、生き物の本能として、一時的にでも自分が弱くなる事は受け入れられないだろう。そんな事を抵抗もなく気楽に行えるのは、異世界からの住人である貴様や、あの魔剣使いぐらいのものだ」

「「……異世界からの住人？」」

めぐみんとダクネスが、意外な所に食い付いてきた。

……そういえば。

俺はまだ、この二人には、遠くの国から来たとしか言っていなかったんだっけ。

「異世界の住人とは、どういう事でしょう。カズマはこの世界の人では無いのですか？」

「……カズマは以前、紅魔の里へと旅する中、遠い国から来たとは言っていたが……」

バニルめ、余計な事を。

「まあ、その辺はいずれ話すよ。今は、なぜみんなはレベルドレインを使ってスキルポイント稼ぎをやらないのかって話だろ？」

「うむ、そうだったな。まあ、理由は簡単だ。レベルドレインなんて能力を使えるのは、一部の大悪魔かリッチー、もしくは、お伽話に出てくるような伝説級のモンスターぐらいだ。そんなものと対峙して、お手軽にレベルだけ下げて逃げるなんて、そんな都合の良い

事は出来ぬ。そんな大変でややこしい事をするまでのメリットは無い。なにせ、希少とは言え、スキルポイントを上げるポーションも世にはある。ダンジョンで、リッチークラスの敵と対峙出来る程の実力者ならば、金にも困らないだろうからな。それこそ、友好的なリッチーや悪魔でも居なければ、無理な話だ」

俺の目の前に、友好的なリッチーと悪魔がいるんだが。

「お手軽にレベルを下げる事など出来ぬ。そして、レベルドレインが使える敵と対峙する頃には、既に比類なき力を手にしているだろう。その力を手に入れるまでに費やした時間は、十年か……二十年か……。長い時を掛けて手にした力を失い、また一からやり直す。たかがスキルポイントに、そこまでのメリットはあるまいて」

なるほど。まあ、普通はそうなるのか。

しかし……。

「俺が簡単にレベルを下げられる。これを利用すれば、まだレベルの低い駆け出し冒険者を鍛えまくれるんじゃないか？　街の外のカエルがいるだろ？　アイツらを数匹狩れば、レベルの二つ三つは簡単に上がるんだし。駆け出し冒険者達でそれを毎日繰り返せば、みんな、就いている職業のスキルを最初から全部覚える事が……」

「……その、カズマ……」

「……？」

めぐみんが、恐る恐るといった感じで。

「……普通は、そんなに簡単にはレベルは上がりません。通常、この駆け出しの街を出られる目標レベル、二十にまで上げるのは数年掛かると言われています。私は爆裂魔法で強敵をまとめて一層して来たから、まあ……。しかしその、カズマは……」

……？

どういう事だろう。

つまり……。

「俺が特別優秀で、人よりレベルが上がり易い人間だって事か？」

「そ、そうです！　カズマは、人よりレベルが上がり易い、特殊な才能があるのですよ！」

「……ん、そ、そうだな！　カズマは選ばれた者、とでも言うのか……、その……！」

めぐみんとダクネスが、そんな事を……。

「生まれつき、弱い者、才能の無い者ほどレベルが上がり易いと言うのはこの世界の常識であるな」

「「あっ！」」

「……」

無言でその辺の商品をいじくりだした俺の背中に、めぐみんがオズオズと声を掛けてくる。

「……カ、カズマ？　その、逆に考えましょう！　普通の人は、こんな簡単にはレベルが上がりません！　そこで、今からウィズにお願いして、ダンジョンで鍛えてもらうのですよ、カズマは自分ではレベルを下げられないでしょうから、ウィズに何度もレベルを下げて貰って！　そうすれば、あらゆるスキルを覚える事も……！」

「うむ、無理だな」

めぐみんの言葉が、バニルに遮られる。

なぜ無理なのか。

それに答えてくれたのは、みんなの視線を浴びるバニルではなく、困った表情を浮かべるウィズだった。

「その……。リッチーである私が本格的な不死王の手を発動させる

と……。カズマさんに、毒の状態異常が発動した場合、高確率で死んでしまうと思います……。それほど、本職の不死王の手は強力なスキルですから……」

「それは残念。じゃあ、この話は無かった事に……」

「ま、待って下さいカズマ！　そんな早々と諦めては……。……ではカズマが……。カズマがスキルを使って、私をレベル一にして下さい。私が、あらゆる魔法を覚えてアクアを助けますから！」

ほう、あのめぐみんがポリシーをねじ曲げた。

それだけアクアを助けたいって事なのだろう。

爆裂魔法以外を使うめぐみんなんて想像出来ないが、とうとうウチのパーティにも、上級魔法を使える魔法使いが……！

「駄目だ。それなら、私がカズマにレベルを下げて貰って、攻撃系のスキルを取る」

ダクネスもが、攻撃スキルは取らないという自分の信念を捻じ曲げて、突然そんな事を言い出した。

「ふむ、被虐嗜好者な娘よ、防御スキルがメインのクルセイダーがレベルを下げて、攻撃スキルを取り直してもたかが知れている。何より、貴様のレベルダウンは戦力的に見てマイナスだろうな。盾職がレベルを下げて貧弱になって、盾にもなれなくなってしまっては本末転倒だろうに」

「う……。し、しかし……！」

ダクネスが、バニルの言葉に悔しそうに唇を噛む。

ウィズが、めぐみんの胸元にぶら下がっている冒険者カードに目をやった。

「……めぐみんさんの爆裂魔法のスキルレベル、凄い事になってますね。そのスキルレベルだと、レベルを一にしてしまった際には……。スキル使用時の消費魔力が、レベル一のめぐみんさんの最大魔力を大幅に越えてしまうでしょう。……本来は、そんな事にならない為のリミッターとして、自身のレベル以上にはスキルレベルが上がらない様になっているのですが。レベルドレインと言うものは、いわば、呪いです。強力な相手を強制的に弱体化してしまう、自然の法則をねじ曲げるものですから……」

ウィズのその言葉を聞いてもめぐみんの表情が変わらないところを見ると、レベルを下げると爆裂魔法が使えなくなる事は覚悟の上の様だ。

……レベルを下げためぐみんが、再び今ぐらいのレベルにまで上げ直すのには、また一年近くは掛かるだろう。

スキルポイント稼ぎと言う事ならば、中途半端なレベルではなく、ひと桁台にまで下げなければ意味が無い。

いや、養殖をして貰えば、もう少し早く元のレベルまで戻れるのだろうか？

……それでも、爆裂魔法を長い期間我慢するめぐみん。

……爆裂魔法以外を使うめぐみん。

……想像つかないな、うん。

「……ウィズ、ダンジョンで俺を鍛えてくれ。そして、レベルが上がってきたら、ダンジョン内で何度かレベルドレインも頼む」

「えっ！」

ウィズが声を上げる中、めぐみんとダクネスも慌て出した。

「カズマ、ちゃんと説明を聞いてましたか！？　カズマだけは、レ

ベルダウンに関して危険が伴います。私やダクネスなら、万一カズマのスキルで毒化が発動しても、即座に死ぬ事はありませんから！」

毒消しのポーションでも用意しておけば……！」

「おい、お前は何時も保守的なくせに、たまに無茶を言い出したりやらかしたりするのは何なのだ！　今はアクアが居ないんだぞ、死んだらそれで……」

そんな二人に。

「ああもう、うるせー！　お前ら二人は、今から街を駆け回って、使えるスキル持ってそうな冒険者に、渡りを付けといてくれ！　俺がダンジョンから帰ってきたら、直ぐにスキルを教えてもらえるようにな！」

俺は逆切れ気味に言ってのけた。

俺に他のスキル覚えろと言われても、頑として聞こうとしなかった信念を、ねじ曲げてまでアクアを助けるとのたまうめぐみんとダクネス。

一人じゃ心細いくせに、俺達を巻き込むまいと、一人で旅立ったアクア。

どいつもこいつも。

全く、どいつもこいつも、普段は好き放題に迷惑掛けるくせに、変な時だけお人好しなのは何なのか！

「俺は巷では、ろくでも無い鬼畜みたいに言われてるが！　流石にここでお前らのレベルを下げて後を任せるほどヘタレじゃないから！　お前ら二人は、長い付き合いなんだから、俺の運が人より高いのはよく知ってるだろ！　毒なんて、不死王の手の持つ、５つある

状態異常の内の一つだろ！　つまりは、2割の確率ってこった！　運が良い俺がそう簡単にハズレを引くわけ無いだろ！　ほら、早く行って！　お前ら二人は、さっさと行って！！」

アクアの口癖を真似ながら、めぐみんとダクネスにシッシと手を振る。

「しょ、正気ですかカズマ……！　その、せめて何か、解毒剤的な物とか……！」

「ま、待て、盾代わりに私も着いて行った方が良くはないか……！？」

俺は、行くのを渋る二人の背中を押して、半ば強引に店から追いやった。

そして、改めてウィズを振り向くと。

「という訳だ。悪いんだが、ウィズ。俺を鍛えてくれないかな？　元魔王の幹部に、魔王を倒すなんて言うこんな事を頼むってのは、筋違いだし図々しいとは思うんだけども……」

「そ、それは……。私もアクア様が気になりますし構いませんが……。私一人ではカズマさんを守りきれる保証は出来ませんよ？　ダンジョンは広大です。道に迷う事もありますし、危険な罠も……。それに、やっぱりなんと言っても、私のスキルでカズマさんが死なないか……が……。……ああっ！　そうです！」

渋い顔をしていたウィズが、突然はたと手を打った。

「バニルさん！　バニルさんなら、見通す力で、カズマさんに毒が発動するかどうかが事前に分かるのではないですか！？　そ、それに！　バニルさんなら、ダンジョンの正しい道だって、仕掛けられ

た罠だって、全部見通せるし」

「断る」

ウィズが出した、名案だと言いたげなその案に、バニルが一言で切って捨てた。

そして、愉快そうに笑いを上げる。

「フハハハ、魔王がどうなろうが知った事でもないが、なぜ悪魔であるこの我輩が、わざわざ女神の手助けになりそうな事をしなくてはならんのか！　ブワハハハハハ、愉快愉快！　女神なぞ旅の途中で道にでも迷い、その辺の雑草でも食んであたって、ポックリ逝ってくれるが吉！　まあ、あやつ一人では間違いなく城には行けぬだろーて！　フワーッハハハハ！」

「バニルさん！　こんな時ぐらいは助けてくれてもいいじゃないですか、そんな事を言うなら私にだって考えがありますよ！」

「ほほう？　言ってみるがいい、この我輩が脅しなどに屈するなどとは……」

「バニルさんに内緒でこっそり仕入れたこの商品郡。流石に、量が量なので返品しようかなと悩んでいたのですが、やっぱり止めに……ああっ！　そっちは返品する気のない大事な物ですから、持って行こうとしないで下さい！」

商品を取られまいとするウィズと、揉み合いを始めたバニルに、俺は。

「そういやバニル。お前には貸しが一つあったよな。ダンジョンから無事に帰れたら、その時の貸しを返すよ」

そんな事をポツリと言った。
「……？　貸しだと？」
取り上げられた商品にすがるウィズの頭を、上から押さえつけながら、バニルが不思議そうに聞いてくる。
「ほら、以前俺が、アクアに屋敷を追い出された時にさ。夜中、屋敷に侵入する時に手伝ってもらっただろ。あの時、ウィズの店で、いらない高額商品大量に買い取るって約束したろ？」
「ほほう、あったな、そんな事も。……ウィズ、早速貴様が仕入れたこのガラクタの数々が捌ける事になったぞ、だから……。ええい、この手を離すのだ！　大事な物などこの中には一つも無い、我輩に言わせれば全てガラクタだ！　これらを全て売り払うぞ！」
「待って下さい、それはガラクタではありませんから！　持ってると、素敵な出会いがあると言われるロザリオで……！」

未だ激しく揉み合いをしている二人に俺は告げた。
「ああ、悪いんだけど、買い取るのはそれじゃない。もう欲しい物は決まってるんだよ。それも、買い取ると多分バニルが大喜びするような…………」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

――地下五階――

「絶好調！　絶好調である！　今日の我輩、絶好調！　フハハハハ

ハハハ！　オーガーのくせに我が前に立ち塞がるとは生意気な、魔力を使うまでもないわ！　素手で蹴散らしてくれる！」
「ご機嫌ですねバニルさん！　でも、トドメはカズマさんに譲らないと、経験値が……」

バニルが身の丈三メートル近くあるオーガと取っ組み合いを始め、その隣ではウィズが、片っ端から他のオーガ達に触っていく。
ウィズに触られたオーガ達は、ある者は泡を吹いて倒れ、ある者は体を震わせ動かなくなった。
それぞれ、毒と、麻痺を食らったのだろう。
本職のリッチーである、ウィズの不死王の手で毒を食らったオーガは、俺がトドメを刺す前に次々と息絶えてしまった。
なので、俺がトドメを刺すのは麻痺したオーガと昏睡したオーガ達。

流石は、元魔王の幹部の二人である。
二人は、オーガの群れなど、なんでもない様に蹴散らしていた。

俺のいるここは、ウィズのテレポートでやってきたダンジョンなのだが、最も大きく、最も深いとされるだけあり、通路の幅や一階層ごとの天井の高さは、ドラゴンですら余裕を持って闊歩できそうな広さがある。

ダンジョンに潜って数時間。
セレナとの戦いで一になった俺のレベルは、既に十を越え、二十に差し掛かろうとしていた。

「多分、この最後のオーガで……。……よし、レベル二十！　二人のお陰で、メリメリレベルが上がってくよ」

俺は、バニルがサブミッションをかけて泣かせていたオーガに剣を突き立てトドメを刺し、二人に今のレベルを報告する。
剣を抜いて、俺はオーガに手を合わせた。
こんな、ゲーム感覚でのレベル上げってのは、正直言ってちょっと気が引ける。
相手が人型のモンスターだからか、少し良心が痛んだ。
でも、これも強くなる為だ、ごめんなさい。

動かなくなったオーガに手を合わせながら。
他の冒険者がレベルドレインを使ってスキルポイント稼ぎをしない最大の理由は、モンスターを殺して、その犠牲の上に積み上げて手に入れた強さをリセットする事に、抵抗を感じるってのもあるのかもしれない。

「ふむ、もうそんなにレベルが上ったのか。冒険者としての才能が無いとは思っていたが、これ程とは。うむ……。何と言うか、その……。まあ、レベルが上がり易い才能を持っていると逆に考えれば……」
「お前にだけは気を使われたくないんだけども。せめて、笑ってくれよ……」

バニルが哀れんでくる中、ウィズが俺に向かって恐る恐る手を延ばす。
「そ、それではいきますよ……？　バニルさん、大丈夫ですよね……？」
「うむ、問題ない。お客様の元気な未来が見えておるわ」
「お客様って止めろよ、いつも通りでいいよ。それじゃあ頼む！」

ウィズの手により、無事にレベル一まで下げられた俺は、ひとまずホッと息を吐いた。

「……本当に成功したのか。良かったな」
「「えっ」」
バニルの一言に、俺とウィズがギョッとする。
こいつ今なんつった。
ちゃんと結果を見通してくれたんじゃ……！
「フハハハハハ！　心配したか？　心配したか？　アレを買い取って貰うまでは、心配せずとも貴様の安全は保証しよう……、おおっと、素晴らしい悪感情、美味である美味である！」

そういやコイツはこんなヤツだった。

――地下八階――

「な、なあバニル……。ここって、どれだけ深いんだ？　もう大分歩いたんじゃないのか？　どれだけ時間が経ったのか、ちっとも分かんないぞ。俺、ろくに飯の準備もしてないままここに連れて来られたんだけど」

悪魔のバニル、アンデッドのウィズ。
そして暗視持ちの俺。
全員、暗闇でも問題なく見えるため、灯りも付けずにダンジョンを進む中。

俺はうんざりとバニルに尋ねた。
時間の感覚が無いが、もう既に随分長くここにいる気がする。

「我輩の見立てでは、地下二十階が最下層の様だな。経過時間はそろそろ半日が過ぎた頃であろうか。食料ならちゃんと我輩が用意してあるから心配ない」

バニルは、背中に背負った風呂敷包みをぽんと叩くと。

「……普通なら、少しずつ少しずつ探索していき、数ヶ月がかりで攻略する規模のダンジョンである。道も罠も全て我輩が見通しているからこそ、こんな短時間でここまで来れている訳であり、そこら辺を良く理解したならば、アレだけでなく他にも色々買ってくれてもよいぞ。……しかし、ここはなかなかに良いダンジョンだな。最下層まで行って、ダンジョンの主を倒し、いっそこの迷宮を乗っ取ってしまおうか」

「だ、駄目ですよバニルさん、ダンジョンは私が作りますから！まだまだお店で助けて貰わないと困りますよ！」

バニルとウィズは、そんな事を言い合いながら、ズンズンと物怖じせずにダンジョンを進んでいく。
バニルのサンダルの音がペタペタと場違いな音を立て、ここが危険なダンジョンだと言う事を忘れてしまいそうになる。

……。

「なあ、ところでお前のその格好、何なんだ？　ずっと聞かないでおこうとは思ってたんだが、やっぱりどうしても気になるんだけど」
「む？　この服か。これはな、旦那を亡くしたマダムが、我輩に使ってくれと貢いできたのだ。一張羅のスーツで近所の溝掃除をして

いたら、動きやすいこの服を、とご近所さんがな。どうだ、似合うか？」

バニルは、自慢そうにステテコと肌シャツ姿を見せびらかしてきた。

一見すると、コンビニにでも行く途中のその辺のオッサンの様だが、仮面のせいで……。

「なんか、場所が場所だけに、レアなモンスターみたい」

今のバニルを冒険者が見かけたら、珍奇なモンスターだと追い掛け回すかもしれない。

「ふむ、この我輩がレアモンスターに見えるか。このコスチュームをくれたマダムには礼を言わねばな」

本人としては、レアモンスター扱いは褒め言葉に聞こえたようだ。

「……バニルさんて、私よりご近所さんに溶け込んでるんですが……。私、長い間あそこに住んでるのに……」

ウィズがしょぼくれる中、前方から唸り声が聞こえてきた。

敵感知にビリビリと感じる、強いモンスターの気配。

「ほう！　こんな所にケルベロスが！　常に温かい温度を保つあやつの毛皮は、冬場とても重宝されるのだ！　ウィズ、絶対に逃がすな！　あれが捕れたなら、一週間は肉を食わせてやろう！」

「ごめんなさい、たまにはタンパク質が食べたいんです！　犬は好きですが、ごめんなさい、ごめんなさ……、ああっ！　逃げないでー！」

――地下十階――

「キシャアアアアア！」

「フハハハハハ、トカゲ風情が生意気な！　今こそ、ドラゴンと悪魔、どちらが強いか……。お、おいウィズ、まだか！　こやつ、ブレス体勢に入ろうとしておる！　押さえ付けている我輩の体が、熱で焦げてきた！」

「だ、だってバニルさん、下位とはいえ、ドラゴン族は強い魔力を秘めてるんですよ、近寄ってかじられたら私でも痛いです！」

「ウィズ、そんな事言ってる場合じゃないって、バニルが！　バニルが食われるー！」

生まれて初めて見る、生きたドラゴン。

これでも下位という事らしいのだが、その大きさはそこらの物置をゆうに越える大きさで、それこそ、牛を常食でもしていそうな……！

「いかーん！　片手を食われた、体の代わりになる様な物も無いダンジョンでは……。このままでは我輩が、食われて無くなってしまう！　ええい仕方ない、ドラゴンの鱗は高値で売れる上に経験値も大量だが、ウィズ！　このドラゴンは諦めるぞ！　魔法で仕留めてくれ！」

「分かりました！　参ります、『カースド・ライトニング』！」

片腕をかじられ、それでもなんとかドラゴンを押し留めるバニル。

そんなバニルの後ろから、ウィズが電撃の魔法を放った。

真っ暗なダンジョンの中に、一条の雷撃が迸る。

青白い雷撃は、ドラゴンの体に黒い穴を開けると、そのまましばらく、バチバチと強烈な閃光を放ち続けた。

やがてスパークが収まり、再び辺りが闇に包まれると、腹に大穴を開けられたドラゴンは重い音を立てて崩れ落ちた。

流石はリッチー、ドラゴン相手に一撃とは。

「すげーな。リッチーは、ドラゴンや悪魔よりも強いのか」

「!?」

「ふふっ、伊達にアンデッドの王なんて言われている訳では……、な、なんですか、止めて下さいバニルさん、かじられた腕を近づけて来ないで下さいよ……！」

苦戦していたドラゴンをアッサリ葬り去られ、バニルが対抗意識でも燃やしたのか、ウィズに嫌がらせをしている。

そんな中、俺は思わず地面にへたり込んだ。

「しかし、今のレベルが二五近く。一戦闘毎にレベルが上がっていくんだが。相変わらずぶっ飛んだレベルアップ速度だけども、これぐらいが限界かな？　そろそろバニルでも苦戦しだしたし、もうこれぐらいで……」

レベルリセットを一度受け、再び上げ直したレベルが早くも二五。

俺の一年は何だったんだというぐらいのレベル上げ速度だ。

ここまでに倒してきたモンスターは、どれもこれもが俺達だけではまず返り討ちに遭う様な大物ばかり。

グリフォンだとかマンティコアだとか、そんなメジャーモンスターのオンパレードだった。

もうどれだけの時間が経ったのか。
先ほど、既に半日が過ぎたとか言っていたのだ。外はもう、夜中を回っている頃だろう。
そろそろ空が明るくなる頃かも知れない。

そんな、俺の言葉に。

「何を言うか。我輩が苦戦しているのは、出来るだけ傷を付けず、なおかつ生きたまま無力化するという制限がある為だ。単に消滅させるだけならば、単身で最下層まで潜ってくれるわ」
バニルが、未だウリウリとウィズに腕を見せびらかしながら言ってきた。
さっさと腕をくっ付けるなりなんなりして欲しい。

「確かに、このままだと流石に苦戦しそうですね。……分かりました。では、こうしましょうか」

ウィズは、言いながらドラゴンの死体に近づくと……。

「……『カースド・ネクロマンシー』！」

気合の声と共に、何かの魔法を死体に放つ。

……俺は、正直舐めていた。

魔王の幹部ってやつを。
そして、リッチーって言う存在を。

駆け出しの街の貧乏店主は、未だ店のエプロン姿のまま……。

「さあ、後何体かドラゴンクラスのモンスターをアンデッド化して……。せっかくです。このダンジョンの最下層を制圧してしまいましょうか」

出来立てのドラゴンゾンビの首に手を置いて、ウィズが言った。

ウィズは、そのドラゴンに向けて、最下層まで行ったら、ちゃんと開放してあげますから……と、申し訳なさそうに呟いている。

「……このダンジョンに来て、俺の中でのウィズへの評価が急上昇してるよ。ウィズって、本当に凄い大魔導師だったんだな」

「そ、そうですか？　わ、私なんてまだまだですから……！　そ、それじゃ行きましょう、早く、行きましょう！」

俺の言葉に、照れた様に慌てるウィズ。

だが……、

「悪い、ちょっと休ませてくれないか。流石に疲れた。ぶっ通しでここまで来たけど、座ったら緊張が解けて、どっと疲れが……」

俺がへたり込んで立てないでいると、バニルが俺の隣に座る。

そして、ダンジョンの床の上に、風呂敷包みを広げだした。

それは、バニルがダンジョン攻略の為に持って来ていた荷物だと思っていたのだが、中身は何かのポーションや日用品みたいな物で一杯だ。

「さあ小僧。疲労回復のポーションに食料品、水に薬に、即席の結界が張れる魔道具など、様々な品を用意してある」

流石は見通す悪魔、なんて気が利く奴だ。

「本日は、特別出張ダンジョン価格！　街の五倍の値段で結構ですよ！　さあ、どうですかお客様！」

流石は見通す悪魔、こんな時こそ足元見やがる。

……なんて奴だ。

２４話（後書き）

長いので分けてしまいました。
今回も説明っぽくてすいません。
前話、今回、次回で、説明回は終わると思います。

元魔王の幹部が魔王退治の手伝いってどうなんですかと言われそうですが、その辺の話は次話で出ますと先に言っときます。
レベルダウン話に関しても、次話でももうちょい触れます。

もっと細かく矛盾ない様に説明したいんですが、説明増やすと物語のテンポが悪くなる問題点。
唯でさえ最近微妙な回が続いているので、極力説明は省きたい感じです。
色々疑問はあるでしょうが、その辺は活動報告とかで答えられたらと思います。

25話（前書き）

最初は他の冒険者視点です。

25話

一体どうしてこうなってしまったのだろう。

「くそっ！　もう追いついて来やがった！　ステラ！　ステラ！！
フラッシュの魔法が込められたスクロール、もう無いのかよ！
もう一度目眩ましを……！」

ギルの泣き声を聞きながら、私は……
「もうないよ！　さっき使ったので最後だから！」
怒鳴りつけるように、同じく泣き声で返した。

「せっかくお宝手に入れたってのに！　ここで終わりなのかよぉ！」
最後尾のゲインが、背中にお宝の入った袋を背負い悔しそうに泣き叫ぶ。

それを聞きながら、なおも走る。
鼻の奥がツンと痛むのに任せ、涙が溢れるのを拭いもせず。
小さなランタンの光で真っ暗なダンジョンの通路の先を照らしながら、数十分前までの自分達の行動を激しく後悔していた。

私達にはまだ、地下十階は早かったんだ……。
九階までの探索は、毎日毎日少しずつマッピングをして、じっくり四ヶ月も掛けて来たのに！
九階のモンスターに苦戦しなかったからって、調子に乗ったのが悪かったんだ……！

まだ攻略者がいないとされているこの最大級のダンジョンは、探索階を一階下に下げるなら、階層の数に四をかけたレベルになるま

で、探索は待つ。
それが、このダンジョンを探索する者にとっての強さの目安だった。

つまり、地下十階を探索するにはレベル四十以上は必要と言う事。
私達の平均レベルは、まだそこに届いていない。

背後に広がる真っ暗な闇の中から、私達を追うモンスターの唸りが聞こえた。
「死にたくない……。死にたくないよお……！」
それを聞き、私のすぐ後ろをひた走る妹が、グスグスと泣き言を言っていた。

この先に行けば、地下九階へ続く階段がある。
そこまで逃げられれば……。
そこまでなんとか辿り着ければ、きっと後ろから追ってくるモンスターからは逃げ切れる……！

地上に自然発生しているモンスターと、ダンジョンに生息しているモンスターは違う。
ダンジョンに生息しているモンスターは、何者かに召喚されたモノがほとんどで、それらは、召喚者がダンジョン内に放出している魔素と呼ばれる物を取り込み生息している。
地上に居るモンスターとは違って、召喚された彼らは魔素が無いとこの世に存在が出来ない。
魔素は地獄の空気だとも、魔力が空気の様になった物だとも言われているが、とにかく、それらはダンジョン最深部の主の部屋から放出される。
当然、深部に行けば行くほど、主の部屋に近いほど魔素は濃い。

強いモンスターほど濃い魔素が無いと活動出来ない。
逆に、弱いモンスターは濃すぎる魔素の下では生きていけない。

だから……。

「ステラ、もう少しだ！　もう少しで、九階への階段がある！　そこまで逃げれば、魔素の薄い上の階層までは、きっとコイツは追っては来れない！　上の階に逃げられれば！　そうすりゃ、俺達はきっと助かる！」

ギルが、自らに言い聞かせるかの様に、私にそんな事を言ってくる。

あのモンスターに奇襲を受けた時、ダンジョン探索に最も必要な、一時的に結界を張る為の魔道具を破壊されてしまった。
更には、食料の入った荷物も。

それはつまり、このダンジョンの中で休憩が取れなくなると言う事。
これで魔力の回復も出来なくなった。
このモンスターから逃げ切れても、恐らく、無事に地上まで帰れる可能性は低いだろう。
それでも、あのおぞましいモンスターに殺されるよりはずっとマシだ……！

このまま上の階層に上がれれば、魔素が薄い階層に行くのを嫌がり、きっとあのモンスターは私達を追い掛けるのを……！

「うあっ！」

最後尾を走っていたゲインの悲鳴で我に返る。

悲鳴の方へ振り向くと、ゲインは背負っていた荷物袋から、拾った宝をこぼしていた。
こんな時に何やってんのと叫びたくなったが、そうではなかった。
ソレがゲインの背中を引っ掻いたのだ。
形容しがたい姿のそいつが。

ゲインの声に、皆も足を止めていた。
そして、全員がゲインの背後に視線を向ける。
真っ暗な闇の中、何かがズルッ、ズルッと引きずられる音が聞こえてきた。
地を這っているくせに、異様に早いモンスター。
そいつがランタンの光の下に姿を現そうとする前に……。

「来やがったな！　仕方ない、ステラ！　魔法の用意をしろ！　一発かまして怯ませて、その隙に……」

ギルのその言葉に混じり。

ペタッ、ペタッ……と何かの足音が、今後は私達の前から聞こえてきた。
その音を聞き、ギルが言い掛けていた言葉を飲み込み、絶望の表情を浮かべ。
他の二人も同じ様な表情で、もうダメだと呟いた。

恐らく、私も同じ様な顔をしていただろう。
……挟み撃ちにされてしまった。
神様、神様……。
どうか、前から来るモンスターが、せめて、獲物を嬲る性質を持っていませんよう……！

「へいらっしゃい！　ウィズ魔道具店、ダンジョン出張店です！」

……。

「「「「えっ」」」」

あまりにも場違いで、あまりにも唐突なその言葉に、私達四人は固まった。

前から現れたのは仮面の男。

なんというか。

その男はなんというか、もう、これなんなのと言う奇抜で場違いな格好をしていた。

ランタンに照らされるその服装は、白い肌シャツにステテコ、サンダル。

中年のおじさんが、そこらにちょっと買い物にでも行くような。

「ここで会ったのもなにかの縁！　さあ、ダンジョンにおいて役立つ品々が……。……やや？」

その仮面の男は、背負っていた風呂敷を下ろそうとして、私達の背後を見て声を上げる。

その視線で、私は背後から迫っていたモノの事を思い出した。

「ああっ、あなたも逃げて！　アイツが、アイツが追って来て……！」

「ネロイド！　地獄ネロイドではないか！　なぜこんな所に地獄ネロイドが！　おお、よしよし。ほれ、こっちに来るがいい」

……地獄ネロイド？

突然現れた仮面の男は、私の警告を遮り、私達の背後から姿を表したソレ……。

その地獄ネロイドとやらに、物怖じもせずに近付いた。

地獄ネロイドと呼ばれた、私達を追っていた形容しがたいその生き物は、仮面の男が差し出した左手に、まるで甘えるように……。

ゴリッ。

「きゃあああっ！　手がっ！　あ、あなた、手、手が……っ！」

「こっ、こらっ！　我輩の手をかじるでない！　それは食べられない物だ、吐き出して我輩に返すがいい！　ほら、ペッと！　ほら、早く……、早……。……『バニル式殺人光線』！」

腕をかじられていた仮面の男は、叫ぶと同時、右腕から眩い光を放つ。

放たれた光は地獄ネロイドに突き刺さると、それを爆裂四散させた。

……私達が苦戦したあのモンスターをいとも容易く葬り去った仮面の男は、かじられて無くなった腕の先を辺りに散ったネロイドの方に向けると、まるで時間を逆に進めるかの様に、ネロイドの残骸からその腕を再生させた。

その行動と強さで、ひと目で人間ではないと分かる。

しかし……。

「なんて躾のなっていないネロイドか。きっと野良であるな。しかし、なぜこんな所に地獄ネロイドがいたのか……。地獄にしかいな

い愛玩生物なのだが……。このダンジョンの魔素が強い所為で、うっかり地獄と繋がり、こちらに来てしまったのだろうか？」

そんな事を言いながら、ふうむと悩む仮面の男。

少なくとも、人間ではないこの男に命を助けられた事は間違いない様だ。

未だ展開に付いていけていない三人に代わり、礼の一つも言うべきだろう。

だが、仮面の男は私が礼を言う前に背中の風呂敷を下ろすと、

「おっと。まあ、野良ネロイドの事はどうでも良い。お客さん、ダンジョンで重宝する品々が沢山ありますよ！　お値段はダンジョン価格となっておりますが、さあ、いらさいいらさい！」

言いながら、その風呂敷の中身を床に広げた。

「結界石！　使い捨ての結界石があるじゃないか！　すまない、これを譲ってくれ！　ダンジョン価格って幾らだ!?」

「薬とか、ポーションも……！　た、助かった……！　九階に登る階段もすぐそこだし、これだけ揃っていれば、無事に地上まで帰れるよ！」

「食い物まであるじゃねえか！　さっきのヤツに食い物が入った荷物も食われてさあ……！　助かった……、助かった……！」

仲間達が、仮面の男が広げた風呂敷の中身の品々を、あれもこれもと次々に買っていく。

なんだろう、この人は。

「ありがとうございます、ありがとうございます！　フハハハ、当店始まって以来の大繁盛ではなかろうか！　今後もダンジョン内への出店を考えるべきか！」

……なんなんだろう、この人は。

商品が売れて、大喜びで笑うこの人は。

颯爽と現れて、私達の窮地を救ってくれたこの人は。

まるで……

「……神様……」

「幾らお客様とは言え、我輩を神呼ばわりとはなんと無礼な」

「あっ！　す、すいません……！」

神様呼ばわりをしたら怒られてしまった。

自分なんかと神様を同一視するなと言う事だろう。

この人は、きっと信心深い方なのだ。

「まさかの完売、ありがとうございますお客様」

「いや、こ、こちらこそ……！　あんたが居なかったら全滅してたと思うしな。これらの品も、本当に助かったよ、恩に着る！」

商品が売れて満足そうにしている仮面の男に、ギルが慌ててお礼を言った。

仮面の男は、立ち上がると。

「いえいえ、お客様がご無事で何よりである。では、我輩はこれで！　毎度どうもー！」

そう言って、そのまま灯りも持たずに、ペタペタとサンダルの音を響かせながら暗闇の中へと消えていった。

残された私達はしばらく無言で立ち尽くし、やがて誰かが呟いた。

「今のって……。……結局なんだったんだろうな……」

名前も告げずに去っていったあの人は、ダンジョンの妖精か何かだったのだろうか……？
いや、やっぱり私にとっては、あの人は……！

「あのレアモンスターは、こんなダンジョンの中を何の目的でほっつき歩いてんだ。もう飯も食べたし、そろそろ行きたいんだけど」
「今のバニルさんの珍妙な格好だと、本当にレアモンスターって感じですしね。なぜかあの服がお気に入りみたいで……。冒険者の方に出くわして、襲われてたりしなければいいんですが……」
俺の食事休憩中、バニルがどこかへ行ってしまった。
一応簡易的な結界を張っている中なので安心して休めるが、それでもダンジョンの中はやはり怖い。
あの珍妙なレアモンスターにもそばに居て欲しい所だ。
ウィズが、自らが生み出したドラゴンゾンビの顎を撫でながら、
「でも本当に、一体どこ行っちゃったんでしょうね。他のモンスターも集めてしまうかもしれませんが、ちょっと呼んでみましょう……か……？」
言い掛けた言葉を尻すぼみにさせていった。
見れば、ウィズは通路の前の方をじっと見ていた。
不思議に思い、俺もそちらを見ると。
「…………モンスター……だよ……なあ……？」

「でしょうねえ……。こんなダンジョンの奥深くに、あんな女の子がいる訳がないですから……」

前に続く通路の曲がり角から、金髪の女の子がひょっこりと顔を覗かせ、こちらをうかがっている。

こんなダンジョンにいる女の子が、普通の子な訳がない。

……だが。

「おかしいな、敵感知に反応がないんだけど。敵意は無いのかな？　でも、年齢的に冒険者にも見えないし」

「敵意が無いんですか？　というか、あの子は何のモンスターなのでしょうか。ゴーストでも無いですし、ドッペルゲンガーなら、あんな風に様子をうかがうなんて行為はしない筈なんですが……」

敵感知スキルに反応しない女の子。

俺とウィズは、その子から警戒を解くこと無く、ヒソヒソと囁き交わす。

と、女の子が小首を傾げた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん。二人は、悪い冒険者？　それとも、良い冒険者？」

その言葉に、俺とウィズは顔を見合わせ。

「……どちらかと言えば、良い冒険者かな」

「私は、冒険者ではありませんが悪いお姉さんではないと思いますよ」

離れた位置から様子をうかがう女の子に向けて、未だ警戒は解かないままに返事を返す。

すると、女の子はにこっと笑顔を見せ。

「良かった。私の名前はアマリリス！　ねえ、私とお話しない？　ずっとこのダンジョンを彷徨っていて、寂しかったの」

はにかみながら、そんな事を……。

「……お話するのはいいけど、アマリリスはなぜこんなダンジョンに一人でいるんだ？　そもそも……。……アマリリスは人間なのか？」

俺は恐る恐るアマリリスに尋ねる。

すると、アマリリスは表情を少しだけ悲しそうに歪め。

「……今は、人間じゃないよ。私を育ててくれたおじさんが魔法使いでね？　魔法の研究で、私をキメラにしたの。それでね、それでね。私はちょっと街には置いておけない姿になっちゃったから、このダンジョンに隠れてなさい、って。私を直す研究が済んだら、また迎えに来るから、って。だから、それまでこのダンジョンで隠れてるの」

そんな、とてつもなく重い事を……。

思わず、俺とウィズは静まり返る。

「えっと……。そのおじさんとはどういう関係なの？　お父さんやお母さんはどこに行ったの？」

「パパとママは死んじゃった。おじさんはね、私を買ったんだって言ってた。ご飯を食べさせてくれる、とっても良い人なんだ！」

……このダンジョンに隠れてなさいと言ったその魔法使いのおじさんとやらは、もうこの子を助けるつもりは無いのだろう。

両親を亡くしたこの子は魔法実験用に買われ、そして実験後、このダンジョンに捨てられたのだ。

なんとも言えない重苦しい雰囲気の中。

「……それじゃあ、お姉ちゃんが直してあげます！　お姉ちゃんは、こう見えて凄い魔法使いなんですよ？　昔の知り合いにキメラの人だって居ましたし、きっと直せますから！」

ウィズが、唐突にそんな事を言い、微笑んだ。

……すげえ。今まで、リッチーを舐めてて本当に悪かった。

「ほ、本当？　本当に、私を元に戻してくれるの？」

「ええ、本当です。ですから、怖がらないでこっちに来て？　このドラゴンゾンビは、お姉ちゃんのお友達ですから」

ウィズの優しげな言葉に、それでもアマリリスは迷った様子で……。

「でもお姉ちゃん、私の体を見ても怖がらない？　気持ち悪く思わない？」

そんな事を、不安そうにモジモジと呟く。

「大丈夫よ。お姉ちゃんは、お化けとだってお友達だから。ほら、心配しないで、こっち……」

そこまで言い掛けたウィズは。

通路の角から現れたアマリリスを見て、絶句した。

俺はと言えば、ウィズの隣で失禁しそうになりながらツバを飲み込む。

アマリリスの頭は、蜘蛛の体から生えていた。

アマリリスが、ワシャワシャと蜘蛛の足を動かして、意外な速さでこちらに迫る。
「お姉ちゃーん！」

「ふわーっ！」
「ままま、待って！　あああ、アマリリスちゃん、ちょっと待って！　お姉ちゃん落ち着くから、ちょっとだけ待ってね！」
俺が悲鳴を上げながらウィズの背に隠れる中、ウィズが涙目でアマリリスに呼びかけ、
「お姉ちゃんどうしたの？　お姉ちゃんどうしたの？　言ったじゃない！　怖がらないって言ってくれたじゃない！　直してくれるって言ったじゃない！　言ったじゃないっ！」
アマリリスが、そんな事を叫びながら髪を振り乱し、首をカクカクさせながらこちらに迫る。

怖い、何このホラー！

「お嬢ちゃん、落ち着いて！　ほら、お兄ちゃんがアメをあげよう！」
「だだだだ大丈夫よお姉ちゃんは別に怖がってなんていないから直してあげる直してあげるからお願いちょっとだけ落ち着かせてねえ待って待ってくださいあああああバニルさんバニルさんバニルさあああああん！」
「あああああ子供は好きだけどもお嬢ちゃんちょっと待ってくれえええええええ！」

俺とウィズが、震え上がりながら涙目で抱き合う中。

「何を騒いでおるのだ騒々しい。……やや？　そこにいるのはアマリリス殿か？」

俺達の後ろから聞こえてきたバニルの声。
それを聞き、こちらに迫っていたアマリリスが動きを止めた。

「おや？　もしや、その美しい仮面はバニル様？　こんなダンジョンの奥深くで、なんとも奇遇な事ですね？」

……？
俺とウィズは涙を浮かべて抱き合いながら、恐る恐るバニルを振り向く。

「アマリリス殿は、また趣味の良い格好をしておられるな。恐怖の悪感情を美味しく頂いているところ悪いのだが、この二人は我輩の連れでな」
「なんと、それは失礼致しました。いや、ステスキーと言う名の、わたくしのペットの地獄ネロイドが脱走しましてね？　追いかけてみたら、魔素の濃いこのダンジョンと、地獄の一部が繋がっておりまして……。それで、わたくしもこちらに渡ってステスキーを探していたら、このお二方を見つけたので、ちょっと悪感情を馳走になろうかと……」

……おい待て。

「なに？　このアマリリスってキメラの子、ひょっとして悪魔なの？　さっきの魔法の実験台にされたキメラって話は？」
「ああ、あんなモノは大嘘でございますよ。わたくし、恐怖の悪感情が大好物でして、好んでこの格好を取っており……。おっと、その苛立ちと怒りの悪感情はバニル様のお好みですね、わたくしは結構ですよ？」

……悪魔、嫌い。

「では、わたくしはこれにて。ペットのステスキーを探しに行かねば……。おお、そうだバニル様！　貴方様の見通す力で、わたくしのペットの居場所を」
「おっと、我輩達はそろそろ行かねばならぬ。ではなアマリリス殿！　また、地獄で会おうか！」
「……は、はあ……」

バニルの素気ない返事に、アマリリスは俺達に一礼すると、蜘蛛の体をワシャワシャ動かし、通路の奥へと去っていった。
「うっ……。ううっ……。ぐすっ……。改造されたキメラじゃなくて、良かったんですけど……。良かったんですけども、釈然としないです……」
気持ちは凄く分かる。
と言うか、思わずチビリかけた。

「いつまでメソメソしているのか。ほれ、二人共そろそろ行くぞ？　フハハハハ、そんな事より喜べウィズ！　小僧が買わなかった他の売れ残りが全て掃けたぞ！　今後もたまに、ダンジョンに行商に来てくれようか！」

「……私、悪魔族がちょっと嫌いになりました……」
「!?　まて、あやつ一人の為に種族全体を推し量るのはどうかと思うのだが」

――地下十二階――

「バニルさん、ちょっとだけ！　ちょっとだけですから、ちょっとだけですからっ！」
「止めろ！　悪魔は魔力が力の源であり存在の全てなのだ！　こっ、こらっ！　ドレインしようとするな、魔力回復ならば、次に出会ったモンスターから吸えばいいではないか！」

「ダンジョンのモンスターの魔力は、魔素を多く吸っているからか、なんだか重たくて胃に貯まる感じの魔力なんですよ！　いいじゃないですか少しぐらい！　悪魔の持つ魔力は最上級の質の魔力でしょう？　ちょっとだけ！　先っぽだけでいいですから！」
「や、止めろ、我輩の仮面を触るな！　と言うか、どういう事だ？　リッチーである汝が早々に魔力切れを起こすとは、先程からこのモンスターの量はおかしい。小僧のレベル上げには都合が良いが、これほどまでにエンカウントするとは……」

ウィズとバニルは揉み合う中、俺は周囲のモンスターを警戒しつつ、

「そう言えば、随分とモンスターに遭うよな。地上とは比べ物にならないぐらいに。俺も、一日でこれだけレベルが上がるとは思わなかったんだが」

既に俺のレベルは二回リセットされ、三周目のレベル上げに突入していた。

地上では、繁殖の時期の、普段より数の多いカエルを五匹討伐するのでも半日ぐらいはかかったものだが、このダンジョンでのモンスターとの遭遇率は確かにおかしい。

と、バニルからドレインタッチで魔力を吸おうとしていたウィズが、自慢そうに首から下げていたロザリオを見せびらかしてきた。

「それは、きっとこのロザリオのお陰ですよ！　これは、素敵な出会いがあると言われている魔法のロザリオなんですが、ダンジョン内のモンスターまで引き寄せていたみたい……あああああっ、バニルさん止めて！　返して下さい、捨てようとしないで下さい！」

本当に、この人の仕入れて来る物はどれもこれもが……。

「全く、おかしいと思っていれば……！　次に出会ったモンスターを我輩が押さえ付けるから、そいつから魔力を吸うがいい！　……と言うか、そんなに出会いが欲しいのか？　我輩の友人に、少々頭が足りないが整った顔立ちの悪魔が居るぞ。愛情深い奴でな。異世界から来た悪魔なのだが、紹介してやろうか」

ロザリオを取り返そうとしていたウィズが、それを聞いて満更でもなさそうにソワソワする。

「……愛情深い、整った顔立ちの方ですか……。いえ、愛情深い優しい方なら、別に顔はあまり気にしないんですけれども……。頭が足りないって、どの位ですか？　計算が苦手だとか？」
「後頭部がすっぽり無い」
「嫌ですよそんな人！　物理的に頭が足りないんですか！　って言うか、よく考えたら悪魔に性別は無いじゃないですか！」

大騒ぎする二人を見ていると、ここが危険なダンジョン内だと言う事を忘れそうになるな……。

――地下十五階――

もうどれだけの時間が過ぎたのだろう。
現在で二度目の休憩を取っているのだが、常に緊張状態にあるダンジョンでは時間の経過が分からない。
バニルから買った疲労回復ポーションを飲んで、疲れこそはあまり感じないが、頭がぼーっとしてきていた。

「む？　そろそろ眠くなってきたか？　無理もない、地上ではもう丸一日以上経っている。ほれ、このポーションを飲むがいい、眠気が取れるぞ？　スカッと一発覚醒ポーションである」
「えっ！　バニルさん、それ持って来たんですか！？　それはだって、副作用がむぐっ！」

何かを言い掛けたウィズがバニルに口を塞がれ、それを見て、俺は手渡されたポーションを飲むのを躊躇した。

「……眠気を飛ばす覚醒ポーションって……、これ、何で出来てるんだ？　中毒性とか無いよな？」

「そんなモノはない。運が良い貴様には副作用はまず無いであろう。……うむ、見える、見えるぞ、ポーションを飲んでも平気そうな貴様の未来が」

「お前、さっきみたいに、本当に無事だったのかみたいなのはドッキリはもうやるなよ」

疑心暗鬼になりながらも、俺はダンジョンの冷たい床に座ったまま、ちびちびとポーションに口を付けた。

「かなりのスキルポイントが稼げたな。もうそろそろ帰ってもいいんじゃないか？　レベル上げが目的であって、ダンジョン攻略が目的じゃないしな」

と、そんな俺の言葉に、ウィズがバニルの手を引き剥がし。

「とんでもない！　ここまで来たからには最後まで攻略しちゃいましょう！　こういったダンジョンの最深部、主がいる部屋なんかには、大概財宝と共に強力な装備が眠っている事が多いんです！　魔王さんと戦うなら、きっとそれらが役立つはずですよ？」

……ま、魔王か……。

「いやまあ、本格的に魔王と戦うかはまだ迷ってるんだけどな。……ていうか、二人は魔王の知り合いなんだろ？　俺達に魔王が倒されちゃったりしてもいいものなのか？」

一応この二人は魔王の幹部をやっていた訳で、それなりの親交もあったと思うのだが。

だが、ウィズとバニルは顔を見合わせ。

「魔王は、最後には倒されるのも仕事の内ですしね？」

「であるな。ネチネチと人類を苦しめ、最後は勇敢な冒険者と派手に戦い、派手に散る。それが魔王と言うものだ。それに、あやつも随分な歳だろう。魔王らしい派手な最後を飾り、そろそろ娘に魔王の座を引き渡したいのではなかろうか」

魔族の考える事ってのは、よく分からん。

そう言えばこの悪魔も、ダンジョンを造るのが最終目標ではなく、冒険者に討ち取られて滅び逝く中、最後に、自分を倒した冒険者達の最高に悔しがる悪感情を食べたいとか、そんなどうしようもない夢を持っていたっけ。

彼らには、彼らなりの生き様や美学みたいな物があるのかも知れない。

本気を出せば、それこそ世界を支配できそうなほどの絶大な力を持ちながら、冒険者になるでもなく、靴屋や服屋やニートをしているアークウィザードの集団もいるのだ。

この世界の住人は変わり者が多いのは知ってはいたが……。

「魔王ってのは歳なのか。歳とは言っても、魔王ってからには魔王軍の中で一番お強いんでしょう？　……でもひょっとして、俺でもなんとかなっちゃったりする位、もうヨボヨボしてたりとか？」

「いいや、一番強いという訳でもないぞ。娘の方が、既に力は上回っているのではなかろうか。貴様にどうにか出来るかは分からぬが、歳とは言っても素手でオーガの頭を握り潰せる程度には元気である

な」

ですよね。

そんなに甘くは無いですよね。

「しかし、お前らの世界では力が全てだと思ってたんだけど。単純に、一番強い奴が魔王な！　って話になるのかと思ってたよ」

「我々を脳筋だとでも思っておるのか。それとも、貴様の居た国の指導者は一番強い輩がトップに立っておったのか？　貴様らの所は知らぬが、代々の魔王は……。……まず、癖のある魔王軍幹部をまとめられるカリスマ性、配下に舐められない程度の力。後は、それなりに知恵が回る事だな。特にこの、癖のある幹部連中をまとめられるカリスマ性、と言うヤツが最も重要だ」

「お前やウィズを見てると、まとめられてなかったんじゃないかって思うんだけど」

自由奔放なコイツを見てると、案外魔王も苦労していたのかもしれないと思えてくる。

バニルが、休憩はもう良いか？　と言いながら立ち上がり。

「何にせよ、貧弱な貴様でも少しはマシに戦える装備があると良いものだな。我輩としては、金になる財宝などが良いのだが！　待っておれよダンジョンの主よ、お宝全てぶん盗ってくれるわ！　フハハハハ！」

コイツといると、なんか、冒険者稼業の最中ってよりも、押し込み強盗の気分になってきた。

「そう言えば、カズマさんはどんなスキルを取るかは考えているんですか？　このダンジョンから帰る際には、私がテレポートを教え

てあげますよ」

テレポート！

テレポートは欲しいな、使い方一つで凄く色々捗りそうだ。

そう、例えば……

「テレポートや光の屈折魔法など、魔法を悪用した犯罪は、通常の罪よりも遥かに重い罰が課せられるぞ」

「……ッ！？　べべべ、別に俺まだ何も言ってないし！？　ただ、テレポートがあれば色々捗りそうだなーって思っただけだから！ほら、テレポート一つ覚えとけば、魔王の城に万一乗り込んだ際に、ピンチになったら逃げられるだろ！？」

「……テレポートで脱出を考えているのなら、城を覆っている結界をなんとかせねばならんぞ？　……それはそうと、我輩のスキルを覚える気はないか？　殺人光線や目ビームがあるぞ」

「……殺人光線って、人間の俺が撃ったら……」

「もちろん死ぬ。だが考えてもみろ、必殺技を放つと同時に撃った本人が突然死ぬのだ。相手もビックリである。これ以上に体を張った一発芸はそうそう無いのではなかろうか」

「俺はどっかの女神と違って、芸に魂捧げてる訳じゃないんだよ！」

――地下十八階――

「『バニル式殺人光線』！　『バニル式殺人光線』！　『バニル式……』……ええい、数が多い！　ウィズ、なんとかならんか！　もう面倒臭い、爆裂魔法でふっ飛ばしてしまえ！」
「だ、ダメですよこんな所で爆裂魔法だなんて！　ダンジョンが崩れてきたら……。……あっ！　きゃーっ、私が作ったドラゴンゾンビが、ミノタウロスの群れにたかられてる！」
「うおおお、おい、こっち来てる！　モンスターがこっちに流れてきてるってえええええ！」
いきなりの大ピンチだ。

階段を降りるとそこは、モンスターハウスだった。
バニルとウィズだけでは押さえ切れず、俺の方にも一体のミノタウロスが……って、
「ブモオォォォッ！」
「ひょっ！」

慌てて頭を下げると、その数センチ上をミノタウロスの斧が通り過ぎた。
あとほんのちょっと遅かったら首が飛んでいただろう。

アクアがいない今、死んだらアウトだ。
やばい、ダンジョン怖い、ていうか、モンスター怖い！
心臓がバクバクいってる！

そうだよな、これが本来の戦闘で、普通は死んだら終わりなのだ。
今更になってアクアの有り難みを痛感する。
アイツに会ったら、ちょっとだけ優しくしてやろう！

バニルやウィズも、大量のモンスターを制圧するので手一杯の様だ。

自分の身長の数倍はあろう牛頭の巨人。
それを見上げながら、逃げ腰で剣を抜く。
「ちくしょー、こんな時にアクアの有り難みが分かるなんて！　ここで死んでたまるかよ、アクアを連れ戻したら面白おかしく退廃的な生活送るんだ！　昼間から酒飲んでゴロゴロしたり夜遊びしたり、皆でどこかに旅行に行ったり！　俺、まだほとんどこの世界を旅してねーぞ、冒険者なのに！」

そんな俺に、ウィズが叫ぶ。
「デレた！　聞きましたかバニルさん、素直じゃないカズマさんがデレました！　やだもう、ピンチの時に自分の本当の気持ちに気づくだなんて、なんてロマンチックあうっ！？」
訳の分からない事を叫んでクネクネしていたウィズが、ミノタウロスの一匹に斧で側頭部を強打された。

「ちょっ！？　ウィズ！？」

ミノタウロスと対峙したまま、ウィズの方をチラ見する。
弾かれた様に吹き飛ばされたウィズだが、何事も無かったかのようにムクリと起き上がり。
「これは絶対にカズマさんとアクア様を再会させて、二人の愛を確かめさせないといけませんね！　バニルさん、大量の魔力を使いますので、この戦闘の後で魔力の補充をお願いしますね！」

あきらかに何か勘違いしているウィズは、周りのミノタウロスにたかられ、攻撃を受けても気にせず、何かの魔法を唱え出した。
リッチーには魔力の篭っていない攻撃は効かないらしいが、傍から見てると凄い光景だ。
俺の傍では三体のドラゴンゾンビがミノタウロス達と真っ向から戦っている。

バニルはと言えば、倒したミノタウロスの血で床に何かを描き……

「ブモオオオオオオ！」

「こ、こいやあああああ！」

対峙していたミノタウロスが、鳴き声を上げて斧を振り上げた。

俺は、ミノタウロスの足元にすかさず飛び込み、街で買ったロングソードで斬りつける。

街で売っている中でも最高級品を使ったにも関わらず、元が貧弱な俺の攻撃は、浅く、ミノタウロスの固い皮膚を斬っただけだった。

だがこれでいい。

麻痺か昏睡の状態異常が発動すれば……って、ピンピンしとる！

ヤバイ、ハズレを引いた！

ミノタウロスが、振り上げた斧を……、

「『カーズド・ペトリファクション』！」

振り下ろす事は無く。

ウィズが唱えた魔法の効果か、俺と対峙していたミノタウロスはその体を石へと変えられた。

見れば、ウィズの魔法は俺の目の前にいたミノタウロスだけでなく、周囲にいた他のモンスターをも巻き込んで、その多くを石へと変えていた。

「フハハハハハハ、ウィズ、やるではないか！　では、我輩も……！　地獄の公爵バニルが命ず！　さあ、地獄より来たれ我が眷属よ！」

バニルは、哄笑を上げながら、ミノタウロスの血で描いた足元の魔法陣に手を置くと……。

手を置かれた魔法陣は、輝き、そして光を放ち。
やがて光が収まる頃には、これこそが悪魔とでも言うような、鬼の体躯にコウモリの様な翼を持った連中が所狭しと並んでいた。

突然現れた大量の悪魔達の姿に、ミノタウロスを筆頭に、その場のモンスター達が怯み逃げ惑う。
俺は、大悪魔の本気を目の当たりにし、軽い恐怖を……。

「なんですかバニル様。困りますよ、クソ忙しい中いきなり召喚されては……」
「そうですよ、領地を放り出して地上で遊び呆けてるバニル様の代わりに、俺達必死で働いてるんですから」
「ていうかバニル様、なんですかその格好は。地獄の公爵の格好では……」
口々に不満を垂れる悪魔達。

悪魔達は皆、おどろおどろしい姿なのだが。
……俺はちっとも恐怖を抱かなかった。

数多の悪魔、そしてアンデッドやゴーストの集団を引き連れて、ダンジョン内を、探索、ではなく。
もはや、進軍の様相で突き進む。

現れるのは、既に俺が剣を振るってもどうこう出来るクラスのモンスターではなく。
それこそ、これだけの大所帯に囲まれていなければ、一目見ただけで失禁する様な大物ばかりが現れた。
それらをウィズが次々とアンデッドに変えて行き。
やがて、俺達が到達したのは……。

――地下二十階――

これまでの様相とは趣の異なるその階層は、壁のあちこちが淡く光っていた。
壁に魔法が掛けられているのか、それとも、光りゴケでも植えられているのか。

この階層に来てからは、不思議とモンスターの気配は無い。
このダンジョンの主以外には、この階層への立ち入りが禁じられているのかもしれない。

俺達は、ダンジョンの最深部である主の部屋の前に立つ。
主の部屋のドアは、まるでゲームのラスボスの部屋の様な、仰々しくも禍々しい装飾が施されていた。
この先に、このダンジョンの主がいるのだ。
俺はバニルやウィズ達と頷き合うと、そのドアを押し開ける。

そこには……。

「ほう……。よもや、ここまで到達する者が現れようとは……！
我がダンジョンを攻略し、ここまで来れた事は褒めて遣わそう。さあ、ここまで来た汝らの力！　アンデッドの王！　永遠の命を持つ存在！　ヴァンパイアの真祖にして、千年の時を経たこの……
……！　……この……。……」

主の部屋の中央に、仰々しい王座が置かれている。
そこに悠然と佇んでいたダンジョンの主の口上が、次第に尻すぼみになって消えていった。
俺の後ろに並ぶ面々を見たからだろう。

「あらあらうふふ、いつからヴァンパイアがアンデッドの王になったのでしょうか。本当に、ここまで来るのに苦労しましたよー。うふふふふ、あはははははは！」
ここに来るまでに大量の魔法を連発し、嫌々ながら数多のモンスターから魔力を吸収してきたウィズが、目に涙を浮かべて乾いた声で笑いを上げる。

「フハハハハハ！　フハハハハハハ！　フハハハハハッ！
いやいや全く、よくもまあこれだけ大仰なダンジョンを造ってくれたものだな！　たかだか千年程度生きたひよっ子が、随分とまあ大きく出たものだ！　フハハハハハハハハハハハ！」
同じく、ここに来るまでに大量の魔力を使い、ひたすら光線を放ってきたバニルが、ゲタゲタと笑いを上げた。

俺の前で固まっていたダンジョンの主は……。

「……あの、今お茶淹れますから、ま、まずはご用件から伺いましょう……か……？」

泣きそうな顔で、必死で牙を覗かせて作り笑いを浮かべて言った。

き、気の毒に……。

26話

「フハハハハハ！　フハハハハハハハ！」
「あっ！　なんでしょうかこの強い魔力は！　伝説級！　これは伝説級の力を持つ魔道具ですね！」

ダンジョンの主の部屋の奥で、バニルとウィズが興奮気味に宝物を漁っていた。
それを、俺とヴァンパイアはお茶を啜りながら傍観していた。
「その……。俺の連れがすいませんね」
「いいえ、こちらこそ、ヴァンパイアみたいなボウフラ並の害虫風情が、こんな大層なダンジョンを構えていてすいませんでした。皆様が引き上げた後は、田舎に帰ってトマトでも育てながら細々と生きていこうかと思っております」

田舎でトマト栽培をするヴァンパイアの真祖か。
日光が苦手なヴァンパイアが農作業に勤しむってのも凄い話だが、まあ――
「そうだな。それがいいのかも知れないな。そうすりゃ、こんな目にも遭わないで済むだろうしな」
「ええ、こんな恐ろしい思いをするぐらいなら隠居してのんびり暮らす方を選びますよ。千年生きてきて、百鬼夜行も真っ青な、悪魔やアンデッドの大群に囲まれるだなんて思いもしませんでしたよ。しかも、私と同格の最上位アンデッドのリッチーに、私よりも遥かに長く存在している大悪魔のオマケ付きです。滅ぼされなかっただけで良しとしますよ」

そう言うと、千年の時を経てきたヴァンパイアの真祖は、達観したかの様にバニル達を眺める。

「フハハハハハハ！　何という金銀財宝！　小僧が引き取ってくれるアレの売上とこの財宝を元手に、大掛かりな商売でも始めてくれようか！　そうだ、カジノだ！　ウィズ、この財宝で巨大なカジノを作るぞ！」

「あああ、見て下さい、見て下さいバニルさん、この魔力に溢れた一品を！　効果は分かりませんが、きっと世界を引っ繰り返す級の力が秘められているはず……！」

お宝を漁る物欲に塗れた二人より、上品にお茶を啜りながらくつろぐヴァンパイアの方が、何だか大物モンスター臭がするのはなぜだろうか。

ヴァンパイアが降伏した事により、既にドラゴンゾンビ達は成仏させられ、バニルの部下達は帰らされている。

俺とヴァンパイアが世間話に花を咲かせている中、バニル達は、降伏の代わりにとヴァンパイアが差し出してきた財宝の数々を、せっせと風呂敷に包んでいた。

「やや！　これはいかん、いかんぞ！　財宝の量が多すぎる、これでは全て持ち帰れんではないか！」

「あっ！　困りましたねバニルさん、どうしましょうか。ここにある品々は、どれもこれもが強い魔力を感じます。出来れば何とか持って帰りたいですね」

二人がそんな事を言いながら、ヴァンパイアの方をじっと見た。

お、お前ら、貯め込んだ財宝を強奪するだけじゃ飽き足らず、それを運ぶのまで手伝えってのか。

「今からウィズにテレポートを教えてもらって、俺がこのダンジョンの最下層を転送先の一つに登録するから、それで我慢してくれよ」

俺の言葉に満足したのか、バニルとウィズは何かを持ってこちらにやって来た。

二人は、一振りの剣と漆黒の全身鎧を持っている。

「ほれ小僧。これを持って行くがいい。この財宝の中で、恐らく最も強力な魔剣である。売り飛ばせば一財産だが、今は貴様が使う方が良いだろう」
「この鎧は、私の見立てによると相当な業物ですよ。強い魔力も感じますから、これを着ければ魔王さんのお城へ行く道中でも、問題ないでしょう」
二人はそんな事を言いながら、恐らく凄まじい値が付くだろうその装備を、惜しげも無く俺に渡してくれた。
何だかんだ言いながら、俺の身を案じてくれているのか。
ほんの少しだけ照れ臭くなりながら、俺は鎧を着ようと――
「……重くて動けないんですけど」
篭手を一つはめただけで、俺はその場から動けなくなった。
いや、なにコレおかしい。
貧弱な最弱職とはいえ、このダンジョンで何度もリセットして鍛えてもらった結果、今のレベルは三十台にまで達している。
筋力などもそこそこ上がっているはずなのだが……。
「ああ、その鎧はクルセイダー限定装備ですよ。ついでに言うなら、そちらの魔剣もソードマスターにしか扱えません」
ヴァンパイアがそんな事を。
限定装備ってなんだ。
最弱職は伝説級の装備を身に付ける事も許されないってか？
「あの、冒険者用の強力な装備なんてありませんかね？」
「す、すいません、冒険者なんて誰もなりたがらない職業に合わせ、強力な武器や防具を作るなんて職人は、いないもので……。少なくとも、私はそんな装備は保有してはおりません……」

そのやり取りを聞いて、バニルがブハッと吹き出した。

「フハハハハハハ！　フハハハハハハハッ！　どこまでも英雄になれぬ小僧よ、良いではないか、それこそが貴様の持ち味だ！　貧弱な装備と、付け焼刃で覚えた数多のスキル！　それらを携えて魔王の奴と渡り合ってきたならば、大英雄と呼ばれる存在になれるだろう！　見える、見えるぞ！　貴様が後世に、ハーレム王だとか最強の最弱職だとか愉快な呼び名を付けられる未来がな！　フワーッハッハッハッ！」

街に帰って使えるスキルを覚えた際には、コイツに真っ先に叩き込んでやりたい。

「ちくしょう、なんだよ。あ、でもクルセイダー装備か。なんか真っ黒で禍々しい鎧だけど、ダクネスへのお土産として持っていくか。魔法使いの杖とかは無いかな？」

「魔法使い装備はちょっと無いですね。ああ、私が身に着けているこの指輪は、持ち主の魔法の威力を強化する、強い魔力を秘めていますが。持っていきますか？」

ヴァンパイアが、言いながら身に着けていた指輪を外そうとするが慌てて止めた。

「い、いや、それはいいよ。なんだか身ぐるみ剥ぐ様で申し訳ないし。……なんか悪いな、あんたからしたら強盗に押し入られた様なものだもんな」

「いえいえ。ダンジョンは侵入されるために在るのです。ここにある財宝や装備も、ダンジョンに挑戦した冒険者のものですし、お気になさらず。でも、この指輪だけは、私が生前から大切にしていた物なので、ちょっとホッとしました」

ヴァンパイアは、言いながら安心した様にはにかみ――
「魔法威力を増幅する指輪ですか……」
ウィズが、物欲しそうに指をくわえ、じっとそれを……。
「ウ、ウィズ……」

◆◆

テレポートで街に帰ると、辺りはすっかり暗くなっていた。
ダンジョンの中で一日以上過ごしたせいで、時間の感覚がおかしい。
「この時間では乗合馬車も運行してはおるまい。疲労回復のポーションや覚醒ポーションで誤魔化したとはいえ、急なレベルアップと長時間の極度の緊張状態、丸一日以上の戦闘など、体への負担は相当な物だ。今日はゆっくり休め。明日、スキルを教えてもらい、そのまま旅立つがいい」
バニルが風呂敷を背負い、両手にも財宝を抱えたまま言った。
俺は、ダクネスへのお土産の鎧一式を手に、バニルとウィズに礼を言う。
「助かったよ二人とも。絶対あのバカを連れ戻してくるからな」
「女神に関しては、まあどうでもよい」
「どうでも良くないですよ！　カズマさん、いざって時には、私達も隠れながらちょっとだけ、この街を守るお手伝いをします。アク

ア様が帰る場所はちゃんと守っておきますから、安心して行ってきてくださいね。無事帰ってきたら、またレベル上げでもなんでもお付き合い致しますので」

それはもう勘弁。

正直、ダンジョンは怖かった。

格上のモンスターに囲まれると、生き物としての本能的な恐怖からか震えが止まらなかった。

ダンジョンは、軽いトラウマになりそうだ。

「あのダンジョンの財宝は、まだまだ残っておるのだ。小僧が旅立たねばならないのは理解しているから、残りの財宝回収は貴様が帰ってからで良い。なので、ちゃんと生きて帰ってくるがいい。あの長ったらしいダンジョン最深部まで、また潜る事を考えるとウンザリするわ」

なんともバニルらしい送りの言葉だ。

「帰ってきたら、手取り足取り上級魔法を教えてあげますからね。だから、無事で帰って来てくださいね！」

ウィズが、優しく微笑み言ってくる。

上級魔法は、覚えようとしたが習得できなかった。

スキルポイント的には足りているのだが、スキル習得欄に出て来なかった。

単純に、名前を叫べば発動する初級魔法。

ちょっとした手順が必要な中級魔法。

この辺までならド素人でも何とかなるが、流石に上級魔法ともなると――

「上位の魔法にもなると、魔法ごとの身振りや専用の詠唱、魔力の流れなども一つ一つキッチリ覚えないといけませんからね。流石に

一日では覚えきれないと思いますので……。あっ！　でも、爆裂魔法ならめぐみんさんに付き合って、長い間、毎日ずっと見てきましたよね？　なので、爆裂魔法の習得ならきっと……」

「アレは要らない」

そもそも、爆裂魔法を覚えた所で魔力が足りない。

魔力に溢れる紅魔族にして、アークウィザードのめぐみんですら、一発撃つと魔力が空になるのだ。

帰ったら、上級魔法か。

姿を見えなくする魔法が欲しい。

凄く欲しい。

何に使うかはまだ考えてはいないが、凄く……

「見える。未来が見えるぞ。小僧が上級魔法を覚えて、姿を隠して大衆浴場に」

「それじゃあ、今日はお疲れ！　また明日、旅立つ前に店に寄るから！」

「ただいまー」

「「お帰り！」」

玄関のドアを開けると、めぐみんとダクネスがドアの前で待っていてくれた。

二人とも絨毯の上に座り込み、長い間俺を待っていた事がうかが

える。
「無事帰って来てくれましたか。ちょこちょこっと潜ってレベルを上げて帰って来るかと思えば丸一日以上帰って来ないものですから、心配しましたよ？」
「本当にな！　まったく、だから私も壁代わりに付いて行くと言ったのだ。これからは……。……なんだ？　これは」
暖かく迎えてくれるめぐみんと、小言を言ってくるダクネス。
そのダクネスの前に出した鎧一式を見て、ダクネスがキョトンとした。

「お土産。クルセイダー用の強力な装備だって言うから持って帰ってきた」
「ほう、限定装備ですか。その職業しか装着できない系の物は、業物が多いですよ。カズマは、自分の装備は見つからなかったのですか？」
「ああ、冒険者限定なんて、そんな需要のなさそうな装備はちょっとなあ」

めぐみんとそんな事を言っていると、ダクネスが、俺の差し出した鎧を震える手で受け取った。
赤い顔をして、ちょっと潤んだ目で鎧をギュッと抱きしめる。

「……ありがとう。大事にする」
シンプルで、それでいて感情の込められた感謝の言葉。

俺が装備できなかったから、ついでみたいな感じで一応貰ってきたなんて、今更言えない雰囲気だ。

「漆黒の鎧ですか。ダクネスという名前的にも似合いそうな感じですね」

「だな。でも色や形状的に、これを装備すると、なんか魔王の側近とかそんな感じになりそうだけど」
「う……。聖騎士が黒い鎧を装備するのもどうかとは思うが、まあ、これはこれで……。それに、美しいじゃないか、この鎧は。強力な魔法の掛かった鎧は、装備する持ち主に合わせて、フィットする様に細部の形状を変える。きっと、私が装備すれば多少は騎士っぽい形の鎧になるだろう」
ダクネスが、いそいそと広間の中央に鎧を持って行き、乾いた布で鎧を磨き始めた。
キュッキュッと音をさせて鎧を磨くダクネスは、なんだか実に楽しそうだ。
と、めぐみんが俺の袖をクイクイ引っ張る。
「で、私へのお土産は？」
「な、ないです」
軽く飯を食い、風呂に入る。
そして、風呂から上がる頃にはダクネスの姿が見当たらなかった。
随分と鎧が気に入っていたみたいだし、自室で試着でもしているのかも知れない。
今夜は珍しく、紅魔族ローブではなく黒のワンピース姿のめぐみんが、風呂上りの俺を待つかの様に、広間のソファーでゴロゴロし

ていた。

「めぐみん、俺はもう寝るけど。明日は早いんだろ？　めぐみんも、早めに寝ろよ？」

明日は、朝一の乗合馬車で出発を予定している。

そして、俺がダンジョンに潜っている間にダクネスやめぐみんが、街の冒険者に連絡を取り、有用なスキルを持つ人達に、馬車の乗合所前に集まってもらう約束を取り付けていた。

スキルを習得次第、アクアを追い掛ける。

広間の隅には、既に遠征用の荷物も用意済みだ。

二人が、俺のレベル上げを待っている間に全て用意してくれたらしい。

「そうですね。では、私もそろそろ寝ましょうか」

言いながら、めぐみんが立ち上がった。

そして、二階の自室に向かう俺の後ろをついて来る。

俺が自室のドアを開けると、めぐみんは当たり前の様に俺の部屋に入ってきた。

……。

「えっと、何してんの？　寝るんじゃないのか？」

「寝ますよ？　カズマと一緒に」

えっ。

――俺が固まっていると、めぐみんがベッドの前に歩いて行き、シーツの具合をぽんぽんと叩いて確かめ。

「今回の旅では、紅魔の里へ行った時より遥かに危険な旅になります。なので……。後悔が無い様にしておきましょう」
めぐみんは、そんな事を言いながらはにかんだ。

…………えっ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あ、改めてこういう状況になると、や、やっぱりちょっと緊張しますね。大丈夫ですか？　まだ、辛くないですか？」
「だ、大丈夫だ、問題ない。めぐみんこそ、無理はするなよ？」

今夜は月がない。
窓の外から漏れるのは、この街の魔法使いにより点けられた、街灯による僅かな灯り。
その微かな光では、めぐみんの白い肌もあまりはっきりとは拝めない。
俺の暗視スキルでは、赤外線による暗視みたいに、輪郭しか確認出来ないのだ。

しかし、そんな暗闇の中でも、めぐみんの紅い瞳だけは鮮やかに映えた。
めぐみんは、ベッドに仰向けにころんと横たわったまま、こちらを見ながら微笑んでいる。
黒いワンピースに着替えたのはこの為なのか。
でも、紅魔族ローブを着ていないと、寝る時にボンッてなるんじゃなかったか。

事が終わったら紅魔族ローブを取りに行くのだろうか。

というか、下半身が大変です。

本音は辛いです。凄く辛いです。早く開放されたいです。

そんな俺の様子を見て取ったのか、めぐみんが、

「これが私が持っている服の中で、唯一色気のある服なんですが……。どうですか？　大丈夫ですか？　ちゃんと、その……」

「だ、大丈夫だ、綺麗だし、その、ムラムラする」

「む、ムラムラしますか。もうちょっと、こう……。いえ、カズマらしいですね」

言いながら、クスリと笑った。

そして、こちらを迎え入れるように、横たわったまま手を広げて微笑んだ。

「辛いんでしょう？　大丈夫です、私が全部受け止めますから。何があっても後悔の無い様に、やり残した事なんて無い様に。好きにしてくれていいですよ？」

そんな事言われたらいよいよはちきれそうです。

ここまで言われてやる事やらないなんて、それこそ、めぐみんではないが頭がおかしい。

めぐみんに体重をかけないように気を付けながらその上に覆いかぶさると、めぐみんはそっと背中を抱きしめてきた。

目が暗闇に慣れてきたせいで、ワンピースの片方の肩紐が外れ、露わになった白い肩がはっきりと見える。

そう言えば、まだダクネスとしかキスとかしてなかったんだよな。

まずは、キスからしておくべきだろう。

めぐみんの頬に右手で触れると、めぐみんは俺の手の上に自らの左手を重ね、心地良さそうに目を細めた。
そんな仕草だけで緊張と興奮がマックスになる。
女ってズルい、これだけでご飯が食えそう。
心地良さそうに目を細めて俺の手を撫でてくるめぐみんに、そのまま顔を近付けていく。
何をする気か察しためぐみんが、コクリと小さく唾を飲み、目を閉じた。

ダクネスに不意打ちでされたキスとは違い、両方合意のキスだ。
緊張するが、それと同時に、急がないとという気持ちがあった。
なぜだかは分からないが、こういう時ってのは大概邪魔が入るのだ。

そう、どうせまた、一番良い所であのバカが……！

あの、バカが……。

……。

「……？　どうしました？」
いつまで経ってもキスしない俺に、めぐみんが片目を薄っすらと開けて不安そうに尋ねてくる。
あのバカが邪魔しに来る事は無い。
だって、今は居ないのだから。
つまり、チャンスだ。
これはチャンスなのだが……。
「……ごめん」
「……その、私ではダメですか？　ダクネスやアクアほどの大きさは無いですが、形は良いと思いますよ？　見てみますか？」
「凄く見た……、いや、そうじゃない。正直言って、やりたい。凄くやりたい。もう下半身も大変な事態だ。だから、めぐみんに魅力が無いワケじゃない。でも……」
勿体無い事をしている。
バカな事をしている。
でも――
「アクアが居て、ダクネスも居て。皆が屋敷にいる中で、あいつらに邪魔されないかとヒヤヒヤしながら情事に耽るのが良い。あのバカに見つからない様にコソコソとめぐみんの部屋に遊びに行ったりとか。で、結局良い所で邪魔が入るんだろうけど、それでも……」
言いかけた言葉が遮られた。
めぐみんに、口を塞がれた事によって。
めぐみんが俺の首に両手を回し、情熱的に口を吸ってきた。
口腔内をめぐみんの舌がチロチロと這い、頭がぼーっとしてくる。

自然とこちらもめぐみんを抱きしめ、そのままめぐみんに伸し掛かろうと、

「……んっ。……あなたの、そんなところが好きですよ。たまらなく、大好きです」

伸し掛かろうとする前に、めぐみんが急に唇を離し、俺の頭を自分の胸に抱き込む様にして囁いた。

ほうと熱い息を吐き、そして、愛おしそうに後頭部を撫でてくれる。

顔にめぐみんの柔らかい物が当たり、これ以上我慢ができなくなった俺は、めぐみんを……！

「アクアを連れ戻したら、その日の夜に二人で凄い事をしましょう。それまでは……」

めぐみんは、耳元で囁くように言った後、そっと俺の両肩を押してベッドからするりと降りた。

……あれっ。

えっと、自分で言っといてなんだけども、めぐみんのディープキスのせいで盛り上がってしまったんですが。

なんかもう、既にアクアとかよりも、続きをしたい方が勝っちゃってるんですが。

泣きそうになっている俺に、めぐみんが、後ろ手に手を組んで立ったまま、いたずらっぽく笑いかけてきた。

「カズマが、ごめんって言った後。理由を聞くまでは、凄く不安になりました。なのでお返しに、私もちょっとだけ意地悪させてもらいます」

意地悪って、その気にさせておいての、このお預けの事か！
なんだよもう、魔性のめぐみんかよ、コイツを何とかして下さい。

「その……。謝るんで、もうちょっと続きをなんとかならないですかね……」

「こ、この男は……。どうせなら、最後までカッコイイままでいて下さいよ。……と、言う訳で」

めぐみんは、そのまま俺の部屋から出て行く――のではなく。

なぜか、俺の部屋の隅にあるクローゼットの前に立つ。

「と言う訳で、ダクネスもいつまでもそこでモジモジしていないで、部屋に帰りますよ！」

「わあっ！」

めぐみんがバンとクローゼットを開けると、そこには、なぜか正座して頬を赤らめているダクネスが。

「ななな、なぜ私がここに」

「なぜここに居るのが分かったのか、ですか？　昨晩、帰って来ないカズマを心配してあれだけソワソワしていた癖に、今夜はカズマがお風呂から上る前にそそくさと二階に引っ込む！　紅魔族は知能がとても高いのです、性欲を持て余して頭の中がピンク色になっているダクネスの行動など、お見通しなのですよ！」

「せ、性欲を持て余してなんて……！　そそそ、それに、それを言うならめぐみんも……！」

めぐみんは、未だクローゼットの中で正座して頬を赤らめ、怯えた様に震えているダクネスの、その手を掴むとクローゼットから引きずり出した。

「私はお土産を貰えなかったので、その代わりを貰いに来たんです。……どうせダクネスの事です、鎧をプレゼントされて浮かれ、昨晩

寂しい想いもしたせいで気持ちが昂ぶり、部屋に忍び込んで待ち伏せしていたのでしょう！　で、私の声を聞いて、慌ててクローゼットに隠れていたのですね！」

「ななな、なんでそんなに私の行動が正確に……！　わ、私は、鎧のお礼をしようと……！」

ダクネスが恥ずかしそうに、そして泣きそうな顔で赤くなる中、

「プレゼントを貰ったら体でお礼を返すだなんて、なんという淫売ですか！　私にとってはカズマと抱き合ったりそういう行為自体嬉しい事なのですが、ダクネスは違うんですか？　自分の体をカズマに与えて、上から目線で、さあこれがご褒美だ！　とでも言う気だったんですか？　そんなに自信があったんですか！？」

「ちちちち、ちが……！　それは、違――！　そそ、そうではなく、そ、そうではなく！」

泣きそうな顔のダクネスを、めぐみんがズルズルと部屋の外へと引っ張りながら。

「私とカズマの情事を盗み見ているうちに自分も盛り上がってきてしまい、あんな姿勢になっていたんでしょう！　なんてエロいんでしょうかこの娘は！　ほら、いつまでも盛ってないで部屋に帰りますよ！」

「待ってくれ、私が居るのを分かっていながら行為をしようとしためぐみんの方が、絶対エロい！　あああ、ちょっと私にも言い訳させて……！」

めぐみんに手を引かれながら、ダクネスは部屋から連れ出されて行ってしまった。

えっと……。

俺は、この昂った気持ちをどうすれば……。

翌朝。

俺達三人は、乗合馬車の待合所に集まっていた。

そして俺達の目の前には、数多くの冒険者が並んでいる。

「よし。それじゃカズマ、スキルを覚える用意は良いか？」

チンピラAが、冒険者の中から前に出て、俺に剣を突きつけてきた。

俺をイジメようと言うのではない。

これから、俺にスキルを教えてくれるのだ。

冒険者の中には、チンピラAの他にもテイラーやキースにリーン、その他、見知った面々が並んでいる。

「どうしましたカズマ？　ぼーっとして。それじゃ怪我しますよ？」

「あ、ああ。悪い」

俺は、めぐみん達よりも早く家を出て、長く家を留守にするという事で、相変わらず朝早く鳴く忌々しい鶏肉を、バニル達の店へと預けに行ったのだが。

その時、屋敷を出てふと振り向いた際、変なものを見たのだ。

こちらに、まるでいってらっしゃいとでも言うかの様に、二階のバルコニーで手を振る少女を。
以前アクアが言っていた、この屋敷に居るという貴族の少女の霊だったのだろうか。
目を擦って見直した時には、既にその姿は無かったのだが。
しかし、それを見ても、不思議と恐怖や不快感は湧いては来なかった。

ということで、ずっとその少女の事を考えていたのだが。

「大丈夫かあ？　頼むぜ、魔王の奴をぶっ殺しに行くんだろ？」
「違う、アクアを連れ戻しに行くだけだから！」

チンピラAの言葉に言い返していると、めぐみんとダクネスが、はいはいと、俺を子供の様にあやしてくる。

こいつら二人は魔王と戦う気満々だからな。
俺としては、魔王と戦うのは最終手段だと考えている。
まあ、先ほどウィズの店にゼル帝を預けに行った際、最終手段を取った時の為の準備もして来たのだが。

「一体何を買って来たのですか？　また随分と大荷物ですが」
「これは、使わなければそれに越した事はない、超高級な品々だよ。……よし、それじゃダスト！　一つ頼む！」
背負っていた荷物を下ろすと、俺は剣を引き抜き、スキルを教えてもらうべくチンピラAと正面から対峙した。

「そろそろ時間でーす！　温泉街ドリス行きの馬車が出ます、お乗りの方はお早めにー！」

御者の声に、俺達は馬車に荷物を積む。

俺とめぐみんが荷物を乗せる中、ダクネスは――

「……ところで、さっきから気になってたんだけども。お前、鎧はどうした？」

俺の質問に、大剣を背負い、薄着な私服姿のダクネスは、大事そうに抱きかかえていた荷物を、どや顔で自慢気にぽんと叩く。

「この中だ」

……。

「いや、これから旅するんだから、ちゃんと着ろよ」

「何を言ってるんだお前は。そんな事をして、せっかくの鎧に傷が付いたり汚れたりしたらどうする」

「お前こそ何を言ってるんだ」

どうやら、ダクネスはよほど鎧が気に入ったらしい。

鎧を抱きかかえて離そうとしないダクネスは放っておき、俺は、見送ってくれている冒険者達に振り返った。

「それじゃあ、ちょっとあのバカ連れ戻してくるわ！」

俺のその言葉に。

「おう、行ってこい行ってこい！　ついでに魔王も倒して来い！」
「アクアのねーちゃんの事だから、とんでもない方向へ行って迷子になってるかも知れないからな！　あちこち隈なく探せよー！」
「ねー！　お土産、期待してるからー！」
「街は任せとけ。なんせこの街には、産まれたばかりのガキと可愛い嫁さんがいるんだ。絶対に守るぜ！」

冒険者達が、思い思いに頼もしい言葉を――

今、最後に不穏な事言ってたのは誰だ。

「ダクネス、いい加減に鎧を着て下さい！　防御力の問題もありますし、それに、そこまで自慢気に大事にされていると、何も貰っていない自分的に、ちょっとイラッと来ます！」
「ちゃんと危険な地域に入ったら鎧を着るから、それでいいだろう！　私の防御力ならば、この辺のモンスターに遅れを取ったりはしない！」

馬車の上では、そんな馬鹿な事を言い合っている仲間達。
俺は今から、この頼りない二人と共に、この世界で最も危険な地域へと旅しに行くのか。
どうしよう、出発前から既に心が折れそうだ。

「おいカズマ！　その剣は、街で売ってる中で最高級品ってだけの、なんの魔法も掛かってないただの店売りだろ？　これを持ってけ！」

チンピラA――改めダストが、自分の剣を馬車の上の俺に放り投げた。
なにこいつカッコイイ。
こんな奴だっけ。
「それは、一応魔法が掛かっている武器だ。特定の職業しか装備出来ない、伝説級の武器って訳でもないからお前にだって使えるだろ。魔王を倒したら、そいつをちゃんと返しに来いよ」
ダストが、そんな男前な事を言い出した。
おいマジかよ、この男への評価を変えないといけないのか……！？
「なるほどねー。万が一、カズマがそれで魔王を倒しちゃったら、その武器にはすんごいプレミア付くもんねー。勇者が使った武器、とか。カズマー、それってダンジョンに転がってた冒険者の死体から、ダストが剥いでいった物だから、返さなくていいからねー」
「てめえリーン！　俺の壮大な一獲千金計画を邪魔すんなよ！」
ほらこんなもん。
だが、逆に安心した。
どうしようもない連中しかいないこの街だが、俺は案外、この街が嫌いじゃないらしい。
そして、なぜかこの街のマスコット的存在として好かれているアクア。
そんなあいつを連れて帰れば、このろくでもない世界でも、結構楽しくやっていける。
そんな気がする。
俺は、リーンを追いかけ始めたチンピラを、苦笑しつつ横目で見

ながら。

「行くぞー！！」

俺達を乗せた馬車は、澄み切った青空の下。まだ見ぬ世界へと旅立った……！

26話（後書き）

主人公達の冒険はこれからだ！

こんな引きですが、ちゃんと来週も続きます。
なんか打ち切りのラストみたい。

27話

「あの場に居た冒険者の中にクリスの姿が見えなかったな。魔王退治に行く前に、挨拶をしておきたかったのだが。魔王の配下が王都を襲うと聞いてから、しばらく忙しくなると言い残し、その後姿を見なくなってな……」

「そういや居なかったな。と言うか、クリスってどこに住んでるんだ？　いまいち謎なんだよな。俺が馬小屋で寝泊まりしてた頃も、今思えば見た事も無いし。お前は長い付き合いみたいだし、知ってるんだろ？」

「……いや、実は知らないんだ。パーティを組んでいた頃何度か、私の実家に部屋を用意するから、そこを拠点にしないかと誘った事もあるのだがな……。……それより二人とも、これを見てくれ。これを、どう思う？」

「「魔王の配下みたい」」

「……」

揺れる馬車の中、自慢気に鎧姿を見せたダクネスにキッパリ告げる。

めぐみんと俺に同じ事を言われ、ダクネスが少しだけ悲しそうな顔をした。

四人乗りの馬車の中、ダクネスとめぐみんが隣同士で座り、俺と向かい合う形となっている。

「なんだか暗黒騎士という印象です。魔王の側近に居そうな」

「盾も持たずに大剣なんて使ってるし、黒い鎧が攻撃的な印象を与えるよな」

俺とめぐみんの批評を受け、ダクネスが拗ねた様に、身につけた鎧を指でなぞる。

漆黒の鎧は滑らかな曲線を描き、ダクネスの体にフィットしていた。
黒い金属の光沢が、ぬめるような怪しい輝きを放っている。
美しいと感じさせる鎧だ。
でも、なんだか妖刀や魔剣に通じる美しさと言うか……。

「そう言えば、もう聞きましたか？　カズマがダンジョンに行っている間、ちょっとした騒ぎがあったんですよ」

めぐみんが、唐突にそんな事を言った。
騒ぎ？

「カズマが捕まえたあの女……。魔王の幹部、セレナが脱走したらしい」
「マジか」
ダクネスの言葉に思わず聞き返す。
というか、警察は何やってたんだ。

「なんでも、セレナは見張りの者を一時的に傀儡化して、脱走を手伝わせたそうですね。見張りの者は、魔王の幹部は露出狂だと謳っているらしいです」
「……ん、なんでも、傀儡化されていた男は何かを見せられただとか言っているそうだ」
何かを見せられた――
つまりはアレですね。
俺が余計な知恵を付けたからですね、すいません。

「街への襲撃に対する防衛があるため、この街からは追手の人員は出せなかったそうです。現在、王都から手の空いている騎士が呼ば

れ、今更ながら追跡を始めたそうですよ。そして、もしどこかで見かけたなら捕縛を、と、ギルドに依頼の紙が貼ってありました。セレナも魔王の城へと報告に帰るかも知れませんし、同じ道を行く以上、どこかで見つけられるかも知れませんね」

「うむ、その際には今度こそあの女に痛い目を見せてやろう。どうにも、あいつとの決着はスッキリしなかったのだ」

まあ、捕まえれば報酬は出るだろうしな。

見つけたら捕まえる、そんな程度でいいだろう。

俺にレベルを下げられ弱体化しているはずだし、アクアが居なくてもなんとかなりそうだ。

俺は、馬車の窓から外を見る。

そして、他の馬車を眺めながら呟いた。

「しかし、客が少ないなあ……」

魔王の配下が襲撃に来るという不穏な噂からか、今の時期に旅をしようという人はあまり居ない。

一部の人は他の街に疎開したようだが、今ではそれも落ち着いていた。

俺達を乗せる馬車以外は、交易商品のみを載せた、客がいない物ばかり。

馬車の数は五台ほど。

その内、護衛の冒険者数名が乗った馬車以外は、御者とトレーダー以外には人は居なかった。

馬車の数が少ないと、弱いモンスターですら馬を怖がらず、近寄って来やすくなる。

先行しているアクアに追い付きたい俺達としては、あまり数の居

ないこの現状は、好ましくないのだが……。

「そう言えば、カズマは結局、どれだけのスキルを取ったのですか？　私とダクネスは、街の中で強い人達や有用なスキルを持つ人を集めただけですから、何を取ったのかまでは把握してはいないので」

ダクネスが鎧の表面の篭手の部分に息を吐きかけ、乾いた布でキュッキュッと磨く中、対抗意識でも燃やしたのか、めぐみんが自分の杖を同じく布で磨きながら聞いてくる。

「とりあえず、魔法系のスキルはテレポートと中級魔法を取ったな」

カランッ、と。

めぐみんが、磨いていた杖を取り落とした。

「そそそ、そうですか、中級魔法を。まま、まあ、上級魔法を取らなかっただけよしとしましょうか」

どもりながらも、めぐみんはなんとか平静を装うと、落とした杖を拾おうと身を屈め――

「上位の魔法ほど長い詠唱が必要らしくてさ。スキルを習得するには全ての上級魔法の詠唱の暗記が必要らしいんだ。そんなの覚える時間が無かったからさ、無事に帰ったら、ウィズが上級魔法を教えてくれるって……」

「アークウィザードの私を差し置いて、中級だけでは飽き足らず、上級魔法まで覚えるつもりですか！　ちょっとカズマのカードを寄越して下さい！　……あっ！　ポイントを全て使えば、爆裂魔法の習得が可能じゃないですか！　これを覚えて、ポイントを空に……！」

「こっ、こら止めろ！　上級魔法と有用なスキルの為に残してあるんだよ！　悔しかったらお前も他の魔法を覚えればいいじゃないか、人様の冒険者カードを勝手に弄るんじゃない！」
「私のカードを勝手に弄った事のある、カズマがそれを言うんですか！　……ああっ！？　他にも、ゴーレム製造魔法や回復魔法まで覚えてる！　何なんですか、魔力が私の十分の一程度の癖に、魔法使いでも目指す気ですか！」
「なんだ、回復魔法まで覚えたのか。アクアが知ったら仕事を取られたと泣くんじゃないか？」

俺達が馬車の中で騒いでいると、馬車が速度を落とし、やがて止まった。

どうしたのかと不思議に思っていると――
「何かの捜査みたいですねー。すいませんねお客さん、冒険者カードを見せられるように用意しておいてください」
馬を操っていた御者が、自らも懐から何かのカードを出し、言ってきた。
窓から顔を覗かせると、騎士風の男たちが馬車に近づき、職務質問みたいな事をやっていた。
セレナが脱走した事で、あいつが馬車に紛れていないかと、見かけた馬車をチェックしているのだろうか。
そんな事を考えていると、他の馬車のチェックは終わり、俺達の馬車の番になる。
馬車はゆっくりと進み、検問の様な事をしている騎士達の間で止まった。

俺達は馬車を降り、身分証を手に騎士の前へ。
「失礼。身元を証明できる物を拝見させて頂きたい。魔王の幹部がこの周辺に潜伏している可能性がありまして、どうかご協力を。え

えっと……。……め、めぐみん……さん……ですか？」
「私の名前が何か」
「いえ！　なんでもありません、失礼しました。結構です、ではそちらの……。……サトウカズマ。……サトウ、カズマ？」
めぐみんに慌ててカードを返した騎士は、俺のカードを確認し、訝しげな表情をした。
予想通り、この騎士達はセレナを追っている様だ。
俺の名前で反応すると言う事は、魔王の幹部を捕らえた一行だと知れ渡っているのかもしれない。
そう、俺達は何だかんだ言いながらも、結構な功績を――
「サトウカズマ！　あの、悪名高いサトウカズマか！　王都で散々暴れ、クレア様やレイン様を脅した、あの凶悪な……！」
「おい待ってくれ」
騎士の間でそんな話が流れてんのか。
いや、間違ってはいないけれども、なんか……。
「申し訳ありません。その、この街道を行くと温泉街ドリス、ついては、王都方面に続く道となっております。実は……。ある御方からの命で、あなたをアクセルの街以外で見かけた際には、その目的と行き先を問い、行き先が王都であった場合はこれを阻止せよとの……」
「ある御方って、クレアとか言った白スーツの貴族だろ。そうなんだろ」
俺の突っ込みに、騎士が顔を背け。
「さる御方です。名前は言えません。すいません、行き先を……」
「クレアだろ！　あの女だろ！　あいつ、俺の釈放に協力してくれ

たから許してやろうと思ってたが、そんな命令下してやがったのか！　舐めやがって、目に物見せてやる！」

「サ、サトウ殿！　違います、クレア様ではありませんから！　と、と言うか、その様な言動をされますと、自分としてはあなたを止めないといけなくなります！」

激昂した俺に、騎士達は慌てながら言ってくる。

と、隊長とおぼしき男が前に出た。

「貴様がサトウか。冒険者の分際で、なんだその態度は？　クレア様をおびやかす気ならば、ここで斬って捨ててもいいんだぞ？　下賤な冒険者風情が。このままアクセルの街まで歩いて帰るがいい！」

隊長は、剣の柄に手をかけながら、威圧するように脅してきた。

めぐみんがそれにカチンと来た様に杖を握り、ダクネスも険しい顔で前に出た。

二人のその動きに、騎士達がこぞって剣の柄に手をかける。

「なんの真似だ冒険者！　駆け出しの街の下級冒険者風情が、我々に歯向かう気か！　構わん、斬れ！　こいつらは斬り捨てればいい！」

なんという切り捨て御免。

なぜこういった輩は短気なんだろう。

どうもこの世界の貴族連中は、ダクネスを除き、人の命や人権みたいな物を軽く考えている節がある。

しかし、こんな所で時間を掛けている暇は無い。

唯でさえアクアに二日ばかり出遅れているのだ。

俺は、険しい顔で前に出て、何か言おうとしているダクネスに手を向けると。

「控え控えい！　この御方をどなたと心得る！　その名も名高いダスティネス家のご令嬢、ダスティネス・フォード・ララティーナ様である！　一同頭が高い！　面を下げよっ！」
「「なっ！？」」

俺の言葉に、騎士達が途端に青ざめ跪いた。
いきなりそんな事を言われたダクネスですら驚き、めぐみんが、なぜか騎士達と一緒に跪いている。

「お前まで何してんの」
「す、すいません。不意打ちだったもので、場の雰囲気に流されまして……」

めぐみんが膝を払いながら立ち上がる中、隊長が、恐る恐るといった感じで問いかけてた。
「ほ、本当にダスティネス卿ですか……？　いえその、申し訳ありませんダスティネス卿、我々は貴方様のお顔を存じ上げておらず、とんだご無礼を……！　……その、疑う訳でも無いのですが、これも仕事なので、一応確認を取らせて頂いても……」

その言葉に、ダクネスが無言でカードを見せる。
それを見て、隊長の顔面が青を通り越して蒼白になった。

「ももも、申し訳ありませんっ！　ダスティネス卿とはつゆ知らず、貴方様とお連れの方にとんだ無礼をっ！」
「おおっと、これはとんだ手の平返しですな！　いやー、あとちょっとで斬られる所だったかと思うと心が痛むわー。一生物のトラウマ植え付けられた気分だわー。ああっ、さっきのやり取りを思い出したら胸が苦しく……！」

平謝りする隊長に、胸を押さえてわざとらしく苦しむ俺。
そしてめぐみんが、俺の意図を察したのか――

「おっと、これはいけませんね！　まったく、ウチのララティーナお嬢様のお供に、よくもまあ随分な態度を取ってくれましたね！」

言いながら、先ほどの鬱憤を晴らすように杖の先っちょで隊長の頬をグリグリしだした。
隊長は、こめかみをひくつかせながらも無抵抗のまま静かに目を閉じ、恥ずかしそうに頬を染めて震えているダクネスに頭を下げる。

「も、申し訳ない。本当に、申し訳ない。ダスティネス卿のお連れ様に危害を加えそうになった事、本来ならば、この行為は切腹モノです。しかしながら、その……」

言い淀む隊長の肩に、俺は馴れ馴れしくポンと手を置き。

「いやいや、俺もそこまでは求めてないですよ。ただ、そちらさんもお仕事で大変なんでしょうが、俺達も凄く急いでましてね？　しかもほら、この商隊の規模って小さいじゃないですか。モンスターに襲われないか心配だなーと。……後ほら、さっきあなたが言ったじゃないですか。駆け出しの街の下級冒険者風情が、って」

「あ、あれは……！　ももも、申し訳ありません、あれは言葉のアヤと言いますかっ！」

顔を引きつらせて慌てる隊長に、俺は続けた。

「いえいえ、良いんですよ、良いんですよ。だって、事実ですから。でもなんて言いますか、現在人手不足でしてね？　俺みたいな下級

冒険者しか、ダスティネス卿の護衛が居なくて困ってたんですよね。いやー、腕の立つ人とかが、温泉街ドリスまででもいいから、モンスターの露払いとかしてくれると助かるんですが、どこかにそんな人達は……」

「自分達に任せてくださいっ！」

俺の言葉を遮った騎士隊長に、ダクネスが恥ずかしそうにポツリと言った。

「よ……よろしく……お願いします……」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

騎士達に護衛され、かなりの距離を稼ぐ事が出来た。

以前、同じ行程を進んだ時よりも旅程が速い。

これなら明日の昼前には街に着けそうだ。

「騎士の人達が徹夜で見張りをしてくれるそうです。……なので、今晩は以前の旅とは違ってゆっくり眠れますね」

めぐみんが、以前紅魔族の里に行った時の事を思い出しているのか、どことなく懐かしそうに、そして、やはり誰か欠けているのが気になるのか、少しだけ寂しそうに。

「……そうだな。順調で、何の問題も無い旅だ。騎士達が先行してモンスターを駆除してくれるから、安心して進むことが出来る。……以前の旅が嘘みたいだな」

ダクネスが、どことなくつまらなそうに。

辺りはすっかり暗くなり、商隊の人達と共に野営の準備を済ませ、俺達三人は他の人達とは少し距離を取り、小さな焚き火を囲んでいた。

寒い訳ではないが、火をくべておかないとモンスターが寄ってくる。

――最も、誰かと一緒に旅していた時は、火を焚こうがアンデッドに群がられたものなのだが。

今回の旅は順調だ。

と言うか、順調すぎる。

誰かが居ないだけで、これだけトラブルが起きないと言うのはどうなのか。

厄介事が起きないのは良い事なのだが、これはこれで退屈でつまらないと思うのは、俺が毒されたからなのか。

今夜は、野良アンデッドにたかられるなんて事はまず無いだろう。

でも、そんな順調な旅が、どことなく物足りなく思えてしまう。

「さて。それでは、前々から聞きたかった事を教えてもらいましょうかね」

めぐみんが、荷物に背中を預けてくつろぎながら、そんな事を言ってきた。

隣では、鎧を脱いだダクネスが、同じく荷物に背中を預けて横になりながら、お腹の上に鎧を包んだ荷物を抱いて、子供の様に目をキラキラさせながら星空を眺めている。

「聞きたかった事って？　ああ、さっき、習得したスキルの説明が途中だったな。それの事か？」

地面にマントを敷いてその上にあぐらをかき、俺は焚き火に枝を放り込みながらめぐみんに尋ねた。

「いいえ、そうじゃありませんよ。スキルはまあ、旅の間に色々と見る機会があるでしょう。……それよりも。バニルが先日言っていた、カズマが異世界から来た人間だと言う事についてですよ」

――あれかあ。

ふと見ると、空を見上げていたダクネスも、こちらをじっと見つめていた。

というか、二人共が真剣な表情だ。

「いや、そんなに真面目になる事でも無いんだけどな。……まあ、何だ。俺は、元々この世界の住人じゃ無いんだよ。ここから遠く離れた、全く別の場所から来た訳で。……ある日、元の世界で死んじゃってな。で、死後の世界で、神様に言われた訳だ。三つの中から選べって。元居た世界で生まれ変わるか、それとも天国に行くか。……それか、全く知らない異世界に行ってみるか、って」

俺の言葉に、二人は笑いもせず、驚きもせず。

「なるほど。その時の神様とやらが、アクアだったりするのですか？」

「そうそう。あいつ、最初に会った時偉そうでさあ。こいつはちょっと痛い目見せてやろうと、つい勢いで一緒に連れて来て……」

――あれっ。

「アクアが神様だなんて、めぐみん信じてなかっただろ。いつも、そうなんだ、凄いねとか言って流してて……」

俺の疑問に、めぐみんとダクネスが顔を見合わせて小さく笑った。

「最初は半信半疑でしたけどね。でも、普通に考えておかしいですし、疑問に思いますよ。本来、蘇生は一人につき一度しか許されない神の奇跡なのに、カズマを何度も生き返らせたりだとか。触れただけで水を浄化したりだとか。水の中に沈んでいても平気だったり、リッチーや悪魔と平気で渡り合ったり」

……ですよね。

なんだ、二人はとっくに気付いてたのか。

ていうか、神様って気付いていて態度を変えないのも凄い話だ。

神様を萌えキャラ化した漫画やアニメで育った日本人の俺とは違い、この世界の人にとってはもっと崇拝の対象になるものだと思っていたが。

――ていうか。

ひょっとして、街の住人達にも、アクアが女神だと気付いている連中は案外多いのかも知れない。

「アクアがどんな存在だろうと関係ない。あいつは私達の大事なアークプリーストだ。すぐ泣き、すぐ調子に乗り、すぐ失敗し。そして厄介事を持ち込み、カズマを困らせるのが大好きな……、よく笑い、そこに居るだけで場を明るくしてくれる、大事な仲間だ。……そう、どんな存在だとかはどうでも良い。アクアはアクアだ」

ダクネスが、大事そうに鎧を抱いたまま。寝そべりながら星を見上げ、そんな事を独白みたいに言った。

それを聞き、めぐみんが満足そうに微笑む。

そして、むくりと身を起こして俺を真っ直ぐ見つめてきた。

「カズマ。アクアはなぜあんなにも魔王を倒したがるのですか？……魔王を倒した後、アクアはどうなってしまうのですか？」

――天界に帰る。

喉まで出掛かったその言葉が、どうしても出てこない。

しばらく無言のままでいる俺に、めぐみんが。

「カズマは、魔王を倒したら元の世界に帰るだとか、そんな事は無いんですよね？　みんなで一緒に、街に帰れるんですよね？」

星空の中、紅い瞳を幻想的に輝かせ、少しだけ不安気に問い掛けた。

ダクネスは、何も言わずに空を見上げ、じっと押し黙っている。

「……帰るわけ無いだろ？　このどうしようもない世界にも、何だかんだ言って友人も居れば知り合いも居るし。家だってあれば、金に困ってる訳でも無いし。……それに、その。この世界にはその……」

俺がチラリと二人を見ると、視線に気付いためぐみんとダクネスが、ふっと口元を綻ばせた。

「何ですか？　それにその、何ですか？」

「言ってみろ、おいカズマ、恥ずかしがらずにその先を言ってみろ。この世界には？　なんだ、この世界には何があるんだ？」

めぐみんに続き、ダクネスまでもが身を起こし、二人してニヤニヤしながら聞いてきた。

畜生、雰囲気に流されて余計な事言った！

◆◆

何のトラブルも無い順調な旅が、どことなく物足りなく思えてしまう。
昨晩、俺がそんな事を考えたのがフラグにでもなったのだろうか。
「うおおおお！　こっ、こいつはっ！　密集体勢！　密集体勢！　一番固いホバーグを中央に、全員密集体勢の陣形を取れ！」
「「「りょ、了解しましたっ！」」」
騎士達が中央に寄り添い、俺達を守るように陣形を構え、弓を手にした。
「めぐみんめぐみんめぐみーん！　爆裂魔法を、爆裂魔法をっ！」
「まま、待って下さい、今から詠唱を始めますから、そんなに急かさないで下さい……っ！　たたた、太古の真名みょっ！？」
ああっ、俺が急かしたからかっ！？
めぐみんが詠唱途中で舌を噛み、涙目でうずくまる。
そんな俺達へと向けて――
ワシの頭に巨大な翼、鋭い鉤爪を持つ猛禽類の上半身。そして、獅子の下半身を持った巨大生物。大物の魔獣である、グリフォンが迫っていた。
「ぼぼぼ、冒険者のみなさーん！　お願いします、お願いしますっ

！！」

御者の悲鳴じみた呼び掛けに、馬車の中から護衛の冒険者達が飛び出した。

だが、駆け出しの街から来た護衛達も、こんな大物は想定外なのかグリフォンを一目見ただけで顔を引きつらせて固まってしまう。

「隊長―っ！　グリフォンはこちらにお任せを！　隊長は、あちらのマンティコアをお願いしますっ！」

「お、俺一人でかっ!?　ううっ、わ、分かった！　死ぬなよお前らっ！」

一言叫び、駆け出す騎士隊長。

隊長が駈け出したその先には――

人の頭が付いた獅子の体に、サソリの尾とコウモリの羽が付いた生物。

そんな、キメラみたいな気持ち悪い体を持つ凶悪な魔獣、マンティコアがそこに居た。

俺達はどうやら、グリフォンとマンティコアが縄張り争いをしている地帯に迷い込んでしまったらしい。

凶悪な魔獣に挟まれ、御者も騎士も冒険者も、皆等しくパニックになっていた。

「だ、だからちゃんと街道を行こうと言ったんですよ隊長！　隊長が、急ぐダスティネス卿の為にと短縮ルートを行こうと言い出すから……っ！」

「う、うるさいぞ、お前達も強く反対しなかっただろうが！　ああくそ、そっちは任せたぞ！　マンティコアなんぞに、栄えある王国騎士が遅れを取ってたまるかっ！　くらええーっ！」

剣を抜いてマンティコアに立ち向かう隊長を、チラリと一瞥したマンティコアは、翼をはためかせるとフワリと空に舞い上がり、その標的を――！

「こ、こっち見てる！　めちゃめちゃこっち見てるぞあいつ！」
「ひたたた、かるま、ゆらはないでくらさい、ちょ、ちょっと待って……！　マンティコアは高い知能を持っています、きっと、先ほど私が魔法を使おうとしたのを見ていたのでしょう、あわわわ、き、来ますよ！」

あかん、他に助けを呼ぼうにも、護衛の冒険者達は御者達を背中に守り、騎士達はグリフォンを牽制している。
だが、ここで慌てる俺じゃない！

「これでも喰らえ！　『ファイアーボール』ッッッ！」

俺は素早く手をかざし、飛び来るマンティコアに向け、覚えたての火球の魔法を撃ち込んだ！

「……なんだこんなモン」
俺が撃ち込んだ火球を、空中にいながら尻尾の先でペシッと払うマンティコア。
俺のファイアーボールは、マンティコアを傷付ける事なくあらぬ方向へと飛んで行った。

「めぐみーん！　俺の魔法が弾かれたぞ、どうなってんだよ！　どうなってんだよっ！」
「単純に、魔力が足りないんですよ！　マンティコアは高い魔法抵抗力を持っています！貧弱なカズマの魔力では、上位のモンスター

相手ではあんなものです！」

めぐみんは、そう叫ぶと同時に、爆裂魔法の詠唱を再び開始。

今度こそは邪魔しないように――っていうか！

「ウハッ！　男前な兄ちゃんじゃネーカ！　おいお前、俺の太いのをチクッと一発ドウダイ！？」

「ヒイッ！」

マンティコアが、色んな意味で物騒な事を言いながら、サソリみたいな巨大な尻尾を見せつけて、空中から、こちらに真っ直ぐ突っ込んで来る。

俺はめぐみんを庇うように前に立つと、片手を地面に置いた。

「『クリエイト・アースゴーレム』！」

壁代わりのゴーレム作成！

こいつの後ろに隠れて、めぐみんの詠唱の時間を稼げれば――

「……っておい、なんか小さい！　小さいぞこれ！　俺の腰ぐらいしか無いんだけど！　ファイアーボールと違って、今度は相当魔力を込めたんだけど！」

「カズマの魔力の総量が少なすぎるんですよ！　大丈夫、もう詠唱は終わりました！　ひたすら毎日爆裂魔法を唱えてきた訳ではないですよ！　さあ、いきます！」

使えねえ！

せっかく取ったスキル群、あんまし使えねえ！

あらゆるスキルを覚えて、俺ＴＵＥＥＥ出来るかと思ってたのに、ちっとも使えねえ！

俺は弓を手に取り、使い慣れた狙撃スキルでマンティコアに狙いを定める。

めぐみんが詠唱を終えたが、一応念には念を！

「うわあああっ、ホバーグ！　ホバーグーっ！」

そんな悲鳴が、騎士団の方から聞こえてきた。

めぐみんが、そちらにピクリと反応し、チラと横目で確認すると……！

「『エクスプロージョン』ーーッッッ！」

盛大に、爆裂魔法でモンスターを消し飛ばした。

――目の前に迫るマンティコアではなく、騎士の一人を前脚で鷲掴み、そのまま空へと連れ去ろうとしていたグリフォンを。

めぐみんは、極力騎士を巻き込まない様、上空に魔法を放ったのだろうが、それでも、捕まっていた騎士は地面に落ちた後も爆風で転がり気を失う。

だが、あのまま連れ去られていれば命は無かった。

それに比べればあのぐらいは安い物だろう。

そして、問題は――

「ちっ、チクショー！　ダクネス、ダクネース！　ダクネスまだかよぉ！」

めぐみんを庇いながらマンティコアに向けて矢を放つ。

狙いは違わず、マンティコアの片目を貫く。

気持ち悪い悲鳴を上げたマンティコアが、めぐみんから俺へと視線を移した。

グリフォンが倒された事により、騎士達がこちらの援護をしようと数名駈け出し、幾人かが弓を構えるが、マンティコアは片目を射

られた怒りからか、それらを無視して俺だけを見ている。

このままだと、背中のめぐみんにも被害が及ぶ。

弓に次の矢をつがえる間も無く、マンティコアの横手に回るように駆け出すと、それを追ってマンティコアが空から肉薄してきた。

「ニイチャン、ええやんけ！　ナア、ええヤンケ！」

「何がいいんだよ、キメラっぽい連中はこんなんばっかか！」

マンティコアが俺に向かって飛び掛った瞬間。

「華麗に回避！」

「！？」

通常ならばそうそう躱せないだろう上位モンスターの攻撃を、俺の体は見事に躱した。

素手で戦う聖職者、モンクさんに教わったスキル、自動回避。

敵の攻撃を確率で躱してくれる優れ物だ。

俺に攻撃を躱されたマンティコアは、驚きの表情で俺を振り返る。

ダストから借りた剣を抜くと、夏の日差しを受けた魔法の剣が、淡く白い光を立ち昇らせる。

だが、これで正面から戦う必要は無い。

「おいこら、さっきから言動が怪しいケダモノ。俺は、お前みたいなタイプに深いトラウマがあるんだよ！　お前をここでぶっちめて、過去のトラウマ払拭してやる！」

威勢よく挑発し、マンティコアの集中を乱してやろう。

騎士達の援護があるのだ、時間を稼げば――

「ああっ！　マンティコアがもう一匹！　雌だ、雌のマンティコア

だ！」

「つがいだったのか！　マンティコアは雌の方が強い！　行くぞ！」

こちらに向かっていた騎士達は、突如現れ、御者や護衛の冒険者に迫る新手のマンティコアへ向きを変えた。

……。

「いいドキョウだなニイチャン。タイマンか！　このオレとタイマン張る気カ！　オットコマエだな、ケツに一刺しクレてやんヨ！」

「勘弁してください！　勘弁してください！！」

なんというやぶ蛇！

「カズマ、逃げてください！　アクアが居ない今、マンティコアの一刺しによる猛毒は致命傷です！」

めぐみんが馬車の陰から叫ぶが、相手が逃がしてくれそうも無い！

ああ、やばい……！

回復魔法を取ったとはいえ、治療魔法までは取ってない。

治療魔法は魔力かスキルレベルが高くないと、強い毒は治せないと聞き、覚えていない。

アクアが居ない今、ちょっとした傷でも命に関わる。

その恐怖が身を竦ませる。

剣を構えたまま対峙する中、マンティコアが舌舐めずりをして飛び掛ってきた。

一太刀！

一太刀浴びせれば、不死王の手スキルで無力化出来る可能性が……！

「グアッ！？　かすり傷ダガ、何だコリャ！？　魔力がフウジラレ

テ……！？」

剣先が僅かに掠ったが、どうやら発動したのは魔法封じらしい。

個人的には一番ハズレだと思っていた状態異常だ。

襲い掛かるマンティコアの前に、今度は自動回避スキルは発動してくれず、為す術もなく伸し掛かられた。

両の前脚で、仰向けになった俺の手首を器用に押さえ、尻尾の先の針を俺の尻の辺りに向ける。

そのまま、それを刺すでもなく、片目が潰れたおっさんの顔で、ニヤニヤしながら言ってきた。

「オイオイ、魔法フウジカ？　これじゃ飛べねえジャネーカ、どうしてクレンノ？　覚悟はイイカ？　一発ブスッと、天国に連れてってヤンヨ！」

色んな意味の恐怖で失禁しそうになる。

「カ、カズマー！」

めぐみんが叫び、その声を聞きながら。

「あああ、こんな事になるなら昨日カッコつけずにめぐみん食っとけば良かったあああああ！　童貞のまま死にたくなねえよおおお！」

「こっ、この男はっ！　この男はこんな時でも！」

――めぐみんが叫ぶ中。黒い塊が、俺に伸し掛かるマンティコアを弾き飛ばした。

俺の貞操の危機に颯爽と現れたのは、もちろん――

「おせーよ！　だから、鎧はちゃんと着てろって言ったんだ！」

「だ、だって、昨日一日着ていたら、汗で蒸れて……！　鎧が臭く

ならないか心配になって……っ！」
顔を赤くして言い訳してくる、今の今まで馬車の中で鎧を着ていたダクネスだった。

グリフォンを遠目に発見してから、こいつは一人、ジタバタと鎧を着込んでいたのだ。

ダクネスが大剣を構え、タックルで弾き飛ばしたマンティコアへと向き直る。
ダクネスなら、高レベルの状態異常耐性スキルを持っていたはずだ。
なのでマンティコアに刺されても大丈夫なのかも知れないが、ここは向こうの騎士連中が雌を仕留めるのを待った方が――

「ぶっ殺してやるっ！」

そんな事を言う間もなく、ダクネスが物騒なセリフを叫び、剣を振りかぶり襲い掛かった。
当然の事ながら、身軽なマンティコアはそれらをヒョイと躱していく。
だが、空に逃げる事は無い。

――なるほど、マンティコアの体の構造上、幾ら異世界だとは言っても航空力学的に空を飛べるのはおかしい。
地球とは重力が同じかどうかは知らないし、向こうの物理法則がこちらでも同じなのかは分からないが――

先ほど魔法封じを食らった時、飛べなくなったじゃねーかと言っていた。
こいつらは、魔力的な物で空を飛ぶのか。

そうこうしている間に、ダクネスは何度もマンティコアへと攻撃を続けていた。
それらは全て躱されるのだが、ダクネスは攻撃の手を休める事なく剣を振り続ける。

「ダクネス！　そいつはしばらく飛ぶ事が出来ない！　離れた所から矢を射かけて、もう片方の目を……」

そこまで言って、俺は気付いた。
ダクネスの様子がおかしい事に。
「カ、カズマ、ダクネスが……！　なんだか、ダクネスの様子が変ですよ！」
ダクネスが、荒い息を吐きながらも嬉々としてマンティコアを追い回していた。
いつものドM騎士はどこへやら、マンティコアから反撃を受けてもそれらを平気で鎧で止め、そのまま休む事なく――

「ハハハハハ！　フハハハハハハ！」
「おいダクネス、笑いがどっかの悪魔みたくなってんぞ！　ってゆーか、鎧だろ！　その鎧が原因だろ！」
ダクネスが身に付けている漆黒の鎧。
それが、陽の光の反射だけでなく、自らも怪しく輝いていた。
呪いか加護かは知らないが、あれの所為でダクネスがハイになっているのは間違いない。
鎧は後でひん剥くとして、今はマンティコアだ！

「グヌヌヌヌヌ、あああああああ！」
マンティコアが、歯を食いしばって変な声を上げると、翼をはためかせて空へと体を舞い上げていく。

くそ、もう状態異常の効果が切れたのか？

いや、表情が苦しそうだ、魔力が使えない中、必死で羽を動かしているだけかも知れない。

あいつを地上に落とさない事にはどうしようもない。

弓で射てもいいが、ここは覚えたての中級魔法――！

「喰らえ！　『フラッシュ』ッ！」

「ギャンッ！？」

俺の唱えた閃光魔法は空へと撃ち上げられ、マンティコアの眼前で強烈な光を放つ。

その光は、マンティコアの目と……

「ぎゃー！　目、目があああああっ！」

「な、何をやっているんですか！　自分の魔法で目をやられてどうするんですか！」

同じく、地面をのたうち回る俺の目を焼いていた。

ちくしょう、覚えたてのスキルによる弊害が！

馬車での移動の間、魔力の温存なんて考えずにちょっと試しておけば良かった！

視力が回復するのを待っていると、遠くから歓声が聞こえた。

おそらくは、雌のマンティコアを退治したのだろう。

そして――

「グハッ！」

近くから聞こえるマンティコアの声。

ダクネスが、地に落ちたマンティコアにトドメを刺したのか。
「カズマって、馬鹿なのか賢いのかどっちなのですか？」
俺は目を閉じたまま、呆れた声のめぐみんに手を引かれながら。
「こ、こんな苦労すんのも、全部家出したアイツのせーだ！　見つけたら覚えてろよー！！」
遠く、どこに居るとも知れないアクアに吼えた。

27話（後書き）

来週はアクア回

閑話（前書き）

アクア視点の閑話です。
閑話なので、ちょっと短いです。

閑話

「アクア様、流石です、素晴らしい支援魔法でした。ありがとうございます」

私の支援魔法を受けた何とか言う人が、あっさりとマンティコアを倒し、お礼を言った。

支援はしたけれども、ほとんどは魔剣のおかげだと思う。

マンティコアだなんて上位のモンスターも倒してしまうのは凄いと思うの。

これがカズマさんなら、わあわあ言いながら逃げ惑って、小技とかで誤魔化しながら私の助けでも求めるんじゃないかしら。

「どう致しまして。怪我した子はいませんか？」

言って、皆を見る。

まあ、もちろん怪我人なんていないんですけど。

毎回一瞬で戦闘が終わるから、傷を負う間もないんですけど。

「大丈夫ですアクア様。アクア様の加護のおかげか、今回も怪我人は出ておりません。お心遣い、感謝です」

言って、爽やかそうに笑う魔剣の人。

イケメンですね。

いつも昼過ぎまでゴロゴロしてるせいで、しょっちゅう後ろ髪に寝癖が付いてたり、ひねくれた精神が眼つきにまで現れてる誰かさんとは大違いね。

「キョウヤ、ご苦労様ー。アークプリーストとアークウィザードがいると、本当に楽ねー」
「ほんとほんと。お陰であたし達、出番がないもん」
槍使いの女の子と盗賊の女の子。
二人が口々に褒めてくる中、その頭を魔剣の人がポンポンと撫でてやると、二人は頬を赤らめた。

以前、ダクネスの頭をなんの脈絡も無く撫でて、ニコッと笑いかけたカズマさん。
そのダクネスに、人の髪のセットを乱しておいて何をにやけてるんだと怒られ、話が違うと凹んでいたカズマさん。
そんなカズマさんに、この光景を見せてあげたい。

撫でられただけで女の子が赤くなるのは、ラノベの中か、もしくはイケメン限定ですよ。

「このメンバーなら、魔王が相手だろうと怖くはないですね。アクア様、行きましょう！　そして、この世界に平和を取り戻すんです！」
「あ、はい」
爽やかに笑いかけてくる魔剣の人に、勢いに飲まれて適当に返事を返していると、ゆんゆんが隣にやって来た。

「……アクアさん、良いんですか？　カズマさんを待たなくても……。今頃、アクアさんを追い掛けて来てますよ？」
「ほう」

まったく。カズマはまったく。
心配しないように良い感じの書き置きを残しておいたのに、結局追い掛けて来るだなんて。

年上でお姉さんな私に頼りたいのは分かるけれど、いい加減しっかりして貰わないと。

「アクアさん、何だか嬉しそうですね」

「それほどでもないわ。それで？　追って来ているのはカズマだけかしら？」

「いえ、ダクネスさんやめぐみんも一緒だと思います。街の人も心配してましたよ。アクアさんに会ったら、テレポートで送り返しましょうかとカズマさんに聞いたんですけど、めぐみんが、アクアさんの抱えている厄介事を解決してしまうから、そのまま行かせろとは言ってましたが」

「……そーですか」

なんて予想外な。

私の入った後のお風呂の残り湯に浸かっていると、私みたいなスタイルになるご利益があるわよとからかった時、お風呂にのぼせるまで浸かっていためぐみん。

めぐみんは、その時の事を恨んでいるのかしら。

泣いて謝ったら許してくれるかしら。

どうしようかしら。生息しているモンスターは、なんかドンドン強くなるし。

旅をしていると街や村に着いた時にしかお風呂に入れないし、夜はアンデッドにたかられるしで、正直ちょっと帰りたいのだけれど。

もう既に、旅に出た事を結構後悔してるんですけど。

「で、でも、あの弱っちいカズマさんが私を追い掛けて旅する途中で、野良カエルか何かに食べられたりしないか心配なんですけど。スペランカーごっこが趣味なんですかってぐらいにポコポコ死ぬカズマさんが、レベル１になった状態で、あの二人を連れながら無事

に来れるだなんて思えないんですけど。心配なんですけど」

だから、ここは一旦引き返して……。

「大丈夫ですよ！　だって、カズマさんはウィズさんやバニルさんに連れられて、最も深いダンジョンで、紅魔族流修行法、養殖をしてますから！　きっと、様々なスキルを覚えて覚醒して帰ってきますから！　……ところで、スペランカーごっこってなんですか？」

……。

「ねえ、何それ私聞いてないんですけど！　カズマが覚醒とか何言ってるの！？　様々なスキルを覚えてって、なに！？　何を覚えようって言うの！？　私、何だか仕事を取られる嫌な予感がするんですけど！　カズマにはね、覚醒だとかそんな格好良いイベントは似合わないわよ！　いつまで経っても雑魚モンスターに苦戦しつつ、強敵相手には狡っ辛い手で勝つのがカズマなの！　ねえ、私がいない間になんでそんな面白そうなイベントが起こっているの！？」

「わ、わ、わたしにっ！　そ、そ、そんな事言われてもっ！　アクアさん、揺らさないで下さい、私はカズマさんが修行に行く前にアクアさんを追って来ちゃったので、詳細は知らないんですよ！　アクセルの街の人総掛かりで、カズマさんを鍛えたりスキルを教えたりするって……。で、スペランカーって……」

私は掴んでいたゆんゆんの両肩を放し、そのまま深く考え込む。

あの雑魚いカズマさんが覚醒？

覚醒だとか目を輝かせながら言っちゃう辺り、やっぱりこの子もめぐみんと同じ種族なんだなと実感する。

腕を組んで悩み出した私に、スペランカー……と、ぽそっと寂し

そうに呟くゆんゆん。
私が真面目に魔王退治の旅に出ている間に、街の皆でそんな楽しそうな一大イベントを？
どうしてくれようかしら、何だか私、凄く蚊帳の外なんですけど。
私はしばらく悩んだ末――
「……うん、帰りましょう」
魔王退治を諦める事にした。
「何を言い出すのですかアクア様！？　アクア様は、今がチャンスだと言ったじゃないですか！　魔王の手先が王都や街を襲いに行き、城の守りが薄くなる今が好機だと！　大丈夫です、僕を信じて下さい！　きっと魔王を倒して見せますから！　と言うか、そんなにあの男の事が心配なんですか！？」
詰め寄ってくる魔剣の人。
ちょ、ちょっと怖いんですけど。
ビクビクする私と詰め寄る魔剣の人の間に、ゆんゆんがさり気なく体を入れた。
「落ち着いて下さいミツルギさん、その、城に行くのはカズマさん達が追い付くのを待ってからでもいいんじゃないですか？　城に行くにしても戦力が増えますし、アクアさんもその方が安心すると思いますし」
流石紅魔族、賢い。凄く賢い。
ゆんゆんの背中から顔を覗かせ、それは良い考えだとうんうん頷く私に、魔剣の人がちょっと寂しそうな顔をした。

魔剣の人は、そのままクルリと背を向けると。
「……先を急ぎましょう。アクア様、あの男が心配なのは分かりますが、世界の命運が掛かっているんです。アクア様、今回の旅の目的を思い出して下さい。世界中の弱者を救うため、魔王との戦いを終わらせるために立ち上がったんでしょう？　……僕が、ずっと傍に付いていますから」
そんな、漫画の主人公みたいなセリフを言った。

どうしようかしら、何だか凄く温度差がある気がするわ。
私、いつから世界中の弱者を救うために立ち上がったのかしら。
そんな格好良い理由で旅に出たんだっけ。

魔剣の人の取り巻きの女の子二人が、複雑そうな表情を私に向けた。
魔剣の人は、今流行りの鈍感系なのかしら。
女の子二人への、さっきの自然な仕草での頭撫でを見た感じ、魔剣の人は無意識系のたらしね。
そう言えば、ゆんゆんにもこの旅の間に、僕の事はキョウヤって呼び捨てでいいよと笑い掛けたりと、魔剣の人ハーレムに取り込もうと頑張っていた。
でも当のゆんゆんは、魔剣の人に話し掛けられる度にビクッとしたり、頑なにミツルギさんと呼んでいる所を見ると、ハーレム入りは難しそう。

魔剣の人は、背を向けたまま。
「僕は何があってもあなたを守ります。アクア様の最強の鎧になります。盾になります。立ち塞がる全ての敵を切り裂く剣になります。ですからどうか、あの男よりも、僕を信じて付いて来て下さい」
そんな、主人公みたいなセリフを言った。

でも一つだけ。訂正させて貰わないと。

――私の最強の盾と鎧はダクネスです。

モンスターの群れを一人で退治してしまった魔剣の人は、馬車の御者台に歩いて行った。

アクセルの街から出ている馬車に乗り、朝一で旅に出た訳だけれども。

馬車を出している商隊の人達との、最初の野営の最中にアンデッドにたかられた。

そこを、魔剣の人達に助けられ、なし崩し的に現在に到る訳なのだけれど。

「アクアさん、元気ないですね？　アルカンレティアの街を出てから、なんだかつまらなそうですが……」

馬車に乗り込んで荷台で揺られながら、ぼーっとしていると、ゆんゆんが話しかけてきた。

アルカンレティアから先には乗合馬車は出ていない。
ここから先は魔王軍の領域で、注意勧告が出されているから。

私とゆんゆんは馬車の荷台に。
そして、魔剣の人は御者台に座り、すぐ後ろには女の子二人を座らせて、楽しげに話をしていた。
この馬車は魔剣の人が買った物らしい。
流石はチート持ち、ポンと馬車を買っちゃうなんてお金持ちですね。

「元気が無いことはないわよ？　なんて言うか、順調よね。以前カズマ達と旅していた時はもっとこう、波瀾万丈というか、毎日が危機一髪的な旅だったんだけれど。もちろんそれが良いって事は無いんですけど。でも、なんていうかその……」

つまらない。

そう、つまらないわね。
ダクネスがモンスターの群れに突っ込んで袋叩きに遭い、カズマが半泣きで助けに行き、めぐみんが爆裂魔法で吹き飛ばして、それを、私の高貴な回復魔法で優雅に収集するっていうのがいつもの流れだったはずなのだけれど。

もちろん、旅が順調なのは楽ちんで良い。
モンスターと遭遇しても、現れた瞬間に魔剣の人に大半が倒されて、残ったものはゆんゆんの魔法で一掃される。
魔剣の人の仲間の二人も、出番が無くてなんだか退屈そうにしていた。

口をもごもごさせて黙り込んだ私に、ゆんゆんが。

「あ、そう言えば。こないだ立ち寄った、アルカンレティアの街で何をしていたんですか？　アクシズ教団の教会に足を運んでいたみたいですけど」
「ああ、あれ？　あれはね……！」

◆◆

旅は順調だった。
本当に、ビックリするぐらいに。
魔王の城へと向かう道中、魔王軍との前線基地の役割も果たしている小さな村々に立ち寄りながら、着々と旅を進めて行く。
そんな訳で、魔王の城にかなり近い、半ば砦と化している村の酒場で休憩中なのだけれど——

「ねえ、来ないんですけど。私が旅に出てからもう十日以上経っているのに、まだカズマさんたら追い付かないんですけど」
「そ、それはその……。きっと、私達が順調だから、なかなか追い付けないんじゃないでしょうか。……あの、ミツルギさん。やっぱり、少しだけでも待ってあげるっていうのは……」
「……ダメだよ。こうしている間にも、魔王軍による侵攻計画は着々と進んでいるんだ。というか、そろそろアクセルの街が襲撃を受けていてもおかしくないんじゃないかな。きっと、街の住人にも大きな被害が出るだろう。今後、こんな犠牲を出さないためにも、一刻も早く魔王を倒さないと。……それに、彼は一緒に居ても戦力に

ならないさ。どんな修行をしたって、僕のように特殊な力を授けられた人間じゃないしね」

言いながら、魔剣の人がギュッと拳を握った。

私を真っ直ぐ見つめているのが怖いんですけど。

と言うかこの人は、そんなにカズマの事が嫌いなのかしら。

そりゃあ、捻くれてて働かなくて街でも悪名高く、女相手でも遠慮無く叩いてくるしやられたらやり返すし、エロいくせにヘタレだし弱いくせに強気な時もあれば、権力に媚びへつらったり、かと思えば権力者のコネなんかを平気で使ってみたり……。

……。

「ねえ、ゆんゆん困ったわ！　カズマのフォローをしてあげようかと思ったんだけど、ビックリするぐらいに悪い所がポコポコ思い浮かぶの！」

「ア、アクアさん、そんな事は口に出しちゃいけませんよ、カズマさんが聞いたら泣きますよ！？」

それを聞いていた魔剣の人が、苦笑しながら席を立つ。

「アクア様はゆっくりしていて下さい。僕は、これから魔王の城へと向かう細かい道をこの村の人達に聞いてきますから」

言って、酒場を出て行った魔剣の人。

同じテーブルに居た二人の女の子も、魔剣の人を追って出て行ってしまった。

……。

「……悪い所はたくさんあるけど、良い所だってあるのよ？　皆が無理難題押し付けても面倒事を起こしても、最後には、しょうがねえなあとか言いながらなんとかしてくれたり。……最後の最後に頼りになるのは、やっぱりカズマさんなんですけど」

「そ、それは、もうちょっと早く言ってあげてください」

ゆんゆんが、私の隣で言ってくる。

……つまらない。

旅は順調で、困難も無く、特に目立ったトラブルも無い。

ちょっと道中の村々で小さなトラブルがあったけれど、どれも些細な事。

そう。

今だって、こうして頭に水の入ったコップを乗せて、宴会芸発動の構えを見せても……

「ア、アクアさん、みんな見てますよ？　女の人がそんなバカな格好しちゃダメですよ！？」

こうして、突っ込んでくれるのもゆんゆん一人。

以前、魔剣の人の前でこんな事をした時は、ニコニコしながら私を眺めているだけで、何も言ってはくれなかった。

どこかの短気な誰かさんは、私が何かやらかす度に、キレのある突っ込みを入れてくれたものなのだけれど。

酒場中の注目を集めた私は、小さな種を親指で弾き、頭の上のコップに投入し。

そして叫んだ。

「『花鳥風月』！」

酒場を後にした私の後ろを、ゆんゆんが慌てて追って来た。
「ア、アクアさん、どうしましょうか、この大量のおひねりは……！　ていうか、良いんですか？　凄い盛り上がりだったのに放って出てきちゃっても……」
「いいのよ。ていうか、おひねりは要らないわ。私は芸人じゃないので、それを受け取る事は出来ないわ。アクシズ教会は無いかしら。そこに寄付でも……」
と、私がキョロキョロと辺りを見渡していると、そこに人集りを見つけた。
なにやら、村の貯水池に人が集まっている。
「どうしたんですかね？　何だか良くない雰囲気ですが」
「ちょっと行ってみましょうか。水の事で困っているのなら、この私の出番じゃないかしら」
言って、そちらに歩いて行く私をゆんゆんが慌てて止めた。
「ま、待って下さい、その、まずは私が行って何があったのかを聞いてきますから！　ほら、アクアさんって毎回毎回、何かしらの事に巻き込まれてますし、きっと今回も……！」
ゆんゆんは心配性ね。
でも、そのゆんゆんの姿はなぜか、頼むから余計な事はすんなと慌てて止める、カズマの姿と重なった。

慌てるゆんゆんを見て、どうしてだか少しだけやる気が出て来る。

「この私を誰だと思ってるの？　ゆんゆん、大丈夫よ。水のトラブルならアクシズ教！　そして、アクシズ教のアークプリーストの私に掛かれば、これはもう解決されたも当然じゃないかしら！」

「アクアさん、私、既に嫌な予感しかしませんから！　ああっ、待って下さい！」

私は意気揚々と人集りの方に歩いて行く。

そして、居並ぶ人達に声をかけた。

「何か、水の事で困っているのかしら。私は通りすがりのアクシズ教のアークプリーストよ。水と言えばアクシズ教！　アクシズ教を、よろしくお願いします！」

「ア、アクシズ教！」

「お、おい、あのアクシズ教徒かよ、関わらない方が……」

私の言葉に、周囲の人達が畏敬の目で私を見てくる。

でも、畏敬の視線と言うよりも、なんだか怯えた視線も混ざっている気がするのはなぜかしら。

やがて集まっていた人達がお互いに肘で突つき合い、一人の男の人が私の前に。

「その、実は村の貯水池がこの有り様でして。どうも、池が汚染されたらしくて、ブルータルアリゲーターの子供がそこかしこに住み始めているんですよ。このモンスターは退治すると、強烈な毒素を周囲に撒きます。なので、迂闊に手が出せないんです。水の浄化を行えば、綺麗な水を嫌うこいつらは離れていくと思うんですが……」

「そう。それは大変ね。では、私はこれで……」

「アクアさん、どこに行くつもりなんです！？　先ほどの勢いはどうなったんですか！？」

そそくさと立ち去ろうとする私の腕を、ゆんゆんが慌てて掴んできた。

「ゆんゆん、離して！　私、あのワニには嫌な記憶があるの！　ゆんゆんの言った通りだったわ、私も急に、ろくな目に遭わない嫌な予感が……！」

「わ、分かりました、分かりましたから、そんな慌てて走ろうとすると転びま……、あっ！」

「「「「ああっ！」」」」

ゆんゆんに突然手を離されて、私はもんどりうって貯水池の中に落ちてしまう。

「アクアさんすいません！　すぐ引っ張り上げますから……、って、ああっ！　ブルータルアリゲーターが急にこっちに！　ちょっと待ってて下さいね、緊急事態なので退治します！」

「ま、待ってくれ！　退治してくれるのは有難いんだが、貴重な水の汚染は困る！　本当に困るんだよ！」

「そ、そうだ！　ちょっとみんなで考えよう！　そうだ、竿か何かを持って来い！　あの姉ちゃんを引っ張り上げよう！」

集まっていた人達がゆんゆんを慌てて止める中、水に浸かった私に向けて、アリゲーター達が――

「ねえ、相談なんてしてないで、引っ張り上げるか退治するかして欲しいんですけど！　ていうか、どうしてワニが私に集まってくるの！？」

意外と深い貯水池に、胸まで浸かった私に向けて、ワニ達がゆっくりと向　かって来る。

見れば、私の周囲の水が勝手にどんどん浄化されていく。

迫り来るワニを前に、私は、その場に居るはずもない頼りないニートの名前を叫んでいた。

「わあああああ、カズマさーん！　カズマさーん！！　色々謝るから助けてカズマーッ！」

閑話（後書き）

次回更新は8月25日の日曜ではなく、26日か27日になる予定です。
その際、お知らせ的な物があるので、それに合わせる感じとなります。
更新時間は未定です、ご迷惑をお掛けいたします。

28話

「いい加減余計な手間取らせるな！　いいからとっとと脱げ、力ずくで剥かれたいのか！　抵抗すんなよっ！」
「よせっ、止めろ！　こんな、こんな……っ！　どうしたんだカズマ、天下の往来で突然こんな……！　ケダモノの様に私の体を求めるだなんて……！」

このバカッ！

「その、忌まわしい鎧を脱げと言ってんだよ！　毎回毎回、どうしてお前は敵に突っ込んで行くんだ！　呪われてるだろ！　その鎧、間違いなく呪いが掛かってるだろ！」
「呪いなど無い！　呪われた装備品は、一度身に付けると所有者に災いを与え続け、死ぬまでその身から外す事が出来なくなる。これはちゃんと取り外しが出来る以上、戦闘時に湧き上がるあのおかしな高揚感は、呪いではなく加護の類だ！」
「お前、戦闘時におかしくなってる事は認めるんだな！　なら話は早い、呪いでも加護でもなんでもいい、とっととそいつを外せ！　こっ、こらっ、抵抗するなって！　この街で一番良い鎧を買ってやるから！」

水の都アルカンレティア。
アクセルの街を出た俺達は、騎士達に護衛されたまま、何度かモンスターとの戦闘をこなし。
そして温泉街ドリスを経て、この街へと転送して貰ったのだが。

「嫌だ！　一度寄越した物を返せだなんて、器が小さいぞ！　初めて貰ったプレゼントな上に、強力な魔法の掛かった、業物のクルセ

イダー専用装備。これはダスティネス家の家宝にする。魔王を倒すまでは、寝る時と風呂の時以外にはこれは脱がない」
「なんでそんな我儘言うんだ！　お前がそれを着てるとめぐみんが魔法を撃てないんだよ、真っ先に敵のど真ん中に突撃するから！　お陰で、この街に来るまでにどれだけ苦労したのか分かってんのか！　護衛してくれていた騎士の人達が、毎回半泣きになってただろうが！」

現在、街の往来にて。
頑なに装備を変えようとはしないダクネスと、俺は激しく言い争っていた。
ダクネスにあげたこの鎧は、どうもおかしな作用があるらしい。所有者の心から恐怖を無くし、勇気を奮い立たせる魔法の効果があるようだ。
真っ当なクルセイダーになら、その効果は素晴らしい恩恵に違いない。
――だが、うちのクルセイダーにとってその効果は迷惑極まりない。
どこがどうおかしな作用をしているのか、戦闘が始まると人の制止も聞かず、真っ先にモンスターに向かって駆け出して行くのだ。

ダクネスにやったこの鎧は、ウィズが選んだ品だと言う事を忘れていた。
ウィズの商品の鑑定眼については、十分に知っていたはずなのに……。

と、横でじっと成り行きを見守っていためぐみんが、口を開いた。
「もう諦めましょうカズマ。おかしな副作用がありますが、確かにこの鎧は業物です。伝説級の装備にも劣らない代物かも知れません。これなら、私の爆裂魔法を受けても死ぬことは無いでしょう」

「お前もサラッと何言ってんだ！　撃つってか！　ダクネスがモンスターと居ても、そこに爆裂魔法を撃つって意味か！」
ダクネスは、めぐみんの物騒な発言を受け、腕を組みながらふむと呟く。
「私は一向に構わんが。昔、めぐみんの爆裂魔法を食らった時は意識を失ってしまったからな。今度は負けんぞ」
「ほう。我が魔力とダクネスの耐久力。どちらが上が、勝負しますか？」
「止めろ！　そういった事は、アクアを連れ戻してからアクセルに帰った時にでもやってくれ！　て言うか、いい加減にしろ！　お前、その鎧を手放さないなら本当に力尽くで剥くからな！」
言って、俺はダクネスに片手を突き出しスティールの体勢を……！
「やってみろ」
……。
「えっ」
思わず素になる俺に、ダクネスが腕を組んだまま。
「やってみろ。私は一向に構わん」
そんな、バカな事を公衆の面前で言ってのけた。
「お、お前何言ってんだ、スティールだぞ？　俺のスティールが、どういった代物か、長い付き合いのお前は知っているだろ？」
「無論だ。その上で言っている。そう言えば私だけ、お前のスティールを食らった事がない。以前ならば躊躇しただろうが、この鎧の加護のおかげで勇気溢れる今ならば、何も恐れるものはない。さあ

やってみろ！　肝心な所ではヘタれるお前が、この公衆の面前で私を剥けるものならやってみろ！」

「へ、変態！　なんでそんなにアグレッシブなんだよ！　自分で何言ってるのか分かってんのか、やっぱりその鎧は問題あるぞ！　分かったよ、俺には無理だよ、認めるよ！　分かったからグイグイくるな！」

鎧の効果か、どうしようもない方向にますます磨きがかかった変態に、俺がジリジリと押されていると。

「……変ですね。これだけ騒いでいると言うのに、誰も姿を見せません。この街の住人なんて殆どがアクシズ教徒で構成されているはずなのですが。アクシズ教徒の習性として、好奇心旺盛、厄介事や揉め事が好き、騒ぎがあれば便乗し被害を拡大したがる、祭りが好き等々。こんな道端で騒いでいれば、まずちょっかい掛けてくるはずなのですが」

「なんてはた迷惑な連中なんだよ。……でも、確かに変だな。以前この街に転送された時は、転送先で宗教の勧誘とかやってたよな、そういや。それが……」

改めて街を見回すと、通行人が殆どいない。

何と言うか、閑散としていて――

「この街はそれなりに大きな街なのだが。それにしては人が少ないな？　どうした事だ、何かあったのか？」

ダクネスが首を傾げ、俺と同じく辺りを見回している。

そんな俺達に、めぐみんが。

「何があったのかは、これから聞くとしましょうか。ここから先は、

徒歩か馬車で行くしかありませんので、馬車の調達などもしなくてはいけませんし」

「いらっしゃいませ！　何になさいますか？　期間限定で、冷たいスイーツが付いてくる日替わりランチがございますが、それがオススメですよ？　ちなみに。当店はアクシズ教徒であれば、三割引とさせて頂いております。宜しかったらこちらをどうぞ！」

スマイルを浮かべながら、メニューと共に紙をスッと出してくるウェイトレス。

メニューと共に出された紙は、アクシズ教団への入信書。

……そう言えば、この街はこういう所だった。

情報収集と昼飯のついでに入った店で、俺達は早速この街の洗礼を受けていた。

「……ええと。それじゃあ、その日替わりで」

「はいっ！　そちらの方は……？」

「私は、キンキンに冷えたネロイドとサンドイッチをお願いします」

「はいっ！」

笑顔を浮かべて俺とめぐみんの注文を取るウェイトレス。

続いてダクネスがメニューを開き、

「ん……。では、私は……」

「土でも食ってろ」

注文しようとするダクネスに、ウェイトレスは笑顔を浮かべたま

ま吐き捨てる様に言うと、そのまま厨房へと去って行った。
「……」
メニューを開いたまま頬を染め、ふるふると震えて固まっているダクネスに。
「お前、この街では、エリス教徒の証みたいなそのペンダントは隠しておけよ」
「……こ、断る……」

この街に着くや、これみよがしにエリス教徒のペンダントを胸元から取り出したダクネス。
以前この街に来た際に、これを身に付けていて手酷い目に遭わされたのが気に入ったのか。
「……しかし、お昼時だと言うのに店の中も閑散としてますね。この街は、頭のおかしい人達で常に賑やかだったはずなのですが……」
紅魔族のめぐみんにこんな事を言われるアクシズ教徒。
だが、確かに以前来た様な迷惑感があまりない。
以前は、道を歩けば鬱陶しい勧誘に遭遇したのだが――

「この街のアクシズ教徒達は、教団責任者のゼスタ様指揮の元、魔王の城へと続く道の、モンスターや魔王軍狩りに出掛けております」
アクシズ教徒のお姉さんが、気合の入った顔で教えてくれた。
水色の胸当てを付け、片手にメイス、片手に銀色の盾という格好で、アクシズ教団の教会の正面に仁王立ちしながら。

飯を終えた俺達は、そそくさと店を後にして、事情を聞くべくアクシズ教団の教会にやって来ていた。
先ほどの店では、事あるごとにダクネスが絡まれるので、情報収集どころではなくなったのだ。
他の店に行ってもどうせ同じ事になるだろうと、アクアのツテを使い、教団の力を借りようかと思ったのだが。

「アクシズ教徒って、そんな、世のため人のためになりそうな事もするんだな」
「我々を、日頃人に迷惑掛けて楽しむのが生き甲斐みたいな、そんな穿った見方はやめてください。我々に関する悪い噂は、心無い邪悪なエリス教徒によるものなのです」

教会を背にして、そこを守る様に立ち塞がっているお姉さんが、悲しげな表情で訴えた。

「……ちなみに、あんたは今、そこで何してんの？」
「アクシズ教徒の大半が留守にしている今、日頃散々好き放題やってきたツケが回ってきているんですよ。エリス教の女性神官を筆頭に、この街の少数派である、非アクシズ教徒達が教会にいたずらしに来るんです」
「日頃好き放題やってる自覚はあるんじゃねーか！　いや、あんた一人で大丈夫なのか？」

俺は、見覚えのあるその女性信者に、少しだけ気になって尋ねた。
確かこの姉ちゃんは、めぐみんの爆裂魔法でこの街の湖に浮いた魚を、嬉々として捕獲していた人だ。

俺の言葉にお姉さんは微少を浮かべ、
「大丈夫ですよ。ノコノコと現れた背教者には、この太くて硬くて大きいメイスで、もれなく大人にしてあげますから」
「や、やめてやれよ！　そういうのがアクシズ教徒の悪評に繋がるんだよ！　……所で。この街にアクアが立ち寄らなかったか？　その辺の情報収集がしたいんだけど、この街の店じゃろくな話が聞けなくてさ」

お姉さんは、アクアという単語にぱあっと顔を綻ばせ、
「いらっしゃいました！　ええ、いらっしゃいましたよ、アクア様が！　と言うか、現在この街のアクシズ教徒が出払っているのもアクア様のお言葉に従ってのものなんです！　あああ、本来なら私も魔王軍狩りに行きたかったのになあ……！　残念な事に、居残りじゃんけんで負けちゃったんですよ」
言いながら、つまらなそうに足元の石を蹴る。
蹴られた石がダクネスの鎧の脛当てに当たったが、お姉さんは悪びれる様子もない。

「アクアの命令で魔王軍狩り？　どういう事だ？　その辺をちょっと詳しく聞きたいんだけど」
「……アクア様はおっしゃいました。『なんじらー、日々清く正しく我が道を行くアクシズ教徒よ。この街から魔王の城までの道を、旅人とかが安全に、かつ迅速に通れる様に、強くて逞しくて格好良いあなた達が道を脅かすモンスター達を成敗するのです。さすれば、魔王が倒された暁には、この世界に降臨してきた通りすがりのアクア様が、実は私が女神なのでした！　とか言って、ここに遊びに来るかも知れません。一人一人にお褒めと感謝の言葉を授けるかも知れません』……と」

俺の言葉にお姉さんは、鎧に石をぶつけられて涙目で悔しそうに

歯を食いしばるダクネスには目もくれず、恍惚とした表情でうっとりと言った。

と言うか、アクアは何の目的で、アクシズ教徒に街道警備なんてさせてるんだ。

……俺達か？

あいつ、俺達が追って来るのを期待してやがんのか？

なんていうか本当に、家出した子供が探して欲しがっている様な状況だな。

こんな面倒臭い事をせず、もう少し足を遅めてくれればいいのに。

全く、あいつは……。

「あの、アクアは一人でしたか？　魔剣を持ったいけ好かないイケメン達と一緒じゃありませんでしたか？」

「ああ、居ましたねそんな人達が。街の出口までアクア様をお見送りした際に、高そうな剣を持ったイケメンが、相場で失敗して金欠な私に見せ付けるかのごとく、高そうな馬車に乗っておりました。私の必殺の流し目にも動じない方でしたね」

この人、以前もギャンブルか何かで金欠だとか言ってなかったか。

しかし、ミツルギとは無事合流できたのか。これで、取り敢えずは安心だ。

「……ん、なるほど。……ああ、ついでに聞きたいのだが。馬車を借りられる店などはあるか？　高く付いてもいいので、出来れば脚の早いヤツが借りられそうな……」

「当教会が保有している馬が、恐らくはこの街において最も脚が早いと思います。……でも、女神エリスの犬であるならば、四つ足で走れば良いんじゃないですかね。邪悪なエリス教徒にはそれがお似

合い……、あ あっ、背教者め、何をするの！」
我慢の限界に達したのか、とうとう女信者と掴み合いの喧嘩を始めたダクネスを押し留めると、金欠信者の目の前に札束を突き出した。
「悪いんだが、そいつを貸して貰えないかな。金なら……」
「貴方様に女神アクアの祝福を！」

◆◆

宿に泊まりもせずに水の都を出た俺達は、アクアを追って馬車を走らせていた。
アクシズ教徒による、モンスターや魔王軍の掃討作戦が効いているのか、道中は至って順調だ。
いや、順調なのだが……。

「おいダクネス。順調なのはいいんだけどさ。ちょっと飛ばし過ぎじゃないか？　もうちょい速度を緩めても大丈夫だと思うぞ。アクシズ教徒が頑張っているとは言っても、モンスターが根絶やしになっている訳じゃないと思うしさ。モンスターでも飛び出してきたら馬がびっくりするだろ？」

そんな俺の言葉に、御者席で馬を操るダクネスは無言のままだ。
少ない人数で旅をするなら、馬が引く馬車も出来るだけ小さい方が良い。
二頭仕立ての馬が引く馬車は二人乗り。
御者席には唯一馬を扱えるダクネスが座り、俺とめぐみんはその

後ろに座っていた。

「ダクネス、確かにちょっと……。飛ばし過ぎの様な気がします。アクアが心配なのは分かるのですが、あまり急ぐと馬を潰してしまいますよ？」

めぐみんも、少しだけ不安そうな表情を浮かべ、言ってくる。

「……」

それでも返事もせず、速度も落とさないダクネスに、俺は再び声を掛けた。

「おい、聞いてんのか？　飛ばし過ぎだって。もうちょっと、速度を……」

言いかけた俺に、ダクネスが半泣きの表情で振り向くと……。

「……馬が、言う事を聞いてくれないのだが……」

「「……」」

めぐみんと共に無言になる俺に、ダクネスが。

「聞いたことがある。アルカンレティアでは、馬ですらもアクシズ教徒に洗脳されていると。アクシズ教徒の言う事以外は聞かないとかなんとか……」

「止めろおおおおー！」

「あっ！　カズマ、見てください！　馬車の隅に、アクシズ教への入信書が置いてあります！　ハメられたんです！　私達は、あの信者にハメられたんですよ！」

暴走を始めた馬車の中、俺は今こそシミジミと実感していた。

アクシズ教徒は頭がおかしい、と。

「あああ、畜生ー！　魔王軍よりも先にアクシズ教徒を滅ぼすべ

きだろ！」

「カ、カズマ、ここは一つ、我々を代表してカズマがちょこちょこっと入信書にサインを……！」

「お、おい、私の言う事を聞いてくれ！　ほら、どーどー！　言う事を聞いてくれたら、後で新鮮な野菜をやるぞ！　採れたてピチピチで跳ね回っているヤツだ！」

馬を宥めるダクネスに、頭を抱えて叫ぶ俺。

めぐみんが、入信書を手に暴走する馬車内でバランスを失いコケる中……。

「ああっ！　前方に人が！　カズマ、どうしよう！　このままでは前にいる人達を轢いてしまうぞ！」

ダクネスが、切羽詰まった声で叫びをあげた。

激しく揺れてバランスの悪い馬車内から、なんとか前方を見てみれば、そこにはかなりの人影が。

一人や二人じゃない、このままじゃあ……！

……。

「ダクネス。構わん。そのまま轢け」

「「えっ」」

ダクネスとめぐみんが少し引きながらこちらを見る。

前方にたむろする人影の正体を、千里眼スキルで確認した俺は。

「構わん。轢け。むしろ盛大に轢いてやれ！　あそこにいるのは……！」

迫りくる馬車の存在に、前方にたむろしている集団の方も気付いた様だ。

わらわらと人影が道を開ける中、一人の男が道のど真ん中に留まっている。

そいつは、迫り来る馬車の荷台の俺達や、御者台のダクネスの顔に気付いた様だ。

神官服の上に鉄の胸当てを着た白髪のおっさん。

それが、こちらに朗らかに手を降っている。

「これはこれは、アクア様のお仲間の！　お久しぶりです、覚えていますか？　アクシズ教のプリースト兼、教団責任者の……！」

ノコノコと馬車の前に出て来たアクシズ教徒プリースト、ゼスタを、暴走する馬車が跳ね飛ばした。

「『ヒール』！　『ヒール』ッ！　……どうだ？　少しはマシになったか？」

「ええ、大分楽になりました。いやいや、自分で治してもいいんですがね？　やはり、若い人に掛けて貰うヒールは良い！　傷だけでなく、心まで癒やされますよ！」

「さすが、何でもいけるゼスタ様！　筋金入りだぜえ……！」

「穴があればオークもいける！　が、ゼスタ様の座右の銘だしな！　ぱねえ！　ゼスタ様マジぱねえっす！」

俺がヒールを掛ける間、ろくな事しか言わないこの男。
このおっさんが、一応は教団の一番偉い人なんだよな。
……一応は。

「お久しぶりです皆さん。何時ぞやは、私が警察にお世話になっている間に旅立たれてしまった様で。別れの挨拶が出来ず、残念でしたよ。しかし、まさかカズマ殿にこんな手酷い仕打ちを受けるとは。これはもう、お詫びとしてアクシズ教団に入って頂くか、私とステディな関係になって頂くかしか、選択肢はありませんな」
「言っとくけど、お前の所で借りた馬が暴走してお前を轢いたんだからな。馬にまでおかしな事するなよな」

どうしようもない事を口走るゼスタにやり返しながら、俺はアクシズ教徒の面々を見る。
男も女も子供も老人も、服装も装備もバラバラで、一見すると何の集団なのか分からない。
だが、一つだけ共通している事がある。
それは……。

「お兄さんていけめんだよね！　ねえ、お兄ちゃんって呼んでもいい？」
「こら、駄目よ！　確かにイケメンで素敵なお兄さんだけど、アクシズ教徒でもない人をお兄ちゃんだなんて……。甘えたいお兄ちゃんが欲しいのは分かるけれど、アクシズ教徒にしなさい？　イケメンだけど残念ねえ……」
「分かったー……。……ねえお兄ちゃん、お兄ちゃんは、アクシズ教徒は嫌いですか？」

嫌いじゃないよ。

不安気に見つめてくる女の子に、喉まで出掛かったその言葉をなんとか飲み込む。
返事をしない俺に、女の子と母親と覚しき二人は、別の信者に手を差し出し、タッチした。
タッチされた別の信者。
ヒラヒラのゴスロリみたいな服を着た、やたらと可愛い少女が上目遣いでこちらを見上げ……。
「あの……。お兄さま、って、呼んでもいいですか？」
「いいわけあるか！　その声、お前男だろ！　なんでアクシス教徒にはホモが多いんだよ！」
「ぼ、僕、ホモじゃないです！　両方行けます！」
「もういい喋るな、あっち行け！　ウチはもう変態枠は埋まってるんだ、キワモノは、ドMクルセイダー一人で間に合ってるんだよ！」
「えっ！」
ダクネスが自分の顔を指さして驚いている中、俺はゴスロリを着た少年を追い払う。
こいつらと話していると疲れる。
本当に疲れる。

――だが。
俺達よりも、もっとぐったりとした奴が、そこに居た。

「お前が、一番疲れてそうだな。……ていうか、やつれてんな」
「うるせーよ……。チッ、なんでお前がこんな所にいるんだよ。ここから先は、魔王軍との前線基地になっている小さな村ぐらいしか見るものなんてねーぞ。ああ、気分悪い……！　変な集団に絡まれたと思ったら、一番見たくねえ顔を見ちまったよ！」

言いながら、地面に唾を吐き捨てるプリースト。

アクセルの街から逃げたと言っていた、俺を殺した邪神の崇拝者。
魔王の幹部であるセレナが、なぜかアクシズ教徒に囲まれてげんなりしていた。

どこかのプリースト然とした服装のため、モンスターや魔王軍狩りをしていたアクシズ教徒に絡まれていたらしい。
ダクネスがなぜか落ち込み、そして、めぐみんがこめかみをピクつかせて　セレナに杖を構える中、全く空気を読まないアクシズ教徒達が、セレナに対してセクハラしていた。

「くっ！　きっさまあ、そんなエロい体をしやがって、一体何が目的なんだ！　どこの街の、どの宗派のプリーストだ、名乗るが良い！」

「そうだそうだ、今度皆で冷やかしに行くから教えろください！」

「あっ！　この姉ちゃんの後ろに回ると、ブラ紐が透けて見えるぞ！　このけしからんサイズの胸、エリス教徒とは関係が無いのか……！？」

「いや待て、宗派と胸の成長補正はあまり関わりがないと言う報告が、学会に提出されている。そこら辺の統計的にも、どこの宗派かを教えなさい！　具体的に、どこの街の教会で、何時ぐらいに行けば会えるのかを！　別に、聖戦の名の元に喜び勇んでセクハラしに行く訳ではないので、安心しなさい！」

「……て、てめえら、いい加減にしておけよ……？」

我慢の限界に近そうなセレナに。

「……なんていうか、ここでお前に会うとか良いタイミングだな。丁度いいわ、お前に色々と聞きたかったんだよ。俺を殺してくれた事はムカつくが、質問に答えてくれれば、今回は、お前の事を見逃してやってもいいぞ」

「ぺっ」

「「「ああっ！」」」

セレナは、それが返答だとでも言うかの様に、地面に唾を吐き捨てた。

そのふてぶてしい態度を見て、アクシズ教徒が声を上げる。

「へっ。バカも休み休み言え。なんであたしが、お前なんかの質問に答えなきゃいけないんだ。それとも何か？　また、あたしに対価でも支払うか？　最も、もうお前なんかを傀儡にするのは……って、おいお前ら何やってんだよ！　何やってんだよっ！？　あたしが唾を吐き捨てた所を掘り返して、何やってんだよ！」

セレナの指摘の通り、数多のアクシズ教徒達が、セレナの唾が染み込んだ土を取り合い喧嘩していた。

なんていうかもう、レベルが高過ぎてどうしようもない。

と、何に使う気か知りたくも無いが、土の争奪に勝利したゼスタが、大切な宝物でもしまう様にその土を瓶に詰め、懐へ。

「……ふう。これはこれは、我が同志達がお見苦しい所を見せました、申し訳ありませんね美しいお嬢さん」

「いや待てよ、お前が言うなよ！　すげえ不快だから止めろよそれ！　マジでそういうの止めてくれよ！　そもそも、お前らは一体何

なんだ！　さっきからあたしに好き放題やってる癖に、誰一人、あたしに貸しを作ったと思っていないってのはどういうこった！　感謝とか色々あるだろ！」

セレナの言葉に、ゼスタは大仰に手を掲げ。

「感謝！？　それはもう、感謝していますとも、我らの神に！　ああ、今日のこの幸運も、全ては私達の日頃の行いと信仰のお陰……！　ああ、ありがたやありがたや……！」

そんな事を言いながら、ゼスタはセレナに向かって、その頭を深く下げた。

「何なんだよ本当に、この頭のイカれた集団はよ！　ああもう、訳が分からなくなってきた！　っていうか……。おいカズマ。そもそも、なんでお前はピンピンしてるんだ？　確かに、お前にはあたしのデスを……、おいこらオッサン！　お前、何頭を下げる振りしてパンツ覗こうとしてんだよ！　いい加減にしろよ、ぶっ殺すぞてめえ！」

セレナがどれだけ吠えようと、全くブレないゼスタは放っておき。

「アクアってプリーストがいただろ。あいつは、腕は確かでな。蘇生の魔法で生き返らせて貰ったんだよ。……それより、聞きたい事が色々あるんだって」

俺の言葉に、セレナは腰の後ろに括り付けていたメイスを取り出し、それを俺に向かって突き出した。

「だから、なんであたしがお前の質問なんかに答えなきゃいけないんだよ。それとも、力尽くで吐かせてみるか？　レベルを下げられたとはいえ、ここにいる連中をどうにかするぐらいの力はあるんだぜ？　……それに。見た所、蘇生が出来るって言うあのプリーストは居ないみたいだな。どうする？　それでもやり合うか？」

セレナは、メイスを突き付けたまま不敵に笑う。
流石は魔王の幹部、レベルが下がったとはいえ、まだまだ自信と余裕に溢れている。
ダクネスが、音が聞こえるぐらいに固く拳を握りしめ、めぐみんが爆裂魔法の詠唱を始めようとする中。
――セレナが言った。
「しかし、アクアとか言ったかあの女。お前なんかじゃなく、あの女の方を殺っておくべきだったね。失敗したねえ、全く……」
――その言葉に、場の空気が一瞬で固まる。
セレナの後ろに回り込んで、透けるブラ紐を拝もうとしていた者。
エリス教徒のダクネスに、せっせと石を投げていた子供。
そして――
「今、なんと？」
セレナの下着をなんとか盗み見ようと、地面に這いつくばった姿勢で歩伏前進していたゼスタ。

それが、静かな声で問い掛けながら、膝の土を払いもせずに立ち上がる。
場の空気が変わった事に気付かないセレナは、俺に突き付けていたメイスを肩に担ぎ。

「なんと？　アクアとか言った、あのすっトロい女を殺っとけば良かったなって言ったんだよ。……で？　どうすんだカズマ。いい加減、あたしも限界に近いんだわ。助けて欲しけりゃ命乞いしな。お前が厄介な相手だってのは知っている。相手をするのは面倒臭いし、見逃してやってもいいぜ？　ああ、最も」

セレナは、余裕たっぷりに不敵に笑い。

「この連中は、駄目だ。お前の知り合いみたいだが、ちょっとあたしをおちょくり過ぎたな。ここまで魔王領に近くなれば、もう、あたしを追って来れる騎士もいないだろうな。……さあ、どうする？」

言いながら。
担いでいたメイスで、挑発するかの様に自分の右肩をトントンと叩いた。

「カズマ殿。こちらのお嬢さんがどこの誰だか、私に紹介しては頂けませんか？」

それは、先ほどまでのおちゃらけた空気は何処かへ吹き飛んでいった、抑揚も無く、感情もなく。ただ平坦なゼスタの声。

俺はセレナに、正体を言ってもいいのかと視線を送ると。
「紹介してやんな。どうせ、この連中は生きて返してやるつもりもないさ。精々、あたしが誰だかを知って後悔するといい」

セレナは、そんな自信たっぷりな返事を返した。
俺は、そんなセレナを皆に紹介するように手で示すと。

「こちらは、邪神レジーナを崇めるダークプリーストにして、アクアに散々嫌がらせをして傷つけて、アクアが街を出て行くキッカケを作ってくれた……。……魔王の幹部の、セレナです」

次いで。
俺は、完全に静まり返り、全員が真顔になっているアクシズ教徒の方を手で示し、言った。

「こちらは。アルカンレティアからやって来た、あの悪名高いアクシズ教の最高責任者のゼスタさんと……。そして、アクシズ教団の皆さんです」

――ドスッ、と。
何か、重い物が地面に落ちる音。

それは……。

顔面を蒼白にし、びっしょりと脂汗をかいて震えるセレナが、手にしていたメイスを地面に落とした音だった。

28話（後書き）

書籍化のお知らせ。
角川スニーカー文庫様から、当作品が１０月１日に発売される運びとなりました。
詳しくは、活動報告にて。

こんな有難い話を頂けたのも、これまで読んで頂いた方々のお陰です。
レビューを書いてくれた方、お気に入りに入れてくれた方。
変なメッセージをくれた方や、ポイントがキリ番近辺の時、評価をちょこちょこと変え、キリ番を保とうと妙な事をしてくれた方。
作者を悩ませる、妙な感想、温かい感想、きつい感想、やっぱり変な感想などなど。
たくさんの感想をくれた方々。
ここまで書けたのも、そんな皆様のお陰です。
改めまして。深く、感謝ですよー！

29話（前書き）

今回は長くなりました、申し訳ない

29話

魔王の城へと続く、人通りの見られない細い道。
普段は人気も無く、虫の音と鳥の声しか聞こえないそこに――

「「吊ーるーせ！　吊ーるーせ！！」」
「やあああああめえええええええええええええ――――――っ！！」

目が血走り、完全に逝っちゃってる様子の女性アクシズ凶徒達と、木に吊るされ泣き叫ぶ、セレナの声が響き渡った。

道から外れ、一際背の高い木に吊るされたセレナは、顔中を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら泣き叫んでいる。
既に、そこから落とされたら洒落にならない高さまで吊り上げられたセレナは、恐怖に引きつった顔で必死に訴えてきた。
「ごごご、ごべんなざいっ！　許してくだざいっ！　知らなかったんです！　あああ、あの女が、女神だなんて知らなかったんですっ！」
「あ？　あの女っつったかお前。偉大なる我らがアクア様を、あの女呼ばわりしやがったのか」
「ヒイッ！　ごご、ごめんなざいっ！」
セレナの発言一つ一つに切れている女性信者。

背の高い木の枝にロープを渡し、目を血走らせながら嬉々として、綱引きの要領で数人で引くその姿は、もはやどこに出しても恥ずかしくない狂信者だ。
メイスを取り落とした後、震えながらもなんとか逃げようとしたセレナは、あっさりと捕縛された。
その後、みの虫のごとくロープでぐるぐる巻にされたセレナは、

現在女性信者の手により、処刑されようとしているのだが……。

「え、えっと。悪いが、ちょっとそいつに聞きたい事があるんだよ。これから俺がそいつに尋ねる事はアクアの為にもなる事だから、協力して貰えないかな」

アクシズ教徒の行動に軽く引きながらも声を掛ける。

すると、高所にぶら下げられたセレナが体をクネクネさせて訴えかけてきた。

「カズマー！　助っ……！　助けてくれ！　答えてやるから助けてくれっ！　あんたとあたしの仲だろ!?　一時は、同じレジーナ教徒だった間柄じゃないか！　わがまま言うあんたを贅沢させてやったし、毎日内職して養ってやったろ？　最後はその……、お互い、戦う事になったけど！　それでも、同じ屋根の下、長く一緒に寝泊まりした深い仲じゃ……、痛っ！　痛い、止めろ！　こらっ、止めろっ！　いきなり何すんだ!」

言葉を遮るように、身動き取れないセレナに突如石を投げつけだしたためぐみん。

石を投げられたセレナの額にコブができ、めぐみんの額にも、同じ様なコブが出来た。

復讐の女神の呪いは健在の様だ。

何が琴線に触れたのか知らないが、なおもセレナに石を投げようとするめぐみんを、ダクネスがどうどうと押し留め、俺はめぐみんの額にヒールを掛ける。

突然怒りだしためぐみんが、俺のヒールを受けて気持よさそうに目を細める中――

そんな俺達の行動を見て、セレナが思い出した様に言ってきた。

「そ、そうだ！　あたしを殺せば、今みたいにレジーナ様の力で、お前達も死ぬ事になるぞ！　レジーナ様は復讐の女神。あたしにやった事は、全てそのまま返ってくる！　とっとと開放しろ！　こんな高さから落ちたら当然死ぬ！　あたしを縛り上げて吊るした連中は、命を落とすと思えよ！」

少しだけ勝ち誇った様なセレナに対し、アクシズ教徒達は眉一つ動かす事無く、全く動じず、首を傾げながら言ってのけた。

「「「それが何か？」」」

常軌を逸した発言に、セレナはおろか、俺達三人も絶句する。何を言われたのか分からないと言った表情のセレナに、一人の女性信者がにこやかに言った。

「なにか、勘違いをなさってますね。私達はアクシズ教徒。そう、アクシズ教徒なんです。私達アクシズ教徒は、死んだ暁にはアクア様の元へと送られます。そう、私達の敬愛するアクア様の元に！　そして、そして……！　私達は死後、アクア様の管理している世界に転生する事になるのです！　そう、ニホンと言う名の楽園に！」

「えっ」

この信者、今なんつった。

なんで日本が出て来るんだ。

呆然としているセレナに、他の信者を代表するかのようにゼスタが口を開いた。

「ニホン。そこは、アクア様いわく楽園の様な世界。そこでは、私の様な両刀も恥じること無く生きていく事ができ……。それどころか！　私の様な趣味の者に合わせた、特殊な本が溢れていると聞き

ます！　そう、異端や変態扱いされる我々が、堂々と生きていける世界なのです！」

おい止めろ。

「ぼ、僕みたいな……！　僕みたいな、心は女の子で、体は男の子な人でも、そこに行けば需要があるって言うんです！　なんでも、男の娘って言うんだそうで……！」

止めろ、マジ止めろ。

「そこは、飢えも無ければ治安も良く、夜な夜なモンスターに怯える事も無い世界だそうです。そして……！　ダンディーなおじ様が組んずほぐれつする様な描写がなされた本が、一つのジャンルを確立しているそうで……！　しかも、しかも……っ！　しょた、とか言う、小さな男の子を取り扱ったいけない系統の本なんかも堂々と売られているそうで……！　私……、私……っ！　アクシズ教徒で良かった！　生きていて良かった……っ！」

頬を火照らせて、瞳を潤ませ叫ぶお姉さん。

ああ、そうか。

この連中は、もう手遅れな人達なのだ。

涙を浮かべてセレナが言った。

「きょ……、狂信者……！」

激しく同意。

「……さて」

その何気ないゼスタの一言に、セレナが高所でビクリと震える。
そんなセレナを見ながら、にこやかに。
「それでは、カズマ殿の質問とやらに答えて頂きましょうか」
その言葉に、セレナが俺とゼスタの顔を青ざめながら交互に見る。
そんなセレナに……。

「じゃあ、魔王軍の事に付いて、詳しく話して貰おうか。どんな幹部がいるのか。何が弱点なのか。後、魔王自身の事についてもな」

「今日の日付から言って、幹部の一人の魔王の娘は、既に軍を率いて城を出ているだろう。つまり、城にいる幹部は一人だな。魔王軍きっての大魔法使いで、城の結界の根本的な部分を維持したり、あと、占いなんかもやっている奴だ。そいつの占いで、アクセルの街に強い光が現れたと出て、ベルディアの奴がお前らの街に派遣されたんだよ」

木から降ろされたセレナが、未だ縛られた状態のままで淡々と話す。

魔法使いタイプか。
そう言えば、今まで戦った相手の中にはその手のタイプはいなかったな。

「そいつはどんな戦い方をするんだ？　後、弱点とかはないのか？」
「……遠距離から、強力な上級魔法で敵を一掃するタイプだな。そして、弱点は無い。こいつは、魔王城の中に魔界から、直接魔力を引き込む魔法陣を設置していてな。おかげで、魔王城から遠く離れられない代わりに、城の近辺では絶大な力を振るう事が出来る。絶えず濃い魔力が供給され続けるおかげで、受けた傷も即座に回復するし、自身に強力な結界を絶えず張り巡らせているおかげで、並の攻撃はまず通じない」

嫌な敵だなあ……。

「そんな奴、どうやって倒すんだよ。そいつをやり過ごす事って出来たりしないか？」
俺の疑問に、セレナは縛られたまま器用に肩を竦めると。

「倒すのは無理だろうな。余程の火力じゃないとあいつの結界に遮られるし、たとえ傷を与えても、回復力に追い付かない。紅魔族の連中が総掛かりで魔法を撃ちまくって、それでようやく押し切れるとか、そんなレベルじゃないか？　やり過ごすのは、まあ……。城の門番みたいな事も兼任している奴だからな。こっそりと城の結界に穴での開けられるのなら、盗賊の潜伏スキルと姿隠しの魔法を併用すれば、なんとかなるんじゃないか？」
どうでもいい、とでも言いたげな態度で、あっさりと言った。

潜伏スキルはともかく、姿隠しの魔法か。
光を屈折させる上級魔法は、今の俺には使えない。

「まあ、ある意味魔王よりも厄介な奴かも知れないな。あたしが知る限り、この世で最強の魔法使いだ」

最強の魔法使い……。つまり、あのウィズよりも、って事か？
最強の名を耳にして、めぐみんが隣でピクリと動く。

まあ、そいつの対策は旅の途中で考えるとしようか。
それよりも――
「じゃあ、肝心の魔王について……」
「断る」

セレナがキッパリと拒絶した。

……俺が呆気に取られていると、
「どうせ、この後あたしは処刑でもされるんだろ？　だったら、あたしに言えるのはここまでだな。……それとも、取引でもするか？　条件は、このあたしを逃がす事。それと引き換えに、魔王の情報を教えてやるよ」
そう言って、セレナは不敵な笑みを浮かべた。
こいつ……！
「お前、そんな事言える状況だとでも思ってんのか？　よく考えろよ？　俺の後ろには、狂信者の皆さんが今か今かと待機してるんだからな？　お前の口を割らせる手なんて……」
「やってみな。……あたしには、拷問の類は効かないよ。なぜなら、拷問を行えばあんたにそのまま返ってくるから。さあ、殺すなら殺せよ！　その代わり、あんたが欲しがっている情報は闇の中だがな！」
セレナは吐き捨てる様に言うと、笑みを浮かべた。

――強がってはいるが、体が微かに震えている。
こいつも、なんとか生き延びようと必死なのだろう。
こちらとなんとか取引をしようと言う腹な訳だ。

「私に任せて貰おうか」

そんなセレナの前に、ダクネスがズイと出た。

ダクネスはほんのりと頬を染め、その両手をワキワキとさせている。

こ、こいつ……。

「私の強固な意志は、痛みなんかに負けたりしない！　……よし、今からフルコースを味合わせてやる。どちらが先に音を上げるか勝負だ！　熱いのがいいかなあ……、いや、最初は……」

「お、おい止めろ変態！　あっ、コラッ！　靴を脱がせて何のつもり……。……おい。お、おいっ！　あたしの小指に何する気だよ、そのレンガみたいな物はどこから出したんだよ、止めろよ、レンガの角で何する気だよ！」

迫るダクネスに怯えるセレナ。

そんな二人の様子を黙って見ていたゼスタが、唐突に奇声を上げた。

「天啓が下ったあああああーっ！！」

「「「ッ！？」」」

突然のゼスタの叫びに、居合わせた者がビクッと震える。

そんな俺達の様子など気にも止めず、ゼスタが目を見開き、震えていた。

……なんだろう。

天啓って、なんだろう。

様子がおかしい。

「私は……。私は、とんでもない事に気付いてしまった。これはア

クア様からの天啓に違いない……」
「ゼスタ様、どうされましたか？」
「ゼスタ様、一体何が！？」

他のアクシズ教徒が騒ぐ中、ゼスタがセレナを真っ直ぐ見つめ。

「レジーナ教徒のお嬢さん。あなたに対して危害を加えると、それは危害を与えた者にそっくりそのまま返ってくる。……これで、間違いないですね？」
「えっ……。あ、ああ……。間違いない……。……です……」
目の座っているゼスタに怯えながら、セレナがおずおずと小さな声で答えた。

それを聞き、ゼスタが両手で自らの頭を抱え、膝をつく。

「あああ、なんて事だ！　つまりは、男であるこの私が！　このレジーナ教徒の純潔を散らした時……！　その時私は、男でありながら破瓜の痛みを知る事になる……！　これは、処女受胎にも匹敵する神の奇跡ではないだろうか……！」
「何を言ってるのか分からねえよ！　分からねえ！　分かりたくもねえよ！」
俺もこのおっさんが何を言っているのかが分からない。
「ゼスタ様、ぼ、僕に！　どうかこの僕に、その機会を譲ってください！　本当の意味での女の子の気持ちを味わいたいんです！」
「ズルいズルい！　いつもゼスタ様ばかりズルいですよ！」
「おい、俺も俺も！　こんなに珍しくも貴重な体験は一生出来ないぞ！」
ゼスタの言葉に触発され、ゴスロリを着た少年を始め、他の信者達がワラワラと群がってくる。
「ヒイッ！　止めろ！　止め……！　お、おか……、侵されるー！

カズマ、カズマー！　あたしが悪かったから！　全部話すから止めて！　止めてぇっ！」

「『パワード』！　『スピードゲイン』！　『プロテクション』！……さあ、あのレジーナ教徒の純潔は、この私が頂いた！　今の私に勝てるというならば、どこからでも掛かってきなさい！」

「汚ねえ！　ゼスタ様、ここでアクア様のお力を借りての支援魔法は汚いですよ！」

「卑怯者！　卑怯者！！　プリーストの立場を使っての職権乱用だ！」

セレナを巡って大人気ない喧嘩を始めたアクシズ教徒達。

そんな彼らは放っておき、俺は、怯えるセレナの前に屈みこんだ。

「おいセレナ。俺に一つだけ、お前が助けて貰えそうな案がある。素直に魔王の事を話せ。そうしたら、お前が助かる様に協力してやるよ」

「ほほほ、本当か！？　本当に、あの狂人達から助けてくれるんだな？　信じるぞ？　信じるからな！？」

セレナはよほど怖かったのか、縛られたまま訴えかけるような目で見上げてくる。

それに無言で頷くと、セレナはポツポツと話しだした。

「……魔王の奴は……。戦闘力自体は、歳のせいでそれ程無茶苦茶に強いって訳でもない。……が、あいつの一族が持つ特殊能力が強力でな。あいつは、そのおかげで魔王をやっていると言ってもいい」

「……特殊能力？」

俺の言葉にセレナが頷き。

「そう、特殊能力だ。お前みたいな変わった名前をした連中みたいに、魔王の奴は、変わった能力を持ってるんだよ。……それは、一緒に居るモンスターの力を増幅させる能力。魔王の側にいれば、貧弱なゴブリンでも中堅どころの冒険者グループと一端に渡り合える様になる」

「なにそのチート」

ゴブリンですらがそれだけの強化をされるとなれば、魔王の側近みたいな連中は一体どれほど強化されるのか。

そんな俺の考えを読み取ったのか、セレナが苦笑しながら言ってきた。

「……魔王を倒そうなんて事は考えない方がいいぞ。あいつを倒したけりゃ、それこそ、配下が居ない時を狙って暗殺でも考えた方がいい。……これでも、その特殊能力は魔王から娘の方にかなり受け継がれちまったんだ。魔王じゃなく娘の方が、魔王軍の大半を率いて王都に攻め入っているのもそういう理由だ。今の魔王じゃ、大軍を率いてもそれらに力を及ぼす事は出来ない。……だが、魔王の部屋の中にいるモンスターには力を及ぼす事は出来るだろうな。魔王がそこに健在な限り、魔王の側の親衛隊連中は、その一人一人が幹部クラスの力を持っていると思っておいた方がいい」

詰んだ。

これは、楽に行けそうならついでに魔王を倒すって考えは、諦めた方がいいな。

となると、アクアを回収したのち、やる気になっているめぐみんその他の連中の説得にあたり、そのまま俺とゆんゆんのテレポートで脱出。

……うん、これが一番現実的じゃないだろうか。

そうだな。そうしよう。

今の話をアクアやミツルギ達にも説明すれば、皆納得してくれるだろう。

「……おい。これでいいか？　他には、魔王について知ってる事なんてあんまり無いぞ？　歳をとってから出来た娘をめちゃくちゃに可愛がっているとか、アレで何かと人材管理に苦労しているだとか、そんな事ぐらいなんだけど」

「ああ、いや、もういいよ。向こうもそろそろ決着がつきそうだしな」

言いながら、俺はある方向に視線を向ける。

「はっはっはっ！　偉大なるアクア様、我が活躍をご照覧あれ！　今、邪悪な背教者どもを片付けますぞ！」

「このおっさん、自分の所の信者を背教者扱いしやがった！」

「ちょっとばかり魔法が使えるからって調子に乗りやがって！　俺達にだって、アクア様の加護がある！　やっちまえ！　やっちまえっ！！」

たった一人ながら他を圧倒していたゼスタが、素手で遠慮無く信者達を叩き伏せ始めた。

人格は崩壊しているが、仮にも最高責任者。
あのおっさん、支援魔法付きなら、素手でオーガーとも渡り合えるんじゃなかろうか。
やがてゼスタが、いい汗をかいたとばかりに、顔をタオルで拭いながらやって来る。
「どうですか？　もう用件は済みましたか？　そろそろ、そこの背教者をこちらに引き渡して頂きたいのですが」
「ヒッ！」
ゼスタの言葉にセレナが震え、更には女性信者達がセレナの傍にじっと佇む。
ゼスタよりも、女性信者達の目が怖い。
というか、今にも殺る気満々だ。
「カズマ……。かかか、カズマ……！」
縋るような目でこちらを見上げてくるセレナ。
先ほど俺が言っていた、セレナを助ける考えがあると言う言葉に期待しているのだろう。

俺は、そんなセレナの前に一枚の紙を突き出した。
それは、アクシズ教徒から借りたあの馬車内に置かれていた、アクシズ教団への入信書。

つまり……。

「汝、自らの行いを悔い改め、今までの信仰は全て捨て去り……。アクアを崇め、敬い、奉り。敬虔なアクシズ教徒になる気はありますか？」

セレナは、いよいよ泣きそうな顔で、呟いた。

「マ、マジで……？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ほらっ、下っ端！　いつまでもメソメソしてないで、とっとと行くぞ！」
「は、はいっ！　すいません先輩！」
「おい、先輩って響き良いな……！　俺も先輩って呼んでくれ！」
「ヒイッ！　……な、なんでしょうか、せ、先輩……っ！」
「おいこら下っ端、チヤホヤされて調子に乗ってんじゃないわよ。取り敢えず、ここにいる全員分のネロイド買ってこい。私は、冬期限定の地獄極楽甘辛ネロイドな」
「せ、先輩……、今、夏なんですけど……」
「なんか言った？」
「言ってません！　か、買ってきます！　色んな街を巡ってなんとか買ってきますから！」

俺は、泣き笑いの様な笑顔を見せて、口元をヒクヒクさせているセレナを見つめ。

「一件落着」
「ど、どこがだっ！」

何気なく呟いた俺に、セレナが怒鳴りつけてきた。
これから、アルカンレティアの教会にセレナを連行し、今までにやって来た行いを懺悔させ、それに応じた罰を与えるとの事。
同時に、過去の罪に応じた年月分を、これからアクシズ教団の下っ端としてこき使われる事になるそうだ。

セレナが、過去に俺以外の人間を殺していない事を祈ろうと思う。

「さて。では、そろそろ行きますか」

俺に、そんな出発の声を掛けてきたのは――

「ダクネス、もうちょっとそっちに詰めてください。ダクネスはあちこち出っ張っていて場所を取るんです。もっと色々、コンパクトにならないものなんですか？」

「わ、私だって好きでこんなに成長した訳では……。と言うか、めぐみんが色々とコンパクト過ぎ……痛い！　あっあっ、めぐみん、髪を引っ張るのは……っ！」

「はっはっはっ！　いやいや、貧乳もムチプリも等しく需要がございます。喧嘩はいけませんよ喧嘩は。どうしても決着を付けたいのなら、優劣を私が決めてさし上げても良いのですが。その気があるのなら、お二方とも、私にペロンとその胸を見せてご覧なさい」

「おいおっさん、俺の仲間にセクハラすんな。それは俺だけの特権だからな。馬車が走ってる間に突き落とすぞ」

「バカな事ばかり言っていると、二人共御者台から突き落とすぞ。……なあめぐみん、本当にこの男を連れて行って大丈夫なのか？　この馬を操るのは、何もこの男でなくとも良いのだろう？　他のアクシズ教徒にしないか？」

ダクネスが、不安そうな面持ちで御者台に座るゼスタを見た。

アクシズ教徒の言う事しか聞いてくれないというこの馬を、ゼスタに操って貰う事になったのだが――

「何を言うのですか。こう見えて私は、アクシズ教団の中でも随一の強さを誇る男。道中の安全はこの私が保証しましょう。無事、アクア様の元まで送り届けて見せましょう」

随一と言う言葉にめぐみんが微妙な表情を見せる中、ゼスタは、手綱を握りしめながらにこやかに言ってきた。

ちなみに、この馬車の荷台は二人乗り。

なので、狭い御者台に、俺とゼスタが二人で収まる事に。

「ああ、背中に若い男の温もりを感じます。何というご褒美！　アクア様、感謝します！」

「頼むから黙っててくれ！　なあめぐみん、ダクネス。本当に場所変わってくれないのか？」

「い、嫌ですよ、なんだかセクハラされそうですし」

「お、同じく。カズマにセクハラされるのは慣れているが、その男にセクハラされるのはちょっと……」

俺の頼みもあっさりと二人に断わられる。

「では、よろしいでしょうか。出発しますよ？　……教団の皆よ、後の事は頼みましたよ！」

「かしこまりました。無事アクア様の力に成れる事をお祈りしております」

ゼスタの出発の合図に、女性信者が微笑んだ。

「じゃあなセレナ、敬虔なアクシズ教徒に染まるんだぞ」

「うっせえ、とっとと失せろ疫病神が！」

セレナの涙声を背に受けながら、ゼスタの操る馬車が魔王城へ向けて駈け出した。

どれ位の距離を駆けたのだろうか。
「おいおっさん。さっきから息が荒いのが凄く気になるんだけど」
「お気になさらず。単なる生理現象ですので」
「気にするよ！　お前、本当に何でも有りなのかよ！　……おい待て、ありゃなんだ？」

俺は、はあはあ言い出したゼスタに引いていると、ふと、馬車の前方に黒い影を見つけ出した。
その影を、千里眼スキルでよく見ると……。

「……ゲッ、マンティコアがいるぞ。おいおっさん、迂回しようぜ。ここに来る途中に脇道があっただろ。あっちから回り込もう」

前方に佇んでいるのは、俺達が苦戦してようやく倒したマンティコア。
そいつが、遠目にこちらをジッと見ていた。
これは、今更逃げても遅いか……？
「いえ、このまま真っ直ぐ参りましょう」
ゼスタが、平然とそんな事を言ってくる。
「正気か？　あいつ、すげー強かったぞ。おっさんがどの位強いのかは知らないけれど……」

俺が不安を込めて訴える中、ゼスタは速度を落とすどころかむしろ早め、急速にマンティコアに向けて接近した。

やがて、マンティコアの表情がスキルを使わずとも目視出来るほどまでの距離に近付く。
そして、ゼスタとマンティコアの視線が一瞬だけ交差した。

「………………じゅるっ」
「ツッツッ！」

視線を合わせた瞬間に涎を飲み込んだゼスタを見て、マンティコアはその顔を思い切り引きつらせて飛び立った。
「ああっ！　また逃げられた！」
「いつも逃げられてんのかよ！　どんだけ嫌われてんだよお前らはっ！　ていうかおっさん、穴があれば本当に何でもいいのかよ！」
どん引いている俺の言葉に、ゼスタがしょんぼりと肩を落とし、呟いた。
「……まあ、この様な感じで……。道中の安全は、この私が保証しますよ………………」

頼もしいやら不安になるやら。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

順調だった。
本当に、今までの俺達の苦労はなんだったんだと言うぐらいに順調だった。
道中、小さな村に立ち寄る度に、ゼスタが俺と一緒に風呂に入りたがったり、同じ部屋で寝たがったり、軽快なセクハラトークを俺達三人に放ってくる以外には、大きな問題はなく旅は進む。

――道中、ハーピーやワーウルフ、果てはラミアやケンタウロスに到るまで。
出会うモンスターに、一々我を失って追い掛け、それらを全て追い散らすというゼスタの行動にようやく慣れ、アクシズ教徒こそ、滅ぼすべき真の敵かも知れないと感じてきた頃――

俺達は、とある小さな村に到着した。
そこは魔王軍との前線基地の役割も果たしているのか、砦の様な設計がなされた村。
そこの住人達は各々が武装し、最前線ならではのピリピリとした気配を――

「……なんでしょうかこの村は。なんだか、ほんわかしたムードなのですが。緊張感が欠片もありませんよ？」

ピリピリした気配を、全く醸し出してはいなかった。

「どうしたんだろうな。もっとピリピリしていてもいいはずなのに。ていうか、こんな小さな村、いつ襲われてもおかしくないだろうに」
その時。
誰かの笑い合う声と共に、俺達の疑問に応えるかの様な会話が聞こえてきた。

「いやあ、あのプリーストさんは何ていうか、まるで女神みたいな人だったな！」
「全くだ、まさか、身を投げ出してこの村唯一の水源を浄化してくれるだなんて……！　今時、珍しく出来た人だ！」

……おい待て。

「ちょ、ちょっとすいません、今なんて言いました？」
俺は、その会話の主、村の入り口近くで立ち話をしていた二人組の見張りの人に、慌てて声を掛けた。

その見張りは、突然話し掛けてきた俺に訝しげな視線を送るも、俺達の冒険者風の格好を見て、安心したような顔を見せる。
「いやね、この村の貯水池が汚染され、ブルータルアリゲーターが住み着いていたんだよ。それを、通りすがりのえらく綺麗なプリーストが、凶暴なアリゲーターの前にその身を挺して、池の浄化をしてくれたんだ」
えらく綺麗なプリーストが、その身を挺して……？

「なんだ、人違いか」
「ですね。そんな立派なプリーストには心当たりはないです」
「うむ、違うな。間違いない」
「わ、我らが神に無礼を働くと、代わりに天罰を食らわせますよ？」

即座に否定した俺達に、ゼスタが汗を垂らして突っ込んでくる。
このおっさんのこんな顔が見られるのは珍しい。
と、もう一人の見張りが。

「青い髪をしたアクシズ教徒のプリースト様でな。まるで、転げ落ちる様に自ら池に飛び込むと、何事かを叫びながら、みるみる内に池の浄化を……」
「アクアだな。落ちたんだな」
「アクアですね」
「うむ、アクアだな。間違いない」

「あなた方は……。いえ、もう何も言いません……」

微妙な表情を浮かべるゼスタの視線を浴びながら、俺は、池に転がり落ちたと言うそのバカの行方を尋ねる。

「ああ、そのプリーストか？　その人なら……。危ないから止めておけって忠告も聞かず……。数人の仲間と一緒に、魔王の城の方面へと向かっていったよ。つい、数時間前の事だな」

「「「数時間前……！」」」

追い付いた！

ていうか、数時間前？

もうちょいだ、もうちょいじゃないか！

こみ上げてくる喜びを隠しもせず、俺は嬉々としてめぐみんとダクネスの顔を……！

「……な、なんだよ。何をニヤニヤしてんだよ二人共」

「いいえ？　なんだか嬉しそうだと思っただけですよ。ここの所、カズマの突っ込みや悪態にもキレがありませんでしたが、それがようやくいつも通りになるのかな、と思いまして」

「ふふ、よせめぐみん。素直じゃないこの男の事だ、そんな事を言うとまたヘソを曲げてしまうぞ？」

この野郎。

この場で二人のパンツを剥いで、ゼスタにここまで送ってくれたお礼としてくれてやろうかと一瞬悩むが、今はそんな事をしている暇は無い。

せっかくアクアの背中が見えてきたのだ。

「よし、めぐみんはアクセルに帰ったらマメにちょこちょこ触って、不死王の手の魔法封じの効果で3日ぐらい魔法を使えなくしてやる。ダクネスは、鎧の手入れに使っている油を定期的に天ぷら油に取り替えてやるからな。よし、それじゃ、急いで追うぞ！」

「カカカ、カズマ！？　冗談ですよね？　いきなりそんな、えげつないキレを取り戻さなくても良いんですよ！？」

「あ、ああ、そうだ！　そんな笑えない冗談は……！　カズマ、冗談だよな？　じょ、冗談だと言ってくれ、この鎧には名前まで付けて大事にしてるんだぞ？　や、やらないよな？　な！？」

ゼスタが鞭を振るって、ほとんど暴走と言っていいぐらいの速度で馬車を走らせる。

先ほど後にした村から、魔王の城はかなり近い場所にあるとの事。そんな近場に村があって、よく滅ぼされないなと思ったが、それにも色々と訳があるらしい。

魔王の配下には、食べ物ではなく、人の精気等を糧にする者もいる。

あの村は、それらのモンスターの餌場でもあるのだそうだ。

命を取られるまでに精気を吸われる訳ではないため、村の人達はそれらの行為を黙認しているらしい。

あの村の存在する目的は、魔王軍との繋がりを作るため。
意外な事だが、魔王軍の中にも対話を望んでくる者もいるのだそうだ。
元居た世界でも、戦争している国同士でも、いざという時には対話が出来る様な、外交のパイプを作っておくものらしい。

血で血を洗う、凄惨な殺し合いでもしているのかと思えば、イザと言う時にこんな繋がりも作っておく。
唯の無法者の集団という訳でもないのか、魔王軍の連中は？

――一体どれ程駆けたのだろう。
俺がそんな事を考えていると、唐突に馬車が速度を緩め始めた。

「……？　どうした？」
「参りましたね。馬が怯えております。どうやら、魔王の城が近い様ですね」
ゼスタの言葉に馬を見れば、やがて脚を止めた二頭の馬は、何かを恐れる様にそこから前に進まない。

参ったな。

アクア達も馬車か何かで来ていると思うんだが、徒歩じゃ追いつけるはずも――

……と、めぐみんがくいくいと袖を引いた。
めぐみんは、無言である方向を指でさす。

「……あいつらの馬車か？」

そこには、アクア達が放置したのか、それとも他の誰かが放置したのか。
馬が開放された、馬車の荷台の部分だけが、そこにポツンと取り残されていた。

これがアクア達の物なのならば、帰りはゆんゆんのテレポートで帰るつもりで馬を逃してやったのだろう。
となると――

「近くに居るな。よし、俺達も徒歩で追うぞ。きっとアクアの事だ、城を前にすれば怖気づいて何だかんだとモタモタしてる。……おっさん、助かったよ。ここまでで良い。後は大丈夫だから、引き返してくれ」
「む？　私が一緒に居た方が何かと助かると思いますよ？　と言うか、魔王の本拠地に乗り込むだなんて楽しそうな事に混ざれないと言うのは、いささか寂しいのですが」

まあ、色んな意味で頼もしいのは間違いないのだが。

「俺達なら、いざって時にはテレポートで逃げられるからな。ゆんゆんと合流したとして、向こうのパーティが五人組。こっちが三人だと、ちょうどテレポート二回で逃げられる。俺とゆんゆんが同時に使えばすぐ離脱できる訳だ。……いざって時にはおっさんを置いて行ってもいいって言うのなら……」
「アルカンレティアにて、良い報告をお待ちしております！　それでは、私はこれで！」

そそくさと馬首を返したゼスタに、苦笑しながら馬車を降りる。
荷台に積んであった荷物を背負うと、全員が降りたのを確認して手を振った。

「じゃあなおっさん、セクハラはほどほどにな」
「私の存在意義が八割方無くなってしまいますよ。……皆様、ちょっとお待ちを」

ゼスタは、御者台の上から俺達に向けて手をかざし。

「『スピードゲイン』！　『パワード』！　……そして、『ブレッシング』！」

ゼスタが、俺達に支援魔法を掛けていく。
速度増加に筋力増加。
最後の、祝福の魔法はおまけだろうか。

「それでは！　皆様、ご武運をお祈りしております。どうか、アクア様のご加護が有りますよう！」
言って、ゼスタは馬を走らせていった。
加護って言っても、今から、そのアクアを連れ戻しに行くんだけどな。
どこか憎めないおっさんだと、手を振って見送っていると。

「……！？　荷物を確認したら、下着が一枚無くなってます！」
「えっ！？　……ああっ、私もだ！」

アクアを追い掛けるのに荷物を軽くしようと、中身を漁っていためぐみん達がそんな事を言い出した。

……やっぱり、アクシズ教徒こそ殲滅するべきだと思う。

支援魔法の効果か、普段よりも体が軽い。
俺は大きな荷物を背負い、軽快にアクア達を追う中で、モンスターに出くわした。

死体となったモンスターに、だが。

上り坂になっている道を、モンスターの死体が点々と転がっている。
おそらく強烈な魔剣の一撃を食らったのだろう。
首を跳ねられたものや胴体を真っ二つにされたものなどが……。

「……ん、まだ死体は柔らかいぞ。そう遠くない場所にアクア達がいるな」

モンスターの死体に手を当てて、ダクネスが小さく呟く。
それを聞いためぐみんが、逸る様に早足になり、ダクネスがそれに続いて小走りになる中で――

「待ってくれー！　荷物が、荷物が重いんだよ……！　置いてかないでくれ！」

「仲間との感動の再開みたいな時なのに、なぜこの男は締まりがないのでしょうか！　その大量の荷物は捨てていけばいいじゃないですか！」
「これを捨てるなんてとんでもない！」
「ええい、貸せっ！　私がそれを背負ってやる！　全く、たまに格好良い所を見せるかと思えば、こうして情けない所も……、重っ！？　なんだこれは、体を鍛える健康器具でも入れているのか！？　旅をするなら荷物は軽くしろ！　何が入っているんだ！」

ダクネスが文句を言いながらも俺の荷物を背負ってくれた。
情けない話だが、基本ステータスの差ってやつだ。
これぱっかりは仕方がない。

と……。

「……ま、禍々しいな……」
「……あ、ああ……」
上り坂を登った先。
俺の呟きに、ダクネスが小さく同意した。

そこには、誰がどう見てもボスの城、と言わんばかりの、漆黒の巨城が俺達の眼下に広がって――

「か、かっこいい……！」

めぐみんが、杖を両手で抱きしめて、小さく震えて呟いた。
紅魔族の感性には、俺はもう――

――唐突に、俺は思考を遮られる。

――居た。

眼下に見える魔王の城。

そのすぐ傍に、見慣れた青髪が遠くから確認できる。

「み、見つけたーっ！」

「「！？」」

突如叫んだ俺の声に、二人は驚き、そしてすぐ様、俺がなにを見つけたのかに気付いた様だ。

二人は俺の見る方向に目を凝らすが、遠視のスキルを使用している俺とは違い、確認できないらしい。

アクアは、ミツルギ達を引き連れて魔王の城に近寄り、オロオロしながらも何かを探るように手を突き出していた。

「アクアー！　おーい！　おーいっ！！　おいこら、アクアー！　……ああ、くそっ！」

俺は小さく舌打ちし、背中から弓を取り出すと、狙撃スキルで――

「待て待て待て、おいカズマ、何をする気だ！」
「近くに矢を放つつもりなのだとは思いますが、一歩間違えるとアクアの頭にすこんと当たりますよ！　カズマの運の良さは知っていますが、アクアの運の悪さも知ってますから！」
くっ、めぐみんにそう言われると、俺もそんな気がしてきた。
と、俺がまごまごしている間に、アクアのかざしていた手が光り――！
「げっ！　あいつ、中に入りやがった！」
遠く見つめる俺の前で、アクアは結界に小さな穴を開け、そこからするりと、結界の中へと入ってしまう。
それに続き、ミツルギ達もすかさず中へ。
それに合わせるように、結界に開けられた小さな穴は、あっという間に塞がってしまった。
不味い、不味いぞ！
結界の外から声は届くのか知らないが、これから走って行って間に合うのか。
と言うか、魔王の城に見張りもいないってのはどうなってんだ！　見張りでもいれば、そいつらとミツルギ達が戦闘になっている間に近付けるのに！
――アレか、それ程までにこの結界に自信があるのか、魔王軍は。
俺の隣で、ダクネスがへたり込む様に膝を付く。
「……なんて事だ、ここまで来て間に合わなかったのか……？」

杖をキツく握りしめながら、めぐみんがオロオロし。
「どどど、どうしましょうか！　こんな事なら、一か八かでカズマに狙撃させるべきでしたか！？」
そんな物騒な事を言う中で、突然アクア達の姿が掻き消えた。

ヤバイ、いよいよヤバイ。

ゆんゆんが、光の屈折魔法を使った様だ。
これでは、いよいよあいつらを引き止める事が難しく――

「……うう――っ……！」

めぐみんが、突然悔しそうに歯を食い縛った。
見れば、目に涙を溜めて震えている。

「お、おい。どうした？　諦めんな、魔王の城に乗り込んで行っただけで、まだアクアは死んだ訳じゃないんだぞ？　勝手に悲しんでると、あいつ泣くぞ？」
めぐみんに冗談めかして言ってみるが、めぐみんはなおも歯を食い縛り。
「……私が、上級魔法を覚えていたなら。……私が、補欠なんかではなく、一人前の紅魔族だったなら……、きっと、アクアの後を追えたんです」

「……？　な、なんで？　結界を破壊する魔法でもあるのか？」

俺の言葉にめぐみんは、小さく首を振ると。
「紅魔族が好んで使う、ライト・オブ・セイバーと言う魔法。あれは、術者の力量によってはどんな物でも斬り裂ける魔法なんです。もし、私がアレを覚えていたなら。もし、私が、もう少し折れてい

たなら……。本来、こういった結界破りなんて仕事は魔法使いの役目なんです。……なのに私は、魔法使いらしい仕事をした事がありません」

悲しそうにそんな事を言うめぐみんに、ダクネスがバッと立ち上がった。

「そんな事を言うなめぐみん！　それを言うなら、私だって！　プリースト程では無いにしても、本来、神に仕える聖騎士、クルセイダーは、簡単なプリーストの魔法が使える。つまり、アクア程では無いにしても、私だって結界破りができたかも知れないのだ。バカなスキル振りをしているのは私だって同じだ、自分を攻めるな」

言って、ダクネスは寂しそうにめぐみんの頭に手を置いた。

こいつらは、何を格好いいドラマをやっているのか。

全く。

どいつもこいつも、全く。

「おいめぐみん。城を囲っているあの結界。アレを、爆裂魔法でぶっ飛ばす事は出来ないのか？」

「……無理です。爆裂魔法は究極の攻撃魔法。たとえ相手が何者でも、たとえ肉体が無い、精神体みたいな相手ですらも。どんな敵にもダメージを与えられる、純粋な魔力爆発を起こす爆裂魔法は、あの結界にだってヒビを入れる事は出来るでしょう。ですが……」

めぐみんが、ボソリと言った。

火力が足りないのです、と悔しげに。

そんな、しょぼくれるめぐみんに。
「……つまり、一発では無理って事か？　何発も撃ち込んでみれば、なんとかならないか？」
「む、無理です。……あの手の結界は、時間が経つと徐々に修復されていきます。今から魔法を放って、直ぐ様眠って魔力回復を図っても、次に魔法を撃てる頃には修復されているでしょう。そもそも、魔法を放った時点で魔王の配下がこちらへ……」
「つまり、間を置かずに何発も放てば壊せるって事か？」
俺はめぐみんの言葉を遮り、更に質問を浴びせかけた。
食い気味の俺の言葉に、めぐみんは若干気圧された様にコクリと頷く。
「は、はい……。でも、アレほどの規模の結界ですから、一発や二発では駄目ですよ？　アクアですら結界に小さな穴を開けるしかなかった代物ですから。それこそきっと、何十発も……」
「何十発、ぐらいでいけるんだな？　それだけ爆裂魔法が放てれば、あの忌々しい結界を破壊出来るんだな？」
俺の言葉にめぐみんは。
「……出来ます。三十……いえ、二十も掛からないでしょう」
そこだけは自信があるとばかりに、力強く頷いた。
それが聞ければ十分だ。
「おい、どうしたんだカズマ。虎の子の爆裂魔法を使うのか？　それを使えば、確かにアクア達も驚いて飛び出してくるかも知れない

が、せっかくの切り札を……」
俺に不安気に言ってくるダクネスに。
「ダクネス、俺の荷物を渡してくれ」
そう言って、手を差し出した。

ダクネスは、眉を悩ましげにしかめながらも大きなリュックを渡してくれる。

「そういやめぐみん。ダクネスには鎧をやったが、めぐみんには、まだ何もあげてなかったな」

俺はリュックの口紐を解きながら、めぐみんに笑い掛けた。

「えっ？　い、いいですよプレゼントなんて。私は、高価なプレゼントが無ければ不安になる様な、そんな面倒くさい女では無いですよ？」
「あっ！」

めぐみんが笑って言うと、ダクネスが小さく声を上げる。

「おいめぐみん、その言い方だと私が面倒くさい女みたいで……！」
「貰った鎧を後生大事に抱えて、暇があればニヤニヤしながら磨いているダクネスの事を、面倒くさい女だなんて誰も言ってません。可愛いなと思います」
ダクネスに、ニヤニヤしながら言うめぐみん。
そんな、めぐみんに。

「まあそう言うなよ。せっかくめぐみんにも用意したんだ。良ければ受け取ってくれよ」
「……？　そ、そうですか？　べ、別に、そんなに気を使わなくて

も……」

「そう言いながら、ニヤけているぞめぐみん。案外めぐみんも、面倒くさい女で……あっあっ！　髪を、髪を引っ張るのに味を締めたのか！？」

揉み合っている二人の前に。

俺は、リュックの中身をぶち撒けた。

「「……」」

俺がぶち撒けたそれを見て、ダクネスとめぐみんがガチンと固まる。

「やるよ。遅ればせながら、めぐみんにもプレゼント」

平然と言った俺の言葉に、めぐみんがブワッと汗を吹き出し、ダクネスが口をパクパクさせて震え出した。

「お、お、おお、おま……！　お前は、これがどれ程の価値のある物なのか、ちゃんと理解しているのか！？　というか、これだけの品質の物を、一体どこから……！」

貴族のお嬢様で、大金には慣れているはずのダクネスが、声を掠れさせ、喘ぎながら言ってきた。

「これの価値なら知ってるよ。おかげで、全財産の大半が消し飛んだよ。ほれ、昔、バニルに大金を巻き上げられた事があったろ？　ダクネスの借金を返すために、色んな知的財産権だのを売った奴だ。バニルが俺から得たその金で、ウィズの奴が、最高品質のマナタイトを仕入れまくった事があったんだよ。旅に出る前に、それを全部

買ってきた」

俺の言葉にダクネスが、フラリとよろめく。

「カカカカ、カズマ……！　ここ、これ……これ……！」

めぐみんが、カタカタ震えながら俺のぶち撒けた物を指さした。

そう。

「聞いての通り、最高品質のマナタイトだよ。めぐみんが、昔ゆんゆんからマナタイトを取り上げた時、言ってたろ？　マナタイト結晶は、魔法を使う際の魔力消費を肩代わりして貰う物だ、って。一級品ぐらいの純度では、我が爆裂魔法の膨大な魔力消費を肩代わりなんて出来ません、って」

俺の言葉に、めぐみんが絶句した。

「そして、こうも言ってたな。私ぐらいの規格外な大魔道士ですと、これは無用な物です、と。……ほら、お前ぐらいの大魔導士に相応しい、最高品質のマナタイト。これ、全部やるよ」

カランっ、と。

めぐみんが杖を取り落とす。

その隣では、ダクネスが額に手を当てて空を見上げた。

「しょ、正気ですか？　その、これだけの品質のマナタイトだと、これ一つ一つで小さな家が買えちゃいますよ？　こ、これだけの量のマナタイト……。これ全部合わせると、小さな城が買えちゃいますよ？」

めぐみんが震える声で言ってくる。が……、

「構わん。遠慮無く使え。あの城の結界に向かってぶっ放せ」

俺がキッパリとそう告げると、めぐみんは震える手で杖を拾い上げ。

「良いんですか？　本当に？　マナタイトは使い捨てですよ？　魔法を撃つと、これは消えて無くなっちゃうんですよ？」

不安気な声で言うめぐみんに、俺はなおもキッパリ告げた。

「構わん、やれ。俺の奢りだ。これ全部、使い切ってやれ」

その言葉に、めぐみんは、今から訪れる事を想像し、熱に浮かされた様な表情で。

「い、良いんですね、本当に？　と言うか、爆裂魔法を連発すると、間違いなく城から敵が飛び出してきますよ？」

「構わん。飛び出してきたら、そいつらも爆裂魔法でぶっ飛ばせ」

めぐみんが、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「きっと、最強の魔法使いとか呼ばれていた、魔王の幹部も出て来ますよ？　魔王よりも厄介だとか言っていた、最強の……！」

俺は片手を突き出し、めぐみんの言葉を遮った。

「相手が誰だろうが、鍛えに鍛えたお前の爆裂魔法の方が、絶対にリーチがある。この長距離から、城に向けてぶっ放せ。魔王の幹部だろうが魔王の配下だろうかホイホイ城の中に入っていったアクアだろうが！　みんな、みんな、ぶっ飛ばせ！　いい加減色々あって、ストレス貯まってきてんだよ！　お前を補欠扱いした紅魔族の連中

に、ここで目にもの見せてやれ！　金ならこれから稼げばいい。もうな、魔王だの家出だの何だのと、こうも一方的に色々やられると、心のちっちゃい俺には精神的に限界なんだよ！　という訳で、だ！　俺の代わりに、あいつらに目にもの見せてくれ！　俺をスカッとさせてくれ！」

「おおお、おいカズマ！　途中、ぶっ飛ばしてはいけない奴の名前が入っていたぞ！　後、一見格好いい事を言っている様で、実は凄く他力本願な……」

横から口を挟んでくるダクネスに、俺は少しだけ赤くなって怒鳴り返した。

「う、うるせー！　財力だって力の内なんだよ！　お前だって、お嬢の権力をちょこちょこ使ったりするだろうが！」

「なっ！　待て、お嬢の権力ってなんだ！　私は不当な権力の行使など……！　……あ、あんまり……無い……かも……」

徐々に小さな声になっていくダクネスを言い負かし、勝ち誇っていると、そんな俺にめぐみんが、ふっと顔を上げた。

その、めぐみんの両の瞳は涙を湛え、一滴の涙が、堪えきれずにポロリとこぼれた。

「カズマ、任せてください。あなたから貰った贈り物。大切に、大切に使わせて貰います。今後、私の人生に置いて、今日の事は絶対に忘れられない日になるでしょう。……この我を差し置き、勝手に最強を名乗る魔法使い！　そんなものは、今日ここで消し飛ばしてやります！」

そんな、力強いめぐみんの宣言に応える様に。

紅魔族の由来である紅い瞳が、色鮮やかに輝いた。

それでこそめぐみんだ。

「頼むぞ、最強の魔法使い」

俺の言葉に、めぐみんがギュッとしがみついてきた。

29話（後書き）

旅が、ダイジェストっぽくなってしまいました。
まあ、旅自体はそれほど大事な箇所でもないもので。
後、あまりアクアと出会えないまま引っ張るのもあれなので。

30話

「ああ……あああ……。このマナタイト一つで、一体どれほどの価値が……」

「うるせーぞ貧乏貴族！　お前は、城から飛び出してきた敵に鎧の呪いで突っ込んで行かない様に、後ろの方で大人しく見てろ！」

「貧乏貴族！！　だ、誰が貧乏貴族だ！　当家は不当な搾取をせず、節制を心がけているだけであって、貧乏な訳ではない！　と言うか、お前は私を買った時といい今回といい、たまに金の使い方がバカになる！　これほどの量の高品質なマナタイトは、国家間の戦争ですら使われないぞ！」

「うっせー、金の使い方がおかしいのは俺だって良く分かってるよ！　でも、借金返してお前を取り戻した時も、今回も！　大金はたいて後悔した事なんてないからな！」

「……。そ、そうか……。う、うん。分かった……」

俺の言葉に照れた様に下を向き、急に大人しくなるダクネス。

……あれっ。こんな空気にするつもりじゃなかったんだが。

「……私の、せっかくの一世一代の見せ場なのに、何をイチャついているのですか」

俯いたまま、照れながらチラチラとこちらをうかがうダクネスと妙な空気を醸し出していると、マナタイトの山の真ん中に腰まで埋もれ、幸せそうな顔をしていためぐみんが、少しだけスネた様な声で言ってきた。

――ネタ魔法と呼ばれ、バカにされている魔法がある。

習得の難しさの割に魔法を使う際の魔力消費が激しく、なおかつ、その威力はオーバーキル過ぎて使う場所を選び、コストパフォーマンスが悪すぎる魔法。

個人が行使できる最強の攻撃方法にして、破壊の象徴の様な魔法。

――爆裂魔法。

まともに喰らえば、神や悪魔や魔王ですらも、あらゆる存在に必ずダメージを与えられる最終手段。

そんな、広範囲型大規模破壊魔法が。

「見ていてくださいね。あなたから貰ったマナタイト。これで、どんな大魔法使いにも出来ない物をお見せします。今から咲かせる爆裂の華。……今日のこの光景を、ずっと忘れないでくださいね」

静かに微笑む紅目の少女の手により、放たれようとする寸前。

「『マジック・ゲイン』！」

俺は、それに返事をする代わりに魔法威力強化の支援魔法を唱えてやった。

拙い支援魔法とはいえ、それでも一時的に魔法攻撃力が上乗せされたためぐみんは――

屈託のない、とびきりの笑顔を見せてくれた。

「『エクスプロージョン』――ッッ！　『エクスプロージョン』――ッッッッ！」

「わはははははは！　わはははははははは！　見ろ！　見ろダクネス、この爽快な絶景を！　思い起こせば、俺は魔王軍の幹部連中に散々迷惑を掛けられてきた訳だが！　とうとう、連中に一矢報いる事が出来たぞ！　わははははは、ざまあ見さらせ！　何が魔王だ舐めやがって！　見ろ、慌てふためいて飛び出してくるあの連中を！　あいつら、あれでも一応、魔王軍の中で強敵の部類に入るモンスターなんだろうぜ！」

「あわわわわ、あわわわわわわわ……！」

幸福の絶頂に達したみたいな表情で、目に涙を浮かべためぐみんが爆裂魔法の乱打を開始。

そして、三発目の爆裂魔法が城の結界に炸裂した時点で、泡を食った魔王軍の連中が、次々と城から飛び出してきた。

ワラワラと出て来たのは、漆黒の鎧に身を固めた暗黒騎士。

その他、闇色のローブをまとった魔導師風の者、翼の生えた、ガーゴイルじみた姿の者。

それらが皆、城の結界を通り抜けてこちらへと向かって来るが、高台にいる俺達の元へ辿り着けるはずもなく、爆裂魔法による一方的な大破壊の前に、為す術もなく消し飛ばされる。

翼の生えたモンスターが空から強襲をかけようとも試みるが、めぐみんが空に向けて一つ魔法を放つだけで、その衝撃波により面白いようにポロポロ墜ちた。

「『エクスプロージョン』――！　『エクスプロージョン』――ッッ！」

今日のめぐみんは、長ったらしい詠唱は行ってはいない。
詠唱は、魔法の威力を安定させ、制御しやすくする為のもの。
定められた詠唱を唱えれば、魔法の暴発を防ぎ威力も増す。
だが、爆裂魔法を極めためぐみんにとって、詠唱抜きでも制御に不安は無いらしい。

それもそうだ。
この、世界最強のアークウィザードは。
「『エクスプロージョン』――！　『エクスプロージョン』――！
『エクスプロージョン』――――ッッッッ！」
その人生において、この魔法しか使って来なかったのだから。

次々と叩き込まれる必殺魔法の前に、魔王城の精鋭達が死体も残さず消し飛ばされていく。
そんな光景をダクネスが俺の背後から、怯える様に眺めていた。

「じ、地獄だ……！　こ、この世の地獄だ……！　あわわわ……。幾ら大量のマナタイトのお陰とは言え、この光景を国のお偉いさんが見たら、めぐみんは間違いなく最重要危険人物に認定されるぞ……！　国が放って置かなくなる……！」
「わはははははは、何これ気持ち良い！　今までの鬱屈した気分が全て吹っ飛ぶ！　めぐみん、やれやれ！　もういっそ結界を破壊しても、魔法の連打は止めずに続けろ！　なに、アクア達はまだ城に入ったばかりだろ、魔王の部屋なんざ、最上階か最下層と相場は決まってる！　結界が消えたら射線を上げて、城の上部を消し飛ばしてやれ！」
「や、止めろおー！　アクアの間の悪さを考えれば、巻き添えを喰

らう可能性の方が高い！　それよりめぐみんが、めぐみんの目の色がヤバイのだが……！」

城の周囲を覆う結界が、素人目に見てもそろそろ崩壊しそうだと言うのが見て取れる。

半透明なバリアみたいな結界のあちこちにヒビが入り、それが今にも砕け散りそうだ。

ガシャポン機から吐き出される玉みたいに、次々と城から出て来るモンスター。

彼らもむざむざと殺されたい訳では無いのだろうが、放っておけば城の結界が破られる事は理解しているのだろう。

魔王軍の魔法使いらしき連中が、結界の中から手をかざし、何やら魔法をかけている。

きっと結界の修復でも行っているのだろうが、千里眼スキルで遠目から見る彼らは、今にも泣き出しそうな絶望の表情を浮かべていた。

そんな中、悲壮感を漂わせた鬼みたいな姿の兵士達が結界から飛び出し、即座に爆裂魔法によって吹き飛ばされる。

やがて、城の周囲に大量のクレーターが出来る頃――

敵兵は打ち止めになったのか、城からは兵士風のモンスターや騎士風の奴なんかが出て来なくなり。

代わりに、白い仮面を身に付けた、白マントで体全体を覆い隠した魔法使いが現れた。

そいつは、明らかに今までの連中とは纏っている空気が違う。

魔王軍の癖に、何と言うか不思議な清涼感の様な、神聖な気配が感じられるというか――

「……何か出て来ましたね。あいつが噂の、最強の魔法使いとやらでしょうか」

頬を紅潮させ、かつて無いほどに紅い瞳を輝かせていためぐみんが、城から出て来たそいつを見て動きを止めた。

めぐみんはマナタイトの山に腰下を埋めたまま、幸せそうにマナタイトの手触りを確かめている。

爆裂魔法の乱打が止んだ事で、白ローブの魔法使いは、結界を越え、こちらへ向けて悠然と歩いて来た。

まだまだ距離は遠く離れ、会話が出来る距離ではない。

俺達が何者なのか。

なんの目的で城に攻撃を仕掛けているのかの真意を問いに来たのだろうか。

それとも――

――と、めぐみんが、脈絡もなく魔法を放った。

「『エクスプロージョン』――！」

「「ちょっ！」」

俺とダクネスが声を上げる中、めぐみんの杖先から放たれた閃光が白ローブにつき刺さる。

一拍遅れ、凄まじい轟音と共に辺りに粉塵が舞い散る中。

爆煙が晴れたそこには、クレーターの中心で仮面とマントを消し飛ばされ、上半身を裸にされた男がうつ伏せになって倒れていた。

マントを剥がれたそいつは、背中に白い翼を生やしている。

……天使系？

堕天使とか、そんな奴だろうか？

そいつを遠目に見守っていると、身を震わせながらヨロヨロと起き上がる。
「「おおっ！」」
めぐみんの魔法に耐え切った所を見ると、やはりあいつが最強の魔法使いとか呼ばれている魔王の幹部か。
俺とダクネスが驚きと称賛の声を上げ見守る中、そいつはフラフラしながら、高台に陣取るこちらを見上げ。
「……我が……は……ッ！　魔王軍……一人……ッ！　いきなり……！」
何かを叫び出したのだが、距離が遠すぎて所々が聞き取れない。
多分、名乗りか何かを上げ、いきなり何するんだとかそんな事を言っているのだろうか。
めぐみんやダクネスも遠くて聞き取れないらしく、二人は顔を見合わせて首を傾げた。
……おお、そうだ。
アクセルの街で教えてもらったスキルに、盗聴なんて物があった。
『……聞こえているのならば何か反応を見せよ！　汝らは何者か！　冒険者か！？　遠距離から城を直接攻撃するなど、汝らは魔王退治の王道と言うものを知らぬのか！　この様な邪道な行い、我が身に流れる神族の血が……』
スキルを使い、突然クリアに聞こえてきたそいつの声に顔をしかめる。
スキルに慣れていないせいか、声が大きい。
「どうしました？　あいつが何を喚いているのか分かったのですか

？」

そんな俺の反応を見て、めぐみんが尋ねてきた。

「耳が良くなるスキルを使ったんだけどな。なんか、遠くから城を攻撃するのはズルい、超ズルいみたいな事を言ってる」

「子供みたいな魔王の幹部だな。まあ確かに、こんな魔王退治は聞いた事も無いのだが……」

ダクネスが腕を組み、複雑そうな顔を見せる中、めぐみんが杖を振りかざした。

「取り敢えず、撃ってもいいですか？」

「撃っとけ撃っとけ。射程はこっちの方が上なんだ、向こうに付き合う必要なんて無いさ」

「き、気の毒に……」

めぐみんが、今度は短縮するのではなく、きちんと手順を踏んで詠唱を開始する。

連発するのではなく、一撃の威力を高める気だ。

『警告はなされたぞ！　我が力、見るが良い！　魔王軍一の魔力を誇るこの我の、必殺の奥義！　しかとその目に焼き付けて……』

聴覚を上昇させている今、爆裂魔法の轟音を聞いてしまうと危なそうなので、何か言いかけていた幹部の言葉を最後まで聞かず、スキルを解く。

「『エクスプロージョン』ッッ！」

魔王の幹部が何かを言い終わる前に、めぐみんが魔法を唱えた。

口上の途中で吹き飛ばされ、魔王の幹部は空高く舞った後、やがて激しく地面に墜落した。

今の爆裂魔法はよほど効いたのか、魔王の幹部は白目を剥き、ビ

クンビクンと痙攣して動かない。
よくよく見れば、腕が片方吹き飛ばされていた。
だが、その傷が徐々に再生されていくのが見える。

そう言えば、再生能力を持つとか言っていたな。

墜落してきた魔王の幹部を、結界の修復を行っていた魔法使い達が慌てて駆け寄り、結界内に引きずり込む。
そんな姿を眺めながら、めぐみんが杖を正面に構え直し。
「結界の内部に篭もられてしまいましたね。まあ、どうせ結界を破壊するのです。その後で、どちらが最強の魔法使いかの決着を付けてやります！」

「『エクスプロージョン』――！　『エクスプロージョン』――ッ！」

めぐみんが遠慮無く魔法を乱発する中、合間を縫って、結界内部の会話を盗聴する。

『あああ、どうしたら！　どうすれば！』
『もうダメだあ、オシマイだあ……！』
『何なんだ！　何なんだアイツは、気が狂っているのか！』
『結界がもう保たない！　早く逃げないと、結界の崩壊と同時にあの凶悪な紅魔族に消し飛ばされるぞ！』
『なぜ突然、あんなラスボスみたいなのが攻めて来たんだ！　どうしてあんなにポンポン爆裂魔法を撃てるんだ！　アイツこそが魔王様みたいだぞ！』

『お、お母さーん！』

魔王軍の魔法使い達が思い思いに悲鳴を上げる中、グッタリしていた魔王の幹部が目を開けた。

それを確認し、俺は片手を上げてめぐみんに合図を出し、魔法を一旦止めさせる。

身を震わせながらなんとか上体を起こす魔王の幹部。

それを遠巻きに監視しながら、盗聴スキルを発動させた。

『……わ……わが……力を持ってすれ……ば……、あ、あんな、あんな……ちっぽけな……紅魔族……など……』

「俺が本気になれば、あんな貧乳紅魔族なんてイチコロだぜ、だってよ」

「『エクスプロージョン』――！　『エクスプロージョン』――ッ！」

俺の通訳にめぐみんが再び攻撃を再開し、いよいよ結界の崩壊が目に見えてくる。

「カ、カズマ、本当か？　本当に、あいつはそんな事を言っているのか！？」

「大体合ってる」

ダクネスに適当な返事を返していると、フラフラと魔王の幹部が立ち上がった。

いつの間にか、先ほど吹き飛ばされた片腕も再生している。

『あ、あの、頭がおかしい紅魔族の魔力切れを狙うぞ！　敵の方が射程が長いなら、このまま結界の修復に力を注ぐまでだ！　我が魔力は、地獄から無限に供給される！　長期戦に持ち込めれば、あんないかれた魔法使いの相手をしなくて済む！』

『『『おおっ！』』』

こちらに作戦を盗聴されているとも知らない魔王の幹部が、結界の中から手をかざし、修復作業にかかりだした。

「頭がおかしい紅魔族の魔力切れを狙うってさ。いかれ魔法使いの相手なんかしてらんねーから、結界直しながら長期戦に持ち込もうぜってよ」

「ブッコロ」

「待てカズマ！　本当か！？　本当に、そんな言い方をしているのか！？」

「大体合ってる」

魔王の幹部や魔法使い達が、結界の修復に当たる中。

めぐみんが瞳を爛々と輝かせ、息を深く吸い込んだ――！

「『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』……！」

『ちょっ……、待っ……！』

早口でエクスプロージョンの連打を開始しためぐみんの手により、魔王城を覆っていた結界はあっさりと崩壊した。

盗聴スキルを切る瞬間、魔王の幹部の慌て声みたいなのが聞こえた気がしたが……。

「『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』『エクスプロージョン』……ッ！」

なおも続く爆裂魔法に、魔王の幹部の周りにいた魔法使い連中は

軒並み吹き飛び、大量のクレーター痕の中心に、ボロボロになった魔王の幹部だけが残されていた。

流石は最強の幹部。

そのしぶとさに半ば感心していると、めぐみんが長々と詠唱を開始する。

今までとは違う魔力のうねり。

マナタイトから引き出す魔力ではなく、ここ一番のために残しておいた、めぐみん自身の魔力を全て振り絞って撃つ気だろう。

今のめぐみんの最大魔力は、最高品質のマナタイトに封じられている魔力総量をも上回る。

瀕死の魔王の幹部も、めぐみんの只ならぬ気配に気付いたのか、小さく喘いだ。

『我……こそ……は……魔王軍……最強の……幹部にして……その名を……』

ぼそぼそと、名を名乗ろうとした最強の幹部は。

「『エクスプロージョン』ッッッッッッッ！」

めぐみんの放った、恐らくは過去最大級の爆裂魔法をまともに喰らい、その名を知られる事もなく消え去った――

「お疲れさん！　いやあ、しかし凄え惨状だな。機動要塞デストロイヤーが襲撃してきても、ここまでにはならなかったんじゃないか？　まあ、これで名実共に、お前が最強の……。お、おいめぐみん、お前、鼻血出てるぞ」

「えっ？　あっ……」

めぐみんが、言われて気付いた様にローブの袖で鼻下をゴシゴシと拭い、その血を広げる。

「あーあー……」

クリエイトウォーターでハンカチを濡らし、それでめぐみんの顔を拭いてやると、冷たい濡れハンカチが心地良いのか、めぐみんは気持ち良さそうになすがままに拭かれていた。

と言うか、鼻血が出るほど興奮していたのか。

……いや、と言うか。

「おいめぐみん、お前、なんかほっぺたとかが異常に熱いぞ。なんだこれ、興奮してるだけじゃないだろ！」

「だ、大丈夫です、大丈夫です。まあ見ていて下さい、今から魔王城の天辺を……」

言って、熱に浮かされたようなめぐみんが、杖を抱きしめフラフラと城へ近付こうとする。

そのめぐみんを、ダクネスが捕まえた。

「爆裂魔法なんて大魔術をこれほどまでに連発したのだ。体に異常をきたさない方がおかしい。マナタイトから魔力を引き出し、それを体内に循環させて魔法を撃ち出す。そんな作業も、体の頑丈な魔法使いが普通の魔法を使う分には、大した負担にはならないのだろうが……」

「めぐみんの体には、負荷が大き過ぎたのか……」
「そんな、私の体が小さいから問題が起きたみたいに言わないで下さい。大丈夫です、まだまだいけます。と言うか、いかせて下さい！」

駄々をこねるめぐみんを押しとどめ、めぐみんの周りに散乱しているマナタイトを拾い集める。
それを、旅の間に俺が背負ってきたリュックに詰めると、めぐみんがすかさずリュックの持ち手に手を通した。

「おい、今日はもう爆裂魔法は撃たせないぞ。後、荷物は俺が持ってやるから無理すんな」
「……そう言われても、危なくなったら遠慮なく爆裂魔法を撃ちますよ？　そして、これはカズマから貰った物なんですから、断固として私が背負って持っていきます」

ワガママだなあ……。

結局、頑固なめぐみんに折れた形で、爆裂魔法はピンチの時以外、使用を控えるという条件で、めぐみんにリュックを背負わせた。
先ほどの連続使用で数は結構減った事だし、今のリュックの重さはそれほどの重量では無いだろうが……。

ともあれ、これで魔王の城へ乗り込む為の最大の障害は除かれた訳だ。
俺達は、敵感知スキルで警戒しながら城へと近付く。
俺達の姿は城から丸見えなのだが、城から攻撃される様な事は無かった。

それだけ、城の兵士が魔王の娘と共に出払っているのか、先ほどの戦闘でほぼ全滅してしまったのか。
それとも、よほど先ほどの幹部と結界に自信があり、油断していたのか。

何にせよ、俺達は特に妨害も受ける事なく城の前に。

「……さて。じゃあ、いよいよここからが本番だ。覚悟はいいな？」
「ああ、ここから先は私に任せて貰おう。ドラゴンが出ても一歩も引かん。めぐみんばかり活躍して、なんだか少し悔しいのだ」
「ふふふ、デストロイヤー戦といいシルビア戦といい、肝心な時にはあまり活躍出来ないダクネスに、今日の私以上の活躍が出来ますか？」
「な、なにおう！」
緊張感の無い二人の前を、俺は敵感知を使いながら進んで行く。

敵の気配も感じないため、無造作に城の門をくぐり抜けたその時だった。

「あーっ！！」
「うおっ！」

突如何も無い空間から驚いた様な叫びが聞こえ、俺は思わず声を上げた。
すると、何も無い空間から突然見慣れた連中の姿が現れる。

それは……。

「めぐみん！　うわーん、めぐみん！　めぐみん！！　こここ、怖かった！　怖かったあああああ！」

「ど、どうしたんですかゆんゆん、普段から涙目が多いゆんゆんですが、今日は特に酷いですよ！？」

そこに居たのは、ミツルギ率いる一行だった。

◆◆

「佐藤和真、追いついて来れたのか！　……と言うか、よく無事だったな、外には魔王が居たんじゃ無かったのか！？」

ミツルギが、腰に二人の女の子にしがみつかれながら、突然そんな事を言ってきた。

取り巻きの女の子二人は、よほど怖い目にでもあったのか、ミツルギにしがみつきながら涙を浮かべて震えている。

……というか、魔王？

「いや、なぜ魔王が城の外に？」

俺の疑問にゆんゆんが。

「わ、私達、アクアさんのお陰でこの城に侵入する事には成功したんですけど……。その後、突然の爆発が城を襲いまして……。きっと私達の侵入に気付いた魔王が外に出て、城ごと私達を生き埋めにしようと暴れているのに違いないって思い、こうして慌てて入り口に……」

俺とダクネスは、なんとなく魔王の方を見る。

マナタイトを背負った紅目の魔王は、視線を受けてそっぽを向い

た。

と、そう言えば！

「おい、アクアのおかげでって、その肝心のアクアはどこだ？」

「そ、それが……！」

肝心のアクアだけが見当たらない。

ゆんゆんが、申し訳なさそうな表情を浮かべながら説明をしようとするが、それを悔しげな顔のミツルギが引き継いだ。

「アクア様は、その……。……はぐれてしまった。突然の爆発騒ぎで城内が慌ただしくなってね。混乱しながらも、ゆんゆんの姿隠しや、僕の仲間の潜伏を使ってここまで来たんだけども……。多分、この近くにいるのは間違いないんだ。はぐれてから数分も経ってはいない」

……あいつは、こんな僅かな時間ですら厄介事を起こせるのか。

何にせよ、急いで探さないといけない。

「それじゃあ、あまり離れない様にしながらも、手分けして探すぞ。敵が出たら声を上げて、ミツルギとゆんゆんに駆け付けてもらい退治する。自慢じゃないが、俺達は戦力にならないと思ってくれ」

「わ、分かった。そこまで堂々と言い切られたなら、あまり頼りにはしないでおくよ。何かあったら呼んでくれればいい」

俺はめぐみんとダクネスに、ゆんゆんとミツルギの傍から極力離れない様に告げると、敵感知を使いながら辺りを探る。

うむ、敵は居ない。

一階部分にいた敵兵は、先ほどの戦闘で大半を討ち取った様だ。

罠の発見も敵の感知もでき、潜伏も出来る俺なら、ちょっとぐらい深入りしても大丈夫だ。
ミツルギの仲間の盗賊の子は、ミツルギの傍から離れようとしない。
なら、いざという時に潜伏で隠れられる俺が別行動した方が効率は良い。
敵を察知したなら皆の所に逃げ帰ればいいのだ。

城の内部構造は、さながらダンジョンの中の様だ。
通路の所々に明かりがともり、侵入者を防ぐためなのか、その通路は入り組んでいた。

――と、俺は不思議な物を発見する。
行き止まりの通路の奥に、『押すな』と書かれた紙が貼ってある。
紙の前には魔法陣が描かれており、その隣にはボタンがあった。

……何なんだこれは。
罠にしても分かりやす過ぎるだろ。
俺は罠発見スキルを発動させると、案の定、これが罠だと分かる。
だが、これが罠だと分かっただけで、一体なんの仕掛けなのかまでは分からない。
一応罠解除スキルもあるのだが、これって、凄く昔に習得したのにちっとも鍛えていない所為で、成功率に不安があるんだよなあ。
まあ、罠だというのなら触らなければどうって事は……。

――いや待てよ。
これは本当に罠なのか？
考えてみれば、こんな単純な罠に引っ掛かるバカは居ない。
となると、これは何かを隠す為のカモフラージュなのではないだろうか。
例えば、魔王の部屋へと直通で行けるテレポーターだとか。
そして緊急時には、魔王の部屋からここへテレポートが出来る様になっている、とか。
罠発見に反応すると言う事は、何かが仕掛けられている。
だが、逆にこう考えてみたら？
緊急時のテレポーターを隠す為、何か小さな罠を仕掛けておく。
そう、罠発見スキルに反応するのは、何も命に関わる物だけでは無いのだ。
転送先が危険に満ちたものでなくても、転送された先で黒板消しが降ってくるとか、そんな物でも罠発見は反応する。
魔王といえど、仮にも王様な訳だ。
緊急時の脱出口くらい用意してあってもおかしくないし、魔王だって年中城に引き篭もっている訳でも無いだろう。
城に帰ってきたその度に、自室へ移動するのに迷路みたいなこの城を最上階まで登って行くというのも大変だ。
確か魔王は結構な歳だと言っていたし。
――断言出来る。

これは、罠じゃない！

「そこらのボンクラの目は欺けても、この俺の目は騙せなかった様だな……」

そんな独り言を呟きながら、俺は魔法陣の上に立ち、押すなと書かれたボタンを押した。

あっ、しまった。

浮かれて押しちまったが、あいつらに声を掛けてからにすれば良かった。

まあ、俺の考えが正しければ一方通行なんて事は無いはずだ。

確認したら、直ぐ様とって返して――

――気が付くと、目の前の光景が一変していた。

そこは、暗く湿った狭い部屋。

まるで、ろくな明かりも無いそこは、今にも幽霊か何かが出そうな部屋で。

そして、何処からともなく、女がすすり泣く様な微かな声が――！

「しまった、罠だ！」

「わあああーっ！」

咄嗟に叫んだ俺の声に、驚く様に。
薄暗い部屋の隅から、そんな悲鳴が聞こえてきた。

……おい。

「……アクア……か……？」
「……へっ？　……カズマ……さん……？」

そこに居たのは、部屋の隅で膝を抱えて小さくなっていたアクアだった。
アクアが、一瞬ポカンとした表情を浮かべ、やがて、顔をクシャッと歪め……！

「カ、カズマ……！　わあああああーっ！　カズマさんカズマさんカズマさーん！」
アクアは感極まった様に立ち上がると、よほど怖かったのか、そのまま俺の胸を目掛け……！

俺の体は自動回避スキルを勝手に発動させて、胸元に飛び込んで来たアクアを華麗に躱していた。

「わあああああ！　ふわあああああああ！　あああああああああー

っ！」

「悪かった！　いや、しょうがないだろ、確率で勝手に発動するスキルなんだよ、ほら、俺が悪かったから泣き止めよ！」

俺が身を躱した事で、壁に頭から激突したアクアは、未だ泣き止まずにいた。

普段、もっと酷い怪我をしょっちゅうしてる癖に、なんでこんな時だけ泣き続けるのか。

「おい、いい加減静かにしろよ！　ここは魔王の城なんだぞ！　あんまし泣いてると、魔王の部下が駆け付けてくるだろうが！」

「だって、だって……！　せっかく会えたと思ったら、カズマが、カズマがあああああ！」

ああもう、面倒くさい！

「ほら、打った所見せてみろ、治してやるから。……『ヒール』！」

俺はアクアの頭に出来たコブに手をかざすとヒールを掛けた。

それを受けたアクアは、途端に泣き止む。

……いや。

というか、目を一杯に見開いて……！

「ひ、ひーるした……。カズマが、カズマが、ヒールを使った……！　あ、ああ、あああああ……！　わあああああああ、このクソニート、とうとう私のアイデンティティを奪いに来たわね！　この私をトイレの女神と貶めただけでは飽き足らず、唯一の取り柄の回復魔法まで奪うつもり!?　いいわ、掛かってらっしゃいロリコンニート！

私の本当の敵は、魔王じゃなくあんただったのよ！　今こそ決着を付けてあげるわ！」

「面倒くさい事ばっか言ってんじゃねえ！　お前がホイホイほっつき歩いてる間に、こっちは散々苦労したんだぞ！　構ってちゃんな手紙残して消えやがって、めんどくせえ女だなお前は！」

「構ってちゃんとかめんどくさい女だとか、これはいよいよ天罰を食らわせるしかない様ね……！　水の女神を怒らせた事、後悔なさい……！　お風呂を焚いても焚いてもぬるま湯にしかならない罰を与えてあげるわ！」

「天罰が地味なんだよ！　だから……、って、おい待て！」

遠くから聞こえてきた足音に、俺は盗聴スキルを発動させる。

「本当に女の声が聞こえたんだって」

「まさか。ここは上層階だぞ？　侵入者は未だ一階を彷徨いているって聞いたぜ？」

こちらに向かって来る足音と共に、そんな話し声が聞こえてきた。と、俺がそんなスキルを習得した事など知らないアクアが。

「どうしたの？　急に変な顔しちゃって。変顔勝負がしたいの？　いくら多芸な私でも、麗しの女神様なイメージが崩れるから、ちょっとそれは……」

「誰がそんなバカな勝負しろっつった！　変顔なんかしてねえよ、真面目な顔してんだよ！　ていうか、魔王の手下がこっちに来るぞ！　隠れろ隠れろ！」

暗い部屋の中、俺とアクアはわたわたと隠れられる場所を探す。

「そう言えば、お前はなんでこんな所にいるんだよ、お前もあのボタンを押したのか？」

「そうよ、押すなって書かれちゃうと押したくなる心理を突いた、

あの高度な罠に嵌まったの！　あれほどの高度な罠よ。直に、魔剣の人や他の皆もここに来るわ！」
「それもそうだな。人の心理の逆手を突いた、あれほどの罠だ。あいつらもきっとここにやって来るだろう。となると、時間稼ぎか……！　おい、隠れられそうな所は……って、」
「「ツボ見っけ！」」

俺とアクアは、人が隠れられそうなツボを見つけ、それを同時にタッチした。

「……ちょっとあんた、私が先に見つけたのよ。どっか他所に隠れなさいな」
「お前こそ、どっか他所に隠れろよ。……ああっ！」

ツボの蓋を開けると、中には水が。
どうやら、飲料水が湛えられたツボだったらしい。

「あらあら、これじゃあ私しか隠れられないわね。水の中でも大丈夫な、この麗しい水の女神様しか……！」
「なんだこんなもん」
「あーっ！！」
アクアの勝ち誇った様な挑発に、思わずツボを蹴り転がした。
派手な音と共にツボが割れ、辺りに水を飛び散らせる。

「今の音が聞こえたか！？　間違いない、誰か居るぞ！」
「そっちだ！　そっちの部屋だ！」

その音を聞きつけて、部屋の外から、今度は盗聴スキルを使うまでもない距離から声が聞こえた。

「何すんのよ！　何すんのよお！」
「ああっ、しまった！　俺とした事がこんなしょうもない失敗を！　アクアへのツッコミが久しぶり過ぎて加減が……！」
「カズマは、たまにバカなのか賢いのか良く分からない時があるんですけど！　どうしよう、見つかっちゃう！」

「そこにいるのは誰だ！　出て来い！」
ドアが勢い良く開けられる音。
それと共に、野太い声が響き渡る。

俺とアクアは、部屋の隅の棚の陰に、縮こまりながら身を隠していた。
潜伏スキルの恩恵を受けるためか、アクアが俺の服の裾をしっかりと掴み、ぴたりと身を寄せてくる。
暗がりの中でも、暗視が可能な俺とアクアは、部屋に入って来た連中がハッキリ見えた。

一人は鎧姿の漆黒の騎士。
一人は、二メートルはゆうに超えそうな巨体を誇る、額に二角を生やした赤銅色の鬼。
それら二人が中を見渡し。

「居ないな」
「誰も居ねえぞ？」
そんな事を口々に言う中で――
「いや、居る。そこに居る。超ピカピカしてる鬱陶しいぐらいに眩しい奴が、そこに居る！」
しっかりとアクアが隠れている場所を指差し、朽ちたローブを着た半透明な幽霊――
アンデッドモンスター、レイスらしきモンスターが口を開いた。
「アンデッドの癖に、この私を鬱陶しいだとか生意気よ！　欠片も残さず浄化してやるからね！」
「こんちくしょう、お前が一緒な時点で、きっと何かあるとは思ってたよ！」
陰から飛び出しレイスに指を突きつけるアクアに続き、俺も剣を引き抜き飛び出した！
「やはり侵入者か！　早く応援を……。……いや待て？　なんだこいつら、えらく弱っちそうだぞ」
「確かに余裕みてえだな。やるか？　やるか？」
「マジかよ、俺、あの女の相手だけは勘弁な！　アイツ、マジやべーって！　天敵の臭いがプンプンするわ！」
好き勝手な事を言ってくる魔王の配下に、俺は剣を突き付け宣言する。
「アクア、支援は任せた！　その代わり、前衛は俺に任せろ！　お

前としばらく会わない内に、数多のスキルを覚えて強化された、覚醒した俺の力を見せてやる！」
「きゃー、カズマさん素敵ー！　ねえカズマ、芸達者になる支援魔法はいるかしら？」
「ください！　アレはとても良いものだ！」

戦闘態勢を取る俺達に、魔王の配下が身構えた。

「な、なんて騒々しくも緊張感の無い侵入者だ！」
「やっちまえ！　このおちゃらけた二人組をズタズタに引き裂いちまえ！」
「おい、この女に近寄るだけで、俺の体が薄れるんだけど！」

アクアが、支援魔法の用意をしながら言った。

「ねえカズマ、どうしてかしら！　いつもと同じ、ピンチなのに！　褒められる状況じゃないはずなのに！　私、何だかとっても楽しいの！」
「ちくしょう、俺もだ！　何これ悔しい、でもなぜかホッとする！」

戦闘開始――！

31話

「アクア、そっちのレイスは任せたぞ！」
「任されたわ！　あはははは、アンデッドが私の前に現れるだなんておこがましいわ！　どうしてくれようかしら！　このレイス、どうしてくれようかしらっ！！」

「ちょっ、なぜか分からないけどこいつ怖い！　やべーって！　この女、マジやべーって！　オレ、逃げてもいいか！？」

魔王の城の何処とも知れない部屋の中で、俺とアクアはモンスター達と対峙していた。

「ペイン、それなら相手を変えるぞ！　お前は俺と一緒にこのヒョロそうな男だ！　ノス、お前は、ペインが怖がるそっちの女を片付けてやれ！」
「よし、任せろ！　ペイン、何ならお前は俺達の後ろに隠れててもいいぞ！」
「何言ってんだ、剣しか持たねー、ただの前衛職なら俺の出番だろ！　おい、そっちの男は覚悟しろよ、このオレに物理攻撃は効かねえかんよー！」

鬼みたいな奴が俺と対峙したまま指示を出す。
鬼型のモンスターが俺の背後のアクアの方へとジリジリ近付き、騎士とレイスが俺を威嚇する様に距離を詰めた。

これはいけない。

「カズマ、ここはアレよ！　必殺のアレを使うの！」

「アレ！？　アレってなんだよこのタイミングで！　さっきは自分で覚醒だのなんだの言ったが、まさか、この俺には本当に秘められた何かの力があって、このピンチに目覚めでもするのか！？」
「「「！？」」」

俺の言葉にこちらを警戒したモンスター達が動きを止める。

「違うわよ、カズマさんはどこに出しても恥ずかしくない、何の力も無い立派な一般人よ！　そうじゃなくて、アレよアレ！　こんな時にはアレがあるでしょ！？」
背後のアクアに視線を送ると、アクアは、右手の人差し指と中指を、自分の目の下にピッと当てた。

なるほど！

「こういう事か！　食らえ、『フラッシュ』！」
「「ぐあっ！？」」
「ぎゃー！」

目を眩ませるこの魔法だが、同じ失敗はしない。
俺は左手で目を庇い、右手を突き出し叫んでいた。
それを受け、手で顔を覆いながら騎士と鬼がふらついた。

「くっそ、この……っ！」
「小癪な真似しやがって……っ！」
俺の閃光魔法は、騎士と鬼には効いた様だが……！
「オレは目玉なんかに頼ってねえからな！　そいつはオレには効かねえよ！」
「それがどうした、これでお前の仲間は動けねー！　そいつらの視力が回復する前に、お前はこの世から消えるんだ！　アクア、出番

だ、やっちまえ！」
俺は無事だったレイスに勝ち誇りながら、背後に居たアクアに指示を……！
「カ、カズマさーん！　カズマさーん！！　ど、どこー！？」
アクアは目の前のモンスター達と同じく、俺の魔法で目をやられていた。
「お前は俺に目潰しを指示しておいて、何で一緒に食らってるんだよ！」
「だってだって、こんな魔法覚えたなんて知らなかったんだもの！　私がアレって言ったのは、なんたらアースとなんたらブレストを使った目潰しよ！」
目を閉じたままのアクアは、よたよたしながら、手探りで俺の服を掴んでくる。
そんな俺達の姿を見て、レイスが勝ち誇ったように笑いを上げた。
「残念だったな兄ちゃん！　オレに物理攻撃は効かねえ！　オレとお前は、おそらく一番相性が悪いぜえ！　ヒャッハアーッ！」
叫びながら、レイスが俺に手を突き出した。
レイスの腕は幽体だからか、ありえない伸びを見せ、その手が俺に……！
「さ、させるかあ！」
俺は背中に引っ付いていたアクアを前に出し、咄嗟に盾代わりにした。
「「ひゃあああ！？」」

レイスに触られ悲鳴を上げるアクアと、アクアに触ってしまい悲鳴を上げるレイス。
あのレイスはアクアの近くに行くだけで体が薄れるとか言っていたが、アクアに直に触れたのは相当痛手を負った様だ。

「カズマー！　今の何!?　冷やっとしたんですけど！　背中が冷やっとしたんですけど！」
「何て鬼畜だこの男！　仲間を盾代わりにしやがった！　ちくしょう、オレの腕が消えちまったあああ！」
目をきつく閉じたままアクアが叫び、レイスが消えてなくなった自分の右腕を見て泣いている。

「ペ、ペイン、状況はどうなっている？　お前にとって女が天敵なのは分かったから、せめて男の方だけでも仕留められないか!?」
「そ、そんな事言ったってよ！　ノス、ロギア、早く回復してくれよっ！」
騎士がヨロヨロとあさっての方を向きながら、レイスに向かって叫んでいる。
ペインと呼ばれたレイスは、俺のアクアシールドを警戒してか、こちらに近付けない様だ。

というか、これでこいつら全員の名前が分かった。
ペインがレイスで、ノスが騎士。ロギアが鬼か。

騎士と鬼は、現在目が見えていない。
……そんな中、騎士がふと、体の正面を鬼に向けた。

――勝機！

「ノス、目の前だ！　丁度お前の目の前に男がいる！　やっちまえ

！」
「おうっ！」
「ぎゃあああああああ！」

アクアに掛けてもらっていた芸達者になる支援魔法。
それを受けていた俺は咄嗟にレイスの声真似をし、騎士を焚き付け鬼を斬らせた。

「どうだ、やったか！？」
「やってねえよ！　ノス！　ノース！　お前が今斬ったのはロギアだよおお！　あああなんてこった！　てめえふざけるなよこの野郎、なんで会ったばかりのオレの声真似なんて出来るんだ！」

崩れ落ちる鬼と勝ち誇る騎士を交互に見ながら、レイスがオロオロと泣き叫ぶ。

「ロギア！？　おお、俺はロギアを斬っちまったのか！？　どどど、どういう事だ、状況を説明してくれペイン！」
「あの男が、オレの声真似をしてお前さんを誘導しやがったんだ！　お前は視力が回復するまではそのまま大人しくしていてくれ！　お前さんが惑わされて、もしその魔剣で斬られちゃ流石のオレでも即身仏だぜ！」
「そ、そうか、分かった！　大人しくしている！」

レイスの言葉に従い、騎士がその場から動かなくなる。
俺はすかさず喉の具合を確かめて……！

「ああ、それでいい！　ったく手間取らせやがって脳筋野郎が！　前々からオレの足引っ張るやつだとは思ってたが、こんなピンチにまで足引っ張りやがって……！」

「ぺぺぺぺ、ぺ、ぺイン！？　おおお、お前、俺の事をそんな風に……！？」

「ちちち、違……！　今のはあの男が言ったセリフで……！　チキショウ、何をニヤついてやがんだてめえ、ぶっ殺す！」

レイスは激昂すると、俺が盾代わりにしていたアクアを警戒しながらも、俺に襲いかかってきた。

アクアを気にして俺にはほぼ無警戒なレイスに、俺は魔法の剣で突きかかった。

「くそったりゃあーっ！」

「いだあっ！？　お、お前、そいつは魔法の掛かった剣か！？　くっ、パッと見ちょろそうな癖に装備だけは良い物持ってやがる！　だが、生身の人間がこの俺に接近されたのが運の尽きだぜ！　食らいな！　アンデッドの奥義、ドレインタッチー！」

「うおっ！？」

騎士とアクアが視力回復に務める中、俺とレイスは泥沼な戦いを繰り広げていた。

ダストから借りた魔法の剣でレイスを突くと、レイスが俺の体に触れて生命力と魔力を吸い取ってくる。

「くそっ、離れろこのっ！　『ヒール』！　『ヒール』ッ！」

「いだだ！　お、お前、回復魔法まで使いやがるのか！　でも残念だな、お前の剣と未熟な回復魔法じゃ、お前から生命力を吸い取る量の方が多いみたいだぜ！」

やばい、何だか意識が遠くなって……！

アクアを盾代わりに使おうとしても、レイスとアクアの両方に警戒されて上手くいかない！

……い、いや待てよ。
俺はレイスの半透明な体の中に、開いた左手を突っ込んだ。

「何の真似……ひゃあああ！？　おおおお、お前、人間のお前がなんでドレインタッチを……！？　ややや、止めろこの野郎、オレが無くなる！」
レイスから、逆にドレインタッチで力を奪いに掛かった俺に、レイスも負けじとドレインを仕掛けてくる。

レイスの体から流れ込んでくるヒンヤリとした何かの感覚に、何だか背筋がゾクゾクして来た。
アンデッドからドレインって物凄く体に悪そうな気がするが、ダンジョンで、モンスターから魔力を吸い取るのを嫌がっていたウィズの気持ちが今なら分かる。
めぐみんから魔力を吸った事があったが、あの時と比べると何だか……！

「あああ、お、オレの体があああああ……っ、って、何でそんな微妙そうな顔してやがんだよ！」
「レイスから魔力を吸っても、何だか嬉しくないって思ってな！　美少女魔法使いからドレインした時は、もっと満たされた感じだったのに！」
「美少女魔法使いからドレイン……！？　な、なんて羨ましい……！　お前のその気持ちは理解できるし、こんな出会いじゃなきゃドレイン談義でもしたいとこだったが、今はお互い敵同士だ！　決着を付けるぜ、人間！」

この野郎。レイスじゃなきゃ、一緒に良い酒が飲めたかもな……！

「「いくぜ、本気のドレインタッ……！」」
「ゴッドブローッッッ！」
俺とレイスが気合を入れ直し、お互いに本気のドレインで止めを刺そうとした瞬間に、視力を回復させたアクアがレイスを殴って消滅させた。
拳を光らせレイスを殴りつけた体勢のまま、アクアが言った。
「まあこの私にかかればアンデッドなんてこんなもんね。どう？どう？」
「お、お前って奴は、相変わらず空気が読めない奴だな……！」
褒めて欲しそうなアクアがこちらをチラチラ見るが、それどころじゃない。
「き、貴様ら、よくも……！」
アクアと同じく視力を回復した騎士が、重い鎧を鳴らしながら一歩詰め寄る。
そいつに向けて剣を構えるが、その重装備の前に俺の剣が通じるかと言われると自信のない所だ。
剣の専門職みたいな騎士を相手に、鎧の隙間を正確に突くなんて出来そうも無い。
不死王の手を発動させるにも、そもそも俺の腕では剣を体に触れさせてもくれなさそうだ。
と、騎士が問答無用で斬りかかってくる！
が……、
「か、回避っ！」
「……む？　貴様、身のこなしだけは悪くないな。こんなに綺麗に

躱されるとは思わなかったが……」

運良く自動回避が発動し、騎士の斬撃から身を躱す。

ハッキリ言って剣が見えない。

流石魔王の城の騎士、俺がまともに剣で打ち合ってもどうにもならない。

――脳筋タイプには魔法が効く。

これは、古今東西の常識みたいなものである。

「これでも食らえ！　『ライトニング』！」

「！？」

左手から中級魔法の電撃を放つ。

突き出された左手と騎士の間を繋ぐように、バヂッと青白い電光がほとばしった。

それを受けて騎士はビクンと体を震わせ、その手の剣を取り落とす。

「カズマさんがっ！　本当に、カズマさんが多彩なスキルを！　なんて事、真正面から正攻法で敵を圧倒するなんて、何だかカズマが主役みたいよ！　こんなのっておかしいわ！」

「う、うるせーよ、たまには俺だってちゃんと戦う時もあるんだよ！」

アクアが興奮しながら理不尽な事を叫ぶ中、騎士が取り落とした剣を拾い上げ。

「いや、すまん。ちょっと驚いただけだ、ビリッとした程度にしか効かなかった」

「……どんまい！　どんまいよカズマ！　でも私、ちょっとだけ安

心したわ」
「うるせーよ！　お前ら二人共、さっきからうるせーよバカにしやがって！　魔力を温存しておきたかったが、こうなりゃ俺の切り札を見せてやるよ！」
「「！？」」

俺の宣言に、騎士が右手で、剣を自らの前に正眼に構え、開いた片手を腰の後ろにやり、その身を沈めた。
いつでも襲い掛かれそうなその低い体勢は、本格的な剣の訓練を受けた奴の本気の構えの様だ。

俺の後ろでは、アクアがハラハラしながらそんな様子を見守っている。
大丈夫だ、心配するな。
魔法抵抗力が高くない相手なら、俺には必殺の切り札がある。

「何かしら……！　ビームかしら……！　とうとうビームとか撃つ気なのかしら……！」

ハラハラしながら目を輝かせているアクアは、別に心配していた訳ではなかったらしい。
何かを期待するかの様なアクアの視線を受け、俺は口の中でぼそぼそと、小さく魔法の詠唱を。
それを見た騎士が、低い体勢の身をさらに沈め……。

「何をする気かは知らんが、魔法を発動させた瞬間に貴様の腹に穴を開けてやる。魔法を放った後の、隙だらけの状態で躱せるかな？
どの技を繰り出すか、宣言してやる。突きだ。貴様の後ろの女ごと、俺の突きで刺し貫いてやる。さっきみたいに身を躱せば、今度は女の命が無いぞ？」

「……だってよ！　アクア、死ぬ気で躱せよ！」
「ねえ、それって避ける気満々って事かしら！　か弱くも麗しい女神様を、身を盾にして守る気はないのかしら！！」
詠唱を終えていつでも魔法を放てる体勢で、俺は騎士の動きを警戒する。
アクアが、背後で俺の服の背中を掴んでいるのが凄く気になる。
こいつ、イザって時は俺を盾にする気だろうか。
仲間を盾にするとか、人として、女神としてどうなのか。
もしかして、さっき俺がレイスの盾にした事への嫌がらせだろうか。
「……お前達は一体なんなんだ？　どこから湧いた？　結界が破られたと聞いたのはつい先ほどだ。……この上層部は、よほどの実力を持ったものでも無ければ、到底来れない所なのだが……。……はて？　確か、この部屋は罠担当の連中が面白半分に作った、ふざけたテレポートの罠の転送先だった……はず……」
騎士が、剣を構えて剣先をゆらゆらさせながら、ぶつぶつ呟き。
やがて、ハッとした様に顔を上げた。
「お、お前達……。まさかとは思うが、あの頭の悪い罠に引っ掛かってここに飛ばされたのか！？」
「ちちち、違うよ！　俺は、アレが罠だって見抜いていたさ！　魔王の部屋への最短ルートはここだって事すら見抜き、あえて引っ掛かったのさ！」
「そ、そうよそうよ、私だってアレが罠だって事ぐらい最初からお見通しだったわ！　私のくもりなきまなこにより、ここが近道だって見抜いたのよ！」

言いつのる俺とアクアに、騎士が、ええー……と、小さな声で呟いた。

「……絶対あの間抜けな罠に……」

「それ以上言わせるか！　これでも食らええーっ！」

俺が魔法を撃つ体勢に入ると、騎士は咄嗟に反応し、こちらに剣を向けて飛び込んで来た。

くそ、不意を突いたつもりなのにやはり反応が良い！

普通なら、俺がどんな魔法を放っても、相討ちになる状況だろう。

だが、俺の切り札は……！

「『テレポート』！」

「!?　くくっ、テレポートか！　残念だったな、この俺には、テレポートは……」

俺のテレポートを受けた暗黒騎士は、剣を突き出した体勢のまま、何かを途中で言い掛け、俺に剣先を届かせる事なく転送された。

そしてなぜか、その場にはガシャンと音を立て、騎士の鎧だけが残される。

「カズマさんがテレポートまで……！　なんて事なの、この男、本当に切り札を隠し持っていたわ！　今の人はどこに飛ばされたの？」

「アクセルの街の警察署の真ん前」

旅に出る前に登録してきたテレポート先は2つ。

アクセルの街の警察署前と、バニル達と行ったダンジョンの最下層。

ダンジョン送りにしても良かったのだが、街に帰ったらウィズやバニルを連れて最下層に残されたお宝を取りに行かなくてはいけな

い。
　そこにあの騎士が待ち構えていると、テレポートした瞬間に俺が殺されてしまうかも知れない。

「あんなのを街に送りつけるなんて、警察署の署長さんとかが泣くんじゃないかしら」
「困ったときは国家権力だ。日頃、街のチンピラや荒くれ冒険者ですら取り締まれる人達なんだし、モンスターぐらい余裕だろう。……ま、覚醒した俺に掛かればざっとこんなもんだ」
「相変わらずの他力本願で安心したわ！　やっぱりカズマさんは雑魚っぽくないとね！」
「あははは、こいつー！　舐めたこと言ってると、俺だけこのままテレポートで帰っちゃうぞー！」
「やだー、カズマさんたら冗談ばっかり！　じょ、冗談よね？　ねえ、冗談よね！？」

　すがるアクアを放っておき、俺は改めて室内を見渡した。
　騎士に斬られた鬼と、騎士が残していった鎧だけがその場に取り残されている。

「どうしてあの騎士の鎧はテレポートされなかったんだろう」
「……多分、転送されちゃったあの人は、魔法に弱い人だったんじゃないかしら。魔法防御力が弱い人が、自分の苦手な魔法に対して対策をしておくのは良くある話よ。で、テレポートの魔法は抵抗が出来ないと、転送先によってはイチコロだったりする魔法だからね。テレポート自体を阻害、なら良かったんでしょうけど。調子に乗って、テレポート禁止の付与でもしてあったんじゃないかしら」

「……それで、鎧は確かに転送されなかったけど、中身のあいつだけは転送されちゃったのか？　それって欠陥品じゃないのか？」

「私に聞かれても知らないわよ。脳筋騎士っぽかったし」

マジかよ。つまり、俺にテレポートは効かない……！　みたいな事を自信満々に言い掛けていたアイツは、警察署の真ん前に素っ裸で転送されちゃったのか。

いや、さすがに鎧の下には服ぐらいは着ていると思いたいが……。

「俺の必殺のテレポートが欠陥品かと思ったんだが、大丈夫ならそれでいい。取り敢えず、ここで大人しくあいつらが来るのを待つ事にしようぜ」

「そうね。あれほどの罠だもの。きっと直ぐに皆も来るわ」

俺とアクアは、部屋の隅で皆が来るのを待つ事にした。

「「来ない」」

俺達が転送されてから、一体どれだけ経ったのか。

アクアと部屋の隅でしりとりしながら待っていたのだが、一向に来る気配が無い。

「どういう事だ。……アレか？　あの高度な罠に、誰も引っ掛から

なかったって言うのか？　いやいや、そんな馬鹿な話が……」
「もしかすると、あの高度な罠自体を見つけられなかったのかも知れないわね。日がな一日、物を壊す事しか考えていないめぐみんと、物にぶつかる事しか考えていないダクネスが、そんなに注意深い子達とも思えないわ」

――納得できる。

「なんてこった。つまり、魔王退治だけじゃなく、現在迷子になっているあいつらもなんとか見付け出してやらないといけなくなったって訳か」
「そういう事ね。ちょっと目を離しただけであっという間に迷子になるなんて。まったく。私達がいないとこんなにダメな子達ばかりなのかしら。まったく！」

皆とはぐれ、迷子になってしまった俺達は、この場に居ない連中相手に好き放題を言っていた。

――が、いつまでもここでこうしている訳にもいかない。
皆と合流するためにはどうすればいいのか。
部屋をしばらく探し回ったものの、転送元に帰れそうなテレポーターは仕掛けられてはいなかった。

つまり、魔王の城の上層部に俺達二人は送られてしまったという訳で。

「……なあアクア。俺達二人で、危険なこの城の中で皆を探して回るのと、このままテレポートで帰っちゃうのと、どっちが良いと思う？」
「テレポートで帰る、に一票を入れたいんですけど」

同じく。

「……俺もそうしたいんだがなあ……。めぐみんやダクネスが、大好きな俺の事を諦めて置いて帰るとも思えないし。どうしたもんか」

「そうね。あの二人が、崇拝する私を見捨てて帰るとも思えないわね」

この場にあの二人が居たらしばかれそうな事を好き勝手に言いながら、俺とアクアは更に待つ。

――その時だった。

「……？　遠くでバタバタと音がしているな。ちょっと待ってろ」

部屋の外から音が聞こえた。

盗聴スキルで外の様子を探ってみると……。

『応援だ、応援を呼べ！』

『上層の連中も、下に降りて来い！　侵入者達が暴れてやがる！　結界を破った連中が、どんどん登って来ているらしいぜ！』

『いやあああ！　魔王城の警備兵は、安全で安定されたエリート職だって聞いてたのに！　ねえ、飼ってるネロイドに餌をやり忘れたんだけど、私、帰ってもいいかしら！』

どうやら、ミツルギやゆんゆん達が俺達を探して暴れているらしい。

となると、もうしばらくここで待っていた方が安全だろうか。

「皆が暴れてるみたいだな。どんどん登って来てるみたいだ」

「ほう。……流石はこの私に選ばれた伝説の従者達ね。魔王の城で身動きの取れない女神を助けようとする者達。ねえ、これって凄く絵になる展開じゃないかしら」

「正確には、家出して迷子になった挙句に罠に引っ掛かり、魔王の城でにっちもさっちもいかなくなって隠れてる女神の救出、だけどな」

俺の言葉に、アクアが隣で膝を抱えたまま、不満そうに人の肩をグリグリと突いてくる。

――というか。

こいつに会ったら言いたい事が沢山あったはずなんだが。

説教したい事とか、叱りつけたい事とか、他にも色々。

そして、街の連中がどれだけ心配したのか。

本来なら女神の敵のはずの、ウィズやバニルですらが協力してくれた事だとか。

他にも、旅の間にあった事など、こいつに話したかった事が沢山あったはずなのだが――

「……？　なーに、変な顔して私の顔を見つめて。久しぶりに会って、女神様の御姿に感動でもしているのかしら。ちょっとでも私を敬う気持ちがあるのなら、これからは晩のおかずを私の希望の物にして……痛い痛い！　痛いんですけど！　調子に乗ってごめんなさい！　ああっ、でもなんか、こんなノリも本当に久しぶりな気がするわ！」

なぜかどことなく嬉しそうな、舐めた事を言い出したアクアの頬をつねっていると、盗聴スキルを発動させていた俺の耳に嫌な単語が聞こえてきた。

『お前ら、聞けえ！　先日、大軍を率いて行った魔王様のご息女が、王都での戦いで互角以上の戦果を収めたそうだ！　決着は付けられなかったものの、今回の遠征は我らの勝利と言っても良いそうだ！
　本日中にも魔王様のご息女が凱旋なされる！　その際に、城を預かる我らが侵入者などに手こずっていたとなれば、責任問題となるぞ！　命が惜しくば、侵入者を探し出し八つ裂きにせよ！』

◆◆◆

「ねえカズマさん、本当に？　本当にやるの？　私、過去に散々酷い目に遭って来たけれど、それらが霞むぐらいに嫌な予感がするんですけど」

「そんな事言ったって、俺達がやらなきゃ誰がやる。とっとと皆と合流して、魔王退治って目的を果たしてこの城からバックレないと、城に帰って来た魔王の娘と魔王軍があいつらと鉢合わせる事になるぞ。敵がいつ帰ってきてもおかしくない、そんな制限時間が設けられちまった以上、いつまでもここで待っていてもしょうがない。俺だって怖いが、そもそも魔王の城にノコノコ出かけて行ったのはお前だろうが」

「そうなんだけど、もう魔王とか、かなりどうでもいいって言うか。カズマと会ったらホッとしちゃって、もう早くめぐみんやダクネスの顔を見て、一緒に帰りたいって言うか」

なんというヘタれ女神。
しかし、その気持は凄く分かる。

「俺だって魔王の元へ行く気なんかあんまりない。でもホレ、皆はやる気になっちゃってるだろ？　ここで、俺達二人がやっぱ魔王が怖いから帰りますなんて言い出したらどうなる？」
「石を投げつけられても文句言えないわね」
「だろ？　という訳で、だ。まずは皆と合流。その後は、魔王の部屋にさえ行ければ俺に考えがあるんだ。俺の本当の必殺技を見せてやるよ」

言いながら、俺は深く兜をかぶり直した。

その兜とは、先ほどテレポートで転送したあの騎士の物。
鎧の中にどんなモンスターが入っていたのかは分からないが、鎧から獣の臭いなどはしない。
やたらと重い上にサイズがデカイが、鎧を着ても歩けない事はなかった。

「必殺技って何かしら！　ビーム？　今度こそビームなの？　……それともまさか、この私の宴会芸……！」

「なわけあるか。いいからお前も用意しろよ。ほら、芸達者になる魔法、もう一度かけ直してくれ。……いいか？　いくぞ？」
「準備はいいわよ。ねえカズマ、あんまりキツく当たらないでね？　あんまりな態度だったら、私、我慢なんてしないからね？　自慢じゃないけど、私は我慢強い方じゃないからね？」

お前が我慢が出来ない女だって事ぐらい、長い付き合いのおかげで誰よりもよく分かってる。

俺は部屋のドアを開け、黒い甲冑姿のままで、外に向けて大声で呼び掛けた。

「侵入者が居たぞーっ！！」

更新出来なかったお詫び兼ねつつのダクネス短編（前書き）

当短編は１０月６日の更新までには削除され、今後誰の目にも止まる事なく二度と使われる事もありません。
時系列的には、本編でのその後みたいな、無事に帰って来たＩＦ短編だと思って下さい。

更新出来なかったお詫び兼ねつつのダクネス短編

「本気で俺に勝てると思ってるの？　壊滅的に勝ち目が無いことぐらい分からないの？　お嬢様で世間知らずなだけかと思ってたんだけど、お前って単純にバカなだけなの？」

「天下に名立たるダスティネス家に、ここまで喧嘩を売った男はお前が初めてだ。家名を出すことはあまり好きではなかったが、ダスティネス家の名にかけて、お前をしばく」

屋敷の庭の芝生の上で裸足になり、動き易いようタイトスカートの端を破り、シャツの袖をまくり上げるという、お嬢様とはとても思えない様な格好で。

一応はこの国でも群を抜く、名家中の名家な大貴族、ダスティネス家のご令嬢、ダクネスが、お嬢様らしからぬ物騒なセリフを吐いた。

同じく芝生の上で裸足になりながら、俺は首をコキコキと鳴らしてダクネスを威嚇する。

「アクアはどちらが勝つと思いますか？　私はカズマだと思います」

「私はダクネス一択ね。貧弱な坊やのカズマさんが、荒ぶるダクネスに勝てるとは思えないわ。何なら、晩のおかずを賭けてもいいわよ」

対峙する俺とダクネスから離れた場所で、芝生の上に座り好きな事を言っている二人。

俺とダクネスの勝負を、二人は何か格闘技の試合でも見るかのように、ポリポリとお菓子をかじりながら見物していた。

「今思えばお前とは。私の実家の修練場で、一度試合をしたきりだったな……。あの時は為す術もなくあっさり負けたが、今日はそうはいかない……！」
「お前には学習能力ってもんが無いの？　一度負けたら、敗因を理解して対策を練ってから再戦を挑むもんだぞ」
俺とダクネスはお互いに素手。
俺は、剣はおろか、バインド用のワイヤーも手にしていないが、それでも負ける要素など一切ない。
なんせ俺には、対人戦においては致命的な威力を発揮するあのスキルがある。

「それではアクア、今日の晩ごはんの献立を賭けますか？　今日の晩ごはん係は私です。カズマから結構な食費は貰っていますが、これは節約したいのです。ダクネスが負けたら、今日のアクアの晩ごはんは塩かけご飯で」
「ほーん？　いいわよそれで。その代わりカズマが負けたら、夜はとびきり上等なお酒を用意してもらうからね？　それに、特上の霜降り赤ガニね」
他所ではアクアとめぐみんが、俺達を勝手に賭けの対象にし始めている。
ダクネスが、腰を落として身構えた。
「行くぞ…………っ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ダクネスって、言うほどお嬢様ってわけじゃないわよね」

めぐみんと一緒に、爆裂散歩から帰って来たアクアが唐突に。

もう、何言い出すんだとばかりに唐突にそんな事を言ってくれた。

その言葉に、テーブルを挟んで俺の向かいのソファーに腰掛け、ゆったりとくつろいでいたダクネスが……。

「……どうしたアクア、藪から棒に。まあ、我がダスティネス家は庶民に親しまれる貴族である事を旨としているので、そう言った意味ではお嬢様らしくはないかもしれないな」

言いながら、優雅な仕草でテーブルの上から紅茶の入ったカップを手に取り、それに口を付けて傾け……、

「さっき、めぐみんとの散歩の帰り道に言われたの。お前ん所のお嬢って、世間知らずなだけで結構短気でガサツだし、貴族の令嬢って感じじゃないよなって。なんちゃってお嬢様にもほどがあるだろって」

「ぶっ！」

「おわーっ！　何しやがんだこのバカ、紅茶が目にっ！　……ああっ、ちまちま作ってた、千分の一スケールの機動要塞デストロイヤー改が……っ！」

アクアの言葉に紅茶を吹き出し咳き込むダクネスに、俺は顔面に紅茶を吹かれ、なおかつ朝から鍛冶スキルでコツコツ組み立てていた新商品を紅茶まみれにされていた。

俺は顔を拭いながら、紅茶まみれになったデストロイヤー改をせっせと拭いていると。

「……ッ、はあ……はあ……っ！　だ、誰だそんなバカな事を言ってくれた奴は！　私は別に世間知らずでは無いし、短気でもなければガサツでもない！　誰だ！　どこの誰だ、ぶっ殺してやるっ！」

十分ガサツだし短気じゃないか。

「カズマさんの友達の、大体ギルドで飲んだくれてる、ダストとか言うチンピラの人」
「アイツか！　見つけ出してボコボコにしてやるっ！」
気の短いお嬢様は、叫ぶと同時、いつもの私服のままで屋敷を飛び出していった。

「あいつ大丈夫か？　あのチンピラは、あれで意外と腕も立つぞ。返り討ちにあうんじゃないか？」
俺の心配を他所にめぐみんが隣に座り、空のティーカップを手に取り紅茶を注ぐ。
「大丈夫ですよ。あれでダクネスは、もうここらの冒険者にはどうにも出来ない様なレベルですよ？　鎧も付けてませんが、あれだけレベルが上がって各種防御特化スキルを覚えまくったクルセイダーに、傷を付けられる人なんて、まあ居ませんから」
言いながら、めぐみんは目を細めて美味そうに紅茶をすすった。

「……はあ……はあ……。ふふふ、手こずらせおって。当家に一度、剣を教えに来たぐらいな男だけあって、流石に良い腕をしていたが。最後には捕まえ、地面に引き倒して公衆の面前でズボンを剥いて泣かせてやった！　……はあ……はあ……」
汗まみれのダクネスが、とんでもない事を言いながら良い笑顔で

帰って来た。
　ダストの奴も気の毒に。……いらん事言うからだ……。

「あのチンピラの人は地味に強いのに、ダクネスったら怪我もしてないのね」
　回復魔法でも掛けてやろうとしたのか、ダクネスの体をあちこち触ったアクアが言う。

「当然だ。魔王城帰りの私が今更あんなチンピラに遅れは取らない。ダメージを受けないなら、じっくり追い詰め、私の腕力でねじ伏せてやればいい。ふふ、今ならカズマにだって負けはしないぞ」
　ダストに勝った事で上機嫌なのか、荒い息を吐きながら、ダクネスが嬉しそうに笑顔で言った。
　その言葉に、俺は作りかけの部品をテーブルに置く。

　……まったく。この世間知らずのお嬢様は、珍しく誰かに勝てた事で、相当浮かれてしまっているらしい。

「まったく。これだから世間知らずのお嬢はまったく。俺をダストみたいな三下のチンピラと一緒にするなよ？　俺は対人戦のエキスパートだよ？　お前、俺と戦ったら一分持つと思ってるの？　そんなんだから、夕飯のお使いにも出せないんだよ」
「ふ、ふざけるな！　最近はちゃんと日用品の一般的な値段もそこそこ覚えたし、魚も切り身の状態で泳いでいる訳ではない事も知った！　こないだだって、ちゃんと頼まれていた塩と胡椒も買ってきただろう！」
「普通は塩と胡椒買ってきてって言ったら、塩袋一キロとか、胡椒一瓶とかを買ってくるんだよ！　誰が業者呼んで荷車一台分取り寄せて来いっつった！」

世間知らずのお嬢様に食って掛かると、お嬢はちょっと気まずそうに目を逸らした。

「……あ、あれは結局、父が屋敷で使うからと引き取ってくれたし良いじゃないか……」

「良くねーよ！　親馬鹿なあの親父さんを何とかしろよ！　何が、娘が仕入れてきた塩で作った料理は一味違うだ！　違わねーよ、唯の塩だろ！　バカ娘を甘やかすな！」

「バ、バカ娘と呼ぶな、色々と常識を知らなかっただけだ！　父は、私の買ってきた塩で作った私の手料理を喜んでくれただけだ！　別に、親馬鹿と言うわけでは……！　わけでは……。うう……」

ダクネスが、恥ずかしそうに顔を覆ってしゃがみ込む。

ダクネスとの言葉勝負に勝った俺は、それに満足しながら再びデストロイヤー改の制作に戻ろうと……。

「……で、ダクネスとカズマはどっちが強いの？」

……いつの間にかソファーに座ってお茶菓子をポリポリかじっていたアクアが、そんな余計な事を言った。

「あのバカは相変わらず余計な事ばかり……！」

屋敷の庭に出た俺は、ダクネスと対峙しながら呟いた。

現在俺もダクネスも、武器も鎧も持っていない。

庭の芝生が気持ち良いので靴を脱ぎ、俺は身軽な裸足になって芝生の上に。

同じくダクネスもブーツを脱いで裸足になると、木剣を俺に放ってきた。

そして、なぜか嬉しそうな様子で、少しだけ優しげな表情で……。

「思えば、こうしてお前と真面目に戦うのは初めてなのかも知れないな。お互い剣を扱う身ながら、剣の打ち合いをする事もなく。これからは、たまにはこうして修練を……」

「嫌だよ面倒臭い。俺は真面目に頑張ってスキルレベル上げなくても、ウィズとバニル辺りに金払ってお願いして、お手軽にレベルを下げて、またスキルポイント割り振って。片手剣修練を上げればそれで済むしなー。大体お前、大剣修練スキルとか取ってから言えよ。俺はともかくお前は成長しないだろ？」

「「……」」

俺がキッパリと告げた言葉に、お互いしばらく無言で見つめ。

やがてダクネスが顔を赤くし、ちょっとだけ目に涙を溜めて肩を震わせ。

「……ぶっ殺してやるっっっっ！」

叫ぶと同時、木剣で斬りかかってきた。

◆◆

おかしい。
凄くおかしい。
焦りの表情を見せる俺に、あざ笑うかの様にダクネスが木剣を振り上げ斬りかかる。
勢いはあるものの、見当違いの方向を狙ったり、距離感を見誤っていたり、真っ直ぐ一直線にしか攻撃がこなかったりと、攻撃自体は問題なく避けれるのだが。
「どうしたカズマ。息が上がってきているぞ！」
言いながら、ダクネスが汗をこぼして楽しそうに笑った。
先ほどからダクネスに何度も剣を当てているのに、スキルの効果が発動しない。
開始と同時の不死王の手で、試合終了だと思っていたのに！
「くそ、どうなってんだ！　俺の運の良さが落ちてんのか？」
そのダクネスの意外な健闘に、焦りを見せたのは俺だけではなかった様だ。
「カズマ、どうしたのですか！？　しっかりしてください、このままでは私のお小遣いがアクアの飲み代に！」
アクアと賭けをしているらしいめぐみんが、悲痛な声を上げてきた。

そ、そんな事を言われても！

「ダクネス頑張って！　私達の力で、今日こそその男に痛い目を見せてあげるのよ！　泣いて謝るカズマの姿を見せてくれたら、カニ足一本分けてあげるわ！」

ちくしょう、うるせーぞ外野！

気が散るからちょっと黙って……。

「おい、今アクアが、私達の力って叫んでたぞ。お前、なにか支援魔法を貰ってるだろ！」

「ふふ、今頃気付いたのか！　アクアに、状態異常攻撃無効の支援魔法を掛けて貰った！　これで、お前の切り札は使えまい！」

ダクネスが不敵に笑い、当たらない木剣を投げ捨て飛び掛かってくる。

これはヤバイ、単純な腕力勝負だと勝ち目が無い！

「その調子よダクネス！　捕まえて絞め上げるの！　組み合えば、貧弱なカズマとダクネスじゃあ勝負にならないわ！」

ちくしょう、何が締め上げるだ！　あいつこそ後で締め上げてやる！

アクアを忌々しく思っていると、ダクネスが両手を大きく広げ、抱きしめる様な体勢で突っ込んでくる。

俺も木剣は投げ捨てて、ダクネスと力勝負をする様に、両手を広げて手４つの構えを見せた。

「私に力で勝つつもりか？　随分と舐められたものだ！」

ダクネスが叫び、嬉々として手を合わせてくる。
俺は、それに合わせて叫んでいた。

「『パワード』！」

それは一時的に筋力を強化する支援魔法。
だがそれを聞いても、ダクネスは余裕の笑みを崩さない。

「カズマの支援魔法程度で、私との差はあああああああああああ！？」

余裕を見せて組み合ったダクネスが、甲高い悲鳴を上げた。
俺は、慌てて手の平から逃れようとするダクネスの手をしっかり捕まえ。

「自信満々だったのにどうしたの？　どうしたのっ？　おいダクネス、何とか言えよ！　わははは、筋力強化魔法を唱えたから、堂々と力勝負をすると油断したな！？　俺が真正面からやり合うわけがねーだろ、長い付き合いなんだから理解しろよいだあああああああああああ一ああああ！？」

勝ち誇っていた俺は、凄まじい力で手を握られて悲鳴を上げた。
俺の手を握りしめたダクネスが、壮絶な目で不敵に笑う。

「ふ、ふふふ……。ド、ドレインタッチか……！　普段あまり使わないから忘れていたが、そのスキルで私の体力を吸い尽くす前に、お前の腕をへし折ってやる！」
「ふぐぐぐぐ、や、やれるもんならやってみれえええええ！　いだだだだだっ！　折れる、折れちゃう！」
ドレインで体力を吸う俺と、俺を力でねじ伏せようとするダクネ

ス。
お互いに譲らないし譲れない。
ダクネスの力にジリジリと押されていくが、押しているダクネスもその表情を歪めていた。
ヤバイ、ドレインで体力を吸っているが、この体力バカの底が見えない……！
このままではジリ貧だというのを見て取ったのだろう。
「あああああカズマあああ！　なんとか一端距離を置くのです！　そして、離れたところから魔法攻撃を！」
「外野がアドバイスするのはずるいわよめぐみん！　あははははは、これで今日はカニ鍋ね！　めぐみんの小さな財布の中身を全部飲み尽くして上げるわ！」
「ア、アクアの支援魔法の方がずるいです！　賭けの神様のバチが当たりますよ！」
そんな、どうしようもない外野の声が聞こえてきた。
……。
賭け……。
「お、おいダクネス！　俺達も、か、賭けをしないか！　勝ったほうが、相手に何でも一つ、言う事を聞かせられるって条件で……っ！」
歯を食い縛りながら耐える俺に、ダクネスが伸し掛かる様にギリギリと力を込め。
「か、賭けだと……っ！？　ふ、ふふっ、会話で時間稼ぎでもする気か……っ！？　賭けでも何でも好きにしろ、私が勝ったら、貴様に土下座させてやる……っ！」

――勝機！

「約束したな……！？　ぜ、絶対だな……！？」

「ああ、二言は無いっ……！　というかもう後が無いぞ！　さあ、降参しろ！　でなければ、本当に折れてしまうぞ……！」

ジリジリとダクネスに押されていた俺の背中が、庭の岩に押し付けられた。

「本当だな？　絶対だな！　約束したぞ！　俺が勝った後、泣いて謝っても止めないからな！」

不利な状況下にも関わらず、俺はダクネスに向けて不敵に笑う。

それを怪訝に思ったのか、ダクネスの力が少し緩んだ。

「……？　なんだ、私が負けたら何を望む気だ」

「とても口では言えない事だよ……！　ふへへへ、約束したぞ！　さあ、勝負だ！　俺が勝った後、お前が必死に許しを乞う姿が目に浮かぶぜ……！　勘弁して下さい、許して下さいって謝らせてやる！」

俺の言葉を聞き、ダクネスはビクリと震えた。

そして俺を捻じ伏せようとする力が弱まる。

「く……っ！　な、何だ、私に一体何をさせる気だ……っ？　言え！　言ってみろ！」

「ふへへへへへ、お前が今想像している事よりも、遥かに凄い事さあ……っ！」

「なっ……！　や、止めろお……っ！　くっ……！　て、抵抗しようにも、ドレインで力を吸われて……！　な、なんて事だ、このままでは……！」

本来ドレインタッチで吸えるのは、体力だけのはずなのだが。

どんどん力を緩めていくダクネスが、その場にガクリと片膝を付いた。

「はあ……はあ……！　な、何をさせる気だ……！　はあはあ……！　ああ……、このままでは負けてしまう……！　せ、せめてこの後、汗を流す時間くらいは……！」

頬を赤らめて荒い息をしだしたダクネスが、うなじから鎖骨にかけて一筋の汗を垂らす。

「そんな時間をやる訳がないだろう……！　俺が勝ったなら、明日の朝までタップリと使ってやるぜ！」

「ああっ！　そ、そんな……っ！　勝負には負けたが、例えどんな辱めを受けても私の心までは屈しはしない！　さあ、私の負けだ！　どんと来い！　早くっ！　ほら、早く！」

俺に両手を掴まれたまま、芝生の上にペタンと正座し、ダクネスが期待に満ちた赤い顔でこちらを見上げた。

「よっし！　おかげで食費が浮きました！　アクア、情けです。サービスでたくあんも付けてあげます」

「わあああああ、なんでよー！　絶対ダクネスが勝つと思ったのに！　思ったのにー！」

外野が何やら騒ぐ中。

俺は期待に満ちた表情のダクネスを見下ろし、命令した。

「これから実家に帰って父ちゃんに、朝まで、お父様だーい好き！　って言い続けて来い」

「かっ……、勘弁して下さい！　許してくださいっ！　そそ、それだけはどうか許してくださいっっ！」

更新出来なかったお詫び兼ねつつのダクネス短編（後書き）

明日はめぐみん短編。
こんなん書いてる間があれば本編書けとのご意見、あんまし聞きたくないですが承ります。

日頃の感謝なめぐみん短編（前書き）

先日のダクネス短編と同じく、これもそのうち、サクッと削除されます。

日頃の感謝なめぐみん短編

めぐみんとゆんゆんが、ウチの庭で座禅を組み、二人して何かをぶつぶつと呟いていた。
昼飯を食べた後から、ずっとこの調子だ。

二人のそんな様子を、俺は一人の幼女と共に見物していた。

「……おにいちゃん。わたしのおねえちゃんは、何をしているんですか？」
「あれはね、食後にああして呟いて、太らない様に自己催眠を掛けているんだよ。近くに寄って聞いてごらん？　きっと、太りませんように太りませんようにとぶつぶつ呟いているよ。……みかん食べるか？」

両親がしばらく留守のため、ウチに昼飯を食べに来たこめっこに、俺は籠に入ったみかんを差し出す。

「食べる。……ご飯を食べた後じゃない時とか、寝る前とかにも、あれをやっている時があるんです」
「それはね、寝る前にああして呟いて、自分の心に言い聞かせているんだよ。寝て起きたら成長している。寝て起きたら成長している、って。あの位の年頃になると、成長は頭打ちになるからね。ああして、脳内にもう一人の自分とかを作って、慰めてもらってるんだよ。……ジュース飲むか？」
「飲む。……おねえちゃんもゆんゆんも、太らない様に大きくなりたいのかー」

めぐみんとゆんゆんが、突然立ち上がり駆け寄って来た。

「妹に勝手な事を吹き込むのは止めて下さい！　信じたらどうするんですか！」
「私、私、太ってませんし！　ちょっとずつですけど、一応まだ背も伸びてますし！」

話を聞くと、どうも魔法の詠唱の練習をしていたらしい。

「まほーふはいにとっへ、魔法のえいひょうの早口れんひゅうは基本なのれふ」
「おねーちゃん、わたしのみかんー！　わたしのみかんー！！」

こめっこが腹に抱いていたみかんの籠を取り上げ、めぐみんがその内の一つをほお張りながら教えてくれた。

「んぐっ……。こめっこ、みかんは一つにしておくのです。でないと、晩ごはんが食べられなくなりますよ」
「おねーちゃんは横暴だ！　わたしがもらったのに！　わたしがもらったのに！」
こめっこにまとわりつかれながら、めぐみんがみかん籠をゆんゆんにパスした。
「えっ？　あっ！」
籠を渡されたゆんゆんにこめっこがまとわりつくが、立っている

ゆんゆんの高さは、こめっこが背伸びしても籠を取り返す事が出来る高さではない。

ひとしきりゆんゆんにまとわりついた後、こめっこが大声で。

「ゆんゆんがみかん盗ったー！　みかん盗ったー！」

「ああっ！　ちっ、違うの！　こめっこちゃん、別に盗った訳じゃあ……！　ねえめぐみん、どうしよう！　どうしたらいいの！？」

「妹の為にもみかんは死守して下さい。この子は際限なく食べるので、夕飯までずっと食べ続けます。そして、お腹が一杯な状態で今晩のご馳走を見て、食べたいのに食べれず、泣き出す事が安易に予想できます。友達なら、絶対に渡さないでくださいね」

「！？」

理不尽な頼みを託されたゆんゆんは、泣きそうになりながらも籠を高く上げ、こめっこの説得を始めだす。

めぐみんは、そんな様子を眺めながら、庭の芝生にあぐらをかいている俺の隣に座り込んだ。

「もう魔法の詠唱の練習は良いのか？」

「妹に余計な事を吹き込んで私達の修行を邪魔しておいて、抜け抜けと言いますか。今日はこのまま休みます。天気もいいし、たまには昼寝でもしましょうか」

言いながら、めぐみんは目を細めて伸びをしながら、隣で気持良さそうに寝転んだ。

「……みかん食う？」

「……一切れください」

俺が１つだけ取っておいたみかんを剥いていると、目ざとく見つけたこめっこが、こちらに駆け寄ってきた。

「わたしにもください」
「全部あげよう」

「カズマ！？　あなたはどうして、そんなにウチの妹に甘いんですか！？」
めぐみんがガバッと起き上がる頃には、既にみかんはこめっこの手の中に収まっていた。
こめっこは、俺が剥いていたみかんを幸せそうに頬張ると、俺の隣に座ってくる。

「おにいちゃんは物知りだと聞きました。ゆんゆんをやっつけられる魔法を教えてください」
「こ、こめっこちゃん！」

ゆんゆんが籠を抱いたまま涙目になって嘆く中、めぐみんが釘を差してきた。

「言っておきますが、初級魔法も教えないでくださいね？　この子はかなりの才能がありますし、もう既に、冒険者カードも貰っています。親がカードを隠していますが、それだっていつ見つけ出すか分かりませんし、教え込めばいきなり中級魔法ぐらいは使える様になってしまうかも知れません。カードを手にして魔法のスペルを覚えていれば、この子はそれで魔法が使えてしまいます。……良いですか？　どれだけ甘えられても絶対に教えてはいけませんよ？」
「大丈夫だよ、俺だってバカじゃない。子供に魔法を教える危険性は理解してるよ」

めぐみんに、心配するなと笑い掛けると、こめっこがくいくいと服の袖を引っ張ってきた。

そして、今にも泣き出しそうな悲しげな表情で。
「……魔法……」
「初級がいいか？　中級がいいか？　ごめんな、お兄ちゃんまだ上級は覚えていないんだ。次会う時までに、覚えてくるからな。おお、そうだ！　テレポートを……」
「カズマ！　ダメですよ！　ダメですってば！」

姉の目が光っているのでしょうがない。
なら……。
うむ、あれなら。

「よし。それじゃあ、お兄ちゃんの国でとても有名な大魔導師の必殺魔法を教えてやろう」
「ほんとう！？」
「カズマ！　だ、ダメですってば！」
目を輝かせるこめっこと、俺をガクガクと揺さぶってくるめぐみん。
そのめぐみんに、大丈夫だと手で合図し。

俺はその場に立ち上がり、ゆっくりと詠唱を開始した。

「黄昏れよりも暗きもの……血の流れよりも赤きもの……時の流れに埋もれし……偉大な汝の名において……」
「「「！？」」」

俺が唱え始めたあの有名な詠唱に、三人の紅魔族が途端に興味を示した。

「カズマ、その魔法はなんですか！？　私の知らない魔法です！」
「おにいちゃん、もう一回！　もう一回！」

めぐみんとこめっこが激しく興味を示す中、籠を抱えたままのゆんゆんですら、耳をそば立てて近づいて来る。
効果はばつぐんのようだ！

「これはな、俺の国で有名な女魔導師が、得意としていた魔法なんだ。凄い爆発を引き起こし、ドラゴンをも屠る必殺の魔法なんだよ」
こめっこに教えてやると、目を輝かせて何度も詠唱を繰り返す。
それを見ながらめぐみんが。

「ほう……。爆発を引き起こし、ドラゴンをも屠る魔法……。女魔導師という所と良い、私に似た魔導師ですね」
「違うよ。向こうは実力も伴うし、世界的にも有名な大魔導師だぞ？　もし似てると言うのなら、お前の方がパチもんなんだ」
「パチもん！？　パパパ、パチもん！」

何やらショックを受けて固まっためぐみんに向けて、こめっこが手を突き出し、覚えたての魔法の詠唱を行っていた。
ゆんゆんが籠を抱えてウロウロする中、めぐみんの目に光が戻る。

「良いでしょう！　この私の実力を、今からその目に見せてやります！　三人とも、街の外まで来るのです！」
「たそがれよりもくらきもの……ちのながれよりもあかきもの……」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

街から離れた草原には、中型の草食モンスターが多く生息している。

カエルがあまり居ないこの季節は、この草原地帯でのレベル上げが基本とされていた。
辺りには同業者と覚しき人達が、モンスターを追い掛け回している。

そこかしこを闊歩する、牛と山羊を足して小さくした様なモンスター達。
それらを見て、こめっこが大騒ぎした。

「おねえちゃん！　おねえちゃん!!　晩ごはんがたくさん歩いてるよ！」
「こめっこ、落ち着きなさい。今日の晩ご飯はアレよりも美味しいご飯です。なので、アレは今日の所は経験値の足しにします」
「もったいない！　もったいない!!」

騒ぐこめっこを尻目に、めぐみんがゆんゆんに目で合図した。
合図されたゆんゆんは、未だに律儀にみかん籠を抱えている。

「……？　どうしたのめぐみん？　目をシパシパさせて。目がかゆいの？」
「違いますよ！　先に、前座のあなたの魔法を見せてやって下さいと言っているのです！」
「ぜ、前座!?」
前座呼ばわりされたゆんゆんは、みかん籠を持ったまま泣きそうな顔をした。
俺がゆんゆんから籠を受け取ると、ゆんゆんはしょぼくれながらもその辺のモンスターに対して向き直る。
しかし、当然と言うか何と言うか、肩を落としたままで、やる気は当然感じられない。
そんなゆんゆんに、めぐみんが発破を掛ける。

「ゆんゆん、これが終わったら、屋敷で晩ごはんを僭ってあげます。なので、後の私が霞むぐらいの、凄いのを一発見せてください！」

「！？　ば、晩ごはん！？　い、いいの？　私がその、お家の晩ごはんに呼ばれちゃっても……」

途端にオロオロしだしたゆんゆんに、めぐみんが。

「構いません！　今晩のメニューは豪華ですよ！　それに量もたっぷり用意してあります。期待していてくださいね？」

「献立は何でもいいんだけど……。晩ごはん……。友達の家で一緒に晩ごはんかぁ……」

不憫な独り言をぶつぶつ言い出したゆんゆんは、バッとマントを翻した。

そして、近場に居た草食型のモンスターに向けて腰のワンドを取り出し突きつける。

食欲旺盛で、畑の作物も雑草も何もかも、生えている物は根こそぎ食い荒らすために、モンスター扱いされた動物だ。

現在も草をモリモリ食べ続けるそのモンスターは、つぶらな瞳で、対峙するゆんゆんをじっと見た。

「……ねえめぐみん、もっと凶暴なモンスターがいる所でやらない？」

「やりません。まったく、とんだ甘ちゃんですね！　見てくれは可愛くても、アレは立派な人類の敵なのです！　さあカズマ！　そして、先ほどから私に謎の魔法を掛け続けているこめっこ！　２人とも、我が力を見るがいい！　そして、誰が世界最強なのかを、その目に焼き付けるが良いです！」

「最強!?　おねえちゃんが、世界最強なの!?」

「そうです！　我が名はめぐみん！　世界最強のアークウィザードにして、爆裂魔法を極めし者！　さあ、こめっこ！　よく見ていなさい！」

めぐみんが杖を振り上げ詠唱を始めた。

それをキラキラと輝く目で見て、こめっこが地面に屈み込む。

ポケットから大事そうに何かを取り出す。

おやつでも取っておいたのかと思ったが、良く見ると、それはチョークだった。

こめっこは、姉の勇姿を見ようともせず、一心不乱に地面に何かを書いている。

ひょっとして、姉の魔法を覚えるために詠唱でも書き写しているのだろうか？

魔法を教えるなと言った本人が何をしてるんだ。

まあ、流石に爆裂魔法は無理だと思うが……。

「さあ、我が奥義、見るがいい！　『エクスプロージョン』――！」

めぐみんの放った爆裂魔法が、数頭のモンスターがたむろしていた真ん中に突き刺さった。

閃光と爆風、そして轟音と共に、爆心地となった地面に巨大なクレーターが出来上がる。

それを見て、めぐみんが満足気にどや顔で鼻を鳴らした。

最近、爆裂魔法を見る目が肥えてきた俺ですらも、今の魔法の出

来には文句の付けようもない。
めぐみんは、振り返って満足気に微笑むと。

「さあ、これで……私……を……。パチもんだと……は……」

胸を張って勝ち誇ってくるかと思えば、笑顔を固まらせたまま、言葉尻を萎ませた。
見れば、ゆんゆんも妙な表情でため息を吐いている。

「……バニルさん、なんでこんな所に生えてきたんですか？」

ゆんゆんとめぐみんの視線の先には、落書きみたいな魔法陣の上で固まるバニルが居た。

「……なぜこんな所にいるのかは、我輩の方こそ聞きたいのだが……。……やや！　そこな幼女よ、また我輩を召喚したのか！　主よ、仕事中は気安くポンポン喚ぶものではないと、アレほど……！」

……まさかとは思うが、こめっこがこいつを召喚したのか。

店のエプロンを付けたバニルが屈んで、こめっこに目線を合わせてこんこんと説教する中。

「いけにえの、みかんです」

こめっこが、隠し持っていたらしいみかんを、物欲しそうにじっと見てから。
それを、バニルにそっと手渡した。

「わがつかいま、バニルにめいず。おねえちゃんが最強らしいので、このいけにえでおねえちゃんをやっつけてください。そうしたら、あるじの私が最強になれます」

「こめっこ、お姉ちゃんと話をしましょう！　まずは、このみかんでも食べませんか！？」

日頃の感謝なめぐみん短編（後書き）

別作品、仮面悪魔の方を読まないと分からないオチですいません……

明日は女神の短編で。

「布教活動をしようと思うの」

「「「「……」」」」

アクアが突然そんな事を言い出すが、どう反応すればいいのか分からず、その場の皆が静まり返った。

そして……。

「クリスは何時までこの街にいるんだ？　街に居る間は、ずっとここに泊まるといいよ」

「……ん、そうだな。部屋は以前クリスが使っていた、私の部屋の隣がそのままになっている。夜になったら、また一緒に遅くまで飲もう」

「やー、悪いねー！　暖かくなってきたから、別に馬小屋でもいいんだけどさー！」

「せっかく部屋が空いているのですから、使わないと勿体無いですよ。今晩はご馳走にしましょうか」

遊びに来たクリスをソファーの中央に置き、皆が口々に喋りだす。

「ねえ、聞いて頂戴！　今、大事な話をしているの！　ほら、無宗派の人はこれ書いて！」

言って、アクアがテーブルの上に紙束を置く。

見れば、それはアクシズ教への入信書。

俺はそれを一枚拾うと、クシャッと丸めてゴミ箱目掛けて……！

「狙撃！」
「ああっ！」
投げつける場合には狙撃スキルは適用されないのだが、気分でスキル名を言ってみたら見事に入った。

「なにすんのよクソニート！　あんた、バチが当たるからね！」
アクアがゴミ箱をひっくり返し、丸められた入信書を拾っていると。

「そもそも、なぜ急に勧誘なんてしようと思ったんです？　普段プリーストらしい事なんてしないのに、どうしちゃったんですか？」
「ああっ！　めぐみんまで！」
めぐみんが、そんな事を言いながら入信書を紙飛行機にして飛ばしていた。

飛んで行く飛行機をキャッチするアクアに、ダクネスが腕を組んで呟く。
「ん……。私は、女神エリスに剣を捧げたクルセイダーだからな……」
「なによ、ダクネスなんてなんちゃってクルセイダーの癖にー！　もういいわよ、私一人で勧誘してくる！」
「な、なんちゃってクルセイダー！？」

アクアが怒りながら屋敷を出ていこうとすると、テーブルに置かれたままの紙束を手にクリスが立ち上がる。
「アクアさん、これ！　……あと、なんだか心配だから、あたしもついて行くよ」
クリスの言葉に、アクアが驚きの表情で振り向いた。
「……ク、クリス……！　わ……わあああああーっ！　この屋敷の中で私の味方はクリスだけよおおおおお！」

「おいクリス、あんましそのバカを甘やかさないでくれよ。また調子に乗って何かやらかすに決まってるんだから」

しがみついてくるアクアに、ちょっと困った表情をしながらもアクアの頭を撫でるクリス。

そんな二人を見ながらめぐみんが、

「すいません、何だか心配なので、カズマもついて行って貰っても良いですか？　私は、皆が帰って来るまでにご馳走作って待ってますので」

「…………なんちゃってクルセイダー……」

ソファーに腰掛け、燃え尽きたようにがっくりと項垂れているダクネスの隣で言ってきた。

しょうがねえなあー……。

◆◆

「クリス。私の唯一の理解者で味方であるあなたには、この私の正体を明かしておいた方が良さそうね」

どこへ向かうのか分からないが、街中をてくてくと歩きながら、アクアがそんな事を言い出した。

アレを言うのか。止めておけばいいのに……。

入信書の束を持ち、素直にアクアの後ろをついて行くクリスが首を傾げる。

「そう。この私の正体とは……。あの、麗しくも美しい水の女神！

アクアその人なのよ！　こないだ八百屋のおじさんに、名前を改名してコスプレまでするなんて、熱心なアクシズ教徒だねって言われたけれど、そうじゃないの！　本物なの！　私、本物の女神なのよ！」

バッと振り向き、クリスに向かって力説するアクア。

というか、知らない間にコスプレ呼ばわりまでされていたのか。

急に信者を集めるとか言い出したのも、その辺が理由なのかも知れない。

というか、そんな事を言っても、いい加減信用されないって事を……、

「そうなんですか。凄いですね！　教えてくれてありがとうございます」

クリスが、笑顔を浮かべながらそんな……。

……あれっ？

「えっ！　今ので簡単に信じるのかよ！」

「そ、そうよ！　爆笑したり、神の名を語るとバチが当たるぞって説教したり、嘘ばっかこくなって石を投げたりしないの？　今ので簡単に信じちゃってもいいの？」

俺と一緒にアクアまでもが驚いている。

というか、知らない間にそんな目に遭っていたのか。

「いつか、この街でデュラハンに大勢の冒険者が殺された時、死者をたくさん蘇生したりしてましたもんね。只者ではないと、前々から思ってましたよ？」

紙束を抱えたクリスが、そんな事を……。

「わあああああーっ！　やっぱり、私の味方はクリスだけよおおおっ！　ねえクリス、アクシズ教に入信しない？　今なら入信特典として、本当にへそでお茶が沸かせる伝説の芸を伝授してあげるわよ！」

「い、いえ、私はエリス教徒なので……。あっ！　アクアさん、泣かないでください！　ほら、今から頑張って、信者を増やしに行きましょう！」

……不安だなあ。

「それじゃ行きましょうか！」

アクアの後ろをついて行きながら、俺は隣のクリスに囁いた。

「おいクリス。どうせポカやらかして泣いて帰るのが目に見えてるし、適当にお茶を濁してとっとと引き上げようぜ」

「キ、キミは、神様に対してあんまりじゃないかな……。水を司るアクアさんは、それはそれは強い力を持った、凄い神様なんだよ？　誰もが水無しじゃあ生きてはいけない。皆、水があるのが当たり前になっているから、有り難みが薄いんだよ」

クリスがそんな事を言ってくる。

しかし……、

「ねえクリス！　あなたには関係ない話かも知れないけれど、今か

ら私が、どうやれば信仰が得られるのか、そんな勧誘の極意を教えてあげるわ！」

「あ、はい……。どうもです……」

クリスが甲斐甲斐しく後をついて来てくれるのが嬉しいのか、アクアが浮かれながら歩いて行く。

これが、凄い水の神様とはとても思えないのだが……。

「あそこね！　あそこなら、困っている人が多そうだわ！」

そこは、路地裏に佇む小さな店。

一体何の店なのだろうと思っていると、ガラの悪そうな金髪のチンピラ冒険者が、数枚のエリス札を握りしめて、店から出て来た。

……と言うか、俺の知り合いだ。

店をよく見れば、それは消費者金融の店だった。

この街にこんな店があるのを初めて知る。

……アクアは、なぜこんな店を知っているのだろう。

アクアは堂々と店の前に歩いて行くと、そのまま店の前に体育座りで居座った。

それを見て、店から店主と覚しきガラの悪そうな男が飛び出して来る。

これはヤバイ、揉め事になる前にアクアを連れて……！

「……ちょっとちょっと、アクアさん頼みますよ。あなたにはお金は貸せないって何度も言ってあるじゃないですか。支払能力が無い方への貸付は出来ないんですよ。それにアクシズ教団と揉めたく無いので、アクシズ教徒への貸出は原則禁止なんです」

知り合いじゃねえか。

「ねえ、どうしてアクシズ教徒にそんな意地悪するの？　あの子達が困ったときには、差別しないでちゃんとお金を貸して上げてください！　……今日は、お金を借りに来た訳でも嫌がらせに来た訳でもないわ。お金にはあまり困って無いもの」

「……そこに座られているだけで十分嫌がらせみたいなものなんですが……では、何しに来たんですか？」

「こんなお店にお金を借りに来るほど困った人達に、借金なんていけませんよっていう、助言と導きをしようかと思って」

「やっぱり嫌がらせですよ！　営業妨害しないでくださいよ、もうほんと勘弁して下さいよ。だからアクシズ教徒は困るんです。ほら、このお酒を教団に寄付しますから帰って下さい」

俺とクリスが離れた所から見守る中、アクアが酒瓶を抱いて帰って来た。

「……ね？」

「ね？　じゃねーよ、何しに行ってきたんだよ！　嫌がらせすんな、勧誘をしろ！」

「アクアさん、それは勧誘でも何でもなく恐喝って言うんですよ！　そんな事してちゃダメですよ、またアクシズ教徒の評判が落ちますよ！」

――店を後にして、街角で作戦会議中。

「しょうがねえなあ。ここは俺が、何か良い勧誘方法を考えてやるよ」

「小ズルくて狡っ辛い上に口が回るカズマさんが手伝ってくれるなら、これはもう勝ったも同然ね！」

「キミ、無茶しそうだし不安だなあ……。あっ！　アクアさんをイジメちゃダメだよ、バチが当たるよ！」

人を褒めているのか貶しているのか分からないアクアの頬を引っ張っていると、クリスが慌てて止めてくる。

調子に乗るからあまり甘やかさないで欲しいんだけどなあ……。

「まあいい、作戦はこうだ。まずさっきの、困ってそうな人を助けるってのは間違っちゃいない。店のチョイスが間違っていただけだ。あれじゃ、相談に乗った所で金を融通しなきゃならなくなる。お前だって、金で信者を買うみたいな事はしたくないだろ？」

「私は一向に構わないわ」

「アクアさん！　ダメですよ、信仰は尊い物なんですから！」

真顔で堂々と言い切ったアクアに、こんこんと説教を始めるクリス。

……こいつ、大雑把でサバサバした姉御肌な奴だと思ってたが、盗賊なんてやってる癖に結構信心深くて真面目なんだな。

「まあいい。取り敢えず、まずは困ってる人を探そうか。……よしアクア、公園のトイレから紙を全部回収してこい。そして、トイレの前で張り込みするんだ」

「なるほど、慌ててトイレに駆け込んだ人を狙うのね！　さすがカズマさん！　こういう時は頼りになるわね！」
「キミたち、発想が逆だよ！　困ってる人を作ってどうするのさ！　そんなんだからアクシズ教の悪評が立つんだよ！」

「ねえクリス。本当にこんなんで上手くいくのかしら。いっそ芸の一つも見せて、続きが見たいなら入信書にサインをって言った方が良いんじゃないかしら」
最も人で賑わう大通り。
そこのど真ん中で、アクアが紙束を抱えて不安げに言った。
クリスの発案で、素直に一人一人、教義を説いて勧誘をしてはと言う事になったのだが。

「ダメですよアクアさん、それじゃ何の解決にもならないです。……何の為に勧誘するんですか？　困っている人に救いをもたらす為でしょう？　……耳を傾けてくれる人がいなくても、そこで落ち込んではいけません。アクアさんの声に導かれて誰かが入信したなら、悩める人が一人救われたと言う事。私達の声に耳を傾ける人がいないというのなら、それは、救いを求める人達がいない、苦しんでいる人がいないと言う事。入信者が一人も居なかったのなら、今日は悩める人が一人もいない、素敵な日だったと思えばいいんです」
クリスがアクアに、優しく微笑みかけながらそんな事を……。

「……どうしたクリス、急にそんな格好良い事言い出して。なんか口調がプリーストみたいだぞ」
「そうよね。自分で言うのもなんだけど、クリスったら私より聖職者に向いてるんじゃないかしら」
「!?　ああ、いやっ、ち、違うよ！　ほら、ダクネスがさ、前にそんな事を言ってた様ないないような!?　受け売りだよ受け売り！」

あのなんちゃってクルセイダーがそんな格好良い事を？
と、アクアが気をとり直したように紙束を握りしめ。
「まあいいわ！　そうね、やる前からこんなんじゃあダメね！　世に蔓延るエリス教徒を、全員アクシズ教徒に改宗させるつもりで行くわ！」
「そ、それは止めて欲しいなあ……」
そんなアクアを見ながら、クリスが困った様に呟いた。

――街頭に立ち、十分経過――

「アクシズ教！　アクシズ教をお願いします！　困っている人はいませんかー？　悩んでいる人はいませんかー？　苦しい時にアクシズ教！　悲しい時にアクシズ教！　……そこの、お顔の造形に悩んでいそうなお兄さん、寄って行きませんか？」

たまに余計な事を言って石を投げつけられたりしているアクアは、挫ける様子もなく石を投げ返し、再び声を張り上げていた。

「アクシズ教をよろしくどうぞ！」

――一時間経過――

「あのー、アクシズいかがですかー？　あのー、何かと良い事がありますよー？　興味はありませんかー？　芸が上手くなったりとか、その、色んな喜びの声が聞こえて来ていますよー？」

道行く人達が素通りする中、アクアの演説が少し不安定になってきた。

それを、クリスが拳を握って見守っている。

「あのー……。……今ならもれなく、覚えておくと場が盛り上がる事間違いなしな必殺芸の伝授を……」

方向性を見失うな。

頑張れ、もうちょっと頑張れ。

――三時間経過――

「……アクシズ教……。……ぐすっ……アクシズ教に……。誰か……ぐずっ……。入りませんか……ぐすっ……」

これぐらいが限界の様だ。

俺はアクアを回収するべくその場から立ち上がると、泣きながら

訴えているアクアの元へと……。

――と、クリスが俺の服の端を掴んで引き止めてきた。
そして、クリスはそのままアクアの元へと歩いて行く。

「ぐすっ……アクシズ教ー……。アクシズ教を……あっ……」

クリスの姿に気が付くと、アクアがいよいよ泣きそうに顔を歪める。
そんなアクアを抱きしめる様に、クリスが肩を抱いて、諭すように言った。

「アクアさん、お疲れ様でした。アクアさんのやっていた事は、無駄じゃないですよ？　だって、少なくともこれまでに通りかかった人の中に、悩める人はいなかったという事ですから。ほら、今日も一日平和だったって思えば、むしろ一人も勧誘出来なかった事が良い事の様に思えてはきませんか？」

「……きません……」

せっかくの良いセリフも、泣きながらクリスの胸元に顔を埋めるアクアには通じなかったらしい。

「……あ、明日！　また明日、頑張りましょう？　私が毎日協力しますから。明日は、私と一緒に、この街の困っている人達、救いを求めている人達に、手を差し伸べてあげましょう！」

クリスの励ましに、ぐずりながらもアクアが頷く。

……まあ、屋敷に戻ればめぐみんの作っているご馳走で機嫌も直る事だろう。

――と、その時だった。

「さすがエリス教徒は違うな！　よく言った！」
「本当だな！　なんか俺まで、また明日頑張ろうって気になる！」
「エリス教徒は違うなー。格好良いなー。流石だなー」
「これだからエリス教徒は信頼されるんだよ！　噂じゃ、敬虔なエリス教徒は無利子無担保で金を借りられるそうだぜ！」
「わたし、今日からエリス教徒になる！」

辺りでたまたま成り行きを見ていた人達が、口々にクリスを褒め称える。
クリスの胸元に輝く、エリス教のシンボルが付いたネックレスで、エリス教徒だと分かったのだろう。

「えっ！？　いやっ、あのっ！　ち、違っ……！　私、……あ、あたし、そんなつもりじゃ……っ！」
周囲の見物人に褒め称えられるクリスが戸惑う中。
アクアがわなわなと震えながら立ち上がった。

「エ、エリス教徒は！　エリス教徒は私の敵よおおおおー！　わあああああ、エリスなんてパット女神のどこが良いのよおおおお！」
「ア、アクアさん！　大声でそんな事叫びながら走らないで……っ！」

泣いて帰るアクアを追って、クリスが慌てて駆け出した。

機嫌を損ねていたアクアは、晩飯の頃には上機嫌になり……。

この日、エリス教徒が少し増えたそうです。

色んな方に深く感謝の女神短編（後書き）

本日、早い地域では書籍が発売だそうです。
書店で本を見てニヤニヤしてたら一日が終わってました。

毎日更新楽しい。やっぱ楽しい、ちょうたのしい。
でも、ネトゲ時間が減るのでまた来週から平常運転です。

明日は本編。

32話

鎧を着たモンスター達が俺とアクアを取り囲む中、重々しい鎧を着た、一際大柄な山羊頭のモンスターが首を振った。

「……ダメだ。ロギアの奴事切れてやがる。その女を置いて逃げたって男は、相当な凄腕の様だな。……ロギアの体の傷痕を見ろ。無防備な所に一撃をくれたかの様な、この鮮やかな傷を。こいつは余程の使い手だ」

山羊頭がそう言って立ち上がる中、アクアに身構えているトカゲ頭のモンスターが、

「クソッ、ロギアの敵だ！　逃げ遅れたこの女を八つ裂きにしてやろうぜ！」

「！　な、何よ、やる気!?　この私は強いわよ!?　伊達にアクシズ教徒の信仰を集めているわけじゃないわよ！」

アクアが、言いながら威嚇するように身構えると、それを囲んでいたモンスター達が顔色を変えて一歩飛び退いた。

「アクシズ教徒！　こいつ、アクシズ教徒かよ！　なんてこった！」

「やっべえ、俺アクシズ教徒と口聞いちまった！」

「エンガチョ！」

「おい、やだぞ！　アクシズ教徒なんかに関わるのは！」

「うわあ……。見ろよあの青髪、確かにアクシズ教徒くせー！」

モンスター達が、俺とアクアから離れ、こそこそと囁きだした。

「……」

「うわっ！　おいノス！　ちゃんとそいつを押さえといてくれよ！」

「危ねえ！　もうちょっとでアクシズ教徒に触られる所だったぞ！」

好き勝手言うモンスター達にアクアが飛びかかろうとし、その威嚇行動に居並ぶ敵が後ずさる。

そんなアクアは、俺の手にするバインド用の強靭なロープで、首元をリードの様に繋がれていた。

本人が、手足を縛られるよりこの方が良いと言いだし、今の状態になったのだが。

「おいノス！　もうそいつ、城の外に捨ててきてくれや。……というか、お前はやっぱり何て言うか……。腕は立つが、頭の方が残念なんだなぁ……。そいつはアクシズ教徒なんだぞ？　ノス、お前はそいつが怖くねえのか？　そもそも、アクシズ教徒って分かるか？」

山羊頭の、こいつらのまとめ役みたいなモンスターが言ってくる。

――アクアを捕らえたフリをしている、鎧騎士ノスになりきった俺に向けて。

山羊頭の言い方だと、あのノスって鎧騎士は、やはりと言うか、頭の方がよろしくなかった様だ。

あいつの声は知ってるが、口調はどんなんだったか。……よし。

「へへっ、旦那、そいつぁいけねえ！　この女は逃げた男への切り札ですぜ！　なあーに、もう一人居た、カズマとかいったあの男。確かに恐ろしく腕は立ち、魔法まで使いこなす万能型の強敵でしたが……。この女を人質にさえ取っておけば、俺達が負ける要素なんて皆無ですぜ！」

俺の言葉にモンスター達が後ずさった。

あ、あれ。声は間違いなく似せてあるはずなんだが……。

「お、おいノス。お前、戦闘で頭でも打ったのか？　元々頭の良い方じゃないお前だったが、喋りまでバカになってるぞ」

「女を人質とか、お前随分悪くなったなあ……」

「ヒクワー。カルクヒクワー」

口々にモンスター達が言ってくる中、山羊頭が、思案する様に顎に手を当てた。

「……ふむ。お前はバカだが腕は立つ。そのお前が、それほどの強敵だと言うのなら、そうなのだろう。逃げた男はまだこの階層にいるはずだ。よし、ノス！　お前はその女を連れてついて来い！　ちゃんと見とけよ！　くれぐれも俺達にその女を近づけるなよ！」

山羊頭は、そう言ってくるりと背中を向けると……。

「……」

アクアが無言でダッシュし、その山羊頭の背中にペタペタ触った。

「あーっ！　マモン様がアクシズ教徒に触られた！」

「ゲッ！　マモンサマ、エンガチョ！」

「ノース！　お前、ちゃんと見とけって言ったろうがァ！　こらっ、止めろアクシズ教徒、あっちいけ！　しっしっ！」

数体の魔物の群れと共に、暗い魔王城の中を歩いて行く。
暗視ができない連中も多いのか、モンスターの中には松明を持っている者もいる。
いざ戦闘になった際には、火を消してやれば有利になるな。
そんな事を考えながら、俺はアクアを引き連れ、連中の最後尾を歩いていた。

倒された仲間の敵討ち代わりに、アクアを拷問しようとか言い出す奴もおらず、今のところは順調だ。

狙いはこのまま安全にミツルギ達と合流する事。
そして、魔王の居場所を聞き出す事だ。

「カズマさんカズマさん」

アクアが小さく囁いてくる。
えんがちょされたアクアを連れている俺は、モンスター達から距離を取らされているのだが、それでも話し掛けてくるのは止めて欲しい。

「なんだよ、話しかけるなって言っておいただろ？」

小さな声で囁き返すと、アクアが神妙な顔で。

「私、既にこの状況に我慢の限界に近いんですけど。どうして私がえんがちょされなきゃいけないの？　仮にも女神の扱いじゃないんですけど。囚われの女神とか、そんなんを予想してたんですけど。

何ていうか、これって狂犬病に感染した獣扱いじゃないのかしら」
「お前、もうちょっと我慢しろよ。幾らなんでもこの数相手じゃどうにもならないからな？　……っと、着いたみたいだぞ」

俺とアクアが連れて来られたのは、広々として、かつ、そこかしこに武器が立て掛けられた、騎士が詰める待機所だった。
そこには、中に入るのを怖気づくほどの鎧騎士が待機している。
何と言うか、鎧騎士の一人一人から雑魚ではないオーラを感じる。
佇んでいるだけで帰りたくなる様な……。

それを見た俺とアクアが中に入る事を怖気づいていると。

「おうお前ら！　侵入者の内一人は捕らえたぞ！　話を聞く限りじゃあ、乗り込んできた連中は恐ろしく強いらしい。城を揺るがし崩壊させそうになった事といい、正面から戦えば魔王様を守れない恐れすらある！　そこで、だ。ノスが良い案を出してくれた。……この、捕らえた女を人質にして、侵入者を一掃するという案を！」
「「「「おおおおーっ！」」」」

居並ぶ連中が深い安堵の息を吐きながら声を上げた。
めぐみんの暴れぶりは、よほど魔王軍の連中のトラウマとなっていたらしい。
無理もない、突如として自分達の居城が爆撃され始めたのだ。
しかも最強の幹部とやらも敗れ去り、堂々と城に乗り込まれている状況だ。

「良かった……、助かった……！」
「しっかし、女を人質ねえ……。実直な奴だと思ってたノスが、そんな事を言い出すなんてなあ……」
「いやさ、人質ってのは流石に小物臭くないか？　それをやっても

いいのは、各地域の管理職クラスの連中までだろう。俺達は魔王様の直属の近衛隊だぞ？　いいのかこれは？」

魔王軍の連中が思い思いに喋り出す中、山羊頭が待機所の奥に行く。

そして、それは何かの魔道具なのだろう。

山羊頭は、タバコ箱サイズの魔道具に喋りかけた。

「おう、こちらは、魔王城最上階層の近衛隊長、マモンだ！　侵入者の一人を捕まえた！　現在侵入者と交戦中の部隊は、侵入者にその旨を告げろ！　捕らえた侵入者はアクシズ教徒のプリーストだ、こいつを殺されたくなければ投降しろと呼び掛けろ！」

マモンとか言った山羊頭は、そう告げると奥の椅子にドカッと腰を下ろし腕を組んだ。

未だ何の音沙汰も無い待機所の中、モンスター達がピリピリしながら待っていた。

アクアは今のところ、意外にも大人しくしている。

……というかこいつ、今あくびしやがった。

隣に、イザって時はテレポートで逃げられる俺が居るから安心していやがるのか？

緊張感のないアクアに呆れていると、マモンがアクアに問いかけた。

「おい女。侵入者はお前を合わせて何人だ？　痛い目に遭いたくなければ知っている事を教えてもらおうか。……特に、お前を置いて逃げた凄腕のカズマって男についてだ。――そいつの職業は？　装備は？　あと、戦い方と過去の戦歴、そして性格だな。知っている事を洗いざらい話して貰おう」

ミツルギ達を拘束するまでの暇潰しなのか、マモンがアクアに、俺の事を聞き出そうとしてくる。

あまり余計な事を言われてボロを出されると困るのだが。

「教えてあげても良いけど、喉が乾いたからお茶欲しいんですけど」

「この女！」

ワガママを言い出したアクアに一人の鎧騎士がいきり立つ。

が、マモンは手を上げてそれを制した。

「茶ぐらい入れてやれ。どうせ、これが最後に飲む茶になるんだ。……一番良いヤツを出してやんな」

マモンがボス格の貫禄を醸し出して、騎士の一人にお茶を命じる。

「……で、まずは侵入者の数と、そのカズマって奴の職業からだ。そいつの職は？　クルセイダーか？　それともソードマスターか？　ロギアの体のあの傷跡だ、魔法使い職って事はないだろう」

「数は……。私を入れて、総勢八人かしら。あと、カズマさんの職業は冒険者ですけど」

マモンの問いにあっさり答えるアクアに、その場がシンと静まり返った。

やがて……。

「「「「ぶはっ！」」」」

俺とアクアを除くその場の全員が噴き出した。

「冒険者！　最弱職の冒険者だと！？　バカも休み休み言えよ！　そんな奴がどうやってこの城にまでやって来たんだ！　ぶはははは、ああそうか、荷物持ちか？　荷物持ちなんだろう？　で、スキル振りは、剣の扱いに一極化させたとか、そんな所か！」

他の鎧騎士達が爆笑する中、マモンが笑いながら言ってくる。

それにアクアが首を振った。

「違うわよ。カズマさんは剣も使えるけど魔法だって使えるわ。小賢しい事に回復魔法まで覚えてたわね。他に、テレポートも使えるし、不死王の手とか言ったヘンテコなスキルとか、その他色々。数え切れないぐらいに大量のスキルを持ってるわよ。……あ、ありがとうね」

アクアが、持ってこられたお茶を受け取り礼を言った。

――シンと静まり返る中、アクアがお茶を啜る音だけが部屋に響く。

「ねえ、これ、お湯なんですけど」

アクアが差し出してきたカップの中は、確かにお湯が。

「おいっ、地味な嫌がらせしてんじゃねえ、俺の顔に泥を塗る気か！　ロギアやペインを殺られて頭にきているのは分かるが、くだら

ねえ事してんじゃねえぞ！」

マモンに怒鳴られ、一人の騎士が慌ててアクアのカップを受け取り、新しいお茶を入れに行く。

……こいつ、お茶をお湯に変えやがったな。

やめてやれよ、嫌がらせするなよ。

マモンが一つ咳払いをし、佇まいを直し口を開いた。

「俺の部下がくだらねえ真似をしちまったな。しかし、不死王の手？　不死王の手だと？　アレはリッチーしか使えないレアスキルのはずなんだが……。……まあいい、続きを聞こうか。そのカズマって奴の装備はどんなだ？　伝説級の装備でも持っていやがるのか？　それなら、ロギアを倒し、ペインをも屠った事に納得がいく。そんな相手なら、スティールを使える奴をぶつければ、楽に……」

「カズマさんの装備は基本的に市販品よ。店売りの中で一番高そうな装備だったけど、せいぜいそんな所ね。というか、あんまり装備に拘らない人だったわ。安物のショートソード一本で、あなた達の所の幹部と何度も渡り合ってたわね。形だけ似せたなんちゃって日本刀を作って貰って、夕方遅くに、せーばいせーばいとか言いながら練習してたわ。……あ、ありがと」

新しいお茶を受け取りながらのアクアの言葉に、また部屋の中が静かになった。

……ていうか、こっそりと練習していたアレを見てたのか。恥ずかしい……っ！

と、一人の鎧騎士が呟いた。

「……俺、なんか聞いた事がある。その、カズマとかって奴の話。……確か、シルビア様と共に紅魔の里を襲撃に行った隊の生き残り

から聞かされたんだが……。カズマって、とんでもないド外道がいた、とかなんとか……」

その騎士の呟きで静まり返る部屋の中に、アクアの声が再び響く。

「お湯なんですけど」

――鎧の騎士がマモンにぶっ飛ばされた。

「そ、その男が、幹部連中を相手取って戦ったってのは本当なのか？」

「本当よ。あなた達の所の幹部で、城に戻って来なくなった人達には、大体カズマさんが関わっているわね。ベルディア、バニル、シルビア、セレナ。私が知っている限りでは、カズマさんが関わった幹部はそのぐらいね。後はまあ、機動要塞デストロイヤー退治の指揮を取っていたわ」

既に待機所の中はシンと静まり返り、先ほどからアクアとマモンのやり取りしか聞こえない。

誰かがゴクリと唾を飲む音。

それらを聞きながら、アクアがペラペラと言葉を続けた。

「後はなんだったかしら？　戦い方や性格を聞きたいって言っていたわね？　あの男は基本的に姑息ね。姑息で陰湿、その上やたらと

知恵が回るわ。あの男は、真正面から戦おうなんて事はまずやらないわね。そう、例えば遠くから暗視と遠視であなたをじっと監視して、狙撃スキルで一撃とか。もしくは潜伏スキルで隠れて、背後から不死王の手で不意討ちなんて事も有り得るわね」

誰が姑息で陰湿だ。後でアクアを引っ叩いてやろう。

「せ、潜伏……。不死王の手……」

マモンの呟きに、誰かがゴクリと唾を飲んだ。

それにアクアが、新しく持ってこられたお茶を受け取りながら。

「そう、潜伏よ。しかも敵感知なんてスキルも持っているから、隠れながらでもあなた達の動向は良く分かるでしょうね。……いえ、もしかしたら……。この部屋に、既にカズマさんが居るのかも！！」

「「「「ヒイイッ！！」」」」

アクアの脅しに鎧騎士達が声を上げた。

というか、そんな際どい事まで言うな！

マモンが落ち着きなく周囲を警戒する中、アクアがお茶をすすって一言。

「またお湯なんですけど」

「待ってくれ！　さっきからおかしい、俺はちゃんとお茶を……、いやマモン様、違いますって！　ちゃんとお茶を淹れてるんですよ！」

アクアが一人の鎧騎士をイビる中、マモンがその騎士に当たり散らそうと立ち上がった、その時だった――

「マモン様、侵入者を捕らえました！　相手は魔剣持ちの凄腕でし

たが、女を人質に取っていると告げたら大人しくなりました！」
そんな報告と共に、一人の鎧騎士が駆け込んできた。
それを聞き、辺りに安堵のため息が漏れる。
今まさに一人の鎧騎士を殴り飛ばそうとしていたマモンもその一人だ。
マモンは駆け込んできた騎士に向け、山羊顔を歪めると、
「ようし、そいつらを連れて来い！　お手柄だ、よくやったな！　あと、ノス！　お前も良くやった！　お前の作戦が上手くいったぜ、後で褒美をやるからな！」
そう言って、マモンは上機嫌で笑いを上げた。

――数名の鎧騎士に、見慣れた面々が連れて来られる。
そこにはミツルギを筆頭に、この城に侵入した全員の顔があった。
「アクア様、無事でしたか！」
ミツルギが待機所の奥でお茶を飲んでいるアクアを見つけ、ほっと息を吐いて安堵した。
アクアの顔を見て、ダクネスやめぐみん、ゆんゆんも表情を和らげる。
ミツルギの取り巻き二人は、武器を構えたまま固い表情で動かない。

マモンは、ミツルギ達がまだ武器を持っている事に気が付くと、
「おっと、悪いが武器を捨ててもらおうか。俺だって、本当はこんな小物臭い事はしたく無いんだがな。この女から、色々とおっかねえ話を聞いちまった以上はしょうがねえ。そこのお前！　お前がカズマって男だな！　武器を捨て、こっちに来やがれ！」
そう言って、ミツルギに指を突き付けた。

「違うわよ？」

アクアが緊張感なくお茶をすすりながら。
「その人は魔剣の人よ。カズマさんはそこには居ないわ」
「！？」

アクアの言葉に、待機所の中がどよめいた。
マモンが途端に、再び落ち着きなく辺りをキョロキョロと警戒する。
一体、どれだけ俺は怖がられているのか。
アクアが調子に乗って脅かすからだ。

「ちっ、確かに聞いた人数に一人足りねえな。……よし、カズマとかいう野郎への人質は、この女一人で十分だ！　そっちの連中は始末しろ！　おい、抵抗するなよ？　抵抗すれば、こいつが一体どうなるか……！」
「くっ……！」
マモンの三下悪役みたいなセリフに、同じくお約束みたいに悔しげに呻くミツルギ。
めぐみんとダクネスは、どうしたものかと思案中の様だ。
「さあ、武器を捨てろ！　おいテメエら、そいつらを囲んで……！」

……おっと、これはいけない。
このままだと状況が悪くなるな。
俺は一歩前に出ると、マモンの傍らに並び立つ。

「お待ちくだせえマモンの旦那！　このままこいつらを楽に殺したら、俺と仲の良かったロギアとペインが浮かばれませんぜ！　どうか、ここは俺に任せてくだせえ！」
「お、おう、そうか。確かにお前は、ロギアとペインの二人とはよく一緒に居たしな。それじゃお前に任せるが……。……しかしお前、その喋りはなんとかならんか？」

マモンの許可を得た俺は、アクアの首に繋がるロープをクイクイと引っ張った。
隙を見て、ミツルギ達の元へダッシュするぞという合図を送る。

「これはイメチェンってヤツです旦那。……さてお前ら。これが見えるか？　俺の手に握られたロープの先には、こうして見ての通り、お前達の仲間が恐怖に怯えている！」
「お茶飲んでますが」

めぐみんのツッコミにそちらを見れば、合図を送られたアクアは首のロープを鬱陶しそうに掴み、未だに椅子に座ってお茶を飲んでいた。
こんな時まで空気を読まない上に察しの悪いこのバカを、本気で引っ叩いてやりたい。

くそ、作戦変更だ。
「……そこのクルセイダーの女！」
「！？」
俺の突然の指名に、ダクネスが大剣を構えたままビクリと震えた。

まずは、このマモンとかいうボス格の警戒を解いておきたい。

「へっへっ、まずはその武器を捨ててもらおうか。それが出来ないと言うのなら、ここでお茶すすっている女がどうなるか……！」

「……分かった。どの道私は攻撃など当たらん。……ほら、これでいいか？」

俺の言葉に素直に武器を捨てるダクネス。

自分で言う通り、ダクネスが武器を捨てても大した戦力低下には繋がらない。

ダクネスが素直に武器を捨てた事で、マモンを始め、他の鎧騎士達が少しだけ緊張を緩めた。

俺は他の連中に武装解除を促すのではなく、そのまま更にダクネスに。

「次は……。そうだなあ、その高そうな鎧が気に入った。次はそいつを脱いでもらおう」

「なっ！？　こ、この鎧は……！　ダ、ダメだ！　これは、この鎧だけは……！」

素直に言う事を聞くかと思えば、ダクネスが意外にも抵抗する。

「鎧が脱げない？　状況が分かっているのか？　魔王城に乗り込んだ女騎士。それが、こうして仲間を人質にされている状況でどうなるか……。仮にも女騎士などをやっているのなら分かるだろう！　さあ、この衆人環視の中、その鎧を脱ぐがいい！」

「なっ……！　なんだと……っ！」

「「「うわあ」」」

ダクネスが頬を染めながら悔しげに歯ぎしりする中、なぜか鎧騎士達の方からドン引きする様な声が上がった。

「ヒクワー。ノス、オマエマジヒクワー」
「悪っりい奴だなお前……！　今まで猫被ってやがったのかよ……」
「お、おいノス。いや、お前に任せるとは言ったが、これは流石に……」

ボス格のマモンですら引いている事実に少しだけ凹みながら、俺はダクネスへと更に続けた。

「くっくっ……。その鎧の下は、さぞかし熟れた体が隠されているのだろうなあ……！　さあ、仲間の命という大義名分があるのだ、とっとと脱げ！」
「た、大義名分……！　い、いやしかし、私はもう、どこの馬の骨とも分からない相手に躾けられる訳には……っ！　ああっ……なんだこの、絡みつくような貴様の視線と、抗い難い感覚は……！　お前は何者なのだ、妙に私のツボに来る……っ！」

上気した赤い顔でダクネスが、何やら葛藤しながら鎧の留め具を一つ一つ外していく。
鎧の部品が一つ絨毯に落ち、ダクネスの白い肩が剥き出しになった。

「「「「「おおっ！」」」」」

……おっといかん、魔王軍の連中と一緒に、俺まで声が出てしまった。
「わ、私は……！　私は、こんな辱めなんかには負けたりしないっ！」
ダクネスが赤い顔で、真っ直ぐ俺を見つめる中。
そんな俺を、なぜかめぐみんがシラケた目で見ているのが非常に気になる。

勘のいいめぐみんとは言え、幾らなんでも……。

「止めろ！　こんな事は許されない！　貴様、魔王軍とはいえ騎士だろう？　恥ずかしくは無いのかっ！　堂々と勝負が出来ないのかっ！！」

空気を読まないミツルギが、歯を食い縛りながら叫びをあげる。

ミツルギの声に、マモンが居住まいを正してその視線を鋭くさせた。

くそっ、色んな意味で余計な事しやがって！

ミツルギの制止の声に、思わず周囲から残念そうなため息が漏れた。

……今ダクネスまでため息を吐いていた様な気がしたのだが。

――マモンが一歩、前に出た。

巨大な鎧に覆われた、その大柄な体が俺の前に無防備に晒される。

マモンは、濁った黄色い山羊の目をギラつかせ――

「おいノス、これ以上いたぶるのは諦めろ！　あの男の言う事も最もだ、こっちは唯でさえ人質を取ってるんだ、これ以上やる必要はねえ！　さあお前ら、そいつらを取り囲め！　その男は俺が相手をしてやるぜ。カズマとかいう野郎が居ないのなら、怖くもねえ！」

吐き捨てるようにそう叫ぶと、巨大な剣を引き抜いた。

「カズマ？　サトウカズマの事か。あの卑怯者よりも、この僕の方

が強い！　僕の名は御剣鏡夜。これでもそこそこ名の知れた、魔剣使いのソードマスターだ！」

人を勝手に卑怯者呼ばわりするミツルギに、応える様にマモンが低く身構える。

そして――

「カズマ？　カズマですか？　あなたはカズマが怖いのですか？」

めぐみんが、杖を構えて威嚇しながらマモンに向けて言ってくる。

「ああ？　怖くねえ！　そんな、コソコソ隠れている様な卑怯者なんて怖くねえ！」

鎧の部品を拾い集め、いそいそと肩にハメたダクネスが。

「あの男を甘く見るなよ。関わった時点で、大概の奴がろくでもない目に遭わされている。お前だって既に例外じゃないぞ」

そんな、褒めているのか貶しているのか分からない様な事を、俺を真っ直ぐ見ながら言ってきた。

「うるせえうるせえ！　俺の名はマモン！　魔王様の部屋へと続く、この大広間を任される近衛隊長を務めるもんだ！　真正面から遣り合えば、幹部連中にだって遅れは取らねえ！　どこにいるかも分からねえ、そんな男に怯えるはずがねえだろうが！」

マモンの叫びに応じる様に、騎士達が剣を構えてミツルギとの距離を測る中。ゆんゆんが、何かの詠唱を開始した。

「本当に？　さっきはあんなに怯えていたのに、本当にカズマさんの事が怖くないの？　もしかしたら、あなたの傍に居るかもよ？」

――アクアが、この緊迫の空気の中。

全く何の心配もしていない様な、安心しきったのほほんとした表情で、アモンに向かって問いかけた。

どうせこいつは、俺がなんとかすると思っているんだろうなあ……。

無事街に帰ったら、こいつとは一度、じっくりと話し合おう。

「怖くねえって言ってんだろうが！　おい、聞いてるか！？　コソコソと隠れる卑怯者が！　この階層のどこかに居るんだろう！？　俺の声が聞こえるなら、今すぐ出て来て名乗りやがれぇぇっ！！」

――俺は兜を脱ぎ捨てると。

「初めまして！　卑怯者のカズマです！」

マモンの首の後ろへと、剣を突き立てながら名乗りをあげた！

33話（前書き）

長くなりました。これでは百万字丁度完結の野望ががが

33話

首後ろに浅く突き立った剣をそのままに、俺はマモンから距離を取る。
スキルによる麻痺か昏睡が発動したのか、マモンが口をパクパクさせながら前のめりにぶっ倒れた。
味方だと思っていた騎士が突然俺になった事により、その場の鎧騎士達がどよめき騒ぐ。

「でっ……！　出たあああああ！」
「マモン様がいきなり殺られた！」
「ナントイウキチク！　ナントイウドチクショウ！」
「えっ！？　ちょっ、えっ！？　有りかよ！　こんなの有りなのかよお！　お前それでも人間なの！？」

無警戒だった所に突然敵が現れ狼狽えていた鎧騎士達だったが、魔王の近衛と言うだけあって、直ぐ様隊形を立て直し、俺の方へ三人ほど鎧騎士が向かってきた。

「『ライト・オブ・セイバー』ッ！」

奥にいる俺達から遠く離れた入り口付近で、ゆんゆんの得意魔法が鎧騎士の一人を斬り裂いた。
それを皮切りに、ダクネスが攻撃を食らう事など気にも止めず、真っ直ぐこっちに突っ込んでくる。
その後にミツルギ達が続き、あっという間に乱戦になった。

「この男は危険だ、サッと囲って一気に殺るぞ！」

俺の前に立ち塞がる鎧騎士が油断なく身構えながらジリジリ迫り、その言葉に二人の騎士が無言で頷く。
俺は目の前の三人に。

「3対1とは騎士の風上にも置けない奴らだ！　お前らは、それで恥ずかしくないのか！」

「おっ……！　お前が言うな！　マモン様を後ろから不意打ちした、お前だけは言うなっ！」
「コ、コイツ、ドノクチガソンナコトヲ……！」
「おい、もういい。これ以上この男のペースに乗せられる訳には……」

「『バインド』ーッ！」
「!?　えっ、ちょっ！！」

何か言い掛けていた鎧騎士の一人に不意討ちのバインドを食らわせる。
俺が手にしていたバインド用の強靭なロープが鎧騎士へと巻きついた。
「いたたたたた！　痛いんですけど！　痛いんですけどー！」

首にロープの端が巻き付いていたアクアも巻き込みながら。

「ぐあっ、畜生！　マモン様を不意討ちしただけじゃなく、まさか仲間まで巻き込むど外道だなんて……！　くそったれ、油断した！　お前ら頼むーっ！」

えらい言われようだが、ロープの先にアクアがくっついてる事を忘れてましただなんて、今更言えない。

「カズマさーん！　カズマさーん！！　この人の鎧が硬くて痛いんですけど！　私の魔法でバインドを解除もしていいかしら！」
「もう少し我慢してろ！　今、こっちの二人を片付けるから！」
アクアに言いながら、油断なく剣を構えて残る二人に向き直る。
それを見て、二人の鎧騎士が腰を落とし、身構えた。

「この外道、何だかんだ言いながら、あっという間に一人無力化しちまった。油断するなよ、１、２の３で同時に行くぞ」
「マカセロ、１、２ノ３ダナ」
二人の騎士が目の前でそんな相談をする中、俺は片方の騎士の声を意識すると……。
「イヤ。ヤッパリ、セーノ！　ニシヨウ。モシクワ１０カゾエテダナ……」
「えっ？　えっ！？　ど、どっちだよ？」
「オイヤメロ！　キサマ、オレノコエマネヲスルンジャナイ！」

片方の声を真似ていると、遠くから警告の声が飛んだ。
「そっちにクルセイダーが突っ込んでったぞーっ！」
警告の声に、騎士二人がチラリと向くと……。
「うおっ！？」
「ナ、ナンジャコリャー！？」

ダクネスが、斬りつけられるのも殴られるのも物ともせずに。
魔王の部屋へは行かせないとばかりに腰に必死でしがみつく二人の騎士を引きずりながら、俺とアクアの方へ突っ込んで来た。
ダクネスは俺達の元に着くと、自分の腰にしがみついていた騎士二人を引き剥がそうとしながら……。

「カズマ、アクア、助けに来たぞ！　助けに……、くっ、お、おい

カズマ、ちょっと手伝ってくれ！　こいつら二人が私を……！」
「お前、敵を二人も引き連れて何がしたいんだよ！　二対四になっただけじゃねーか！」

ダクネスにしがみついていた騎士二人が一端離れ、俺とダクネスを、残り二人の騎士と連携しながら取り囲んでいく。
そこに、勝ち誇った様なアクアの声が聞こえてきた。

「ふふっ、なら、三対四ならどうかしら？」
そこには俺のバインドを解除し、ドヤ顔で立つアクアの姿。
バインドを解除したという事は、当然一緒に縛られていた騎士も自由になるわけで……。

「ね、ねえカズマ！　なんだか一気に形勢が不利になった気がするんだけれど、気のせいかしら！」
「役立たずのプリーストとクルセイダーを連れて、何で五人も相手にしなきゃならないんだよ！　お前らバカだろ！」

そうこう言っている内に、五人の騎士達が全員俺にだけ剣を向け、突き掛かってくる体勢をとった。
まずは俺を仕留める気らしい。
先ほどの脅しがよほど効いている様だ。

ヤバイ、魔王の精鋭に一度に襲い掛かられればもれなく死ぬ。
なんとかダクネスの陰に隠れようとするも、騎士達が一斉に殺到した。

「『デコイ』！」

そして、その剣先が皆、突然ダクネスへと方向を変える。

騎士の剣がダクネスの鎧を引っ掻き、数本の金髪を散らせ、頬に浅い傷を負わせる中。
俺を狙うはずだった騎士達は、ダクネスを攻撃してしまった事に狼狽えた。

「こ、この俺が囮スキルに影響されるだと……っ！？」
「くそ、なぜかこのクルセイダーは、俺の嗜虐心を煽ってくる……！　剣で突かずにはいられないというか……っ！」

騎士集団に剣で突かれ、赤い顔でハアハア言っている場違いな変態が。
「くうっ……！　流石は魔王の精鋭、良い突きを持っているな……！　だがお前達の攻撃など、私が全部受け止めてやる！　さあ、お前達の猛り狂った荒ぶる攻撃を、全て私にぶつけるがいい！　さあ早く！　ほら、早くっ！」

そのダクネスの挑発を罠か何かかと受け取った騎士達が、警戒しながら身構える中。
五人の内の一人が、突然その場に崩れ落ちた。

「アクア様、ご無事ですか！」

ミツルギの声にそちらを見れば、俺達を囲む騎士以外が、いつの間にか倒されていた。
突然の乱入者に、騎士の一人が振り向き様に斬りつける。
が……。
「！？　なっ……、お、俺の妖刀が……！？」
「この魔剣は女神から賜った伝説の業物だ。斬れない物など何もないさ」
ミツルギは、魔剣であっさりと騎士の剣を叩き斬り、返す刀で騎

士を切り捨てた。

……なんというか。

「こいつっ！　そこのど外道よりヤベエ！　こいつを先に殺らないと……ッアアッ！？」

言い掛けていた騎士が、更にミツルギに斬り捨てられる。

それを見て、三人の騎士が一斉に掛かるが――

「『ルーン・オブ・セイバー』！」

魔剣を輝かせたミツルギが、一刀の元に三人まとめて横払いに斬り捨てた。

「……この男、また余計な事を……」

ダクネスが、しょんぼりしながら残念そうにポツリと呟く。

……なんというか。

やっぱ、こいつの持ってる魔剣ってずるい。

ミツルギが、アクアに近づき手を取った。

「アクア様、お怪我は？」

「あ、大丈夫です。それより、ダクネスの傷を治すので……」

手を取られたアクアが、手を掴むミツルギを困った様な顔でじっと見る。

「あっ、す、すいません！」

「……別にいいんですけど、気軽にセクハラしてるとうちのカズマさんみたいになりますよ？」

「引っ叩かれたいのかお前」

慌てて手を離したミツルギに、

「しかし、お前ってこんなに強かったんだなあ。もう、魔王とかお前一人で倒してくれよ」

俺は周囲を見回しながらそう告げた。

――辺りに転がる騎士の亡骸。

マモンとか言った奴も、動けなくなった所をミツルギの取り巻きにトドメを刺された様だ。

「君は僕なんかよりも、もっと大きなチートを貰ったじゃないか」

魔剣を鞘にしまいながら、ミツルギがアクアをチラッと見た。

大きなチート……。

俺も何となくアクアを見ると、ダクネスの傷を癒していたアクアが気まずそうに目を逸らす。

めぐみんやゆんゆんがほっとした表情でこちらにやって来る中、俺は騎士達の詰め所の奥にある、巨大な扉が気になっていた。

確か、マモンが言っていた。

この部屋の事を、魔王様の部屋へと続く、この大広間、と。

騎士達が屯していたこの場所は、侵入者を迎え討つ為の最後の関門的な所だったのだろうか。

ズルしてあっさりとここに来てしまった訳なのだが、この先にはきっとアレがいる。

大立ち回りをした俺達に、間違いなく気付いている事だろう。

全員が集まってきた所で俺は口を開いた。

「さて。アクアを連れ戻すっていう俺達の方の目的はこれで果たされた。後は、俺とゆんゆんのテレポートで帰ればいいんだが……」
その言葉に、ミツルギが何をバカな事をと言いたげな表情で頭を振る。
「君はこの期に及んで何を言っているんだ。魔王だぞ？　目の前に、人類の敵である魔王がいるんだ。こんなチャンスは二度と無い。いいかい？　人類と魔王軍との戦いに、僕らが決着をつけられるんだよ」
……そうは言うが、魔王軍の本隊を率いている魔王の娘とやらはどうなるんだ。
そいつが後を継いで終わりな気がするんだが。
「ひた……！　ひたたたた、ひたいんですけろ……！　二人とも何でほっぺた引っ張るの？　ここは感動の再開なんだから、抱き合って、大丈夫だったかとか心配かけるなとか、そんな場面じゃないの!?　痛い痛い、痛いんですけど！」
その悲鳴にそちらを見ると、ダクネスとめぐみんの間で、二人に無言でほっぺたを引っ張られるアクアの姿。
「まあ聞けよ。この城の結界はめぐみんが魔法で消し飛ばした。これで何時でも城に攻め込める。後は、チート持ち連中と紅魔族の連中に任せちまおうぜ」
気楽に言った俺の言葉に、ゆんゆんが、えっ！　と驚いた声を上げた。
「結界を破壊しちゃったんですか？　紅魔族が束になっても解除できなかった結界を、めぐみんが一人で？」
「そーだよ。皆が城に侵入してる最中に、城を何度も爆発が襲っただろ？　アレって、マナタイトを抱え込んだめぐみんが、爆裂魔法

を超連発して……」
「カズマ！　それ以上は……！」
めぐみんが慌てて俺の言葉を遮るが……。
……？
あっ！

「あ……、あれって、魔王が城の外から魔法を撃ってたとかじゃなくて、めぐみんが……。めぐみんが、私達が中にいるにも関わらず、魔法を乱発してたんですか……！」
涙目になったゆんゆんがわなわなと震え出す。
しまった、そう言えばこの連中にはきちんと言ってなかったな。

「酷い！　魔王ごと私達を生き埋めにしようとするとか、本当に友達なの！？」
「ち、違うのです、あの時はプレゼントを貰った事といい、その後の色々な展開と良い、ちょっとテンションが振り切れてまして……！」
「ねえダクネス、頭をわしゃわしゃするのはいいんだけど、いいんだけどね！？　篭手でそれをやられると痛いんですけど！　勝手に出てったのは悪かったから、もうそろそろ許して欲しいんですけど！」

魔王の部屋を前に場違いな空気を醸し出している四人を尻目に、ミツルギの仲間の槍使いが疲れた様にしゃがみ込み。
「ねえー、それで結局どうするの？　この先に行くの？　私はまあ、キョウヤが行くって言うならどこまででも着いてくけどね」
それに続いて盗賊風の子がミツルギの傍に佇むと、そっとミツルギの腕に手を触れた。
「あたしも、キョウヤの為にここまで来たんだしね。死ぬ時は一緒よキョウヤ。キョウヤが行くのなら、どこまでも一緒に……」

そして、最後の戦いを前にした仲間達みたいな、そんな格好いいセリフを吐いている。

……いいなあ。

チートな魔剣と良い、ミツルギが本気で羨ましくなってきた。

俺の仲間達の方を見ると、相変わらずぎゃいぎゃい騒いで、色気や緊張感が欠片も無い。

一体どこでこんなに差がついたのか。

「アクア様。アクア様は、どうするべきだと思いますか？」

ミツルギが、ダクネスに頭をかいぐり回されているアクアに問いかけた。

「……へ？　私？　……そうねえ、楽ちんに魔王を倒せるなら倒したい所だけど。でも、こうして皆に会えたらちょっと……その……気が抜けちゃったって言うかね……？」

言葉の最後の方を殆ど聞き取れない様な小さな声で、アクアが言った。

なるほど、ヘタれたな。

気持ちは分かる。俺ももう帰りたい。

――よし。

「じゃあ帰ろうぜ。今度はもっと、しっかりと準備と計画を立ててから襲撃してもいいんだしさ。そう、楽ちんに魔王を倒せる方法を考えて。案としては、城の外にテレポートの転送先を登録してさ、めぐみんに毎日爆裂魔法を撃ってもらうって作戦があるんだが……」

「――待て、佐藤和真」

話をまとめて引き上げようとした俺を、ミツルギが引き止めた。
ミツルギは、左右にいる二人の頭をポンポンと軽く撫で、離れさせる。

そして――

「君は、アクア様をこの世界へ引きずり込んだ張本人だろう？　その君が、そんな事を口にするのか？　君は、本来なら命懸けで魔王を倒し、アクア様の願いを聞き届ける必要があるはずだろう」

ミツルギが、そんな面倒臭い事を言い出した。
いやまあ、確かに俺が連れて来たんだけども。
それはそうなんだけども……。

ふとアクアを見ると、アクアは俺とミツルギを見比べて、珍しくオロオロしていた。
アクアが、そんな俺達を仲裁しようとしてか。

「私としては、ここに来てから毎日面白かったし、連れて来られた事は気にしてなかったんだけどね？」
いつか、ミツルギに言った事を再び口にした。

だが――

「では、どうして街を出たんですか？」

ミツルギのその言葉に、アクアが困った様な顔をした。
そして少しだけ寂しげな陰りを見せて、こちらをチラリと見ると。

「その、ちょっと家出気分を味わいたかっただけだから……」

そんな、思ってもいない事を口にする。

「なんて言うの？　ほら、私のありがたみを忘れた人達にお灸を据えてやるみたいな。なんかそんな感じで旅に出てみたんですけど。どう？　どう？　街の皆は何か言ってたかしら」

「そりゃあもう心配してましたよ？　一年近く暮らしてるあの街で、未だに迷子になるアクアが旅なんて出来るはずがないって」

「旅に出る前、街中の冒険者達がカズマにスキルを教えてくれたからな。そして、無事にアクアを連れ戻してこいと言っていた。魔王軍による街への襲撃計画さえ無ければ、きっとたくさんの冒険者が一緒に来ただろうな」

「ほう。あれかしら、皆ツンデレってやつかしら。普段は素っ気ないのに、まったくもう。……しょうがないわね！　それじゃカズマ、帰りましょうか！」

アクアは言いながら、こちらに振り向き笑顔を見せた。

――いつもバカみたいに明るいアクアの笑顔は、ほんの少しだけ。ほんの少しだけ、後ろ髪を引っ張られる様な陰りがあって――

「……分かりました。アクア様がそう仰るのなら、今回は……」

その陰りに気付かないミツルギの一言で、取り巻き二人がほっと息を吐く。

それを受け、ゆんゆんがテレポートを唱えようとワンドを取り出す。

……。

「……行き掛けの駄賃って知ってるか？」

俺は帰ろうとする皆に呟いた。

何の事だと振り返る仲間達に――

「俺さ、今回の事でほぼ全財産をマナタイトに変えてきたんだ」

――一言だけ。

「……魔王に掛かった賞金って、一体幾らぐらいなんだろうな？」

――扉の前に、まずはダクネス。

その後ろにミツルギが立ち、槍使い、盗賊娘、ゆんゆん、アクア、

めぐみんと続く。

ダクネスが皆を守りつつ突入し、ミツルギとゆんゆんが主力となって、槍使いはダクネスに守られつつ攻撃、盗賊娘は皆のサポート。

傷ついた者にはアクアが後方から回復魔法をかけ、今日は限界近くまで魔法を撃ちまくったためぐみんには、お前は最後の切り札だからと説得し、最後尾で待機してもらった。

戦況が不利と判断したら、俺とゆんゆんでテレポート。

そして俺は――

「君は本当に姑息だね……。僕との勝負の時の事といい、さっきの不意討ちといい、堂々と戦うという事が嫌いなのか？」

ミツルギの非難を受けながら。

俺は、扉の陰に張り付いた。

「姑息じゃなくて、慎重と言って頂きたい。……それにな。卑怯者の汚名をうけてでも、絶対に負けられない戦いってヤツがある……。そう、人類の命運を賭けたこの戦いとかな……！」

皆が先に突入して魔王と戦う中、俺は潜伏スキルを使いながらこそこそと後から侵入。

魔王の隙を突いて、先ほどの様にバックアタックを仕掛けるという手筈だ。

「ねえ。あの男あんな事言ってるけど、今日以外の戦闘も大体姑息

よね？」
「しーっ、ダメですよアクア、せっかく魔王戦を前に格好付けているんですから」
「そうだ、アレにヘソでも曲げられたらどうする。アイツは、皆をほっぽって一人でテレポートしかねないぞ」
背後からヒソヒソとそんな声が聞こえてきた。
本当に俺一人で帰ってやろうかと考えていると……。
「皆、聞いてくれ」
ミツルギが、扉を前にしながら振り返る。
そして、真面目な顔で一人一人の顔を見つめ。
「……皆、よくここまで一緒について来てくれたね。これから始まる戦いは、人類の命運を賭けた戦いで……」
ミツルギが突然そんな演説を始める中、アクアが俺の袖をクイクイと引いてきた。
「カズマさん、カズマさん。本当にいくの？　お金なんて、これから適当に稼げるんじゃないかしら。何ていうか、こんな一攫千金みたいな事、慎重で臆病なカズマさんらしくないんですけど」
バカにしてんのかと言いたくなる様な物言いだが、アクアのその表情は至って真面目で不安そうだ。
「お前な、そもそも最初に魔王退治だとか言い出したのは誰だと思ってんだよ。お前には、屋敷に帰ったら色々言いたいことがあるからな。泣くまで説教してやる。あれだよ、何だかんだ言って、やっ

ぱ天界に帰りたいって気持ちがあるんだろ？　なら、スカッと魔王倒していつでも帰れる状態にして、それから面白おかしく暮らせばいい。ここで無理して虚勢張って強がったりすると死亡フラグだからな、慎重に行くぞ？　特にお前は、フラグになる様な事を言ったりやらかしたりが多いんだからな。注意しろよ？」

――アクアが旅に出た夜の、あの時の一言が脳裏に浮かぶ――

「ねえカズマ、私ならもういいわ。もういいから、帰りましょう？　ゼル帝にも会いたいし、帰って美味しいお酒でも飲みながら皆の説教聞き流してあげるから。ねえ、もう帰ろう？」

大事な説教を聞き流すなよと言いたいとこだが。

――帰りたいな……――

膝を抱えて月を見上げたアクアが呟いた、寂しげなその一言がどうしても忘れられない。

「フィオ、クレメア。大丈夫だよ、心配ない。僕は負けない。魔王を倒して皆で帰ろう。もし誰かが死んでも、即座に撤退すれば大丈夫だ。僕達にはアクア様がついている。例え負けても、また強くなって来ればいい」

向こうではミツルギの演説が終わった様だ。

一体何を言ったのか、感極まった涙目でこくこくと頷く槍使いと盗賊娘。

どっちがフィオでどっちがクレメアだろう。

「おい、ちゃんと作戦は理解してるんだろうな？　お前もミツルギの言葉を聞いとけよ？　もし誰かが死んだらそこで作戦は中止。死体を回収して、蘇生はさせないでテレポートだ。お前は、もし誰か

が死んでも本能のままにホイホイ蘇生に行くなよ？　お前が殺られたら元も子もないんだからな？」

「分かってるわよ。……でも、ねえカズマ、私、何だか嫌な予感がするんですけど。それも、いつもみたいにカズマがポコッと死ぬぐらいじゃなくて、取り返しがつかないレベルの……」

「このバカ、それ以上言うな！　どうしてお前はそうやって、死亡フラグを作るのが好きなんだよ！　いいか？　こんな時ぐらいはちゃんと俺の言う事聞けよ？　誰かが死んでも絶対に前に出るなよ？　分かったな？　お前は安全な所で支援な。お前さえ生きてれば、死体を回収できればなんとでもなる。分かったな？」

念入りに言い含めると、アクアがこくこくと頷いた。

大丈夫かなあ……。

「皆、話は終わった様ですね。では、これは私から」

めぐみんが、大切そうに背負っていたリュックから、魔法を使える者にマナタイトを渡していった。

アクアに一つ。

俺には、なぜか五つ。

そしてゆんゆんには……。

「わあ……。凄く大きなマナタイト……！　いいの？　これ貰っちゃっ……、ねえめぐみん。ね、ねえ？　ねえったら！　くれるんなら、早く頂戴！」

ゆんゆんに差し出したマナタイトから、めぐみんがなかなか手を離さずにいた。

「これは、私がカズマから貰った物です。大切な物です。大事に使ってくださいよ？　本当に、ここぞと言う時に大切に使ってくださいよ？　私が！　貰った物ですから！」
「分かったわよ、こんなに高価な物貰ったのが嬉しかったのは分かったから、そんなに自慢しないでよ！　大事に使うから！」
マナタイトを受け取ったゆんゆんが、目をキラキラさせてそれを見る。

俺もめぐみんから受け取ったマナタイトを懐にしまい込むと、改めて扉の陰に待機した。
陰に佇む俺の隣にダクネスが立つ。

そして、俺の胸を拳の裏でポンポンと叩いて、何も言わずにニコッと笑った。

普段はハアハアしてるか短気に怒っているか無表情かのどれかなコイツが珍しい。

アクアが全員に支援魔法を掛けるのを待ち……。

全員で顔を見合わせ、頷き合う。

――ダクネスが門を蹴り開けた！

「魔王！　覚悟――」

「『カースド・ライトニング』！」
「『カースド・ライトニング』ッ！」
「『カースド・ライトニング』ッッ！」

門を開けた瞬間に、所々が闇色の雷光が先頭のダクネスに降り注いだ。

「ちょっ！」

俺は思わず、扉の陰から声を上げた。

確かこれは、ウィズがドラゴンの腹に穴を開けた、強力な電撃魔法。

それを食らったダクネスの体が大きくビクンと一つ跳ね……、

「おのれ、口上も無しにいきなりの魔法攻撃とは卑怯者めが！　それでも魔王か、名を名乗れっ！！」

鎧から黒煙を上げながらも、そのまま部屋の中へと乱入した！

……あれっ？

凄く致命的な魔法を食らった気がするんだけども……。

と、扉の陰に隠れながらダクネスのタフさに呆れる俺の隣を、皆が次々と通り過ぎ、部屋の中へと突入して行く。

ゆんゆんが、何かの魔法の詠唱を唱えながら駆け抜ける中、部屋の中から、聞いているだけで胸が苦しくなる様な重々しい声が――

『これは我が部下が失礼したな！　なるほど、貴公の言にも一理ある。我が城で随分と好き勝手に暴れてくれた侵入者よ、汝らは勇者か愚か者か……。さあ、その力を我が前に』

「『インフェルノ』――――――――ッッッッ！！」

『ぐあっ！？』

その重々しい声の主が悲鳴を上げた。

とびきり気合の入った今の魔法はゆんゆんの声か。
開けられた扉の隙間から、こちらにまで熱風が吹き抜けた。

「ちょっ……！　ゆんゆん、ここぞという時に大事に使えと言ったマナタイトで、いきなり開幕ぶっぱとはどういう事ですか！」
聞こえてくるのはめぐみんの怒り声。
最高品質のマナタイトで、とっておきの一撃をお見舞いしたらしい。
真面目なゆんゆんらしからぬ行動だ。
……一体どこの誰に毒されたのか。

『……紅魔族か。相変わらず、お前達はやってくれるなあ……』
「す、すいませんっ！　で、でもあの……。私の悪友から頼まれてまして……っ！　……ちょっとクソ迷惑な魔王のとこまで行って、俺達の代わりに一発かましてこい、と……っ！」

一人の優等生がとうとう堕ちた瞬間である。

「なんですか、その格好いい演出は！　私のマナタイトでの一撃のクセに！」
「いたた、こんな時に何すんの、めぐみん止めてえ！」
姿は見えないが、何をしているのかは大体分かる。
本当に、こんな時に何やってんだ。

と、部屋の中から大勢のモンスターの声が轟いた。
事前に部屋の中の敵の気配を探知し、その数は把握済みだ。
敵の数は十人程。

先ほどの広間の戦闘では、もっと多い数を討ち取った。
魔王の力でその力が増大しているので無ければ、なんとかなる敵の数だろう。
つまりは、俺が魔王さえ上手く殺れればこの戦闘は本当にどうにかなってしまう訳だ。

「『デコイ』ーッ！」
中から、ダクネスの囮スキルの声が聞こえる。

「行くぞっ！　魔王ーっ！」

ミツルギの熱苦しい掛け声と共に、剣撃の音が響く。
魔法が飛び交う炸裂音、そして聞こえるのは、鎧の呪いか加護でテンションが上がった、ダクネスの笑い声。

そんな様々な音が交差する中、俺は潜伏を使いながらコッソリと中に侵入した。
俺はマントを外し、それをすっぽりと頭から被っている。

こんな子供騙しみたいなバカな真似でも、闇の中、壁に張り付くだけでも発動してしまうのがこのスキルだ。

いつかこのスキルをクリスに教えて貰った時の事を思い出す。
俺の目の前で樽の中に潜り込み、それで潜伏と言い張っていたなあ。

そのまま壁を伝いながらこそこそと。

マントの隙間から辺りを覗くと、ダクネスが敵のど真ん中に突っ込んで大立ち回りをしていた。

その攻撃は当たらないものの、頬を火照らせて大剣を振り回す様は敵からすれば脅威だろう。
自然と攻撃が殺到するが、魔王の力で強化された攻撃を数多受けても、倒れる素振りも見せつけない。

「何だコイツは、鉄でも食ってるのか！」

魔王の側近の一人が叫ぶ。
チラッと見ると、黒マントの魔導師風が三人に、騎士風の奴が四人。
角の生えた大柄な鬼みたいな奴が一体に、まるで死神みたいな、ローブを着て大鎌を持った骸骨が一体。

――そして部屋の一番奥に、あれこれと指示を飛ばしている男がいた。

マントの隙間からでは、その顔までは見て取れない。
だが、恐らくアイツが魔王だろう。

……勝機。

このままアイツの後ろに回って、背後から一刺ししてくれる。
見れば鎧も付けてはいない。
俺はジリジリと歩を進めると、

「オマエ、ナニシテンノ？」

いつの間にか俺の目の前に、死神みたいなヤツが立っていた。

――おい、潜伏スキルはどこいった。
死神が鎌を大きく振り上げる中、
「カズマさーん！」
そんなアクアの声が聞こえてくる。
――ああ、そうか。
――アクアとダンジョンに潜った時、アイツに言われたじゃないか。
俺はマントを跳ね除けて、剣を抜き様に斬りつけようと……！
……して、死神の腕がブレると同時、視界が地に向かって落ちていくのを見ながら……。
アンデッドには、潜伏スキルは通用しないという、アクアの言葉を思い出していた。

◆◆

「『筋力増加』！」
気が付くと、俺はいきなり魔法を掛けられた。
そこはいつもの、真っ白い神殿の中。
例によって例の如く、俺は首を跳ねられでもして死んだらしい。

……俺はその場に立ち尽くしながら。

「……何やってんですかエリス様？」

突然魔法を掛けてきたエリス様に問い掛けた。

「『速度増加』！」

エリス様は、それには答えず再び魔法を唱えてくる。

……エリス教の魔法はこんな魔法名なのか。

それとも、ちゃんとした神様ともなると、魔法の効果を直接唱えるだけでいいのだろうか？

というか……。

「エリス様？　何で俺に魔法掛けてるんですか？」

「『体力増加』！　……なぜってそれは、カズマさんが先輩に蘇生されたらいつでも戦いに戻れるようにです」

エリス様は、魔法を掛けながら俺にそんな事を言ってきた。

……いやいや。

「勘弁して下さいよエリス様。俺、もう失敗しちゃいましたから。ていうかアンデッドがいる事を考えてませんでしたよ。……上手くいくと思ったんだけどなあ」

俺は言いながら、その場に座り足を投げ出す。

マモンとか言ったヤツには通用したから、今度も……と、思ったのだが。

まあ、そう物事がホイホイ上手く行く訳も無いよなあ。

くそ、アクアが嫌な予感がするとか言って立てた死亡フラグを俺が回収しちまった。

あいつ、帰ったら文句言ってやる。

「何を言ってるんです、まだまだこれからですよ？　今だって、皆が魔王相手に立ち向かっているのですから。……確かに戦況は不利ですが……。……あっあっ！　ミツ……？　……ルギさんが、敵に囲まれて……！　……良かった、ゆんゆんさんが、暴風の魔法で敵を弾き飛ばしましたね」

エリス様が、そんな断片的な情報を寄越してくる。

リタイアした身にそんなハラハラする情報を教えてくるのは止めて欲しい。

「ていうか、作戦は決まってるんですよ。誰か死んだら戦闘は中止。死体回収してテレポートって。そろそろ撤退の準備をしてる頃じゃないですかね」

地面にだらしなく座る俺に、エリス様が首を傾げた。

「いいえ、まだ皆諦めてませんね。むしろ、ゆんゆんさんが燃えてますよ？　めぐみんさんの激励を受けて……。めぐみんさんが、カズマの仇を取るのです！　とか言って杖を振り回して怒ってます。今にも、狭い空間の中で爆裂魔法を放ちそうな勢いです。あとダクネスが、ぶっ殺してやる！　とか物騒な事を……」

や、止めろよめぐみん、煽るなよ……。

ダクネスの奴も、良いとこのお嬢様のクセに、どうしてあんなに

気が短いんだ。

どうして撤退しないんだろうと思ったが、まあ、死んだのが俺だからなあ。

これが、ミツルギやダクネス、ゆんゆんの場合だと戦況が一気にピンチになるだろうが。

もうちょっとイケると踏んで、戦いを継続しているのだろうか。

ちょっと作戦とは違うが、いよいよヤバくなったら逃げるだろう。

……その際、作戦忘れて俺の死体だけ置いて行かれたらどうしようか。

だ、大丈夫だよな？

それはちゃんと回収してくれるよな？

ちょっと怖くなって悩む俺に、エリス様が微笑んだ。

「さあ、酷な様ですが、ここは敢えて送り出させて貰います。先輩のワガママじゃなく、自分から規定を破るのは初めてなので、ちょっとドキドキしますが……。『蘇生せよ』！」

エリス様が唱えると、俺の体が淡く光り、斬られたはずの首の辺りが暖かくなった。

……ああ、これが魂の傷が治るとかそんな現象か。

アクアが言っていたなあ。

今度死んだら、向こうでもリザレクションを掛けてもらいなさいとか何とか。

――でも。

「いやいや、もう無理ですよエリス様。大体、さっきの実況の感じだと、あのミツルギが苦戦してるんでしょう？　そんなの相手に俺が参戦したところでどうなるってんですか。俺、なんのチートも持たない最弱職ですよ。しかもステータスも一般人で、人より運が良いってだけで。……あんまし愚痴も言いたくないですけど、俺、こんな能力で結構頑張ったと思いません？　自分で言うのもなんですけども……」

エリス様は、俺の情けない愚痴を静かに微笑みながら聞いている。

「だって、着の身着のままで異世界に送られて、温室育ちなニートがいきなり馬小屋で寝泊まりして肉体労働ですよ？　で、手の掛かる仲間の尻拭いしながら頑張ってるのに、いつの間にか借金まみれに。物騒な連中と敵対するわ、次々と厄介事が舞い込んで来るわで……。俺、もうちょっと良い思いしたって罰当たんないと思うんですよ。ていうかこの世界に来て、自分でも性格ねじ曲がったなと思いますもん。そりゃ、性格だって捻くれますよ。……元々ニートなんてやってたダメ人間でしたけど、それに輪を掛けてダメになった気が……」

エリス様は、そんな俺の独白を、何を言うでもなく静かに聞いて……。

「……でも、楽しかったでしょう？」

そんな事を言ってきた。

……ずるいなあ。

「……まあ、それなりには」

「でしょう？」

エリス様がどうだと言わんばかりに微笑む。

……可愛い。

「皆がまだ諦めない中、カズマさんだけここでリタイアなんて、寂しいじゃないですか。だから、先輩が蘇生させてくれたら何時でも参戦できるように……」

……エリス様のその気持は有難いのだが。

「そもそも、それがあり得ないんですよ。誰かが死んでも、戦闘が終わるまでは放置。それが、皆で決めた事なんで。目の前の戦闘に集中するって事で話はついてますからね。と言うか、あのバカには散々言い聞かせましたから。誰かが死んでも前に出るなよって」

だから、せっかく掛けてくれた魔法も無駄になっちゃいますね、と俺が呟き。

それに、エリス様が自信有り気な顔で小首を傾げると……、

「そうですか。では、準備しますね？　『知覚強化』！」

そんな、俺との会話が全く噛み合っていない様な事を言い出した。

女神というのは、人の話を聞かないのだろうか。

俺がそんな事を考えていると――

聞こえてはいけない声が聞こえてきた。

《カズマさーん！　カズマさーん！！》

――それは、最後の最後まで人の言う事を聞かないバカの声。

戦闘をほっぽって、一体何をしてるんだろう。

アイツが死んだらもう誰も生き返れないのに、そこら辺がちゃんと分かっているのだろうか。

あれほど前に出るなと言ったのに。

そして、あれほど魔王を怖がっていたクセに。

《カズマさーん！　カズマさーん!!　色んな意味でピンチなんですけど！　めぐみんが、爆裂魔法を唱え出したんですけど！》

聞き捨てならない事を言うアクアの声に、俺は思わず腰を浮かせた。

そして、未だにこにこしているエリス様の方を見ると。

「……あいつ、どうしてあんなに人の言う事を聞かないんですかね」

「でも先輩は、そんな所が可愛くないですか？」

ちっとも可愛くないし、帰ったら引っ叩いてやろうと思う。

エリス様は、そんな俺の顔を見て。

「カズマさん、顔が笑っていますよ？」

楽しそうに言ってきた。

……参ったなあ。

エリス様には、どうも手球に取られてしまう。

そして、笑っている事を否定出来ない所がまた悔しい。

俺はその場に立ち上がると、頬を叩いて顔を引き締める。
「ったくあのバカは。俺を何だと思ってるんでしょうね？　大体よくもまあ、あの激戦の中で蘇生が出来たなと思いますよ」
言いながら、復活後にいつでも戦闘が出来るように体を伸ばす。

「それは、ダクネスが今、全員を相手どって必死で持ち堪えてくれてますからね。流石の魔王もダクネスのタフさにちょっと引いてますよ？　引きつった魔王の顔を見せてあげたいです」

エリス様が、そう言いながら可笑しそうに口に手を当てる。

納得した。
ウチの自慢のクルセイダーは硬いのだ。
世界で一番硬いのだ。

……と言うか。
「エリス様って、ダクネスだけ呼び捨てにしますよね。やっぱり、自分の信者だからですか？」
「いいえ？　大切な親友だからですよ？」
俺の言葉に、エリス様はにこにこしながら言ってきた。

……？

俺は首を傾げながらも、白い門の前に歩いて行く。
そして、今から戦う相手の事を考え、ため息を吐いた。
「……魔王かあ……」

まさかのラスボス。

魔王の幹部に始まり、どうしてこうも強敵の相手ばかりしなくてはいけないんだろう。

俺の運が良いとか、絶対嘘だろ。

不安気にエリス様を振り向くと、何かを期待するかのような表情で、嬉しげに拳を握っている。

「……一応言っときますけれども、何の作戦も無いですからね？俺が参戦した所で、結果は見えてますよ？」

その俺の言葉にエリス様は。

「では、一つだけ。カズマさん。あなたはテレポートが使えますよね？　そして、向こうには今、先輩がいます。信じられないかもしれませんが、先輩は、それはもう強い力を持った女神なんですよ？　それこそ、一時的に魔王の能力を弱体化させる事が出来るぐらいには」

「マジで！？　なにそれ、本物の女神みたいだ！　……いやでも、あのバカは一言もそんな事言わなかったんですけど」

「……わ、忘れていたのでしょう」

……本当に強い力を持つ女神なんだろうか。

「……あ、でもアレですよ。魔王の一番厄介な力って、その場にいるモンスターの能力を引き上げるって能力らしいんですけど、その力も一時的に弱まるって事ですかね？」

「それは無理です。弱体化させられるのは、身体能力に魔法抵抗力、魔力、その他……と言った所でしょうか。……この、魔法抵抗力を弱体化させるというのにヒントがあります。カズマさんは、テレポートが使えましたよね？」

……なるほど！

「魔王に魔法が通じる様になったら、テレポートでアクセルの街へ転送する訳ですね！　そして街中の冒険者にシメてもらうと！」

「ち、違います！　違いますよ、現在アクセルの街には魔王軍の部隊が襲撃中です！　今の所は冒険者側が押してますが、そこに魔王が現れたら、強化された魔王軍によって街は全滅ですよ？」

街への襲撃なんて話があったなあ、そう言えば。

よりにもよって、なんてタイミングだ。

「じゃあ、どうしろと……？」

俺の疑問に、エリス様が指を立てて言ってきた。

「あなたは、テレポート先にダンジョンの最深部を登録していたでしょう？」

……と。

なるほど、魔王をダンジョンの深部に置き去りにしてくる訳か。

「ダンジョン深部に放置して、後は野垂れ死にさせる。エリス様、黒いですね。でも良い作戦だと思いますよ」

「違います！　違いますよ！　ダンジョンにはモンスターが蔓延っていますから、魔王ならば簡単に従えられますし、楽にダンジョンを出て来てしまいます。……そこで、カズマさんにお願いが……」

嫌な予感がする。

「……魔王。一対一で、倒してきては貰えませんか？」

――この人、アクア以上の無茶を言うなあ。

「いやいやいやいや、それは無茶ってもんでしょう。それなら、ミツルギ、ゆんゆん、アクアを魔王と一緒にダンジョン送りにして、アクアの支援を受けたミツルギとゆんゆんに魔王をシバイてもらうとか……！　で、帰りはゆんゆんのテレポートで！」

俺の作戦に、エリス様がゆっくりと首を振る。

「そもそも、魔王はテレポートが使えるはずです。なので、そんな状況でダンジョンに送られては城に帰ってしまうでしょう」

「いやいや、それなら俺と一緒にテレポートしても、一人で帰ってしまうんじゃあ……」

俺の疑問に、エリス様は。

「魔王は、勇敢な冒険者と戦って華々しく散るのも大切な仕事の内に入るんですよ？　一対一で勝負を挑んでくる冒険者から逃げ帰って来たなら、もう魔王とは言えません」

……なんだろう。

それ、どっかで聞いた事があるな。

……確か、バニルやウィズがそんな事を言っていた様な。

最後は勇敢な冒険者と派手に戦い、派手に散る。それが魔王と言うものだ。とかなんとか。

「で、でも……。だったら、俺じゃなくてもミツルギと魔王を転送するってのは？　あいつ、勇者になりたがってたみたいですし」

せめてもの抵抗とばかりに言ってみるが。

「……ミツルギさんでは無理でしょうね。剣しか使えないミツルギさんでは、暗いダンジョンの中で魔族の魔王に勝てるとは……。でも、あなたなら。どんな場所でも適応出来て、色んな事が出来るカズマさんなら、まだ望みはあるんじゃないでしょうか？」

軽く言うなあ……。

「それに……」

エリス様は、拳を握り。

「一番弱い職業の人が魔王を倒す。そっちの方が、格好良いじゃないですか！」

そんな、とんでもない事を言ってきた。

エリス様は、熱い少年漫画とかが好きな人なのかも知れない。

――その時。未だ迷う俺の背中を押す様に。

《カズマさーん、カズマさーん！》

場違いな、アクアの声が響き渡った。

「……まったく。どうしてアイツは、日頃俺をコケにするクセに、肝心な時は俺なんかに頼るんですかね？」

言いながら、俺は頬を叩いて覚悟を決める。

そんな俺を見てエリス様が嬉しそうに飛び跳ねた。

「それでこそ、私が見込んだカズマさんです！」

そんなエリス様の激励を受けながら、俺は門が開けられるのを待つ。

「もし魔王を倒したら……。私から下着を剥ぎとった事も、許してあげます！」

エリス様は、そんな事を……。

俺はバッと後ろを振り向いた。

「今なんて言いました？」

俺の問い掛けに、エリス様は俺をからかうような、イタズラでも仕掛けている様な表情で、右の頬をポリポリ掻いた。

俺が過去に下着を剥いだ人数なんて限られている。

……いやいや、と言うか。

確かに俺は、エリス様に会った事がある。

というか、というか……！

今まで何で気付かなかったのかってレベルで……！

「エリス様ってそう言えば、右の頬を掻く癖がありますよね」

「……『防御力増加』！」

エリス様は俺の問い掛けには答えず、支援魔法を掛けてくる。

そんなエリス様の表情は、既に俺の知る友人がよく浮かべる、バカみたいに明るい表情だ。

「そういえば。ウチの屋敷に友人が泊まりに来た時、その友人を見てアクアが言ってたんですよ。懐かしい様な、とかなんとか。……で、その子は、他の連中は呼び捨てなのに、アクアの事だけさん付けで……」

「『魔力強化』！」

やっぱり俺の問いには答えずに、支援魔法を掛けてくるエリス様。

そんなエリス様に苦笑しながら……。

「俺がサキュバスを逃した時、エリス様は次の日、サキュバスを一人で探しに行きましたよね。アクアが言ってましたよ。エリス様は、悪魔相手だと私以上に容赦が無いとかなんとか……」

「『魔法抵抗力増加！』！『状態異常耐性増加』！」

それ以上は何も言わず、俺はただ苦笑した。

それに対して、エリス様もはにかんでくる。

《カズマさーん、カズマさーん！》

……良い空気になると必ず邪魔するアイツは何なのか。
ちょっと、文句行って来てやる。

エリス様が指を鳴らすと、白い門がゆっくり開く。

「カズマさん。先輩は水の女神ですが、私は何を司る女神か分かりますか？」

俺の背中にエリス様が、唐突にそんな事を言ってきた。
エリス様を振り返り、俺は無言で首を振る。

「幸運です」

エリス様は、一言呟き。

「私の扱う、一時的に幸運を上昇させる支援魔法は、先輩とは一味違いますよ？」

言いながら、目の前の女神様は、俺の友人のクリスとそっくりな、屈託のない笑みを浮かべた。
「カズマさんの一番の長所を、一時的に更に強化します。行きますよ！　……『祝福を！』」

友人からの頼もしいブレッシングの支援魔法を受けながら、俺は苦笑しつつ門に向かって身構える。

そんな中、本当に空気を読めない奴の、緊迫感のない声が響き渡った。

《はやくきてー、はやくきてー》

……。

俺とエリスは顔を見合わせて笑い合う。

そして、虚空に向かって大声で。

「しょうがねえなあああああああああああああ！！」

そんな俺を見ながら、もう吹っ切れた様にやたらとテンションの高い、エリス、いや、クリスが言った。

「さあ、それでは魔王退治！」

その、友人の声を背に――

「――いってみよう！」

友人のその口癖と共に、俺は門へと飛び込んだ――！

33話（後書き）

次回は長くなるので、来週の日曜日に更新出来ないかもです。
頑張れたら更新します。

次回、最終回。

最終話前編

「構わん、殺れ！　殺ってしまえめぐみん、こいつらをぶっ殺してやれ！　お前達はこの私が壁になって守ってやる！　私が爆裂魔法の一撃にも耐えられるのは、過去に実証済みだ！」
「良いでしょう、死なばもろともです！　もしダメだったとしても、皆で一緒ならあんまり怖くはないものです！」
「止めてえ！　めぐみん待って！　ダクネスさんもけしかけないで！」

――とてつもなく物騒な会話が聞こえる。

目を開けると、こちらを覗き込むアクアと目が合った。

後頭部が柔らかくも暖かい。
アクアが膝枕をしているのだろう。
「あっ……！　カズマが帰って来たわ！　帰って来たわよ！」

俺の意識が戻った事に、アクアが嬉々として大声を上げた。
慌てて上体を起こし、状況を確認する。

――そこには――

「魔王様！　我々の後ろへお下がりください！　我らが壁に！」
「おい、そこの紅魔族！　分かっているのか！？　こんな室内で爆裂魔法なんて放てば、お前達もタダでは済まんぞ！」

杖の先に爆裂魔法の光を灯らせて、それで魔王達を威嚇するめぐみんと、そのめぐみんを守る様に立ち塞がるダクネス。

そして、魔王を最奥に庇いながらめぐみんを必死に説得する魔王の側近達と、そのやり取りを、青い顔をしながら遠巻きに見守るゆんゆん達の姿があった。

傷でも負ったのかミツルギは片膝をつき、それを守るようにして取り巻きの二人が立ち塞がっている。

改めて周りを見ると、俺が殺されて血溜まりが出来た場所に大きな鎌が転がっていた。

どうやら俺を殺した死神型のアンデッドは、アクアに浄化されたらしい。

俺が立ち上がると、こちらをチラリとうかがったダクネスとめぐみんが、ホッとした表情を浮かべた。

現在、状況は膠着状態にあるようだ。

俺が蘇生した事には魔王の側近達はあまり注視していない。

というか、めぐみんの杖先の危険な光にそれどころではないのだろう。

と、魔王の側近達がめぐみんへ落ち着くように呼びかける中。

「カズマ、テレポートを唱えて頂戴！　ここは皆で脱出するの！　ねえめぐみん、カズマとゆんゆんがテレポートの詠唱を終えたら、杖の先の爆裂魔法はそこのバルコニーから外にぺッてしてね！　街にそんな状態で帰っちゃ危ないからね！」

アクアが後ろから俺の肩を両手で掴み、ゆさゆさと揺らしながら言ってきた。

そのアクアに。

「おいアクア、今から言う事をよく聞けよ。ていうか、最後くらいはよく聞けよ？　さっき、クリ……エリス様から聞いたんだが。…

…お前、魔王の力を弱体化できるんだろ？」
先ほどエリスから聞いた事を伝えるべく……。

「……？　あんた何言ってんの？　そんな女神みたいな事ができる訳ないじゃない。大丈夫？　しっかりなさいな」

……。

「お前がしっかりしろよ！　自分の職業を忘れんな！　お前は一応女神だろ！」
「そうでした！　そうよ、私の神聖な力で魔王を……！　……。ねえ待って。弱体化はするけど、それだけよ？　さっきから見ている感じ、魔王は戦闘に参加していないの。魔王を弱体化しても、多分あんまり意味はないわよ？」

「そこは、お前が魔王を弱体化したら俺が何とかしてやる。……あの死神型のアンデッドは仕留めたみたいだな。これで潜伏スキルが通用する」
潜伏スキルという単語に、アクアが不安そうな顔で。
「ねえ、もう帰ろう？　お金が無いのなら、本来は私の主義に反するんだけれど、芸でお金を稼ぐ事も考えなくもないわ。あ、でも、ある程度のお金が貯まるまでよ？　ずっとじゃないからね？　だから……」

言い掛けたアクアに右手を突き出し、それ以上言うのを止めさせた。
そして……。

――俺は、真面目な顔でアクアに告げる。

「いいから見てろ。何だかんだで長い付き合いなんだから、こんな時どうにかしてきた俺の事を少しは信じろよ」
「長い付き合いだから信じられないんですけど」
……やっぱこいつ、引っ叩いてやりたい。
俺の格好良いセリフに即答したアクアの額を片手で掴むと。
「いい！　から！　お前は！　魔王の力を弱体化する準備をしてろ！」
「痛い！　痛い！　痛いんですけど！　分かったわよ、やればいいんでしょ！」
ギリギリとアクアのこめかみに指をめり込ませると、これからの事を掻い摘んで説明した。
「いいか？　お前が魔王を弱体化させたら、俺はもう一度潜伏スキルで魔王に近づく。で、テレポートで魔王を拉致。ダンジョンの奥深くに連れて行って、そこであいつを仕留めてくる」
「ねえ待って、貧弱なカズマさんが魔王と一対一で戦うって事？　死亡フラグしか見えないんですけど」
一々こいつは、人のやる気に水を差しやがる……！
「色々と手はあるさ。本当にどうしようもなくなったなら、テレポートで先にアクセルに帰ってるから。お前らは、魔王が帰って来なかったら俺がちゃんと倒したと思って、ゆんゆんのテレポートで街に帰還な。俺は、魔王を倒せないまでも、時間稼ぎぐらいはしてやるよ。その間に、お前らはこの部屋の側近連中を倒すって事で。魔王がいなくなればこの部屋の連中も弱体化するだろ。そうすりゃ、お前らでなんとかなるだろ？」

俺の言葉に、アクアがますます不安そうに。

「……ねえ、カズマがダンジョンでぽこっと死んだりした場合はどうするの？　死体の回収もできないし、ダンジョンに潜って回収に行ったりしてたらその間にカズマさんが傷んじゃうわよ？」

「い、傷むとか言うなよ。やっぱ、死体が傷みだすと蘇生できなくなるのか？　……まあ、ヤバそうだったらすぐ逃げるよ。テレポート用にちゃんとマナタイトを残しておくから」

「フフフ、ここで魔王を倒せれば、この私が新たな魔王に……！」

「めぐみん、落ち着いて！　魔王を倒しても魔王にはなれないから！　眼の色がかなり本気なんだけど、ただの脅しよね！？　街に帰ったら、色んな冒険者の人達と一緒にご飯食べる約束してるのに！」

向こうを見ると、未だ膠着状態の様だ。

……と、こちらをチラリと見るダクネスと目が合った。

だが、その瞬間に目を逸らしてしまう。

まるで俺の存在を魔王達に注目されまいとするかの様に。

「よし、それじゃ行ってくる。アクア、俺がテレポートで飛んだ後、めぐみん達に説明頼むぞ。ちゃんと、俺は危なくなったらテレポートで帰るってのを伝えるんだぞ？　でないとアイツらはまた暴走するからな」

言って、俺はこそこそと壁に沿って潜伏しようとすると……。

服の裾を、アクアが掴んだ。

「……ねえカズマ。どうしてそこまで魔王退治にこだわるの？」

そんな事を、不安気に。

そして、少しだけ何かを期待している様なそんな顔で、アクアが言った。

……お前のタメだとかそんな格好良いセリフを期待してるのが見て取れる。

目をキラキラさせやがって、こいつ絶対、勇者を送り出す女神的な状況に酔ってるだろ。

「……別にっ、別に、お前のタメなんかじゃないんだからな！」

「ツンデレ！　カズマのツンデレッ！　こんな時ぐらいあなたの為です女神様とか、歯の浮く様なセリフ言えないの！？　……あんた、本当に危なくなったら逃げ帰って来なさいよ？　もやしっ子なカズマさんじゃ、まともに攻撃食らったら一撃だからね？」

もやし言うな。

「分かってるよ、俺を信じろ。俺が真正面から格好良く最後まで戦う男だとでも思ってんのか？　ニートってのは諦めが早いんだよ」

「知ってるわよ。諦めが早いのも臆病なのも。雰囲気に流されやすいのもヘタレなのも」

こっ……、こいつ……！

「……あと、何だかんだで最後には必ずなんとかしてくれる事も知ってるから、死なない程度に魔王をおちょくってきてやんなさいな」

――自信有り気なドヤ顔で、アクアが俺を真っ直ぐ見てきた。

壁伝いに、マントで体を隠しながらコソコソと進んで行く。
今から魔王を倒そうとする姿では無いのだが、どうせ格好良いヒーローなんかとは無縁な事は分かっている。
魔王の傍へとジリジリ近づくと、アクアが両の掌を組み、目を瞑って祈る様なポーズを取った。

……あれっ、あいつ、本当に女神っぽい。

こめかみからうっすらと汗を垂らして、何かを唱えているアクア。
それを注視する魔王と側近達。
側近達はアクアを止めたそうにしているが、めぐみんの威嚇により身動きが取れない様だ。

――やがてアクアがカッと目を見開き、声高に叫びを上げた。

「『光よ！』」

それは、エリスが支援魔法を使う時に唱えたような端的な言葉。
たったそれだけなのだが、その一言に広間の中が輝いた。

魔王の側近達が、その光から魔王を庇おうとする中――

――ダクネスが、真正面から突っ込んでいった。

「!?　魔王様を守れ！　壁になれ！」

側近の一人が叫び、魔王の前へ、ダクネスとめぐみんを警戒する様に展開する。

ミツルギは何やってんだと思いそちらを見ると、アクアに回復魔法を飛ばされ、ようやく立ち上がっていた。

よし、これなら魔王を攫った後、側近との戦いも戦力的にいけそうだな。

ダクネスが側近連中に殴り掛かり、その注意を引いている中。

俺は、魔王の背後に回っていた。

近くで見る魔王は、一見すると大柄な老人だ。

白髪の間から二本の角が生えているが、パッと見は人間っぽい。

黒衣を身にまとったその姿は、誰が見てもこう呼ぶだろう。

魔王、と。

「あの紅魔族の娘はどうせ撃てまい、ハッタリだ！　クルセイダーより魔剣の男に注視せよ！　それと、もう一人の紅魔族の娘にもだ

！」

魔王の言葉に、めぐみんのこめかみがぴくりと動いた。
おいやめろ、そいつを煽るな。
そいつはやる子だ。

「くそっ、忌々しい……。まさか女神が降臨しているとはな。……駆け出しの街に落ちた光とは、あの緩んだ顔の女神の事か……？」

魔王が俺に背を向けて、忌々しそうに呟いている。
……どうしよう、予定を変更して剣で斬りかかってやろうか？
いや、失敗したらそれで終わりだ、やはりここはテレポートで……！

ああくそ、やっぱり怖い。
魔王は背を向けている。
キッカケが、何か、勇気が出るキッカケが欲しい……！

……と、潜伏中にも関わらず、ダクネスと目が合った気がした。

……いや、実際に目が合ったのだろう。
ダクネスは、口元を少しだけ歪め、微笑を浮かべた。

あいつは俺のやる事を理解した上で、真正面から突っ込んで注意を引いていてくれたらしい。

――やるなら今だ！

「『テレポート』！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

——まるでゲームのラスボスの部屋の様な、仰々しくも禍々しい装飾が施されたドアの前。
魔王と共に移動した先は、例のダンジョンの最下層。
俺は魔王と共に、ヴァンパイアの真祖が立て篭もっていた部屋の前へと立っていた。

この階層にはモンスターの気配は無い。

以前、バニル達とこの階に来た時もヴァンパイア以外のモンスターはいなかった。
つまり、魔王を相手取るにはうってつけの場所だと言う事だ。

魔王はバッと後ろに飛び退いて、直ぐさま俺と距離を取る。

「……どこだここは？　てっきり、貴様の仲間がわんさかいる所にでも送られたのかと思ったが……。ふむ、このカビの臭いと濃い魔力。どこかのダンジョンの中か？」
俺も魔王からジリジリと距離を取りながら。
「当たり。ここは世界最大のダンジョンとやらの最下層だ。ここから帰るには、地上までの道のりを延々と歩いて帰るか……。もしくは、テレポートで帰るしかない訳だ」

俺の言葉に、魔王がふむ、と一つ呟き。

「では、城へ帰らせてもらうとしようか。仮にも魔王が、テレポー

トの一つも使えないとでも思ったか？　いつまでもこんなカビ臭い所にいる必要は……」

言いながら、テレポートを使おうとする魔王に向けて。

「テレポートを使える事ぐらいは知ってたさ。でも、魔王が逃げるのか？　一対一のこの状況から？」

俺は人差し指を立ててゆらゆらと振り、挑発的に魔王に告げた。

「……なるほど。一体どこで聞いたのかは知らんが、魔王の事を調べてきたらしい。確かに、堂々と一対一で戦いを挑まれたなら、そこで逃げてはもはや魔族の王を名乗れまい。……だが、我が部下に真っ先に殺された弱き男よ。貴様がワシと戦うのは力不足だ。もう少し鍛えてから出直して来い。せめて、あの魔剣のソードマスター並には強くなってからな」

魔王は首を傾げると、ニヤリと笑みを浮かべからかうように言ってくる。

そんな、魔王に向けて……。

「俺、冒険者なんだ」

俺は挑発的に笑いながら言ってやった。

「……？　冒険者？」
「そう。冒険者。最弱職の冒険者だよ」

ダンジョンの最下層は、魔法でも掛かっているのかヒカリゴケでも植えられているのか。ここは完全な闇ではなく、淡く青白い光で照らされている。

「……お前は冒険者なのか？　上級職でも、前衛職でも魔法使い職でもなく、貧弱な冒険者？　その冒険者が……」
「そう、その弱っちょろい冒険者が、魔王相手に一人で決戦挑もうって言ってるんだよ。……あるえー？　幾ら女神の力で弱体化しているって言っても、まさか最弱職の冒険者からは逃げませんよね魔王様！」

俺の挑発に、魔王の顔が険しく引きつった。
それを見て小便チビリそうになるが、ここで魔王に帰られては困る。

だが、魔王は深く息を吐いて心を落ちつけると……、
「……その挑発には乗らん。伊達に長くは生きてはおらんからな。貴様が冒険者だからといって、それが何だと言うのだ。……つまりはこういう事だろう。戦力外である貴様がワシを連れ去り、勝負を挑んで時間を稼ぐ。その間に、我が力の恩恵を受けられなくなった部下達を、貴様の仲間達が倒す」
と、勝手にそんな予想を立てて語りだした。

「そして、十分に時間を稼いだ後、貴様はテレポートで脱出でもするのだろう。その後、テレポートで城に戻ったワシを、貴様の仲間達が取り囲む。……そんなところか？」
魔王はそう締めくくると、テレポートで帰る準備を始めた。

――伊達に年食ってないなと感心するが、そんな場合じゃない。

魔王に向けて、俺は一枚のカードを見せびらかし。

「まあ待てよ、これが俺の冒険者カードな。薄暗いし距離もあるけど、レベルとステータス、職業の欄が見えるか？　ほらほら、見ろよこのステータス。そこらの中堅冒険者に比べて超低いだろ？　そんな冒険者が怖くて逃げ帰っちゃうの？　何だかんだと理由を付けて、単に倒されるのが怖いんだろ？　お前、それでほんとに魔王を名乗ってもいいの？　ここまでお膳立てされて、それで逃げ帰っちゃうの？」

「……挑発するな小僧、その気になれば貴様など」

「その気になれば貴様などとか、どんな三下の中ボスのセリフだよ。ガッカリだよ、本当にガッカリだよ！　何が魔王だふざけやがって、蓋を開けてみれば、最弱職相手にビビって逃げようとする臆病者の爺さんじゃねーか！」

ギリッ、と、魔王が歯を食い縛る音が薄暗いダンジョンの中に響く。

「……無駄だ、貴様が最弱職の捨て駒だと言うのなら、なおさら相手をしてやるまでもない。貴様の目的は時間稼ぎだと理解した。ではな、口だけの小僧！」

言って、魔王はテレポートの詠唱を……！

「お前の幹部連中の討伐に、大体俺が関わってるぞ。ベルディア、バニル、シルビア、セレナ。後一人、この城を守っていた名前も知らない奴もいたな。……部下の仇討ちぐらいはしてやれよ」

――テレポートの詠唱を中断した魔王は、俺を見て鼻で笑う。

「……笑えない冗談だ。バカが、貴様では時間稼ぎもできぬと知れ！　『カースド・ライトニング』！」

魔王が突然、俺に向けて魔法を放つ。

えっ、ヤバイ、死……！

「！？」

「ッ！？　……と、ふ、ふふ、危ねえ危ねえ……。まったく、魔王ともあろうお方が不意討ちっすか！　まあ俺ぐらいになるとこうしてあっさり見切っちゃうんですけどね！」

少しチビッた。

運良く自動回避が発動しなかったなら、間違いなく俺の頭が無くなっていた事だろう。

魔王が放った黒い電撃は、一瞬前まで俺の頭があった場所を正確に撃っていた。

本能的な恐怖でジリジリと後退る俺に対して、魔王が魔法を放ったままの体勢で首を傾げる。

「……？　今のはスキルによる回避か。電撃の魔法を躱すなど、普通はできるものではない。やれやれ、面倒な奴め……」

ため息を吐き、魔王が無造作に俺に詰め寄る。

ちょっ、まだ戦闘準備が……！

「ちょっ、待っ……！」

「フン、さてここからどうするつもりだ？　どうしようもないだろうがな。老いたりとはいえ、人一人を捻り殺す事……な……ど……？」

「……？」

一瞬で距離を詰めた魔王は、俺の胸ぐらを掴んだまま固まると。

俺の胸ぐらを掴んだその掌が、何かが焼けるような音と共に煙を上げた。

「……っっあぢゃあああああああああああああ！」

俺の胸ぐらを掴んでいた魔王は慌ててその手を離し、右手を懐に抱いて転がり回る。

その間に俺は大きく距離を取ると、胸元から何かが無くなっている事に気がついた。

俺が首から下げていた、大事にしていたアレが……。

「なんだコレは！　護符？　呪いの護符か何かか！？　ぐううう、姑息な真似をしてくれおって……っ！」

魔王は、俺の胸元からむしり取ったそれを忌々しそうに地面に叩きつける。

――それは、いつかめぐみんに貰った紅魔族のお守り。

みんなの髪が入っている、ただのおまじない的な物だったのだが……。

「おいコラ、それ大事な物なんだから粗末にすんな」
「……っ、コレは何だ？　ワシの右手が焼け焦げたぞ！　一体中に何が……。……？　青い髪の毛？」
「女神の髪の毛がたっぷり詰まったお守りだよ」
「いっ、忌々しい物を触らせおって！　……くっ、そうであった、貴様などに構っている暇などないのだ、雑魚だと思って甘く見ていたが、もういい、貴様の相手はまた今度だ！　早く帰ってやらねば、我が部下達が……」

このジジイ、この期に及んでまだ俺とやり合わない気か！
俺は腰から剣を引き抜くと、それをこれみよがしに見せつける。

「楽に倒せると踏んで不意討ちしといて、手強いと見たら逃げるとか。お前ほんとに魔王かよ？　あーあ、せっかく魔法の掛かった武器まで用意してきたのに、お前にはほんとガッカリだよ！」
その言葉に、魔王は俺の持つ剣を一瞥すると。
「……確かに魔法は掛かっている様だが、その剣はそれほどの業物にも見えぬのだが」

「業物だよ。俺の悪友が冒険者の死体を漁って拾ってきた、由緒ある無銘の魔法剣だ。ビビリのなんちゃって魔王を倒すにはこれで十分……おわっ！」
度重なる俺の挑発にとうとうキレたのか……。
「よかろう！　そんなに死にたいのなら、今すぐあの世に送ってくれるわ！」
魔王が襲い掛かってきた！

「待て！　散々挑発してくれおって、ここで逃げるか臆病者が！　貴様、先ほどワシをなんと呼んだ？　貴様こそがビビリではないか！」

遠くで魔王が叫んでいる。

なんとでも言え。

俺は薄暗いダンジョンの陰で、潜伏スキルを使いながら弓に矢をつがえ。

「目潰しなどとは姑息な真似を！　正々堂々と戦いを挑むのではなかったのか？　出て来い小僧！」

遠く、俺を探してキョロキョロしている魔王に向けて……！

狙撃！

「はぐっ！？」

側頭部に矢を受けて、魔王の頭が弾かれるように横にブレた。

魔王に襲い掛かられた時、クリエイトアースによる目潰しをくれて距離を取ったのだが、魔王はそれが、よほど頭にきたらしい。

冷静さを欠いた魔王は、俺の狙撃をまともに食らった。

……のだが。

「ぐぐぐぐ……！　そ、そこか……！　どこまでもワシをおちょくらねば気がすまんらしいな……！」

矢を食らったこめかみを片手で押さえながら、魔王がよろめきながら歯ぎしりする。

殆ど効いてねえ！

アレか、やっぱ魔法の掛かった武器でないと効果が薄いってヤツか！

入り組んだダンジョン内を奥へと進み、慌てながらも距離を保つ。

アイツに接近されたら多分終わりだ。

流石に魔王相手には、不死王の手の状態異常なんて効かないだろう。

近寄って、試してみる気もサラサラない。

かと言って、弓で少しずつダメージを与えていてもキリがないのだが。

「あれほど盛大に挑発しておいて、情けないとは思わんのか？　あの魔剣の剣士は堂々と向かってきたぞ！　あのクルセイダーもだ！　それが、貴様は何だ！？」

敵感知スキルで感じる、こちらへと向かってくる魔王の気配。

それを感じながら、俺は道具袋から一本の紙筒を取り出すと、そこにジッポオイルをかけていく。

少しずつ後ずさりながら、導火線の様に地面にオイルを垂らしていき、ボソリと一言。

「『罠設置』」

「そこかっ！」

俺の囁きを聞きつけて、魔王が幾本かに分かれた通路の内、こちらへと続く通路を真っ直ぐに向かってくる。

レンジャー職の人に教えてもらった罠設置スキル。

素人が適当に作った罠でも発動率が高まってくれる、何と言うか、姑息な俺とはとても相性が良さそうなスキルだ。

こちらへ駆けて来る魔王に、もはや姿を隠すこともせず立ち上がると。

「剣を抜け小僧！　一瞬でケリを着けてくれる！」

ジッポを擦り火を灯すと、それをオイルの上に落としてやった。

垂らしたオイルに火が回るのを確認すると、大きく後ろに飛び退り。

「エクスプロージョーン！！」

「！？」

――俺の声と共に、薄暗いダンジョン内に炸裂音が響き渡った。

ダンジョンの硬い壁や床を砕き、その破片がこちらにも飛んでくる。

俺の手作りの劣化マイトは――

「……っ！　なん……！　なんだこれは……っ！」

魔王の左足の膝から先をズタズタにしていた。

くそ、思った以上にダメージを与えられなかった。

というか、これも魔法じゃないからダメージが通りにくいのか。
威力的に、足の一本もモゲるかと思ったのだが。

足を負傷した魔王に、俺はジリジリと後ずさりながら虚勢を張る。
「ふっ……、俺をただの冒険者だと思うなよ？　さっき言っただろ？　俺は、お前の所の幹部討伐に関わってるってな。エクスプロージョンの一つぐらい使えるってもんさ」
「嘘をつけ！　今の爆発は、とてもエクスプロージョンには及ばぬわ！　今の爆発には魔法的な力は無かった……。爆発ポーションか何かか？　姑息な事ばかり……、あっ、こらっ……！」

俺は魔王に最後まで言わせず、背を向けてダンジョンの通路を駆けて行く。
その後を、魔王は足を引きずりながらも追って来た。
アクアの力で弱体化しているにも関わらず、それでも身体能力は向こうの方が遥かに上だ。
足を負傷しているはずの魔王を撒く事ができない。
このダンジョンの最下層の造りはどうなっているんだろう。
このまま逃げ続けて、行き止まりにでもなれば間違いなくなぶり殺される。

道具袋を探ると、俺は最後の劣化マイトを取り出した。

めぐみんが怒るのでなければ、もう少し作っておいたのに。
劣化マイトを見つけると激怒する、めぐみんの目を盗んで作るのは大変だったのだ。

コイツでもう一度ダメージを与えつつ、弱った所で接近戦でも……。

――そう考えていた時だった。

背後から、ゾクリと寒気を感じる。
これはアレだ、ヤバイやつだ。
めぐみんが魔法を使う時に感じる程ではないが、魔王が強力な魔法を使おうとしている。

背後を振り返ると、魔王がこちらに向けて手をかざしているのが見えた。
自動回避が発動すれば何とかなるか？
いやいや発動しなかったら死ぬんじゃね？
魔王との距離は十メートル程度。
さっきの電撃魔法よりも、詠唱が長い感じだ！

「お前の相手はもう疲れた。ワシも若くはないのでな。帰った時に備え、魔力の温存をと思っていたが……。これはお前には避けられまい」

ヤバイ、なんか来る、ヤバイヤバイ、超ヤバイ！
防御魔法なんて何かあったっけ！
俺は懐から、めぐみんから貰った極上品のマナタイトを一つ取り出し。

「食らうがいい！　『インフェルノ』！」
「『クリエイト・アース』ーッッッ！！」

それに込められた全ての魔力を使い、目の前に大量の土砂を生み出した！

「ぬおっ！？　ぐわっ、熱っ！」

土砂の向こう側からは、そんな悲鳴が聞こえてくる。
出現した土砂に炎を防がれ、それが自らに吹き返してきたのだろう。
しかし、流石は極上品のマナタイト、土砂の量が半端ない。
……待てよ？
これなら……！
「どこまでも忌々しい小僧め！　小手先の技ばかり使いおって、土砂を使って通路を塞ぎ、閉じ篭もる気か！？　ならば鬼ごっこは終わりだ、ワシは……！」
俺はマナタイトをもう一つ取り出すと。
「『クリエイト・アースゴーレム』ー！！」
「ワシは……今度こそ……城……に……」
――土砂が蠢き、人の形を形成する。
普段の俺の魔力ではショボイゴーレムしか創れない。
が、しかし。
「……お、お前は……。こんな真似も、できるのか……」
極上のマナタイトの全魔力を使用して創られたアースゴーレムは、長身の魔王をすら悠に凌ぐ、通路の天井スレスレの巨体を持って生み出された。
前に立ち塞がるゴーレムの足の間から。
俺は、魔王に向かって不敵に笑った。

鬼ごっこはこれからだ。

「ラウンド2！」

「くそがー！」

「卑怯者！　魔王が背中を見せて逃げるのか！　戦えよ、真正面から戦えよ！　お前、さっきまでは俺になんて言ってた？」

「貴様という奴は！　貴様という奴はっ……！」

鬼役がひっくり返った俺達は、ダンジョンの中を駆けずり回っていた。

「わはは！　魔王弱え、幹部の方がまだナンボか強かったぞ！」

「たわけ！　とうに全盛期を過ぎた老人に無茶を言うな！　我が力は部下の強化だ、最前線で戦うタイプでは無いのだ！　しかも、今は力を弱体化されているのだぞ！」

流石の魔王も巨大なゴーレムを倒す手段は持ち合わせてはいないのか、はたまた、ゴーレムと戦っている間に俺の攻撃に曝されるのを警戒してか、足を引きずり逃げ回っていた。

しかし、一見するとこちらが有利なこの状況だが、ゴーレムの活動時間は思い切り削り、大きさを優先して創ってある。

長期戦になるとゴーレムの寿命が尽きてしまう。
それまでにケリを着けてしまわないと。

「食らえ、狙撃！　狙撃！　狙撃っ！」
「あだっ！　ぐあっ！　ぐうっ！　こっ、この……っ！！」

魔王をゴーレムが追い掛け、更にその後ろを俺がつきまとい、ゴーレムの足の間から矢を射かける。
嫌がらせぐらいにしかなっていないが、魔王から冷静さを欠くには十分過ぎる手の様だ。

俺の創ったゴーレムにテレポートでも掛けられたら、それでこちらは終わってしまう。
先ほどからの挑発に、魔王は上手く頭が回っていない様だ。

……と、しまった、矢が尽きた。
理想としてはゴーレムで魔王をしばいて、弱った所で魔法剣でトドメというのが理想なのだが……。

「……はあ……はあ……。……もうやめだ」

突如、魔王が足を止めた。
「貴様は、本当に我が幹部達を倒したのか？　……倒したのだろうなあ……。姑息ではあるが、このワシですらがこうして手球に取られている」

なんだ、いきなり語りだして。
ゴーレムの寿命が尽きるまでの時間稼ぎだろうか。
しかし、ゴーレムは俺の制止があるまでは魔王へと迫り続ける。

「奴等はどうだった？　幹部として、恥ずかしくない戦いを見せたか？　少しは貴様を痛い目に遭わせられたのか？」

魔王は、深く息を吸い込むと、猛禽類の様な黄色い目をギラつかせた。

ゴーレムが、魔王に向けて手を伸ばす……！

「ベルディアは、スティールで首を取られてオロオロしてる間に浄化されたなあ。そう言えば、アイツが廃城に住み着いたお陰で俺は借金背負うハメになったっけ。バニルは爆裂魔法で吹っ飛ばされたクセに、その後ウィズの店で元気に店員やってるよ。俺も、何度ボッタクられた事か……。シルビアには紅魔の里で掘られそうになるし、セレナにはレジーナ教徒にされるしで、まあ色んな目に遭わされたよ」

「……お前も苦労したのだなあ……」

ため息混じりの俺の言葉を聞き、魔王がしみじみ呟いた。

この爺さんも、色々苦労したのかも知れない。

「『クリエイト・アース』！」

突如、魔王が目の前に、大量の土砂を生み出した。

俺がマナタイトを使い潰して出した量にも匹敵するその土砂は、魔王へと伸ばしたゴーレムの手を遮った。

……おいまさか。

「『クリエイト・アースゴーレム』！」

魔王の声で土砂が蠢き、人型へと形成された。

それは、俺が生み出したものよりも一回りは小さいゴーレム。

人の事は言えないが、魔王は何でも有りかよ！

「……ふう。いかんな、かなり魔力を食ってしまった。……しかし、やるなあ小僧。戦士には剣で。魔法使いには魔法で。相対する冒険者は、そいつらの得意分野でことごとく潰してやったものだが……。こんな変わった戦い方をするのは貴様が初めてだよ」

魔王が感心した様に言ってくるが、こっちはそれ所ではない。

ゴーレムの大きさはこちらが上だが、確か魔王の力は……！

「今度はこちらの番だな。しかし、実に面白い事ばかり考える男だ。次は一体どうするつもりかね？」

魔王の生み出したゴーレムは、魔王の力の恩恵を受け、俺のゴーレムをあっさりと打ち砕いた。

「小僧、ラウンド3だな！」

「ちくしょー！」

最終話後編

「ワハハハハ、さあ、逃げろ逃げろ！　もう一度ゴーレムを生み出してみるか？　今度は勝てるかもしれんぞ？」

背後から聞こえる嬉しそうな魔王の声。
それと共に、重い地響きが聞こえてくる。

ゴーレム作成までできるだなんてズリいよ魔王！
懐のマナタイトは後３つ。
劣化マイトが後一本。
そして、一振りの魔法剣。
これが俺に残された武器だ。

「新しいゴーレム創った所で、あっさり捻り潰されるって分かってるクセに！　性格悪いぞ、さすがアイツらの元締めだな！」

俺は薄暗いダンジョンの通路を走りながら、背後から聞こえる声に叫び返す。

「なっ……！　ま、待て！　ワシとてアイツらには苦労掛けられていたのだ、ベルディアの奴は首をちょくちょく女子トイレに置き忘れるわ、バニルは城の兵士達相手にあらゆる嫌がらせをして悪感情を食うわ、ウィズは城の軍資金を物欲しげに見るわ……！　シルビアなんぞ、あなたと合体したいだとか言い出すわ、セレナに到っては、お布施を寄越せと城で募金活動を始めるわで……！」

ほ、本当に苦労してんだなあ……。

俺は若干同情しながらも、走っている内に仕舞いこんだ劣化マイトを再び取り出した。
魔族である魔王には、魔法系の攻撃でないと効果が薄い。
だが、アースゴーレムならば……！

俺は後を振り向くと、劣化マイトを投げつけた。
そしてすかさず手をかざし……！

「『ティンダー』ッッッ！」
「！？」

アースゴーレムの顔に投げた劣化マイトを着火魔法で爆破した。
炸裂音と共に飛び散る破片。
ゴーレムの上半身が見事に弾け、残された下半身だけがゆっくりと歩き続ける。
今の爆発は結構大きかったのか、ダンジョンの天井からパラパラと破片が振り、崩れないかと心配になる。

「……お、おのれ……」
砕けたゴーレムの破片を顔に受け、魔王が忌々しそうに呻く中。
俺は勝ち誇った様に魔王に告げた。

「……今のはエクスプロージョンではない。ティンダーだ」

「知っておるわ！　貴様、ティンダーと叫んだではないか！　そもそも、冒険者如きがエクスプロージョンなどという最上位魔法を使えるか！」

激昂した魔王が再び俺を追って来た。

ええい、魔王のクセに魔王ネタの分からん奴め！

マナタイトは後3個。

どうする、迎え撃つか！？

逡巡する俺に向け、魔王が右手を突き出した。

俺はマナタイトを一つ握りしめ……！

「『ライトニング』ーッッ！」

「『カースド・ライトニング』！」

マナタイト一つ分の魔力を叩き込んだライトニングを、魔王に向けて解き放つ。

それと交差するように闇色の電撃が俺の右肩を撃ち貫いた。

「……ッッッ！　ぐうううう、やるのう！　やるのう、小僧！」

「……ッッ、いっ、痛だあああああああ！　肩がっ！　肩に穴開いてるんですけど……っ！」

右肩を押さえ泣きながら魔王を見ると、魔王が右の太ももを押さえてうずくまっていた。

こっちは肩に穴を開けられたってのに、向こうの傷はそれほどの重傷には見えない。

ダメだ、真正面から戦うのは分が悪い、ここは一端……！

「また鬼ごっこか？　それはもう飽きたぞ小僧！　『カースド・ライトニング』！」

魔王が地に右膝をついたまま片手を突き出し、致命的な魔法を放つ。

……ああ……これはあかん。

こんな強力な魔法を、なんで詠唱もなくポンポン撃てるんだよ。

俺は肩を押さえていた左手で、無意識に魔法剣を抜き、なんとなく目の前に……。

――澄んだ音と共に、魔法を食らった魔法剣があっさりと砕け散った。

「ああっ！」

「!?　……これも逃れるのか。貴様、なんと強運な冒険者なのだ」

最後の頼みの魔法剣が砕けた事により、俺はいよいよ絶望的な心地で、砕けた魔法剣の柄を投げつけながら、魔王に向けて食って掛かった。

「何が強運だよ、本当に強運なら、ここでこんな目に遭わねえよ！　あーあ……。ダストの野郎ナマクラ持たせやがって使えねえな！」

「き、貴様、人様からの預かり物に無茶苦茶言うな……。だがこれで、最後の望みも絶たれた訳だ。残るマナタイトは幾つある？　それで、先ほどのライトニングは何発撃てるのだ？　お前は上級魔法が使えないと見た。使えていれば、中級魔法のライトニングなどではなく、上級魔法での一撃を食らわせていただろうからな」

くそっ！

「『ヒール』！　『ヒール』ッ！」

泣きそうになりながら右肩の傷にヒールを掛ける。
だが、傷が深すぎて俺の魔力ではどうにもならない。

痛む右肩を押さえながら立ち上がると、魔王に背を向ける。

「本当に、逃げてばかりだな貴様は。もういい、諦めろ。貴様は冒険者の割には本当によくやった。これはワシの本心だ。貴様に敬意を表して、このまま逃してやってもいいぞ。まだマナタイトはあるのだろう？　テレポートの詠唱を終える時間をやろう」

魔王は俺の背中に、そんな言葉を投げ掛けてきた。

魅力的なその言葉を無視し、俺は通路の角を曲がり、そこに肩を押さえたままズルズルとうずくまる。

ヤバイ、血が止まらん、超痛い。

このままテレポートで帰ってもいいってか……。

どうしよう、城の皆はもう、魔王の側近を全滅させたかな？

なんせ、俺でも一対一でここまで頑張れたんだ。
あの連中ならまず問題無いだろう。

それよりも、早く血を止めないと……。

「なあ、小僧。そう言えば、まだ貴様の名前を聞いていなかったな。こういった、最後の決戦の様な時には、魔王として名前ぐらいは聞いておいてやらんといかんのだ。良ければ名前を教えてくれないか」

ズルッ、ズルッ、と。
足を引きずる音と共に、魔王がこちらに近づいて来る。

俺はマナタイトを一つ取り出し。

「『ヒール』ッ！」

右肩の傷を塞ぎ終えると。

「佐藤和真と申します。……あんたの名前は？」

魔王に向けて、問い掛けた。

血が出過ぎたのか、体がダルい。

立ち上がらなきゃいけないのは分かっているが、立ち上がれない。

「……ヤサカだ」

魔王の、そんな呟きを聞きながら、俺は……。

……。

「ヤサカ？　魔王ヤサカ？　もっと、おどろおどろしい名前を想像してたよ」

俺のそんな言葉に、ズルッ、ズルッ、という音が聞こえなくなった。

魔王が、その場に足を止めたらしい。

魔王は、ふふっと小さく笑う。

角の向こう側にいるのでその表情は見えないが、心底可笑しそうな笑い声だ。

「私の名は、八坂恭一。魔王、八坂恭一だよ」

……えっ。

「……えっと、どういう事？　えっ。えっ！？　何？　あんた、日本人？　人間なの？」

パニックになる俺に、魔王が実に可笑しそうに。

「いいや？　れっきとした魔族だし、ニホンなんて所は知らん。その国の事は聞いた事はあるがな」

……！？

「おい、訳分かんない事言うなよ、俺を混乱させてトドメを免れようとかそんな手か？　汚ねえぞ」

「今からトドメを刺されようとしているのは果たしてどちらなのか。フフ、いやな、この名を名乗ると、お前達の中にはその様な面白い反応をする奴が多くてな。……我が名の由来が知りたいか？　そして、我々魔王軍がなぜ人類を襲うのかを知りたくないか？」

実に可笑しそうに魔王が笑う。

えっ、なにこれ。

なんなんだよ、この、ゲームや漫画によくある展開は。

「俺、そんな事聞きたいなんて言ってないんだけど。なんでわざわざ、そこまで教えようとしてくれんの？」

「お前と同じ様な変わった名をした連中が、ワシに会うと必ず聞きたがった事だからだよ」

魔王はそう言って、クスクスと面白そうに。

「……えっと、じゃあその名の由来とか聞いてもいい？　後、どうして魔王軍が人類を襲うのか……」
「それが知りたくば、この私を倒してからにするのだな！」

ムッ、ムカつく――――！！

「ワハハハ、腹が立ったか？　イラッときたろう！　最後に貴様に一矢報いられたわ！　少しだけ溜飲が下ったぞ！」

このジジイ、意外と大人気ねえ！

「……さて。こうして名乗ったのは久しぶりだ。ワシが今まで名乗ったのは、必ず死にかけの者にのみ名乗ってきた。だが貴様は、我が名を知り得た者としてこのまま帰るがいい」

言って、魔王は再び、ズルッ、ズルッ、と音を立てて、こちらへと近づいて来る。
俺がテレポートで帰らないとなれば、このままトドメを刺すのだろう。
残るマナタイトは後一つ。

今の俺の残りの魔力では、帰りの分のテレポートにはとても足りない。
帰るとすれば、これを使う他はないだろう。

「なあ、あんたはこのまま帰るのか？　城に帰れば、多分俺の仲間が待ち構えてるぞ。これだけ時間が経ったなら、きっとあんたの側近は倒されてるよ」
俺の、魔王に対する呼び掛けに。

「そうだな。あの連中相手では、我が部下は殺られているか……。お前を殺すか、お前が逃げ帰るかした後で、ここでしばらく休むとしようか。その後、このダンジョンで手勢となる強力なモンスターを見繕って帰るとしよう。ワシが休憩して帰る頃には、我が娘が大軍を率いて、城に凱旋している頃だろうしな」

そう言えば、娘が帰って来るとか言っていたなあ。

俺が一端街に帰還し、準備を整えてアクセルの冒険者達と共に、再びここへテレポート……。

いやいや、もう一度ここへ来る魔力は無いし、マナタイトだって最後の一つだ。

なにより、街は今、絶賛防衛中なはず。

そんな中で、確実に魔王を倒せるかどうか分からないのに人を割いてもらう訳にもいかない。

――ズルッ、ズルッ。

その音が、すぐ傍まで近づいている。

魔王を倒さずに俺が帰る。

すると、どうなるだろう。

あいつらは、魔王がモンスターを連れて城にテレポートで帰ってきたら、ちゃんと俺の言う事を聞いて逃げ帰ってくれるだろうか。

……間違いなく、言う事を聞く訳がないな。

魔王に伝言を頼むか？

俺とは引き分けって事になり、俺は街へと帰りました、と。

でもあいつらが信じるかな……？

まあ、無理だろうなあ……。

となると……。

「なあ、俺も一緒に城に連れて帰ってくれって言ったら、俺にもテレポートを掛けてくれる？」

「……そこまでしてやる義理もあるまい。我が配下にでもなるか？その際には、ワシを裏切れない呪いを掛けさせてもらうが、その上でなら連れ帰ってやろう」

だよなあ。

――ズルッ、ズルッ。

そんな音を聞きながら、俺は座り込んだまま自分の冒険者カードを手に取った。

右手にはカードを。そして左手には最後のマナタイト。

――ズルッ、ズルッ。

……やだな。

正直、こういうのは柄じゃない。

こんな事は、ヒーローになりたいって奴がやればいいと思ってた。

もしくは、勇者様願望がある奴、俺ＴＵＥＥがしたい奴。

――俺みたいに、ゴロゴロして飲んだくれて昼まで寝て。

美少女に囲まれて、退廃的な一生を送りたいなんて考えの奴にやらせる事じゃないと思う。

「さあ、テレポートの詠唱は済んだか？　見逃してやるとは言ったが、憎らしい貴様の顔を見た瞬間、我慢できるかは保証できんぞ？」

ズルッ、ズルッ、と。

そんな音を聞きながら。

――あいつら、きっと怒るんだろうなあ、と……。

でも俺がやらないと、どうせあいつら、やけっぱちになってまた何かやらかすんだろうなあ……と。

そんな事を考えながら。

俺は、冒険者カードを――

ズルッ、ズルッ、という音が、角の向こう側から聞こえてきた。

「そこを曲がらずに、怒らないでこのまま聞いて欲しいんだけどさ。

ここは、引き分けって事でさ。俺を先に、テレポートで城まで送ってくれないかな」

俺の言葉に、魔王の足音がピタリと止まる。

「送ってもらったら、俺は仲間と一緒に街に帰るよ。あんたは休憩でも何でもしてくれればいい。もしくは、休憩せずにすぐ城に帰って来ても、俺の仲間には手を出させないって約束するよ」

……薄暗いダンジョンの中が、シンと静まり返る。

「……クックッ、クハハハ、引き分け？　何を言っている。お前は何か勘違いをしているな。お前は負けたのだ、そしてお前が逃してもらえるのは、ただの気まぐれに過ぎず……！」

魔王は、曲がり角を曲がってこちらに体を向けると、そこでピタリと言葉を止めた。

俺の両手の間に灯る破滅の光。

――爆裂魔法の光を見て。

「……。……引き分け、か。良いだろう冒険者よ。お

前を先に、城へと送り届けてやろう。……それでいいか？」

「……ダメだね。だから言ったじゃん。そこを曲がらずに、怒らないで聞いて欲しい、って。これを見た後でそんな返事を貰っても、もう信用できないんだよ。俺を送ったテレポート先が、火口のど真ん中だったらどうする？　殺られ損だろ？」

俺の手の間の光から目を離さず、魔王はゴクリと喉を鳴らした。

「……分かった、ではどうしたらいい？　この距離でそれを放てば、ワシはおろか貴様も無事では済むまい。いや、そもそも爆発に巻き込まれない距離から撃っても、間違いなくこの階層は崩れるぞ。貴様も、それが分かっていたから今までそれを使わなかったのだろう？」

まあ、そういう事なんだけども。

「そもそも、なぜ上級魔法も使えない冒険者が、爆裂魔法などという複雑な魔法を覚えているのか……。……一体お前は何なのだ？」

「……何なんだろうね。俺もよく分かんないよ。というか、自分の立ち位置って奴すら分かんないぐらいだ。俺は、あいつらの……保護者？　恋人？　飼い主？　ご主人様？　友人？　仲間？　……うーん、何に当たるんだろうね」

今更ながらに悩みだした俺に、魔王は変わらず、脂汗を垂らして手の中の光を見つめている。

「俺の仲間にこの魔法が大好きな娘がいてさ。俺の隣で毎日欠かさず、これをぶっ放しまくってたんだよ。お陰で、俺でも習得が可能なぐらいに、この魔法の詠唱も完全に丸暗記しちまった」

手の間にある、火傷しそうなぐらいに熱い光。
気を抜くと、それがあっという間に暴発しそうだ。
めぐみんは、よくもまあこんな代物を、毎日制御できていたもんだ。

「それを放てばお前は欠片も残さず消える。間違いなくな。だが、ワシは仮にも魔王だ。冒険者の放つ爆裂魔法では、一撃では死なんかもしれんぞ？」
「アクアに弱体化させられた今のあんたじゃ、多分耐えられないだろ？　どの道、この階層は崩れるんじゃないのか？　多少息があっても、生き埋めになればどうにもなんないよな？」

俺の言葉に、魔王が黙り込んだ。
血が足りないのか、頭がボーッとする。

「……死ぬのが怖くは無いのか？」
「超怖いよ。もう何度も死んでるから、なおさら怖い」

死ぬのは怖い。
というか、今だって正直いって泣き出しそうだ。
皆と会えなくなる。
そう考えると辛い、ほんとに辛い。

でも、

「……ワシの名前の由来を聞きたくないか？　そして、魔王軍がなぜ……」
「興味ないわー」

――でも。

どうせあいつらは、俺がなんとかしてくるとでも思っているんだろうなあ。

「…………『カース』

魔王が唱え終わるより先に。

「『エクスプロージョン』――――ッッ！」

俺は魔法を解き放った――――

◆◆◆

体がフワフワして、なんだか心許ない。
というか、何も見えないし聞こえない。

――そんな中、遠くから俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。

なんとなくそちらに向かってみる。
そちらに行きたいと願うだけで、体が自然とそちらに向かった。
夢心地というか、浮遊感というか。
なんだろう、この不思議感覚は。

呼ばれた気がした方へと向かうと、やがて目の前に、大きな光が――

「ようこそ死後の世界へ。私は、あなたに新たな道を案内する女神、アクア――。佐藤和真さん、あなたはダンジョンの最下層において亡くなりました。――辛いでしょうが、あなたの人生は終わったのです」

……。

そこは、既に見慣れた白い部屋。

光を見つけて飛び込んだはずなのだが、なぜか、目の前にはアクアがいる。

そして、その隣にはエリスまで。

……こいつがここにいるって事は、魔王は無事倒せたって事なのだろうか。

というか、あの後どうなったのだろう。

俺が魔王を倒した瞬間に、こいつはここに送られたのだろうか。

「おいアクア、俺が魔王をテレポートで拉致った後、どうなった？」

アクアに話し掛けるが、アクアは俯いたまま、こちらに目を合わ

せようとしない。
というか、前髪で顔が隠れてアクアの表情がうかがえない。

「……あなたには、いくつかの選択肢があります」

アクアが、そんな事を淡々と、棒読みで言ってくる。

「……このままこの世界で、赤子として生まれるか」
「……おいアクア、まずは状況説明からにしろよ。皆はどうなったんだよ。あと、人と話する時はちゃんとこっち向け」

アクアに言うも、そんな俺の言葉を無視し、更にアクアは淡々と――

「……それとも平和な日本で、赤子として生まれるか」
「おいこら、人の話聞けよ。あれからどうなったんだって聞いてんだよ。お前、こっち向かねーなら、その鼻に指突っ込んで向かせるぞ？」

アクアが顔を上げて、言った。

「……もう、手の掛かる仲間に苦労する事もなく、借金背負ったり逮捕されたり、そんな酷い目に遭う事のない天国で、平和に暮らすか……！」

肩を震わせ、ボロボロと涙をこぼしながら。

……ガチ泣きじゃないか。

ボロ泣きするアクアの肩に、エリスが優しく手を置いた。

アクアはエリスの胸元に顔を埋め、しゃくり上げながら肩を震わす。

そんなアクアの姿を見ながら、俺はなぜだか達観していた。

アクアがこうまで泣くって事は、俺はもう生き返る事はできないのだろう。

覚悟の上での事だし、しょうがない。

……もっと心にくるかと思ってたが、意外と平気なもんだ。

やる事やって、ちゃんとこうして目的を果たせたからだろうか。

――アクアを、ここに帰してやるって目的を。

改めて自分の体を見てみると、胸元から下が透明になっている。

嗚咽を続けるアクアの肩を抱き、優しく撫でながら、エリスが言った。

「……カズマさん、お疲れ様でした。あの場にいた皆は、無事に魔王の側近を倒し、あなたの無事を祈りながら待機しています。そして、魔王を倒したあの瞬間から、先輩はここに。それを見て、あの場の皆も、あなたが魔王を倒した事を知った様です」

それを聞き、俺はホッと息を吐いた。

「今は、激戦の後という事で休憩中の様です。先輩が突然いなくなった事で少々混乱している様ですが……」

エリスが眉根を寄せて、そんな事を。

……そういえば、俺が死んだって事を皆に伝えられないのか。

参ったなあ。めぐみんやダクネスが、ダンジョンの探索を始めだしたらどうしよう。

いや、アクセルの街の連中も探索に参加してくれるかもなあ。

というか、結構大掛かりな探索になったりして。

……参ったな。

やっぱ、このまま皆とお別れってのは辛い。

しかし、魂みたいな今の状況で良かった。

でなきゃ、アクア並にガチ泣きしていたかもしれない。

俺の考えは表情に出ていたのだろう。

エリスが俺に、優しく微笑みかけてきた。

「……さて、佐藤和真さん。魔王を倒して死んだあなたには……。

ご褒美として、通常の死後の選択肢とは、別の物を用意するようにとの言伝を承ってます」

それを聞いて。

アクアが、バッと顔を上げた。

「まず、一つ目。先ほどの選択肢にあった、天国でのんびりと暮らすというもの」

エリスが指をピンと立て、優しく微笑みかけてきた。

「……そして、二つ目。体を得て、日本へ帰る。この際には、一生を掛けても使い切れないだけのお金を。そして、あなたの理想とする配偶者を……ちょっ、先輩！　ち、近……！　顔が近いです！　興奮しないでください！」

アクアが涙をゴシゴシ拭い、エリスの隣でジッと聞く。

エリスが一つ咳払いをして先を続ける。

「そして、三つ目。――体を得て、あの世界にもう一度降り立つか」

――それを聞き。アクアがパアッと顔を輝かせた。

なんだよ嬉しそうなその顔は。まるで、俺がどれを選択するかが分かりきってるみたいな顔しやがって。

――天国ってのはまだ早いよな。

だが、日本で暮らす。

そう、こいつがくせものだ。

一生遊んで暮らせるだけの金を得て、後、エリスが言い掛けたが、理想の配偶者がどうとか……。

つまり日本に帰れば、何不自由無く、苦労も無く、理不尽な目に遭う事も無く、可愛い嫁さん貰って遊んで暮らせる訳だ。

「どれにしますか？」

エリスが微笑を浮かべながら聞いてくる。

そんな質問に、俺が今更迷う訳がない。

俺がどれほど異世界で苦労してきたと思っているのか。

ろくでもない生物に、どうしようもない住人達。

まともな常識人がレアっていう、根っこの所が破綻している様な世界だ。

あんな世界に戻れば、今後も間違いなく苦労する。

そんなもの、今更考える必要もなく分かる。

「俺の大嫌いな、あの世界へ送ってください」

そんな、俺の返事を受けて。

エリスが嬉しそうに笑みを浮かべた。

「さあ、そうと決まったら早く皆の所に帰ってあげないとね！　エリス、ちょちょいとアレな力をアレして、魔王の城の皆の所へ送って頂戴。きっと、突然消えた私を心配してるんじゃないかしら。早く戻ってあげないとね！」

アクアがソワソワと浮かれながら、そんな事を言ってくる。

だが、それにエリスが困った様に眉をしかめ。

「……あの、先輩。申し上げにくいんですが、先輩はもう、こうし

て天界に帰って来た訳ですし……。日本担当の先輩は、この世界に遊びに降りる事も……。その……」

その言葉に、アクアがエリスの肩を掴んだ。
そして、目に涙を浮かべてフルフルと首を振る。
「そ、そんな目をされてもこればっかりは私には……！　あっ、止めてください！　先輩、パッド取ろうとしないでください！　ダメですよ、そんな事されたってダメですってば！」

目の前で揉み合いを始めた二人に。
「……ちょっと聞きたいんだけど、いい？」
俺は、半分透き通った指でポリポリと顔を掻き。

「俺、もう一度異世界へ行く訳だからさ。……何か、チートって貰えないのかな」

とても重要な事をエリスに尋ねた。

それを受け、二人はピタリと動きを止める。
そして――

「ええ、もちろんです。魔王が倒されたとはいえ、まだまだ強敵ひしめくこの世界で生きていくには、必要なものでしょうから」

エリスが、そう言っていたずらっぽく笑った。

俺がこれを言い出すのを予想してたんだろうなあ……。
色々苦労掛けられた先輩に、一矢報いたかったに違いない。

「あ……」

それを聞き、アクアが不安そうにこちらに手を伸ばしかけ、そして思い直した様に手を引っ込めた。

この騒動の後に、流石に、チート代わりに自分を連れて行けとは言えないらしい。

ちゃんと自分が手の掛かる女神だって事を理解してくれたのは、驚くべき成長だと思う。

「さあ、どんな能力をお望みですか？　強力な装備？　強靭な肉体？　それとも、とてつもない才能ですか？」

俺が何を言うのかを予想しているのか、ワクワクした表情を浮かべながら言ってくるエリスの横で、アクアが珍しくシュンとしていた。

自己主張の強いこいつが珍しい。

いつもこんなんなら良かったのに。

……俺はエリスに言ってやった。

「女神はチートに入りますか？」

それを聞き、心の底から嬉しそうに、にこやかな笑みを浮かべるエリス。
そしてその隣では、これ以上にないぐらいに、アクアがパアッと顔を輝かせた。

「エリス！　エリス！！　早くカズマを蘇生するわよ！　ほら早く！　早くしないと、城の皆が休憩終えて、街へ帰っちゃう！」
「はいはい、分かりましたから、先輩も力を貸して下さい。ここに帰って来た今なら、本来の女神の力が使えるはずですから……。……ではカズマさん。これは特例中の特例です。二度はありませんから、今後、命は大切に……」
「そんなのいいから、早く早く！　ほら、いくわよエリス！　『蘇生せよ！』」
「あっ、先輩っ！　もう、『蘇生せよ！』」

二人の女神の力を受けて、体の奥に凄まじい熱を感じる。
体に重さを感じ、俺は床に足を付けると、床の冷たさを感じ取った。

そして、俺を蘇生させてくれた二人は慌ててバッと後ろを向いた。
……？

「せ、先輩！　先輩が慌てて蘇生させるから！　早く、服か何かを……！」
「だってだって！　しょうがないじゃない、浮かれてたんだもの！　ねえ、何か無いの！？　カズマさんが荒ぶってるんですけど！」

俺は見事に素っ裸だった。

「ちょ、ちょっと待ってください、今服を……！　……ほら、先輩

から渡してあげて下さいよ、先輩ならもう何回か見てるでしょう？」
「待って頂戴、私が見たのはチラッとよ！　同じ屋根の下の相手のアレを見ちゃうなんて、色々と気まずくないかしら！　エリスなら接点ないんだし、ササッとその服を渡してあげてよ！」
「いいからとっとと服くれよ！　こんな神聖な場所でいつまでフルチンでいればいいんだよ！」

服を着替え準備を終えた俺に、エリスが改めて向き直った。
俺の隣には、浮かれた様子のアクアがいる。

「……さて。これで今後は、先輩は、いつでも天界に帰る事ができます。もっとも、当分は帰って来る気は無さそうですけどね？」
エリスが、浮かれた様子のアクアを微笑ましく見守りながら言ってくる。

……と、アクアが浮かれて言った。

「まあねー？　何だかんだで結果オーライってやつね！　私がこんな事を言い出さなかったら魔王だって倒せなかったでしょうし。……あら？　ひょっとしてこれって、カズマが女神によって導かれ魔王を倒したって言ってもいいんじゃないかしら。魔王を弱体化させたり、今回の私ってこれでもかってぐらいに女神っぽかったしね。……そう考えると、今回の魔王退治のＭＶＰって、私の名前が入っ

てもいいんじゃないかしら」

……そんな、浮かれきった事を。

「……おいこら、お前舐めてんの？　魔王倒したのは俺だよ？　分かってんの？　勇者カズマだよ？　伝説になるんだよ？　お前は家出して保護されて連れ帰られる駄女神だろ？　お前ってば何言っちゃってんの？」

「ほーん？　あんたみたいなもやしニート、私の力が無かったらそもそも魔王に勝てなかったって分かってるんですか？　魔王退治の報奨金は私の取り分を多くして頂戴。後、今後は本来の女神の力を使えるんですからね、私の扱いを雑にすると、本当に天罰がくだるからね？」

そんな、舐めた事を。

アクアは、自信満々に髪をかきあげながら言ってきた。

エリスがそんな俺達のやり取りを、可笑しそうに見守っている。

「では、カズマさん。そろそろ願いを、あなたの口から……」

そしてそんな事を、笑いながら言ってきた。

「目の前で突然私が消えちゃって、めぐみんやダクネス達は心配して泣いてないかしら。早く街に帰って、皆を安心させてあげないとね！」

俺の隣では、浮かれた様子のアクアがチョロい事を言っている。

「ではカズマさん。……改めて、願いを……」

エリスが、魔王を倒した事への礼を言うかのように。

そして、祈るように手を組んだ。

ニコニコと笑みを浮かべるエリスは、まさしくメインヒロインといった感じだ。
それに比べて……。
「ねえカズマ、私、街に帰ったらキンキンに冷えたクリムゾンビアーね！　私のジョッキにとびきりのフリーズを頂戴。早くゼル帝に会いたいわね、そろそろ立派なドラゴンになってる頃合いかしら！」
俺はアクアとエリスを交互に見ながら。
「……？　どうしたの、変な顔しちゃって。元から変な顔が、今は更に歪んでるわよ？　顔にヒールを掛けてあげようか？」
……………。
俺は、エリスに願いを告げた――――！

◆◆◆

一瞬の立ち眩みの後、俺は見覚えのある所に立っていた。
そこは確かに魔王の部屋。
その証拠に、辺りには魔王の側近が倒れ伏している。
突如現れた俺に、その場にいた皆が驚き、そして――
「「カズマ！　お帰……………り…………？」」

ダクネスとめぐみんが、俺にお帰りを――

……言おうとして、言葉尻をすぼませて首を傾げた。

改めて皆を見ると、ダクネスは手酷い傷を負っていた。

命に関わるレベルではないが、よほどの激戦だった事がうかがえる。

めぐみんとゆんゆんは呆然とした表情を浮かべているが、怪我らしい怪我はない様だ。

……と、向こうではミツルギが倒れ、その傍らにあの二人が縋りついていた。

胸が上下している所を見ると、ミツルギも無事な様だ。

「あのう……」

めぐみんが、おそるおそるといった感じで尋ねてきた。

「……あのう。その人は、誰ですか？」

俺の隣に佇む、女神エリスを指さしながら。

俺は、困った表情を浮かべオロオロしているエリスに手を向けて。

「こちら、あの有名な女神エリス様。魔王を倒したご褒美代わりに、

せっかくなんで連れて来た」
「「「えっ！？」」」
めぐみん、ゆんゆん、ダクネスが、驚きの声と共に後ずさる。
と、ダクネスが片膝をつき。
「こ、これはエリス様！　その御姿、確かに教会に記されていた通りの……。通り……。の……？」
エリスに向かって深々と頭を下げていたダクネスは、チラッと顔を上げてエリスの顔を怪訝そうにジッと見た。
それを受け、エリスがふっと目を逸らす。
――その時だった。
「なんでよ――――――――！」
突然光の柱が現れると、そこからアクアが飛び出してきた。
「あっ！　お前、なんで自力で降りて来れるんだよ！」
「せ、先輩！？　何してるんですか、ダメですよ許可も無しに勝手に降りてきちゃ！　怒られますよ！？」
俺とエリスの声を受け、アクアが泣きながら声を上げた。
「わあああああああーっ！　ガ、ガズマがあああああああ！　ふわあああああああ！　あああああああああ！　あああああああああーっ！」
「めんどくせえ奴だなお前は！　調子に乗るから置いてったんだろ

うか！　ったく、ちゃんと暫くしてから迎えに行くつもりだったのに、どうすんだこのバカ！」

わあわあと泣くアクアを見て、めぐみんとダクネスが安心した様に息を吐いた。

と――

「ねえー！　よく分かんないけど、プリーストがいるならキョウヤを助けてあげてよ！」

「そうよ、大怪我してるの！」

そんな二人の声に被せる様に、ゆんゆんが突然大声を上げた。

「魔王軍が！　魔王軍が、帰って来ました！　先頭にいるのは魔王の娘じゃないんでしょうか！」

部屋のバルコニーから外を見て、ゆんゆんが緊張した面持ちでこちらを振り返る。

もう帰って来たやがったのか。

でもまあ、目的は果たした訳で、とっとと引き上げるとするか。

「ほら、いつまでも泣いてないでとっとと帰るぞ！　もう、来ちゃったもんはしょうがないから、後の事はまた後日考えるって事で……」

「わあああああ！　ふあああああああああ！」

「……あ、あの……ダクネス、さん……？　な、何でしょう、顔が近いのですが……」

「……いえ。私の友人に似ているな、と……」

ダクネスがエリスに顔を寄せ、ジーっと見つめる中、アクアが泣

き、そしてゆんゆんとめぐみんが……。

えっ、ちょっ……！

「『エクスプロージョン』ー！」

めぐみんがバルコニーから外に向け、マナタイトの詰まったリュックを背負いながら爆裂魔法を解き放った。

「めぐみん！？　ちょ、ちょっとなにしてんの！？」

めぐみんの隣で、ゆんゆんがそれを慌てて止める。

「『エクスプロージョン』ー！　『エクスプロージョン』ーッ！」

「止めて！　めぐみん止めて！　鼻血が！　鼻血が出てるからっ！」

魔王軍に対して攻撃を始めためぐみんをゆんゆんが慌てて止める中、俺はバルコニーへと近寄り外を見た。

そこには、突然爆裂魔法の連打を食らった魔王軍の軍勢が、パニックに陥り逃げ惑っていた。

他のモンスターに庇われながら逃げ惑っているアレが、魔王の娘なのだろうか。

「ワハハハハ！　我こそは魔王めぐみん！　この城を乗っとりし、世界最強のアークウィザード！　我が城に近づく愚か者ども！　我が絶大なる力の前に消え去るがいい！」

「めぐみん！　めぐみん落ち着いて！　せっかく魔王を倒したのに、また魔王が現れてどうするの！」

まったくだ。これ以上の厄介事を持って来ないで欲しい。

――潮時だな。

「ゆんゆん、テレポートを頼む！　俺、もう魔力が無くってさ」

「え……、あ……！　私、後二回分ぐらいの魔力しか残ってませんが……！　でも、今この場には……」

テレポートでの転送は一度に四人まで。

エリスを連れて来てしまった事により、この場には九人いる。

「仕方ないですね。カズマ、これを使ってください」

爆裂魔法で魔王の娘と魔王軍をいびっていためぐみんが、ぐしぐしと鼻血を拭い、俺にマナタイトを渡してきた。

「……お前、あんま無茶すんなよな」

「高価なプレゼントを貰ったんですから、私だって何か、カズマにお返しをしたいんですよ。……もっとも、誰かはそんな事気にもしてない様ですが」

「えっ？　あっ……！　私か？　私の事を言ったのか！？」

めぐみんが、そう言ってダクネスに絡みだす。

というか、マナタイトのお返しが城ってか。

お返しとしては大きすぎるだろう。

「えっと、では、皆さん集まってください、テレポートで転送しますから！」

ゆんゆんの言葉に、皆が寄り集まった。

「ねえー！　その前に、先にキョウヤの治療してよー！　なんか、脈が弱くなってきたんだけど！」

「ていうか、息も弱く……！」

「……エリス様、以前、私と会った事は……」

「ななな、無いですよ！？　……っというか、私はこれからどうしたら……」

皆が好き勝手に騒ぐ中、ゆんゆんが第一陣をテレポートで転送した。

「『テレポート』！」

エリス、ミツルギ、取り巻き二人が転送され、後には五人が残される。

「うっ……ぐすっ……ぐすっ……」

いつまでもメソメソしているアクアの肩に、ゆんゆんが手を置いた。

その隣にはめぐみんが並び、ダクネスが頬についた血を拭いながら並び立つ。

「では、行きますよ？　それではカズマさん、アクセルで！」

ゆんゆんが声高に。
「『テレポート』！」

テレポートの魔法を唱えると、そこには未だメソメソしているアクアが取り残されていた。

！？

「えっ！？　どういう事だ！？　なんでお前、テレポートで飛んでないの？」
「て、抵抗、ぐすっ……し、したから……！　……ぐずっ……」

アクアが鼻を啜りながら、そんな事を……！

「おまっ……！　お前って奴は、どうしてこう、最後の最後まで……！」
「ち、違うの！　違うの、聞いて！」

目に涙を浮かべながら、アクアが慌てて言ってきた。

「言いたい事があったから！　エリスの前じゃ、ちょっと……、その……」
「なんだよ！　ってか、今言う事でもないだろーが！　分かってんのか？　今こうしてる間にも、続々と城へ敵が入って来てるんだぞ！？　いつここに来るか……！」

俺はアクアに慌てて言うが、当のアクアは、未だ目尻に涙を溜めたまま何も言おうとはしない。

そうこうしている内に、そう遠くない場所から何かが駆けて来る音がした。
この最上階へと続く、直通ルートでもあったのかもしれない。
ソワソワしながらアクアの言葉を待っていると、アクアが指で涙を拭い。
「……ねえカズマ」
「なんだよ、早く言えって！　置いてった事は悪かったよ、でも、ちゃんと迎えに行く算段はあったんだぞ？」
俺の言葉に、アクアが首を振る。
「その……。ほら、私って、あの……。あんまり、物凄く賢いってほどでもないじゃない？」
「というか、まあバカだよな。それが？」
アクアが一瞬、ギッ！　と歯を食い縛る。
が、ふっと表情を緩めると。
「……まあ、そんな訳だから。私は上手に言えないから一言で言うわね」
「だから、何がだよ！　ほんとに早くしろってば！　ほら、外の足音聞こえるだろ！？」
部屋の外から聞こえる、こちらに向かう音が大きくなっている。
慌てる俺に、アクアが――

屈託のない笑顔で言った。

「ありがとうね」

……俺は、こいつ相手にドキッとする日がくるだなんて、今の今まで思いもよらなかった。

エピローグ

いつもの通りのいつもの部屋。
退屈で何の変哲もない私の職場に、この部屋の常連客が現れた。

「やあ」

彼は気さくに手を挙げ挨拶してくる。
やあ、ではないのだけれど……。

「カズマさん……。まったく、どうしてあなたは……」

どうしてこの人はこんなに簡単に死ぬのだろう。
魔王すら倒した人が、あっさりとここに来るのは止めて欲しい。
というか、こんな所でくつろぐのも止めて欲しい。
両手を後ろについて床に足を投げ出し、満足そうにリラックスしている。

――ここは、この世界の死者の魂が呼ばれる所。
決してくつろげる場所ではないのだけれど……。

「いやあ、やっぱりここが一番リラックスできますね。なんつーか、エリス様を見てるだけで癒されます」

そんな事を言いながら、彼は腕を枕に寝そべった。

「……まったく。あれから大変だったんですよ？　私がここに帰るのに、一体どれだけ苦労したか……」
「いやだって、エリス様ってば街に戻ったらもういないんですもん。

ちゃんと送って行こうと思ってたのに」

……送って行く？

いえ、そんな事よりも。

「その、エリス様ってのはやめませんか？　私の正体も知っているんですから、呼び捨てで構いませんよ？　その口調も、もっと砕けた感じでも……」

「じゃあ、そっちもいつも通りの口調になったら、呼び捨てにしますよ」

「……この姿の時は、どうしてもこの口調に……。でも、何だか疲れてますね？　今回は一体どうしたんですか？　すっかり平和になったので、あまり下界は見ていませんでしたから……」

一体どんなモンスターに殺されたのだろう。

もう、彼が不覚をとる相手なんてそうそういないはずなのだけれど。

「まあ色々ありまして。って言うか、ちょっと調子に乗っただけで屋敷から放り出されたんですよ。俺、魔王を倒した英雄ですよ？　もうちょっと報われてもいいと思うんですよね」

それは酷い。

一体何があったのかは知らないが、確かにこの人は、もうちょっと報われてもいいと思う。

「まあでも、皆さん元気そうですね。皆に変わりは無いですか？」

「これでもかってぐらいに元気ですよ。でも、どーも嫌な予感がするんですよね……。たとえば最近めぐみんが、ゆんゆんとちょこちょこどこかにテレポートして、スッキリした顔で帰って来るんです

よ。どこかで爆裂魔法を撃ってるんだろうとは思うんですけど、また一体どこに向かってぶっ放してる事やら……」

……彼女達が毎日テレポートで魔王城の傍へおもむいて、城に向けて魔法を撃ち込んでいる事は内緒にしておこう。

「ダクネスの奴は魔王殺しに尽力した大貴族って事で、新しい領地を与えられるとかなんとか言ってましたね。ていうか、お見合いの話が山ほどきたって泣いてましたけど。屋敷に立て篭もって、国からの使者を迎撃してましたよ」

……遠回しに結婚しようと言われているのに、気づいていないのだろうかこの人は。

ダクネスも大変だと思う。

ライバルは強敵ばかりの上に、こんなに奔放な人が相手では……。

後は……。

「アクアの奴、チラチラと人の顔色ばっかうかがって。言いたい事があるなら言えばいいのに何なんでしょうね？　今日だって屋敷に帰ろうとしたら、もうバカな事口走らない？　とか言われたんですけど。バカな事って言ったって……」

なんというか、先輩らしい。

こういった事に疎い先輩だから、きっと自分の気持ちがよく分からないのかもしれない。

「ちなみに、一体何を言って屋敷を追い出されたんですか？」

「魔王を倒したって事で街でチヤホヤされたんで、ちょっと調子に

乗って言ったんですよ。ほんの、軽い冗談で。よーし、パパ、ハーレム作っちゃうぞーって」

「……」

「……エリス様、今では反省してるんで黙らないでくださいよ、凹みますから」

前言撤回。

この人はもうちょっと、痛い目に遭った方がいいと思う。

「まあでも、先輩からの呼び掛けがあるまでは、ここでゆっくりしていってくださいね」

そう、こんな時ぐらいはゆっくりさせてあげればいいだろう。

「……？　呼び掛け？　……ああ、俺、別に死んでませんよ？」

彼が、寝そべったままで首だけを上げてそんな事を……。

「……？　死んでない？　でも、ここにいるじゃないですか？」

「ああ、はい。自力で来たんですよ」

……？

「テレポートですよテレポート。ほら、魔王との決戦前に、ここに来たじゃないですか。俺、テレポートの登録先が一つ空いてたんで、そん時に……」

「！？！？！？！？！？！？？？？」

この人は今、何を言ったのだろう。

「ちょっと待ってください、ここを？　転送先に？　登録？」

「そうですよ。……てか、幾ら俺でも、ちゃんとこうして迎えに来る算段がなかったらアクアを置いてったりはしませんって。これからちょこちょこ来てもいいですか？　面倒事に巻き込まれた時なんか……」

「ダメですダメです、何言ってるんですか！　というか、ここを登録!?　ここって、転送先に登録できたんですか!?　なんて事!?　っていうか、どうしてあなたは次から次へ、他の人が考えつかない事をやらかすんですか！」

「い、いやだって……！　試しに登録してみたらできたから、つい……」

つ、ついで、こんな所にひょこひょこ来られては威厳も何もあったものじゃない。

「そういやダクネスが、ちょこちょこクリスを探してましたよ？　ていうか俺だって、エリス様にマメに会えるならこんな事しなくて済むんですが」

そんな事を言いながら、気怠げに身を起こし。

「しかしあいつらは、世界を救った勇者様をなんだと思ってやがるのか。……よし、そろそろ痛い目に遭わせてやろうかね！」

首を鳴らしながら、彼は大きく伸びをした。

世界を救った勇者様。

というかこの人は冗談めかして言っているが、自分のやったその事を、ちゃんと理解しているのだろうか。

何の力も持たない人が、魔王の幹部を始め、様々な強敵を打ち破って、ついには魔王ですらも倒してしまった。

誇張されたお伽話の勇者ですら、伝説の装備を手にして強力な仲間を連れて、ようやくそんな偉業を達成しているというのに。

「まずは俺を追い出したあのバカだな。ちょっと甘い顔してれば、まーた調子に乗りだしやがって」

彼はそう言って、柔軟をしながら魔法の詠唱を始めた。

今から巻き起こされる事を想像するだけで、自然と笑みがこぼれてしまう。

彼の傍は困難と厄介事で溢れているけれど、いつだって楽しそう。

「っと。じゃあエリス様。ちょっとあいつら泣かせて来ます」

「行ってらっしゃいませ。あまり酷い事はしないであげてくださいね？」

私の言葉に、世界を救った勇者様は苦笑を浮かべて背を向けた。

――せめてこの人が、もう少しだけ報われるように。

――日本に帰らず、この世界に留まってくれた事を後悔しないで

すむように。

「カズマさん、ちょっとだけ待ってくださいね？　せっかくなので、私からお土産を」

不思議そうな面持ちでこちらを見る彼に。

私は片手をかざして笑みを浮かべた。

「あなたにちょっとだけ。……良い事がありますように」

――あなたが守ってくれたこの素晴らしい世界を、もっともっと好きになってくれますように。

私は彼に手をかざし、心の底からの祈りを捧げた――！

「『祝福を！』」

完

エピローグ（後書き）

閲覧してくれた皆様に、深く感謝！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7145bl/

この素晴らしい世界に祝福を！

2013年10月25日20時02分発行